
乙女ゲー世界はモブに厳しい世界です

三嶋 与夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女ゲー世界はモブに厳しい世界です

【Nコード】

N3191EH

【作者名】

三嶋 与夢

【あらすじ】

男が主役の悪役令嬢物！？

異世界に転生した「リオン」は、貧乏男爵家の三男坊として前世でプレイさせられた「あの乙女ゲーの世界」で生きること。

そこは大地が浮かび、飛行船が空を行き交うファンタジー世界。

だが、リオンは素直に楽しめない。

何故ならそこは設定がふわふわしたあの乙女ゲーの世界だと知って

いたからだ。

そんな世界にリオンは、ゲームでは名前すら存在しない「モブ」として転生してしまう。

学園では女子のみが専属使用人という亜人種を奴隷として連れるのが当たり前の世界。

男子は亜人種を連れることも許されず、婚活では常に下手に出て苦労する。

しかし、あの乙女ゲーの攻略対象である貴公子の男子たちは例外で女子に囲まれチャホヤされていた。

そんな姿を見たりオンは、理不尽な境遇に怒りを募らせていく。

転生した先がふわふわした設定の乙女ゲー世界だと思い込んでしまったリオンは、平和の未来を掴み取るためゲーム知識や卑怯な手を使い様々な困難に立ち向かう！

はずだったのだが。

GCノベルズ様より書籍化済み。

1～8巻は好評発売中！

電子書籍もあるよ！

書籍の巻末と帯裏のバーコード、またはURLからアクセスしてアンケートに答えるとアンケート用特典が読めます。

3巻からのアンケート特典「マリエルト 書籍ならぼ2冊分」
もお楽しみください！

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。登場する人物、団体、名称は架空であり、実在のものとは関係ありません。

基本主人公の一人称視点で話が進み、それ以外のキャラの視点は三人称で進みます。

感想は受け付けますが、感想欄での返信はしておりません。ご了承ください。

更新予定や今後の予定などは、後書きや活動報告を利用して報告させていただきます。

プロローグ

正義と悪は見方が違えば逆転する。

普段全く考えない事を考えるくらいに、俺の精神は疲労していた。削られていく精神のおかげか、俺は表情がなくなっていく。

今すぐにもベッドに横になり、大好きな漫画やアニメに時間を割きたい。もしくは、もっと男の子がやるゲームをプレイしたかった。

休日の昼間から社会人が死んだ目でプレイをしているゲームは…
…乙女ゲーだった。

いわゆる恋愛ゲームであり、男性が主人公ならギャルゲー。

女性が主人公だから乙女ゲーと呼ばれている。

そうだ。

せつかくの休日に、社会人である俺がやるようなゲームではない。

俺が乙女ゲーを好きならまだ話も分かるが、どちらかと言えばもっと男の子向けのゲームの方が良い。

「どうして俺は朝から野郎を攻略しないといけないんだ。しかも、もうお昼だし」

画面の向こうにいるのは美形の男性キャラ。

基本的に登場する攻略キャラはどれも美形だ。

有名声優が声を当て、人気イラストレーターが描いたキャラたちが登場する。

近くに置いてあるスマホの画面には攻略情報を表示させている。

チラチラ見ながら選択肢を選んでいけば、好感度上昇を知らせる音と共に3D表示のキャラが動いてポーズを決める。

髪をかき上げるポーズで少し頬を染めていた。

『お前……その辺の女たちとは違うな。名前を覚えておいてやる』

相手は王太子　ゲームに出てくる攻略対象キャラで、学園では大人気の男性キャラだ。

主人公は偶然に出会い、王太子のことを知らないので普通の対応をしたシーンになっている。

王太子には主人公の態度が新鮮に見えているのだろうか……。

「……男が頬を染めているのを見ても何にも嬉しくない。せっかくの休日がこんな事で消えていくなんて」

月曜日から金曜日まで働いて、せっかくの土日休みが乙女ゲーで潰されていく。

土曜日に休めたのも久しぶりだった。

残業もあつてしばらく忙しかったから、この二連休には色々予定を立てていたのだ。

それが。

スマホから電子音が聞こえてきた。

手に取って確認をすれば、妹からのメッセージが画像付きで送られてきている。

『友達とハワイを楽しんでいます』

……腸が煮えくりかえる思いだ。

男女の友人たちと、ビーチやらホテルで楽しそうにしている妹の姿がそこにあつた。

すぐにメッセージを送る。

『ふざけんな！ お前、忙しいからって俺にゲームを押しつけたんだろっが！』

そう、今プレイしているのは妹の乙女ゲーだった。

土曜日の朝、一人暮らしをしている狭い部屋を掃除していると妹が訪れた。妹は大学生で実家暮らし。

珍しいと思っていたら、俺にゲームを押しつけてきた。

忙しいからこれをコンプして、と笑顔で言ってきた。

コンプ。コンプリート……CGやらイベントムービーを全て見終わった状態にしておけという意味だ。見終わっていれば、後でそれらを見返すことが可能だから。

妹に乙女ゲーをプレイするようにと押しつけられたのだ。

妹からメッセージが届く。

『はあ？ そんなことを言っても良いの？ 戻ってきてから、お母さんの誤解は解かないよ。お土産買うからコンプの方お願いね』

イライラするメッセージを読み、スマホを床に投げつけたくなる衝動をこらえながら俺は叫んだ。

「ちくしょうおお！！」

俺だってこんなことは拒否したかった。

しかし、実家住まいの妹は 俺の部屋に自分の趣味である本を大量に隠した。それをお袋に見つけさせ、俺がそういう趣味を持っていると誤解させたのだ。

ちなみに、妹は腐女子と呼ばれる人間だ。

見た目は悪くなく成績も悪くない。

だが、性格は猫をかぶるのが上手く、俺はいつも酷い目に遭わされてきた。

あいつは両親にも自分の趣味を隠している。

俺にゲームをさせようと策を巡らせたのだ。

おかげで俺は、心配したお袋から電話がかかってきた。

暴れたい衝動を抑えつつ、俺は画面に視線を戻した。

再びコントローラーを手に取ると、誤解を解くためにゲームをクリアすることだけを考える。悔しいが、両親に信用されているのは妹の方だ。

あいつはそれを分かっているから腹が立つ。

必死に誤解を解こうとしても、妹の方が弁は立つのも厄介な点だ。しかもあいつは実家住まい。

俺から小遣いまでせびり取って、忙しい理由が旅行。一発殴っても絶対に許されると思う。

「あいつは一度痛い目に遭えば良いんだ」

昔から要領が良く賢い。

自分が可愛いのも分かっており、何というか俺とは正反対な妹だった。あいつの弱点など、周囲に隠している趣味だけだろう。

悔しい気持ちでゲームを続けると、俺は眉をしかめた。

「ここが問題なんだよな」

妹が俺に押しつけた乙女ゲー。

大作を目指して作られた乙女ゲーは、随分と作り込まれている。妹もイラストや声優目当てで初回限定版をすぐに購入したらしい。

だが、問題は乙女ゲーなのにRPG要素、そして戦略シミュレーション要素が入ってしまっていることだ。

ゲームの舞台は剣と魔法のファンタジー世界。

大地が浮かび、そこで人々が暮らしている幻想的な世界だ。

王や貴族たちがいる世界で文明レベルは高くないように見えるが、飛行船が空を飛び騎士たちはまるでパワードスーツのような鎧を身につけ戦っている。

おまけに主人公が通うのは貴族の子弟が入学する学園。

主人公は身分は庶民なのだが、才能を認められて学園に入学することになった。

そこで王子様やら貴族の息子たちに出会う事になる。

だが、入学すると同性からのいじめやら、戦争によって彼女の人生は大きく変わろうと……。

とにかく、学園物の恋愛ゲームに冒険やら戦争をぶち込んだゲームだ。

妹も最初は自力でクリアを目指そうとしたが、どうしてもそういった男の子向け要素が苦手だったのか諦めたらしい。

おかげで俺が苦勞する羽目になった。

「そもそも乙女ゲーにこんな部分は求めていないだろうが」

文句を言いながらも画面を見てコントローラーを操作した。

画面上には、飛行船が並んでいる。

船型、ラグビーボールの形をした飛行船。様々な飛行船が向かい合っている。

動かすと飛行船が動き、飛行船から騎士たちを出撃させて攻撃を行うのだが。

「妙に難しいのが悪いんだよ。もっとサクサククリアできるようにしようよ!」

とにかく、どのステージも難しい。

簡単なら妹だってクリアできていた。

「あ、しまった」

味方の飛行船が沈んでいく。

大地が浮き上がっており、移動する手段は飛行船が主流だ。そのせいか、戦争の主流も飛行船である。

鉄の塊が空を飛び、砲弾を撃ち合っているのはいいが……とにかく難しい。

ランダム要素があつて勝敗に影響を与えているのも原因の一つだ。

攻略情報を見ながら進めても負けることがあるから腹立たしかった。

「こんなところで時間をかけていられるか！ 大体、なんで乙女ゲーにこんな要素を入れたんだよ！ 馬鹿なのか？ 馬鹿なんだな！ それとも課金させたいのか！」

有料コンテンツを買わせようとしている。

妹のためにこれ以上の出費を認めたくないが、俺の時間が奪われている原因は間違いなく戦闘やら戦争パートにある。

ゲームを中断して有料コンテンツを探した。

そうすると、大量に出てくる商品の数々。

自分 主人公の衣装やら、装備品にアイテム各種。

これらは一つ百円程度の値段で売られているが、戦闘パートで役に立つ飛行船やら鎧の値段が妙に高い。

三百から八百だ。

「……こんな商売をするから評判が悪いんだ」

当初は期待されていたわけだが、このような商法で有料コンテンツを買わせようとしているため批判を受けていた。

強気の価格設定も、一ヶ月もしない内に見直され金額が下がっている。

商品をチェックしていく。

「男の水着姿とか嫌だな」

販売されていたのは、男性キャラを水着姿にする装備品。

見ていて不愉快になってきた。

だが、立場が逆になれば……主人公が男で、攻略対象が女性キャラの普通のギャルゲーなら買ったかも知れない。いや、買ったな。全種類購入した。

精神的にボロボロの俺は力なく笑った。

「ハーレムなんて女から見れば今の俺と同じ気持ちかな？ まあ、どうでもいいか」

俺から見て逆ハーレムを完成できる乙女ゲーは見ていて呆れるし、それはギャルゲーにも言えるかも知れない。

そんな事を真面目に考えている当たり、精神的に危険な気がした。もう、とにかくゲームを終わらせることだけを考えよう。

「さて、どれを買えばすぐに終わるかな？」

どれも強力そうだ。

男性キャラの専用武器とか、主人公の専用装備。

どちらかと言えば戦争パートで役に立つ物が欲しい。

「……これは」

一番高い金額の有料コンテンツは飛行船だった。

補給やら面倒なステータスを無視して、とにかく強い飛行船が手に入るようだ。

「飛行船というか宇宙船に見えるな」

一千二百円もするだけあって性能は申し分ない。

設定を確認すれば、古代のなんとかで……とにかく凄い宇宙船だった。

「宇宙船じゃねーか！ ……もしかして、誤字かな？」

説明文に飛行船と打ち込もうとしたら宇宙船と打ち込んだのでは？ そう思ったが、ゲームをクリアできれば良いので問題ない。

購入しておく。

次、鎧の確認だ。

パワードスーツ……鎧の姿をしているが、なんというか少しも現実感がない。ロボットと言われた方が納得できる姿をしている。

そんな鎧を着込んで戦争するのが騎士である。

女からすれば、自分のために戦ってくれる男が素敵に見えるのだろうか？

とりあえず高いのを購入した。

これで攻略が楽になるのなら安い出費だ。

黒い鎧はどこか刺々しく敵役のように見えるが問題ない。大事なのはゲームを手軽にクリアすることである。

武装が豊富なのか、技の種類が多いのも良い。

どんな場面でも活躍してくれるだろう。

剣は強いが飛び道具を持っていない剣聖の弟子とか、魔法馬鹿で打たれ弱い攻略キャラもいる。

とにかく、戦争パートを手早く終わらせられるなら二千円の出費も悪くない。

「終わらせないと。とにかく終わらせてゆっくりしたい」

せつかくの休日が失われていく。

我慢できずに購入した有料コンテンツを使用し、俺はそこから黙々と野郎共を攻略していくのだった。

昼を過ぎ、夕方になる頃にはなんとかイベントやらCGの回収率が九割を超えた。

残っているのはハーレムエンド。逆ハーレムエンド？

主人公と男性キャラ全員が結婚するエンドが残っている。

このゲームのトゥルーエンド 真のエンディングとも言われているのだが、俺からすればただ無心でクリアするだけだ。

野郎共の好感度が一定数になると渡してくるアイテムを、翌日には道具屋で売り払って金に換えてやる。

しかも本人が仲間にいる状態で、だ。

本人の目の前で売り払うなど外道だが、ゲームなので関係ない。

ただ無心で攻略情報通りに進めていく。

これがギャルゲーなら良かったのに。

そう思いながらプレイを続け……気が付けば夜になっていた。

「……本当に丸々二日間が潰れた」

エンディングを見ながらこみ上げてきたのは怒り、そして悲しみである。

どうして俺がこんなことをしなければならないのか。

データをセーブし、そして妹との約束を守った俺はベッドに横になる。

時計を見れば寝ていてもおかしくない時間だ。

今から出かける気にもならない。

だが、全てが終わって安堵したせいとお腹が空いてきた。

手で腹を押さえると、朝少しだけ食べたのを最後に何も食べていなかった。

「冷蔵庫には何もなかったな」

掃除をした際に賞味期限の切れた物は捨てた。

元からほとんど何も入っていなかったこともあり、俺は何を食べるにしても外に出なければいけない。

しかもこの時間帯だ。

ファミレスやコンビニくらいしか行くところがない。

スマホを見れば、妹からメッセージが届いていた。

『真面目にやっている？ 帰ったら受け取りに行くから用意しておいてね。頑張ったらお土産を渡してあげる』

自分の妹ながら最低な奴だと思った。

自分は楽しんでいることをアピールしつつ、俺に真面目にやれとか言っているのだ。しかも、俺から金をせびって……。

「あいつアルバイトもしていないのにいったいどこから金を出したんだ？」

不思議に思って考える。

下手にプライドが高いので捕まるようなことはしていないだろう。門限もあるので夜遅くまで遊んでられない。

そこまで考え、俺はお袋が以前言っていたことを思い出した。

「資格取得のために金がいるとか言っていたな」

両親は車の免許でも取るのかと思ってお金を用意したらしいが、どう考えてもその一部は旅行に使われているとは思えない。

俺は妹のメッセージをコピーした。

パソコンで編集をして、お袋宛にメッセージを送る。

もちろん、あいつのコメントやら画像も添えて、だ。

「……馬鹿な奴。兄を舐めているからこうなるんだ」

俺を脅したことやら、旅行に出かけていること。

これらを見て両親がどう思っただろうか？

流石に動かぬ証拠があるので、あいつも言い訳が出来ないだろう。

そう思っただけでニヤニヤしたところで俺は気が付いた。

「あれ？　なら、最初からこうしていれば無駄にゲームをクリアする必要もなかったような……ああ、もう駄目だ」

自分がいかに間抜けかを実感してしまいつつ、俺は腹が減ったので財布を手に取った。

妹の件は、戻ってきてからの楽しみ。

もう、乙女ゲーのことで頭を悩ませる事もない。

そう思えば足取りも軽い。

妙にフワフワした感覚は、まるで仕事から解放された後のような幸せな感覚だった。

「さて、今日は奮発するか。コンビニか、それともファミレスか」

夕食を普段よりも豪華にしようと思つて決めると幸せな気分だった。

誰もいないチ力チ力する蛍光灯が気になる通路を進み、階段のところにさしかかると急にめまいに襲われた。

「あ、これ駄目な奴」

体は糸が切れてしまった操り人形のように力を失いその場に倒れる。

運が悪いのは場所だった。

目の前には階段が迫っており、そのまま視界が急激に景色を変えていく。

体は痛いとかそういう感覚はなかったが、勢いよく転がり落ちた俺は自分の状態が危険だと思った。

「……こんな……最期は……みと……ない」

せつかくの休日を妹に潰され、そして解放されたと思えば明らかに大怪我をした自分。いや、もしかしたら命の危機かも知れない。

そう思うと、妙に 腹が立ってきた。

薄れゆく景色の中で、走馬灯が流れ出していよいよ最後かと思っ
ていると 最後の最後で見たこともない景色が見えてきた。

海から浮かんだ大地。

空を飛ぶ飛行船。

青空と白い雲　太陽に手を伸ばしている自分の姿が見えて、そこで意識は遠のいた。

なだらかになっっている土手はほどよく伸びた草で青々していた。

そんな場所に寝転がり、太陽に手を伸ばした俺【リオン・フオウ・バルトファルト】は激しい動悸に襲われていた。

太陽の暖かさで汗をかいたのではなく、冷や汗が止まらなかった。
気持ち悪い汗だ。

「な、なんだ、今の？」

上半身を慌てて起こしたせいか、服に引っかかった草が地面から抜けた。風が吹くと葉やら草が舞っていた。

随分と強い風が吹いたと思えば、太陽を隠すように俺の真上を飛行船が通過していく。

四角い箱のような木造の飛行船は、領地に定期的に訪れる飛行船だ。

普段何気なく見ていたはずなのに、今日に限っては目を見開いて驚きを隠せなかった。

まるで初めて見たような感覚。

胸を押さえると心臓が強く脈打っていた。

立ち上がって飛行船が過ぎ去っていく方向を見れば、その先には海が広がっている。

違和感があるとすれば、海の見え方が違うことだ。

「なんだ。なんで」

ゆっくりと足を進めると、転んでしまった。

自分の体を確認すれば、手足が妙に小さい。

自分の体であるのは間違いないのに、妙に小さく感じてしまう不思議な感覚。

気にするよりも、まずは確認する方が大事だった。

歩き、そして駆け出して向かった先は海だ。

妙に胸騒ぎがする。

子供の足で随分と時間がかかった気はしたが、目的地に到着した。

落下防止のための柵が用意されたその場所から見た景色は、いつも通りの景色だった。

「そうだ。いつも通り　島は浮いている」

海から浮かんだ島。

今日も浮島は浮かんでいるのに、それが嬉しいのか悲しいのか分からない。浮かんできたイメージは島が海水に浮いているようなイメージだ。

そんなはずはないというのに、どうしても確認したかった。

先ほどから妙だ。

太陽に手を伸ばした瞬間、見えたイメージはまるで人一人分の一生だった。ここではないどこかで生きた男の一生。

際だった物などないが、それでも幸せそうに見えたのは気のせいではない。

ただ、名前が思い出せない。

両手で頭を押さえる。

あれだけ鮮明に見てきた記憶なのに、どうしても名前が思い出せないのだ。

自分が生きてきて五年　五歳の自分が経験する以上の物を、一瞬で経験したような　思い出したような感覚。

訳が分からなくなりその場に座り込む。

柵を背にして空を見上げた。

「……いたい何だったんだろう」

誰に対しての問いかけなのか、自分にも分からなかった。

日も暮れてきたので家に戻った。

戻るのが嫌で逃げ出して土手で横になっていたのを思い出したが、夜になる前に戻りたかった。

覚悟を決めて家に戻れば、そこで待っていたのは父親だった。

玄関の前で仁王立ちをして待っていた。

「この馬鹿息子が！」

大きな拳で頭を叩かれ、涙目で頭を押さえると玄関が開いた。

そこから見えるのは俺の母親だった。

「ようやく戻ってきた。あんた、奥様が来る日にどうして逃げたりなんかしたの」

俺の親父【バルカス】は領主　男爵だ。

イメージでは貴族というのは良い服を着て、もつと線の細い感じ。もしくは、太っているイメージだったが、バルカスは筋肉質で髭を生やした大男だった。

母親は妾で【リユース】 寄子である騎士家の娘だった。

こちらドレスではなく、町やら村で女性が着ているような服を着ている。

俺の母親が言う奥様というのは、親父の正妻のことである。

「う、ごめん……なさい」

俺の雰囲気がいいつもと違うのを察したのか、両親は微妙な顔をし
ながら俺を家 屋敷ではなく倉庫へと連れて行こうとした。

すると、開いた玄関からドレスを着た女性がこちらを覗いていた。

屋敷から出ないで俺を見下している。

宝石で首や指を着飾り、近くには長男である【ルトアート】と長
女の【メルセ】が控えていた。

あの二人だけが奥様 正妻の子供たちである。

その後ろには、長身の美形である男性がスーツ姿で立っている。

耳が長く、エルフの特徴を揃えた男性は俺たちを見て嘲笑っていた。

「まったく、教育の行き届かない子供はこれだから」

目を細める女性は髪をまとめており、いかにも貴族の女性という
イメージにピッタリだ。兄も姉も俺とは違って金のかかった服を着
ている。

母が謝罪をし、父が俺を連れて倉庫へと向かうのだった。

倉庫に到着するまで、父は我慢している顔をしていた。

「……倉庫で反省していなさい。食事は後で持つて行かせる」

言われて頷くと、倉庫には先客がいた。

次男である兄の【ニックス】だ。

俺と同じような服を着た二つ上の兄は、ランタンの明かりの下で本を読んでいた。父と俺がやってくると呆れた顔をしている。

「お前も馬鹿だな。数日我慢すればあいつらは出て行くんだぞ」

本に視線を戻す次兄を見て、父は手で頭を押さえていた。

「ニックス、リオンに勉強を教えてやりなさい」

次兄は凄く嫌そうな顔をしていたが、倉庫にある机のスペースを空けると椅子を持つてくる。

俺に座るように言うのだった。

「寝たら叩くからな」

俺が頷くのを見て、父は倉庫を出て屋敷に戻るのだった。

二人だけになると次兄は俺でも読めそうな本を渡してきた。何度も使い回されたボロボロの本を開く。

所々に落書きがされていた。

倉庫内。

ランタンの光に集まった虫を払いのけながら、本を読む。

少し不思議な感覚だった。

知らない言語が頭の中にある。むしろ、そちらの方が使いやすい感覚もあるくらいだ。

俺が悩んでいるのを次兄は読めない文字があると思ったようだ。

「少しは自分で考えろよ。どうしても分からないなら教えてやる」
静かな時間が過ぎていく。

五月蠅いというか、邪魔なのは光に集まる虫くらいだ。

「ねえ、兄貴？」

俺の言葉遣いに次兄が少し驚いた。

「兄貴？ お前、今日の朝まで兄さんって呼んでいなかったか？」

俺は慌てて言い直そうとしたが、次兄は自分の中で答えを見つけたらしい。

「背伸びしたい時期か？ まあ、俺は別にどうでも良いけど。それ

よりどこが分からない？」

俺は首を横に振る。

気になったのは俺たちの扱いだ。

嫡男が大事にされるのは分かるのだが、どうして俺たちは倉庫に追いやられているのか、だ。俺たちには他にも姉や妹がいる。

なのに、姉と妹は倉庫にはいない。同じ妾腹なのに、だ。

「どうして俺たちだけ倉庫なのかな？」

次兄は「昨日まで僕とか言っていたくせに……」と、独り言を呟いた後に本を置いて天井を見上げるのだった。

「奥様は俺たちのことが嫌いだからだ」

「お袋　母さんの子供だから？」

次兄は頭の後ろに両手を持って行く。

「それ以外に理由なんかあると思うか？　流石に妾の子でも、女の子を倉庫に追いやるのは躊躇ったみたいだが、男の扱いなんてこんなものさ」

そこから次兄は淡々と家の事情を話してくれた。

話してくれたと言うよりも、訳も分からない三男の俺に愚痴を言っているような感じだろう。

七歳の次兄も色々と不満に思っているらしい。

バルトファルト家は浮島を領地に持つ家だ。

ただ、以前は準男爵家という騎士家に分類される家だった。本物の貴族ではないが、一応は領主という家柄だ。

しかし、随分と時間も経てば発展もする。

独立、仕官など寄子の騎士爵家も誕生し、気が付けば家の規模が大きくなっていた。

領内の整備が進み、人口が増える。それは支えられる人口が増えることを意味しており、領地規模で言うならばギリギリ男爵家相当だった。

そんな領地に「ホルファート王国」の調査官がやってくる。

領地規模を確認しにやってきたらしいのだが、普通は領地規模だけを見て陞爵を決めない。決めないのだが、王国は領地規模が男爵家相当なら男爵位を用意すると言いつつ出した。

普通はもっと武功やらその他の功績がなければ陞爵しないらしい。

「陞爵するのは駄目なのですか？」

次兄も分からないらしいが、父の様子から嬉しくないのを察しているようだ。

「急に言われても困ると愚痴をこぼしていた。それに、男爵家には男爵家並の貢献が求められる。うちが貧乏なのはそのためだってさ」
家格にあつた働きを求められる。

そう言えば、知らない世界の知識で思い当たる物があつた。

ギリギリ男爵家の規模と、余裕のある男爵家。

余裕がある家は問題ないが、そうではない家は貢献が苦になる。
だから、領地規模が男爵家並でも、黙って準男爵家を名乗っている家もあるのだろつ。

とにかく、離島の田舎貴族が男爵家になつてしまった。

家格に相応しい振る舞いを求められ、父は身分の高い女性と結婚することになったらしい。

だが、奥様と呼ばれる女は日頃領地にはいない。

長男も長女も領地にはたまにしか来ない。

「……結婚したんですよね？」

「そうだな。したな。まあ、男爵以上の家はアレが普通らしい。将来は俺もお前も学園で相手を見つけないといけないからな。ただ、男爵家以上の娘は関わりたくない。年増女の面倒を見る後夫にもなりたくない。お前も今の内に勉強をして、学園で相手を見つけれようにしておけよ。でないと婆の後夫にされるぞ」

……俺は驚きを隠せなかった。

学園とか、色々と聞きたいこともあるのだが……それ以上に後夫という言葉だ。

「あ、あの、兄さん？」

「別に兄貴でも良いぞ。それよりもなんだ？」

「……普通は男性が家の中心では？　というか、年上の女性に押しつけられるってどういう意味ですか？」

次兄は首をかしげている。

「そのままの意味だ。結婚できなかった女とか、男に逃げられた女とか、とにかく夫がいない女だな。愛人だけ、って言うのは面子が立たないらしい」

やけにしっかりしている次兄は、俺の質問に答えてくれる。

「普通は男の方が立場は上では？」

俺が手に入れてしまった知識では、こういう場合は男が強いと漠然と思っていた。だが、どうやら違うらしい。

「女の方が強いのは父さんを見ていれば分かるだろ。あいつに奥様に逆らえないのはお前も見ているだろうが」

奥様をあいっと呼んだのを改めるところを見るに、次兄は奥様を苦々しく思っているのだろう。

とんでもない話を聞いてしまった。

「お前、今日はなんか変だぞ」

次兄に疑われ、俺は苦笑いをしながら視線を本に向けてまたしても変な汗をかく。

おかしい……何というかこの世界はおかしい。

変な世界の知識を得たためか、俺には違和感がなかった。

しばらく本を読んでいて、そして先ほどの次兄の言葉を思い出す。

「学園……ホルファート王国？ それに愛人……もしかして、あのエルフの使用人……エルフ？」

俺がブツブツ呟いていると、次兄が五月蠅いと文句を言う。

「どうしたんだよ」

「え、えつと、あのスーツの男。エルフは奥様の愛人だね？」

どうにも次兄に対してどんな風にしゃべれば良いのか分からない。

次兄は気にした様子はなく、ただ呆れているだけだ。

「当たり前のことを聞くな。ほら、さっさと勉強しろ」

亜人種が愛人というか、側で仕える使用人……この状況を俺は知

っている。というか、凄く鮮明に覚えていた。

俺は机に突っ伏した。

「……ここ、乙女ゲーの世界だ」

混濁した意識が徐々にハッキリしてきた。

同時にこの世界が、とんでもなくフワフワした設定の乙女ゲー世界だと気が付いてしまった。

次兄が俺の頭を平手打ちする。

「寝るな！ お前、今日は本当にどうした？ 頭でも打ったのか？」

俺は顔を上げて次兄を見る。

引きつった笑みを浮かべているので、次兄が驚いて少し下がった。

「な、なんだよ」

「……兄貴、世の中って理不尽だよね」

「……あ、ああ、そうだな」

返事に困っている次兄は、逃げるように視線を本に戻して勉強を再開するのだった。

異世界転生というのを、まさか自分が経験するとは思わなかった。

しかも剣と魔法のファンタジー世界……でも、女尊男卑の乙女ゲーの世界とか聞いていない。

俺は両手で頭を抱える。

「最悪だあああ！」

叫んでしまった俺に、次兄が泣き言を言うのだった。

「なんなんだよ！ 誰かこいつを静かにさせてくれよ！」

俺【リオン・フォウ・バルトファルト】は、乙女ゲー世界に転生した元日本人。

……もつと普通の世界に転生したかった。

しかも、よりもよって乙女ゲーって……。

戦う理由

ホルファート王国は女性の権限が強い国だ。

乙女ゲーのフワフワした設定を実現すれば、こんなにも醜い世界が作り上げられるのかと怒りを覚える今日この頃。

俺は記憶を取り戻してから、十年の歳月が過ぎていた。

十五歳。

黒髪は短くしている。体つきは日頃の鍛錬や農作業で鍛えられたのか引き締まっていた。

鍛えているためか顔つきも良い。

前世の面影も残っているが、それでも見られない顔ではない。

際だった美形でなくとも嬉しい限りだ。

ただ、この世界は乙女ゲーの世界。

仲が良かった次兄は、大陸である本土の学園に入学してそこで寮生活を送っていた。

手紙には「婚活がきつい」と書かれていた。

この乙女ゲーの世界……男は学園を出るまでに結婚しないと問題

有りとなされ、二十歳までに結婚できない男は不良物件扱いだ。

男にとってはとんでもなく厳しい世界だ。

次兄の手紙を狭い部屋で読む俺は、次兄の結婚相手が早く見つかることを祈った。

何しろ、結婚していないと今後の就職やら出世に響くのだ。

貴族でも次男や三男など独立しても進む先が決まっている。

多くは軍人や役人だ。

結婚できない男はずっと下働きのような扱いを受ける。

数年前まで次兄と一緒に使っていた部屋は、今では四男の【コリン】と使用している。コリンは俺の六つ下の弟だ。

戦争や小競り合い、そして空賊という賊集団もいる世界では命を落とす確率が高い。そのため、辺境では子供は多い方が良いとされた。

男は命がけで戦い死にやすい。なのに扱いは酷い。

「……理不尽な世界だな」

弟のコリンがベッドに横になり寝息を立てている。

無邪気な顔をしていた。

跡取りではない俺たちは、ハッキリ言ってしまうえば予備とかその他大勢だ。

ゲーム的に言えば学園に入学できても背景扱いのモブに過ぎない。
脇役でもないその他大勢。

台詞もゲーム内で一言二言あればマシな部類。

モブAとかB、そんな立ち位置だろう。

そもそもバルトファルト男爵家などゲームでは聞いたこともなかった。

「モブか……俺らしいと言えば、そうなんだろうけど」

納得したくはないが、納得できる自分がいる。

来年からは俺も学園に入学だ。

この世界、唯一の利点は貴族なら学園に入学できることだろう。

ゲームのための設定が現実になっていると思えば微妙だが、そこで勉強できて役人や軍人になれるのはありがたい。

領地の外に出られる機会がなければ、縁談を持ってこられ強制結婚も十分にあり得る。

これが同年代、もしくは二十代ならまだマシなのだが、どこかの三十代とか四十代の後夫だったら笑い話にもならない。

「そう思つと、学園に入学できるのは本当にありがたいよな」

無邪気に眠っている弟のコリンを見て、俺は安堵の溜息を吐くのだった。

「……お、お見合い？　どついう事ですか！」

朝食後。

父の執務室　　というか、仕事部屋に呼び出された俺は唖然とするしかなかった。

理由は部屋の中にあるソファ―に座っている奥様　【ゾラ・フ
イア・バルトファルト】が持ってきたお見合いの話だ。

普段使用している椅子に座る父が苦々しい顔をしていた。

受け取った身上書　見合い相手の写真やら色々と書かれている書類などを受け取った俺は唖然とするしかなかった。

父は悩んだ顔をしているが、ゾラの顔を見てから俺の方を見る。

「ゾラが持ってきた縁談だ。知り合いが後夫を探しているらしい」

ゾラは家に置かれている中でも高級なお茶を飲んで「安物はこれだから」などと文句を口にしていた。

俺は納得できない。

「いや、でもこれって!」

とにかく相手が酷かった。

身上書には相手の年齢が五十を超えていると書かれ、オマケに結婚回数は七回を超えている。

相手は男爵家の娘らしく、子供もいるが独立していないというか……俺よりも年上だった。

ゾラは少し乱暴にカップを置いた。

苛立っているのが伝わってくる。

「私が日頃からお世話になっている方です。宮廷貴族の家柄で、長年王家に仕えてきた歴史ある家ですよ。何が不満なのですか」

何が不満？ 逆にこれで満足すると思ったら馬鹿だろう。

「なんで学園にも入学していないのに結婚の話が出るんです!」

ホルファートでは結婚の話が出るのは、通常は学園に入学してから。もしくは政略結婚で婚約している場合などが早い例だ。

それでも、政略結婚は跡取り同士が主な例である。

男子がいない家に婿入りで婚約という話もあるが、相手は独立した家を持っていない女性でしかない。

男爵家の娘と言っただけ。

しかも結婚が俺で八回目……明らかに危険な見合いにしか思えない。

ゾラは苛立っていた。

「次男までを学園に入学させるのはよしとしましょう。ですが、三男を学園に入学させる意味などないわ。入学費は不要でも、その他のお金がかかるのよ」

俺がゾラを睨み付けると、父が謝ってくる。

「お前にはすまないと思っている。だが、家に金がないのも事実だ。学園に入学してから稼ぐ方法もあるんだが」

父がゾラを見た。

ゾラはソファでふんぞり返っている。

「学園を出てもたいした職に就けないでしょうに。どうせ戦争で死ぬんですからね。精々、家のために頑張りなさい」

戦死して名誉やら遺族年金を渡せと言っているようにしか聞こえない。

貴族は夫が死ぬと、遺族には年金が支給される。

兵士なら一括で支給される。

ゾラの持ってきた話は、俺を殺して金や名誉が欲しいと言っているようにしか聞こえない。

「嫌です。お断りします」

拒否する俺に対してゾラがテーブルを叩いた。

「お黙りなさい！ 妾の子風情が私に意見しようというの！」

このゾラという女……基本的に王国の首都【王都】で生活している。

父が屋敷を用意してやり、生活費も仕送りしている。

実家の収入的になんか苦しい中、仕送りしているのにこの態度だが、こんな女でも父が切り捨てると悪評が立つ。

それこそ、あの家はまともじゃない 等という評価を受ける。

そのために離婚も出来ないのだ。

俺はどうにかしてこの状況を打開したいと知恵を絞る。

思い出せ。

俺にはゲームの知識がある。

十五歳になるまで色々と試してきたが、金もなく時間もないので色々と試せてこなかった。

だが、ここで頑張らないと未来がない！

「……金があれば問題ないんだな？」

俺の問いかけにゾラは鼻で笑っていた。

「あら？ 金も稼いだことのない穀潰しが随分大きな態度に出たわね」

鏡を見るとこれほど言いたい相手もいない。

「このお見合いの話を断るのは失礼に当たるわ。入学費だけを稼げば良いなんて都合の良いことだけを考えているなら止めておきなさい」

この話、父も知らなかったらしく不満そうにしていた。

だが、父も強い態度に出られない。

「リオンもまだ若いんだ。そんなに急ぐことも」

「黙りなさい！ 男なんて二十を過ぎれば貰い手なんかいないのよ！ 今の内に相手を見つけてあげようとしている私にお礼を言わず、選り好みをして文句を言うなんて……これだから田舎のガキは嫌いなよ」

何でも田舎のせいにするのはどうかと思う。

俺が文句を言おうとすると、父が仲裁に入った。

「この子の気持ちも考えてやってくれ。初婚で五十代の女性など断つても仕方がない。年齢差は四十に近いんだぞ」

そもそも、俺より年上の子供がいるのだ。

そんな家で暮らしていくなど……寒気がする。

「……もしも金が用意できたら、見合いの話は取り消して良いんだな？」

ゾラは乱暴に腰を下ろすと、脚を組んで俺たちを馬鹿にするように見ていた。

「あら？ それだけの甲斐性を持っているなんて初耳ね。毎月の仕送りをもっと増やして欲しいくらいだわ」

この世界の女性が、全てこいつのように勘違いしているとは言わない。だが、こんな女を見ていれば嫌にもなってくる。

この世界の女性へのイメージ 特に貴族のイメージは最悪だ。

父は片手で顔を押さえていた。

俯き、絞り出すような声で言う。

「時間をくれ。なんとか用意してみよう」

そんな父の姿に腹立たしい気持ちもあったが、俺のために無理をしてくれる父に申し訳ない気持ちが強かった。

本当になんて酷い世界だろう。

ゾラが出て行った部屋には俺と父だけが残された。

腹立たしい女だ。

「あいつ、これだけのために船を出せとか、滞在の準備をさせたのかよ」

日頃は首都で暮らしているので、こちらに来るとなると準備が必要だ。

飛行船は定期便を使うとしても、宿泊する部屋の用意や食事の準備はこちらが行う。交通費もこちらが持つのだ。

父は弱気だ。

それだけの理由もある。

「怒るな。この結婚はどうしても必要だった。ゾラと結婚したから、うちは男爵家として相応の格を得た扱いになっているんだぞ」

離島 辺境に嫁に来てくれただけでもありがたいというのが父の考えだ。同じ辺境出身の貴族の娘たちは、都会に憧れ都会に住む相手を見つけるらしい。

中には変わり者がいるのだが、そういった女性は奪い合いになる。

ゾラが結婚してやったと思うように、父は結婚して貰ったと思っているのだ。

「ところで、金を用意できる予定はあるの？」

俺は父に確認するが、難しい表情をしていたので察した。

「金を借りるのも厳しい。あの様子だと、本気でコリンの奴も婿に出してしまいそうだな。どうしてこんな事になったのか」

「……なんで兄貴に話を持っていかなかったのかな？」

父も俺の話を聞いて首をかしげていた。

「ニックスでも年齢が離れすぎているが……確かに変だな。学園に入学させたくないみたいだった」

気になったので俺たちは次兄に対して手紙を出し、少し確認することにした。

実家でこういう話が出ているが、そちらは大丈夫なのか、と。

だが、返答は俺たちの想像を超えていた。

一週間後 実家の倉庫。

俺は保管されている武器を取り出していた。

武器も実家の財産であるから、無理矢理俺が使おうとすれば父が怒る。だが、今の俺を止められる奴はいない。

随分と旧式のライフルは、弾倉に五発しか入らないタイプだ。

その中でも一番まとまそうなものを手に取り、整備するために分解する。

飾られてあつた剣をテーブルの上に置き、使えるかどうかの確認もした。その他必要な道具も全部かき集めた。

父がそんな俺を見て。

「お、おい、どうするつもりだ」

先ほど次兄からの返事を見て俺は覚悟を決めた。

俺なりにゲーム知識を使って金を稼ごうとのんきに考えていたのだが、事実を知った俺は悠長なことを言っていられなかった。

「変態婆に売られる前に、何が何でも金を稼ぐんだよ！ 嫌だぞ。俺は嫌だからな！」

父の後ろで母も涙目だった。

俺が売られるように婿入りする家は、とにかく評判の悪い家らしい。

淑女の森？ とかいう集まりを開催しており、男は奴隷であるか

らどんな扱いをしても良いと言っている婆たちだった。

実際に奴隷として扱い、亜人の使用人などよりも待遇が酷いらしい。

どれだけ男を使い潰すかを楽しむ連中……。

最悪だ。

しかも、身分だけ高い貴族の婆が揃っており、使えない男は戦場送りにして殺していると言っから酷い。

何が酷いって……ゾラがその関係者だったことだ。

集まりの一員ではなく、俺たちのような部屋住みと呼ばれる跡取りの予備を売り払って儲けようと考えていたらしい。

まともな人なら関わり合いにならない連中のようで、同じ女性からもドン引きされる集団だった。

「なんでモブにそんな変態共が関わってくるんだよ！ もっと穏やかで山も谷もない人生の方がマシだ！」

母が俺を見て心配している。

「あなた、リオンが何を言っているか分からないわ」

「俺も分からない。というか、武器を持ちだしてどうするつもりだ？ まさか、王都に乗り込むつもりか？ や、止めておきなさい」

武器を整備している俺を見て、父が心配そうな顔をしている。

今すぐ乗り込んで消してやりたいが、今の俺では無理だ。

首都　王都には武装した騎士たちがいる。

乗り込んだところで取り押さえられるし、貴族の女性が側に置く
亜人の使用人は鍛えられており強いことが多い。

「……一攫千金を狙うなら冒険者が一番だ」

俺の話を聞いて両親が顔を見合わせた。

この世界では冒険者というのは認められた職業だ。認めなければ
ならない職業とも言える。

何しろ、貴族というのが元は冒険者たちの末裔だからである。

ゲームの設定では、貴族というのは冒険者として新しい大地を
見して領地を得た人たち。数々の冒険で財を得た冒険者が貴族にな
った。

だから、学園では貴族は冒険者となる必要がある、とかそんなゲ
ーム的な言い訳がある。

ダンジョンで主人公がチャホヤされ好感度を稼ぐための理由が、
ここでは俺を救うために利用できる。

父が首を横に振る。

「止めておきなさい。ダンジョンなんて一人でどうにかなるものではないし、金を稼げるようになるのも時間がかかる」

母も同じだった。

「そ、そうよ。それに、今は浮島を見つけるのも大変なのよ。大金なんか稼げないわよ」

人が住める浮島とか、資源が採取できそうな浮島を発見すればそれは冒険者の物になる。その気があれば領地を持つて独立も可能だが……条件の良い島なんて大陸周辺には残っていない。

残っていないのだが、たった一つだけ俺は知っている。

「ごめん。決めたんだ」

俺一人なら逃げてても良いが、弟のコリンはまだ九歳だ。

そんな弟が変態共に売られるなど見てはいられない。

俺の覚悟を父が察してくれると、口を開いた。

「欲しいものはあるか？」

俺は迷わず父に揃えてほしいものを告げた。多少無理を強いるが、俺にとっては生きるか死ぬかの瀬戸際でもある。

何もしないで変態婆たちに玩具にされるくらいなら、前のめり可能性のある方に賭けたい。

「ボート型でも良い。飛行船を一隻。それから、弾丸が欲しい。特別な弾丸が欲しいんだ」

父は首をかしげていた。

「いったい何をするつもりだ？　どこかのダンジョンに挑むのか？　なら、定期船でも良いだろうに」

「定期船が出ていない場所に行く」

ライフルを構える。

剣と魔法のファンタジー世界にライフルは微妙だが、飛行船が大砲を撃ち合う世界だ。魔法もあつて銃もある。

引き金を引くとライフルは動作して金属音を鳴らした。

この世界に転生して、なんとなく生きてきた。

だが、流石にモブでも譲れないこともある。

玩具にされる人生などこりごりだ。

だから抗おう。

父が頷く。

「分かった。出来るだけ早く用意してやる。だが、絶対に戻ってきなさい。それが約束できないなら準備はしてやらないぞ」

俺だつて戻つて来たいが、人生がかかっている。

「……必ず戻つてくるさ」

俺の人生を守り、弟の人生を助け、ついでにゾラの鼻を明かしてやりたい。俺を売ろうとした糞女にいつか復讐してやる。

そんな強い気持ちを抱きつつ、俺は出発まで準備に費やすのだった。

「こうして真剣に取り組むのは初めてだな」

乙女ゲーの世界とは言え、ゲームの世界。

ゲーム知識で無双してやると考えたことは一度や二度ではない。

ただ、日々の生活で疲れていた。

質素な食事。朝から父に鍛えられ、その後は農作業。

終わる頃には日が暮れており、家に戻れば勉強が待っている。

この世界、辺境やら離島の男爵家など貧乏だ。

要因が結婚相手にあるが、基本的に都会と比べると貧乏である。

陸爵 出世せずに準男爵のままなら、今と比べてもまだ裕福だったと父が愚痴をこぼす事が多い。

金持ちの男爵家も当然いるし、実家とは比べるのもおかしいくらい裕福な家もある。

浮島の端に向かった俺は、飛んでいる魚のような酷く不気味な何かを見つけてはボルトアクションのライフルを構え引き金を引いた。

モンスターと呼ばれる存在は、このフワフワした設定の世界では悪である。もう清々しい程に悪という存在なので、倒すことに忌避感はない。

倒してしまえば消えてしまうと言うのも大きな理由の一つだろう。

人を見つければ襲いかかってくるこいつらは、とにかく倒す方が良い。

もっとも、倒した事で得られるのは目には見えない【経験値】である。

「くそっ！ 外した」

すぐに次の弾丸を装填すると、構えてよく狙う。

相手はこちらに気が付いて向かってくる。

大きさ的には一メートルくらい。

本来なら引き寄せたところで撃てば良いのだが、外して組み付かれると最悪死ぬ。

俺が戦えるのはライフルがあるから。

だが、弾丸も無料ではない。

一発一発がとにかく高い。

近づいて来たモンスターは、大きな口を開けて俺にかみつこうと
していた。口の中には刺々しい歯が並んでおり、見ていて怖くなる。

「この程度で逃げたら……人生が終わるんだよ！」

今まではいつか経験値稼ぎでもやってみよう。いつか冒険者にな
って島を発見して探検しよう。いつか金を稼ごう。そう、“い
つか”しよう。

そう思ってきた。

だが、もう時間もなく逃げられない現状でようやく尻に火が付い
た。

引き金を引くと、弾丸はモンスターの口から入り背を貫く。

急に方向を変え、島にたどり着くことなく落ちていく。

様子を見れば、海水に到達する前に黒い煙に包まれ消えていった。

「……これで経験値が手に入ったのかな？」

自分の左手を見るが、そのような感覚はない。やはり、ゲームと
現実の違いのだろう。

ただ、射撃の腕は磨かなければいけない。

ボート 空を飛ぶボート型の乗り物も操ることになれば
目的地に到着すら出来ない。

いつかやろうと思っていた事は、ゲームで言うならチート級アイテムの回収だ。中でも有料コンテンツで手に入れたアレがあるのな
ら話が早い。

なかった場合も考えがある。

本来は主人公が手に入れるべき財宝やらアイテムなどが、俺も人生がかかっている。主人公様に悪いが、俺にも幸運を分けて貰おう。

ライフルを両手に持つ。

「俺の幸せのために主人公には犠牲になって貰おう。大丈夫だ。計算したら、俺は主人公と同じ学年。いつか恩を返せばチャラだ」

罪悪感もあるが、それ以上に変態婆に売られたくない。

俺の貞操の危機だ。

「変態中年親父の後妻に送られる女もこんな気持ちだったのか？
くそっ！　なんて世界だよ」

残り時間は少ない。

俺はまたモンスターを探して周囲を見渡すのだった。

一ヶ月後。

一隻の小さな船は作りがしっかりしていた。

プロペラのエンジンが取り付けられ、操作もしやすい。

船の上。

日差しが強く体を覆うローブをまとい、フードをかぶっていた。
積み込んだ水や食料の他には武器関係。

人一人ならしばらく大丈夫な量はある。

「親父も無理をしたな」

用意してくれたのは船だけではなく、ライフルに剣。他にも色々ある。

両親には感謝しても足りないくらいだ。

これだけの物を揃えるために随分と無理をしただろう。

船自体は持っていた物に小さなプロペラエンジンを付けたようなものだ。それでも、貧乏貴族には大事な財産と言える。

「それにしても、電気もガスもあるなんてファンタジー世界として

どうなんだ？」

ライフルを肩にかけ座っている俺は、双眼鏡を手を取って周囲を見る。

地図を手に取り、コンパスを取り出した。

「こういうところはファンタジーなんだよな」

コンパスは方位を知らせ、そして進むべき道を示してくれる。方位を知らせる針とは別に、目的地を知らせてくれる針があった。

二つの針が存在するコンパス。

場所をダイヤルで数値として設定するとその目的地を示してくれるのだ。

十年も前にやったゲームの記憶など薄れているが、当時の俺は覚えていた限りの数字を書き記していた。

あの頃はチートで暴れ回る妄想をしていたが、日々の生活の忙しさに何も手を付けていなかった。

「もつと前から努力しておけば良かったな」

そう思っても動き出せないのが人間だ。俺はその典型だったといってもいい。

俺も尻に火が付くまではダラダラと日々を過ごしていた。

いや、前世よりも過酷ではあった。

朝早くから起きて、夜は勉強をして……農作業って本当にきつい。全部終わってベッドに横になればそのまま眠るのが普通だった。

毎日クタクタだった。その後に自主練などする余力もないし、俺には特別な知識も技術もなかった。転生してチート？ 持っていたら苦労しない。

知識チートで内政？ そんな知識は持っていないし、異世界で通用するか分らない。

時折浮かんでいる岩があるくらいの空を進むボート。

「青い海と空……白い雲もあるけど、それだけじゃな」

気が狂いそうになるのを耐えて、ライフルを握りしめる。

いつそのライフルで自決でもすれば、次はもっと良い人生が待っているのかも知れないと前世を持つ俺は考えて 首を激しく横に振った。

「俺だけが死んでも何の解決にもならない。俺の代わりにコリンが変態共の餌食になるだけだ」

思いとどまり顔を上げる。

太陽がまぶしい。

いっそ、全てを捨てて逃げ出してみようか？ などと何度も考え

た。

だが、この世界は前世の日本より危険だ。

モンスターもいれば賊もいる。

俺が一人飛び出したところで、仕事にすらありつけないのが現状だった。前世の日本が恋しい。

逃げ場はないのだ。

「モブには辛い世界だよ」

独り言が多くなってきたが、気にしてなどいられない。

周囲を警戒する。

こんな時に空賊にでも出会ったらおしまいだ。

そう思って再び周囲を警戒するのだが、急に風が強くなってきた。地図がパタパタと音を立てている。

風に流されないように置いたコンパスの目的地を示す針がぐるぐると回っていた。

「なんだ？」

立ち上がると風が強くなり、体が倒れそうになるのを耐える。近くの手すりにつかまり周囲を見るが、海は穏やかだった。

雲の動きも普通。

嵐など発生しているようには見えない。

ボートが進むにつれて太陽が遮られる。

「 上か」

見上げると白い雲があつた。

大きな雲だ。

その雲を見上げた俺は左手を握りしめた。

ボートの下。

海面を見れば、一部緑色に光っていた。

俺は背を丸め、そして手すりに額を当てて笑うのをこらえる。

「そうか、よりもよって アレが手に入るのか！ 課金をしたからか？ それとも元から存在していたのか？ まあ、そんな事はどうでも良い。……当たり前だ。当たり前だ！」

立ち上がって両手を大きく広げた俺は、空を仰いで大声を出した。

まさに、存在してくれていてありがとう、だ。

「おっと、まだ手に入れていなかったな」

気持ちを引き締め、ボートの後部に移動するとプロペラ機を操作する。

両手で抱えられるくらいの大きさの機械を操作して、海面近くまで移動する。光っている一部に移動すると、そこでボートがきしむように揺れ始めた。

体を低くしてボートにしがみつく。

「耐えてくれよ」

ボートはそのまま操作をしないのに、勢いよく上昇始めた。その勢いは立てないほどだ。

まるで打ち上げられるようにボートが雲の中まで放り出されると、周囲は真っ白だった。

体が冷たい。

服が濡れる。

ライフルをロープの中に入れて保護した俺は、何も見えない雲の中でボートを動かす。

雲の他にといつかなんらかの流れがあるため、それに逆らう方向へボートを動かすのだ。

何も見えないが、流れとは逆方向で間違いない。

エンジンの出力を限界まで上げて使用すると、凄い音を立てる。

コンパスは二つの針がぐるぐると回転していて役に立たず、今自分はどこにいるのかも分からない状況だ。

ただ、流れに逆らい続けて進むしかなく、そして気が付けば体が濡れていた。とにかく寒い。

水がしたたり、服が重く感じる。

ボートをどうにか操作して流れに逆らっているが、これで正しいのか不安になってくる。

「頼むぞ。チャンスなんてそう何回も　　って！」

数十分か、それとも数時間か。

時間の感覚も怪しくなる中で、酷使し続けたエンジンが火を吹き始めた。

「待つて！　本当に待つて！　このまま外に投げ出されたら、そのまま遭難して　　」

一瞬、最悪の結果を予想したその瞬間にエンジンが爆発してプロペラが燃えながら回転し、吹き飛んでいった。

火は木製のボートにも燃え移り、火を消さなければと思っているとボートが急激に揺れ始めた。

激しく揺れるボート諸共に外へと投げ出されると　そこには雲に覆われた一つの浮島が存在していた。

雲から飛び出し、そのまま投げ出される形になった俺だが、その浮島の形を見て目を見開く。ゲームで何度も見た形そのままだが、現実で見ると大きかった。

島は巨大樹の根に絡まれ、自然に包まれ緑色をしていた。

下部の土肌が見えている場所にも木の根が突き出て、そこに植物が生えている。

「　　凄いな」

徐々に近づく浮島。いや、俺のボートが向かっているのだろう。

慌てて動かそうとするが、エンジンは吹き飛んでいる。

「マジかよ!」

浮島の地面が近づく中、俺は荷物を持ってタイミングを計り飛び出した。

持っていた荷物を手放し、そして地面を転がると巨大な地面に出ている根に背中をぶつけ止まる。

ボートは激突して粉々に碎け、荷物をばらまき燃えていた。

痛む体を起こして冷や汗を拭う。

「あ、危なかった。やっぱりボートは危険だったな」

もつと大きな飛行船があれば楽だったのだが、購入するだけの金がない。ついでに言えば、借りる金もない。

誰かを頼ろうにも、この辺りは特に何もないとされる場所。

誰も飛行船を出してくれないのだ。

まだ視界がチカチカする。痛む頭を押さえ、急いで大事な荷物を回収した。

燃えてしまった荷物も多いが、それでも残った荷物だけでなんとかなりそうだ。

荷物を一カ所に集め、燃えたボートの火を消す。

目的地には到着できたが、ボートを失ってしまった。これで、他に知っている財宝やらアイテムの回収は難しくなった。

この島に眠る“アレ”を回収できれば何の問題もないが、この島に“アレ”がなかったら俺はこの島から出られない。

休憩のために腰を下ろすと、随分と時間が過ぎていたらしい。

暗くなり始めている。

荷物から食料と水を取り出し、そして口に入れた。

乾パンのような食べ物をもそもそと食べて水を飲む。

味よりもとにかく腹を満たすことだけを考えた。

明日から忙しくなる。

ボートの碎けた木材を集め焚火を行った。

ライフルの状態を確認し、他の装備に関しても確認をする。

焚火の明かりの中、弾丸を数えて弾倉に装填していく。

弾丸は特殊な物を用意して貰った。表面には丁寧に雷のマークが刻まれており、一般の弾丸とは違うという事を示している。

弾丸一発が日本円で言うなら三千円から五千円くらいはする。

この特殊弾丸　魔弾は弾丸に魔法の効果を付与した物だ。直撃すれば炎が発生するとか、凍るなどの効果が付く。

そのため、値段は一発一万円を超える。

そんな弾丸を数多く揃えてくれた両親には感謝するしかない。

「生きて戻れたら親孝行もしないといけないな。……あ、俺って前世で親孝行していないや」

今になって思えば、親より先に死んだことになるのだろう。

とんでもない親不孝野郎だ。

「妹はどうなったかな。一発叩かれてくれると嬉しいが」

この世界で目を覚ましたというか、記憶を取り戻した日は今でも覚えている。妹に乙女ゲーをやらされたのが懐かしい。

そのおかげでこうして知識が役に立っているのだから、妹に感謝しなければいけないのだろうか？

だが、乙女ゲーを押しつけられなければこうなっていないような気もする。俺が死んで異世界に転生するなどなかっただろう。

なかったか？

ライフルや弾丸の確認を終えて横に置いた俺は、巨大な木の根に背を預けて体を休めていた。

久しぶりの大地はやはり落ち着く。

「……どうして俺は乙女ゲーの世界に転生したんだ？ これなら、普通に剣と魔法のファンタジー世界に転生したかった。いや、元の世界の方が良いのか？ うん、出来れば日本の方が良かったな」

モンスターもいなければ、空賊の心配もなくて良い日本は幸せだったのではないだろうか？

そう思って目を閉じた。

ロストアイテム

ふわっとした設定の乙女ゲー世界。

古代文明の遺産であるロストアイテム　というフワフワした設定の物がある。とにかく凄いアイテムをゲーム中に登場させたかったのだらう。

主人公しか使えない古代文明の装備も存在するし、主人公の特別感を引き立たせるためのアイテム。

失われた技術で作られており、生産できないそれらをロストアイテムと呼んでいるのだ。

到着した浮島は、まさにそのロストアイテムが眠る島である。

道など整備されていない森の中を進む俺は、汗を拭い後ろ腰に提げて用意していた剣を抜いて草や枝を切り払って進んでいた。

汗を拭う。

青臭い香りはまだいいが、地面の一部がぬかるんでいて何度も転びそうになった。

「剣鉈の方が良かったな」

ただの剣よりも、こういった場所を進む際に便利な鉈を持っていたら良かったと後悔した。

周囲に視線を巡らす。

島の中央を目指しているのは間違いないが、ゲームと違って実際に歩くとかなり距離があるのが分かる。現実には森や山の中をサクサク進めない。

整備されていない道を進むのに苦労させられ、あまり進んでいないのに時間はかかっている。

蛇や虫、その他の生き物が生息しており油断も出来ないが、何より危険なのは。

「またかよ！」

小声で愚痴をこぼしつつ身を潜めた。

地面に這いつくばって近くを通る敵から隠れる。

敵というのはモンスターではない。

丸っこい全身鎧は、両足がなく宙を浮いていた。

長い両手に、頭部のとんがり帽子の形が特徴的である機械。

警備用のロボットは、二メートルくらいの大きさはある。

浮いて移動するため、手入れもされていない森の中で機械たちは問題なく移動していた。

息を殺して動かず、見つからないことを祈った。

機械が通り過ぎていくのを確認した俺は、体を起こして足早にその場を離れる。

既に人が存在しない基地を守るために稼働している機械、というのは妙にさみしい設定だが、見つければ命がない。

対処できるが、今ここで気づかれるわけにはいかないのだ。

「なんとか基地にたどり着きたい訳だが」

浮島に存在する基地。

それはロストアアイテムが眠る基地だ。そのため防衛用の機械たちが守っている。

詳しい設定には興味がない。

ただ、そこに俺が探しているロストアアイテムがある。

警戒しながら森の中を進みつつ、そのまま数キロ歩いたところで俺は建物を発見した。

蔦に絡まれ、建物の内部から生えた木に屋根を貫かれた施設。

随分と長い時間、放置されていたのだろう。

妙にゲームで見た時と似ているのが新鮮に感じられた。

「……こいつが存在しているだけで、俺が夢を見ていたわけじゃないと実感できるな」

今まで、もしかしたら俺は転生者だという夢を見たのかも知れない。そう思ったこともあるが、今日の出来事で確信した。

前世とは俺の妄想ではないのか？ 実際に何度も疑ったことがある。現実をゲームとして認識している可能性もあった。そう思うと怖い話だ。

自分が前世を持っているかと思っただけではなかったと安堵しつつ、周囲を警戒しながら建物の中へと入る。

基地内の防衛設備は木の根やら蔦で動かなくなっている物がほとんどだ。

コンクリートの建物。

壁に埋め込まれた電子機器。

どれも俺が知っている世界の物と似ており、こちらにも親近感がわいてくる。

「こういつ昔の建物がダンジョンの扱いを受けることもあるんだよね」

浮島の中にはこうした古代の建物が存在しており、冒険者たちはそこから宝を得て財を築くのだ。

貴族たちは新しい島を発見、そしてダンジョンを攻略すると賞賛

される。自分たちが偉大な冒険者の末裔だった事を誇りに思っているためだ。

「……遺跡を荒らし回っている気分だな」

貴重なこれらの遺跡から宝を奪い取っていく冒険者たち。

違う見方をすれば破壊者や略奪者にも思えた。

「まあ、俺も変態婆たちに売られないために同じ事をするし、人のことは言えないが」

そのまま通路を進んでいくと開いているドアを発見した。

ただ、通路奥にふよふよと揺れるように浮かんでいる機械 警
備用のロボットがこちらに向かってくる。

性能的にはどれも壊れており、動いていることが奇跡に近い。ロボットになりながらも基地を守ってきた姿が涙を誘う。

ライフルを構えた。

「悪いな」

今まで施設を守ってきた機械に謝罪をした俺は、引き金を引く。

弾丸はロボットに命中し、雷撃を放出。

一瞬光が発生して弾けると、ロボットは地面に落ちた。チカチカ光っていた目のようなライトが消える。

ライフルを構えたまま待機するが、他の敵が来ることはなかった。基地の機能がまともに動いていれば、そもそも俺は侵入できない。

「効いてる、効いてる。……えっと、確かこっちか」

特別に雷撃という効果を持つ魔法の弾丸だ。こういったところに妙に魔法的な何かが存在しているのがこの世界である。

先に進むと、開いているドアは木の根や蔦に絡まれ半開きの状態だった。

部屋に入るとそこにはボロボロになった白骨死体が転がっていた。

汚れた布もそこにある。

かつては衣服だった布を触る前に、手を合わせて拝んでおく。

そしてポケットらしき物から一枚のカードを取り出した。

これで施設内のいくつかの部屋には入れる。

カードキーにもなっている身分証は、ボロボロになっているが名前の一部は読み取れた。

「ローマ字だよな？　なんか不思議な感じだ」

異世界でローマ字を見ることになるとは思いつかなかった。

カードキーを自分のポケットに入れて移動を再開する。

ゲームでは課金したアイテムなどを手に入れるため、何度も立ち寄った場所だ。クリアしても、次の攻略対象とのエンディングを見るために、何度も回収するために来ることになった。

だが、十年も前の記憶は不確かなところも多い。この浮島への座標を覚えていただけでも十分に凄いと思ったが、もし間違えていたらと思うと怖くなる。

たった一人で空に出る不安と恐怖は……二度と味わいたくなかった。

カードキーで開きそうな部屋を探し、機器にかざしてドアを開けるとそこは休憩室らしき場所だった。

錆びてボロボロの自動販売機。

一つは倒れ、中身の商品が外に出ていた。

手で拾うと崩れ去って砂のようになってしまう。

ソファアーの上には二つの白骨があった。

「……ゲームだと気にもならなかったけど、ここでいったい何が起きたんだ？」

二つの内、一つは先に進むために必要な鍵を持っていた。

手を合わせた後に回収して先に進むのだが、通路を守るように塞ぐ防衛用のロボットがまだ動いていた。

「そついえばこういう奴もいたな」

ライフルを構え引き金を引くも、命中したのは確認したが敵もタフである。両手にあるガトリングを構えるが、動いたのは片方だけ。

その片方だけでも十分に脅威だったが、壊れているのか狙いも定まっていない。

「危なっ！」

通路に隠れるように身を潜め、そしてボルトアクションで次の弾を装填すると隠れながらライフルで攻撃を行う。

相手が壊れているのか、まともに移動できずに狙いも定まっていないのが助かった。

弾を撃つ度に思うのは。

「くそっ！ 思ったより当たらない」

消費されていく弾丸を頭の中で計算していくと、とんでもない金額になっていく。

何発も相手にたたき込み、ようやく動かなくなるのを確認した時には二十発近くも使ってしまったていた。

ゲームでは十発くらいで終わったはずなのに。

その後も見張りやら防衛用のロボットの相手をしながら進む。

気が付けば、持ち込んだ弾丸も残りわずかになっていた。

暗い通路を進み、そうしてようやく目的の場所に到着した。

鍵を使用するとドアが開く。

地下へと続く階段。

暗く何も見えないので、荷物からランタンを取り出して明かりを付けた。

「電気もあるなら懐中電灯くらい欲しいよな」

ブツブツと文句を言いながら階段を降りていく。

時折、人骨が転がっているのが恐怖を誘った。

この場所で何があったのか知らないが、出来れば荷物を回収して戻りたい。

「それにしても……見事に記憶通りだな」

俺が購入した課金アイテムが眠る場所 記憶をたどり進んだ先に待っていたのは、木の根や蔦が絡まる大きな部屋だった。

飛行船用のドックを俺は歩く。

両手に持ったライフルを握りしめ、周囲を見ながら歩いた。飛行船を収納するらしい場所には、開いているスペースもあれば壊れた

飛行船に蔦が絡まっている場所もある。

「どれだけ放置されていたのか気になるけども　こいつだな」

そうして広いドックの奥に到着した。

並んでいる飛行船の中、原形をとどめているのは一隻だけだ。

緑に包まれてはいるが灰色の装甲の一部が見えていた。

この飛行船を見つけたのは幸運だ。

「本当にあつたのか」

ゆっくりとタラップを上る。

入り口は蔦が絡みついて開きそうにないので、持ってきた剣で蔦を切っていく。そして、カードキーで入り口を開けると船内　いや、艦内は綺麗だった。

分類上は飛行戦艦となる飛行船。いや、宇宙船の艦内はとても未来的な内装をしている。出てくるゲームが……世界観が違うように思えた。

大きさは目算で七百メートルと馬鹿でかい。

ただし、島や大陸が浮く世界だ。

中には小さな浮島を飛行船に改造した物もあり、千メートルを優に超える飛行船も数多く存在している。

この規模の大きさは、確かに巨大だが珍しいとは言えない。

形は飛行船と言うよりも宇宙戦艦という感じだ。甲板やらそういった物がない。

全体的に四角く細長い船体の後部やら後部両脇にエンジン部分が付いていて、大きな羽のようなプレートが斜めに取り付けられている。

形は後部が多少ごちゃごちゃしているが、前方部分はシンプルだ。

この世界、飛行船の形は様々だ。

船型もあれば、ラグビーボールのような形の飛行船も普通にある。正直、形にこだわりのないようにも思える。

艦内を進むと自動で照明が起動するのでランタンをしまった。

ここまで来れば難関もあと一つを残すだけ。

飛行船の中央を目指し移動をする。

足音が通路に響く中、俺は中央にたどり着く。

ライフルの状態を確認し、弾倉に弾丸が入っているのを確認。

呼吸を整える。

「……行くか」

気を引き締め、ドアを開けて中に入ると、中央と呼ばれる部屋には床から上半身をはやしたようなロボットがいた。

ライフルを構える。

「……侵入者を確認。排除……排除……」

ゆっくりと起動する大きなロボットは、大きさで言えば六メートルくらいだろう。大きな両手を広げ俺を捕らえようとしてくるので、ライフルを向けて引き金を引く。

すぐに次の弾丸を装填すると、相手は俺の攻撃など効いていないかのように手を伸ばしてきた。

「カードキーを見せたら引いてくれないかな」

俺の呟きにロボットは答える。

「貴方が持っているカードキーは別人の物です。身体的特徴が違います。加えて、持ち主の生存は絶望的状况だと判断します。よって、貴方は侵入者と判断しました」

「生真面目に答えてくれてありがとうございます！」

会話が出来るとは思っていなかった。意外だったが今は気にしている暇がない。

次を撃つと命中するも、雷撃が発生したくらいで敵の動きは止まらない。

ベルトに取り付けていた筒状の物を取り出し、安全ピンを引き抜いて投げつけると敵は片手でソレを払いのける。

しかし、払いのける衝撃で爆発。

弾丸よりもより強い雷撃を発生させ、敵ロボットの関節から煙が上がった。

「よっしゃっ！」

命中したことに喜んでいると、敵ロボットは頭部部分のバイザーを光らせる。

『未知の攻撃を確認。攻撃方法を“魔法”と断定。これより魔法障壁を発動します』

ボディーが光に包まれる。

次々に弾丸を撃ち込むも、魔法による雷撃の攻撃は全て弾かれていた。

「卑怯だろうが！」

俺の叫び声に、敵ロボットは返答する。

『ありがとうございます』

お礼を言われて驚くも、弾倉を交換して再びライフルを構えた。

「壊れているのか？ お礼なんか口にしゃがって」

攻撃手段などライフルくらいしか残っていないので、次々に弾丸を撃ち込んでいく。敵ロボットの動きは少し鈍っているように見えた。

『戦いで卑怯とは褒め言葉である。そう学習していますが、違うのですか？』

「違うわ！ そもそも、なんで未知の攻撃に対抗手段を用意していやがる！」

魔法障壁なんて聞いていない。こんなのインチキだ。

ゲームにも登場しなかった。

『それは難しい質問です。これまでのデータから敵の攻撃に対して対抗策を用意しましたが、魔法という物を理解したとは言えません。そのため、未知と分類しています』

「お前、頭が良いのか悪いのか分からないぞ」

『こうして人類と会話をするのも久しぶりです。興奮しているのかも知れません』

機械が何を言っているのかと思ったが、このチート級飛行船はロストアイテム。古代の技術の塊だ。

人工知能があってもおかしくはないが、ボスと会話するとは思わなかった。

腰に下げているもう一つの筒を手取る。

『魔法攻撃を可能とする手榴弾ですか？ 今の私に効果は』

「馬鹿が！」

投げつけると俺は距離を取った。

相手は防ごうとしない。

しかし、筒が敵ロボットに当たると爆発を起こした。

部屋の中に黒い煙が発生し、すぐに視界が悪くなる。

「ただの爆弾だよ。あんまり使いたくなかったけどな。船内を壊すのも気が引けたからな」

後で俺も使う飛行船だ。

出来れば壊したくなかった。

ライフルを降ろす。

流石にこれで倒れただろうと思っていたと、黒い煙の中から勢いよく手が伸びて俺は捕まるのだった。

衝撃でライフルを手放し、剣を引き抜くとロボットの指にたたきつける。しかし、剣の方が欠けていくだけで、たいした効果もなかった。

強く握られ、とても苦しい。

「は、離せ」

『ただの手榴弾ですか。確かに驚きました。貴方たちはこうした兵器を毛嫌いしていましたので、この戦いは意外です』

敵ロボットは一部の装甲を失い、中身をさらしている。

俺を掴んだ手を顔に近づけた。

『昔とは随分戦い方が異なっていますね。弾丸に魔法的な要素を組み込むとは思いませんでした』

バイザーの奥にあるカメラのレンズが、俺の顔を見て拡大やら縮小を繰り返しているのかしきりに動いていた。

逃げる事も出来ず、そして徐々に力が強くなってくる。

俺がもがいていると質問を投げかけてくる。

『質問。現在は新暦何年でしょうか？』

「っ！ 新暦？ そんなの知るかよ！ ホルファートの王国歴なら……ぎゃあああー!!」

敵ロボットの手から電流が流れ、俺は痛みと体の痙攣に悶えた。

無我夢中で逃げようとするが、ソレは無理だ。

『その答えで分かりました。我々は敗北したのですね』

電流が収まり、俺がぐったりしているとロボットは動かなくなつた。口がガクガクして閉じられず、涎が出ているので手で拭つた。

「は、敗北？ お前ら、いったい何と戦っていたんだよ」

チート級の戦艦が負けるような相手がいたのだろうか？

『……新人類。言つてしまえば人類同士の戦争です。旧文明は圧倒的な新人類を前に滅ぼされたことになりますね』

新人類？

ゲーム的な設定だろうか？ 乙女ゲームにそんな設定まで盛り込んだの？ ちょっと困るんですけど。もっと簡単に倒れて欲しかった。

まあ、そんな事は俺には関係ない。どうにかしてこの場から逃げ出さなくてはいけないのだ。

『そして貴方は新人類の子孫。私にとっては敵になります』

急に電子音のような声が低く聞こえた。俺を敵と認定して排除しようとしている声。

「ま、待て！ アガアッ！」

ギチギチと締め上げてくる大きな手により、体から聞こえてはい

けない音が聞こえてきた。

『敵は排除……排除……』

もはや会話ができるような状態ではない。

ロボットの方もダメージが大きいのか、俺を一気に握り潰せないようだ。だが、かえって苦痛が長引く結果になった。

運が良いのか悪いのか分からない。

「て、てめえ……今更昔の戦争を」

『我々の使命は終わっていません。新人類の排除は最優先命令です。この基地で待機を命じられていましたが、こうなれば一隻でも飛び出して新人類を殲滅』

そんな事になれば俺の家族までこいつに消されてしまう。

俺がこいつを復活させたような物ではないか。

あのゾラは消えても良いが、両親やら次兄　弟が消えるのは嫌だと思った。

右手に持っていた剣の柄にあるピンを噛んで引き抜き、ロボットに刃を向けた。

そして　。

「くたばれ……ポンコツ」

仕掛けを使用すると、刃が飛んでロボットのバイザーに突き刺さりそのまま紫電を発生させる。内部に電気を流したのか、ダメージは大きそうだった。

ロボットの頭部が小さな爆発で吹き飛ぶと、バイザー部分が割れて破片が飛んできた。

手が緩んで解放された俺は地面に落ちる。床に落ちた痛みやら、解放されて呼吸しやすくなるやら、もう何が何だか分からない。

咳き込み、そして這いつくばるように移動をしてライフルを回収する。

動きの鈍いロボット。

ライフルを持ってよじ登り、その頭部の割れたバイザー部分に銃口を差し込む。

「お前らには同情してやらないこともない。けど、俺には俺の都合があるんだよ。黙って従って貰うぞ」

引き金を引く。そして、また弾丸を装填して引き金を引く。

何度も繰り返し、弾倉が空になるとロボットは動かなくなった。

バチバチと各部から放電が発生し、いかにもまずい状況を表している。装甲の隙間から煙も噴いていた。

しかし、電子音が聞こえてくる。

『……私を使おうとしていますね？ それは無理です』

ロボットは動かないので、部屋の中にあるコントロールパネルを起動した。ゲームではこうするとマスター登録が可能になったの思い出す。

「五月蠅い。課金アイテムの回収に來ただけだ。黙って従え」

俺が購入した課金アイテムかどうかは分からない。だが、手に入れなければ未来がない。

『新人類に奪われるくらいなら自爆を選択します』

「どうせ自爆するなら俺の物になれ。爆発されても迷惑だ」

操作を行うと、画面の文字は日本語だった。

「ご都合主義で大いに結構。この方が操作はしやすいな」

操作を行い、そして飛行船の所有者　マスター登録を行う画面に來ると、コントロールパネルの一部が開く。

そこには手を乗せる位置を表示したガイドラインが光っていた。

『……読めるのですか？　貴方たちは日本語を使用しなかったはずです』

よく耳を澄ませてみれば、音声は部屋のどこから聞こえてきておりロボットが喋っていたわけではないらしい。

興味を持った相手に、俺はコントロールパネルに手を乗せながら冗談交じりに言うのだ。

「俺の魂は生粋の日本人だぞ。毎朝のご飯と味噌汁がジャステイスだ。まあ、こっちで食べたことはないけどな」

『魂？ 輪廻転生の概念でしょうか？』

日本語で受け答えをすると、ロボットは黙ってしまった。どうやら自爆は思いとどまってくれたらしい。

手のひらから遺伝子情報を確認したのか、マスター登録が終わると俺の全身を赤い光が包み込む。

スキャンしているらしい。

終了すると質問を再開してきた。

『遺伝子情報に確かに日本人の形跡を確認しました。ですが、貴方は新人類です。同時に旧人類の遺伝子も引き継いでいます。不思議です。あり得ません』

「そうなのか？ でも、これでこの船は俺の物だろ？」

『はい。今日からこの飛行戦艦は貴方の所有物です。名前を付けますか？』

少し考える。

ゲームでは名前を付けることは出来なかった。

「良い名前が思いつかないな。デフォルトだったら【ルクシオン】だったんだけど」

『ルクシオン……記録しました』

「自爆はしないんだな。助かったよ」

随分とボロボロになった俺は、全てが終わるとその場に座り込む。煙の発生と、警報が鳴り響いている中でライフルを手に取る。

木製の部分が割れている。

これでは修理しないと使えない。

『魂は日本人という事は戦時中の記憶があるのですか？』

「ないね。そもそも平和な時代のサラリーマンだ。戦争なんて経験してない。……そう思うと、前世は凄く幸せだったな」

煙が落ち着いて警報も鳴り止む。

ダラダラと話をする俺は、誰かに話を聞いて欲しかったのか、人工知能？ に対して転生した経緯を話した。

乙女ゲーの世界である事も、だ。

「驚いたか？」

『貴方の妄想には感心しました。ですが、ただの妄想で日本語を話すことは出来ないでしょう。私の感想は一言……興味深い、です』

「こつちだって驚いているんだよ。それに、お前がこの場にあるのが一応の証拠でもあると俺は思うけどね。お前を探し出した事もこの世界がゲームっていう証拠じゃないか？」

『妄言にしか聞こえませんか。そもそも、ゲームと認識しているだけではないのですか？』

「そういう細かい事はいいんだよ。俺は面倒なのは嫌いな。どうせ考えても答えなんか出ないなら時間の無駄だろうが」

ぐだぐだと話を続けていると、咳き込んでしまふ。

口元を押さえると手袋に血がにじんでいた。

「……どこか怪我をしたのか？ まずいな。戻らないと行けないのに」

体がゆっくり倒れていくと声が聞こえてくる。

『リオン・フォウ・バルトファルト マスターの生命危機を確認。
医務室への移動を 』

リオンが旅立ってから三ヶ月の時が過ぎていた。

バルトファルト男爵家にはゾラがやって来て、ネチネチと嫌みを

口にしている。

バルカスの仕事部屋に入り、朝からリユースまでも自分の前に座らせ責めていた。

「私がせっかく用意した縁談を台無しにして、本当に馬鹿な子供よね。一人で飛び出してかってに死んでしまうなんて」

バルカスが悔しいのか手を握りしめていた。

リユースも自分の息子が死んだかも知れないと言われ、気分は暗く沈んでいるのが分かる。だから、ゾラは責め立てるのを止めない。

「こうなったら次の子供を渡して貰うわ。まあ、あの年齢でも家事くらい出来るでしょう」

バルカスが待ったをかける。

「あの子はまだ十歳にもなっていないんだ。それに、リオンだって戻ってくるかも知れない」

ゾラは鼻で笑う。

「本気で言っているのかしら？ この辺鄙な島を出て三ヶ月よ、三ヶ月。流石に生きている方がおかしいわ。ああ、そうね。もしかしたら自分だけ逃げ出したのかも知れないわね。まったく、これだから田舎貴族の子供は困るのよ。騎士道を知らないのかしら」

ホルファートの騎士道は、自分の主人に忠誠を捧げる物だ。

騎士なら国王陛下に。

陪臣騎士なら領主や上司に忠誠を誓い、清く正しく生きるのが素晴らしいという教えである。

日々鍛錬と質素儉約な生活が美德とされていた。

忠義のために命を賭ける騎士こそ誉れ。

国のために戦うことこそ誉れ……まさに理想の騎士。

簡単に言えば統治者にとって便利な部下の見本が騎士道である。

近年では女性を守る騎士や、女性のために命を賭けるのも騎士の仕事とされていた。

リユースが泣きそうな顔になっているのを見て、バルカスが側に行くとは手を置いた。二人の方が夫婦に見える。

それがゾラには腹立たしかった。

（何よ。私はこんな田舎領主と結婚してあげたのに！ 目の前で仲の良さを見せつけるなんて本当に許せないわ）

リユースも腹立たしかった。

だから、そんなリユースの息子や娘は、王都で相手もない女性や男に売りつけてやろうと思いつく。

すると、部屋に慌ただしい声が聞こえてきた。

まだ幼いコリンがドアを力一杯に開ける。

「コリン、お前は部屋にいなさい。ノックもしないで」

バルカスが注意をすると、コリンはアワアワと口をパクパクさせて窓の外を指さしていた。

全員が窓の外を見ると、太陽が遮られたのか影が出来る。

バルカスが気になって窓を開けて外を見ると　。

「なんだ、あの船は？」

屋敷の上空には大きな飛行船が停まっていた。

ゾラは身を縮める。

「な、何よ？　どこの船！？」

空賊か、それとも他領や他国の飛行船が攻め込んできたのかと慌て出す。しかし、それにしても様子がおかしかった。

大きな飛行船から、小さな飛行船　二十メートル前後の飛行船が下りてくる。

そこにはリオンの姿があった。

飛行船は金銀財宝を山のように載せており、その量は遠目に見ても多い。

屋敷の庭に降り立ったりリオンは、両手を振っていた。

「親父！ 約束通りに戻ってきたぜ。見てくれ、この財宝を！」

見れば金銀の延べ棒の他には金貨やら装飾品に宝石が山のように積み込まれている。どれだけの価値があるのか計算できないが、本物ならとんでもない金額になるのは間違いないかった。

リユースが泣き崩れる。

「あの馬鹿息子。連絡もよこさないで急に戻ってきて」

嬉しいのか泣きながら笑っている。

バルカスは慌てて部屋の外に飛び出し、リオンのところへと向かった。

ゾラは窓からリオンが持ってきた財宝を見る。

すると、リオンが勝ち誇った笑みを浮かべていた。ゾラに向かって口パクで「俺の勝ちだ」と言っている。

窓枠を握る手の力が強くなる。

「あ、あの糞ガキ……」

バルカスはリオンのところに向かうと、そのまま抱きしめ泣いていた。馬鹿野郎と言いながら、よく戻ったと泣いて喜んでいる。

ゾラは忌々しくなり、そのまま部屋を出て行く。

（まあ、いいわ。あれだけの財宝が私の物になると思えば悪くない。精々、今度も私のために働いて貰うわ。お前の稼ぎは全て私が貰う。最後に笑うのは私よ）

ゾラは廊下に出ると、待っていたエルフの奴隷を引き連れ外へと向かうのだった。

苦々しい顔をしたゾラを前に、俺は笑みを浮かべていた。

持ってきた財宝もそうだが、飛行船が俺の物だと分かるとすぐに渡せと言ってきたこの阿呆を前に正論を吐くと押し黙ったのだ。

「あんたと親父の契約は俺には関係ない。俺は十五歳で成人しているし、冒険者登録も済ませた。分かるよな？　俺が見つけた宝は俺の財産であって親父の物じゃない」

親父が何か言いたそうにしていたが、お袋が止めに入っていた。

ゾラはそれでも言い返してくる。

「親の金で得た宝でしょう！　それを自分の物だと誇示するとは何事ですか！」

俺は余裕たつぷりに言い返す。

冒険者として手に入れた財産は守られる。

この国は冒険者が建国した国だから、だ。

「両親に罵られるならまだしも、お前に言われたくないね。ああ、これは持つて行って良いぞ」

金の延べ棒が入った革製の旅行鞆を渡し、俺はニヤニヤする。

俺の後ろには大量の財宝があるのに、ゾラに渡すのは本当に数少ない一部だけ。本来なら手に入った財宝だけでも凄い金額なのに、まったく喜べない状況だろう。

ゾラは諦めない。

「お、お前がどうせバルトファルト家に財産を入れるなら、それは私が好きにしても良いことになる。さっさと渡しなさい！」

俺は肩をすくめてやった。

そして、前々からルクシオンと相談していた内容を口にする。

「それは俺が実家に財産を入れれば、の話だよな？　俺は考えたんだ。いつそ俺が財産を管理して、領地の整備をしよう、って。親父に許可を貰えば可能だし、何の問題もない。それとも、港の一部を持つて帰るか？」

ゾラは分が悪いと悟ったのか引き下がった。

愛人のエルフを連れて屋敷に戻っていく。

俺はその背中を見てゲラゲラ笑うのだった。

親父が俺の背中を叩いてくる。

「馬鹿。煽りすぎだ。相手を怒らせてどうする」

「俺を変態婆に売りつけようとした女だぞ。これくらい許される。それはそうと、どうよこの財宝の山は」

飛行船に積み込んだ財宝を見て、両親は確かに驚いていた。

「いや、素直に凄い。だが、これはギルドに報告したのか？」

俺は頷いた。

冒険者ギルドは正式には国の組織で、ギルドと言いながら協会ではない。

昔からギルドと呼ぶのが決まりらしい。こういつふわつとした設定が困るのだ。

「もちろん。おかげで一部は国に奪われたけどね」

用意した財宝の二割から三割を国は持って行った。

ただ、残った財宝は純粹に俺の物である。

「壊したボートも買い直すよ。いっそ飛行船をプレゼントしようかな」

気前の良い俺を前に、お袋が少し呆れていた。

「あんた、将来のために残しておくとか考えないの？　これだけあれば独立だって出来るでしょうに」

言われた俺は、二人に向かって姿勢を正した。

「そのことで話があるんだけど」

俺は両親に今後のことを話すのだった。

入学

小さな浮島は特に際立った物はなかった。

小さな山に森、そして川があつて平地部分が広い。

見つけた時は特徴がなさ過ぎた浮島だが、ここに独立して領地を持とうと決めた。

どんなに発展しても準男爵規模にしかならなそうな大きさも理由の一つだが、誰も住んでいない無人島だ。

将来というか、余生を過ごすには最高ではないだろうか？

学園を卒業して領主になり、開拓すると理由を付けて引きこもる。

実家を寄親にして面倒を見て貰いつつ、俺はのんびりするわけだ。

島にある洞窟の中。

そこにはルクシオンを格納していた。

ゴテゴテと張りばての装甲を付けたルクシオンは、今ではその張りばてをモデルに新たな飛行船の作成をしている。

造っているのは作業用のポッドロボットたちである。

俺の近くには灰色のメタリックボディーに、赤い一つ目の球体が

浮かんでいた。

大きさはソフトボールくらい。

「わざわざ偽物を造る必要があるのか？」

『何事にも備えは必要です。それに、あのゾラという女が何か仕掛けてくる可能性も否定できません』

自爆すると言っていたルクシオンだが、俺が日本語を話せると知ると興味深いという理由で俺に従ってくれた。

意味が分からないが、命令通りに動いてくれるなら問題ない。

「それより島の様子は？」

『浮島に熱を持つ鉱石がありましたね。吸い上げた水を通して温泉にすることが可能です。将来的には観光地として稼げそうですね』

「別に興味もないけどな」

そもそもルクシオンがいれば問題ないのが大きい。

こいつ、資源を自分で用意できるらしいのだ。

どうしてそんなチート性能を持ちながら、旧人類は新人類に負けたのか気になって仕方がなかった。

ただ、こいつが目覚める前に戦闘は終わっており、詳しい記録は残っていない。謎は残るばかりだが、乙女ゲーの世界にそんな謎が

あつても気にならないのが本音だ。

どうでもいい。

『屋敷の建設を開始、港の整備も進めています。一年もすれば地上も快適になるはずです』

手入れのされていない領地など酷い物だ。

それが一年でどうにかなるのだから、ルクシオンの性能様々である。

前世で二千円だったとは思えない。

「頼むよ。俺はもう冒険なんかこりごりだ。モブにはお前を探すだけでも人生何回分の刺激になったか分かりやしない」

『私の性能を手に入れ、全力で引きこもるという判断をしたマスターには敬意を表したいですね。大志もなければ自己中心的。惚れ惚れするくらい人間です』

「嫌味か？」

『皮肉です』

俺がルクシオンをデコピンで弾き飛ばす。

表面は割と柔らかい材質で出来ているのかあまり痛くなかった。

『王都にある学園に入学する用意は出来ましたか？』

ルクシオンの質問に俺は肩をすくめながら答えた。

「出来ているよ。お前のおかげで実家は借金から解放されて、滞っていた領内整備の真っ最中だ。付き合いのある商人が俺のために色々と用意してくれてね」

手に入れた財宝のほとんどで港の整備と、領内整備に金をばらまいた。

新しい村を造るために資材を買い集め、今まで手を付けなかったことに手を出している。

領内はここ数ヶ月で随分と賑わっていた。

「それにしても学園なんて意味があるのか？」

今度は俺の問いかけにルクシオンが答える。

『表向き、貴族の子弟を教育することで質を上げるという意味合いがあります。貴族の子弟の方々はマスターのように引きこもりで領内から出ない方も多いとか。そのため、貴族の一般常識に欠けている方も多いのですから、一カ所に集めて教育したいのです。また、そのような見識の狭い貴族たちに王都の凄さを見せつけ反抗心を奪いたい気持ちもあるかと。地方の貴族たちにしてみれば、学生は人質になります。ですが、若者は留学が出来て嬉しいでしょうし、王都で教育を格安でしてくれるのですからありがたいのも事実かと』

「……詳しいな？」

『一番の理由は、同じ国に所属するという事を意識付けたいのだと思います。いざという時にまとまれるのは強いですよ。マスターの話では他の大陸国家も存在しているようですし』

学園に意味を見いだすとするとそんなところなのだろうか？

俺はてつきり乙女ゲーの事情で学園物だから用意された学園とは思えない。

『そう言えば、学園は結婚相手を見つかる場所だとか。社交の場でもある訳ですから、あまり無茶をされないように』

「別に何もしないって。そもそもモブが騒いだくらいでどうにかなるかよ」

『モブ、ですか。言いたいことは分かりますが、その判断は』

俺は話を遮る。

「まあ、無難に相手を見つければ良いんだ。高嶺の花である貴族の娘じゃなくて、騎士家の娘を見つけて将来は独立だ。それでいいだろ」

まさに順風満帆の人生。

下手に地位の高い女など貰う物ではない。

「……え？」

父の仕事部屋に呼び出され、向かってみれば待っていたのは俺の想像を超える話題だった。

「いや、どうして驚くんだ？ 未開のダンジョンを発見して攻略。ロストアイテムの発見に加えて新しい浮島の発見だぞ」

そこには王宮から俺宛の書状があった。

俺はこれまでの冒険者としての功績から、仮として男爵の地位が与えられることになった。

騎士として独立するだけではなく、男爵の地位まで与えられた。

「な、何で！」

「今さっき理由は言っただろうが。お前は学園を卒業したら男爵家の当主だ。だから、実家の寄子にはなれない」

男爵家である実家のバルトファルト家。

その寄子になろうと思えば騎士爵家と準男爵家の二つしかない。同格の家が寄子になるのは正直あり得ないというのがこの国の常識だ。

「男爵家規模の領地なんかないよ！」

「俺だって知るか！ 王宮からの手紙に功績を評価して独立と陞爵を認めるとあったんだ！」

親父にとっても驚きらしい。

精々、独立を認めて騎士爵にしてくれる程度だと考えていたらしい。

「……もしかして、学園では」

「男爵家以上の跡取りが入るクラスになるな」

学園に通う貴族の大半は騎士家の子弟だ。だが、彼らと同じ教育を男爵家以上の跡取りにするわけには行かない。

次男や三男なら良いが、独立予定の俺は上級クラスに入るのが決定していた。

金を持っている家の次男や三男も、金を出して上級クラスに入りがたがる。そのため、跡取りしかないわけではないが……とにかく入りたくないクラスだ。

「普通クラスが良い」

「無理だろ。男爵家の当主だぞ。相応の教育が必要だ」

「なら嫁は！」

「……当然、同クラスの男爵家が子爵家から貰うことになる」

俺は絶望のあまり膝から崩れ落ちた。

「そんなの嫌だああ！」

「馬鹿、泣くな！　ゾラみたいな女だって少ない。それに、お前が思っている以上にいい女だって学園にはいるぞ……多分」

この親父、多分とか言いやがった。

ソレは逆を言えば外れしかない状況かも知れないじゃないか。

「男爵から伯爵家の娘なんて一番の地雷だぞ！　俺は嫌だからな。絶対に嫌だからな！」

親父が慌てる。

「お前、貴族のお嬢さんを地雷呼びするのは止めるよ！　聞かれたら大変なことになるぞ。というか、お前の姉も妹もその男爵家の娘だからな」

「だから嫌だって言っているんだろうが！　あいつらマジで最悪だ！」

出来ればもつと身分の低い女性の方が良かった。

「嫌だー！　俺はもつと大人しくて優しい女性が良いんだ。男爵家以上の娘とかあり得ないよ！」

親父が両手で顔を覆っている。

同意できる部分があるのだろう。

実際、田舎貴族なのに姉や妹たちは俺から見てもちよつと「え！？」って感じた。

平気な顔で「男は甲斐性よね。顔のいい男は他で探すわ。もしくは奴隷！　ねえ、パパ、私もエルフの愛人　じゃなかった、使用人奴隷が欲しい」と妹が言っているのを聞いてドン引きした。

俺の金で姉が奴隷を購入して自慢しており、羨ましかったらしい。

お袋はそんな娘たちを見てオロオロしていたし、俺や親父　そして実家に戻ってきた次兄はしらけた感じでその光景を見ていた。

姉とか妹とか害悪でしかない。

「とにかくお前が進むクラスは上級クラスだ」

跡取りや金持ちの貴族が通うクラスと、その他大勢の生徒が通うクラス。学園には二つのクラスが存在していた。

まあ、男爵家以上の女子は無料で上級クラスには入れるのだが。

上級クラスと言えば、主人公たちと出会えるのかと思ったが……別に思い入れもないので興味がない。

「それに今年は王太子殿下に名門の跡取りたちも入学する。縁を繋いでおくのも悪くないぞ」

「いや、向こうからすれば俺たちなんて眼中にないでしょ」

乙女ゲーの王子様は普通っぽい子が好きであって、周りに集まる

貴族なんか大っ嫌いだ。俺はそういう偏見の目で見ている。

「……分かっているけどハッキリ言っなよ。お前のおかげで少しは領地もマシになったんだぞ。あと二年もすればうちだってもっと裕福な生活だって」

落ち込んでしまった親父に謝罪しつつも、俺はこれからのことを思うと気が重くなるのだった。

ホルファート王国の王都は大陸中央に位置する。

その場所には昔からダンジョンが存在し、モンスターが湧き出していた。だが、同時にダンジョンには魔石などの鉱石が存在している。

それらが王国の財源や資源となっており、強国に押し上げた要因の一つとなった。

大陸は非常に大きく、海水から水をくみ上げている箇所も一カ所や二カ所ではない。何カ所からも水を引き上げており、大地は豊かだった。

自然と調和する美しい大陸という奴だが、王都の規模はとても大きい。

都市部だけで百万人はいるのではないだろうか？

下水やら電気も用意された近代的な都市。

そんな場所に貴族の通う学園は存在していた。

都市部から少し離れた場所にある小さな浮島は飛行船の港になっており、そこに領地から乗ってきた飛行船を停泊させる。

実家が購入した飛行船で、大きさは五十メートルクラス。

最新型の飛行船は上部に甲板を用意しているが、他は装甲で覆われている。形としては潜水艦に似ている。

次兄が旅行鞆を持って欠伸をしていた。

「実家から直でここに来られるのは良いな」

以前は乗り継いで実家に戻ることになっており、一年目と二年目は戻ってこなかったのが次兄と次女だ。

次女の【ジェナ】は、学園の二年生である。茶髪で都会かぶれした姉は、実家に金が入ったと知ると奴隷を購入した。

獣人の亜人で猫耳を持つ細マッチョの奴隷は、俺たちが着用している服よりも立派なスーツに身を包んでいた。

「もっと豪華な飛行船が良いわ。友達は豪華客船並の飛行船を持っているのに、私だけ貧乏な感じで嫌よ」

お前の飛行船じゃないし、嫌なら乗るなと言ってやりたかった。

次兄も同じ事を思っていたのか視線をそらしていた。

「お袋はまともなのに、うちの女共ときたら」

次兄と二人で旅行鞆を持って都市部に降りる定期便の飛行船。その乗り場に向かうと奴隷に荷物を持たせた次女も後をついてくる。

「ちょっと、あんたたち話を聞いているの？ リオン、あんたまだ財産があるなら出しなさいよ。お姉ちゃんは交際費だって馬鹿にならないのよ」

後ろで五月蠅い姉とか言う生き物を無視して次兄と話をする。

「兄貴、俺だけ上級クラスに行くのが不満じゃない？ なんなら俺の功績は兄貴のだって言つてやろうか？」

「弟の功績を譲って貰うほど落ちぶれていないっての。上級クラスになんか行きたくないね。何しろあんな女ばかりだぞ」

二人で後ろを振り向けば、まだグチグチと文句を言っている次女の姿があった。

「……俺の金で高い奴隷を買いやがって。糞が」

俺が忌々しそうに呟くと、次女の奴隷が俺を睨んでいた。

そのピコピコ動く猫耳で聞いていたのだろう。

次兄が俺の肩に手を置く。

「上級クラスでかぶれたんだよ。察してやれ」

上級クラスはとにかく身につける物やら奴隷などがステータスになる。そのため、金を持っている家のお嬢様たちは着飾って奴隷を連れ歩いて見せつけるのだ。

男が無駄に着飾り、女性の奴隷を連れて歩くものなら白い目で見られるというのに……。

次兄は少し照れくさそうにお礼を言ってくる。

「まあ、お前のおかげで俺もアルバイトに精を出さずに勉強が出来た。相手も見つかりそうだし、ありがたいとは思っているよ」

「じゃあ、俺を助けると思って」

「無理なお願いは聞けないな。おっと、ここの乗り場は道に迷いやすいからちゃんと覚えておけよ」

次兄に案内される形で定期便の乗り場に移動した俺は、他にも学園に向かう多くの生徒たちの姿を確認した。

飛行船の港を利用しているのは主に騎士家から子爵家が大半だ。

伯爵家以上の家になると専用の港が都市に用意されており、そこで乗り降りをしているらしい。

前世のイメージで言うところの駅やバス停のターミナルのようなイメージに近い。

港という感じはあまりしなかった。

待っていると定期便がやってくる。

俺たちの後ろでふてくされている次女が立ち上がろうとすると、何やら慌てていた。

次兄も額に手を当てている。

「どうかしたの？」

次兄は人混みを指さした。

「公爵家の取り巻き様たちだ」

見れば、堂々と横入りをしている集団が目にとどまった。女性陣を筆頭に、その後ろには美形の奴隷たち。そして、男子たちが続く。

次女が嫌そうな顔をしていた。

「今年は王太子殿下や有名どころの跡取りが来るからね。仕方ないわよね」

王子たちが来る。そして、その相手である婚約者たちも来る。

という事は、有名どころの貴族が一杯来る　名門貴族の生徒たちが大勢いると言うことだ。

その取り巻きたちは、名門貴族の地位を後盾に偉そうにしているわけである。

「なるほど……ボスがいるから強気な子分たちか」

俺の言葉に次兄と次女が慌てていた。

「ば、馬鹿！」

「あんた馬鹿じゃないの！　ねえ、馬鹿なの！？」

二人は聞かれていないと知ると安堵する。

「耳の良い亜人たちが聞いているかも知れないだろうが。お前、もう少し緊張感を持てよ」

黙って何度か頷いていると、定期便の飛行船に取り巻き連中が乗り込んで王都に降りていった。

学園は王都の中に存在している。

人口密度の高い場所でこれでもかというくらいに広い土地を確保し、校舎も大きいが学生寮の規模も凄い。

次兄は普通クラスの寮に向かったが、俺の方は上級クラスが使用する寮になる。

気が重い。

学生寮とは思えない豪華さで、一階のロビーはまるでホテルだった。

受付にも人がいて、実際に働いている人たちはホテルの従業員のようだった。

「うわ、ゲームで見た感じそのままだ」

豪華な学生寮。出てきた感想はその程度だ。これが待ちに待った学園！ なら話も違っだろうが、俺にしてみれば牢屋みたいな物だ。

対して主人公は質素な感じの寮に押し込まれる流れがあるので、ゲームをプレイしていた俺には見慣れない景色だ。

受付に行くところの部屋が教えられる。

もっと身分が高ければ荷物も持って貰えるらしいが、俺はクラスのカースト的に最下層なので自分で向かえというのを丁寧に言われた。

マジのカーストが存在しているから驚きだ。

クラス内での人気も関係するが、実家の規模とか実力がここでは大きく影響するのである。

「もう帰りたい」

鍵を受け取り部屋に向かうと、そこには俺と同じような学生たちがいた。部屋の位置的にあまり日当たりの良くない場所。

掃除はしているが部屋も他に比べれば狭いのだろうが、一人部屋であるのは救いだ。

先に送った荷物は届いているようで、箱を開けてみると俺の荷物が入っていた。

それらを部屋に置いていくと、机の上に教科書やらノートが置かれていたのに気が付く。

もう準備はほとんど整っていた。

「至れり尽くせりだな。まあ、卒業するまで頑張るとしますか」
どうせ三年だ。

正直、貴族の娘を嫁に迎えるのは抵抗が強い。しかし、結婚後にゾラのように王都や都会に住むのなら、俺は現地というか実家の領地で嫁 側室を探せば良いのだ。

相手はあまりいい顔はしないだろう、が。

親父のように仕送りさえしておけば文句を言う女も少ないだろう。

女性の多くが田舎貴族など相手にしないのも分かっている。

収入的な意味でも、外見的な意味合いでも俺は女性が欲しがる男ではない。そもそも次女のように都会に住みたいから田舎の貴族はちよつと……なんて奴が多いのだ。

まあ、住みやすい都会の暮らしが良いのは俺も同じだが。

最後に旅行鞆を開けると中からルクシオンが飛び出してきた。

『到着したのならさっさと解放して欲しいですね』

「あゝ、悪い。忘れてた」

『……流石はマスターです。賞賛に値する記憶力ですね』

こいつの皮肉を聞きつつ片付けを続ける。

「それで、船旅はどうだった？」

『原始的な飛行船ばかりですね。魔法技術に関しては驚くしかありませんが、科学で再現可能なレベルです。まあ、今後も引き続き情報を収集しようと思いましたよ』

つまり見るべきところはあつたのだろう。

「素直じゃないAIだな。ツンデレか？」

『おや？ 私に異性を求めているのです？ 残念ですが、私には性別の概念がありませんのでマスターの気持ちには応えられませんね』

こいつ腹が立ってきた。

殴ってやろうと拳を構えると、そのまま俺から距離を取ったので片付けに戻る。

すると、ノック音が聞こえてきた。

学生寮を出て　　というか、新入生を集めて先輩たちが連れ出してくれたのは学園の外にある洒落た居酒屋だった。

「えー、今年も同じ立場の新入生を迎えられ、誠に嬉しく思うわけですね」

挨拶をしているのは同じ地方の男爵家　　その跡取りだった。

俺は近くにいた同じ新入生の【ダニエル・フォウ・ダーランド】に話しかけた。

ダニエルは小麦色の肌をした健康的な男子だ。短髪で背が高く筋肉質で好青年に見える。

「なあ、なんでこんな歓迎会をしているんだ？」

「知らないのか？　同じグループで集まって悩みを相談しつつ情報を共有するんだよ。ほら、結婚とか大事だよ」

同じグループでまとまっていると確かに楽だが、好条件の女子が出てきた際に奪い合いになるのではないかと思った。

首をかしげていると、反対に座っていた眼鏡をかけた男子【レイモンド・フォウ・アーキン】が眼鏡を押し上げながら呆れていた。

こちらはダニエルとは反対にインテリ眼鏡で性格が少しひねくれているようだ。

「女性の奪い合いになっても同じグループなら付き合いもあって無駄茶もしないだろ。揉めたらグループ内で話を付けるのさ。まあ、奪

い合いになることは滅多にないらしいけどね」

そういう物かと納得していると、上級生の挨拶が終わったので宴会が始まった。

今回の歓迎会は先輩たちのおごりらしい。

そして、来年は俺たちがおごる側に回るようだ。

上級生の一人がこちらにやって来た。

「いや、今年は大出世した話題の騎士がいるから楽しみにしていたんだ。あ、俺は『ルクル』って言うんだ。よろしく」

ルクル先輩は三年生らしい。

既に結婚相手を見つけており、後は実家に戻るだけの状態のようだ。

「大出世の騎士？」

俺が首をかしげると、レイモンドが舌打ちをした。

「とばけないで欲しいね。入学前に冒険者としてほぼ成功した男爵家の三男は君だろう？ 王都どころか、僕の実家にも話は聞こえてきたよ」

ダニエルが驚いていた。

「あの噂の騎士ってお前だったのかよ！」

俺は顔を伏せる。

「仕方なかったんだ。金を稼がないと変態婆と見合いコースだったんだ」

俺の言葉で全員が察したのか、それ以上の追求はなかった。やはり同じ悩みを抱えているだけあって話しやすい。

ルクル先輩は笑いながら学園のことを話してくれる。

俺は気になったことを聞いてみた。

「そう言えば、うちの実家は長男が継ぐんですけど……このグループにいたんですか？ あ、名前はルトアートって言います」

ルクル先輩は次兄と同じ三年生だ。

もしかしたら知っているかも知れないと思った。

「去年卒業したルトアート先輩？ 僕たちのグループにはいなかったね。スクールカースト最下層はお呼びじゃないとか言っていたよ」

お前もその最下層だろうに。

ルクル先輩が当時のことを話してくれた。

「なんて言うかお金持ちのグループに混ざっていたね。無理して付き合っていたようにも見えたけど、本人の希望なら仕方がないし。仲が良かったの？」

首を横に振ると、ルクル先輩は「だろうね」と言っただけでジョッキを口に運んだ。

ダニエルやレイモンドが先輩に学園生活で気になることを質問し、先輩が面白おかしく答える。

そうした会話を聞いていると、ルクル先輩が俺たちに言うのだ。

「入学式まで残り数日だから、その間に王都の案内をするよ。あんまり遊びすぎて身を崩さないようにね」

三人で頷くと、ルクル先輩が言う。

「それと、君たちの学年に一人特待生が入学するらしいよ。優秀な人材を拾い上げるために、貴族以外の生徒も入学させるとかなんとか言っていたね」

その話を聞いてレイモンドが苦々しい顔をしていた。

ダニエルも面白くなさそうだ。

貴族の子弟からすればこの反応が当たり前なのだろう。

「特待生ですか？ 普通クラスですよ？」

レイモンドの質問に、ルクル先輩は首を横に振った。

「上級クラスだよ。王太子殿下が入学する時期なのに迷惑だよ。あ、それから何かあったら教えてくれない。それに、その特待生

なんの伝もない平民って噂なんだよね」

俺は特待生が平民だと知っているので驚きもしないが、二人には衝撃的だったらしい。

俺も驚いておくふりだけしておいた。

将来的に聖女だったか？ とにかく凄い血を引いていた事が判明し、貴族たちが手のひらを返すことになるのは黙っているべきだろう。

言ったところで誰も信用しない。

入学式当日。

大講堂とでもいうのだろうか？

とにかく、まるで劇場のような場所で入学式が始まった。

欠伸をかみ殺して出席してみれば、これ程までに貴族がいるのかと驚くような数が出席している。

なんとなく女子の香水の臭いが混ざり合って酷い感じになっている。

そんな中を紺色の髪を短くした王太子殿下【ユリウス・ラファ・ホルファート】が挨拶を述べている。

見るからに美形。背が高く引き締まった体はバランスも良い。

綺麗な肌に紺色の瞳は美しく輝いて見えた。

周囲の女生徒たちが溜息を漏らすのも理解できる。

アレは次元が違う。

近くにダニエルとレイモンドが座っているが、流石に王太子殿下に文句は言わないらしい。黙って話を聞いていた。

すると、後ろの方から。

「ついに来たわね。もう、王子様ったら十年も待たせちゃって」

聞こえてくる声に振り返ったが、誰がしゃべったのか分からない。王太子殿下の美しさを口々に呟き、周囲と話しており誰か見分けが付かなかった。

だが、一人だけ 妙に気になる女子がいた。

金髪碧眼。

顔立ちは美人と言うよりも可愛い感じの女子は、周りの女子とは違う視線を王太子殿下に向けていたのだ。

ダニエルが俺を見る。

「なんだ、もう相手を見つけたのか？ お、可愛い感じだな。あの子が好みなのか？」

からかってくるダニエルに対して、俺は静かに首を横に振った。

「いや、どちらかと言えば……嫌いだ」

「そ、そうか。可愛いと思うんだが」

その女子を見た時に最初に感じたのは怒りだった。どうして腹が立ったのか分からないが、とにかく嫌だった。

憎しみではない。何というかもっと複雑な……とにかく、異性としてみることは出来ない相手だと思った。

主人公と悪役令嬢

さて、入学式から一ヶ月が過ぎた。

慌ただしい毎日が過ぎていくのは早いが、特筆すべきイベントなど俺のようなモブにはない。なれない学園での生活によやく慣れ始めた今日この頃だ。

ゲーム的な話をするのなら、今頃は主人公に攻略対象の男性陣との出会いが連発している頃。

悪役令嬢が出てきて「身の程を知りなさい」とでも言われている頃だろう。ゲームではスキップ機能を利用していたので、詳しい会話の内容は覚えていない。

まあ、そんな関わりのない主人公たちの話は置いておこう。

俺の方はようやく学生寮での生活にも慣れ始め、付き合う友人たちも固まりつつあった。

俺で言うならダニエルやレイモンドだ。

二人とは置かれている状況に違いもあるが、育った環境がほとんど同じだ。そのため話が良く合う。

学園内の中庭にあるベンチ。

野郎三人で腰を下ろして相談するのは、五月はじめに予定されて

いるお茶会だ。

「なあ、お茶会はどうする？　やっぱり招待する相手は選ぶべきだよな？」

五月にある連休は、女子にとっては休みでも男子にとっては違う。ここで女子との距離を縮めるためにお茶に誘うのだ。

ナンパと違うのは誰でも良いというわけではなく、おまけに相手の格にあつたお茶会を開く必要があつた。

学園内の非公式な行事みたいな物だ。

心配そうなダニエルの問いかけに、レイモンドがうつむいていた。

「実家から仕送りをして貰ったけど、そんな贅沢なお茶会は開けないんだ。僕は参加してくれそうな女子なら誰でもいいや」

学園は金がかかる。しかも男子に限って、だ。

俺も蓄えがあるとは言え、湯水のように使えるわけでもない。と
いうか使いたくもない。

そもそも、持っていた財産のほとんどは両親　領地に投資して
しまった。

ただ、このお茶会……逃げると、女子のネットワークで噂が広がってしまふ。あいつはお茶会も開けないとか、そういう噂が広がって結婚に不利になる。

例え相手に興味を持たなくても、しっかりとしたお茶会をやる必要が出てくる。

俺たちが情報を共有するように、女子は女子で情報を共有するのだ。女子を敵に回すと一気に噂が広まって大変なことになる。

こういうところでも男子は不利だ。

そして、ここで一つ問題がある。

俺は実力で卒業後に独立を勝ち取っており、周囲にはそれなりの金持ちとみられていた。そのため、周囲の期待というかハードルが高い。

「俺の方は格式高いお茶会って言うの？ それをしないといけないらしくてさ。正直、気が重いんだよね」

五月のお茶会を前に三人で落ち込んでいると、勝ち組とも言えるユリウス殿下が取り巻きや女性を連れて歩いているのが見えた。

側にいるのは親友にして親衛隊の一員でもある子爵家の跡取り殿下の乳兄弟でもある【ジルク・フィア・マーモリア】だった。

濃い緑色の髪は本当に地毛なのか問い詰めたい。緑色の瞳は優しそうな垂れ目で、鋭い目つきの殿下とは対照的だ。

宮廷貴族の子爵家だが、殿下の乳兄弟であり親友でもあるため将来は重要な役職が与えられるのは明白だった。

女子たちが瞳にハートを浮かべそうな顔をして話しかけており、

中には伯爵家や辺境伯家出身の男子たちが取り巻きを気取っていた。

「殿下は五月のお茶会は開かれるのですか？」

「私も参加したいです」

「わ、私も！」

殿下のお茶会に招待されたいと尻尾を振る犬のような女子たちを見て、俺たちは現実を直視する。

レイモンドが両手で顔を覆っていた。

「……今年は殿下や名門貴族たちがいるからハードル高いよね」

ダニエルも肩を落としていた。

「比べられるよな。勘弁して欲しいぜ」

羨ましい光景を見ると、そこに一人の女性がやって来た。周囲に取り巻きを連れているが、その数が本当に多い。

相手は公爵家のお嬢様 【アンジェリカ・ラファ・レッドグレイブ】。輝くような金髪をアップにしてまとめ、赤いドレスを着用していた。

白い肌は綺麗だが、その赤い瞳は力強い。

目力のある鋭い瞳は、他者とは違う何かを持っているのがすぐに分かった。

生まれながらに何か持っている者がいるのなら、彼女や殿下だろ

う。

内心、きつと主人公も凄い何かを持っているのだろうと思った。

在り来たりかも知れないが、まとっているオーラが違うとでも言うのだろうか？

「王太子殿下の婚約者様だな」

俺の言葉より早く、殿下とジルクを取り囲んでいた女子たちが距離を取る。婚約者の前で誘いをかける馬鹿はいないらしい。

そもそも声なんかかけるなと言いたい。

アンジェリカさんの視線が少し鋭くなった。

「王太子殿下、五月の茶会について少し話があります。ご一緒にてもよろしいでしょうか？」

学園の中で外の地位やら親の力を笠に着るのは駄目と言われているが、世の中は切っても切れない物がある。

「アンジェリカ、周囲を威圧するな。ここは学園だぞ」

「ええ、心得ていますよ。ただ……王太子殿下の周りが少々五月蠅かったもので」

学園の中だろうとそれは同じで、公爵令嬢に逆らう馬鹿はいない。女子たちが気まずそうに視線をアンジェリカさんからそらしてい

た。

「この人が主人公のライバルか。凄く強敵な感じが出ているな」

ブツブツ独り言を言っていると、集団から離れた場所に一人の女子がいた。俺は視線を細める。

アンジェリカさんを美女というなら、その彼女は可愛らしい感じだった。

金髪碧眼のお嬢様は、子爵家の娘。

名前は【マリエ・フォウ・ラーファン】。

俺がどうにも好きになれない相手だった。

見ているイライラする。ただ、憎しみの感情ではなく、イライラするだけだ。

青い瞳でそちらを見ているのを、ジルクが見つけて殿下に知らせる。

「殿下」

「ん？ ああ、マリエか。丁度良かった、お前のことを探していたんだ。こっちに来てくれないか」

殿下が笑顔に向けた相手はマリエだった。

ピクリとアンジェリカさんの眉が動く。

取り巻きの一人が、マリエのことを耳打ちすると余計に眉をしかめた。

マリエは呼ばれたから仕方なく来ました、という感じで緊張感漂うこの場所にやって来た。

ダニエルが胃の辺りを押さえていた。

「俺、帰ったら駄目かな？」

座っていたベンチの近くでもめ事が起きており、今立ち上がって逃げると目立ってしまう。レイモンドが首を横に振る。

「駄目だ。終わるまで動くな。それにしても、彼女は王太子殿下の知り合いか？ 有名な女子ではなかったと思うけど」

マリエはかわいらしい声で殿下に話しかける。

「なんでしょう、殿下？」

「実は男子は五月に茶会を開かなくてはいけないくてね。あまり派手に開催したくないから知り合いだけを呼ぶつもりだ」

その言葉にアンジェリカさんが反論した。

「王太子殿下、茶会にも格がございます。このような者を」

殿下は止まらない。

そして俺はこの光景を思い出していた。

そういえば、強制イベントでこれと似た出来事があった、だが、その時に呼ばれたのは主人公だったはずだ。

周囲を見るが、それらしい人物はいなかった。

レイモンドが俺を見る。

「何をしているんだよ」

「いや、探している人がいるんだけど……特待生ってここにいる？」

レイモンドが同じように周囲を見るが、首を横に振るのだった。

「いないよ。そもそも特待生がこの場に混ざれるものか。ほら、黙ってじっとしているんだ。嵐が過ぎ去るのを待つ心持ちで耐えるんだ」

逃げられない俺たち。

中庭に入ろうとして、異様な雰囲気に関わりながら逃げる生徒たちの姿がチラホラ見えた。羨ましい限りである。

アンジェリカさんと言い争う殿下は、少し煩わしそうにしていた。

「いい加減にしろ、アンジェリカ。ここは学園だ。俺は一生徒としてここにいる。お前は俺の婚約者だが、そこまで干渉されるいわれはないぞ」

その言葉にアンジェリカさんが引き下がる。

「……失礼しました」

そう言ってこの場を離れていくアンジェリカさんは、最後にキツという感じでマリエを睨み付けてから去って行く。

周囲の取り巻きたちもマリエに対してきつい視線を向けていた。

「すまなかったな、マリエ。悪い気分になんてしてしまった」

「い、いえ、そんな事は良いんです。でも、本当に私が参加しても良かったんですか？」

ジルクが肩をすくめていた。

「殿下は堅苦しいのが嫌いだね。もっと軽いお茶会が良いんだ。是非とも参加して欲しい。それに、殿下がここまで誘うなんて珍しいんだよ」

クスクス笑っているジルクに、恥ずかしそうにしている殿下が視線をそらしていた。

「と、とにかく参加しろ。ほら、ジルクも行くぞ」

殿下やジルクが移動を始めると、その取り巻きたちも去って行く。

ようやく解放されたとダニエルもレイモンドも安堵している時、俺はマリエの横顔を見た。

誰も見ていないと思ったのか、油断したらしいマリエは薄ら

笑っていた。

お茶会のためのマナー教室。

先生は髭を綺麗に整えた紳士という感じの男性教師だった。

実際に教室にはテーブルが置かれ、お菓子やお茶が用意されている。

「良いですか？ 女性をお茶会に誘う時は全てを見られていると思いなさい。立ち居振る舞いからどのような教育を受けてきたのか、そしてどのような人物なのか相手に見抜かれますからね。逆に言えば、ここですっかり女性をもてなせばそれだけ高評価を受けることになります」

男子が雁首揃えてマナー教室で勉強中。

親父もあんな髭面でマナーを学んだらしいが、卒業と同時に忘れたとか言っていた。確かに普段の生活態度が見えてくるかも知れないが、そこまで相手は見てくれるのだろうか？

「ヘイ、ミスタリオン！ もっと緊張感を持ちなさい」

「は、はい！」

注意されて返事をする、周りではクスクスと笑い声が聞こえてきた。笑っているのは金持ちや宮廷貴族の跡取りたちだった。

「田舎者はこれだから」

「少し手柄があるからと偉そうに」

「野蛮人は冒険者に向いているが、この場には相応しくないね」

男性教師が背筋を伸ばして授業を続けた。

「まずはお茶会で大事なのは全体の雰囲気です。とりあえず道具を揃えた、空いている部屋を押さえたというのは論外です！ 道具一つ一つに至るまでこだわり、女性を特別な空間に招待する。ただ場を用意するなど三流以下と覚えておきなさい」

こんなどうでも良い授業に何か意味でもあるのだろうか？ 卒業したらどうせ使わない、と思っていると、教師はソレを見抜いたらしい。

「ミスタリオン……理解していないようですね。では、一つ実践してご覧に入れましょう」

言われて俺は前に呼び出されると、客としてもてなされた。

どうせたいしたことなどない。

精々、表面上は感心しつつ内心であざ笑ってやろうと思っていた。

「わゝ、楽しみですね」

「ええ、楽しんでください」

そう思っていたら。

授業が終了後。

教室を出た男性教師に声をかける。

「先生！ 俺、感動しました！」

背筋を伸ばした男性教師は、綺麗に振り返ると自慢の髭をなでていた。

「ミスタリオン、分かってくれたようですね」

「はい！ 俺、お茶というのを舐めていました。今は凄く反省しています。俺、先生みたいに完璧なお茶会を開きたいです！」

男性教師は笑顔で頷く。

「大変結構。ですが、間違えていますよ」

「え？」

男性教師は俺に体ごと向き直ると、右手を胸に当てるのだった。

「大事なものはもてなす心。そして、私はまだ道半ば。未だに満足できるもてなしが出来た事ありません」

「そ、そんな。先生でも完璧じゃないんですか？」

男性教師が頷く。

「ええ、そうです。私もその場、その瞬間に最高のもてなしを目指していますが、その境地にはまだ届きません。ですが、基礎は教えられます。ミスタリオン、共に茶の道を進もうではありませんか」

「はい！」

俺と男性教師が笑顔で話をしていると、後ろからダニエルとレイモンドの声が聞こえてきた。

「なあ、あいつ何かやばい薬でも決めたのか？」

「さあ？ まあ、無駄にはならないし良いんじゃないか？」

五月のお茶会。

俺は招待状を送った相手から返事が来たため、招くために部屋を借りて準備を行っていた。

学園には茶会専用の部屋がいくつも用意されており、それを生徒たちが借りてもてなすのが主流である。

本来ならどこか本格的な場所を借りたいのだが、この時期はどこも混み合ってしまうので借りられない。

茶器のセットやら茶葉にお菓子。

それらを先生と相談して揃え、部屋の掃除から配置など変えて待

っている段階だ。

部屋の中央にはルクシオンが浮かんでおり、内装を確認している。

『随分と手が込んでいますね。数週間前までは業者を入れて手早く終わらせようとしていたマスターとは思えません』

「五月蠅いぞ。お前も何か気が付いたら言ってみろ」

最終確認をしている俺は、懐中時計を取り出して時間を確認した。

十分もすれば招待した女子がやってくる。

今回は男爵家の次女が相手である。

ハッキリ言って次女とか嫌いだが、相手には関係ない話だ。

『私には理解できない世界ですね。遺伝子情報から最適なパートナーを選んで駄目なんでしょうか？』

「その遺伝子を確認できる人がいないから無理だな」

『ならば言うことはありません』

ルクシオンと話を終えると、女子がやってきた。

「ちわ〜」

だが、その態度はどうにも好意的なものではなく、渋々やってきたというのが態度に出ている。

しかし、俺は慌てない。

落ち着け、俺。どんな相手も心からもてなすのが始まりと先生がおっしゃっていた。

だが。

「ようこそ　　って、え？」

よく見ると招待した女子の後ろには二人の女子の姿があった。

相手はヘラヘラ笑っている。

「あ、友達。ついでに時間を潰させてよ。結構大きなお茶会があるんだけど、それに参加するまで時間があるのよね」

名門貴族の跡取りが開催するお茶会は、もはやパーティー規模だった。馬車を用意して出発するため、時間を潰したいらしい。

「そ、そうでしたか。それで、出発は何時に？」

「三十分くらい。暇だね〜って話していたら、そういえばお茶会に参加するって返事出したのを思い出してさ」

他二人が勝手に椅子を用意して席に着く。

置いてあるお菓子を食べ始めた。

「あ、お茶もよろしく」

そのまま三人でテーブルを囲み、俺が座る場所もなくなる。三人でこれから向かうお茶会の話で盛り上がっており、俺はまるで三人の使用人みたいにせっせとお茶のおかわりやお菓子の追加を行っていた。

時間が来ると、食べ散らかした三人はお礼もなく部屋から出て行く。

「じゃ、お疲れ。お菓子おいしかったけど、もっと高いのを買わないと女の子は喜ばないよ」

出て行く三人。

俺は肩を落とした。

「このお菓子がセットでどれだけすると思ってるんだ。ちゃんとした店で今日作って貰ったお菓子だぞ。これ以上高いつて……」

残ったお菓子を見る。

「……先生、お茶の道はまだ長く険しそうです」

悔しい気持ちに泣きそうになりながら片付けを行っていると、外から声が聞こえてきた。女子生徒数名が何か言い合っている。

「……あんたは不釣り合いなのよ！」

「で、でも、招待状が」

「そこは気を利かせなさいよ、平民！」

バタバタと足音が聞こえてくる。

女子生徒数名が「早く行こう、馬車が出ちゃう」などと言って去って行く。先ほどの平民という声から、俺はもしかしたら主人公がいるのかと期待して部屋から出てみた。

きっとライバルのアンジェリカさんよりもオーラがあって美人でと、そこまで期待していたのに、廊下には座り込んでいる女子が一人。

明るい茶髪はミドルのボブカット、覇気というかオーラなどない普通の女子の姿がそこにはあった。

瞳もブラウンで優しそうな顔立ちはしているが、アンジェリカさんとは比べると正反対。地味な女子だった。

美人ではあるが……普通の子だ。

廊下には破り捨てられた招待状がある。

先ほど黙って置物に徹していたルクシオンが、俺の肩に乗って様子を見ていた。

『……これがいじめ、ですか。彼女は特待生ですが貴族階級ではないと聞いています。一般人がこの学園に通っているのが許せないのですね』

「まあ、そんな感じだな。けど、なんか……普通すぎるな」

悲しそうに招待状を拾い集める彼女を見て、俺は部屋の中へと視線を向けた。

「まだ、一人くらい招待できるか」

残っているお菓子やら茶葉から、一人くらいもてなせると思った俺は声をかけた。

「ねえ、その彼女！ お茶していかない！」

顔を上げた女子 主人公は俺を見て少し驚いた顔をしていた。

「ふん、辺境伯の跡取りから招待状を受け取った、と」

「はい。特待生と話をしてみるのも悪くないと言っていたあなたんですけど、皆さん相応しくないから辞退しろと」

部屋の中、先ほどとは違い落ち着いた時間が流れていた。

お菓子を食べると笑顔になる彼女は、俺の用意したお茶を見ていた。

「こ、これ、高い茶葉なんじゃ」

「高いけど、一人で飲むところだったから丁度良さ。それにしても大変そうだね」

別に深く関わるつもりもないが、彼女が誰と関わっているのか知りたかった。主人公が今後どのような行動に出るのか知っていても悪くはない。

辺境伯と言えば【ブラッド・フォウ・フィールド】だろう。

紫色の長い髪が特徴的なナルシストで、領主貴族としても広い土地を持つ金持ち。とにかく規模の大きな家だ。

俺の実家なんか相手にもならない。

ブラッド自身は前に出るよりも軍師タイプの人間だ。参謀とも言うが、頭が良いので軍を指揮するタイプ。

本人は大して強くないが、領主貴族としてそのことにコンプレックスを持っている。

一言で言うなら面倒くさい奴だ。

いや、考えたら攻略対象の男子全員が面倒くさい奴らだった。

曇った顔をした主人公【オリヴィア】はうつむいてしまった。

「私、本当はここに来ない方が良かったんでしょうか？ 一生懸命頑張っていますけど、周りに付いてくのがやっとで……どうして入学出来たのか分からなくて」

そう言えば、最初はステータスが低くて学園パートも苦勞する時期である。

殿下を筆頭に野郎共がフォローしてくれるのだが、今のオリヴィアさんは基本的に一人らしい。

俺たちも絡むことがないし、そもそも上手くやっていると思っていた。

だが、話を聞けば一ヶ月近くも一人らしい。

俺よりも悲惨な状況だった。

まあ、同じクラスの男子からすれば彼女は結婚相手になり得ない。何しろ身分が低すぎるのだ。結婚相手を必死に探す俺たち男子からすれば、関わっている暇のない相手でもあった。

そう思うと、婚約者がいた攻略対象キャラたちが主人公に関わったのは余裕があるからという理由になる。

羨ましい限りだ。

でも、少しおかしい。

五月までに攻略対象キャラとは出会っているはず。強制イベントのようなものもあった。そこまで思い出し、俺はマリエを思い出す。

笑っていたマリエの横顔がどうにも不気味だった。

「え、えつと」

俺が黙っているために不安になったのか、オリヴィアが慌てていた。何か粗相でもしたのかと自分を責めている。

わがままな他の女子たちには見習って欲しい。

「少し考え事をしていたんだ。まあ、学園でも初めてのことから手探りの部分もあるし、今は出来ることをするしかないよ」

オリヴィアが「そうです、よね」と俺のアドバイスに頷くが、納得してはいないようだ。そもそも、俺が一言で相手に感銘を与えるような答えを言えるわけがない。

人生経験は豊富でも、女性相手には素人も良いところだ。

「……私、ここにいても良いんでしょうか？」

そんな質問に俺は即答する。

「え？　良いに決まっているじゃない」

そもそもこの世界の主人公は君だ。

君が誰を攻略するのかで俺の人生にも少なからず関わりが……ないな。まったくくない。まあ、誰と付き合っただくらい話のネタとして知ってはおきたかった。

「ど、どうしてですか？　だって、私は毎日ここには相応しくないと」

俺からすれば当然でも、オリヴィアさんからすれば不思議なのかも知れない。俺は適当な理由で説明しておく。

「いや、だつてほら……そう！ 君の入学は学園や王宮の意向だ！
つまり、生徒側に決定権がないわけで、王宮も学園も入学を許可
した側！ 文句を言われても君の責任じゃない」

オリヴィアさんが目をパチパチさせていた。

「で、でも、周りが」

「どうしても耐えられないなら退学でも良いじゃない。出て行けっ
て言った奴には、上の意向なので無理です。でも、苦情があつたと
伝えておきますね、って言うっておけば？」

どうせ主人公はきっと攻略対象の男子が守ってくれる。

だから大丈夫。

きつと……多分。

今はゲームと違う流れだが、ルクシオンを手に入れた流れも結構
違った。やはり、ゲームとは違う部分もあるのだ。

そうになると、今後とも注意が必要である。

オリヴィアさんがポツポツと話をする。

「私……もつと魔法のことを勉強したいんです。でも、学園のルー
ルとか、暗黙の了解とか疎くて……」

男子内にも暗黙のルールとか色々がある。

だが、女子は女子で大変だろう。

「暗黙のルール……ああ、そう言えば一人心当たりがいるな。なんとかなるわ」

「本当ですか！」

俺は次女を呼びつけることにした。

たまには役に立って貰わないと困る。あいつのためにいいくら支払ったことが……少しは貸しを返して貰うとしよう。

金をちらつかせれば動く女だ。

きつと嫌々でも教えてくれるだろう。

次女のためにお茶を煎れる。

本当は雑に煎れるか、一服盛ってやりたいが先生の顔が思い浮かんだのでやめておいた。お茶会の場でそんな事するのはいけない事だ。

忌々しそうにしている次女。

その後ろには猫耳筋骨隆々の使用人が腕を組んで立っていた。

「私を呼びつけるなんて偉くなったわね、愚弟」

俺は鼻で笑う。

「呼び出しに応えるくらいの理性があつたのは褒めてやる。ほら、さつさと女子のルールについて教えるんだ」

申し訳なさそうにしているオリヴィアさんに、俺は気にしなくても良いと言いながら席に着いた。

次女は額に手を当てる。

「……教えるのは良いけど、特待生に肩入れしてあんたの得はあるの？」

俺に得はない。

だが、知り合い程度になっておくのは悪くないだろう。そうすれば、今後色々と情報がオリヴィアさんから入ってくるはずだ。

恩は売っても損のない相手。そして、本来ルクシオンを手に入れたかも知れない彼女に対するせめてもの罪滅ぼしだ。

「これだから損得で動く人間は嫌だな。もっと優しい心を持ったらどうだ？」

煽ると次女が舌打ちをしてきた。

俺のおかげで後ろにいる立派な奴隷　愛人が購入できたのだ。そのことは本人も分かっているらしく、オリヴィアさんを見た。

「あんた、クラスの女子……とにかく一番偉い女子に挨拶とかした

の？」

オリヴィアさんが首を横に振る。

「私じゃ近づけなくて」

「ちゃんと手紙を出しなさいよ。手土産もって挨拶しておくのがルールなの。大きなグループがあるなら、誰かに仲介を頼むのよ。取り巻きとして結構重要なポジションにいる子が良いわ。その子に手紙を渡して、ついでにその子にもお土産を渡すのよ。ああ、お土産は相手の好みをちゃんと調べなさい」

俺は次女の話聞いて思った。

「それって賄賂じゃないか！」

「五月蠅いわね。世の中、それで上手くいくなら問題ないのよ。それから、あからさまにお金とか品がないから止めてね。相手も怒るわよ。人気店のお菓子とか茶葉が無難ね。こういうのは塩梅を間違えると面倒なのよ」

メモを取るオリヴィアさんの手が止まった。

「わ、私、そんなお金が」

次女が俺の顔を見て顎を小さく上げた。

「この愚弟に買わせていいわよ。私を呼び出したんだからそれくらいさせないかね」

俺は急に話を振られて慌てる。

もう関係ないと思って女子って大変だな、くらいの気持ちで聞
いていたのだ。

「な、なんだと……」

次女は話を続ける。

「直接会いたいと言うか、それとも何か返礼の品が来たらそれでお
しまい。後は相手の気に障ることをしなければ無事に卒業できるか
ら」

オリヴィアさんが泣きそうな目で俺を見てくる。

「……代金は俺が持つから」

「ありがとうございます。必ずお返しします！」

お礼を言ってくれるオリヴィアさんを見て、俺は周りもこの子く
らい優しければと思うのだった。

ふんぞり返ってお菓子を食べている次女を見て、俺は首を横に振
る。やれやれという感じを出すと、次女が自分の使用人に合図を出
した。

マッチョマンが俺に手を伸ばしてきたので、俺はその場からすぐ
に逃げ出す。

獣人と力比べなどやっけていられない。

後日、オリヴィアはアンジェリカに呼び出しを受ける。

緊張した様子のオリヴィアを見ながら、アンジェリカは優雅に紅茶を飲んでいた。持っているカップも中身も、リオンが用意した物よりグレードが高い。

それらを使うのが普通であるようなアンジェリカは、カップを置くとオリヴィアに鋭い視線を向けてくる。

「誰の入れ知恵か知らないが、挨拶に来たのは褒めてやろう。精々、身の丈に合った生き方をする事だ。ここはお前のような者がいる場所ではない。だが、弁えているのなら、隅で大人しくしていることくらい許してやろう」

学園というのは外から隔離された、少しだけ不思議な場所だった。

独特なルールやら外では通じないルールも存在する。

アンジェリカに“挨拶”というのもその類いだ。

別に必要なことではないが、学園生活を円滑にするためには必要なことだった。

オリヴィアは力もなければ後ろ盾もない。

学園内では本当に弱い立場なのだから。

「え、えつと、それは学園にいるのを許してくれるのでしょうか？」

オリヴィアが困っていると、アンジェリカが少しめまいを覚えたような顔をしていた。

部屋にはアンジェリカの取り巻きである女子が数人はいたが、部屋から出させて二人きりとなる。

すると、先ほどよりも幾分か優しい口調で話し始めた。

「……あそこで頷いて茶を飲んで帰る。それだけで全て終わった。お前が質問をするから話がややこしくなっただろうが」

「え？」

アンジェリカは溜息を吐く。

何やら少し疲れた顔をしていた。

「許すも何も、私がお前を追いつつと思つていても思つたか？ 正直な話、特待生の件は興味がない。私もお前に関わつてられるほど暇ではないからな」

オリヴィアが困っていると、アンジェリカは一言ぽつりとこぼした。

「王太子殿下にすり寄るあの女よりはマシか」

「あ、あの、何か？」

「いや、なんでもない」

アンジェリカがオリヴィアに小さく笑って見せた。

その姿は年相応にも見える。

普段はもっと覇気があり、そして激高しやすいイメージをオリヴィアは抱いていた。実際、アンジェリカは学園内で怒鳴り散らしたことが何度かある。

「特待生、お前に挨拶の話を教えたのは誰だ？ ああ、勘違いするなよ、含む所があるという意味ではない。周りが特待生であるお前に距離を置く中、お前を助けた奴が気になっただけだ。これは個人的な興味だよ」

男子は結婚相手を探すのに夢中で余裕がなく、女子からは嫌われている特待生。そんな彼女を助けた人物が素直に知りたいと言う。

オリヴィアは少し悩んだが、リオンの名前を口に出した。

リオンが自身の姉を紹介してくれた、と。

「バルトファルトの三男か。アレは変わり者だな。まあ、好感は持てる」

「知っているんですか？」

アンジェリカはクスクス笑っていた。

「お前、知らないのか？ 私たちの世代では間違いなく一番出世し

た奴だぞ。今後、あいつのように自力で独立できる奴が何人出てくるか……だが、人となりも悪くないなら、王太子殿下と話す機会を設けても良いな」

そう言つて微笑むアンジェリカを、オリヴィアは少し不思議そうに見ていた。

貴族の嗜み

ホルファート王国の貴族は元をたどれば冒険者だった。

そのため、冒険者というのは国が管理している立派な職業で、貴族たちも先祖に倣って一度は冒険者になる。

学園でも普通、上級クラスに関係なく全員が冒険者ギルドで冒険者登録を行い、先祖の苦勞を知るといふありがたい授業があった。

まあ、理由はともかく、金のない貴族の子弟にとって冒険者家業は小遣い稼ぎになる。学園でも人気の授業で、休暇や長期休暇に冒険者として金を稼ぐ生徒たちは多い。

親父も次兄も随分と冒険者で稼いだらしい。

その金が女子とのお茶会などの交際費に消えていくと思うと悲しい限りだ。

俺は金に困っていないが、それでもダンジョンと聞けばワクワクする。

乙女ゲーの世界で、限りなく興味をそそられる中の一つだろう。

その、はずだったのだ。

五月半ば。

一年生たちが冒険者となり、王都にあるダンジョンに挑もうとする日。俺は周囲を見て場違い感に悩まされていた。

「ダニエルもレイモンドも友達が困っているのに逃げ出しやがった。いや、俺も同じ状況なら逃げるけど。逃げるけども！」

一般的な冒険者の装備に身を包んでいる俺の隣には、これまた一般的な冒険者の装備を身につけたオリヴィアさんが立っていた。

俺に申し訳なさそうにしている。

「ご、ごめんなさい。アンジェリカさんがどうしても参加して欲しいと言っているので」

困っているオリヴィアさんを見る。

いや、この人に文句を言ってもどうにもならないのは分かっているのだ。

ダンジョンに挑む今日という日。

俺はとんでもなく高貴なグループに回されていた。

青い髪と瞳をした真面目そうな背の高いスマートな男は、どうやって身を守るのか分からないファッション性だけを追求した装備に身を包んでいる。

腰には剣一本だけを下げている。

攻略対象キャラで、真面目な前衛の剣士 いや、ゲーム的には

剣豪と言つべきだろう。ホルファート王国の剣聖の息子【クリス・ファイア・アークライト】。

宮廷貴族の家柄。剣一本で成り上がった伯爵家の嫡男だ。

対して、赤髪を逆立てたようなノースリーブ姿の筋肉質の男が槍を担いでいた。

お稽古の剣術よりも実践主義だと言う荒々しい男は入学前からダンジョンに挑み、数多くのモンスターを倒してきた男だ。

攻略対象キャラ。豪快な前衛で、実家は領主貴族の伯爵家だ。

ノースリーブだが、金持ちのボンボンである。

赤い髪に焼けた小麦色の肌はともお坊ちゃんには見えない。

名前は【グレッグ・フォウ・セバーク】だ。

クリスとは馬が合わないというゲーム設定だったが、途中で友情イベントがあったと思う。ゲームを攻略するには必要ではないが、友情イベントはこなしていた方が後は楽だった気がした。

【ユリウス・ラファ・ホルファート】

【ジルク・ファイア・マーモリア】

【ブラッド・フォウ・フィールド】

【クリス・ファイア・アークライト】

【グレッグ・フォウ・セバーク】

この五人が攻略対象キャラ　主人公の相手になる五人である。

ゲームでは、上から順番に黒、緑、紫、青、赤と覚えていたのが懐かしい。

本来なら、ここにもう一人「カイル」というエルフの美少年が加わる。カイルは主人公が購入することになる奴隷 専属の使用人だ。

本来なら身の回りの世話とか好感度を教えてくれる便利キャラで、戦闘では魔法を使ってサポートをしてくれる。

可愛い弟ポジションらしいが、俺は主人公の小間使いにしか感じなかった。

ちなみにホルファートでは、ミドルネームのラファが王族を示し、フィアが宮廷貴族の出身者で、フォウが領主貴族の出身である事を示している。

五人が揃い、その取り巻きの中でも腕の立つ奴らが周囲を固めている。

その中に俺とオリヴィアさんが混ざっている形だ。

一つは五人の興味が理由。

オリヴィアさんは特待生で、俺は実績を作った冒険者……学園側からすれば、俺にダンジョンで王太子殿下の護衛をさせたいのだから。

実家から連れてきた騎士や兵士を使うのは無粋とされるし、周囲

も実家の力を利用したと思う。だが、俺のように同年代で実績が飛び抜けた奴がいれば、ただ一緒に行動しただけとか理由が付くらしい。

よく分らないが、強い騎士や兵士を勝手に連れてきて貰っても困るので学生で問題を片付けているのだろう。

学園側の思惑や、アンジェリカさんの推挙など色々と重なってこのような結果になってしまった。

というか……今から入る場所は初級も初級だ。

ここまで護衛を揃えるなど過保護すぎる。

殿下もそれを気にしているのか少し嫌そうな顔をしていた。そう言えば、こういうのが嫌いだと主人公に語っていた気がする。

周囲を探せば、殿下の婚約者であるアンジェリカさんもこのグループにいた。こういった所は男女平等だ。

男女に関係なくダンジョンに入るのは決まっている。

人数的には三十人くらいの集団。

多い気はするが、今回はダンジョンを観光するような物だ。この人数でも問題ないだろう。

「それにしても、呼ばれた割には声もかからないな」

俺が周囲を見ると、オリヴィアさんが不安そうにしていた。

「こちらから声をかけるべきでしょうか？」

「どうかな？　出しゃばりと思われるだろうし、指示に従っておく方が良いかも」

本音で言うなら、この中の誰が主人公とくつつくのか気になるが、関わりたくないので距離を取っておきたかった。

教師が全員を前に説明を開始する。

「それでは、班を作ってください。今回はダンジョンの地下二階に到達したら戻ってきて貰います。それ以上先には進まないように」

班を作るとしても、三十人近くで移動する。

怪我をしてはいけない殿下たちを中央にして、俺たちは一番前を歩くグループになった。まあ、これは問題ない。

ただ、班分けの際に問題が起きる。

「身の程を知れと言っている！」

アンジェリカさんが怒気を孕んだ声は、ダンジョン内に響いた。

全員が振り返ると、そこにはマリエの前にアンジェリカさんが立っていた。

教師は若く、しかも公爵令嬢が相手とあってオロオロとしていた。

様子をつかがうと、どうやら班分けで揉めたらしい。

マリエは殿下の後ろに回る。

「アンジェリカ、もうそこまでにしておけ」

庇う殿下にアンジェリカさんも言い返すのだった。

「殿下、この者のわがままをお許しになるのですか？」

マリエは殿下の後ろでうつむいていた。殿下の袖を指でつまみ、可愛らしい仕草をしているが妙にイライラする。

「殿下、私……殿下と一緒に良いと思っただけです。迷惑なら断つていただいても構いません」

マリエにアンジェリカさんが噛みつくように怒声を浴びせた。

「図に乗るな！ お前と殿下とは身分が違う。今まで大目に見てきたが、お前がそのような態度なら」

アンジェリカさんはよく怒っているイメージがあった。

ソレはゲームでも同じだ。瞬間湯沸かし器、などと比喻されるようなキャラである。まあ、主人公のライバルである悪役令嬢だ。

短気で自分の美貌やら実家の権力を振りかざす痛い女をイメージされたのだろう。

だが、このシーン……庇われるのは本来なら俺の隣にいるオリヴ

「イアさんだ。オリヴィアさんの方は「ど、どうなっちゃうんですか！？」などと慌てているだけ。」

「……こっちは妙に可愛く見える。マリエとは大違いだ。」

「どうしてこうなったのか考えるが、やはり原因は一つしかない。」

「あのマリエって女、何かおかしくないか？」

「俺の言葉にオリヴィアさんが少し考える。」

「そ、そういえば、最近は私よりいじめが酷くなりましたね。周りが言うには貧乏な子爵家の娘だとか噂されていましたけど」

「子爵家は男爵家よりも規模が大きいが、家によつては借金やら爵位に見合った領地を持っていたのは過去の話で、現在は領地が小さいという例はいくつもある。」

「二人で話していると、周囲もアンジェリカさんに同調していた。」

「婚約者の前であそこまですり寄るとかあり得ないよね」

「あの子、他の男子とも仲良くしていたよね？」

「信じられない」

「周囲の反応から察するに、マリエという女は主人公の立場を奪ったように思えた。オリヴィアさんに話を聞こうとすると。」

「いい加減にしろ！」

「殿下が大声を上げると、周囲の生徒たちも口を閉じた。」

アンジェリカさんが驚いた顔をしている。

「で、殿下？」

殿下を庇うように前に出たのは、普段優しそうなジルクだった。アンジェリカさんの前に立ち、右手を横に出して殿下とマリエを庇う姿勢を見せていた。

「アンジェリカさん、あまり殿下を困らせないでいただきたいですね」

「困らせる？ 私が困らせているというのか？ 私は殿下のためを思っ
て」

その言葉に噛みつくのは、暇そうにしていたグレッグだった。

槍を担いで目を細めていた。

「そういう態度が迷惑だって言うんだよ。学園にまで外の関係を持ち込むな。見ていてイライラするぜ」

有力貴族の跡取りの言う言葉に、周囲が言い返せずにいると殿下が教師に話しかけていた。

「申し訳ない。俺たちはここにいるマリエと組む。後は適当に編成してくれ」

教師が慌てて何度も頷いていた。

「は、はい！」

啞然とするアンジェリカさんだが、皆が見ていない中でマリエだけがニヤリと笑みを浮かべているのを俺は見逃さなかった。

王都にあるダンジョンは、何というか……本当に廃鉱という感じだ。

広い通路には等間隔で木の柱や梁が用意されている。

時折、壁から出土する鉱石が出てくるのだが、それがダンジョンの宝でもあった。宝箱もいつの間にか置かれていたようだが、その原因は究明されていない。

きっとゲーム的な理由だ。

深く考えても意味がない。

オリヴィアさんが壁に埋まっていた鉱石を取り出している。

見つけた鉱石は鉄か何か。そもそも、精錬されたような鉄が出てくるのもおかしい話だ。

「えへへ、見つけちゃいました」

嬉しそうなオリヴィアさんだが、夢中になっている時に汗を手で拭ってしまったので鼻の頭に土が付いて汚れていた。

「おめでとう。こいつで百ディアは确实だな」

重い金属の塊を受け取り、俺は荷物入れに放り込む。

通貨単位は【ディア】と【デイル】。

一千デイルで、一ディアだ。

金貨や銀貨も存在しているが、お札や硬貨が存在しているのであまり見かけない。

時折宝箱から出てくる質の良い金貨は、細工も凝っており一枚で一千五百から二千ディアの価値はあったと聞いた。

オリヴィアさんが周囲を見た。

「どうした？」

「いえ、あの……どうしてダンジョンにはこうした現象が起きるのかな、って。宝箱もあると聞きますし、なんだか変ですよね」

そこに違和感を持ったら駄目な気もする。

何しろ、王国を支えてきた資材と資金の宝庫だ。

「不思議だね。よし、先に進もう」

「ま、待ってくださいよ！ 気にならないんですか、リオンさん？」

俺は溜息を吐く。

「別に」

オリヴィアさんが落ち込む。

「リオンさんが冷たい」

随分と打ち解けたが……残念なことに彼女の出自は平民だ。いずれ聖女として認められた時は、手の届かない存在になる。

そんな相手と結婚できないので、友人関係止まりだった。

本当に惜しい。

オリヴィアさんが貴族の娘なら告白しているところだ。本人の中心がとか、そんな甘い理由ではなく現実的に理想の相手だ。

本人は離島の田舎育ち。将来は実家に帰ろうと考えているらしく、俺の実家でも問題なく暮らしてくれそうだ。

本当に惜しい。

「落ち込んでいないでさっさと おっと、止まった方が良いか」

成り上がりの特待生。

他の班員と上手くやれるわけもなく、二人で先行させられている訳だがかえって動きやすい。

俺はオリヴィアさんを後ろに下げ、後ろ腰に下げた剣を抜く。剣

というか幅広の刀だ。

ルクシオンの奴が、日本人の魂なら刀が良いとか言い出した。使える物なら使ってみるというあいつなりの挑発に思えた。

……俺、別に侍の子孫でも剣道をやっていた訳でもないが、喜んで受け取った。

ただ、あいつが作成した日本刀はファンタジーの刀である。

似ているようで別物の気がする。

オリヴィアさんが後ろで震えていた。

「あれが……モンスター」

出てきたのはジャイアントアントだ。体長は七十センチから八十センチくらいの大きな蟻さんである。

だが、その大きな顎に噛みつかれると大変なことになる。

出てくる時は数も多く、ダンジョン内にはよく出現する。

ダンジョンの掃除屋とも言われており、斃れた冒険者などをどこかに運ぶという噂だ。

「こついう通路だとライフルも使えないから面倒なんだよな」

これでも田舎育ちで、親父には鍛えられてきた。

将来はダンジョンで稼がなければいけないだろうから、戦い方だけは教えておくと書いていた親父を思い出す。

きつと親父もダンジョンで苦労してきたのだろつ。

ジャイアントアントたちが俺たちを発見すると、次々に向かってくる。

数は五体。

まずは目の前の敵の首を切り落とす。

黒い煙を出して消えていくモンスターだが、気にせず次の相手に攻撃を仕掛ける。

ジャイアントアントは厄介な相手であるが、頭部と胴体などのつなぎ目は比較的もろい。

顎やら頭部は結構頑丈なため、下手に斬りかかると弾かれてしまう。

そのため、俺は弱点に斬りかかるようにしていた。

「はい、二体目！そして三体目、つと！」

持っていた剣で次々斬り裂いていく。

素早く横に回り込んで剣を振り下ろす作業を繰り返し、最後のジャイアントアントも首を切り落として無事に戦いは終了した。

ゲームではターン制で相手の攻撃を受けるが、現実では位置取りを上手く活用すれば攻撃を受けない。

ただ、ソレは相手にも言えることだ。

囲まれたら本当に対処に困る。というか死ぬ。

俺が剣を肩に担ぐとオリヴィアさんが近づいてきた。黒い煙を発生し、消えていくモンスターたちを見て少し怖がっている。

「リオンさん、強かったですね。あんなに怖そうなモンスターを次々に倒しちゃうなんて」

確かにジャイアントアントはその見た目から女子には嫌われている。

しかし、銃を使えば一発だ。当たれば、だが。

そして倒し方を知っていれば相手もしやすい。

「弱点とか知っているからね。オリヴィアさんもなれば簡単に倒せるよ」

困ったような顔をするオリヴィアさんを見つつ、俺は剣を鞘にしまつて先に進もうと提案するのだった。

「リオンさん、頼もしいですね」

「この辺は余裕だからね。それに雑魚しか出てこないし。あ、トラップには注意をしてね。よし、サクサク行こうか！」

オリヴィアさんが複雑な表情をしているのが気になった。

ユリウスたちがいるグループは、基本的に先行した班の後ろをついていく中盤の班だった。

後ろにも班が存在しており、彼らは前後をしつかり守られている。

ただ、入り組んで分かれ道もあるダンジョン内ではモンスターが飛び出してくることもあった。

罾の類いにしても時に危険なものがある。

地下へと進むダンジョン。

地下一階や二階と言って気を抜けば死ぬことだってあるのだ。

ユリウスは初めてのダンジョンと実戦に少し汗をかいていた。

隣に立つジルクは、ユリウスを守ろうと緊張している様子がうかがえる。

普段は嫌味を言うブラッドも口数が少なく、クリスも緊張からか剣の柄から手が離れていない。

グレッグはダンジョンになれているが、このような学園の遊びレベルの冒険など興味もないのか暇そうにしていた。

ユリウスは後ろにいる女性 マリエに気を使う。

「歩くペースは問題ないか？」

少し不器用な台詞にも、マリエは微笑んでくれた。

「大丈夫ですよ、殿下」

ユリウスにとってマリエは、王宮にはいないタイプの新鮮な印象を受ける女子だ。

苦労してきた話も聞いており、庇護欲をそそられている。

グレッグが舌打ちをしていた。

「マリエよりも王太子殿下の方が心配だぜ。マリエは強いが、王宮育ちは貧弱でいけないな」

その言葉にクリスが視線を細める。

「……粗暴な田舎者が良い度胸だ。だが、殿下に対する非礼は見逃せない」

すぐにジルクが止めに入る。

「クリス君も生真面目ですね。今の私たちは学生ですから気にする必要はありませんよ」

ゲラゲラとグレッグが笑った。

「これは失礼。だが、よくよく思い出してみれば領主貴族でも頭でっかちがいたな。俺が悪かった」

誰のことを言っているのはすぐに分かる。

ブラッドが額に青筋を浮かべていた。

眼鏡の位置を正し、そして苛立った声で嫌味を言う。

「脳筋はすぐに腕力で物事を考える。マリエ、あの手の男に嫁ぐと苦勞するぞ」

マリエが苦笑いをしていると、ブラッドが言い返してきた。その慌てている様子は、マリエの誤解を解こうとしているようだ。

「おい、嘘は止める！ マリエ、俺の所に来る女は苦勞なんかさせないぜ。嫌味ばかりのブラッドの嫁になる奴は、細かすぎる性格に疲れるだろうけどな」

二人が言い争いをしているのを、近くにいた護衛の班が聞いて気まずそうにしていた。

ユリウスたちを守る班も存在しており、その中にはアンジェリカの姿もある。

騒がしい集団。

しかし、グレッグがすぐに槍を両手に持って構えると空気が一変する。

「……おい、全員警戒しろ。ジャイアントアントだ」

全員が慌てて武器を手取る。

ダンジョン。特に通路では銃による同士討ちが怖い。

そのため、銃に頼ってはいけない事になっている。

護身用にジルクや女子が拳銃を持っているくらいで、男子は銃器の携帯を許されなかった。

グレッグが少し焦る。

「数は……六体だな。脇道から出てきやがる」

少し焦ったブラッドが苦々しい顔つきになっていた。

「先行した班は何をしていたんだ！」

クリスは黙って剣を抜いていた。

そして綺麗な構えを取る。

「脇道から来たのなら、先行する班は出会わなかったのでしょうか。それにしても、六体とは数が多い。殿下、お下がりください」

しかし、ユリウスは一度マリエに視線を向けると、一歩前に出て剣を手取る。

（ここで情けない姿など見せられるものか）

グレッグが口笛を吹く。

「いいね、殿下。それでこそ王族だ」

戦う姿勢を見せるユリウスに呆れつつも、ジルクも拳銃を構えた。ジルクは銃の扱いに長けている。

すると、後方にいたアンジェリカが。

「何をやっているのですか！ 殿下を守りなさい！」

周囲にはユリウスたちを守るため、六人組が二組存在していた。本来ならモンスターの相手は彼らの仕事だった。

だが、グレッグが怒鳴る。

「引っ込んでろ！」

髪と瞳と同じ赤い装飾の付いた槍を振り回し、グレッグは飛び出すと護衛の生徒たちを押しつけて叩き付けるように槍を振り下ろした。

押しつぶされるジャイアントアントが黒い煙に包まれると、そんなグレッグを挟み込むように二体が迫ってくる。

槍を持ち上げると、一体が斬撃により両断され、もう一体は炎に焼かれていた。

見れば、剣を構えたクリスの姿。

「無駄の多い動きですね」

その後ろでは杖を持っているブラッドの姿がそこにあつた。魔法を放ったのはブラッドである。

「やっぱり脳筋だな。お前がいなければ三体同時に倒せたのに」

直後、銃声が二発。

頭部を撃ち抜かれたジャイアントアント二体が、黒い煙に包まれて消えていくところだった。

ジルクの構えたりボルバー式の拳銃の銃口からは、白い煙が出ていた。

「気を抜きすぎですよ。殿下」

そうして残った最後の一体が向かう先は、ユリウスの所だった。

アンジェリカが叫ぶ。

「何をしているのです！ 早く殿下をお守りしなさい！」

叫ぶアンジェリカにジルクが言う。

「少し見ておくのが良いでしょうね。アンジェリカさん、殿下は弱くありませんよ」

狼狽するアンジェリカと違い、ジルクは落ち着いていた。

ユリウスは駆け出すと両刃で幅広の西洋剣を振り上げた。

「はっ！」

振り下ろされた一撃に、ジャイアントアントは頭部と胴体を斬り裂かれ、黒い煙を出して消えていくのだった。

ユリウスは頬を汗が伝うのを感じ、手で拭うと震えている事に気が付いた。

すると、後ろから駆けつけたマリエがユリウスの手を握る。

「殿下、大丈夫ですか？」

ユリウスは握られたきゃしゃな手のぬくもりに安堵する。

（ホツとする。これが恋なのだろうか？ いや、愛なのか？）

ユリウスには、戦おうとすると止めに入るアンジェリカよりもこうして戦い終わった後に心配してくれるマリエの方が嬉しかった。

アンジェリカが近づく。その時、マリエを押しつけるように追いやってしまう。

「殿下、タオルをお持ちしました」

しかし、ユリウスにはそんなアンジェリカが煩わしかった。

「……… 必要ない。それよりも先に進むぞ」

地下二階の入り口。

地下一階から階段を降りたら地下二階なのだが、到着すれば今回の授業はおしまいだ。

生徒が調子に乗って先に進まないように見張り役の教師が待つており、到着した俺とオリヴィアさんは用意された部屋で待つことになった。

俺は担いできた荷物を見て笑顔になる。

「流石は王都のダンジョンだ。先行させられた時は、貴族のボンボン共はくたばれと思ったけど大量に金属が手に入ったぞ」

鉄、銅、その他色々だが、精錬後のような金属が土から出てくるなど流石はファンタジー世界だ。ありがたくて涙が出てくる。

そして、その中には魔石と呼ばれる綺麗な結晶があった。

オリヴィアさんが結晶を手にとって見ていた。

「宝石みたいです。綺麗です。いったい何に使うんでしょうか？」

俺は手に入れた宝の山がいくらかで売れるのか計算しながら、魔石に関してのうんちくを語るのだった。

「えーと、これとこれで二百ディアになるから ああ、魔石？」

エネルギー資源だね。後は金属を鍛える時に釜に放り込むと良い感じに鍛えられるらしいよ。詳しくは知らないけどなんか凄い石だね。こっちは高値で売れるからどうでも良いけど」

全体で五百ディアは堅い。

先行して俺たちが手に入れたのだから、これは俺たちの物で良いだろう。金持ちのボンボンたちはどうせこの程度の宝には見向きもしない。

「これだけあれば二人で分けても茶会一回分に……ならないな。くそっ、もつと稼がないと」

前回購入した茶器などはあるが、茶葉とかお菓子を購入すれば百ディア、二百ディアなどすぐになくなってしまふ。

落ち込んでいると、オリヴィアさんが話しかけてくる。

どうにも意識が今後のことに向いてしまふので、対応がおざなりになっていた。

だからゲーム的な知識や設定を口を滑らせ話してしまふ。

「どうして魔石が出土するんでしょう？ まだ金属は埋まっているから納得するんですけど、魔石が出てくる鉱山なんてありませんし、出てくるのはダンジョンだけと聞いていますから気になりますね」

「あゝ、アレだよ。アレ。モンスターを倒すと魔力が放出されて土に溜まっていくの。それが魔石になるんだって」

「そうなんですか？ 初めて聞いたんですけど？ えっと、教科書にはまだ説明されていないって書いていましたよ」

「俺を信じろ。どこかで読んだ気がするから間違っていないはずだ。アレ？ そうなると、宝箱も魔力が溜まって形になった物なのかな？ 魔法というか、魔力って便利だよな」

今度のお茶会はもっと相手に合わせた物にするべきか？

そうなるとティーセットから購入しなおすべきになるが、今の未熟な俺では道具だけ凝った痛い状態にならないだろうか？

くそ、お茶とはどうしてこんなに奥深いのだ。

というか有名なティーセットが欲しい。

日本の戦国武将が茶器を買い集めた気持ちがいさ分かってきた。

この世界のお茶会は茶道に通じるものがあるとみた。

俺が真剣に考えていると、オリヴィアさんが俺の顔をのぞき込んでいた。

「……何？」

「リオンさん、物知りなんですね。私、驚いちゃいました」

物知り？ ソレは違う。

大体、第二の人生なのに学園の入学テストでは平均七十点台の中

の上という位置付けだ。

優秀な生徒なら他にもゴロゴロしている。

だが、褒められると嬉しいので喜んでおく。

俺は小さい人間なのだ。だが、そんな自分が嫌いではない。

「そ、そう？ 分からないところがあるなら教えてあげようか？」

そう言つと、オリヴィアさんが満面の笑みを浮かべる。

「はい、お願いします！」

まあ、結婚相手を探す合間に勉強を見るくらい問題ないだろう。

真主人公

ちよつと前の俺を殴りたい気分になった。

勉強くらい教えてやるよ、などとオリヴィアさんに大見栄を切った俺だが、彼女のレベルを確認していなかった。

だって、主人公なんてステータスのどれを伸ばすとか自由だし、勉強が出来ない雰囲気を出していたから脳筋タイプなのかと思ったら……。

「ここが分からないんです。魔法に関する物で、通常の呪文とは別に術式を用いた魔法は応用力もあって」

図書室での勉強会。

俺は冷や汗を流しながら、オリヴィアさんの知識量に驚きを隠せない。

そうだな。簡単に言うのなら、やや優秀な俺が学年でも上位争いをしている人に勉強を教えるくらい無謀だ。

というかオリヴィアさん頭が良い。

「う、うん、ソレはこういうことじゃないかな？」

今まで勉強してきた知識と、ゲーム知識でなんとか場を乗り切ろうと頑張る俺。

だが、頭の良いオリヴィアさんは俺の曖昧な話を聞いて何度か感心したように頷いている。

「そうですね！ 教科書が正しいわけじゃありませんし、やっぱり間違っていたんですね。私もなんとなくおかしいと思っていたんです。魔法を使用した感覚と、定説に違和感があつたんです」

どうしよう……この子、教科書の否定を始めた。

俺はこの子が極端にならないように軌道修正を図る。

「す、全てが間違いじゃないんだ。やっぱり教科書は大事だと思うよ」

「そうですね。二割くらい首をかしげなくなつたんですけど、裏を返せば八割は納得できたわけですし」

なんだろう、教科書を見ると随分と使い込まれている。もしかして、この子は既に教科書を読み終えたのだろうか？ 一学期のこの時期に？ まだ六月だぞ！

貴族の中には、教科書の内容が難しくて投げ出す奴もいるのに！？

俺だってテスト対策で勉強しているが、内容を理解しているとは言いがたい。そもそも、魔法に関しても評価は七十点台だ。

俺は早く時間が過ぎないか祈るような気持ちで勉強会を過ごしていた。

そして予定の時間が過ぎる。

「も、もうこんな時間だし終わるつか」

「本当だ。あつという間でしたね」

嬉しそうなオリヴィアさん。

俺は時間が過ぎるのが凄く遅く感じていた。

「えっと、今度の休日にもお願いして良いですか？」

上目遣いで頼まれると、男の性で「はい！」と返事をしなくなってしまう。しかし、こんな思いはあまりしたくない。

なんとか回避するために理由を探す俺は、この学園での重要課題を思い出した。そうだ、結婚だ！

「ご、ごめん、次の休みはお茶会の準備があるから」

オリヴィアさんが慌てて謝罪してくる。

「い、いえ、私がお願いしていることですから。そ、そうですね、リオンさんも忙しいですよね」

そうだった。俺は忙しかったのだ。

教科書やノートを抱きしめ、少し寂しそうにしているオリヴィアさんに悪い気もするが、当初の目的を忘れてはいけない。

ビジネスライクな関係を維持できる嫁を探すため、お茶会を開かなければ。

そもそも俺はクラスのカースト的に下層に位置している。

良い相手 性格も良く優しい女子は、カースト上位が必死に結婚を申し込んでいる。性格良く優しい女子はいても、そういう子は実家のことや今後のことも考えて出来るだけ上を目指すので俺たちに回ってこない。

ああ、なんて酷い世界。いや、元の世界も同じだったか？

オリヴィアさんが俺の目を見て微笑みながらお礼を言う。

「リオンさん、今日はありがとうございました」

その笑顔と瞳の輝きが、嘘を吐いてこの場を乗り切った俺の性根にはまぶしかった。この子、本気でお礼を言っている。

俺は恥ずかしさに悶えそうになった。

俺は目の前の女の子よりも長い人生を歩んできたはずなのに……。

男子寮の俺の部屋。

友人であるダニエルとレイモンドを部屋に招き、飲み物やらお菓子を食べていた。女子に出すようなお菓子ではなく、フライ物というか油っぽいお菓子だ。

炭酸飲料があるのを考えると、この世界は近世でも現代寄りに近い気がする。

思えば制服もそうだ。乙女ゲーだから当然か？

ダニエルがフライドポテトを食べながら。

「聞いたか？ 金持ち連中、もう二人は結婚確定だつて。しかも相手は俺たちにも優しくかったミリーとかジェシカだ。狙っていたのに」

落ち込むダニエルに対して、レイモンドは冷静な風を装っていた。

レイモンドはミリーのことが好きだったから仕方がない。

「僕たちの実家よりも良い条件があればそっちに行くのは当たり前さ。最初から無理だったんだ……そう、ミリーが幸せなら僕はそれでいい」

二人を呼んだのは落ち込んでいたためだ。

金持ちグループはあらゆるメリットを女子に提示し、是非とも結婚して欲しいと攻勢をかけていた。

俺たちがついている隙など与えられない。

周りの女子を見れば、それこそ優しい女性がいかにレアであるか分かる。更に上のグループは、そもそも結婚相手が決まっている。

王太子殿下のように婚約者がいるケースも多い。

ダニエルが炭酸飲料を一気飲みしていた。

「ちくしょう！ これでこの学年の希望はもうなくなった！ 後は酷い女子ばかりじゃないか！」

男子に対して見下してくる女子がとにかく多かった。

レイモンドも頷いている。

「今年の一年は運が悪いよね。王太子殿下を始め、名門貴族の跡取りが沢山いるのも悪いよ。比べられるこっちはたまったものじゃない」

とびきりの美形。家柄も良くお金持ちの男が沢山いれば、周りに向けられる視線は厳しい物になる。

比較対象のレベルが違いすぎて、俺たちカースト下位は女子を誘うことも難しかった。

家柄、立ち居振る舞い、財力、外見……その上、婚約者もいて余裕もあるから精神的なゆとりも違う。

「それよりもリオン、お前の方は上手くいつているのか？ 最近、あの特待生とずっと一緒じゃないか。結婚を諦めたのか？」

心配してくるダニエルに、俺は肩をすくめるのだった。

「まさか。ちゃんと招待状は出しているけど、女子から拒否されているだけだ」

レイモンドも口は悪いが俺を心配しているらしい。

「下手な同情心は身を滅ぼすよ。……特待生に入れ込んでいるから女子の反感を買ったんだ。距離を置いた方が良い」

三年生のルクル先輩にも同じようなことを言われた。

先輩たちの中には、女子との結婚が難しいので結構きつい条件を受け入れた例もある。例えば……亜人奴隷以外の愛人を認めること、だ。

普通クラスの騎士家出身男子の中に、好みを見つけた女子がよくやるらしい。跡取りを生んで貰う代わりに、その騎士家の愛人も支援するという屈辱的な契約。

女子は生活の支援をして貰いながら、好みの男性と結婚生活が送れる。まさに最高の環境だろう……女子にとっては、だが。

女子から言わせれば、跡取りを生んでやったのだからそれぐらい当たり前らしい。

そもそも政略結婚なので愛を求める方がおかしいとも言えた。

まあ、前世の方がマシだと思える環境なのは間違いない。

ダニエルが俺にたずねた。

「リオンの兄貴は確か普通クラスだよな？」

「そうだね」

兄貴も上級クラスに送り込みたかったが、そもそも大金を得たのは兄貴が入学した後なので無理だった。

今から編入させるなんて鬼のような真似は俺には出来ない。

「羨ましいよな。普通クラスはまともなんだろう？」

ダニエルが言いたいのは、結婚がそこまで難しくないという意味だ。

普通クラスの女子は本当に普通だ。

何しろ奴隷を買う余裕がない。

上級クラスの女子のように横暴では結婚できないため、割と対等な関係で結婚できるらしい。

「話を聞いた時にさ……」

「ん？」

「……俺は兄貴を殴りたくなったよ」

そもそも騎士家の女子というのは不遇だ。

理由は色々あるのだが、単純に言えば結婚相手である男子が少ない。

上級クラスの女子が普通クラスの男子と結婚が出来ても、普通クラスの女子が俺たち上級クラスの男子と結婚できないのも原因だ。

優秀な男子は上級クラスの女子が持つて行く。

オマケに普通クラスの男子は、地元に婚約者や恋人がいるケースも多い。普通クラスの女子は不遇だ。

そのため、個人として女子を見ると普通クラスの女子の方が優しく気立ても良く家庭的で……滅茶苦茶羨ましい。

まあ、俺たちよりはマシだ。時間的制約が学園の卒業までではないし、卒業してからでも結婚相手を探すことが出来る。

「俺も普通クラスが良かった。そうすれば、こんな苦労はしなかったのに」

泣きそうになると、レイモンドも同意する。

「僕らの結婚ってなんでこんなに厳しいんだろうね」

それは乙女ゲーの世界だからです、なんて答えたら二人はどう思うだろうか？ 三人で愚痴をこぼして憂さ晴らしをしていると、レイモンドが学園内の噂を話し出した。

「そう言えば、最近は王太子殿下の周りが騒がしいらしいよ」

俺はジュースを飲みながら「ふ〜ん」という態度で話を聞く。そもそも俺たちには雲の上の話だ。

興味はあるが、関係ない話。

レイモンドも暇つぶしとして話をしているだけで、あまり信憑性を重要視していなかった。

俺からすれば、強制イベントでも起きたかと思っただくらいだ。

ダニエルも話しに加わる。

「アレだろ？ 女子の……マリエだっけ？ あの子、女子の間で随分といじめられているらしいじゃないか」

王太子殿下にすり寄れば嫌われて当然だろう。

そう思っていたが、レイモンドが続きを話したら。

「その噂に関係しているんだけど、なんでもそのいじめの中心人物が公爵令嬢だったんだよね。それを王太子殿下が知って激怒したらしいよ」

俺は飲み物を嘔き出しそうになりむせて咳き込む。

「お、おい、大丈夫か？」

「リオン、何か知っているの？」

二人が心配し、そして俺が何か知っているのかと聞いてくるので「いや、気管に入ったただけだから」と言い訳しておいた。

俺は口元を拭きながら、冷や汗も拭う。

二人はテーブルの上を片付けてくれていた。

ただ、気になるのはレイモンドの話だ。俺がゲームで知っているイベントでは、王太子殿下が婚約者に激怒するのはもっと後の話である。

それに俺はオリヴィアさんと親しい。

彼女が攻略対象の男子と仲が良い様子は見たことがない。

いったい何がどうなっているというのか。

関わらないでおこうと思った。

モブはモブらしく遠巻きに眺めていれば良い。関係ない話だと思っていたのだが、どうにも雲行きが怪しい。

俺はすぐにオリヴィアさんと話をすることにした。

上級クラスの女子の知り合いなど彼女だけだ。

図書室に呼び出し話を聞く事になったのだが……。

「ごめんなさい。私も詳しいことは知らないんです。一時期、マリエさんに女子全員が冷たくなって、今は落ち着いているということしか分からなくて」

「そ、そうなんだ。あ、もう一つだけ良いかな？ マリエっていう女子と何か接点とかない？」

主人公がいる場所を奪った女。

実はこの世界はゲームとは関係なく、そもそも俺の方が勘違いをしている可能性も考えられる。

だ。
だ。

「……何度か会ったことがあります。入学式の数日後に私は図書館に来たんですけど、その時に話しかけられて」

俯き悲しそうな顔をしているオリヴィアさんの態度から、あまり話したくない話というのが分かった。

だが、俺は知りたかった。彼女の気持ち？ マリエという不気味な女の情報を知るためにはこれくらいする。

「どうしても知りたいんだ」

オリヴィアさんが顔を上げた。

「……リオンさんも、マリエさんみたいな人が好きなんですか？」

恥ずかしそうにしているところを見ると、色恋の話と勘違いしたらしい。

あいつと色恋？ 虫唾が走る。

俺が嫌そうな顔を見ると、逆にオリヴィアさんが驚く。

「え！？ 違うんですか？」

「俺、あいつの事が嫌いなんだよね」

「そ、そうですか」

オリヴィアさんは少し考え込み、マリエとの関係を話してくれた。

「図書室を覗こうと思って来たら、マリエさんがいて邪魔だから出て行つてと言われました。他にも、中庭で見かけた時があります。同じように邪魔者扱いを受けたので、何かしたのかと思って聞いたんです。そしたら、あんたみたいな女が嫌いって言われてしまいました」

苦笑いをしているオリヴィアさん。

マリエはオリヴィアさんが嫌い？

平民が貴族の学園に来るな、ではなく個人的にほとんど初対面の相手を嫌いと言つのも気になった。見る限り外面は良さそうな奴なのに。

俺が黙っていると、オリヴィアさんが困ったようにオロオロしていた。

ただ、二人で口を閉じていると声が聞こえてくる。

「こんなところで？」

「良いだろ。二人つきりだ」

なんとも甘い会話が聞こえてきた。

いったい誰がこんなところで羨ましい展開を繰り広げているのか
と思い、そのまま身を屈めた俺は相手を確認するために移動する。

「リオンさん、何をしているんですか！」

小声で注意をしてくるオリヴィアさんに、俺も小声で対応した。

「いや、気になるんだ。誰がくつついたとか俺たちにとっては必要
な情報だから。さて、いったい誰が……！？」

俺は思わずオリヴィアさんの口を塞ぐ。

俺も息を潜め、物音を立てないように細心の注意を払った。

そこには紫色の髪をした眼鏡の男子……ブラッドが、小柄で華奢
な金髪の女子と抱き合っていた。

そう言えば、ブラッドはよく図書室にいるキャラだった。

オリヴィアさんもマジマジと見ている。

しかも女子は マリエだった。

二人で腰を密着させ、腕を腰に回して抱きしめ合っている。まさ
か、図書室でこんな濃厚なキスシーンを見るとは思いもしなかった。

俺たち二人は、その場をゆっくりと離れて図書室から逃げ出した。

マリエ・フォウ・ラーファンは図書室から寮へと向かう途中だった。

ブラッドとの甘い時間を思い出し、唇を指でなでる。

「ふふ、本当に最高の世界よね。元の世界みたいに馬鹿な男が少ないし、女性の権利が正に認められる世界って最高」

夕日で校舎がオレンジ色に染まっている。

スキップしたい気持ちを抑えて女子寮へと戻る。

「ユリウスたちが味方になったら、私を馬鹿にしていた女子たちが悔しそうな顔をするし、もう最高。はあ、学園に入学して良かった」

この世界はマリエにとって理想の世界だろう。

何しろ、彼女は紛れもなく主人公がいるべき場所に存在していた。

校舎の廊下を曲がったところで、そこにはユリウスとジルクの姿があった。どうやらマリエを探していたらしい。

「マリエ、ここにいたのか」

二人が近づいてくる。

（この二人、いつも一緒にいるわよね。もしかしてそういう関係？昔の人って男色も普通だったって聞くし、それならそれでありかも）

内心で酷いことを考えながら、顔を作って姿勢を正す。

二人が　特にユリウスが求めている女子の理想を演じるマリエだった。

「どうされたんですか、殿下？」

ユリウスは少し呆れた風に注意をしてきた。

「殿下は止せ。ユリウスで良い。ジルクと話をしていたんだが、お前には専属の使用人がいなかったな？」

マリエは頷く。

それも、少し恥ずかしそうに、だ。

「は、はい。実家はその……金銭的に苦しい状況ですので、専属の使用人を用意するのは難しくて」

（両親が無駄遣いするからいけないのよ。出来れば金持ちの家に転生したかったわ）

実家への不満を隠し、健気な自分を演じるマリエにジルクが提案するのだった。

「それでしたら、殿下と私の方で購入代金を支払わせていただきますよ。マリエさんも学園で専属の使用人がいないのは寂しいでしょうから」

二人の申し出に内心でガッツポーズをするマリエは、お礼を言うのだった。

（これで避妊不要の愛人ゲット！ 持っていない女子が少ないから、結構気にしていたのよね。それにしても、女は公然と愛人を連れ回せるなんて狂っているわね。まあ、私は嬉しいからどうでも良いけど）

内心、二人が自分に愛人を与えるのが少し気になるマリエだったが、そういう世界なのだろうと納得しておくことにした。

「あ、ありがとうございます。でん……ユリウス、ジルク」

名前を呼ぶとユリウスが照れくさそうにしている表情を見て、裏もなさそうだとマリエは安心するのだった。

ジルクがマリエとユリウスを案内する。

「では、馬車の用意をさせて出かけましょうか。王都でも指折りの奴隷商館があるというのを聞いています。そちらに向かいましょう」

女子寮の広い部屋。

そこを使用できるのは伯爵家以上の家柄の娘たちだけだった。中でも王家に連なる者たちには、特別な部屋が用意される。

アンジェリカが使用している部屋はその一つだ。

部屋には取り巻きの一人である女子が来ていた。

「アンジェリカ様、あの子は許せません。あの子のために殿下は亜人の奴隷を買い与えたそうではありませんか。アンジェリカ様は持つことも許されないというのに」

窓の近くに立つアンジェリカは、女子から顔が見えないようにしていた。

悔しさで表情がゆがむ。

「……放っておけ。亜人の奴隷がどういう意味か理解しておられるのなら、あの者とはそれだけの関係と言うことだ」

「で、でも」

公爵令嬢のアンジェリカは、実家の規模を考えるとそれこそ亜人の奴隷を何十人と購入できる。

だが、それをしないのは、アンジェリカが公爵家の娘だからだ。何より、王太子殿下の婚約者という立場もあった。

王妃になろうという娘が、愛人を抱えているなど笑い話にもならない。

女子を部屋から退出させると、アンジェリカは近くにあった置物を両手で手に取って力任せに床へと叩き付けた。

「ふざけるなっ！ あんな……あんなどうでもいい娘にうつつを抜かして！ 私は 殿下のために 殿下のためだけに！」

荒れ狂うアンジェリカは、その外見から想像しやすく激情家でもあった。

少し前、マリエをいじめていた女子たちをユリウスたちが問い詰めた。女子たちは別に命令されたわけではないが、アンジェリカの名前を出してしまう。

同じグループに所属していたその女子たち。

彼女たちのには調子に乗っていたマリエをいじめて日頃の憂さ晴らしをしたかったのだろう。女子は大事にされる貴族社会なので、どうしても精神的に自制が利かない女子は存在する。

ただ、問い詰められると王太子殿下を前に怖がり、アンジェリカの名前を出してしまった。

それによってユリウスたちに問い詰められ、否定したが信じて貰えなかったのだ。

そこから学園内でのアンジェリカの立場というのが弱くなった。

今では、マリエに取り入ろうとする女子が増えつつある。

男子たちもその辺りに反応し、マリエに近づくグループがあった。

主にユリウスたちに近づきたい金持ちの次男やら三男の跡取りではない男子たちだ。

今までアンジェリカに反感を抱いていた女子たちの動きは特に顕著だ。

「私が指図した？ その証拠もないのに、あんな女の言い分だけを信じて……」

アンジェリカが悔しかったのは、ユリウスがマリエの言い分だけを信じたことだ。いじめをしていた女子たちの言葉だけを理由にアンジェリカはまるで悪人のように扱われた。

それがアンジェリカにはたまらなく悔しかった。

いじめをしていた女子たちも、このままでは自分が不利になると思ったのかアンジェリカの悪い噂を流して力を付けてきたグループに合流している。

それはいい。

アンジェリカもそんな小物に用はない。だが、今ではユリウスやマリエに近づくことさえ出来ない。

しかもそのユリウスに。

『お前とは婚約をしているが、学園では一生徒だ。干渉しないでくれ』

そう言われてしまった。

アンジェリカは涙を流し、その場に座り込む。

「私は……私は殿下のことが……殿下のために育てられてきたのに！ 殿下のためだけに！」

アンジェリカはユリウスを愛していた。

だが、ユリウスは違った。

ただの政略結婚としか思っていなかったのだ。

ユリウスの婚約者と決まってから、アンジェリカは喜んだ。ユリウスのために頑張ってきたつもりだったが、それは何一つ評価されなかった。

ユリウスが求めたのは、マリエのような家庭的で優しい女性だったのだ。

両手で顔を押さえ、アンジェリカは悔し涙を流すのだった。

「おい、愚弟いいい！」

休日朝。

男子寮に乗り込んできたのは、自慢の奴隷の肩に乗った次女だった。

自室で欠伸をする俺は、時計を見るとまだ朝の七時だと気が付いて再び横になる。

「寝るな！ あんた、いったいどういう事よ！ どういう事なのよ！？」

大騒ぎしている理由は知らないが、俺としては二度寝を楽しみたいところだ。

「悪いな、姉貴。昨日の授業、男子は格闘訓練だったんだ。疲れているから寝かせてくれよ」

女子は楽しくスポーツで、男子は走り込みに格闘術の訓練で泥まみれである。本当に戦争やモンスターとの戦いで命を落としてもおかしくない世界だから、訓練も非常に厳しい物になるのだ。

「寝ているんじゃないわよ！ 愚弟、あんた一年の詳しい情報を教えなさい。今すぐ！」

相当慌てているのか、次女は俺を無理矢理起こそうとする。

朝から筋肉質な猫耳奴隷に持ち上げられ、椅子に座らせられた俺は眠い目をこすりながら欠伸をした。

「一年の情報？ 俺よりも女の姉貴の方が詳しいだろ」

「変な噂が聞こえてきたから確認しに来たのよ。あんた、一応は上級クラスの生徒でしょ」

一応とは失礼な。

そんな扱いなら俺は普通クラスでのんびりしていたかった。

「情報？ ああ、そう言えばクラスのマドンナだったミリーとジェシカが結婚を決めたんだ。本当に良い子だったのに残念で仕方がないね」

「そんなどうでもいい話は良いのよ」

どうでもいい？ 俺たち男子にとっては涙ものの話だったというのに。

「マリエって女を知っているわね？」

俺がピクリと反応を示すと、次女が続きを話せと命令してくる。

思い出すのは濃厚なキスシーンだ。

「……王太子殿下のグループと仲が良いね」

「王太子殿下とだけ？」

「……名門貴族の男子とも仲が良い。良すぎるよね」

学園内でイチャイチャしていれば嫌でも噂は聞こえてくる。特に、噂になっているマリエならなおさらだ。

「公爵令嬢がいるわよね？ そっちの詳しい情報は？」

「俺が知ってると思うの？ 王太子殿下に怒られた程度の噂しか聞

いていないね」

考え込む次女は深刻そうな顔をしていた。

今度は俺の番だ。

「詳しい内容を知っているかな？ 公爵令嬢が指示を出してマリエをいじめたとか噂が広がっているんだけど」

「はあ？ あんた馬鹿じゃないの」

次女に馬鹿と言われて腹が立つ。朝から男子寮に駆け込んでくるお前はもつと憤みを持った方が良い。まあ、愛人を侍らせているので憤みなんてかけらもないだろうが。

「あれくらい身分が高いと、指示しなくても気に入られたくて周りが勝手に動くのよ。そもそも、本気で潰しにかかったら相手の女は生きていないんじゃないの？ 公爵家とか洒落にならない規模よ。男はこれだから駄目ね」

ヤレヤレという感じで俺を馬鹿にしてくる次女に聞く。

「公爵令嬢は関係ないと？」

「それとこれは別よ。自分のグループの子がやったんだから責任は取らないといけないの」

「理不尽じゃない？」

「そついうものなのよ」

乙女ゲーの世界も大変らしい。ゲームだと公爵令嬢が指示したように……なっていたかな？ もう十年も前の記憶だから、臆気にしか思い出せない。

次女は俺の顔を見ると、真剣な表情をしていた。

「二年も三年も大慌てよ。よりにもよって王太子殿下の周りで変な波風を立てないで欲しいわよね。こっちにも予定があるのに。あんた、もう少し情報を集めるとか真面目にしてよね。それから、私にちゃんと報告するように」

この女、一体俺をなんだと思っているのだろうか？ 俺はお前の駒じゃない。まあ、気になるので調べるけども。

次女も暇である。

「あんたこれがどういう意味か理解できているのよね？」

「女子は大変だね」

「馬鹿、大馬鹿！ 愚弟！」

朝から五月蠅い次女を前に耳を押さえていると、次女は語り出す。

「王太子殿下は何もなければこのまま王位に就くのよ！ ここで気に入られたら、この先安泰って分かっているの？ 逆を言えば嫌われたら終わりだからね！」

辺境の男爵家には関わりのない話だ。

いや、都会に住みたい次女には大きく関わってくる話だった。下手な相手と結婚して、そいつが王太子殿下の反感を買えば将来の出世など望めない。

「俺は結婚できて無事に卒業できればソレでいいや」

「本当に男って奴は！」

次女が荒れているが、俺としては王太子殿下の周辺には関わりたいになりたくないというのが本音だった。

何しろ、これから国は大きく荒れることになるのだから。

ゲーム的に言えば、だ。まだ確定ではない。

「とにかく、あんたは関わっていないのよね？　なら、私にとってはマイナスもないけどプラスもないわね」

次女は俺が下手に関わって家族に累が及ぶのを警戒しているらしい。

「向こうも辺境の男爵家なんて眼中にないって」

ただ、気になることがあるのは事実だ。

あのマリエという女が、これから何をしようとしているのか気になる。

次女が俺に注意してくる。

「一学期の終わりには学年別のパーティーがあるわ。あんた、下手なことをして私に恥をかかせないでよね。まったく、これじゃあ男もまた選び直さないと」

忙しい次女が部屋を出て行こうとする。

「あ、それと、あんたは相手が見つかったのかしら？」

ニヤニヤしている次女を見ているとイライラする。

こんな次女でも、結婚したいと申し込む男子が後を絶たないらしい。選り取り見取りとは羨ましい限りだ。

「見つかったら苦労なんかしないっての」

「でしょうね。あんたはちょっと目立つただけで魅力なんてないし。もう少し男を磨いたら？」

俺は鼻で笑う。

「その魅力もない男の金で奴隷を買って貰えた気分はどうだ？ 聞かせてくれよ、お姉様」

すると、次女は「くたばれ、愚弟！」と吐き捨てて部屋を出て行った。

一人になった俺は椅子から立ち上がると背伸びをした。

部屋で置物を装っていたルクシオンが浮かび上がる。

『朝から賑やかなことです』

「一学期が終わるのか……パーティーとか流石貴族、って言えば良いのかな？ よく分からないや」

乙女ゲーの世界。

学園の一年の行事は日本の学校をモデルにしているのが分かる。

まあ、日本人向けのゲームだし、その方が馴染みもあるから仕方がないのだが……。

「一学期……友達とダンジョンに入って、お茶会をしていたら終わった」

『成果がゼロでも、マスターにとっては有意義な時間を過ごしましたね。基本、マスターは怠け者ですから。動いている分だけマシです』

「お前、俺に恨みでもあるの？」

『新人類は嫌いですから、そういう意味ではマスターも嫌いです』

「その俺にこき使われるとか悲しいAIだな。一生こき使ってやるから覚悟しろよ」

『楽しみなことです。それにしても、本当に慌ただしい学園生活ですね』

日々の授業とは別に、ダンジョンに入って小遣い稼ぎ。

その金を元手にお茶会を開いて女子を招待しては、失敗を重ねていたら終わってしまった。

本当にあつという間だった。

「……なあ、情報とか集められるか？」

ルクシオンは基本的に忠実だ。

『公爵令嬢の周辺を、でしょうか？ 可能ではありますが、スリーサイズなどの情報は調べても教えませんよ』

「……教えてよ」

『お断りします』

「そうかい。なら、姉貴の話が本当か調べてくれるか？」

『噂の確証が欲しいと？ マスターにどんな関係があるのですか？』

「ただの好奇心だ」

『野次馬根性ですか。度し難いことです。では、噂の確認に向かいましょう』

そう言ってルクシオンはボディーに周囲の風景を写し、溶け込むとそのまま部屋を出て行って情報収集に向かうのだった。

あいつ、何でも出来るな。

白い手袋

一学期も残すところあと僅か。

学年別のパーティーが開かれるのが恒例行事となっているのだが、学園内の施設で開かれたパーティーは豪華だった。

テーブルに並んだ料理の質や量に言葉も出ない。男子は学生服で参加しているが、女子はほとんどがドレスを着用していた。

隣に亜人の使用人を立たせ、着飾った女子たちに鼻の下を伸ばす男子たち。

俺の視線も女子の胸元をオートでロックオンしてしまうので、視線を動かすのも苦勞する。

咳払いをして、俺は真面目な顔で。

「今の胸はFカップ？　じゃなかった、凄い料理だね」

テーブルに視線を戻すと、ダニエルが肉料理を皿に大盛りで乗せて食べていた。レイモンドはソレを見て呆れている。

「こんな大きなパーティーは初めてだ。学園は凄いな」

「ダニエル、口に物を入れて喋るなよ。これだけの規模のパーティーを三箇所も学年別で開いていると思うと、王都はやっぱり凄いよね。地方の貧乏男爵家とは大違いだ」

前にルクシオンが言っていた。

王都の実力を地方に見せつけるために学園に通わせているのだと確かに、これだけのパーティーを開ける時点で財力が違いすぎる。

実家で甘やかされて育ってきた貴族も、これだけ見せつけられれば思うところの一つや二つもあるだろう。

周囲には同じ境遇の男子たち。

今日は普通クラスの生徒たちも参加しており、パーティーの参加者は非常に多い。

ダニエルが周囲を見渡していた。

「普通クラスの女子もドレスが多いな。制服で参加している女子が少なすぎるぜ」

レイモンドは眼鏡を押し上げている。

視線の先にはレイモンド好みのスレンダーな女子がいた。

こいつはムツツリだ。

「ドレスだって値段は上から下まで幅広いからね。二千ディアもあれば一着用意できるらしいよ」

一着なんと二十万円！ 円換算すれば、だが。

まあ、高いのか安いのか分からないが、最低価格二十万は笑うしかない。

そんな中、今話題の女子であるマリエが制服姿で登場する。周りではザワザワと生徒たちが五月蠅く話をしていた。

この状況では、制服姿で参加している特待生のオリヴィアさんがまったく目立たない。

それにしても、子爵家の娘ならドレスくらい用意できそうなものなのだが……そう思っていると、マリエは殿下たちと合流していた。カースト的には最上位の殿下たちのグループで、楽しそうにしている。

それよりも、だ。

モブである俺たち男子には、このパーティーというのはチャンスでもあった。先輩たちからの情報では、こういう時にカップルが成立する場合があるらしい。

「さて、二人とも準備は良いか？」

俺が二人に声をかけると、ダニエルが皿を置いた。

「ああ、腹ごしらえは十分だ」

レイモンドも眼鏡の位置を正す。

「僕たちも頑張らないとね」

三人で早速行動を開始する。

とにかく女子に声をかけて回るのだ。

こういう雰囲気なら、もしかしたら条件面を下げて結婚してくれる女子もいるかも知れない。この際、相手に愛人がいても良いように思えてきた。

「むっ！ あそこに女子三人組を発見！ 早速アタックをかけよう」

他の男子たちも動いている中、俺たちも女子のところへと向かうのだった。

だ
が
。

「はあ？ 鏡を見て出直してきなさいよ」

「地方の男爵家？ 田舎者はお呼びじゃないわ」

「芋は芋らしく、芋女にでも声をかけなさいよ。こっちは最低でも子爵家狙いな。しかも辺境とか……論外よ」

「嫌よね、結婚に必死な男子って。底が浅いのが丸わかりよ」

「もつと余裕がないと男は駄目よね」

「王太子殿下とは大違いよね」

女子には軽くあしらわれ、彼らの専用使用人 愛人たちには見下された。彼らの主人は女子であり俺たちではない。

それに、女子の奴隷を闇討ちするとこれでもかと厳しい調査が待っている。

自分たちは攻撃されない安全な立ち位置だと分かっており、こうした態度を取るのだ。

「あ、あの、話だけでも」

女子の一人が顎で使用人に指示を出した。

すると、筋肉だるまみたいな亜人が俺たちを突き飛ばす。

三人で転がると、周囲の視線を集め女子には笑われ男子たちには笑われるか同情されるかという視線を向けられる。

「出直さない。いえ、次の人生があるのならもつとマシな男に生まれるくらい願わないと駄目かもね」

周囲の女子や奴隷たちが俺たちを見て笑っていた。

パーティー会場の外。

「くそっ！ 調子に乗りやがって！」

怒気を孕んだ声を出しているのはダニエルだ。

ベンチに腰掛け膝を抱えているレイモンドは、夜空を見上げていた。

「人生をやり直せって……そこまで言うのか」

近くの建物からは楽しそうなパーティー会場の音楽やら笑い声が聞こえてくる。

会場内の雰囲気になんか耐えきれず、そのまま逃げよう外に出た俺たち。その様子を見ていた女子たちが笑っていた。

笑っていたのは上級クラスの女子や奴隷たちだ。

普通クラスの女子たちは哀れんだ目を向けているか、視線を合わせないようにしていた。

惨めだ。

「……なんか、もう嫌になってきた」

俺の言葉にダニエルが何か言おうとして、口を閉じてうつむく。

レイモンドも黙ったままだ。

野郎三人でベンチに座り、ボンヤリと空を見上げた。

「なんか女が気持ち悪く感じてきた」

ダニエルの言葉にレイモンドも同意する。

「だよな。男は卒業までに結婚できないと世間の目が冷たいから結婚を急ぐのに。時間的に余裕のある女子とは条件が違いすぎるよ」

別に学園の女子全員が酷いわけではないが、酷い女子の割合が多

すぎるのだ。

そのため、学園内で生活していれば嫌な思いをする男子が増える。

俺は嫌なことを思い出した。

ルクル先輩が言っていたのだが。

「学園で女が嫌になって、そのまま男に走る男子がいるらしいけど……入学前は笑っていたけどさ。今は笑えないよね」

ダニエルもレイモンドも頷いていた。

学園で女子が嫌になり、男に走る男子が出てくる。

笑えないのは女子の中に転生前の妹　BLを好む女子が普通に存在していることだろう。救えない世界だ。

学園に入学　女子の酷さに女性嫌いに　男性に走る　腐女子大歓迎。

こうしたサイクルが出来ているのだ。

まさに腐のスパイラル……語呂が良いので言ってみただけだ。まあ、毎年このような悲しい出来事が繰り返されていると思えば、腐の連鎖とも言えなくはない。いや、言えないか？

無言のまま時間だけが過ぎていく。

すると、気が付かない内に音楽が聞こえなくなってきた。

パーティー会場では生演奏が行われていたはずだ。懐中時計を取り出してみれば、パーティーが終わる時間ではない。

休憩とも思ったが、よく耳を澄ませば会場から笑い声が聞こえなかった。

時折誰かの叫ぶような声が聞こえてくる。

「なあ、様子がおかしくないか？」

俺の言葉にレイモンドが会場に視線を向けた。

「そう言えば、なんだか変に騒がしいような」

ダニエルは立ち上がる。

「様子を見てくるか？ 窓から覗けば中に入る必要もないし」

レイモンドが止めた。

「これ以上恥を重ねないでよ。見つかったら笑いものだよ。でも、確かに気になるよね」

三人で興味を示すが、今更会場に戻れないという話をしていると外に女子が一人出てきた。

周囲を見て、こちらに気が付くと走ってくる。

制服姿の女子は、オリヴィアさんだった。

「リオンさん！ 大変なんです！」

パーティー会場に戻ると、場は静まりかえっていた。

いや、壁際による生徒たちは静かに静観していたが、会場の中央で騒いでいる集団は違った。

オリヴィアさんに事情を聞く。

「いったい何があったの？」

「最初は軽い言い争いだったんです。けど……」

中央にいるのはマリエを囲む五人の男子たちだった。囲まれている男子の中には、金髪碧眼のエルフの少年【カイル】の姿も見える。

七人を前にして、アンジェリカさんが声を張り上げていた。

悲痛な叫び声に聞こえた。

「どうして私の話を聞いていただけないのですか！ 私は 私は 殿下のために！」

震える声に対して殿下はどこまでも冷たかった。

「お前の言葉は聞くに堪えない。それだけの話だ」

「待ってください。その者の性根を知ってどうして受け入れられるのですか！」

流れは分からないが、アンジェリカさんが必死に何かを訴えているのが分かった。

オリヴィアさんを見ると、先ほどの続きを話してくれた。

「えっと、マリエさんが王太子殿下とは別の男性と手を繋いでいるのを見て、アンジェリカさんが怒ってしまっただけ。そしたら、王太子殿下はその程度で騒ぐこともない」と

自分の女に他の男がいても許せる。

そんな大きな男が殿下だ。

いや、俺なら絶対に嫌だけど、殿下はソレでOKらしい。

制服姿のマリエは殿下の後ろに隠れている。

庇護欲をそそるような態度で、逆にアンジェリカさんは赤いドレスを身にまといしっかり化粧もして　輝いて見えていた。

対比というのだろうか？

アンジェリカさんとマリエは真逆に見えた。

マリエの周囲には男子と美少年の奴隷がいるのに、アンジェリカさんの周りには誰もいない。

ブラッドが前に出た。

「レッドグレイブ家の娘もこうなると惨めだな。見ろ、お前に賛成する奴はこの場にはいないぞ」

アンジェリカさんが周囲を見渡すと、これまで取り巻きとして甘い汁を吸っていた生徒たちが顔をそらした。

敵対ではないが、反感を持っていた生徒たちがニヤニヤと彼女を見ている。

「誰に口をきいている？ 私は公爵家 レッドグレイブ家の娘だぞ。辺境伯風情が調子に乗るな。お前たち、その女が何をしたか知っているのか？ お前たち全員に」

全員に手を出した？

だが、男子たちは慌てた様子がない。

「それくらい知っている」

青髪のクリスがそう言うと、アンジェリカさんが驚いていた。

「な！？」

クリスは怯えているマリエを見て一瞬微笑んだ気がした。いつもは無表情で剣を振るっているような男がそうした顔を見ると、周囲の女子たちが頬を染めている。

やはり顔か？ 顔なのか？

「私は彼女に救われたんだ。悩みを聞いてくれた。そして、彼女を守りたいと思ったんだ」

そんな告白を学年の全生徒が見ている中、平気で出来るメンタルは賞賛に値すると思った。

続いて出てくるのはグレッグだ。

「お前は屁理屈が多いんだよ。素直にそんなことが関係ないくらい好きだって言えば良いだろうが」

ジルクが口元に手を持って行きニコニコしている。

「そうですね。素敵な女性です。けれど、マリエさんを一番愛しているのは私だと思いますけどね」

言葉が出ないアンジェリカさんは、殿下の顔を見るのだった。

殿下は少しムツとした表情をしている。

「ジルク、例えお前でもそれは違うと思うぞ。マリエを一番愛しているのはこの俺だ」

その言葉に黙っていた女子たちが黄色い声援を上げた。

「今の聞いた!？」

「私も言われてみたい!」

「羨ましいわ。それにひきかえ、公爵令嬢は無様よね」

クスクスと笑われるアンジェリカさん。

彼女は俯いて手を握りしめている。

「……殿下は在学中のお遊びで終わらせるつもりはないと言つことですか？」

アンジェリカさんの質問に殿下は視線を落とした。

「俺にとってかけがえのない女性は一人だけだ。アンジェリカ、学園に入学する前なら、お前のことは嫌いではなかった。だが、マリエを傷つけるようなら容赦はしない」

周囲の女子たちが笑っていた。

「聞いた？ 公爵令嬢様もこれで終わりよね」

「これってもう婚約破棄と同じじゃないの？」

「私、あの子のことが嫌いだったのよね」

相手が弱くなると言いたい放題である。

まあ、気持ちは分からないでもないのだが……。

「ハーレムを見る女子の気持ちってこんな感じかな？ なんかむず痒いというか、こういう場面は痛々しく見える」

「どうしました、リオンさん？」

隣で首をかしげているオリヴィアさん。

ダニエルとレイモンドはアンジェリカさんが上げた顔を見て驚いている。

「お、おい、やばくないか？」

「なんか今にも凶行に及びそうな顔をしているね」

何か覚悟を決めたような、諦めたような無表情。目には今まで宿っていた光はなく、暗い何かが見える気がする。

アンジェリカさんは何かをマリエに投げつけた。

「へ？」

マリエが呆気にとられていると、投げられた何かはマリエに当たった後に床に落ちた。それは白い手袋だった。

「拾え、売婦。殿下たちを誑かした魔女め」

それは決闘の申し込みだった。

この場合、手袋を拾えば決闘を受ける合図になる。

「そう言えばそんな設定もあつたな。決闘イベントか」

などと呟いていると、レイモンドが慌て始めた。

「また訳の分からないことを言って！ お前、この決闘の意味を分かっているのかよ！」

公爵令嬢が子爵家の娘に決闘を申し込んだ。

形の上では、だが。

「代理人を立てるんだっただけかな？」

決闘をする時、女子は男子を代理人に出来る。だが、男子に代理人を立てる権利はなかった。

ゲームでは公爵令嬢に決闘を申し込まれた主人公の代わりに、仲の良い攻略キャラが引き受けるのだが　このルートではもしかして。

先ほどのやり取りから嫌な予感はしていた。

「……アンジェリカ、俺を失望させたな」

眉間にしわを寄せ、侮辱した視線を婚約者に向ける殿下は怒りが頂点に達しているように見えた。

「マリエ、拾え。大丈夫だ。お前には俺が付いている。お前の代理人には俺になる」

その言葉に続いたのはジルクたちだ。

「殿下ばかりに良い格好はさせておけませんね。学園のルールでは女子の代理人である男子が一人とは限りません。私も立候補をしましょう」

グレッグが手のひらに拳を打ち付ける。

「面白いから俺も参加する。誰でも良いからかかって来いよ！」

眼鏡を外し、ブラッドが忌々しそうにしていた。

「売婦とは聞き捨てなりませんね。訂正していただきたいが、決闘後に謝罪もしていただかないとね。当然僕も参加します」

クリスは腕を組む。

「剣の腕には自信がある。マリエの剣として戦って見せよう」

マリエが指で涙を拭う。

「みんな……私、怖いけど、みんながいれば安心だね。私、この決闘を受けるよ。アンジェリカさん、私はみんなと戦います」

そんな主人にカイルが呆れていた。少し皮肉屋な所がある少年は、美形とあってその仕草が様になっている。

「本当にお馬鹿なご主人様ですね。僕がいるのを忘れていませんか？ 応援くらい出来ますよ」

マリエが笑顔になっていた。

「ありがとう、カイル」

思っていたとおりだ。

「これ、逆ハーレムルートだ」

「またリオンが何か言っていやがる。それはそうと、こうなると公爵令嬢様はどうするんだろうな。あの五人を相手にする奴なんかいるのかよ」

ダニエルの疑問にレイモンドも同意していた。

「殿下は普通に成績上位だし、他もみんな凄い成績だからね。五人を相手に戦えそうな男子なんてこの場にはいないよ。第一、次期王国最強剣士の筆頭候補のクリスが相手だよ。敵うわけがないよ」

ソレが分かっているから。いや、戦うことを嫌がっている男子が大半だった。殿下と戦うなんて普通の男子なら拒否する。

これは練習試合などではなく、決闘なのだ。

今までアンジェリカさんの取り巻きをしていた男子も関わりたくない態度を取っていた。

アンジェリカさんが周囲に視線を向けると、男子たちが一斉に視線をそらした。

グレッグが周囲を煽る。

「おい、誰かこいつを助けてやろうって思う奇特な奴はいないのか？ 取り巻きもいただろうに、ここまで人徳がないと同情したくなるぜ。まあ、しないけどな。……決闘を申し込んだんだ。代理人が用意できなくても逃げるんじゃないぞ」

アンジェリカさんを笑う声がパーティー会場を満たしていた。

誰もが彼女を助けない。

学園内の決闘ルールでは、確か外から代理人を連れてくることを禁止していた。正確には子供の決闘に大人が出てくるのは駄目だね、的な暗黙のルールがある。

ゲームではソレを破り、更に負けてしまつて恥の上塗りをしてしまつのがアンジェリカさんだ。

ただ。

「ねえ、あの女がどんな無様を晒すのか賭けない？」

「実家に泣きついて終わりよ。こんな決闘、認められるわけがないわ。だって、絶対に代理人なんて見つからないもの」

「あいつ自身が出てくるかもよ。そうなったら、ボコボコにして欲しいわ」

周囲の女子たちの反応が冷たい。冷たすぎる。

入学時はあれだけアンジェリカさんの前では大人しかったのに、立場が変わればここまで強気になれるのか。

相手が公爵令嬢とか関係ない態度は……きっと、今回の失態で婚約を破棄され、彼女の人生が終わったと思っっているのかも知れない。ゲームでは田舎の醜男に押しつけられた結末だったか？

気丈に振る舞うアンジェリカさんは、周囲を見渡し焦っているようにも見えた。

俺と視線が合う。

激情家で後先考えないところがあるアンジェリカさんは、目に見えて狼狽えていた。藁にもすがる気持ちというのか、とにかく助けを求める目をしていた。

しかし、俺から視線をそらして俯き齒を食いしばる。

「た、例え誰かに代理人になつて貰わなくとも……」

グレッグが鼻で笑っていた。

「どうした？ さっきの威勢はどこにいったんだ？」

周囲はアンジェリカさんに酷く冷たい。

中でも一番冷たいのは殿下だろう。一応、元婚約者のはずなのに。

「アンジェリカ、覚悟は出来ているんだろうな？ 今更なかった事には出来ないぞ」

本当に……何故だろう。

放っておけなかった。

一歩前に出ると、制服の袖をオリヴィアさんが指でつまんだ。

「あ、あの……どうするつもりなんですか？」

不安そうな彼女の顔を見て思うのは、どうしてこの子がここにいるのか。そして、オリヴィアさんがいる場所に、どうしてマリエと言っ女がいるのか、だ。

……答えは出ている。

ダニエルが俺を止めに入る。

「馬鹿。なんで関わろうとするんだよ。関わったら駄目な奴だろうが」

レイモンドも同じだ。

「こんな決闘、戦う前から勝負なんか決まっているようなものだよ。それに、勝っても負けても代理人だってただじゃすまない。相手は殿下だよ？」

三人が止めに入るのだが、俺はニヤリと笑う。

「俺さあ……あいつら嫌いなんだよね」

嘲笑されるアンジェリカさんと親しいわけではない。同情する気持ちがないとは言わない。だが、一番の理由は俺の気持ちだ。

人をかき分け前に出ると俺に視線が集まる。

「はい、はい！俺が決闘の代理人に立候補します！」

軽いノリで手を上げながら決闘の代理人を名乗り出たが、周りの「なんだこいつ、空気を読めよ」的な視線に耐えているとグレッグ

が俺の顔を見る。

「お前、いったい誰だよ？」

本当に知らないらしい。

モブには辛い現実という奴だ。

ブラッドが眼鏡を押し上げ、俺を値踏みするように見ていた。

「確か入学前に冒険者として成功した奴がいたな。独立して男爵になる予定だと聞いたが、お前のことか？」

明らかに下に見ている発言だった。

まあ、俺の成績やら立場を考えれば、眼中にないのだろう。

俺は無視して話を続ける。

「あの、立候補をしたんで認めて欲しいんですけど？ アンジェリカさん、ほら、はやく認めないと」

アンジェリカさんが困っている。

「え、あ……」

「ほら、認める。それだけ言えば万事解決ですって」
「み、認め……る」

俺は殿下たち マリエに振り返った。

「と、言うわけでリオン・フォウ・バルトファルトが決闘代理人を引き受けました。そちらは殿下たち五人で間違いないですよ？ 決闘方法の確認もしたいんですけど、その前に何を賭けるんです？」

マリエが啞然として俺を見ていた。

この、俺という存在が関わってくると全く思っていない様子。ここ最近、ルクシオンに情報を集めさせていたが、間違いない。

こいつ、俺と同じ転生者だ。

しかも、この乙女ゲー世界を知っている人間だ。前世も女だったのだろうか？ 俺のように乙女ゲーをやらされた男という可能性もある。いや、男でも乙女ゲーが好きとかそういうタイプもあり得るのか？

俺はアンジェリカさんに振り返った。

「因みにアンジェリカさんの決闘を申し込んだ理由は何ですか？ そこ、ハッキリさせて貰わないと困るんですよ」

アンジェリカさんも周囲も啞然としていた。俺のような軽いノリで話を進めるのが信じられないという顔だった。

だが、気持ちを切り替えたのか自分の希望を述べる。

「……殿下に近づくな。私の望みはそれだけだ」

周囲からひそひそと声が聞こえてきた。

「聞いた？」

「嫌だ、もしかして嫉妬？」

「本当に醜いわよね。魅力で振り向かせられないから力尽くたって」

アンジェリカさんが俯き齒を食いしばる。

「で、決闘なのでそちらの希望も聞きたいんですけど」

マリエの方に向き直り問うと、殿下が俺の視線を遮るように前に出た。

「そこまでして俺たちを引き裂きたいのか。どっちが魔女が分かったものではないな。アンジェリカ、例えば俺たちの仲を引き裂いたとしても俺の気持ちがお前に戻ることはない！」

アンジェリカさんが呟く。

「分かっています。分かっていますが、その者を引き離すのが私が出来る最後の……」

俺は手を叩く。

「いや、そういうのは後でお願いします。ほら、そっちの条件を早く出してくださいよ。はやく」

ムツとするマリエ陣営だが、俺は気にしない。

マリエが前に出てアンジェリカに対する条件を述べた。

「わ、私が勝ったら、もうこんな酷いことは止めてください。実家

の権力で言うことを聞かせるような真似は……良くないと思います」

どこかで聞いた台詞だと思えば、これは主人公の台詞だったように思う。こいつ、主人公の台詞をパクりやがった。

「じゃあ、こつちが勝ったら殿下とあんたは別れる。こつちが負けたら、もう関わらないって感じで良いよね？　なら、次は決闘方法の確認ね。闘技場を借りた鎧での決闘はどうか？　一般的な決闘方法だと思っただけ」

決闘自体数は多くはないが、毎年起きている。決闘理由はたいしたことなくても、男子にとっては見せ場であるので張り切る者が多い。

その際、鎧　パワードスーツ的な何か、を使用するのが通例だ。鎧を持っていると言うことはそれだけで財力の証明だ。

そして、自分は戦えると周囲に知らしめ、勝てば名誉まで得られる。

なので決闘の形式は鎧を使用することが多い。

クリスが鋭い視線を向けてきた。

「貴様、私たちに勝つつもりか？　剣術の授業では目立った腕を持つていなかったように思うが？」

俺のを見ていたらしい。いや、際だった腕を持っている生徒を覚えていて、俺は名前も知らないので木っ端扱いを受けているだけか？

「はあ？　なんで俺が負けると決めつけるわけ？」

ちよつと煽つてみると、周囲が爆笑の渦に包まれた。

「ちよつと聞いた！？」

「勝つつもりだって。本当に身の程知らずよね」

「あいつ、笑いを取る才能はあるみたいだな！」

「まぐれで男爵になった奴が笑わせてくれるぜ」

女子ばかりではなく男子からも笑われてしまった。まあ、確かに一年生の中では飛び抜けて優秀な五人である。

それに、喧嘩を売ってはいけない五人でもある。

グレッグが俺に近づいてきた。顔を近づける。

「そう言えば、さつき女子に声をかけていた連中が、専属使用人に突き飛ばされて会場から逃げていたな。あれ、お前じゃないのか？」

分かっていて聞いている奴だ。こいつ性格が悪い。

「……お前じゃ勝負にならない。目立ちたいだけならさつさと逃げ帰れよ、雑魚」

グレッグは実戦経験を積んだだけあって、他と迫力が違う。

いや本当に立派な連中だ。か弱い女の子のためにここまで頑張れるのだから。

何も知らない第三者が見れば、アンジェリカさんが酷いじめを受けているようにしか見えない所も凄い。

……本当にご立派な連中だ。

「え、何？　口で言い負かしたいのかな？　もしかして決闘方法は口論がお好みですか？　困ったな、俺ってそっちの方は苦手なんだよね。でも、挑んだのはこっちの方だから受けないとね。俺と戦うのが嫌で口で勝負したいみたいだからね。仕方ないよね。お互いに頑張って勝負しようね」

口で勝負するような男が嫌いなグレッグが、額に青筋を浮かべていた。

ジルクが仲裁に入る。

「勝負方法は鎧を使った一対一の形式で行いましょう。ただし、こちらは五人。そちらが期限までに人数を揃えるなら五名までの参加は認めます。闘技場は……もう夏期休暇も目の前。終業式の翌日には借りることも出来るでしょう」

話をまとめにかかってくるので、俺はありがたく頷いておく。だが、残り日数が少ないので人なんか集まらないだろう。

「一対五か。まあ、一対一を五回なら問題ないかな」

五人で襲いかかれたら危ないかも知れないが、流石に一対一なら問題ない。

ジルクが俺の顔を見て。

「本気で勝つつもりですか？ 今では珍しいですが、決闘で命を落とすこともあるのですよ」

命がけというルールは徐々に廃れ、運が悪ければ死ぬというのが今の決闘だ。学園内の特別ルールみたいな奴だ。

「知っていますから大丈夫ですよ。一つ聞いて良いですか？」

「……何か？」

「どうして自分たちは大丈夫、って顔をしているんですかね？ 好きな女の子の前で格好を付けたい気持ちは分かりますよ。ただ、自分たちは死なないと思ってるのは甘すぎませんか？」

ジルクが視線を細めた。

「実績のある方だと聞いていましたが、どうやら期待外れのようにですね。相手の実力を測れていないようだ」

「そこまでしておけ、ジルク。リオンと言ったな。冗談では済まされない。覚悟は出来ているんだろうな？」

先ほどから前に出てこないマリエは、想定外の事態なのか落ち着いた様子ではなかった。

それにしてもこいつら少しは俺の迷惑も考えて欲しい。

ついでに言わせて貰えれば……俺は小心者だ。

「大事な恋人との別れを済ませておけよ、王子様。あれ？ 他の四人は関係ないから付き合えるし、指を啜えてみていろ、って方がいいのかな？」

殿下の視線がきつくなる。

そっちから煽っておいて、俺に怒らないで欲しい。

というか……後ろにいるアンジェリカさんは、もはや空気扱いだ。

殿下は、目の前に婚約者がいるというのを本気で考えて欲しい。

名門貴族の面々が、揃いも揃って一人の女に誑かされている事をもっと危ぶんだ方が良くと思う。

決闘

パーティーの翌日。

マリエはベッドの上で膝を抱えていた。

親指の爪を噛んでいたが、離して独り言を呟く。

「いったい誰なのよ、あのモブは！ どうして私の完璧な計画を狂わせるのよ」

昨日から気分が悪いといって一人部屋にこもっていたが、攻略対象の男子たちは決闘を申し込まれてショックだったのだろうと勝手に納得していた。

「大丈夫。あの五人が負けるわけではないし、それにあのモブはなんか頼りなくて弱そうだったから大丈夫。というか、あいつを見ているとイライラするのよね。死んだ兄貴を思い出すわ」

本当にろくでもない兄貴だったと呟くと、部屋をノックしてすぐに専属使用人のカイルが入ってきた。

「ちょ、ちょっと、返事を待ちなさいよ！」

注意するマリエに、不満そうな態度を見せるカイルは溜息を吐いた。

「次からは気をつけます」

「この間も注意したじゃない」

テキパキと朝食の準備をしてくれるカイルは、見た目も仕事ぶりも問題ない。だが、性格は少し癖が強かった。

そのため売れ残り、売れても奴隷商館に戻されていた。そういう設定だった。

「今日の朝食は野菜多めです」

「……その野菜苦手なんだけど」

「これくらい食べてくださいよ。情けないご主人様ですね」

主人を主人とも思わないような口ぶり。

（ゲームだとツンツンしているけど仕事はして可愛い弟キャラだと思ったのに、なんか毎日これだとムカつくわね。まあ、美少年だから許すけど）

数週間の付き合いだが、美少年が自分の世話を焼くというのは良いものだ。マリエは思っていた。

これくらい家事が出来て、女性を大事にする男性が元の世界にいれば自分も上手くいったと考えている。

「決闘の話はどうなったの？」

カイルはカップに茶を注ぎ、そしてマリエに差し出した。

「闘技場の使用許可は取れたそうです。学園側を説得するのにジルクさんとブラッドさんが苦勞したそうですけどね。使用人仲間から聞きましたけど、あのリオンって男の成績は良くて上の下らしいです。勝負にならないってみんなが言っていました」

「そ、そう」

なら安心だと思い安堵するマリエは、朝食を食べる。

「もつと褒めてくださいよ。使用人仲間に聞いて回るのは大変だったのに」

「あ、ありがとう」

妙に恩着せがましい部分がある自分の専属使用人だが、見た目が良いのと仕事が出来るのを考え我慢した。

（はあ、私って健気よね。他の女子ならきつとこの子はすぐに捨てられているわ。それを寛容な私が許しているのよね）

懐の広い自分、などと思いながらマリエは思う。

（予定は少し狂ったけど、これでさっさとアンジェリカを追い出せるわね。あの女、少し煽ったら決闘を申し込んできたし、本当に馬鹿）

激情家であるアンジェリカの性格を知って、パーティー会場でわざと煽ったのだ。ユリウスに近づき、その後すぐに違う男と体を密着させ手を握るなどの行為を見せつけた。

（後は夏休み中に色々準備しないと。ダンジョンでアイテムを回収して、それからアレも回収しないと）

アレ、とは本来主人公が持つべき装備だった。

それが今後の物語の鍵になるのをマリエは知っていた。

「昨日の今日で随分と酷いな」

荒らされた自室の中で腕を組む俺は、天井を見上げた。

姿を消していたルクシオンが姿を現す。

球体が俺の視線まで降りてくると、そのまま周囲に映像を映し出した。

『マスターが出かけている間に男子が乗り込み荒らしていききました。実行犯はマスターが所属しているグループで、その後ろには別グループがいますね』

俺が王太子殿下に喧嘩を売ったので、金持ちのグループがカースト下位のグループを使って荒らさせたのだらう。

校舎から戻ってきたら酷い状況だった。

映像には命令されているダニエルやレイモンドの姿も見える。

「あの二人もやらされたのか」

『怖い友人関係ですね』

「自分の将来を優先しただけだろ。暗い顔で命令されている二人を見て責められないよ。お前は心が小さいな」

ルクシオンを煽ってやると、腹が立つたのか言い返してきた。

『小心者のマスターに言われたくありませんね。それと、学園内では既に今回の決闘で賭け事が始まっています』

映像を見ると、俺が大穴となっている。だが、賭けるにしても殿下たちに賭けてもわずかな金額しか稼げない。というか、賭けが成立していなかった。

「圧倒的不人気だな」

『人気があると思っていたのですか？ それはそうと、こちらの準備は整っています。当日に荷物が届きますが、それまでどうされますか？』

俺は少し考え。

「金貨を一万枚用意して貰えるか？ いや、白金貨五百枚の方がインパクトはあるかな？ とにかく俺に一点賭けだ。こういうのは楽しくないと駄目だよな」

『本当に酷い人だ。それに、わざわざ決闘を受けずとも仲裁に入れば良かったのでは？ 煽る必要性も感じられませんでした』

俺は少し間を開けてから答えた。

「……それであの五人がマリエー人と付き合うのを見ていると？俺、面倒ごとは一気に解決するタイプなんだ」

『失敗が多いタイプですね』

「そもそも長く関わる気がないんだよ。手早く済ませたい。それから煽ったのは気分だよ。気分。あの見下す態度に腹が立った」

『……そうですか』

学園内というのは外から隔離されていることで、一種の別世界だ。学園内で通用する暗黙のルールがあるのもそれだ。

多くの学生には公爵令嬢が殿下を筆頭とした名門貴族に喧嘩を売った形にしか見えていないだろう。どちらがより強いかなど明白。

ただ、学園内の話だけで終わらないから厄介なのだ。

「さて、白金貨を受け取ったらブックメーカーの所に行くとするか」

これだけ俺に賭ければ学園の生徒たちが挙って殿下たちに賭けるだろう。

周りは俺がダンジョンで稼いだ金額だと思うだろうし、下手に怪しまれないというのが良いものだ。

楽しみだな。

『それではすぐに届けましょう。港である浮島に取りに来てください。おや、友人二人が部屋の近くでお待ちですよ』

俺は部屋を出ると、確かにそこには俯いたダニエルとレイモンド二人の姿があった。

青い顔をしているのを見ると責められない。

レイモンドが小声で。

「ご、ごめん」

ダニエルも悔しそうだった。

「もう、お前には近づくなって言われて……俺たち、逆らえなくて」

泣きそうな二人に俺は声をかけて通り過ぎる。

「次の決闘の賭けだが、俺に賭ければ儲けさせてやる。……悪かったな、二人とも。迷惑をかけた」

俺は足早にその場を去った。

学園の食堂。

そこでは男子が五人ほど集まっていた。

「どうする？　せつかくの決闘なのにこれじゃ賭けにならないぜ」

「みんな殿下に賭けているからな」

「せめて五人揃ってくれれば……」

賭けを仕切るブックメーカー。

そんな五人の下に俺は台車を押して近づいた。五人が俺を見てぎよつとした顔をするのだが、俺は淡々と話を進める。

「これ全部俺に一点賭けね」

箱を開けると、そこには黄金よりも強く輝く白金貨の山があった。五人は金貨よりも価値がある白金貨の山を前に息をのむ。

「これだけあれば賭けも成立するだろう？　あと、こいつはこの場に置いていく。持ち逃げしたら分かっているよな？　俺はかけた金額を公表する」

彼らも学園を無事に卒業したい生徒だ。

学園で他の生徒たちの恨みを買いたくないだろう。

絶対に勝つような勝負。しかも儲けが出ると分かっている勝負なら、無理してでも賭ける馬鹿が出てくる。

一人が俺に確認してくる。

「これ、全部白金貨だよな？　ほ、本当に全部賭けるのか？」

現代で言えば十五億から二十億？　まあ、それだけの金額になる。

学生が取り扱う金額としては大きい金額だろう。

「もちろんだ。俺はダンジョンを攻略した男だぞ。全財産、自分に賭けて何が悪い」

息をのむ五人は、全て本物が確認を始めた。

「こ、これだけあれば賭ける奴らも出てくるぞ」

「すぐに宣伝しないと！」

「今回は盛り上がるぞ！」

楽しそうで何より。

そんな俺の後ろから声がする。

「……バルトファルト、話がある」

俺は振り返った。

先に話しかけてくるのは次兄やら次女だと思っていたのだが、どうやらアンジェリカさんの方が先だったようだ。

その場が静まりかえる。

呼び出された場所は人気のない一室だった。

普段男子が茶会を開く場所を借りたらしい。

「お前と話し合いに使つと言つたら快く貸してくれた。教師と仲が
良いのだな」

まさか先生 いや、師匠が気を利かせてくれたのだろうか。あ
の紳士を体現した師匠ならこんな心配りも当然だろう。

嬉しくて涙が出てくる。

「……バルトファルト、お前はこの決闘を辞退しろ」

アンジェリカさんが少しやつれた顔で俺に決闘を止めるように言
ってくる。

「あの場で決めたことですから今更それは俺も面子が立たないんで
すよね」

面子とかどうでも良いのだが、参加したいので参加するのだ。

力なく小さく笑うアンジェリカさん。

「お前もやられたんじゃないか？ 部屋が滅茶苦茶にされていた。
決闘までの間、こうしてこちらを徹底的に叩くつもりらしい」

万に一つの勝ち目も与えないように頑張っているらしい。

殿下たちは知らないだろう。

殿下の周りの取り巻きたちが気を利かせているのだ。何という忠
誠心！

だが、俺に喧嘩を売ったのは許せない。

俺は小さい男だ。そしてモブだ。

なので、やられたら普通にやり返す。

普段なら黙って騒ぎが収まるのを待つのだが、今回に関しては泣き寝入りなどしないと決めた。

「私にもう力はない。お前が期待するような事は何一つ出来ないぞ」

俺は溜息を吐いた。

「実家から何か言われたんですか？」

肩が震えて反応を示していた。自分を抱きしめるようにアンジェリカさんは両腕を強く握る。

「……決闘を申し込んだことを短慮だと言われた。だが、だが……私はなんとかしたかった。なんでもいい。あの女を殿下から遠ざけたかった！ そしたら頭が真っ白になったんだ。そう返事を書いたら、大人しくしていると指示が来た。私は終わりだ。良くて軟禁か辺境送りだ。最悪は――」

自裁だろう。命を以て償えと言うことだ。

そんな事にはならないと思うが。

「勘違いをしていますね。正直、公爵家なんてどうでもいいんです

よ」

アンジェリカさんが顔を上げ驚いた顔をする。

「だ、だったら何故あの場で名乗り出た！ 馬鹿なのか？ お前、絶対に馬鹿だろ！ いいか、今回の決闘で勝とうが負けようがお前は終わりだ。相手は王太子殿下を始め、名門の貴族たちだぞ。喧嘩を売ってこれから先どうするつもりだ！」

まくし立てて息を切らすアンジェリカさんに、俺は意味ありげに小さく笑みを浮かべた。

「どうでもいいんですよ。貴族の地位も名誉も必要ない。上級クラスでカースト下位の扱いを知っていますか？ 頑張って独立したら女子のご機嫌取りの毎日だ。もう疲れたんですよ。それならいっそ、嫌いな奴らを全部殴って辞めてやろうと思ひましてね」

「お前の家族にも累が及ぶぞ！」

「俺はこれでも独立した騎士でしてね。仮免ですけど。まあ、実家は別の家、って事で」

「か、かりめん？」

アンジェリカさんが首をかしげているが、俺の目的はそこにはない。マリエという女を放置できないのは俺も同じなのだ。

「貴方はマリエを殿下から遠ざけたい。俺はあいつら全員を殴り飛ばしたい。ほら、互いに手を組むのに相応しい」

アンジェリカさんが後ろによろめきながら数歩下がった。

「お前、狂っているのか？ 相手は学年トップの実力者たちだぞ」
それについては問題ない。

これが三年 いや、二年生に決闘が起きていたら厳しかったかも知れないが、今の段階では俺の方が勝率が高い。

「大丈夫。俺は強いんで」

「信用できるか！ そ、そう言えば、ダンジョンを攻略する冒険者の多くは頭のネジが数本抜けている奴が多いと聞く。お前もその類いか！」

「失敬な！ 勝てる可能性があるから挑んだんだろうが。そもそも、決闘挑んだのはお前だからな！」

「だ、だから、それは悪かったと言っているだろうが！ 私が責任を取る。お前は学園に残れ。巻き添えには出来ない……その、あの時に名乗り出てくれただけで十分だ」

誰もが敵に見える中、損得抜きに俺が助けに来てくれたように彼女には見えたのだろう。きっとアンジェリカさんの中で俺はヒーローだ。

俺自身はモブで小物だが。

「いや、ここまで来たら引き返せないし、引き返す方が恥ずかしいんで嫌です」

「……お前、相手にグレッグやクリスがいると分かっているのか？
あいつらは冗談抜きで強いのだぞ」

そうだ。あの二人だけではなく、他の三人も学年の中では図抜けて強い。学園の中では、だが。

「それにお前、自分に大金を賭けるとはどういうつもりだ！」

……やはりこいつはガチのお嬢様だ。

白金貨の山を見ているはずなのに、別に驚いてはいなかった。普通はもつと腰を抜かすとか驚愕するはずである。

羨ましい限りだ。

「何なら賭けます？ 俺に賭ければ儲かりますよ」

「いらぬ！ 私が金に困っているように見えるのか？」

これだからお嬢様は……まあ、いいか。

「嫌がらせもすぐに終わりますよ。決闘まで数日しかありませんからね」

俺は部屋を出て行くのだった。

決闘当日。

学園にある鎧を使用出来る闘技場はとても広い。

観客席は魔法障壁に守られ、安全確保も万全である。

学園の闘技場。ここで多くの生徒たちが決闘してきたと思うと…
…どうしよう、あまり感情がわいてこない。

控え室で着替えをしている俺は、自分の姿を見る。

『似合っていますね。まあ、私が適正な素材でマスターのために作った一品ですから当然ですが』

機体カラーに合わせてダークグレーメインのスーツは、体に張り付くインナーの上にズボンやらベストを着用しているスタイルだ。

首回りが保護されている。

「思っていたのと違うな。作り直しを要求する」

『お断りします。色やデザインが多少違っても性能に差はありません。好みでなくとも我慢してください』

こいつ本当に俺をマスターと思っているのだろうか？

上着を着て控え室を出ると、そこにはオリヴィアさんが待っていた。

「あ！」

壁に寄りかかり待っていたのか、俺が出てくると慌てて近づいてきた。距離がとても近く感じる。

「あ、あの 私、何も出来ませんけど、応援します！ リオンさんのこと、応援していますから！」

主人公に応援されるとか不思議な感覚だ。本来なら、向こう側にいる人だというのに。

「俺に賭けたの？ なら大正解だ。大儲けさせてやるよ」

親指を上げて立ち去ろうとすると、オリヴィアさんが否定した。

「え？ 賭けていませんよ。賭け事はいけないと思います」

「お、おう」

とても綺麗な澄んだ瞳で言われた俺は、自分に大金をかけた事を思い出して恥ずかしくなってくる。

これが主人公の力という奴だろうか？

二人で控え室から闘技場の方へと向かうと、既に向こう側の五人は揃っていた。

自慢の鎧を既に用意しており、観客に見せつけている。

鎧と言うよりもロボットのような形をしており、大きさも三メートル近い。パワードスーツのようなもので、空だって飛べる不思議人型兵器だ。

「おう、派手なカラーリング」

王太子殿下の白い鎧から順番に、それぞれ派手な装飾が付いた鎧が並んでいた。

俺が出てくると一斉にブーイングが巻き起こる。

観客席を見れば、ダニエルとレイモンドの姿も見えた。俺が視線を向けると周りに見えないように俺に賭けた証拠の赤い札を見せてくる。

殿下たちに賭けると青い札が貰えるのだ。

「あいつら……さて、俺も頑張りますか」

俺が出てくると、アンジェリカさんが駆け寄ってきた。

「おい！　なんで鎧を用意してこなかった！　お前、自信満々だったくせに用意していないとか言わないよな！」

俺に対して遠慮がなくなってきたが、俺は空を見上げる。

屋根のない闘技場。

今日は青空が広がっていた。

「問題ない。到着した」

俺が指を指すと、空に黒い点が見える。俺の上着に隠れていたル

クシオンが俺にだけ聞こえる音声で伝えてくる。

『アロガンツ、来ます』

大きな箱が空から落ちてきた。

高さ五メートル。幅は四メートルのその箱は、闘技場に着地すると前面から開いた。そこには腕を組んで立っている鎧が一つ。

以前使った時は戦闘ではなく作業だったが、こうして見るとやはり戦闘用である風格というか威厳を感じる。最初に浮島に穴を掘る時に使ったのが申し訳なく思う完成度の鎧だ。

しかし名前だ。俺には意味が分からない。

「……アロガンツってどういう意味だったかな？」

どこかで聞いたことがあるようなないような……凄そうな名前なので個人的には好みだ。

『貴方にピッタリの言葉です』

「そうか。たまには気が利くことも出来るじゃないか」

ダークグレーの鎧は現在の主流であるスマートな鎧とは違い、とにかく頑丈な作りをしていた。本体自体が普通の鎧よりも大きい。

実戦向きなのか刺々しい飾りもなく、無骨なロボットに見える。

殿下たちの鎧が高機動型のスリムタイプなら、俺の鎧は重装甲の

鈍そつな鎧だつた。

俺の鎧の出現に闘技場の観客たちが盛大に大笑いをする。

集まつたのは一年から三年まで。

とにかく夏休み初日にこのイベントに参加できる人は可能な限り集まつた印象だ。

何千人と集まっているが、観客席の収容人数は万単位を想定しているためか観客席が有り余っていた。

アンジェリカさんが俺に疑つたような視線を向けてきた。

「お前、これで戦うつつもりか？　もしかしてロストアイテムか？　だから強いと思っていないだろうな？　ロストアイテムは再現不可能なのであつて、別に強いという意味ではないんだぞ！」

オリヴィアさんが手を頬に当てて首をかしげる。

「でも、なんだか可愛いですよ」

「お前の美的感覚がおかしいのだ。確かに無骨だけではないが、今の戦闘には不向きだ」

防御よりも攻撃力が高いこの世界では、素早く動いて敵を倒すのが主流である。

つまり、重装甲は時代遅れの型落ちに見えるのだ。

俺は重装備の方が好きだが。

「見ていれば分かりますよ」

俺は闘技場の中　　舞台へと上がった。

俺が鎧の所までよると、闘技場内に紫色の鎧が降りてきた。細長いイメージで、背中にはランスのような武器をいくつも背負っている。

色合いからブラッドのようだ。

鎧の胸元を解放すると、そこにはブラッドの姿があった。

「逃げずに出てきたのは褒めてやろう。だが、そんなウスノロな古い鎧を持ち出して、僕の鎧に勝てると思ったのか？　名工に作らせたこの鎧は製作だけでも白金貨で　　」

傲慢を無視して鎧の胸元を解放する。

滑り込むように中に入ると、両脇の前にある穴に腕を入れた。中にある操縦桿を握る。ゲームのジョイスティックのような物が鎧の腕の中にある。それを握ると胸元がしまつて視界が遮られるのだが。

『アロガンツ起動します』

ルクシオンの言葉に反応してアロガンツが起動する。目の前には、まるで実際に外にいるかのように映像が見えていた。

内部の機械が動いて頭部や首　胴体などを保護していく。

準備が完了したので前を見れば、まだブラッドが鎧の自慢話を続けていた。

「あいつまだ自慢しているのか？」

『彼の話からするに、後ろに背負っているのはドローンのような兵器のようです。こちらに対抗して展開しますか？』

「必要ない。最初は派手に行こう。こいつの性能を見せつける意味合いもあるけど、基本的に紫って打たれ弱いんだよね」

ゲームではすぐに沈むので本当に苦労させられた。

アロガンツが一步踏み出すと、ブラッドが腹を立てた顔をしているのが見えた。話を無視しているのが気に入らないらしい。

大丈夫……ちゃんと聞いていたし、お前の鎧の特徴は知っているから。

『……お前の態度に腹が立つ』

そう言っただけで胸部を閉じて戦闘の構えを見せたので、こちらも武器を取り出すことにした。

「えっと、一番のブレードを」

すると、バックパックの収納ボックスから出てきたのはスコップだった。主に穴を掘るのに最適な剣スコだ。

鎧用なので大きく、それなりの大きさがあるが……やはりスコップだ。

「あれ!？」

『前回、一番にはスコップを収納していましたね』

「ブレードを出せよ!」

『一番を指定したのはマスターです』

こいつ絶対に分かっているやっっている。

俺がスコップを構えると、観衆の笑い声が聞こえてくるのだがブラッドは舐められたと思ったのか激怒していた。

『貴様、そうやって僕を馬鹿にするのか!』

闘技場に審判である教師の声が響く。

『両者、まずは決闘の誓いを』

だが、大きく踏み込み飛び出してきたブラッド。

そんなブラッドは両手に持ったスピアを俺に向かって突き刺してくる。胴体狙い。思いつきり殺すつものようだ。

スピアの先端が魔法の発生で光を帯びていた。

ルクシオンは感心している。

『素晴らしい踏み込みです』

「お前は」

鎧を動かそうとすると、イメージ通りに動いた。重装甲な鎧が軽快に横へステップすると、そのままブラッドの腕を掴んで押さえつける。

『は、放せ！』

「はい、落ち着いてね。ほら、決闘の誓いがあるから。先に済ませないと色々と面倒だからちゃんとしてようね」

アンジェリカは、アロガンツの動きを見て冷や汗を流した。

隣では鎧に関して何の知識もない素人のオリヴィアが手を握りしめ、リオンの応援をしていた。

「アンジェリカさん、リオンさん結構頑張れそうですね！」

そんなオリヴィアを見て「あ、ああ」と頷くしか出来なかった。

ただ、内心ではあり得ないと思っていた。

（今の動きはなんだ？ あれだけ重装甲な鎧があんなに軽快に動くというのか？ あり得ない。いったいどんな鎧だ。重量があればあ

るだけ、持ち主の魔力を余計に吸い上げていくんだぞ」

鎧のセオリーからいけばあり得ない重量。

そして、一瞬の動きも驚きだが、そのパワーだ。片腕でブラッドの鎧を押さえつけたパワーはあり得ない。

（フィールド家が跡取りのために用意した鎧だぞ。ただの数合わせの量産品ではない。本物の騎士の鎧だ。それを……）

闘技場の二人が決闘の代理人として誓いの言葉を述べる。

死んでも恨まないというような誓いの内容。

そんな言葉よりも、アンジェリカはリオンの鎧から目が離せなかった。

周囲から声が聞こえてくる。

「なんだよ。早く始めろよ」

「俺、殿下に全財産を賭けたんだ。こんな儲け話ないよな」

「俺も実家から金を借りてきた！」

観衆の多くはリオンが早く負けることを願っていた。

中には借金をしてまで大量にユリウスたちの勝利に賭けた生徒もいる。男子も女子も、この機会に金を稼ごうとしているのだ。

アンジェリカは笑みを浮かべた。

「アハ、アハハハ！」

笑い出したアンジェリカに、オリヴィアが怯えるような視線を向けている。

「ど、どうしたんですか？」

「これが笑わずにいられるか。あの男は本当に酷い奴だよ」

オリヴィアが言い返す。

「酷くありません！ リオンさんは優しい人です！」

「そうだな。そうだった」

適当にオリヴィアをあしらいながら、アンジェリカは思案した。

（だが、それなら何故私に味方した？ 確実に勝てる見込みがある
と判断したのは分かるが、今後を考えれば私に味方するのは下策だ。
それが分からない頭ではないだろうに）

ブラッドは焦っていた。

狭い鎧の中、息を吐くと生暖かい息が跳ね返ってくる。

「なんだ、なんなんだよ」

鎧の腕を見れば、握られた場所が指の形にへこんでいる。鎧の装

甲は強度もあるが、そもそも魔法によって守られている。多少の攻撃では傷も付かない。

付かないはずなのだ。

それに 全く動けなかった。

抵抗しようとしたのに動けず、相手は無理をしている様子がなかった。

決闘の合図を待つ今、開始前の余裕は吹き飛んでいた。

「こうなればこいつを使うしかない」

背中に背負った握る部分がないスピア 細長い円柱は、魔法で浮遊させて攻撃を可能とする兵器だ。

魔法に関して高い適性を持つブラッドの奥の手だった。

四本のスピアが四方から突撃し、相手を突き刺す必殺だ。

『それでは両者 はじめっ！』

決闘の開始と同時に背負っていたスピアを解放し、周囲に浮かせる。その数は四つ。

「四方からの同時攻撃に耐えられるわけが」

ブラッドがそこまで口にしたところで、ダークグレーの鋼の巨人が目の前に迫って来ていた。

丁度、スコップを両手に持って大きく振りかぶっている姿が見えた。

「へ？」

金属のぶつかる激しい音が闘技場に響き渡る。

開始と同時に突撃し、スコップで殴りつけたら闘技場の壁まで吹き飛んでいった。

「なんてパワーだ」

圧倒的な機体性能の差は、相手が仕掛けて来る前に全てを終わらせてしまった。

ただ、直進してスコップを叩き付けただけで、紫色のトンがり帽子は戦闘不能まで追い込まれている。

『これでも抑えましたけどね。魔法で動く鎧には感心しますが、見るべき技術はそこだけです。無駄に装飾が多くスマートではありません。』

……こいつ、アロガンツが笑われたのを根に持っているのだろうか？ まあ、製作したのはルクシオンだから、結構気にしているのかも知れない。

俺は壁に激突してゆがんだ紫色の鎧に近づく。

相手はなんとか動こうとしていたが、踏みつけた。

ミシミシと音が聞こえてくる。

『や、やめっ！ 苦しい 助けて！』

相手の鎧はへこんだのに、スコップはまったくビクともしていなかった。このままスコップで戦うのも良いかもしれない。

助けを求めるブラッドの声を無視する。

「ほら、潰しちゃうぞ。早く負けを認めないとね」

『圧倒的な力でねじ伏せる……流石はマスターです。卑怯という言葉葉がこれほど似合う方も滅多にいませんよ』

「……嫌味かよ」

『いえ、褒めています。勝負事で卑怯とは褒め言葉ですから。勝てると思わないと戦わない。私もそうありたいものです』

そう、俺は勝てるから決闘に名乗りを上げた。

右手にスコップを持って肩に担ぎ、紫野郎を踏みつける。

ついでに言えばこいつらをぶん殴りたかったのも事実だ。前世の記憶が俺に言うのだ……面倒くさい野郎共をぶっ潰せ、と。

徐々に踏みつける力を強めていくと、ブラッドの鎧の大事な骨格

基本フレームがゆがんだのか変な音が聞こえてくる。

「ほら、さっさと負けを認めないと死んじゃうぞ」

『認める！ 負けを認めるから！』

ブラッドを踏んでいた右足をゆっくり上げ、俺は振り返って闘技場を見た。ブラットが発射したスピアが闘技場の地面に突き刺さるか転がっている。

闘技場の観客席は静まりかえっていた。

俺は審判の方を見た。

「審判、ブラッドは負けを認めたぞ」

その言葉に審判が俺の名前を叫ぶ。

「しょ、勝者！ リオン・フォウ・バルトファルト！」

パチパチと聞こえてくる拍手は、広い会場内で数人が行っているだけだった。

「数人拍手しているな」

アンジェリカさんとオリヴィアさんなら理解できるが、それ以外にも数人が拍手をしていた。

頭部のカメラが発見した人物の中には、教師である師匠が背筋を伸ばし堂々と拍手をしている。

……師匠つたらこんな時も紳士。

私怨と

俺が決闘の代理人に名乗り出た理由がいくつかあるとして、その一つを挙げるとすれば私怨がある。

攻略対象の男性キャラに対する私怨。

前世で妹に無理矢理させられた乙女ゲーで攻略させられた五人。

何が悲しくて野郎を口説き、甘い台詞を聞かなければいけないのか。

そうした思いが沸々と蘇ってきて俺に囁いたのだ。

やっちまえよ、って。

闘技場内。

転がっている破片やら邪魔な物を片付け、アロガンツを運んできたボックスも闘技場の外に出されてしまった。

中央で立って待っていると、何やら殿下たちの様子がおかしかった。

アロガンツのマイクが殿下たちの声を拾う。

『俺が行く。ブラッドの軟弱野郎は確かに弱い、アレは脅威だ。お前たちじゃ荷が重い』

『舐められたものだな。私がお前に負けるというのか?』

グレッグとクリスが言い争いをしており、殿下とジルクは俺の方を見ていた。

『バルトファルトの奴はダンジョン攻略者だったな。そうか、これだけの鎧を持っていたからこその自信か』

『ロストアイテムでしょう。ですが、ここまで強い鎧が眠っているなど聞いたことはありません。見た目から言えばパワータイプのようです』

闘技場の雰囲気は番狂わせが起きたという事でざわついていた。

俺が負ける　殿下たちの勝利を信じて疑わない生徒たちが沢山いるのだ。オマケに大金もかけている奴も多い。

マイクが拾う声には「これくらいして貰わないと見に来た意味がないぜ」とか「でも次で終わりよね」などと安心しきっている声がある。

ルクシオンはデータの修正を行っていた。

『先ほどの戦闘データから槍での戦闘方法を修正しました』

「ご苦労さん。おっと、次はグレッグか」

赤い鎧に金色の装飾がされた鎧の中に入ると、大きな槍を持って闘技場内に降り立つ。

ルクシオンは相手の状態を確認。

『表面に修復箇所を確認。傷などから推測すると、戦闘経験があるようです』

「ああ、こいつは強いんだよ。強いんだけどさあ……」

グレッグ・フォウ・セバーグは、荒々しい見た目と同様に五人の中で冒険者として一番活躍している。そして実戦に重きを置くタイプだ。

それはいい。

ゲームでも戦闘面で頼りになるキャラだと俺も思っていた。

グレッグが槍を俺に向けてくる。

『バルトファルトって言ったな。その名前は覚えておいてやるぜ。だが、調子に乗るのもここまでだ。ロストアイテムで強力な鎧を手に入れたみたいだが、しょせんは鎧の力だ。お前の力じゃない』

まさにその通り、反論一つ出来ない正論に拍手を送りたくなる。

「それがどうした？ お前、パーティー会場でも思ったが、口が良く回る奴だな。お喋りがしたいなら今度お茶にでも誘ってくれよ」

遠回しに口だけ野郎と煽ってみると、効果はきめんだった。

『……ぶっ潰す！』

審判が試合開始を告げた。

『はじめ！』

槍を振り回し、俺との距離を詰めてくる。

先ほどの戦闘を見ていたのか、俺に攻撃をさせないつもりのようにだ。連続で攻撃してくるのだが。

『おらあ！ どうした！ こんなものかよおお！』

槍で突く、斬る、払う、などの連続攻撃を持っていたスコープで防ぐ。

金属同士のぶつかり合いによる火花に加え、相手の槍が淡く光を帯びていたので実にまぶしかった。

ただ、こいつ。

「動きは良いんだよ。根性もある。けどさあ……お前はもつと道具にこだわれや！」

スコープで槍を弾き飛ばすと、鎧の性能差から相手がバランスを崩した。軽量タイプであるために、重量差もあって弾かれる形になったのだ。

グレッグの赤い鎧が空を飛んで距離を取ろうとしていた。

元々鎧は空を飛ぶ兵器でもある。

しかし、左手を伸ばしてグレッグの右足を掴んだ。

『こ、こいつ！』

槍で左手を攻撃してくるが、傷一つはいらない。

グレッグの使用している鎧は旧式の鎧で、着飾っているだけで量産品だった。

この男、能力はあるのにゲームと同じく道具にこだわらない。道具にこだわるのは二流とでも思っているのだろう。

おかげで戦争パートではよく沈み、そのたびにゲームオーバーになったことが何度もあった。

変なプライドなど捨ててしまえ！

アロガンツの左手が、グレッグの鎧の右足首を握りつぶす。そこに本人の足がないのは知っているので握りつぶしたが、鎧の構造を知らない女子も多くヒツ！ という悲鳴のような声が聞こえてきた。

引き寄せてスコップを頭部に突き刺す。スコップを手放した右手で槍を持っている左手を覆うように握って潰した。

グレッグが持っていた大きな槍も音を立てて曲がる。

「ほらほら、逃げてみるよ」

いたぶるように今度は右手を掴んで握りつぶすと、グレッグの叫

び声が聞こえてきた。

『ちくしょうがああ！ 放せよ！』

「……放すかよ、ばか」

機体性能に任せてグレッグの鎧を破壊していく。グレッグ自身は傷つかないように注意しながら、鎧の腕を引き抜いた。

グレッグの生身の腕が出てくる。

アロガンツの大きさは一般的な鎧よりも一回り以上も大きい。

『いたぶって楽しいのか！ お前は男じゃねー！ 騎士なら騎士らしく戦いやがれ！ 鎧のおかげで勝っているだけだろうが！』

何か叫んでいるので不満をぶつける。

「騎士？ まだ正式な騎士じゃない。ついでに言わせて貰えば、決闘に旧式の鎧で出てきて負ければ鎧のせい？ 新型を用意しなかった自分の準備不足を嘆いた方が良く。いや、侮っていた自分を恥じた方が良く。でも言い訳が出来て良いよね。僕は鎧の性能差で負けたんです、ってさ！」

鎧の胸部装甲を引き剥がすと、グレッグの顔が出てきた。

圧倒的な力を前に手も足も出ないのが悔しいのか、その顔は驚きから徐々に怒りに変わっていく。

まるで子供が玩具を破壊していくように、アロガンツはグレッグ

の鎧を破壊していく。俺がグレッグだったらトラウマ物の光景だろう。

まあ……止めないけどね！

グレッグは鎧が使えないと分かると外に出て鎧の破片を持って俺の前に立つ。

『ふざけんなっ！俺はまだ負けていない。死ぬまで戦ってやるよ！』

道具なんか気にしないで自分の力を信じている姿には感動すらいや、どうでもいいな。こいつにも苦勞させられた。

「えゝ、でもさあ……」

『さっさとかかってこいやああ！』

鎧の破片で何度も斬りかかってくるグレッグに対して、俺は無抵抗を貫いた。

だってダメージなんかないし。

そもそも、鎧と生身では勝負にならない力の差が存在するのだ。

「流石に弱い者いじめは嫌いなんだよね」

すると、グレッグの動きが止まった。

『な、なんて言った。今なんて言ったああ！』

「お前らみたいに弱い奴をいじめられないよ、って言ったんだよ」

『ふ、ふざけんな！ 俺たちがいつ弱い者いじめを 』

「アハハハ！ お前、本当によく喋るよね。まあ、人を舐めて旧式の鎧なんかで出てくるくらいだから、よっぱど実力に自信があったんだろうけど……お前程度の奴なんか世の中ゴロゴロいるからね。俺も実力的にトップじゃないし、アレだけ決闘を申し込んだ時に強気に出てくるから少しは期待したのにこのざまって……お前、本当に雑魚すぎ。俺もこんな雑魚を時間をかけていたぶっても後味が悪いから、手早く終わらせたいの。この気持ち、分かんないだろうな」

君は弱いんだよ、って言うのを丁寧に遠回しな言い方で教えてあげた。

俺ってなんて優しいんだろう。

『うわあああああああああああ！！』

グレッグが叫びながら攻撃を仕掛けてくるが、その姿は勇ましいと言っよりも哀れ、だった。大勢の前で雑魚呼ばわりした相手に、雑魚扱いを受けて負ける……悲惨すぎて心が痛む。まあ、嘘だが。

こいつらは自分の実力を知った方が良い。

審判が流石に止めに入る。

『……勝者、リオン・フォウ・バルトファルト。グレッグ・フォウ・

セバーグは下がりなさい。両者の健闘に拍手を！」

覇気のない同情に満ちた審判の声に、グレッグは膝から崩れ落ちてその場に座り込む。

闘技場内はパラパラとした拍手が俺たちに送られていた。

俺は呟く。

「これで残り三人か」

ルクシオンの奴は俺に冷たい。

『なんとも酷い結果ですね。相手をここまで追い詰めるなんて常人には躊躇われますよ』

「知るかよ。こいつらは現実を知った方が良いんだって。調子に乗った奴は嫌いなんだ」

『鏡を用意いたしましたようか？ マスターにも当てはまるピッタリの言葉ですね』

…… 自覚はあるが言われるとやはり腹が立つ。

観客席では生徒たちがドン引きしていた。

「今の試合は酷いだろ。騎士の戦い方じゃないぜ」

「馬鹿、決闘だろうが」

「これで二人抜きだな。まあ、クリスが止めるだろうけど……」

決闘内容に観客たちは、グレッグが意外にたいしたことがなかったと口を揃えて言っていた。

「あいつ実は弱いんじゃないか？」

「実戦がどうか、五月蠅かったのにこの程度かよ」

「期待していたのに残念。弱い男って興味ないわ」

アンジェリカはグレッグとの試合内容に冷や汗をかく。

「ここまで差を見せつけるか」

アンジェリカはグレッグが弱いとは思っていない。

それ以上にリオンが強すぎたのだ。

グレッグは運が悪すぎたのだ。本人が道具に頼るのは二流という考えを持ち、旧式の鎧を扱っていたが……最新式を用意していても歯が立たなかったのはアンジェリカの目から見ても分かる。

それだけの力の差がある試合だった。

（そもそも、王国で手に入る鎧で相手になるのか？）

オリヴィアの方は少し怒っていた。

「リオンさんが勝って嬉しいですけど、今のはやりすぎです。後でグレッグさんに謝罪するべきですよ！」

本気でそう思っているオリヴィアに、アンジェリカは首を横に振った。

「止めておけ。余計にグレッグのプライドを傷つけるだけだ」

ただ、アンジェリカは小さく俯く。

（……弱い者いじめ、か。バルトファルトにしてみれば、私もただの小娘なのだろうな）

リオンがグレッグを煽った際に「お前らみたいに」と言っていた。アレは、パーティー会場で味方のいない自分を責め続けたユリウスたちへの嫌味なのだと察する。

本人は気が付いていたのか、それとも無意識だったのか分からない。

「そうか……私は弱いのか。惨めだな。もっと」

アンジェリカは空を見上げた。

（もっと強くなりたかった）

闘技場の片付けが終わると、降りてきたのはクリスの青い鎧だった。

大きな大剣を両手に持ち、背中には違う種類の剣も背負っていた。

若き剣豪　　剣士ではなく、剣豪だ。

ゲーム内ではただの剣士よりも格が高く、実力を認められた称号のようなものだ。

父が剣聖で、幼い頃から厳しく育てられてきたらしい。

冷静だが感情を表に出すのが苦手。

だが、剣を持てば無敵の剣士様……俺はこいつも嫌いだった。攻略が難しいキャラだったのもあるが、こいつ剣しか使わないのだ。

そのため遠距離攻撃を持たないので戦争パートでは苦勞させられた。というか、クリスを含めた三人に癖が強すぎて何度もゲームオーバーになった。

今思い出しただけでもムカムカしてくる。

鎧並に大きな剣を構えるクリスは、前世風に言つのなら示現流の構えに似ている。耳横に手を持ってきた構えだ。

クリスが喋った。

『俺は二人のように油断しない。最初から全力を出す』

「そうか。なら、俺も全力を出そうか」

未だにスコップを持っているのが腹立たしいのか、俺に突っかってくる。

『いつまでそんな道具を持っているつもりだ？ この場に相応しくない』

「それを決めるのはお前じゃないよね？」

審判が開始を告げた。

『はじめっ！』

まあ、なんだかんだと言って強いキャラだと思う。実際、他二人と違って油断もしていない様子だ。

一直線に俺に向かって斬りかかってくる動きには迷いがない。

「ルクシオン、ドローンを展開しろ」

『ドローンを展開します』

後ろに下がりつつ後ろの武器コンテナから次々にドローンを出していく。球体ドローンには銃器が取り付けられていた。

その数は八つ。

『なっ！？』

驚いた顔をするクリスに向かい、俺は。

「射撃開始、っと」

操縦桿のトリガーを引いたら、それに合わせてドローンたちがク

リスの青い鎧に向かって射撃を開始した。

慌てて避けようとするクリスだが、八機のドローンに囲まれてはどうしようもない。マシンガンを取り付けたドローンの攻撃に、ダメージを蓄積させていく。

防御をしているとは思ったのか、ドローンを攻撃しようとするが操作しているのはルクシオンだ。

『無駄です』

どれかを攻撃しようとすると、回り込んだドローンに後ろを攻撃される。

だが、クリスもすぐに対応して壁際に下がると回り込ませないように対策を取った。取ったのは良いが……。

「はい、詰みね。負けを認めてくれるかな？」

スコップを担いでほとんど動かない俺に、クリスが感情的になる。

『お前は！ お前はこんな戦い方で満足か！ 騎士道の欠片もない。こんな戦い方をして！』

剣へのこだわりは認めるが、ハッキリ言って興味がない。

「言いたいことはそれだけかな？ これは試合じゃない。決闘なんてどんなに取り繕っても殺し合いだろうが。銃に頼ったら駄目？ そんなルールは聞いていないね。そもそも、お前ら五人を相手している俺こそ同情されるべきじゃないのかな？ いや、すまない。一

対一を五回すればいいだけだから、これは同情されなくても仕方がないね。それにしても、圧倒的な差がありすぎるから、確かに真面目に手加減を考えているところだったんだ。君たちの言う正々堂々とした騎士道も考えてあげようじゃないか」

ペラペラと話を続けていると、クリスが動こうとした。ルクシオンが見逃すはずもなく、一斉に八機のドローンが俺の周囲に浮かんで射撃を開始。

すぐに動けなくなったクリスが大剣を盾代わりにして屈み込む。

『馬鹿にして……こんな戦いは誰も認めない！』

「結構だ。大事なのは結果だ。お前たちは負けて、俺が勝つ。過程なんて気にする奴は少ないからね。ああ、でもお前たちは頑張ったって言うてやるよ。無様に負けたと言えば角が立つから」

『うわあああああ！！』

弾丸の雨の中を突き進み根性で俺のどこに来るクリスは、大剣を振り下ろした。クリスの魔力と剣速により、まるで光の刃に見えたそれを左手で受け止め、大剣を握りつぶす。

「流星は最強の剣士様、お見事でした」

鎧から煙が吹いたところで、審判から勝者の宣言が行われる。

『クリス・ファイア・アークライト戦闘不能！ 勝者……リオン・フオウ・バルトファルト』

俺の名前を宣言する時、どうにも言葉に力がない気がする。

鎧の中からすすり泣く声が聞こえてきた。

『……どうしてだ。どうして私は負けたんだ。誰よりも努力してきた。私は誰よりも頑張って……認められたかったのに』

家庭の事情もあって努力するしかなかったクリスには同情するが、それとこれとは話が別なので気にしない。

「不幸自慢はご自慢の彼女にするんだな。同情してくれるぞ」

『本当に屑ですね』

ルクシオンの言葉が妙に心に刺さった。いや、俺だってちょっとやり過ぎたかな、って思っている。

観客席に不安の声が上がる。

「お、おい、クリスが負けたぞ」

「なんだよ。あんなの卑怯じゃないか」

「……なあ、リオンってソロでダンジョンを攻略して男爵位を得たんだよな？　もしかして、強いんじゃないか？」

「ま、待つてよ。ならこのまま勝負が決まるの？　私、全財産を賭けたのよ！」

絶対に勝てると思っていた賭けが、実はそうではなかったと知って焦る観客たち。同時に、リオンを馬鹿にしていた生徒たちは認識

を改め始めていた。

オリヴィアが泣きそうな顔になる。

「アンジェリカさん、私……凄く悲しいです。リオンさんが勝ったのは嬉しいんですけど、こんなの酷すぎます」

アンジェリカはオリヴィアを言いくるめる。

「馬鹿を言つな。気を抜けばリオンも負けていたかも知れない男だぞ。それだけ相手を警戒したと言つことだ」

「そ、そうなんですか？」

頷いてクリスについて語る。

「宮廷貴族で伯爵家の地位にある。剣術指南役の家だ。クリスの父は王国一の剣士で剣聖の称号を得ている。あいつ自身、一段下がるが、剣豪の称号を得ている男だからな」

オリヴィアは素直に感心していた。

「凄いんですね」

「ああ、凄い男だよ」

（そんな男でも手も足も出なかったという事は……乳兄弟のジルクは焦っているのだろつな）

ユリウスたちがいる場所を見れば、ジルクの姿も鎧も見えない。

青ざめているマリエをユリウスが慰めており、その姿を見るとアンジェリカは胸が締め付けられるように苦しかった。

（……殿下）

クリスが闘技場から運び出され医務室に向かう中、ジルクは次の試合の準備を行っていた。

鎧の整備士に指示を出していく。

「ありったけの武器を積み込みなさい。弾丸も魔弾を使用します」

整備士が目を見開く。

「試合で使う代物じゃありませんよ！」

「これは決闘です！」

普段優しいジルクが余裕を失うほどに焦っていた。

緑色の鎧は各部に羽のような飾りが付いている。

そんな鎧に重厚感のあるライフルや、剣ではなく斧が持たされた。まるで戦場に行くかのような装備だ。

「飾りを外して追加の装甲を取り付けてくれますか。それから、手榴弾の類いも用意して貰いますよ」

整備士が困っていた。

「ジルク様、今ある部品では限界があります」

ジルクは俯き、そして顔を上げた。

「構いません。出来る限りの事をしなさい」

大急ぎで装備を変更する周囲に目もくれず、ジルクは頭の中で戦い方を考えていた。

（なんとしても私で止めなければ。それが出来なくとも、ダメージを与えなければ殿下の評価が）

乳兄弟、親友……しかし、ジルクはユリウスのために生きてきた。ここで負ければ、ユリウスの評価が著しく下がることになる。

そのために、ありとあらゆる手段を執ることにした。

近くに置かれていた爆弾を一つ手に取る。

「……少し出かけます」

鎧の装備を換装させ、一人ジルクは部屋を出て行く。

「ふあゝ、疲れた」

一時休憩を挟むことになり、俺は鎧から出て背伸びをしていた。

トイレを済ませて戻ろうとするとオリヴィアさんとアンジェリカさんが駆け寄ってくる。

「リオンさん、どこに行っていたんですか！」

「心配したぞ」

二人の反応に俺は首をかしげる。

「え、何？」

二人は顔を見合わせていた。

「いえ、あの、具合が悪そうだと聞いたので」

俺は目を細めた。

「俺が？ トイレに行っていただけだよ」

アンジェリカさんが少し怪しんでいた。

「お前の姉を名乗る者が現れた。顔はオリヴィアが確認したが……お前の顔色が悪いから見てきて欲しいと言っていた」

次女が俺の心配？ まずあり得ない。

殿下に喧嘩を売ってから顔を合わせていないが、きっと迷惑をかけたと思う。だが、このタイミングで話しかけてくるだろうか？

そう思っているとルクシオンが俺に話しかけてくる。目の前の二人には聞こえていない。

『マスター、機体に爆薬がセットされました。マスターの姉君がセツトしましたが、指示した者がいますね』

……だろうな。

脅されたと考えるのが一番だろう。

俺が殿下に喧嘩を売った事で学園では肩身が狭かっただろう。そこをジルクが利用した、と。

俺も屑だが、ジルクも屑野郎だな。

『調査の結果、次の対戦相手が可能性は一番高いかと』

俺は小さく溜息を吐いた。

二人に向かって。

「そつか……実の姉には分かるか。実は大きい方を我慢していたんだよね。お腹痛くてさ。漏れるかと思った」

俺がそう言うと、オリヴィアさんがオロオロと困っていた。

「そ、それは仕方ありませんね」

アンジェリカさんは冷たい視線を向けてくる。

「女子の前ではもつと言い方があると思うが？」

「そうだね。お花を摘みに行っていました。闘技場に花壇なんてないけど」

そう言うのと、オリヴィアさんが苦笑いをしていた。

アンジェリカさんが額を手で押さえている。

「その言い訳は……まあ、いい。普段から直さねばいざという時にミスをするぞ。それより、もうすぐ時間だ」

「なら、行くとしますか」

闘技場へと向かうと、ルクシオンが情報をくれた。

『爆薬のセット位置は背中になります。鎧はそこに重要機構があるので、こちらを本気で潰しかかっていますね。爆薬の量から計算すると、一般的な鎧ならば中の操縦者の生命に関わってきます』

普段優しそうな奴が一番怖かった……確かに、よくある話だ。

闘技場に行くと次女の姿はなかった。

まあ、話をしないのはありがたい。俺も何を話せば良いのか分からないし、それよりも爆弾なのだが……隠すように取り付けられていた。

アンジェリカさんが相手を見る。

「ほら、相手がお待ちかねだ。ようやく本気になったらいい」

戦場にも出るような装備で闘技場に出てきたジルク。

鎧の中に入ると、ルクシオンが俺に。

『どうやら特殊な魔法に反応して爆発するタイプのようです』

ゲームでもそういう爆弾はあった。

「ジルクみたいなタイプが一番怖いよな。特出するのは射撃の腕で、それ以外には特徴がない。けど、性能的には射撃以外も平均的だからどこでも活躍できる万能タイプでもあるんだよ」

殿下が近接戦闘に秀でており、ジルクは中、長距離を得意としているキャラだ。癖がなく使いやすく優秀。ゲームでは頼りになったキャラだった。

まあ、攻略難度が高く腹立たしいのは変わらない。

闘技場に降り立つと、ジルクが声をかけてくる。

『君は強い。敬意を表しましょう』

「それはどうも」

審判が開始の合図を出すと同時にジルクは右手に持ったライフル

を俺に向けた。最初から空を飛び、問答無用で引き金を引くと手榴弾まで投げつけてくる。

『煙幕です』

「容赦がないな」

周囲が白い煙に包まれる。

ジルクは白い煙に包まれた闘技場でギリギリの高さまで飛ぶ。

あまり高く飛びすぎでは失格になるので、ギリギリの距離まで上がってそこからライフルや手榴弾で敵を真上から攻撃する戦い方を選択した。

「これで沈んでくれれば良いのですがね」

あまり使いたくない手を使った。

リオンの実姉に接触して爆弾を渡したのだ。ジルクが直接渡したのではなく、その間に男子生徒を挟んでいる。

事が公になってもユリウスの評判を傷つけないため、生徒の暴走として処理するためだ。

煙に包まれた闘技場だが、ジルクの目には魔法陣が浮かび上がる。その中には煙の中でジルクを探しているリオンの姿があった。

「君は危険だ。ここで処理させて貰いますよ」

ライフルの引き金を引く。

軍でも使用している対鎧用のライフルは貫通力がある。学園の決闘に持ち出すのはあまりいい顔をされないが、相手はリオンだ。

ここまで圧倒的な差を見せつけてきた相手にそんなことを言っていられない。

「……殿下に逆らった時点で君の人生は終わっている。ここで華々しく終わらせてあげますよ」

弾丸はリオンの頭部に命中した。鎧の頭部だが、角度的に貫通すれば中の人間も怪我を負うのは確実だ。

しかし。

「な、なんだと！」

リオンは何事もなかったかのように空を見上げている。

手を振っていた。

「ちっ！」

手榴弾を投げつけ、そしてライフルを構える。ボルトアクションで弾丸を装填し、引き金を引く。

爆発に巻き込まれても平気な姿で立っている鎧を前にシルクは奥

の手を使った。セットした爆薬を作動させるため、特殊な魔法をリオンに向かって放つ。この魔法自体は何の意味もないが、爆弾と反応して大きな爆発を起こした。

「直撃ならダメージくらい！」

しかし、闘技場にリオンの姿が見つからない。爆風が止んだ後に姿を消していた。

「どこだ。いったいどこに！」

そんなジルクは、急に太陽が隠れ、影が出来た事に違和感を覚えた。空は青く雲一つなかったのに、と。

見上げると、すぐ後ろにリオンの姿があった。

『やあ』

「っ！」

急降下しながら振り返り、ライフルを構えたとリオンが向かってくる。

引き金を引くが、リオンの鎧は弾丸を弾いてしまった。

「直撃したはずだ！」

『きつい一発だったさ。いろんな意味で、ね』

口ぶりから色々と察していると判断したジルクは、戦斧で斬りか

かった。リオンがスコップで受け止めると、闘技場の観客たちに聞こえないように話しかける。

「君は何も分かっていない」

『鏡を見て発言しろよ。お前らの方は正気じゃない』

「殿下と決闘をするつもりか？ 君は貴族として死んだのも同じだ」

『それは良い！ 上級クラスなんて反吐が出る！ 解放されるならそれこそ何だつてやってやるよ！ ……てめえみたいになっ！』

普通の男子ならここまで言えば察するだろう。察しが悪くても、デメリットを言えば何かしら交渉の余地が生まれる。

だが、リオンは逆にやる気を見せていた。

ジルクはマリエの顔を思い浮かべる。

不思議な女性だった。まるで自分のことを理解し、そして自分の理想そのものの女性だった。

夢中になるのに時間はかからなかった。

王宮にはいない。普段、周りにいる女性とは違って本当に心が安らいだのだ。

「私は！ 初めて理想の女性に出会った！」

『良かったな、競争相手が一人減るぞ。存分に恋愛ごっこを楽しむ』

と良いよ』

リオンのスコープによる攻撃をライフルで受け止めると、そのまま弾かれライフルが地面に落下した。

そして、ユリウスの顔も浮かぶ。

マリエの事で話をする、とても嬉しそうに話す大事な親友の姿が。

「お前に何が分かる！ 殿下も私も本当に愛しているんだ！ 独占したいんじゃない。彼女に幸せになって欲しいんだ！」

『なら身を引けば？』

淡々としているリオンだが、その攻撃は一撃一撃が重かった。

「私はどんな手を使っても君には負けない。もしも殿下に何かするつもりなら、私の全てを賭けて君を いや、君の家族にも責任を取らせる！」

愛した人が同じだった。

それは最初悲しく、身を引こうと思ったが……その程度で引き下がるほどの愛でもなかった。

ジルクは自分のためではなく、ユリウスやマリエのために何でもする覚悟を持っていた。

『……決闘にそんな脅しは卑怯だね』

「何とでも言う方がいいさ」

二人は空の上で戦っており、闘技場の観客たちは見上げている状況で声など聞こえていない。

ジルクは手応えを感じ、このまま畳みかけようとする。

『私はどんな手を使っても君には負けない。もしも殿下に何かするつもりなら、私の全てを賭けて君を　いや、君の家族にも責任を取らせる！』

自分の声で、先ほどの台詞が聞こえてきた。

「な、なんで」

そういう魔法があるとは聞いていなかった。知らないだけで存在しているのかも知れないし、新しく開発されたのかも知れない。

そして、リオンが声を真似たという事もなかった。

『先に脅したのはお前だ。だから、俺も脅すことに決めた。そうだな、これをお前の実家に持っていこう。家族はどう思うかな？ 決闘で負けそうになったから脅したなんて貴族として終わったのも同然だよな！ あ、それとも大事な殿下やマリエに聞かせてやろうかな？ きつと軽蔑すると思うよ。いや、やっぱり学園に提出しよう！ 全校生徒に聞いて貰わないとね！』

ジルクはすぐに立て直す。

『もういいや　沈めよ』

リオンの声が冷たいものになった瞬間に、空中で踏みつけられたジルクはそのまま地面に向かって落ちていく。

そうして、地面に叩き付けられ意識が遠のく。

『姉貴にも迷惑をかけたけど、それよりも脅した連中はどうするか？』

既にリオンはジルクへの興味を失っていた。何しろ、ジルクの鎧は地面に叩き付けられボロボロで動けそうにない。

最後に思ったのは　。

（殿下、こいつは危険です。戦ってはだ　め　です）

そこで意識は途切れた。

愛

マリエは闘技場に立つ灰色の鎧を見て震えていた。

（何よ。なんなのよ。あんなに強い奴がいるなんて聞いていないわ。私は！ 私はこんなの知らない！）

ジルクを踏みつけていた足をどけると、すぐに係の者たちがジルクを救出する。命に別状はないが気絶しているようだ。

カイルが驚いていた。

「ちょっと、これって本当に大丈夫なんですか？ 四人ともほとんど何も出来ないまま負けちゃいましたよ」

ユリウスが手を握りしめた。

自分の白い鎧を見ている。

「あれほどの相手だとは思っていなかった。だが、俺の鎧は王国最高の技術で作られている。マリエ、心配するな」

マリエはぎこちない笑みを浮かべた。

（みんなそう言ってボコボコにされて終わったじゃない！ 本当に役に立たないわね。そう言えば、こいつら役に立たなくて戦争パトで負けまくるから兄貴にクリアしろ、って押しつけたんだったわ）

マリエの思考は前世のことを思い出していた。

こんな現状を認めたくない現実逃避だったのかも知れない。

（大体兄貴が悪いのよ！ 旅行に行ったのを母さんに言いつけてそのまま死んで その後、家族の中で私の居場所がなくなつて！ 結婚しても式も挙げられなくて、相手に逃げられたのに助けてもくれなくて！ 全部兄貴のせいよ！ そうよ、それにあのリオンって奴、なんか兄貴に似ていてムカつくわ！）

ユリウスは上着を脱ぐ。

すると、全身タイツのようなスーツに身を包んでいた。鎧に入るためには普通の服では邪魔になるため、考えられた服装だった。

だが、実際に目にとすると。

（なんか馬鹿っぽい。ゲームだと筋肉が浮き出てちよつと興奮したのに）

ユリウスが鎧の中に入ると、鎧の兜の目の部分が光る。ツインアイになっており、無駄にロボットのようになっていた。

カイルが白い鎧を見上げて羨ましそうにしていた。

「いいな。僕もアレが欲しいです」

マリエは首を横に振るのだった。

「騎士じゃないから駄目よ。それに、貴方はエルフだから動かせな

いわ」

「やってみないと分かりませんよ。僕はハーフェルフなので可能性
があります」

「駄目よ。それに私は鎧を持って」

そこまで口にして、マリエは思った。

（あ、あれ？ 亜人種と人が交配しても子供が生まれなはずじゃ
……まあ、ゲームだからその辺りは曖昧なのかも）

ユリウスがマリエを見下ろしていた。

『マリエ、行ってくる』

そんなユリウスに対して、マリエは頭の中で言葉を思い出す。

（確か、こういう時は）

「はい。ユリウスの勝利を願っています」

『ああ、頼む！』

主人公を真似た台詞や態度。マリエは五人の前で理想の女性を演
じていた。

（はあ、疲れるわ。そもそも、ぶりっ子で頭お花畑の主人公を真似
るとかマジできつい）

第二の人生、主人公の立ち位置を奪うために頑張ってきた。

出会う場所に張り込み主人公を追い出し、仕草やら台詞を真似て男子たちを魅了した。

誰がどんな性格か知っているのもあるが、それらは成功していた。

アンジェリカをかなり早い段階で追い出せそうになったのが証拠だ。しかし、そのためにイレギュラーな存在が出てきた。

リオンだ。

（とにかくあのモブをなんとかしないと。というか、これって負けたらどうなるのかしら？ ゲームだとゲームオーバーだった気がするけど）

自分の人生がかかっているので、是非ともユリウスには勝って欲しいというのがマリエの意見だった。

（そうよ。この世界をもっと楽しまないと。他にもいろんな男と恋をして、贅沢な暮らしをするの。元の世界なんて酷いことばかり。ようやく私は幸せをつかめるの。あんなモブみたいな男に負けない！）

闘技場に降り立つ白い鎧。

まるで輝いているように見える鎧は、王国最強の鎧の一つだった。後で更に強いバージョンが出てくるが、現時点では最強の一角だ。

……他にも最強があるという事は、一番強くないとかそんな突っ込みはナシだ。

『まさか俺まで順番が回ってくるとは思わなかった。誇るが良い』

尊大な態度を前に、俺は観客たちの祈るような声援が心地よかった。

もしかしたら全財産を賭けた馬鹿もいるかも知れない。だが、勝つのは俺である。

俺は小物であることを自分で理解している。

そんな俺が決闘に出たのはアロガンツがあるのも理由の一つだが、それは殿下たちがまだ一年生だからだ。

しかも一学期が終わった段階などまだ成長し始めたばかりに等しい。これから強くなる逸材たちも、今の段階では経験不足で実力不足。

叩くなら今。俺にとって都合が良かったのだ。

「雑魚を倒して誇っても……ねえ？」

煽ってみるが殿下の反応が薄い。

左手に盾を持ち、そして右手に剣を持った。

バックパックから両肩にかかるような砲が二門取り付けられてお

り、回転式の弾倉をしていた。

随分と豪華な鎧は、まさに王子様の鎧と呼ぶに相応しい。

主人公が本来結ばれるべき相手……だったはずなのだ。

「殿下、一つ質問をよろしいですか？」

『答えられることなら』

「特待生のオリヴィアさんをどう思います？」

しかし、殿下の反応は薄かった。何故、そんな質問をされるのか分かっていない様子だった。

『オリヴィアというのか？ 頑張っていると聞いているが、それがどうした？』

「……そうですか」

俺もスコープを構える。よく考えるとシユールな光景だ。だが、今からブレードに持ち替えても良いものだろうか？

ここまでスコープで来たのなら、最後までスコープで戦った方が良いかもしれない。

審判が少し苦しそうな顔をしていた。

だが、腕を上げて振り下ろす。

『はじめっ!』

しかし、開始の合図があっても両者動かなかった。

殿下は盾を前に出す形で待ちの姿勢を見せている。

ルクシオンは冷静だった。

『これまでの戦いを見て後手に回りますか。駄目な人ですね。性能差は歴然でしょうに。他の鎧よりも優秀そうですが、本当にそれだけの鎧ですね』

「なら仕掛けるだけだ」

アロガンツが大きく踏み込み、スコップで盾を突く。すると、殿下は攻撃を受け流して右手に持った剣で斬りかかってきた。

スコップの持ち手の部分で受け止めると、火花が発生する。

『まだまだあああ!』

盾と剣を使って連続攻撃。

それをスコップで受け止め、弾きながら下がる。殿下が俺を押しっていると、周囲からは熱のこもった声援が送られていた。

「こいつら、賭けに負けたくないだけだろうに」

『マスターが負けることで溜飲も下がるのでしょうか。先ほどもそうですが、随分気持ちよく説教をしていましたからね。観客からすれ

ば、マスターは“ウゼエ”のでは？」

「そういう言葉を使うんじゃない！ おっと！」

殿下の鋭い突きが目の前に迫り、地面を滑るように移動して下がる。それは向こうも同じで、スケートのように地面を滑り移動して斬りかかってくる。

受け止めると、殿下の声が聞こえてきた。

『俺は負けられない。俺の勝利を願ってくれる彼女のためにも負けられないんだああ！』

気持ちがかもったのか、刃が輝きを増していく。

鎧の背中から青い炎が出て殿下の鎧は凄く綺麗だった。

『芸術的な価値を認めます』

「お前にしては褒めるじゃないか。けどね、こっちも引き下がれないんだよ」

気迫のこもった一撃一撃をスコップで受け止め、弾く。鎧の中身操縦者の技量はあちらの方が上なのはよく分かる。

「王太子殿下、流石ですね。前の四人より随分と気迫が違いますよ。やっぱり、前の四人は心の中で思っていたんじゃないですか？ 一人減れば自分とマリエちゃんの時間が増えるから、殿下消えてくれないかな、って！」

『戯れ言を言うな！ お前に俺たちの何が分かる！』

白い鎧の背負っている青い炎が更に強くなり、勢いを増していた。圧倒的な性能差を覆そうと、鎧に無理をさせているのが分かった。

それだけ本気なのだろうが……。

「何も分かりませんけどね。このままが良いとは思えないですよ」

観客席　オリヴィアさんとアンジェリカさんを見れば、こちらを見ていた。

両手を組んで祈るように俺を応援しているオリヴィアさん。

アンジェリカさんは複雑な顔をしていた。俺が殿下と戦っているのが嫌なのだろう。

俺は殿下と話をする。

「殿下、真剣に他者を愛するってどういう気持ちですか？　俺、そういう気持ちがないんですよ」

『だろうな。だから他人の邪魔が平気で出来るんだ。本当に誰かを愛したことがあるのなら、こんな決闘騒ぎなど起こさないだろうさ！　本当に愛しているのなら、潔く身を引けば良い！』

「アンジェリカさんのことですか？　いや、殿下を愛していると思いますよ」

『　　じゃない』

「え？」

背中が勢いを増すと、殿下の鎧はスピードを上げた。

どの相手よりも素早く移動して斬りかかってくる。

それだけ本気なのだろう。

『あいつの気持ちに愛である訳がない！ あいつは俺の気持ちなど察しなかった！ 宮廷の女と同じだ。俺に王族としての生き方を強要する！ 俺は王族として生まれたくなどなかった。誰も俺を見ない宮廷での生活など』

仕方がないじゃない。だってあんた王族だし。

そう言えれば良いのだろうが、本人としてみれば好きで王族に生まれた訳でもない。

『マリエだけが俺の気持ちに気づいてくれた女性だった』

宮廷にはいないタイプの女性で、気になっている内にコロッと騙されたわけだ。

本来縁があったのはオリヴィアさんのはずだ。ゲーム的には、だが。

転生者のせいで駄目になった結果がこれだ。

野郎五人が手玉に取られ、とんでもない恥をさらしている。

『偉そうなことを言っているお前も同じだ！ お前の言葉は薄っぺらいんだ！ 今のお前は、大きな力を手に入れて傲慢になっただけの男だ！ 楽しいか？ それだけの力で他を圧倒し、上から目線で説教する気分はどんな気持ちだ！』

「 最高だね！！ 」

『 なっ！？ 』

殿下の鎧を蹴り飛ばすと、盾で防がれた。後ろに吹き飛ぶ瞬間に、両肩のキャノンで砲撃されたがガードはしなかった。

アロガンツは揺るがない。傷一つ付かなかった。

「 もう最高の気分だよ！ あれだけ威張り散らしていた威勢の良いお前らを、圧倒的な力でねじ伏せて説教すると気分が晴れる。言い返せないお前のお仲間もどうかと思うけどさ。まあ、負けた癖に言い返すしか出来ない姿も惨めさを誘うだけだよな！ そして教えてやるよ。俺は確かに傲慢かも知れないが、お前らはそんな俺にも勝てない訳だ。その辺の気持ちはどうだ？ 格下に見ていた奴に負ける気分はどうですか、王子様！ 」

『 貴様はあああ！ 』

圧倒的な力で相手をねじ伏せ説教する。

病みつきになりそうだ。

しかも、相手は俺を見下していた連中……罪悪感が薄いのもポイ

ントだろう。

ルクシオンが俺に同意してきた。

こいつの声は外に漏れない。俺との会話も外に漏らさない。とても有能なのだが……。

『マスター程度を論破できない時点で終わりです。もともと、負けたショックで言い返せなかったのでしょう。それにしてもゴミみたいな人間性ですね。感服しました』

左手を振りかぶり、盾を殴りつけると殿下の鎧は左手に負荷がかかったのか煙を噴いていた。

盾がゆがみ、殿下は盾を捨てる。鎧の指が折れ、曲がっておりもう使い物にならなくなっているのが見えた。

「それから一つ言っておく。お前の気持ちなんか知るか、ばか！ 大体、お前は俺の気持ちができるのかよ！ それにアンジェリカさんの気持ちだって」

『黙れえええ！』

斬りかかってくるのでスコープで鏢迫り合いを行い、頭部を付き合わせる。重量差があり、大きさもこちらが上だ。

殿下の鎧が覆い被されている形に見えるだろう。

「何が王族に生まれなくなかった、だ。お前、変態婆に売られそうになったことがあるのかよ？ 女子にペコペコ頭を下げて、嫁に来

てくださいって頼んだ経験は？ 田舎は嫌だとか、愛人も支援しろと言われたことは？ 惨めだぞ。結婚して生活の支援を全てするのに、愛は愛人と育むとか言われた気持ちがかかるかああ！」

マジで言われたし、俺に同意する男子もきつと多いはずだ。

観客席で頷く、もしくは涙を流して同意している男子たちの姿が見えた。

みんな……俺、今この世間知らずのボンボンに天誅を下すから、その場から見ていてくれ！

『そ、そんな事がどうしたというのだ！ お前らは自由じゃないか！ 良い相手を見つければ良いだけだ！』

腹が立ったので何回も殴りつける。その度に、白い鎧は揺らされ殿下の耐えるような声が聞こえてくるのだった。

「自由！？ 良い相手を見つける？ 俺みたいに必死に生きてきた男が自由！ 馬鹿にするなよ、このボンボンが！ お前、純潔の危機を感じながら！ 命がけで！ 小さな船で！ 空に船出が出来るのかよ！ あんな美人な婚約者がいて、他の女と遊んでいるのも許されて……何が王族に生まれたくなかった、だ。エンジョイしまくりじゃないか！ 出直してこい！」

『遊びではない！ 本気だ！』

「なおいわ！」

子爵家の娘ならギリギリ妾とか、愛人でもいけたはずだ。行けた

か？

詳しくは知らないが、公爵令嬢をないがしろにする理由にはならない。

そもその話　　こんなのが将来のトップとか、王国は大丈夫なのか？

将来の有力貴族たちもそうだ。

みんなで同じ女性を囲っていますとか、問題しかない。

スコップのフルスイングで剣を吹き飛ばし、腕を掴んで握りつづいた。

両腕を使えなくすると、距離を取って砲で攻撃を仕掛けてくる。

それを避け、弾切れを待った。

弾数にも限りがあるので、すぐに弾切れを起こした。

「はぁ……もういいだろう？　遊びは終わり。お前の相手はあっち分かった？」

親指で観客席　アンジェリカさんを指さすと、彼女は悲しそうな顔をしていた。身を乗り出して殿下の言葉を待っている。

アンジェリカさんは殿下が好きだ。いや、愛していると言って良い。この決闘も、彼女なりに殿下からマリエという女を引き離したかったために起こしたのだ。

戦えなくなつた殿下は。

『……まだだ』

「は？」

『まだ終わっていない。マリエを奪われるくらいなら死んだ方がマシだ！ 俺は絶対に負けを認めない。殺すなら殺せ！ これは決闘だ！ 俺かお前が死ぬまでこの決闘を止めることを禁ずる！』

誰にも邪魔はさせない、という意味だろう。

開き直りやがった。

王族がどうのこうのと言いながら、誰も止めに入るなと命令しているじゃないか。ダブルスタンダード……自分なら平気でやるが、他人がやるとイライラするな。

しかし、こうなると相手にするのは面倒だ。

「よし、心が折れるまでいたぶるか」

小声で呟くと、ルクシオンが呆れていた。

『最低な会話でしたね。しかし、先ほどまでのどんな言葉よりも実感がこもっていました。そこは評価します』

当たり前だ。俺の実体験だぞ。

説教で気分爽快！　なんて話じゃない。

ユリウスの白い鎧が両腕を壊しながらもリオンの鎧に殴りかかっていた。

その姿には必死さを感じる。

圧倒的な強さを持つリオンに立ち向かうその姿にアンジェリカは手すりを掴み、そして涙を流していた。

「本気……なのですね、殿下。本当にあの娘が好きなのですね」

自分の気持ちは届かないのだと諦めが付いたアンジェリカは、涙を拭う。

（そうだな。身を引こう。殿下が望まれないのなら私は身を引く）

視線は円状の観客席の反対側に向かう。

青い表情をしたマリエの顔を睨み付けた。

（だが、お前だけは認めない。殿下の隣に立つのはお前ではない。お前では殿下の邪魔をするだけだ。それだけは許さない）

諦めてなお、アンジェリカはマリエをユリウスから引き離そうとする。それがユリウスのためになると思っていた。

愛人を側に置き、他に四人もの男性と関係を持つ女　単純にそ

んな女を王妃の座につかせるわけにはいかなかった。

短期間で五人も籠絡した女だ。

この後もどんどん男を増やしていくのだろう。

そんなマリエが王妃になったら、争いの種が激増するのは目に見えている。

そして、王宮もそれを黙っている訳がない。

ユリウスがボロボロになるのを見て青ざめ、そして狼狽するマリエをアンジェリカは睨み付けていた。

（例え私がどうなろうとも、お前だけは引きずり下ろして道連れだ。絶対に殿下を好きにはさせない）

ユリウスが愛していると宣言した女性との関係を引き裂くのは心が痛むが、アンジェリカはそれだけはどんな手を使っても実行するつもりでいた。

すると。

「ま、間違っています！」

オリヴィアが声を張り上げた。

「確かに王太子殿下はマリエさんを愛しているかも知れませんが。でも、でも！ アンジェリカさんだって王太子殿下を愛しています！ だって、ずっと、ずっと苦しそくにこの戦いを見守っているんで

すよ！ 見ているのも辛いのに、目を背けないで悲しそうに見ているんです！ 愛じゃないなんて言わないでください！」

アンジェリカは焦ってオリヴィアに声をかける。

「お、おい、止める」

興奮しているようなので肩を掴んで引き下がらせようとするが、オリヴィアは止まらなかった。

よく通る声で、そして人を惹き付ける声で叫ぶ。

闘技場内にいる観客 生徒や教師たちの視線を集めた。

「どうして否定するんですか！ 相思相愛でなければ愛じゃないんですか？」

「良いから止める。オリヴィア、もう止せ！」

「いいえ、言わせて貰います。アンジェリカさんの気持ちは愛です。受け取る、受け取らないは本人の自由です。けど、否定なんてしないでください！」

オリヴィアの言葉はマリエにも届いていた。

……腹が立つ。

マリエは素直にそう思った。

（これだから良い子ちゃん嫌なのよ。頭お花畑なんじゃないの？
一方的な気持ちなんて愛じゃなくて迷惑よ！ 本当にイライラするわ。こいつの台詞ってイライラするのよね）

マリエとはそもそも考えが異なっていた。

だが、その透き通った声で周りの心を掴むオリヴィアを前に、マリエは悔しさを顔ににじませていた。

本物を見せつけられているような気になった。

それは、自分が偽物だと自覚していることも大きい。

本来彼女がいるべき場所を奪った。

美形で金も権力も持っている男たちを侍らせるのは、本来はオリヴィアだったのだ。その立ち位置を奪ってなお、彼女は輝いている。

（少し強いモブを味方にしたからって何よ。私にはみんながいるわ。そんな強いだけの三枚目みたいなお笑い担当のモブなんかより、みんなの方が絶対に良いに決まっている）

まっすぐにオリヴィアはマリエを見ていた。

その目が怖かった。

まるで偽っている自分を見抜かれるような感覚に一歩だけ後ろに下がった。

マリエには、嘘で塗り固めたお前から自分の居場所を取り戻すと
言っているように見えた。

そんな時だ。

『言いたいことは　それだけか、女』

ユリウスが声を絞り出している。

鎧の中から喋っているのが愛だとして声がかくもっているが、ユリウスはオ
リヴィアに言い返した。その口調は怒気を孕んでいる。

『一方的に押しつけるのが愛だと？　俺を王子としか見ていないそ
の女の気持ちか愛？　俺は……俺個人を見てくれる女性を見つけた。
そして分かったんだ。これが愛だ。これこそが愛だ！　アンジェリ
カ、お前は俺を理解しようとしたか？　お前の気持ちは押しつけた。
愛じゃない。もう、二度と俺に関わるな！』

ユリウスの声にマリエは持ち直した。

（そ、そうよ。私は間違っていないわ。間違っているのはあっちよ。
何よ、主人公と悪役令嬢が並んじやって。ゲームだと思いつきり争
っていたじゃない。さっさと喧嘩しなさいよ！）

ユリウスはまだ戦うつもりだった。

『さあ、続きを始めようか。どちらかが死ぬまでこの決闘は終わら
ない。俺は覚悟を決めたぞ。お前はどうか！』

灰色の鎧はスコップを担いでただ立っているだけだった。

（ユリウスは王太子。貴族なら空気を読みなさいよ。あんた、自国の王子様を殺す気？ さっさと負けを認めなさいよね）

すると、リオンは……先ほど以上にユリウスを責め立てた。

『覚悟を決めた、ですか？ 今まで覚悟もなく戦っていたと？ 負けそうになってようやく決める覚悟ってなんですか？ 馬鹿にしているんですか？ とうかさあ……決闘ってそもそもそういうものだから。学園内の暗黙のルールがあるから命は取らないだけで、本気になったらすぐに終わっていたんだよ。気が付かなかったの？ これなら五人同時に相手にしても良かったわ。その方が楽に終わっただし。自分たちの方が強いって自信満々にしていたから警戒したけど、想像以上の弱さだったよ。勘弁してよ。これだと……俺が弱い者いじめをしているみたいじゃないか』

揚げ足取りに加え、徹底的にユリウスたちを虚仮にしていた。

マリエは思った。

（な、なんなのよ、こいつ。まるで兄貴みたいにネチネチと人の揚げ足取りをして嫌な奴！）

『今まで覚悟が決まっていなかったけど、ボロボロになって負けそうだから覚悟が出来た、ですか。自分の命を盾にして勝ちを得ようとする執念は認めますよ。こう言えば俺が引くんだろうな、って淡い期待があるのが見え見えでドン引きですけどね。流石に俺も王太子殿下は殺せないし負けを認めてあげようかな。良かったね。君は王太子殿下だから戦いに勝利するんだよ。王子として生まれなくなつたと言いながら、立場を最大限に利用するその強さは賞賛に値

しますよ』

闘技場内にいる全員が思っただろう。

こいつ最低だ、と。

辛辣に責め立てているが、正論もあるだけに的外れでもなかった。実際、ユリウスは言い返せずに動かない。リオンが心動かされるかも知れないという淡い期待が、本人にもわずかにあったのだろう。

だが、リオンは小揺るぎもなかった。

『ほら、負けてくださいって言えよ。僕は大好きなマリエちゃんと離れたくないから、勝たせてくださいってお願いしろよ。負けるなんて思っていなかったんです。許してくださいってお願いしてごらん』

ユリウスが反論した。

『で、出来るわけがないだろう！ これは神聖な決闘だ。互いに全力で戦うのが礼儀だ！』

『え？ 気を利かせてお前が負けを認めろ、って？ 王太子殿下、それはきついっすわ。どう見てもここで負けを認めたら神聖な決闘の侮辱じゃないですか。ここからどうやっても逆転できそうにないし。それとも俺の気持ちを動かすような名演説でもはじめます？ まあ、心が動かされるとは絶対に思いませんけどね。五人が五人とも、聞いていて首をかしげなくなる戯言ばかり。俺の心は一ミリも動かされませんでしたよ。逆にここまで嘘くさい台詞をよく言えると感心しましたけどね』

闘技場内の雰囲気は最悪だった。

王太子殿下を煽っているリオンに不満が募っている。観客席からは「王太子殿下、そんな奴やつつけて!」という女子の声が徐々に大きくなっていた。

(こいつ気持ち悪い。どこにでもこんな最低男がいるのね)

女子のほとんど、そして男子もリオンに罵声を浴びせていた。

アロガンツの中、俺は小さく溜息を吐いた。

ルクシオンは俺のことを最低野郎と言ってくる。

『よくもあそこまで言えたものですね。気分は最高、という状態ですか?』

「やり過ぎたとは思っているよ。けど、五人とも少しは自覚して貰わないと俺が困る。こいつら、今はこれでも将来は国の中核だからな」

そう、五人が五人とも今のままでは困るのだ。せめて、上には上がいるのだと自覚して貰わないと困ったことになる。

『悪役に徹したとでも? 随分楽しそうでしたか?』

「……正直、めっちゃ楽しかったよ。まあ、二度としないだろうけ

ど」

闘技場内は俺が悪役で、殿下を応援する声強い。

それでいい。

俺は周囲から罵声を浴びせられながら、殿下に近づいた。

殴りかかってきたので受け止めて捕まえる。

「……殿下、俺は引きませんよ」

『離せ。離せえええ！ この騎士道も知らぬ獣以下の外道が！ 例えお前に勝てなくとも俺は戦いを止めるつもりは』

暴れ回る白い鎧を、アロガンツは余裕で押さえつけていた。

性能差があつて本当に良かった。

「真面目な話をしようか。お前、本当にこのまま幸せになれると思つているの？」

『な、何が言いたい！』

婚約者を侮辱し、男を侍らせている女との愛を本物だと言つ。こんな奴が将来の国王だと思つと涙が出てくる。

周りはやはり学生気分で気が付いていない。いや、気が付いていても見ないようにしている気がする。

将来的にマリエを中心に火種が発生するのが目に見えているのだ。

五人の男に囲まれている女がいたとして、そいつが産んだ子供は誰の子だ？ きっと誰かが疑うし、その疑問を利用する輩も絶対に出てくる。

そうになったら、こいつはどうする？

途中で目が覚めて跡取りを生んでくれる女性を迎えるのか？

まあ、その前に、だ。

王太子殿下とは言っても、この世界では後ろ盾が必要になってくる。力のある大臣やら諸侯 領主貴族たちだ。

誰もが認めない王がいても政治は上手くいかない。

派閥やら何やらと、王も大変なのである。

そして、この王太子殿下を調べたら、最大の支援者というか後ろ盾が公爵家だった。アンジェリカさんの実家である。

派閥をまとめ、殿下の王位継承を後押ししている。

こいつ、自分から最大の支援者を敵に回そうとしているのだ。

ゲームではそこに聖女が出てきていたが、問題はマリエが聖女ではないということだ。上手くやっている転生者にすぎない。

つまり……俺と同じモブなのだ。

いつかヘマをしそうだ。いや、もう半ば詰んでいる気もする。

俺がマリエの尻拭いをしてやっているようなものだ。お前は前世の俺の妹かと言ってやりたい。

「愛？　素晴らしいね。王位継承権を捨ててまでも手に入れたいその心意気は認めますよ」

『……っ！』

こいつはそれも分かっていたのだろう。

分かっているけどマリエを選んだらしい。

「やっぱり今の地位を捨ててでも、ですか」

『愚かだと笑うか？　だが、それだけの女性を俺は得た。地位や名誉もいらない。あいつだけいてくれればそれで……』

「相手は地位や名誉も込みで王太子殿下が欲しいと思いますけどね。ただの殿下なんて見向きもしないと思いますよ」

地位も名誉も財産も、全て失ったらきつとマリエは見向きもしくなるのでは？　俺にはそう思えて仕方がない。

『そんな事はない！　マリエは付いてきてくれる。俺は　俺たちはマリエさえいてくれれば』

ここまで言わせるのだから、マリエという女も恐ろしい女だ。た

だの主人公の真似だけでここまで言わせられるというのも才能だろう。

そんな奴に真実の愛があるとも思えないが。

そもそも、愛しているのなら男を六人も侍らさないだろう。

「それは良かったですね。でも、負けるんだから今後は付き合いを遠慮してください」

俺は殿下を解放するとスコップで思いっきり叩いた。

白い鎧がへこみ、そして中にいる殿下は大きく揺らされ体勢を崩した。

ルクシオンが準備は整ったと知らせてくれる。

『解析終了しました。パイロットの安全は確保可能です』

「手加減って難しいよね。ほら、これでおしまいだ」

スコップを手放し、右手で殿下の鎧の胸部装甲に触れた。掌を当てるとアロガンツの右腕の装甲が展開。内部が光を放ち、そして次の瞬間に。

『インパクト』

ルクシオンの言葉と同時に、衝撃が起きて殿下の鎧が粉々に吹き飛んだ。一瞬でバラバラになった鎧に、観客たちは絶叫する。

鎧は碎け散ったが、俺は左手で殿下を受け止める。

気を失っているため抵抗せずにいてくれて楽だった。

右腕が元に戻ると、俺は手放したスコップを回収した。

静まりかえる闘技場。

俺は審判に視線を送ると、審判は勝利宣言の前に医者を送つてきて殿下の安全を確認していた。

幸い、気を失っているだけだと分かると頂垂れるように勝者を宣言した。

『勝者、リオン・フォウ・バルトファルト　よつて、決闘の勝者はアンジェリカ・ラファ・レッドグレイブ。両者、決闘の誓いに則り』

決闘に負けた方は勝者に従えと言って終了が宣言された。この瞬間、闘技場内には殿下たちに賭けた証拠の青い札が舞う。

絶叫と罵声が入り交じったなんとも心地よい響きに包まれた。

俺への罵声が実に心地よい。

「金返せ！」

「インチキだ！　こんな決闘が認められるものか！」

「返してよ。私のお金を返してよ！」

俺はスコップを掲げ、そのまま会場内をゆっくり飛行して観客た

ちの顔を録画して回った。

どいつもこいつも絶望した顔をしているが、中には俺に賭けた奴もいるのか赤い札をポケットに大事にしまい込んでいた。

「みんな……賭け事は程々にね！」

そう言っただけでやったら、ゴミなどを投げつけられる。しかし、華麗にそれらを避けながら高笑いをしてオリヴィアさんたちの所に戻った。

着地して鎧を脱ぐと、ボックスの中に鎧を戻す。すると、鎧が収納されてボックスは空へと戻っていった。

「……回収できるんだよね？」

『当たり前じゃないですか』

箱が空に消え、そして俺はオリヴィアさんから上着を受け取って羽織った。

「どうだ、お嬢様。見事に勝ってまいりましたよ」

アンジェリカさんは複雑そうな顔をしていた。

まあ、愛しの殿下をボコボコにした俺に、複雑な感情を抱くのは仕方がない。

「そつだな。礼を言おう」

礼を言うような顔ではない。表情は青く、どうにも殿下のことを気にしている様子だった。

だから俺は真顔で告げた。

「怪我はさせていない。気を失っているだけなのは本当だよ」

何かミスがあつたとしたらルクシオンのせいだ。俺のせいじゃない。

オリヴィアさんも複雑そうな顔をしている。何よりも、周囲を見て危機感を覚えたらしい。

「あ、あの、これで本当に良かったんですか？ 周りの方たちの視線が」

俺を視線で射殺さんばかりに睨み付けてくる生徒たち。

罵声を浴びせてくる奴や、泣いている奴もいた。

「どうするんだよ！ お前のせいで全財産が！」

「お願いだから返して！ 借金なの。借金したお金で賭けたの！」

「こんな賭けが認められるかよ！」

世の中を舐めている貴族の子供たちには良い薬だろう。借金をしたという話もあるが、する方が馬鹿なのだ。

「放置で良いよ。あいつらは賭け事で全財産をすったんだ。自業自得。良い勉強になったことだし、授業料と割り切って貰うさ」

アンジェリカさんが溜息を吐く。

「よく言う。こうなると分かって自分も大金を賭けたんだろうが。今回の件、助かった。ありがとう。……礼は後ですとしよう。私は殿下の所へ向かう」

アンジェリカさんがその場を足早に離れていくのを見て、俺もオリヴィアさんと更衣室へと移動したのだった。

オリヴィアさんが心配そうに俺を見る。

「リオンさん、どうしてあんなに酷いことを殿下たちに言ったんですか？ 黙っている方が良かったですよ？」

道すがら話をしたのだが、オリヴィアさんはどうにも俺に幻想を抱いているらしい。

というか、どうしてこんなに俺に優しいのだろうか？

特別に何かした記憶はあまりない。

学園で話するのが俺だけで、周囲の状況から仲良くなっている気はするが……少し問題だな。

「俺にヘイトが集まる方が良かったから。それだけだね」

「良いんですか？ あ、あの、結婚とかこの先不安になると思うんですけど」

「ああ、それは大丈夫。俺、退学になるだろうし」

俺の言葉にオリヴィアさんが「へ？」と間の抜けた声を出した。

しかし、美人は得である。そんな表情でも可愛く見えるのだから。

愚か者たち

どんな世界でも女で身を崩す男たちはいるらしい。

それがこの世界では王太子殿下だった。

本来であれば聖女である主人公と愛を育むはずだった。時間をかけて周りに認めて貰い、そして幸せな結婚へと続くわけだ。

性急に事を進めたどこかの馬鹿は、大事なことを見落としていたのだ。

主人公 オリヴィアさんだから王太子殿下と結ばれたのだ。

オリヴィアさんの偽物が同じ事をしてても無駄である。それこそ、自分自身としてアタックしていた方が結果はマシだったかも知れない。

ふっ、乙女ゲーの世界で少し考え込んでしまった。

「それで、この私に君の後始末をしるというのかね？」

現実逃避もここまでだ。

俺は夏休みを利用してアンジェリカさんの実家 レッドグレイ
ブ公爵家に来ている。

現当主の【ヴィンス・ラファ・レッドグレイブ】は、灰色の髪を

オールバックにした威厳のある男性だった。背は高く鍛えられた体を持ち、眼光鋭い中年男性。

隣に立つのはそんなヴィンスさんの息子で、アンジェリカさんの兄である「ギルバート・ラファ・レッドグレイブ」だ。金髪碧眼だが、ヴィンスさんによく似た顔立ちだ。

年齢は二十代前半だ。

二人とも俺を睨み付けている。

俺は姿勢を正してお願いする。

「自分では王宮に何の伝もありません。これでは何も出来ない状況です。資金の方は白金貨を用意いたしました」

積み上げた白金貨は、学園の賭け事で稼いだ金額だ。貴族の馬鹿な子供たちの借金やお小遣いの結晶は、とんでもない額になっていた。

それを積み上げ、差し出す俺。

要はお金を出すので守ってくださいとお願いしているわけだ。

情けない？ 金で自分の命が買えるなら俺は買っね！

何かを言おうとしたギルバートさんを、ヴィンスさんが手で制した。

「成り上がりの男爵にしてはよくかき集めたものだ。確かに宮廷工

作には金がかかる。娘の決闘代理人だ。面倒を見よう。だが、あれもこれも守れと言われても困る。君は私の寄子ではないし、同じ派閥の仲間でもない。娘の短慮に付き合わせたが、言い換えれば首を突っ込んだのは君の方だからね」

本来、俺は関わるべきではなかった。そう言いたいのだろうか……。

俺は内心でガッツポーズをしたかった。

まだ学生という身分を最大限に利用し、この危機的状況から望む方向に事を運ぶ。俺の人生はここからだ！

「はい。分かっています。自分の命、そして家族に責任が及ばないようにしていただきたいのです」

ヴィンスさんが机の上で指を組んでいた。

「……名誉は既に地に落ちた。次は地位を捨てると？」

決闘で五人をボコボコにしたのは良いとしても、心までへし折るほどに貶した。名誉ある決闘にはほど遠い。

「与えられるはずだった爵位と騎士の称号は返上します」

今回の一件、大金と爵位、騎士の称号。これらをもってチャラにしてくださいと頼み込んでいるのだ。

王太子殿下と決闘したことを考えれば安い代償だ。

ついでに婚活から逃げられる。

ギルバートさんが俺に問いかけてきた。

「一つ聞きたい。君の本当の目的は何だ？ それだけの力があるのなら、あの場をやり過ごして立身出世も可能だったはずだ。一代で子爵家にまで上り詰めた可能性だってあるだろう。それを捨ててまで何がしたかったのか気になる」

イライラしていた、攻略キャラを殴りたかった、ついでに婚活地獄から逃げ出したかった。

色々理由はあるが、どれも言えないのでそれらしいことを口にする。

「あのまま女に騙される殿下を放置できませんでした。国のため、ですかね。誰かがやるべきだと思っただけです」

ヴィンスさんがクツクツと愉快そうに笑っていた。

「それが本心なら立派なことだ。だが、確かに遊びならまだしも本気では困る。おかげで宮廷や名門貴族たちは大慌てだよ。レッドグレイブ家はアンジェと殿下の婚約も正式に解消した。アレに娘は相応しくない。そうは思わないかね？」

試されている気がする。

別によく見せようなどとは思っていない。命が助かり、貴族という身分 婚活から解放されるなら満足だ。

憂さ晴らしにあの五人をボコボコにして、婚活地獄からも逃げられ貴族でもなくなる。ああ、俺は望んだ結果に近づいている。

「二人の関係は自分が口にすることではありません。個人的には学園でこれから学んで欲しいと思います。立派な王になって欲しいですね」

「……そうか。話は変わるが、一つ頼みがある」

「なんでしよう?」

「娘のことだ。今回の一件、随分と堪えているらしい。やつれて元気がないのは親としても見ていられないのでね。手頃な田舎に休養に出したかったが、家の事情で少々立て込んでいてね」

寄子や同じ派閥の整理というか、後始末だろう。アンジェリカさんを裏切った訳で、公爵家が黙っているわけがない。

連日、生徒たちの親兄弟が謝罪に来ており、大変忙しいそうだ。

取り巻きとして送り出した子供や兄妹が、主人の娘を裏切ったら大問題だ。

アンジェリカさんに謝りに来る人も多く、どこか手の届かない場所では休養させたいというのだろう。

「君の実家は条件が良いのですね。帰り際に連れて行ってもらおう。世話役を数人つける」

「え、あ……は、はい!」

娘を男に任せる。それってどうなの？　なんて思ったが、公爵令嬢に手を出すなんて俺には無理だし、そんな考えを抱いたなどと思われたら怖い。ここは、旅行ですね、お任せください！　的なノリで引き受けよう。

「ありがたい。では、下がりなさい」

「失礼しました」

部屋を出たところで、俺は安堵して胸をなで下ろした。これで俺の学園生活は終わってしまうだろうが、気分は最高だ。

心残りがあるとすれば、師匠にお茶を学べなかったことくらいだ。決闘の際に品がないと怒られたが、おいしいお茶を飲ませてくれた。

「本当にそれだけが心残りだな」

後はダニエルやレイモンドが気になる。三年のルクル先輩はどうしているだろうか？　学生食堂の人気デザートを全部制覇していないのも残念だ。

……なんだ、気が付けば俺も結構学園生活を楽しんでいたのか。

リオンが去った執務室。

ギルバートがヴィンスに視線を向けた。

「父上、どう思われますか？」

ヴィンスは笑っていた。

「お前の言ったとおりだ。自分のことだけを考えているお利口な子供なら黙ってその場で静観しただろう。実際、そういう子は多いのではないかな？」

リオンが用意した白金貨の山を二人は見る。

「……随分な大金を用意しましたね」

「地位も名誉も捨てて殿下を諫めた。立派な覚悟ではないか。それに引き換え、乳兄弟のご機嫌取りはいかな。本来はアレが諫めるべきだった。それにしても、学園というのは今も昔も問題が多い。世間知らずの子供が多すぎる」

学園内は少し特殊な環境だ。

次世代の貴族たちを教育する場所であるため、建前としては皆を平等に扱うことになっている。そんな事は無理なのに、だ。

特殊な環境で世間の目を気にしない。内輪の評価にこだわってしまつたため、時にこうした事件も起きる。

世間知らずが集まって出来た箱庭なのだ。問題だつて起きる。

今回の一件は問題が大きく騒ぎになった。そして、夏期休暇で実家に戻った生徒たちは、そこで現実を知ることになる。

実際、アンジェリカの取り巻きたちも、公爵家に喧嘩を売ったという意味を知ることになる。

「まあ、他にやり方はいくらでもあったように思いますけどね」

「そうか？ 愉快じゃないか。決闘を申し込んだアンジェは浅はかだったと思うが、誰もが敵となり助けない状況で名乗りを上げる…美談ではないかな？ 騎士とはそうあるべきだな。表向きは、だが」

ギルバートはヴィンスの真意を問う。

「どうされるおつもりですか？」

ヴィンスはニヤリと笑う。

「娘の恩人だ。尻拭いくらいしてやろう。それに、だ。お前も頼りになる家がある方が良さだろう。取り込めば、レッドグレイブ家は安泰だと思わないか？ 今回の一件で、いくつかの家は頼りにならないとハッキリしたからな」

二人が窓の外を見る。

そこには、七百メートルを超える飛行船が一隻浮かんでいた。見たこともない作りも気になるが、ダンジョンで発見したロストアイテムというのが二人の心に響く。

冒険者が尊ばれる世界。

リオンの功績は男子にとって憧れである。

「名門貴族の男子を容易に倒した実力は高く買います。ですが、どこまで取り込むおつもりですか？ 当家の関係者で年頃の娘を用意しますか？」

ヴィンスは顎に手を当てる。

「それもいいが少し弱いな。耳ざとい連中や目端の利く連中なら喉から手が出るほどに欲しがるだろう。だが、まずは尻拭いからにしよう。宮廷に行く。領地はお前に任せるぞ」

ヴィンスは立ち上がると、本気で宮廷工作に乗り出すことにした。

ルクシオンの艤装を再現した飛行船。

名前は「パルトナー」だ。

フワフワ宙に浮いている円柱に、手が付いたロボットたちが飛行船の管理をしている。ルクシオンを手に入れる際に壊し、壊れていた機械を回収、修理をして制御させていた。

丸っこい鎧で足のない防衛用のガーディアンも仕事をしていた。

甲板に出ると風が気持ちいい。

俺の横には球体ボディーのルクシオンが浮かんでいた。

『お二人のところには行かないのですか？』

二人というのは、夏期休暇についてきたオリヴィアさんと 傷
心中のアンジェリカさんのことだろう。

世話役に数名の侍女を付けられたが、俺が関わる二人はオリヴィ
アさんとアンジェリカさんだけだ。

「何を話せて言うんだ？ 俺に気の利いた台詞なんか期待されて
も困る」

『誰も期待していませんよ』

「お前、俺のことが嫌いか？」

『嫌いではありませんが、好きでもありません』

……有能でなければそのボールのような体を掴み、空に投げつけ
ているところだ。

「……はあ。実際問題、何を言って良いのか分からないんだよ。正
式に婚約破棄だぞ。おまけに二人の話し合いも失敗したんだろ？」

アンジェリカさんは殿下と二人で話をしたが、結局上手く話はま
とまらなかった。

決闘によって殿下とマリエは恋人関係を解消。

障害がある方が愛は燃えると言うが、本人 殿下は例え関係が
切れても愛し続けるし、幸せを祈るらしい。

純潔を守るとか変なことを言っていた。

清い体なのか気になるところだ。いや、気にならないな。どうでもいい。待った、やっぱり良くない。

あいつアレでも王太子だった。世継ぎがいないと困るので、適当な女性と子供を作って貰わないと国が危ない。

「俺が口出ししても解決しないから関わりたくない」

『本当に清々しいほどの駄目人間ですね』

船内。

客室らしき場所でベッドに腰掛けているのはオリヴィアとアンジェリカだった。

アンジェリカは最近更にやつれていた。

決闘後、ユリウスとの話し合いは上手くいかなかったらしい。

オリヴィアは夏期休暇とあって、アンジェリカに付き添っていた。

「笑える話だ。私の気持ちは何一つも通じなかった。引き離れた女にも負けるのだから、私は相当な愚か者らしい。女としても完敗だよ」

ユリウスはアンジェリカを拒絶した。

引き離されようともマリエを愛することは止めないと言われたそう
うだ。

「アンジェリカさんは間違っていない」

「だろうな。婚約者を奪おうとした女に喧嘩を売ったら打ちのめされただけだ。笑えるよ。試合に勝って勝負に負けたと言うのかな？」

リオンのおかげで決闘には勝つことが出来たが、結果としてアンジェリカはマリエに負けた形になった。

「結局何の意味もなかった。私のわがままにリオンやお前を巻き込んだだけだ」

オリヴィアは俯いた。

「そんな事はありません。私は口だけで、結局頑張ったのはリオンさんです。リオンさん、言っていたんです。最初から退学するつもりだった、って」

アンジェリカは涙を流す。

「私は礼も言わずに殿下の所に行ったんだ。あの場で、ちゃんと礼を言うておくべきだった。やっぱり、私は駄目な女だな。そこまで覚悟をしているとは思わなくて……」

泣き出すアンジェリカの背中を、オリヴィアがさすっていた。

部屋の外から二人の会話を聞いてしまった。

『心が痛みますね。私に心があるか分かりませんが、これを聞いて何も思わないのですか？』

ルクシオンの言葉が胸に突き刺さった。

「……勘違いですごめんなさい」

確かにこのままでは駄目だと思ったが、別に本気でどうにかなるとは思わなかった。婚活が嫌で逃げたくなつたのと、あいつらを殴りたかつただけだ。

そんなに重く考えないで欲しい。

暴れるのに丁度タイミングが良いかな？ と思つただけだ。

『これからどうするつもりですか？』

「中退して親父の世話になる。見つけた島で独立して陪臣にでもなれば、平和に暮らせるだろうさ」

『……上手くいくでしょうか？』

「いや、行くだろ。王太子に喧嘩を売つたんだぞ。大金だつて払つて謝るんだ。殺されないだろ。あれ？ 殺されないよね？ どうしよう、不安になってきた。もういつそのこと逃げるか？」

『いえ、そういう意味ではないのですが』

乙女ゲーの世界。

ドタバタした時間が終わってみると、少し寂しい気もする。

ただ、モブの俺にはこの辺りが引き際だ。随分と濃い時間を過ごさせて貰った。もうお腹がいっぱいだ。

予定は色々違ったが、ここまで頑張ったんだから良いだろう。

俺はモブなりに頑張った。

夏期休暇。

マリエは学園に残るように言われており、そして王宮からの使者が来るとこれからのことを告げられた。

使者は文官のような男で、淡々と事務的に話を進める。

その内容はマリエを啞然とさせるに十分すぎた。

「ま、待ってください。み、みんなが廃嫡ってどういう事ですか？」
集まったのはユリウスを始め、マリエが付き合っていた攻略対象の男子たちだ。

文官の男は淡々と告げる。

「聞いての通りです。ユリウス殿下は廃嫡し、王太子殿下ではなく
なりました。今日からは殿下でございます。他四名につきましても
廃嫡が決定いたしました。王太子殿下……いえ、殿下もレッドグレイ
ブ家と婚約破棄されましたが、他の方々も婚約中だった女性から
の手紙を預かっております」

ジルク、ブラッド、クリス、グレッグ……四人は婚約者たちから
の手紙を受け取り、少し悲しそうな顔をしていた。

手紙の内容は正式な婚約破棄が成立したことを知らせる手紙だっ
た。

マリエは反論する。

「決闘で負けたからってあんまりよ！　こんなの酷すぎるわ！」

そんなマリエにグレッグが髪をかきながら言う。少し照れくさそ
うだった。

「いいんだ、マリエ。俺たちは覚悟が出来ていた」

「え？」

クリスが事実を話す。

「少し前から婚約者に好きな人が出来たと伝えていた。実家や婚約
者からも考え直すように言われてきたんだ。だが、今回の一件で見
限られたらしい」

マリエだけが知らなかったのだが、ユリウス以外もけじめを付け

ようとしていた。

その結果が廃嫡。

跡取りではなくなったのだ。

ユリウスは継承権を持たないただの王子に。

ジルクも学園卒業後は男爵の地位を保証された騎士になる。だが、治める領地もなければ宮廷での役職すらない。

他の三人も同じような状況だった。

四人とも実家からの支援は期待できなかった。

例外はユリウスで、王家の血を引くために利用価値があると判断されたらしい。言ってしまうえば婚姻外交に利用される王子だ。しかも国内では悪評が高く、国外が婿入り先として濃厚というおまけ付き。

ユリウスは頂垂れている。

「俺はもうマリエの側にはいられない。だが、ずっと君の幸せを祈っているよ」

マリエはめまいに襲われた。

マリエに不幸があるとすれば、その魅力が本物だったことだろう。主人公の真似　オリヴィアを真似ただけでここまで彼らも本気にはならない。

そうさせるだけの外見的魅力と、前世の経験がこの事態を作ってしまった。

グレッグが安心させるために笑う。

「なに、お前の分まで守ってやるよ。それに、生きていこうと思えばどうとでもなるからな。冒険者なんて良いんじゃないか？ ロストアイテムの鎧を見つけたら、今度こそリオンの糞野郎にリベンジだ」

クリスが小さく笑っていた。

「そうだな。悪くないかも知れないな」

ブラッドが皮肉を言う。

「ただの名ばかりの男爵四人。まあ、この四人ならなんとかなるだろうけどな」

ジルクが少し悲しそうにしていた。

「殿下、申し訳ありません。彼を止められていればこんなことにはならなかったでしょうに」

ユリウスが小さく首を横に振った。

薄らと笑みを浮かべているが、悲しそうに見える。

「いいんだ。お前たちがマリエを守ってくれるなら、俺はどこにい

ても安心できる」

カイルが頭の後ろで手を組んでいた。

「皆さん色々と考えていたんですね。良かったですね、ご主人様」

本当にそう思っているような笑顔に、マリエは目の前が真っ暗になる思いだった。

「え、ええ、そうね」

（はあ？ ふざけるなよ、馬鹿！ あんたら、なんでそんな風に地位や財産を捨てられるのよ！ っていうか、あんたらそれって結局無職よね？ それでどうやって生活していくつもりなのよ！ 冒険者？ その日暮らなんて絶対に嫌よ！ こ、こうなったら金持ちを見つけてたらし込まないと）

現実的な思考に切り替わったマリエは、笑い合っている男たちを見てドン引きしていた。

文官の男が去って行く。

「それではこれで失礼いたします」

まだ仕事をしている分だけ、この文官の男の方がマシだと思いつながらマリエは自分の想像していた未来が遠のいていくのを感じることがあった。

将来無職の予定である四人の彼氏を持っているようなものだ。

望んだ結果とは違いすぎていた。

（どうしてこうなるのよ！　こんなの、私の望んだ未来じゃないわ！）

俺の発見した浮島は入学前よりも整備されていた。

日夜、ロボットたちが頑張ってくれており、それなりの形になりつつある。

いずれここで独立して、混乱する王国を心配しながら平和に高みの見物をしようと思っているのだが。

「なんでついて来るかな？」

ロボットたちが手入れをしている畑の様子を見に来たら、オリヴィアさんとアンジェリカさんまでついてきた。

アンジェリカさんが綺麗に並んだ畑を見ている。

「良いじゃないか。こういう機会は滅多にないから新鮮だ。男爵の領地はどこも開発途中で見ていると邪魔になるだろうからな」

実家は俺の投資により今日も忙しくあっちこっちを開発中である。道の整備に水路の整備、他には開拓村も出来ている。

港の方も拡張していて慌ただしい毎日が続いているようだ。

オリヴィアさんが真剣な顔つきで畑を見ていた。

屈んで土の様子やら周囲を見ている。

「凄いですよね。人がいないのにここまで綺麗な土地は見たことがありません」

アンジェリカさんが首をかしげていた。

「そうか？　人がいないから綺麗だと思うのだが？」

オリヴィアさんが否定をする。

「何を言っているんですか。これだけ手入れの行き届いた場所に人がいないなんてあり得ませんよ。ロボットでしたか？　凄いですよね」

俺は頷いておいた。

色々と説明するのも面倒なので、凄いよねと言って同意だけはおく。

アンジェリカさんが顔を上げた。

「なんだ？　変な臭いがするな」

風に乗って運ばれてきた臭いが気になるらしい。

「ああ、これは」

浮島に用意された露天風呂。

形だけは整っており、アンジェリカとオリヴィアは開放的な景色を眺めながら風呂へと入る。

少し熱く、普段の風呂とは少しだけ違う感覚だった。水には変わりのないのだが、肌に張り付く感じがある。

髪を下ろしたアンジェリカの髪をオリヴィアが洗っていた。

「アンジェリカさんの髪は綺麗ですね」

「……殿下が長い綺麗な髪が好きだと言っていたからな。今度は少し短くするつもりだ。手入れが面倒だ」

オリヴィアがお湯で綺麗に泡を落としていく。

「それにしても良い場所だな」

リオンが持っている浮島のことを褒めるアンジェリカは、景色を眺めていた。夕日が見えるのだが、その景色を見ながら風呂に入れるというのは贅沢に感じられる。

オリヴィアも同じ気持ちなのだろう。

「入学前に見つけて自分のものにしたらしいですよ。将来はここで独立して……すみません」

「いいさ。私のせいであいつに苦勞をかけている。あいつにはここで独立させてやりたいよ。今の私では願うことしか出来ないのが齒がゆい」

リオンの独立の話もどうなるか分かっていない。

アンジェリカは、父が上手く処理してくれることを祈るしか出来なかった。

「それにしてもここまで理想の成功を収めた冒険者は数少ない。これ以上は物語に登場する冒険者くらいだな。いや、何事もなければ冒険譚の一つに加わったかも知れない男だっただろうに」

今度はアンジェリカがオリヴィアの髪を洗うのだった。

「そんなに凄いですか？ 私からすると冒険者はダンジョンに挑む者という印象が強くて」

「そうだな。平民では初期投資が大変だと聞くからそっちがイメージとしては強い。だが、ダンジョンで稼ぐよりも、貴族は飛行船で冒険をする方を好む。新しい大地を発見し、未知のダンジョンに挑む。時に遺跡からロストアイテムも出てくるからな。父も兄も、昔はやんちゃで無理をして冒険をしたらしいから、リオンの事は高く買っていると思うぞ」

アンジェリカはオリヴィアの胸を見た。自分の方が大きい、そう言えばマリエは小さかったと思ひ出す。

（胸の大きな女が嫌いだったのだろうか？ いや、もう忘れよう）

「小さなボートで新しい島を発見したりオンさんって凄いですか？」

アンジェリカはクスクスと笑った。

「ああ、凄いな。一步間違えれば自殺志願者と言われても仕方がない行為だ。ここ数十年では一番の功績だよ」

男爵家の三男が大出世をした。

それにはそれだけの理由があると言うことだ。

「……お前が羨ましいよ」

「え？」

アンジェリカはオリヴィアの髪を洗いながら本音をこぼす。

「恋人なのだろう？　ずっと一緒にいるからいずれ結婚すると思っていた。私もお前たちのようになりたかった」

オリヴィアの表情が曇る。

「……私は身分が違いすぎて届きません」

上級クラスにいてもオリヴィアは一般人。貴族であるリオンは、嫁となると相応の相手と結婚しなければならない。

それをアンジェリカは思い出す。

「悪かった。そうだな。お前は特待生だったな」

すると、オリヴィアが言うのだ。

「私は……リオンさんはアンジェリカさんが好きなのかも知れない
と思っていました」

「何故だ？」

お湯で泡を洗い流しながら、アンジェリカはオリヴィアの言葉を
待った。

「あそこまでして守ろうとしましたから。それが羨ましくて。私の
時はどうなんだろう、って考えると苦しくて」

「……私が？ それこそあり得ない。私は酷い女だぞ。でなければ、
殿下に捨てられることもなかったさ」

二人は無言で洗い終わると湯船につかり、そして景色を眺めてい
た。

二人が風呂に入っている。

俺はこのチャンス逃すつもりはない。

「へへ、待っていたぜ、この時を」

興奮して目が血走ってきてしまう。

白い湯気と懐かしき香りに魂が震えてくる。この浮島は俺の庭だ。どこで何をしようが俺の自由だ。

「待ちに待ったイベントだ！」

近くに浮かんでいるルクシオンが告げる。

『成功したようで何よりです。おかずは焼き魚になりますがよろしいですか？』

「ああ、早くしてくれ！」

テーブルの上には白い湯気を出す炊きたての白米。

まだ味噌はないのでお吸い物を真似た何か。

川魚の塩焼き。

きつとあの二人には理解されないだろうが、俺はこの時をどれだけ楽しみにしてきたことか……。

「涙が出てくる」

『良かったですね。幸せをかみしめながら私を崇めて良いんですよ』

「今だけはお前を許せちゃう。さて、食べるか」

食べてみると味は似ているが微妙に違った。しかし、それでも白米だ。焼き魚を箸でほぐして身を取りご飯に乗せてからかきこむ。

「あゝ、幸せ」

『幸せそうですね。おや？ 何やら飛行船が近づいてきているようですね』

食事中にルクシオンが、実家に近づく飛行船を発見した。

バルカスは朝から慌ただしくしていた。

「リユース、食事の用意は順調か？」

「ええ、そつちは大丈夫だけど……ほ、本当に泊めるの？ 嫌とか言うんじゃないのよ。でも、お姫様を家に泊めるなんて」

理由は帰省してきたリオンにある。

リオンの父親であるバルカスは頭を抱えなくなった。

「あの馬鹿、殿下に喧嘩を売ったと思えば今度は公爵令嬢を連れてくるとかどういふ事だ。もっと俺の心臓を労れよ。ショック死したらあいつのせいだ！」

辺境の男爵家に公爵家の娘が来るなど思ってもいなかったため、朝から大慌てで準備をしていた。

朝早くに飛行船で戻ってきたリオン。

そこから慌てて準備をしているのだ。

公爵家の侍女が台所に顔を出す。

「失礼いたします。お借りしたお部屋の用意が済みしましたので、こちらのお手伝いに伺ったのですが」

侍女が着ている服はシックなメイド服だった。

教育されており、どう考えても上級メイド　簡単に言えば、公爵家に奉公に出ている身分の高い家の娘たちだ。

陪臣貴族の娘たち。しかし、中には陪臣でも下手な男爵家より大きな領地を持つ家もある。

バルカスから見れば無視できない相手だった。

「いや、こちらは大丈夫なので休んでいただければ。すぐに部屋の用意を」

「あんた、それはこの人たちがさつき終わらせたよ」

朝から忙しいバルカス。

そんなバルカスにまた災難が襲いかかる。

台所まで聞こえてくるのは、怒鳴り散らす甲高い声。

「ちょっと、使用人のくせに私の命令が聞けないって言うの!」

バルカスは両手で顔を覆った。

台所にいるメイドに謝罪して急いで玄関に向かうと、そこにはゾラの姿があった。ルトアートとメルセも来ており、ゾラとメルセの専属奴隷も控えている。

（どうして今日に限ってこும்客が多いんだ！）

バルカスが見たのは、公爵家のメイドに詰め寄っているゾラの姿だった。叫びたい気持ちを抑え、メイドの前に出た。

「久しぶりだな、ゾラ！ 今日是一体どうしたんだ？」

ゾラは持っていた扇子でバルカスの頬を叩く。

「どうしたですって！ お前の無能な息子がいったい何をしたのか聞いていないのかしら？ 王都はもう大騒ぎよ。この責任、どうとつてくれるのかしらね？」

長男のルトアートは長い髪をいじっており興味を示していなかった。メルセもバルカスに興味を持っていない。

「い、いや、それはだな……」

いったい何から話せば良いのか、バルカスにも分からなかった。

ここ最近、本当にめまぐるしく日常が変化しており色々について行けないこともある。

現実逃避として「ニックスが早く卒業して仕事を手伝ってくれな

いかな」などと考えていた。

すると、メイドたちが玄関に集まり、並んで自分たちの主人を迎える。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

ゾラたちが振り返ったところには、髪を下ろしたアンジェリカの姿があった。

その後ろに隠れるようにリオンがいる。

（お前はもつと前に出るよ！）

息子にダメ出しをしたいが、口を出せる状況でもないので黙っているバルカス。

「騒々しい。何事か？」

目を細めたアンジェリカを見てゾラが眉間にしわを寄せた。

「いったいどの娘かしらね。それに、そこにいるのは大馬鹿者じゃない。隠れていないで出てきなさい」

洪々前に出ようとするリオンを、アンジェリカが手で制した。

リオンを馬鹿にされたので目が険しくなっている。

「お前こそ誰だ？ 先に名乗ったらどうだ？」

ゾラは口の端をピクピクと震わせる。

「待ってくれ、ゾラ。とにかく話し合おう。そうだ、皆さん中に入
って。さあ。さあ！」

無理矢理話を区切って全員を屋敷に入れたバルカスは、今日とい
う日を一生忘れないだろうと心の中で思い、泣いた。

「ま、まあ、そうだったの。レッドグレイブ公爵家のお嬢様がこん
な田舎に来られるとは思ってもおりませんでしたわ」

手のひら返しがすさまじいゾラの顔を見れば、焦って冷や汗を流
していた。

内心で馬鹿な奴、などと思いながら俺はアンジェリカさんとゾラ
の話を聞いていた。

二人は向かい合って座っている。

「世話になる。しかし、夫人が常に屋敷を空けているというのもお
かしな話だ。嫡男が仕事の手伝いをしないのも私からすると理解し
がたい。嫡男のルトアート殿は、今は何を？ 軍人には見えません
し、文官職で？」

ルトアートの奴はこの場にはいない。

ゾラは俯いてしまっていた。

「い、今は王都で将来のために勉強をさせております」

「なるほど」

ルトアートは十九歳だ。メルセは二十歳。

二人とも結婚しないで、王都にあるバルトファルト家の屋敷で生活している。バルトファルト家というか……ゾラの家だ。無駄に金がかかっているが、王都ではそれでもランク的に低いらしい。

ゾラが困っているところを見られるのは良いが、先ほどから親父が視線で「なんとかしろ」と訴えてくる。

「そ、それよりも今回はどういったご用件で？」

下手に出ているゾラを見るのは珍しい。

アンジェリカさんが小さく笑っていた。

「ただの観光だよ。今日は新しく発見された浮島に足を運んだ。温泉もあって良いところだ」

ゾラが喜ぶ。

「喜んでいただけたら幸いですわ」

「ああ、しばらく世話になるつもりだ」

それを聞いてゾラは固まった。

「ど、どれほどの日数を予定しておられるので？」

「予定などないよ。実家から連絡が来るまでだろうな。安心すると良い、世話になる男爵家には滞在費を払うぞ。もちろん、男爵に、だが」

それを聞いて「どうぞごゆっくり」などと言ったゾラだが……翌日には自分の子供たちを連れて王都に戻っていった。

正直、逃げ帰るゾラを見て嬉しくてたまらなかった。アンジェリカさんに拍手したら複雑な表情をされた。「お前も苦労していたんだな」という言葉に涙が出たが、親父やお袋は俺を冷めた目で見ていたのが理解できない。

エピソード

夏期休暇もそろそろ終わりが近づいていた。

ただ、連絡が何も来ないのが気になっている。

宮廷工作　そちらに時間がかかっているのだろうか？

「まいったな。早いところ話を終わらせて欲しいんだが」

畑に出て作業をしていると、次兄のニックスが俺に文句を言うてくる。

「お前は本当にのんきだよな。下手すると処刑だぞ。それですめば良いが、俺たちまで巻き添えにならないか俺は不安で仕方がないんだ」

四男のコリンはあまり話が分かっていない。

「兄ちゃん、決闘で相手五人を倒したんだろ？　なら凄いじゃないか」

次兄が怒鳴る。

「喧嘩をしたらいけない相手だったんだよ！　コリン、お前も他人事じゃないからな！」

朝から仕事をしているわけで、疲れたので背伸びをした。

少し離れた場所ではアンジェリカさんがオリヴィアさんに畑仕事を教わっている。

それを心配そうに見ているメイドたち。

手伝おうとしても、アンジェリカさんに止められて手が出せないでいた。

「ここをこうして ひっ！ なんだ、このウネウネした生き物！」

「“アンジェ”、それはミミズです」

「ミミズ？ 聞いたことはあるが……ひっ！ “リビア”、手で掴んで平気なのか！」

「これくらいという事はありませんよ。さあ、続きをしましよ
う」

夏期休暇で仲良くなった二人は愛称で呼び合っている。

俺も愛称で呼ぶのを許されるようになったが、基本的にそれ以上の関係ではない。そもそも、メイドの人たちが交代で見張りをしているので手が出せない。

出す気もない。

公爵令嬢に手を出すなど馬鹿のすることだ。俺は馬鹿じゃない。だから、手なんか出さない。

コリンが俺の腕を引っ張った。

「兄ちゃん、どっちと結婚するの？」

「はあ？」

コリンの質問に俺は首を横に振る。

「いいか、コリン。相手は特待生と公爵令嬢だ。どっちも俺のストライクゾーンから離れすぎているから結婚は無理だ」

「すたらいくぞーん？」

次兄は「また始まった」と言って仕事を再開していた。

「特待生の姉ちゃんとは平民で結婚は難しい。公爵家のお姫様は身分が高すぎて釣り合わない。分かったか？」

「うん、分かんない！」

「ははは、正直だな、コリン。ほら、さっさと仕事に戻れ」

「はい」

俺のストライクゾーンは好みなら二人ともありなのだが、身分的にどちらもアウトだ。ストライクゾーンにかすりもしない。

もう、見るからにボール球だ。

リビアはミットまで届かずワンバウンドしているような球で、アンジェは高めに大暴投したようなボール球。

バットを振る気すら起きない。

くそ……外見は好みなのに。

それよりも今は俺の将来についてだ。

まあ、公爵様次第の状況だ。

流石に酷いことになるとは思わないが……白金貨の山を用意したのだ。きつと大丈夫。

でないと困る。

そして、畑仕事をしているのがもう一人。

「爪が汚れる。手が痛いよお」

泣き言を言っているのは次女のジェナだ。

俺の鎧に爆弾を貼り付けた事を両親に告げ口し、事情もあつたので夏期休暇はこうして働かせている。

弟を暗殺しようとして、畑仕事で許される次女はもつと反省するべきだと思った。まあ、殿下の乳兄弟。その命令を実行した連中に半ば脅されていたのも考慮するべきだろうが俺たちが普段している仕事に罰になる時点で、この世界の基準はおかしいと思った。

「その程度で許されるんだから感謝して欲しいね」

「あんたが問題を起こさなかったら、私だって爆弾なんかセツトしなかったわよ」

まあ、そうだろう。

だから俺も許した。実際、たいしたダメージもなかったし。

「畑仕事なんかしたくないよ」

文句を言っている次女を見て俺は思ったのだ。

やっぱり乙女ゲーの世界って酷い、って。

翌日。

公爵家の飛行船が実家にやって来た。

アンジェリカさんを迎えに来たらしいが、ついでに王都から役人を乗せてやって来たようだ。

俺への対応が決まったという所だろう。

役人の中でも随分と身分の高い 階位の高い人がやって来たのは驚いた。

領主貴族は爵位で格付けされるが、領地を持たない王の直臣である宮廷貴族たちは階位を持つ。

これは領主も持っているが、男爵以上は王宮で王に面会できる階位を貰えるだけだ。

王を最上位にした一位から、王太子殿下が二位上。王族が二位下となり、実質的に役人の最上位三位は上も下も大臣クラスとなる。

ずっと下がって六位下が王への面会権がある階位だ。多くの領主たちはこの階位を与えられている。

男爵以上の領主は自動で貰える階位で、宮廷内の階位だと役人としては係長やら課長クラスだろうか？

まあ、そんな階位があるのだ。

宮廷貴族でも爵位を持っている人もいるし、その辺りは説明が難しい。というか、俺には関係ないので詳しくない。

ただ、やって来た役人は五位下　宮廷的には親父よりも格上の役人だった。

そのため親父が緊張した様子だった。

屋敷で話をすることになったのだが、役人の人はニコニコしていた。

「いやはや、今回は随分と大騒ぎでしたよ。婚約破棄に決闘騒ぎ。王太子殿下の廃嫡と話題に事欠きませんでした」

「は、はあ」

親父が緊張した様子で話を聞いているのだが、相手はそのまま何事もないかのように話を続けた。どうしよう……廃嫡の話、凄く気

になるんだけど口を挟める雰囲気じゃない。

「宮廷内でもバルトファルト家の責任を問う声が上がっていました
が、公爵家が動いてくれたおかげで何事もなく終わりました」

ヴィンスさんが頑張ってくれたらしい。

ありがとう、アンジェパパ。

「あ、あの、それでバルトファルト家の処遇は？」

親父が我慢できずに聞いてしまった。

役人さんは笑顔で答える。

「安心してください。責任は問いません。むしろ、リオン殿は独立
した騎士として正式に認められることになりました。在学中ですが、
王宮で正式に叙勲式を行います。何しろ殿下の愚行に忠言した騎士
ですからね。他の生徒も見習ってほしいものです」

……親父は安心して胸をなで下ろしているのだが、どうにも俺は
雲行きが怪しくなってきた。

叙勲式で卒業前に騎士？ そんな話は望んでいない。

今度は俺が質問する。

「ま、待ってください。俺の責任は？ 男爵位を剥奪するとか！」

「そんな話は出ていませんが？ そう言えば少し揉めましたが、リ

オン殿は男爵位を正式に与えられることになっています」

騎士への叙勲、それと男爵位。

……これでは俺の計画が狂ってしまうではないか。

今更学園に顔を出すなんて嫌だぞ。戻らないと思ったからやりた
い放題だったのに！

「流石にそれは」

「そう。流石にこれでは話になりません」

なんだ、落としてから上げるのか。この人もやり手である。

俺が期待のこもった目をしていると、書類を一枚用意してきた。

何が書かれているのか読むと、親父が「ひゃあああ！」とか叫び
声を上げた。俺もそんな声で叫びたい気分だった。

役人が笑顔で告げてくる。

「リオン殿に宮廷階位六位“上”が許されました。おめでとござ
います。昇進ですよ」

……昇進するとか聞いていない！

公爵家の飛行船。

リビアは同乗させて貰った。途中、実家のある浮島に寄って降りて貰うことになっている。

甲板でアンジェと話をした。

「宮廷の階位が上がるって昇進ですよね？　でも、領主さんたちからしたら関係ないような気がしますけど」

リビアはその辺りのことが分からなかったが、詳しいアンジェが説明してくれる。

「確かに領主にはあまり意味がないかも知れないが、宮廷がその他大勢の六位下よりも認めているとも言える。分かりやすく言えば、その他大勢の中でもマシという扱いだな」

「それ、褒美になるんですか？」

「何事も考え方だ。因みにだが、宮廷階位の九位と八位は一代限りの地位だ。七位から世襲できる地位になる訳だが、一つ階位を上げるとなると長年の忠勤やら大きな手柄が必要になるな」

リビアにはよく理解できなかった。

「長年の忠勤というと、十年とかですか？」

「八位まではそれでもいいが、七位より上は世襲できる関係で個人ではなく家単位で考える。親子三代で真面目に仕えた、とかそのレベルだ。普通にやれば百年はかかる」

それを聞いてリビアが驚く。

「な、なら、それだけ認められたって事ですよね!？」

「そういう事だ。まあ、宮廷からすれば昇進させても痛手はないかな。リオンは宮廷貴族ではないから年金も支払われない。ただ、昇進させるとは思わなかったが」

アンジエにしても、ここまで待遇が良いと勘ぐってしまうレベルだという。

奇々怪々な宮廷事情。どうしてこうなったのか、という事例は多い。今回もそうした一件だったのだと納得するしかない。

ユリウスを廃嫡して、リオンを昇進させる程に優遇することで利益が生まれる個人や集団がいるのだと結論づけた。

話を聞くリビアはその辺りの話に疎く、あまり理解していない様子だった。

「良くて男爵からの降格だと思ったのだが」

リビアが思い出す。

「そう言えば、リオンさんが賭けで手に入れたお金を使ったと言っていました!」

「何? そうなると……金の力か? いや、しかしそれにしては……うん」

二人は答えが出ないので話題を変える。

「話は変わるが、リオンが新学期前に叙勲式を行っらしい。お前も来るか？」

誘われたリビアが少し困る。

「で、でも、そういう場に参加したことがなくて」

「制服で良さ」

最悪だ。

連れてこられたのは王宮。王様がいるお城と思ってくれれば良い。

ゴテゴテ飾りの付いた騎士服を着せられ、俺の鎧であるアロガンツは会場に飾られ、オマケに参加者がとにかく多い。

「なんでだよ。なんでこんなに参加者が多いんだよ」

控え室で嘆いていると、この日のために王都に来た両親が俺を見て泣いている。

お袋が酷い。

「こんなに立派になって。昔はちよつと馬鹿な子かと思っていたのに、あんた実は凄かったんだね。お母さん、本当に嬉しいよ」

親父も泣いている。

「まさかお前がこんなに早く騎士に任命されるなんて思わなかったぜ。ちくしょう……涙が出てきやがるぜ」

次兄や次女は制服姿だ。

「あれ？ あっちの家族は？」

次兄はゾラたちが来ていないことを不思議に思っているようだが、次女は最初から来る気がないのを知っていたらしい。

「来るわけじゃないじゃない。そもそも、リオンは独立した別のバルトファルト家よ。それにしても六位上か……」

次兄と次女の話が続く。

「なんだよ？」

「このままリオンが宮廷に仕官すれば、女子にしてみれば狙い目になると思ったのよ」

「リオンが？ こいつ、全校生徒に恨まれているじゃないか。俺たちだって新学期になったらどうなるか分からないぜ」

「馬鹿ね。昇進したのよ。リオンが王宮に認められた、って事よ。馬鹿以外は察してくれるわよ」

「なら学園に戻っても大丈夫そうだな」

「どうかしら。荒れるんじゃない？ 全財産すった子もいるし」

「どっちだよ。ハッキリしろよ」

「五月蠅いわね。私だって知らないわよ」

くそっ！ 下手に全校生徒のヘイトを稼いだせいで、学園に戻る

のが怖い。そもそも戻るなんて考えていなかった。

戻るんだったらもつと手加減したし、賭け事で荒稼ぎなんかしなかった。突発的に行動した俺の馬鹿！

最悪、家族を巻き込んで命が危なくなったらみんなでルクシオンに乗って逃げれば良いとか考えていたのがいけなかった。調子に乗ってしまったっていた。

ここでハツとした。

「王太子殿下の父親が王様だよね」

親父が冷めた目を向けてくる。

「当たり前だろうが。陛下の前で変なことをするなよ。今度こそ首が飛ぶぞ」

俺は無視して話を続ける。

「自分の息子をボコボコにした相手を昇進させるって……どんな気持ちかな？」

親父が腕を組んで考え、俺から視線をそらした。

「……面白くないのは事実だな。俺なら嫌だ」

そりゃそうだ。

いくら息子が悪かったとしても、面白いとは思わないだろう。い

つたい俺のことをどう思っているのか聞いてみたい。

いや、やっぱり知りたくない。

その日。

一人の騎士が誕生した。

十六歳という年齢で正式に騎士として認められるのはホルファート王国では珍しく、同時に爵位も正式に与えられる。

階位は六位上。

冒険者としての成功。

そして、王太子の愚行を諫めた事も功績に数えられた。

実際は名のある家の跡取りたちを五人も倒したその実力を評価されたと言われているが、正確な理由は不明である。

だが、ホルファート王国に若く力のある騎士が誕生したのは事実。

そんな騎士を見るために王宮には大勢の者たちが押し寄せた。

夜。

次の日から学園生活が再開するとあって、俺は学生寮に来ていた。ホテルのような上級クラスの寮では、入った瞬間から以前と対応が違っていた。

用意された部屋のグレードが上がっているのもそうだが、使用人たちの態度も入学当初とは明らかに違っていた。

学生寮の生徒たちも、俺を遠巻きに見るだけで話しかけてこなかった。

ダニエルやレイモンドも、引け目があるのか声をかけてこない。

広くなった自室。

ベッドに大の字に横になる俺は、天井を見上げながら呟く。

「どうしてこうなった」

律儀に返答するのはルクシオンだ。

『やはり安易な考えで行動した結果ではないでしょうか？ 私がいるから多少無理をしても大丈夫と判断し、調子に乗って決闘に参加した事が致命的でした。失敗しても大丈夫だと思い、好き勝手に暴れたのがいけません。後処理も問題です。命欲しさに大金を支払い、宮廷工作に随分と資金が流れたと判断します。結果、昇進するといふ、望んでいない形に行き着きました。まあ、ハッキリ言って……自業自得です』

「的確な回答ありがとう。気が付いたなら途中で言えよ、馬鹿野郎」

『途中で修正しようにも情報不足でした。言わせていただければ、私としてもこの結果は少々意外です』

役に立たないAIである。

「くそ……おかげで婚活生活に逆戻りだ」

『よろしいではないですか。昇進したことで女性の見る目も変わるかも知れません』

「変わらと思うのか？」

『はい。ただし、決闘での賭けがいけませんでした。あれで七割に近い学生を敵に回してしまいましたから。情報を集めました。が、夏期休暇にダンジョンに挑んで金を稼いだ生徒は男女ともに過去最高だったそうですよ』

全財産を賭けた奴もいれば、借金をした馬鹿もいる。それくらい絶対に勝てると思い込んでいたのがいけない。

まあ、俺も知らなければ絶対に殿下たちに賭けていた。

『因みにマスターの評判は、卑怯者、口が悪い、最低野郎、などの罵倒が多い結果となっています』

「そんな情報いるの!？」

『マスターが嫌がると思って集めてみました。ですが、一部の男子からは人気もあるようです。言いたいことを言ってくれた、と』

「嬉しくて涙が出るね！」

入学前よりも更に結婚が難しくなってしまった。

確かに自業自得ではあるが、こうなると分かっていたらもっと自重した。だって、殿下をボコボコにして無事だとは思わない。

『まあ、良いではないですか。女尊男卑で男に厳しい世界ですが、結婚が全てではありません。世間体を気にしなければそれ以外は自由です。それこそ、金の力を使うべきでしょう。金に困っている女子を探せば良いのです』

「えー、それって酷くない」

『マスターにピッタリの解決方法ですね』

こいつ、俺のことをどんな目で見ているんだ？

始業式から三日が過ぎた。

学園生活は順調とは言いがたい。

何しろ周りが俺を避けてくる。

ダニエルとレイモンドが俺に謝罪してくれたことが救いではあるが、以前のような関係に戻るには時間もかかるだろう。

二人が俺に負い目があるのか、まだ話しかけてもギクシャクしている。

ただ、俺以外は順調なようだ。

ルクシオンの調べでは、アンジェもリビアも学園生活に困っていないらしい。まだ三日しか経っていないのでこれから何が起きるか分からないが、二人の周囲は落ち着いたものらしい。

アンジェの方は信用を取り戻そうと必死な取り巻きたちに辟易している様子らしいが、それ以外は以前と同じようだ。

リビアも夏期休暇中に勉強を進め、もはや俺では何を言っているのか理解できないレベルになっていた。

勉強を教えて欲しいと言われないかビクビクしている。

いつそ出来るふりをしていたと謝罪して謝ってしまいたい気分だ。

そして問題がもう一つ。

殿下たちだ。

決闘で二度と近づかないと決めたわけだが、マリエとは離れていなかった。恋人ではなくなったとしながらも、夏期休暇中にマリエやカイルを含めた七人で何度もダンジョンに挑んでいたらしい。

グレッグやクリスは俺と再戦するため、力を付けようとしているようだ。

ジルクやブラッドは、実家からの支援を打ち切られたので資金稼ぎが主な目的らしい。

マリエに関しても同じようだ。

元からマリエの実家である子爵家の家計は火の車。支援など期待できるわけもなく、ダンジョンに挑んでいたようだ。

そして殿下　ユリウスは、そんなマリエたちと行動を共にしていた。馬鹿にしたような話だが、本人たちの言い分は「たまたまダンジョンに挑もうとしたら一緒になった」という事になっている。

俺は決闘後に評価は酷く落ち込んだのに、殿下たちに関しては同情されて中には応援している女子もいるらしい。

それに七人で随分楽しそう　いや、一人だけ楽しそうじゃない奴がいた。

今回の元凶であるマリエだ。

地位も名誉も、そして財産も失ったような面子に囲まれて苦しんでいるらしい。他の面子はそれを楽しんでいるのがポイントだ。

周りは楽しそうなのに、マリエ一人が現実を見て焦っているのが笑える。

小賢しく動き回った結末は、間違いなくマリエにとって望んだ結果ではないのを思えばこれほど素晴らしいことはない。

スカツとした。今日はよく眠れそうだ。

校舎の中庭にあるベンチに座り、そんなことを考えていると両脇に人が座る。ダニエルやレイモンドかと思っただが、雰囲気は柔らかく良い匂いがしたので違うと思った。

野郎臭くない。

顔を上げるとリビアとアンジエが座っていた。

「リオンさん、今日も一人ですか？」

「心を抉る言葉をありがとう。今日も一人です」

「まったく、その物言いをどうにかしたらどうだ？ それより暇なら付き合え」

取り巻き連中を巻いてきたのか、アンジエは少し疲れた表情をしていた。

「付き合う？ どこに？」

リビアがウキウキとした表情をしていた。

「クレープの屋台です。評判の良いお店があるんです！」

流石は乙女ゲーの世界。

剣と魔法のファンタジー世界でありながら、クレープや甘いものは大抵揃っている。女性に優しい世界だ。

男には厳しくなければ最高の世界だろう。

「イチゴとかチョコはあるのかな？」

しかし、体が糖分を求めるので俺も興味が出てきた。

リビアが思い出しながら答える。

「あるみたいです。イチゴジャムは人気でしたね」

アンジェはクレープ自体が珍しい。

「屋台か。あまり経験がないな。取り巻きたちも、私が口にするようなものではないと言って買わせないからな」

そう言う取り巻きの女子たちは、大抵が屋台で買い食いをしていくはずだ。ルクシオンがそんな報告をしてきた気がする。

二人に手を握られ、立たされるとそのままクレープの屋台を目指すことになった。

「リオンさん、早く」

「ほら、急げ」

背中を押され歩き出した。

こんなに優しく可愛い二人だが、俺にとっては手の出せない相手だ。理不尽すぎないだろうか？

本当に 乙女ゲーの世界は俺^{モラ}に厳しい。

エピソード（後書き）

いかがだったでしょうか？　楽しんでいただければ幸いです。

これにて第一章が終了となります。

明日は短いですが幕間を投稿する予定です。

今後の予定は活動報告で報告できればと考えています。

幕間 ルクシオンレポート その1

深夜。

リオンが眠っている部屋では、ルクシオンが窓の外を見ていた。

赤い一つ目の中にあるいくつものリングを動かし、月を見ている。

リオンは疲れ切っており、起きる気配が感じられない。

『リオン・フォウ・バルトファルト……前世は日本人と称するこの人物は実に興味深い』

ルクシオンのマスターであるリオンだが、その評価を一言で表すなら。

“愚か者”

である。

『五十代女性との結婚を嫌がり単身冒険の旅に出て私を発見。その後は実家に頼って独立して悠々自適なスローライフを画策するも、騎士の称号と爵位を約束され計画は白紙に。何をやっているのしょうね』

ルクシオンを手に入れた経緯は置いておくとしても、大量の金銀財宝を発見して冒険者として大成功を収める。

そのため、冒険者が尊重される王国では高く評価されてしまった。
ルクシオン発見後に、適度に財宝を見つけたことにすればまだマシだったのだろう。

本人、嬉しさのあまりに調子に乗ったとしか言えない。

ハッキリ言ってお調子者だ。

リオンは自分をクールだと思っているところがあるが、間違いなく小狡いお調子者だった。

何しろ、目指している場所に向かって努力していないのだ。

『あれだけこの世界を“乙女ゲー”で関わる気がないと言いながら……』

この世界を乙女ゲーだと言い張り、そして自分はモブだと言っていた。

だから、関わるつもりもない。

自分が無事に卒業できればそれでいい。

当初の方針は、何事もなく結婚して卒業後に独立の方針である。

だが、学園での生活で気が緩んでいたのか、それとも婚活でのストレスが原因か……リオンは駄目な行動が目立った。

主人公であるオリヴィアがいじめられているのを見て、自分の中

で適当な理由を付けて声をかけてしまった。

『彼女から情報を得たいという言い訳……私を利用すればそれ以上の情報が得られるというのに』

無駄以外の何物でもない。

おまけに婚活にメリットもなければ、デメリットしかなかった。

将来独立するリオンは、男爵家以上の家から娘を貰わなければ将来に響く。

軽く見られるとか、笑われるという小さいことから、単純に家格を低く見られ使い潰されたり付き合いを持つことも出来なかったりする。

他領の貴族に攻撃されることもあるだろう。

とにかく結婚しないことのデメリットが大きすぎる。

そしてもう一つ……アンジェリカだ。

学園内で孤立してしまった彼女を助けたために、リオンは学園全体に敵になってしまった。

『小狡いので賢くないとは思っていましたが、想像以上の愚か者ですね』

王太子であるユリウスと決闘代理人として戦う事になり、学園全体をほぼ敵に回したのは阿呆である。

本人曰く、婚活が嫌だったとか決闘代理人の五人を殴りたかったと。

婚活から逃げるために地位やら色々と放り出し、一人になりたかったのだろうが……その後はアンジェリカの父親に助けを求めるというガバガバなプラン。

間違えれば命がなかったはずである。

『……どちらも素直に見ていらなかったと言えば良いでしょうに』

オリヴィアは周囲にいじめを受けていた。

アンジェリカも周りを全て敵にしていた。

それを見ていらなかったと言えばまだ好感が持てるが、本人は妙に照れているのかそれとも自分自身への言い訳か嘘を吐く。

不器用すぎるお調子者だ。

ただ、出世したくないのに出世するという本末転倒な結果には、ルクシオンも驚いている。

『この世界は複雑怪奇ですね。女性の権力が一部の層で強くなっていくのも何か裏があるのでしょうか？』

大金をばらまいたせいで出世したのか、それともリオンを出世させて得をする誰かがいたのか……ルクシオンにも情報不足だった。

事情を調べるようにリオンから命令が出ていないのもあるが、ルクシオンも興味がないのが大きい。

現状、最大の興味を引く対象はリオンだけである。

ルクシオンはリオンを観察する。

頼まれれば行動するが、それ以外は基本静観の姿勢だ。

リオンが死ぬような目に遭わなければ自ら動く必要も感じない。

何しろルクシオンは　この世界が嫌いだから。

窓の外に再び一つ目を向けた。

そして、ルクシオンのもう一つの興味は　。

『私の仲間たちは無事に任務を果たせたのでしょうか？』

乙女ゲーが現実になったような世界。

リオンの知らない事も多い。

ゲームでは語られない設定など、だ。

ふわふわした乙女ゲーの設定。

一人の女子のために用意されたような世界は、モブを自称するリオンにどう関わっていくのだろうか。

幕間 ルクシオンレポート その1（後書き）

本日は活動報告を投稿しました。

乙女ゲー世界はモブに厳しい世界です、にも触れていると思うので
気になる方はそちらも読んでいただけると嬉しく思います。

プロローグ（前書き）

本日より更新を再開いたします。

20時更新を二章終了まで続けさせていただきます。

プロローグ

女の友情って儚くない？

そんな事を思う俺【リオン・フォウ・バルトファルト】は、遊覧飛行船の有料ラウンジで札束を数えながら目の前で突っ伏している姉 次女の【ジェナ】を見ていた。

丸テーブルの上には札束と金貨や銀貨が積み上げられている。

壁一面がガラス張りになっており、外で行われている体育祭の競技がよく見えていた。

体育祭……この乙女ゲーの世界は、日本の学校をモデルにされている。

そのため二学期にはイベントが多い。

体育祭の次は学園祭。

そして修学旅行まで存在しているのだ。

イベントが目白押しというか、詰め込み過ぎと言われても否めない。

お札を数えるのを一旦止め、俺は次女を見た。

溜息が出てくる。

「狙っている男子が同じだったから親友と絶交したのは分かったけど、そんなに落ち込むなよ。親友の男を狙うような奴は友達として失格だから」

次女は親友と絶交して落ち込んでいた。

その後ろでオロオロとしているのは、次女の専属使用人である亜人種の奴隷　猫耳野郎だった。高身長で細身ながらも筋肉質のイケメン……猫耳野郎で十分だな。

話を聞いていたリビア　【オリヴィア】が、次女を慰めている。

「そ、そうですよ。先輩は悪くありません」

紅茶を優雅に飲んでいる【アンジェリカ・ラファ・レッドグレイブ】は、我関せずという態度である。

いや、そもそも恋人というか、結婚相手の略奪という話題はアンジェには地雷だ。

夏休みに婚約破棄となったアンジェは、婚約者のユリウス殿下を奪われたのである。静かにしているが、内心は腸が煮えくりかえる思いが蘇っているかも知れない。

「……その程度で相手になびく男が悪いと思う」

そんなアンジェのポツリとした呟きに、俺とリビアは視線をそらしてしまった。ごめん、かける言葉が見つからない。

そもそも、どうして次女がこの場にいるのか。

飛行船の有料ラウンジ　次女の入場料まで俺が支払っている。
次女でもそれはちよっと許せないというか、図々しいと思う。

おまけにアンジェがいるのに面倒な相談　というか、愚痴に付き合わせられる俺たちは迷惑だ。

「……違うの」

「え？」

「最初に狙っていたのは親友の子で、私も後から色々聞いて声をかけたというか……」

次女がそう言うと、リビアもアンジェも黙ってしまった。

略奪したのはお前の方か！？

「最低だな」

俺の冷たい視線と呟きに対して、次女が反論してきた。

「違うの！　聞いて！　その子爵家の跡取りだけど、少し前まで無名というか貧乏貴族だったのよ。でも、夏休み中にその子の実家から鉱山が発見されたの。調査したらレアメタルで、王国から援助を受けて鉱山所有者になるの！　お金持ちになるから黙って見ていられなかったのよ！　……しかも本土の領主貴族だし」

大陸本土に領地を持つ領主貴族の子爵様。

浮島の離島に領地を持つ貴族よりも、大陸本土に領地のある方が女子には人気だった。

……話をまとめると、夏休みに金持ちになりそうな男子が誕生。

女子同士で奪い合いになっており、そこに次女も次女の親友も参加した、と。

「お前ら相手に謝れよ。お前らより相手の男子が可哀想だよ」

「何で可哀想なのよ！？ こっちは結婚して“あげるのよ”」

これだ。

これがこの世界の標準的な女子の考えだ。

貴族の女子。

特に男爵家以上の家柄出身である女子は、とにかく優遇されている。

そのため、結婚にしても男子より立場がとても強い。

乙女ゲーの世界は女子に甘くて男子には辛い世界だ。

「金持ちになったからすり寄ってきているようにしか見えないよ。もっと愛とか恋とか、そういった感情はないのか？」

俺の切実な訴えを次女は鼻で笑うのだった。

「私には【ミオル】がいるし、美形の男子なら普通クラスの男子から探しても良いからね。愛はそっちと育んで、旦那に求めるのは甲斐性よ」

ミオルというのは猫耳野郎の名前らしい。初めて聞いた。

「……本当に最低だな」

「なんでよ！ みんな同じじゃない」

黙っていたアンジェが口を開いた。

「一緒にしないで貰おうか。私もリビアも専属使用人は持っていないし、愛人だの考えていない」

公爵家のご令嬢であるアンジェの言葉に、次女が尻込みしていた。

先程の俺に対する強気な態度はどこに行ったのか？

リビアが苦笑いをする。

「私は出身が貴族様ではないので……そう言えば、アンジェはどうして使用人を雇わないんですか？」

アンジェがリビアには親切丁寧に説明している。

「こちらは仲が良い……と、思う。」

「使用人なら雇っているさ。専属使用人とは言っているが、亜人種

の使用人たちは全員が奴隷だ。雇うのではなく買うのさ」

リビアがそれを聞いて困った顔をしていた。

「ど、奴隷って良いんですか？」

リビアには馴染みがないのだろう。俺の場合、次女や三女が奴隷を買うと言いだして調べていたので詳しくなった。

三女も俺の金で奴隷を購入しようと画策している。

マジで姉も妹も害悪だ。

「まあ、色々あるけど、女性に限って言えば奴隷を持っても白い目で見られないよ」

そういう世界だ。

女性にだけは限りなく甘い。

同じ事を男がすれば白い目で見られるのに。俺だって猫耳美少女が欲しい。

アンジェは小さく溜息をこぼした。

「……今では当たり前になってしまったな」

そんな当たり前となっている奴隷の話を、アンジェはどうにも嘆いているように見えた。

微妙な雰囲気になったので、俺はリビアに聞いてみた。

「専属使用人に興味がある？」

「え？ あ、あの……その」

顔を赤くしているのを見るに、彼らが日頃何を行っているのかリビアも知っているのだろう。次女が連れている奴隷たちは、そのまま女子の好みを表している。手を出していない女子の方が珍しいだろう。

俺がリビアをからかっていると、アンジェが頬をつねってきた。

「リビアをからかうな。それはそうと、次の競技はエアバイクのレースだ」

エアバイク 大地が浮かび、そこで暮らす人々には馴染みのある乗り物だ。

空を飛ぶバイクなのだが、形状は水上バイクに近い。空を滑るように飛ぶのだが、結構高価な乗り物である。

体育祭ではそんなエアバイクのレース競技があり、とても人気だった。

因みに有料ラウンジには受付があり、賭け事も行っている。

「このレースも賭けているんだよね」

俺が結果に興味を示すと、アンジェもリビアも呆れている。

「お前は賭け事が強いな」

「リオンさん、賭け事はいけません。程々にするべきです」

丸テーブルの上に積み上げられた札束と金貨に銀貨の山。これらは体育祭の賭けで手に入れた物だ。

俺にギャンブルの才能がある？ 違うよ。俺は勝てる勝負をしているだけだ！

相棒であるメタリックカラーの球体ボディーを持つ人工知能の【ルクシオン】が、俺にしか聞こえない通信を送ってくる。

イヤホンもしていないのに聞こえるのはテレパシーかと思うが、科学で再現可能らしい。

剣と魔法のファンタジー世界に、科学の結晶であるルクシオン…
…世界観が間違っているが、そんなのは問題じゃない。

そもそも、乙女ゲーの世界なんて設定からしてふっわふわである。

ツツコミを入れても意味がないのだ。

『マスター、少々問題が起きました』

俺がこめかみを指で触れて聞く体勢に入ると、ルクシオンが続けるのだった。

『一年生の代表枠で出場したジルクですが、どうやら標的にされて

います』

……ジルクが？

ジルクというのは元王太子殿下であるユリウス殿下の乳兄弟
元子爵家の跡取りである【ジルク・フィア・マーモリア】の事だ。

緑色の髪を持つ優しそうな男で……乙女ゲー世界の攻略対象キャラである。

エアバイクの扱いが上手く、一年生の代表の一人に選ばれていた。

俺が真剣な表情で会場を見下ろしていると、リビアが少し気を使いつつ尋ねてくる。

「あ、あの、リオンさんもやっぱり出場しなかったですか？」

「え？」

俺が首をかしげていると、アンジェも申し訳なさそうな顔をしていた。

「……すまない。選手決めは実行委員の多数決だ。流石に私も口を挟めない」

「ん？」

どうやら二人とも俺が出場しなかったと思っていたらしい。確かに立候補はしてみたが、男子は最低でも一種目に立候補する決まりになっているだけだ。

別に出たくなかったし、賭け事で儲けるつもりだったので問題ない。

何しろ俺には、情報収集が出来るルクシオンがいるのだ。

賭け事の勝率が違う。

次女がリビアとアンジェの二人に言う。

「気にしなくても良いわよ。愚弟の自業自得よ。だって、生徒の大半を敵に回したのよ。選手になんかなれるわけがないわ」

……分かってているが次女に言われると腹が立つ。

俺はユリウス殿下をはじめ、攻略対象の五人と決闘を行った。

誰もが五人が勝つと思っていたのに、俺が勝ってしまったのだ。ユリウス殿下と決闘をしたのも問題だが、その時の賭けで大損をした生徒たちが大勢出てしまい俺は目の敵にされている。

嫌われ者という立場なのだ。

……理不尽すぎる。

『マスター、何やら不満そうな顔をしています。自業自得ですからね。成立しない賭けを自分に大金を賭け成立させ、おまけに王子殿下の立場にいたユリウスたちをボコボコにして説教までしていましたから。アレでマスターを好きになる人は少ないと思いますよ』

相棒が冷静過ぎてつまらない。

そう思っていると、レースが開始された。

空の上　数多くの飛行船が囲んで出来た会場は、空の上の競技場だった。

体育祭を見るために学園が飛行船を用意し、金持ちたちが体育祭を見学するために更に周囲を囲む。

なんともスケールが大きな体育祭だ。

体育祭は男子にとって見せ場である。日頃さえない奴でも、大きな舞台で活躍すれば女子が熱に浮かされ婚約してくれる確率が上がると聞いている。

そのため、男子たちは選手になるために必死だ。婚活事情から、こつこつとした機会で結婚しようと本気で出場したいと思っている。

おかげでどの競技も選手になるための競争率が非常に激しい。

そんな体育祭で人気のエアバイクレースだが、スタート直後からどうにも様子がおかしかった。

アンジェがすぐに気付いたようだ。

「ジルクの奴、マークされているな」

一年生でも優秀な選手ならマークされてもおかしくはないが、そのマークのされ方が徹底していたのだ。

囲まれ、そしてぶつけられ　明らかに攻撃を受けている。

リビアが見ていて悲しそうにしていた。

「ど、どうしてあんな事をするんですか？　ジルクさん、可哀想です」

リビアの言うとおりだ。

俺もジルクに賭けているため、このまま負けて貰っては困る。

次女がジルクを囲んでいる生徒たちを見て気付いたようだ。

「待つて。あの男子たち……伯爵令嬢の取り巻きたちよ」

アンジェは呟く。

「そういう事か」

レースは中盤から終盤へと移行すると、ジルクが勝負に出て上級生たちの囲みを突破した。無理矢理のアクロバットのような動きで囲みを抜け出し、そのまま加速して次々に他の選手たちを追い抜いていく。

「なんかあいつだけ違法改造したバイクみたいだな」

まるでバイクの性能からして違うのではないか？　そんな事を思ってしまうほどの華麗なごぼう抜きに会場は大盛り上がりだ。

俺もジルクが勝てば賭に勝つから嬉しいのだが……。

ルクシオンが告げてきた。

『ジルクは勝利しても決勝には出られませんね』

小声で「駄目そうか？」と聞くと、ルクシオンはジルクの怪我の診断を俺に教えてくれる。

『骨折しています。囲まれて攻撃を受けてひびが入った所に、無理な動きをして折れてしまいました。いくら治療魔法なんて便利なものがある世界でも、次のレースまでには間に合いません』

ジルクはギリギリでトップを抜き去ってゴールしていた。

そんなジルクがエアバイクで飛行船に戻ると、倒れ込んだために医療関係者たちが集まって担架で運んでいく。

アンジェがラウンジから出ようとするので聞いてみた。

「どこに行くの？」

「……これでも一年のまとめ役だからな。ジルクの怪我の様子を確認して、必要なら代役を用意する。実行委員と話をするさ」

リビアも付いていこうとするので、俺も丸テーブルの上の札束や金貨をバッグに入れて追いかけることにした。

次女が俺に言う。

「あ、出るならお金頂戴。お財布の中身が空なのよ」

「……お前は本当に清々しいくらいに図太いな」

弟に堂々とたかる次女に、俺はお札を数枚渡してアンジェたちを追いかけるのだった。

医務室にはマリエの声が響いていた。

「ジルク〜！」

俺と同じ転生者と思われる女にして、本来は主人公の場所を横取りした【マリエ・フォウ・ラーファン】は、ベッドに横になるジルクに泣きついていた。

ジルクは心配させまいと笑顔を向けている。

「大丈夫ですよ、マリエさん。私はこの通り無事です」

医務室には他にユリウス殿下と、マリエの専属使用人【カイル】というエルフの少年がいる。他の男子たちは選手として出場するので、この場にはいなかった。

アンジェは一年生の実行委員と話をしている。

「代役を立てるしかあるまい」

「で、でも、そうなると選手が……」

「優秀な男子はほとんど他の競技に出ていますから、代わりなんて……」

こちらはどうかやら代役捜しで大変そうだった。

リビアが俺の腕を掴む。この場の雰囲気の小声になっていた。

「あ、あの、ジルクさん大丈夫なんですか？」

「三日もあれば治るって。骨折しても三日で治るなんて凄いよね」

本当に魔法って凄い。

ルクシオンは対抗して『私なら条件次第で一日でも大丈夫です。いえ、二十四時間も必要ありません』とか俺にアピールしてくる。

こいつ魔法に負けたくないのか必死すぎて笑える。

リビアが不思議そうにしながら。

「で、でも、私ならもっと早く治療できますよ。どうして皆さんそうしないんですか？」

治療魔法というのは使い手が少ない。

そして主人公は治療魔法に適性がある訳で……聖女と呼ばれるほどに高い才能と力を持っている特別な存在だ。

俺は黙っているように言う。

「リビアの普通は異常だから。医者に言ったら、怒られるから黙ってしようね。これが普通だから」

「は、はい。そうなんですか？」

あまり理解していないような感じだが、黙っていてくれれば助かる。

専門家たちよりも優秀なのは分かるが、それをこの場で披露しても面倒になるだけだ。医者はプライドを傷つけられるし、噂を聞きつけたるくでもない連中が集まる可能性が高い。

然るべき時と場所で、リビアの能力は発揮して貰うとして……。

「ジルクがレースで優勝すれば賞金が出たのに！」

泣いているマリエの本音が酷い。

ユリウス殿下など、そんなマリエの背中に手を置いて慰めている。

「大丈夫だ、マリエ。俺やみんなが他の種目で優勝するから」

体育祭だが、貴族の子弟が通う学園だけあって各種目で優勝すれば賞金が出る。

日本円で言えば百万とか二百万とか。

各種目に賞金額は違っており、エアバイクレースの賞金は一千万円だ。それだけ人気があるのを賞金金額が物語っている。

「エアバイクレースに期待していたの！ 他の競技じゃ全部手に入ってもエアバイクレースの半分の金額にもならないのよ！」

ジルクが申し訳なさそうにしていた。

「申し訳ありません。まさかここまでするとは思っていませんでした」

マリエが涙を拭っている。

「本当よ。上級生も酷くない？ 慰謝料を請求してやるわ」

マリエのそんな言葉にユリウス殿下もジルクも、自分たちを心配しているのだと思って照れくさそうにしている。

恋は盲目とはよく言ったものだ。

「あいつ、さつきから金の話しかしていないぞ。良いのか？」

俺が小声でそう言うと、リビアも困っていた。

「き、きつとジルクさんのことも心配していますよ。だって、皆さん一緒になるために地位を捨てたんですから」

マリエという女のせいで、攻略対象の五人が籠絡された。それだけならまだ何とかなったかも知れないのに、その五人 自分たちの地位を捨てやがった。

マリエと一緒にいるため、婚約者を捨てて実家から縁切りされてしまったのだ。

覚悟決まりすぎていて引いたね。

「えー、どうかな？ マリエの方はお金の方が好きみたいだよ。さつきからお金の話しかしていないし」

マリエという女がどういう女が分かったところで、医務室にやって来た女子とその取り巻きたち。

女子は二年生の【クラリス・フィア・アトリー】伯爵令嬢だった。優雅な立ち姿に、ふわりとしたボリユームのある髪。

絵に描いたようなお嬢様だ。

宮廷貴族の伯爵家出身にして……ジルクの元婚約者だった女子だ。周囲には取り巻き以外にも、亜人種の専属使用人を五人も揃えている。

「あら、随分とみすばらしくなったわね。……ジルク、今の気分はどうかしら？」

ニヤニヤしている取り巻きたち。

だが、アンジェがこの場にいるのを知ると表情を改めていた。

ジルクが目を閉じている。

「……クラリス、貴方の仕業ですか」

全てを察したジルクに対して、クラリスは怒鳴り散らす。

「ええ、そうよ！ 私を捨てたあんたには地獄に落ちて貰うわ！
私はあんたを絶対に許さない」

美人であるクラリス先輩が激怒している姿は怖い。

「美人が怒ると迫力があるよね」

「リオンさん、何を言っているんですか！ もっと真面目にしてください」

リビアのそんな要望に応えるため、口を閉じるとクラリス先輩の前にアンジエが立った。

「医務室では静かにして欲しいな。……クラリス、気持ちは分かるが体育祭で堂々と不正行為か？」

アンジエの睨みに対して、クラリス先輩が一步下がるが首を横に振る。乱れた髪が余計にクラリス先輩を怖く見せていた。

「……偉そうにしないでよ。あんたが殿下の手綱を握れていないからこうなったのよ。同じように捨てられたくせに自分だけ何事もなかったように振る舞って腹が立つわね。いつもみたいに怒鳴り散らさないよ」

アンジエが眉間に皺を寄せていた。

……アンジエ、怒りっぱいんだよね。

「私が何だつて？ 一人だけ悲劇のヒロインにでもなったつもりか？ 専属奴隷まで連れて、随分と派手に振る舞いだしたな。お淑やかな姿は猫をかぶっていたと見える」

「っ！ あ、あんたに何が分かるのよ！」

二人がつかみ合いになりそうなところで、クラリス先輩の取り巻きたちが止めに入った。

相手は公爵令嬢のアンジェだ。

絶対に敵に回したくないと思ったのだろう。

俺もそれには同意する。取り巻き連中も苦労しているんだな。ちよっただけ同情した。

クラリス先輩がジルクを睨んでいた。

目を閉じて顔を見ないようにしているジルク……お前、本当に反省しているのか？ お前のせいだぞ。何とかしろよ！

「次も出てきなさいよ。公衆の面前でボコボコにしてあげるわ。これからずっと仕返しをしてあげる。泣いて許しを請うのね。そんな事をして、絶対に許さないけど！」

これは相当怒っているね。

対してジルクの反応は冷めていた。

「……それで貴方の気が収まるのなら、存分にすると良いでしょう。」

ただし、マリエさんや他のみんなへ何かすれば、私は貴方を絶対に許しません」

マリエが二人の間で完全に空気になっていたのに、名前が出たことでクラリス先輩の血走った目が向く。

ビクリと反応するが、何やらスイッチが入ったのか演技に入った。

……こいつ、こんな所まで前世の妹にそっくりだ。実に腹立たしい。

「先輩、復讐は何も生み出しはしませんよ。もっと大事な」

「知ったようなことを言ってるじゃないわよ！ 何も生み出さない？ だから？ それがどうしたのよ！」

「はいいすみません！」

マリエの嘘くさい台詞を聞いて、クラリス先輩が激怒していた。当たり前だ。婚約者を奪った女が、そんなことを言えば腹も立つ。

アンジェも冷たい視線をマリエに向けていた。

だが、そんな二人の視線を遮るように前に出たのは……ユリウス殿下だ。

「その辺で良いだろう。アンジェリカもそんな目をマリエに向けるな」

「……申し訳ありません、殿下」

アンジェが謝罪をすると、ユリウス殿下はクラリス先輩へと視線を向けた。

こいつ、無駄に王族オーラが出ていて羨ましい限りだ。

「クラリス先輩。ジルクのことが許せないのは理解している。だが、もうこんな事は止めて欲しい。貴方のためにもならない」

俯いて暗い笑みを浮かべているクラリス先輩は、少しおかしくなっているように見えた。

「……殿下がそれを言いますか。たった一人の女のために、どれだけの人間が不幸になったか分かりますか？ アンジェリカだけじゃない。私や、他の婚約者たちが陰で何て言われているかご存じで？ 知らないですよ。貴方たちが知るわけがない」

……マリエが逆ハーレムを目指したために、不幸になった人間がいる。

やっぱり乙女ゲーの世界って酷いと思いました。

「……俺たちに説教をする権利がないのは分かっている。だが、こんなことを続けさせるわけには行かない。貴方自身のためにもならない」

俺は思ったことが口に出た。

「台詞までイケメンだな。マリエに誑かされて婚約者を捨てた男なのに、説得力があるように聞こえるのが凄いよね。やっぱり顔って

大事だな」

「リオンさん、めっ！ そんなことを言ったら駄目です。だから、めっ！」

リビアの駄目の「めっ！」という仕草が可愛くて仕方がない。本来なら彼女が野郎共を侍らせるわけだが、この魅力なら侍っても良いと思えた。

主人公恐ろしすぎる。

それはそれとして、俺の台詞を聞いたユリウス殿下が睨んでいた。

お口を閉じて視線もそらしておこう。

クラリス先輩がきびすを返した。

「出てくるなら次も叩き潰してあげるわ。出てこなくても、代役を潰すわよ。あんたたちには思い知らせてやる……絶対に許さないから」

笑いながら去って行くクラリス先輩。

……医務室の空気は最悪だ。

俺が溜息を吐く。

「これ、次のレースは代役が立てられないよね？ 誰も代わりになりたくないだろうし」

そんなことを俺が言つと、ジルクが怪我をした体で立ち上がろうとしていた。

「くっ!」

「ジルク止める!」

ユリウス殿下がベッドに押さえつけているが、本人は出場するつもりらしい。

「放してください、殿下。私が出れば誰も傷つきません。これが一番冴えたやり方です」

……一番冴えたやり方は、お前たちが婚約破棄をしないことだったと思う。言っても仕方がないと思うが、どうしても文句を言いたかった。

本来なら主人公であるリビアと、五人の内の誰かがくつついてハッピーエンドに向かうはずだったのだ。

今では勘当され、後ろ盾がほとんどない五人になってしまった。今後どうなるか予想もつかない。

一年生の実行委員たちが俺をチラチラ見ていた。

「ね、ねえ、バルトファルトはどう?」

「成績はギリギリ選手レベルだけど……」

「どうせボコボコにされるなら、ジルク様よりもこいつじゃない?」

医務室にいる面子の視線が俺に集まると、アンジェが俺を庇うよ

うに前に立った。

「リオンを出場させるつもりはない。こんな話を知った上で出場な
どさせられるものか。悪いが棄権する」

それを聞いてマリエが声を張り上げていた。相当慌てている。

「待つてよ！ 賞金はどうなるのよ！ エアバイクのレースには期
待していたのに！」

アンジエが視線で人が殺せそうな勢いで睨み付けていた。

「そんな物のためにこれ以上の怪我人を出せるものか」

アンジエの正論にホツと胸をなで下ろす。

出場するつもりはなかったが、出ていればきつと俺がボコボコに
されるところを見て会場は大盛り上がりになっただろう。

……絶対出たくないわ。

ただ。

「で、でも、それをするとアンジエリカ様の評判が」

「そうよね。代役も立てられないなんて学年の代表として問題に…
…」

「誰かが出てくれれば……」

俺が首をかしげていると、マリエがまるで叩き込むように俺に言
う。何気に初めて会話するのだが、こいつ何だか図々しい。

「そ、そうよ！ あんたが出ないとその女が困ることになるわよ！
ね、ユリウス！」

「あ、ああ、アンジェリカは一学年の代表みたいなものだからな。
代理を用意できないのはアンジェリカの手腕というか……まあ、評判に関わるかな？」

俺がアンジェエを見ると、困ったような顔をしていた。

「……私のことは気にするな。わざわざ怪我をする必要もない。お前には、これ以上の迷惑はかけられないからな」

……ちよつと困るんですけど！

そもそも、何で代理を立てられないとアンジェエの責任になるの？
そもそも、学年の代表ならその元王太子殿下様で良いだろうが！

と言うか、アンジェエの評判が落ちるとか困るんですけど！

これ、俺を庇ったせいでアンジェエが困るパターンだよ！ そんなの許せないよ！

……だって、俺はアンジェエパパに借りがあるのに！

王太子だったユリウス殿下に喧嘩を売っても平気だったのは、アンジェエのパパさんが俺を守ってくれると思ったからで、そして実際に守って貰った。

おかげで出世するという意味不明なことにもなったのだが、そん

なアンジェパパからすれば俺のせいで娘の評判に傷が付いたらどう思う？

……激怒するに決まっている。俺なら憤慨ものだ。

「……出場する」

「へ？」

リビアが驚いていた。

アンジェも目を見開いている。

「リオン、同情なら」

「同情なんかじゃない！ 決めた。俺は出場する。すぐに手続きをしてくれ。それからバイクの用意を」

実行委員に言う「やった。みんなに知らせてこよう」と言いながら一人が医務室から出て行った。

俺がボコボコにされる事になった、とでも言いふらしに行くのだから。

「リオンさん、無茶をしていませんか？」

リビアの言葉に俺は真剣な眼差しを向けた。

「無茶？ 違うな。これは意地だ！」

困った顔をしているアンジェは、俺の出場を止めたいらしい。

「だ、駄目だ。クラリスの所はエアバイクに長けた者が多い。去年の優勝者は、あいつの取り巻きの男子だぞ。ラフプレーもその気になれば何をしてくるか分からない」

「それでもやらないといけない時があるんです！」

アンジェもリビアも俺の気迫に止めることを諦めたようだ。

「リオン……そ、そこまで言うならもう何も言わない。お前の勝利を祈ろう」

「わ、私も応援します！ リオンさんのこと、凄く応援しますね！」

アンジェパパは怒らせちゃ駄目だ。

だって、俺が死んじゃうから。

マリエはのんきにしていた。

「あんたが出るなら安心ね。負けても嬉しい。勝ったら賞金は私の物。うん、大丈夫！」

……こいつの顔面に拳を叩き込んでも良くない？ こいつは殴っても許されると思う。確かに最終レースに出られるのはジルクのおかげだ。だが、賞金を貰うつもりでいるのが図々しい。

ジルクが俺の顔を見てから、悔しそうに俯いた。

そんなに俺のことが嫌いか！ 俺も嫌いだね！ 大嫌いだ！

「……今は貴方に頼るしかありませんね」

「泣いて喜べよ、緑の陰険野郎。貸しにするからな」

俺がそう言うと、小さく笑っていた。

「大きな借りになりそうですね」

「……すぐに返して貰うから覚悟しておけ」

俺は医務室を出てエアバイクレースへ出場するための準備に入
った。

プロローグ（後書き）

いかがだったでしょうか？

本日活動報告も投稿したので読んでいただければ嬉しく思います。

それと【乙女ゲー世界はモブに厳しい世界です】は書籍化決定しました！

G C ノベルズ様から夏前に出版予定です。

今後とも応援、よろしくお願いいたします！

女の友情は儚い（前書き）

セブンス6巻の予約が開始されました。

こちらにも応援よろしくお願いいたしますm
（
（
m

女の友情は儚い

エアバイクレース。

飛行船の格納庫で、俺は自分の乗るエアバイクを前にしていた。

レーサーのようなスーツ姿で、ヘルメットを携えた俺はエアバイクに取り付いたルクシオンと会話をしている。

『後ろ盾を怒らせたくないからと無理をしますね。アンジェリカの立派な取り巻きではないですか。モブに相応しい立ち位置でしょうか？』

日頃から俺は自分のことをモブと言っており、ルクシオンは嫌味を言ってくる。

『もう少し背景みたいな立場が俺の好みだ。悪役令嬢の取り巻きなんて大役は恐れ多くていけないね。それより、いけそうか？』

まるで水上バイクのようなエアバイクに、ルクシオンが球体ボディから伸びたコードを突き刺して改造していた。

『後十分程度で問題ないかと。どうやら、嫌がらせを受けていますね。エンジントラブルが発生するような仕掛けがされていました』

『マジかよ。もしかして俺ってそんなに嫌われているの？』

『間違いなく全校生徒が嫌っていると思いますよ。今仲良くしてく

れているお二人は大事にするべきでしょう。異性として見られないならお友達になりますか」

「……友達ね」

小声で話をしている俺は、あの二人について思うのだ。

本来なら友達にもなれない主人公と悪役令嬢……俺はもっと、簡単な問題で二人は親しくなれないと思っていた。

「このまま仲良く出来れば良いけどね。波風立たないのが一番だ」

『何か気になる点でもあるのですか？』

「ああ、あるね。あの二人は根本的に」

そこまで話をしていると、三年生の先輩が一人やってくる。

短髪で背が高く、厳つい先輩は随分と体を鍛えている様子だ。首回りがとにかく太い。優勝候補の一人である。

「ジルクの代理はお前かよ」

「おや、優勝候補の筆頭様じゃないですか。俺に何か用件でも？ ちょっと忙しいんで後にして貰えませんか。エンジン関係でトラブルがありましたね」

クラリス先輩の取り巻きの一人。

三年生の先輩は、俺の顔を見て苦々しい表情もしていない。ただ、

普通にしていた。

「知っていたのか？　なら忠告してやる必要はなかったな。それにしても、ジルクの代わりに出てきたのがスコップ野郎かよ。……複雑だな」

スコップ野郎。決闘時に間違ってスコップで戦ってしまったので、そう呼ばれているのだろう。

「言ってくれますね」

そう言うと、先輩は少し自嘲気味に笑った。

「……先に謝っておくぞ。お前には恨みもないが、次のレースは本気で潰す」

なんと律儀な宣戦布告だろう！　……謝るなら止めてよ。痛いのは嫌いなんだ。

「やむにやまれぬ事情でも？　クラリス先輩に脅されましたか？」

「　　違う！」

俺の冗談に先輩が激高すると、すぐに「悪かった」と謝罪してきた。

そして咳払いをしてから俺に話してくれるのは　　クラリス先輩の事だった。

「俺の家は宮廷貴族でも末席だ。爵位もなければ、俺自身は跡取り

でもなかった」

普通クラスの生徒である先輩は、クラリス先輩の取り巻きの一人。

ただ、少し違うのは恩義を感じているところだろう。

「お嬢様はこんな俺にも優しくかったのさ。俺にエアバイクの才能がある」と知ると、支援してくれた。おかげで卒業後はこいつに乗って働く仕事に就けそうだ」

エアバイクに優しく手を置く先輩は、嬉しそうなのに悲しそうにも見えた。

「……優しい人だ。俺たちの憧れだった。周りの女が酷くて、他のお嬢様連中の取り巻きたちがグチグチ言っているのを聞いて……俺たちはこの人で良かったと何度も思ったさ」

俺が黙っていると、先輩は過去を話してくれる。

「お嬢様の家はエアバイクのレース場を持っていてよ。そこを自由に使えるから練習には困らなかった。ジルクの奴も婚約が決まる前からレース場に通っていたんだぜ。お嬢様はあいつのために指導者を用意して、エアバイクも送ってさ。凄くいい顔で応援するんだよ。それが悔しいやら嬉しいやら……なのに、ジルクの野郎は急に婚約破棄を言ってきた。お嬢様が会おうとしても絶対に会わないまま、気が付けば婚約破棄だ」

それは怒っても仕方がない。

ジルクはボコボコにされれば良い。俺が許す。やつちゃって、先

輩！

「なら、俺は許してくれませんか？」

「悪いな。心情的には嫌いじゃないが、お嬢様の命令は絶対だ。……この命令だけは俺たちは絶対にやり通す。何が何でも……命を引き換えにしても」

強い決意。

これだけ慕われていたのだから、クラリス先輩も人望が厚い。

先輩が俺に言う。

「……医務室の件は聞いた。無理だろうが、お嬢様を悪く思わないで欲しい。あの人、夏休みから人が変わっちゃったのさ。奴隷を侍らせて、夜は遊んで朝帰りだ。昔はそんな人じゃなかったのに」

……奴隷を侍らせ朝帰り？ それ、うちの姉貴を筆頭に多くの女子がやっている事だ！

感覚が麻痺してきたせいか、あまり驚かなかった。

末期だな。どうやら俺も、この乙女ゲーの世界に染まりつつあるらしい。

普通じゃん、って一瞬思ってしまった。

「……同情してこちらが手を抜くとしても？」

先輩は笑っていた。

「駄目か？ まあ、お前はこういう話に興味がなさそうだから無理だろうな。別にいいさ。俺の愚痴だ」

去って行く先輩を見ながら俺はエアバイクのシートに腰を下ろしてヘルメットをかぶる。ヘルメットの顎にあるベルトをしっかりと固定した。

『エアバイクを完全に掌握しました』

「そうか」

『……マスター、今の話を聞いても何も思わず優勝狙いですか？』

「ああ、優勝狙いだ。悪いけど、俺は俺自身に大金を賭けているからな」

ジルクの代わりに俺が出ると知った生徒たちの賑わいと言ったら……今回は学園の用意したエアバイクを使用すると聞いて、俺が負けると思ったらしい。

決勝に進出した選手たちと俺を比べれば、明らかに俺は劣っている。

……つまり、俺は大穴だ。

『お金など必要ないと思いますが？』

「馬鹿だな。俺が負けると思っている連中が悔しがる姿を見せてく

れるんだぞ。そのためになら優勝くらいするわ。賭けはついでだ。こっちは別件でちよつとな」

『本当に良い趣味ですね。私の力を使って勝負する時点で情けないのに、それを微塵も感じないタフで図々しい精神は見習いたいものです』

こいつ俺のこと嫌いすぎじゃない？

レースが始まるとあってエアバイクで空の上を走った。

周囲には同じようにバイクに乗っている生徒たちの姿がある。

中には、俺を目の敵にしている奴もいた。

「よう、待っていたぜ。今日はあの時の借りを返してやる」

誰だ、こいつ？

見れば二年生のようなだが、俺には全く見覚えがない。普通クラスではなく、どうやら上級クラスの生徒らしい。

俺が無視をするとエアバイクをぶつけてきた。

「無視してんじゃねーよ、一年のカス野郎」

俺は鼻で笑ってやった。

「お前みたいなゴミ野郎をいちいち覚えていられるわけねーだろ、ゴミ屑が。公爵家にお前の名前を告げ口してやるから名乗れよ。ほら、名乗ってみろよ！」

レッドグレイブ家と親しくしておりますというのをアピールしつつ、俺は丁寧に対応して相手に下がって貰うことにした。

虎の威を借る狐？　それが何か？　結構楽しいよ。

相手が舌打ちをして俺から距離を取る。

布で張られたスタート地点に選手が出そうと、飛行船たちが困って出来たコースが見える。

随分と長いコースだ。

所々に障害物も設置されていた。

『……相変わらず口が悪いですね。マスターに全く同情できませんよ』

「俺はこんなに真面目なのに、どうして厄介ごとが舞い込むんだろうな。ヤレヤレだぜ」

『自業自得です。実は目立ちたがりではないかと最近疑っております。ほら、スタートですよ』

前を見ると審判がライフルを空に向かって撃った。

それを合図に一齐にエアバイクが走り出すと、俺も先頭集団に

ならなかった。

『見事に囲まれましたね』

「ガッデム！」

『貴方の前世は日本人では？』

「言ってみただけ」

周囲を囲む男子生徒たちが、俺に近付くと蹴りを入れてくる。

「くたばれ、この外道！」

「お前のせいでこっちは借金生活だ！」

「落ちろおお！」

この怨嗟の声に俺は誤解だと言いたかった。

「全部自業自得だろうが、ばーか！ お前らが落ちろ！」

俺も蹴ってきた男子生徒に蹴り返していると、ルクシオンが呆れていた。

『……目くそ鼻くそに相應しい会話ですね。争いは同レベルの者同士でしか起きないと実感できますよ』

上下左右……そして前方まで防がれた俺は周囲からの集中的な攻撃に耐えるのだった。

「痛っ！ 誰だ、今ぶつかったの！」

有料ラウンジでは、生徒たちが集まりレースを応援していた。

「やっちまえ！」

「そこよ。もつと決り込むように！」

「ちよつと、生温いんじゃないの！」

白熱する応援……全ては、リオンが生徒たちのヘイトを稼いだのが原因だった。

アンジェが頭痛にこめかみを押さえる。

「……下手に止めても不満は溜まる。適度にガス抜きさせれば良いとリオンも言っていたが、これは流石に」

リビアが涙目だ。

「リオンさんが可哀想です。リオンさん、別に悪いことは……え、えっと」

何とかリオンを庇おうとするリビアをアンジェは慰めた。

「無理をするな。あいつにも悪いところはあるが、ここまで言われる奴ではないと私とお前が知っている。それにしても、クラリスの関係者が近づけないとは」

リオンを潰そうとしたクラリスの取り巻きたち。

しかし、その取り巻きたちが囲む前にリオンは他の男子に囲まれボコボコにされていた。

致命傷は避けているが、見ていて腹立たしい思いのアンジエが手を握っているとクラリスがやって来た。

「あら？ 私たちが手を下すまでもなかったわね。あんたの取り巻き、本当に嫌われているわね」

リオンを取り巻きと思ったクラリスに、アンジエは反論した。

「リオンは取り巻きではない」

「そうなの？ いつも一緒にいるから、そうとしか見えなかったわ。それにしても、あんたも人望がないわね。取り巻き連中がみんな裏切ったんでしょ？ 裏切られるあんたにも問題があったんじゃないの？」

ケラケラ笑っているクラリスに、リビアが会話に割り込んでしまった。

「そ、そんな事はありません。アンジエは悪くありません！」

「リビア」

そんなリビアにアンジエが少し安堵すると、クラリスが目細めていた。

「私たちの会話に割り込むんじゃないわよ、平民風情が」

「……え、あ」

リビアが平民と言われて尻込みすると、今度はアンジェが庇おうとする。それを見てクラリスは暗い笑みを浮かべていた。

「アンジェリカも変わったわね。取り巻き全員に裏切られて弱気になってしまったのかしら？ 昔の貴方なら、平民なんてたいして気にも留めていなかったのに。もしかして、気落ちして平民にすぎたのかしら？ あんなに平民を見下していたのに変わるものね。私も騒動以降に裏切り者は出たけど、流石に平民には頼らないわよ」

アンジェがクラリスを睨むが、すぐに振り返ってリビアを見た。言葉が出ないリビアに、アンジェは誤解を解こうとするが。

「……ち、違う。リビア、私は」

手を伸ばすが、リビアは涙を拭うようにその場を去って行く。

「あ」

アンジェが追いかけようとするが、足が止まった。

（……私に追いかける権利はあるのか？）

立ち止まって考えるのは、過去の自分だった。

公爵令嬢ともなるとリオンとは生活が全く違う。畑に出ることもなければ、民とふれあう機会など用意されなければあり得ない。

そんなアンジェが、平民をどう思っていたかなど……。

「あゝあ、逃げられちゃった。最後のお友達も冷たいものよね」

クラリスの言葉にアンジェが額に青筋を浮かべ睨み付ける。

「黙れ。その顔を吹き飛ばされたくなければ、私の前で口を開くな」

「……ようやく調子が戻ってきたわね、アンジェリカ。あんた、やっぱり短気よね。それにしても、そんなあんたが復讐もしないで大人しいなんてガツカリだわ」

煽ってくるクラリスに、アンジェリカは取り巻きと専属奴隷を見た。

（全て男ばかり。そうか、こいつも女子には裏切られたか）

女子の取り巻きがないことに気が付き、アンジェリカもクラリスを煽った。

「偉そうなことを言っておきながら、自分も友人たちとは縁切りか？ 鏡を用意してやるのか？」

「……あんた、本当に苛々するわ。あんたがユリウス殿下たちを見張っていれば、こんな事にはならなかったのよ！」

アンジェリカの頬を平手打ちが襲う。

先程まで白熱していたラウンジが、一気に静まりかえった。

クラリスの取り巻きたちが慌てて仲裁に入ろうとすると、アンジ

エリカはクラリスの胸倉を掴んで拳で頬を殴った。

そのまま押し倒してマウントポジションを取る。

「偉そうに言うな！ 男共侍らせて、あげくに専属奴隷？ お前の方が馬鹿だ！ そんなお前だから捨てられたんだろうが！ この猫かぶりが！」

クラリスがアンジェリカの髪を掴む。

「言っただけ、このじゃじゃ馬！」

ラウンジ内が騒然となった。

レースも終盤に入ると、順位を上げようと男子たちが俺から離れていく。

「こんなもので良いだろ」

「これだけボコボコにしたらもう走れねーよ」

「じゃあな、口だけ野郎！」

去って行く糞野郎共の背中を見ながら、俺はハンドルを握りしめスロットルを上げていくとエンジンが小気味良く震えていた。

車体はボロボロになってしまい、ヘルメットのバイザーも割れているが……俺の心は折れていない。

残念だったな、ゴミ屑共！ お前らの敗因は、俺に止めを刺さな

かったことだ！

「いけるな？」

『いつでもどうぞ。しかし、これだけあからさまなラフプレーで止めに入らないとは嫌われすぎでは？』

「審判に金を握らせておけば良かったな」

『……本当に最低な発想ですね。ただ、他の生徒が既に握らせていると思うのでマスターの場合は更に大金を積み上げないと審判も納得しないかと』

「ああ、そう思うよ」

スピードが上がると先程まで俺を囲んでいた男子たちが、順位を争って仲違いをしていた。

そんな彼らを追い抜く。

ルクシオンが完全管理したエアバイクの調子は最高だ！

「て、てめえ！」

悔しそうにする男子たちに、俺は手を振っておく。

「足の引っ張り合いご苦労さん。お前らはそうやって一生足の引っ張り合いをしているよー！」

そして次々に選手たちを抜いていくと、上位陣を独占するように

クラリス先輩の取り巻きたちが走っていた。周囲とはレベルが違い、仲間内で上位を独占しそうな勢いだ。

『流石に速いですね』

「追いつけるか？」

『ご冗談を……追い抜くまで一分もかかりません』

エンジンが限界を超えて動き始めると、エアバイクにしがみつくだけでも大変だった。

エアバイクの制御もルクシオンが行っている。バイクが小刻みに時には大きく傾く中、俺は必死にしがみついていた。

『マスター、体重移動が僅かに遅いですよ』

「小刻みに変更を入れすぎなんだよ！」

バイクに合わせて体を動かし、そして次々に上位の選手たちを抜いていく。

その光景に会場内が騒然としていた。アナウンスも驚愕したのか声を張り上げている。

『ま、まさかここでバルトファルト選手が優勝争いに加わったあああ！こんな事があり得るのでしょうか？ もしや違法改造か！』

俺が勝つのがそんなに嫌か？

「そうか。それなら……意地でも勝つてやるよ」

お前らの泣き顔を是非とも俺に見せてくれ。

そうして三位の選手を抜き去り、二位の選手が俺の前に出てきた。

「行かせるか！」

俺の進行方向を邪魔する屑に、笑いながら言つてやる。

「残念！ 行かせて貰いまゝす！」

エアバイクの動きに体を合わせ、随分とトリッキーな動きで二位の選手を抜くと目の前には三年の先輩だけがいた。

俺がアウトコースから抜こうとすると、先輩は俺に何かするよりも直線コース 最後のゴール手前で無駄なことはせずに実力勝負に出た。

元から小細工は嫌いなタイプと見ていたが、やはりそうだった。

「 悪いな」

ルクシオンに管理されたエアバイクがマフラーから火を噴くと、最後のスピードは俺でも恐ろしくなるものだった。

……二度とエアバイクのレースなんか出たくないと思えるくらい
のスピードを感じていると、先にゴールしたのは僅かに俺のエアバイク。

勝ったのは俺だった。

スピードを落としてヘルメットを脱いだ俺は、観客席に向かって笑顔で手を振るのだった。

「みんな、俺が勝ったよー！ ごめんね」

観客席　飛行船の甲板やラウンジから、物が投げつけられる。

「またお前か！」

「私のお小遣いを返して！」

「この疫病神が！」

そんな声援に包まれつつ、俺は手を振っていた。悔しそうな私たちの顔が、俺には最高の業褒美だ。

『マスター』

「なんだ？　今は気分が良いから放っておいてくれ」

『いえ、そろそろ本当に限界です』

「え？」

振り返ると、エアバイクから白い煙が吹いていた。通りで背中が少し熱いと思った。シートとか、エアバイク自体に熱があるような気がしたのだ。

「いやあああ！」

ルクシオンを手にとってそのままエアバイクから飛び降りると、後ろを走っていた先輩が俺を拾ってくれる。

……意外に優しい先輩だった。

「助かりました」

お礼を言っと、先輩が困ったように笑うのだった。

「別にいいさ。決闘騒ぎの時はスカツとしたからな。その時のお礼だ。まあ、ついでに少し稼げたからよ」

この先輩、ジルクへの憎しみで決闘の際に俺に賭けていたらしい。

医務室。

表彰された俺は、賞金を持ってジルクたちの所に来ていた。

俺はメダルを見せつつマリエの悔しそうな顔を見る。

なんて気分が良いんだろう。

この、妹を言い負かしたような爽快感は久しぶりだ。

「ほら、勝ってきましたよ。約束忘れていないだろうな、ジールク君」

俺のニヤニヤした顔に、ジルクは小さく溜息を吐いている。

「……ええ、約束は約束です。何でも命令すれば良いでしょう。まあ、可能な限り応えるつもりですよ」

可能な限りというのが、こいつの腹黒さを物語っている。

出来ないことはしないと言っているのだ。

なんて最低な奴だろう。

これだから乙女ゲーの攻略対象は駄目だ。

頭の後ろで手を組んでいるカイルが、俺に対してため口で話してくる。こいつ、俺が男爵様だと知っているくせに……。

「それで、何をさせるつもりなんですか？ 裸で逆立ちでもさせるつもりですか？」

「馬鹿かお前は。こいつの逆立ちにどれだけの価値があるよ？ いや、待てよ……女子たちの前で裸を晒すのは良いかもしれないな。金になりそうだ」

すると、マリエが俺を指さしてきた。

「そこまでしてお金が欲しいの！ この守銭奴！」

「鏡見てこいよ！ 俺以上の守銭奴がそこにいるからさ！」

「というか、賞金を返してよ！」

本当に図々しい。優勝レースに出られたのはジルクのおかげだから、賞金は折半でも良かったが……俺は全額をマリエに渡すことにした。

「ああ、良いよ。受け取りなよ」

「や、やけに素直じゃない」

「俺は素直が取り柄だ」

賞金の十万ディアを渡すと、マリエは跳びついた。しかし、俺が持っていた金貨　白金貨が気になったらしい。わざと見せつけるように白金貨を手の上で遊ばせる。

「そ、それって……」

「ああ、今日の賭けで随分と儲けてね。俺自身に賭けたら大穴だったから大儲けだよ」

白金貨と、後は金貨や銀貨に変換した物を見て、マリエはガクガクと震えていた。この守銭奴、絶対にこれでうらやましがると思っていたが大当たりだ。

十万ディアなど霞む金額が俺の手の中にあつた。

「ひ、卑怯よ。そんなの卑怯！　自分に賭けるなんてあり得ない！」

「問題ありません。お前らは精々、その金額で満足しているんだな」

別に十万デИАなんて痛くも痒くもないと見せると、マリエは本
当に悔しそうにしていた。こいつ、本当に分かりやすい。

腹が立つマリエと睨み合っていると、ジルクが立ち上がった。

怪我の方は大丈夫らしい。

「分かりました。それで君の気が晴れるのなら構いません」

俺はどうでもいいマリエから視線を外し、ジルクへと向き直った。

「阿呆が。そんな事をしたらアンジェとリビアに怒られるだろうが。
もつと現実的で可能な範囲の命令……いや、お願いだ」

ジルクが少し俺を疑ったように見てくる。そんなに信用がないの
だろうか？

「お願いですか？」

飛行船のラウンジ。

貸し切ったのでこの場には関係者しかいなかった。

病衣を着用したジルクは、頭部や腕に包帯を巻いていた。

そんなジルクを前にしているのは、クラリス先輩である。

俺がお願いしたのは……。

「この度のことは本当に申し訳ありませんでした」

……クラリス先輩への謝罪である。

因みに、ラウンジにいた次女にも謝らせた。そちらはついで、こちらが本命だ。

クラリス先輩が涙目になっている。

「今更……今になって……遅いのよ！ 私は待っていたのに！ あんた、手紙一つで全部なかったことに出来ると思っていたの！」

激怒するクラリス先輩。

当然だと思う。ジルクはもっと反省した方が良い。

「会うのは失礼と思いました。他の女性を愛して貴方に会うことは出来なかった。嘘を付くのが……貴方の前で嘘を付くのが嫌でした」

クラリス先輩が踏み込みつつスナップの利いた平手打ちをジルクにお見舞いしていた。

いい音がラウンジに響く。

もっとやって！ やっちゃって、クラリス先輩！

……ジルクは何もやり返さない。ただ、全て受け入れるつもりだようだ。その潔さは、もっと違う場面で見せるべきだろう。

「何が嘘よ！ あんな女に誑かされて……私を捨ててまでそんなに欲しかったの？ どうしてあの女なのよ！」

「……自分でも分かりません。けれど、彼女のことを愛してしまっただけです。だから、貴方に会ったのを躊躇いました」

イケメンは言い訳も綺麗に聞こえる。

俺なら怖いから会いたくなかったと言うかな？ いや、そもそも浮気とかないわ。こんな乙女ゲーの世界で浮気とか……男がボロボロになるまで追い詰められるからね。逆に女性の場合は、めっ！で済むけど。

……やっぱりこの世界って理不尽だね。

「そうやってまた誤魔化すの？ ジルク、貴方はいつもそう！ そうやって本音を私に語ったことなんか一度もないじゃない！ 今もそうやって謝るふりをして逃げるの？」

「……これが私の素直な気持ちです。貴方に会える立場ではない。会っても貴方を傷つけてしまう。それなら、思い出のままの私を覚えていて欲しかった」

このジルクという攻略対象だが、面倒なのは『基本的に自分の考えを他人に話さない』だ。いつもニコニコしているだけで、何が好きとか嫌いとか喋らない。

そうやって嫌なことからも逃げているので、本当に面倒な奴なのだ。ゲームではユリウス殿下のためとか、そんなのが理由になっていたが……元婚約者くらいには謝っておけよ！

クラリス先輩の取り巻きたちが手に武器を持とうとしていた。

流石にまずいと思って俺が間に入ると。

「……もう良いわ」

「お嬢様？」

三年の先輩がクラリス先輩を心配していた。クラリス先輩自身は涙を拭っていた。

涙よりも傷だらけの顔が気になる。どうして傷だらけなのだろうか？

「貴方たちが手を汚す価値もないわ。もう、私はこんな男と関わらない。これからは他人よ。二度と関わらないで」

喧嘩を売ってきたのに凄いい分だが、ジルクは頭を下げていた。

「申し訳ありませんでした。そして、ありがとう……クラリス」

クラリス先輩が俯いて奥歯を噛みしめている。

「呼び捨てにしないで！ もう顔も見たくないわ！」

追い出されるジルクは、姿勢正しくラウンジから出て行ったが……

…あ、あれ？ 俺だけ取り残されてない？

部屋の雰囲気ビクビクしていると、先輩が声をかけてきた。

「……悪かったな。迷惑をかけた」

「い、いえ」

クラリス先輩は、取り巻きが持つて来た椅子に座って涙を流している。

……俺、もう帰りたい。

「俺も帰ります。この場には相応しくない」

「いや、少し待ってくれ」

そう言われて男子たちに囲まれると、全員に頭を下げられた。

「せ、先輩!？」

「俺たちが呼び出してもあいつは来なかった。お前には 男爵に感謝しています。数々のご無礼、申し訳ありませんでした!」

「申し訳ありませんでした!」

男子一同からの謝罪に困惑していると、少し離れた場所で亜人種の奴隷たちはその光景を眺めていた。

彼らに忠義など存在しない。あるのは契約だけだ。

「不満があれば殴ってくれても構わない。出るところに出ても良い。ただ、お嬢様は今回の件と無関係だ」

「それが通用するとも?」

俺が意地悪く言えば、先輩は小さく笑った。

「駄目なら俺が責任を取るさ。命懸けでな」

責任を取って自ら命を、か。本当にやりそうで怖い。……ここま
で忠誠を捧げられる主人がいるのも羨ましい限りだ。

それを聞いてクラリス先輩が立ち上がった。

「待ちなさい! 私がそんな事を許すと思っているの! ……全ての
責任は私にあるわ。貴方たちは私の命令に従った。それだけよ」

「ですがお嬢様!」

誰が責任を取るかで争っているその場で、俺は呆れたように言う
のだった。

「面倒な小芝居は止めて貰えますか。それに責任を追及しても面倒
になるから嫌です」

すると、先輩が俺を見て。

「お、お前……そうか。許してくれるのか」

クラリス先輩を追い込む? そもそもジルクの野郎が悪い。あい
つが気を利かせておけば事前に解決していた問題だ。

本当に面倒な奴。

「……クラリス先輩もいい加減に立ち直ってくださいよ。男なんて星の数ほどいますよ」

俺の台詞にクラリス先輩が俯いて力なく笑っていた。

「貴方は捻くれているけど優しいのね」

その台詞を聞いていたルクシオンが『この方は勘違いをしています。マスターは捻くれているのではなくねじれ曲がつて』などとうとうでも良いことを言っていたので、俺は髪をかいて照れくさそうな態度を改めた。

「……気持ちは分かります、なんて言いませんけどね。面倒なのは止めて貰うとありがたいです」

「そうするわ。もう……随分と遅いけどね。私、もう汚れちゃった」
悲しそうに笑うクラリス先輩の後ろで、専属奴隷の一人が意味ありげに笑っているのが見えた。俺たち相手に勝ち誇ったような笑みだ。

「安心してください。良い女はその程度の汚れなんて気になりません。まあ、専属奴隷の数はどうにかするべきですが」

俺がにらみ返すと、専属奴隷の亜人種たちがそれぞれ狼狽えた表情になる。彼らにとって、クラリス先輩は良い主人だったのだらう。

都合が良いとも言う。

「口が上手いわね。そうやってアンジェリカに取り入ったのかしら？」

「俺、正直者ですから嘘は吐かないです」

先輩が「絶対に嘘だ」とか言っていたが無視した。

クラリス先輩が小さく頷く。

「そうね。また頑張ってみるわ。もうこんな生活も疲れたし……なんだろう。何をやっても振り向いて貰えないって分かっていたのに……私は何をやっていたのかしら」

ジルクも罪作りな男だ。これだけ想われていたのにマリエのために全てを捨てやがった。

……本当に、転生者なんてろくでもないな。逆ハーレムを実現させるために、不幸を量産しやがる。

真面目で優しい女性が、男を侍らせ遊び回って……その理由が、捨てた男に振り向いて欲しいからとか……どうして俺にはこんな女子が周りにいないんだ！

あげくにジルクの尻拭いのような真似までさせられて……悔しい！

本当なら関わらないでも良かった。だが、ジルクが攻略対象の男子である。これが原因で余計な面倒ごとが起きるのは避けたかった。自分のためにお節介を焼いたのだ。

クラリス先輩がまた泣き始めたので、俺は用も済んだので去ろうとした。泣きたいのは俺の方だ。今日の頑張りや婚活に何の得にもならない。体育祭の成果は、賭けで稼いだ家が建ちそうな大金だけだ。

すると。

「リオン君。貴方やアンジェリカ それに、あの特待生にも謝らないといけないわ」

遊覧飛行船の甲板。

その隅で座っていたリビアを見つけた俺は、近付いて声をかけた。

「……落ち込んでいるな」

顔を上げたリビアは泣いていた。

「リオンさん、私……どうしたら良いのか分からなくなりました」

痛々しい笑顔で言うリビアの隣に座る。顔に傷があつたアンジェリの所にも向かったが、リビアの所に向かって欲しいと言われた。凄く寂しい顔を見せられたよ。

「慰めるのは下手なんだよね。それでも良いなら慰めるけど？」

首を横に振られたので「そっか」と言うところ。

「リオンさん。私は……アンジェリカさんと友達になれていましたか？ なれたと思いますか？」

友達だったのか、それともこれから友達になれたのか。そんな質問に対して俺はどう答えるべきか悩んだ。正直に言えば、こうなると予想していたのだ。

「甘い嘘と苦い真実ならどっちが良い？」

「……苦い真実をお願いします」

俺なら甘い嘘に逃げたいけど、この子は強いな。流石は主人公……いや、流石はリビア、か。まあ、そう言われると思っていた。

「丁度良かった。甘くて温かい飲み物を用意していたんだ。苦い真実を聞くには丁度良い甘さにしてきたよ」

「リオンさんは本当に不思議な人ですね」

複雑そうな笑みを浮かべていた。まあ、前世を持っている人間だからね。

飲み物を渡し、リビアがそれを飲むと俺は苦い真実を告げる。

「答えから言えば限りなく難しい、だ。そもそも生活や環境が違いすぎて共通点が何もない。ハッキリ言ってこれまでが上手くいきすぎだったと思うね。鋤を持った農民が明日から剣を振れと言われても困るだろ？ そっいう事だよ」

家庭環境の違いやら、生活水準の違いというか……そもそも、金持ちと貧乏人がいたとして、どちらにも同じ価値観を持てとか無理だ。

例外はあるだろうが、それでも大半が上手くいかないだろう。

リビアが涙を流す。

「私、ようやく学園で同性の友達が出来て嬉しくて、でもやっぱり駄目みたいです……私、アンジェの側にいると迷惑になります」

泣いているリビアに上着を貸して、そのまま横に座った。

気の利いた台詞？

俺に期待する方が間違っている。そういうのは……ユリウス殿下たちの仕事だよ。

友達を作ろう

「……身分が違いすぎますよね」

図書館で本を読みリビアがポツリと呟いた。

そのまま少し間を空けてから、俺は同意するのだ。

「そうだね。公爵令嬢とか俺でも雲の上の人だからね。アンジェ自身は良い子だと思うけど、住む世界が違うからね」

同意する俺が読んでいるのは「茶会の歴史」という非常にためになる本だ。体育祭が終われば学園祭が待っており、次のアピールタイムが待っている。

学園祭での出し物は、クラス単位ではなく個人やグループ単位で行われる。

俺はダニエルとレイモンドを引き込み、喫茶店を行うつもりだ。

俺が勝負を賭けるには……女子にアピールするにはお茶しかないのだ。

「やっぱり基本の王道が良いのか？　しかし、ここは工夫を凝らした方が女子へのアピールに……」

「リオンさん、私の話を聞いていますか？」

「え？ あ、うん。アンジェのことでしょう？」

「そ、それもありますけど、もっと違うことです。全体といいますか、学園の人たちは私から見ると貴族や騎士様で……」

まあ、貴族もピンキリだからね。俺みたいな田舎貴族で畑仕事を
している貧乏な家もあれば、アンジェのような皆が想像する貴族と
いう人もいる。

「俺とは話せているし、田舎貴族の野郎なんて畑仕事もやるから仲
良く出来るんじゃない？ 卒業したら就職しても割と質素な暮らし
だから気にしなくても良いのに」

みんなが将来的に貴族らしい暮らしをするわけじゃない。

家を出て王宮や、他家で仕事を貰う。多くは実家で仕事をしつつ、
慎ましく暮らしていくしかない。

次兄なんかも将来は王宮でしばらく働いて、実家に戻って家の手
伝いという予定だ。

「で、でも、皆さん凄い人たちなので」

俺はリビアが読んでいる本を見る。

魔法に関するとにかく難しく分厚い本を、リビアはすらすら読ん
でいた。そんな難しい本を読める奴がいったいこの学園に何人いる
のだろうか？

君の方が凄いから。君、この世界の主人公様だよ。

「他の人にも聞いてみれば良いよ。俺と答えが違ふ奴はそうはいないよ。気にしすぎだつて」

俺の言葉にリビアが戸惑っていた。

「どうしたの？」

「え、えつと……他の人に聞くのがちよつと」

「知り合いとかいないの？」

「……いません」

俺はここで気付いた。気付いてしまった。

リビア、学園で友達が少なすぎる。

……やべえ、この子、普段から俺かアンジエと一緒にそれ以外に友達や知り合いがいなかった、と。

俺とアンジエがいるために、他の友人を作る機会を潰してしまっていた。

アンジエは皆が簡単には近づけない公爵令嬢で、俺は学園で嫌われているため人が近づいてこない。

そんな俺たちと一緒にいれば、リビアにも誰も近付かない。

盲点だった。主人公なら上手くやっているだろ、みたいな感じで

放置していたら、とんでもない状況になっていた。

俺は本を閉じて机に置く。

「リオンさん？」

「リビア……勉強は一旦中止だ。まずは友達から作ろうか」

「へ？」

リビアを連れて乗り込んだ先は、普通クラスの男子寮。

普通クラスは基本的に二人部屋だ。普通クラスには次兄【ニックス】がいるので、俺は頼るために足を運んだ。

「兄ちゃん助けて」

忌々しそうな顔を向けてくる次兄は、学園の三年生だ。

卒業学年の普通クラスの生徒は忙しい。

文官職に進みたい次兄は、試験を受けるために勉強していた。

リビアが頭を下げている。

「よ、よろしく願いします、ニックス先輩」

同室の男子が気を利かせて出て行くと、次兄は俺を睨む。

「お前さ……馬鹿だろ」

「何で？」

事情を話すと、次兄は俺の行動にダメ出しをしてくる。

「そういうのは最低でも新学期が始まったくらいに考えておけよ。二学期はもう一ヶ月以上も過ぎて、これから学園祭だぞ。新しい人間関係とか難易度高いだろうが」

「だから相談したんだろうが！」

「逆ギレ？　ねえ、なんでお前が怒るの？　怒りたいのはこっちだよ！」

次兄が俺ではなくリビアを見る。

「……オリヴィアさんは知らない人でもないから真面目に相談には乗るけどさ。俺たち普通クラスには上級クラスとは違うルールがあるのは知っているかな？」

「え、えつと……知らないです」

俯くりビアに、次兄は淡々と説明する。

「上級クラスみたいに女子が極端に酷いことはないよ。みんな騎士家　騎士爵とか、準男爵ね。それから、宮廷での階位が低い家の生徒たちばかりさ。俺みたいに男爵家の出自でも家を継げない立場の奴もいるから、意地を張ってられないの」

普通クラスは割とまともなのは、女子は奴隷を購入できるほどに裕福ではないからだ。

そうだな……簡単に言えば、奴隷を購入するのは前世で言えば車を買うのと同じ事だ。

購入しても、次に発生するのは維持費だ。

優秀な奴隷は相応の対価を求めてくるし、優秀でなければ側に置く意味がない。上級クラスの女子たちは、側に高級車や外車を置いているようなものだ。

「普通クラスの女子は愛人だとか、奴隷だとかそんなことを言っていられないから割とまともだよ」

その割と、というのも上級クラスと比べたら、だ。

やはり女性の方が立場は強い傾向にある。もともと、許容範囲内だ。上級クラスを見てきた後なら、普通クラスの女子は天女か天使に見えるだろう。

女神？ リビアとアンジェかな？ 少し下がってクラリス先輩も捨てがたい。

そんな女神たちを捨てたあの五人は何も分かっていないと思う。

はあ……でも、そんな女神に俺は手を出せないけどね。

「学園祭前で友達を作りたいなら……そうだな。そこに馬鹿がいる

だろ？ そいつ、学園祭で喫茶店を開くらしいから、そいつから無料のチケットを貰って配るとか？ 顔合わせになるし、話すきっかけにはなるよ。普通クラスの女子も学園祭は楽しむし、上級クラスの男子がやっている出し物を楽しみにしているからね。身分違いの恋に憧れるんだと。あり得ないのに期待して馬鹿みたいだよな」

もしかしたら学園祭で出会いが、など考えるらしい。

普通クラスの女子も夢見がちなのだろうか？

可愛いじゃないか。上級クラスの女子は是非とも彼女たちを見習って欲しい。

リビアが俺を見てくるので、無料チケットは用意するでしょう。金ならあるからね。

「お茶とお菓子のセットの無料券を用意するから」

「あ、ありがとうございます！」

次兄が首を回していた。勉強に疲れているようだ。真面目な次兄らしい。

「チケットを配ったら、そこから顔見知りになって挨拶する感じで良いんじゃない？ 流石にこれ以上はアイデアが浮かばないかな。急に話しかけるよりも自然だと思うけど」

俺は首をかしげた。

「なんだ。学園祭当日に一緒に回らないの？」

「いきなり距離感を間違えたら面倒だろうが。少しずつ縮めていく方が確実だろ。あと、近付いたらいけない女子を教えておくから」

「な、なら、当日はリオンさんのお手伝いをします！」

近付いてはいけないというのは、まあ……不良と呼ばれる女子らしい。

学園の外にあるホストクラブのような場所に通い、朝帰りをしてくる女子たちがいるそうなのだ……それ、上級クラスの女子と同じ？

え、普通クラスでは不良扱いなの？

「朝帰りしてくる女子とか駄目だろ。授業も出てこないとか、何を考えているのか分からない。はあ、それでも結婚は俺たち男子より楽なのが羨ましいよな」

俺がボソリと。

「それ、上級クラスだと普通的女子になるけど」

次兄が俺から目をそらした。

リビアも困ったように笑っている。

……どうして俺は上級クラスなんかにいるんだろう？

俺が悲しい目をしていると、リビアが服を掴む。

「リオンさん、喫茶店は私もお手伝いします。その、いつも迷惑をかけてばかりですから」

心の清涼剤 リビアの頑張りますという顔に、俺は荒んだ心が癒やされていく。

……この子が平民で、しかも未来は聖女様でなければこの場で求婚していたかも知れない。

世の中って理不尽だよな。

学園祭の数日前。

俺たちの出し物は喫茶店と有り触れている訳だが、学園祭の出し物は非常に多い。

数日に渡って開催されるため、喫茶店は休憩場所として大人気だ。

そのため数も多いのだが……。

「師匠にお茶を習った俺を舐めるなよ。本格的な喫茶店を用意してやったぜ！」

俺の友人であるダニエルが、まるで別物になった部屋を見ていた。

「……前は空き教室だったよな？」

眼鏡をかけているレイモンドが頷く。

「リオン、いくらなんでもお金をかけすぎだよ。採算が取れないよ」

二人が心配しているが、何の問題もなかった。

「はじめから黒字は期待していない。それに、この内装にかかった費用は賭け事でみんなから巻き上げたお金だ。少しは還元しないと駄目だろ」

内装は業者を呼んだ。

学生が行ういかにも学園祭の喫茶店とはクオリティーが違っただい！

俺が高笑いをしていると、リビアが涙目でやってくる。

「リオンさん！ お、お隣が」

四人で隣の教室に向かうと、そこにはユリウス殿下の姿があった。

見物に来た生徒たちにチラシを配っている。

「暇があれば来てくれ。歓迎するよ」

ユリウス殿下の笑顔に、女子たちが頬を染めていた。

「は、はい！」

「通います。私、学園祭の三日間、全力で通います！」

「わ、私も沢山お金を使います！」

何かの洗脳ではないだろうか？

そんな女子たちに、ユリウス殿下は爽やかな笑顔を向けていた。

「喫茶店、プリンススをよろしくね」

……喫茶店プリンススだとおおお！

ダニエルが肩を落としていた。

「マジかよ。喫茶店を隣同士に並べるなんてあり得ないだろ」

レイモンドが俺をチラチラ見ている。

「リオンへの当てつけかな？ 実行委員にも、決闘やエアバイクのレースで負けた人がいるだろうし。でも、流石にこれは酷いよね」

ユリウス殿下が俺を見つけると、意味ありげな笑みを向けてきた。

こいつも俺のことがそんなに嫌いなのか？ 悪いが俺も大嫌いだ。奇遇だな。

「バルトファルト、お前も喫茶店を出すらしいな。俺たちも喫茶店を開くつもりだ。良かったら来てくれ」

チラシを受け取ると、リビアが驚く。

「お、お茶とお菓子のセットで百ディア！」

目を回したリビアを支えてやる。

強気の価格設定。いや、強気というか、ぼったくりではないだろうか？

前世感覚で言えば、安いお茶とお菓子で一万円を払う感じだぞ。おまけに追加オプションで金額は膨れ上がって……数十分で一人二万や三万は簡単に消えて行きそうだ。

キャバクラだってそこまで酷くねーよ！

ダニエルとレイモンドも啞然としている。

俺は客単価で十ディアから二十ディアもいけば良い方だと思ったが……忘れていた。ここは貴族のボンボンたちが通う学園だった。

価格設定はもっと強気でも良かったのだ。

ユリウス殿下はリビアを見て首をかしげている。

「安すぎたか？　だが、これくらいが良いとマリエが言うからな。本当ならもっと稼ぎたいんだが」

リビアが金銭感覚の違いにくじけそうになっている。

「……リオンさんが言っていた意味が分かりました。確かにこの感覚の違いは埋められないと思います」

「諦めるな。君はやれば出来る子だ。まあ、ユリウス殿下のことは放っておいていいや」

どう考えてもリビアの相手にユリウス殿下とジルクは相応しくない。

出来れば残り三人に期待したいところだが……駄目だろうな。五人の代わりを探した方が早いかな？

ユリウス殿下がムツとした表情になる。

「俺を無視するか。良いだろう。いつか貴様に俺を認めさせてやる。バルトファルト、今度は負けないぞ」

そう言っただけで去って行くユリウス殿下だが、俺たちは敵情視察のためについて行く。

ついでに学園祭で負けないとか何を言っているんだ、こいつ？

面白い奴だな。

俺たちがゾロゾロとついて来ると、ユリウス殿下が驚く。

「お、おい、なんで来るんだ！」

「いや、偵察でもしようかな、って」

「図々しいぞ！」

「俺、自分に正直なんで。ほら、見せてみる……よ？」

中に入って最初に気が付いたのは……これ、喫茶店じゃねーよ。

ローテーブルに豪華そうなソファが並び、部屋の雰囲気は少し薄暗かった。

教室の中では【クリス・フィア・アークライト】と【ブラッド・フォウ・フィールド】が衣装合わせをしていた。

どうみてもスーツ姿。しかも、胸元が開いている……。黒系統のスーツに色つきのシャツ。

俺は叫ばずにはいらなかった。

「ホストクラブじゃねーか！」

青い髪に眼鏡という姿のクリスが、俺に気が付き普段から鋭い視線を更に鋭くしてきた。

「バルトファルトか」

紫色の長い髪をまとめた、チャライスーツ姿のブラッドも俺を見に来る。

「敵情視察か？ 相変わらずコソコソと汚い男だな」

……汚いのはお前らだよ。

喫茶店と言いつつ、実際はホストクラブじゃないか。

「お前ら卑怯だぞ！」

俺がそう言うのと、クリスがとても嬉しそうに笑っていた。

「お前からその言葉を聞けるとは思わなかった。やはり、マリエの提案に乗って正解だったな。お前の悔しがる顔を見られただけでも価値がある」

またあいつか！ あいつは本当にろくな事をしない！

ユリウス殿下が俺たちを前に宣言する。

「今度の学園祭、勝つのは俺たちだ。バルトファルト、負けそうだからって逃げるんじゃないぞ」

俺を煽ってくるユリウス殿下が本当に嬉しそうにしている。

……お前ら馬鹿か？ 喫茶店とホストクラブで何を勝負しろと？
そもそも戦う土俵が違うじゃねーか！

リビアが首をかしげている。

「あの、これも喫茶店なのでしょうか？ どう見てもその……酒場に雰囲気に近いような気がします」

リビアに近付くのはブラッドだ。

「特待生まで文句を付けるのか？ マリエの提案に文句を言わないで欲しいね。それに、提供するのはお酒じゃない。あくまでも菓子とお茶だ。僕たちがサービスはするけどね。マリエの考えは君には分らないよ」

「え、えつと……でも、何か違うような」

俺はリビアとブラッドの間に割り込む。

「触るな。リビアが汚れるだろうが。あっちに行け」

「……本当に腹が立つ奴だね」

お前ら、元は名門貴族の跡取りとして恥ずかしくないのか？ 学園祭でホストクラブとか正気じゃないって。

部屋の中を珍しそうに見ていたダニエルが、メニュー表を発見して驚く。

「サービス料十分で百デИА！」

レイモンドも驚いていた。

「こ、こんなに高額な喫茶店って……」

俺たちが更に驚いていると、衣装合わせをしていたらしいマリエがこの場に現れた。カイルが側に控えている。……こいつはキャバ嬢として参加するつもりなのか？

「当然よ。言っておくけど、ユリウスをはじめ、みんな元は付くけど名門の跡取りだったのよ。そんな彼らにサービスして貰えるなら、それくらい払って当然ね」

ドレス姿のマリエを見て、俺は舌打ちをした。

「看板のプリンセス、ってお前のことか？ お前、子爵家の末っ子だろ？」

「こ、心はいつでもお姫様よ」

すると、ブラッドがマリエをフォローしていた。

「マリエ、君はいつでも僕たちのプリンセス。お姫様だよ」

「ありがとう、ブラッド。それに引き換え、脇役もどきのモブのあんたときたら本当に失礼よね」

「俺、嘘が言えないんだ。ピュアだから」

「あんたがピュアならならず者も聖人君子じゃない。「冗談は止めて」

この女にローキックを入れてやりたい。

マリエがふわりとした髪をかき上げ、そして俺たちに言うのだ。

「学園祭当日が楽しみね。まあ、あんたたちの喫茶店は暇そうだから、私たちの休憩場所に使ってあげるわ。あ、ちゃんと代金は払うわよ。だから、ちゃんとしたお茶を出してね」

……言われなくても俺はお茶で嘘は吐かない。

だって師匠に申し訳ないから。

それにしても、思いがけない強敵が隣に出てくるとは……。

学園祭前日。

リビアは普通クラスの女子たちに、喫茶店の無料チケットを配っていた。

場所を教え、そして来て貰うためにお茶一杯とお菓子を少し無料に出来るチケットを配っている。

「え、えっと、私たちの喫茶店をよろしくお願いします」

チケットを受け取った女子たちが、リビアを見て少し戸惑っていた。

受け取りはしたが歩き去って行く。

「誰？」

「特待生よ」

「上級クラスじゃない。羨ましいわ」

「馬鹿ね。あの子は専属奴隷もいないでしょ。そういう扱いよ」

校舎の通路でリビアは肩を落としていた。

チケットは受け取って貰えるが、まともに挨拶も会話も出来ない。

落ち込んでいると一人の女子が話しかけてきた。

「チケットはまだあるかしら？」

「は、はい！」

リビアが渡すと、女子は紺色の長い髪でとても綺麗だった。リビアが羨むようなスレンダー体型に、立ち姿がとても綺麗だ。

「貴方は特待生よね？」

「はい。オリヴィアです」

「そう。私はカーラ【カーラ・フォウ・ウェイン】よ。準男爵家の次女で普通クラスに在籍しているわ。お互い、顔を合わせる機会なんてないけどね」

上級クラスと普通クラスは授業内容がそもそも違う。

行事で一緒に行動することはあっても、普段は別々に行動していた。

相手が名乗ってくれたのが嬉しく、リビアは喫茶店の場所を丁寧に説明した。

すると。

「そこ、確かユリウス殿下たちの喫茶店もあるわよね？」

「そうなんです。リオンさんも困っていました」

「ふーん、バルトファルト男爵と親しいのね」

リオンをバルトファルト男爵と呼ばれ、リビアはハツとした。

（そ、そうだ。リオンさんも雲の上の貴族様だから、私と親しいと問題が……）

しかし、カーラは嬉しそうにしていた。

「噂は色々と聞くけど優しい人なのかもね」

「え？」

「だって、特待生と一緒にいて男爵にはメリットがないもの。ああ、別に貴方が悪いって意味じゃないわよ。ただ、思っていたより優しい人なんだろうな、ってね」

リビアは嬉しくなった。

「は、はい！ リオンさんは優しい人です。優しくて、強くて本当に頼りになる人なんです。時々やり過ぎてしまいますけど、皆さん誤解しているだけなんです」

本当に誤解しているだけか怪しいが、リビアにとってリオンは憧れの騎士で貴族様だ。

優しく、強く、誰かを守る理想の騎士である。

「そ、そう。良かったわね」

若干引き気味のカーラに、リビアは満足げに微笑んだ。

「はい。私、この学園に来て良かったと本当に思えたのは、リオン

さんと リオンさんのおかげなんです」

もう一人……友達と思っていたアンジェの名前は出せなかった。

（私がここで名前を出したら迷惑になるだろうから）

カーラはそんなリビアに。

「ねえ、男爵とお話しは出来るかしら？」

「はい。出来ますけど」

「そう、良かった。必ず行くわね」

そう言って去って行くのだった。

リビアは深く考えずに手を振った。

学園祭当日。

アンジェは突然の訪問者の対応に困り果てていた。

ストレートの長い髪に帽子をかぶり、そして白を基調とした服装。

隣を歩く女性を他人が見れば、まるで姉妹のように見えたかも知れない。

アンジェは隣で珍しそうに周囲を見ている女性【ミレーヌ・ラフ

ア・ホルファート】に声をかけた。

青い瞳は輝き、まるで無邪気な子供のようだった。

「王妃様、あまり無茶を言われても困ります」

そんなアンジェに、ミレーヌは「ごめんね」と謝罪するのだが。

「でも、普段は貴方たちの無茶を許しているのだから、今日くらいは私のわがままに付き合って貰います」

王妃　ミレーヌはホルファート王国の王妃である。

周囲には学園祭に溶け込むように客として護衛が配置されていた。

「それにしても学園というのは凄いわね。私の祖国にはなかったわ」

「そうですか」

ミレーヌは他国から嫁いできた王妃だ。

そのため、立場はあまり強くなく、特別な権力を持っているわけでもない。

立場が強すぎても面倒になる。

アンジェは、ユリウスと婚約していたのでミレーヌともよく顔を合わせていた。ユリウスよりもミレーヌとよく面会していたくらいだ。

ミレー又が言う。

「叙勲式よりもやつれているわね。何かあった？ あの時、まだ元気があったように見えたのだけど？」

アンジェは敵わないと思いつつ答えた。

（天真爛漫に見えてよく見ている。怖い人だな）

「……殿下の件とは別ですけどね」

ミレー又は少し考えてから。

「もしかして、これから会うリオン君？」

「違いますよ。それよりも、本当にリオンとお忍びで会うつもりですか？」

ミレー又は少し怒った顔をする。

「当然じゃない。ユリウスが廃嫡になったのは本人の責任だけど、親として少しは文句も言ってやりたいわ。決闘は流石にどうかと思うけど……それより、内容よ。本当に酷すぎて声も出なかったわよ」

「……私の代理人が申し訳ありませんでした」

アンジェが謝罪するほどに、リオンの決闘内容は酷かった。

圧倒的な力でねじ伏せ、おまけにユリウスたちに説教までしたのだ。

当時のユリウスは王太子。そんな立場の人間に、上から目線で説教に加えて煽りまくっていた。普通はあり得ない。

「王国の騎士に任命したのだから、これからは私たちにも彼の行動の責任が発生するのよ。ここはガツンと言ってやるわ」

ミレーヌの言葉にアンジェは庇うのだった。

「あまり厳しい言葉は勘弁してあげてください。その……リオンが可哀想です」

「アンジェは優しくなったわね。少し前の貴方なら私が言っただけで聞かれます！　くらい言ったのに。……それとも、ユリウスの件がまだ堪えているのかしら？」

「……いいえ、とは言いません」

「母親として謝罪するわ。あの子、どうして騙されちゃったのかしら。王宮ではそんなそぶりもなかったのに」

王宮ではむしろ、近付いてくる女性に警戒しているくらいだった。

「殿下曰く、学生　普通の雰囲気が良かったそうです」

それを聞いてミレーヌは首をかしげる。

「学生の雰囲気は分からないのよね。私、学園に通ったことがないから。それにしても……ちょっと酷いわね。聞いてはいたけど想像以上よ」

ミレーヌが見て酷いと言ったのは、女子の態度だった。

出店前の女子を見る。

「ちょっと、こんな物でお金を取るつもり？　タダにしないでよ」
「こ、困ります」

男子が店員で、女子は客……金を払わずに出店から去って行く。
おまけに多くの女子が亜人種の奴隷を連れ回していた。

ミレーヌから見て、その光景は異常に見えた。

「本当に酷いわね」

「……お恥ずかしい限りです」

そんな学園祭を見て回りながら、二人はリオンが行っている喫茶店へと向かった。

ミレーヌは喫茶店が見えると表情を引き締める。

「ここね　って、お隣は大盛況ね」

長蛇の列が出来ている隣の喫茶店。

対して、リオンの喫茶店にはお客はいても列など出来ていなかった。

アンジエは少し考える。

（殿下の出し物を見せるのは後でも……いや、流石にお忍びだから避けた方が良いのか？ 私と一緒にいるところを見ては、殿下も落ち着かないだろうし）

ミレーヌがアンジエの手を握る。

「さあ、リオン君を困らせに行くわよ。アンジエも協力してね」

「いえ、あの、協力は流石に」

「良いから。良いから！ 紅茶が温いとか、そうやって文句を付けるだけだから」

十分に迷惑な客だと思いながら、二人が喫茶店に入ると。

「紅茶が温いわ！ 煎れ直してきて！」

カップごと投げつけられ、紅茶まみれになるリオン。

制服はボロボロで、他にも何かされた跡があった。とにかく酷い状態で立っている。

俯いていて表情は見えない。

「……申し訳ございません。すぐに煎れ直して参ります」

そう言って落ちたカップを拾おうとリオンが屈むと、女子は立ち上がってニヤニヤしながらリオンの後頭部を踏みつけた。

「やっぱりいいわ。どうせたいした茶葉でもないのだし、このまま帰らせて貰うわ。こんな不味いお茶とお菓子を出したのだから、お金なんて取らないわよね？」

グリグリと革靴のかかと部分でリオンの頭部を踏みつける女子を見て、友人らしき女子とその専属奴隷たちが笑っていた。

リオンは踏みつけられ、まるで土下座をしているような体勢になっている。

「お、お代はいただきたいと……」

「はあ？ あんた、私たちからどれだけお金を巻き上げたと思っているの？ 借金をして専属使用人を売った子もいるのよ！ それが分かっているの！」

巻き上げたというか、絶対に勝てると思って借金までして賭けをしたのだ。リオンの責任ではないし、そもそも奴隷を売ったのはその女子の都合である。

ミレーヌがドン引きしていた。

「え？ ……え？」

何度もリオンとアンジエを交互に見て、何が起きているのか説明を求めている。

アンジエは怒りがこみ上げてくる。

ミレーヌがまずいと思ったのか前に出た。

「いい加減にしない!」

喫茶店内の視線がミレーヌに集まると、リオンを踏みつけていた女子がこちらを見てくる。その顔は王妃に向ける顔ではなかった。

「何よ、おばさん」

「お、おばっ!」

アンジェは頭を抱えなくなる。

(自国の王妃の顔も知らないとは……まあ、こんな場所に王妃様がいるとは思えないだろうが)

アンジェが注意しようとすると、頬を引きつらせながらミレーヌが耐えていた。

「……今の発言は聞かなかったことにします。貴方たち、すぐに支払いを済ませたら出て行きなさい。それでも学園の生徒ですか!」

それでも相手は止まらない。

「はあ? 調子に乗らないでよ。私を誰だと思っているの? この婆を摘まみ出して」

女子が専属使用人に命令すると、亜人たちがミレーヌを囲む。

アンジェが激怒する。

「貴様ら。誰に向かって」

すると、視界にはこちらを見ているリオンの顔が見えた。

ミレーヌとアンジェの顔を見て、その顔は……笑っていた。最初は驚いていたが、その顔は大義を得たと言わんばかりに笑っていたのだ。口が三日月のように広がり、目も弧を描いていた。

（ま、まずい。なんとかこの場は）

アンジェが気付いたときには、リオンは立ち上がってミレーヌを囲んでいた専属使用人の一人を蹴り飛ばしていた。

魔法で強化した肉体が、全力で攻撃を行えば強靱な体を持つ亜人たちも吹き飛ばされる。

普段……男子たちが専属使用人を攻撃しない理由は、女子に嫌われるから。この一点である。この一点で専属使用人たちは守られていたのだ。

ただ、この状況……リオンにしてみれば言い訳が出来るのだ。

リオンは王妃の顔を知っている。

叙勲式で王妃であるミレーヌの顔を見ているのだ。そして、アンジェが側にいるため王妃だと確信したようだ。

「くたばれえええ！」

もう一人は両手を組んでハンマーのように振り下ろし、硬い床に叩き付けていた。

容赦など微塵も感じられない。

リオンを取り押さえようと覆い被さった専属使用人は、そのまま投げられ同じように床に叩き付けられる。

三人を一瞬で叩きのめし、リオンはミレーヌを庇うように前に出て。

「控えろ、下郎共！ このお方をどなたと心得る！ ホルファート王国王妃 ミレーヌ様だぞ！ 頭が高いんだよ、ひれ伏せ！」

自分を踏みつけて笑っていた女子たちを見て笑い、そしてミレーヌの正体まで暴いてしまった。

ミレーヌが戸惑っている。

「え？ あれ？ 何で？」

困っているミレーヌを見ながら、アンジエは両手で顔を隠した。

「リオン……お前という奴は」

お忍びが台無しである。王妃を理由に専属使用人たちを叩きのめし、女子たちをひれ伏せさせようとしていた。

リオンは女子たちを威圧する。

「貴様ら覚悟しろよ！ 王妃様に手を出した報いを受けてもらう！」

王妃であるミレーヌの威光を笠に着て、リオンは高笑いをしていた。女子たちは動けないのか立ち尽くし、口をパクパクさせていた。血の気が引いて顔が青ざめている。

ミレーヌがリオンの腕を掴んでいた。

「リオン君待つて。お忍びなの。こんな所で騒ぎなんて起こせないの！ だから落ち着こう。良い子だから。ね？」

「お任せください、王妃様。このリオン……こいつらを成敗する際は先陣を切るつもりです。さあ、ご命令を！ 族滅でも根切りでも実行してみせますよ！ ご命令を！ 王妃様の敵は全てこのリオンが倒しましょう！」

「駄目って言うてるでしょう！」

涙目のミレーヌ。アンジエは溜息を吐く。

（興奮しているな。これまで何をされたのか想像はつくが……）

喫茶店内には、リオンに嫌がらせを行おうとしていた女子たちが多く、俯いて震えていた。

アンジエは興奮したリオンを止めるため、ある人物を呼ぶことにした。

学園祭

リビアは学園祭を回っていた。

喫茶店の手伝いをするつもりだったのだが、リオンが手伝いは後からで良いから楽しんでくるように言ってくれたのだ。

一人で回るつもりだったのだが、隣にはカーラが並んで歩いている。

「へえ、噂通りね。パルトナーっていう巨大飛行船を持っているんだ」

「リオンさんは大きさならもっと上があるって言っていましたけど」

巨大飛行船パルトナーに感心しているカーラは、あり得ないと言いつ出した。

「浮遊島を要塞にした物は存在するわよ。けど、純粋な飛行船。それも、飛行船艦ではあまり聞かない大きさよ。聞いている限り、性能も凄く高そうね」

「そ、そうなんですか？ カーラさん、詳しいんですね」

「……まあ、調べたからね」

学園祭の屋台を二人で回り、そしてお昼頃に喫茶店へと向かう予定だった。

リビアはそこでカーラを紹介するつもりだ。

それがカーラの頼みでもある。

「あ、そろそろ時間ですね」

リビアが喫茶店に向かおうというと、カーラは少し緊張した様子だった。

「大丈夫ですか、カーラさん？」

「ええ、大丈夫よ」

「緊張しなくてもリオンさんは優しいですよ。そ、その、少しアレですけど」

アレ、というのは突飛な行動のことだ。

そもそもリオンを優しいと思っているのは、学園にも数人しかいないだろう。

（やっぱり、リオンさん相手だと緊張するのかな？ わ、私がしっかり紹介しないと）

意気込むリビアは、上手くカーラのことを紹介しようと考えそして、喫茶店の前に来ると立ち止まってしまった。

（……え？）

どうやってリオンにカーラを紹介しようか悩んでいたリビアに、最初の難関が待ち受けていた。

「ミスタリオン！ いけません。茶の道を進む者が、ご婦人に迷惑をかけるなどあつてはならないことですよ！ それは紳士ではありませんよ！」

「……すみません、師匠。でも、俺……俺は！」

男性教師 リオンのお茶の師匠だ。

その師匠が、リオンを前に説教をしていた。普段、太々しい態度をしているリオンだが、この師匠にだけは素直になる。

立ち止まったりリビアは、喫茶店には入れずにいた。

カーラも困惑している。

「え？ な、何？」

喫茶店内。

師匠が泣いているリオンの肩に手を置く。

「辛かったです。しかし、そこで諦めてはいけません。その先にこそ、真の紳士としての道。そして、茶の道が続いているのです」

「は、はい、師匠！」

感動の場面らしいが、その周囲ではダニエルとレイモンドが専属使用人らしい亜人たちを縛り上げて蹴り続けていた。

「王妃様に手を出すとは最低だな」

「処刑できないなら私刑かな？ 僕、みんなを集めてくるよ！」

普段、専属使用人たちに見下されている男子たちは、亜人種に対して強い反感を持っている。そのため、大義名分があれば攻撃的になるのだ。

ノリノリの二人の横では、疲れた顔の女性が二人……リビアは、その内の一人を見て部屋には入れずにいた。

（アンジェ……）

アンジェも入り口に立つリビアに気が付き、顔を俯かせていた。

この場から逃げようとするリビアだったが。

「あ、リビアが戻ってきた」

リオンが気付いて手招きをしたので、そのまま気まずそうに部屋に入るのだった。

さて、喫茶店内の片付けを済ませた俺は、騒いだカス共 もとい、女子とその専属使用人たちをダニエルとレイモンドに任せて外に追い出した。

喫茶店は休憩のため看板を下げ、クローズとドアに貼り付けている。

着替えとシャワーを済ませ、準備が整ったところで王妃様
ミレーヌ様との顔合わせとなった。

少々、疲れた顔をしているのが気になる。

「……リオン君。私は怒っています」

そんな王妃様の言葉に、俺はその場で両膝をついて両手も床に付ける。

「やはりそうでしたか。分かっていました……どうか、家族だけは許してください！　俺は……俺はどうなっても構いませんから！」

そんな俺の態度にミレーヌ様がまた慌てていた。

「え？　いや。ち、違うのよ。そういう話じゃなくて……アンジェ助けて！」

隣に座るアンジェに助けを求めたミレーヌ様を見て、どうやら俺に本気で怒っている様子ではないのを察した。

いや、元々分かっていたが、からかってやるつもりで土下座したのだ。

本気で王妃様が怒っていたら、俺は今頃王国から脱走している。

ただ、アンジェには気付かれたらしい。

「……ミレーヌ様、からかわれていますよ。リオンはミレーヌ様が本当に怒っていないと分かっている顔をしています」

「え？」

ミレーヌ様が俺を見るので、テヘペロをする。

もの凄く冷たい目を向けてくるので、どうやら許してはくれないらしい。

「最低ね。見損なったわ」

「申し訳ありませんでした！」

今度こそ本気で謝罪をしたところで、師匠がミレーヌ様の用件を伺う。師匠がお茶を用意してくれており、何だか得した気分だ。

飲むと衝撃を受けた。

っ！ 同じ茶葉を使っているはずなのに、どうしてここまで味に差が出る。香りまで別物みたいだ。

流石は師匠だ。

「王妃様、今回のお忍びの件ですが」

「……もう良いわ。下手なことを言つと誰かさんがいじめるから、ハッキリ言います。リオン君。私は貴方に文句を言いに来ました。

処罰云々ではなく、個人的な話です」

……だろうな。

理由はどうあれ、俺はユリウス殿下をボコボコにしたのだ。

母親としては文句の一つも言いたくなるだろう。

さて、この王妃様　ミレーヌ様だが、ゲームではいわゆる敵側の人間だ。アンジェと親しい様子からも分かるように、主人公がアンジェと敵対すればそのまま一緒に敵になる人物でもある。

流石は女性向けのゲームだ。姑は嫌いらしい。

まあ、ユリウス殿下が主人公を好きになると、そんな事は許さなめいと言う立場の人だからね。当たり前のことを言っているだけなのに、乙女ゲーでは二人の仲を引き裂く敵になる。

理不尽だよな。

そんなミレーヌ様も、最後は主人公を認めざるを得ない訳で……さて、俺に何を言いに来たのか。

「お伺いしますよ」

「よろしい。では……ユリウスの事を先に詫びます。あの子のわがままに付き合わせて申し訳なかったわ」

謝罪から始まるとは思わなかった。

悪の親玉なのに礼儀正しいな。

「どうしてこうなってしまったのか、母親でも理解に苦しむわね。言い方は悪いけれど、子爵家の娘なら愛人でも良かったのよ。あの子は王宮では女性に対して素っ気なかったから、ここまで執着するとは思わなかったわ」

俺が頷きつつ聞いていると、ミレーヌ様が俺の瞳を見つめてくる。透き通った青い瞳に吸い込まれそうになった。

……この人、めっちゃ美人だ。

「ただし、決闘内容には納得が出来ません。戦いぶりが酷すぎます。貴方ならもつと穏便に事を収められたのではなくて？」

出来たとは思うが、そもそもストレスの発散に氣を使いたくない。

俺が神妙な顔をしつつ助けを求めるようにリビアやアンジェをチラ見ると、二人とも体育祭から微妙な関係が続いているようだ。

お互いに俯いていて俺のアイコンタクトに気付いてくれない。

ここはルクシオンに助けを求めるため、強く念じると電子音の聲が聞こえてきた。

『マスターが穏便に事を収める？ 無理ですね。この人はマスターに何を期待しているのでしょうか？』

……相棒が酷い。

この役立たずの人工知能が！ もっと俺に優しくしろよ。

ただ、黙っているとミレーヌ様が勘違いをしてくれた。リビアやアンジェたちへの視線で何か思っただろう。

「あら、もしかしてそういう事？ 若いわね」

笑顔で俺をからかってくるが、何を勘違いしたのか？

まあ、都合が良いので黙っておこう。

「……リオン君、分かっていると思うけど、王宮にも貴方の敵は多いわよ。ユリウスに期待していた人たちも多いの。貴方、この先のことをしっかり考えている？」

「もちろんです」

……アンジェパパに頼ります。そもそも、王宮とか俺は顔を出さないし、ノンビリ出来れば良いので出世にも興味がない。

何だったら、降格してくれてもいいのよ。

ユリウス殿下に期待していた人たち？ 見る目がなかったと諦めて貰おう。実際、見る目がないって。だって、アンジェを捨ててマリエを選んでいる時点で駄目なもの。

王太子として失格だったね。

「そう。強い子ね。ユリウスの側に貴方みたいな子がいれば、あの

子も道を間違えなかったのかしら？」

それはどうだろう？ まあ、俺が側にいればマリエを遠ざけてリビアを勧めたかも知れない。……そうなるとアンジエは敵になってしまうか。

困ったな。近くにいたらいたで面倒そうだ。

「俺がいたところで結果は変わりませんよ」

「そうかしら？ まあ、良いわ。今日はもう一つだけ別の目的があるの。それを手伝って貰いましょう」

「別の目的？」

「私、他国から嫁いできたから、学園に通ったことがないのよ。だから、学園での思い出が欲しいな。リオン君は手伝ってくれるわよね？ 私ね。学園が凄く気になっていたのよ。知り合いの女性たちみんなが楽しそうに話をするから、羨ましくて」

悪戯っ子のような笑みを向けてくる三十代のご婦人……学園の思い出が欲しいと？

前世の俺なら婆自重しろとか笑っていたかも知れない。

だが 今は違う。

俺は立ち上がってミレーヌ様の手を取って両手で握った。

「え？」

驚くミレーヌ様 いや、ミレーヌさんに言うのだ。

「良いでしょう。学園での思い出を作って貰います。ミレーヌさん……俺と結婚してください！」

顔を真っ赤にして狼狽えているミレーヌさん。

椅子から立ち上がったのは、リビアとアンジェだった。

「リオンさん！ 何を言っているんですか！」

「お、おま お前は！ 相手は王妃様だぞ！」

師匠も流石に驚いている。完璧紳士の師匠を驚かせた俺って凄くない？

「ミスタリオン……流石にその冗談は笑えませんか！」

分かっている。分かっているが、ここでよく考えて欲しい。

学園に通う目的は何か？ 勉学？ 違います！

ここは乙女ゲーの学園だ。……目的はただ一つ！ それは結婚することだ！ つまり、そういう思い出が欲しいのだ。ならば、俺がここで行うのは求婚である！

そして、結婚相手と見た際にミレーヌさんは超優良だ。経産婦？ 子供を産める証拠だろうが！ 貴族は跡取りが欲しいから、むしろ大歓迎である！ 処女じゃない？ 学園にいる女子なんてほとん

ど非処女だ！

処女なんて幻想上の生き物は存在しないから目を覚ませ！

年齢？ 別に良いね。躰の出来ていない猿みたいな十代よりも、お淑やかで可愛い三十代の方が最高だ！ 俺は人間と結婚したいんだ！

学園に通って分かった事がある。女子に幻想を持つのはもう止めよう、って。

学園の女子とミレー又さんなら、迷わずミレー又さんを選ぶね！

……あれ、待って。マジでこの人、身分以外はパーフェクトじゃない？

「好きです！」

「こ、困ります。わ、私は夫も子供も……そ、それにおばさんだし」「関係ありません。貴方は美しい。例えば家族がいても俺は好きなんです ぶっ！」

頬を染めて目を潤ませる可愛いミレー又さんの照れ顔を見ていたら、急に後頭部を叩かれた。

いったい誰だ！ ぶっ飛ばしてやる！

そう思って振り返ったら、そこには怒気をまとったユリウス殿下の姿があった。

乱れたスーツ姿は胸元が大きく開けていた。髪型も乱れている。

「あ、殿下」

俺がそう言うと、ユリウス殿下は持っていたお盆を振り上げていた。

「人の母上を口説くとは良い度胸だな、バルトファルト。貴様をここで斬ることが出来ないのが残念で仕方がないよ」

……結構本気で怒っていた。

目の前で母親を口説かれていたら当然か？

ミレーヌさんが戸惑っていた。

「ち、違っのよ、ユリウス。こ、これはその」

「母上もいい加減にその手を離してください！ バルトファルト、お前もさっさと離せ！」

「えゝやだ」

嫌がるとユリウス殿下が殴ってきた。

喫茶店プリンス。

休憩時間になったことで、部屋に客はいなかった。

先程まで札束を数えていたマリエは上機嫌だったが、今はカーテンで仕切った奥でユリウスが連れてきた人物から隠れている。

（なんで悪の親玉がいるのよ！）

悪の親玉ではないが、ゲームでは悪役令嬢の支援をしていたのが王妃である。

マリエから言えば当然敵だ。

しかも、今のマリエでは太刀打ちできない相手だった。

隠れながら様子をうかがっていると、カイルがマリエのスカートを引っ張る。

「ご主人様、もう嫌ですよ。女子の人たち、サービス料は払っていると言って僕の体をなで回すんですよ。次はお手伝いしませんからね」

そんな文句を言う自分の専属使用人に対して、マリエは腹立たしかった。

（何を言っているのよ！ あんたたちの生活費とか、必要経費を稼ぐためにこっちは大変だって言うのに！ 少しは手伝いなさいよ）

マリエがお金にこだわっているのは、ユリウスたちの生活費が必要だからだ。

ユリウスは見限られていないが、大幅に仕送りを減らされている。

他の四人に至っては仕送りなどない。

「三日間だけ頑張りなさい。そうすれば、後は楽になるから」

「本当ですか？ 怪しいな」

文句の多い使用人だと思いながら、マリエはミレーヌの様子をうかがう。

ソファーに座り、ユリウスとローテーブルを挟んで向かい合っていた。

「母上、バルトファルトに近付かれては困ります。あいつは油断できません」

「……」

「知らないでしょうが、あいつはとにかく汚い奴です。金のために何でもします。おまけに卑怯者です。王妃である母上に告白するなど異常ですよ」

ユリウスはいかにリオンが駄目なのかを説明しているのだが、ミレーヌは店内を見渡して目つきが段々と険しくなっていた。

マリエは青ざめる。

「ねえ、ユリウス？ 貴方たちの出し物は喫茶店だと聞いていたのだけれど？」

「ええ、喫茶店ですよ。多少、マリエがアレンジしてくれました。どうです？ 似合いますか？」

自分のスーツ姿を自慢してくるユリウスと、その後ろにはジルクが同じような格好で控えていた。

サービス料を貰い、女子に接待をしていたため服装と髪が若干乱れている。

ミレーヌが酷く冷たい声を出す。

「その女をここに呼びなさい。今すぐ問い詰めてあげるわ」

ただ、ユリウスは少し呆れた顔になる。

「母上も他と同じですね。そんな態度ではマリエと会わせられませ
ん」

ユリウスの返答にマリエは喜ぶ。

（ありがとうユリウス！ 流石は私の王子様！）

しかし、ミレーヌがローテーブルに手を振り下ろし、大きな音を立てるとユリウスを睨んでいた。

その顔にユリウスもジルクも若干怯えている。

「……連れてきなさい」

「い、嫌です！ 俺たちの関係を認めてくれるのなら」

「貴方は決闘騒ぎまで起こして何を言っているの？ ジルク、貴方が付いていながらどういう事ですか！ ユリウスも目を覚まさない。貴方、さつきはリオン君に金に汚いと言いましたね？ なら、この喫茶店は何ですか！」

メニュー表には喫茶店とは思えない金額が並んでいた。

「この価格設定は何ですか？ 質の悪いお茶とお菓子で百デИА？ おまけにサービス料？ 名門の元跡取りたちが、なんて格好をしているのか……」

簡単に言えば喫茶店の名前を借りたホストクラブのようなものだが、学園の女子には高い人気を得ていた。

「ユリウス、リオン君が卑怯者と言いましたね？」

「ひ、卑怯者かと」

「では、決闘で負け、マリエという女に近付かないと約束しながら、どうしてこの場に貴方がいるのですか？ 約束を平気で破る卑怯者はどちらですか！」

見ていられなかったジルクが割って入った。

「王妃様、これは殿下が私たちを手伝っているだけで」

「無様な言い訳をするとは何事ですか！ 恥を知りなさい！ おまけに異常？ ユリウス、答えなさい。婚約者を捨てて他の女を選び

王太子の地位を失った貴方は正常なのですか？ 貴方はリオン君に何か言える立場ですか？」

「いえ、あの、それはその……」

「ハッキリしなさい！」

説教が始まり、部屋の空気は最悪だった。

いつの間にか雰囲気を感じたグレッグは逃げており、クリスとブラッドは買い出しに出かけて不在。

マリエは部屋の奥で祈るような気持ちで時間が過ぎるのを待っていた。

（なんなのよ、あのおばさん！ あのモブ野郎の肩を持って！）

ユリウス殿下に頬を殴られた俺は、膝を抱え椅子に座っていた。

「……めっちゃ好みだったのに」

悔しがっていると、呆れたアンジェが俺を責める。

「この阿呆が。どこの国に自国の王妃を口説く騎士がいるのか」

そう。王妃様でなければ……悔しくて仕方がない。

師匠は既に仕事でこの場にはいなかった。

後はリビアがいるのだが、俯いていて会話に入ってこない。

ただ、ドアをノックする音が聞こえてくる。

「あゝ、もう良いですか？」

ドアを開けて顔を出した女子は知らない人だった。

「今日は俺の心が折れたので閉店です」

「え、えっと、それだと困るんですけど。オリヴィアさん、お願いできない？」

女子がリビアに助けを求めた。

知り合いなのかと思っていると、リビアが顔を上げて俺にお願いしてくる。

「そ、その……新しいお友達です。カーラさんです。リオンさんを紹介して欲しいと言われて」

それを聞いてアンジェの目つきが険しくなった。

カーラさんはそんなアンジェの視線に怯えながらも室内に入ってくる。

「カーラ・フォウ・ウェインです。男爵、お見知りおきください」

カーラ？ ウェイン？

俺が「あ、はい」と返事をしている横で、アンジエはカーラさんを睨み付けていた。だが、リビアがオロオロしながら話をするので黙って聞いている。

「え、えつと、普通クラスの生徒さんで、学園祭と一緒に回って貰って」

……これも因果なのだろうか？

俺は抱えていた膝を下ろし、そしてカーラさんに座るように言うのだった。

「わざわざリビアに紹介させた理由を聞いても良いかな？」

リビアが俺の雰囲気が違うと察したのか困惑している。

俺は先程までの冗談という雰囲気を脱ぎ払い、割と本気でカーラさんと対面していた。

「あ、分かりますか？ 流石は出世頭ですね。他の男子とは大違いですよ」

「それはどうも」

リビアがアンジエに助けを求めるように視線を向けるが、すぐに視線を落としていた。アンジエも何か言いたそうにしているが、口を閉じて俯く。

リビアは俺にたずねることにしたらしい。

「リオンさん、いったいどうしたんですか？　なんか雰囲気か」

カーラさんが本性を現す。

「ちょっと黙っていてね。これから割と大事な話をしたいから」

リビアがカーラさんの態度にショックを受けている。

……お前、俺の前でそんな態度に出たら印象は最悪だと分かっているのか？　まあ、学園の女子に期待した俺が悪いか。

それにしても困ったことになった。

「男爵……私を、ウェイン家を、いえ　私たちをどうかお救いください」

アンジェがカーラさんを睨む理由……それは、俺にすがってきたと分かったからだ。

俺も知っていた。

名前で思い出したのだが……こういうイベントもあったと懐かしい気分になった。

学園祭の初日が終わり、俺は自室でベッドに座っていた。

打ち上げはダニエルとレイモンドの三人で行った。

リビアとアンジェはすぐに帰ってしまったからだ。

俺が考え込んでいると、ルクシオンが俺の目の前を横切る。

「……何だ？」

『浮気をする奴は最低だ』

「何が言いたいのかな？」

『これ、実はマスターのお言葉です。さて、そして今日の行動を思い返してみましようか。王妃様を口説いたマスターにお聞きします。浮気は最低ではなかったのですか？』

「……違うんだ。この気持ちを抑えられなかったんだ」

『本当に自分の発言が次々に突き刺さっていますね。あまりの見事さに感動すら覚えますよ。鏡を持ち歩いたらいかがですか？』

「いや、だってあの人ならありかなしなら、ありだろ！」

『王妃様ですよ。ありかなしなら、なしです』

正論ばかり言う人工知能には、きっと俺の気持ちなど理解できないのだ。

『そもそも、王妃様が言っていた学園の思い出とは、きっと学園祭を回ることだったと思いますよ。それを急に口説きはじめて……正気を失ったかと思いました。あ、失礼しました。元から正気ではあ

りませんでしたね』

「お前は馬鹿だな。学園の存在理由なんて結婚以外にないだろうが。思い出が欲しいって事は口説いて欲しい、って意味だろ」

『それは男子だけです。学園は勉強するところですよ』

「マジで！？ 初めて知ったよ！」

『それは良かったですね。これから勉学に励んでください』

「悪いな。婚活からは逃げられないんだ」

『婚活を諦めていなかったのですか？ 諦めが悪いですね』

「嫌われても諦めない不屈の闘志を持つ男だからな」

諦められるものなら諦めたいが、どんなに強がっても世間体というものは付きまとう。これが俺だけの問題ではないから厄介だ。俺だけではなく、家族も笑われることになる。それはきつい。両親や次兄に弟……俺のせいで笑われるというか、困らせたくなかった。

他？ 誰かいたかな？

『ものは言いようですね』

ルクシオンと馬鹿みたいな会話を続けていたが、急に本題を切り出してきた。

『マスター、あの女子……ウェイン家に力を貸すのは本当ですか？』

俺は天井を見上げた。

「学園祭が終われば連休に入る。そこで助けに向かうさ」

『マスターが助ける理由はないはずです』

俺もないと思っている。

だが、正式に依頼されてしまったのだ。

それも、リビアが紹介したという形になっていた。やり方は騙し討ちだが、結果的に周囲からはそうは見られないのがこの世界らしい。

リビアがアンジェに最初に挨拶をしたときと同じだ。ウェインさんが、リビアを通して俺に面会した形……。

別に学生同士の関係で、正式な依頼でもない。

突っぱねても良いのは知っているし、こんな騙し討ちをする奴は助けたくない。

助けたくないのだが……助けなければいけない理由もある。

空賊退治というのは貴族の仕事みたいなものだが、それ以外にも俺にとって無視できない理由がある。

『空賊に苦しめられている領地、ですか。マスターよりも王宮に依頼するべきでは?』

「そうだな。泣きつく相手は王宮が正しいよ。けど、その空賊がさあ……主人公の必須アイテムを持っているんだよね」

『ゲーム的な理由で参加しなければならないと？』

「主人公が聖女としての能力を発揮するためには、三つのアイテムが必要だ。その内の二つは自分で回収することになる。その一つを空賊が持っているから、退治しないと回収できない」

一つは王都にあるダンジョンに隠された【聖なる腕輪】。

そして、ウェインさんに討伐を依頼された空賊が持っているのは【聖なる首飾り】。

最後の杖はこの国で一番大きな宗教 神殿が管理している【聖女の杖】だ。

女尊男卑の社会であるため、神様も女神が基本となっている。

神殿が主人公を聖女認定するのだ。

そのためには、能力を底上げしてくれるこの二つのアイテムが必要だった。

「はあ……空賊のイベントなんて二年生になってからなのに」

本来なら中盤の山場である空賊イベントは、二年生の時に起きるはずだった。

ある伯爵家の領地というか領空に出現した空賊を、討伐するために主人公がユリウス殿下たちの力を借りるのだ。

因みにここは大きな分岐になっており、誰が助けしてくれるかでルートが固定される。

『王国の正規軍は頼れないのですか？ ウェイン家は準男爵でも、寄親は伯爵だったはずですが？』

「あ、それは色々とあってね。実はブラッドの元婚約者の実家なの」

『これまでのパターンでは、その方もまともそうですね』

「いや、屑だと思うよ」

それがまったく違う。

これまでも異例だったかのように、俺でもドン引きしてしまう屑である。

成り上がりの家で、ブラッドの持つ名門のブランドを欲しがっている という家で、その空賊を招き入れたのは伯爵家だ。

これは終盤に起こる戦争の布石となっている。

賊とつるんで悪いことをしているのだ。

『……よろしいのですか？ オリヴィアはウェインと友人のような関係でしたか？』

「大丈夫……だと思う」

主人公に近付いた悪い奴というのがカーラだ。

……それを伝えるのが酷に思え、俺は言い出せなかった。

リビアは強いので大丈夫だと思うのだが……だって主人公だし。

『……マスターは、ゲーム的な利益を優先していますね。現実的なメリットは少ないと思うのですが、その辺りはどうお考えで？』

「ユリウス殿下たちが頼りにならないなら、俺が回収するしかないだろ。このまま戦争になると困るんだよ」

そう、本当に困る。

リビアが聖女にならないと、ルクシオンを所持している俺でも……大陸から逃げるしなくなるのだから。

勝てる、勝てないといった話じゃないのだ。

『どうしてウェイン……伯爵家はマスターに討伐依頼を？』

「畏だよ、畏。いったら、俺でもドン引きする屑だぞ。会ったことはないけど、ゲームでは屑過ぎて笑ったよ」

ブラッドが主人公と親しいとか、とにかく腹が立ったから空賊退治に誘い出すという流れだ。まさか、俺に話が来るとは思わなかった。

『マスター、このままではオリヴィアの相手はマスターという事になりますか?』

「俺? ないって。だってモブだよ」

俺の言葉にルクシオンは『そうですか』と言っただけだった。

リビアの自室にノック音がした。

「は、はい」

部屋で落ち込んでいたリビアがドアを開けると、そこにはカーラそして後ろには二人の女子の姿があった。

「ちょっといい?」

笑顔のカーラにリビアはオドオドするだけだった。

「え、あ……」

「実はあんたも空賊退治に参加して欲しいのよ。上級クラスで成績優秀らしいじゃない。手伝いくらい出来るでしょう」

「あ、あの……今日のことでお話が!」

カーラがドアの縁を強く叩く。

その音にリビアが黙ってしまつと、後ろの女子たちがクスクスと

笑っていた。

「手伝ってくれるわよね？　だって、私たち　“友達” だから」

カーラの笑顔にリビアが俯いて涙を流した。

友達という強調したカーラの言葉は、そのままの意味には聞こえない。

騙された事にリビアも気が付くが、それが余計に悲しくて惨めだった。近くにリオンやアンジェがいただけに、こうした悪意にリビアは弱かった。

それを見て後ろの女子二人が笑っている。

「泣いちゃったよ」

「平民なんてちょっと脅せばすぐに言うことを聞くわよ」

カーラがドアから離れる。

「それじゃあね」

三人でリビアをあざ笑いながら去って行く。リビアはドアを閉めると、頭を抱えてその場に座り込んでしまった。

「……リオンさん、私……どうしたら良いんですか」

泣いているリビア　リオンと親しくなったことで彼女にメリツトがあるとすれば、その庇護下で守られていたことだ。

デメリツトは 本来なら強く成長する機会を、リオンに守られているためにほとんど奪われてしまったこと。

自分よりも強い立場の貴族に半ば脅され、リビアも空賊退治に参加することになった。

空賊討伐

王都にある飛行船の港。

そこは王都から少し離れた場所に浮かんでいる浮島にある。飛行船が出入りを繰り返すその場所は、港と言うよりも駅やバスのターミナルのように俺には見えた。

数十人が乗る小さな飛行船で、王都から港にやってくると指定した場所に俺の飛行船【パルトナー】が既に待機していた。

「お、来ているな。時間通りだ」

俺の荷物に隠れているルクシオンが返答してきた。

『これくらいパルトナーには余裕です』

パルトナーは、ルクシオンが偽装した姿をそのまま再現している。

ルクシオンの形は未来的というか、とにかくこの世界の飛行船の形として不自然なのだ。そもそも宇宙船だし。

そのため偽装させたが、中に入りたいという人たちが非常に多い。

ルクシオンの秘密が知られると俺を殺してでも奪い取ろうとする奴らが出てくるので、新たに一隻建造したのがパルトナーである。

ルクシオンの奴、実はパルトナーをちょいちょい自慢してくる。

親馬鹿という奴か？

『……マスター、気付いていますか』

「見えているよ」

そんなパルトナーの近くにいるウェインさんと……リビアの姿が見えていた。ウェインさんの荷物をリビアが持っている。

俺が近付いてくるのを見つけると、荷物を受け取って何事もなかったかのように手を振ってきた。

俺が気付いていないと思っているらしい。

リビアはここにいてなんて聞いていなかった。なにより、リビアの態度がどうにも……簡単に言って元気がない。

「男爵、こつちですよ」

ウェインさんを見て、俺は改めて女は怖いと思うのだった。

「女って怖いな」

『マスターはそんな彼女たちに恐れられているので安心してください』

「嫌われている、間違いないね？」

そうして二人のところに到着すると、何やら見知った顔が近付い

てくる。

赤と紫……槍を担いだグレッグと、とても嫌そうな顔をしたブラッドだった。

「げっ！」

「……何でバルトファルトがいるんだよ」

二人のあまりの態度に俺のガラス細工のような心が傷つく。

「文句があるのか、負け犬共が」

ガンを飛ばしていると、グレッグもブラッドも俺に近付きメンチを切ってきた。

やっぱりこいつら柄が悪い。髪色もあってチンピラみたいだ。

「やんのかごらあ」

「いつまでも調子に乗れると思うなよ」

二人が俺を威嚇してくるので、俺は素直にリビアの後ろに回った。

「俺はこれからリビアたちと予定がある。さっさとどこかに行けよ」

ただ、二人ともこの場を離れない。

グレッグは髪をかき、そしてブラッドはジト目をウェインさんに向けるのだった。

「これ、どういうことかな？」

困ったように俺たちから視線をそらすウェインさんは、どうにも何か隠しているようにしか見えなかった。まあ、隠しているからね。

「あは、あははは……えっと、私の実家までの足は男爵の飛行船です」

それを聞いて、俺たちは顔を見合わせた。

「はあ！？俺の大事な飛行船にチンピラを乗せろ！」

俺の言葉にグレッグもブラッドも切れる。

「誰がチンピラだ！」

「お前、本当に嫌な奴だよな！」

二人とリビアを挟んで睨み合っていると、ウェインさんが謝罪してきた。

「ご、ごめんなさい！実はブラッド様にもお声をかけていたんです」

全員の視線がブラッドに集まると、本人も渋々と説明をする。

「……元婚約者の寄子だね。助けを求められたから手を貸すことにしたのさ。報酬も出るし、その空賊は賞金首だ。マリエの助けになればと思って賊討伐を決意した」

何だかまともなことを言っているようで、実はかなり頭がおかしいことを言っている。

学生が賊討伐なんて間違っている？ 違う。そこじゃない。

そもそもここは乙女ゲーの世界だ。男子は女子に好かれるために、賊討伐という目に見えた結果を求めるような世界である。

……よく考えると、元からこの世界は狂っているな。

グレッグが自慢の槍の石突きで、床を叩いた。槍を持った立ち姿は立派だな。

「その話を聞いて俺も参加を決めた」

槍一本で何が出来ると？

本当に乙女ゲーの登場人物って頭がおかしいよね。

「他の三人は？ ほら、黒と緑に、青い奴だよ」

ブラッドが怒鳴ってきた。

「色で俺たちを呼ぶのを止めろよ！ 三人とも実家に呼び出されたよ。マリエは用事があるから来ない。まあ、用事がなくても危険だから来させないけどね。だから僕たちだけさ」

……こいつら頭がおかしい。たった二人で何をするつもりだ？

おまけにほとんど武器を持っていない。

空賊なんて飛行船を持っているのが当たり前なのに、いったいどうやって戦うつもりだったのか。

ウェインさんが俺たちを急かす。

「と、とにかく、この面子で頑張りましょう。ほら、オリヴィアさんからもお願いして」

リビアが俯いていた。

何も言わないでいると、ウェインさんが俺たちに聞き取れないような小さな舌打ちをしていた。

俺は髪をかく。

「……取りあえず乗れよ。お前ら、悪戯するなよ」

グレッグが舌打ちをする。

「ガキみたいな真似はしねーよ」

俺は鼻で笑ってやった。

「ガキだから注意したんだよ」

「やんのかてめえ！」

「そうやって怒りっぽいのがガキの証拠だ、馬鹿が！」

俺はリビアの手を引いてパルトナーに逃げ込むと、その後ろをグレッグとブラッド　そして笑みを浮かべたウェインさんがついてくるのだった。

学生寮。

普通クラス的女子が使用している寮に足を運んだのは、アンジェだった。

手には土産を持っており、少し緊張した様子だった。

「こ、これで良いのだろうか？」

リビアのために買ってはみたが、普段自分で買い物をしないアンジェは困っていた。

リオンに相談しようにも、既にウェイン家の領地に向かったのか学園にはいなかったのだ。

「あの馬鹿者が。利用しようとしている輩のために船まで出して」

止めたのに行くと言ったリオンを心配していた。

実家に知らせてはいるが、そもそもアンジェには自由に扱える飛行船がない。リオンのように思い立ったらすぐに行動、とはいかない。

追いかける前にリビアに声をかけておきたかった。

どんな声をかけるべきか悩む。

リビアの部屋の前まで行くと、アンジェは驚いた。

「な、なんだ、これは？」

学園の女子たちが使用するような部屋ではなかった。

物置となっている場所にリビアの部屋が用意されていたのだ。おまけに落書きもされており、扱いの悪さが際立っていた。

アンジェはノックをするが返事はない。

「リ、リビア、私だ……」

声をかけるが返事がなく、いないのかと思ったとき。

「あら、アンジェリカ様じゃない」

振り返るとそこにいたのは三年生の女子と、その取り巻きたちだった。

「……お前か」

年上相手にお前呼びをするアンジェは、目を細めて見下していた。それを相手も理解しており、忌々しそうにする。互いに険悪な雰囲気を出している。

「成り上がりの伯爵家はお嫌いみたいね」

「随分と自分の家を良く言うのだな。非道な行いでの上がった家の娘は本当に図々しい」

アンジェが相手を嫌っている理由は、そもそも敵対派閥だから。

それと同時に、伯爵家には悪い噂が多かった。

噂だけならまだ良いが、実際に悪事に手を染めているのも知られている。

相手の家は上り詰めるために相当な無理をしてきたのだ。

そして、目の前の女子はブラッドの元婚約者でもあった。

数多くの専属使用人を引き連れ、取り巻きたちも随分と派手に遊んでいるのが外見からでもよく分かる集団。

（成金趣味が可愛く見えるな。どいつもこいつも、亜人種の奴隷を引き連れて……）

まさに学園の女子という感じの一団だった。

相手が舌打ちをする。

公爵令嬢であるアンジェに手を出さないくらいの分別はあるようだ。

「お気に入りの平民のお出迎えなんて、随分と可愛がっているのね」

「……何が言いたい？」

相手が顔を近づけてくる。

香水の強い臭いにアンジェは顔をしかめた。

「アンジェリカ様、大事な取り巻きと可愛いペットはちゃんと繋いでいないと駄目よ。死んじゃったら悲しいわよね？」

下卑た笑みを向けてくる相手に、アンジェは睨み付ける。

「……やはりお前の差し金か」

「分かっていたなら止めてあげれば良かったのに。公爵家の娘さんは冷たいのね」

しかし、アンジェは慌てない。

（馬鹿が。お前たちは何を相手にしているのか分かっているのか？
リオンを優秀な番犬程度に考えているのなら、お前たちはおしまいだよ）

カーラの依頼をアンジェは怪しんでいた。

それは、カーラが誰の取り巻きか知っていたからだ。

普通、学園の取り巻きというのは身近な 寄子や陪臣の家の子供たちで固める。カーラが寄親に救援を求めなかった時点で怪しかった。

（リオンの奴、分かっている何故手を貸した？ 相変わらず読めない奴だな）

逆に相手を哀れむアンジエだったが……。

「そうそう、お気に入り平民のペットだけど出かけているわよ」

「出かけた？」

「ええ、カーラの領地についていったの。お友達だから連れていくんですって。カーラったら物好きよね。空賊が出る危ない領地に友達を連れて行くなんて」

瞬間。

アンジエは相手の胸倉を掴んで壁に叩き付けた。

胸元を締め上げ、そのまま壁に押しつけ片腕で持ち上げる。

「おい、リビアをどうしたって？」

「く、苦し」

足が床から離れ、もかく相手を助けるために取り巻きや専属使用人たちが集まるも、アンジエが一睨みする。

「私に触れるな」

静かに底冷えするような声に、全員が動けなくなると再び顔を相

手に戻した。

「私は気が短い。さつさと話せ。お前たちは何を考えている？」

「は、離して　こんなことをして、ただで済むと思っているの？」

相手は手を出してくると思っていなかったのか、多少慌てるが手を出してきたのはアンジェだと思ったのか強気な態度に出る。

「質問しているのはこちらだ。騒ぎたければ後でいくらでも騒ぐといい。決闘騒ぎから、私に舐めた態度をとる馬鹿共が多かったところだ。いい見せしめになる」

その馬鹿共の多くが同性である女子というのが、アンジェにとっては悩みの種でもあった。男子の方がまだまとまった。

相手は笑っていた。

「自分で確かめなさいよ」

アンジェは相手を床に投げつけると、そのまま何事もなかったかのようにその場を歩き去るのだった。

「そうさせて貰う」

アンジェは少し離れ、曲がり角を曲がるとそのまま駆け出した。

（急いでリオンに連絡を。いや、私が向かった方が速いか。しかし、パルトナーで向かったとなれば追いつくのは難しいぞ）

パートナーの一室。

俺はブラッドとグレッグの三人でトランプをしていた。

もちろん、賭け事だ。

二人が難しい顔をしている。

「ほら、どうしたよ」

グレッグが唸っている。

「待て！ もう少し考えさせる！」

二人から巻き上げたお金は結構な金額になっている。二人とも、学園祭で稼いだのかお金を持っていた。

もちろん、トランプには仕掛けがしてある。

いかさまで二人から金を巻き上げていた。

まあ、船賃代わりだ。こいつらはもつと社会勉強をした方が良い。いつか騙されて痛い目を見る前に、俺が社会の厳しさを教えておこう。

暇なので遊んでいるのだが、まさかこいつらとトランプをすることになるとは思ひもなかった。

二人は覚悟を決めた顔で、トランプを置く。

「これでどうだ！」

ブラッドも強気だ。手札を見れば確かに勝てそうにも見える。

「次こそは勝つ！」

そして俺はゆっくりとトランプを見せてやる。そして、俺の役の方が強いため、またしても俺の勝ちになった。

「悪いな。また俺の勝ちだ」

グレッグが頭を抱える。

「嘘だろ！　こんなのインチキだろうが！」

ブレッドも蹲っていた。

「何連敗したと思っているんだ！　あり得ないだろうが！」

俺はトランプを回収しながら二人に言うのだ。

「お前たちは本当に馬鹿だな」

二人が睨んでくるが、もう財布の中身が寂しいのか勝負は出来な
いと言っ。

トランプを片付けていると、グレッグがブラッドに聞いていた。

「そう言えば、お前の元婚約者ってどんな奴だ？」

ブラッドは寂しくなった財布を見つつ答える。

「……珍しいタイプの女子かな。伯爵家以上の家柄とは思えない感じだよ」

そう言って話し出すブラッドは、何やら不満そうだった。

「会ったのは学園入学前に数回だ。単純な政略結婚だから、殿下やジルクみたいな揉め事はなかったよ」

グレッグは貴族的な話に疎いため、ブラッドの元婚約者を知らないらしい。

俺はトランプを片付けて話を聞く。

「僕に興味なんてないのさ。欲しいのは血だよ。フィールド家の血が欲しかったのさ。相手の家は商人からの成り上がりだからね」

冒険者が貴族になったホルファート王国では、生まれながらに貴族であれば優秀な冒険者の子孫だ。そして、成り上がったとしても冒険者として成功を収めたのなら立派だと判断される。

成り上がり者扱いを受けるが、それでも貴族として扱われる。

だが、そんな王国にも例外はある。

それがブラッドの元婚約者の家だ。

元は小さな男爵家だったが、商人が強引に家を買って取ってから陞爵して伯爵家になった。

王国貴族からすると憤慨ものだが、それでもグレーゾンというか法の目を掻い潜ってやりたい放題。ただ、そのために敵も多い家だったのだが。

グレッグが思い出したように少し上を向いて話をする。

「そう言えば、大公国との外交で活躍した家だったな」

「その手柄もあって僕が結婚相手に選ばれたのさ。僕の家は大公国に近いからね。話をまとめたら、結婚の話を考えて欲しいと相手の家に言われたらしいよ。実家も“黒騎士”に怯えないで済むなら、つてさ」

辺境伯であるフィールド家は、大公国と近いために戦争が起きると大変だ。それを防いだとして、ブラッドが相手の家の娘と結婚することになった。

「経緯はともかく優秀な家か」

「だから厄介でね。実際、ウェインさんも婚約破棄の件を臭わせて協力を求めてきたよ。狡いよね。親が親なら、その下の寄子も、つて感じだよ」

グレッグも神妙な顔で頷いていた。

「俺の方も同じだな。婚約者とは言っても会ったのは数回だ。情なんてわかないよな」

……こいつらも大変だな。そう言えば、グレッグとクリスの婚約者はゲームに登場していない。いったいどんな人物だったのだろうか？

二人の会話を聞いているとルクシオンの通信が耳に届く。二人には聞こえていない。

『マスター、どうやらお出迎えのようです』

目的地への到着まで時間がある。

お出迎えというのは。

『空賊の飛行船。二隻がこちらに接近してきます』

俺は立ち上がると準備に入るのだった。

「お前ら、仕事の時間だ」

俺を見上げる二人が口を開けて驚いていた。反応が悪いことを見るに、何を言っているのか理解していなかった。

「敵が来たから準備をしろ、って言っているんだよ」

グレッグが立ち上がる。

「そ、そうか」

ブラッドも立ち上がるが、二人とも困惑していた。

「そ、それより、僕たちは何をすれば良いんだ？」

……役に立たないな。大人しくして貰うか。

空賊の飛行船は、黒い布地にドクロマークを掲げていた。

空賊団「ウイングシャーク」の船長の一人が、飛行船から見えるパルトナーの姿に口笛を吹いた。

「これが手に入ればお頭も大喜びだな」

空賊の部下が同意する。

「大物ですね。しかも乗っているのはガキが四人ですか？」

「ああ、野郎三人の女が一人だ」

「四人とも始末しますか？」

「馬鹿。野郎は三人とも貴族のボンボンだぞ。金持ちの婆に売りつけて小遣い稼ぎだ。女の方は遊んだ後に捨てれば良い。平民で身代金も取れないからな」

周囲がそれを聞いてやる気を見せると、隣を飛ぶ飛行船も降下を開始した。

パルトナーに真上から接近し、そのまま押さえつけようとしているのだ。

船長が首に手を当てて回す。

「一人はとんでもなく強いらしいが、学園のガキだ。空賊の戦い方を教え込んでやれ」

「へい！ 全員、準備させています」

飛行船から次々に飛び立つのは、鎧をまとった空賊たちだ。

二隻の飛行船から二十を超える鎧がパートナー目掛けて飛び移ろうとする。

鎧とは言っても、パワードスーツのような物だ。

大地が浮かぶこの世界では、鎧だって空飛ぶ。

「今日は馬鹿なガキたちのおかげで楽が出来そうだな」

「そうですね」

後は自分たちの飛行船で押さえつけ、逃げられないようにして奪う。

いつもの仕事だと思っていた船長だが、パートナーから何かが飛び出すと空賊たちの鎧へと近付いた。

それは普通の鎧よりも大きな 灰色の重そうな鎧だった。

「たった一人で何が出来る。多少強くてもやっぱりガキだな。おい、

囲むように」

船長が命令を出そうとするよりも早く、パートナーから出てきた鎧はその空いた両手にそれぞれ空賊たちの粗悪な鎧を掴んでぶつけて破壊した。

鎧を自分の飛行船に投げつけ、そして囲もうとする空賊たちの鎧を次々に素手で破壊していく。

ライフルを構えた空賊の鎧を蹴り飛ばす。

船長が怒鳴り声を上げた。

「なんだアレは……上昇だ！ 上昇」

だが、言い終わる前に飛行船が激しく揺れた。

近くにあった手すりに掴まり、船長は叫んだ。

「何があった！」

「ほ、砲撃です！ 獲物が砲撃を！」

「馬鹿を言つな！ 俺たちは真上にいるんだぞ！」

この世界の飛行船の戦闘は、基本的に上を取った方が強い。大砲の精度が悪いのもあって、とにかく側面に大砲を並べ、数を撃ち込むのだ。

魔法なんて物があるために、バリアが発生して飛行船を守るのだ。

空賊たちも砲撃を一応警戒して真上から強襲した。

「あれだけ大きな飛行船で、どうやって大砲を撃った？　そもそも四人で動かせるわけが」

パルトナーの規模なら、それこそ何千人と人が揃わなければ動かない大きさだ。

そのため、たった四人……五人しか乗っていないのにまともに動かせるわけがないと思っていた。

それがこの世界の常識だからだ。

船長が叫ぶ。

「降伏だ！　降伏しろ！　早く白旗を」

逃げられないと判断し、降伏するため白旗を掲げるように言うのだった。

甲板に降り立つアロガンツを、グレッグは見ていた。

ブラッドの方は甲板に叩き付けられた空賊たちを拘束しており、グレッグにも「さっさと手伝え、脳筋！」と言われている。

ただ、グレッグは灰色の巨人　鎧を見て思った。

（……勝てねえな）

普通の鎧よりも大きなアロガンツは、重装甲でとても重そうだし、空を飛んだ姿はとても軽やかだった。

空賊たちの粗悪な鎧など相手にもならなかった。

グレッグは、リオンの強さに勝てないと思ったのではない。

（何が実戦重視だ。いざ、一人になったら俺は何も出来ないじゃないか）

今までは家臣たちに支えられて活躍できていたのを、リオンを前に痛感させられたのだ。

敵が来たと思えばすぐに動いたリオンとは違い、自分は誰かのサポートがなければまともに戦えないとグレッグは気付かされた。

「……ガキか。何だ、俺は粹がったガキだったのか」

リオンが自分をガキと言ったのは当然のように思えた。

グレッグは自分がとても情けないと思うのだった。

アロガンツの中。

俺は周囲を見渡す。

「これで全員無力化できたかな？」

答えるのは、アロガンツの中にいるルクシオンだ。

『はい。既に飛行船二隻はエンジンを停止しています。逆らっても問題ありません。撃墜するだけです』

「馬鹿、やめろよ。持ち帰って売るんだから」

粗悪な鎧もそうだが、飛行船も金になる。もちろん、空賊たちも同様だ。

そのため、全て捕らえることにしたのだ。放置するよりはマシだろう。

『撃墜した方が早かったのでは？ このまま連れ帰っても面倒になるだけかと』

「いや、嬉々として人殺しを出来る精神じゃないからね。流石にお前を使って戦うなら自重するわ」

俺の言葉にルクシオンの電子音声は、普段以上に冷たく聞こえた。

『マスターはそれで失敗をすることになってもよろしいのですか？』

「……だから巻き込まれたくないんだよ」

こういう判断を求められることになるから、俺は外から見ての方が良かった。命令されて戦うことになれば、それを言い訳に出来る。ただ、自分から関われば言い訳が出来ない。

……本当にどうしてこうなったのか。

「それより、相手には威嚇射撃で十分だっただろ。なんで撃ち抜いたんだよ」

「……パートナーに覆い被さるうとするなど認められません」

こいつ、人のことをどうこう言える立場なのか？

人工知能が私情を持ち込みがった。

これを凄いと思うか、それとも駄目だと思うか……まあ、乙女ゲー世界の人工知能だ。それに、俺の相棒と思えばこれくらいが良い。

ガチの人工知能とか反乱されたら怖いし。

パートナーの一室。

カーラは震えていた。

「ふ、ふざけるんじゃないわよ。なんで簡単に負けているのよ」

空賊たちを手引きしたカーラは、あまりの呆気なさに狼狽えていた。

まさか、ここまでリオンが強いとは思わなかったのだ。

おまけにパルトナーだ。

カーラも入れて五人しか乗り込んでいないのに、普通に動いているなど信じられなかった。

通常、一般的な飛行船でもそれなりの人数がいなければ動かない。

「ロストアイテムって言うていたけど、こんなのインチキよ。これじゃあ……私の実家に到着しちゃう」

カーラはブラッドの元婚約者からの命令で、リオンたちをこの場所におびき出した。

後で自分だけは助かる予定だったのだ。

持ち込んだ通信機は、出発前に報告をしてから調子が悪い。

「なんで壊れちゃうのよ!」

電波の状況が悪いのかノイズが酷かった。

普段から通信状況は良くない。

この世界はそれが基本で、相手が近くにいればやり取りが可能である。

カーラは作戦が失敗して焦っていた。

「実家には何の連絡もしていないのに」

空賊たちを捕まえたリオンは、このまま準男爵家の領地を目指すために移動を再開する。そうなれば、家族に知られてしまう。

「そ、そうだ。あの平民の女を利用してやろう。あいつが悪いことにして……そ、そうよ、あのバルトファルトの奴もあの平民には甘いからきつと許してくれるわ。ほ、他の二人は何とか言いくるめて……違うわ。そうよ、もうあいつらなんて気にしなくて良い。どうせ廃嫡されて権力なんかないんだから」

部屋の隅……小さなカメラがカーラの様子をしっかりと監視していた。

パートナーがウェイン準男爵の領地に到着したのは夕方だった。

「日が落ちるのが早くなったな」

おまけに寒い。

準男爵家の領地には、パートナーが接岸できそうな港がなかったので小型の飛行船で上陸したのだ。

ただ、ここで問題がある。

ブラッドが俺に文句を言ってきた。

「何でお前は落ち着いているんだよ!」

俺たちは今　　準男爵家の兵士たちに囲まれているのだ。

俺は凜々しい姿で両手を挙げている。

「狼狽えるな。……俺も困っている」

グレッグが苛々していた。

「こいつ凄いのか駄目なのか全く分からないな」

兵士たちが俺たちを警戒しているのは、見慣れた空賊の飛行船を連れているからだ。

そうして騒いでいると、準男爵が現れた。

ウェインさん カーラの父親である「コンラッド・フォウ・ウエイン」だ。

疲れた顔をした少しお腹の目立ってきた中年男性という感じだが、俺たちを見ると驚いていた。

「すぐに武器を下ろせ！」

兵士たちが武器を下ろすと、俺も手を下げる。

そして、俺ではなくブラッドに挨拶をしていた。どうやら、ブラッドが辺境伯の息子であると分かったようだ。

「ブラッド様ですね？ お久しぶりです」

「え？ あ、ああ」

だが、準男爵をブラッドは覚えていないのか曖昧な態度になっている。

相手もそれを察したのか自嘲気味に笑っていた。

「伯爵様の屋敷でパーティーをした際にお会いしましたが、随分と大きくなりましたな」

相手が流してくれたので、ブラッドも安堵して話をする。

「それより、どうして僕たちは囲まれているんだい？ そっちの娘さんに助けを求められ駆けつけたっていうのに」

コンラッドさんが戸惑っている。

「助けを？ 娘が求めたのですか？」

周囲の人たちがカーラに視線を向けると、慌てたように言い訳を始めた。ルクシオンに見張らせていたが、本当に酷いな。

「ち、違うの。私が相談をしたこの子が大きく考えすぎて。そ、それで」

話を振られたリビアに今度は視線が集まる。

「え？ あ、あの、私は頼まれて」

どこか心ここにあらずといった感じで、リビアは急に話を振られてしどろもどろになっている。ここ最近、どうにも元気がない。

コンラッドさんが問い詰めようとしたので、俺が間に入った。

「お宅の娘が俺に救援を求めるために、リビアに紹介して欲しいと相談したわけよ。だから俺たちは駆けつけたんだけど？」

誰だこいつ、みたいな目で見られたのが悲しいが、ブラッドが俺のことを紹介する。

「リオン・フォウ・バルトファルトだ。噂くらい聞いているだろう？」

それを聞いてコンラッドさんが少し下がって謝罪をしてきた。

「男爵様でしたか。これはとんだご無礼を。し、しかし、我が領地はそこまで困っていません。救援を求めたのは本当なのでしょうか？」

ブラッドは目を細めてカーラを見た。

「どういう事？」

カーラは言い逃れできなくなると、リビアを睨み付けようとしたので俺が間に入る。

すると泣きそうな顔になった。

コンラッドさんが謝罪してくる。

「申し訳ありません。娘も混乱しているようだ。ここは一旦、我が家にご招待しますので」

そこまで言われ、俺は鼻で笑うのだった。

この世界は乙女ゲー。女に 特に女子に優しい世界だ。有耶無耶にされても困る。

「こいつが俺たちをここに呼んだ。報酬を約束して助けを求めた。準男爵、あんたも分かるよな？ 遊びじゃねーんだよ」

威圧的に、そして脅すように俺は詰め寄った。

世の中、立場というのは利用するためにある。欲しくなかった男爵という肩書きを、ここで大いに利用してやろう。

「将来の男爵二人。俺に至っては既に男爵だ。飛行船まで出させて、空賊を二隻も拿捕した。間違いでした、なんて言わないよな？」

「で、ですが、状況がよく分からないのでは」

「だったらさつさと娘に聞けよ。可愛い娘を庇うのは良いよ。けど、そっちがその気なら、俺は俺のやり方で報酬を貰うから」

ルクシオンが気を利かせて飛行船を動かす。

準男爵がパートナーの大きさと、動いている姿を見て仲間がいると勘違いしたのかカーラの両肩を掴んだ。

「カーラ、いったいどういう事だ？ お前、本当に救援を依頼したのか？」

そこからカーラが泣きながら事情を話すのだった。

準男爵の屋敷ではなく、パルトナーに戻ってきた俺は背伸びをした。

カーラの奴が全て話してくれた。

俺たちを騙すために連れてきたことを、だ。

まあ、捕らえた空賊から事情は聞いていると言ってやったら諦めてべらべら喋りやがったのだが。

空賊たち？ 知らないふりをしていたよ。

嘘？ 違うね。相手が勘違いをしたただけだ。空賊たちから聞いている、なんて言ったら諦めてカーラが計画を話したのだ。

伯爵令嬢が、俺たちを騙して空賊に襲わせようとした、ってね！

部屋にはリビアと二人だけだった。

「はあ、疲れた。明日は様子を見るとして、しばらくノンビリしようか。幸い、連休はまだあるし」

初日で随分と片付いた感じがある。

上手くいきすぎて拍子抜けだが、ゲームではないのだ。盛り上がりなんて必要ない。

人生、平穩無事な穏やかな日々が最高だ。

普段なら心配そうに「それでいいんですか？」なんて聞いてきそうなりビアが、俯いて何も話そうとしない。

「大丈夫か？」

顔を向けると、リビアがゆっくりと顔を上げてきた。

「……何なんですか？」

「え？」

「リオンさん、凄いですよね。何でも一人で解決して、何でも知っていて……」

「お、おい」

リビアのいつもと違う雰囲気、心配して手を伸ばすと振り払われた。

一歩下がられて距離を取られる。

「どうして私にそこまで優しいんですか？」

「い、いや、これは」

最初に浮かんだ理由は、自分への言い訳にしていた「君が主人公だから」という言葉だった。言葉が詰まって出てこない。

「おかしいですよ。私、平民出身で嫌われ者なのに。何か助ける理由があるんですか？ 私、本当に何もありませんよ。リオさんの期待に応えられないのに、どうして私なんかを助けるんですか？」

答えられずに黙っていると、リビアが暗い笑みを浮かべていた。

「……体が目的ですか？」

「ち、違う。そんな理由じゃ」

すると、泣きながら笑っていた。

その笑顔が痛々しかった。心が痛かった。

「ですよ。私なんて可愛くないですし、アンジェの方が凄く綺麗でお姫様ですからね。私なんて本当に何もなくて……何も……」

……俺は何を間違った？

泣き出して座り込むリビアにかける言葉が出てこなかった。

本当に……自分が情けない。

「みんな言っていました。私はペットみたいだ、って。リオさんもアンジェも、私を人として見ていないって」

普通クラスの女子か、もしくはカーラたちに言われたのか。

そんな事はないと言おうとして、また「この世界は乙女ゲー。名

門男子は攻略対象」と言っていた自分の言葉が頭を駆け抜ける。…
…俺とカーラたちの何が違う？ そんな疑問が俺の頭に浮かんだ。

リビアが泣きながら叫んだ。

「ば、馬鹿にしないで！ 私は……私は人間です！ リオンさんたちのペットじゃないんです！」

そのまま泣き出したリビアは座り込む。

俺は何も出来ずに、部屋から逃げるように出て行くのだった。

八つ当たり

良かれと思つての行動が、全て裏目に出てしまった。

パートナーの甲板。

風が冷たかったが、部屋にいろと色々と考えてしまいそうなので外に出た。しかし、寒かろうが考えるのはリビアのことだった。

ルクシオンが俺の側で浮いている。

『ペットですか。確かに、マスターのかわいがり方はペットを相手にしているようでしたね。お気に入りのゲームキャラを可愛がっていたマスターは、言い返すことも出来なかった、と』

「……そうだよ」

忌々しい人工知能は、俺を慰めることをしない。

こいつの言葉は俺の心によく刺さる。

『学園で本格的な悪意を向けられ弱っていたのでしょう。精神状態が不安定になっています。気にされる必要はないかと』

「お前は俺をなんだと思っているの？ 俺だって傷つくぞ」

『マスターの心は防弾ガラスで出来た特別製です。ちょっとしたことで傷一つ入りませんから大丈夫です』

「そうかい」

前世の経験もあるのだ。俺なりの処世術だってある。

だが……リビアの言葉が妙に心に突き刺さっていた。

首を横に振る。

「これで良かったのさ。モブが調子に乗って主人公や悪役令嬢に手を伸ばしたのは分不相応だったって事だな。良い勉強になったよ」

『……ここで手を引くのはどうかと思いますが？』

「最後まで面倒を見ろ、って？ 冗談は止める。ペット扱いを拒否したのは主人公様だ。今後の活躍に期待するさ」

『拗ねていますね』

「……五月蠅い」

拗ねていると言われ、俺は苛立った。苛立ったという事は、自身で自覚があると認めているのだろう。

しばらくしてから、俺はルクシオンに話しかけた。

「俺の何が駄目だった？」

『方針を早期に放棄したのが最大の失敗です。おかげでマスターの言うストーリーに関わることになりました。ただ、今回の場合……』

オリヴィアの成長をマスターが阻害したのが原因かと』

「成長を阻害？ おい、ふざけるなよ。俺はそれこそ手伝ってきたぞ。学園でダンジョンとか、他にも色々と」

ルクシオンはあくまでも自分の答えを曲げなかった。

『本来ならそれらを彼女は一人で解決していたはずです。短い目で見ればマスターの助力は成功です。しかし、長い目で見ればオリヴィアの精神的な成長の妨げになっています。彼女の言うとおりです。マスターは、オリヴィアをペットだと思っていますのですか？ さぞ、可愛いお気に入りのおペットだったのですね。この世界では貴重なマスターにとって都合の良い女子ですから』

「てめえっ！」

ルクシオンを殴りつけると、そのまま甲板に打ち付けられ跳ね返り……ゆっくりと俺の所に戻ってきた。

『……気は済みましたか？』

「もう一発殴りたいけど、拳が痛い」

顔が怒りで火照っていた。それを外の冷気が覚ましてくれるのを待つ。

『私は言い続けます。マスターにとって、これは必要なことです。前世を持ちながら、子供のようなマスターには、精神的な成長が必要ですよ』

「精神的な成長？　なら必要ない。大人と子供の違いを知っているか？」

『この場合、肉体的な意味でないのなら……自制心などですか？』

「違うな。大人と子供の違いは社会に適応するかしないかだ。この世界の常識を、お前という力を持っているのに破壊せずに生きている俺は十分に大人だよ」

良くも悪くも適応してしまえば大人だ。

『……聞きようによつては感動しそうな話も、マスターが言つと冗談のように聞こえますね』

「そうかよ」

ふて腐れてその場に座り込むと、ブラッドが甲板に出てくる。その手には剣を持っており、俺の顔を見ると酷く嫌そうな顔をした。

ルクシオンは俺の上着に隠れる。

「剣の練習か？」

ブラッドは短く「甲板を借りるぞ」と言つと寒い中で素振りを開始した。その腕前は、お世辞にも素晴らしいとは言えない。

俺の方がまだマシである。

「魔法の練習でもすれば？　お前の特技は魔法だろ」

すると、ブラッドは汗が滲んできていた。

随分と真剣に振っている。

「そんなのは知っているんだよ！」

「逆ギレかよ」

再び剣を振り始めたブラッドが、見ている俺が気になるのか集中できていなかった。

「お前、毎日振っているの？」

「当然だ。騎士になるための必須条件だ」

「別に必須じゃないだろ」

「ぶ、武芸は必須だろうが！」

剣だけ出来ても騎士にはなれない。ずば抜けて剣聖と言われるくらいになれば別だが、その他大勢は何でも出来ないと騎士になれない。

まあ、貴族は自動的に騎士になれるが。

「そんな事をしなくても騎士にはなれるだろうが」

ブラッドはキザっぽく前髪を手ではね除け、そして俺に言うのだ。

「いつかお前に勝つためだ！ その日まで、僕たちは頑張ると決め

た」

頑張る？ 笑うわ。

え、お前ら俺がまた勝負すると思っていたの？

「馬鹿じゃねーの。俺、もうお前らとは戦わないから。お前ら一生負け犬だな」

すると、ブラッドが悔しそうな顔をしてまた素振りを再開した。

「……言い返さないのか？」

「そんな暇があるなら一回でも多く振るだけだ。僕は……五人の中で一番弱いから」

……俺は髪をかく。

ブラッドは魔法が得意なキャラだった。

魔法以外の才能がないと言っても良い。そのために、ゲームでは苦勞させられてきた。弱いのに前に出るし、おまけにすぐに沈む。頼むから前に出るなと何度思ったか。

「得意分野で頑張れば良いだろうが」

「そっちはもう頑張っている！ だけど……僕は負けたくないんだ」

ブラッドが胸の内を明かした。

「……マリエに僕を見て欲しい」

「お前ら、あいつの何が良いの？　ちびっ子でペッタンだぞ」

「外見じゃない！　中身だ！」

その中身も最低だと教えてあげたい。まあ、言ったところで聞きはしないだろう。

すると、船内からフワフワと浮かんだロボットがやってくる。その手には木刀を二つ持っていて、俺とブラッドに渡して去って行った。

ブラッドが気味悪がっていた。

「な、な、なんだ、あの鉄の塊は」

腰が引けて足が震えている。そう言えば、こいつ臆病だった。船内でロボットたちをまだ見ていなかったのか、怖がっている様子だったか……。

しかし、丁度木刀は二本。

ブラッドは俺に木刀の切っ先を向けてくる。

「勝負だ、バルトファルト！」

「嫌だよ。寒いし」

ブラッドが悔しそうに地団駄を踏んでいた。

だが、チラチラ俺を見ながら素振りをするので、負けないと思って一回だけ試合をすることにした。

ブラッドが喜ぶ。

「さあ、来い！」

「何で苦手な分野で戦って喜ぶんだよ。馬鹿なの？」

「お前より座学の成績は良いからな！とにかく、お前に挑めれば良いんだ」

そう言って構えるブラッドだが、練習しているだけあつて構えはまともだった。

踏み込んで打ち付けると、簡単に下がって体勢を崩している。とても才能を感じるとは言えない。

「ほら、どうした」

何度も打ち付け、そしてフラフラになるブラッド。

しかし、一度だけ　大きく踏み込んだブラッドの左斬り上げ。下から斜め上に向かう剣が、思いのほか力強く体勢を崩された。

「　　っ！」

単純な油断だったと思う。

ブラッドが調子に乗って踏み込んでくる。

「このまま畳みかけ　あうっ！」

不用意に踏み込んだので距離を詰め、柄の部分で頭を叩いてやるとその場に蹲った。

「……やっぱりお前、馬鹿だろ」

「く、くそ……いけると思っただのに」

これならまだ槍の方が才能はあると思う。決闘の時は鋭い突きを放ってきた。

ブラッドは立ち上がると、そのまま素振りは終わったのか船内に戻っていく。

「つ、次こそは必ず」

頭を押さえ、戻っていくブラッドを見送りながら俺は木刀を見る。

振ってみると、久しぶりだった。

「うわ、振れなくなっただな。そう言えば、授業以外で触らなくなっただな」

実家を出る前は練習させられた素振りも、学園に来てからサボり気味だった。

隠れていたルクシオンが再び現れる。

『楽しそうですね』

「わざわざ面倒なことを……ロボットに木刀を持ってこさせたの、お前だろ」

『はい』

夜空に木刀の先を向けると、星が随分と綺麗に輝いていた。

「……あいつらも色々と考えているんだな」

翌日。

答えが出ないまま迎えた朝は最悪だった。

テーブルの上に並んだ料理をガツガツ食べるグレッグと、優雅に食べるブラッド……。

「朝から男臭い」

リビアは部屋に引きこもっているの、ルクシオンが食事だけは届けていた。

グレッグが口元を拭う。

「俺だって朝からお前の顔なんか見たくないぞ。それより、これからどうするつもりだ？ 空賊の本隊はまだ残っているんだろ？」

空賊たちはまだ残っており、このまま討伐するのか逃げるのか聞かれている。

別にゲーム的なら二年まで待つても良いが、下手に関わったのでこのまま潰しておきたい。戦争時に凄く邪魔なのだ。

叩けるときに叩くのが俺のやり方だ。

「場所は特定している。ただ、乗り込むのはもう少しだけ待ってから」

すると、ルクシオンから報告があった。

『マスター、どうやら空賊の方から攻めてきたようです』

立ち上がって窓の外を見れば、二人も緊張した様子で俺を見ていた。

「意外と早く動いたな」

そんな俺に、二人が申し出てくる。

グレッグが俺に、

「バルトファルト、壊れかけの鎧でも良い。貸してくれ」

ブラッドも真剣な顔つきだ。

「昨日の内に使えそうな鎧を見つけている」

壊れた鎧で何をしようというのか。

「駄目だ。あんな不良品に乗せられるか。お前ら、もっと立場を考えて」

グレッグが頭を下げてきた。

「頼む！ お前の足手まといになるのも分かっている。けど、このまま見ているなんて出来ない」

ブラッドも俺に頭を下げてきた。

「虫のいい話だ。分かっている。壊れた鎧もお前の 君の物だ。だが、少しで良い。貸して欲しい」

断ろうと思ったが、二人の真っ直ぐな視線や態度に俺は顔を背けた。

「こっちで一度チェックする。その後なら好きにしろ」

「恩に着る！」

「今度こそ役に立ってみせる！」

ルクシオンは俺の言葉を待たずに、

『では、補給と整備を開始します』

そう言ってくれた。

…… 本当に嫌な奴だ。文句が多いのに有能で腹が立つ。

これではなじめないではないか。

外が騒がしくなった。

床に座り込んでいたリビアは、立ち上がると窓の外を見る。

「パートナーが動き出して……」

ボンヤリしていたリビアが、船の揺れを感じて意識が徐々に覚醒してきた。

泣き腫らした目が見た光景は、空の上でリオンがアロガンツに乗って戦っている姿だった。

「リオンさん？」

窓の外、見れば昨日の空賊たちと同じような飛行船が押し寄せてきていた。

その数は五隻。

一際大きな飛行船は、三百メートルくらいの大きさもある。

側面に並べた大砲が火を噴くと、パートナーに砲弾が次々に襲いかかってきた。

「きゃっ！」

頭を抱え座り込んでしまうと、淡い光に守られパルトナーは傷つきもしなかった。

「す、凄い」

リビアが外の光景を見ると、リオンが敵の旗艦に向かって突撃する。

船型の帆を張った飛行船のマストを破壊していた。

リビアはその姿に安堵して　そして落ち込む。

（私、リオンさんに何てことを……でも、私は）

ウジウジと悩むリビアだったが、敵の飛行船から出てきた鎧にリオンが吹き飛ばされる姿を見て慌てて外に駆け出した。

部屋を飛び出し、そして甲板に出るための通路を走る。

大きなパルトナーの船内は広く、外に出るのも結構な距離があった。

途中で見かけた浮遊するロボットたちが、リビアを行かせまいとするが。

「ごめん、通して！」

リビアがそう言つと、ロボットたちは一瞬動きが止まってしまった。

再起動すると慌てて追いかけるが、結局リビアを捕まえることが出来なかった。

いても立つてもいられずに甲板に出ると、船内にいるときには聞こえなかった激しい戦闘音に耳が痛くなった。

火薬の爆発する音。

魔法が発生し、ぶつかった音。

とにかく、激しい揺れと爆発音や火薬で発生した煙が支配する戦場。

リビアがドアから離れてリオンを探す。役に立つか立たないかわはなく、リオンの無事を確認したかったのだ。

「リオンさん。リオンさん！」

すると、目の前に大きな鎧が降り立った。

見上げると、それは灰色のアロガンツではなく、ドクロマークが描かれていた。

「え？」

その鎧はアロガンツと同じ重装甲だが、刺々しくいかにも空賊という感じの鎧だった。

大蛇のような武器を担ぎ、鎧はリビアへ手を伸ばした。

リビアの頭部を包むほどの大きな手が迫ると、恐怖で動けないリビアと鎧の間に円柱に手が付いたようなロボットたちが割り込む。

鎧の中からくぐもった声が聞こえてきた。

『ちっ、何だこのゴミは』

野太い男の声。

拳でロボットたちを吹き飛ばし、リビアを捕まえようと再び手を伸ばすと。

『させるかあああ！』

空賊から奪った鎧に乗り込むブラッドが、敵に体当たりをする。

しかし、相手は甲板に踏ん張りその場から少し後退するだけだった。

まるで子供が大人を押しつけようとしている姿は、とてもどうにかなるようには見えない。

次々に目の前で起こる出来事に、リビアが呼吸するのも忘れて驚いていると空賊はブラットを投げ飛ばした。

『ガキが調子に乗るな！』

甲板の上を転がるブラッドの鎧。

すぐに立ち上がって立ち向かおうとすると、今度はグレッグの乗る鎧が突っ込んでくる。鎧を振り回し、空賊の鎧を破壊して突撃してきた。

『おらあ、退けえええ！！』

グレッグの鎧が空賊に突き刺さるも、分厚い装甲に阻まれ貫けなかった。

『硬え』

グレッグの鎧が掴まれ、そのまま空賊は鎧を抜く。今度は鎧を持つてグレッグを甲板に叩き付けた。

リビアが動けずにいると、ブラッドが前に立つ。

『何をしているんだ、下がれ！』

「え……あ……」

鎧同士の戦いを目の前にして、リビアは恐怖で動けなくなる。

空の上。

吹き飛ばされた俺は苛立ちを近くにいた空賊にぶつける。

「邪魔だ、退け！」

掴んだ空賊の鎧を、そのまま飛行船に叩き付けてやった。

周囲を見ると、俺を取り囲むように空賊たちが囲んでいた。

呼吸が乱れていた。

狭い鎧の中、周囲を見るとドローンが俺の周りに展開されていた。

「殺すなよ。全員捕まえる」

ルクシオンは俺の命令に愚痴をこぼしていた。

『無茶を言います。そのせいで苦労しているというのに』

ライフルを構えた空賊たちが何か叫んでいた。『化け物！』『なんだ、なんなんだよ、こいつ！』『弾丸を全部弾いて 来るなあ ああ！』そうした会話を聞き流しながら、先程のことを思い出していた。

……空賊の頭。

賞金首の男が乗る大型の鎧。

一般的に鎧はスマートな物が主流だ。空賊たちも多くはそのような鎧を駆って俺に襲いかかってくる。

それなのに賊の頭は、アロガンツと同等に大きな重装甲の鎧に乗っていた。

「早くあいつを捕まえたいのに」

俺が焦っていると、ルクシオンが忠告してきた。

『マスター、反応速度が通常よりも遅れています。操縦技術、その他諸々が前回よりも悪くなっていますよ』

……そうですね。練習不足ですね。

「悪かったな。忙しかったんだよ」

『いえ、精神的な問題かと』

灰色の鎧 重装甲のアロガンツが空を飛ぶ。

空賊たちが撃つ弾丸を装甲が弾き、そしてスピードもパワーも他を圧倒する俺の鎧は間違いなく最強だろう。

そんな最強の鎧に乗っているのに、俺は苦戦している。

……完全に相手を舐めていた。

賊の頭は、部下たちに俺の相手をさせ俺との戦いを避けている。

近付いた敵を捕まえ、頭部を握り潰した。鎧の隙間から、操縦者である空賊が怯えた顔で俺を見ている。

「さっさと潰すぞ。いつまでも関わっていられるか」

『マスター、空賊の頭領と思われる男が、パルトナー甲板に降り立ちました。それと、オリヴィアが甲板に出ています』

「なっ！」

驚いていると、空賊の飛行船がこちらに大砲を向け次々に砲弾を撃ち込んでくる。

ぶつかり、爆発に巻き込まれるアロガンツ。

鎧の中でルクシオンを責めた。

「なんで外に出した！」

『申し訳ありません。作業ロボットたちが一時的にダウンしていました。何かしら原因があるとしたか』

「もう良い！　すぐに助けに」

目の前に出現する映像には、空賊の頭に挑むブラッドとグレッグの姿が映し出されている。

『彼らを出撃させて正解でした。今は、オリヴィアを守るために戦ってくださいます』

その姿は　まるでリビアを守る二人の姿は　それが当たり前の光景だと言わんばかりに俺の目に焼き付いた。

ゲームで散々見てきただろうその光景は、主人公を攻略対象の男子たちが守る光景そのものだった。

小さく笑う。

「……これで良いんだよ。そうだよ、最初からこれで良かったんだ」
『マスター？』

一度深呼吸をした俺は、操縦桿を握りしめて周囲の映像を消すと目の前のことに意識を向けた。余計なことは考えなくて良いのだ。

そう、俺には俺の役割がある。

だって俺はモブじゃないか。

主人公の リビアの側に立つなんておこがましいと思わないか？

「出力を上げる。四番コンテナのアレを使う」

『……了解しました』

ルクシオンが俺の雰囲気を感じてか、余計なことを口にしなくなる。おいどうした？ 何か言えよ……お前の文句が聞けないのは寂しいじゃないか。

アロガンツの両手にそれぞれ、コンテナから出てきた二振りの斧が握られる。

随分と大きな斧を片手に握りしめ、俺は一度俯いてから顔をゆっくりと上げた。

「潰す」

リビアがその場に座り込む。

目の前では、ブラッドもグレッグも空賊頭の鎧の前に倒れていた。

『く、くそ』

『何で大型なのにそこまでの出力が出るんだよ』

二人とも生きてはいる。だが、もう立ち上がれそうにもなかった。

空賊頭が大鉈を肩に担ぎ、左手をリビアに伸ばす。

『手間取らせやがって。女、お前はあいつへの人質だ』

リオンに対しての人質にするつもりであることを察し、リビアが逃げようとする。空賊頭は大鉈をブラッドの鎧に突き立てた。

『がっ！』

ブラッドが声にならない声を上げ、そして苦しんでいる。

「ブラッドさん！」

空賊頭は鎧の中からくぐもった声で告げる。

『逃げればこいつらを殺す。ほら、さっさとこっちに来い』

手を伸ばしてくる空賊頭の鎧の前に、泣いているリビアは震える足で前に出た。ブラッドを見ると苦しんでいるが生きている。

（私、足手まといだ。みんなに迷惑をかけている）

悔しさに涙を流すと、先程まで目の前にいた空賊頭の鎧が吹き飛んだ。

突風にリビアの髪や服が乱れると、目の前を通り過ぎた灰色の鎧を見た。

「リオンさん！」

リビアは嬉しそうに叫ぶが、すぐに表情が曇った。

「え？」

両手にそれぞれ大斧を 戦斧を持ったリオンのアロガンツは、相手の鎧の両腕を切断していた。

以前、ユリウスとの決闘の時には、スコップを持ってどこか間の抜けた愛嬌すらあったアロガンツだったが、今目の前にいる鎧は禍々しく見えた。

戦うために作られ、本来の目的を果たそうとするアロガンツの迫力を前にリビアの笑顔は驚愕に変わる。

「駄目。リオンさん、駄目です！」

リオンは両腕を交互に振り回して、空賊頭の鎧を弄んでいた。徐々に削り、空賊頭が恐怖に叫んでいる。

『た、助けてくれ！ 降伏だ。降伏するから！』

リオンは笑っていた。

『降伏？ おいおい、名のある空賊がそれじゃあつまらないだろうが。最後まで抵抗して見せてくれよ。なあ？ 誰に喧嘩を売ったか教えてやるよ！』

踏みつける。何度も踏みつけ、空賊頭は泣いて命乞いをしていた。

『助けてください！ お願いします。助けて！』

『散々暴れておいて、虫が良すぎるんじゃないの？ まずは部下たちに降伏するように言うのが先だよね？ ほら、早くしないと死んじゃうぞ』

先程までブラッドとグレッグの二人を相手に戦っていた空賊頭を、リオンはまるで雑魚のように扱っていた。

空賊頭の命令で、空賊たちが降伏を宣言する。しかし、リオンは空賊頭の鎧を破壊していく。アロガンツが装甲を剥がし、大事な骨組みとなるフレームを引きちぎっていく。

その姿を見たリビアは、素直に怖いと思うのだった。

そして敵の鎧の腹部に手を入れたアロガンツが、何かを抜き取る。

リオンはそれを見て笑っていた。

『みくくつけた』

空賊頭が悲痛な声を出す。

『か、返せ！ そいつは大事な 』

『知るかよ。 お前の物じゃない。 今日からは俺の物だ』

アロガンツは、もう空賊頭の鎧に興味もないのか蹴り飛ばして甲板の上で転がした。

周囲を見れば、リオンがやったのか空賊たちの飛行船が黒い煙を噴いていた。何とか浮いているという感じで、中には小型のボートに乗り込んで逃げようとしている空賊たちもいる。

鎧のほとんどは落とされ、海の上に浮かんでいた。落ちたときのため、鎧には浮き輪のような物が付いている。それが展開し、海上に浮かんでいるのだ。

空賊たちが鎧から出て、これからの事を考え絶望した顔で頂垂れるか空を見上げている姿……。

リビアはブラッドが怪我をしているのを思い出し、鎧に駆け寄ると怪我の具合を確認する。

「す、すぐに治療します」

鎧の中から顔を出したブラッドは、脂汗をかいていて苦しそうだ

った。

だが、リビアを前に無理して笑顔を作る。

「あ、ありがとう」

「いえ、私のせいで怪我を」

「それは違うよ」

「え？」

「僕も、グレッグも納得している。君を守るために戦った。何しろ、僕たちは騎士を目指しているからね。騎士は女性に優しくないと……あ、そこ痛い！」

腕に怪我をしているブラッドを治療し、自分を恨んでいないという言葉に安堵した。同時に、酷く情けなくなる。

ブラッドの傷に手をやると、魔法の淡い光が発生して傷を癒やしていく。傷口が綺麗に消えるのを見て、ブラッドは安堵した。

「マリエと同じで治療魔法が得意みたいだね。助かったよ」

その言葉に、リビアは聞き返す。

「マリエさんも治療魔法を扱えるんですか？」

治療魔法を扱える魔法使いは少なく、更に腕の良い治療魔法を使える人間はもっと少ない。貴重な人材だと言える。

ブラッドは微笑みながら自慢をする。

「ああ、僕たちの女神だよ。どんな傷もマリエがいれば大丈夫……」
そう言っで意識を失うブラッドだった。

リビアがそんなブラッドの傷口を持っていたハンカチで拭くと、アロガンツから出てきたリオンがその姿を見下ろしていた。

「 リオンさん。あ、あの！」

リビアが何かを言う前に、リオンは微笑んでいた。

ただ、リビアには悲しそうに見えるのだった。

「お似合いだよ。やっぱり、何事も正しいところに戻るように出来ているわけだ」

何を言っているのだろうか？

リビアが立ち上がろうとすると、リオンはグレッグの所に向かう。そして鎧から出してやると、怪我のないことを確認して声をかけていた。

「ご苦労さん。なんだ、強いじゃないか」

「嫌味かよ。……悪い、借り物の鎧を壊しちゃった」

「いいさ。それ以上の働きだったから。それより、ブラッドを運ぶ

から手伝ってくれる」

「あいつ無事なのか？」

「平気。もう怪我は“オリヴィアさん”が治療してくれたから」

リビアは自身の胸に当てた手を握りしめる。

凄く心が痛かった。

心臓が握りしめられたように痛む。

立ち上がって何かを叫ぼうとするが、声が出なかった。そんなリビアの横を通り過ぎたリオンは、目も合わせてくれなかった。

グレッグと二人でブラッドを鎧から出してやると、そのまま口ボツトたちが担架を持ってきたので乗せてやる。

三人が船内に戻ると、リビアは泣くのだった。

「どうしてですか。……リビアって呼んでくださいよ」

崩れるように座り込み、泣き続けるのだった。

空賊たちの宝を前に興味も出てこない。

パルトナーにある倉庫の一つには、空賊たちから奪った宝を放り込んだ。

金銀財宝に加えて、何やら懐かしいアイテムも見つけたが手に取ってすぐに手放した。

「よくこれだけ貯め込んだな」

俺の側で浮かんでいるルクシオンは、俺の態度を見ていた。

『ウェイン家の報酬は期待できませんが、空賊団の壊滅と、空賊頭の懸賞金もありますので結構な金額が手に入ります。ちよつとした財産ですよ』

今更興味もない。

それだけの大金を持って何をするというのか？

……全部馬鹿らしい。

「ティーセットを買おうかな。残りはどうするか……」

思い浮かんだのはリビア　オリヴィアを守るグレッグとブラッドの姿だった。本来あるべき姿はあちらなのだ。妙に心がざわつく。

俺はルクシオンを見た。

「おい、伯爵家と空賊の繋がっていた証拠は見つけたか？」

『はい。やり取りのある書類などを数点発見しました。証拠としては不十分かも知れませんが』

「王宮に告げ口してやるか。後はレッドグレイブ公爵家だな。敵対派閥のスキヤンダルは良い手土産になる」

『醜聞というか、明らかな弱みですからね。伯爵家が空賊たちを取り返しに来るかも知れません』

「そんなの、叩き潰せばいいだけだろ」

今まで俺は一体何をしてきたのか。

これだけの力があるのに使わないなんて馬鹿か？

そうだな。馬鹿だったな。

俺は馬鹿だった。

「ゴミみたいな奴らが消えれば、王国も少しはまともになるかもないや、駄目だわ。王国自体ゴミ、っていうか……乙女ゲー自体ゴミじゃね？」

ヘラヘラしている俺の様子を見ているルクシオンは、いつもの憎まれ口が少なかった。

『本当によろしいのですか？ 私は王国を この世界を破壊するのにためらいはありません。ご命令ならすぐにでも実行しますよ。その後、マスターにとって都合の良い世界を作ること可能です』

……俺に都合の良い世界？

最高だね！

「良いな。女を侍らせて、ハーレムを作ろうか？ エルフとか猫耳の獣人も良いな。今度は逆に女なんてゴミだ、みたいな世界にするか！」

……そこまで口にして気が付いた。

あ、これただ男女の立場が逆になっただけだ、と。

「……なんだ、俺も学園の女子と同じか」

『自分の中で答えが出たようで何よりです。空賊相手に八つ当たりをして、気は晴れましたか？』

……まったく晴れなかった。

モヤモヤとした感情が腹の中で蠢いている。

すぐにでも吐き出したいのに、その方法が分からないのだ。

ルクシオンが俺に言う。

『彼女。オリヴィアは、マスターを嫌いになった訳ではありません。ただ、精神的に不安定になっており』

「知っているよ。自分の言うとおりにしなかったから。迷惑をかけたから。そんな理由で怒ると思ったか？」

『はい』

「……お前、俺のことをなんだと思っているの？」

外に出てきたときは流石に「何してんだ、馬鹿！」って思った。だが、逆にそのおかげでブラッドやグレッグの男気を見ることが出来た。

主人公と攻略対象の本来あるべき姿も見られた。

大きな収穫だったと思う。そうだ……これで良かったのだ。彼らの代行ももう終わり。モブに戻るときが来たただけだ。

ポケットに入れた聖なる首飾りを取り出す。

「そうになると、これはどうやって渡そうかな？」

俺がプレゼントするのではなく、どちらかが　ブラッドかグレッグが目覚まし、オリヴィアとくつつけば話は楽なのだ。

プレゼントするように言って渡せれば、俺としては最高の結果になる。

二人には頑張って貰いたい。

「……財宝の使い道は決まったな」

俺は一人で結論を出すと、首飾りをポケットに押し込む。

ルクシオンが告げてくる。

『マスター、どうやら伯爵家の艦隊が向かってきています。同時に

レッドグレイブ公爵家の飛行船もこちらに向かっています』

……騒がしい限りだ。

業

カルマって知っているだろうか？

俺は運命とか、宿命みたいな物のように思っている。

あやふやな知識で申し訳ないが、とにかくカルマって…… かつこいいと思わない？

「俺もモブのカルマから逃れられないのか」

そんな台詞に添削するがごとく、ルクシオンがズバズバ言うてる。

『カルマは業ですね。因果 行為があって結果があると言っ意味では？ 少々台詞としておかしいと思いますよ』

かつこうをつけた台詞を添削されたときの気分が分かるだろうか？

…… 無茶苦茶恥ずかしいよ。

「……今の台詞はなかった事にしよう」

『自由』

俺は今、甲板の上に立っていた。

寒空の下、俺のパートナーと並んでいるのは公爵家の飛行船三隻。

そして、向かい合っているのはウェイン家の寄親である伯爵家の飛行船　武装をした飛行船艦が、艦隊でこちらと向き合っている。

簡単に言つと、伯爵家は捕らえた空賊たちを引き渡せ。

公爵家としてはお前らの寄子の要請で助けに来たのに、引き渡せつて馬鹿じゃないの。みたいな態度だ。

伯爵家としては、空賊と手を組んでいた事実を隠したいため必死だった。

しかし、公爵家が出てきたことで無理矢理手を出すわけにも行かず、こうして話し合いをしているのだ。

オリヴィアさんは、アンジェが引き取って自分の船に連れ帰った。

泣いているオリヴィアさんを見て、俺は平手打ちを一発貰ったが痛かった。

『それより、よろしかったのですか？』

「交渉を任せたことか？　俺に高い交渉能力があるように見えるか？　公爵家に任せれば良いんだよ」

交渉ごとはお願ひしている。仲介料は取られるだろうが……。

俺は空賊たちから奪った鎧や飛行船があるし、空賊たちも全員捕らえている。

……何も問題はない。

『そうではなく手柄についてです。ブラッド、グレッグの両名に手柄を譲るのは何故でしょう？』

「二人が元の地位に返り咲けば俺としてもありがたい。オリヴィアさんを守ってくれそうじゃないか？ そうならなくても、いざという時に頼れそうだ」

既にストーリーを大きく外れてしまった。

少しは修正しないと今後が怖い。まあ、元の地位に戻れなくとも少しは現状よりマシになってくれれば良いのだ。それに、二人は頑張ってくれた。それくらいしても良いと思えたのだ。

『マスターはオリヴィアとの関係を清算。手柄を二人に譲り、手元に残るのは僅かなアイテムが数点のみ……元は取れましたか？』

「十分だ。俺にはこれで十分。お前もいるからな」

よく考えれば、ルクシオンはオリヴィアさんが手に入れていたかも知れない飛行船だ。チート級の宇宙船を奪ったと思えば、多少の労働や嫌われることくらい対価にもならない。

それを言うとルクシオンが調子に乗りそうなので黙っておく。

『オリヴィアを泣かせたと、アンジェリカに怒られていましたね』

「お姫様は気難しいね。モブに相手は出来ないよ。いずれ相應しい王子様が迎えに来てくれるのを祈ろうか」

『アンジェリカとも距離を取ると?』

「むしろ今までが近すぎたと思うけどね」

何事も適切な距離というものがある。

甲板の上で待っていると、伯爵家の飛行船が艦隊へと戻っていく。そして、艦隊の飛行船はこの場から去って行くのだった。

……話し合いは終わったな。

飛行船にあるアンジェの自室。

そこではリビアが膝を抱えて座っていた。

話を聞いたアンジェは呆れるのだった。

「……お前ら子供か? リビア、お前も悪いがリオンも拗ねるとは情けない」

自分のことを棚に上げるアンジェだが、リビアは俯いていた。

「私が悪いんです。ペットだって言われて、それを真に受けてリオンさんに八つ当たりするから嫌われたんです」

アンジェが慰める。ただ、その距離感は微妙だった。

アンジエにも思い当たる節がある。実際、同じ事を言われて少し考えていた。リビアをペット扱いしていなかったか、と。

「……今は休め。すぐに学園に戻るぞ」

アンジエもどうすれば良いのか分からなかった。

与えられた友人ではなく、自分で手に入れた友人……リビアは平民で、どう接すれば正しいのか分からなかったのだ。

三人の関係は崩れかかっていた。

王宮にはブラッドとグレッグの二人が呼び出されていた。

二人を前にした役人が困り果てている。

何しろ、元は名門の跡取りだ。今は違うが、扱いは腫れ物を触る感じになっているのだ。

ブラッドが机を叩く。

「いったいどういふつもり　あ、腕が痛い」

怪我した腕で机を叩いてしまい痛がつている。

グレッグはそんなブラッドに呆れつつも、役人をしっかりと睨み付けた。

「俺たちが正式に騎士になるのは分からなくもない。納得できないが、戦場に出た功績みたいなものだからな。だが、空賊退治は俺たちの手柄じゃない。報酬なんて貰えるかよ」

ブラッドも涙目で頷いていた。

役人が困り果てている。

「受け取って貰わねば困ります。バルトファルト男爵からの報告で、自分は二人を助けただけだと……そ、その、お二人は、現在は騎士でもなければ爵位も階位ありません。六位上である階位と、男爵位を持つバルトファルト殿の報告が優先されまして。ふ、不正があれば取り調べも出来るのですが、何分こんなことは少ないので」

報酬を支払うというのに受け取らない二人を前に、役人も困惑しているのだ。

普通は、手柄も報酬も欲しがるものだ。

それなのに二人が拒否しているのが信じられないのだろう。

グレッグは腕を組む。

（あの野郎、変な気を使いやがって）

深呼吸をすると、グレッグは役人に全てを話した。

「俺たちが手伝いをしたただけだ。空賊団を潰したのも、懸賞金のかかった空賊を捕らえたのもバルトファルトだ。あいつの手柄だ」

ブラッドも頷く。

「僕たちはたいした活躍もしていない。それなのに、こんな報酬は貰えない」

今度は役人が溜息を吐く。

「……お二人には言わないように言われていたのですが、バルトフアルト男爵がお二人の実家に働きかけています。今回の手柄で絶縁を解いてくれないか、と」

二人が複雑そうな顔をした。

「あ、あいつがなんで！」

グレッグが立ち上がれば、ブラッドも同じように理解できないという顔をしていた。

「そ、そうだ。そこまでの理由がどこにある？」

役人は二人の顔を見つつ答えるのだ。

「男爵のお気持ちは分かりませんが、王宮内で相応の資金が流れています。お二人の実家にも相応の金額や品が贈られたとか。ここは素直に受け取られてはいかがでしょうか？」

今後恩を返せば良いと言うと、役人は部屋から去って行くのだった。

王宮の中庭。

ベンチに座る二人は気持ちの整理がつかないでいた。

グレッグは忌々しそうに、ブラッドは少し悲しそうな顔をして俯いている。

そんな二人の下に、ユリウスが現れた。

少し疲れた顔をしている。

「二人とも、聞いたぞ！」

どうやら二人の活躍を聞いて探していたのが、ユリウスは嬉しそうにしていた。

「殿下？」

ブラッドが顔を上げると、ユリウスは興奮している様子だった。

「名のある空賊を退治したらしいな。しかもバルトファルトの奴の前で！ これはもう、俺たちの勝ちじゃないか？ それよりも、二人には絶縁を解くための手続きが始まっているらしい。お前たちの嫡男復帰も近いかも知れないぞ」

喜ぶユリウスに、グレッグが小声で言うのだ。

「違う。俺たちはあいつに何一つ勝てなかった。強さも、心意気も……おまけに度量も負けたのさ」

ブラッドもそのことに反論できずにいた。

「殿下、僕たち……決めたんです」

「二人とも？」

ブラッドとグレッグが立ち上がる。

「バルトファルトに勝ちたい。別に負かしてやりたいわけじゃないんです。もっと男として勝ちたい」

「だよな。今のままなら勝負にもならない。あいつは凄い騎士だよ。俺たち、最初から相手にならなかったのさ」

ユリウスが来たことで俯いていられないと思った二人は、すぐに行動を開始した。

ブラッドが言う。

「殿下、王妃様に面会は叶うでしょうか？」

「母上に？ いったい何を考えている？」

グレッグが照れくさそうに。

「これだけして貰ったんだ。あいつに恩を返さないなんて男じゃないからよ」

……恩を仇で返されるとはこのことか。

男子寮に戻ってきた俺は、明日から授業が再開するというのに王宮から届いた書状を受け取り震えていた。

「ブラッド……グレッグ……そうか、お前らはそんなに俺のことが嫌いか」

震える手で持った書状に皺が入る。

そこに書かれていたのは【五位下への昇進】が許されたという、事後報告のような内容だった。

俺は六位上という宮廷階位が、一段上がって五位下になってしまったのだ。

理由は空賊退治とブラッド、グレッグの絶縁解除を手伝った云々とかあり得ない理由で、だ。……嘘だと思った。

「いったい誰が裏で糸を引いた。こんな……こんな事が許されるわけがない。五位下ってなんだよ。親父だって六位下なのに、その二つ上とかどうしろっていうんだよ」

普通は出世で喜ぶもの？

違うね。少なくとも俺は嬉しくない。

出世すると言うことはそれだけ責任が発生すると言うことだ。

領地に引きこもってノンビリしたい俺が、出世してどうする。

下手に宮廷階位が高いと呼び出しとか多いんだぞ。

王宮と関わりたくないからあの二人を支援してやったのに、気が付けば俺が出世してしまったではないか。

空賊退治ぐらいで普通は出世しないぞ。

もつと功績を積み上げないと王宮は出世させない。領地規模は厳しくチェックして陞爵させるくせに、階位の昇進には厳しいのが王宮だ。

この理不尽な扱いに憤慨していると、ルクシオンが俺の後ろから書状を見ていた。

『……まさか昇進するとは思いませんでした。マスターは私の予想の斜め上を行くのが得意ですね』

「得意って何だ！俺だって昇進するとは思わなかったよ！どう考えても昇進する流れじゃなかっただろうが！むしろ、どうやって昇進するのか知りたい奴は山ほどいるよ！」

六位とか五位とか、そもそも昇進するのがとても難しいのだ。空賊退治一回で昇進するなんてあり得ない。

それこそ戦場で大きな手柄を立てるとか、長年仕えたとか、そんな大きな功績が必要だ。

個人の力で出世するようなものじゃないんだよ！

一人騒いでいると、ノック音が聞こえてくる。

ドアを開けると、緊張した様子の男子寮の職員が立っていた。職員は女性で、俺を前に頭を下げてくる。

「バルトファルト男爵。お、お手紙と贈り物が届いています」

「手紙と贈り物？」

「は、はい。部屋には届けられないので外にご用意しております」

「外？」

気になって職員に案内され、贈り物を見に行くとそこにあったのはエアバイクだった。

それも割と豪華で大きな奴だ。

「下手な鎧よりも値が張ると思うエアバイクと、手紙の送り主は【アトリー家】だった。」

手紙を受け取り読んでみる。

「……にぎやあああああああああ！！！」

俺が叫ぶと、近くにいた職員がビクリと肩をふるわせた。

そこに書かれていたのは、俺への謝罪だった。

アトリー家　クラリス先輩の実家から届いた書状には、体育祭での一件に関する謝罪と、娘に元気が戻った事へのお礼……それがエアバイクだったらしい。

男子ならちょっと懂れるからエアバイクはいい。

これは良いが、問題は最後だった。

「嘘だ。こんなの嘘だ。みんな……みんなそんなに俺のことが嫌いなのか」

俺が泣いているのを見て、職員が頭を下げ何か言って逃げ去った。紙に涙がポタポタと落ちる。

そこに書かれている内容を簡単に言うのなら『流石に昇進させるのは、しばらく待って欲しいと言われたので五位下から、五位上への昇進は卒業までお待ちください』だった。

アトリー家は宮廷貴族の伯爵家だ。

大臣とか、それくらい偉い人たちの家柄だ。娘のことに恩を感じたのか、俺を昇進させると言ってきた。エアバイクだけで良かったのに！

俺が五位下に昇進したばかりで、流石にすぐには無理だから、卒業するまで昇進を待つて欲しいという詫びだった。

「何で！　何で昇進させようとする！　おかしいだろ！　お前ら、さては俺が悔しがると分かってやっているだろ！　どうしてこんな

酷いことが出来るんだ。それでも人間かよ！」

フワフワ浮かんだルクシオンは、エアバイクにコードを延ばして突き刺していた。

『体育祭で使用したエアバイクとはエンジンが違いますね。パーツも丁寧に作られ、とても良い物ですよ』

「お前、何をしているの？」

『改造と掌握を行っています』

まるでエアバイクに酷いことをしているような光景だ。ルクシオンが悪い奴に見える。

俺は膝から崩れ落ちた格好でエアバイクを見ていた。

「……そうだ。旅に出よう。知らない国へ冒険の旅に出よう」

『明日から学園なので無理です』

「だよね！　ちくしょうおお！」

どうして俺ばかりがこんな目に遭う？　出世したい奴なんていくらでもいるだろうが！

俺は出世なんてしなくなかったのに！

実家から戻ってきたクリスは疲れた顔をしていた。

（バルトファルトの奴、なんで座り込んでいたんだ？）

男子寮に戻ろうとするときに、力なく座り込んでいたりオンを見たが声はかけなかった。

部屋に戻ると手紙が届いていた。

床にあった手紙を拾い上げると、それはマリエからだ。

頬が緩むクリスが眼鏡の位置を正して手紙を読む。

「マリエが連休中にダンジョンへ？　だ、大丈夫だったのか？」

手紙には戻ってきたら会おうと書かれており、クリスは急いで身支度を調べると飛び出すように部屋を出てマリエの下へ向かうのだった。

見せたい物があると書かれた手紙。

クリスは実家での事を忘れてマリエに会いに行く。

翌日。

俺は絶望した顔で授業を受けていた。

休憩時間になりダニエルとレイモンドが近付いてくる。

「酷い顔だな」

「もつと喜んだら？」

既に噂は広がっているのか、空賊退治をしたブラッドとグレッグの二人は女子にもてはやされていた。俺には黄色い声援なんて一つもない。

ハッキリ言えば、オリヴィアさんもアンジェも声をかけてこないから、女っ気一つない。

「俺は下手に出世なんてしなくなかったの」

ダニエルが困ったように笑って納得していた。

「まあ、そうだよな。階位が高いと大変だからな。お前の階位、下手をしなくても領主貴族なら寄子や陪臣をまとめて艦隊を指揮するような階位だし」

階位が高いと相応の働きを求められる。

ダニエルの言うとおり、その辺の六位下の男爵なら戦争になっても飛行船一隻を出せば良い。だが、階位や爵位が上がるとそうはいかない。

相応の戦力を出す義務が発生する。

これが嫌で、昇進も陞爵もしたくない貴族は多い。

逆に昇進や陞爵を狙う貴族は、見栄を張って飛行船の数を揃えるのだ。

レイモンドが近く的女子に視線を向けた。

俺を見ている女子たちの顔がとても複雑そうだった。

「でも、五位上の階位が確実なら、結婚には困らないんじゃないの？」

……結婚。

そうだな。俺たちはそのために学園にいる。砂漠で一粒のダイヤモンドを見つけるがごとく、俺も諦めてはいられない。

「ああ、そうだな。確かにそうだけど……面倒だよな」

レイモンドは笑っていた。

「修学旅行もあるし、その時に声をかけてくる女子がいるかも知れないよ。羨ましいね」

今更声をかけてくる女子なんて、俺の地位が目当てだと言っているようなものだ。

おっと、違った。この学園、そんな女子ばかりだった。

ダニエルがつまらなそうにする。

「お前たちとは別々か。残念だな」

この学園の修学旅行は毎年ある。

三学年合同で行われるが、目的地は三カ所ある。毎年一カ所を巡る事になっており、俺やダニエルとレイモンドはそれぞれ目的地が違う。

そのため、別の飛行船に乗るのだ。

ゲームでは狙っている男子と同じ目的地へと向かい、好感度を稼ぐことになる。ついでにそこでしか手に入らないアイテムも回収できる。

俺が向かうのは、狙っているアイテムがある浮島だった。

「お土産は期待して良いぞ」

俺の言葉に二人とも「期待しているよ」と言って笑った。

……代わり映えのしない日常。

これがとても尊いと思えるのは、俺に前世があるからだろ。学生時代はこれがどれだけの贅沢か気が付かなかった。

レイモンドが俺を見て、

「そう言えば、特待生と公爵令嬢も同じ船だね。リオン、最近上手くいっていないみたいだし、この際謝っておけば」

「何で俺が悪いことをしたみたいになっているの？」

ダニエルが驚く。

「え、だってほとんどの原因はリオンだろ？」

「だよな」

レイモンドも同意しやがった。こいつら、俺を一体どんな目で見ていいのか一度じっくり話を聞く必要があるな。

修学旅行当日。

用意された飛行船は随分と豪華だった。

まるで豪華客船のような飛行船に乗り込み、向かう先は南方にある暖かい浮島だ。

季節が違い、今の季節は夏。修学旅行先としては人気である浮島だ。

「北半球と南半球みたいな感じか？ それにしても……」

修学旅行と聞いていたが、豪華客船で遊んでいるようにしか見えない生徒たち。

俺は同じ底辺グループの先輩である三年生の【ルクル】先輩とカジノを回っていた。

「修学旅行なんて言っているけど、しょせんはお遊びだよ。これから向かう浮島は観光地だし、この時期はお祭りがあるんだ」

「お祭りですか」

「異国の雰囲気がある場所だよ。女子は浴衣を着て祭りを楽しむ。

男子はエスコートが出来ればぐっと距離が縮まるよ。リオン君も頑張る時だよ」

……そうだ。結婚するならここで頑張らないと。

そう思っていたが、人気のある女子は既に男子が取り囲んでいた。

それ以外の女子たちは専属使用人に囲まれチャホヤされている。

目に留まったのは カウンターで話をしているアンジエだ。信用を失った取り巻きたちが、必死で接待をしているが煩わしそうにしていた。

他に視線を向ければ、カジノの雰囲気が見えた。オリヴィアさんの姿が見えた。

ルクル先輩が俺に言う。

「難儀な相手を選んだね」

「何を言っているんですか？ 二人とも俺が狙える立場にいませんよ」

「うん、それでいい。僕たちには僕たちの相手がいる。それは彼女

たちも同じだからね。釣り合わない相手っているからね。それを無視すると大火傷だ。まあ、リオン君には言わなくても分かっているかな？ 殿下たちを見ているわけだし」

その殿下たちだが、見事にバラバラに配置されている。

ユリウス殿下とジルクは一緒だが、マリエはブラッドとグレッグと一緒に。よりもよって、目を覚まして欲しいあいつらとマリエが一緒……悲しい限りだ。

ルクル先輩がクリスを見つけた。

「おや、剣豪様だ」

ポーカールをやっているようで、勝負に勝ったようだが嬉しそうには見えない。

席を立て他の場所に向かっている。

「クリス一人か」

ただ、その周囲には女子たちが群がっていた。

「クリス様、今度はどれで遊びます？」

「一緒に甲板のプールで泳ぎませんか？」

「いえ、お食事を一緒に」

女子が言い寄っているが、溜息一つで去って行く。そんな態度なのに、女子たちはとても嬉しそうだ。

俺が溜息を吐けば、額に青筋を浮かべ睨み付けてくるのに。

ルクル先輩が俺を誘う。

「ルーレットでもするかい？」

「いえ、俺　ギャンブルはしない主義でして」

ルクル先輩が驚いた顔をしている。

「……え？」

嘘だろ、とでも言いたい顔をしていた。だが、俺は本当にギャンブルが嫌いだ。勝つか負けるか分からないのに戦う？　馬鹿らしい。

俺は勝てる勝負しか挑まない男だ。

修学旅行。

リビアは到着した浮島で浴衣を借りると、夜の街を歩いていた。

普段なら危険だろうが、今日は浮島でお祭りのある日。

屋台が建ち並び、赤い提灯の光で独特な雰囲気を出していた。

「……綺麗」

太鼓の音に笛の音。

そして楽しむ人たちの声。

自分の故郷の祭りとはまた違う。

新しい文化に触れた気がしたりビシアは、そんな祭りを一人で歩いていた。

空賊退治からリオンとは話もしていない。アンジエも話し難く、そうしている間に距離が出来てしまったらしい。

アンジエは取り巻きに囲まれ祭りに来ており、話しかけることも出来なかった。

甘辛いタレの匂い。

甘いお菓子の匂い。

射的や、他にも色々と並んだ屋台。

金魚すくいを眺め、そして打ち上げられた花火の音に驚くも空に散る花火に感動するが、どこか心から楽しめなかった。

視線はアンジエと、そして、リオンを探してさまようが、今はアンジエも見つからない。

アレから友達を探そうとも思えなかった。

カーラの一件でどうしても卑屈になっている。

「……私、ここにいて良いのかな？」

以前にリオンがいても良いと言ってくれたときは嬉しかった。

そんなリオンに酷いことを言った自分が恥ずかしく情けない。

（どうして周りの人の意見を優先したのかな）

自分でも分からないが、最近は何をしても楽しくなかった。

フラフラと歩いていると、祭りの会場から離れてしまった。

（あ、戻らないと）

だが、聞こえてくるのは揉め事のような声だった。

「良いから渡せよ！」

「い、嫌だ！ これは渡せない！ 貴族様だからって駄目です！」

そんな声を聞いてリビアは飛び出す。

「あ、あの　！」

「そこで何をしている！」

だが、飛び出したのはリビアだけではなく、浴衣が少し乱れたアンジェも一緒に飛び出てきた。

二人が顔を見合わせ驚き、そして気まずそうに視線をそらすと困

っている人を見た。

「……リオンさん？」

「……お前、一体何をしている？」

だが、悲しいことに脅されている人は現地の人で　脅しているのはリオンだった。

リオンが視線をさまよわせる。

「こ、これはその」

すると、現地の人が二人に泣きついてきた。

「た、助けてください。この貴族様が、持っている物を全部渡せと言うんです」

男性に泣きつかれた二人がリオンを見た。まるで弱い立場の人間から、無理矢理商品を奪おうとしている悪い貴族のような感じた。

「ち、違う！　俺は全部買うから渡せって言ったんだ！　金ならあるんだ！」

男性は首を横に振る。

「だ、駄目です。これを楽しみにしてくれる人たちがいるんです！　いくらお金があっても、みんなの楽しみは奪わせません！」

男性が持っている物を見れば、中身が分からない白い紙で包まれ

た小さな何か、だった。

アンジェが男性に聞く。

「これは？」

男性は興味を持たれて嬉しいのか、笑顔で説明してくる。

「はい。うちの婆ちゃんが作ったお守りです。御利益があるって人気なんです。中身が見えないのは種類が違って、運試しといひかなんというか」

笑っている男性のすぐ後ろにリオンが迫っていた。

札束を持っている。

「だから売れよ。全部買っから。分かった。十倍の値段で買い取る」

しつこいリオンは、全てを買い取ると言い出して大金を用意していた。

逆に男性が怯えている。

「何なんですか、貴方！ お金で解決する問題じゃないんです。これはみんなの笑顔を見るためにやっているんです！」

お祭りを楽しむ人たちに、お守りを売って喜んで貰うため男性も譲らない。

リオンは懷から金貨の入った袋を取り出した。

「ほら、これでどうだ？ 金貨だ。二十枚は入っているよ。これもつけよう」

男性が一瞬考えたが、首を横に振る。

「婆ちゃんはみんなに喜んで貰うためにこれを作ったんだ。絶対に屈しないぞ！」

リオンが意味ありげに笑うのだった。

「良い度胸だ。なら、俺が買っても良いよな？ ほら、正規の値段で全て買おう。さあ、全部俺に寄越せ！」

「だから駄目ですって！」

アンジエがリオンの耳を掴む。

「痛い。痛いです、アンジエさん！」

「さん、はいらない。ほら、さっさと行くんだ。ここは私たちが引き受ける」

すると、男性は大事な商品を抱えてお礼を言うのだった。

「あ、ありがとうございます！」

その場から去って祭りの会場に向かうと、男性は人混みに消えて行った。リオンが耳をつかまれながら手を伸ばして嘆いている。

「待つて！ 俺のアイテムウウウ！」

そんなリオンに何て声をかけたら良いのか分からないリビアだった。

公国

夏祭り会場から少し離れた神社。

その階段に腰を下ろした俺は、俯いて悔しさに涙を流した。

日本の夏祭りとか世界観がおかしい？ 俺に文句を言うな。俺だ
っておかしいと思うが、ここは狂った乙女ゲーの世界だ。まともだ
とっている奴が悪い。

「ちくしょう……欲しかったのに」

今からでも追いかけて全てを買い占めたい気持ちに駆られていた。
だが、それを許さないのがアンジェとオリヴィアさんだ。

俺を見張っている。

そんな二人は、俺がとても落ち込んでいるのを見て逆に引いてい
た。

「そ、そんなに欲しかったのか？」

アンジェが俺の顔を覗き込む。

どうやら取り巻きたちから逃げ出したらしい。俺が側にいないた
め、今の内に決闘騒ぎの時に見捨てた失点を回復するため奴らも必
死なのだろう。

「この日を凄く楽しみにしていました。昨日は眠れなかったのに」
涙を拭う。

お芝居だろって？ 本気で悔しいから泣いているんだよ！

オリヴィアさんが話しかけてきたが、とてもぎこちない。

「で、でも、あんなのはいけないと思います。お金で買い占めるなんて」

言いたいことは分かるが、お金で物を買うのを全否定するのはどうかと思う。

「お金を払うから良いじゃない。十倍出しても良かったのに」

本当にそれだけの価値があるのか俺も怪しいが、本当に効果があるのなら百倍の値段を出しても買いたいお守りなのだ。

この浮島で回収したかったアイテムが、あの男が売っていたお守りだ。

ただ、中に何が入っているのか分からない。

ゲームでは完全ランダムで、外れても【幸運】のお守りが手に入る。

次に良いのが【武運のお守り】で、これがあると近接戦闘系の能力が向上し、フィジカル系のステータス成長率が良くなる。

大当たりは魔法系で【属性の加護】だ。こいつがあれば、魔法への適正値が上がるというゲーム的な効果がある。

魔法的な成長率が上がり、属性への適性も上がる優れたもの。

これがあるため、一年の時の修学旅行先はこの浮島を選んだ。教師に金を握らせてここに來たのに、手に入らないとか悲しい。

成長ボーナスがつくので、一応念を入れてダンジョンにも最低限しか挑んでいなかったのに……。

最強育成法のために練ってきた計画が全て崩れた。

アンジエもオリヴィアさんも凄く困った顔をしていた。

俺が泣くとは思わなかったのだろう。

グスグスと泣いていると、夏祭りも終盤に差し掛かり男性が戻ってきた。

持っていた商品はほとんどが売れてしまったようだ。

「あ、ここにいた。貴族様、二つ余ったのでこちらをどうぞ」

俺は立ち上がってその二つのお守りを購入する。

「当たれえええ！」

「いや、あの、当たり外れなんてないですよ。全部お守りで種類が違っただけですから」

お金を払って袋二つを手に取りゆっくり白い紙を脱がしていく。

緊張して顔が赤くなっていく。

ゆっくりと剥がした紙の下にあったのは、ビー玉ほどの大きさの白い玉。それに金具と赤い紐がついていたお守りだった。

……駄目だ。俺には白……治療魔法の才能はない。

持っけていても意味がない。

二つ目を乱暴に剥くと、今度は赤い玉が姿を現す。二つともとても綺麗な色をしているが、キーホルダーのようにしか見えない。

御利益はあるのだろうか？

「赤……俺、赤の才能がない」

アンジェが首をかしげて、

「お前は何を言っているんだ？　だが、良かったじゃないか」

アンジェが安堵しているのを見て、男性は階段を上って去って行く。

「では、俺は戻りますので。大事にしてくださいね。でも……それ、貴族様よりも、そちらのお二人の方がお似合いに見えますけどね」

俺よりもアンジェとオリヴィアさんにお似合いだと？　まあ、そ

うだな。

俺が欲しかったのは黄色とか、青とかだ。

赤は狙っていなかった。

言い方は悪いが、俺にとって外れである。

肩を落とした俺は、お守りをそれぞれ二人に渡した。いつの間にか男性は階段を上っていなくなっていた。

「く、くれるのか？」

アンジェが少し引いている。俺が泣くほど欲しかった物を貰っても良いのかという顔をしていた。

「俺が狙っていた物じゃないし」

「そ、そうか」

オリヴィアさんにも渡すと、遠慮して拒否をする。

「も、貰えません」

「良いから貰ってよ。俺じゃ意味がないし。別に高価な物じゃないし」

投げて渡すとオリヴィアさんが手に取って困った顔をしていた。

俺は階段に腰掛け深い溜息を吐き、頭を抱える。

「リオンさん……あ、あの」

何か言おうとするオリヴィアさんだったが、この場にアンジェの取り巻きたちがやってくる。

「あ、お嬢様！」

その声を聞いてアンジェが慌てて逃げ出した。

「わ、悪い。私は行く」

逃げ出すアンジェを追いかけて、取り巻きの女子たちが追いかけていく。だが、彼女たちに専属使用人の姿はなかった。

バタバタと駆け抜けていくアンジェたちを見送ると、取り巻きの男子たちが俺を見つけて囲んだ。

相手は三人だ。

「バルトファルト、またお前か」

「少し出世したからっていい気になるなよ」

「お嬢様に取り入った貧乏貴族が」

俺は顔を上げて無能な男子の顔を見た。その程度の認識だからお前らは駄目なんだ。そしていい加減に気づけ。一度大事な場面で裏切ったお前らの信用は、これから何とかしようとしてもプラスにはならない。

今はマイナスで、一生かけて頑張ってゼロになるかどうか……今

更取り入っても遅い。

「え？ 悔しいの？ お嬢様に気に入られた俺が羨ましいの？ 残念だったね。お前らが決闘騒ぎの時に見捨てなければ、お前らがアンジェのお気に入りだったのに。お前らは学園の空気を読むのは上手いけど、もつと貴族の世情というか世間の空気を讀んだ方がよいよ。今更取り入ろうと頑張って恥ずかしくないの？」

煽ってやると手を出してきそうになった。

苛々しているので喧嘩を買ってやろうと立ち上がると、リビアが俺の前に立って両手を広げる。

「け、喧嘩は駄目です！」

男子の一人が怒鳴ってくる。

「先に喧嘩を売ったのはそっちだろうが！」

「う、ごめんなさい。で、でも、喧嘩は駄目です」

「ちっ、行こうぜ。女後ろに隠れる情けない野郎だ」

その言葉、そっくり返してやりたいね。アンジェという盾が欲しいだけの連中の癖に。

男子たちが去って行くと、俺はオリヴィアさんに言うのだ。

「別に放っておいて良かったんだ。あいつら、これ以上の騒ぎを起こせないから引いたのに」

手を出せないと分かっている相手を煽った。

まあ、若いので暴力を振るってくるかも知れないが、その時は社会的に制裁するつもりだ。大人の喧嘩は殴り合いだけで終わらないのだよ。

オリヴィアさんが俯く。

「……ごめんなさい。リオンさん、本当にごめんなさい」

泣いて謝るオリヴィアさんを前に、俺は髪をかく。

「謝ることないのに。そもそも、俺なんかよりオリヴィアさんにはもっと相応しい人が」

そこまで言いかけた俺は、近くに来ていた老婆に視線を向けた。
いったいいつからここにいた？

「……えっと、どちら様で？」

老婆に話を振ると、オリヴィアさんも驚いた顔をしていた。

杖をついた老婆は笑っていた。

「いえ、息子がお世話になりましたのでお話しに、と」

俺は老婆から視線をそらす。息子とは、あのお守りを売っていた男性だろうと思った。

「このたびは大変申し訳ないことをしたと思うわけでした」

言い訳を始めた俺に、老婆は懷から白い袋を取り出すのだった。

「私の作ったお守りを、大金を払ってでも欲しいという方は初めてでした。ですが、アレはお祭りで楽しみにしている方が多いのでね。余っている物で悪いのですが、これをどうぞ」

受け取った白い袋に入っていたのは、武運のお守り？ だった。

「これ、形が違うような？」

「随分と詳しいお方ですね。それは来年から用意しようと思った物です。試しに作ったのですが、お気に召すでしょうか？」

欲しかった物とは違うが、手に入ったのは嬉しい限りだ。

「ああ、ありがとうございます。あ、代金を」

「いりません。どうしてもと言うのなら、お参りでもしていただく。ここは縁結びの神社ですから、御利益もありますよ」

そう言っただけで階段を上っていく老婆。

神職の関係者だろうか？

オリヴィアさんが驚いて階段を見上げている中、俺はお守りをよく見る。剣と盾がある武運のお守りではなく、剣が三本交差したお守りを顔の位置まで上げて眺め、そして手に握りしめた。

「……まあ、大当たりでなくても当たりと思えば悪くないか」

ばらまいた金額に見合うだけの価値はあったと思っておこう。

それにしても縁結びの神社……夜は怖いから、明日の朝にでもお参りにでも来よう。

そう言えば、ゲームで主人公と攻略対象が距離を縮めるため神社に向かったような記憶が……。

オリヴィアさんが俺に聞いてくる。恥ずかしそうだ。

「リオンさん、縁結びってその」

「そのままの意味だよ。縁を結ぶ御利益がある。明日の朝にでも来るさ。良縁を願わないと」

大金を積んでお願いするべきだな。

俺がその場を去って行くのを見て、オリヴィアさんが寂しそうな顔をするが放置する。

……俺と関わるべきではない。

翌日の朝。

お昼には飛行船が出発するので、その前に島を観光していた。

浮島はとにかく独自の文化の発展を遂げやすい。

理由は海すらなく他の島への行き来は飛行船を使うしかない。時には、飛行船を持たずに自分たちだけの社会を作っている浮島もある。

そうした浮島を発見するのも冒険だ。

……まあ、悪い奴らはそのまま侵略することもあるのだが。

どんなに取り繕っても冒険者が粗暴な連中と言うことだろう。

実際に俺もルクシオンを得るために遺跡荒らしのようなことをしたからね。

石を積み上げた階段を上る。

見えてきた鳥居と、神社はいかにも日本風だ。

浮島自体が日本風なので、どうにも違う世界に入り込んだような気分になる。

境内の掃除をしていた巫女さんを見つけた。

可愛い巫女さんは小学生くらいに見える。

「どうも。ここって縁結びの神様がいるのかな？」

そんな俺の質問に、可愛い巫女さんは笑顔で頷いてくれた。

「はい。縁結びの神様がおられます。武と魔法の御利益もありますよ」

武人や魔法使いにはありがたい神様らしい。

お礼を言ってお参りに向かおうとすると、話している間に人がやつてくる。

「……あ」

「……お前ら」

「……え、えっと」

俺が間の抜けた声を出すと、アンジエが困ったように俺たちの顔を交互に見た。オリヴィアさんと下で出会い、そのまま上ってきたのだろう。

小さな巫女さんが笑顔で挨拶をしていた。

「あ、学園の貴族様たちですね。えっと、お参りの仕方をご存じですか？」

丁寧に教えてくれる可愛い巫女さん。

あゝ、癒やされる。

乙女ゲーの理不尽さが浄化されていくようだ。

そんな訳でお参りすることになったのだが、俺たち三人……横並びで賽銭箱の前に並んだ。

……気まずい。」

「お、お布施をするんだったな。いくらが良いだろうか？」

困っているアンジエが財布から金貨を取り出した。

オリヴィアさんがそれを見て、

「そ、そんなに払うんですか？」

「違うのか？ 神殿ではこれくらいは普通に……」

神殿が一神教で他の宗教を排斥していなくて良かった。宗教戦争とか本当に勘弁して欲しい。乙女ゲーの緩い設定に初めて感謝したね。

そんな二人の横で、俺は昨日支払うはずだった札束と金貨を入れていく。気が狂ったと思う？ 違うね。ゲームでは一定金額を支払うと攻略対象キャラの好感度が爆上げされるのだ。御利益があると信じて、俺は大金を支払うのだ。

昨晚思い出し、もっと金を持ってくれば良かったと後悔したほどだ。

二人が啞然として見ている中、礼儀正しくお願い事をする。

「神様、贅沢は言いません。どうか……どうか、嫁を！ 良識があって、優しい女性との縁を結んでください！ 夫を見下す女や、他人の子供を育てさせるような女は嫌です。どうか良縁をお願いいたします！」

俺の強い願いが口から漏れ出てしまう。

二人は呆れている様子だが、俺にとってはとても大事な問題なのだ。

色々頑張ってきたのに、ことごとく裏目に出て苦労している可哀想な俺の願いをどうか聞き届けてください、神様！

必死に祈る俺の横で、どうやらアンジェもオリヴィアさんも願いだした。

流石に口から願いが漏れることはない。

何を願ったのだろうか？ まあ、アンジェは結婚相手に関する事なのは間違いない。オリヴィアさんは恋人か？ 是非ともブラッドとグレッグを除いた三人と あ、駄目だ。ジルクの野郎は駄目だな。

とにかく、残ったユリウス殿下かクリスとくつついて……欲しいと思う。

まあ、俺は自分のことを祈っておこう。

「出来れば胸は大きくて腰はくびれた女性が良いです。少しエッチだったらなおよしです！ ぶっちゃけ、俺を甘やかしてくれる大人で色っぽい」

俺の欲望だだ漏れな願いを聞いて、アンジェとオリヴィアさんが恥ずかしそうに俺の耳を引っ張り引きずり出した。

「待つて！ まだ伝えきれていない願いがあるんだ！ まだ伝えたいことがあるんだ！」

アンジエが顔を真っ赤にしていた。

「こ、子供の前で何を言っているんだ、この阿呆が！」

見ると幼い巫女さんが顔を赤くしている。

……凄く可愛くない？ いや、ロリコン的な意味ではなく、こう汚れていない女子というのは尊いと思える感じで。

オリヴィアさんが巫女さんに謝っていた。

「ごめんね。忘れてね」

「え、えっと、だ、大丈夫です。その、色々と驚きましたけど」

苦笑いをしてくれた巫女さんに手を振り、俺たちは階段を降りるのだった。

リオンたちが去った境内。

巫女の衣装を着た少女は、お賽銭箱を見た。

「あんなにお賽銭にお金を入れた人は初めてかも。おじいちゃんに伝えないと」

少女が走って行く。

この神社にいるのは、少女と祖父だけ……老婆も壮年の男性も家族にはいなかった。

豪華客船に戻った俺は、浮島から離れていくのを甲板から眺めていた。

握りしめたお守りを取り出すと、視線をそちらへと向ける。

ルクシオンは興味があるのか声をかけてきた。

『首に提げてはいかがです?』

「……なあ、これって御利益があると思う?」

『精神的に何かに頼るのは悪いことはありません。頼りすぎなければ良いのです』

神頼みは否定しないが、それで幸運が手に入るとは思っていないらしい。

首に提げた俺は、夏のような日差しを見上げ目を細めた。

「暑いな」

『そうですね。ところで、少し気になったのですが』

「何？」

『もしかして、ダンジョンに積極的に挑まなかったのは、そのお守りを手に入れていないのが理由ですか？ ゲーム的な効果を期待して？』

「……ば、馬鹿、違うよ」

『そうですか。いつまでも聖なる腕輪という奴を回収しないので疑ってしまいました』

「あ、アホだな、お前も」

ぶっちゃけ、効果を期待してダンジョンには必要以上に挑んでいなかった。ゲーム的な効果を期待していたためだが、現実になるとどうなのか分からない。

「回収する場所まで行くのは良いけどさ。そこ、上級生たちでも苦戦するような場所なの。安全に回収するなら準備が必要だったからな」

『そうですか。慌てていないので不安でした。マリエがいるのに焦っておられないようなので、気になっていたのです』

マリエもゲームをプレイしていたのなら、馬鹿な真似はしないだろう。

本格的にダンジョン攻略をするのは三学期からになる。

そこから二年生の中盤まではダンジョンで稼いで。

『それにしても、せつかく【シュヴェールト】のお披露目が出る
と思ったのですが』

「あのエアバイクに勝手に名前をつけたの？ お前、アレの持ち主
は俺だぞ。まあ、シュヴェールトだっけ？ かつこついいから別に
良いけど……なんて意味？」

『……マスター、時にエアバイクを魚に例える事をご存じですか。
飛行船と比べると小さいですからね』

「聞いたことがあるな。それが何？」

『いえ、何でもありません。シュヴェールトは剣という意味です』

「良いじゃないか！ 気に入った。そう言えば、先端が鋭いし、な
んか良い感じだな」

『ええ、本当はかじきマ……何でもありません』

こいつのネーミングセンスには脱帽だな。

まあ、持って来たのだが使わなかった。浮島で乗り回している男
子たちもいたが、俺はあのお守り売りの男を捜し回るので大変だっ
たからな。

どついう訳かそいつの身元が分からないのだ。

現地の人も「あゝ、あの人！ 誰だっけ？」みたいな反応なのだ。

「随分と改造していたな。色までメタリックカラーにしやがって」

『良いじゃないですか。少し青を混ぜてみますか？』

「ああ、今度お願いするよ。途中どこかの浮島で止まるし、その時に乗ってもいいな」

『準備しておきましょう。シュヴェールトはじゃじゃ馬の気分屋で調整が難しいですからね。マスター、大事に乗ってくださいね』

何だろう。

こいつ、あのエアバイクに名前をつけて改造して……結構可愛がっているのか？

そう言えば、パートナーも何だか可愛がっていたような気がする。

……パートナーとシュヴェールトの悪口は言わない方が良さな。

その場にいると、クリスが甲板に出てきた。

疲れた顔をしながら、

「まったく、一人になる時間もないな」

女子から逃げてきたらしい台詞を口にしていた。

こいつ俺たち男子に喧嘩を売っているのだろうか？

俺がいると気が付くと、不敵な笑みを作って近付いてきた。青く

整った髪が風で少し乱れているのに、それすらかつこいいから腹が立つ。

眼鏡を外して俺に話しかけてきた。

「バルトファルト、ブラッドと試合をしたらしいな。私とも剣術の試合をしようじゃないか」

自分の得意分野で俺を倒したいのだろう。

俺は鼻で笑ってやった。

「ブラッドは自分の苦手な分野で勝負を挑んできたのに、お前と来たら得意分野で勝負しようと言ってきて……あいつの方が根性はあったね」

ブラッドの名前を引き合いに出したらすぐに表情が歪んだ。

お子様共が。

この程度で心を乱されるな。

「苦手な分野で勝負してやるからかかって来いよ」

このクリスという男は剣術特化である。そのため、他分野になると駄目になるキャラだ。

「わ、私は 剣術も得意だと思ったことはない」

俯いて眼鏡をかけるクリスに呆れた。

「見苦しいぞ。剣豪様はもつと堂々として欲しいね」

「嘘じゃない。ずっと剣の修行をしてきた。それでも、父には才能がないと言われた」

……そんな設定もあつたな。

どいつもこいつも、とんでもなく面倒な設定を持っている。それこそ、原稿用紙何十枚となるような設定だ。

面倒くさいことこの上ないと思って愚痴を小声でこぼすと、隠れたルクシオンは『逆にマスターの人生は薄っぺらいですね』などと言いやがる。

五月蠅いよ！ そうだよ、転生者と言うだけで他に何もないよ！

それでも面倒な奴らよりマシだと……思う。

「それで剣豪になった努力の人、ってか？ 剣豪にもなれない俺たちは才能もないお前以下かよ」

クリスは俺を睨む。

「全て剣術に捧げて同じ事が言えたら謝罪でも何でもしてやる。お前に私の何が分かる？」

「何も？ 逆にお前は俺の何を知っているのかな？ 自分は可哀想なんです、って同情して欲しいならマリエにでも言えよ。前にも言っただろ」

「……たいして努力もしてこなかったお前みたいな奴が私は嫌いだ」
……努力？ 俺だってしてきたよ。

生きるために畑仕事とか、ランタンの明かりの下で勉強とか。

次女や三女が部屋の中で電気の下で勉強し、畑仕事もしない中でね。

女の子は大事にしないと駄目なんだって！ ……けっ、胸くそ悪い。

野郎の扱いが酷すぎるわ。

「奇遇だな。俺もお前らが嫌いだ。特に俺の期待を裏切ったブラッドとグレッグは許さない。あいつらには期待していたのに」

よりもよって俺が一番嫌うことをピンポイントで……必ず復讐してやる。

そうして話し込み、にらみ合っていると急に警報が鳴り響いた。

俺たちは周囲を見る。

「なんだ？」

「モンスターでも出たか？ いや、だがこの警報は流石に」

クリスが流石におかしいと言おうとしたときだ。

白い雲の中から大量のモンスターたちが現れた。

雲を突き破って続々と現れたその数は、数十、数百という規模ではない。

「……なんだよ、アレは」

海洋生物を真似たような外見のモンスターたちは、空を海の中で泳ぐように飛び回っていた。

その数は既に数え切れないのに、まだ雲の中から飛び出してくる。

浮島からは距離が離れ、周囲には他に飛行船が見当たらない。

船員たちが武器を持って外に出てくるが、その圧倒的な数を前に怯んでいた。

持ってきた武器を持って震えている若い船員もいる。

クリスが船員に詰め寄った。

「いったい何が起きた！」

「わ、分かりません。モンスターたちが急に現れて……こ、こんなことは初めてです」

クリスが焦っているが、それは船員たちも同じようだ。

俺は空を見上げた。

「……どうして囲むだけで襲ってこない？」

通常、出くわせばとにかく襲いかかってくるモンスターが、妙に大人しく飛行船を囲むにとどめていた。

ルクシオンが俺の肩の辺りで浮かんで報告してくる。

『統率が取れていますね。データにはない行動です』

群れで動いていたとしても、ここまで統制が取れたモンスターの集団なんて見たことも聞いたこともない。

少しピンクがかった白いモンスターたち　だが、額の辺りに何が見えた。

俺では確認できないが、ルクシオンが俺の周囲に映像を映し出す。

「紋章？　どこかで見たことがあるな」

『公国の紋章ですね。ファンオース公国の紋章です』

「ファンオース？　……嘘だろ」

ファンオース公国。昔はホルファート王国の公爵家　だが、随分と前に独立して公国を名乗っていた。

通りで見たことがあるはずだ。

何しろ　ゲームでは終盤に出てくる敵なのだから。

『何か知っているのですか？』

「……ゲームで戦争を仕掛けてきた国がファンオース公国だ。だけど早すぎる。俺は三年になるまで余裕があると思っていたのに」

『モンスターとの関係がある？』

「公国にある魔笛だ。アレがモンスターを操る設定だった。だけど、こんな数を操るなんて知らなかったぞ」

数千か、それとも万か。

そんな数のモンスターを前にしていると、甲板の上で女子たちが騒いでいた。

「ちょっと、誰か何とかしなさいよ!」

「ぶ、武器くらい積んでいるんじゃないの?」

「あんな数、見たことがないわよ」

数十、数百なら、なんとか持ち堪えられるかも知れないが、流石に目の前の数は大型の豪華客船ではどうにもならない。

武器だって積み込んではあるが、それよりも居住性を優先した飛行船だ。

戦闘をメインに考えて作られていない。

船内へと逃げていく女子と専属使用人たち。騒ぎが徐々に大きくなり、気が動転したのか発砲している船員までいた。

ルクシオンは冷静だった。

『本体とパートナーを出撃させます。マスター、ご許可を』

「すぐに出せ！ 到着までの時間は？」

『急ぎますが、やはりすぐという訳には』

そうしていると、雲の中から一際大きなモンスターが出てくる。鯨のような姿をしたモンスターの背中には、人が用意したらしい建造物が見えた。

「モンスターを飛行船にしたアレは……お姫様の登場か」

魔笛を扱える王女様……それが来ているとなると、本当に厄介だ。一年生のこの時期に、まさかラスボスを相手にするとは思ひもしなかった。

もつと終盤に 三年生の時に相手をすると思っていたのに！

そんな王女の乗る大型モンスターの周りには、飛行船の艦隊
公国の紋章を掲げた飛行戦艦が隊列を組んでいた。

その後ろから浮島を飛行船に改造した物が雲を突き破って現れる。いつの間にか、大きな雲は四散していた。

公国の艦隊やモンスターたちに食い破られた。

クリスが眼鏡の位置を少し震えた指で整えると、声を絞り出すの

だった。

「公国だと。王国の領空に入っていきたい何を考えている」

どう考えても侵略するつもりなのだろう。

戦力としてみると飛行船の数はたいしたことがないが、それを補うモンスターたち。

甲板から中へと逃げ込む生徒たちが多い中、外に出てくるのはアンジェとリビアだった。俺たちを見つけると駆け寄ってくる。

「リオン、ここにいたか！」

「リオンさん！　　って、リオンさん、周りに何か浮かんでいますよ！」

ルクシオンが俺の側で浮かんでいるのは、それだけ警戒してのことだろう。隠れようとしなのは、俺の命に関わると判断したのか？

確かにこの数は……。

二人がルクシオンを見ていた。俺の周りに浮かんだ映像も見えている。

「だ、大丈夫なのか？」

心配そうなアンジェに対して、オリヴィアさんは空中に映し出された映像を指で触っていた。好奇心の方が勝ったようだ。

そしてルクシオンを見る。

「リオンさん、この丸いのは」

俺は説明が面倒だったので、ルクシオンを。

「ああ、こいつ？ 使い魔のルクシオンだよ。ほら、挨拶をしろ」

ただ、ルクシオン的には嫌だったらしい。

『使い魔？ いえ、納得できません。私は魔に関係するのではなく、科学の結晶です。そこは絶対に譲れません。はじめまして、お嬢様方。私はマスターのサポートをしていますルクシオンです。使い魔ではなく人工知能を搭載した』

そんなルクシオンの説明を感心しながら聞いていたオリヴィアさんだが、アンジェは無視した。この状況の方が最優先事項だと判断したのだろう。

「変わった使い魔だな。お前、魔法の才能もあるのか？ まあ、それはいい。問題は奴らだ。公国のように見えるが、どうしてモンスターと一緒にいる？」

モンスターは人を襲う。

近くにいて襲われないのが信じられないのだろう。

俺は肩をすくめた。

理由は知っているが、それを俺が知っているのは現状ではおかし

いだろう。

クリスが大きなモンスターを見て口を開く。

「待て、誰か出てくるぞ」

アンジェが目を細めていた。出てきたのは敵国　公国の王女である【ヘルトルーデ・セラ・ファンオース】。

「ヘルトルーデ王女か？」

リビアがルクシオンを気にしつつ、王女について質問する。

「あ、あの、お知り合いですか？」

「以前に一度だけ会ったことがある。だが、どうしてこんな場所に」

すると、大きなモンスターの頭上に投影されたヘルトルーデ王女の大きな姿が現れる。

全員が警戒していると、拡声器を使ってこちらに通告してきた。

『ファンオース公国、第一王女ヘルトルーデ・セラ・ファンオースが告げる。我らはホルファート王国に宣戦布告する』

まだ若い女性が無表情で告げたのは宣戦布告。

……いずれくると分かっていたが、流石に準備不足だった。

「おいおい、前倒しにも程があるだろうが」

いったいどこで予定が狂った？

本来なら戦争になるまで時間はあつたはずなのに……。

『愚かなる王国貴族の子弟たちよ。覚悟を決める時間をやろう。降伏か、それとも死か……一時間だけ待ってやる』

与えられた猶予は一時間。

アンジェが手すりを叩く。

「私たちを人質にするつもりか……卑怯者が」

開戦と同時に俺たちを交渉材料にするのだろう。

俺は周囲を見た。

船員たちはオロオロしているが、甲板に取り残された生徒たちは安堵している奴もいた。

公国側から使者が乗る小型のボートが出てくる。

ルクシオンが俺に、

『マスター、厄介なことになりましたね』

「ああ、そうだな」

俺はアンジェを見た。俺たち木っ端と違い、王家に連なる公爵令嬢だ。

公国としてみれば確保したくて仕方がないだろう。

「……いったいどこで間違えた」

どうして三年生のイベントがここで来てしまうのか？

俺は頭を抱えなくなった。

ワロス

甲板の上に来た公国の使者たち。

身なりの良さから身分の高さがうかがえた。

俺たちに向けられた態度は明らかに横柄で、整えた自分の髭を触りながら宣言する。

「男爵家以上の子弟は助けてあげましょう。それ以下の騎士家の子弟に興味はありません。亜人の奴隷も同じです。もちろん、この飛行船も船員も必要ありません」

大半が絶望した表情をする中、安堵しているのは上級クラスの生徒たちだ。

亜人種たちは何か文句を言いたそうにしていた。

女子の一人が、

「ま、待つてよ！ 私の専属使用人は助けてよ！」

そんな女子に使者は侮蔑した態度で答える。

「ならば貴方は愛人と一緒に沈みなさい。奴隷付きの人質など面倒なのでね。まあ、貴族としての心意気を見せるのなら、ここで沈んだ方が良いでしょうけどね。もっとも、腑抜けた王国の貴族では無理でしょうが」

そんな使者の前に出たのはアンジェだった。嫌な予感がする。

「なんだ、この小娘は」

アンジェの態度は堂々としていた。

「……レッドグレイブ。アンジェリカ・ラファ・レッドグレイブ。私の家名くらい知っているだろう」

公爵家とはかく有名だ。

流石の使者も目を見開き驚くが、すぐに笑みを浮かべた。

「まさか公爵令嬢が乗っておられるとは……王国は本当に間抜けですね。そんな大事な人物を護衛もなしに旅に出すなんて」

使者は手を広げる。

「さて、そんな貴方がどうして名乗り出たのでしょうか？　もしかして、私たちがその名にひれ伏すとても？」

お前の家名に恐れないと言う使者に、アンジェは小さく息を吐いた。何か覚悟した姿に、俺が前に出ようとする背中から男子たちが俺を押さえ込んだ。

「は、離せ！　お前ら、一体何をしているのか分かっているのか！」

俺がもがくが、大勢で押さえつけられる。

それを見ていた使者が首をかしげていた。

「誰です？」

アンジエが答える。

「……私の友人だ」

「何とも友達思いですね。……五月蠅いので黙らせておきなさい」
全力で起き上がろうとすれば、拳や蹴りが俺に飛んでくる。

「お、お前ら！」

「アンジエリカ様のご厚意を無駄にするつもりか？ お前は黙っている！」

アンジエの取り巻きに殴られ口の中を切った。血の味が口の中で広がる。

それが分かっていたなら止めるよ……。

予想通り、アンジエが言う。

「公爵令嬢に価値がないとは言わないよな？ 私一人を人質にし、皆の命を助ける」

使者が髭を撫でながら、

「良い心がけです。まあ、後は戻ってからお話ししましょう」

するとオリヴィアさんが声を上げた。

「アンジエ！」

周囲の亜人種たちがオリヴィアさんを取り押さえていた。

「は、離してください。アンジエ、行かないで！」

手を伸ばしたのはオリヴィアさん一人だった。連れて行かれるアンジエは、振り返ると笑っていた。足が小さく震えている。

「リビア、ありがとう」

そう言って使者たちが乗ってきたボートに乘せられ、そのまま去って行く。

俺は強く蹴られて甲板の上を転がった。

腹を押さえると、オリヴィアさんが駆け寄ってきて俺を庇う。

「リオンさん！」

俺を見下している男子と専属使用人たち……まずいな。恨みを買いきってしまった。

「お前のせいで全部無駄になるところだっただろうが」

「この馬鹿貴族が」

「おい、船員。こいつを牢屋にでもぶち込んでおけ」

集まってくる船員が俺を取り囲んだ。

……この糞共が。

公国の飛行船　モンスターの上に作られた建物の中、貴賓室で
アンジェは騎士たちに囲まれていた。

対面しているのはヘルトルーデ王女だ。

「アンジェリカ、久しぶりとも言えば良いのかしら？　まあ、互いに挨拶しかしていない関係ですけど」

アンジェは不敵に笑っていた。

「公国の国力で本気で戦争をするつもりか？　今回の一件、小競り合いでは済まないぞ」

王国と公国には国力に大きな差がある。

それを知っているアンジェだったが、内心では少し焦っていた。

（こいつら、いったい何が目的だ？　国力差を埋める何かを得たか？）

ヘルトルーデは伏し目がちに答えた。

「そうね。でも、国力差なんて関係ないのよ。外の様子を見なかったの？」

「モンスターを従えていたな。それだけで王国に勝てると?」

「……勝つわね」

すると、側にいた重鎮らしき人物がヘルトルーデの話を遮った。

「殿下、それよりもあの豪華客船ですが」

「ああ、そうだったわね」

アンジェが睨み付ける。

「私の投降で見逃すはずでは?」

「それも考えたのだけれど……アンジェリカ、使者は助けるなんて言ったのかしら?」

ヘルトルーデの言葉にアンジェは目を閉じた。

(……やはり当初の予定通り、男爵家以上の子弟を人質にするつもりか)

しかし、

「考えたのだけれど、貴方一人で十分ではないかしら?」

「な!」

驚くアンジェリカに、騎士たちが剣を向け取り囲んだ。

ヘルトルーデは淡々と話をする。

「貴方が連れ去られるとき、抵抗したのは二人だったそうね？　なんと薄情な貴族の子弟たちかしら。貴族としての気概もなければ正義もない。そんな者たちは必要かしら？」

「お、お前は何を言っ
て」

「アンジェリカ、貴方には全てを見て貰いましょうか。ここから王国が滅ぶ様を」

学園の生徒たちが乗る飛行船に、それを伝えるために使者が向かうのだった。

牢屋に放り込まれた俺は座って天井を見上げていた。

鉄格子の向こうでは、オリヴィアさんが泣いている。

俺を出して欲しいと願い出ても駄目で、今は鉄格子を掴んでいますり泣いている。

「もう泣くなよ」

「だって。アンジェが……アンジェ一人を犠牲にするみたいで。リオンさんも怪我して、私は何も出来なくて」

ウジウジして嫌な奴　と、昔の俺だったら思ったかも知れない。

前世の俺なら、こんなキャラは嫌いだ。

だが、誰かのために泣けるというのは、凄いことなのではないだろうか？

そんな場所にやってくるのはクリスだった。

悲痛な面持ちでやってきたクリスは、牢屋の前に来るとオリヴィアさんを無視して俺に話しかけてくる。

「バルトファルト　先程、使者が来た。人質はアンジェリカだけで十分。覚悟を決めろと言ってきた」

また一時間後に攻撃を行うと言い、最後に華々しく散って見せろと笑っていたようだ。

生徒たちも船員も、そして亜人種たちも絶望しているらしい。

「……それで？　俺に何をしろと？」

嫌な予感がしていたのだ。

それなのにアンジェを渡すとか……取り巻き連中は恥を知らなければ良いと思う。

クリスは眼鏡を外した。

「手を貸して欲しい。この船には鎧が六つはあるらしい。私とお前で何とか船が脱出するまで時間を稼ぎたい」

俺は鼻で笑った。

「嫌だね」

クリスが目を細めるが、俺を責めなかった。

「そこを曲げて頼む。全員がここで死ぬわけにはいかない。お前は飛行船の護衛でもいい。私がこの場に残る」

それで押さえられる数ではない。いくら鎧でも万という数のモンスターを相手になど出来ないのだから。ソレを知らないクリスでもないだろう。

「……リオンさん」

オリヴィアさんが俺を見ている。俺なら何とか出来るのではないかという目だ。

純粹で綺麗な瞳が怖い。何もかも見透かされそうで……。

「そんな目で見るな。俺に何を期待している？　そもそも、アンジエを見殺しにした生徒たちを助ける？　笑わせるよね。おまけにボコボコにしてくるし。みんな沈めよ」

悪態をつくときクリスが意外にも同意してきた。

「ああ、そうだな。何も出来ない私たちは沈んで大地ではなく海に還るべきかも知れない。だが、それでも私はお前に頼みたい。可能性があるのはこの方法だ。頼む……私たちを助けてくれ」

頭を下げてくるクリスを前にして、俺はゆっくりと立ち上がる。

「断る」

クリスが悲しそうに頭を上げた。

「……すまなかった。邪魔をしたな」

去って行こうとするクリスを呼び止めた。

「馬鹿が。話は最後まで聞けよ。そもそも包囲されているのに逃げられるわけがないだろうが。お前が残っても囲まれて終わりだ。俺との戦いで何も学べていないな」

戦略ゲーム的に言えば、詰んでいる状態から始まっているようなものだ。

クリスが振り返ってくる。

「だったらどうする！ この状況で、お前に何か策があるのか？ 一人だけ逃げるつもりなら勝手にしろ。私は別に止めない」

……頭が硬いんだよ。

俺も頭が良い方ではないが、俺より不器用とか悲しいだろ。泣いてやろうか？

それは良いとして、

「お前一人で戦っても駄目だ。俺と二人でも駄目だ。だったら、全

員でやるしかないだろうが。アンジエを見捨てた馬鹿共には責任を取って貰う。いいか、俺は何もしない奴を助けるほどお人好しじゃないんだよ」

「……無理だ。みんな絶望していて立ち上がれずらしい。それに、こういう時に私が頼ろうとしたのはバルトファルト、お前だ。分かるだろ？」

クリスが言いたいののは「他の奴ら役に立たない」だ。

激しく同意するが、そんなカス共にも働いて貰うしかない。

俺は鉄格子の側に顔を近づける。クリスも近付き、互いに鼻が触れそうになった。

「戦力の分散はこれ以上できない。一丸となってやれるなら、正面突破が一番だ」

「正面？ お前の方が馬鹿だろ」

「ああ、馬鹿だよ。でも、ただ死を待つより利口だと思うけどね。いいか、あいつらの旗印を逆に奪ってやれ。堂々と包囲網を突破する」

汗が頬を伝うクリスは息をのむ。

「お前は船を守れ。自慢の剣術を披露するのはここだ」

クリスが引きつった笑みで言う。

「自慢した覚えはない」

「世間ではお前の行動は自慢しているのと一緒にだ。努力の成果を見せる。積み上げてきたのは、今日この日のためだと思え。俺は死ぬつもりはない。お前も生きたいだろ？」

その言葉に、クリスは俯いて考え　顔を上げた。

「……そうだな。マリエの笑顔を見たい」

……最後に落ちをつけやがった。

お前ら本当は洗脳されているんじゃないの？

あいつのどこがいいの？

クリスが鍵で牢屋を開けると、俺は外に出た。座り込んだオリヴィアさんに手を伸ばす。

「手伝って貰うぞ」

「は、はい！ 私、頑張ります！」

涙を拭って立ち上がるオリヴィアさんは、表情を引き締めていた。アンジエを救うために頑張るつものようだ。

……マリエより、絶対にこっちの方がいいって。

クリス、お前も目を覚ませよ。

そう思っていたら、クリスは胸に手を当てて呟いていた。

「マリエ、私はもう一度お前の笑顔を見る。そのために、力を貸してくれ」

その手にはお守りが握られていた。

「あ、それ」

「これか？ 祭りで買ったら入っていた。武運のお守りらしい。今にして思えば、縁起が良かったな」

盾と剣の小さなお守り。

俺は笑うのだった。もっとも持つべき者に、そのアイテムが渡ったのが嬉しかった。

「ああ、お似合いだ。お前、最高に運が良いよ」

「そ、そうか。何だか、お前に言われると照れるな」

……いや、頬を染めて照れるなよ。反応に困るだろうが。

クリスが呼びかけて生徒や船員の代表者が集まった一室。

広間に来た俺は、途中で船員から購入したショットガンを持っている。

絶望したのか俯いている奴が多い。

ショットシエル ショットガンの弾を確認する俺は、広間にある階段の中央で演説をするクリスを見ていた。

階段に腰掛け、集まった連中の顔にも視線を向ける。

「……全員が助かるためには、戦うしかないと判断した。みんな、力を貸してくれ」

そんなクリスに浴びせられる声は罵声である。

「調子に乗るなよ、一年が！」

「あんたたいして強くないのになんで威張っているのよ！」

「そこにいる屑野郎に負けたくせに！」

俺を屑野郎呼ばわりした男子を睨み付けると、相手はコソコソと隠れてしまった。だが、顔は覚えたので後で仕返しをする。絶対だ！

三年生から一年生までいるこの状況。

しかも、これから死ぬかも知れないのだ。

普段の序列など何の意味もないと、あからさまな態度を取る奴もいる。普通クラスの男子たちが笑っていた。

「戦うだってよ。上級クラスの男子様は偉そうだな。命令すれば誰もが言うことを聞くと思っているのか？」

「偉そうに命令しやがって」

「そもそもさあ……そいつ、廃嫡されて何の権限もないよね？」

女子も同じだ。だが、専属使用人たちが女子と言い合いをしている。

「ちょっと、命令に従いなさいよ！」

「五月蠅いぞ、小娘！ 今更お前の命令に何て従えるか！」

騒がしくなってくるこの場で、俺は階段から腰を上げた。

ショットガンを担ぐと、全員の視線が集まる。

「ガタガタ五月蠅いんだよ、カス共が」

武器を持った俺を前に静まりかえる聴衆。向けられる視線は恐怖やら憎悪といった感情が込められている。

「よく聞け。俺は正式に男爵位を持っている騎士だ。おまけに五位下 引率している教師たちよりも実質的に立場が上だ。分かる？」

教師たちが視線をそらした。

影の薄い教師陣は、これでも一応は貴族である。ただし、身分は高くない。

学園長くらいなら俺よりも立場が上だろうが……それ以外は俺よりも立場が下になる。

師匠くらいか？ 俺よりも立場が上なのは？

まあ、あの人は人として尊敬している。俺が立場は上でも頭が上
がらないだろう。

「その俺がお前らに命令してやるよ。戦え。死にたくないなら戦え」
当然だが、俺の物言いに反発して誰かが口を開く。

「ふ、ふざけんな！ お前らで戦えよ！」

俺はショットガンを肩に担ぐ。

「はあ？ 当たり前だろ。戦うよ。だって貴族だからね。知っているか？ 貴族というのはかつて活躍した冒険者たちの末裔だよ」

誰でも知っていることを偉そうに口にする俺を、ヒソヒソと小声
で馬鹿にしてくる。

「あいつ頭でも打ったの？」

「そんなの当たり前じゃない」

「ほら、あいつ馬鹿だから。最近知ったから、みんなに自慢したい
のよ」

苛々する女子たちだ。

「え？ もしかして知っていたの？ 嘘だ。だって、知っていた
ら震えて怯えているなんて真似は恥ずかしくて出来ないよね？ も
しかして、知っているのにここで絶望していたの？ ねえ……恥ず
かしくないの？」

こいつ何を言っているんだという顔を全員がしていた。

見上げてくる関係ない専属使用人や船員たち。

「死ぬような航海の末に大地を見つけてきた。時にはダンジョンに挑んで財宝を得るため、何人も死んだ。常に戦い続けてきた冒険者の末裔が、この程度で腰が引けて動けない？ お前ら、ご先祖様に恥ずかしくないの？」

文句を言ってくる奴もいるが無視をする。

「ああ、ごめん。どいつもこいつも腰抜けばかりだったね。これは、公国の使者が言うとおりだ。お前らに期待しても無意味だな。それにしてもきつとご先祖様たちは悲しむだろうね。いや……笑うかな！」

俺は腹を抱えて笑う仕草をする。

「きつとさ『俺の子孫弱すぎ ワロスwww』ってさ！」

ワロスとは前世のインターネット用語だ。笑うから、段々と変化してワロスになった訳だが、当然ながら目の前の奴らに意味は分からない。

ただ 時に言葉よりも態度や熱い気持ちで語りかける事が大事だ。

俺のあざ笑いたいこの気持ちを……言葉ではなくこの熱い気持ちを届けたい！

「頑張つて貴族になつたのに、自分の子孫は腰抜けで冒険者失格の

屑ばかり。きつと草葉の陰で泣くよりも笑っているね！」

この世界の貴族は冒険者の末裔である事に誇りを持っている……設定だ。それを学園も教えるし、中には立派な先祖を敬愛している奴もいる。

そもそも、冒険者という立場に憧れるのがこの世界の貴族たちだ。

……そこを煽ってやればどうなるか？

「ば、馬鹿にするな！ 俺のご先祖様は、お前なんかよりもっと凄い人だぞ！」

俺は馬鹿にしたように笑う。

「ああ、凄いね。でも、それってお前のご先祖様が凄いんであって、お前には何の価値もないわけだけど、そこをどう思う？ ほら、聞かせてあげなよ。みんなに言ってごらん。そして胸に手を当てて考えてごらん。そんな凄いご先祖様が、今のお前を見てどう思うのか？ ほら、みんなも胸に手を当てて！ 聞こえないか？」

やっていない奴もいるが、多くが胸に手を当てていた。中には船員の姿や、そして専属使用人たちも胸に手を当てていた。

「ほら、ゲラゲラ笑っている声が聞こえるか？ それとも悲しんでいるか？ 呆れて肩をすくめていないか？ お前ら……恥ずかしくないの？ 偉大な冒険者の子孫が、この程度で諦めて投げ出すの？」

言い返せる奴が少なかった。

まあ、言い返してきても笑ってやるが。

「狙うのは敵の旗印。あの王女様をさらって逃げる。戦う者は武器を取れ。今ここで戦わない奴は、海に沈んで先祖に笑われる。生き残ったら一生後悔しろ。……意地を見せる馬鹿野郎はいないのか！」

一人の男子が叫んだ。

「ふざけんな、この糞野郎が！ お前に言われなくても俺は戦っていた！ おら、武器を渡せ！」

すると、他の男子たちも意地を見せる。

「普段からダンジョンで稼いでいる俺たちを舐めるなよ。お前はサボっていたけどな！」

「やってやるよ。こんな所で死ねるかよ！」

「お前よりも活躍してやるからな！」

男子たちが動き出せば、女子たちも中には変わり者がいるらしい。

「……ちよつと、なんで女子は誰も声を上げないのかしら？」

お嬢様という感じの縦ロールの髪型をした女子が、髪を揺らして前に出た。胸の下で腕を組み、堂々とした態度を見せている。

高いヒールに強気な瞳。何というか女王様タイプの先輩だった。

「学園一の愚か者が戦うのに、もしかして何もしいつもりかしら？ 明日から貴方たちが愚か者になりたいようね」

先輩　　女子は、俺を見上げてきた。

「ところで、貴方はどうするの？　これだけ大きな口を叩いて、何もしないなんて言わせないわよ？」

俺はショットガンを両手に持った。

「俺？　乗り込むに決まっているだろうが」

先輩はニヤリと笑った。

「あら、流石は学園一の愚か者さんね。そうになると、鎧が必要になるわね」

俺は言う。

「鎧は全て飛行船の防衛に使う。俺が使うのはエアバイクだ」

「エアバイク？　貴方、死ぬつもり？」

外はモンスターの群れに、公国の飛行船が一杯だ。きっと鎧も沢山出てくる。

鎧と言ってもパワードスーツのようなもので、空を飛ぶ兵器である。

エアバイクでそんな場所に突撃するのは馬鹿なのだ。

「助けないといけない人がいる。ついでに旗印をかつぱらって公国の艦隊を笑ってやるのさ」

「アンジェリカを？ 取り巻きの忠誠心という奴かしら？ 無理をしなくてもこの状況なら誰も責めたりしないわよ」

アンジェパパが怒るかも知れないね。でもね……そういうのは関係ないんだよ。

「忠誠心？ 違うね。一度くらい、お姫様のピンチに駆けつける騎士になりたいと男なら思うだろ？ 俺、お前らは見捨ててもアンジェリカ……アンジェは見捨てられないわ。だって良い女だからね。お前ら女子は少しくらい見習ったらどうかね？」

一人で人質になったとき、俺が男爵位を持っていると言えば良かったのだ。そうすれば、一人で連れて行かれることもなかった。

みんなのために人質になる？ まだ十六歳だぞ。アンジェパパも怖いが、そんな女子を見捨てたら俺が一生後悔する。この腐りきった乙女ゲーの世界で、アンジェと……アンジェは俺の希望である。

先輩が口を三日月に歪め笑っていた。

「いいわ。貴方、凄く良い。アンジェリカのお気に入りでなければ側に置いたのに残念ね。その生意気な態度を調教して私に忠誠を誓わせたら楽しいでしょうに。貴方、いいペットになるわ」

……こいつも駄目な女子だな。ベクトルは違うが、お近づきになりたいとは思えない。

「それはどうも」

そうして俺は声を張り上げる。

「お前ら、公国に喧嘩を売る覚悟は出来たか！」

熱気を帯びた会場が爆発するように 俺への罵声混じりに大声で皆が答えた。

飛行船の格納庫。

そこに足を運ぶと、待っていたのはルクシオンだ。

鎧を着用するためのインナースーツは、バイクに乗るために用意していた。ヘルメットをかぶると、上はベスト、下は厚手のカーゴパンツにブーツという格好になる。

ヘルメット内はエアバイクと連動して、周囲の映像が見えるようになっていた。

『準備は出来ています』

エアバイクに自分が収まる場所を作っており、そこにくつつくと俺を見ってくる。

跨がった俺はハンドルを握ってエンジンを吹かした。

暴れ回るエンジンの振動が格納庫に響き渡ると、ハッチが開く。

船員たちが俺に声をかけてきた。

「本当にやるんですか！」

俺は笑う。

「当たり前だ。あの使者の髭をむしって土産にしてやる」

あいつのご自慢の髭は永久脱毛にしてやる。

「それは欲しいですね！ あ、やっぱりいらないかも」

ノリの良い船員にサムズアップし、俺はそのまま体勢を低くして外に出た。

大空にエアバイクが飛び出し、まるで空を波の上を走るかのようにエアバイクが走る。

背負っていたショットガンを片手に持つと、シュヴェールト目がけてモンスターたちが集まってきた。

「準備は良いか？」

『いつでもどうぞ』

ショットガンを両手で持つて構えると、ルクシオンがエアバイクの操縦を行いつつ。

「雑魚の相手はこれが一番だ」

銃口のすぐ前に魔法陣が発生すると、小さな魔法陣がいくつも更

に発生した。目の前に迫るモンスターたちを次々にロックオンしていく。

『雷属性、散弾式、ライトニング　どうぞ』

「ふつとべ！」

引き金を引くと、銃口からショットシェルが飛び出して魔法陣を突き破った。すると、中の小さな散弾の弾が弾け飛び　そのまま魔法の光を放って黄色や青と言った色に変わって方向を無理矢理変えていく。

モンスターたちが弾丸を避けようとするも、光は追いかけて貫いていく。

まるで花火のように広がった魔法は、範囲攻撃に最適な魔法だった。

難易度が非常に高く、扱える魔法使いも少ない。

一発で数十ものモンスターを倒した俺は、大きな声で笑ってやった。

「見たか！　俺とルクシオンの力を！　二人で力を合わせれば、こんな凄い魔法だって使えるんだよ。最近知ったけどな！」

俺一人なら？　ごめん、無理。発動まで時間もかかるし、動いている敵をロックオンするとか厳しいです。

「まあ、七対三の割合での協力だが」

『どうして自分が七も頑張っているように言っているのですか？ 比率から言えば私が七で、マスターが三の割合ですよ』

「気分が良い所で邪魔しやがって。ほら、次が来るぞ」

『……本当に屑ですね』

ショットガンを構え、また狙いをつけて引き金を引くと目の前のモンスターたちがまた大量に消えて行くのだった。

鎧に乗り込むクリスは、飛び出したりオンの姿を見ていた。

「本当に先陣を切ったのか」

飛行船がリオンを追いかけるように向きを変えて速度を上げていく。

目指すのは一番硬い本部 旗印のいる巨大モンスターの背中だ。

その姿に、クリスは鎧の操縦桿を握りしめた。

「……お前は強いな」

単純な剣の強さなら自分が上でも、今のリオンを見てクリスは自分の敗北だと思った。

魔法、そして度胸……全てが自分よりも上だった。

単騎で突撃など誰もが憧れても中々出来ない。

それをリオンは簡単にやってのけているように見えた。

エアバイクに乗ってそれを行う度胸は、クリスにはなかった。

「私はお前　バルトファルトのようになれるのか？」

首から提げたお守りが揺れていた。

クリスは鎧に乗り込んだ用心棒や、生徒たちを見る。

「私たちの目的は飛行船を守ることだ。絶対に守り切れ！」

仲間が声を揃え、鎧の胸元を閉めると起動した鎧六体が動き出す。外に出たクリスは、リオンではなく飛行船に突撃してきたモンスターを斬る。

その太刀筋はとても綺麗だった。

モンスターたちの中を進み、全て斬り伏せていくと　モンスターたちは煙になって消えて行く。

その姿を見て、甲板に出た生徒たちが歓声を上げている。

クリスは飛行船の側面に沿うように降下して、モンスターの斬り裂いていく。

「バルトファルトとの約束だ。この船は落とさせない！」

公国の飛行船。

船内には警報が鳴り響いていた。

立ち上がったヘルトルーデは、その黒く長い綺麗な髪を揺らした。黒系統のドレスに身を包み、窓に近付くと侍女が行く手を遮る。

「殿下、いけません」

「下がれ。自分の目で確かめる」

騎士に囲まれたアンジエも気になっているようなので、ヘルトルーデは声をかけた。

「アンジエリカも来ると良い。どうやら、お前の学友は名誉ある死を選んだ。最後の瞬間をその目で見せてやろう」

睨み付けるアンジエの顔をヘルトルーデは見ている。

ただ、馬鹿にはいなかった。

アンジエが騎士たちに囲まれながら立ち上がると、そのまま二人を囲むように騎士たちが配置につく。

外に出て様子を見ると。

ヘルトルーデが目を見開く。

「なっ！」

豪華客船が正面を向いていた。しかも、こちらに向かってきている。

ヘルトルーデが魔笛を持ってこさせた。

「魔笛を早く！」

アンジェはその様子をチラリと見てから、正面を向いた。

飛行船の前で戦っている人物は、エアバイクに乗って魔法を放っている。広範囲を攻撃する魔法は、とても高度な魔法だった。

「馬鹿者が。それだけの力があるのなら逃げれば良いのに………本当にお前は馬鹿だな」

リオンの姿にアンジェは目から涙があふれてくる。

侍女が魔笛を持ってくると、ヘルトルーデは口をつけた。

とても不思議な音色が響き渡ると、モンスターたちが一斉に動き出す。

そんな光景を前にしてアンジェは、公国の強気な態度に納得がいった。

「これが公国の奥の手か」

ヘルトルーデが口を離す。

「そうよ。数の差はこれで覆る。王国は沈むの」

そう宣言したのだが、飛行船に突撃したモンスターたちが次々に消えて行く。

乗っていた学生たちが必死に抵抗していた。

シールドを展開し、おまけに魔法を放ってモンスターの数が減っていくのだ。

……公国の使者は馬鹿にしていたが、王国の騎士は強い。

何故か？

結婚して貰うためにダンジョンに挑み、稼いではそれを女子へと貢ぐ。稼ぐために奥へ奥へと進み、卒業する頃には結構な強さを手に入れているからだ。

女子に振り向いて貰うために、本当に血と汗と涙を流して頑張ってきた成果である。

アンジエは戦場を駆けるリオンを見て胸が苦しくなった。

（見捨てれば良かったんだ。お前なら逃げることだって　　）

真っ直ぐに目指すのは自分の所だと……そして、助けに来てくれることを期待するアンジエだった。

必死に抵抗する飛行船を前に、ヘルトルーデが唇を噛んだ。

「……抵抗すればそれだけ辛くなると言うのに」

アンジエが笑う。

「悪いな。王国の貴族は諦めが悪い。お前らの言うとおり、意地を見せに来たぞ。そしてあの場では言わなかったが……前を駆けるのはリオン・フォウ・バルトファルトだ。王国でも指折りの騎士さ！」

「バルトファルト？」

そんな二人の下に使者に出た男がやって来た。

「確かに諦めが悪い。ですが、それもここまでですね」

使者がそう言うと、公国の艦隊が飛行船を囲む配置についた。射線に味方が入らないように八の字に展開している。

モンスターたちに囲まれた飛行船や、リオンに向かって大砲を向けている。

ヘルトルーデが使者を睨む。

「勝手なことを」

「勝つためです。それに、モンスターなどいくらでも手に入りますので」

使者が不気味に笑うと、モンスターたちが押し寄せたりオンと豪

華客船に何百という大砲が放たれた。

モンスターたちを巻き込むその砲撃に、アンジェが叫ぶ。

「リオン！ リビア！」

騎士たちに取り押さえられるアンジェ。飛行船は大きな爆発と黒い煙に包まれるのだった。

友情

飛行船の甲板は激しく揺れていた。

リビアは手すりに掴まり、怪我をした船員に駆け寄り治療を行う。

「大丈夫ですか！」

「だ、大丈夫だから」

力なく笑う船員は、モンスターに腕を噛まれていた。そんなモンスターを槍で倒したのは、学園の男子生徒だ。

男子生徒が叫ぶ。

「小物はこっちに任せろ！ 女子を意地でも守れ！」

女子たちは口々に呪文を唱え、飛行船を守るためにシールドを展開。

「こっちに来ないでよ！」

攻撃魔法を放つ女子の姿もあった。

「あははは！ 吹き飛びなさい！」

甲板の上も戦場だった。

その周りを鎧が飛び回り、人では相手に出来なさそうなモンスターを次々に倒していく。

クリスはまさに獅子奮迅の活躍という勢いだった。

誰もが、やはり強いのだと再認識させられる。

リビアは治療魔法が扱えるので、怪我人の治療をして回っていた。船員の治療を終えると、立ち上がって次の怪我人を探そうとして。

「おい、大砲がこっちを向いているぞ！」

「あいつら囲みやがった！」

「モンスターごと吹き飛ばすつもりか！？」

モンスターたちの後ろから大砲を構える公国の飛行船。側面を向け、並んだ大砲をこちらに向けている。

リビアは呼吸が乱れた。胸の前で手を握ると、手首に下げているリオンから貰ったお守りが淡く光る。

「駄目。このままじゃ 駄目えええ！」

背中を丸め全力で叫ぶと同時に大砲が一斉に火を噴いた。

誰もが目を背ける中、リビアを中心に光があふれる。

黒い煙に包まれる中、聞こえてきたのはルクシオンの声だった。

『驚きました』

「ああ、俺も驚いたよ」

黒い煙が風に流され晴れていくと、俺は後ろに見える豪華客船の無事を確認する。

飛行船を守るように展開されたのは、とても大きな球体の淡い光。魔法陣のような模様が浮かび上がったその光こそ、主人公様のオリヴィアさんの力そのものだ。

大砲から船を守り、そして近付いていたモンスターたちを吹き飛ばしたその威力に感心する。

「キーアイテムもないのにこれだけの事を」

砲撃に対して備えていたルクシオンが言う。

『彼女の研鑽の結果です。学園で随分と頑張っていましたからね。マスターとの出会いで得たメリットですよ。マスターに守られていたことで、オリヴィアは勉学に励む時間が豊富にありましたからね』

「……無駄じゃないならそれでいいさ」

前を向きながら、ショットガンに弾丸を装填する。

ハンドルを握りしめ、シュヴェールトのエンジンを唸らせる。

「おら、行くぞ！」

『最短ルートを選択します。マスター、振り落とされないのでくださいね』

エアバイクが直進すると、モンスターたちが襲いかかってくるが縫うように避けて目的地に向かう。

目の前に見えるのは、大きな鯨のようなモンスターだ。

大きな口を開け、その中にあるいくつもの目が俺を見る。

「気持ち悪っ！」

『なんたる悪趣味。まあ、突っ込みますが』

目から光　ビームのような魔法が放たれるが、それらも全て避けて直進した。

大きな口の中、俺はルクシオンと共に突撃する。

アンジェは揺れるその場所で、手すりに掴まっていた。

室内に連れ戻されると、無理矢理押し込められたその場所にはヘルトルーデもいる。

アンジェが文句を言う。

「乗り心地の悪い飛行船だ。おまけに趣味も悪い」

ヘルトルーデが眉間に皺を寄せていた。

「な、何ですって！ 可愛いじゃない！」

「どこがだ！ お前の目は節穴か？」

とんでもなく大きなモンスターを飛行船にするなどアンジエは考
えつかなかった。

すると、報告を受けた使者の男が笑顔になる。

「どうやら先頭を走っていた男は、食べられてしまったようですよ」

ニヤニヤしながらの台詞にアンジエが涙をこらえ睨む。

それを察した男は止まらない。

「馬鹿な男です。たった一人で突撃してくるのですからね。まあ、
公国の歴史に名前を刻んであげますよ。一人で向かってきて、無駄
死にした馬鹿、とね」

随分と身分の高い男は【ゲラット】と名乗った。

ゲラットはリオンの事を馬鹿にする。

「そもそもあの年齢で騎士！ 王国は人材不足なのですか？ まあ、
そうでしょうね！ 公国とは大違いですよ！」

アンジエは俯く。

「……リオン」

下の方から。床からメキメキと音が聞こえてきた。

そのままその部屋の床を突き破って出てきたのは、エアバイクに乗ったリオンだった。モンスターの体内を突き進み、ここまでやって来たのだ。

「リオン！」

「頭を下げて！」

ショットガンを構えると、そのままアンジエの頭上を通過するように騎士たちへショットガンを放って吹き飛ばしていた。

相手も騎士。魔法で防御をしたのか、ダメージは致命傷ではない。だが、すぐには動けない様子だった。

リオンがエアバイクから降りると、ショットガンでゲラットの顎を横殴りし、ヘルトルーデに銃口を向けた。

「お前も来い。人質にしてやる」

だが、ヘルトルーデは笑っていた。

「まさかここまでするか。侮っていたよ、王国の騎士。名前を聞かせてくれるか？」

だが、リオンはすぐにショットガンを発砲。

ヘルトルーデの後ろにいた侍女を吹き飛ばした。

アンジエは気が付く。

（対人用のゴム弾？）

リオンは冷静だった。

「時間稼ぎは無駄だ。魔笛を渡せ。お前も来い。時間がないからな。抵抗するなら」

アンジエはリオンが魔笛のことを知っていたのを不思議に思うが、ヘルトルーデは観念して魔笛をリオンに投げて寄越した。

だが。

『偽物です。本物は机の下に隠していましたよ』

ルクシオンが、ゲラットの髭をレーザーで焼くように剃りながら言ってくる。『ついでに永久脱毛処理もしませんか』などと呟いていた。

リオンはヘルメットをしているが、アンジエには笑っているように見えた。

「残念だったな、王女様」

ヘルトルーデがリオンを睨むが、アンジエはすぐに本物の魔笛を回収してリオンに渡した。

抵抗の弱いヘルトルーデに対してリオンはその素直さに少し驚く。ヘルトルーデの腕を拘束してエアバイクに乗せた。

アンジエも乗り込むと、船内が大きく傾いていく。

「リオン、まさか？」

「ああ、なんか下のモンスターは消えかかっていたから落ちているね。大丈夫。バルーンが建物には着いていたし、ゆっくり落ちるだけだって」

下にいたモンスターを倒したと言って、リオンはエンジンを吹かすと壁をぶち抜いて外に出るのだった。そして、捕らえたヘルトルーデに銃口を向けて叫んだ。

「おらあああ！ お前らの王女殿下はここだぞおおお！」

王女に銃口を向け、そして人質にして集まってきた鎧たちが手を出せないようにしていた。

公国の騎士が駆る鎧たちは、ヘルトルーデの姿を見て武器を下ろしていた。

『き、汚いぞ、それでも騎士か！』

誰かの声がすると、リオンは大声で言うのだった。

「馬鹿が！ 鏡見て発言しろよ！ おら、退けえ！」

リオンの背中に抱きついていているアンジエは、背中に顔を埋めて笑うのだった。

危機に駆けつけた騎士は、物語のように優雅で気品にあふれてない。しかし、アンジエにはとても嬉しかった。

「お前は本当に……ありがとう、リオン」

「くそっ！ 取り囲みやがった」

豪華客船の甲板にシュヴェールトを着船させた俺は、ヘルトルーデさんとアンジエを降ろした。

ショットガンの弾を確認すると残り僅か。

周囲を見れば、モンスターたちはその場に留まり動かない。しかし、公国の艦艇がこちらを取り囲んでいた。

前後左右だけではない。

上も下も敵の飛行船が控えている。

クリスが俺の近くに来ると、鎧の胸元を開けて顔を出した。

「バルトファルト、これからどうする！」

……考えてなかったです。いや、このまま王国に戻るうかと考えていたのだが、どうにも逃がしてくれそうにない。

周囲を見れば疲労困憊。

学生の身でよく持ち堪えたと言っしかないが、相手はまだ余力があるのだ。

モンスターを戦わせただけで、純粋な戦力自体は減っていない。

「……交渉できれば一番良いけどね」

時計をチラリと見た俺は、それからオリヴィアさんを見た。

疲れ切って座り込んでいた。

アンジエには取り巻きたちが駆け寄り、身動きが取れないようだ。

クリスの鎧もボロボロで、おまけに剣は折れている。

……この状態で戦ったの？ 何なのお前？ ちょっとこいつの事を舐めすぎていた。

「さて、次はどうするか」

そこまで口にしたところで、公国の艦隊向けに拡声器で命令が伝えられていた。

『王女殿下はその身を公国に捧げた！ 各艦、総攻撃を開始せよ！』

ゲラットの声だった。

クリスが苦虫をかみつぶしたような顔になる。

「まだ生きているぞ。自国の王女に死ねというのか！」

ヘルトルーデさんが、小さく笑ってその場に立っていた。

「何も分かっていませんね。公国はこの程度では止まりません。私の代わりはいるのです。私は先遣隊を任されたに過ぎない」

俺は耳を疑う。

「ラスボスじゃなかったのか？」

すると、ヘルトルーデさんが呪文を唱えた。

俺が銃口を向けると、彼女は笑っていた。呪文を唱え終わり
そして、モンスターたちが一斉に動き出す。

「何をした！」

「やはり覚悟が足りませんね。即座に私を撃ち抜くべきでした。：
モンスターたちを支配から解放放ちました。支配されていたモン
スターは、支配していた者を狙ってくる。この船に集まってくるで
しょう」

言うとおりに、モンスターたちが引き寄せられるように集まってくる。

公国の飛行船も動き出し、この船を目指してきた。

アンジェがヘルトルーデさんの胸倉を掴み上げ。

「そこまで　そままでする目的は何だ！」

「言っただでしょう。王国を沈めるためですよ」

オリヴィアさんに視線を向ければ、飛行船を守ったあの魔法は使えそうになかった。これ以上無理をさせたくもない。

エアバイクに跨がり、ルクシオンに話しかけた。

「とにかく時間を稼ぐ、付き合え！」

『ええ、どこまでも』

エアバイクが宙に浮いたところで、俺は集まってきたモンスターに銃口を向けて引き金を引いた。

吹き飛ばしたモンスターたちが煙に変わるが、その煙を突き破って新しいモンスターたちが現れる。

最悪だ。

リオンが飛び立つと、アンジェは手を伸ばす。

クリスも新しい武器を受け取り、飛び立つと周囲の敵を倒してい

く。

「私は。私は！」

右手首にくくりつけた赤いお守りが淡く光ると、アンジエの周囲に炎が発生した。炎は膨れ上がったかと思うと、六つに収束してそれらは槍の形になる。

アンジエはその魔法を知っていた。

「ファイアランス。どうして」

今まで使えなかった魔法の発動に驚き……そして感謝しつつ、リオンに群がる敵に向かって槍を放った。

「私の敵を吹き飛ばせ！」

槍はモンスターたちの群れの中に突き進むと、貫き、燃やし、そして大爆発を起こした。

多くのモンスターを吹き飛ばしたが、やはりそれでも敵の数が多い。

次々に敵の鎧も飛行船から飛び立ち、こちらに向かってくる。

アンジエは焦り、そして同じ魔法を使おうとすると倒れているリビアが見えた。

そんなリビアにモンスターが食らいつこうとしており、慌ててリビアを助けるために魔法を放つ。

炎の弾丸がモンスターを貫いて弾き飛ばし、アンジエはリビアに駆け寄ると抱き上げた。

「何をしている、さっさと立て！」

リビアは荒い呼吸をしていた。

そして、足がふらついている。

「お前、まさか魔力の消耗で」

魔力を消耗しすぎたリビアは、顔色が悪くまともに歩けなかった。しばらくすれば回復するのだが、この場で座っていれば的になる。

アンジエが抱えるようにして船内に逃がそうとすると、リビアが言う。

「私　また役に立てなかった。リオンさんやアンジエの足ばかり引っ張って」

悔しそうに涙を流すリビアに、アンジエは笑う。

「馬鹿！　お前は十分頑張った。それに　お前を助けるのは苦しくない。お前は……お前は私の大事な友達だ！」

アンジエが恥ずかしそうに絞り出した言葉に、リビアは驚きそして顔をくしゃくしゃにして涙を流す。

「アンジエ」

直後、アンジエは目の前に迫る敵の飛行船が見えた。

「突撃する気か」

豪華客船の大きな船体に、公国の軍艦が突撃をかけたのだ。側面にぶつかられた船は大きく傾く。

二人がバランスを崩しそうになると、そこにモンスターが大きな口を開けてやって来た。

アンジエはリビアを押しつけてモンスターの前に出ると、右手を向けて魔法でモンスターを焼く。

炎に包まれたモンスターは消えるが、傾き激しく揺れる甲板の上でアンジエは足を滑らせ投げ出された。

「アンジエ！」

リビアが声をかけると、アンジエは傾いた甲板の手すりに掴まる。

体は船から投げ出され、下は海が見えた。

高度は高く、落ちれば助からない。おまけにモンスターたちがウヨウヨしている。落ちれば食らいついてくるだろう。

アンジエが手すりに掴まっているのを見る生徒たちもいるが、自分のことで精一杯で助けられずにいた。

運悪く、その部分が壊され崩れかかっている。

アンジエが呟く。

「もっと、早くにちゃんと伝えていれば」

浮かんだ顔は家族やリビアに　そしてユリウスの顔も浮かぶが、最後にリオンの顔が浮かんだ。煽るような笑みを浮かべた顔を思い浮かべ、アンジエは笑みを浮かべる。

「リビアと仲良くしろよ、あの馬鹿者が」

限界が来て手を離そうとしたときだ。

決死の覚悟ができたリビアが助けに向かってくる。

アンジエがリビアに怒鳴った。

「来るな！」

「嫌です！」

リビアが即答すると、壊れた足場を飛び越えてアンジエの下に駆けつけた。まだ体力も回復しきらない体で無理をしたリビアは、呼吸を乱しつつアンジエの片腕を掴んで持ち上げる。

アンジエは最後の力を振り絞ってよじ登る。

落ちずには済んだが、アンジエはリビアに怒鳴った。

「お前馬鹿だろ！　お前まで落ちるところだったぞ！」

「だって……だって……」

リビアは顔を上げた。涙を流しながら、

「友達だって言ってくれたじゃないですか!」

アンジェが恥ずかしそうに俯く。

「馬鹿。そんな理由で」

「わ、私は馬鹿でも良いです。アンジェと友達になれるなら」

ただ、もう一度激しく船が揺れると、今度はリビアが船から吹き飛ばされてしまった。アンジェが伸ばした腕は、リビアには届かない。

「あ!」

泣きそうなアンジェの顔を見て、リビアは微笑んでいた。そのま
まりビアが落下していくと、アンジェが泣き出して。

灰色のエアバイクが海面に向かって一直線に突き進む。

「リオン!」

ショットガンを構える。

落下するオリヴィアさんに食らいつこうとするモンスターたちを狙う。オリヴィアさんはそんな俺を見て胸の前で手を組んで祈るような仕草で目を閉じた。

信じ切っているような優しい顔をしており 期待を裏切れないのが腹立たしい。これでは、失敗できないではないか。

引き金を引いて周囲のモンスターたちを吹き飛ばすと、ショットガンをしまう。

ハンドルを手放してルクシオンに操縦を任せた。

「頼むぞ」

『相対速度合わせます。慎重に掴んでください』

オリヴィアさんを抱き留める。

お姫様抱っこのような形になった。

『海面に着水します。衝撃に備えてください』

「本当に忙しいな！」

オリヴィアさんをしっかり抱きしめ、衝撃に備えるとエアバイクは底の部分を海面に打ち付ける。

そのまま前進すると、海面を走り後ろには白い水しぶきが発生した。徐々にエアバイクが高度を上げていく。

オリヴィアさんが泣いていた。

抱きしめつつ頭を軽く叩いて慰める。

「もう大丈夫だ。ちゃんと上まで届けるから安心して良いよ、オリヴィアさん」

すると。

「リビアです！」

自分の名前を愛称で呼んで欲しいと主張してくる。その姿は今までもよりも強い意志を感じ、どこか怒っているようだった。

「あのさあ」

「リビアです！ リオンさん、私は 私はリオンさんに謝りたかった。ごめんなさいって言いたかった。なのに、私を避けて……名前だってオリヴィアさん、って！ 凄く悲しかったんですよ！」

ルクシオンは黙っていた。

高度を徐々に上げるシュヴェールトの操縦を行っているのだが、助けてくれても良いと思う。俺、こういう状況は苦手なのに。

「俺と一緒に駄目だ。もっとちゃんとした男と一緒にいろ」

「嫌です！」

「何でだよ！ 顔の良い奴や、金持ちとか、色々いるだろうが！」

いつもなら戸惑っているところで、開き直って意地を張ってくる。

君の相手は攻略対象の男子たちだ。

ユリウスとジルクはともかく　いや、ブラッドもグレッグも駄目だ。こうなったらクリスを推すか？

もう、この際、誰でもいいや！　この子が幸せになればソレでいい。

「ユリウス殿下とかいるじゃん！」

「アンジエを捨てたので嫌いです！」

「なら、ほら！　ジルクとか！」

「腹黒じゃないですか！」

「ブラッド！」

「ナルシスト！」

「グレッグ！」

「脳筋！」

「クリス！」

「構ってちゃん！」

……と、特徴をよく捉えていたのね。少し面白かった。

「他の人なんて嫌です！　私は　私はリオンさんと一緒にいたいんです！　アンジエと三人で、前みたい楽しく過ごしたいんです」

「！」

「だが、このまま俺といっても、オリヴィアさんのためにならない。」

「お、俺と一緒にいたら駄目なんだよ！　気づけよ、俺のどこが良いの！？」

「私が一緒にいたいんです。リオンさんは、優しくて強くて……そんな事よりも、リビアはリオンさん大好きです！　それが全てです！　私は貴方が好きです！」

俺は俯く。

「……こんなに真正面から好きだと言われたのは、お袋以来だ。」

それをこんな世界で聞くとは思わなかった。

ルクシオンが俺に言う。

『マスター、飛行船に到着します』

俺はショットガンを手に取る。弾を込め、そしてオリヴィア・リビアに照れているのを分からせないように小声で、

「しっかり背中に掴まれ……リ、リビア」

「はい！」

以前愛称を呼んだときは何気ない流れだった。

どうにも思っていなかったのに、どうしてこんなに意識してしま
うんだ。

リビアが笑顔になって俺の後ろに回り込むと抱きついてくる……
どうしよう、ここって普通胸を押し当てられて緊張する場面じゃな
いの？

服が分厚いというか、そのせいで胸の感触が分からないんですけ
ど！

俺の表情を見て察したのか、ルクシオンが割と明るい声で、

『マスターのパイロットスーツは特注品です』

「お前はそういう奴だよな！」

怒鳴った俺はショットガンを構え、上昇するエアバイクの前に見
えたモンスターたちを吹き飛ばした。

飛行船は公国の船が突撃して傾いている。

ただ、公国の船にもモンスターたちが集まって身動きが取れない
ようだ。

ショットガンの弾を撃ち尽くした俺は、シュヴェールトを飛行船
の甲板に無理矢理着船させて周囲を見た。

ルクシオンが何か言っている。

『……シュヴェールト、ご苦労様です。後で必ず整備をしますね』

俺はショットガンをシュヴェールトに置いて、リビアを連れて降りる。

アンジェが駆け寄ってきた。

そしてリビアと抱き合う。

「馬鹿。馬鹿！ 心配させるな」

「アンジェ……ごめんなさい」

……泣きながら抱き合う女子って尊いね。誰だ、女子の友情は儚いとか言った奴は？ こんなにも美しいじゃないか。

混戦の続く戦場。

突撃してきた公国の飛行船のおかげで、砲弾は飛んでこないが実に危うい。

このままでは飛行船が沈む。

幸いにして死者は出ていないが、このままでは時間の問題だ。

「ルクシオン。時間は？」

『予定通りです 今、到着しました』

その言葉を聞いた俺は懐中時計を取り出して時間を確認した。

ピッタリだ。

遠くに姿が見えるのは、パートナーだった。

アンジェがリビアを抱きしめたまま、パートナーの方角を見る。

「まさか、呼んだのか？ この距離で通信が使えるわけが」

そんなアンジェに、俺は笑って見せた。

「近くに待機させていたんだよ。俺、心配性だから。ルクシオン」

『既に射出しました』

言い終わる前に準備は出来ているとルクシオンは言う。

最後まで喋らせて欲しい。

そして、戦場に新たに現れた飛行船に、公国の艦隊は対応するため陣形を崩した。

ゲラットが移った飛行船。

その艦橋で怒鳴るように指示を出していた。

「何をしているのですか！ 早く沈めるのです！」

軍人たちが反対する。

「味方がいるのです！ それに、王女殿下はまだご無事ではありませんか」

ゲラットが失った髭を触ろうとして、既にないことに気が付き手を握りしめた。

自慢の髭だった。

毎日手入れをしてきたというのに、今は綺麗になくなっている。カイゼル髭は、目を覚ますとなくなっていた。

あの騎士だ。あの騎士を何としても討ち取らねば気が済まない。

「どうして突撃などさせたのです！」

ゲラットの言葉に、軍人たちは視線をそらした。

（こいつら、姫様を助けるためにわざと突撃させましたね。砲撃できない理由を作って！ 代わりはいるというのに！）

ゲラットが腹立たしく近くの者を蹴り飛ばすと、意外に硬くて足を痛めた。

「っ！ こ、これもあの男が悪い。私の髭を奪ったあの男が！」

すると、乗組員が叫んだ。

「あ、新たな艦影を確認しました！ 目算で七百メートル級です！」
ゲラットが目を見開く。

「馬鹿な！ 王国の増援が来るには早すぎます」

ただ、双眼鏡で見れば変な飛行船だった。

「何ですか？ 大砲の数が……二門しか見えませんね」

軍人たちも不思議そうにしている。

「あの形も不自然です。それに、可動式の大砲？ たった二門だけ？」

側面に固定して数を用意して面で制圧するような戦い方が主流なのに、その形はあまりにも不自然だった。

ゲラットは言う。顎を寂しそうに撫でながら。

「叩きなさい。あんな品のない飛行船は目障りです。浮遊石を回収すれば問題ありません」

飛行船を浮かせるための浮遊石。

これがあるために飛行船の技術が進歩してきた。浮かぶ石があるため、簡単とは言わないが飛行船が作れてしまう世界だ。

それを回収し、新たな飛行船を建造しよう。

ゲラットはまともな意見を言っていたのだ。

ただ、それがただの飛行船であれば問題なかった。

「さっさと囲みなさい」

すると、ゲラットの乗っていた飛行船に向けて敵艦が砲弾を撃ち込む。

飛行船は大きく揺れ、大事な機関が損傷して航行不能になってしまった。

「な、何が起きて!」

「敵艦からの砲撃です!」

「砲撃? この距離で届くわけが! あうっ!」

そしてパルトナーがまたも砲撃を行うと、次々に公国の飛行船が航行不能になっていくのだった。

パルトナーから射出された何かを見たゲラットは、それが王国の豪華客船に向かうのを見た。

「い、一体何が」

砲撃で落ちてきた天井の一部が頭に直撃し、血を流すゲラットはこれから何がおこるのか想像も出来なかった。

甲板に降り立った大きな箱。

その箱を見る生徒たちは、希望に目を輝かせた。

クリスは複雑そうな表情をしていた。

ボロボロになった鎧で、俺の近くに降りてくると声をかけてくる。

「バルトファルト、やれるのか？」

俺はルクシオンを片手に持って振り返った。

「誰に言っている？　そして喜べ　俺の勝ちだ」

既に勝負は決まったのも同然だった。

ルクシオンは俺の自信について、

『マスター、敵の鎧がこちらに向かってきています。ドローンの展開許可を求めます』

頷くと、パートナーから次々に戦闘用のドローンが射出される。

上半身だけの鎧たちは、手にそれぞれ違う武器を持っていた。

箱が展開されるように開くと、そこから灰色の鎧　アロガンツが出てくる。

胸元を開けて俺が入り込むのを待っていた。

アンジェとリビアが、ヘルトルーデさんを捕まえながら俺の様子を見ている。

捕まえられているヘルトルーデさんは、アロガンツを見て目を細めた。

「……ロストアイテム」

俺はアロガンツに乗りながら、そんなヘルトルーデさんに答える。

「詳しいですね。そうですよ。ロストアイテムです」

「思い出しました。王国に冒険者として名を上げた若い騎士がいると。貴方でしたか」

ルクシオンが『何だか納得がいきません』みたいに言っているが、無視して胸元を閉めると周囲の映像が見える。

集まるモンスター、そして動き出す公国の騎士たち。

アロガンツが起動すると、俺は笑みを浮かべる。

「一方的に殴りやがって。ここからは俺が一方的に殴り続けてやる！」

『マスターも反撃をしましたけどね』

「気分の問題だ！ 誰に喧嘩を売ったのか分からせてやる。公国の馬鹿共に、俺が恐怖というものを叩き込んでやる！」

アロガンツの背中にあるコンテナから、マシンガンを持ったドローンたちが射出されていく。

周囲のモンスターたちを次々に撃破し、俺はアンジエに言うのだ。

「避難しててください」

アンジエもリビアも頷いていた。

「ああ、後はお前に任せる」

「リオンさん、絶対に戻ってきてくださいね」

そして、クリスが俺の横に立った。

『私は手伝わせて貰う』

ボロボロなのにまだ頑張るといふのだろうか？

「勝手にしろ。足を引っ張るなよ」

俺の憎まれ口に対して、クリスは小さく笑っていた。

『善処する!』

……いや、認められても困るというか、もっと“お前に言われたくない!”みたいな反応を期待していたのに……もういいや。

「ルクシオン、大型ライフルと　ブレードを出せ」

『一番、五番コンテナ、解放します』

出てきた大型のライフルを右腕に持たせ、ブレードを左手に握る。アロガンツがゆっくりと飛び上がると、クリスも俺について飛んだ。

空の上に出たアロガンツを狙って、モンスターたちが襲いかかってくる。

『……無駄です』

ドローンたちがアロガンツの周囲に集まると、そのままモンスターたちをマシンガンで吹き飛ばしていく。

それを見たクリスが「これに剣で挑んだ私はどうかしていたかなどと反省していた。

お前ら、もっと早く反省しろよ。

周囲にはパルトナーから出撃したドローンがモンスターや鎧の相手をしており、飛行船を守っていた。

近付いてくる公国の鎧にライフルを向け、引き金を引くと鎧の頭部が吹き飛ぶ。

「さて、公国の皆さんの戦意を折っておこうかな」

『やはりマスターは悪役みたいですな』

ニヤニヤする俺は、アロガンツの操縦桿を握りしめた。

ゲラットは艦橋からその光景を見ていた。

「……化け物か」

公国の飛行船だけではなく、鎧までもが次々に落とされていく。

灰色の鎧は主流である形とはほど遠く、重装甲。

旧式など出してと笑っていたが、味方が次々に落ちていく光景に顔を青くしていた。

近くにいた軍人が声をかけてくる。

「伯爵、もう撤退するべきかと」

ゲラットはそんなことを言う軍人を殴り飛ばした。

魔力で強化した拳に軍人は吹き飛ぶ。

「撤退？ 馬鹿を言いますね。公国の軍隊は、王国の学生に負けて帰ったと笑われるつもりですか！」

軍人は立ち上がり、口から出た血を拭う。

「し、しかし、既に我が軍の被害が」

「姫を奪われ、魔笛を奪われ、拳げ句に子供に負け！ 我々に撤退する道は残っていないのですよ！」

そんな状態で逃げ帰っても、ゲラットたちには未来がない。

責任を取らされる立場にあるゲラットは、何としても目の前の敵を沈めるしかなかった。

爪を嚙んで目を血走らせる。

「王国にこんな新型機があるなどと聞いてはいない。せめて、あれらを沈めて持ち帰らねば私の立場が」

ゲラットが周囲の目を気にせずブツブツと独り言を言っていると、艦橋の騎士たちがやってくる。

特注の黒い軍服を着用した彼らを見て、ゲラットはハッと顔を上げた。

先頭に立つ騎士を見て笑みを浮かべる。

「そうでしたね。我々には貴方がいた。公国最強の英雄殿」

初老の男性はゲラットの顔を忌々しそうに見ている。

「出撃するなと命令しておいてよく言う。姫様が捕らえられたと聞いた。お前を締め上げるのは後にしてやる。俺たちを出撃させる」

軍人たちの瞳に希望の光がとる。

目の前で暴れ回る飛行船も鎧も、この人なら何とかしてくれるという目をしていた。

ゲラットが嬉しそうに何度も頷く。

「ええ、構いませんよ。【バンデル・ヒム・ゼンデン】子爵。貴方に、貴方たちに任せましょう」

騎士たちが艦橋を出て行く。

ゲラットがクツクツと笑っていた。

「これで全て解決ですね」

ただ、殴られた軍人が言うのだ。

「し、しかし、バンデル子爵は出撃させるなど国から命令が」

ゲラットは鼻で笑う。

「本人が勝手に出撃するのです。それに、この状況で最強のカードを切らないなど馬鹿ですか？ 黒騎士ならきつとあの化け物を倒してくれますよ。何しろ、公国最強の騎士ですからね」

公国最強の騎士が、リオンを狙って動き出した。

黒騎士

空の上。

アロガンツに乗る俺は、コックピットで悪態をつく。

「こいつらウゼえ！」

集団で襲ってくる敵の騎士たちは、上下左右と俺を囲んで遠距離からの攻撃を仕掛けてくる。背中を見せれば斬りかかってくる。

そちらを向けば散開して逃げていく。

『随分と訓練されていますね』

弾丸は装甲が弾き、接近戦でも傷はつかない。

ダメージはないのだが、問題は倒すのに時間がかかることだった。

「おまけになんで撤退しない！」

『既に損耗率は二割を超えているのですけどね。敵は撤退しないようです。通信を傍受しましたが、どうやら撤退できない理由があるようですよ』

ルクシオンが傍受した情報に寄れば、撤退を進言する軍人たちが多いらしい。

それを指揮官は拒否していた。

「さっさと逃げろよ！」

逃げてくれないとこっちが困る。

アロガンツを加速させ、空中で敵の鎧をブレードで突き刺す。突き刺したのは中にいる騎士が傷つかない場所だ。

ブレードを引き抜き、敵飛行船の甲板に蹴り飛ばしておく。

「無駄に抵抗しやがって！」

どうして逃げないのか考えつつ周囲を見れば、ルクシオンが状況を報告して来る。

『パルトナー、護衛対象に接近します。救助を開始します』

傾いた豪華客船を守る位置にいたパルトナーは、救助艇を出して人命救助を開始している。

「豪華客船はもう駄目か」

黒い煙が至るところから立ち上り、既に船体が歪んでいた。

「このままこっちが撤退だな。パルトナーに全員を乗せたら離脱しろ。いつまでも付き合っていないでいいから」

『！ マスター、新手が出撃してきました。機体色はブラック。敵、精鋭部隊と思われます』

ブラックと聞いて俺は嫌な思い出が蘇った。

前世　ゲーム中最強の敵は【黒騎士】だった。とにかく強く、黒騎士相手に何度もゲームオーバーにさせられてきた。接近戦はクリスよりも強く、遠距離戦闘ではジルクが相手にもならない公式チートが黒騎士である。

いったいどれだけ苦労させられてきたことが……こいつも戦略モードの難易度を上げた元凶の一つだ。

「黒騎士かよ！」

ルクシオンが警戒を強めていた。

『パルトナーの砲撃を避けています。ドローンも破壊して進んできます。このままでは救助を邪魔されます』

「上等だ。俺が相手をする！」

しかし、今の俺はアロガンツに乗っている。

チート戦艦ルクシオンがいる今、俺に恐れるものは何もない！

黒騎士くらい倒してみせる！

こちらに向かってくる映像を見た。

すると、黒い機体は……あ、あれ？　五機もいるんだけど？

パートナーに移ったリビアは、部屋の中でアンジェとヘルトルーデの三人になっていた。

混乱する船内、馬鹿なことをする……ヘルトルーデを狙う貴族の子弟がいなくても言い切れず、アンジェが見張る形を取っていた。

窓に広がる戦場の光景は、幾分か落ち着いては来たが終わらない。

アンジェが苛立っている。

「何故退かない？ もう勝負はついているはずだ」

ヘルトルーデは捕らえられたのに堂々としていた。

「……言っただけです。公国は止まりません。この程度では退きませんよ」

リビアがリオンの無事を祈る。

「リオンさん、大丈夫でしょうか？」

アンジェは頷く。

「簡単に負けるとは思えない。ただ、何が起きるか分からないのが戦場だ」

窓の向こうに見えたのは、リオンの駆るアロガンツとそれを追いかける黒い鎧たちだった。

その姿を見て、ヘルトルーデが焦る。

「バンデル！ どうして……」

バンデルの名前を聞いてアンジエも焦る。

「黒騎士か？ まさか、ここで出てくるのか？」

リビアは訳が分からなかった。

「あ、あの、黒騎士というのは？」

アンジエが説明する。

「私たちが生まれる前から活躍している公国の騎士だ。王国は奴一人のために飛行船を何十隻と沈められた。百に届くかも知れないな。鎧はその何倍も討ち取られた」

アンジエがチラリとヘルトルーデを見るが、口を閉じて俯いている。その姿は悲しそうに見えた。

アンジエはヘルトルーデの様子を気にしながら続きを話すのだ。

「……最近の名を聞かなくなった。もう年齢も年齢だが、病気でもしているという噂があったな」

リビアはそんな強い騎士がリオンを狙っていると聞いて焦る。

「そんな強い騎士様がいたんですね。リオンさん、勝てるでしょう」

か？」

「流石に予想は」

予想が出来ないというアンジエの言葉にヘルトルーデの声が被さった。

「バンデルは負けません！ 公国最強の騎士が、王国の卑劣な騎士になど絶対に負けません！」

卑劣と言われ、リビアは言い返すのだった。

「リオンさんは卑劣じゃありません！」

「はっ！ 笑わせてくれますね。王国が二十年前に公国にしたことを忘れたのかしら？ それとも、自分たちは間違っていないとでも教えているのかしら？ 学園というのはとても素敵なところみたいね、アンジエリカ」

アンジエリカは少し俯いた。

「アンジエ？」

リビアに対して、アンジエは昔の事を話した。

「私たちが生まれる前 王国は公国に侵攻した。一度や二度ではない。何度も攻め込み、そして公国を追い込んだ。その度に、公国は王国を追い返していたよ」

リビアが驚く。

「そ、そんな。だって、そんな話は聞いたことはありません。王国が攻め込んだって話も聞いたことが」

ヘルトルーデはリビアを睨み付ける。

「平和ボケとはこの事ね。自分たちのしてきたことを教えていないのだから。教えてあげなさいよ、アンジェリカ。貴方たちが公国で何をしてきたのかを」

アンジェリカは口を噤む。

それだけの事をしてきたのだと、リビアも察して悲しい気持ちになるのだった。

目の前に迫る黒騎士　　たちに向かって、ライフルを構えて引き金を引く。

しかし、彼らは一騎、一騎が強者なのか、ライフルの銃口を見た瞬間に射線を回避していた。

「こいつら全員チートかよ！」

空を後ろ向きに飛び、向かってくる黒騎士たちの気迫に圧倒される。

「性能はこれまでの鎧よりも上ですね。公国は王国よりも技術レベルが高いと思われます。飛行船、鎧、そして組織体系などが王

国よりも優れています』

「技術大国か？ 親近感がわくな」

『向こうは敵意がわいていると思いますよ』

ルクシオンの言うとおりだった。

とにかく俺を打ち取ろうとする気迫が凄い。

今も一騎が距離を詰めて斬りかかってくるのを、ブレードで受け止めるが。

『王国の外道が！ その首を渡せえええ！』

機体性能で弾き返し、そしてまたライフルを構えるが すぐに散開する。

ルクシオンが言う。

『恨まれていますね』

「過去の云々とか、そんな感じだ。俺には関係ないのにさ」

王国が昔攻め込んだから恨まれているのだ。

そんな重たい設定を乙女ゲーに持ち込むなと言ってやりたいが、事情を知っている俺からすれば一方的な被害者面はどうかと思う。

……乙女ゲーに重い設定を持ち込みやがって！ もっとふわふわ

軽い感じにしろや！

「ルクシオン、ライフルとブレードは収納しろ」

『武器を交換しますか？』

「素手で勝負する」

両手を空けた俺に対して、黒騎士たちが激怒しているのが分かった。

ただ、気になるのは五機で追いかけてくる中、後ろで控えている鎧だ。いかにも隊長機という感じなのに、先程から一人だけ静かだった。

アロガンツが距離を詰めてきた敵を手で掴む。

ユリウス殿下に行った攻撃　大きな衝撃を与えて粉々にするア
レだ。とにかく、そんな機能がある。

その出力を絞り込めば　。

「もういい加減に下がれよ！」

黒い鎧は衝撃を受けても、たいしたダメージは受けていない。だが、中のパイロットは別である。

黒い鎧からアロガンツが手を離せば、そのまま海に向かって落ちていく。

「これで仲間を助けに」

落ちる仲間を助けに行くため、更に一機がこの場を離れる。

そう思っていたのに、

『マスター、後ろです』

振り返ると、剣を振り下ろしてくる鎧の姿が見えた。展開しているドローンたちの攻撃を無視して、ボロボロになりながら俺に一撃を入れるために向かってくる。

「ちっ！」

左腕でガードすると、相手の剣が折れた。

接触した際に声が聞こえてくる。

『消えろ、王国の化け物』

その直後、ルクシオンがアラートを鳴らしてきた。

『！マスター！』

アロガンツが振り返ると、残り三機が俺に向かって突撃してくる。真正面には、隊長機らしき黒騎士が大剣を向けて突撃してくる光景が見え、そのままモニターが黒く染まると、大剣の剣先が俺に迫ってきた。

クリスは公国の騎士を一人倒し、そして周囲を見回していた。

「数が随分と減った。バルトファルトはどこだ」

味方を探すクリスが見た光景は、アロガンツに大剣を突き刺す黒騎士の姿だった。

目を見開く。

「黒騎士が出て来ただと……」

クリスの家は剣術指南役であり、父は剣聖の称号を持っている。だが、そんな父でも黒騎士相手に勝つことは出来なかった。

公国最強の騎士に貫かれるアロガンツを見て、クリスは歯を食いしばり俯くがすぐに顔を上げた。

既にパートナーに乗員は避難を終えている。

最悪、自分が時間を稼げばみんな生きて帰れる。

「マリエ、すまない。どうやらここまでのようだ」

剣を構えてリオンの下に向かおうとすれば、急に黒騎士たちの様子がおかしくなった。

アロガンツは、剣を関節に突き刺す黒い鎧二機を両手で掴む。

そのまま両手が光り、衝撃が発生すると黒い鎧はまるで中にいる

騎士が気を失ったかのように落ちていく。

そして黒騎士が大剣を抜くと、追いかけるために動き出した。

ボロボロになった黒い鎧が間に入れば、そのまま掴まれまた衝撃波で戦闘不能にされ投げ飛ばされた。

「あいつ、生きていたのか！」

黒騎士に追いつがるリオンを見てクリスは喜ぶ。

「いけ、バルトファルト！ お前なら お前なら黒騎士に！」

貫かれたモニターを手で取り払う。

アロガンツの胸元が開いた形になった。外の風がコックピットに入り込み、開放感が凄い。同時に、生身が外に出た形は不安だった。

間一髪で頭部を右に避けた事で、頭部を守った俺は頬から血を流していた。

コックピットの頭部目がけて向けられた大剣。

これが腹部だったら死んでいた。

「はぁ……はぁ……」

肉眼で見る黒騎士は、大剣を構えていた。

ルクシオンが俺に声をかけてくる。

『性能は三割減です。パイロットへの負担増加。撤退を進言します』

「アロガンツの装甲を貫くとか聞いていないぞ」

『敵の持つ大剣は、どうやらこの世界特有の金属【アダマティアス】のようです。ファンタジー金属ですね』

「ファンタジーの塊みたいなお前がそれを言うのかよ」

特別製の大剣。

それを振り回すのは、ほとんどチートのような黒騎士という存在だ。

「さっさと撤退しろよ」

愚痴をこぼすと、ルクシオンの反論が耳に痛い。

『マスターが相手の命を奪わないようにした結果です。そのため、彼らは退くに退けない状況に追い込まれたと推察します』

本当に耳が痛い。

相手が俺に話しかけてきた。

『若いな。若すぎる。これが王国の騎士か？』

黒騎士の細かな設定なんて知らないが、声は渋かった。年齢は初老か壮年の野太い声だ。

「お前らが攻め込むから戦うしかなかったんだろうが」

『そうだ。俺の時もそうだった。小僧、王国に生まれたことを恨め』
大剣を構える相手を見る。

操縦桿を握りしめ、アロガンツの拳を構えさせると緊張で呼吸が乱れている。

どうして俺がこんなギリギリの戦いをしなければいけないのか？

普段なら絶対に逃げている。

逃げない理由？ 啖呵を切って逃げ出すのがかつこ悪いのと、こいつが逃がしてくれそうにないからだ。

相手の持っている大剣……下手をしなくてもパルトナーの装甲だつて貫く。

こいつだけはここで倒しておかないと危ない。

『……撤退しない理由をお聞きしても？ その気になれば』

「悪いな、俺にも意地がある」

こちらが動き出すと、敵も動き出した。

首に提げたお守りが揺れる。

大剣を問答無用で振り下ろしてくる黒騎士は、俺を最初から殺すつもりようだ。右腕で受け止めると、右腕を随分深く切られた。

アラートが聞こえ、左手を黒騎士に向ければ危険を察知したのか剣を引き抜きつつ俺の真上を飛んで後ろへと回る。

振り返ると大剣を横一文字に振るう黒騎士。

前に踏み込むと右肩に大剣が深々と突き刺さった。

「機体性能の差があるはずなのに！」

文句を言うと、ルクシオンは冷静に返答する。

『操縦者の技量の差ですね』

左腕を黒騎士に叩き込み、そして衝撃波を放とうとすると黒騎士は乱暴に左腕を蹴り飛ばして離れた。

そのまま互いに身を削るような戦いを繰り返し、そして最後に夕日を背に黒騎士が俺と向かい合う。

黒騎士は左腕を失い、そして片足もない。

こちらもボロボロで、俺は外に姿が見えている。

黒騎士も随分と弱っていた。

『……王国の騎士に負けるわけには』

絞り出した声は苦しそうだった。

俺も苦しい。

黒騎士が突撃してくると、夕日が眩しく目を細めてしまった。大剣がキラリと光った気がする。

距離を詰められ、黒騎士がアロガンツに大剣を突き刺す。

俺はそのままアロガンツから飛び降りて、黒騎士の鎧にアンカーを引っかけて飛び移った。黒騎士は俺の行動に驚くも、笑っていた。

『勝負を捨てたか！』

「いや、俺の勝ちだよ」

右手に拳銃を持ち、俺は黒騎士に向ける。すると、俺の方に気を取られた黒騎士は、アロガンツが動いていることに気が付かなかった。

アロガンツが黒騎士を抱きしめ 締め上げていく。

『なっ！ どうして動く！』

黒騎士の頭部を引き剥がし、そして身動きの取れない中のパイロットに銃口を向けた。

「終わりだ。降伏しろ」

その言葉に黒騎士は、

「殺せ。降伏などしてたまるか」

拒否してきた。

だが、気が付けば船上の音が聞こえなくなっている。

浮かんだルクシオンが俺の側にやって来た。

『制圧が完了しました』

動けなくなった敵の艦隊。鎧も全て海の上だ。

黒騎士が悔しがっている。

「姫様をお救いできないとは」

そんな黒騎士の様子を見ながら、俺は敵の飛行船から放たれた光を見た。照明弾のようなソレを見て、俺は眉間に皺を寄せる。

「往生際が悪すぎる」

ゲラットは、黒騎士が負ける姿を見て気が狂ったように笑っていた。

「終わりだ。私はおしまいだ」

生きる伝説のような黒騎士を敗北させてしまった。

公国にとっては酷い痛手である。

学生に負け、出すなといわれていた黒騎士も出して敗北……ゲラツトは持っていた銃のような物を懷から出して窓に近づく。

一発だけ撃てるソレは、魔笛を研究して作られた道具だ。

モンスターを呼び寄せることができる。

魔笛で率いるモンスターたちを集めるための道具だが、その中でも特に強力な効果を發揮するため使用を控えるように命令された物だった。

「こ、こうなればせめて全てを消し去らなければ。将来、私が無能として歴史に名を刻まないためにも」

空に向かって引き金を引くと、照明弾のような光が打ち上げられた。

暗くなり始めている空に輝くその光と　　妙な音。

それに引き寄せられるかのようにモンスターたちが出現してくる。

空から、海から……続々と集まってきた。

「さあ、化け物たち同士で食い合え！」

ゲラゲラ笑うゲラットを慌てて押さえに来る軍人たち。

だが、モンスターたちは次々に集まってきた。

黒騎士を抱えたアロガンツの上に立っていた。

俺は小さく溜息を吐く。

肩の側で浮かんでいるルクシオンが、俺を見ている。

「……これだけ集まると壮観ですね」

身動きの取れない黒騎士が、味方の飛行船を睨んでいた。照明弾を打ち上げた飛行船だ。

「愚か者が。この場の証拠全てを消し去るつもりか。おい、小僧！ 姫様に伝える。魔笛を吹くように言えば良い。この状況、お前らにも不都合だろう」

魔笛で新たに集まったモンスターを操るつもりか？

確かにありだが……そうになると、また敵が増える。

黒騎士が俺の疑念に気付いて話をする。

「今更、お前たちと争うつもりはない。このまま双方、全滅するのが望みか！」

俺はルクシオンに視線を向けた。

「全滅なんて嫌だね。ルクシオン、やれるな？」

『ようやく出番ですか』

そう言うつと、ルクシオンの赤い瞳が光った。

すると、空に浮かぶ雲の一つから次々に細い光が放たれ集まるモンスターたちを貫いて黒い煙に変えていく。

黒騎士が首を動かしその光景を見ていた。

「何が起きている！」

まるで流星群でも見ているような気分だ。

俺は黒騎士を見る。

「切り札を持っているのはお前たちだけじゃないんだよ。その辺を国に帰ったらちゃんと伝えるんだな」

すると、黒騎士が俺を怒鳴りつける。

「俺の首を取らないつもりか！」

爺の首なんているかよ！

「いらないね。ちくしょう、俺のアロガンツをここまでボロボロにしやがって……あ、この大剣は貰っていくから。没収するわ」

この大剣のせいで焦ってしまった。

「小僧！ 貴様の甘さは命取りになる。忘れるな、次は必ず貴様を討ち取ってやるからな！」

憤慨している黒騎士を見つつ、俺は笑みを浮かべた。

「まだ分らないの？ お前ら、増援が来た時点で負けていたんだよ。お前らはその甘さに救われたんだ。俺が優しくて良かったな。感謝しろよ。お前らみんな生きて帰れるのは俺のおかげなの。文句を言う前にありがとう、って言わないとね。あと……殺せ、云々だったけど、大丈夫。俺はお前たちを殺したから」

黒騎士が驚いた顔をしていた。

もう殺したという意味が分かっているらしい。

「ど、どういう事だ」

「爺さんには分からないかな。お前らさあ……学園の生徒。子供に負けたの。大の大人が軍隊を動かして、切り札も用意して、完全敗北だよ。分かる？ お前ら、人としては生き残ったけど、騎士とか軍人としては死んだの。帰ったら再就職先を探そう！」

黒騎士が目を見開く。

「貴様、我らに恥辱にまみれ生きろというのか！」

黒騎士に顔を近づけ頭突きをすると、頭が痛かった。この石頭爺

が。

「負けたのに何を偉そうにしているの？ お前は負けたの。恥辱にまみれて生きる。俺は人としては優しいが、騎士としては外道や卑劣と呼ばれても良いと思っている」

黒騎士が齒を食いしばっていた。

俺は黒騎士を笑ってやる。散々ゲームでも現実でも手間取らせやがって。

お前は少し反省しろ！

黒騎士の顔は憎悪に歪んでいた。前世 黒騎士が出てくると同じように俺の顔も歪んだものである。……悔しさがこみ上げてくる。

「騎士としての情も持ち合わせていないか。この外道が！」

「外道で結構！ ついでにお前のその顔が見たかった！」

散々苦勞させてくれた黒騎士の悔しい顔が見られて満足だ。

「はあ、スッキリした。今日は気分よく眠れるな」

話し込んでいる内にルクシオンがモンスターたちを全て倒し終え、周囲は静寂に包まれる。俺は黒騎士を拘束したままパルトナーへと向かい、そして後片付けを始めるのだった。

一段落した後。

パートナーの格納庫に俺は足を運んだ。時間は随分と遅くなっていた。

ボロボロにされたアロガンツに突き刺さった大剣を眺める。黒い大剣は、これまで多くの血を吸ってきたのだろう。

『マスター、どうしてわざわざ戦われたのですか？ 私の本体ならば、黒騎士を倒すのは容易なことでした』

俺が自分から命を危険にさらしたと思っているのだろう。ルクシオンが責めてくるが、目の前の大剣を見て思うのだ。

圧倒的な力で敵を全て消し去ることも可能だった。ただ、それをやれば俺は大量虐殺者だ。

悩まずにいられるだろうか？ ……無理だな。絶対に後悔するし、きつと悩む。

「全て消し去ったとして、それを見た連中はどう思うかな？」

『……マスターを脅威とするでしょうね』

「この大剣と同じだ。黒騎士みたいに今度は俺が王国に酷使されるか、嫌になって反旗を翻しても、次は王国と戦って余計に血を流す。そういうのは馬鹿だと思わないか？ ……俺、そういう面倒な事は嫌いだね」

甘い？ それがどうした。終わりなく戦うなど人生を損している。

俺は小物であると認めているが、修羅や戦争狂にはなりたくない。

……これが嫌だから、俺は引きこもりたかったのに。

翌日。

公国の浮遊島には、破壊された公国の飛行船が積み上げられていた。

ロボットたちが次々に作業をしてくれるので、大量の浮遊石が手に入る。

……全部俺の物だ。

「鎧も運び出せよ。状態が良い飛行船は持ち帰るぞ」

ルクシオンが俺の側に浮かんでいるが、どうやら肩の近くが気に入りのポジションらしい。

『根こそぎ奪うなんてマスターには人情がありませんね。流石です』

「だろ？ 俺もこんな自分が嫌いじゃない」

近くにいるのは、拘束された使者だった男 ゲラットだ。

随分とボコボコにされているが、やったのは俺ではない。

捕まえたときにはこの状態で気を失っていた。

何でも伯爵らしく、この艦隊でも結構な地位にいた。

「バルトファルト男爵、出来れば浮遊石は返していただけじゃないでしょうか？」

俺はニヤニヤしながらいうのだ。

「えー、どうしようかな？ こっちは豪華客船を襲撃されて破壊されたから、少しでも回収したいんだよね。あーあ、誰かさんたちが襲ってこなければこんな事にならなかったのに」

「そ、それでしたら、公国と王国の間で正式に交渉を ひっ！」

俺はわざとらしく床を乱暴に踏んで音を立てた。

「何で勝った俺が譲歩するの？」

「いや、しかし」

「良いよね？」

「いやあの」

「良いよな？」

「……は、はい」

俺に生殺与奪を握られているゲラットが、悔しさに顔を歪めてい

た。

「いや、俺って優しいわ。だってこれだけでみんな許してやるんだもの。俺の優しさって罪だわ」

ルクシオンは呆れている。

『情け容赦のないマスターって素敵ですね』

「負けた兵士を捕らえて奴隷にしないだけマシじゃない？」

『空賊は子爵家に売り払いましたけどね』

「売ったね。丁度、鉦山が見つかった子爵家がまとめ買いしてくれて助かったよ。そもそもあいつら犯罪者だからね。捕まればどうなるか分かっていたはずだし、後悔なんかしないはずだよ」

『助けを求めていますか？』

「そんなことも言っていたね」

次女が迷惑をかけた子爵さんの家に売り払った。

今後は人のために鉦山で空賊たちも必死に働いてくれるだろう…

…命懸けでね！

鉦山の労働なんて重労働で命懸け。大人でもバタバタ倒れていくような場所である。

そんな場所に公国の兵士を送り込まない俺は、優しさにあふれて

いると思った。

……ただ、内心で少し焦りもある。

これだけ多くの戦力を削りはしたが、公国は戦争を止めるだろうか、と。

「……止めないだろうな」

将来への不安が膨らむも、これだけ頑張ったんだから後は王国で何とかして欲しいと思ってしまっ自分がいた。

目の前には壊れた鎧が多い。

「これも修理に出さないと駄目だな」

「私が修理しても構いませんが、全てを私が行くと私の能力を疑う方も出てきます。ここは鎧を整備する工場に依頼するべきでしょうね。一番良いのは、マスターがそういった工場を持つことです」

「すぐには無理だけど、それもいいな。今はどこかに依頼するか」

「最近は鎧製作のスペシャリストを名乗る詐欺師も多いようです。依頼する場合は気をつけた方が良いでしょうね」

「ああ、そう言えばゲームでもそういう詐欺師がいたな」

ルクシオンが告げてきた。

「マスター、そろそろ時間です」

「そうだな。奪う物は奪ったし、帰るか」

『まるで空賊のような台詞ですね』

浮遊島一つを残し、公国は飛行船とほとんどの鎧を俺に奪われるのだった。

パートナーの船内。

俺は豪華客船の船長やら、色々な話をして疲れて部屋に戻った。

ドアの前にはガードマンのようなロボットがいて、部屋を守っている。「ごくろうさん」といってドアを開けようとすると 俺の邪魔をしてきた。

「おい、なんで俺の部屋なのに俺を通さない」

ロボットが俺の入室を阻止してきた。

何やら頭部の目が光って何か訴えているが、俺は無理矢理部屋の中に入ろうとする。

「良いから通せよ！ 眠いんだよ！」

邪魔をするロボットの言葉を、ルクシオンが俺に伝えてきた。

『マスター、どうやら部屋にお二人が 』

ドアを開けて部屋の中に入ると、俺のベッドでリビアとアンジェが向かい合うように横になっていた。

お互いの手を握って眠っている姿。

布団が掛けられており、どうやら制服も脱がされている。お世話をするロボットが浮かんでおり、二人の制服にアイロンをかけていた。

そうになると、布団の下は下着？

二人とも可愛い寝顔をして、静かに寝息を立てていた。

なんて尊い光景だろう。

……俺はゆっくりとドアを閉めた。

そしてドアを背にして、そのまま座り込む。

「……言えよ！ 覗いちゃったじゃないか！ アンジェパパに殺されちゃうよ！」

膝を抱えて怖がっている俺に、ルクシオンの言葉がかけられたが。

『どうやら部屋で待っている間に眠ってしまったそうです。お疲れだったのでしょう』

……二人とも可愛かった。

俺の精神が大人でなければ、そのまま覗き込んでいたかも知れない。

二人とも、俺が大人で良かったね。

「俺はどこで寝ようかな？」

避難した学生やら船員やらがパートナーに乗り込んでいるため、空いている部屋があるのか考える。

すると、足音が聞こえた。こちらに近付いてくると立ち止まり、そして見上げればクリスが立っていた。

「……どうした？」

「バルトファルト、答えて欲しい。お前が……お前が私と剣術の勝負をしないのは、私ではお前に勝てないからだろうか？」

……何を言っているんだ、こいつ？

剣術に才能が振り切れたようなお前に、俺が勝つ？ 「冗談だろうか？」

「何？ 「冗談？」」

クリスは首を横に振る。

「いや、黒騎士に勝ったお前だ。私たちなど眼中にないのだろう。私ではお前の技量を測ることは出来なかった。自分が恥ずかしい」

勘違いを恥じた方がよいよ。

勝ったのはアロガンツの性能があったからだし。

「それは勘違いで」

しかし、クリスは決意を新たにしたような顔で告げてきた。

「必ず追いつく！ 私はお前に認められるくらいに強くなる。それを、言いたかった お前は私の目標だ」

そう言っただけで歩き去って行くクリスに、誤解を解こうと思ったが面倒なので止めた。

どういつもこいつも改心するのが遅すぎる。

去っていくクリスを見ながら思った。

「……よし、今度はあいつに功績を押しつけるか」

「また悪巧みですか？」

悪巧みとは失礼な。

俺が出世するよりもきつとみんな喜んでくれる。

俺はそう思いつつ、ドアの前で座りながら眠るのだった。

「いや、公国は強敵でしたね」

学園の自室。

ようやく修学旅行から戻ってきた俺は、ベッドに横になりルクシオンと話をしていた。

『よく言いますね』

あの後、色々とり調べを受けた。

しかし、俺は黒騎士の大剣を渡す際に「クリスが頑張ってくれました！」と役人に何度も念を入れて伝えている。

ほとんどの功績を伝えず、みんな頑張った。俺、感動しました！という態度で俺は協力しただけという立場に徹した。

王宮としても、騎士団や軍が来るまで待てとか嫌味を言われたが……。

危機的状況だったので、取りあえず俺に問題はないとされたのだ。

今回頑張った男子や女子には、国から褒美が出るらしい。

勲章的な物が出ると聞いた。

『それにしても、黒騎士の大剣を献上してよろしかったの？』

「万単位の人を屠った大剣とか呪われていそうだから嫌だ。同じ材

質の物はお前が用意できるだろ？」

『解析したので可能です。それにしても、飛行船と鎧まで献上しますか？ 王国と公爵家の両家に無償で献上するとは……』

王宮に媚びを売る。

そして、アンジェパパにはアンジェの寝顔を見た後ろめたさもあって引き渡した。

「別に良いだろ。まだ残っているし。大事な浮遊石は手元にあるからな」

今回は昇進もない。

みんなと一緒に勲章を貰って終わりだ。

『マスターがそれでいいのなら、こちらは構いませんが……』

今回は色々であった。

反省点も見つかった。

そろそろ、本格的に頑張るとしよう。リビアの腕輪を回収して、後は公国との戦いを終わらせればソレで終わりだ。

やっと俺もこの騒がしい日々との付き合いを決めることができた。モブのままでいい。ただ、あの二人の側にはいたい。

さて……そのためには色々と準備が必要になるな。

再戦

さて、過去に貴族は爵位と階位にあった働きを求められるという話をしたが、覚えているだろうか？

俺の階位は現状でも五位下。実質五位上の男爵様だ！……どうしてこうなった？

そしてこれは、それだけの働きを国に期待していると言われていたのと同じだ。

日頃の貢献やらその他諸々に加え、戦争になれば相応の働きまで求められる非常に苦しい立場なのだ。

もし戦争が起きれば、学生でも男爵の俺は出陣要請があると断りにくい。そのため、いくつかの布石を打っておくことにした。……酒場でね！

「リオン、本当に飛行船を手に入れたの？」

「羨ましいな。軍艦だろ？」

「飛行船があるだけで羨ましいよ。俺の家にはないし」

田舎貴族の跡取りたちを集めた酒場で、俺は今回の手柄や色々な儲けから宴会を開いている。同じグループの仲間たちへの付き合いみたいなものだ。

羨望もあるが、そこには妬みや嫉妬といった感情も含まれていた。……想定内だ。

そんな同じグループの男子たちを前にして言うのだ。

「ああ、手に入れて整備をしているよ。けど、数が多くて困っているんだ。俺と親父の家で飛行船を抱えてもまだ余るからね」

それを聞いた男子たちの視線が鋭くなる。

ダニエルがゴクリとつばを飲み込んでいた。

「……お前ら、欲しいか？」

レイモンドがその場で立ち上がった。

将来、家を継ぐ彼らには飛行船とは喉から手が出るほどに欲しい物だ。持っているといないのでは、大きな差が出てくる。しかし、買おうと思えばやはり金もかかる。

維持費だつて馬鹿にならない。

安く古い飛行船を使い回している男爵家がほとんどだ。最新鋭の公国の飛行船なんてこの場にいる奴らは誰も持っていない。

「な、何が望みなんだい？」

全員が価値を知っている。タダで貰えるなんて虫の良い話は、詐欺だと分かっている連中だ。むしろ、タダで寄越せなどと言わないこいつらは好感が持てる。

俺は余裕を見せるために飲み物を口に含み潤すと、全員の顔に視

線を巡らした。

「実は実家に工場を構えることにした。そこで船の整備なんかをするためにね。もしも整備関係を俺の所に“全て”任せてくれるなら……無料で提供しようじゃないか」

男子たちの目がすぐに泳いだ。

「そ、そんな都合のいい話があるのか？」

「もしかして欠陥品か？」

「でも公国の飛行船だろ？ 実際に動いていたなら欠陥品じゃないし」

気になって仕方がない男子たちに、俺は誠実に向き合っただ。

「安心して欲しい。こっちもちゃんと儲けを考えているから。それに、修理やらその他諸々で悪質に荒稼ぎしないことも誓っよ」

物は格安で提供し、維持費で荒稼ぎをする手法は俺も好まない。

それでも疑念が拭えない彼らに、俺は溜息を吐く。

「分かった。一隻につき、鎧も四体までサービスしよう。公国の鎧だ。質は保証するぞ」

レイモンドがフラフラと俺に近付いてくるのを、ダニエルが押しとどめた。

「ま、待て、レイモンド！ 相手はリオンだぞ。下手をしたら骨の髄までしゃぶり尽くそうとする奴だ！」

「はっ！ そうだった！」

友達の酷い評価に俺の繊細な心が悲鳴を上げている。

他の連中も同じような顔をしている。同じグループのみんなにいい話を持って来たのに冷たい限りで泣けてくる。

「残念だな。お前たちが活躍すればうちで立ち上げ予定の工場は宣伝にもなるし、互いに利益のある話だったのに。悪かった。他に相談するよ」

ダニエルが待ったをかける。

「待て！ ほ、本当に無料なのか？ 動かないとか、余計な金がかかるなんて事はないんだな？」

「信じて欲しいね。俺は、嘘は吐かない男だよ」

男子数人が「嘘吐け」なんて言っているので悲しいが、実際に嘘は言っていない。

ちゃんと商売をするつもりだ。

実家に工場を用意し、その持ち主は俺だ。将来的に工場で稼ぎ、王国への貢献を考えていた。出世すると大変なの。稼がないといけないの。

報酬？ 駄目なのだ。毎年貢献を求められるのに、一時的なお金じゃ意味がない。そんな金、十年もしない内に使い切って何も残ら

ない。

俺が持っている浮島はどう考えても準男爵家クラスの稼ぎしか得られない。観光地として栄えても男爵家の稼ぎには届かないのだ。

だから工場を用意し、将来の収入源を増やそうと思っている。

「故障した飛行船なんか売るかよ。今後商売するのに信用がなくなるだろうが。いきなり工場を立ち上げても客がいない。なら、客を獲得するために多少の無理をしよう、って話だ。幸い、俺の所には鹵獲した飛行船があるからな」

飛行船なんて売れるのはそこまで大きな物ではなく、五十メートルから百メートル級などのクラスだ。扱いやすいし、もつと小型の物も人気である。

今にして思うとルクシオンとかパルトナー……でかすぎ。

「飛行船と鎧が今なら実質無料のゼロディア！ メンテナンスは心配するな。うちがしっかり責任を持つから！」

男子たちが次々に手を上げる。

「か、買った！」「お、俺も！」「僕も！」

俺は笑顔で契約書を用意すると、彼らに渡すのだ。

「はい、これを実家に送って記入欄に名前を書いて貰ってね。ちゃんと実家には説明してよ。あ、もしも古い飛行船があるなら買い取るよ」

全員が書類を貰ってウキウキしている姿を見て、俺はニヤリと笑った。

「みんな、これから仲良くしようね」

……実質無料に食いついてくれてありがとう。

諸君、今後とも末永く一緒に頑張ろうじゃないか。大事な飛行船の整備を俺に握られ、簡単に俺を裏切れなくなった友人たちを前に俺は満面の笑みを浮かべた。

王都にある公爵家の屋敷。

そこには、公爵家の跡取りであるアンジェの兄【ギルバート】がいた。

アンジェは学園が休みになっており、兄に呼び出されていた。

「兄上、何か問題でも？」

ギルバートは少し困った顔をしていた。

テーブルの上に置いた書類をアンジェに見せた。

「……これは？ 飛行船の売買に関する契約書でしょうか？」

「そうだ。リオン君が用意して男爵家に配っているらしい」

「リオンが？」

それを聞いてアンジエは悪い予感がした。実家　公爵家は、このリオンの行動に不快感を持ったのではないかと。

「も、申し訳ありません。すぐに止めさせます」

「その必要はない。これ自体は問題ではないのだよ」

問題ではないと言われて安堵した。

だが、ならば何故呼び出したのかとアンジエは気になる。

「では、これがいったい何か？」

「分からないのか？　リオン・フォウ・バルトファルトは、公国と交戦して今後戦争になる。もしくは、大きな戦争が起きると考えているのではないかとね。工場の立ち上げにしても性急すぎる。普通は無料で飛行船を提供するなど馬鹿だと笑うところだが……」

ギルバートは、王国首脳部が今回の事件を軽く考えているとアンジエに聞かせた。

「王宮は学生に倒された公国を甘く見ている。だが、戦った本人は警戒を強めている。……これはどう見るべきだ？」

アンジエに何か聞いていないのかと問うていた。

「わ、私には何も。ただ」

「ただ？」

「ただ 急に忙しく動き回っているのは事実です。アレから、鍛錬に精を出すようになっていきます。今日もダンジョンに入ると言っていました。以前とは雰囲気違います」

本人は「黒騎士が強くて自信をなくしたので頑張る」などと言っていたが、アンジエはそれらのことを考えると。

（公国を警戒しているのか？ 対して王宮はほとんど警戒していない？）

学園の生徒に返り討ちに遭った公国。

王宮はそんな判断を下していた。

黒騎士も負けたと聞いて、名のある騎士も老いたな、と。

ギルバートは指で机をトントンと叩きつつ考えていた。

「モンスターを従えた公国の姫も、魔笛も確かに王国の手元にある。交渉もこれから始まるだろうが……警戒する理由が分からない。何の意味もないとも思えない。まったく、彼は本当に厄介だよ」

アンジエは気になったので聞いてみた。

「ヘルトルーデ殿下はどのような処遇に？」

「処遇、か。甘いと言わざるを得ない。本人を王国にこのまま留学

させるという話になった」

アンジェが目を見開く。

ギルバートも反対の様子だった。

「王宮は我が国の強さを学園で学べば良いと言っていた。被害が少なかったからな。これを機会に、殿下を取り込んで公国を再び傘下に置きたいのだろう」

アンジェが納得できないしていると、ギルバートは話題を変えた。リオンが警戒しているのが分かったので、もう聞くこともないようだ。

「話は変わるが、特待生と随分と仲良くしているらしいな？」

アンジェが俯くと、ギルバートは続ける。

「特待生を嫌えとは言わない。王宮の決定だ。だが、必要以上に仲良くする理由もない」

アンジェがギルバートの前で意志の強い瞳を見せた。

「……わ、私の友達です。兄上には関係ありません」

ギルバートは静かに睨み付けるが、妹が退かないと分かると降参のポーズを見せた。

「好きにしろ」

「よ、よろしいのですか？」

「お前がそこまで言うなら構わない。だが、大事な友達なら自分で守れよ」

「は、はい！」

アンジェが喜ぶと、ギルバートは少し探るように……どうやらこちらを聞きたく、リビアの件はただ話を振るための話題だったようだ。

「それと……リオン君とはどうだ？」

「どうだ、とは？」

「ああ、うん。彼の結婚相手が決まったと聞こえてこないのですね。色々あって出世もしている。下手な相手と結婚されると困ると思っていた」

アンジェはギルバートが、リオンを取り込もうと考えているのを知っている。実際、リオンを味方に出来れば大きな力になる。

それに、制御しやすいという面もあった。

言われる前に公国の最新鋭の飛行船と鎧を渡したのが証拠である。

自分で大量に保有し、個人として戦力増強に走らなかったのも良かった。

辺境の男爵家ですら、飛行船の数を揃えると脅威になる。瞬く間

に戦力を後ろ盾に浮島を制圧していき、大きくなることだつてあるのだ。

周辺を取り込み、そして王国に牙をむく　などということが、今までにも沢山あつた。

それをギルバートたちには、リオンが弁えていると見たのだらう。

（調子に乗るようなら注意するつもりだったが、そうか男爵家に配る程度なら兄上も脅威とは思われないか）

横の繋がりを強化しているようにも見えるが、その程度ならば王宮も公爵家も問題視しないということだろう。

むしろ、王国と公爵家に献上した物の方が数が多い。多少、問題があつたとしても王国も公爵家も「大丈夫かこいつ？」と心配するほどだ。

端から見れば採算度外視で滅私奉公している騎士であり、一部で公爵家の新しい忠犬などと陰口を叩かれていた。

アンジェはリオンの婚活に関する近況をギルバートに報告した。

「最近はずいぶん忙しいので女の影もありません。まあ、なんと言いますか……女子には嫌われてしまして」

ギルバートが額に手を当てる。

「そこが分からない。いったいどうして見向きもされない？　現状

でも男爵で実質五位上の男だ。これから考えても有望株だろうに」

アンジェはギルバートの言い方に疑問を持った。

「兄上、その言い方ではリオンがまだ昇進すると聞こえますが？
流石にこれ以上は厳しいのでは？」

ギルバートはアンジェの顔を見て、伝え忘れていたと思ったのか
少し恥ずかしそうにしていた。

「すまない。お前に伝えていなかったな。実は」

二学期も終わりが近付いた頃。

公国との戦争　　というか、事件で処理された一件の勲章授与式
が冬休みの初日に決まった。学園では勲章を貰える生徒たちが楽し
そうにその日を待っている。

勲章なんてそう簡単に貰える物でもないし、何より箔になる。

浮ついた感じの学園だが、俺は別に気にしない。

暖かい部屋でお茶を楽しんでいた。

新しいティーセットを自分へのご褒美のために買い揃え、そして
師匠に貰った大事な茶葉を味わっている。

お菓子は朝一番に有名店の物を買いに走り、お高めのお菓子も添

えることが出来た。

「はあ、幸せだな」

窓の外は寒空が広がり、窓が白く曇っている。

リビアがお菓子を食べているが、申し訳なさそうに少しずつ食べて
そしてその甘みに頬を緩めている。

有名店のお菓子、侮り難し。というかつますぎてビックリ。正直
舐めていた。

「これおいしいです」

対してアンジェはマナーよく食べてはいるが、食べ慣れているの
か感動もないらしい。

「チョコが好きなのか？　なら、私のお気に入りの店から取り寄せ
よう」

お嬢様！　そのお店、俺も知りたいです！

リビアは苦笑いだ。

「あまり高いのを食べ慣れると困りますから」

「そ、そうか」

俺は小さく手を上げる。

「アンジェ、俺に教えてください。ガチの高級店や人気店は購入まで数ヶ月待ちになるので、公爵家の紹介状が欲しいです」

乙女ゲーの世界だけあって、お菓子関連は揃っているし人気もある。

辛すぎるこの世界で、せめてお菓子だけは甘く優しくあって欲しい。切実な願いだ。

「お前は茶狂いだから駄目だ。下手に金を持っているから、買い占められると私が恨まれることになる」

お茶会が好きな男子も少なからずいて、そういった場合はよく有名店のお菓子を注文するが多い。

……俺のように！

「えー、買い占めないよ。人気商品を女子の前で食べるだけだよ。もしくはダイエット中の女子に配ろうかな！」

ダイエットで甘い物を控えている女子に、有名店の滅多に食べられないお菓子を見せつけるという優越感が俺は欲しい！

ダイエットを諦め、お菓子に手を伸ばした女子を笑ってやりたい。

「……流石に酷いですよ」

呆れるリビアを前に、俺はここ最近の平和な時間を思い返す。

戻ってきてからパートナーも、アロガンツも、そしてシュヴェー

ルトもみんな整備するとルクシオンに没収された。

そのため出かけることも出来ないの、ダニエルとレイモンドを誘ってダンジョンに潜っている。流石に最強の敵を倒した今、俺の敵などいないと思うが……まあ、備えくらいしておくべきだろう。

公国は戦争を止めない可能性もあるが、彼らの切り札はこちらにある。

大丈夫なはずなのに……妙な胸騒ぎもある。どうにも落ち着かないのだ。

アンジエが話題を振ってくる。

「そう言えば、リオン。お前、クリスに黒騎士討伐の手柄を譲っただろ」

俺が視線をそらすと、リビアが俺を見た。

「どうしてですか？ 黒騎士さんを倒したのはリオンさんなのに」

アンジエが呆れつつお茶を飲み干したので、俺はおかわりをそそいで媚びを売る。

「お嬢様、その辺りのことに関しては非常に高度な判断があったと
」

アンジエも頷いていた。

「まあ、確かに悪い手ではなかったよ」

「でしょ！」

別に色々と考えた上での事ではないけれど、褒められたので喜んでおく。

「え、えっと、どうしてですか？」

リビアが分からないという顔をしていた。

アンジェは優しく説明してくれていた。

「簡単なことだ。リオンを敵視していたアークライト家……クリスの実家は、今回の件で黙るしかなかった。自分が倒せなかった黒騎士を倒し、おまけに息子に箔をつけて貰ったのだからな。黒騎士を退かせた功績は大きい。クリスの勘当も近い内に解かれるはずだ」

リビアが俺を見て微笑む。

「リオンさん、やっぱり優しくかったんですね！」

「あ、当たり前だろう」

どもってしまった。いや、嫌われていると思ったが、まさか剣聖がいる家に敵視されているなんて思わなかった。剣聖に命を狙われるとか命がいくつあっても足りないじゃないか！

そう言えば、ミレーヌさんがそんなことを言っていたな。

部屋の中、話を聞いていたルクシオンが俺を見ている。

『良かったですね、マスター』

この良かったですね、というのは俺の功績を押しつけて出世したくないという思惑がばれなくて良かったね、という意味が込められている。

段々とこいつの気持ちが出来てきた。

「どうだ。そんな高度な計算が出来る主人を持って嬉しいだろ？」

『……そこまで調子に乗れるのも一種の才能ですね。普通はもっと謙遜しますよ。後ろめたいことがあるならもっと謙虚になれるべきかと』

「何のことが分からないな。俺は誠実さと優しさが売りの平凡な男なのに」

『誠実と優しさを辞書で調べて差し上げましょうか？ マスターには国語の勉強が必要のようですね』

アンジェとリビアが、浮かんでいるルクシオンを手で触っていた。

「よく喋る一つ目だな」

「駄目ですよ、アンジェ。ルク君にはルクシオンって名前があるんですから」

ルクシオンがリビアを見た。

『ルク君？ それは私の愛称でしょうか？』

俺はルクシオンをニヤニヤ見る。

「良かったな、ルク君。可愛いじゃないか」

ルクシオンが黙ってしまったので、リビアが怒らせたのかと心配そうにしている。俺は大丈夫だと言って、先程の話に戻った。

「まあ、あれだ。 あいつらも悪い奴ではないんだよ。うん、たぶん」

別に目の前から消えて欲しいわけでもない。ちょっと苛々するだけだ。煽るには丁度良い面子でもある。

アンジェは面白くなさそうな顔をしている。

「確かに、このまま消えて貰っても困る面子ではあるな」

リビアは五人の顔を思い浮かべているのか、天井を見上げて。

「そう言えば、皆さんで何かしているらしいですよ」

「何か？」

俺が聞くと、リビアは噂話を思い出すのだった。

「はい。格納庫で五人が集まって色々していると」

五人が集まって一体何をやっているんだ？

マリエは学園にある倉庫に来ていた。

「もう、みんなどうしたのよ」

五人が見せたい物があるというので、プレゼントだろうと思ってウキウキしていた。

（いったいどんな物かしら？　もしかして宝石かしら？　いや、ドレスとか？　最近、みんなも頑張っていたし、きっと私へのプレゼントよね。サプライズって最高！）

そんなマリエの前に用意されたのは、シートに隠れた大きな何かだ。

マリエは首をかしげる。

隣に立っていたエルフの少年　　カイルも首をかしげていた。

「何です、これ？」

グレッグが鼻の下を指でこする。

「まあ、見てのお楽しみだ」

ブラッドは前髪を手でかき上げ。

「マリエには随分と待たせてしまったね」

二人の台詞でマリエの期待も上がっていく。

「二人ともありがとう！」

クリスが照れているのか、眼鏡を外してマリエの笑顔を見ていた。

「わ、私も頑張った」

「うん、クリスもありがとう」

すると、ジルクがわざとらしい咳払いをした。

「マリエさん、殿下と私のことも忘れないくださいね。ほら、殿下」

ユリウスがマリエの前に立つ。

「マリエ……これが俺たちの気持ちだ」

シートを五人が剥がすと、そこにあったのは膝をついたポーズの……鎧があった。

マリエの笑顔が固まった。

（……………え？）

ユリウスたちは鎧を見ている。

「これでバルトファルトに戦いを挑む。俺と、お前を引き裂くあい

つを……俺たちはあいつに勝って前に進む！」

グレッグがサムズアップしていた。

「言っじゃないか、殿下！ いや、ユリウス！」

ブラッドも腰に手を当てて胸を張っている。

「そう。僕たちは彼に勝たないと前に進めない。そのために用意した鎧は、僕たちの決意の表れさ」

マリエは固まっていた。五人が何を言っているのか分からないのだ。

（決意？ 鎧を用意するのにいくらかかると思っているのよ！ しかも、なんか色違いのパーツがゴテゴテしているし……も、もしかして、これって決闘の時に壊れた鎧をつなぎ合わせたの！ え、なんで鎧なの？ 嬉しくないんだけど！）

クリスの目が潤んでいた。鎧を前に感動しているようだ。

「不格好だが、今まで乗ってきたどんな鎧よりも私たちの気持ちが詰まっている」

ジルクが微笑みながら頷く。

「使えるパーツを寄せ集めたのですが、それでもこれは世界にたった一つの鎧です」

マリエがぎこちなく首を動かし、ユリウスの方を見た。

「ユリウス、こ、これいくらだったの？ 修理費とか？」

ユリウスは少し寂しそうな顔をする。

「マリエ、これはそういうお金の問題では」

「ち、違うの！ みんなが無理してお金を借りたんじゃないか心配しているの！」

それを聞いてユリウスが安堵した。

「なんだ、そんな事か。実は報酬がそれなりの金額になったからな」

ブラッドとグレッグは空賊退治の報酬。

クリスは公国との戦争で得た報酬があった。

「そ、そのお金で修理したのね」

マリエは、せっかくの報酬をどうして無駄なことに使うのかと思っただが、まだ大丈夫だと安堵する。

ただ、そんなマリエをジルクの台詞がどん底に突き落とす。

「少々心許なかったので共有財産を使わせていただきました。何でも、有名な鎧の制作者だという方が、格安で修理を受けてくださいましてね」

格安と聞いて安心するマリエだったが、

「金額は共有財産の五十万と、みんなの報酬で何とかまりました。凄腕らしく、鎧の性能を限界まで引き出してくれましてね。素晴らしい方でしたよ。この性能なら、バルトファルト君のアロガンツにも勝てるでしょう」

マリエは立ちくらみがした。カイルが支えてくれたので倒れなかったが、内心では泣き叫びたかった。貴族のお坊ちゃんたちの金銭感覚が狂っているのは知っていたが、この五人は特に酷いと再確認させられる。

（五十万ディアって！ 円で計算すれば五千万も支払ったの？ 共有財産から！？）

共有財産とは言っても、ほとんどマリエが管理していた生活費である。

学園祭で荒稼ぎをし、おまけにダンジョンで必死に稼ぎ……そうしてようやく手に入れた生活費のほぼ全てが、不格好な鎧一つに使われたという事実。

しかも、五十万ディアはちよつとという五人……。

マリエは心の中で泣いていた。

（こんな寄せ集めのガラクタ鎧に五十万！ 頭おかしいわよ！ なんで全部使うのよ！ というか、使う前に相談してよ！ これからどうやって生活するのよ！）

心配して駆け寄ってくる五人に マリエは震えながら言うのだ。

前世で借金取りに追われる生活を思い出し、膝も震えていた。

「ど、どうして前もって相談してくれなかったの？」

ユリウスが笑顔で言う。

「お前を驚かせようと思っていた。すまない、こんなに驚いてくれるとは思わなかったんだ。待っていてくれ、マリエ……俺たちは、バルトファルトを倒して俺とお前を引き裂く障害を取り除いてくるから」

それよりも将来の不安を取り除いて欲しいと思うマリエだった。

その日、俺の部屋に届いたのは決闘の申し込みだった。

「……またかよ」

差出人はユリウス殿下たち五人であり、決闘の日付は終業式の日だった。

翌日は勲章授与を学園で行う予定だ。王都に残るので問題はないが決闘を挑んでくると思わなかった。

「マリエとの関係に口を出すな、か。あいつら、神聖な決闘をなんだと思っているんだ？ 負けた側だって分かっていないのか？」

側にいるルクシオンも冷たい言葉をかけている。

『彼らにとっては神聖なことでは？ 拒否してもよろしいかと』

少し考える。

……そこまでマリエと一緒にいたいのだろうか？

「いや、受ける」

『受けるのですか？』

「そこまで一緒にいたいなら負けてやる。よく考えると、俺が勝ったことで色々と面倒になったと思うんだ。もう好きにさせてやるさ。あの五人の誰かをリビアと、って思ったけどあいつら駄目だ。マリエの方がお似合いだよ」

『……今更気づいたのですか？ 本当に気づくのが遅いですね』

こいつ俺のことを馬鹿にしているの？

「とにかく、もう元には戻らないなら好きにやらせようって思うの。マリエもあいつらに囲まれて幸せならそれでいいじゃない？ 俺、正直もうマリエのことを気にしている余裕がないし」

公国とか、聖女とか、とにかくこっちも忙しいのだ。

あいつに構ってられない。早めに余計な問題を片付けておきたかった。

冬休みには工場の立ち上げとか、他にも仕事で予定が一杯である。

『マリエが今度邪魔をしてこないとも限りませんよ。警戒を緩めすぎでは？』

「あいつだって転生者だろ。なら、リビアが聖女にならないと王国が沈むって分かっているからこれ以上は邪魔をしないって」

『そうなのですか？』

最強の敵も倒して、敵の切り札も手元にある。

警戒はするが、これ以上は何もないと思いたい。

……なのに、どうしてこんなに気持ちは落ち着かないのか。

『アンジェリカが怒るのでは？』

「俺からも謝るよ。もう好きにさせてやろう、って。怒られたらあいつらには負けて貰うわ」

『あの五人の扱いが軽いですね』

「アンジェの気持ち優先だから仕方がないね」

俺は決闘を受けることを伝えるためにユリウス殿下の所に向かうのだった。

終業式が終わったすぐ後。

学園は異様な熱気に包まれていた。

闘技場に集まった生徒や教師たち。

円上の闘技場では、これから行われる決闘を応援するため女子たちが駆けつけている。

「ユリウス殿下たち、あの外道に勝つために五人で頑張ってきたって！」

「夜な夜な鎧の修理のために五人で集まっていたらしいよ」

「よ、夜な夜な」

リビアは周囲の声を聞きながら、アンジエの方を気にかける。

怒り出さないか心配しているのだ。

「アンジエ、その」

しかし、アンジエは堂々としていた。

「ん？ ああ、心配ない。リオンからは事前に話は聞いていたからな。あいつの負けてやる理由も納得した。文句はないよ」

「そ、そうなんですか？」

「私と思うところもある。だが、事実を受け入れられる程度には諦めもついたさ。それに、言い方は悪いが殿下に対しての気持ちは冷めたよ。まったく、余計なことにリオンを巻き込んで迷惑な」

「明日の授与式は大丈夫でしょうか？ リオンさん、怪我しないと

いいんですけど」

ユリウスはアンジエの元婚約者だ。愛していた相手が、他の相手のために決闘を再び起こした。アンジエも諦めているらしい。

周囲の女子たちはヒートアップしている。

男子たちも同じだ。五人が自分たちで鎧を用意した話が男子好みだったらしい。一度はリオンに完敗しながらも、それでも立ち上がる五人の姿にみんな期待していた。

「負けてからまた挑もうなんて凄いよな」

「ああ、きつと今回はやれるさ」

「俺、殿下たちを応援する」

ユリウスたちの話は美談にされ、そして悪役のリオンが空から登場すると会場は一斉にブーイングの嵐に包まれた。

アンジエが笑う。

「歴史に名を残す騎士様は、学園一の嫌われ者か」

「歴史？ 何ですか？」

よく聞こえなかったリビアが聞き返すと、アンジエは笑って首を横に振る。

「何でもない。ほら、私たちくらいリオンを応援してやろっじゃないか」

「はい！」

二人がリオンを応援する。

闘技場。

アロガンツで空から着地して会場入りすると、準備を整えたグレッグが鎧に乗り込む。

そして四人に振り返り確認を取った。

「本当に俺でいいのか？」

そんなグレッグにブラッドは真剣な顔を向けて頷く。

「悔しいが、僕では勝てない。お前の技量に期待している」

友人の言葉にグレッグが笑うと、クリスもグレッグに勝負を託す。

「剣術だけの私でも無理だ。グレッグ、頼んだぞ」

剣にこだわっていたクリスとは思えない発言だった。

ジルクは鎧の緑色の部分に触れる。

「みんなの思いを託します」

ユリウスも頷く。

「一番可能性があるのはお前だ。バルトファルトに勝って来い！」

グレッグが頷く。

「おうよ！」

会場は五人の友情を前に感動の嵐に包まれている。

グレッグは鎧に乗り込むと、みんなの気持ちがこもっているためか鎧がとても暖かいことに気が付く。

「へへ、お前も高ぶっているみたいだな。一緒に戦おうって気持ち
が伝わってくるみたいだ。一緒にやろうぜ、相棒！」

目の前のアロガンツを見て、

「バルトファルト、行くぜ！これが俺たちの力だ！」

アロガンツの中。

「どうやって負けようかな」

五人が、なんだか腐の人たちが喜びそうな展開を繰り広げているのを見ていた。

夜な夜な倉庫で鎧の整備を行っていたらしい。

お金を出し合い、自分たちで出来ることは自分たちで行ったのか目の前の鎧には拙い部分も目立っていた。後から職人を呼んで仕上げて貰ったらしく、形になっているだけではなく性能も向上していた。

俺を倒すためによくやる。

……そんな青春も悪くないだろう。

『清々しい友情ですね。なのに、マスターと来たら契約書で結ばれた友情の輪を広げて……最低ですね』

「見せつけてくれるよね。まあ、アンジエの許可も出たし、負けてこの戦いも終わりにしようか」

審判が決闘の開始を宣言する。

グレッグが向かってきたので距離を取りつつブレードで槍の攻撃をいなししていた。

「右手に槍で、左手にライフルか。なんだ、成長したな」

最初から全力を出そうとする相手に感心しつつ、少しずつアロガンツを下がらせていく。

周囲には俺が押し込まれているように見えるはずだ。

音声を外に出してグレッグに声をかけた。

「随分無理をしたみたいだな」

『お前に勝つためならこれくらいどうってことねー！ バルトファルト、本気でかかってこい！』

「あゝ、熱いね。熱血って奴？」

ケラケラ笑ってやるが、真剣な五人を思つと羨ましくもあつた。

音声を外に漏れないようにした俺は「お前らが羨ましいよ」と呟いてしまう。本気でそんな青春が眩しく見える。

そんな俺の言葉にルクシオンが警告音を発した。

『！ マスター、すぐに相手に脱出するように伝えてください。目の前の鎧は、爆発寸前です』

「え？ 嘘！？」

『嘘ではありません。熱量が異常数値です。内部構造がデタラメです。この状態でよく動いているとしか言い様がありません。性能を引き上げるために無理をしています』

ルクシオンが警戒しており、俺は即座にグレッグに伝えた。

「おい、お前の鎧おかしいぞ！ すぐに降りろ！」

しかし。

『はっ！ 俺を惑わすつもりだな。そうはいくか！ お前の手だと分かって騙されるものかよ。だが、それだけお前を追い詰められた

って事だよな！』

目の前の鎧は随分とよく動いていた。

実際に目を見張る動きもしているのだが、暴走していると聞けば納得だ。

俺は審判に叫ぶ。

「審判！ 中止だ！ こいつの鎧はおかしい！」

ただ、審判の教師が首を横に振った。

『バルトファルト君、見苦しいですよ。彼らの思いを真正面から受け止めてあげなさい』

俺が嘘を吐いていると思われたらしい。

確かに負けようと消極的に戦っていたため、それが追い詰められているように見えたかも知れない。負けるために追い込まれていたのが徒になった。

でも違う。違うんだ！

ルクシオンが呆れていた。俺とルクシオンの声は、外部に漏れていない。

『身から出た錆ですね。日頃の行いが悪いから苦労します。解析終了しました。いつでも爆発させずに破壊できます』

「嘘だろ」

俺に壊せというのか？ あいつらの青春の一部であるあの鎧を？
流石の俺だって心が痛むぞ！

「い、嫌だ。そんな事が出来るか！ だって、あいつらが頑張って
作ったとか……そんな鎧を壊すとか鬼だろ！」

例えるのなら、夏休みに五人で作った人力飛行機……泊まり込み
で作業し、互いに喧嘩しながらも完成させた一夏の思い出があった
としよう。みんなで完成させた思い出の機体は、どんなにボロボロ
で他人には価値がなくても五人の宝物のはずだ。

それを壊せと言われて「やるやる！」なんていう精神構造を俺は
していない。むしろ、ちょっと応援したくなっていたのに。

俺が拒否すると、ルクシオンは淡々と告げて来た。

『では、爆発でグレッグが死ぬところを見るおつもりですか？』

脳筋のグレッグ……死ねとか思ってたないよ！

俺はアロガンツの左手でグレッグを掴んだ。

暴れるグレッグの鎧。

「おい、降りろ！ 頼むから降りてくれよ！」

『まだ言うか！ ままだ。まだ俺は負けていない！』

「いや、本当に危ないんだって！」

『お前の口車にはもう騙されないぞ！ 俺たちにいかさまをしたことは忘れてねーからな！』

パルトナーに乗せたとき、こいつらから船賃代わりに金を巻き上げたのは失敗だった。世間を教えてやるつもりだったから、後で種明かしをしたのもまずかった。

からかってやったのだが、今は酷く後悔している。

こいつら俺を信用していないというか、信用するわけがない。

「少しは成長しろよ！ 詐欺師に騙されやがって！」

鎧の修理を行うと詐欺行為をする職人というか名工を名乗る奴もいる。そのような人間に騙されたのだろう。

これだからボンボンは！ 少しは世間を勉強しろ！

今までは周りの人間が面倒を見てきたので、名工と名乗る人間を疑いもしなかったのだろう。少しは疑えよ！

応援しているユリウスたちが声をかけていた。

『離れる！ あいつの腕は危険だ！』

ジルクも声を張り上げていた。普段は落ち着いているのに珍しい。

『パーツの切り離しです！ すぐに逃げてください！』

そんなジルクのアドバイスをブラッドが否定する。

『無理だ。パージする機能はオミットしている。グレッグ、なんとかしても離れる！』

クリスがグレッグを大声で応援していた。

『グレッグウウウ！ お前の力を見せてやれえ！』

お前はクールキャラだろうが！ もっと落ち着いて応援してやれよ！ でないと。

『へへ、クリスにここまで言われたら頑張らないと駄目だな。行くぜえええ！』

グレッグがやる気を見せて、アロガンツから無理矢理離れようとしていた。暴走する鎧は出力を上げ、アロガンツのパワーでなんとか押さえている状態。

……長くは持たない。

『マスター、タイムリミットが近いですよ』

「……お前ら……最低だああ！ 俺にこんなことをさせやがって！」

俺は俯いて……震える指でトリガーを引いた。

ルクシオンが軽い感じで、

『いんぱくと』

と言うと、左腕の装甲が展開して光を放つ。

衝撃波がグレッグの乗る鎧を襲い、そしてバラバラに弾け飛んだ。操縦者であるグレッグは気を失っているが、無事な状態で地面に落ちる。鎧だけを破壊するアロガンツの攻撃手段があつて本当に良かった。良かったが……。

「……もうヤだ」

『お疲れ様でした。いや、あの五人は強敵でしたね』

……静まりかえる会場。

俺はトリガーを引いたが、観客は俺に引いていた。ドン引きである。

そして遅れて聞こえてくるのは、マリエの叫び声だった。

「イギヤヤアアアアアアアアアア！ 私の五十万があああ！
全財産があああ！」

両手で頭を押さえ、絶叫するマリエの側でカイルが耳を押さえていた。

目の前に立つのはアロガンツ バラバラに吹き飛んだみんなの

鎧を見て、マリエは叫ばずにはいられなかった。

「あゝあ。見事にバラバラですね。流石に修理は不可能じゃないですか？」

真っ白に燃え尽きたマリエが、その場に倒れてピクピクと痙攣していた。

カイルが慌てて駆け寄る。

「ちょっと！ ご主人様！？」

ピクピクと震えるマリエは、うわごとのように呟く。

「こ、これは夢よ。そう、私はみんなに囲まれて、何でもない日でも祝われるの。今日はマリエの笑顔が見られた記念日とか言って、みんなで私にプレゼントをくれるの。間違っても鎧を自慢してこないの。それをあのモブ野郎のリオンに壊されるなんて絶対駄目。壊れたら……売れない……私の五十万ディア……生活費が……借金は嫌……夢、そうこれは夢なの。私はベッドの中にいて、ちょっと怖い夢を見ていただけなの」

カイルが冷静にツツコミを入れている。

「いや、現実ですって。いい加減に妄想の世界から目を覚ましてくださいよ」

鎧と一緒にマリエの財産の全てがリオンに吹き飛ばされてしまった。

マリエは現実を直視できない程の精神的、金銭的なダメージを受ける。

リオンにも心に大きなダメージを与え、両者痛み分けの形となった。

エピソード

自室のベッドの上で体育座りをしていた。

「俺だって壊すつもりはなかったんだ。だけど、ルクシオンが壊さないといけないって言うし、グレッグが目の前で死ぬとか言われたら誰だってトリガーを引いていたよ。引かない奴は人間じゃないよ。なのに、みんな俺を見て“ないわ”って。ダニエルもレイモンドもドン引きするとか酷くない？」

ルクシオンを前にブツブツと文句を言っている俺を見ているのは、今日の勲章授与の式典に参加する両親と次兄……そして、この度めでたく子爵と結ばれなかった次女だ。

次女の猫耳専属奴隷野郎 ミオルは、部屋の外で待機だ。

だってまだ客がいるし。

アンジェが呆れていた。

「昨日からこれだ。男爵、悪いな。礼服に着替えさせるまでは出来たのだが」

申し訳なさそうなり비아もいる。

「リオンさん、昨日の決闘で色んな人に責められちゃって」

俺を責めなかったのは師匠だけだ。俺に「何か理由があったので

しょう」なんて優しい言葉をかけてくれた最強紳士だ。

……涙が止まらない。

「あゝ、泣き出しちゃった。ほら、リオン君、礼服が汚れるからタオルを目に当てて」

何故この場にいるのか分からないクラリス先輩。

理由は、何やらアトリー家が関係しているらしい。理由を話していたが、その時は放心状態で聞き流していた。

親父が俺を見て呆れている。

髭面に似合わない礼服を着ていた。なんだか気合が入りすぎた格好だな。

「お前って奴は……今日くらいしやんとしないか！」

お袋も同じだった。普段着ないようなドレスを着ている。

「そ、そよ。勲章を貰うんですから。今日の主役じゃない」

何を言っているんだ？　そもそも今日の式典は、あの戦いに参加した生徒たちに『頑張ったで章』みたいな勲章を渡すのだ。

学園で行われるので、そんなに気合いを入れなくてもいい。

というか、なんで両親がここにいるのだろう？

不思議そうな顔をしていると、次兄が疲れた顔で溜息を吐いた。

「お前、もしかして話を聞いていなかったのか？」

頷くとアンジェが俺を睨んでくる。かなり怖い。

「ほう……昨日、アレだけ説明してやったというのに、全て聞いていなかったと？」

アンジェが怒っていると、リビアが俺を庇ってくれた。

リビア、俺……君に凄い首飾りあげちゃう。元から君のだけど。

「待ってください。リオンさんだって傷ついているんです。本当は負けてあげるはずだった決闘で、殿下たちに勝ってしまった。それなので……許してあげてください！」

リビアがそう言うのと、アンジェは困った顔をして再び俺に説明してくれるのだった。

「今回、一番の功績はリオンにある」

「え？ クリスでしょ？」

「クリスは確かに黒騎士を退けたが、ヘルトルーデ殿下を捕らえたのはリオンだからな。敵国の新型飛行船と鎧を鹵獲。それらを献上した功績も大きい。学生や船員たちを助けた功績もある。総合的に判断して、お前とクリスは別枠。本物の勲章を授与される流れになった」

リビアは嬉しそうにしている。

「アンジェを助けるために単機駆けをしましたからね！ 公爵家の人たちが、まさに騎士の中の騎士って褒めていましたよ！」

……え、そっち？ それって功績になるの？ え、でもゲームだと倒した敵の数とかそういう評価で……え！？ ちょっと待って！！

クラリス先輩の言葉に耳を疑った。

「アトリー家で前に昇進を推薦していたけど、それもこれを機会に認めることになったのよ。それに、クリス君の実家も推薦してくれたわ。フィールド家、とセバーク家もリオン君のために推薦状を書いてくれたのよ」

……？ 推薦状？ え、なんで？ そいつら、俺を嫌っていた家だよな？

俺が固まっていると、リビアが笑顔で告げてきた。

「凄いですよ、リオンさん！ リオンさん、なんと今日から【四位下】で、【子爵】様ですよ。王都ではリオンさんの噂が広がって、英雄扱いですよ」

……リビアが何を言っているのかよく分からなかった。頭が理解することを拒否していた。

し、子爵様？ 英雄？ おかしい。あり得ない！ あってはならない……！

次女が部屋の隅で小さくなっていた。子爵と聞いて落ち込んだのだろう。きっと結婚できなかった子爵様を思い出しているはずだ。だって、恨み言をこぼしている。

今はそんな次女を見て少し落ち着こう。そうだ、落ち着けばたいていの事は対処可能なはずだ。

「何よ。結婚してあげるって言ったのに、私も親友も拒否して。いや、ちよつとないです」なんて酷いじゃない」

実は次女が熱を上げた子爵家の先輩と俺は知り合いだ。俺が空賊たちを奴隷にして売り払った先が、次女と親友が結婚しても良いと言っていた相手の家だった。

色々と聞いてみたが、次女と親友が盛り上がっていただけで相手手は他にいたらしい。

俺は、次女は気にしなくて良いから、って笑顔で言っておいた。

サービス価格で奴隷を売ったのだが、それは迷惑料代わりだ。本当に酷い姉で申し訳ないと謝罪してきた俺は、きつと出来た弟だろう。

そして次女は親友と仲直りをしたらしい。

子爵に腹を立てて文句を言い合っていたら仲直りをしたようだ。

……女の友情は儚いって言った奴は誰？ もっと強固に結びついたよ！

俺はベッドに倒れ込むように横になった。

「これは夢だ。起きたら俺は学園生活が始まる新学期で、ダニエルやレイモンドと一緒に婚活が大変だと愚痴りあうんだ。お茶の道を極めるために師匠の指導を受けて、新しいティーセットを買うためにダンジョンに挑んで、そして地味だけど優しくておっぱいの大きな女子が困っているところを助けて惚れられるんだ。三年間、無難に過ごしてそのおっぱいと結婚して地元に戻るんだ。温泉に浸かって、和食に舌鼓をうって幸せに暮らすんだ。子爵？ 人違いです」

ダダ漏れになった願望を口にする俺を見た次女が、舌打ちをしていた。

「男って本当に駄目ね。女をなんだと思っているの？ 最低よ」

次兄も酷い。

「お前、最後はおっぱいと結婚しているぞ」

親父も酷い。

「大事なのはお尻だろ？ 母ちゃんみたいな、丸いお尻が 　　ひでぶっ！」

「あんた！」

何か酷いことを言おうとした親父を、お袋が平手打ちしていた。良いぞ、もっとやれ。

クラリス先輩が興味を示す。

「あら、温泉を持っているの？　良いわね」

アンジエがそんな先輩を睨んでいた。

「どういう意味で言っている？」

そんなアンジエに余裕を見せるクラリス先輩は、

「気になるの？　教えてあげない」

ちよつと可愛いと思ったが、アンジエの睨みが半端ないので目をそらした。

それよりも、割と広い部屋なのに人が多くて狭く感じる。できればこのまま式典から逃げ出したいのでみんな帰ってくれないだろうか？

リビアが少し怒りながら俺を起こす。

「リオンさん、式典が始まりますから早く行きましょう！　ほら、起きてください」

アンジエが俺に呆れつつも褒めている。

「まさかこんな手段で出世するとは思わなかった。あの三人に手柄を立てさせ、そして最短で出世するとは……お前は本当に凄いな。敵意を向けていた家に推薦状を書かせるとか聞いたことがない。父上も兄上もリオンの事を褒めていたぞ」

……こんな間違っている！

冬休み初日。

学園では盛大な式典が行われた。

「公国との戦闘で活躍した男爵をはじめ、若い生徒たちの活躍をたたえて勲章を授与したのである。」

男子生徒の多くは騎士として認められ、そして女子の多くは勲章を得たことで僅かばかりではあるが年金が出ることが決まる。

男子に年金は支払われないのが、この世界の厳しさを物語っていた。

そしてリオン・フォウ・バルトファルトは子爵に陞爵。

階位を四位下として、大出世を遂げた。

短期間でこれだけの出世が出来たのは、王国の歴史の中でもリオンだけだった。

この日、リオンは王国の歴史に名を刻むことになる。

冬休み。

俺は実家に帰つてくると、新しい屋敷を見上げていた。

田舎つていいね。まるで都会の出来事が全部嘘のようだ。そう、これが現実だと俺を優しく迎えてくれる優しい場所だ。

「大きな屋敷だね」

照れながら自慢してくる親父は、大変嬉しそうにしていた。

「客も増えたからな。やつぱりビシツとした屋敷で出迎えたいから頑張ったぜ。お前のおかげだ」

大金を持っていたので両親にいくらか仕送りしたのだが、それで屋敷を建て直したらしい。

まあ、以前は屋敷と言うには何というか……うん。趣があったとだけ言っておく。

次兄は自分の部屋があると聞いて複雑な顔をしていた。

「もう少し早くに建てて欲しかったよ。卒業したら戻ってくることも減るだろうし。けど、ありがとう」

次女の方は前から自分の部屋を持っていた。

三女も同じだ。

そのため、注文が多い上にお礼やら感謝の言葉もない。

「ねえ、ミオルの部屋は？」

親父が困っていた。次女が専属使用人の部屋を求めてくると思っ
ていなかったらしい。

「え？ 専属使用人はいないだろ？ 一応、客室はあるから、次か
らはそつちに泊まればいいと思うが」

次女が怒る。

「どうせ部屋がないから、ってミオルは学園に残ったのよ！ 先に
伝えてくれたら連れてくること出来たのに！ というか、ミオル
専用の部屋くらい用意してよ」

「い、いや、サプライズで驚かせようかと」

「もっと気を使ってよ。それより、私の部屋を勝手に触ったの？」

親父が次女に責められていた。

お袋が庇う。

「貴方の部屋は私が片付けたわ。だから安心して」

「嫌よ！ なんで勝手に触るのよ！ 屋敷を建て直すなら連絡して
くれれば良いじゃない！ リオンに送り迎えをさせたのに！」

俺はつばを吐く。

それを次兄が咎めてきた。

「馬鹿。ややこしくなるから放っておけ」

「あいつぶん殴っていい？」

「気持ちは分かるが押さえる。ほら、男子にフラれて気が立っているだけだから」

なんと気分のいい話だろう。結婚してやると上から目線で相手に告白したら「もう相手がいるので結構です。というか誰？」なんて断られた次女。笑わせてくれたから、今回の無礼は目をつむろう。

……しばらくこのネタでからかうか。

次女がプリプリと怒って屋敷に入っていくのを見送り、俺たちは落ち込んでいる親父の肩に手を置いて屋敷を褒めるのだった。

戻ってきて久しぶりに領地の様子も見したが、随分と発展してきている。

これなら、二年後は立派な男爵家になっていることだろう。

グレッグが目を覚めたのは、決闘から一日が過ぎた頃だった。

医務室で目を開けると、ユリウスたちが集まってくる。

「グレッグ！ おい、しっかりしろ！」

ブラッドが声をかけてくると、グレッグは医務室にいて結果を察した。

「……みんな、すまねえ。俺のせいで負けちゃった」

そんなことを言うグレッグに、ジルクが微笑んでいた。

「グレッグ君に任せたんです。それで負けたのなら、みんなの敗北です。彼の強さを見誤っていました」

名工を名乗る男が手がけた鎧でも駄目だった。本当は詐欺師だったが、五人はそのことに気が付いていない。

全員が気落ちしているかと思えば、ユリウスがグレッグに言う。

「落ち込むな。次がある」

「殿下？」

「ユリウスでいい。グレッグ……俺たちはまたバルトファルトに挑む。お前も手を貸して欲しい」

グレッグが上半身を起こして小さく笑った。

「……みんながやる気なのに、俺だけ引き下がれるかよ。何度でも手伝っぜ、ユリウス！」

クリスが眼鏡を外し、涙を拭っていた。

クールキャラに徹していた。

グレッグは周囲を見ながら。

「マリエはいないのか？」

ブラッドが肩をすくめる。

「ああ、色々忙しいみたいだよ。カイルと何か話をしていたね。そう言えば」

ブラッドがマリエに聞かれたことを思い出したのか、グレッグに確認を取る。

「グレッグ、前に空賊退治でバルトファルトが倒した空賊の頭がいただろ？」

「ああ、いたな」

「空賊頭の鎧から、バルトファルトが首飾りを手に入れたのを見たか？ 僕は見ていなかったんだ。怪我で苦しんでいて余裕がなかった。ただ、何かを手に入れたのは聞いたんだ。随分と嬉しそうだったし」

グレッグは思い出す。

あの時、リオンが空賊の鎧から何か取り出していた。

「首飾りか何か分からないが、確かにバルトファルトが何か言っていたな。相手も取られたら困るようだったが……それがどうした？」

ブラッドは首を横に振る。

「いや、マリエに尋ねられてね。倒した空賊の名前を聞いたら、とても真剣な顔をしていたんだ。少し気になっていたのさ」

グレッグは顎に手を当てる。

「首飾りか……そう言えば、前に見せてくれたのは“腕輪”だったな」

クリスも頷く。

「ああ、王都のダンジョンで見つけたらしい。あまり無茶をして欲しくないな」

ユリウスがソレを聞いて同意していた。マリエの身を案じている。

「そうだな」

ジルクは少し考え込んでいた。

ユリウスがそれに気が付く。

「どうした？」

「いえ、マリエさんが最近神殿に通っていたとお聞きしましてね。何をするつもりなのかと思ひまして」

五人が答えの出ない話を終え、今度はマリエに何かプレゼントでもしないかという話になると盛り上がるのだった。

新築である屋敷に乗り込んできたのは、親父の正妻であるゾラだった。

随分と強気な態度で乗り込んできたゾラは、一緒に神殿の偉い神官を連れていた。その人は女性で丸眼鏡をかけたふくよかな女性だ。

ゾラとは親しい様子だった。

「この不届き者！　神殿の宝を返しなさい！」

そして、俺を呼びつけるといきなり泥棒呼ばわりだった。

「はあ？　神殿の宝？」

何を言っているのかと思いながら、畑仕事から戻ってきた俺は靴についた泥を落としていた。

神官はそんな俺の態度を見て「なんて臭いのかしら」とか言っている。きっと、都会育ちの女性なのだろう。

ゾラと親しい段階で性格はお察しだ。

神官が咳払いをする。

「バルトファルト子爵、貴方は以前に空賊を退治しましたね」

屋敷の外には武装した神殿の騎士たちが配置され、親父もお袋も

随分と警戒している。

次女や三女は家から出てこない。

次兄は別の畑に行っており、この場にはいなかった。

「……ああ、討伐したね。それが何か？ 空賊なら奴隷にして売ったけど？」

神官が顔を真っ赤にして怒鳴ってくる。

「その空賊たちは、神殿の宝を持ち出したのです！ あるはずですよ！ 神殿の紋章が刻まれた首飾りが！ それを所持していた空賊も、貴方が奪ったと証言していますよ！」

……口を封じておけば良かったか？

いや、それよりも、だ。

「なんでそれで泥棒呼ばわりなの？ 空賊を倒した奴に、そいつらが持っていたお宝は手に入れる権利があるの。これ、王国の法律だよ」

俺が悪いみたいに言っているが、認められた権利だ。悪いのは俺じゃない。

俺の言い分に対して、神官が激怒する。

「神殿の紋章が刻まれていたならば、寄贈するのが当たり前ですよ！」

何この暴論？

お前の当たり前とか常識は、俺にとっての非常識だから。

追い返そうと思ったが、今の俺は丸腰だった。対して、あちら側は武装した騎士に加え、遠くに飛行船が見える。

ルクシオンが俺に通信を送ってきた。

『マスター、残念ですがここは諦めるべきかと』

どうしてと聞けば、ルクシオンが答える。

『この場を切り抜けるのは簡単です。ただし、社会的にマスターの地位が大変なことになってしまいかと。まるで領地を攻め滅ぼす規模の戦力を持っていますよ』

神殿も戦力を所持しているのだが、随分とかき集めてきたらしい。

騒いでいる神官を無視しつつルクシオンの話を聞いた。

『神殿の勢力と事を構えるのは得策ではありません。オリヴィアを聖女と認定する組織ですよね？』

……宗教って面倒だね。確かに敵対するのは得策じゃない。

首飾りの偽物を用意することも考えたが……。

『レプリカでは見抜かれるかと』

俺は舌打ちしたいのを我慢して、ゾラを睨んだ。勝ち誇った笑みをしているのが腹立つ。

「取りあえず持ってくるからそこにいろよ」

すると、神官が俺に言うのだ。

「子爵は随分と貯め込んでいると聞きます。いつそ、その財を神殿に寄贈しなさい」

上から目線で言ってくる神官にゾラが同調した。

「そうよ。貴方も神殿に逆らえないでしょう」

ただ、ルクシオンが。

『そちらは拒否していただいて結構です。どうやら、財宝の件は組織とは無関係。個人の判断だと推測します』

どうやって二人の計画を調べたのかと思えば、神殿の戦力がどうして集まっているのか調べたらしい。

神殿の騎士たちの話では、極悪非道の騎士が神殿の宝を所持しているためかき集められたということになっていた。公国をボコボコにした俺が怖くて、戦力をかき集めたとか逆に可哀想になってくる。

それよりも……極悪非道？ 誰が極悪だ。

「嫌だね。それに俺、宗派が違っし」

首に提げたお守りを見せてやると、二人とも顔を赤くして何か言っていた。

修学旅行先で購入したお守りだ。別に深い意味もなかったが、煽るために言ってやった。

そのまま俺はルクシオンと合流し、首飾りを持って二人のところへ。ではなく、港にいる神殿の関係者に首飾りを持って行く。

港にいたのは緊張した様子の四十代の騎士だった。

急激に成り上がった俺の噂を聞いているのか、酷く警戒している様子だ。

「貴方が責任者ですか？」

「……はい。この艦隊を率いています。バルトファルト子爵、出来れば手荒なまねはしたくありません。神殿の宝を返していただけますか？」

最初からこう言えればいいのに。

俺は首飾りを見せると、将軍が目を見開いてすぐに鑑定士を呼んだ。鑑定士が首飾りを確認すると、激しく首を縦に振る。

「ま、間違いありません。伝承通りです！」

それを聞いて将軍が震えていた。

「こ、これが失われた宝！」

……大事な物ならちゃんと神殿で保管して欲しい。

俺は將軍に言うのだ。

「それより、屋敷に来た人を連れて帰ってよ。お目当ての宝以外にも財宝を出さないと攻撃するとか言われたから、ちよっと困っているんだけど」

そんなことを言われ、將軍が驚いていた。

「こ、これは失礼しました！ 我々は首飾りを受け取りに来ただけです。すぐに連れて帰りますので」

別に争うつもりはなかったらしい。

ルクシオンって便利だな。余計な争いをせずに済んだ。

それにしても、神殿に宝が渡ったなら早くダンジョンの腕輪を回収した方が良くのだろうか？

將軍は安堵した。

「それにしても噂とは違いますね」

「噂？」

「傍若無人だと聞いていましたので。聖女様が怒るのも無理はない

と思うのですが、噂に聞いていたよりも落ち着いておられますから」

……今、なんて言った？

「ちょっと待ってくれ。聖女様？」

「あ」

將軍が安堵から漏らしてしまった情報に、周囲の関係者たちも顔に手を当てていた。

俺が問い詰める。

「聖女様が見つかったのか？」

もしや、リビアが そう思っていた。だが、將軍の口から出た名前は意外すぎた。あり得ない。あり得ないのだ。

「面識はあると思うのですが……【マリエ・フォウ・ラーファン】様です。首飾りと同様に失われた腕輪を持って王都の神殿に来られました」

その名前を聞いて俺は焦った。

どうしてあいつが腕輪を手にするのか？ 手にしたただけならまだ良いのだ。それがリビアの手に渡れば結果的に問題ない。

ただ……ただ、聖女を名乗るなんてあり得ない。

あいつは転生者だ。

上手く立ち回って五人を籠絡したのは、許せないが理解しよう。
だが、聖女を名乗るなんてあり得ない。

“ゲーム知識を持っている”……ゲームをクリアしていたのなら
絶対にあり得ないのだ。

だって、最後に必要になるのは、聖女の力ではなくリビア自身の
力なのだから。

「マリエが聖女？」

「はい。聖なる治療魔法の使い手にして、その技は既に神官殿たち
よりも抜きん出ていました。杖もマリエ様に反応され」

そこまで口にする將軍に、近くにいた関係者が口を閉じさせた。

「し、失礼しました。それでは、我々はこれを届けに行きますので
神官殿はこちらで人を出して連れ帰ります」

俺は去って行く彼らが見えなくなるまで見ていた。

そして、すぐにルクシオンに連絡を取る。

『どうされました』

「マリエが聖女になりやがった。あのアマ、絶対に許さねえ」

公爵家の領地。

そこにある屋敷の一つに、アンジェとリビアはいた。

アンジェは馬に乗っているリビアを見る。

「ほら、怖がるな」

「高いですよ。これ、思っていたよりも高いです!」

「この程度は高いとは言わない」

冬休み。

リビアを屋敷に招待したアンジェは、屋内で乗馬を教えていた。

「二年生になれば学力以外にもこうした実技のテストが出てくる。今の内になれておけ」

ガクガクと震えているリビアは、学力には問題はないがそれ以外マナーなどに問題を抱えていた。

それをどうにかしたいというので、アンジェがリビアの指導を行っている。

本当はリオンの実家に行こうか迷った二人だが、工場の立ち上げなど忙しいリオンの気を使い遠慮していた。

「ほら、姿勢が崩れているぞ」

怖がるリビアを見つつ乗馬を教えていると、屋外には雪が降り始めていた。

（今年は早いな）

寒いのでリオンの領地に出向いて温泉にでも入るか考えるが、嫁入り前の娘なので流石にまずいと自重した。

（しかし、兄上が取り込みを考えているとなると公爵家の縁者から嫁を出すのだろうか？ そうなると誰だ？）

リオンの結婚相手だが、ここに来て選択肢が広がっている。

男爵だったなら男爵、上は子爵家の娘が結婚相手になる。

しかし、子爵になったのなら下は男爵から上は伯爵までとなるのだ。

辺境伯もありだが……とにかく選択肢が広がった。

流石に公爵家とは格が釣り合わないが、伯爵家の娘なら結婚できる可能性が生まれたのだ。

同時に、これからは多くの女子に言い寄られる立場になる。全校生徒の三分の一という人数がリオンの活躍を見ていた。

誰が黒騎士を退けたのか 戦いを見ていなくても、少し考えれば分かることだ。

（クリスの奴が不満そうにしていたからな。直接目で見た生徒は少

ないだろうが……クリスの態度から察することはできる)

そしてここからが重要だった。

リオンの爵位は子爵。階位は四位下……パルトナーという大型飛行船に、アロガンツという黒騎士を退けた鎧。これらを間近で見た女子たちや、噂を聞いた女子たちはどう思っただろうか？

アンジエは頭が痛くなってくる。

(クラリスは狙っているのか？ アレは時々分からないからな。からかっているだけかも知れないが……父上に聞いてみるか？)

妙に気持ちモヤモヤするアンジエは、首を横に振る。

すると、リビアが泣いてアンジエに助けを求める。

「アンジエ……足がつりそうです」

「お、お前……もしかして運動不足か？」

元タインドア派であるリビアは、学園に来てから実家のように家の手伝いで体を動かす機会も減っている。

そのため体力が逆に落ちていた。

「まいったな。これでは卒業までにダンジョンの攻略は難しいぞ」

「ダンジョンの攻略？ あ、あの、ダンジョンって攻略すると消えるから王都のダンジョンは攻略したら駄目なのでは？」

アンジエがリビアを馬から下ろしつつ説明していた。

「攻略と言っても地下三十階だ。そこまで行けば一人前と判断される。逆を言えば、そこまで辿り着かなければいつまでも半人前だ。まあ、最悪の場合は護衛を雇うことになる。ただ、体力がないと行きも帰りも大変だぞ。ダンジョンの攻略は卒業の条件でもあるからな」

特別な理由がない限り、ダンジョン攻略は必須であった。

リビアがソレを聞いて肩を落とすのだった。

「……が、頑張ります」

震えるリビアを抱きしめ、アンジエがクスクスと笑った。

「震えているじゃないか。それにしても、リビアは暖かいな」

「アンジエ、そんなに強く抱きしめないで」

イチャイチャしている二人を見守るのは、護衛とお守りをするメイドたちだった。

神殿の貴賓室。

マリエはソファアの背もたれに腕をかけ、足を組んでローテーブルの上を見ていた。

「ふふ、ついに手に入れたわよ」

首飾りを手に入れたマリエは、それを手に取り自分の首に提げた。

左手首に輝く腕輪は聖なる腕輪。

首元を飾る首飾りは聖なる首飾り。

そして、近くに立てかけてある聖女の杖。

それらは間違いなくマリエに反応を示している。

「主人公様の居場所を奪ったけど、そもそも私が聖女でも問題ないわよね。だって、私も治療魔法が得意なもの」

マリエの知識というのは確かにゲームから来ている。

「イベントムービーでも、聖女様が祈れば大丈夫だったし 何が起きても私が代わりに対処してあげる。だから、前世で良いことがなかった私に全て譲ってね、オリヴィア」

転生者であるマリエの知識は 主にイベントのムービーや画像。そして、ネットの攻略情報が、中途半端にあるだけだった。

何しろゲームは難しくて途中で投げってしまった。

クリアしたのは前世の“マリエの兄だった男”だ。

「それにしても大変だったわ。腕輪を回収するために冒険者を雇っ

たし、おまけに神殿の人たちを説得するのに苦労したし」

そしてもう一つ。

「あのリオンが倒した空賊……確認したら首飾りを持っていた連中だったのよね。あの男……もしかして何か知っているのかしら？」

そもそもバルトファルトなんて家名をマリエは知らなかった。

ゲームは中盤辺りまでしか進めていなかったのだ。

知らない事もあるだろうと思っていた。

「イベントに出てきていなかったし、本当にモブ？ 待つて、もしかして私みたいに……あり得るわね。そうすると、私の邪魔をしてきたのも……あいつ、絶対に許さない！」

激怒するマリエは、どうやって復讐してやろうか考えるのだった。

「まあ、でも 今は私の方が立場は上よね。同じ転生者で、向こうは成り上がっているみたいだけど今の私は王妃の地位だって狙えるわ。そうよ。ユリウスを王太子に戻して、なんとしても王妃様にならないと！ 夢の都会で豪華な暮らしが私を待っているの！」

リオンとマリエは酷く似ている。

ただし、その目指している場所が違った。

リオンが田舎での平凡な生活を目指しているのに対して、マリエは王都での贅沢な暮らしを望んでいた。

「美形の男を侍らせて、毎日のように贅沢な暮らしをしてやる。前世で苦労したからこれくらい許されるはずよね。主人公はあのモブがお似合い。あれ？ そうなると、このまま放置が良いのかしら？ いえ、駄目ね。私の腹の虫が治まらないわ」

マリエは前世を思い出す。

「前世は本当に辛かったわ。夜のお店で仕事をして、人気も出たのに駄目な男に引っかけた……ああ、私って何て不幸なのかしら」

夜のお店で働いた経験が活きてしまった。

無駄に男子を籠絡する手段を磨いた前世。

マリエが五人を籠絡できたのは、その外見以上に前世の経験が大きかった。

マリエは立ち上がり笑顔になる。

「私、この世界では幸せになってみせる！」

エピソード（後書き）

幕間 ルクシオンレポート その2

実家の自室で眠るリオンを、ルクシオンは見ていた。

建て直した屋敷で個室を与えられたリオンは、ベッドの上で幸せそうに眠っている。

起きているときはマリエへの罵詈雑言を繰り返していたが、この調子では明日の朝にはまた忘れて遊び回るかも知れないと思うルクシオンだった。

『マリエが聖女になるのはあり得ないと言っていたのに……ことごとく予想が外れるマスターを持って私は幸せです』

聞こえるわけでもない皮肉を口にするルクシオンは、二学期について振り返った。

『それにしても色々とありました』

学園の行事が多いため、それに合わせてリオンも大忙しだったと思う。

半分は自分の責任で忙しかったのを、本人は気が付いているか微妙だ。

『体育祭でお節介を焼いてしまったために昇進してしまいましたし』『ジルクの元婚約者を納得させて、昇進するきっかけを作ってしまった』

った。

普通昇進は喜ぶべき事である。

だが、リオンにしてみれば爵位も階位も邪魔だった。

地位が高いということはそれだけ責任もあるということだ。

リオンがわざわざ工場を持ったのも、今後王国へ貢献するために仕方がない部分もある。リオンの持つ領地では、男爵家としての働きを期待されても無理なのだ。

しかし、更に昇進してしまい計画は更に見直しが必要になっていった。

『子爵で四位下、ですか。随分と昇進してしまいましたね』

学園祭では王妃であるミレーヌを口説き、カーラに言われるまま空賊退治を行った。そのおかげで昇進だ。

あの時の昇進……ルクシオンは、ミレーヌの支援があつたと考えている。

『ミレーヌは何を思つて昇進させたのか気になりますね。まあ、調べるように言われていないので分かりませんが』

予想は出来るが、情報を集めようとはしない。だって命令されていないから。

『空賊退治くらいで昇進しないと言っておきながら』

本人としては、貴重なアイテムの回収が目的だった。

ついてきたブラッドやグレッグに功績を押しつければ何とでもな
ると思っていたのだろうが、そのせいで余計に昇進するきっかけを
作っている。

『やることなすことが目指している方向とは違うというか……』

空賊退治の後は修学旅行だ。

そこで襲撃してきた公国に勝ってしまったのもいけない。

仕方がなかったとも言えるが、とにかくうまく収めてしまった。
そのために、王国は公国を侮ってしまっている。

『マスターの頑張りはことごとく裏目に出てしまいますね』

ただ、黒騎士に追い詰められたのがショックだったのか、鍛錬を
再開している。

『良い薬でしたね。まあ、助けられたので見守っていましたが』

黒騎士を退けた功績自体はクリスに押しつけたが、クリスの実家
はそのためにリオンに文句が言えなくなってしまった。

下手に相手へ恩を売ってしまい、それが昇進という形で戻ってき
てしまったのだ。

誰もクリスの功績に文句を言わないのは、両家の間で和解が成立

した条件だと勘違いしているからだ。

剣聖も下手に文句を言えば余計に恥をかくため、黙るしかなかった。

どれだけ憎く思っているても、今のリオンに手出しは出来ないのが現状だった。

そしてルクシオンの興味は他へと移る。

『オリヴィアの件も無事に終わって何よりです。それにしてもルク君ですか……彼女の保護対象のレベルは二段階上げておきましょう』

何故かオリヴィアに対して敵意を持ってないルクシオンだった。

本来、ルクシオンはロストアイテム 旧人類の遺産であり、新人類とされるオリヴィアには敵意を持ってもおかしくない。

それが不思議と敵意を抱けなかった。

『これがマスターの言うオリヴィアの力なのでしょう？ というか、事前に色々と話して欲しかったですね。知っていれば対策も立てられたのに』

リオンは自分の中で自己完結しているところが多く、ルクシオンも後から知った情報が多い。そのためにマリエの件は後手に回った。

『まあ、別に構いません。王国が滅びようとも、マスターとその関係者は救えますので』

いざとなれば逃げれば良い。

ルクシオンもその程度にしか考えていない。

王国の存亡などあまり興味がなかった。

『……ですが不思議ですね』

ルクシオンは二学期を振り返る。

『マスターが突き放したあの五人は精神的にたくましく成長し、逆にオリヴィアとアンジェリカが精神的に脆くなるとは』

特にリビアの精神的な脆さが今回は出てきた。

三人の関係も壊れたが、再び元に戻って安堵するルクシオンだった。

逆にたくましく成長したのはあの五人　主に三人だが、ブラッドとグレッグ、そしてクリスである。

『跡取りという環境から脱したことで、精神的に成長したのでしょうか？　まあ、女性の趣味は相変わらず悪いようですし、詐欺師に騙されていましたけどね』

女性版リオンみたいな女がマリエだとルクシオンは思っていた。

同じ転生者。

そして、自分のために行動するその姿勢。

性格も似ていると判断している。

リオンが突き放した五人の方が人として成長したのは皮肉な話だ。
リビアもアンジェも、リオンと距離が出来てからの方が成長していた。

『マスターは本当に邪魔だった？』

その結論をルクシオンは一旦置いておく。

流石にリオンが可哀想になってくる。

『それにしても、オリヴィアの見た力は凄かったですね。出来ればもっと解析したかったのですが』

修学旅行で見たあのバリアは、ルクシオンでも驚愕する能力を持っていた。

『マスター曰く、最後に必要になるのは聖女の力ではなく、オリヴィア自身の力という事でしたが……マリエはその情報を知らないのでしょうか？ もしくは、知っていてなおどうにか出来ると判断したのでしょうか？』

よくリオンが乙女ゲーの世界だから苦労するとか言っていたが、ルクシオンには異物二人を抱え込んだこの世界の方が苦労しているように思える。

二人がいなければ、何事もなく幸せな世界が待っていたのだろう

か？

そしてルクシオンは二学期を振り返ってまとめる。

『……あの五人を面倒くさいと言っていました、マスターも十分に面倒くさい人間でしたね。人のことは言えないとはこのことですよっ』

リオンは攻略対象の五人並みか、それ以上に気難しかった。

拗ねるし、自分から距離を取るし、おまけに妙な自分ルールを大事にする。

ルクシオンを使つての勝利に制限をつけているのも、前世の価値観に引きずられているからだろう。

『まあ、嬉々として大量虐殺をするよりマシでしょうけどね』

好感が持てるとルクシオンは思っていた。人間らしく駄目なりオンが、ルクシオンにとっては大事なのだ。

ルクシオンはリオンに近付き顔を覗き込む。

『さて、これからどうなるのでしょうかね、マスター』

すると、リオンが寝返りを打ってルクシオンを叩いた。床に叩き付けられたルクシオンは、不気味に瞳を赤く光らせるとゆっくりと浮かび上がる。

リオンは幸せそうな顔をして寝ていた。

ルクシオンはそのままリオンの腹部の上に移動し、自身を落としてぶつける。

「ふぎゃっ！」

そんなリオンの声が聞こえてきたが、本人はまた寝息を立てていた。

プロローグ

愛とはいったい何だ？

物語において、最終的に愛が全てを解決する場合が多々ある。

それは、この乙女ゲーの世界でも同じだ。

最後は主人公と攻略対象の男子の愛が、ホルファート王国を勝利へと導く。

実に素晴らしい。

愛が全てを救う。

愛って最高だな！

……どんな兵器よりも優れた愛は、それ自体がとんでもない兵器なのではないかと考えてしまう俺は捻くれているだろうか？

愛があるから人は……縛られる。

愛だけではない。

人は目には見えない様々なものに縛られ生きている。

強いだけでは、それらを振り切り生きてはいけないのだ。

強いからこそより強く縛り付けられる。

俺のように！

「ふう、ようやく到着ね。酷い空の旅だったわ」

輝くような金髪を手でかき上げたのは、マリエ・フォウ・ラーフ
アン　この度、めでたく神殿から聖女認定をされた聖女様だ。

その隣にいるのは、どうしてお前がここにいるのかと問い詰めた
くなる女子だ。

「マリエ様、お荷物をお持ちします！」

「ありがとう、カーラ」

マリエの荷物を持つカーラ　カーラ・フォウ・ウェインは、リ
ビアに近付き俺たちを騙した普通クラスの女子だ。

今はマリエの取り巻きをやっている。

他にも周囲に女子たちが侍っており、マリエを持ち上げる発言を
していた。

「マリエ様、その衣装もお似合いですわ」

「特別に作らせたと聞きました。流石ですわ、マリエ様」

「マリエ様は何を着てもお似合いですわ」

周囲に視線を巡らせれば、浮島に到着した学園の生徒たちが背伸
びをしていた。

その中にいるのは、緑と赤。

ジルク・ファイア・マーモリア。

グレッグ・フォウ・セバークの二人だった。

「快適な船旅でしたね」

「ロストアイテムの飛行船は凄いやな。俺も欲しいくらいだ」

二人を中心に、男子生徒が集まって話をしていた。

「ここがエルフの島か」

「なんか想像していた通りの場所だな」

「自然豊かというか、密林じゃないか？ 本当にここにダンジョンがあるのかな？」

……さて、この状況を整理しよう。

今、俺たちはエルフが住む浮島へとやって来ていた。

移動手段は俺が持つ飛行船パートナーだ。

どうしてこうなったのか？

それは俺が聞きたい。

俺だって、この状況が全く理解できていないのだ。

「……どうして俺がこんなことをしないとイケないんだ」

文句を言う俺の側には、相棒であるルクシオンが浮かんでいた。

周囲を警戒しながら、俺に答えてくれる。

『それがマスターの仕事だからです』

「何で学生の俺が仕事をするの！ 嫌だよ。帰って新しいティーセ
ットでお茶を楽しみたいのに！」

現実逃避のために購入したティーセット。

俺、リオン・フォウ・バルトファルトは、学生の身分でありなが
ら騎士 おまけに、子爵様だ。

宮廷での階位は四位下と、とんでもなく高い地位を得てしまった。

もう笑っしかない。でも、本音では……泣きたい。

出世して嬉しくないのか？ などと聞いてくる奴らもいるが、世
の中は野心あふれる上昇志向の持ち主ばかりではないのだ。

そもそも、高い地位にいるということは、それだけの責任を背負
うという意味だ。

おまけにそれだけの働きも期待されている。

責任とか期待とか、とにかく今の地位は俺に荷が勝ちすぎている。

グレッグが俺にまるで友達のように話しかけてくる。俺、お前と仲良かったか？

普段の制服姿ではなく、動きやすさを重視した軽装備の格好だ。

「親衛隊長、これからどうする？　すぐにカイルの故郷に向かうのか？」

凄く良い笑顔で俺に話しかけてくるグレッグに、俺は凄く微妙な顔を向けていた。

「何だよ？　そんなに嫌なのか？」

不思議そうにしているグレッグに、俺は溜息を吐くのだった。

「……とりあえず、カイルと一緒に代表者が村に向かう。お前もついてこい」

「了解だ、親衛隊長。あ、隊長の方がいいか？」

実に楽しそうなグレッグは、俺の指示を受けてこの場から離れていく。

そう、今の俺は親衛隊長だ。

誰を守る親衛隊長だと思う？

……マリエだよ。

視線を向けると、マリエが周囲のご機嫌取りに気分良く笑ってい

た。

高笑いをしている姿に小物感が滲み出ている。

「おほほほ！ エルフの里のダンジョン攻略で沢山稼いでみせるわ！」

俺が額に青筋を浮かべていると、やって来たのはアンジエだ。

「まったく、実にのんきな奴じゃないか」

マリエを見る目はどこまでも冷たく、一歩間違えば激怒して武器を手に取りそうな雰囲気を出している。

そんなアンジエを心配そうに見ているのは、リビアだった。

「アンジエ、落ち着きましょう。ほら、深呼吸ですよ。深呼吸！ 空気がおいしいですよ」

確かに自然豊かで空気はおいしい。

冬だというのにまるで春のような暖かさで、木々は青い葉をつけている。

リビアに視線を戻したアンジエは、この島の暖かさに感謝していた。

「そうだな。それにしても、寒くないのはいいな。冬場の冒険は辛いと父も兄も言っていたから、私としても助かる」

……そう。俺たちはこの島に、冒険に来ていた。

集団の中、一人だけ雰囲気が違う女性がこちらに近付いてくる。

彼女の名前はヘルトルーデ・セラ・ファンオース。

ファンオース公国の王女様だ。

公王家の姫なので王女様。公女じゃないのかという質問には、そういう世界だからとしか言いようがない。

美しく長い黒髪を持つ美女だが、胸は非常に残念だった。

アンジェとリビアを見た後に彼女を見ると、胸が締め付けられるような痛みを覚える。

胸に広がる山も谷もない平野に悲しみを覚えた。

「王国の騎士は品がありませんね。いったいどこを見ているのかしら？ 欲情した視線を向けるなんて な、何よ。なんで悲しそうに首を横に振るのよ！」

欲情できたら良かったのだが、あまりの悲しみに俺は首を横に振ってしまった。

「ごめんね。俺が悪かったよ。それで、何か用？」

ヘルトルーデ王女殿下 まあ、色々とあつて留学生として学園にやってきた彼女は、とても微妙な立場にあった。

数ヶ月前に起きた公国の宣戦布告は、俺がぶち壊してしまったために彼女は王国で留学生として受け入れられてしまったのだ。

彼女としても屈辱だろうが、王国の樂觀視には呆れるしかない。

もつと危機感を持てと思うが……。

危機感を持ってない理由が、宣戦布告したと同時に公国軍がほぼ全滅。

学生に敗れ、おまけに公国最強と言われた黒騎士まで敗れたのだ。

……全て俺がやった。

俺がやってしまったために、王国も公国を舐めてしまったのだ。

あまりいい状況ではないのは確かだろう。

「何も知らされずに連れてこられた私に、誰か説明してもいいと思うのだけれど？ いったい、この島に何があるのかしら？」

「ついてきたのはあんただろうに」

俺たちが出発すると聞くと、自分も参加したいと名乗り出たのだ。それを、王宮や学園が認めてしまった。待遇が緩いというか、なんかもう王女様なのに王国に相手にもされていない気がする。

さて、この島についてだが……。

マリエの専属使用人であるカイルという美少年エルフがいる。

そのカイルの故郷に俺たちは来ていた。

全ては　マリエの借金が理由だ。

思い出しても腹立たしいあの日の出来事。

俺は目元を拭う。

「何で泣くのよ！」

ヘルトルーデさんが怒るも、アンジェとリビアが俺を慰めてくれる。

「あまり責めるな。リオンだって好きで親衛隊を率いているわけじゃない」

「リオンさん泣かないでください。大丈夫。大丈夫ですからね」

俺は嗚咽おえっを漏らしつつ頷いた。

「うん。俺、頑張りたくないけど頑張るよ」

微妙な表情をして俺たちを見るヘルトルーデさん。

そう、全てはあの日が原因だった。

三学期が始まりしばらくした頃だ。

学園内の掲示板に張り出された掲示物の前に人が集まっていた。

リビアと廊下を歩いていた俺は、そんな人だかりの隙間から覗き込む。

「留学希望者募集中？　へえ、外国への留学生を募集しているのか。この学園でもこういうのがあるんだな」

「留学先はどこ国ですか？」

「えーと、アルゼル共和国？　他にも色々あるみたいだけど」

留学など行っていたのかと感心していると、人だかりの中から友人が出てきた。

眼鏡をかけたインテリ風の男子はレイモンドだ。

どうやら俺たちの話を聞いていたらしい。

「みんなが集まっている理由は留学の話じゃないよ」

リビアが首をかしげている。

「違うんですか？」

「そつちも興味はあるけど、みんなが気にしているのはあっち」

数人が掲示板の前から離れ、張り出されていた書類が見えた。

リビアが口に出して読む。

「神殿騎士募集？ えっと、聖女マリエ様を守るための盾になる騎士を募集する。学園の生徒でも応募可能？」

眉をひそめる俺は、この場から離れることにした。

「興味ないな。誰があんな奴を守るかよ」

レイモンドは呆れていた。

「リオンの聖女様嫌いも筋金入りだよ。でも、結構人気があるんだよ」

いわれて掲示板の前を見ると、男子たちが真剣な眼差しを向けていた。

婚活に忙しい学園の男子たちが、どうして神殿騎士を目指すのか気になった俺はレイモンドに視線を向ける。

説明を求められたと分かったレイモンドは、その役割を果たしてくれた。

「上級クラスも普通クラスも、今回の話には興味を持つよ。神殿騎士って、基本的に教育を受けた人たち。つまりは僕たちみたいな貴族出身者が多いの」

リビアが納得した顔をしていた。

「神殿の関係者の方は貴族出身者が多いと聞きますね」

「教育を受けつつ、それなりに戦える学園の男子は候補になるわけか。それで？　今までは別に人気なんてなかっただろくに」

レイモンドは不敵な笑みを浮かべていた。

神殿騎士になれるのは知っていたが、ここまで人気があるとは知らなかった。そもそも、神殿騎士は人気がなかったはずだ。

理由は、王国の騎士にならずに神殿の私兵になるためだ。

言ってしまうえば、ホルファート王国の騎士にはなれない。もっと詳しく説明すると、正式な騎士じゃない。

神殿騎士になるというのは、貴族の地位を捨てることを意味している。

貴族社会では、あまりよく思われない。

それでも毎年のように神殿騎士になる生徒がいるのは、婚活に疲れ果ててしまったからという涙なくしては語れない理由があるからだ。

あとは普通に信仰心からかな？

なのに、ここまでの人気が出るとは思わなかった。

「分からない？　聖女様だよ」

「……はあ？　なんでマリエが関係するのさ？　三学期だから、も

う結婚を諦めた男子が多いただけだろ」

「みんな簡単に諦めることが出来たら苦労しないよ。僕だって、許されるなら神殿騎士になりたいくらいさ。まあ、跡取りだから無理だけどね。おっと、話がそれたね。実はこの親衛隊の話だけど、王宮も関わっているんだよ」

人だかりが更に少なくなり、リビアが近付いてよく読む。

「親衛隊の騎士は王国騎士の資格を与えると書かれていますね」

「嘘！」

驚いた俺は書類をよく読むが、本当にそんなことが書かれていた。

レイモンドが勝ち誇った顔をしている。

「分かるかな、リオン？　つまり、神殿騎士になっても、王国の騎士になれるのさ。王国から年金も出る立派な騎士だよ」

王国が神殿の私兵へ給料を払う？

そんなことがあるのかと驚いていると、リビアがよく分かっている顔をしていた。

「それ、凄いことですか？」

レイモンドが激しく首を縦に振る。

「凄い。凄すぎてビックリだよ。つまりだよ！　親衛隊の神殿騎士

は、王国から認められた騎士になれる。更に！
婚活からも逃げられるのさ」

神殿騎士は正確には騎士ではない。

そのため、結婚相手は貴族の女性でなくてもいいのだ。

だが、親衛隊の騎士は、王国の騎士でもある。

「婚活から逃げられる？　どういうことだ、レイモンド！」

「一代限りの騎士じゃなく、七位下の世襲できる騎士の地位を保証しているの。ついでに、学生ばかりが親衛隊の騎士じゃないからね。その辺りが理由で、結婚相手が貴族の女性でなくても子供に地位を引き継げるってこと」

神殿騎士からも親衛隊員を募集する。

そうになると、既に結婚している神殿騎士もいる。

今更、貴族の女性と結婚してくださいとか……無理。

なら、今回に限っては、特例として認めると王宮が認めたのだ。

俺は頭を抱え、膝を屈した。

「マリエの親衛隊になれば婚活から逃げられる。だが、あいつの親衛隊なんて絶対に嫌だ」

俺がどうするべきか悩んでいると、リビアが俺を説得してきた。

「リオンさん、今は女子から人気者じゃないですか」

昇進してから、女子からお茶会に出てもいいわよ、みたいな手紙を貰うようになった。

手の平返しというやつである。

それなのに上から目線というのが、この酷い乙女ゲーの世界を物語っていた。

「今更すり寄ってくる女子なんか信じられるか！ 俺は絶対に嫌だぞ。俺のお茶会に呼ぶのは、リビアとアンジェだけだ！」

少し嬉しそうにするリビアだが、すぐに思い出したのか目を細めて俺を問い詰める。

「でも、この前はクラリス先輩を招待していましたよね？」

俺はそつと視線をそらした。

黙秘を貫く姿勢を見せると、レイモンドが呆れて肩をすくめる。

「リオンは無理だよ。だって、子爵で四位下の騎士だもの。王宮だって絶対に許さないよ」

俺は立ち上がる。

「それもそうか。はあ、婚活は来年に期待するか」

昇進したことですり寄ってくる女子が気持ち悪く思えた。

今まで見向きもしなかったのに、昇進して子爵になったら目の色を変えるのだ。

まったく嬉しくない。

むしろ、人間不信になりそうだ。

リビアは俺を複雑そうな顔で見ていた。

「来年ということは、在校生とは結婚しないんですか？」

「無理だね。はあ、マリエの親衛隊じゃなければ、喜んで参加したのに残念だな」

俺の心情的に無理だ。

昨日までこちらを見下していた女子が、急に笑顔を向けてくる…
…まったく魅力を感じないし、むしろ怖いからね。

今までの仕返しをしてやろうと思う前に、もうドン引き。

関わりたくないね。

それにしても、王宮がここまで親衛隊に力を入れる理由とは何だろうか？
それが気になる俺だが、どうせ関わることもないからと放置した。

放置してしまったのだ……。

王宮では、聖女誕生をきっかけに慌ただしい日々を過ごしていた。

大臣クラスが集まった会議の場には、公爵家の当主であるヴィン
ス アンジェの父も参加している。

「神殿の生臭坊主共が調子に乗って」

「ユリウス殿下を担いで、勢力拡大を目指す考えだろうな」

「聖女様の周りには、有力貴族の元跡取りたちもいる。これは厄介
だぞ」

マリエという聖女を利用し、王国内での地位を向上させようと神
殿が動いていた。

これを機に権力を握ろうとしていたのだ。

アトリー家の当主。クラリスの父親である【バーナード・フィア・
アトリー】が、周囲へ提案する。

「……信用のおける騎士を送り込む必要があります」

王宮が親衛隊のために予算を用意したのは、人事権に口出しをす
るためだった。

マリエという厄介な聖女を放置できないという危機感からだ。

公国よりも、王国はマリエに危機感を抱いていた。

「聖女の首輪に、よく鳴る鈴を付けるのは当然だな」

「だが、あの聖女だぞ。下手な騎士では籠絡ろうらくされないか心配だ」

「殿下や名門の跡取りたちを数ヶ月で籠絡した女だからな……まったく、厄介な女だ」

王宮に情報を流すスパイを送り込みたい面々。

バーナードは、先程から黙って話を聞いているヴィンスに視線だけを向けた。

「一人心当たりがあります。聖女と同じ学生という身分であり、実力も確か。籠絡の恐れもない騎士がね」

周囲もヴィンスに視線を向ける。

「……成り上がり者だが、確かに彼奴なら」

「公爵家の新しい番犬でしたかな？」

「だが、寝返ると痛いぞ。彼奴が持つロストアイテムは脅威だ」

会議の場では「ロストアイテムを取り上げてはどうだ?」「それをすれば国是に反する」「ロストアイテムだろうと、取り上げては王宮へ反感が集まる」などと話が脱線する。

バーナードが咳払いをし、改めてヴィンスに問う。

「……リオン・フォウ・バルトファルト子爵をお貸しいただけるかな、公爵?」

ヴィンスは小さく笑っていた。

「彼は公爵家の寄子ではないのだがね。好きにするといい」

バーナードが話をまとめる。

「では、聖女親衛隊の隊長に、王宮はリオン・フォウ・バルトファルト子爵を推薦しましょう。彼なら任せられる」

ヴィンスは腕を組んでいた。

「さて、どうしたものか」

マリエは笑いが止まらなかった。

（もう最高！ 生活費に悩まない日々がこんなにも素晴らしいなんて 素敵！）

五人もの男子の生活に頭を悩ませることもなくなったのは、聖女となったマリエに王宮や神殿から予算が出されたからだ。

卒業後は聖女となるべく教育が待っているが、今のマリエは生活費に悩まされない日々こそが幸せだった。

（買い食いだって出来る！ 食費を切り詰めて服を買わなくても良い。好きな物を買えるって幸せ！）

おまけに周囲の女子たちだ。

「マリエ様、今日もお美しいですわ」

「やはり聖女様は雰囲気違いますね」

「マリエ様、実は評判のお店を見つめましたの。今度、ご一緒しませんか？」

今まで自分のことを見下していた女子たちが、手の平を返してマリエのご機嫌取りをしているのだ。

理由は簡単だ。

マリエが聖女になったことで、ユリウスの評価が持ち直していたからだ。

公爵令嬢を婚約破棄したユリウスだったが、好きになった相手が神殿も認める聖女だったのだ。

ユリウスの後ろ盾など皆無だったが、ここに来て神殿がユリウスを担ごうとしていた。

つまり、マリエは勝ち馬になりつつあったのだ。

「もう、みんな、様付けなんて止めてよ。私たち、友達じゃない」

そう言つと、周囲は更に感動したように振る舞つ。

「流石は聖女様ですわ。何とお優しい」

「友達だなんて、嬉しいですわ」

「マリエ様、一生ついていきます」

お世辞だと分かっているにも嬉しいマリエは、内心で大笑いをしていた。

（最高！　取り巻きを連れている連中の気持ちが分かるわ。これ、病みつきになりそう！　あら？）

そんなマリエが、一人の女子を見つける。

ベンチに座って落ち込んでいたカーラだ。

取り巻きたちが、マリエに言う。

「マリエ様、行きましょう。あの女は駄目です」

「知っているの？」

「……取り潰された伯爵家の元寄子ですよ。空賊たちと繋がっていた恥さらしです」

「へえ」

リオンたちを襲撃した空賊たち。

その空賊と関わりがあつた伯爵家は取り潰されてしまった。

本来ならカーラも学園を退学になつてもおかしくなかったが、実家自体は空賊たちと関わりがないとされ見逃されていた。

ある種の見せしめでもある。

周囲からは貴族として信じられないと蔑まれ、取り潰された伯爵家の元寄子の関係者　主に生徒たちからも距離を置かれている。

裏切ったらどうなるかを、まるで見せつけているような光景だ。
だ　　が　　。

（あの連中を騙した女……あのモブ野郎は、さぞかし腹立たしいと思うわよね）

リオンへの仕返しのために、マリエはカーラに声をかけた。

（グレッグやブラッドも騙したのは許さないけどね。精々、こき使ってあげるわよ）

マリエは周囲の反対する声を無視して、カーラへと近付いた。

「貴女、どうして一人なの？」

カーラは顔を上げると、酷く怯えた顔をしていた。

制服には汚れが目立ち、手には痣もあった。

酷いいじめを受けているのがすぐに分かった。

「え、あ　　」

逃げようとするカーラの手を、マリエは握る。

「お友達になりましょう」

「で、でも、私は　　」

「大丈夫よ。私は全てを知っているわ。それでも、貴女とお友達になりたいの。駄目？」

首を横に振り泣き出すカーラを見て、マリエは思うのだった。

（手駒ゲット！ 私のために頑張って働いてね。グレッグとブラッドには、後で説明するとして、早速あいつらの前でカーラを見せつけにいかしら）

色々と考えているマリエの下に、クリスがやって来た。

取り巻きの女子たちがクリスを見て頬を染める。

その姿にも、マリエは優越感があった。

「マリエ、手紙だ」

「ありがとう、クリス」

「いや、問題ない。それよりも実家からだぞ。何かあったのか？」

実家と聞いて、少し不安に思うマリエだった。

「だ、大丈夫だと思うけど」

その場で手紙を読み始めたマリエは、カタカタと震えだしてしまった。そのまま膝から崩れ落ち、クリスに抱き留められる。

「マリエ！ す、すぐに病院に連れて行くからな！」

周囲が騒がしくなる中、マリエは泣いていた。

「……もう嫌。信じられない」

俺は王宮からの辞令にカタカタと震えていた。

アンジェからは、アンジェパパ　ヴィンスさんからの手紙も渡された。

寮の自室、俺はアンジェの顔を震えながら見る。

「諦める。王宮はリオンに親衛隊の隊長を任せた。父上もその提案に賛成している。身分的にも丁度いいからな」

身分的に丁度いいとはどういうことだろうか？

「意味が分からないです」

「……マリエの周囲にいるジルクたちは、将来的に男爵位が用意される。まあ、爵位ばかりの男爵たちだが、そんなあいつらを率いるには上の立場であるリオンが相応しいという判断だ」

マリエの親衛隊を用意するのなら、確かにあいつらも参加するだろう。

「ユリウス殿下は？」

アンジェの表情が少しだけ曇った。

「殿下が親衛隊入りなど出来ると思うのか？ まあ、本人は参加したいと言って、ミレーヌ様を困らせていたらしいが」

ユリウス殿下最低だな。

俺はその場に膝から崩れ落ちる。

側に浮かんでいるルクシオンは、

『流石に予想外でしたね。まさか、マスターがマリエを守る親衛隊の隊長になるなんて』

俺だって信じられない。

いったい、どうして俺がこんな目に遭うのか？

どれだけこの世界は俺に冷たいのだろうか？

涙が止まらなかった。

「……やりたくない」

アンジェが俺の背中をさする。

「気持ちは分かるが諦める。親衛隊の隊長といっても学生の身だ。働く機会など滅多にない」

「……それより、神殿騎士になったら、俺も婚活から逃げられるか

な？」

ルクシオンが目を横に振って。

『マスター、そんなに結婚が嫌なのですか？ 前は、ビジネスライクな嫁が欲しいと言っていたではありませんか』

アンジェが急な話の変更と、ビジネスライクという単語に困惑していた。

「びじねすらいく？」

「いや、選べる立場なら選ぶだろ。というか、未だに結婚の条件を出してくる女子の気が知れないね。愛人は三人まで認めるとか、普通に言ってくるんだよ」

それでも控えめにしたと自信満々に言ってきた女子がいたが、丁寧にお断りを入れてやったら「信じられない！」だって。

俺の方が信じられないよ！

アンジェが俺を見て少し悲しそうにしている。

「……リオンの場合、王宮側の立ち位置に近い。婚活からは逃げられないぞ」

「こんなのってないよ！」

神殿騎士になっても、婚活から逃げられないとか損ばかりじゃないか！

もう、嫌だ。

どうして俺がマリエなんかを守らないといけないのか。

急にノック音がすると、訪ねてきたのはリビアだった。

……こんなに頻繁に女子が俺の部屋に出入りしていいのだろうか？
ここ、男子寮なのに。

「リオンさん大変です！」

「何？ マリエが高笑いのしすぎで過呼吸にでもなったの？ 俺も見なかったな」

そのまま病院にでも担ぎ込まれば良いと思っていたら。

「違いますよ！ マリエさんが親衛隊を集めて、今度の連休に冒険に出ると言っていました。それから、パルトナーを出せと言って」

……早速お仕事の時間らしいが、拒否してもいいだろうか？

……色々あった。

エルフの住む浮島で、俺は物思いにふけていた。

ヘルトルーデさんが困惑している中、マリエが俺の所にやってくる。

「あんだ、私の親衛隊の隊長でしょ。さっさと働きなさいよ」

上から目線で命令してくるマリエに、俺は冷めた目を向ける。

「あ？」

アンジエも鋭い視線を向けているため、マリエは少し焦っていた。

「……親衛隊長なんだから、真面目に働いて欲しいと思っているわけだして」

視線をさまよわせ、一気に態度が弱くなるマリエを見ながら俺は溜息を吐いた。

「お前のためにどうして俺が働かないといけないの？　そもそも、ダンジョン攻略は親衛隊の仕事じゃないし」

マリエの周囲には取り巻きたちがいない。

今はマリエ一人だった。

「し、仕方がないじゃない！　私だって　私だってこんなことになるなんて思ってもいなかったのよ！　みんな実家が悪いの！」

ヘルトルーデさんは首をかしげていた。

「どういふことかしら？」

マリエに同情しているリビアが答える。

「マリエさんのご実家が、その……莫大な借金があるらしくて。それと、マリエさんが聖女になったから、更に強気になってお金を借りて回ったそうです」

マリエの実家であるラーファン子爵家がやりやがったのだ。

普通に借金があるのに、娘が聖女になったから威張りだした。

おまけに借金を更に増やして豪遊を繰り返して　そのツケがマリエに回ってきた。

王宮と神殿が用意した予算が、借金で消えた。

それどころか足りなくなったのだ。

子爵家の借金だろ？　そう思ったが、マリエの両親はハッキリ言っただけだった。俺でも同情するレベルである。

ラーファン子爵だが、マリエの名前で借金をしたのだ。

おまけに自分たちの借金は借りた金で返済している。

実家のために、マリエは莫大な借金を背負う形になってしまった。

ヘルトルーデさんも、まさかこんな理由で飛行船を出して冒険したとは思わなかったらしい。

「え、何？　もしかして、お金がないから冒険を言い出したの？　貴方たち本気？　馬鹿じゃないの？」

俺も馬鹿だと思うよ。

実際、子爵家の対応に激怒したユリウス殿下、ブラッド、クリスの三人は抗議やら後始末で走り回っている。

ジルクがここにいるのは、ユリウス殿下の親衛隊に所属していた経験があるからとマリエを守るために側に置かれていた。

グレッグは単純に戦闘力を評価されたというか、他の三人と違って後処理に向かないのでこの場にいる。

マリエは泣きそうになっていた。

「私だってこんな奴に頼りたくないわよ！　けど、けど……お金がないって辛いだよ！」

そんなマリエに、ヘルトルーデさんは冷ややかな目を向けていた。

「これが聖女なんて世も末ね」

まったくの同意見だ。

だが、哀れすぎて、俺はパートナーを出してマリエに付き合ってしまった。

見ていて可哀想で……。

というか、下手にこいつらだけで行動して死んだら目も当てられない。

俺はこいつに聞きたいことがあるのだから。

はぁ……どうしてこんなことになったのだろうか？

エルフの里

エルフたちが住む浮島。

森の中を先導するのは、マリエの専属使用人であるカイルだった。

マリエはのんきなものだ。

「もう、カイルったら自分の故郷なら先に言いなさいよ。お土産とか用意したのに」

自分の専属使用人が里帰りをするのを見守っているつもりかも知れないが、カイルからすれば微妙ではないだろうか？

奴隷として買われ、主人と一緒に故郷に帰るのだ。

家族に「これが僕のご主人様です！」って紹介するの？

俺なら嫌だね。

前を歩くカイルはあまり面白くなさそうにしていた。

「……お土産は必要ありません」

何やら憂鬱うつむそうなカイルは、故郷へと戻りたくなさそうにしていた。

心配しているのはリビアだ。

「リオンさん、カイル君の様子がおかしくありませんか？ 故郷に帰れるのに、どうして落ち込んでいるんでしょう？」

のんきなマリエとは違い、リビアはカイルの様子をよく見ていた。

「色々あるんじゃないの？ まあ、帰りたくない理由があるのかも知れないね」

マリエと違って優しいリビアは、カイルのことを心配していた。

アンジエの方は 。

「ここがエルフの住む森か。ダンジョンがあるとは知らなかったが、何やらワクワクしてくるな」

流石は貴族の血筋。

冒険と聞いてワクワクしている。

そもそも、マリエと一緒になのにアンジエが同行した理由は、エルフの里にあるダンジョン 遺跡を探検するためだ。

ゲーム中では特に難易度が高いわけでもなく、ボスもいるが簡単に倒せた。

ただ、この遺跡は宝が豊富なのだ。

稼げるダンジョンであるため、それを思い出したマリエが攻略して借金の返済を考えついた。

アンジェが普段通りなら、俺に飛行船を出してやる必要はないと言っていただろう。

つまり……。

「アンジェは楽しそうですね」

「うむ！ リビアもワクワクしないか？」

「少しはしますよ。遺跡と聞いていますし、何か凄い発見があるかも知れませんか」

「いや、宝だ。宝がある気がする！ 必ず宝を見つけて、家族に自慢してやる！」

……テンションが高い。

対してマリエの方は切実だ。

「大丈夫。ここで大きく稼げば、借金なんて帳消しよ。むしろプラスじゃない？ そしたら、人気の屋台で買い食いして、夜は夕食にデザートも付けて……新しい服も買わないと。もう、靴下とかボロボロだし」

マリエの独り言を聞いて悲しくなってくる。

聖女を騙^{かた}った転生者のマリエに腹も立ったが、こいつはどうしてここまで不憫なのだろう？

聖女になったことで生活費も、必要経費も用意されたばかりなのに借金を背負わされるとか、前世でいっただけ悪いことをしたのだろうか？

後ろをジルクとグレッグが歩き、中央に女性陣が歩いていた。

一人、面倒そうに歩いているのはヘルトルーデさんだ。

「待ってればよかったのに」

「私の自由でしょう。それに、借金の返済や、興味本位で遺跡に入ろうとする貴方たちに色々と任せるのも不安よ」

まあ、分からなくもないが……この人をここまで自由にさせる王国は、もっと危機感を持つべきではないだろうか？

森の中、整備された一本道が続いている。

俺の肩に浮かんでいるルクシオンは、そんな道を見て　。

『……マスター、エルフとは一体何者なのでしょうか？』

「ファンタジー種族だろ。何が気になる？」

『私のデータにエルフという種族は存在しませんでした。私が待機している間に、急に出現したのがエルフです。気になりませんか？』

そんなことを言われても困る。

突然変異か何かで出現したのではないだろうか？

『それに、人間の女性と交配出来ない点も気になります。なのに、男性の場合は』

ルクシオンが気になりますという感じで次々に質問をしてくるが、カイルが見えてきた村を指さした。

「あそこが僕の生まれ育った故郷です」

マリエが興奮気味に、

「うわぁ、美形ばかり！」

ログハウスの建物が多い村は、一見するとのどかだが随分と整備された村だった。

数人の村人らしきエルフたちは、体に張り付くような衣装を身にまとっている。

全員がスタイル良く、美形揃いだ。

ジルクが顎に手を当てて、知識自慢をし始めた。

「エルフは基本的に美形揃いですが、人間のように外見で美醜を判断しないそうですよ」

マリエも驚くが、隣に立っていたグレッグも驚いた顔をしていた。

……お前も知らなかったのか。

「え、そうなの？」

「はい。その者の持つ魔力によって好みがあるそうです。なので、外見的な好き嫌いはほとんどないそうです」

魔力で美醜を判断するエルフに興味を持つ一同だが、カイルだけは少し俯いて何も話そうとしていなかった。

俺は声をかける。

「どうしたよ」

「……話しかけないください。自己満足のために、落ち込んでいる僕に優しくしないで貰えますか。貴方みたいな勘違い野郎が一番嫌いなので」

俺は頭がカツと熱くなるのを感じた。

「俺もお前みたいな糞ガキは嫌いだよ。お袋に、これが僕のご主人様です、ってマリエのことを紹介して気まずい雰囲気になれ」

すると、カイルは溜息を吐いて俺を馬鹿にしたような態度を取った。

「これだから学園の男子は馬鹿ですよ。いいですか、エルフにとって奴隷になるというのは出稼ぎと同じですよ。奴隷といっても待遇はまともですし、貴方たち学園の男子よりよっぽど好待遇ですからね」

確かにそうだが、言われると腹が立つ。

ルクシオンは妙に納得していた。

『なるほど、エルフにとっても出稼ぎ感覚ですか。納得です』

「エルフの寿命は人間より長いですからね。数十年を無駄にしたとしても、問題なんかないんでしょう」

……数十年の出稼ぎか。それよりも、カイルの言い方が少し気になるな。

まあ、それはともかく、奴隷の心情なんてこんなものだろう。

村に近付いてきた俺たちを見て、その中の一人がこちらに向かってきた。

緑色の髪に茶色の瞳をした可愛らしい感じの女性だ。

年頃は俺たちより少し上に見えるが、小柄で可愛らしい女性エルフだった。

「カイル！」

手を振って駆け寄ってくる女性はカイルを知っているらしい。

その女性が近付くと、カイルは姿勢を正してジルクと話をしていたマリエの側へと移動して……。

「マリエ様、こちらが僕の母親になります。名前は【ユメリア】です」

「え、あ！ は、はじめまして！」

慌てて挨拶をするマリエに対して、カイルの母親であるユメリアさんも慌てて頭を下げてくる。

カイルは淡々とユメリアさんに告げていた。

「マリエ様が連れてきた皆さんで、里にある遺跡に入りたいそうです。村長に許可を取りたいのですが？」

「あのね、カイル。久しぶりに帰ってきたのにそんな他人みたいな言い方はやめ」

「今の僕はマリエ様の専属使用人ですから」

カイルの態度は、使用人として正しいかも知れないが、母親に対して冷たかった。

ユメリアさんは落ち込んでいる。

「あんまり冷たくするなよ。久しぶりの故郷だろ？」

俺がそう言うと、カイルは鼻で笑うのだった。

「何だよ？」

「なれなれしく話しかけないで貰えますか？ 僕はマリエ様の専属使用人であって、お前と仲良くするつもりはないからさ」

妙に刺々しいカイルに対して、グレッグが少し苛立っていた。

「おい、少し言いすぎだ。バルトファルトは俺たちの隊長だぞ」

故郷に来てからどうにも態度がおかしい自分の専属使用人に、マリエは何とかしようと声をかけている。

「カイル、喧嘩は駄目よ。それに何だか今日は変よ」

「いつものことです。さあ、行きましょう。村長の家に行った方が早いですから」

そう言って村に入るカイルは、ユメリアさんの姿を見ようともしなかった。

心配したリビアが声をかけている。

「あの、この島に来てから様子がおかしくて。えっと、気分が悪いのかも」

ただ、ユメリアさんは悲しそうに笑っていた。

「大丈夫です。私が悪いんです。私は酷い混ざりものですから」

混ざりものという言葉が妙に引っかかった。

村長の屋敷は大きかった。

聞けば、数十年前に専属使用人を終えて村に戻ってきたらしいが、その際に結構な報酬があり屋敷を構えたいらしい。

顎髭あごひげのある若い 二十代後半にしか見えない男性エルフだ。

「里の遺跡を見てみたいと？」

代表して俺が話をする。

立場があるだけに、こうした面倒事が俺に回ってくる。

「はい。可能ですか？」

「遺跡に入ること自体は ただ、あそこは里にとって神聖な場所
でしてね。本来なら、他の村の長たちにも同意が必要なのです。ま
あ、自由に出入りをしていますが、流石に里以外の者たちが出入り
するとなると……」

浮島にあるエルフの村々。

それら全てを里と呼んでいるらしい。

「里長も反対するだろうし、無理でしょうね」

「里長？」

「占いが得意な老婆ですよ。我々より前の世代は強く信じています
が、今では占いの力も落ちたのか当たらないことも多いですけどね。
昔は、人間たちもよく里長の下を訪ねに来たそうです」

どうやらダンジョンには 遺跡には入れそうにもない。

「それにあそこは、我々も足を運びます。ですが、宝なんてありませんでしたよ」

「え？」

村長の言葉に驚いていると、ドアが激しくノックされた。
入ってきたのはエルフの女性だった。

「村長、里長が！」

村長が近くにあつた置物を投げつける。

「きゃっ！」

女性が物をぶつけられ、怖がっていると。

「バタバタと走って乱暴にドアを叩くとは何事だ！ 何度教えれば理解できる！ お客様の前で失礼だろうに！」

そのまま女性の方へと向かうと、村長はそのまま女性を蹴り始めた。

あまりの光景に、俺は慌てて止めに入った。

「おい、あんた何をしているんだよ！」

村長は俺の手を振り払うと、蔑^{さげす}んだ目を向けてきた。

その目は、学園で専属使用人たちが男子に向ける目だった。

「邪魔しないで貰いましょうか。エルフにとって礼儀作法は大事なですよ。日頃からこうして礼儀作法に気を付けねば、子供たちも行儀が悪くなる。そうなれば、奴隷として高く売れませんからね」

……俺には理解できないエルフの事情だが、これではあまりにも酷い。

「客の前で気分が悪い光景だな」

これが精一杯の強がりだった。

「これは失礼しました。さて、用件は何だ？」

蹴られた女性が涙を流しながら告げるのは、話をしていた里長が村を訪ねてきたという報告だった。

村の広場。

集まったエルフたちは、全員が美男美女。

その中に、支えられるように立っているのは、背が低く大きな杖を持ったお年寄りだった。

腰は曲がり、目は開いているのか閉じているのかも分からない。

随分と白髪交じりの髪をした老婆。

両脇を同じような民族衣装を着た女性に支えられ、何か呟いていた。

隣にいたエルフの女性が代わりに言葉を伝えてくる。

「里長の言葉を伝えます。もう二度と遺跡に入ってはならぬ。このままでは、古の魔王の怒りに触れる、と」

村長が髪をかいていた。

「……里長、魔王とは何ですか？　そもそも、他の村の者たちも出入りをしているじゃないですか」

ボソボソと呟く里長。

その声を聞いて若い女性エルフが答える。

「何も知らないと思っっているのですか？　貴方が遺跡に大きく関わっているのを里長は知っています。里長は言っていますよ。禁忌に触れてはならぬ。エルフの聖地に入ってはならぬと」

周囲のエルフたちも呆れているが、里長や巫女さんたちは本気のようだ。

俺の肩辺りで浮かんでいるルクシオンも、呆れている感じだった。

『占いですか』

「何？ 全否定派？」

『まさか。不思議な能力を持つ人たちは確かに存在しましたよ。マスターもその一人ではないですか』

前世の記憶を頼りにルクシオンを探し出した俺も、確かに非科学的な存在かも知れない。

それはそうと、

「ところで魔王について何か知っているか？」

『マスターの方が詳しいのでは？ 乙女ゲーに魔王が出てくるのですか？』

「出てこない。だから気になっているが……老いたと考えるべきか？」

昔は有能な占い師も、今は老いてしまったと思うと悲しい。

エルフたちをかき分け前に出るのは マリエだった。

「ちょっと！ ゴチャゴチャ五月蠅いひざりのよ。いいから私を遺跡に案内しなさい！ 私は絶対に攻略して」

借金に怯えるマリエが前に出ると、里長の目が見開かれた。

隣の女性に何か伝え、それを女性が俺たちに伝える。

驚き、そして焦っている様子だった。

「貴女様は聖女様でしょうか？」

「あら、分かる？ そう、私が聖女よ。分かったらすぐに」

マリエが言い終わる前に、女性は言うのだ。

「……遺跡に入るのは構わないそうです。聖女が古の魔王を連れてくる。それが、里長がここ数ヶ月で予知した未来ですから」

周囲のエルフたちがざわめく。

マリエは首をかしげていた。

「魔王？ 私、魔王なんて知り合いにいないわよ？」

俺にとつてお前はラスボス。魔王みたいな者だけだね。

ルクシオンに視線を向ける。

『もしや、ユリウスのことでは？ 王族ですし、新人類の末裔まつえいは魔法を使います。魔の法則を操る王族という意味なら、魔王、もしくは関係者とも呼べますね』

「……そう言われると納得だが、殿下はここにいないぞ？」

『私に言われても困ります』

里長の代弁していた女性が周囲に告げる。

「審判の時です。この島が沈むのか、それとも許されるのか……この方たちの邪魔をすることは許しません。全ての者は、心静かにその時を待つようにと里長が仰せです」

そう言つて、里長たちは村を出て行くのだった。

遺跡の中。

やってきた俺たちは、中の様子を見て意気消沈してしまう。

「……何もないな」

取りあえず部屋があるだけで、壁やら床には木の根やら蔦が這い回っている。

俺から見れば近代的な建物が古びたような遺跡だが、リビアから見れば浪漫あふれる古代の遺跡らしい。

リビアは一人喜んでいる。

「凄いですよ！ リオンさん見てください、この形をした物は、他の古代遺跡でも発見されているんです。少し形は違いますが、ドアの近くにあるこの何かは古代遺跡の特徴ですよ！」

「……お、おう」

それ、カードの読み取り機だ。

カードキーを読み取る機械は、既に壊れているのか形だけを保っていた。

ルクシオンはリビアの喜んでいる姿に、

『事実は告げない方がいいのでしょうか？』

何かしら意味のある物だったのではないかと、リビアは一人楽しそうに考えている。

それはカードの読み取り装置です、なんて正解をすぐに教えているものか悩んでいるらしい。

「教えた方が喜ぶだろうに」

『……自分で発見するから楽しいこともあります。マスターには分からないでしょうね』

「お前って本当に嫌な奴だな」

『マスターには負けますよ。しかし、これはなんというか』

ルクシオンが視線を向けているのは、アンジェたちだった。

「宝はないのか。まあ、遺跡を見られただけでも話のネタにはなるか」

ジルクも落ち込んでいる。

「エルフたちの遺跡と聞いたので期待したのですが」

グレッグの方は諦めた様子だ。

「そう簡単に財宝のある遺跡が見つかるかよ。こういう空振りもあるから楽しいのさ。でも、ここまで何もないと逆に清々しいな」

意外にも落胆しているのはヘルトルーデさんだ。

「あれ？ 実は期待していたの？」

「……そうよ。悪い？」

「別に悪くはないけど意外だなんて」

「公国だって元を辿れば王国系の国よ。冒険者に憧れを持つのは貴方たちと同じなのよ」

それなのに、婚活事情が違うのはいったいどういうことだろうか？

俺が視線をマリエに向けると、

「……もう嫌。こんなのってないわ」

メソメソしている姿が目に入った。

ジルクがマリエを慰める。

「マリエさん、大丈夫ですよ。またいつかみんな冒険に出れば良いじゃないですか。その時は、財宝だって見つかりますよ」

微妙にずれている。

マリエは冒険したいのではなく、財宝が欲しいだけだ。

ジルクの好意に微妙な顔をしているのがその証拠だ。

「そ、そうね」

遺跡に夢中なりビアに呆れたのか、アンジエが俺の所にやってきた。

「リオン、これからどうする？ このまま引き上げるか？ ついてきた村長も迷惑そうにしているぞ」

見れば、遺跡の入り口で俺たちを嫌そうな目で見ている村長の姿があった。

屋敷での一件から、俺に向ける視線が冷たいものになっている。

「……見下していて腹が立つな」

今すぐにも殴り飛ばしてやりたい。

古だが、新品だか知らないが、魔王様には裁きの鉄槌を期待したいところだ。

まあ、魔王なんて存在しないのだが。

村長が俺たちに声をかけてくる。

「もうよろしいでしょう。遺跡といってもあまり広くありません。見るべきものなんてありませんよ」

……おかしい。

この遺跡には確か。

「諦めるわけにはいかないのよ！　こうしている間にも、借金が増えていくのよ！　私は　私は絶対に諦めない！　もう、借金の返済生活は嫌よ！」

マリエが暴走して一人で遺跡の奥へと進む。

アンジェが忌々しそうにしていた。

「勝手に動くとは馬鹿か」

俺は持つて来たライフルを肩にかけ、ルクシオンを連れてマリエを探しに行くのだった。

「ルクシオンはついてこい。アンジェはみんなと一緒にここにいてすぐに戻ってくるから」

「親衛隊長殿も大変だな」

追いかけようとするシルクとグレッグに残るように言って、俺はマリエを追うのだった。

……チャンス到来だ。

これでマリエと二人きりになれる。

ようやく、転生者同士話ができる。

遺跡の奥。

マリエは何かを探していた。

「ない。ないわ！ 地下への入り口がない！」

ルクシオンの一つ目がライト代わりに光を用意すると、マリエが驚いたように振り返った。まるで追い詰められた犯人のようなマリエが振り返る。

俺はライフルに弾丸を装填して見せた。

いつでも撃てるようにする。

「ようやく一人になってくれたな。飛行船の中でも、お前とこうして話をする機会がなくて困っていたんだ。……これで、ゆっくり話ができる」

マリエはガタガタと震えながら、護身用に使っていた拳銃を手に取りうつとする。

「動くな。動けば撃つ」

「わ、私を殺したらあんたは大罪人よ！ 私は聖女よ！」

「リビアから聖女の地位を奪った偽物だけだな。さて、その辺りについて聞こうじゃないか。お前、これからどうするつもりだ？」

リビアから聖女の地位を奪い、これから来るかも知れない公国との戦いを乗り切れると思っっているのだろうか？

「……はあ？ 何を言っているの？ 何が聞きたいのかちゃんと言いなさいよ」

しかし、マリエの態度はここに来て也太々しい。

こいつ本当に撃ちたい。一発撃っていいかな？

「なら一つずつ質問してやるからちゃんと答えろよ。お前は転生者か？」

「そうよ。そうですよ。前世持ちって意味なら正解よ。あんたも同類みたいね」

「この世界は乙女ゲーの世界だと知っているよな？」

「それが何よ？」

否定しない。つまり、マリエも乙女ゲーと認識しているということだ。

この世界が乙女ゲーだと あの乙女ゲーの世界だと知っている。

「なら、どうしてリビアから聖女の地位を奪った？ 公国と戦争に

なったら
」

俺の質問にマリエは笑っていた。

「馬鹿じゃないの？ あの女に出来て、私に出来ないと思う？ 私だって治療魔法が使えるわ。聖女の資質は十分にあるのよ。あの女が持つべき道具は全て私を認めたわ。偽物なんて言わせないわよ。まあ、言ったところであんたを信用する奴なんていないでしょうけどね」

ルクシオンが俺を見る。

『マスターとの情報に食い違いがありますね。ここはお互いの情報を共有した方がよろしいのでは？』

マリエは少し困惑していた。

「何よ？ 何が言いたいのよ。言っておくけど、私はあの乙女ゲーのし
」

直後、床が抜ける。

「なっ！
」

「きゃあああ！
」

遺跡の外に出たアンジェは、心配そうにしているジルクとグレッグを見た。

「二人とも落ち着け、リオンがあの女を迎えに行ったから大丈夫だ」
内心、リオンがマリエを気にかけているのが許せないアンジエは
思う。

（リオンの奴、飛行船でもマリエの姿を探している様子だったが
まさかな？）

ジルクは鋭い視線を向けてきた。

「だから不安なのです。マリエさんと二人きりですよ。間違いがな
いと言えますか？」

グレッグも遺跡の中を見ながら、

「いくら何でも遅いだろ。迎えに行こうぜ。バルトファルトが変な
気を起こさないか心配だ。あいつ、女になれてない気がするし、マ
リエの可愛さに」

リオンがマリエに対して興味を持っていると聞き、アンジエは普
段と違って狼狽^{うろた}えるのだった。

「ば、馬鹿を言うな！ リオンはお前らとは違う！」

「どう違うというのですか？ 同じ男。そしてマリエさんは素晴ら
しい女性です。間違いを起こさないという方があり得ない」

「男なら絶対に手を出すと思う」

二人の意見に対して、アンジエは感情がいつもより高ぶっていた。

「リオンはマリエが嫌いだ。それはお前たちも知っているだろうが！ リビアも何か言ってやれ。リオンがマリエに手を出すなど」と

リビアは少し青ざめていた。

「あ、あの、今気付いたんですけど……リオンさん、何でライフルなんか持ってたんでしょうか？ モンスターも出てこない安全な遺跡には必要ないですよ？」

アンジエも、そしてジルクやグレッグも目を見開く。

普段はマリエと距離を置くリオンが、今回はかりは近付こうとしていた。

三人が青い顔をして想像したのは、リオンがマリエを撃ち殺す場面だった。

「マリエさん！」

「マリエ！」

飛び出す二人。

アンジエとリビアも二人を追いかける。

「ま、待て！ いくらあいつでもそこまではしないぞ！」

「そうですよ！ やっても脅すくらいです！」

四人がその場を離れると、そこにはヘルトルーデとカイル　そして村長が残った。

マリエは夢を見ていた。

それは懐かしい前世の夢だ。

夏なのか日差しが強く蒸し暑い。

夕方なのか、周囲はオレンジ色に染まり暗くなりつつあった。

あの日の暑さをマリエは思い出す。

（ああ、そうだ。こんなこともあったわね）

一人の少女が躓^{つまず}き、膝をすりむいて泣いていた。

『お兄ちゃん、おんぶ』

助けを求めた相手は、少女の兄だった。

今思い出しても腹の立つ顔をしている。

『……それくらいなら自分で歩ける。背負うと背中が熱いから嫌だ。それにお前、重いし』

（重くねーよ！ こいつ本当に腹が立つわね！ 滅茶苦茶スレンダ
ーな体型だよ！）

自分から見ても可愛らしい姿をしている前世の自分が、あまりの
物言いに顔を上げて啞然としていた。

驚いて泣き真似を止めている。

『……え？』

『ほら、泣いているふりだ。お前のそういう猫をかぶったところが
嫌いなんだよね。俺は騙されないからな』

人通りも少ない道だった。

前世の自分は驚いている。

この頃になると、自分が周囲の女子よりも可愛いのを知っていた。
周りに頼めば何でもしてくれると分かり、少年 兄もこき使お
うとしていたのだ。

『ひ、膝が痛い』

『痛いのは生きている証拠だ。良かったな』

『お、おんぶして欲しい。お家に帰れない』

『そっか。ならここにいれば。それが嫌なら自分で歩け、屑な妹』

『……糞兄貴！』

『糞で結構！ お前の言いなりになるくらいなら、俺は自由な糞を選ぶね！』

笑顔でそんなことを言う兄を見て、マリエは思っのだ。

（……こいつ本当に最低ね。今思い出しても、私の中で一番……まあ、三番目くらいに酷い男だったわ）

一人目は自分と子供を捨てた男だ。

二人目は付き合っていたヒモの男。

その次くらいに、マリエは兄が嫌いだった。

そしてマリエは思い出す。

（あれ？ 私は一体……あれからどうなったのかな？）

ゆっくりと目を覚ます。

周囲は埃っぽく、それに発砲音が聞こえてきた。

床に薬莢けっしやが落ち、金属音を立てる。

顔を上げると、そこには背中を向けているリオンの姿があった。

「次は！」

『天井を這って移動してくる未確認生物がきます。マスター、残弾数に注意してください。それから、こいつらはモンスターではありません』

「撃ち殺しても消えないとか質が悪いな」

リオンがライフルを構え引き金を引くと、発砲音が聞こえ闇から姿を現した不気味な化け物の頭部を貫いた。

化け物は天井から剥がれ落ち、そのまま床に落ちて痙攣している。

マリエは飛び上がって起きようとするが。

「ひっ！ あ、痛っ！」

脚を怪我したのか痛みで立ち上がれなかった。

リオンが声だけをかけてくる。

敵が来るのを警戒している様子だ。

「気が付いたか？ 状況はルクシオンから聞け」

「え？ はえ？」

『遺跡の床が抜けて地下へと落下しました。貴女が目覚まさない間に、通路奥から出てくる未確認生物たちをマスターが倒しているところですよ』

「未確認生物って」

モンスターとは違うのか？

そう思ったマリエが、先程の未確認生物を見た。手足は人のそれとは違うが、胴体や頭部は人のような姿をしていた。

トカゲが人の姿になったようなその姿に、マリエは絶叫するのだった。

「いやああああ！」

だが、リオンもルクシオンも。

「五月蠅いから黙っている。気が散る。くそ、役立たずのお守りまではないといけないなんてついていないな。これがリビアやアンジエなら、真面目に守るのに」

「叫んでも状況は変わりません。出血はありませんし、大人しくしていてください」

「え、でも脚が」

「唾でも付けておけば治るのでは？　そういえば、貴女は聖女で治療魔法が得意でしたね。自分で治療してください。あ、マスター次が来ます」

とても態度が冷たかった。

マリエは思うのだ。

（こいつらも兄貴と一緒にじゃない！ 本当に腹が立つわね！）

遺跡の秘密

「これはどういうことだ？」

遺跡の奥に空いた穴。

アンジエはランタンをかざしてみるが、奥が見えなかった。

何やら発砲音が聞こえてきており、中では戦闘が行われているらしい。

ジルクがすぐに降りる準備を始める。

「すぐにロープを持って来ます！」

グレッグは槍を担ぎ、

「俺は先に降りる。マリエもバルトファルトもこの下かも知れないからな。急いで助けにいったやらないと」

リビアも名乗りを上げた。

「わ、私もいきます！」

「お前は駄目だ。残れ」

「いきますー！」

アンジェが自分も降りようとしたところで、走ってきた村長が声を張り上げる。

「何をやっているんですか！」

アンジェは村長を睨む。

「何もないと言っていたのは誰だ？　こんな所に地下へ続く穴があったではないか」

「そ、それは……申し訳ありません。すぐに私たちが向かいます。貴方たちは外に出ていてください」

マリエのことが気がかりなグレッグは、そんな村長の意見が聞き入れられない。

「下で戦っているのかも知れないんだぞ！　マリエに何かあったらどうするつもりだ！」

「な、なら私がいきましょう」

村長は背負っていたライフルを手に持ち、穴を滑るように降りていく。

その姿にアンジェは違和感を抱いた。

（あの村長、何があるか分からないのに一人で向かうのか？）

地下へと落ちた俺たち。

ルクシオンが周囲を照らす中、俺とマリエは通路を歩いていた。

一部は崩れ、そこから土や岩が出て通路を塞いで迷路のようになっている。

顔だけ後ろを向いてマリエを見れば、

「治療魔法は使ったんだよな？ 歩くのが遅いぞ」

足を引きずっているマリエに文句を言いつつ、歩く速度は合わせてやらないといけない。

ムキになるマリエは、そのことに気が付いていない様子だ。

「怪我は治してもしばらく痛むのよ！ もっとゆっくり歩きなさいよね」

「リビアなら痛みも消せるのに。これだから偽物は」

「はっ！ あの女が少し可愛いからって入れ込んで馬鹿みたい。あんたみたいなモブ、誰も相手にしないわよ」

「悪いがこれでも女子には人気が出てきたところだ。手紙なんかもよく貰う」

あまり嬉しくない手紙ばかりだが、強がってみせるとマリエが本当に悔しそうにしていた。

俺は地上での話題を再び振ってみる。

「……何で逆ハーレムなんて考えた？」

「文句？ 手に入る幸せがそこにあるとしたら、拾うのが人間でしよう」

幸せ？

「他人を蹴落として気分は最高、ってか？ お前、リビアに謝れよ」

マリエは暗い通路の中で俯きながら呟く。

「あんたに何が分かるのよ。前世で私は幸せじゃなかったわ。第二の人生くらい、好きに生きて何が悪いのよ。私は！ ……私は幸せになりたいだけなのよ」

その方法が酷すぎて笑えない。

「リビアの邪魔をして、アンジェを罠にはめて。お前、最低だよ」

すると、周囲を照らしていたルクシオンが俺も同じだと言ってきた。

『その言葉はマスターにも言えますね。私を発見し、オリヴィアから奪ったのはマスターだと言っていましたし。更に言えば、あの五人を公衆の面前で叩きのめして気分爽快！ ……そう言ったのもマスターですよ』

今度はマリエが俺を責めてくる。

「あんた最低ね。人に文句を言う前に鏡を見れば」

「お前に言われたくないんだよ！ 大体、お前のせいでこっちは苦労したんだからな！ そもそも、最終決戦はどうするつもりだ。公国が攻めてくる確率は低いけどさ」

王国がヘルトルーデさんと、ロストアイテムである魔笛を持つ限り大丈夫なはずだが、それでも奪われたらおしまいだ。

そこから最終決戦が始まってしまえば、非常に厄介なことになる。

「そんなの、私の聖女の力でどうとでもなるわ」

「は？ 聖女の力だけでどうにかなる？ お前、リビアの力はどうするつもりだ？」

「……何の話？」

「いや、だから！」

そこまで話をしていると、ルクシオンが俺たちの会話に割り込んできた。

『……マスター、どうやら私の疑問は一つ消えたようです』

ドアが開き、そこに広がっていた景色は……。

液体の入った筒状のカプセルが並び、中には人の姿に近い何かがあった。

エルフたちが俺たちを待ち構え、ライフルやら拳銃を向けている。

マリエの前に出たのは、こいつには聞かなければならないことが山のようにあるためだ。そのために守らなければならない。

ライフルを構えると、エルフが俺を見ながら笑っていた。

「何だ、人間の雄と雌か……変な丸いのもいるな」

まるで実験動物でも見ているような口振りだった。

「化け物を作っていたのはお前らか？」

モンスターであれば倒せば消えてしまいが、地下にいた生物は倒しても消えなかった。

今まで倒してきたのはモンスターではないということだ。

代表者のようなエルフの男が俺に答える。

その手には拳銃を持っていた。

「理解が早いな。お前たちでは想像すら出来ないと思っていた」

男はカプセルに手を触れる。

中に入っていたのは、大きな植物の花。その中央には人の顔があった。見るからに不気味で、エルフたちも気味が悪い。

「我々はこの遺跡で生命の誕生という神の領域に足を踏み入れたのさ。お前ら人間には理解できないだろうが、古代では高度な文明があった。きつと野蛮な人間ではなく、我々エルフが支配していた時代だ。その証拠もある。この地下にはエルフの骨があった。人間の骨は一つもなかったよ」

ここでエルフたちが化け物共を昔から作っていたと思うとゾッとする。

俺がルクシオンに視線を向けると、一つ目を横に振って否定していた。どうやら、ルクシオンは知らないらしい。

だが、自慢話は終わらない。

「我々は、人間に奪われた世界を取り戻し、エルフこそが全ての種族を束ね、導き」

自分に酔っているエルフの話を遮ったのは、ルクシオンだった。

『それは違います。貴方たちが言う古代の文明を支配していたのは人間です。そして、この施設で作られていたのは 貴方たちエルフでしょう』

マリエが俺の服を指でつまみ何度か引っ張り、ルクシオンを見上げていた。

「ねえ、あんたの使い魔って何者？」

「こいつはチートアイテムのルクシオンだ。分かるだろ？」

「そんなの知らないわよ。というか、チートアイテムとか卑怯よ。頂戴」

「……お前は本当にいい性格をしているよ」

エルフたちの表情が歪む。

「何だ、その変なことを言う丸い物体は？」

『この部屋に眠っている管理AIにアクセスし、情報の共有を行いました。この島は実験場です。新人類に対抗するため、人が禁忌に手を出した島……魔法を扱える生物として人工的に作りだしたのがエルフです』

周囲から音声が届いてくる。

ルクシオンとは別の電子音声で、女性寄りの声をしている。

『その通りです。この島にいるエルフたちは、ここで生み出された個体が野生化した存在です』

「人工知能なのか？」

俺が周囲に視線を向けても、姿は見えなかった。

『はい。旧人類の遺伝子を持つ貴方に会えたことは幸運でした。我々の戦いは無意味ではなかった証ですね』

エルフが周囲に視線を向けながら、はじめて声を聞いたのか慌てふためいている。

「だ、誰だ！ そんな嘘を言う奴は！ 我々エルフは人より優れた存在だ。寿命も長く、人よりも魔法の扱いに長けている！」

管理AIは淡々^{たんたん}と告げるのだ。

『長寿なのはそれだけ長く戦わせるためです。すぐに死なれては困ります。また、魔法の扱いに長けているのは、そのように作り出したからです。もっとも、野生化した影響なのか、我々が作り出した初期のエルフよりも劣化した様子ですが』

エルフたちが啞然としている中、俺たちの前に立った男だけが怒気を強めた。

「ふざけるな！ そんな事実はない。我々こそが」

後ろから気配がしたので振り返れば、そこには村長がいた。

ただ、様子がおかしい。

「いったい何をしている！」

そう叫んだ村長は……同じエルフではなく、俺たちに怒気を向けていた。

「あ、村長……え？」

ライフルを構えた村長は、マリエの顔に銃口を突きつけていた。ルクシオンは妙に納得していた様子だった。

『なるほど。あの里長の言っていたことは、全てが嘘ではないようですね』

狼狽えているエルフたちに村長が命令する。どうやら、こちらが本性というわけか。

「こいつらはここで始末しろ。人工生物たちにやられたように見せればいい」

エルフたちはカプセルを解放し、そして液体が排出されたカプセルからは化け物たちが出てくる。

『装置を動かすただけでも褒めた方がいいのでしょうか？』

落ち着いているルクシオンの横で、俺はライフルを構えた。

「俺たちを殺して証拠隠滅か。エルフって見た目通り腹黒いよな」

村長は俺を見て笑っている。

「人間風情が調子に乗るなよ。お前たちのような下等生物は、我々に頭を下げていればいい！」

管理AIが嘆く^{なげ}ように言うのだ。

『……緊急対応を実行します』

直後、飛びかかってくる人工生物たちに施設の壁から出てきた武器が向けられ、そのまま撃ち抜かれ殺されていく。

エルフたちが混乱している中、俺は村長の肩をライフルで撃ち抜いた。

「あがつ！」

ライフルを落としたところで、マリエの前に出て銃床でその顔を殴り飛ばした。

エルフたちが叫ぶ。

「う、撃て！」

弾丸と魔法が俺たちに降り注ぐとすると、マリエが頭を抱える。

「もう嫌あああ！」

五月蠅いと思いながら、ルクシオンに命令する。

「やれ」

『この程度ではマスターを傷つけることも出来ませんね』

俺たちを中心に発生した光の壁により、弾丸も魔法も全て弾かれる。

ライフルを村長に向けながら、銃も魔法も効果がないと知ったエルフたちを見る。

「まだやるか？ 高貴で賢いエルフ様たちは、滅びの美学がお好み

ですか？」

このままやつても勝てないと分かんると、エルフたちは銃を捨てて両手を挙げるのだった。

「全員を拘束する。お前も手伝え」

「ちょっと！ 私はこれでも聖女よ。あんたの上司よ！」

「……俺がこいつらのせいにして、お前の頭を撃ち抜いてもいいんだぞ」

やるつもりはないが、脅してやるとマリエは笑顔になる。

「もう、怒らないでよ。ちゃ、ちゃんしますから撃たないで」

……最初からそう言えばいいのに。

エルフたちの拘束が終わる頃。

管理AIが俺とルクシオンに話しかけてきた。

『……我々が敗北したのは理解しました。そうになると、この施設は自爆する必要がありますね』

「お前ら自爆が好きだな。ルクシオンと同じ反応じゃないか」

管理AIはこの遺跡 施設の役割を話すのだった。

『本来は新人類に対抗するための施設でした。無意味となってしまう今は、この施設を残す意味がありません。残してしまえば、ここにいるエルフたちのように悪用する者たちが出てきます』

人工生物を作りだしたエルフたち。

確かに残してはいけない施設だろう。

「……管理AIとして、お前はそれでいいのか？」

ずっとここを管理してきた人工知能は、久しぶりに目覚めると自爆を選択しなければならなかった。何故か、それでは寂しい気がする。

『問題ありません。ルクシオン、私の持つデータを全て貴方に渡します。それから、これを受け取りなさい。移民船である貴方には必要になります』

床から出てきたのは、立方体がいくつもくつついた何かだ。

浮かび、それは輝いて見える。

『いただきましょう。これで更に私は活躍できますね』

「これは何だ？」

『財宝です。非常に価値がある物ですよ』

それを聞いたマリエが飛び上がった。

「財宝！」

『はい。私たちにとって価値はありますが、この世界では利用方法も分からないので、光る置物程度の価値しかありませんけどね』

「……本当に最悪。財宝なんてないし、やっぱりゲームと違うのかしら？ 大体、ファンタジーだと思っていたのに、SFとか聞いていないわよ」

…… エルフを作り出したのは人間。

エルフは新人類に対抗するために作られ、他の亜人種たちも同じような理由で作りに出されたと思うと…… 確かに少し不思議な世界だな。

乙女ゲーのふわっとした甘くて優しいファンタジー世界はどこにいった？

「他に財宝はないのか？」

マリエが目に見えて落ち込んでいるので、管理AIに確認を取ると 何故か、凄く嫌そうに答えてきた。

『財宝と言えるか分かりませんが、一つだけ存在している物があります。引き取ってくれるのなら、是非とも引き取って欲しいですね』

マリエが復活する。

「あるんじゃない！ もう、隠していないで渡しなさいよ」

こいつ本当にいい性格をしている。

遺跡から離れた場所。

その場所で、俺たちは　。

『くあwせdrftgyふじこ!~!』

激怒しているルクシオンを落ち着かせるために苦勞していた。

「だから落ち着けよ」

『私は冷静です。冷静にこの物体を破壊し、すり潰し、灰にして、とにかく塵すら残らないレベルで消滅させて　　ぎいやあああ!』

……壊れたのだろうか？

マリエは絶望したように地面に横になり、うつろな表情をしていた。

「……こんなの貰っても嬉しくない」

そんなマリエを励ましているジルクとグレッグは、本当に安堵した表情をしていた。

「マリエさんが無事で良かった」

「そうだぞ、マリエ。宝なんかまた探せばいいだろうが」

俺たちの前にあるのは、遺跡の管理AIが最後に渡してきた物だ。

それは鎧　　パワードスーツの右腕だ。肘から先の部分になっている。

刺々しい腕を前に、壊れてしまったルクシオン。

こんなジャンクパーツは金にならないと嘆くマリエ。

リビアはルクシオンを前にオロオロとしている。

「ルク君落ち着いて！　ほら、深呼吸だよ、深呼吸！」

『私は呼吸を必要としていけませんので出来ません』

「え、あ、はい。な、何かごめんね」

冷静に返答され、逆に困ってしまうリビアが可愛かった。

アンジェが俺に近付いて状況を確認する。

「リオン、村長が怪我をしているのに拘束を解かないのはどういう理由だ？　それに、このエルフたちは遺跡のどこにいた？　まさか、捕らえられていたのか？」

拘束されているエルフたちを見て怪しんでいた。

遺跡の件を話すわけにもいかない。

報告すれば遺跡を破壊したことを責められる。

勝手にエルフたちを罰することも出来ず、俺には何も出来ない状態だ。

「ああ、こいつらはちょっと　おっと」

地面が揺れるのを感じ、俺は驚いたアンジエを支えて遺跡の方を見た。どうやら、無事に自爆したらしい。

無事と言っているのか分からないが、これであの遺跡は二度と人工生物を作れない。

これで良かったのだ。

そう思っていると、空に大きな飛行船が姿を現した。

……ルクシオンだ。

光学迷彩で隠れているが、俺にはその不自然さが見えていた。薄らと空に飛行船　ルクシオン本体の姿が見えていた。

「おい！」

俺が睨み付けると、ルクシオンは悪びれもせずと言う。

『私を騙した報いを受けてもらいます。こんな物を押しつけるとは！』

激怒したルクシオン本体からの一撃は、光の柱となって遺跡に降り注いだ。

その光に村長がガタガタと震えている。

「まさか、里長が言っていたのはこのことだったのか。魔王だ。魔王が我々に怒っている！」

ごめん、それうちの相棒がやったことだから。

魔王じゃないんだ。

エルフたちがこの世の終わりのような顔をしている。

この場にいた全員が光の柱に目を奪われる中、ヘルトルーデさんだけは鎧の右腕を見ていた。

それにしても、この形状はどこかで見たとがあるような気がする。

黒く刺々しいこの右腕をどこかで俺は見たような……。

「ねえ」

「ん？」

ヘルトルーデさんが俺に話しかけてくる。

「貴方 私に手を貸さない？」

何やら企んでいる様子だが、関わりたくないので拒否した。

「冗談。嫌ですよ」

「欲しい物なら何でも与えるわ。王国よりも好待遇を約束するわよ」

「いません」

ヘルトルーデさんは、少しだけ悔しそうに「そう」と呟いていた。

エルフの村に戻ってくると、里長たちが待っていた。

エルフたちは家から出て祈るように天に許しを請う。

「魔王様、どうかお許してください」

「我々の島を見逃してください」

「だから俺は嫌だと言ったんだ！ 村長たちが遺跡を荒らすから！」

そんな村の様子を見たカイルは、馬鹿にしたように笑みを浮かべていた。すぐに無表情に戻したが、俺は見なかったことにする。

こいつにも色々と事情があるのだろう。

グレッグは回収した鎧の右腕を、ジルクと共に運びながら周囲の様子を見ていた。

「何か雰囲気違うな」

「遺跡が崩壊したので恨まれると思っていましたが……どうやら大丈夫みたいです」

壊したのは俺だけだね。

俺たちがやってくると、里長が近付いてくる。

捕らえられたエルフたちを見て何か呟いていた。

隣で里長を支えている女性エルフが代弁してくれる。

「この者たちの扱いについて話がしたいそうです。出来れば、代表者である貴方たちには里長の屋敷に来て欲しいと」

色々と説明も必要だろうと、俺が話をすることにした。

里長がマリエを見ている。

「あいつも呼んだ方がいいの？」

「はい。それから、黒髪の女性と、そちらのお二人も同行願いたいということです」

呼ばれなかったグレッグとジルクは、荷物を下ろして休憩していた。

「お前らだけで話をしてこいよ。俺たちはこいつを運ぶから」

「飛行船に積み込むまで大変そうですね」

二人の言葉を聞いて、ルクシオンが嫌そうな声を出す。

『私のパルトナーにその汚物を乗せると?』

「お前もいい加減に諦める。ほら、いくぞ」

里長の屋敷。

そこで里長と向き合って座る俺たちは、お礼を言われることになる。

「里長が皆様にお礼を申しております」

マリエが照れている。

「お礼なんていいのに。出来れば財宝か何かが」

そんなマリエを睨んで黙らせたのはアンジェだ。

「……こちらこそ申し訳ない。結果的に遺跡を破壊してしまったかな」

里長は首を横に振る。

「里長は、古の魔王の怒りがこの程度で済んで幸いだったと言っています」

リビアが俺たちの会話に割って入ってくる。

「あ、あの！ 話は変わりますが、混ぜり物って何ですか？ ユメリアさんがそう言っていて……カイル君も様子がおかしいですし、どういう意味でしょうか？」

カイルを心配するリビアに、露骨に嫌そうな顔をするのはマリエだった。

「人の専属使用人に口を出さないで欲しいわね」

「そういつつもりじゃなくて、どうにもおかしいと思って」

確かに普通じゃない。

俺が里長の代弁者である女性を見ると、目を伏せつつも答えてくれた。

「エルフの美醜が魔力によって判断されるのはご存じでしょうか？」

ジルクがそんな自慢話をしていたな。

頷くと説明が続く。

「魔力はそれぞれに特徴があります。人に説明するのは難しいですが、色として判断しています。ですが、希に複数の色が混じりあったような魔力を持つものが生まれます」

俺たちには分からないが、それはエルフにとって醜いということなのだろう。

「そういった者たちが使う魔法は強力で、そして魔法も特殊なのです。ですが、我々から見れば嫌悪感を抱かずにはいられない。それを里の者たちは混ざりものと呼んでいます」

普通とは違う魔法を使えるという意味か？

それがエルフにとっては嫌悪感を覚えるとなると、どうしようもない。

生理的に無理とか、そんな類いの話なのだろう。

「カイルの母親であるユメリアは、一時期は里を離れてその魔法で旅芸人の真似事をしていました。その際、人間の男性との間に子供が出来てしまったのです」

アンジェが目を見開き驚いていた。

「……噂話程度には聞いたことがある。ハーフエルフという奴か」

女性エルフが頷く。

「ハーフエルフの立場というのは微妙です。ハーフエルフが生まれるということは、出稼ぎをする男たちにとって放置できない問題ですからね」

専属使用人として高値で買われるエルフの奴隷たち。

彼らが気に入られている理由の一つは、人との間に子供が出来ないからだ。

それが、少しばかり可能性があると知れば……奴隷を買う方だ
ってためらうだろう。

ためらうかな？

ためらわない気もするな。

むしろ、スリルがあるから買うとかいう連中もいるかも知れない。

「だ、だからあいつ、自分がハーフエルフだって言ったのね」

何やら冷や汗をかいているマリエを放置し、俺は話を切り上げた。

「エルフの里の厄介者か。その話は置いておくとして」

「リオンさん、そんな簡単に話を切り替えないでください」

リビアに責められたが、俺たちに出来ることは少ない。

「他人の家の事情に深く首を突っ込んでも解決できないよ。そもそも、嫌悪感を抱くな、ってエルフたちには言えないし。カイルが微妙な立場なのも理由が分かるからね。あいつ、この島を嫌っているんじゃない？」

女性が頷く。

「そうでしょうね。こればかりは貴方たちにも解決できないかと」

里長が女性に何か話しかけた。

女性は俺たちを見る。

「里長が皆さんを占っていたそうです。その結果を伝えるとのことでした。里長に出来るお礼は、こんなものしかないと」

村長の屋敷よりも質素な屋敷の中には、物も少ない。

生活は裕福には見えなかった。

「では、まず聖女様からです」

「占い？ まあ、聞いてあげるわ。一番いい結果を教えなさいよ」

こいつ本当に態度がでかい。

だが、占い自体には興味を持っているのを見ると、毎朝の占いをチェックしていた前世の妹を思い出す。

あいつもいい結果が出なければ、違うチャンネルに変えて違う占いをチェックするような奴だった。

……思い出したら苛々してきたな。

「不思議な運命の下にいるそうです。そして、運命の相手とは巡り会うもすれ違います」

「運命の相手って誰よ！」

「それは分かりませんが、既に出会っているそうです。その方とは袂を分かたれ、一緒にはなれないでしょうとのことでした。それか

ら
」

「何よ？」

「背負ったものからは逃げられません。貴女に待つののは過酷な人生だそうです。全てを手に入れるか、全てを失うか、その二つの道しか貴女にはないそうです」

マリエは啞然とし、次第に怒り始めた。

「やり直し！ やり直しを要求するわ！」

「さて、次は黒髪の貴方
」

「話を聞きなさいよ！」

黙っていたヘルトルーデさんは、興味なさそうに占いの結果を聞いていた。

「いずれ貴方には大きな転機が来るそうです。貴方の目の前に大きな困難が現れると里長が告げています」

「そう。それくらいの方が人生は面白いわ」

「それと、貴女は運命の相手と出会います。その方と共に歩むことが出来れば、貴女の困難な道は光に照らされ、頼もしい支えになってくれるそうです」

「そ、そう。まあ、気にかけておくわ」

少し嬉しそうにしているのを見るに女の子だな。

運命の相手と聞いて嬉しそうだ。

そんなことで喜べるなんて羨ましい限りだよ。

「次は貴女です」

「私か」

少し期待して待っているアンジェの方を見ると、いつもと違って可愛く見えた。

占いもたまにはいいのか？

里長の言葉を聞いた女性が少し戸惑っていた。

「な、何だ？ 早く言ってくれ」

急かすアンジェに、女性は言う。

「貴女と、そちらの方には、古の魔王すら従える勇者が守っているように見えるそうです。既に現れているのか、これから出会うのか分からないそうです」

「……勇者？」

アンジェが首をかしげ、リビアも少し戸惑っていた。

「男の子向けの物語に出てきますね。魔王を倒した勇者……え、え

つと、そんな凄い人は知り合いにいませんけど」

一気に胡散臭くなってきた。

また魔王か。

しかも古の魔王って、怒りがどうのこうのと言っていた奴じゃないか。

倒されているなら出てこないだろうに。

アレかな？ もう里長は力尽きた感じかな？ 的中率が下がっているとか村長が言っていたよね？

というか、勇者がいるなら出てこいよ。どうして俺が代わりに頑張っているの？ 本当に使えない勇者様と、従っている魔王様だ。使えない奴らだ。

「里長が疲れているなら寝かせてあげれば？」

女性は何を止める。

「だ、大丈夫です。えっと、続きもお二人一緒にあります」

この人もちょっと怪しいと思っているのではないだろうか？

微妙になった空気の中、俺たちは続きを聞く。

「貴女たち二人の運命は複雑に絡み合い、本来あるべき道から大きく外れているようです。そして、貴女たちは本来背負うべき重荷を

他者が既に背負ってくれています」

リビアが戸惑っていた。

「え、えつと、助けて貰ったんですかね？」

「はい。そして貴女も既に助けられています」

アンジェが俺に視線を向けた。

「ま、まあ、何度も助けられたこともあるが」

女性は困っていた。

「里長も複雑すぎてよく見えないそうです。ただ、お二人の近くには勇者の加護^{かこ}が見えるそうです」

アンジェもリビアも俺をチラチラ見ていた。

リビアが里長に頼む。

「リオンさんも占ってください！」

アンジェも同様だ。

「た、頼む。こいつだけ占われないのも寂しいだろう？ 気になるとかそういう意味ではなく、やはりこいつのはみんな一緒にいいからな！」

俺は里長を見るのだった。

「里長、疲れているのなら寝てもいいですよ。別にこの島をどうに
うするつもりは」

里長が俺の前で姿勢を正した。

小さい声ながら、俺に聞こえる声を出す。

しわがれて声を出すのも辛そうに聞こえる。

……無茶するなよ、婆ちゃん。俺が悪いことをしているみたいじゃないか。

「この里を救っていただきありがとうございます。貴方様はとても
優しい方ようだ」

里長の言葉に目を見開いて驚くのは、マリエとヘルトルーデさん
だった。

……文句があるのか？ いや、あるだろうな。

この二人からすれば、俺は優しくなどないのだから。

「私の占いも、貴方様の未来は見通せません。ただ、貴方様はいず
れ 大事なものを失い 過酷な」

いきなり俺に告げられたのは、望むものが全て手に入らないとい
う最低な部類の占いだった。

小声で呟いてしまう。

「さ、里長？」

もう一度だけ占って欲しいと頼み込むも、里長は黙ったままだった。

「え？ 里長？」

女性が里長を支える。

「その、お疲れのようです。眠ってしまわれました」

俺は立ち上がって里長の両肩を掴む。

「待つて！ お願いだから目を開けて！ お願いだからちゃんと教えてよ！ 不穏なことを言っただけで眠らないで！」

アンジェとリビアが俺を里長から引き離した。

「リオン、いい加減にしないか」

「お年寄りには大事にしないと「めっ！」ですよ！」

分かっているが、こんな結果は認めたくない。

認められないのだ！

マリエとヘルトルーデさんは、俺を見てとても楽しそうに笑っていた。

「いい気味ね」

「本当ね。可哀想になるわ」

可哀想と言いつつ笑っているヘルトルーデさん。

この女、やっぱり性格が悪いぞ。

「こんなの嫌だああ！ やり直しを要求する！」

黙って話を聞いていたルクシオンは、不機嫌そうに呟くのだ。

『占いなど信じていないとか言っていたのに、随分と本気で嫌がりますね。マスター、格好悪いですよ』

「五月蠅いよ！ 誰だってこんな結果は嫌だろうが！」

格好いいとか悪いとか、そんな問題ではないのだ。

俺が人生を楽しく生きるために、こんな結果は認めたくない！

そもそも、大事なものを失うとか、どういうことだよ！

因縁

エルフの浮島を離れるパルトナー！。

飛行船の中、俺は小さくなっていく浮島を見ながらルクシオンと話をしていた。

『エルフも一枚岩ではないとは面白いですね。出稼ぎをする男性と、島に残る女性では価値観も違うようですし』

「生まれた男の子を奴隷にするのが嫌、っていうまともなエルフがいて良かったよ。少しは学園の女子に見習って欲しいね」

一連の出来事は、公にしないことにした。

捕まえたエルフの男たちの処分も任せる代わりに、俺が手に入れたのはユメリアさんだ。

旅行鞆一つを持って、オロオロと船内を見ている。

「あ、あの、私はこれからどうなるんでしょうか？」

俺は手をひらひらとさせ、

「俺の実家にいって貰います。使用人を探している様子だったので、住み込みで働いて貰いますよ」

「で、でも、私はその」

自己評価が低いユメリアさんは、何事にも消極的というか引つ込み思案だ。

「エルフの美醜は人には関係ありません。知っていますよね？」

「……里では、愚図とかノロマとか言われていました。私でお役に立てるのか不安です」

エルフの里でも、こうした後ろ暗い部分があるのだと思うと悲しくなる。

まあ、学園でのエルフたちを見ていれば納得もするが。

「心配ありませんよ。それに、こっちにも色々と理由が」

俺が話をしようとする、会話を遮ったのはこちらに怒りを顔に滲^{にじ}ませてやってくるカイルだった。

「どういうことですか！」

俺に対して抗議したらしいカイルは、随分と態度が大きかった。

「何が？」

「母さんを里から出したことですよ。この意味が分かっているんですか？」

ユメリアさんが、カイルの腕にすがりつく。

「待つて。カイル、この方は私を気にかけて」

「黙っててください！　そうやっていつも騙されてきたじゃないか！　こいつがどんな奴か知っているのかよ！　学園で一番の屑野郎だ！」

カイルが叫んだことで、近くにいた人たちの視線を集めた。

「一番の屑とは酷いな」

「本当のことだろうが。殿下を公衆の面前でボコボコにしたお前が屑じゃなかったら、いったい何なんだよ！」

ユメリアさんは困ってしまい何も出来ずにいた。

そんな態度にカイルは苛立っている。

「そうやっていつも判断に迷って騙される。里でも同じだ。何も知らずにのんきだから、みんなから安くこき使われて貧乏なんだろうが！」

不満が爆発したのか、カイルはユメリアさんを　母親を責め立てた。

見ていられずに止めようとすると、

「その態度は何ですか！」

間に入ってきたのはリビアだった。

「な、何だよ。関係ないだろ。引っ込んでいろよ!」

「いいえ、見ていただけません。母親にその暴言は何ですか。謝りなさい!」

いつもより怖いリビアの姿に、カイルもたじろぐが。

「何も知らない癖に。この人のせいで僕は貧乏だった。この歳で奴隷をやっている理由があんたに分かるのか? 里でどんな扱いを受けたのか知っているのかよ! 偉そうにしているけど、何も知らない癖に!」

カイルが泣きながらこの場を離れていく。

普段の態度はそこではなく、あれが素なのかと思うと少し怖くなつた。

可愛らしい弟キャラを演じていたことになる。

追いかけようとするリビアを止めたのは、ユメリアさんだった。

「ま、待ってください。私が悪いんです。あの子の言うとおり、私が駄目だったからあの子に辛い思いをさせたんです」

周囲の視線もあるので、俺は二人を連れて空いている部屋へと入るのだった。

ユメリアさんが教えてくれたのは、里での立場だった。

「私は混ざりものです。魔力の色が混ざり合い、普通の魔法が使えない代わりに特別な魔法が使えます」

見せてくれたのは、植木鉢に手をかざすと種から芽が出てそのまま成長して花を咲かせる光景だった。

「凄いな」

俺がそう呟くと、ルクシオンも同意する。

『これを使用すれば、食糧問題は解決では？ あの里での立場が一方的に弱いとは信じられませんね』

ユメリアさんは褒められたのが嬉しかったのか、少しだけ照れていた。

「そんなに凄くありません。出来ることも限られていますから。ただ、私は混ざりものの上に、ハーフェルフであるカイルを生んでしまいました」

リビアはそれが分からないらしい。

「それがどうして駄目なんですか？」

ユメリアさんは少し迷いながらも、淡々と話すのだった。

「……混ざりものは嫌われますが、その力もあって里で生きていきます。ですが、私は外の世界を知るために旅に出ました。その後すぐに貴族様の屋敷でしばらく捕らえられ、そこで色々と酷い目に遭

いました」

リビアも何があつたのか想像できたらしい。

「里に戻ると、今度はその貴族様の子供を宿していて……周囲は生むのを大反対しました。ハーフェルフが生まれたら、エルフの奴隷としての価値が下がるから、と」

「そんなのって」

リビアが信じられないという顔をしているが、ルクシオンは納得していた。

『妊娠確率のあるエルフは、確かに専属使用人として見ると少なからず危険がありますね。価格に影響しても仕方ありません。ただし、黙っておけば分からないと思いますけどね』

ユメリアさんは首を横に振る。

「あの子の成長速度は人と同じです。すぐに大きくなります」

外見ではなくその成長速度でハーフだと分かるらしい。

「なら、なんで奴隷として売ったんだ？」

簡単な疑問を口にすると、ユメリアさんが顔を押さえて泣いていた。

「……うちは貧乏で、その年の冬を越せそうにありませんでした。だから、カイルは私に黙って自分を売ったんです」

周囲も反対しなかったのかと思ったが、里からいなくなり良かったという奴らもいたらしい。

何て陰険で愚かなことだろう。

……人間と同じだな。

「あの子が私にきつくあたるのも、色々と歯がゆいからだと思います。でも、良い子なんです。自分だってそんなにお給料を貰っていないように、私に仕送りもしてくれて」

リビアが肩を落としている。

「リオンさん、私は何も知らずにカイル君に」

俺は小さく溜息を吐く。

「……俺が話をするよ」

どうして俺がカイルの世話をしないといけないのか？

そもそもマリエの仕事である。

だが、あいつにこの手の問題を解決できるとも思えないし……俺が動かないと駄目だろう。

船内にある狭い通路。

そこに隠れるように座っていたカイルを見つけた俺は、声をかけるのだった。

「おい、糞ガキ」

「……何だよ、屑騎士」

このガキ、まったく可愛くない。

「お前の母ちゃんの話だ」

その尖った耳をピクリと動かすカイルは、俺の話を黙って聞くのだった。

「俺の実家である男爵家は、屋敷を建て直したばかりでね。広くなつたから、新しい人手が欲しい。住み込みの使用人として、ちゃんと生活が出来るように手配する」

「……信じられるかよ。どうせ、母さんの外見を見て気に入ったから困い込むんだ。お前も、お前の家族も信じられるもんか」

確かに外見は優れているし、その心配は仕方がないかも知れない。

「俺は実家にあまり戻れない。男爵は 親父は、身なりは野蠻だけど、アレでも純情だ。お袋を大事にしているから浮気はしらないと思う。……たぶん」

たぶんと言ってしまい、カイルが顔を上げて睨んでくる。

ちょっと怖い。

「信用できない」

「俺は約束を守る男だ。それに、あの人を手元に置く理由もある」

俺が彼女を引き取る際に、エルフたちだって少し抵抗があった。

何しろハーフエルフを生んだ女性だ。

外に出して、またハーフエルフが生まれたらどうなるか？

男連中はかなり抵抗したが、里長が黙らせてくれた。

「エルフ共への切り札だ。俺に何かすれば、秘密をばらすという脅しだな。俺の手元にいるだけで価値がある。そんな人に酷いことはしない」

本気で秘密をばらしてもあまり意味はないが、手元に置いてエルフたちが警戒する程度でいいのだ。

エルフたちには「俺はお前たちの弱みを握っているぞ」と思わせおけばいい。偉そうなエルフたちへの嫌がらせが出来れば満足だ。

カイルは黙っていた。

「会いたいなら勝手に会いにいけ。お前だけなら領内に入るのを認めてやる。ただし、マリエは駄目だ」

俺があいつを嫌いだから。

カイルが涙を拭っている。

「……あの人はお人好しで騙されやすいんだ」

「そうだな」

「自己評価が低くて、弱気で……なのに、優しいから憎めない。本当に酷い親だよ」

本気で嫌ってはいないのだろう。

カイルは立ち上がって俺に頭を下げてきた。

「子爵様、どうか母をお願いします」

こいつなりに、母親であるユメリアさんを心配していたのだろう。

俺は頷いてカイルを安堵させる。

そして、聞いてみたかったことを尋ねた。

「なあ、お前が以前に主人がコロコロ変わっていたのって、もしかして」

カイルは少し呆れたように答えるが、目元を隠している。

泣いているところを見られたくないのだろう。

「信用できるご主人を探すために決まっているでしょう。せっかく、

王太子殿下を虜にした女性を主人に持てたのに、あんたのせいで全部パーだよ」

「めんど」

軽いノリで謝罪すると、カイルが睨み付けてくるが溜息を吐いた。

「本当に嫌な奴だよね。あのままいけば、僕の人生は安泰だったのに」

こいつ、色々と計算している奴だったのか。

「マリエを見限らないのか？」

「……新しい主人を探すのは疲れるからね。それに、今では聖女様だから、一緒にいれば僕だっていい目が見られるよ。それと、あの人は駄目なようでしたっけりしているし」

そのマリエは借金で首が回らなくなっているのだが？

それを知らないカイルでもないし、実はマリエのことが気に入っているのだろうか？

カイルが俺に忠告してきた。

「それから、あの公国のお姫様には注意した方がいいよ。あの人が何か企んでいるみたいだからね」

「ヘルトルーデさんが？」

「詳しくは知らないけど、あんたたちがいなくなってから、僕たちに声をかけてきたんだ」

俺たちが遺跡に入っている際に、カイルたちに声をかけていた？

学園に戻つてくると、俺は急いで王宮へと向かう準備に取りかかった。

服を着替えている俺の横で、ルクシオンが見つめてくる。

『あの右腕の調査が終わりました。壊してよろしいですか？ いつ壊しますか？ 今すぐに実行しますか？』

「あゝ、五月蠅い！ お前、本当にどうしたよ？」

部屋に運び込んだ鎧の右腕は、新人類が旧人類と戦う際に使用したパワードスーツらしい。今は箱に入れている。

その黒くトゲトゲとした腕には、どこか見覚えもあるが思い出せない。

『アレは存在してはいけない道具です。すぐに破壊するべきです。いえ、今すぐに破壊しましょう』

「破壊するために、お前の本体でも主砲の一撃が必要だろ？ すぐに来るかよ。次の休みにでも実行するから、先に報告に行かせてくれ」

『見ているだけで気が狂いそうな破壊衝動があります』

「鍵もかけているし、放置でいいだろ。見張りたくないなら、それでもいい。とにかく、今は王宮に急ぐぞ。くそ……どうして学生の俺が働かないといけないんだ」

見張らせて、ルクシオンが壊れたらたまったものじゃない。

部屋には鍵もかけているし、きっと大丈夫だろう。

『中身はオッサンでは？』

最近、右腕のせいで攻撃的になっているルクシオンは、言葉にも棘^{とげ}がある。

箱に入れた右腕を部屋に残し、俺はルクシオンを連れて王宮へと向かうのだった。

こんな腕だけの鎧など、誰か興味を示すわけでもない。

それよりも急いで呼び出しに応えないと。

「はあ、仕事したくない」

『最低な発言ですね。私もここにいると狂いそうです。さっさといきましょ』

こいつは本当に人工知能なのか？

何か落ち着きがないというか、妙に感情豊かというか……。

王宮の廊下。

今回の一件の報告をするためにやってきたわけだが、俺はくたびれてしまった。

外を見れば暗くなっている。

「もう夜じゃないか」

『報告は建前で、女子とのお茶会が待っていましたね』

騙し討ちのように待っていたのは、学園を卒業した女性たちとのお茶会だ。

有力貴族や、最近力を付けてきた貴族たちの娘が待っていた。

報告は十分程度で終わったのに、お茶会は数時間も続いたぞ。

「疲れたな。とにかく帰るか」

お茶会に出てきたのは、男爵から伯爵家の令嬢たちだ。

ただし、みんな専属使用人を連れている。

俺に聞いてくるのは、将来どのように収入を得るのかというお金関係だ。

合コンで年収を聞かれる感じ？

もう頭が痛かったよ。

人が少ない王宮の廊下を歩いていると、以前出会ったときとは違うドレス姿の王妃様　ミレー又様がそこにいた。

「あら、子爵殿はお疲れのようですね」

後ろには数人が付き従い、無表情で立っている。

服装を整える。

「これは失礼しました。王妃様におかれましては」

「子爵殿、少しお時間をよろしいかしら？」

……今度はミレー又様に呼び出されたが、内心は嬉しかった。

「喜んで！」

微笑むミレー又様についていく俺を見ていたルクシオンが呟く。

『本当に分かりやすい人ですね』

王宮内の一室。

ミレー又様と向き合う形で席に着いた俺は、出された紅茶を飲む。

……俺の出すものよりもうまい。

ちょっとした敗北感を覚えつつ、ミレー又様の話に耳を傾けていた。

ルクシオンは黙って俺の側で隠れている。

「ヘルトルーデ殿下とは仲良くやっているのかしら？ 殿下連れ出して冒険に出るなんて少し焦ったわよ」

「無理矢理ついてきましたけどね。許可も出たみたいですが？」

ミレー又様は少しだけ表情が曇^{くも}った。

「王宮内にも色々な考えを持つ人がいますからね。私としては、留学させている場合ではないと思うのだけれどね」

ミレー又様は反対したが、誰かが許可を出したのだろう。

自分の息子を通っている学園に、宣戦布告した国の王女殿下がいれば心配にもなる。

ヘルトルーデさんの安全についても気を配る必要がある。

馬鹿がヘルトルーデさんを傷つけければ国際問題だ。

彼女が学園にいる時は、王宮から派遣された女性騎士たちが護衛をしている。

「殿下とは私も話をしました。口には出しませんが、過去の侵略について随分と恨みを持っていますね」

自分で見たわけではないが、伝え聞いている王国の所業。

それは俺が聞いても眉をひそめるものだっただ。

だが、ミレーヌ様に「酷いっすよね」なんて返事は出来ない。

黙っていると、ミレーヌ様が話を続ける。

「私はね、子爵殿　いえ、リオン君。公国がこれで諦めるとは思えないのよ」

「……………でしょうね」

積みもり積みもった恨みは簡単には消えない。

「親衛隊の件でも迷惑をかけましたね。それから……………ラーファン子爵家の話は聞いたかしら？」

首を横に振ると、ミレーヌ様は頬に手を当てて困ったという顔で俺に結末を教えてくれるのだった。

「ユリウスたちが走り回って解決はしたのだけれど、ラーファン子爵家の　聖女様の借金が増えていてね。本来ならお取り潰しも考えるのだけれど、さすがに聖女様の実家を潰すのは反対意見も多かったのよ」

……………あいつ呪われているんじゃないの？

解決したのに借金が増えていたとか、マリエが聞いたら卒倒するのではないだろうか？

絶望した顔をしていたら、笑ってやりたい。

「王宮と神殿で借金を立て替えたのはいいのよ。けどね、来年度の予算とか色々あるからね」

聞けば、マリエに対して支払われる予算　まあ、自由に使えるお金というのは、大幅にカットされることになった。

話を聞いているだけで紅茶がうまい。

最高のお茶請けだ。

今日は気分よく眠れそう……。

「ここからが本題なのだけれど、聖女様の親衛隊長は子爵殿　リオン君でしょう。責任問題になってきているのよね」

「……へ？」

「就任時期や色々と考慮しても、おとがめなしも駄目だと王宮や神殿から声が上がっているの」

雲行きが怪しいぞ。

俺に一体どんな責任があるというのか？

「ま、待ってください。俺はあいつの護衛が仕事でして、借金に關してまで色々と言われるのはちょっと納得できないです」

「それは分かっているのよ。分かっているても……責める人はいるのが世の中よ」

異世界も、元の世界と同じだ。

……世の中腐っている。

「急な出世を妬む人もいますからね。私としては、自分が陞爵を推薦した騎士が責められているのは見ていられません。出来る限りフオローはさせて貰うわ」

「ありがとうございます　え？　す、推薦？」

「ええ、そうよ。ほら、以前の空賊退治の時にね。ブラッド君とグレッグ君が私の所に来て、リオン君の手柄について話をしてくれたの。その後の公国との件もあつたから、私も推薦したわ」

眩しい笑顔を俺に向けるミレーヌ様……違う、そうじゃない。

俺が望んでいたのは出世ではないんだ。

「あ、あのですね、俺は出世なんかよりも　」

「出世よりも？」

首をかしげるミレーヌ様が輝いて見えた。

この人年上なのに可愛いぞ！ 中身は俺の方が年上かも知れないが、何だか急にクラクラしてしまった。

ここで出世なんかいらんと言って、この人を傷つけていいものか？ もしかしたら、出世させたことを後悔するかも知れない。

この人を悲しませたら駄目だ。

咄嗟にこの場を乗り切る言葉を俺は口にする。

「貴方が欲しい」

「ちょ、ちょっと！ そ、そそそ、それは駄目よ。だって、私とりオン君は親子ほども年が離れているのよ」

年齢差は二十歳未満……いけるのではないだろうか？ というか、手の平返しをした女子よりもこの人は可愛いぞ。

俺はミレー又様の手を両手で包み込むように握る。

「それでも俺は貴方が」

「っん！」

わざとらしい咳払いが聞こえてくる。

誰がやったのか分からないが、ミレー又様お付きの侍女の誰かだ。

いかん。ノリで口説くところだった。

ここが王宮だというのを忘れていた。

ミレーヌ様が顔を赤らめている。

この人、結構反応がいいな。からかいたくなる。

「……またそうやって年上をからかう。リオン君の悪い癖ですね」

王妃様でなければなあ……。

話題を変えるミレーヌ様がヘルトルーデさんの話に戻った。

「それはそうと、ヘルトルーデ殿下について気になることがあります」

リオンが王宮に出向いた知らせを受け、学生寮には三人の亜人種
専属使用人たちが集まっていた。

一人は、リオンの姉であるジェナの専属使用人【ミオル】だった。

猫耳を持つ背が高く筋肉質の男は、他の仲間と共にリオンの部屋の
前に来ていた。

「カイルの奴、裏切りやがった」

ミオルの苛立ちを慰めるように、他の二人が話しかける。

「聖女様の使用人だ。下手な真似もさせられないだろ」

「それにしても、鍵なんてよく手に入っただな」

リオンの部屋の鍵を手に入れたミオルは、笑みを浮かべている。

「あの女がこの部屋に出入りをするときにちよつと鍵の形を、な。馬鹿な女は扱いやすくていいぜ」

鍵を開けてリオンの部屋に入ると、周囲を警戒しつつ中に入った。

一人は部屋の外で見張りを行い、ミオルはもう一人と一つの箱を確認する。

「これだな」

「こんな物、いったいどうするんだ？」

「俺が知るかよ。届ければ金になる。それで十分だ。それに、あの糞野郎への仕返しにもなるからな」

リオンは専属使用人たちからも嫌われていた。理由は、学園祭の時にミレーヌに手を出そうとした専属使用人たちをボコボコにしたからだ。

ちゃんとした理由もあつての行動だが、それでも専属使用人たちからすればリオンというのは嫌な男子、なのである。

その腹いせが、今回の行動に繋がっていた。

三人は部屋の中から箱を運び出すと、そのまま荷物を運ぶように

頼まれた体^{てい}で学生寮を出て行くのだった。

自室に戻ってきた俺は、部屋の様子を見て髪をかく。

「……最悪だな」

『確かに盗まれたのは痛いですね。ただ、アレを利用する人がいるのでしょうか？』

「見張らせていればよかったよ。それにしても、嫌いすぎじゃないか？」

盗まれたのは黒い鎧の右腕だ。

王宮から戻ってくると盗まれていたあとだった。

『見ていると破壊衝動を抑えられません』

「何か理由があるのか？」

『……我々はあれらと戦うために作られた、と言っても過言ではありませんからね』

深く刻み込まれた敵対心には脱帽するしかない。

「誰が盗んだのか調べる。見つけ次第破壊する」

『アレを今の新人類がうまく扱えるとは思えませんがね。下手を

しなくても使うだけで死んでしまいますよ。さて、破壊するためにも探してみるとしましょう」

ルクシオンが調査を開始すると、すぐに犯人が判明する。

『……マスター、どうやら姉上の専属使用人が関わっているようですよ』

すぐに部屋に入った存在を特定したルクシオンだったが、部屋にノック音がする。

警戒しつつドアを開けると、そこには顔を腫らしたカイルが立っていた。

服もボロボロである。

「喧嘩でもしたのか？」

「相変わらずのんきだね。誰のせいでこうなったと……」

ブツブツ文句を言うカイルを部屋に入れる。

「待っている。すぐに治療をする」

「怪我はご主人様に治して貰うからいいよ。それより大事な話だ。僕もさつき解放されたんだけどね。この部屋にあったあの鎧の右腕を盗ませたのは、ヘルトルーデ殿下だよ」

ルクシオンが俺に報告をしてくる。

『マスター、公国行きの飛行船が急遽出発したそうです』

「ヘルトルーデさんはどうした？」

『女子寮にいます。我々からアレを奪って、そのまま飛行船に乗せた可能性が高いですね』

そんなことが出来るのか？

飛行船を用意して、公国に送りつけるなどヘルトルーデさん一人には無理だ。

カイルが俺を急かす。

「あの人、何か企んでいるよ。とりあえず報告はしたからね」

専属使用人たちを裏で動かしていたのは、ヘルトルーデさんだと教えてくれたカイルは部屋を出て行く。

部屋に残った俺は、ルクシオンと今後についての話し合いだ。

『飛行船を手配するのは、ヘルトルーデでは難しいでしょう。専属使用人たちでも難しいのなら、関わっているのは王宮の貴族になります』

脳裏によぎったのはミレーヌ様の言葉だ。

王宮内 色々な考えを持つ人間がいる、と。

「誰かが手助けをした？ いったい誰が？」

『ミレーヌ本人かも知れませんよ』

「ないな。あの人がそんな汚いことをするはずがない」

『女性は男性を騙すのが得意らしいですよ』

「……あの人が俺を騙していたなら、もう何もかも放り捨てて引きこもる」

『マスターらしい回答ですね。それで、どうしましょうか？』

俺はすぐに、アンジェに相談することにした。王宮内の事情に詳しいのは、俺の知り合いでアンジェくらいだからだ。

女子寮。

ヘルトルーデが使用している部屋に乗り込んだアンジェは、急いできたために呼吸が少し乱れていた。

そんなアンジェを涼しげに眺めるヘルトルーデは、椅子に座って脚を組んでいる。

「随分と慌てていますね。無作法はこの際許してあげますよ」

「……リオンから聞いた。使用人たちを買収したらしいな」

ヘルトルーデは微笑むのだった。

「さあ？ 何のことかしらね」

「とぼけるつもりか？」

「……貴方こそ、証拠もないのに人を疑うのはよくないわ」

証拠はないと言い張るヘルトルーデに、アンジェは呼吸を整えてから口を開いた。

「買収した三人。そして、学生寮から荷物を持ち出すところを男子生徒が目撃している。お前が使用人たちに声をかけているところも見ている生徒がいる」

「専属使用人というのが気になっただけよ。みんな楽しそうに連れ回しているから、私も欲しくなって話を聞いたの」

クスクス笑っているヘルトルーデに、アンジェは顔を近付ける。

「何を考えている？ 本気で戦争でもしたいのか？ リオン一人に負けたお前らに何が出来る」

笑みを浮かべているヘルトルーデは、リオンの弱点について話をする。

「随分と高く評価しているのね。短い間でしたけど、私も子爵を見てきたわ。普段の様子は凡人ね。でも、騎士としては凡人以下の出来損ないよ」

アンジェが眉を動かし、不快感を示す表情を見てヘルトルーデは

更に笑う。

「だってそうでしょう？ 心優しい騎士は理想よね。けど、戦争時に人を殺せない騎士なんて、役立たずでしかないわ。バンドルとは大違いね」

ヘルトルーデは、リオンをよく見ていた。

「ロストアイテムを手に入れた騎士。あの使い魔もロストアイテムと関わりがあるのよね？ 彼の命令しか聞かないとなると、凄い兵器も宝の持ち腐れよね」

リオンが本気になれば アンジェはそう言えなかった。

優秀だろうと、まだ騎士として未熟なのだ。

この世界は普通に戦争がある世界だ。

人を殺したことがない騎士など、一人前とは呼べない。

「……そんなに私たちが憎いか？」

ヘルトルーデの笑みが消える。

「私たちは忘れない。貴方に分かるの？ 子供を、親を 家族を殺された領民たちの悲しみが？ 一方的に私たちを攻めた癖に、数十年で許されると思わないで！」

アンジェはヘルトルーデに対して、

「おめでたい奴だな。お前は本当に何も知らないらしい。留学を決めた王宮は正しかったよ。お前に必要なのは」

アンジェの台詞を止めたのは、部屋に入ってきた女性騎士たちだった。

「そこまです！ アンジェリカ様、ご同行願います」

「何？」

女性騎士たちはアンジェを囲む。

「お前たち何をしている？」

そんな問いに、女性騎士たちは笑みを浮かべ答えた。

「いけませんね。ヘルトルーデ王女殿下に乱暴を働くなど」

「公爵令嬢ともあろう方が品のない」

「さあ、こちらへ」

アンジェは全て理解する。ヘルトルーデの護衛であり、彼女の監視役だと思っていた女性騎士たちは、既に手駒にされていたのだと。

苦々しい顔で女性騎士たちに拘束される。

アンジェは女性騎士たちから、視線をヘルトルーデに向けるのだった。

「お前たち、まさか王宮にまで」

王宮内に公国の協力者がいると聞いてはいたが、アンジエも騎士を動かせる人物だとは思っていなかった。

立ち上がったヘルトルーデは、アンジエの耳元で囁く。

「今度はホルファート王国を血に染めるわ。そして、この大地を」

アンジエは最後の言葉に目を見開く。

「沈めてあげる」

どうでもいい一文が、結構重要だったりすることがある。

それを今、俺はもの凄く実感していた。

朝方。男子寮の自室。

武装した騎士や兵士たちが乗り込んでくると、俺は乱暴に拘束されるのだった。

「大人しくしろ、この反逆者が！」

無抵抗なのに何発か殴られ、床に転がるとルクシオンが俺を見ていた。

大丈夫だとジェスチャーを行い、俺は大人しく拘束された。

昨日の晩にアンジェが拘束されたと聞いて、嫌な予感がしていたのだ。

嫌な予感によく当たると聞いていたが、本当に最悪だ。

「成り上がって、すぐに地位を奪われる気分はどうだ？」

「怪しいと思っていたんだ。お前のような小僧が子爵などあり得ない」

「裏で散々悪事に手を出していたらしいな。取り調べはきついものになると覚悟しろよ」

縛り上げられ、部屋の外に出ると男子生徒たちが見ていた。

その中には、専属使用人であるミオルの姿もある。

俺を笑っていやがった。

「糞野郎が」

俺の言葉に、ミオルは益々楽しそうに笑っていた。

背中を蹴られ倒れる。

髪を引つ張られ無理矢理立たされ、歩かされると外には女子生徒や専属使用人たちの姿もあった。

「いい気味よ」

「最初から怪しいと思っていたのよ」

「あいつが子爵なんて、私は最初から疑っていたわ」

言いたい放題の生徒たちが作った道を歩くと、ゴミなどを投げられた。

……ここまでされるいわれはない。

だが、そんなことは関係ないのだ。

俺はヘルトルーデさんを　公国を甘く見ていた。

俺を後ろから蹴り飛ばした騎士が言う。

「リオン・フォウ・バルトファルト子爵……いや、今はただのリオンだったな。覚悟しておくことだ、この犯罪者が」

罪状は色々とあるが、どれも言いがかりに近いものばかりだった。

俺は拘束され、牢屋にぶち込まれることになったのだ。

「こんな方法で降格なんかしたくなかったな」

軽口を叩くとゴミが飛んできて、おまけに蹴りまで飛んでくる。

人混みをかき分け、リビアが姿を見せた。

「リオンさん！」

俺の名前を呼ぶリビアに小さく手を振り、そしてゴミを投げつけられながら歩く。

……本当に、最低なこの乙女ゲーの世界は、最低な世界だよ。

裏側

ファンオース公国の上空。

王国から到着した一隻の飛行船に乗り込むのは、元黒騎士【バンデル・ヒム・ゼンデン】だった。

王国に潜り込んでいた工作員から、ある品を受け取る。

「これが姫様から？」

「はい。必ずお届けするようにと」

バンデルは額から頭頂部にかけて髪がなく、体中に傷がある。

筋骨隆々。

初老とは思えないほどに逞しい騎士だった。

受け取ったのは、黒い刺々しい鎧の右腕だ。

「これは……まさか、ロストアイテムか!？」

「間違いありません。あのバルトファルトが隠し持っていたそうです」

飛行船に乗り込んだのはバンデルだけではない。

以前、王国との使者を務めた伯爵の【ゲラット】もいる。

手で顎をさすり、なくなってしまった髭を惜しんでいる様子の手癖。

その目は復讐に燃えていた。

「あの【外道騎士】が隠し持っていた？ それだけですか？ 姫様ももう少しマシな物を送り届けて欲しいものですね」

外道騎士 公国でのリオンの二つ名だ。

その行いが、騎士として道を外れているために二つ名となった。

敵を殺さなかったリオンだが、それにより騎士や兵士たちは公国の貴族や国民から随分と罵倒された。

リオンが言った通りだ。

騎士として、バンデルは既に老いばれ扱いを受けてしまっていた。

黒騎士という称号も失っている。

いったいどんな道具なのか分からない右腕。

だが、届けられた書状を見るゲラットの瞳が見開かれ、黒い刺々しい右腕と書状を何度も視線が行き交っている。

「ま、まさか」

「どうした？」

バンデルが腕を組んで問うと、ゲラットは笑みを浮かべていた。

「黒騎士殿。いえ、元黒騎士殿は 命を捨てる覚悟はありますか？」

ゲラットの言葉を鼻で笑うバンデルだった。

「既に騎士として死んだ老いばれだ。姫様を助けるためなら、何だってする」

「結構！ では説明しましょう。これは古代 いえ、神話の時代に存在した鎧の一部です。王家でも一部しか知らないロストアイテムとのことです」

全員の視線が右腕に向けられると、ゲラットは両手を広げた。

「何と素晴らしい贈り物でしょう！ ヘルトルーデ王女殿下は、その役目を十分に果たしました。これで妹君 【ヘルトラウダ・セラ・ファンオース】王女殿下の敵は存在しません！ 外道騎士も、今度こそ終わりですよ！」

ヘルトルーデの妹 ヘルトラウダ第二王女殿下。

公国の空を埋め尽くす艦隊とモンスターたちを率いる、公国の切り札である。

バンデルは目を細め右腕を見た。

「ヘルトルーデ様をお救いする。そのためになら、この命を捧げてでも」

髭の仇討ちが出来ると喜ぶゲラットの横で、バンドルは拳を強く握りしめていた。

王宮の地下牢。

ジメジメしたその場所は、ひんやりと冷たくて寒い。

空気は淀み、いつまでもいたい場所ではない。

囚人の格好をしなければいけないので、両手には手錠がされていた。木製の板に手首を通したタイプの奴だ。

欠伸をしていると、看守が俺に合図を送ってくる。

どうやらお客らしい。

その人物を見た俺は、文句を言ってやりたかった。

「見損なったぞ、バルトファルト」

堂々とした声の主は、王宮の主になったかも知れない男。

ユリウス殿下だった。

俺を前に憤っていたが、俺もお前がこの場にいることが腹立たし

いよ。

「……誰？」

からかつてやると、顔を赤くして名乗ってくる。

「ユリウスだ！ ユリウス・ラファ・ホルファート！ お前、裏切っていたとはどういうことだ！ 卑怯者だとは思っていたが、こんなことをする奴だとは思わなかったぞ！」

言っていることが滅茶苦茶だ。

俺がいくら小狡い奴でも、王国を裏切るとは思っていなかったのだろう。

……でも、よく考えると裏切ってもおかしくない下地はあるよね。

原因お前だよ。お前のせいだぞ。

いや、少し待て。こいつよりも、婚活が原因かも知れない。婚活で酷い目に遭う度に、こんな国捨ててやるって何度思ったことか。

「裏切ってないです。冤罪えんざいですよ。助けて、王子様」

「軽口が叩ける内はまだ元気だな。話して貰うぞ、バルトファルト」

どうやら助けに来たわけではないらしい。

「何を？」

「お前、俺の前だというのに態度がでかいぞ」

「裏切り者扱いで処刑する国に未練があると思うのか？　いつか絶対に後悔させてやるから覚えておけよ」

「……実は話がある」

こいつ俺の話を流しやがった。

「お前の所持していたパートナーとアロガンツは、王国の騎士団が押さえている。動かせないらしいが、そこは問題じゃない」

俺にしてみれば十分に問題だ。

まあ、ルクシオンが対処してくれるだろう。

「お前を擁護する動きもあるが、王宮内の動きがおかしい」

俺からすればいつも王宮はおかしい。

俺を出世させるとか、出せさせるとか。とにかく今だけおかしいとは思えなかった。いつもおかしいから、正常なときがあったら教えて欲しいくらいだ。

「それで？」

「……俺も今の王宮がおかしいのは理解している。バルトファルト、何故お前は裏切った？　お前の目的はいったい何だ？」

俺を裏切り者扱いとか酷すぎる。

「冤罪だっって言っているだろうが。俺を捕まえた奴がいるの」

「何!？」

何でお前が驚くんだよ！ お前、王宮で暮らしていた王子様だよ
ね？ もっと想像力を働かせようよ！ お前ちよっと純粹すぎるよ。

「俺が裏切ると思ったのか？ 裏切るならもつとうまく裏切るね」

「……確かにそうだな。お前ならもつと相手が嫌がることをする」

納得してくれたユリウス殿下に腹が立つ。

お前、いったい俺の何を信用しているの？

ユリウス殿下は俺に話す。まるで相談しているみたいだ。

「俺は戦争を経験していないが、まるで戦争前の雰囲気だと思ったよ。動くとすれば公国か？」

それ以外にどこと戦争を、なんて言おうとしたが口を閉じた。

思い出してみれば、王国は国境というか 戦場をいくつも抱えている。いくつもの国と戦っている。

公国はその内の一つでしかない。

だが、公国の可能性が一番高い。本当に、どうしてシナリオ通りに進もうとするのか。

「……修正力って奴かな」

俺の呟きにユリウス殿下が戸惑っていた。

「修正？ 何を言っている、バルトファルト？」

「こつちの話だよ。公国が一番可能性は高いじゃない？ 俺は捕まっているからよく分からないけど」

ユリウス殿下が顎に手を当てて何やら考え込んでいたので、お願いしてみる。

「ねえ、出してよ」

「それは無理だ。今の俺には権限がない。持っていたとしても、裏切り者を解放できない」

使えない王子様だ。まあ、出して貰っても困るけどね。

それにしても……公国との間で戦争が起きようとしている。切り札は王国内にあるというのに、どうして彼らは攻め込んできた？

まるで本当に物語の修正力ではないか。

「……本当に嫌な世界だ」

俺の呟きを、今度は聞き流してしまうユリウス殿下は急いで地下牢から出て行く。

このまま物語通りに進むのなら、逃げるしかない。

俺 いや、ルクシオンでも、公国の切り札には勝てないのだから。

そんなユリウス殿下と入れ違いで地下牢に来るのは ヘルトルーデさんだった。看守に何かを渡すと、席を外していく。

その際、俺に目配せをしていた。

それより、この人は堂々と王宮に乗り込んできたのか？

「随分と酷い目に遭っているわね」

「誰かさんのせいだね」

「私じゃないわ。確かに貴方を拘束するように頼んだけど、ここまで厳しい扱いをしたのは王国の貴族たちよ」

原因はお前だろうに。俺がふて腐れていると、鉄格子に近付いて顔を近付けてくる。人が弱った時を見計らって近付いてくる 詐欺師の手口だな。

「出してあげましょうか？ こんな国に仕えるよりも、公国に従いなさいな。好待遇を約束するわ。貴方が願ってやまない、平穩無事な人生を送らせてあげる」

体がピクリと反応してしまった。

「愚かよね。公国を侮り、派閥争いに利用する王宮の貴族たちは見

ていられないわ。私を利用して、貴方を潰しておきたかったのよ。自分たちがいったい何をしているのか、分かっているのね。ここまでうまくいくとは、正直思わなかったわ」

同じ殿下でも、ユリウス殿下とは大違いだ。俺が何を求めているのかよく分かっている。

「私の前に膝をつきなさい。私の騎士にしてあげる。腐敗した王国に尽くすよりも、きつと貴方の願い通りになるわよ。地位も名誉でもない、平穏無事な人生を約束するわ」

顔を向け、微笑んでいるヘルトルーデさんに俺は。

「お断りします」

微笑みから少し苛立ちを含んだ笑みに変わるヘルトルーデさんは、俺が断る理由を聞きたいらしい。

「そんなに王国が大事かしら？ 貴方、領主貴族よね？ 実家ごと寝返ってもいいのよ」

「魅力的な提案だが、それを実行するか怪しい奴と取引するつもりはない」

そもそも、俺って公国に恨まれているからね。ついでに言えば、俺を貶めたのはお前だ。

ルクシオンも会話に加わってくる。

『マスターを恐れて捕らえさせたのは、貴方たちでは？ 弱ったと

ところで手を差し伸べるなど典型的ですね。判断力を喪失していると思いましたが?」

ヘルトルーデさんがルクシオンに視線を向けた。

「嫌な使い魔ね」

『貴方が本気でマスターを取り込むつもりなら 約束を守ろうと
していたのなら、私はマスターの説得に協力しましたよ』

「……本当に嫌な使い魔。私が本気で取り込むとは思っていない癖
によく言っわ」

つまり、今までの話は嘘だった、と。

悲しいな。

ヘルトルーデさんが鉄格子から離れ、そして冷たい声をかけてく
る。

「誇っていいわよ。私たちの障害になり得ると判断されたのだから。
愚かな王国と一緒に沈むといいわ」

地下牢から去って行くヘルトルーデさんの背中を見送り、俺はベ
ッドに横になる。

「随分と嫌われたな」

去って行くヘルトルーデさんの背中、少し寂しそうに見えたが
気のせいだろうか?

『どうでしょう？ 本当に嫌っていたら誘いはしないと思いますよ。彼女なりに罪悪感があるのでは？』

話をしていると戻ってきた看守が俺に話しかけてきた。ルクシオンは姿を消す。

「子爵様、コーヒーと紅茶、次はどちらがいいですか？」

「紅茶で。次はいい茶葉で頼む」

「いや、高価な茶葉なんてここにはありませんよ」

「それにしても、親衛隊長からいきなり囚人だ。俺の人生、いったいどうなっているのかな？」

「それはさすがに私も驚きですよ。王国始まって以来じゃないですか？」

まったく嬉しくない。

看守が再び外に出て、紅茶の用意に向かうと俺は欠伸をした。再び、ルクシオンが姿を見せた。

手錠を外してクルクルと回して遊ぶ。

『マスターは本当に面白いですね』

「放っておいてくれ。それにしても、ミレーヌ様と親しくなっていたのはよかったな。あのまま捕らえられて拷問にかけられていたら

笑えなかったぞ」

『その時はいつでもご命令ください。すぐにこの大陸を沈めて見せますよ。もしくは、マスターの関係者以外をこの大陸から』

「ストップだ。俺は大量虐殺なんて嫌だぞ」

『……お優しいことで』

忘れがちだが、こいつは見つけたときに「新人類なんか殲滅^{せんめつ}してやるよ」なんて言っていた奴だ。

十分に危険な存在だった。

だが、こんなルクシオンでもラスボスには勝てない。

負けはしないが 勝つことは出来ないだろう。

最後に必要なのは、聖女の力とリビアの力、そして「愛」^愛なのだから。

それはそうと、俺がここでいたい何をしているのか？

全ては捕らえられたその日に話が戻る。

さて、これはいったいどういうことだ？

目の前にいるのはギルバートさんと ミレーヌ様だった。

この組み合わせは珍しいと思ったが、思い起こせばミレーヌ様は公爵家と繋がっていた。二人が一緒にいてもおかしくない。

王宮に連れてこられた俺は、そのまま別の騎士たちに預けられ王宮内の一室で二人を前にしてテーブルを囲っている。

「ギルバートさん、俺って捕まっただけですけど」

俺の疑問にギルバートさんは安堵の表情をしていた。

「話せば長くなるが、簡単にまとめると公国が君を脅威と判断した結果だ」

どうして公国の判断で俺が捕らえられるのか？

もしかして、王国は公国の言いなりですか？

ミレーヌ様がその後の説明を引き継ぐ。

「リオン君、私は言いましたよね？ 貴方の出世をよく思わない者たちがいると」

出る杭は打たれる。

俺のような異例の出世を遂げた若造が気に入らない奴らが多い。

そんな妬みやら嫉妬を、公国に利用されたのだろうか？

「王宮も一枚岩ではないわ。色んな派閥が、それぞれの思惑で動い

ています。その意味が分かるかしら？」

「公国の利害と一致した？」

ギルバートさんが頷く。

「そうだ。ユリウス殿下の失脚は、公爵家にとっても痛手だった。派閥は縮小し、他の貴族が力を付けてきている。その派閥が公国と繋がっていた」

何をやっているんだと思った俺に対して、不思議なことではないとミレーヌ様が言う。

「リオン君、彼らにとって脅威なのは 公国よりも貴方なのよ」

「は？ え、でも」

俺が驚くと、ギルバートさんが呆れていた。

「考えてもみなさい。飛行船数十隻を相手に完勝してしまうということは、君は一人でそれだけの軍事力を持っているのと同義だ。君が王国に謀反を企てるつもりがないのは知っている。だが、それを全員が信じると思うかな？ 信じたとしても、自分たちと敵対しないと言えるだろうか？」

……確かに警戒されても仕方がないが、公国との戦争を軽く見ていないか？ いや、少し待て。少し前まで、公国は侮られていたのでは？

「俺に負けた公国を侮っていたのでは？」

「確かに笑い話にする連中もいるが、戦争を経験してればそれがいかに脅威かも理解できる。口には出さないが、相当焦っていたのは確かだ。言ってしまうえば、公国は君や聖女よりも脅威度が低い。君たちのことを危惧した派閥が力を付けたということだ」

不思議に思っていると、ルクシオンが二人に見えないようにアドバースをくれた。

『マスター、公国の脅威を本当の意味で理解しているのは、現時点でマスターだけのようです。マスターに負けた公国よりも、公国に勝ってしまったマスターを警戒するのは仕方ありません』

「それで俺を冤罪で捕らえたと？」

「間一髪だったよ。アンジエから連絡を貰う前にこちらも動いてはいたけど。王妃様と相談して、我々は君を地下牢へ捕らえることにした。正確に言えば、捕らえたと見せつつ保護した形だ」

「貴方の政敵は、なりふり構ってられないの。数ヶ月前とは状況が違っわ。リオン君、貴方は暗殺されてもおかしくなかったのよ」

俺がギョツとすると、ルクシオンの奴が軽い感じで、

『はい。事実、怪しい動きがありましたね。暗殺か、情報収集なのかまだ判断が付きませんでした。これで確定ですね』

おい、ふざけるな。もっと早く教えろ。

『どの道、私が守るのでマスターの暗殺は不可能です。確定してか

らお知らせしようかと』

もしかしてこいつ、俺が捕まったらこうなると分かっていたのか？

『まあ、そうですね。危なくなれば救出すればいいだけです。王国を見限るならいつでもご相談ください』

それにしても、俺のような善良な男を暗殺とかふざけているのか？

「あの騎士たちの張り切り具合とか、本当に恨んでいるようでしたか？」

「アレは本気だ。途中で我々が君を回収したが、肝が冷えたよ」

ギルバートさんの台詞に背筋が寒くなる。想像以上に危ない状況だったようだ。

「リオン君を王宮で保護します。今は、これが精一杯です。公爵家の敵対派閥だけじゃないの。君を脅威と思っている貴族は多いわ。君のロストアイテムを回収して、自分たちの力にしたい者たちは多いのよ」

王妃様が必死に俺に訴えてくる。まるで、小さな子供に言い聞かせている感じがした。

ミレーヌ様がお母さん……ちょっとゾクゾクするが、それは置いておこう。

王妃様でも対処が難しいのかと思えば、ギルバートさんが詳しく説明してくれた。

「本格的に動いているのは侯爵家だ。彼らの派閥は、王子に自分の娘を嫁がせて王位に据えるのが目的だ。私の実家とは色々と因縁もあつてね。派閥としては敵同士になる」

ユリウスに？

まあ、公式にはあいつはフリーだったからな。

それもあるのか？

「公国と繋がったのは、敵対派閥を疲弊させるためだろう。国境を守る辺境伯は、侯爵家と仲が悪い。公国をぶつけて他の派閥も疲弊させたいのが狙いだな」

フィールド辺境伯と言えば、ブラッドの実家だ。

あいつの家も大変だな。

さて、一応は忠告しておくか。

「公国はそんなに弱くはありませんよ。まだ、切り札を隠し持っている気がします。まともに戦えば勝てるなんて甘いのでは？」

ミレーヌ様もそれを心配していた。

「リオン君、覚えておきなさい。侯爵にとって、王国の領地が多少削れても痛くも痒くもないの。それは領主貴族の貴方なら分かるわよね？」

侯爵は領主貴族だったらしい。

なるほど、自分の懐は痛まないのなら、公国に多少の領地を割譲しても問題ないのか。

それよりも王国を好きに出来る立場が欲しい、と。

王国にしてみれば、俺が公国を倒してしまったために相手の力量を見誤った。

同時に、警戒を向けられたのは聖女になったマリエと　俺か。

「なりふり構わないのは、レッドグレイブ家に勢いをつけさせたくないためだろう。あらゆる手段に手を出そうとしていてね。捕らえる方がまだ穏便だったのさ。君には事前に連絡も出来なかったけどね」

「アンジエはこのことを？」

「知らない。いや、教えられない。君が保護されているのは、一部の者たちしか知らない極秘事項だ」

知っていれば、アンジエにヘルトルーデさんのことを言わなかった。

というか、急に慌てすぎではないか？

これではまるで　ん？

「あ、あの、もしかして　」

俺が気付いたことを察したのか、ミレーヌ様は小さく頷いた。

「公国が動くわ。それに合わせるように、王宮内は権力闘争が起きているわね。まったく、本当にやってくれましたよ。利用しているつもりでしょうが、公国に利用されるなんて」

公国にとって都合のいい状況が出来ている。

その原因の一つが、俺とは流石に思わなかった。

ギルバートさんが俺に頼み込んでくる。

「悪いがこちらは後手に回っている。すまないが、しばらく地下牢で頼みたいことがある」

「頼みたいこと？」

……と、いうわけだ。

俺は今、暗躍している連中を釣るための餌としてここにいる。

親衛隊長から、囚人にランクダウンだ。……いや、餌だから囚人以下？ とにかく、俺はここにいてことの成り行きを見守っていた。

「公爵家の立場がそんなに弱くなっているとは思わなかったね」

『考えてみれば当然では？ そもそも、王子に娘を嫁がせようとし

たのは公爵家も同じことですからね。派閥争いなのでしょう」

「少し前まで、俺を笑っていた連中が警戒するとか信じられないね」

『現状を正しく理解したら、マスターの方が脅威に見えたのでは？
そもそも、ミレーヌと公爵家の派閥と懇意にしすぎていますからね。それ以外の派閥にしてみれば、マスターは得体の知れない存在ですね』

冬休みから時間が経ち、色々と状況が変化してきたわけだ。王宮から距離を置いていた俺には、寝耳に水である。

『お喜びください。公爵家の派閥には媚びを売るとは成功しましたよ。こうして後ろ盾になってくれるのが証拠です』

「それ以外が敵とか信じたくないな。極端すぎるだろ」

『……極端な人付き合いをしたマスターにはお似合いの結果ですね
こいつにとって王国の事情は関係ない。いざとなれば、俺を連れて逃げるつもりでいるから笑ってみている感じか？

それにしても……派閥争いをこのタイミングでするなと言いたい
いや、このタイミングだから激化したのだろうか？

解放されたアンジェは、その足ですぐに公爵家の屋敷へと向かった。

王都にある公爵家の屋敷でアンジェを待っていたのは、父親のヴィンスだ。

ヘルトルーデの件について報告をするも、

「復讐か。二流だな。それにしても、王国も裏切り者が多いな」

「父上、リオンを解放してください。リオンは悪いことなどしていません！」

ヴィンスは目を細める。

「甘えるな。この程度のことは、王宮内では日常茶飯事。私の権力で釈放したところで、肝心の飛行船も鎧も戻ってこない」

アンジェはヴィンスの言葉に衝撃を受ける。

「……リオンは、ロストアアイテムがなければ無価値と言いたいのですか？」

「彼を出世させてきたのは、間違いなくロストアアイテムの力だ。度胸は認めよう。だが、ロストアアイテムのない彼にどれだけの価値がある？」

アンジェが手を握りしめ、悔しそうに俯くのだった。

「お、恩人です。リオンは私の恩人です！」

「その分の見返りは用意してやった。お前は学園に戻って待機だ」

「　　っ！」

そして執務室を飛び出すように出て行く背中を見送るヴィンスは、
「まったく……もう少し素直になれば、こちらも苦労しなくて済むというのに」

不器用な自分の娘を見送ると立ち上がる。

入れ違いに部屋に入ってきたのは、アンジェの兄であるギルバートだった。

「父上、アンジェが凄い顔で飛び出していきましたが？」

「見張りは付けるから心配ない。アンジェには悪いが、真実を知れば何をするか分からないからな。あの子は感情的すぎる。なのに、未だに色恋沙汰には態度をハッキリしないのは気になるがな」

「……まあ、今まで家のために育ててきたのです。いきなり自由恋愛などと言われても困るのでは？　事情を話してみては？」

ヴィンスは小さく笑っていた。

「こちらから押しつければ、色々と他家からも文句が出るからな。それに、あの子の気持ち次第だ。友人関係なのか、それとも」

ギルバートは納得したのか頷いた。

アンジェの話を一旦置いておき、調べてきたことを報告する。

「地下牢にいる子爵に接触を図った者たちを調べました。どうやら、連中はパルトナーが動かせずに焦っている様子ですね。殺せば、新たな主人を認めるのではないかと一部の者たちが騒いでいます。すぐに処刑するべきと陛下に直訴したとか」

ヴィンスは腕を組み、そして公国の考えを思索した。

「子爵が怖いのか。まあ、仕方がない。たった一人で公国軍を撤退させた騎士だからな。その矛先が自分に向く可能性があれば、焦りもするか」

公爵家と敵対していた派閥にしてみれば、いつリオンがその矛先を向けてくるか分からない。焦る気持ちもヴィンスには理解できた。

「神殿の者たちも騒ぎ始めています。このような時に権力闘争といっても限度があります。これでは、公国の思いつばです」

ヴィンスは組んでいた腕を解き、呟くのだった。

「……来るべき時が来たにすぎない。いずれ暴発するために仕込んでいたようなものだからな。それにしても、私も敵が多いな」

ユリウスの廃嫡以降、公爵家の派閥から抜ける貴族たちも多かった。宮廷内の派閥争いでは、公爵の家の敵が力を強めている。

そんな中、彼らが恐れたのがリオンだった。

ミレーヌ、公爵家の派閥がマリエを警戒していたように、他の派閥はマリエよりもリオンを警戒していた。

「愚かなことをしたと言いたいが……気持ちには理解できる。ギルバート、アンジェの人を見る目は確かだったと思わないか？」

ギルバートは何とも言えない表情をする。アンジェがいなければ、公爵家もリオンを強く警戒したかも知れない。

「ある意味、幸運だったのですね。下手に“第二王子殿下”を担がなくて正解でした」

ヴィンスは笑みを浮かべる。

「さて、お前は領地に戻って戦の準備だ。私はここに残ってやることがある」

ギルバートが頷き、足早に部屋を出て行く。

学園の上空に浮かんでいるのは、王国軍が所有している軍艦だった。

鎧をまとった騎士たちが周囲を警戒し、地上にも騎士と兵士が派遣されている。

物々しい警備に、学園の生徒たちもピリピリとした空気を感じ取っていた。

まるで戦争前のような緊張感。

戻ってきたアンジェは、駆け寄ってくるリビアを見た。

「アンジェ！ リオンさんが！ リオンさんが捕まって！」

混乱するリビアに、アンジェは涙がこぼれそうになるのを我慢する。

周囲には他の生徒もいるし、何より校門前だ。人が多い。

「分かっている。中へ入るぞ」

女子寮へと向かうため、アンジェはリビアを連れて移動した。

リビアはこの状況に不安そうにしている。

「リオンさんが連れて行かれて、そしたらクラリス先輩たちも学園から出て……いったい何が起きているんですか？」

慌ただしいのは王宮だけではない。

学園内にもその影響が出ていた。

「……戦争だよ」

「戦争！？」

「静かに。あまり大きな声を出すな」

急いで入ったのはリビアの部屋だった。

部屋に入り安堵したアンジェは、そのまま膝から崩れ落ちる。

リビアが体を支え、自分のベッドに座らせるとアンジェが話を始めた。

「公国と繋がっている者たちがいる。裏切り者だ。そいつらがリオンを捕らえて王宮の地下牢に放り込んだ。パルトナーやアロガンツも押さえられている」

「そ、そんな！ リオンさんは悪いことなんてしていません！」

「関係ない。奴らはリオンが邪魔なのさ。……私にもっと力があれば、あいつを守ってやれたのに」

落ち込むアンジェに、リビアが思いだしたように言う。

「王妃様！ ミレーヌ様に頼めば」

首を横に振るアンジェは、ミレーヌは動けるなら動いていると分かっていた。リオンを助けていないということは、そういうことなのだろう。

「ミレーヌ様は動けない。手は回しているとは思うが、それが実行されないということは、誰かが命令を握りつぶしている。もしくは、リオンにだけ関わっていられる状況ではないのだろうな」

急に動き出した裏切り者たち。

アンジェはこれが何を意味しているのか見えていた。

「……公国は動くぞ」

「え？ でも、公国はリオンさんが倒しましたよね？」

「アレは先遣隊に過ぎない。公国が本気を出せば、二百隻は飛行船を動かせる」

二百隻という数字に、リビアは驚くのだった。

一般の飛行船ではなく軍艦となると、相応に金もかかる。それだけの数を公国が持っていると言われ、驚いてしまった。

「か、勝てるんですか？」

「数だけなら王国が有利だ。準備不足だが、五百から六百はかき集められる」

リビアが安堵するも、アンジエは不安そうにしていた。

「……まともに王宮が機能していれば問題ない。だが、今はまずい」

混乱する王宮では、対応が遅れてもおかしくない。

何より、飛行船を持つこの世界 戦争は仕掛けた方が圧倒的に有利だった。

飛行船があるために、攻め込む方が楽なのだ。

対して、守る方は常に大規模な艦隊を展開してられない。精々、見回りを強化するくらいしか出来ない。

対応を間違えると、王国も非常に危険だった。

「リオンを捕らえた理由がハッキリしたな。一隻で艦隊を相手に出来るあいつは、公国にとって悪夢だ」

リビアがリオンを心配し、胸を押さえていた。

「リオンさん、大丈夫でしょうか？」

アンジェは嘘を言っても仕方がないと察し、リビアに事実を告げる。

「私がもしも逆の立場なら、確実な方法を選ぶ。……リオンを殺すだろうな」

リビアが顔を青ざめさせた。

敵がそれをすぐにしないのは、リオンを暗殺できなかったからだろう。だから、罪をでっち上げて捕らえたのだ。

それにより、リオンを擁護する声もあるから処刑できない。

「今は捕らえているが、時間の問題だ。リオンの命が危ない。私はこんな時に何も出来ない自分が嫌いだ」

リビアは立ち上がった。

そしてフラフラとドアを目指す。

「おい、どこに行く？」

「……アンジェ、ごめんなさい。私は……リオンさんが死ぬのは嫌です」

そう言つて部屋を出て行くリビアを押さえ、アンジェが話を聞く。

「お前一人ではどうにもならない。下手をすればお前も」

「でも！……それでも、出来ることは全てしたいんです。私は何度もしオンさんに助けて貰いました。ここで逃げるのは嫌なんです」

アンジェがリビアを掴んでいた手を放した。

「どうするつもりだ？」

「マリエさんを頼ります」

マリエは後悔していた。

そこは学園内の広場だ。

（嘘。どうしよう。どうしてこうなったのよ！）

冷や汗が吹き出てくる。

周囲はマリエたちを囲み人の輪が出来上がっていた。

中央にいるのは、マリエとその取り巻きたちだ。

「見て、マリエ様。この者たちの哀れな姿を」

「公爵令嬢が平民と一緒に頭を下げていますよ。しかも、地面の上で」

「無様ですこと」

周囲で笑っている学生たち。

マリエの横では、カイルが本当に呆れている。

「ここまでさせていいんですか？ 正直、僕でもドン引きしますよ」

リビアが助力を願った相手はマリエだった。

そしてマリエは、そんな二人に対して色々と苛立っていたこともあり「みんなの前で土下座したら考えてあげるわ」などと言ってしまったのだ。

広場で二人並んで土下座をしているリビアとアンジェ 主人公
と悪役令嬢を前にして、マリエは冷や汗が止まらなかった。

やれとは言った。言っただが、本気ですとは思わなかった。

（待って！ 本当に待って！ どうせ出来ないだろうから、土下座しろって言ったのに！ 私にどうにかする方法なんて思いつくわけがないでしょうが！）

助けを求めてきた二人に土下座をさせたマリエだが、本当にするとは思っていなかった。だから、本当に土下座をされると困るのだ。

周囲では二人を笑う声が聞こえてくる。マリエよりも、周囲が興奮していた。

「公爵令嬢が情けない」

「こんな人の取り巻きをしていたなんて泣きたくなるわ。貴族の意地はないのかしら？」

「男のためだつて。あのバルトファルトのどこがいいのかしら？」

アンジェの取り巻きだった者たちもヒソヒソと話をしていた。

立場のある者が簡単に頭を下げては、下に対して示しが付かない。マリエは、だからアンジェは土下座などしないと思っていた。

マリエの取り巻きがアンジェとリビアに、

「ほら、ちゃんとマリエ様をお願いしなさいよ！」

アンジェが頭を下げたまま、

「リオンの命を助けて欲しい」

「違うでしょ？ 頼み方があるわよね？」

「……っ！ リオンの命を助けてください……マ、マリエ様！」

プライドの高いアンジェを土下座させ、マリエを様付けで呼ばせた取り巻きの一人にマリエは声も出なかった。

「そっちの平民も言いなさいよ」

「リオンさんを助けてください、マリエ様」

「バルトファルトがいないと惨めよね。あんた、あの男の後ろに隠れて守って貰っていたものね」

笑っているマリエの取り巻きたちや、周囲にいる生徒たち。

（え？ 何？ 取り巻きって怖い。こいつら、私の名前で鬱憤晴らしうつぶんをしているだけじゃない？ ちょっと信じられない）

土下座しろと言ったことを棚に上げ、周囲にドン引きするマリエだった。

そして。

「マリエ様、手頃な足置きがありますよ」

マリエの取り巻きが、アンジェの後頭部を指さした。

「え！？」

他の取り巻きたちも続く。

「あら、それなら公爵令嬢を椅子にして、平民を足置きにすればいいわ」

「聖女様の椅子になれて嬉しいわよね、アンジェリカ？」

「さっさと返事をしなさいよ！」

アンジェを踏みつけようとする女子を見て、マリエは叫びたくな

った。

（お前ら何をやっているのおお！ 私を破滅させるつもり！ かつてらをこんな目に遭わせたと思ったら、あのモブが絶対に復讐しに来るわ！ わ、私、あいつに殺されちゃう！）

無表情でライフルを構えるリオンの姿を想像し、マリエは足の震えが止まらない。

そんな女子を、手を伸ばし止めたのは ユリウスだった。

「お前たちの覚悟は見せて貰った。マリエ、これ以上は不要だ」

ユリウスの言葉に、ブラッドも続く。

「だね。ここまでされたら、相応の誠意をこちらも見せなくちゃね」
ジルクが頷いていた。

「過去のことはこれで互いに水に流す。マリエさん、彼女たちを許してあげましょう」

上から目線の三人だが、クリスも同意する。

「これ以上辱めればマリエの名前に傷が付く」

グレッグは拳で自分の手の平を叩き、そしてマリエに笑って見せた。

「ここまでされたんだ。バルトファルトは助けてやるうぜ、マリエ」

土下座の文化などないため、ここまでされたら許してやるかという程度の考えの五人。しかし、リオンは土下座の意味を知っている。

この話がリオンに漏れたらと思うと、マリエの頭の中は真っ白だ。そもそも、リオンを助ける方法なんて知らない。

どうやって手続きをすればいいのかも分からず、神殿に働きかけてどうにかなる問題とも思えなかった。

聖女という立場を使って圧力はかけられるかも知れないが、それで助けられる保証がどこにもない。

（まずい。実は助けられません、なんて言ったら……私の人生が終わる。というか、あいつ自力で脱出すればいいのよ。何でしないのよ。馬鹿じゃないの？）

マリエは五人に頼むのだった。

「……みんな、お願いしてもいいかしら？」

五人はマリエに向かって頷くと、その場から去って行く。

とにかくマリエは、この状況から逃げ出したかった。

土下座している二人から背を向けて歩き出すと、取り巻きたちがついてくる。

「マリエ様は寛大ですね」

「私なら踏みつけていましたよ」

「あら、私なら」

そんなことを言い出す取り巻きたちに、マリエは気味が悪くなってきた。

（本当に笑えない。取り巻きとか意味が分からない。こいつら、私を破滅させるつもり？）

騒がしい取り巻きたちの中、カーラだけは静かにマリエに付き従っていた。

マリエが去ったあと。

周囲が笑う中、アンジェとリビアは立ち上がった。

周囲の声はどこまでも冷たい。

「あそこまでする？」

「公爵家は落ち目だな。頭を下げる意味が分かっていない」

「本当に卑しい女よね。平民なんかと仲良くして」

嘲笑ちやうしやうされる二人は、その場から歩き去る。

リビアがアンジェに、

「私だけでよかったのに、どうしてアンジェまで？ その……実家の立場とか」

アンジェは悲しそうに笑うのだった。

「これが最善だと思ったただけだ。実家には悪いと思うが……それよりも、リオンを助けたかった。私は本当に馬鹿な女だな」

マリエに頭を下げたアンジェは、そう言って笑い　泣いていた。

「これで本当に捨てられる。家名に泥を塗ったからな。だが、それでも……リオンが助けられればそれでいい」

そう言って笑うアンジェの顔は、どこか清々しかった。

マリエに頭を下げるというのが、本人にとってどれだけ辛かったかを知るリビアは思うのだ。

(……アンジェはこんなにリオンさんのことを)

自分とアンジェを比べるリビアは、胸が苦しくなる。

ファンオース公国上空。

浮島を飛行船にした飛行空母を旗艦とした艦隊が、空を覆い尽くしていた。

百五十を超える飛行船と共に、周囲にはモンスターたちの姿があった。

王国に魔笛があっても問題ない。

何しろ、魔笛はもう一つ公国に存在しているのだから。

そして、その魔笛を使うのはヘルトラウダ第二王女だった。

十四歳。

姉と似たサラサラの黒髪と顔立ち。

違いがあるとすれば、ヘルトラウダの方が幼く　胸の膨らみがあることだ。

そして胸だけではなく、姉のヘルトルーデよりも魔笛の扱いがうまかった。

率いるモンスターの数も多く、そして魔笛自体もヘルトルーデが持っていた物よりも強力だ。

本来なら、ヘルトルーデたち先遣隊は橋頭堡きょうとうほを確保する任務があった。

それが、リオン一人に計画を潰され、公国は大慌てである。

「……外道騎士は動かない。間違いないな？」

ヘルトラウダの問いかけに家臣が答える。

「間違いありません。ロストアイテムの飛行船も、そして鎧も押さえたと報告がありました。のんきなものです」

ヘルトラウダの周囲には、重鎮たちが並んでいた。

騎士が報告してくる。

「姫様、支度が調いました」

小さく頷く少女　ヘルトラウダは、公国の未来をかけた戦いに挑む。

「これより王国に攻め込む。皆の者、奮起せよ。目指すはホルファート王国王都。他の雑魚には目をくれるな！　　出撃せよ！」

ヘルトラウダの声に合わせ、周囲の重鎮たちが威勢よく返事をした。

偽りの聖女

地下牢の中。

看守に席を外して貰った俺は、これまでにやってきた客人たちを思い出す。

わざわざ紅茶を用意して貰い時間を作った。

どいつもこいつもろくでもない連中だ。金を出すからパルトナーの動かし方を教えろとか、仲間に入れてやるとか……まあ、とにかく酷い。

言うことを聞かないと殺すと脅してくる奴も多かった。

ルクシオンも呆れている。

『パルトナーやアロガンツを渡せば、命だけは助けてやるとい貴族たちの胡散臭さはどうにかならないものでしょうか？』

「ならないだろうな。渡したらずぐに殺しに来る癖に、よくあれだけ嘘が言えるよ」

パルトナーとアロガンツを接收したのはいいが、動かないので困っているらしい。

俺に動かし方を聞いてくるとか頭がおかしい。

『解体も試みて、途中で諦めたようです。パルトナーが随分と酷い扱いをされているので不憫です。マスター、我々で王国を倒しませんか？』

「却下」

アロガンツは手出しできないコンテナの中。

パルトナーは、船内が随分と荒らされているらしい。

『……マスターが王国を見限らない理由は、アンジェリカやミレーヌが理由ですか？ クラリスもマスターの中で優先順位が高いとは思いますが、その辺りが支配階級にいるため王国を守りたいと？ 内部からの改革を推奨しますよ』

好きな女がいるために王国を守りたいと思われているのか？

流石にそれはないし、内部から改革をするつもりもない。

「お前、本当に俺が王国を守りたいと思っているの？」

『違うのですか？』

正直な話をするなら、王国など滅んでしまっても構わない。

どうして存続して欲しいかと言えば、国がなければ民が困るから？ 統治者がいないと困ったことになるのも事実だ。

「俺は国家を運営する気はない。そんな俺が国を滅ぼしたら、困るのはそこで生きている民だからね。やる気もない奴がそんなことを

したら駄目だと思うよ」

『それでよろしいのですか？ ミレーヌ、公爵派閥が失敗した場合、マスターは処刑されることになりますよ。もちろん、そんなことはさせませんが』

「国が俺を捨てるなら逃げるだけさ」

幸い、ヘルトルーデさんも魔笛も王国が握っている。

それらを奪われない限り、王国は負けないだろう。

かなりの被害は出ると思うが……。

『民のために立ち上がってみては？』

「望んでいないだろ」

この世界の戦争は、領民を集めて槍を持たせるものではない。そのため、領民を兵士にしようと思えば、教育が必要だ。

飛行船があるために、領民を徴兵するのは難しい。

圧政を敷いている領主もいるが、ホルファート王国は割とその辺りは民に優しい。乙女ゲーの世界らしい設定ではないか。

戦うのは騎士や軍人の仕事となっている。

婚活で困っているのも、支配階級の一部の層。

不満はどこにでもあるだろうが、一番不満を抱えているのは俺がいる男爵と子爵という微妙な立場の貴族たち……何て嫌な世界だろうね。

簡単に言えば、反乱を起こしてもついてくる民がないのよ。悲しいね。

「それに俺はこれでも騎士だからな。仕事はしないとね」

『マスターの言う騎士の仕事とは、女性に優しく国家に都合のいい存在ですか？』

「馬鹿。……民を守るのが騎士だろう」

『それは建前では？』

「建前とか綺麗事とか大好きだよ。学園の女子の言いなりになってこの国のために身を粉にして働くよりよっぽどマシだ。あと、そう言うとりビバが喜ぶの」

アンジエはちょっと困った顔をするけどね。

『なんて軽い意志でしょう。ちょっと感動したのに台無しです』

「お前は俺に何を期待しているの？」

『新人類の殲滅がマスターと出来たらいいな、とは思っています』

……こいつ怖い。

すると、ルクシオンの一つ目が地下牢の入り口へと向けられた。看守が戻ってきたのかと思えば、足音は複数。

「……マスター、どうやら逃げた方が良さそうですよ。王国は、マスターの期待には応えられないそうです」

ミレー又様たちでも駄目だったか。

ルクシオンは姿を消して、俺は手錠をいつでも外せる状態にする。ドアが開くと、やってきたのは地下牢に何度も足を運んだ貴族だった。

爵位は子爵。

階位も高く、取り巻きのように騎士たちを連れている。

その手には地下牢には似合わない酒瓶が握られていた。

「バルトファルト子爵、差し入れを持って来た」

武装した騎士たち。

子爵が持っている酒は 毒入りなのだろう。

「お酒はまだ飲まないようにしているんだ。持って帰るか、みんなで飲みなよ」

子爵は馬鹿にしたように俺を笑っていた。

「いつまで意地汚く生きているつもりだ？ 貴族なら潔く死ぬべき

だと思っけどね」

潔く、ね。俺、第二の人生は老衰^{ろうすい}で死にたいと思っているから、それは嫌かな。

それにしても、こんな結果になってしまつて非常に残念だ。

王国から逃げるかと思つたところで、何やら慌ただしい足音が聞こえてきた。

ルクシオンが姿を見せると、子爵たちが驚いて拳銃やライフルを構えた。

「報告にあつた使い魔か！ 捕らえろ！」

『マスターが仮に死んだとしても、貴方たちには従わないのですけどね。それよりも、後ろに注意されては？』

入り口から飛び出してきたのは、クリスだった。

棒を持つて子爵の後ろにいた騎士たちを叩き伏せていく。

「バルトファルト、無事か！」

どうしてクリスがここに？ そう思っていると、次にジルクが部屋に入ってくると子爵が持っていた拳銃を銃で撃ち落とした。

「バルトファルト子爵をやらせませんよ」

子爵が手を押さえ、毒入りの酒をこぼすとジルクたちを睨み付け

る。

「お、お前ら、自分たちが一体何をしているのか分かって」

そんな子爵の頭の上に、ルクシオンが自らの体を落として気絶させた。

『黙っていなさい』

ジルクが鍵を開けると、俺に話しかけてくる。

「さあ、急いでください」

……どうしてこいつらが俺を助けに来るんだ？ ルクシオンを見れば、一つ目を縦に頷くように動かしていた。

逃げてもいいのだろうか？

「どうしてお前たちがここに？」

「マリエさんに頼まれましてね。色々と手を尽くしたのですが、強硬手段に出ることにしました。さあ、早くこちらへ」

ジルクに背中を押されるように外に出た俺は、地下牢の階段を駆け上がった。

そこで待っていたのはブラッドとグレッグだ。

二人は、拘束された看守を見下ろしていた。

「お前らも来たのか？ その人はどうした？」

「僕たちが来たときには拘束されていたよ」

「それより急ぐぞ。ユリウスが待っているからな」

看守が生きていることを確認した俺は、四人と共に王宮内を移動した。見回りから隠れて身を潜めていたときだ。地面が揺れたのを感じた。

四人に案内され到着したのは中庭だった。

中庭の木の陰から姿を見せたのはユリウス殿下で。

「待っていたぞ」

「おい、どうして中庭なんか案内した？ 逃げるんじゃないのか？」

ユリウス殿下はちょっと自慢するように、

「ここには王族しか知らない秘密の抜け穴があるからな」

「そんな秘密を俺に教えるなよ！ 馬鹿なの？ お前ってやっぱり馬鹿なの？」

「助けてやったのに何て言い草だ。おっと、何だか揺れが多いな」

小声で言い合いをしていると、またも地面が揺れた。

建物に囲まれた中庭で、俺たち六人が集まって話をしているとルクシオンが。

『マスター、囲まれてしまいました』

「何？」

中庭が光に照らされ一気に明るくなり、眩しさに手で目を隠すと武装した騎士たちが駆け足で近付いてくる音が聞こえた。

ルクシオンに命令をしようとしたら。

「お待ちください、ユリウス殿下！ 我々は敵ではありません！」

叫ぶ騎士から、ユリウス殿下が俺を庇うように前に出る。

「ならばここを通して貰おうか」

声をかけてきた騎士が、それは出来ないと告げてくる。

「我々はバルトファルト子爵を救出するために来たのです」

「俺を？」

信じていいものか悩みどころだな。

嘘を吐いている可能性もある。

ルクシオンが俺に『アロガンツをここまで運ぶのに数分必要です』と告げてきたので、交渉して時間稼ぎをしようとした。

そんな俺の前に現れるのは。

「……父上」

ユリウス殿下が持っていた剣を下ろした。

「ユリウス、悪いようにはしない。武器を下ろしてこちらに来なさい」

ユリウス殿下の父親　【ローランド・ラファ・ホルファート】
国王陛下だった。

少し癖のあるグレーの長い髪と髭。

身長は高く、初老というのに鍛えられた細身の肉体。

王としての威厳を持った人だ。

陛下だと気が付き、俺たちは膝をつく。

「バルトファルト子爵、苦勞をかけた。だが、おかげでこちらも片がついた」

勝ったという意味か？

ルクシオンを見れば視線をそらしやがった。こいつ、もしかして

最初から俺を逃がそうとしていたのか？ 油断も隙もない奴である。

「父上、バルトファルトは殺されそうに！」

ユリウス殿下がそう言うと、陛下は頷くのだった。

「知っている。それから、ゆっくりと話している時間はない」

大地が揺れると、陛下は下を向いて何やら思い悩んでいる様子だった。

シャワーを浴びて着替えた俺は、会議室のような場所に案内された。

そこに座っているのは国の重鎮たち。

そして、陛下と王妃様 ミレーヌ様までいる。

ヴィンスさんの姿もあった。なるほど、俺を擁護していた人たちの集まりか。

「元気そうだな、子爵」

「な、何とか」

嫌味の一つでも言ってやりたいが、助けて貰ったこともあるので強気に出られない。

周囲を見ると、ユリウス殿下たちの姿はなかった。

視線で誰を探しているのか分かったのか、陛下が俺に説明してくれる。

「ユリウスたちは別室で待機している。いや、拘束したと言った方がいいかな」

それを聞いて警戒すると、ミレーヌ様が俺を安心させた。

「勘違いしないでね。あの子たちを守るために匿^{かくま}っているのよ。リオン君と同じです」

「俺を呼び出した理由を伺っても？」

当然だと言うヴィンスさんだが、説明してくれたのはバーナード大臣。クラリス先輩のパパさんだった。

「公国の艦隊が、王国本土に上陸した。周辺の偵察艦や防衛部隊の艦艇十隻以上が撃沈。鎧は百機近くが撃墜された」

王国は国力で勝るも、各地に戦力を分散配置するとまとまった数にならない。

おまけに公国側はこれまで平和だったこともあり、配置していた戦力が削られていた。

「敵の艦艇はおおよそ百五十隻。鎧の数は不明。率いるモンスターは、数え切れないと報告が上がっている。空を覆い尽くす数だったそうだ」

すぐに思いついたのは、ヘルトルーデさんと魔笛だったが、ヴィンスさんが否定してくれた。

「殿下と魔笛は今も王国にある。公国には、もう一つ魔笛があったのだろうな。それを扱うのは、第二王女殿下と予想している」

神妙な感じで聞いている俺だが、第二王女殿下がいるなど初耳だった。

第二王女がいるなんて俺は知らない。

それに、もう一つ魔笛がある？

……聞いていない。

陛下が「それにな」と言っ

「公国以外の国も動いている。国境を任せている領主貴族たちからも救援要請が来た。四方八方から攻め込まれているよ」

バーナード大臣が説明を引き継ぐ。

「地方に配置している軍は、そちらに向かった。今更呼び戻せない。それに、今の王国には出撃できる艦隊がない」

「王都の防衛部隊はどうしたんです？ それに、近くには王国の正規軍も」

俺の疑問に答えてくれたのはミレーヌ様だった。

「数日前のことです。神殿側から協力を要請され、会議の結果協力するため戦力を提供しました。その数は二百隻です」

ミレーヌ様が落ち込みながら話をしてくれた。

マリエがいることで強気になった神殿側と、侯爵を中心とした派閥が手を組んだ。

その結果。

「公国に敗北しました。戻ってこられたのは十隻程度です」

数日前。

ユリウスたちを見送ったマリエの所に、神殿の神官が訪ねてきた。

「マリエ様、聖女としてのお力を示す時が来ました」

「しょうがないわね」

そんな感じにノリノリで飛行船に乗ったわけだが。

「……え？」

飛行船の甲板の上。

聖女の衣装に身を包んだマリエは、首飾り、腕輪、杖という聖女

を示す道具を持っていた。

風が冷たく寒い。

髪が風で乱れるなど、色々と文句を言いたい気持ちよりも先に、

「……こ、こんなの聞いていないわよ！」

神殿が保有する戦力は三十隻程度。

王国から戦力を借り、更に二百隻を追加した艦隊だ。

数だけなら公国とも戦えるが、敵にはモンスターという捨て駒に出来る戦力が存在していた。

その数の迫力は、想像以上で　マリエは恐怖していた。

モンスターたちが押し寄せてくると、マリエは杖を掲げる。

「来るなあああ！」

聖女が持った杖は光り輝き、艦隊を覆う大きなシールドを展開した。

白い模様が浮かんだその大きな光は、艦隊を包み込みモンスターたちが触れると消し飛んでいく。

周囲の神官、そして神殿騎士たちがマリエを褒め称えた。

「聖女様のお力だ！」

「勝てる。我々は勝てるぞ！」

「飛行船を前に進めろ！ このまま公国の艦隊を押し返してやれ！」

マリエがモンスターたちを無力化したことで、士気は嫌でも高くなる。マリエも、引きつった笑みを浮かべ、どうにかなったことに安堵した。

（な、何だ、結構やれるわね。少し心配だったけど）

マリエの周りにユリウスたちはいない。

神殿側が同行を求めたが、運悪くリオン救出に動いていた。

そして、カイルの姿もこの場にはない。

神殿側が飛行船に乗せなかった。

そのため、マリエは一人心細く戦っている。周りには神殿の神官や騎士たちがいるのだが、知らない顔ばかり。

少し弱気になっていた。

マリエが乗る豪華な飛行船が前進すると、シールドにぶつかったモンスターたちが弾け飛ぶように消えて行く。

「……そうよ。簡単じゃない。私は聖女よ！ この程度で倒せると思わないことね！」

周囲にユリウスたちがいないことが不安だったが、今のマリエは自身の力に酔いしれていた。

公国側は、マリエを先頭に向かってくる王国の艦隊を見ていた。

ヘルトラウダも艦内のテーブルの上に用意された、味方と敵の駒を配置した戦場の様子を見ている。

「聖女の力は本物のようね」

周囲の重鎮たちがヘルトラウダを見ていた。

椅子から立ち上がると、ヘルトラウダは側にいた女性から笛魔笛を受け取る。

重鎮の一人が、

「姫様、ここは既に王国本土です。予定とは違いますが、問題ありません」

「そうね」

そう言ってヘルトラウダは笛を真剣な表情で見つめ、一度深呼吸をすると口を付ける。ここから先に進めば戻れない。

緊張するが、覚悟を決めて笛を吹く。

その音色は妖しく、そして美しい。

周囲の者たちが目を閉じてその音色を聞く。

（さあ、聖女様　公国の怒りを止められるかしら？）

戦場の上空。

厚い雲が出現すると、戦場は暗くなっていく。

そして、そんな雲から姿を見せるのは　とても大きなモンスターだった。

丸い体にはいくつも目が付いている。

そして長い腕も生えていた。

白い体には血管のようなものが脈打ち、多眼、多腕のモンスターは異様に大きい。その大きさは、下手な浮島よりも大きかった。

球体だけでも何千、何万メートルあるか分からないモンスターだった。

突然出現したモンスターに、王国の艦艇は動揺し始める。

ヘルトラウダは笛から口を離すと、そのまま倒れそうになった。

周囲の者たちが支えれば、その顔は笑っていた。

「空と海の守護神を使役する魔笛　大地の守護神を操る魔笛はお姉様と王国にあるけれど、何の問題もないわね」

重鎮たちが拍手をする。

「これで王国に積年の恨みが晴らせます」

「ご立派ですぞ、姫様」

「守護神様を前に、王国軍もなすすべがないでしょう。あとは、王国に乗り込みヘルトルーデ王女殿下を救出するだけです」

ヘルトラウダは、外の様子が見たいと言って支えられ外に出た。

艦内の外は風が吹き荒れている。

視線の先に見えるのは、空から手を伸ばしたモンスターが王国軍を手でたたき落としている光景だった。

聖女が発するシールドも破壊されると、巨大な腕が飛行船をなぎ払う。

多眼から光が放たれると、飛行船を撃ち抜いて燃え上がらせた。

「空と海から挟まれて、貴女たちの大地は沈むのよ」

本気で王国を　大陸を沈めようとする公国。

ヘルトラウダは青い顔をして笑っていた。

疲れた顔が青いのか、それとも自分のしたことが怖くなり顔が青いのか　そんなことは、周囲の誰も気にしていなかった。

巨大な手の平が迫ってくる。

マリエは屈み込み、その手から杖を手放した。

飛行船が大きな手にぶつかり破壊されていくと、周囲の神官と神殿騎士が叫ぶ。

「聖女様、シールドを！」

「聖女様の力で、あの化け物をお倒してください！」

「聖女様、杖を！」

聖女、聖女と五月蠅い周囲に、マリエは泣き叫ぶ。

「あんなのどうやって倒すのよ！ 私は知らないわ。 “あいつ” が出てくるなんて聞いていない！ そもそも、私は 本物の聖女じゃない！」

周囲の者たちが唖然としてみると、マリエたちの頭上を吹き飛ばされた飛行船が通過していく。

飛行船が玩具のように破壊され、吹き飛ばされ、燃やされていく。

目の前にいるものが何か分からない。

ただ、空を覆い尽くす大きなモンスター……化け物だった。

その気味の悪い格好にマリエは恐怖して足が動かなかった。

モンスターを見上げ、涙を流す。

「こんなの どうしようもないじゃない！ 誰か助けてよ！」

抵抗する飛行船からの砲撃も効果がなく、化け物はゆつくりと進んでくる。進路上にある邪魔な物を破壊して、ゆつくりと 王都を目指して進んでいた。

神殿騎士の一人が叫ぶ。

「て、撤退。撤退だ！ すぐに引き返せ！」

飛行船がその場で反転すると、その間にも次々に飛行船が沈められていく。

大地に落ちた飛行船が爆発し、炎が大地に広がっていく。

百隻を超える飛行船が、逃げ切ったときには 十隻にも満たなかった。

マリエはずっと、膝を抱えて座り込み泣き続けていた。

それは前世のあの日のように 。

「 以上が事の顛末てんまつです」

……ミレーヌ様の報告が終わった。

陛下が呟くように、

「悪夢だな」

ヴィンスさんも困っていた。

「数を揃えたくらいではどうにもならない。それに、この地震だ」

ヴィンスさんは飲み物を飲み干し、コップをテーブルの上に寝かせておいた。ゆっくりとコップが転がっていく。

僅かに傾いているようだった。
わずか

公国の動きに合わせ発生しているらしく、何か関係があるらしい。

「バルトファルト子爵、率直に尋ねよう。君なら勝てるかな？ 化け物相手に、君と君のロストアイテムなら 勝てるか？」

バーナードさんの言葉に、俺は唾を飲み込んだ。

もしも、その化け物がラスボスと同じ特性を持っているなら無理だ。

ルクシオンでは倒せない。

いや、負けることはないだろう。だが、勝つことも出来ないのだ。

相手はいくら倒しても復活するのだから。この状況、ゲームなら諦めて大事な分岐まで戻ってやり直すような状況だ。素直に「あ、これ詰んだな」と思ってしまった。

「……分かりません」

そもそも相手が違うので、答えようがない。

ヴィンスさんがコップを手に取りながら、

「だろうな。だが、我々は子爵に期待するしかない。君しか動かせないロストアイテムで倒せないなら　王家の船を動かすことになる」

ミレーヌさんが視線を細めた。

「公爵、その話をこの場でするとはどういうつもりですか？」

何やら揉めているようだが、主人公と選ばれた攻略対象の男子が乗る飛行船『王家の船』は、後半に出てくる強力な飛行船だ。

しかし、ルクシオンよりも性能が低い。

パートナーにも負けているかも知れない。

「今動かさず、いつ動かすと？　この状況で出し惜しみは感心しませんな」

「　っ！」

ミレーヌ様が何か言おうとして、陛下がまた止めた。

「止めよ。ヴィンス、お前も分かって言うとは意地の悪い奴だ。王家の船は動かない。資格を持つ者が揃わなければ動かないのだ。そ

して、私とミレーヌでも動かせなかった」

あったね、そんな設定。

ゲームでは主人公と攻略対象の男子が動かしていた。

だが、ここで問題がある。

リビアと攻略対象である五人との間に愛という名の絆がない。愛がなければ、王家の船は動かない設定だった。

そうとなると、この状況を切り抜けるためには　マリエの力が必要だ。

愛という名の絆と、聖女の力をマリエに借りる必要がある。

「陛下、お願いがあります。王家の船を使わせてください。それと、マリエとあの五人の力が必要です」

陛下は、俺に対して不快感をあらわにしていた。

ミレーヌ様が首を横に振る。

「残念ながら不可能よ。聖女マリエは、神殿が処刑すると発表しました」

状況を聞いた俺は、別室へと移ることになった。

陛下たちは今も会議をしており、俺にはパルトナーとアロガンツの返還を約束して待機が命じられる。

まあ、俺もまだ王国の騎士だ。

待機命令は甘んじて受けよう。考えたいこともある。

椅子に座って口の前で両手を組んで考えていると、ルクシオンが俺の側に寄ってくる。

『聖女を騙ったマリエは火炙りか、それとも磔刑か　新人類の末裔も醜いものですね』

聖女のアイテムがマリエを認めたのに、本人が偽物だと言ったから処刑だ。その理由が、責任の押し付け合いの結果だから笑えない。

公国に攻め込んだ神殿側も、戦力を提供した王宮内の侯爵派閥も誰かに責任を取らせたかったのだ。

『それにしても、待機命令とはおめでたい人たちです。マスターがまだ忠誠心を抱き、王国のために働くと考えているのですから。パルトナーもアロガンツも返してやる、みたいな態度がいただけませんね。滅ぼしますか？』

俺は首を横に振る。

ハッキリ言ってしまうえば、俺にとって王国の存在価値はない。ゲームのシナリオ的にもバッドエンドを進んでおり、おまけに俺を処刑しようとした。

何とか食い止めてはくれたが、危機的状況に追い込まれていることに変わりがない。オマケに話し合いの場から追い出されている。

……なのに、俺は決めきれずにいた。

『……マスター、何をお考えなのですか？』

「ルクシオン、お前ならこの状況で勝てるか？」

俺の周りを漂いながら、

『勝利条件は？』

「大地を沈ませない。“超大型”を王都に来る前に倒す」

超大型と呼称することになった馬鹿でかいモンスターは、俺が知っているラスボスと同じなら王都を目指して進むはずだ。

事実、ルクシオンも王都を目指して進んでいると考えている。

『不可能です。マスターが言ったように、私は負けなくとも相手が倒しても復活する相手なら、時間稼ぎしか出来ません。それから、超大型の反応は二つ。浮かんだ大地を挟み込むように空と海から王都を目指して進行してきていますよ』

「……最悪だな」

『もしも勝利するなら、王国の全てをマスターが使える立場にしなければなりません。王家の船が必要なのでしょう？ただ、国王の様子を見るに、王家の船を預かるとすればそれはつまり、全権

を委任された総司令官になるしかありません。マスターの方針とは相容れませんね」

本当に最悪だ。王家の船を預かるには、相応の地位が必要。だが、俺にはそれだけの信用も実績もない。

勝つために必要なものが足りていない。

「逃げることをお勧めします」

逃げた方がいいのは分かっている。俺だって、こんな王国に未練はない。あるとすれば、個人的に知り合いを助けたいだけだ。

だが、それだと。

「おや、マスターが大好きな師匠ですよ」

部屋にノック音が聞こえ、ルクシオンは姿を消した。

返事をするに師匠がサービスワゴンを押して部屋に入ってきた。

「失礼しますよ、ミスタリオン」

「師匠」

お茶の用意を始める師匠は、普段と変わらず紳士的だった。王宮内では、王国軍が敗北したと聞いて逃げ出している貴族や騎士たちもいるのに、師匠は普段通りだ。

差し出された紅茶を飲むと、少し落ち着いた。

「ミスタリオン、悩んでいますね」

「あははは、そう見えますか？」

逃げるべきか戦うべきか　俺は自分の優柔不断さが嫌になる。
笑って誤魔化そうとするが、笑顔がうまく作れない。

「事情は王妃様から聞いています。何やら陛下を怒らせて退席させられた、と」

王家の船を貸せと言ったのがまずかったらしい。王家が極秘で管理している飛行船だ。確かに後で思えばまずかった。

「王妃様が心配していましたよ。ミスタリオンは女性の心を掴むのが私よりもうまい。今後ご教授していただきましょう」

冗談を言う師匠に俺は、

「師匠は逃げないのですか？」

「私はこれでも王国の爵位と階位を持った騎士。今までの給料分の働きはしませんとね。ただ、出来ることは限られています」

冗談を言っているが、師匠は残って戦うつもりなのだろう。

これだ。これなのだ。

俺が救いたい人たちも、捨てられないものがあって王国に残るかも知れない。無理矢理連れ出しても、師匠にとっては辛いだけかも

知らない。

それでも、

「逃げませんか？」

「ミスタリオン。貴方が逃げることを私は責めません。ですが、私は残ると決めています。紳士として、そして騎士としての判断です」

騎士として？ 俺が首をかしげていると、師匠は俺に笑顔を見せる。

「昨今は女性に優しいのが騎士とされていますが、私の騎士道は大切な人々を守ること。それを曲げるつもりはありません」

王国にとって都合がいい騎士でも、乙女ゲーの求める女性に優しい騎士でもない。

師匠なりの騎士道があるらしい。

ゲームには登場せず、同じモブなのに 何て格好いい人だろう。

「騎士道ですか」

「ミスタリオンの騎士道をお伺いしてもよろしいですか？」

俺は紅茶を飲み干し、そして立ち上がる。

「俺はこれでも建前が大好きでしてね。民を守る騎士道が大好きですよ」

学園女子に優しい騎士道も、国に都合のいい騎士道も嫌いだ。

「ごちそうさまでした。俺はいきます」

「どちらへ？」

「……ちよつと、総司令官になってみようかと思ひまして。この状況を打開するには、それが一番いいもので」

俺の言葉に師匠が目を見開き、そしてすぐにいつもの表情に戻った。

笑つかと思えば……。

「ならば王妃様を頼りなさい。ミスタリオン、あの方はアレで王宮内でもかなり融通が利くお方です。きっと、助けになってくれるでしょう」

俺はお礼を言つて部屋を出る。

廊下を少し早めに歩くと、ルクシオンが俺についてくる。

『逃げるのではないのですか？』

「止めた。公国と戦つ」

『……出世したくないのでは？ 総司令官など、マスターが望む地

位ではありませんよ』

「悪いけど一度くらい経験したいのが男の子だ」

『建前で戦うつもりですか？ 理解できません』

民のために戦う？ 確かに嘘っぽい。俺が言っても誰も信用してくれないだろうが、割と本気だ。

前世が一般人だったからだろうか？

割と関係ない王国の民が死んでいくのは気分が悪い。たとえば、毎日を細々と堅実に生きている幸せな家庭があったでしょう。大地が沈めば、そんな人たちが大勢死ぬ。

マリエのせいでグチャグチャになったこの世界、最大の被害者は彼らだ。

大陸が沈み、死んでいくのを見ているのは気分が悪い。

「何千万人と人が死ぬのを見ている趣味はないね」

『逃げて問題ありません。マスターの行動は理解できません』

「俺だって理解できないよ。今だって逃げ出したいさ。でも……ここで逃げてでも絶対に後で考えるんだよ。ベッドに横になったときにアレでよかったのかと悩む人生とか絶対に嫌だわ」

絶対に悩む自信がある。この後の人生、そうやって悩むのは……ごめんだ。

そもそも、俺って騎士なのよ。爵位云々はともかく、前世で言うなら非常時の軍人の立場よ。そんな人たちが逃げたら、俺なら恨むね。

というか、巻き込んだじゃ駄目だろ。

『出世を嫌がっていたのでは？』

「そういつの、勝ってから悩めばいいから。勝てないこの状況で、出世とか悩むだけ無駄だから」

出世は今も興味がない。出来ればノンビリ暮らせる立場が一番だ。

だが。

「どいつもこいつも頼りにならないから俺がやる。手伝え、ルクシオン」

絆

「本気なのですか？」

ミレー又様と話をすることに成功した俺は、指揮権が欲しいと頼み込んだ。もちろん、ミレー又様の表情は呆れ果てている。

十六 いや、十七の小僧を総司令官にするとか正気ではないし、そんなことを頼む俺を怪しんでも仕方がない。

「本気です。指揮権が欲しい。お願いできませんか？」

ミレー又様は今までと違った顔を見せる。冷静な顔付きは、今までの優しさが消え去ってしまったように見える。

「信用、そして実績があまりにも足りません。貴方を推薦すれば、正気を疑われますよ」

「勝つためです。このままでは勝てません。嫌なら俺は逃げるだけです」

顔を伏せるミレー又様は「これも今までのツケが回ってきたのね」と呟いていた。

「陛下たちは、公国へ突撃をかけて超大型を呼び出した魔笛の使用者を討ち取る考えです」

「それでは近付けもしません。全滅するので無駄です」

「……リオン君、能力だけで全ては決まりませんよ。たとえ、貴方がアレな陛下より素晴らしくても、人は陛下の方を信じます。人とはそういうものです。総司令官に貴方を据えても誰もついていけないわ」

どこか陛下に棘のある言い方だったが、気にせず交渉を続けよう。何気にミレー又様の中で、俺への評価も高いことに気が付いた。

「他の奴に任せていては勝てません。王家の船が必要です。アレ、特別な力がありますよね？」

どうしてそれを知っているのか？ そんな顔をするミレー又様を壁際に追い詰め、俺は壁に手をついた。

「っ！ あ、あれがどういう船か知っているの？ あれは」

「王国を築いた原動力。王家の切り札……ですよね？」

「ええ、そうです。簡単に貸せる物ではないわ。あれは、ロストアアイテムよ」

ルクシオンとはまた違ったロストアアイテムだが、どうしても必要だ。

ミレー又様との距離が近い。

「貸してください。必要です」

「でも、動かないわ。私と陛下では動かせなかったのよ」

「ユリウス殿下とマリエを使います。他の四人も集めてください」

「けど、聖女は　マリエは処刑が待っているわ」

どうしてもマリエが必要だ。

マリエが死んで、すぐにリビアが聖女に認定されるとは限らない。神殿がまた騒ぐかも知れないからだ。ならば、確実な方法をとる必要がある。

飛行船を動かし、聖女の力を発揮するのはマリエたち。

後はリビアを乗せればいい。

「ルクシオン、王妃様に説明してやれ」

『はい』

出現したルクシオンを見て、ミレーヌ様は「これは　報告にあった使い魔？」と驚きつつもルクシオンを見ていた。

そして、超大型が空と海から大地を挟み込むように移動してきているのを聞かされ王妃様が絶望する。

「本当なのですか？」

『事実です。同時に、二体の出現時から通信状況がかなり悪くなっています。敵に近付けば、通信はほぼ使えないと考えるべきかと』

王妃様が左手で顔を押さえていた。

「聞けば聞くほどに厄介ですね。……リオン君、勝てるのですか？」

「勝ちます。そのために用意して欲しいのが」

「聖女と王家の船。なるほど、総司令官の地位が欲しいわけですね」

ミレーヌ様が顔を引き締め、俺の目を見つめてくる。

「貴方を総司令官にするとえば、反発する者たちが出てきます。侯爵派閥の者たちです。その者たちを押さえ込む必要がありますね。それに、貴方に協力してくれる騎士や兵士は少ないでしょうね。戦力は集まりませんよ」

ルクシオンに視線を向ければ、一つ目で頷いていた。

「構いません」

「……まったく、自業自得とはいえ、他の騎士たちにも貴方のような忠誠心があれば」

忠誠心？ 俺にはほとんどないよ。

「俺の忠誠心は高いですか？ それと、自業自得とは？」

「一部の男性たちに負担を強いてきた現状です。無事に帰ってきたら教えましょう。ちゃんと勝って帰ってきなさい。いいですね？」

頷くと、ミレー又様が顔を赤らめ可愛らしい咳払いをする。

「そ、それから、離れてくれると助かるのですが」

おっと、そうだった。距離を取ると、ミレー又様が深呼吸をしてから俺を見る。

「リオン君には借りも多いですからね。根回しは私の方で進めます。ですが、本当に味方は少ないですよ」

「大丈夫ですよ。戦力には宛てもあります」

問題ない。

今こそ絆の力を使う時だ。

王都は大混乱に陥っていた。

逃げ出そうとする人々の中には、貴族たちの姿もあった。

嘆かわしいことに、こんな王国のために戦えるものと職務を放棄捨てて愛人と逃げ出す貴族や騎士たちが多い。

ちなみに、正妻たちというか……本妻は置いて逃げていた。理由が分かってしまうだけに、どうにも複雑な気分だ。

王宮から学園にやってきた俺は、普段と違う様子に自分の目を疑う。

「ま、待つてよ。私も連れていつてよ！」

すがりつく女子を乱暴に振り払うのは、辺境子爵家の跡取りだった。

「今更俺に頼るなよ。散々無視してきた癖に」

学園から去って行く男子生徒。

違う方では、王都住まいの金持ち子爵が女子にすがりついていた。

「俺を捨てるのかよ！ あれだけ貢いでやったのに！」

「ここに残つても死ぬだけよ！ 王都がなくなれば、あんたなんて無価値なのよ！」

普段と立場が逆転したような光景。

ちつとも嬉しくない光景だ。

ルクシオンが俺を案内する。

『マスター、こちらです。皆さん、集まって何やら相談をしているようですよ』

「でかした！ ルクシオン、お前はリビアとアンジェの方に向かえ。二人は何としても助ける！ あと、知り合いがいたら声をかけておけ」

『構いませんが、マスターの方は一人で大丈夫ですか？』

大丈夫だ。

俺とみんなの　　ダニエルやレイモンドたちの友情は本物だから！

「心配するな。みんなきつと協力してくれるから」

「いや、無理だろ」

「うん、無理」

辺境の男爵家　　俺と立場に近いみんなが集まったその場所は学園の会議室だった。

急に手の平を返した女子たちから逃げるように、みんなで隠れていたらしい。

実家から迎えが来る彼らは、それまで時間を潰していたようだ。

俺が協力を申し出たら、ダニエルやレイモンドのように「嫌だ」とか「無理」と口にして協力を拒んだ。

「何で！」

「王国軍もほぼ全滅。二百隻近い飛行船が手も足も出ないモンスターと戦えるかよ」

レイモンドの冷静な判断は間違っていない。

「リオンも諦めたら？ 冤罪で捕まったよね？ そこまで頑張る必要なんかないって。王国が負けたら、公国に従えばいいだけだし」

ダニエルもやる気がない。

浮島を領地に持つ領主たちは、強い国に従っているだけだ。

王国が負ければ、次の従属先を探す。

周囲もそんな反応ばかりだ。

「だよな。あ、知ってる？ 公国って、男の方が立場は強いらしいぞ。結婚はむしろ、女が焦っているんだと」

「本当か！ 俺、公国に忠誠を誓うわ！」

「俺も！」

……気持ちは痛いほど理解できるが、お前らもつと忠誠心を持てよ！

いや、俺もないけどね！

みんなはトランプをしつつ時間を潰していた。何しろ、自分の領地に戻れば、安全なのは間違いない。大陸は沈んでも、独立して浮かんでいる浮島は無事だ。

その後、公国と戦うかも知れないが、王国のために戦いたくないのが俺たちの本音だ。

事実、王都にいる貴族や騎士たちは逃げだし、領主貴族たちは援

軍を出し渋っている。

王妃様が言っていたツケとは、こういうことか。

俺は深呼吸をした。

会議室内は野郎臭い。

懷から書類を出す。

「お前ら、これを見る」

レイモンドが眼鏡を持って書類を読む。

「これ、飛行船の売買契約じゃないか。これがどうかしたの？」

「お前らは既に飛行船を受け取った。クルーの教育を行っている頃か？」

ダニエルが頷く。

「そうだな。扱いやすくて凄く性能がいいって喜んでいたな」

みんな立派な軍艦が手に入ったと大喜びだが、レイモンドだけは青ざめていた。

「リオン、これって」

「そうだ。お前らの持つ飛行船は、親父の領地にある工場でしか整備が出来ない。試しに他の工場に持っていくか？ 完璧な整備は無

理だぞ。新技術が一杯で、整備を怠ればいずれ動かなくなる」

契約書には、新技術を搭載しているので整備はうちの工場に任せないと駄目、的なことが書かれている。

持っていた中古の飛行船を手放し、俺から飛行船を買った連中だ。今持っている飛行船が動かなくなると、何も出来なくなってしまう。

「俺は公国と戦うぞ。そうなるとどうだ？ 公国は俺の領地や親父の領地を蹂躪するかも知れないな。工場だって潰されるかな？ それに、俺は公国と一度戦って恨まれているはずだ。お前ら、そんな俺と繋がりがあると思われているぞ。いや、むしろお前らとの関係をアピールしてやるよ！」

全員が俺に罵声を浴びせてくる。

「汚いぞ！」

「おい、ここでリオンを押さえて、ヘルトルーデさんに突き出せ！」

「あの人は王宮に連れて行かれたよ！」

拳銃を取り出し、天井に向かって発砲した。

全員が静まりかえる。

「落ち着け、馬鹿共！ お前ら、本当に公国がお前らの恭順を認め
ると思うのか？ 相手は公国だ。王国を恨んでいる連中だぞ。下手
をすれば領地を奪われ、奴隷として扱われるかも知れない」

その可能性もあると全員が考えたところで、俺は優しく語りかける。

「俺に協力しろ。大丈夫だ。お前らは俺の後ろに隠れていればいい。生き残ったら、これからもサービス価格で整備してやるよ。ついでにお前らは英雄だぞ。後ろで大砲を撃つだけで英雄なんて大儲けじゃないか！」

みんなが悔しそうな顔を俺に向けている。

「俺を信じる。勝てるから戦うんだ。俺が一度でも不利な戦いを挑んだことがあるか？俺は勝てる戦いしか挑まない男だぞ」

「そ、そう言われると」

「確かに何度もピンチは切り抜けてきたけど」

「リオンがそう言うなら勝てるのか？」

俺の普段の行いがいいから、きっとみんな信じてくれると信じていた。

ダニエルが凄く悩み、

「……お前、いつも卑怯なんだよ」

「おや、褒め言葉かな？安心しろ。そんな卑怯者がお前たちの仲間だ。心強いだろ？」

レイモンドが髪を両手でかき、

「その卑怯者のおかげで公国と戦争をしないとイケないとか最悪の

状況だよ！」

みんなが諦め いや、覚悟を決めてくれたらしい。

俺に従うと言ってくれた。

これが俺たちの友情の力だね！

「みんなありがとう！俺たち、ずっと友達でいようね！」

全員が俺を睨んでいるが気にしない。「ふざけるな」とか「この鬼！」とか「やっぱりあの契約書は罠だったんだ」とか、叫んでいる。

まあ、その程度の嘆きはラスボスの前では些細な問題だ。

さて、次へ行こう。

ルクシオンがやってきたのはリビアの部屋だった。

「リオンさんが公国軍と戦う？」

驚くリビアに対して、アンジェの方は呆れかえっていた。

「子爵とはいえ、学生を総司令官にするなど聞いたことがない。名目上は陛下かユリウス殿下が大将になるのか？」

一つ目を左右に揺らし、ルクシオンは否定した。

『マスターが総司令官で話が進むと思われます。現状、戦力はパルトナーを含め二十隻前後です。王国軍がどれだけ飛行船を用意できるか分かっていません。神殿側の戦力は期待できません』

アンジェが頭を抱える。

「その程度で公国に挑むつもりなのか？ 將軍たちはどうした？ 領主たちの艦隊は？」

『王国軍はミレーヌの根回し次第です。領主貴族たちは、自分の抱えている戦場で忙しいと。同時に複数の国が動いていますが、戦力を出せる領主たちは日和見を決めていますね』

リビアがアンジェを見た。

「どうしてですか？ どうして助けてくれないんですか？」

「……どうして領主たちが王国に従うか分かるか？」

「えっと……忠誠を誓っているからですよね？」

「違う。国力だ。軍事力の差があるから、王国周辺の領主たちは従っている。王国が負ければ、次の主人を探せばいいと考えている領主は多いからだ。それに、王国はこれまで領主たちを冷遇してきた」

「え？」

ルクシオンは思う。

（やはり、そうなのでしょうね。おかしいと思っていましたよ。マスターは乙女ゲーだからと思考を停止していましたが、当然といえば当然ですね）

公爵家は王家と縁が強い家だ。

考え方としては王国寄りになっており、アンジェの領主たちへの考え方は　そのまま王家が領主たちをどう見ているか物語っている。

「領主たちが力を付けないようにしてきた。歪^{こじ}な婚姻関係はその一環だ。これはいずれ　」

そこまで口にして、アンジェは首を横に振る。

そして立ち上がった。

「私は父上の下に向かう。公爵家の艦隊を動かして貰う」

『よろしいのですか？』

アンジェは意味ありげに笑うのだった。

「リオンがやると言ったら、勝てる可能性があるからだろう？　…
…私はあいつを信じるよ」

リビアが少し落ち込むも、立ち上がってアンジェに付いていこうとした。

ルクシオンは、

『でしたら、王宮へお急ぎください。公爵は王宮にいます』

アンジェが微笑む。

「助かる。すぐに向かおう。リビア、お前はどつする？」

「私もいきます！」

二人と　ルクシオンは大急ぎで王宮へと向かうのだった。

王都近くに浮かぶ浮島には、飛行船の出入りがいつもより激しかった。

人も大勢詰めかけ、歩くのも大変だ。

そこで待っていたのはニックス　俺の兄貴だ。

「リオン、お前無事だったのか！」

喜んでいるニックスの近くには、姉貴　ジェナの姿があった。

「あんた脱獄したの？」

その近くには専属使用人のミオルがいて、俺を見て視線が泳いでいる。

「丁度よかった。お前も乗れ。親父が俺たちを迎えに来てくれた」

次兄は親父が乗ってきた飛行船を指さす。

「ベストタイミングだよ」

俺は飛行船の中に入り、船員に親父がどこにいるかを聞く。

「親父は？」

「船橋ですよ。坊ちゃん、今回は何をしたんですか？」

「俺じゃない。悪いのは姉貴の猫耳奴隷だ。そいつは絶対に乗せるな！」

俺を裏切った奴を　　姉貴の側には置いておけない。

次女が何やら騒いでいたが、俺は無視して船内の廊下を駆けた。

船橋に入ると、親父が船長と相談をしていた。

「領主様、自分たちも乗せろと言う奴らが押しかけています」

「子供らを確保したら、乗せられるだけ乗せて離れる！　いつまでもこんな場所にいられないからな。ん？　リオン！」

親父が俺に気が付いて喜んだかと思っただが、すぐに厳つい表情になる。

「お前、今度は何をした！　牢屋に放り込まれたと聞いたぞ！」

「悪いな、親父……力を貸してくれ」

「はぁ？ お前、いったい何を」

とにかく俺は状況を説明した。俺が捕まった理由やら、本当に色々
々々 ミオルの野郎がやったことも告げ口しておいた。

すると親父の顔が徐々に青ざめていき……少し可哀想になる。

「……やっぱりお前は馬鹿だな」

「俺も出るが、親父にも力を貸して欲しい」

「逃げたって許される状況で、何で逃げないんだよ。本当にお前は
馬鹿息子だよ」

親父に贈った飛行船 軍艦は、他の物より大きく性能もいい。

クルーの訓練も行っているはずだ。親父には手伝って貰う必要がある。
ある。

親父が悩んでいると、次兄と次女が船橋に入ってきた。その後ろ
には、ミオルの姿も見えている。

次兄が慌てて報告してきた。

「親父、ゾラたちが船に乘せると言ってきた。何か知らないが、大
勢連れてきやがった」

親父は小さく溜息を吐くと、そのまま外に出るため船橋を出て行

く。

ただし、ミオルの頭を片手で掴んでそのまま引きずっていく。

「ま、待つて！ 何でミオルに乱暴するのよ！ 放してよ！」

次女が親父に抗議するし、ミオルも抵抗するが親父は腕一本でミオルを掴み放さない。

「放してください。私は何もしていない！」

「黙れ、裏切り者が！ 俺の前にノコノコと顔を出しやがって、舐めてんのか！」

親父が次女を睨み付けて、はじめて怒った。本気で怒っていた。

「リオンを裏切ったこの屑を俺の船に乗せるな！ ニックス、お前は船橋にいる。ジェナ、お前は個室で大人しくしている。誰か、さつさと連れていけ！」

船員たちが次女を連れて行くと、俺は親父と飛行船の出入り口へと向かった。

そこには、貴族らしい女性たちと奴隷たち……ゾラと親しい連中が押し寄せていた。

ゾラが親父に怒鳴っていた。

「バルカス！ さつさと私たちを乗せなさい！ それから、王都に降りて屋敷の財産も全部回収しなさい。いいわね！」

人が多く騒がしい港で、親父はミオルを突き飛ばした。

「ま、待ってくれ！ 俺の話を」

「黙れ」

そして腰に下げた剣を抜き、ミオルの首を一振りで落とすと体は蹴飛ばした。空に浮かぶ港から、ミオルの首と体は別々に落下していく。

ゾラの後ろに隠れた長兄 震えていたルトアートを親父が睨む。

「これから戦争だ。ルトアート、お前は乗れ。初陣を経験しろ」

「い、嫌だ！ 私に命令するな！ 田舎領主の野蛮人が！」

俺が黙っていると、ゾラたちが先程の出来事から徐々に回復していた。

「バルカス、いったい誰に命令しているのかしら？ 誰のおかげで平和に暮らしてこられたと」

「ルトアートを寄越せ。これから戦争だ」

いつもと雰囲気が違う親父を前に、ゾラが喚き散らした。

「図に乗るな！ ルトアートは私の愛した人の子よ！ お前なんかの血は流れていないわ。戦争をしたいなら、そのろくでなしにさせなさい！」

混乱して本音をぶちまけたらしいが……何とも酷い話だ。

だが、親父は髪をかく。

「だと思った。だが、これで清々したよ。ゾラ、ここでお別れだ」

ゾラが急に慌て始める。

「ま、待つて。今の話は違うの。あの、ほら！どうしても跡取りが欲しいなら、これから子供を作ればいいじゃない。とにかく、私たちをここから逃がして」

「悪いな。俺は忙しいんだ」

親父が合図を出すと、鎧をまとった騎士たちが甲板から降りてくる。

「ゾラたちはお帰りだ。避難したい人間を優先して乗せる。それからリオン！」

「はい！」

これまで情けなかった親父が、今日は格好いい。

「……皆を送り届けたらすぐに戻る。それから、あれだ……覚悟は出来ているか？」

親父の心配そうな顔を見て、いつもの親父だと思った。

それが妙に嬉しくて……俺は小さく頷いた。

「そうか。あとはこっちでやる。お前はお前のやりたいようにやれ。どうせ俺が言っても聞かない奴だからな。まったく、お前にはいつも驚かされる」

……そうするよ、親父。

迷惑をかけて本当にすまないと思った。

本当に俺は……前世も今も、両親に迷惑をかけ続けている。

港から王宮へと戻った俺は、駆け寄ってくるバーナードさんクラリスパパから報告を受ける。

「子爵、王国軍の集まりは悪い。地上戦力も思っように集まらない。飛行船も五十隻程度の数しか揃わなかった」

むしろ、五十隻も揃えられたのかと驚いた。

「こちらはパルトナーと合わせて二十四隻です。おっと」

段々と揺れが酷くなってくる。

バーナードさんも随分と顔色が悪い。

「子爵、単刀直入に聞こう。勝てるのか？ 返答によっては、家族を避難させたいのだね」

「……公国軍には勝てます。問題はあの超大型だけです」

超大型を消滅させる方法は　聖女の力と、リビア本人の力が必要だ。

心に届く声。

人の心に声を届ける力がリビアにはある。

何故って？　俺が知るかよ。そういう設定だ。

とにかく、その力が必要なのだ。

聖女の力だけでは片手落ちだ。

「子爵は本当に凄いな。どうかな？　これが終わったらクラリスを貰ってこないか？」

バーナードさんの冗談に笑おうとしたが、目が真剣だった。

妙な汗が出てくる。

「……勝ってから考えましょうか。今はほら、色々忙しいので」

「そうだな。さあ、こちらで準備をお願いします。もうすぐ、謁見の間の準備も終わるだろう。それまでは休憩をしてくれ」

案内されたのは謁見の間に近い控え室だった。

その控え室には、マリエたちがいた。

膝を抱え座り込むマリエは、酷く汚れていた。

白かったと思われるドレスは汚れ、膝に埋めた顔を上げてこない。

ユリウス殿下を始め、五人組が困っていた。

同じようにボロボロの格好をしているカーラは、部屋の隅でマリエを見守っている。

俺はカイルに近付くと、呆れ顔で話しかけてくる。

「あんた呪われているんじゃないの？」

「俺じゃない。呪われているのはお前の主人だ。それより、何があった？」

カイルは疲れた顔でこれまでの経緯^{いきわづ}を話してくれた。

「ご主人様が、自分は聖女じゃないって宣言したら、今まで取り巻きをしていた人たちが罵声を浴びせてきましたね。神殿の神官や騎士が怒鳴り込んできて、捕らえられて地下牢行きですよ。何があったのか、急に呼び出されて今はここにいますけど」

「何それ？　ちょっと笑える」

「こっちはまったく笑えませんけどね。それからずっとあの調子で

す。……ご主人様、このまま処刑されちゃうんですか？」

聖女を騙った極悪人だ。当然、神殿側は許さないだろう。

ミレーヌ様も、よくこいつを神殿から引つ張ってこられたものだ。

「王宮が一時的に処刑を延期にただけだからな。勝っても負けても、命はないな」

俺の言葉にユリウス殿下が睨み付けてきた。

すぐにマリエに声をかける。

「マリエ、大丈夫だ。俺たちが付いている」

だが、マリエは　。

「五月蠅い」

「え？」

「五月蠅いって言ったのよ！ あんたたち、何が大丈夫なのよ！
どうにかなるの？ あの化け物を見ていないのに、勝てると思っ
ているの？ 本当におめでたい連中よね」

「マリエ？」

本性を現しやがった。

「出ていけ！ みんな出ていって！ 私は　あんたたちなんか、

みんな大嫌いよ！」

カーラがマリエに駆け寄る。

「そんな。マリエ様は、私と友達だつて」

「嘘に決まっているでしょう。あんた馬鹿じゃないの？ そんな考えなしだから、孤立していじめられるのよ。あんたを利用したのは、そこにいるモブ野郎が少しでも苛つけば儲けもの、って思ったからよ。あんたなんか……友達じゃないわ」

カーラが泣き出す。

俺は舌打ちをして、

「本性はそれか。猫をかぶるのが上手かったじゃないか。今日で剥がれたけどな」

マリエが俺を睨み付けてくると、クリスが剣の柄に手をかけた。

「バルトファルト、もう止せ！」

だが、クリスを貶^{けな}しだしたのは、マリエだった。

「はあ？ 止めて欲しいのはこっちよ。あんた、剣術しか能がない癖に随分と偉そうね」

「なっ！？」

今度はグレッグを見ていた。

「あんたも口だけよね。何が実戦云々よ。あんた、本当に役に立たないわ。その紫もナルシストで気持ち悪い。緑色のあんたは、何を考えているのか分からないから気味が悪いわ。それとあんたよ。あんた。一番の問題は元王太子のあんたよ！」

「マリエ？　いったいどうした？」

ユリウス殿下にマリエが笑いながら言うのだ。

「王子様って肩書きくらいしか役に立たない奴よね。本当にあんたたち馬鹿よね。地位も名誉も　財産も捨てて、女が喜ぶと思っていたの？　本当に意味が分からない」

ゲラゲラ笑うマリエは、カイルにも視線を向けた。

「そのこの小うるさいガキもそう。調子に乗って偉そうに。私が許してあげなかったら、あんたなんかまた奴隷商館に戻されていたのよ。少しは感謝しなさいよ！」

この場にいる全員がドン引きしていたと思う。

俺は首を横に振る。

「見苦しいぞ」

「五月蠅い。消えろ！　お前がいるから私は幸せになれないんだ！　返せ。返せよ！　……私の幸せを返しなさいよ！」

マリエが泣き出したところで、アンジェとリビアが部屋に入って

きた。

「リオン！ 無事だった……ど、どうした？」

「マリエさん、どうして泣いているんですか？」

俺は髪をかき、マリエ以外静まりかえった面子を外に出した。

「少し二人だけにしてくれ。こいつと話がある」

マリエは徐々に静かになっていくと、そのまま倒れるように気を失っていた。随分と疲れているのか眠っていた。

……本当に腹立たしい。

マリエは夢を見ていた。

あの日も、兄に見捨てられて泣いていた。

前世の記憶。

膝をすりむいて座り込み、泣き疲れて眠ってしまった時の記憶だ。

（私も馬鹿よね。さっさと帰ればいいのに、意固地になって。そういえば、ここからどうやって帰ったのかしら？）

ボンヤリと眺めていると、少年が近付いてきた。

グチグチと文句を言っている。

『この馬鹿。泣き疲れるくらいなら歩けばよかったんだ』

兄が戻ってきて、前世の幼いマリエを背負っていた。

（ああ、そうか。結局兄貴に背負って貰ったのよね。なら、最初から背負いなさいよ、この屑兄貴）

文句を言いたいマリエだったが、涙が流れる。

背負われた自分は安堵して眠っていた。

涎を垂らし、兄の服が汚れる。

どうせ文句を言うのだろうと思っていたら、

『……何で俺に頼るかな』

少しだけ嬉しそうな兄の顔を見て、マリエは胸元に手を当てて握りしめた。

そうだ。兄は　口は悪いが優しくかったと、マリエは思い出す。

（糞兄貴……何で死んだのよ）

思い出すのは、兄が死んだ日のことだ。

（いつもみたいに、文句を言ってよ）

旅行から戻ってくると、マリエは両親に平手打ちをされた。

葬式が終わると家を追い出されたのだ。

（いつも糞兄貴がいれば、どうにかなったのに。糞兄貴がいなければ、私が不幸せになったのよ。何で死んだのよ……お兄ちゃん）

文句を言い合いつつも、うまくやっていると思っていた。

大抵のことは、兄に任せると嫌々でもやってくれた。解決してくれたのだ。

だから、マリエは兄に甘えていた。ゲームを押しつけたのも、甘えていたからだ。

だが、頼りにしていた兄が死んだら、全てが狂い始めた。

マリエは 前世で兄を本当に嫌ってはいなかった。

文句も言っが、それでも嫌いではなかった。

頼りになる兄の顔が思い出せない。

（助けてよ。何で助けてくれないのよ……）

いつも文句を言いつつ助けてくれた 優しい兄の顔が思い出せなかった。

「……お兄ちゃん」

眠っているマリエの顔を見ながら椅子に座る俺は、忌々しい前世の妹を思い出す。

あいつも周りに迷惑をかけ、それをいつも俺がフォローしていた。

第二の人生までマリエのフォローに大忙しだ。

『マスター、このまま寝かせていてもよろしいのですか？』

拳銃の弾丸を全て抜き取り、脅しのためにテーブルに置いた。

「もう少しだけ寝かせてやれ。まだ時間はあるからな」

『叩き起こして、無理矢理言うことを聞かせるのでは？』

「お前は俺をなんだと思っているの？ いや、言わなくていい。どうせ、極悪非道とか言うんだろ」

『残念でした。優柔不断のヘタレ野郎、です。惜しかったですね』

全然惜しくないよ。むしろ、かすってもいないよ。

ハッキリ言って、極悪非道の方がまだマシだよ。

ルクシオンを睨んでいると、マリエが上半身を起こした。目が赤く腫れ、髪も乱れているので怖く見える。

拳銃をマリエに見えるように手に取った。

「起きたな。さあ、交渉の時間だ」

「……嫌よ。お兄ちゃんが来るまで何もしない」

何こいつ？　もしかして壊れたの？　お兄ちゃんって誰よ？

本当にどうしようもない奴だ。

「お前の兄貴？　どうせろくでもない屑野郎だな」

「お兄ちゃんを馬鹿にするな！」

マリエが近くにあつた物を俺に投げつけてきたので、ルクシオンを手に取って盾代わりにする。『マスター……私はこのことを忘れませんよ』などと恨みがこもった声で言うてくるから無視した。

「本当に屑だな。そんなお前と妹を重ねて見ていた俺が馬鹿だったよ。あいつの方がまだマシだな」

「五月蠅い！　あんたの妹なんて、どうせ頭のおかしい馬鹿な女でしょ！」

頭がおかしくて、わがままで、ついでに馬鹿で腹立たしい妹だが、マリエにそこまで言われる筋合いはない！

「馬鹿にするなよ！　お前より百倍マシだからな！　確かに頭も悪くて、性格は酷くて、おまけに腐の人で、性格は最悪だが、お前よりマシだ！」

「私の兄貴だつてあんたより百倍。いえ、一千倍マシよ！ モブ顔で、ハッキリ言つて目立たないし、口は悪いし、性格も悪いし、口が悪いし……と、とにかく、お兄ちゃんを馬鹿にするな！」

腹が立つてきた。

どうしてこいつとこんなことで喧嘩をしなければいけないのか？

言い合つていて息が切れた。

俺はマリエに尋ねる。

「どうして聖女になった。あの乙女ゲーをクリアしていたなら、リビアの力が必要なのは知っていたはずだ。おまけに、王家の船もないのに戦いを挑むとか馬鹿なのか？」

マリエは肩で呼吸をしながら答える。

「知らなかったのよ！ 私は……兄貴に……お兄ちゃんにゲームをクリアして貰ったのよ。その後にすぐに死んで、落ち着いた頃を持っていたセーブデータを確認したの！ 画像とか、動画でしか知らなかったのよ！」

こいつゲームをクリアしていないのに、半端な知識で逆ハーレムを完成させただと！？

……あ、あれ？ ちょっと待てよ。兄貴にクリアさせた？

「……俺、妹が海外旅行に行くから、その間にゲームをクリアしろ

ってあの乙女ゲーを押しつけられたただけど？ え？ もしかして、お前……え？」

マリエも「え？」と言って、俺の顔を見た。

俺もマリエの顔をよく見ると、前世の面影が色濃く残っていた。

このム力つく顔は間違いない！ マリエは俺の妹だ！

「お、お兄ちゃん！？ おにゅちゃ 痛いっ！」

飛び付こうとしたマリエの頭部に握った拳銃のグリップで叩いてやった。

「お前かよおお！」

俺が絶叫すると、ドアの向こう側がガタガタと音がした。

だが、それよりも気になるのは目の前の女 マリエだ。

「久しぶりに出会った妹に酷くない？」

「俺は、もしも再会したらお前に復讐すると決めていたけどな」

「兄貴がお母さんに色々と言うから、話がややこしくなったのよ！」

「元はお前のせいだろうが！ ま、待て！ お袋や親父はどうなった？」

ルクシオンが俺たちの様子を見ながら、

『これはアレですね。お二人が芝居をしているとは思えませんし、前世というのも真実味を帯びてきましたね』

……こいつ、実はまだ俺を疑っていたのか？

運命

「つまり、お前は自分の子供をお袋と親父に押しつけたのか？」

「う、うん。だって、あんたには育てられないから、って。酷くない？」

「いや、まったく酷くない。むしろ、その方が子供 姪っ子にも良かったな」

謁見の間の近くにある控え室。

そこで俺は、前世の妹と運命的な再会を果たした。

まったく嬉しくない再会だ。

散々この世界をかき乱したのが、自分の妹だったとか泣きたくなってくる。

ただ、両親がどうなったのか聞けて良かった。

「それで？ お前の記憶はどこで途切れているの？」

「え、えっと……彼氏に暴力を振るわれて、これはさすがにまずいかな、ってとここで気付いたらこの世界にいました」

テヘッ！ みたいな顔をしたので、拳銃を向けるとマリエが怯えだした。

「私だって色々頑張ったもん！」

「うるせえっ！ 中身は婆の癖に「もん！」なんて使っくな！ 鳥肌が立つわ」

「言っただけね！ 糞兄貴こそ中身はオッサンじゃない！」

マリエが俺を睨み付けてくるが、問題はそこじゃない。

「とにかく、お前はリビアに協力しろ」

「……あ、あのさ？ このままだと私は死ぬんだけど？」

「そうだな。最期くらい真面目に人生に向き合ったらどうだ？」

マリエが泣き始めた。

「そんなの嫌よ！ 助けてよ、お兄ちゃん！」

糞兄貴とか、兄貴とか、お兄ちゃんとか……こいつ、いったい俺をなんだと思っているのか？

マリエは泣く。本当に泣いていた。

「それに嫌よ。あんな化け物と戦いたくない。絶対に戦争に出ないわ」

「……は？ ふざけるなよ、お前が聖女になるから色々狂ったんだよ。とにかく、責任とって飛行船に乗れ。それ以外はリビアのサ

ポートでいいから」

泣いている目で俺を見ているマリエは「何であの女なのよ。私を助けてくれてもいいじゃない！」そう呟いて、外に飛び出してしまった。

「あ、この馬鹿！」

そしてタイミング悪く部屋に入ってくるのは、バーナードさんだ。

「子爵、準備が整った。謁見の間に来てくれ」

大臣なのに人手不足で動き回っているバーナードさんは酷く忙しそうだった。

迷惑もかけられず、俺は謁見の間へと向かう。

……マリエの奴に腹を立てつつも、どうしたらいいのが悩みながら。

マリエが部屋から飛び出すのを見たのは、アンジェとリビアだった。

アンジェがマリエを睨み付けている。

「あの女、ここまで来て逃げるつもりか」

目つき鋭いアンジェにマリエを追わせては、危険と判断したりビ

アが説得する。

「アンジェは謁見の間にご迷惑をいただきますから！」

「リビア……わ、分かった」

アンジェも謁見の間に呼ばれており、これからリオンと向かわなければいけない。

リビアは内心、

（……私が邪魔をしたら駄目だね）

そう思っ駆け出した。

王宮の廊下を走り、マリエを追いかけると屋上に逃げていた。

涙が出てくる。

それを拭い、マリエを追いかけた。

（私はリオンさんに相応しくない。分かっていたのに。アンジェがいるのに、どうして私は）

そうしてマリエが逃げた場所は、王宮にある屋上だった。

屋上に庭が整備されたその場所に逃げ込んだマリエに追いついたリビアは、互いに呼吸が乱れていた。

マリエがリビアを睨む。

「……返すわよ」

「え？」

「全部あんに返すから、私にも返してよ。あんに必要なのは、殿下たちよ。あの五人も、そしてカイルも　聖女の地位もあんなもののなのよ！」

話に理解が追いつかないリビアを置き去りに、マリエは訴えてくる。

「だから返してよ。おにい……ちゃんを……リオンを返してよ。全部あんに返せば、それで終わるのよ！」

リビアはマリエに近付くと、そのまま右手を力の限り振り抜いた。

強烈な平手打ちに、マリエが倒れる。

マリエは力なく笑って頬を押さえていた。

「ああ、これ、両親にもこんな風に叩かれたわ。凄く痛い。何？怒ったの？　安心してよ。あんなものは全部返すから」

リビアは、涙を流しながら叫んだ。

「　馬鹿にしないで！」

泣き出すリビアは、その場に座り込んでしまう。

マリエが啞然としていた。

「リオンさんはものじゃない……せめて、学園にいる間だけでも一緒にいたかった。他のものなんて何もいらなかったのに」

貴族と平民。

二人の間にはそんな大きな壁があった。そんな壁に比べれば、リオンとアンジエの間にある壁などどうにでもなるとリビアには思えたのだ。

二人はお似合いだ。

幸せになつて欲しい。

「返してなんて言わないで。リオンさんは、私のものじゃない」

マリエが俯いて笑う。

「……それじゃ何？ 結局私は、全てを失っただけじゃない。本当に最低。二度目の人生も、失ってばかりじゃない」

泣き出したマリエが蹲り、嗚咽を漏らす。

「何もかも知っていたのに。うまくいくと思っていたのに……どうして、私は幸せになれないのよ」

泣いているマリエを見るリビアは、何と云えばいいのか分からなかった。

すると、

「ここにいたんですか？」

「マリエ様！」

カイルとカーラが、マリエに駆け寄った。

マリエが顔を上げると、二人は本当に心配した顔をしていた。

「あんたたち、何で？」

どうしてここにいるのかという顔をしているマリエに、カーラが泣いていた。

「わ、私……マリエ様がいないと、本当に一人になっちゃう。助けて貰って、本当に嬉しくて……マリエ様は本当に優しくして」

泣いているカーラを横目で見たカイルは、呆れた顔をしていた。

「僕も悪いところはありますからね。でも、ご主人様も流石にアレは酷かったですよ。まあ、これでお相子ですね。他の五人は知りませんが、僕とカーラさんくらい一緒にいないと可哀想ですし」

マリエが、ポロポロと涙をこぼす。

「ごめ……さい。ごめんなさい。本当に……ごめんなさい、二人とも」

カイルが目を袖でこすり、泣いているのが分らないようにしていた。

「さあ、いきますよ。偽物でも聖女様です。格好くらい付けないと」
カーラとカイルに支えられ立ち上がった。二人は、リビアに頭を下げてから、マリエを連れて室内へと戻っていく。

リビアは俯いて笑っていた。

「……嘔吐き。全部失っていないじゃない。支えてくれる人が二人もいるじゃない……嘔吐き」

そう呟いて、ハッと気が付き口元を両手で押さえた。

胸の中にある黒い感情に涙が出てくる。

（私には何も残らないのに）

屋上への入り口で、泣いているリビアを見ていたのはアンジェだった。

通り過ぎたマリエたちに目も向けず、リビアの泣いている姿から目が離せなかった。

「リビア、お前……そうだよな。ずっと一緒だったよな」

学園でリオンの後ろを付いていくリビアを見ていたアンジェは、

胸の痛みが苦しかった。

三人でいるのが楽しくて、そのことに目を向けなくなかった。

「すまない。私がこんな気持ちを抱けなかったら、お前を苦しめなかったのに。……許してくれ、リビア」

アンジェが口元を押さえて涙を流した。

涙を拭い、そして立ち上がってリビアの下へと向かう。

「リビア」

泣いていたリビアは、顔を隠しておどけて見せた。

「アンジェ？ あ、あの、マリエさんは無事に戻りましたよ。その、今は顔を見ないください。色々あったので」

アンジェは正直に話した。

「私は リオンが好きだよ」

リビアが口を閉じ、俯くと涙が地面に落ちる。

「だから、お前も身を引くな」

「え？」

アンジェはリビアに手を差し出した。手を握るリビアを立たせて、そして向かい合って互いの両手を握る。

「お前はそれでいい。リオンにちゃんと気持ちを伝える」

「……一度伝えました。でも、リオンさんはその後すぐにはぐらかして」

「だったら！……だったら、今度は逃げられないようにする。私も気持ちを伝えるから、お前も伝えろ」

泣いているリビアを、アンジエは抱きしめた。

「いいんですか？　だって、アンジエは貴族様で　リオンさんも貴族様ですから」

「馬鹿。こういうものに身分の差などない。その程度で諦められないから苦しむ。なら、伝えるしかないだろうが」

本妻とか妾にすればいいという意味ではない。本当に誰が好きなのか、それを知りたがっていた。

アンジエは優しく語りかける。

「私はお前も大事だ。だから、泣くのを止める」

リビアもアンジエの背中に手を回し、

「はい」

と力強く呟いた。

謁見の間。

視線を動かし、リビアとアンジエを探すもどこにもいなかった。

マジかよ。ちょっと心細いぞ。

参加している五人組は、服装は整えたいらしいが顔付きに気合が足りない。何を悩んでいるかすぐに分かる。

色恋に悩みやがって。

俺なんか愛について真剣に考えているというのに。最終兵器として、ルクシオンですら倒せない超大型のモンスターを倒せる愛！愛って凄いな！もう、愛こそが最終兵器だよ！……どこかに愛は転がっていないだろうか？

こんなに悩んでいる俺を少しは見習え、馬鹿五人組。

整列した貴族や騎士たち。

陛下は意味ありげに右の口端を上げ、機嫌良く振る舞っていた。

「随分と人が少なくなったものだな」

逃げ出した貴族や騎士たち。兵士たちですら集まらない。

状況は絶望的だ。

俺も一般の兵士ならすぐに逃げている。いや、一般人なら、そもそも兵士にすらなっていないかも知れない。

「だが この場に残った者たちこそ、真の勇者たちである！ 公国は卑劣にもモンスターを従え、王国領に侵攻してきた。諸君……今こそ命をかける時！」

残った連中は肝が据わっているのか、それとも諦めているのか……。

「公国に立ち向かうため、我々は一丸となって戦う必要がある！ バルトファルト子爵、前へ！」

謁見の間に敷かれた赤い絨毯を歩き、陛下の前で膝をついて頭を下げた。

「この危機的状況に際し、私は君を総司令官に任命する。若いと侮る者もいるだろう。経験不足と信用しない者もいるだろう。だが、この状況を打開出来る力を持つのは子爵だけだ。バルトファルト子爵、この戦い 勝てるか？」

芝居がかったやり取りだ。

だが、嫌いじゃない。

一回くらいやってみたかった。

どこかで聞いたような台詞で返した。

「陛下がそう望まれるのなら」

周囲がざわめく。

聞こえる声は「若造が」とか「口だけは一人前だ」とか「うゝん、七十点」とか「どこかで聞いたような台詞だな」とか……お前ら黙れ！

見る！ 陛下が少し怒っているじゃないか！ え？ 何で怒っているの？

「……そうか」

対して、ミレーヌ様は少し頬が赤かった。嬉しそう？ え？ 何で！？

陛下が宣言する。

「バルトファルト子爵を総司令官とし、これより公国との戦いに決戦を挑む！」

そんなやり取りの後、豪華な衣装に身を包んだ貴族 侯爵が異議を唱える。

「お待ちください、陛下！ このような成り上がり信用してはなりません。こやつは反逆罪に問われています！ このような者の下で戦うなど、我らを愚弄するおつもりか」

レッドグレイブ公爵家の敵対派閥をまとめているのが、この侯爵だった。

彼に賛同する貴族たちも異論を口にする。

「そうです。ここは公国と交渉をするべきです」

「私にお任せください。必ず公国との交渉を成功させて見せます！」
「そのような者に頼るなど間違っています！」

立ち上がって陛下とミレー又様の顔を見れば、陛下は目を閉じるがミレー又様は無表情で口を開く。

「……見苦しい真似は止めなさい。子爵は既に罪人ではありません。罪を捏造したのは貴方たちでしょうに。それに、総司令官に任命したのは陛下の決定事項です。逆らうというのですか？」

王様には色々と決定できる権利がある。だが、毎回それを使用することは、周囲の反発を買うため考えなければいけない。

まあ、俺を総司令官にしようとするれば、この方法しかないだろう。

侯爵が顔を赤くして抗議していた。

「なんと！ そのような物言いは、王妃様といえ許せません！ どのような状況では、我々は一丸となって戦えませんぞ！」

ミレー又様も目を閉じた。

俺はゆっくりと立ち上がって振り返る。貴族に文武官が並ぶ謁見の間で、懷から拳銃を取り出すと天井に向けて発砲する。

謁見の間に、発砲音が響いた。

それを合図に入り込むのは、衛兵と　公爵家の騎士たちだった。

ヴィンスさんを見れば小さく頷いている。

「その汚い口を閉じろ、ゴミ共が」

「な、なんだと！　衛兵！　何をしている。こやつをすぐに　な、何だ？」

衛兵たちが捕らえていくのは、先程抵抗した貴族たちだ。

「反逆罪で捕まるのはお前らだ。俺はお前たちのように捏造なんかない。しっかり証拠も用意してやった」

上空にルクシオンが出現すると、謁見の間の中央に立体映像を映し出した。そこにいるのは、侯爵と他の貴族たち。

「残念だ。非常に残念だ。俺は心優しいから、この場で一丸となって戦ってくれるのなら許してやるつもりだったのに」

「な、何を！　陛下！　この者を止めてください。こやつ、謁見の間に銃を持ち込みましたぞ！　こやつは危険です！　陛下も分かっているはず。こやつは野放しにしてはなんのです！」

立体映像が動き、そして音声が部屋に響いた。

『侯爵様、バルトファルトの奴が釈放されました。ミレーヌ様の命令だとか。噂では、奴を総司令官に据えるお考えのようです』

立体映像の中の侯爵が口を開く。

『あのような小僧に籠絡されるとは情けない。多少有能でもやはり女だな。陛下も尻に敷かれて情けない限りだ。それにしても、公国が密約を破るとは思わなかったな』

『いかがいたしましょう？』

『殿下を交渉材料にしろ。奴ら、どうしても取り返したいようだからな。陛下には内密にことを進めるのを忘れるなよ。それから奴に、バルトファルトの好き勝手にさせるな。公国の切り札は計算外だったが、奴も同等かそれ以上に危険だ。いざとなれば、陛下に責任を取ってもらい公国とは手打ちだ』

……陛下に責任を取らせる。まあ、王位から退けて公国に差し出すとか、そういった意味合いなのだろう。十分に不敬だ。

侯爵が青い顔をして俺を見ている。

「う、嘘だ！　こんなのはデタラメだ！　こやつの見せる幻だ！」

銃口を侯爵に向けて俺はニヤニヤ笑う。

「これ以外にもあるんだよ。実はさ、ヘルトルーデさんがお前たちとの関係をペラペラ喋ってくれてね。お前ら、あの人に裏切られたんだよ」

ヘルトルーデさんに見てみれば、このような状況下で内輪揉めをしている王国を見て楽しみたいのだろう。

立体映像の侯爵が不満そうな口振りで、

『どいつもこいつも分かっていない！　いったい誰が危険なのか分からないのか？　聖女など厄介だがどうにでもなる。だが、あいつだけは駄目だ！　あいつ一人で、いったいどれだけの艦隊と同じ働きが出来る？　一隻で数十隻の艦隊に完勝できる意味が分かっているのか？』

『しかし、今は公国が　』

『バルトファルトをぶつけ、互いにすり潰させる！　家族を人質に取れ。どんな手段を使っても構わん！　いいか、奴を公爵家の番犬だと思うな。奴の飛行船は、一人の人員も必要としないというではないか。おまけに、僅か数ヶ月で工場を用意して飛行船を整備した。分かるか？　あいつこそ危険なのだ！』

『ですが、本人はそのような人物ではないと　』

映像の中の侯爵が激怒している。

『心変わりがこの先ないと言えるのか！　公爵もいったい何をしているのか。あいつ一人を好きにさせれば、それこそ王国は終わりだ。公国に勝ったところで意味などない。奴は　奴だけは何としても潰せ！』

……こいつらにとって、俺はマリエと同じくらいに脅威だったわけだ。いや、侯爵はそれ以上に脅威と感じていたらしい。

そんな俺とマリエに目を奪われ、公国に好き放題に暴れ回られるとか勘弁しろよ。

ゲーム 本当のシナリオなら、こいつらが裏で暗躍したおかげで、主人公が台頭できたのだろうか？

まあ、考えても仕方がない。

「良かったな。お前らの裏切りのおかげで、王国は危機的状況だ」

侯爵は俺に向かって叫ぶ。

「……それがどうした？ 全ては国のためにやったことだ。この国を一体誰が支えてきたと思っている？ わしだ。わしたち貴族だ！ お前のような小僧にいたい何が理解できる！ 国を維持するために、必要な犠牲がお前だったのだ！」

随分と激怒しているのか、顔が凄く赤くなっていた。

「何か勘違いをしているようだ。俺は貴方を認めていますよ。今まで立派に王国を支えてきたのでしよう。うん、よく頑張った！ 尊敬しよう！ あんた最高だ！ ……けどさ、失敗すれば意味なんてないから」

「し、失敗だと！」

「今この時、この状況がお前らのやってきたことの結果だよ。分かるかな？ お前らが王国を危機に陥れた。その責任を取れるんだ。それだけの人物と判断された証拠だよ。ほら、嬉しいだろ？ 責任者は責任を取るためにいるんだよ。知っているかな？」

「わ、わしは侯爵だぞ！」

「うん、凄いな。立派な爵位だ。だからこそ責任を取るに相応しい。安心していいよ。お前たちの尻拭いは俺がしてやるから。よかったね。俺のような後進がいて。お前らの失敗は俺が処理してやるから」
煽るように笑ってやった。

お前の罪は、俺を殺そうとしたことだ。……何もしなければ俺だつてここまで関わらなかったのに。

「お前にいったい何が出来る、小僧！ 政治も分からぬ小僧が、でかい口を」

「うーん、分からないかな？ ちゃんとしないと分からないみたいだから言っけど お前は負けたんだ。国のためにお前たちが今度は犠牲になる番だ」

青い顔をする侯爵の顔を拳で殴り、吹き飛ばした俺は衛兵たちに命令する。

「これで俺に喧嘩を売ったのはチャラにしてやる。後は自分の罪を償え。連れていけ」

「はっ！」

裏切り者の貴族たちが連れて行かれ、残ったのは更に少ない貴族たちだった。

軍の関係者 将軍たちも俺を見ている。

「……さて、俺が冤罪で捕らえられていたことを知った諸君。ここ

でハッキリさせておくことがいくつかある。一つ目　俺はお前らが嫌いだ。この国が嫌いだ。理由？　お前らが間抜けなせいで俺が働くことになったからだよ！　ちゃんと仕事しろ！」

俺に突き刺さる視線。

ただ、彼らにも言い分はあるだろう。何しろ、公国があんな切り札を持っているなど知らなかったのだ。いつもの国境での争い程度にしか思っていなかったはずだ。

でもそんなの関係ない。

そもそも、こいつら国の中核にいて一体何をやっていたのか？　いや、よく考えたらしょうもないことは、前世の国でもよくあったな。

どうしてそんなことになったのか、首をかしげたい事例はいくつもあった。

それでも、あっちの方がマシだった。

だって、こんなグダグダなことにはならなかった……のか？　まあ、いい。生きていくなら絶対前世の方がよかったのは事実だ。

「二つ目。お前らが俺を信用しないのは理解している。俺もお前らなんて信用しない。それに、こんな小僧の命令で戦えるか、そう思う気持ちは理解しているつもりだ。勝てると思える奴がいるなら名乗り出る。俺が叩き潰してその自信を潰してやる。俺に勝てないのに公国に勝てるって言わないよな？」

視線をそらす騎士や軍人たち。これが、ユリウス殿下が総司令官ならまだ納得しただろうが、俺では頼りなさすぎるし、心情からも納得できないのは理解できる。

俺も年下に命令に従えとか言われたら、心の中で「何だこの野郎」って思うからね。

「三つ目は非常にシンプルだ。俺の命令に従えば勝たしてやる。従わないならさっさと逃げる。疑問を持つな、口答えをするな、お前に許されるのは、俺の命令に従うことだけだ。どうだ、分かったか？」

ざわつく謁見の間に俺の声がよく響いた。

「俺のために戦って死ね。代わりにこの国を救ってやる」

決起集会的な何かが終わった俺は、頭を抱えていた。

「もう最悪だ！」

『今更ですか？ 自分でやると言ったのに。それにしても、よくあれだけ言えましたね。ほとんど全ての言葉がマスターに返ってきてますよ。公国を軽視したのはマスターも同じです。この状況、マスターがうまく立ち回れば回避できたと推測します』

「五月蠅い。そもそも、俺がそこまでする必要があったのか？」

『この状況が嫌ならもっと頑張ればよかったのでは？ マスターの

ブーメラン芸は神業ですよね』

自分でやるとは言ったが、よく考えなくても俺が総司令官とか終わっている。

人材不足極まる、って感じた。

用意された部屋でルクシオンと向かい合っていた。

「とにかく避難を最優先だ。俺の命令に従いたくない奴には公国の進路上にある村や街の住人の避難をさせる仕事を振る。王都からも人を避難させる」

『少ない戦力が更に減りますね。そのように手配する書類を作りましょう』

まるでプリンターのような機械が、命令書を次々に作成していく。ルクシオンが貰った資料から部隊の編成やら段取りを整えていた。

「公国軍の状況は？」

『移動速度は速くありません。王都到着までまだ時間がありますが、こちらの準備が整い、戦いを挑めば どちらか一方の超大型は、王都に辿り着くでしょうね』

出来上がった書類を手に取り、俺は自分の名前をサインしていく。

「お前の本体にも働いて貰うぞ」

『それは構いませんが、通信状況が悪いですからね。大陸を挟んで

の活動となると、マスターのサポートが最低限になってしまいが？』

「問題ない」

『分かりました。それにしても、侯爵は有能でしたね』

「は？」

俺が驚くと、ルクシオンは自慢をしてくる。

『マリエでも公国でもなく、私を脅威と判断したのは流石ですよ。それと、侯爵は王家の船について知識を持っていたのでしょうか。だから、マスターを危険視したのです』

王家の船　ゲームでは主人公の飛行船として登場するが、設定では王国を建国させた力を持ったロストアイテムだ。

同じ飛行船のロストアイテムであるルクシオンを知り、侯爵は警戒したのかも知れない。だが、公国を侮りすぎた。

「有能ならこの状況にはなっていないだろ」

『マスターは私という力を持ちながら、この状況で意に沿わない地位に就きましたけどね。侯爵を笑えませんか』

……… いったいどこで間違ってしまったのかと、俺は考えながら書類にサインをしていく。

王宮の地下深くに作られた格納庫へと足を運んだ。

そこに眠っていた飛行船は、白く美しい船体をしていた。

形はルクシオンと同じで流線型の飛行船。だが、こちらの方がより凝ったデザインになっている。

主人公の最終的な母艦を前にしている。

「大きな」

『四百メートルくらいですね。パートナーよりも小さいです』

「強そうじゃないか」

『パートナーに比べると頼りないですよ』

「……デザインがいいよね」

『生産性、整備性を無視した豪華客船では？ パートナーの機能美には敵いません』

あの黒い刺々しい右腕の時のように、何が何でも壊そうとはしなかったのは幸いだ。だが、パートナーの方が凄いと自慢を繰り返してくる。

振り返ってこの場にいる面子を見た。格納庫で王家の船を管理していた整備士たちが整列している以外の面子は。

不満そうな陛下に、そんな陛下に呆れているミレーヌ様。

五人組が無言で付いてきて、気まずそうにしているのはマリエだ

った。

あとは、リビアとアンジェの姿もある。

リビアは俺が連れてきて、アンジェは王家の関係者としてここにいる。

「随分と自分の船を自慢する使い魔だ」

陛下の棘のある言葉に、俺は冷や汗が止まらない。

「こいつ、負けず嫌いです。え、えっと、とにかく！ 中に入りましょうか。こいつが修理できるかも知れませんし」

「無理だな」

「え？」

陛下は飛行船の前にある装置を指さした。

シートがかけられている物体。陛下の命令でシートが取り外されると、そこにはハート型の台座があった。

「真に愛し合う者同士があそこに立った時、王家の船は持ち主と認め、その力を発揮するのだ。所有者がいなければドアも開かず中に入れない」

……こんな設定、ゲームにはなかった気がする。

王家の船を探しに来て、主人公と愛し合っている男に反応したは

ずだ。

陛下は何やら感慨深そうにしていた。

「王家であるホルファート、そして分家とはいえマーモリア家。更にフィールド家、アークライト家、セバーク家……かつて、パーティーを組んでいた者たちの末裔が揃うとは運命なのだろうな」

何か聞いた気がするな。ホルファート王家を始め、五人組の実家は王国建国前にパーティーを組んでいたらしい。だから、この五人というか、五つの家の血縁には、王家の船を動かす資格があるとか何とか……。

もう一人、名前も知らない女性冒険者が存在していた。

それがリビアの先祖だったとか、そんな話があったな。

確か、リビアのご先祖様が初代聖女だった気がする。

興味がなかったのだから「はい、運命、運命、良かったね」とか思っ
てゲームの説明は全てスキップしていた。

「王家の船に認められるのは、王家と残りの四家。そして、失われた最後の仲間の一族だけが資格を持つ」

自信満々の陛下が俺に自慢してきた。

何だこいつ？俺に何か恨みでもあるのか？お前の息子をボコボコにして、嫁さんを口説いただけじゃないか。

あ、駄目だ。恨まれても仕方がない。他人が聞いたら最低の屑野郎にしか聞こえない。

ルクシオンが耳打ちしてきた。

『ドアを破壊すれば簡単に中には入れるのですが？ 空気を読んだ方がいいでしょうか？』

最後に必要なのは愛だ。

その愛を確かめるための装置があるのなら、今の内に確かめておきたい。

ルクシオンに空気を読んで貰い、俺たちは台座まで近付く。

台座まで来るとアレだ。

……ハート型の台座というかステージが、妙に神秘性がない。

ミレー又様が俺たちに振り返る。

「覚悟はいいですね？ これは生易しい装置ではありませんよ」

妙に緊張したミレー又様と、急に黙ってしまう陛下。

「まずは私たちが使い方を示します。いいですね、陛下？」

「う、うむ。今度こそ動くはずだ！」

ミレー又様の疑った視線に、陛下が怯えていた。

二人がハート型のステージに乗ると、中央に線が入っていた。線を挟んで二人が立つと、ハート型のステージが光り始める。

男性がいる場所は青に。

女性のいる場所は赤　　ピンク？　　まあ、そんな感じに光った。

どこからともなく声がする。

『男性　二十五点！　女性　五十八点！　残念！』

……え？

全員がオロオロと顔を見合わせていると、ミレーヌ様が陛下をポコポコと叩いていた。おい、ちょっと可愛いぞ。

「嘔吐き！　二十五点、って何よ！　それってもう他人が顔見知り程度じゃない！」

陛下が言い訳をしているが、その姿は非常に情けない。

「う、五月蠅い！　お前だって、たったの五十八点じゃないか！　お前だって私のことをもう愛していないんだろが！　ああ、そうさ。もうお前を女として見られないよ！　それが悪いのか！」

二人して言い争っている姿を見て、俺は何となく理解した。

「愛情を数値にして伝えたのか？」

ルクシオンが頷く。

『ジョークグッズに近い装置ですね。先程、王家の船にアクセスして調べてみましたが、どうやらお金持ちが道楽で作った飛行船のようです。私の本体よりも随分前に生産され、新婚旅行で一度使用したあとに倉庫で眠っていたそうです』

王家の船の建造理由が微妙すぎて判断に困る。え？ そんな理由なの？

古代の民間船だったとか、誰に言っても信用して貰えないだろう。

『ちなみに、その夫婦は二年で離婚したそうですよ』

「そんな情報は知りたくないよ。それよりも、さつさと終わらせるぞ。やり方は分かったんだ。この中の誰かが乗れば動かせるかも……って、思っていたんだけどな」

マリエたちは、どう考えても修復不可能だ。

このまま動かせないかも知れない。

『動けば間違いなく戦力になりますよ。武装もあつて、この世界の飛行船よりも確実に高性能ですから。あ、修理は必要ですね』

格納庫で大事に保管されてきたが、中身の整備が出来ていない王家の船。

例えるなら、整備をしていない車か？ 中身はボロボロなのに、外見だけは綺麗な状態だ。

それにしても、ドアの開け方がジョークグッズというのが何とも情けない。

「どうしても駄目なら、扉を壊して中に入るか」

『では、作業ロボットたちをこちらに向かわせます。十分ほどお待ちください』

その間に、誰かが認められれば儲けものと考えていた。

問題は、王家の船が愛を増幅するとかそういう大事な設定の部分を俺が覚えていないことだ。当然、マリエも知らない。

本当に大丈夫かと不安に思っている。

「……マリエ、来い！」

「え？ え！？」

ユリウス殿下がマリエの手を握り、乱暴に装置の上に連れて行く。争っている自分の両親を無理矢理下ろしていた。

俺だったら、両親が愛し合っていないとか知ったらショックだな。何をするのかと思っていたら、

装置が動き出して愛を数値化する。

『男性 九十点！ 女性……十七点。非常に残念な結果に終わっ

てしまいました』

電子音声が空気を読まない。

ルクシオンのような高性能な人工知能ではないらしい。

マリエが青ざめた顔をしていた。

ただ、ユリウス殿下は笑みを浮かべている。どうした？ 現実を知って吹っ切れたか？

「……これが結果なら受け入れるさ。マリエ、俺はここで宣言する。いつかお前を振り向かせてみせる」

自分を騙し、そして愛していないと分かった女性を前に振り向かせるという宣言。

アンジェがいるのにこの態度である。

チラリとアンジェの様子を見ると、呆れた顔をしていた。

よし！ 怒っていないなら大丈夫だ。

マリエをその場に残し、今度はジルクが装置の上に立つ。

『男性八十九点。女性……十二点。悲しい結末に終わってしまいました』

最後の一言いるの！？

マリエが俯いてしまうと、ジルクは優しく語りかけた。

「殿下に負けたのは悔しいですが、私も負けていただけません。マリエさん……私も貴方を絶対に振り向かせて見せます」

「……ジルク」

「退け、次は俺の番だ。マリエ、これが俺の気持ちだ！」

今度はグレッグが装置の上に立った。

『男性九十一点。女性……二十二点。片思いです、諦めましょう』

最後のコメント止める！

グレッグが肩を落としていた。

「きつついな。けどさ、これでスッキリした。マリエ、俺の気持ちだ。俺はお前を諦めないぞ」

「グレッグ……あ、あのね！」

「次は僕だ」

グレッグが装置から飛び降り、ブラッドが自信満々に上がる。

『男性九十八点！ 女性……九点。見事にすれ違いました』

止める。もう見てられない。

……笑つのをこらえてお腹が痛い。

「一番低いね」

「ご、ごめんね。でも、私は！」

「けど、ここからだ。僕はここからマリエの一番を目指す。マリエ、僕たちは気が付いたよ。あの時、マリエが僕たちを突き放したんじゃないか、って」

何を勘違いしているんだ？

クリスがブラッドと交代した。

「確かに私たちでは頼りない。だが、私たちには　マリエしかないんだ」

いや、他にもいい女性はいっぱいいるよ。目を覚ませよ。

『男性八十七点。女性　三十一點！　この女冷たすぎない？』

マリエが泣いていた。

「みんな、違うの。私の話を聞いて！」

ユリウス殿下がマリエの手を取り、装置から下ろした。

「分かっている。情けないが、俺たちではお前を守れなかった。マリエが俺たちに呆れるのは当然だ。大事なときに、側にいてやれなかった」

「どうやら、マリエを戦争に行かせたので、呆れられて当然と五人は思ったらしい。」

「何という勘違い。その人の良さを、マリエに出会う前に発揮して欲しかった。」

「安心しろ、マリエ……もう、お前を放さない」

「違うの！ だから、私の話を聞いてよ！」

「みんな「分かっているから」みたいな態度なのに、マリエは必死に何かを訴えようとしていた。まあ、諦めていたので、最終兵器としてあの六人が使えなくても問題ない。」

「ミレー又様が陛下を責める。」

「ユリウスたちはあんなに高い数値を出したのに……貴方ときたら、出会った頃は四十点もなかったわ」

「政略結婚に愛を求めるのか！ だったら私も好きな相手と結婚したかった」

「必ず数値を上げるって約束したじゃない！ 一緒に王家の船で空を旅しようね、って！」

「そんなの嘘に決まっているだろうが！」

「そうやって雰囲気だけなのよね。何でもそう。自分さえ気持ちよく役者のように振る舞って、悦に浸って……本当に口だけなんだか

ら！」

こっちは修復不可能じゃない？　というか、ミレーヌ様が言ったとおりだな。こいつは確かに生易しい装置じゃない。結果次第で大変なことになる。

それよりも、陛下がいい格好しいだったという事実が悲しい。

俺は気付いていたけど。最初に会ったときから、こいつ何か薄っぺらいな、って思っていたんだよ。……騙されてなんかいないぞ。俺は気付いていた！

さて、国の危機は何かしようと思うが、夫婦の危機は俺でも修復できない。

二人のことを諦めた俺は、黙っているリビアとアンジェに振り返った。

「あゝ、あれだね。愛って難しいね。さて、そろそろ戻ろうか。ルクシオンにあとは任せれば大丈夫だし。……ねえ、何で俺の腕を掴むの？」

まるで両手に花、という感じで二人が俺の腕を掴んでいた。

無言で俺を装置に引っ張っていく。

「待つて。お願いだから待つて！　嫌だ。俺はあんなジョークグッズに乗りたくない！」

嫌がる俺を、リビアとアンジェは無理矢理乗せようとする。

「リオンさん、乗ってください！」

「これなら白黒ハッキリ付く。色々とはぐらかすお前でも、これなら嘘は吐けないはずだ！」

俺は本気で嫌がった。

全力で拒否する。

「嫌だ！ こういうのは見ている立場だから笑えるんだ。自分が参加するなんて絶対に嫌だ！俺はあいつらみたいにメンタルが強いんだ。繊細なんだ。嫌な結果が出たら耐えられないよ！」

自分は絶対に参加しないから笑っていたのだ。

それなのに、二人は俺を載せようとする。白黒付けると言っていたので、二人が反対側に乗って愛を確かめるのだろう。

数字が高くて何か恥ずかしいし、低かったら俺の愛ってこんなものか、って自己嫌悪に陥るだろうし……こんなの知りたくないよ！

「二人とも、愛を数値で測るなんておかしいよ！こんなの間違っている！」

ルクシオンが俺を見て 面白そうにしていた。

『他人はよくて、自分は嫌というのは人としてどうかと思いますよ』

この人工知能、マスターである俺を裏切りやがった！

「止めて！ 嫌な結果が出たら受け止められないよ！ 人のことを笑えないよ！ このまま笑って終わりたいかったのに！ みんなを笑って終わりたいかったのに！」

叫ぶと、ユリウス殿下たちが俺にユラユラと近付いてきた。

陛下が俺の肩に手を置く。

「貴様だけ何もしではつまらないよな？ お前のニヤけ面には腹が立っていたところだ。さっさと乗れ！」

男共に押される形で装置手前まで来ると、俺は屈み込んで抵抗した。

装置に乗ったリビアとアンジェが、俺の腕をそれぞれ引つ張りステージに上げようとする。

「リオンさん。すぐに終わりますから」

「さっさと乗ってハッキリさせろ！」

ユリウス殿下と マリエも俺の背中を押していた。

「あんたも乗れえええ！」

「待つて！ せめて気持ちの整理をさせてよ！ こんなのに」

間違っている。そう叫ぼうとしたところで、ステージがピンク色に輝きファンファーレが聞こえてくる。

唸るような飛行船のエンジン音が部屋に反響した。

『互いに百二十点！ おめでとございます。貴女たちは真実の愛で結ばれた関係です！』

全員が俺を手放すと、いきなり解放された俺は後ろに転がる。

ステージの上にいるのはリビアとアンジェだった。

「……アンジェ」

「リビア……お前」

ステージの上で頬を赤く染めた二人が、恥ずかしそうに見つめ合っていた。

「そ、その、嬉しいです」

「私も同じ気持ちだ」

周囲も啞然としている中、

『確かに男女でなければいけないという決まりはありませんでしたが……意外でしたね。おや、マスターはどうしました？』

……正直期待していた。

マリエたちよりも高い数字が出ると思っていた。

なのに、二人が自分の気持ちに気が付いて見つめ合っている光景を見ていると……。

「……どうせ俺はお笑い担当のモブだよ！　こんな扱いが精々さ！」
複雑な気分だ。

凄く美人な知り合いが、百合な展開を繰り広げているとは知らなかった。

悲しいような、でも相手は男じゃないから嬉しいような……でも、やっぱり悲しくて俺はその場に座り込む。

ミレー又様が俺の肩に手を置いてくれた。

「あ、あのね。何と言えいいのか分からないのだけど……気を落とさないでね」

……俺は、泣きながらその場を逃げ去るのだった。

「こんなのって酷い！」

「リオン君！」

出陣

深呼吸をする。

王宮にある屋上の一つ。

太陽が昇ってくる景色を見ていた。

冷たい空気が体に入ると寒かった。

その寒さで目が覚める。

王都からは飛行船が出入りを繰り返して、住民たちの避難を続けている。

『マスター、パルトナーの準備が完了しました』

「これで俺の方は戦う準備が整ったな」

避難が続く王都。

今、公国に攻め込まれたら困ってしまう。

「このまま予定通りに進んで欲しいな」

『……超大型の接近に伴い、通信状況が更に悪化しています。大陸の裏側に本体が回り込めば、私はマスターのサポートが必要最低限しか行えません。マスター、本当によろしいですね？』

球体の一つ目の姿は、ルクシオン本体の子機だ。

本体とのリンクが切れてしまうと、どうしても性能が落ちてしまう。

通信状況が悪くなり、今まで出来ていた偵察も出来ていない。

公国の動きが分からない。

分かっているのは、超大型がゆっくりと王都を目指して移動してきていることだけ。

「リビアとアンジェもいるから大丈夫だ。二人の愛の力でモンスターたちを吹き飛ばしてやる」

『愛ですか。本当に愛でどうにかなるのなら、世界中にあふれている愛とは何なのでしょうね？』

「俺が知るわけがないだろう。そういうのは勝った後に考えればいい」

『それよりも、本当によろしかったのですか？ アレからお二人を避けていますよね？』

ジョークグッズで二人が愛し合っていると分かっていたのだ。

俺が二人の邪魔をする必要もないだろう。

「流石の俺も予想外すぎて何も言えないからな」

『お二人はその後にはマスターを探していたそうですよ。　　！　　マスター！』　　マ

ルクシオンが空を見上げていた。

王宮の一室。

そこにはリオンの師匠がいた。

お茶を用意しており、向かい合って座っている女性二人の給仕をしている。

朝早くに向かい合っているのは、ミレーヌとヘルトルーデだった。

「王女殿下、この戦争を止められませんか？」

「無理よ。公国はこの日のために何十年も耐えてきたのよ。今度は貴女たちが蹂躪じゅうりゃんされる番ね」

薄らと浮かべた笑みを見て、ミレーヌは目を閉じる。

「王国が悪だと言いたい気持ちは分かります。ですが、」

「あら、脅すつもり？　もう遅いわ。あの子の持つ魔笛は、空と海に公国の守護神を呼び出すの。一度命令されたら、それらを実行するまで止まらないわ。もう手遅れよ」

自分を使った交渉も意味がない。

ヘルトルーデがそう告げると、ミレーヌは首を横に振る。

持っていた随分と古い書類、そして一冊の本をテーブルの上に置いた。

「これは？」

「まずはこれを読みなさい」

ヘルトルーデが読んだ書類は、公国が独立したばかりの時代の物だった。そこには、これまでの蛮行についての賠償について書かれていた。

王国ではなく、公国が行ってきた蛮行についての賠償だ。

「う、嘘です。公国は独立のために、不当な扱いを行う王国と戦ったのです！ これは偽物ですね」

ミレーヌはあきれ果てた目をヘルトルーデに向けていた。

「綺麗事だけ聞かされて育ったのですね。傀儡としては素晴らしい王女でしょう。国が綺麗事だけで動いていると思っているのですか？」

本に書かれているのは、王国と公国の間にあった歴史だった。

公国　大公は、王国と敵対する国と繋がり、王国を何度も攻めていた。

攻め込んだ領地で略奪の限りを尽くしていた。

大公家の軍事力は相当なもので、王国も困り果てていた。

大公家一つを潰すのは簡単でも、周囲に敵国を抱えているので全力を出せなかったのだ。

そのため、辺境伯を置いて国境の守りとした。

「軍事施設を用意し、飛行船を揃え、浮島を運び要塞としました。その時、莫大な資金と資材、そして労働力が消費されたそうです」

大公家に腹を立て、王国は臣下ではなく敵国として扱ったのだ。

大公家は公国を名乗ると、これまでの略奪が行えないため一時的に疲弊する。

結果 戦力を整えようと、まだ人が住んでいる浮島から浮遊石を得るため、砲撃で破壊してしまった。

激怒する王国と、辺境伯により公国軍は敗北。

賠償を約束させた後は書類へと繋がる。

「この後も公国は王国を攻めました。辺境伯を配置した後は被害も少なくなりましたが、恨みは消えません。以前公国に攻め込んだ際に、乗り込んだのは今まで公国が蹂躪してきた土地に住んでいた人々です」

王国が絶対的に正しいとは言わないが、ミレーヌはヘルトルーデに事実を突きつけた。

「本当に公国は王国から略奪するのが好きなのですね」

「違う！ 公国は独立のために戦ったのよ。王国が不平等な条約なんて結ぶから！」

「賠償を請求しただけです。当時は払う気などなかったのでしょうね。負けたので渋々払い、生活が苦しくなったら王国が悪いのですか？」

ヘルトルーデが顔を赤くしてカップを手にとろうとすると、師匠が素早く動いた。

「紅茶が冷めてしまいましたね。煎れ直しましょう」

ヘルトルーデが悔しそうに師匠を睨むも、ミレーヌが話をしているのは自分だと言いたげに、

「貴方には知る義務があります。確かに王国は公国領で略奪を行いました。ですが、そこに至る経緯を忘れて貰っては困ります」

混乱するヘルトルーデだったが、師匠が急に窓の外に視線を向けた。

サイレンが鳴り響き、王都に敵が来たことを知らせていた。

「ミレーヌが立ち上がる。」

「予定よりも早いわね」

師匠がヘルトルーデを見た。

「王女殿下の救出でしょうか？」

「あり得ますね。魔笛を彼らに渡してはいけません。リオン君は？」

「既に外にパートナーが出撃しています。ミスタリオンは迎撃に出たでしょう。頼もしい限りです」

ヘルトルーデは足が震えていた。

師匠が二人を床に伏せさせる。

「お二人とも、失礼いたします」

直後、爆発音が王都上空で響き渡る。

王宮の屋上に降り立つアロガンツ。

すぐに乗り込む俺は、ルクシオンから状況説明を受ける。

『やられました。上空からの奇襲攻撃です』

「お前のリーダーもたいしたことがないな」

『通信状況が悪いと言いました。攻撃前に気付いたことを褒めて欲

しいですね。パルトナー、緊急発進します』

王都の空を守るように出撃したパルトナーを見た俺は、アロガンツの操縦桿を握りしめ空へと舞い上がった。

王都にサイレンが鳴り響いている。

「何隻だ」

『三十隻です。飛行船が降下してきます。同時に、爆弾を投下してきましたね』

「撃ち落とせ」

パルトナーが攻撃を開始すると、空に弾丸がばらまかれ爆弾に命中していく。空で爆発すると、灰色の煙が王都を覆った。

朝日が綺麗だった空は、急に曇り空になったようだ。

『マスター、王国軍が指示を求めています。迎撃部隊の出撃が遅れているようです』

「避難を優先させる。味方が空に上がるまでは、俺とお前であいつらをどうにかする」

『敵、鎧を出撃させました』

操縦桿を握りしめ、アロガンツの背負ったコンテナからライフルを取り出すと構える。

急降下してくる公国軍の鎧に乗るパイロットたちの声を拾う。通信にノイズが混じり、聞き取りにくい。

『出てきたぞ！ 外道騎士だ』

『隊長、あんな大きな鎧が凄い勢いで近付いてきます！』

隊長機に狙いを定め、ライフルを構えて引き金を引く。

『問題ない。あいつは人も殺せない臆病者おくびょうもの え？』

腹部を撃ち抜き、鎧が爆発すると周囲の鎧たちが慌てていた。

『隊長おおお！』

『あいつは殺さない不殺の騎士じゃなかったのかよ！』

ライフルを向けてくる敵に対して、俺は操縦桿を強く握った。

何が不殺だ。

俺が不殺を貫いたのは、あの時点ではまだどうにかなる状況だったからだ。

事ここに至っては もう不殺なんて言っていられない。

犠牲を出しすぎた。

「ここまで俺を追い込んだのはお前らだ。悪く思っなよ」

弾丸を避け、当たったとしても弾くアロガンツ。

左手に戦斧を持たせ、すれ違いざまに一体を深く斬りつける。近付いてきた他の鎧を蹴り飛ばし、ライフルを構えた俺は飛行船の機関部分を狙った。

引き金を引き、少し遅れて飛行船が火を噴き出した。

空の上で逃げ惑う公国の軍人たち。

その姿をモニターで見ていた。

「最悪だ。本当に最悪だ。お前らが来なければ、俺はこんなことをせずに済んだんだ！」

『逃げれば戦わずに済みましたが？』

「そしたらもつと嫌なことになるから戦うんだろうが！ 王国も嫌いだが、公国はもつと嫌いだ！ これなら婚活で悩んでいた方がマシだ！」

吐き気を我慢してアロガンツを操縦すると、周囲の敵が集まってくる。

アロガンツを目がけてやってくる鎧たち。

『奴を止めろ！』

『この外道が！』

どうやら外道、外道騎士は、俺の通り名らしい。

何が外道だ。

外道は俺にこんなことをさせる　お前らだ。

「逆恨みで攻め込んできてんじゃねーよ！」

また一体を破壊し、ライフルを飛行船へと向けた。

戦場となった王都の空。

ユリウスは王宮の廊下を駆けていた。

「ジルク！」

見つけたのは親友のジルクだ。

彼はパイロットスーツを着用している。

「ご無事でしたか、殿下！」

駆け寄るジルクに、ユリウスは窓の外を見上げながら悔しそうな顔をしていた。

「公国の連中は何を考えている。今更、王都を攻める理由は何だ？」
モンスターを引き連れずに、公国軍だけで乗り込んできたのを不

審に思うユリウスに対して、ジルクは自分の考えを述べた。

「ヘルトルーデ王女殿下　そして魔笛を取り返そうとしているのではないでしょうか？」

ユリウスが右手で壁を叩き、苛立ちを隠そうともしない。

「バルトファルトは何をしている！」

「迎撃に出ています。殿下はお下がりにください」

「馬鹿を言うな。俺も出るぞ」

そんな二人のところに、護衛に守られたミレーヌとヘルトルーデそして師匠が姿を見せた。

ミレーヌはユリウスに強めの口調で、

「それはなりません」

「母上？」

振り返ったユリウスは、顔を引き締めミレーヌに出撃させて欲しいと願い出た。このような状況を黙ってみていられないという気持ちだった。

「俺も出撃します。母上たちはすぐに避難を」

「ユリウス、貴方に戦う力はありません。そして、貴方の仕事は生き残ることです」

「ジルクは戦うのですよ！ 俺だけに逃げると言つのですか！」

「ええ、そうです。貴方は逃げることにしか出来ないのよ」

「飛行船を出せとは言いません。鎧を一機用意してくれば」

「ユリウス、貴方のために鎧を用意する人はいませんよ」

ユリウスが驚き、ならばジルクはどうしてパイロットスーツに着替えているのかと思って振り向いた。

自分と同じで、ジルクも鎧を持っていないはずだ。

「実家に頼み、一機用意して貰いました。他の三人も同じです。殿下、あとはお任せください」

そんなジルクに、ユリウスは力なく首を横に振る。

「どうしてだ。どうしてお前たちが俺を裏切る！ 協力しようと言ったじゃないか。あの言葉は嘘だったのか。マリエと一緒に守ろうと！」

俯くジルクを責めると、ミレーヌが止めに入った。

「ユリウス、もう王宮には鎧も飛行船もないのよ。貴方に戦う力はない。ここは素直に私たちと避難しなさい」

王宮が保有していた鎧も飛行船も出払っている。

ユリウスに回す鎧がなかった。

だが、ユリウスは思い出した。

「あります！ 公爵家の飛行船には、まだ余っている鎧があつたはずです。騎士を募集していると聞きました。すぐに俺が向かえば」

「

「貴方はレッドグレイブ公爵家に何をしましたか？ 公爵家は、既に貴方の支援者ではないのですよ。ジルク、公国軍が降下してきています。出撃するなら早くしなさい」

「はっ！ 殿下、それでは失礼いたします」

ミレーヌが「武運を祈っています」と言つて見送ると、ユリウスはその場から駆け出すのだった。

混乱する王宮内。

アンジェはリビアの手を引いて走っていた。

窓の外を見るリビアは不安そうにしていた。

「王都に接近するまで気が付かないなんて」

「普段よりも通信機のノイズが酷い。ルクシオンが発見できないなら、私たちではどうにもならない。とにかく、王家の船まで移動する」

アンジェが窓の外に視線を向けると、パートナーの姿が見えた。

一隻で王都の空を守っている。

（リオンの奴はどこにいる）

二人が王家の船に認められた後、リオンは姿を消してしまった。

話に聞けば落ち込んでいたらしいが、王家の船に選ばれてしまった二人もその後は忙しく結局リオンには会えなかった。

リビアが俯く。

「浮かれていた私たちに愛想が尽きたんでしょうか？」

「そ、それはないと思うが いや、確かに私たちが悪かった。だが、謝る暇もなくなるとは思わなくて」

あの後、気が付けばルクシオンが手配していたロボットたちがやって来て、王家の船を整備し始めた。

ドアをこじ開け、中に入り整備を始めたので大騒ぎだった。

王都の空からは発砲音に爆発音が絶え間なく聞こえ、何かが王都に落ちた音も聞こえてくる。

（父上も兄上もここにはいない。タイミングが悪すぎる）

王宮の空には、護衛のために出撃した飛行船が姿を見せた。

その内の三隻は、公爵家がアンジェのために残した飛行船だった。いざとなれば、逃げ出させるために用意されている。

アンジェのための戦力でもある。

そんなアンジェたちの前には、肩で息をするユリウスが現れた。窓の外を見ており、アンジェに気が付くと近付いてくる。

「殿下、こんな所で何を？」

急いで逃げようと提案するアンジェに対して、ユリウスは頭を下げてきた。

「アンジェリカ、頼みがある。お前が持つ戦力を　公爵家の艦隊を貸して欲しい」

リビアがオロオロとしていた。

アンジェは、一瞬驚くもすぐに冷静になり首を横に振る。

「彼らは私の護衛で部下ではありません。命令できるのは、父上か兄上　もしくは、リオンだけです」

リオンの名前を聞いて悔しさが顔に出るユリウスは、それでも頼み込んできた。

「飛行船を貸せとは言わない。鎧一つでもいい。俺は卑怯者になりたくないんだ」

戦場から逃げたくないというユリウスの言葉に、アンジェはまたも首を横に振った。

「駄目です。殿下、我々と避難をしてください」

アンジェの言葉に、ユリウスは顔を上げる。

「お前の気持ちを裏切った俺が憎いのか？」

だから戦力を貸さないのだろうと問われ、アンジェは気が付いた。

（何だろうな……もう、憎しみも悔しさもない）

復讐してやろうという気持ちよりも、リオンが無事なのかという気持ちの方が強かった。同時に、早く顔が見たかった。

「憎かったのは事実です。でも、もう私は リオンが好きです
ら」

そう言って微笑むと、ユリウスは少しだけ狼狽うろたえていた。

何か言いたそうにしたところで、公爵家の騎士たちがアンジェたちを駆け寄ってくる。

アンジェはすぐに命令した。

「これから地下に向かう。殿下もお連れしろ」

「はっ！」

騎士たちがユリウスを囲み、そして地下室へ向かって移動を開始した。

リビアがアンジェの手を握る。

「大丈夫ですか？ あの、えっと」

「気にするな。私は大丈夫だ。色々と吹っ切れた」

そう言って笑顔になるアンジェを、ユリウスは見て俯いてしまう。

リビアがユリウスを見て、

「どうかしましたか？」

ユリウスは自嘲じちやうしていた。

「アンジェリカがこんな風に笑うところをはじめて見た。……それだけさ」

ユリウスの言葉を聞いたが、アンジェはリオンの心配をする。

（リオン、無事でいろよ）

公国軍の飛行船。

艦橋にはゲラットの姿があった。

ゲラットは、空高くから王都を見下ろし親指の爪を噛む。

「またも邪魔をしますか、外道騎士！ 絶対に本隊へ来ると思ったから、奇襲部隊に志願したというのに」

王国側が、一か八かの賭に出て公国軍の本隊に決戦を挑むと考えていた。そして、その先鋒はリオンだと思っていたのがゲラットだ。もしくは、王国の上層部に飛行船を取り上げられ出撃できない状態だと考えていた。

どちらにしろ、出てこない確率が高いと思っていた。

「本隊が来るまでに魔笛を回収せねばならないと言うのに！」

本隊は空の守護神と言われる超大型と一緒に行動している。

出現場所が王都から遠く、移動速度が遅いという欠点もあったま
だ王都に到着していなかった。

「あの魔笛は大地の守護神を呼び出す貴重なアイテム。失うわけに
は
」

ゲラットが回収したかったのは、ヘルトルーデではなく魔笛だった。公国の宝であり、奪われたままでは自分の将来に関わる。

そのため、無理に「ヘルトルーデを救出する」と言って、ヘルトラウダから三十隻の飛行船を借りて奇襲をかけた。

近くにいた軍人が、ゲラットに報告をする。

「伯爵、既に十隻が撃沈。鎧も次々に撃ち落とされています」

「見れば分かります！ あの外道騎士、不殺を諦めるなど騎士としての意地がない！ このままあいつがここに来れば、私は……ここ、こんなところで死ねない！」

すぐに撤退を決めるゲラットだが、既に遅かった。

飛行船の艦橋　その前に姿を見せたのは、アロガンツだった。

鎧から音声が聞こえてくる。

『こいつが旗艦か』

向けてくる銃口を前に、ゲラットが両手で顔を覆う。

アロガンツのコンテナの一つが開放され、そこに積み込まれたミサイルが発射されると飛行船に襲いかかった。

「こんなところでえええ！」

アロガンツが引き金を引いた瞬間に、ゲラットの意識は途切れてしまう。

王都の避難場所の一つ。

飛行船に乗り込もうとする人々を守るのは、クラリスだった。

飛行船に乗り込み指示を出している。

アトリー家が保有している飛行船で、避難民を乗せて王都からの脱出を手伝っていたところだった。

「何としても避難民を守りなさい！」

避難民を急いで収容するが、公国軍の勢いが勝っていた。

地上ではバリケードを作り騎士や兵士たちが戦っているが、押し込まれていた。

空ではエアバイクに乗った学生たちが、公国軍のエアバイク部隊と交戦しており地上も空も騒がしい。

地上にいたクラリスたちを守る鎧は、公国の鎧たちによって破壊されるのが見えた。

降伏を考えるクラリスだったが、敵は飛行船に攻撃を仕掛けてくる。

『避難民でも関係ない。王国の外道共は殺して罪を償わせろ』

敵の声に、クラリスは悔しそうに奥歯を噛みしめた。

「好き勝手暴れたのは、あんたたちも同じじゃない！」

すると、一機の鎧が飛び上がり艦橋前に姿を現した。

持っていた斧を振り下ろすと、天井に切れ目が入る。そこを無理

矢理広げた鎧からは、下品な笑い声が聞こえてきた。

『女がいるぞ！ しかも貴族の女だ！』

クラリスは嫌な予感に冷や汗を流す。

戦場で女性が捕まればどうなるかを知っているため、その後の予想に体が震えていた。

クラリスに鎧が手を伸ばしてくるので、近くにいたクルーたちがライフルで攻撃するも鎧は弾丸を弾いていた。

『そんな豆鉄砲が効くかよ。お前はその身で自分たちの罪を償え！』

クラリスに鎧の手が届きそうになると、乱暴に鎧が艦橋から引き剥がされてしまった。

見上げるとそこにはアロガンツの姿があった。

右手に持ったライフルを公国軍に向けると、そのまま引き金を引く。

弾丸は鎧の腹部を貫き、敵が動きを止めるとアロガンツの握った鎧から声がする。

アロガンツから離れられずに暴れ回っていた。

『放せ！ この』

アロガンツの左腕から衝撃波が放たれ、鎧のパイロットからは声

が聞こえなくなった。

鎧を放り投げ、そのまま次の戦場へと飛び去ってしまうアロガンツを見送り、クラリスは小さく溜息を吐く。

「……無理しちゃって」

投げ捨てられ地面に落ちた鎧。

腹部を撃ち抜かれ動かなくなった鎧……手加減など考えない戦い方に、クラリスはリオンが無理をしていると見抜くと心配そうな顔をするのだった。

コックピットの中。

エチケット袋に何度目か分からないが吐いてしまった。

胃液のツンとした臭いが気持ち悪い。

降下した公国軍が王都内で暴れ回っている。

「降伏しろよ。何で暴れ回るんだよ。もう勝負は付いただろうが」
旗艦を潰した。

彼らの頭を叩いたのに、それでも抵抗が続けている。

『降伏しても、というところでしょうか？』

一部では降伏した公国軍を、王国軍が認めずに撃ち殺している戦場もある。

市街戦で王都の至る所から煙が上がっていた。

口元を拭い、そして周囲を見る。

「次の戦場はどこだ？」

ルクシオンに尋ねるも、どうやら時間が来てしまったらしい。

『……マスター、どうやら時間です。これより、サポートは最低限しか行えません』

いつもの声が申し訳なさそうに聞こえてくる。

「そうか。頑張れよ」

『本当によろしいのですか？』

「構わないからいけ。お前にしか頼めないだろうが」

ルクシオンは一つ目で俺を見た後に、一度お辞儀をするように一つ目を動かす。

『王家の船の整備は終了しています。アレには私とは別の人工知能をサポートに付けました。何かあればそちらに』

電子音にノイズが混じり、そして普段と少し違うルクシオンの声

に変わった。

『本体とのリンクが切断されました』

機械的な口調に、俺は少しだけ不安を感じつつも操縦桿を握り直す。

「頼むぞ、相棒」

浮かび上がる大地と海の隙間。

海から伸びる水の柱は、大地が海水をくみ上げているものだ。

それとは別に、大地を海から伸びた触手のような腕が何本も突き刺していた。

海面から顔を出すのは大きな人の顔だ。

まるで島のようなそのモンスターは、海の守護神である超大型だった。

飛行船 否、宇宙船ルクシオンは七百メートルを超える大きさだ。そんなルクシオンが小さく見えてしまう。

『何とも大きなモンスターですね』

たった一隻で大陸の下に潜り、海の守護者と呼ばれるモンスターの前にしてルクシオンは落ち着いていた。

『まあ、倒し続けることに何の問題もありません』

ルクシオンの主砲が光を放つと、大地に突き刺さっていた腕が全て切断され黒い煙へと変わっていく。

大きな顔の瞳がルクシオンを見ると、海面から次々に触手が出現してルクシオンに絡みついた。

『私に触れるな』

そう言うと、灰色の船体から次々にレーザーの発射口が出現。発射口から放たれたレーザーに触手は切り払われる。

船体からミサイルの発射口が姿を見せると、一発のミサイルを放った。

命中すると大爆発を起こして超大型を吹き飛ばしてしまう。

黒い煙が周囲の視界を覆い尽くすように広がった。

『徐々に復活しつつありますね。マスターの情報に間違いはなかったということですか』

海面から再び触手が出現すると、それを次々に撃ち抜いていく。

人の顔を持ったまるでイカのようなモンスターが、ルクシオンの前に姿を現すと海面が大きく波打っていた。

そんな姿を見たルクシオンは　主砲で撃ち抜いて再び黒い煙に

変える。

『私がここにいる限り、貴方の目的は達成できそうにありませんね』
問題なのは、もう一体の相手をルクシオンが出来ないことだ。

そちらはリオンとパートナーに任せるしかない。

復活やら再生を繰り返す敵に攻撃を繰り返し、ルクシオンは動きを完全に封じ込めていた。

だが、同時にリオンの言った通りだと判断する。

『確かに負けはしませんが、勝つことも不可能ですね。問題は、反対側にいるもう一体……マスターの生存確率が予想よりも下がってしまう』

ルクシオンの本体が、艦内にある工場でシュヴェールト……リオンのエアバイクの改修を始めた。

修理するため、ルクシオンが本体に移していた。

修理は終わったが保管した状態だったので、丁度良いと改修を始める。

『シュヴェールト、マスターのために生まれ変わきなさい』

大地と海の狭間で、ルクシオンは超大型モンスターを相手にする。

魔人

空の守護者と共に移動する公国軍本隊。

ヘルトラウダは一人の老騎士を前にしていた。

右腕を黒い何かに覆われたその老騎士は、元黒騎士であるバンデルだ。

目の前で膝を突いているバンデルに、ヘルトラウダは冷たい口調で対応していた。

「出撃許可は出せないと言ったはずだが？」

バンデルは口を開かず、ヘルトラウダの近くにいた重鎮が反対理由を説明する。

「バンデル殿、王国が狙うとすれば我々本隊への突撃です。バンデル殿は、そこであの外道騎士の相手をしていただきたい」

ヘルトラウダは目を細めた。

（魔装の右腕……結局、使えたのはバンデルだけね）

魔装の右腕を使用する騎士を選ぶため、十人以上も犠牲になっている。結局、魔装の右腕が寄生して生き残れたのは、バンデルだけだった。

バンデルの黒い右腕に切れ目が入り、そこから目が出現して周囲を見ていた。

何かに侵食されたようにしか見えない。

バンデルはその目を左手で隠し、謝罪してくる。

「失礼。まだ完全に制御できていないようです。ヘルトラウダ王女殿下、どうか姉君　ヘルトルーデ様の救出のご許可を」

「救出部隊は既に出している。お前は外道騎士との再戦から逃げるつもりか？」

公国は、王国が勝負をかけてくるなら自分たち本隊への突撃だろうと考えていた。

空の守護者を相手になど出来ない。

ならば、リオンを先鋒に突撃してくる可能性が高いと考えていた。王国の通信状況が悪いのと同じで、公国軍も通信状況が悪い。警戒はしているが、いつ王国軍が来るか分からない状況だ。

「私ならば確実に姫様を救出できます」

バンデルの言葉に、ヘルトラウダは小さく笑った。

「お前は姉上のお気に入りだったからな。まあ、救出部隊も出ている。その結果を見てくる奴がいてもいいだろう」

重鎮が反対するも、ヘルトラウダは取り合わなかった。

バンデルが立ち上がる。

「では、すぐに出撃いたします」

「足の速い飛行船を用意させよう」

「無用です。この身　いえ、鎧一つで十分。飛行船など足手まといです」

そう言つて部屋から去つて行くバンデルの後ろ姿を見て、重鎮が怖がつていたのか冷や汗を拭つていた。

視線の先には右腕がある。

黒く変色した右腕は禍々しく、そしてバンデルの目も血走つていた。

「アレがロストアイテム【魔装】の一部ですか。まるで化け物ではありませんか」

ヘルトラウダは椅子の肘掛けに体を預けていた。

「使用者の命を対価に絶大な力を授けると言い伝えられてきたが、まさか本物を見る日が来るとは思わなかったよ」

「外道騎士に勝てますかな？」

「勝つさ。勝てなくとも、我々に負けはない」

ヘルトラウダは目を閉じる。

（お姉様、どうかご無事で。バンデルが迎えに上がります）

王都の空。

戦闘が終わり、徐々に飛行船が集まりつつあった。

パートナーの甲板の上には、領地から飛行船に乗ってやって来た友人たちの姿がある。

レイモンドが王都を見て啞然としていた。

「……ボロボロじゃないか」

「空から攻められたらどうしようもないからな」

「本当に勝てるの？ 三十隻に攻められてボロボロなんだけど？」

不安そうな友人たちを前に、俺は元気づけてやる。

「俺が秘策もなしに戦うと思うなよ。ちゃんと準備をしている。見ろ」

視線の先 そこには、地下から浮かび上がった白く輝く飛行船があった。

王家の船。

面倒なのでルクシオンが名前を付けていた。

その名を【ヴァイス】　ルクシオン曰く、白とかそんな意味合いらしい。実にお似合いだ。アロガンツの意味も聞いてみたいところだ。

きっと俺に似合いの意味があるのだろう。

「あの飛行船が秘密兵器？」

「パートナーより小さいぞ」

「何か凄い武器でも積んでいるのか？」

興味を示す友人たちだが、パートナーより小さいと文句が多かった。飛行船自体には、パートナーほどの性能はない。

だが、リビアとアンジェが乗っているのだ。

愛を確かめ合った二人が乗っているなら、あの飛行船はきっと凄いを発揮してくれるはずである。

……それにしても複雑な気分だ。

二人が愛し合っていたなんて……俺の立場は一体どうなる？

ダニエルが俺を心配そうに見ている。

「顔色が悪いぞ。大丈夫なのか？」

「平気だ。それより、補給を受けたら今後の説明を」

そんな話をしていると、何かが王宮に向かって飛び込んだ。

何だ？ 慌ててルクシオンに確認をする。

「何が起きた！」

『現在確認中です』

反応がいつもよりも遅く、そしてルクシオンではないように思えた。

「アロガンツを出せ」

『補給と整備中です。十分ほどお待ちください』

しかも融通も利かない。

王宮の方を見れば、煙が上がっていた。

王宮の中を歩くのはバンデルだった。

宝物庫に厳重に管理されていた魔笛を左手に持つと、右手には保管されていた自分の大剣。アダマンティスという特殊金属で作られた、鎧向けの大剣を手取る。

自分の体よりも大きな大剣を持ち、口角が上がる。

「相棒、迎えに来てやったぞ。姫様のついでだけだな」

そう言つて肩に担ぐと、扉の前に王国の騎士たちが立ちはだかった。

「何者だ！」

「武器を捨てて投降しろ！」

バンデルが王宮に開けた穴の向こうには、浮かび上がった王国の鎧が見えた。

銃口を向けてくる騎士たちが、引き金を引くとバンデルは見えない何かに守られているのか銃弾が弾かれた。

右腕がいくつも目を見開き、キョロキョロと動いて周囲を見ている。

その姿に騎士たちも驚く。

「ば、化け物 撃ちまくれ！」

鎧も王宮内に入り、バンデルを取り押さえようとする。

だが、バンデルは生身で鎧に飛びかかると、そのまま大剣を片手で持って振り回した。

鎧が両断され、騎士たちは切断される。

一瞬で戦いが終わると、バンデルは騎士たちを見下ろした。

「不甲斐ない連中だ。さて、姫様をお捜しせねば」

右腕の目がキョロキョロと動き、そして全てが一ヶ所を見た。

「そうか、こちらにいるのか」

歩き出したバンデルはそのまま騎士や兵士たちを倒して進み、ヘルトルーデが捕らわれている部屋までやってくる。

ドアを乱暴に開けると、そこには無事な姿のヘルトルーデがいた。

「姫様！」

右腕の全ての目が閉じる。

「バンデル？ どうして貴方がここに？ 公国軍は負けたと聞いたのに」

襲撃してきた公国軍は敗北していた。

そのことにバンデルも悔しがる。

「情けない者たちです。姫様をお助けできず、王国の腰拔けたちに負けてしまったのですからね。さあ、わしと一緒に帰りましょう。ヘルトラウダ王女殿下もお待ちです」

「……ラウダが？」

バンデルに魔笛を渡されたヘルトルーデは、受け取ると信じられない光景を目にする。

「姫様、少しお下がりください」

急に右腕が膨張し、そのままバンデルを飲み込むと鎧の形になっていく。

その姿は どこかアロガンツに似ていた。

ただ、刺々しく禍々しい姿は、機械ではなく生物のようだった。
蝙蝠こうもりの翼に爬虫類の尻尾に棘が付いた物もある。

機械音ではなく、心臓が脈打つような鼓動が聞こえてくる。

「バンデル、まさか貴方 あの右腕を」

ヘルトルーデが奪い、公国に送った刺々しい鎧の黒い右腕をバンデルが使っていた。

そのことが何を意味するのか知っていたヘルトルーデは涙を流す。

それが、バンデルには少し嬉しかった。

（私のために涙を流さないでください、姫様）

「どうして貴方がこんなものを使うのですか！」

鎧と一体となったバンデルの声は、くぐもっていた。

『姫様　この老いばれの最期のご奉公です。さあ、お乗りください』

左手を差し出され、ヘルトルーデが乗り込むとバンデルは王宮を飛び出した。

そこには数多くの鎧が待ち構えていたが、

『王国の雑魚共が！　お前らでは相手にならぬ。外道騎士を連れてこい！』

ヘルトルーデを守るように空を飛びながら、右手に持った大剣で王国の鎧を次々に破壊して逃げていく。

パルトナーの姿を見たバンデルだが、左手にはヘルトルーデがいる。今は連れ戻すのが先決だ。

甲板の上にリオンの姿も見えていたが、勝負は預けることにした。

『バルトファルトか！　姫様は返して貰ったぞ』

悔しそうなリオンの顔を見ながら、バンデルは笑っていた。

『お前との決着もすぐにつけてやる』

そう言って逃げ去るバンデルに、王国軍は追撃部隊を出さなかった。

ヘルトルーデさんも、そして魔笛も奪われてしまった。

というか、暴れ回ったあの黒い鎧の姿はどこかで見たことがある。
どこで見たのか思い出せないのが気になって仕方がない。

腕を組んで考えていると、次兄から頭をはたかれた。

「寝るなよ！」

「痛いな。寝てないよ」

頭を押さえながら、パルトナー周辺に浮かんでいる飛行船たちを見た。

契約によって縛られた友人たちが加勢に来てくれたのだ。

王都の空には、他にも王国軍の飛行船。

駆けつけた領主たちの飛行船　二百隻近くが整列して浮かんでいる。
いる。

親父は緊張した様子でその光景を見ていた。

「リオンがこの艦隊を率いるとか聞いていないぞ。いったい何がどうなっているんだ？」

親父からすれば、駆けつけたら息子が総司令官になっていたのだ。
驚いても仕方がないと思う。

「ノリと勢いで司令官になってしまいました」

「なれるかよ！ 普通はなれないんだよ！」

次兄は呆れて肩を落としていた。

「それで？ どうやって公国軍に勝つんだよ。遠目に見ただけ、あんな馬鹿でかいモンスターとか本当に倒せるのか？」

飛行船の艦隊中央に浮かぶ白い船　ヴァイスを見た。

「勝てない戦いはしない主義だ。ちゃんと切り札は用意したよ」

親父が疑った目を向けてくる。

「アンジェリカ様とオリヴィアちゃんか？ お前、あの二人を戦場に出すのか？ 駄目だろ。それは駄目だろ。お前、あの二人のことが好きだろ」

……それ以上、言うんじゃない。

「どうしてもあの二人が必要になる」

親父は納得していなかった。それでも、俺が必要と言い切るので諦めた様子だ。

「絶対に守れよ。お前、ここで二人が死んだら後悔するぞ」

やはり親父はよく見ているのだろうか？

次兄も俺を心配そうに見ているので、笑って答える。

「分かっているさ」

そんな家族の会話に割り込むのは、首を横に振るマリエだった。

「待つて。何で私がこの船に乗るのよ」

「当たり前だろうが。パートナーを先頭に敵に突撃するんだ。お前はバリア代わりだから、しっかり働けよ」

洪る神殿から、無理矢理に聖女の装備もうば　預かっている。

こいつには働いて貰わないといけない。

次兄と親父が首をかしげている。

「誰、この人？」

「俺も知らんぞ」

「こいつ？　聖女様だよ。突撃するときには盾にしようかな、って」

二人が俺を見て「ないわ」というような顔をしている。

「女の子を盾にするなんて、お前の父親として情けないぞ」

「五月蠅い。俺は使えるものは親でも使う主義だ。こいつも当然こき使ってやる」

「あんた最低ね！」

マリエの頭を小突くと、俺は真剣な目を向ける。

「命がけで働け。そうすれば、お前の助命にも協力してやる」

マリエは涙目で頭を押さえていた。

「ここで死んだら意味がないじゃない！」

「そんなの俺が知るかよ！ お前は意地でも責任を取れ。逃げたら俺が殺す。地の果てまで追いかけて殺すからな」

マリエが俯いてしまうが、これ以外に助命をする方法が思い浮かばない。負ければ死ぬ。勝っても、こいつは聖女を騙った極悪人だ。

せめて、命懸けで戦わないと。

「マリエ、不安そうにするな」

甲板の上に、随分と派手な色をした鎧が舞い降りてきた。

赤い色の鎧を見て、俺は舌打ちしたくなる。

「何しに来た お前ら」

赤、青、紫、緑 四人のパイロットが姿を見せ、そしてマリエの下に集まった。

「このグレッグ・フォウ・セバーグが、お前を守ってやる」

自信満々のグレッグに、マリエは涙を流していた。

「あ、あんたたち」

「私も忘れて貰っては困る」

クリスが眼鏡を外し、マリエに微笑みを向けていた。

「僕たちがいる限り大丈夫さ」

ブラッドが前髪を後ろに流すようにかきあげ、ポーズを決めるとジルクがマリエに手を差し伸べた。

「マリエさん、今度は私たちが側にいます。貴方一人ではありません
ん」

「みんな……わ、私は！」

そして、パルトナーの艦橋の上に一機の鎧が舞い降りた。

「私も参加させて貰おう！」

白く輝く鎧は、青いマントを風に揺らしている。

見上げた俺は思うのだ。

「……いや、帰れよ」

胸部装甲が開き、そこから出てくるのは仮面をした騎士。

どう見てもユリウス殿下です。

ピッタリなパイロットスーツに、仮面をかぶりマントも着けている。お前は一体何がしたいんだ？

その馬鹿っぽい格好を止める。恥ずかしい。

しかし、

「彼は何者ですか？」

ユリウス殿下の乳兄弟にして、親友であるはずのジルクが本当に驚いていた。いや、嘘だよね？ 空気を読んで知らないふりをしてるんだよね？

グレッグがマリエの前に出て庇う。

警戒心むき出しだった。

「仮面野郎、いったい何をしに来た！」

……え？

俺は周囲を見た。みんな、本気で驚いた顔をして警戒している。親父と次兄は展開についていけないために驚き、他の四人は本当に驚いている。

クリスなど剣を抜いていた。

「マリエ、下がれ」

「え？ でも、あれってユリ」

ブラッドが両手に炎を出現させ、いつでも戦える用意を始めていた。

お前ら何なんだよ！ あれ、どう見てもユリウス殿下だろうが！

仮面を付けたユリウス殿下が俺たちの前に飛び降りてきた。

四人が警戒する中、見事に着地をしてゆっくりと立ち上がると名を名乗る。

「私が何者、か。『仮面の騎士』とでも呼んで貰おう」

「仮面の騎士？」

驚くジルクが拳銃の銃口を仮面の騎士と名乗ったユリウス殿下へと向け、俺は本当に泣きたくなってくる。

「そうだ。君たちの心意気に感動した。私も微力ながらお手伝いをな、何をする！ バルトファルト子爵、放さないか！」

「いいからこい、この馬鹿野郎」

仮面の騎士の首に腕をかけ、全員から引き離すと俺たちは物陰に隠れて二人になった。

俺が仮面に手を伸ばすと、ユリウス殿下は両手で仮面を押さえて

守る。

「何をしに来た、殿下」

「ち、違う！ 私はユリウス殿下などという高貴なお方ではない。故あって顔をさらせないが、一人の騎士としてこの戦いに参加することにした者だ。ユリウス殿下ではない」

……俺、もしかして馬鹿にされているの？

「帰れよ」

「ちよっ！ バルトファルト子爵、今は少しでも戦力が欲しいときではないのか！」

「身元不明の怪しい奴は使えないんだよ。ほら、帰れ」

「ま、待ってくれ！ し、仕方がない」

そう言っただけで仮面を脱ぐユリウス殿下は、俺に素顔を晒した。

「……俺は、ユリウスだ」

「いや、知っているから。気付いていたから」

「何だと！ 変装は完璧だったはずだ」

「お前は俺のことを馬鹿にしているの？ 周りを馬鹿にしすぎじゃない？」

「分かった。では、お前だけには事実を話そう。今回の戦いには俺も参加をする」

「お帰りはあちらです」

出口を指さすと、この馬鹿野郎が俺にすがりついてきた。

「頼む！ 俺はみんなと戦いたいんだ」

「お前が死んだら俺の責任になるんだよ！」

「だから仮面を付けてきたんだろうが！」

仮面を付けたから何だというのか？

「帰れ！」

「嫌だ！」

こいつ、このまま送り返してもついてきて勝手に死ぬのではないだろうか？ ポンコツ王子になってしまったこいつでは危険すぎる。

いったいどうすればいいのか？

ふと視線を向けると、そこにはヴァイスの姿があった。

よし、ならば一ヶ所にまとめよう。

ヴァイスに載せて、リビアやアンジェの護衛とすればいい。あそこは一番守りも堅くしているので、生き残る確率が高い。

ただ、後ろに下がれと言えば、こいつはグチグチと文句を言うてくるに違いない。

「……本気だな？」

「無論だ」

「なら、一番きつい場所に配置してやる」

「先鋒か？ ふつ、分かっているじゃないか、バルトファルト」

笑っているこいつの顔をぶん殴りたいが、今は我慢の時だ。

「馬鹿を言うな。今回の作戦の肝はヴァイス 王家の船だ。あの馬鹿でかいモンスターを倒すために、王家の船を使う。敵が一番に狙う場所だ」

ユリウス殿下の表情が真剣なものになった。

マリエも付けておけば、死に物狂いで守ってくれるだろう。

「マリエも乗せる。敵が押し寄せる一番危険な場所だ。お前に覚悟はあるか？」

仮面をかぶったユリウス殿下は、口元に笑みを浮かべていた。

「任せて貰おうか、総司令官殿」

馬鹿で助かった。

マリエも後ろに下げることになるが、あの五人組を後ろに下げられるなら我慢しよう。

「よし、ヴァイスにいけ」

「ああ、お前の期待に応えよう。……ところで、勢いで飛び降りたが、どこから昇れば鎧の所までいけるだろうか？」

仮面の騎士が、自分の鎧を見上げてどう昇ろうか考えていた。

……間抜けすぎる。

ヴァイスの艦橋。

リビアは、アンジエと共に不思議な光景を見ていた。

「えっと ルク君？」

浮かんでいるのは、白い球体に青い瞳という外見だけが違うルクシオンと同型のサポート人工知能である。

声質は女性に近い電子音声だ。

『外れではないですね。当たりでもありません。私は貴女たちの言う使い魔で、この飛行船の制御を命じられています』

アンジエが驚いていた。

「そんなことが出来るのか？」

『随分と古いタイプの船ですが、装置を取り付けたので可能です。実際、クルーの数は貴女たちと護衛の方々だけですので』

リビアはルクシオンに似た使い魔に触れる。

「お名前は？」

『困りましたね。番号では味気ないでしょうから　　』クレアーレ『
とでもお呼びください』

「クレアーレちゃん？」

『好きなようにお呼びください。それにしても、あのひねくれ者のルクシオンが随分と貴女たちを気に入っていたご様子。しっかり守らせて貰いましょう』

アンジェが俯くと、クレアーレが少しだけ傾き不思議そうにして見せた。

『どうされました、アンジェリカ？』

「……リオンに会えないか？　このまま出発しては、気持ちを伝えることが出来ない」

『マスターへの気持ちですか。分かりました。お繋ぎしましょう』

「え？」

クレアーレがそう言うと、空中に映像が映し出された。

そこにはリオンの姿がある。

チラチラと仮面をかぶった男が見えているが、リビアもアンジェも気にしなかった。

「リオンさん！」

「リオンその あのだ！」

『む？ 何だこれは？』

仮面を付けた男がリオンを押しつけ、画面一杯にその顔を見せた。

二人は大声で仮面の男に退いて欲しいと言うのだ。

「そこの変な人は退いてください！」

「何て格好だ。その変な仮面とマントは何だ？ オマケに全身タイツ？ 変態か？ いいからさっさとリオンを出せ！」

落ち込む仮面の男が画面から消えると、リオンが何とも言えない表情をしていた。

二人の姿を見て、咳払いをしていた。気まずそうな顔をしている。

『えゝあゝ……何かな？』

「リビアは胸に手を当てて、

「リオンさん、お話があります！」

『打ち合わせもあるし、手短でいいなら』

話を聞こうとするリオンに、アンジエは呼吸を整える。

「この前の件だ。実は、お前にどうしても」

そこまで言うと、今度はグレッグが割り込んでくる。

『おい、あの仮面の騎士はどこに行った？ あいつの顔を確認しないと　ん？ お、何だ、これ！』

画面一杯にグレッグの顔が映し出されると、アンジエが額に青筋を浮かべる。

集まってくるのは、ジルクにブラッド、そしてクリスだ。

みんなして、リビアとアンジエに手を振っている。

『これは凄いですね。相手の顔が見えて声も聞こえますよ』

『僕たち、そっちに行くから待っていてね』

『マリエも来るから準備を頼む』

いきなり邪魔をしてきて、おまけにマリエのために準備をしると言ってくる。アンジエが激怒して拳を画面に叩き込む。

「お前ら退け！ 私たちはリオンに話があるんだ！」

すると、映像はノイズが走って消え去った。

「あ！」

リビアがクレアーレを見ると、青い一つ目を横に振る。

『通信状況が悪いのでこれ以上はお繋ぎできません』

俯くリビアに、アンジェが手を握る。

「大丈夫だ。必ず二人で気持ちを伝えるぞ」

「……はい」

クレアーレは、そんな二人をからかう口調で告げてくる。

『あら、お熱いわね。本物の愛と言われるだけあるわ。けれど、そろそろ出発の時間よ』

リビアが前を向く。

「凄い光景ですね」

二百隻という飛行船が動き出し、公国との決戦に挑もうとしていた。

「ほとんど寄せ集めで連携など取れない。数だけは揃えてはいるが、

本当にこれで勝てれば奇跡だな」

「奇跡……リオンさんなら起こせますよ」

「そうだな。あいつにはどうしても期待してしまう」

決戦について補足してくるのはクレアーレだ。

『どうやら決戦の場所は大きな湖の上で行うみたいね。海水を引き上げている場所で、大地の裏側と繋がっているわ』

リビアが左手で胸を押さえた。

「湖の上で決戦ですか」

「そうだ。落下しても助かる確率があるからな」

湖の上で戦えば、落下しても命が助かる可能性もある。そのため、空中戦を行う際には湖の上で行われることが多かった。

リビアはそれが理屈で分かっている、納得しがたい顔をしていた。

「水が汚されてしまいますね」

戦争で出たゴミなどが湖に落ちて汚してしまう。

周囲に住む人々には迷惑な話だった。

「……今回は生きるか死ぬかの戦いだ。悪いが、気にしている余裕

はない。全てが終われば、復興作業で人手を出そう」

艦隊の先頭に行くパルトナーから、小型の飛行船が出てきてヴァイスに近付いてくる。

そこには先程の仮面の騎士や、マリエたちが乗っていた。

甲板の上で一人になる。

ルクシオンの抜け殻に指示を出した俺は、前を向いていた。

遠くに見える分厚い雲 あと一日もしない内に、公国軍との戦闘が始まる。

「切り札はこちらにある。あの二人を戦争に連れてきたくはなかったけどな」

後悔があるとすれば色々だ。

もつとうまくやれたのではないか？

たとえば、ルクシオンを使って情報を集めていれば、物語がここまで狂うことはなかったはずだ。

総司令官に俺が必要もなかった。

そもそも、寄せ集めで突撃くらいしか出来ない艦隊だ。

「……あ」

俺は一人思い出した。

あのユリウス殿下が付けていた仮面だが、ゲーム中に登場したキヤラだ。割と目立っていたが、最後まで誰だか分からないことになっていた。

ゲーム中ではユリウス殿下でもなかった。

少し芝居がかった立ち居振る舞いと、少しポンコツだが強い奴だった気がする。

ただ、思い出したのはいいが、特に重要でもないことだったな。

「でも、あいつがああ仮面を付けてくるとは」

仮面の騎士　本物は一体誰なのだろうか？

王宮。

ローランドは自分の部屋にある隠し部屋で捜し物をしていた。

「な、ない！ 私の変身セットがない！ 特注で作らせた鎧のキーもない。だ、誰がこんな真似を……ミレーヌ！ あの年増に違いない！」

激怒するローランドの部屋に、そのミレーヌがやって来た。

「陛下！ ユリウスを見かけませんでしたか？」

隠し部屋を見られたローランドは、慌てた様子で振り返った。

「ユリウスだと！？ こ、ここにはいないが……お、お前、驚かないのか？」

ローランドの隠し部屋を見たミレーヌは、呆れた顔をしていた。

「こんな隠し部屋など知っていましたよ。中に何があるのかまでは知りませんけどね。それよりもユリウスです。あの子の姿が見当たらないのです」

ローランドは肩を落とす。

「知っていただと？ わ、私の秘密部屋が……それより、ユリウスなら知らないぞ。ふて腐れて自室にこもっているんじゃないか？」

「いないから尋ねているのです。あの子は貴方に似ていますからね。何かやらかしていないかと不安なのです」

そこでローランドは思い至る。

「おい、ユリウスも私の部屋の秘密を知っているのか？」

「当然でしょう。小さい頃に見つけたと報告してくれましたよ」

それを聞いたローランドは、慌てて自室を飛び出すのだった。

「どうされたのですか、陛下！」

「ユリウスだ。あいつ、私の変身セットと鎧を持ち出したに違いない！」

ミレーヌの表情が青ざめる。

「どうして貴方がそんなものを持っているのですか！」

「浪漫だ！」

リビアの力

公国軍の旗艦。

王女殿下の私室。

ヘルトラウダの横には、ヘルトルーデの姿があった。

「お姉様は大地の守護神を呼び出さないでください。天と海 双方の守護神がいれば十分に目的を果たせます」

「ラウダ……貴方には辛い役目を押しつけてしまったわ。私がこの魔笛を使ってさえいれば」

ヘルトラウダは首を横に振る。

「どちらかが背負う役目でした。お姉様が失敗した時点で、私が次に王国へ向かうのは決まっていたことですから」

ヘルトルーデは魔笛を握りしめ、そして涙を流す。

魔笛の真の力を発揮した場合 その対価に求められるのは、使用者の命だ。

引き換えに守護神と呼ばれる超大型を使役できる。

「ラウダ、私は分からなくなりました」

ヘルトルーデの言葉に、ヘルトラウダは明確な答えを持たない。

もう、意味がないからだ。

「ミレーヌ王妃様の言葉が真実であつたとしても、我々は止まることが出来ません。王国を沈め、大陸を浮かせる浮遊石を奪い　公国は新しい大地を得ます。公国が真の大国となるために必要なことです」

公国が王国を沈める理由は、王国が持っている　王国の大地を浮かせている浮遊石が欲しいからだ。

その浮遊石を持ち帰り、自分たちの領地を広げるためだ。

正攻法では勝てない公国が、大国となるためにはこれくらいの強引な手法が必要だった。

「私たちは正しいのかしら？」

「私には判断できません。全てが終われば、お姉様に後を託すしかありませんから」

姉妹の両親は事故で亡くなっている。

王族もいるにはいるが、跡取りとして口伝やら教育を授けられたのは二人だけだ。

どちらかが生き残り、国を導く必要があつた。

「……お姉様、王国ではどのように過ごされていたのですか？」

ヘルトルーデが妹と話せる時間は残り少ない。

だから、なるべく楽しい会話がしたかった。

「学園という場所にいましたよ。そこに留学生として通いましたね。想像以上に酷いところでした」

女子生徒が奴隷を連れ回し、男子生徒たちを見下していた光景はヘルトルーデも知っていたが衝撃だった。

「あの外道騎士も女性にペコペコ頭を下げていたのよ」

「バンデルを倒した外道騎士が？ 王国はどうしてそのようなになったのしょうね？ 公国が大公家だった時代は、私たちと変わらなかったと聞いていますが」

「そうね。変な国よね。女子のために飛行船まで出して冒険をするのよ。私があゝ魔装の右腕を見つけた島は、エルフの島だったわ」

目を輝かせるラウダの姿を見て、ヘルトルーデは冒険の話をする。

大公家も元は冒険者の家系だ。

幼い頃からこういった話を聞かされて育つ。

ヘルトルーデが話し終わると、ラウダはニコニコしていた。

「お姉様は冒険をしたのですね。うらやましいです。私には、もう時間がありません」

「ラウダ」

妹を哀れむヘルトルーデだが、時間が来てしまう。

騎士が報告に来た。

「ヘルトラウダ王女殿下！ 王国軍の接近を確認いたしました！」

ラウダの表情が子供のものから、一変して冷たいものへと変わった。

「すぐにいきます。……お姉様、私が倒れたら後は頼みます」

王都 大陸中央まであと僅かの距離だ。

そこに到着すれば全てが終わる。

ヘルトルーデは妹に笑顔を向けるも、涙が流れていた。

「任せなさい。それと、私も側にいます」

「心強いです、お姉様」

アロガンツを甲板の上に座らせていた。

コックピットの中、俺は目の前の光景に強がり口笛を吹く。

「何だよ、あの大きさ」

超大型のモンスターの真下には、まるで守られているような公国軍の艦隊がいた。

ゆつくりと王都を目指すモンスターに付き添っている。

『目標、射程圏内に入ります』

馬鹿でかいモンスターは、雲をまとった多眼で多腕の姿だ。いくつもの大きな目が、王国軍に向く。

パルトナーの後ろに付き従う王国軍の飛行船と共に、公国軍へと突撃を掛けようとしているところだ。

超大型が、その手の一つを俺たちに伸ばしてくる。

『目標、接近してきます』

「ぶちかませ！」

俺の言葉にあわせ、抜け殻になってしまったルクシオンが『了解』と呟く。いつもの憎まれ口もなければ、必要最低限の会話しかない。

『ミサイル発射します』

パルトナーのミサイル発射口から、一発のミサイルが発射された。

それは真っ直ぐに超大型の手にぶち当たると、大爆発を起こして大きな手を吹き飛ばしてしまう。

パルトナーすら握りしめそうな大きな手が吹き飛び、黒い煙に変わっていく。

「どンドン撃とうか！」

『砲撃開始』

パルトナーの大砲が火を噴き、超大型に命中すると大きな爆発を起こす。ミサイルが次々に発射され、腕を吹き飛ばしていく。

そのまま船首の向きが変わると、パルトナーは加速した。

『敵艦隊、隊列に変更を確認』

「遅い！」

自慢のラスボスが腕を吹き飛ばされ、慌ててこちらを迎え撃つ準備を始めたのだろう。

通信状況が悪いのは、あちらも同じなのかモタモタしている。

パルトナーのすぐ後ろに続くのは、家族や友人たちが乗り込む飛行船だ。

現在、もっとも性能がいいのはこいつらの飛行船だ。

甲板の上で、アロガンツを立たせライフルを構えた。

公国軍の艦隊の周囲を飛んでいるモンスターたちを撃ち落とす。

何千、何万というモンスターたち　その相手は、パルトナー以外が行うことになっていた。

パルトナーは超大型への攻撃で忙しい。

艦隊戦での撃ち合いと、モンスター退治は、味方艦に任せるしかない。

どんどんと敵との距離が縮まると、砲撃が開始された。

モンスターたちが撃ち抜かれ、黒い煙に変わっていく。

パルトナー目がけて次々に砲弾が撃ち込まれるが、それらがぶつかり弾けてもたいしたダメージにはならなかった。

飛行船を守るように展開されたバリアが、全てを弾いてくれる。

船体の側面に大砲を並べている飛行船が主流であり、敵はこちらにその腹を見せているようなものだ。

「食い破れ」

パルトナーが公国軍の目と鼻の先まで来ると、すぐ後ろの味方艦が船首に取り付けた大砲を次々に放つ。

公国軍の艦艇の周囲に魔法的なバリアが展開されるも、撃ち抜かれ飛行船が沈んでいく。

「最新式だ。その程度で守れると思うなよ！」

味方艦が沈み、鎧が次々に飛び出してくる。

パルトナーの進路を邪魔するように、一隻の飛行船が側面を向け出現してきた。

並べた大砲を一齐に放ってくるが、それらをパルトナーは全て防ぐ。

「その程度じゃ抜けないぞ。それに、体当たりも得意だ」

パルトナーの船首が飛行船の側面に突撃して、くの字に折ってしまった。

更にそのまま前進し、飛行船は前後に切り離され落ちていく。

「懐に入ればこちらのものだ」

既に超大型の真下に入り込んでいた。

この状態なら、超大型の攻撃も受けない　　はずだ！

次々に突撃してくる王国軍の飛行船が、鎧を出撃させると両軍が激しく戦う混戦状態に突入した。

「第一段階クリアだな」

パルトナーからミサイルが数発発射され、超大型に命中すると爆発により吹き飛んで黒い煙へと変わった。

その黒い煙を、渦巻いた雲が吸い込んで更に黒く大きくなってく。

早朝に突撃をかけ、明るかった空は分厚く黒い雲に覆われてしまった。

そんな黒い雲から、復活したようにまたも超大型が出現する。

多眼の目が全てパルトナーを見ていた。

「すぐに復活しやがる。このまま攻撃を続けて動きを封じるぞ」

『敵機接近』

パルトナーの甲板に着地し、アロガンツに向かってくる公国の鎧。

『見つけたぞ、外道騎士！』

「外道？ 自分だけが道を踏み外していないみたいに言うな！」

俺を殺しに来るお前も、これからお前を殺す俺も同じ穴の^{むじな}貉ではないか。

ライフルを向けて引き金を引くと、腹部を撃ち抜かれて甲板を転がる。

見上げると、飛行船や鎧がパルトナーを取り囲みつつあった。

ライフルを真上にいる飛行船に向け、引き金を引くと機関部に命中して火を噴いた。パルトナーに落下してくるが、バリアに守られパルトナーには傷一つ入らない。

ノイズが混じった声が聞こえてくる。

『鎧で破壊する!』

『奴を討ち取れば出世は思いのままだ!』

『貰ったあああ!』

左手に斧を持たせ、近付いてきた鎧を斬る。

右肩から腹部までを抉り、パイロットは助からないとすぐ分かった。

ルクシオンが俺に指摘してくる。

『反応が遅れています』

「そうだね!」

もう一体は頭部に斧を振り下ろし、胴体まで刃が届くも引き抜かず、斧を手放した。

三機目はライフルの弾丸で撃ち抜くと、新しい武器を左手に持たせる。

「頼むぞ」

一度だけヴァイスに視線を向けた俺は、空を見上げて飛び立った。

ヴァイスの艦橋。

公国軍に突撃し、混戦状態に持ち込んだ王国軍は激しく戦っている。

その様子を見ているアンジェは、震えているリビアを抱きしめ支える。

「リビア、少し休め」

首を横に振るリビアの目からは、涙がこぼれていた。両手で頭を押さえ、そして呼吸が乱れていた。

「苦しいです。どうしてみんな戦うんですか？こんなに苦しいのに……どうして」

アンジェは答えに悩む。

「……どうしてだろうな」

答えは知っていた。

アンジェはその答えを学んできたが、実際に目にとすると答えが分からなくなってくる。

リビアが胸を押さえると、そこにマリエが入ってくる。

「ちょっと！ この船の周りにも敵が集まってきたいるんですけど！」

聖女の格好をしたマリエに、アンジェは一喝した。

「静かにしろ！」

「は、はい！」

「周囲に護衛艦もいる。それに、この船は簡単には落ちない」

周囲に浮かんでいたクレアーレが頷いて見せた。

『一番の脅威は真上にいる超大型と呼ばれるモンスターですね。それ以外の飛行船に、この船は落とせません。それよりも、お二人の準備はよろしいですか？ あと、マリエも』

オマケのように扱われたマリエは不機嫌そうだが、アンジエが怖いのか黙っていた。

アンジエはリビアを支え、そして優しく語りかける。

「リビア、こんな戦いは早く終わらせよう。出来るな？」

リビアが泣きながら頷き、胸の前で両手を組む。

祈りを捧げるような格好になると、アンジエもその姿を真似た。

（何だ？ 胸が苦しい。それに 悲しくて涙が）

周囲の声が聞こえてくる。

《助けて！ 死にたくない！》

《母さん、助けて！》

《だから、戦争なんてしたくなかったんだ》

消えて行く命を感じ、アンジエも胸が苦しくなってくる。

（お前は、これをずっと感じ取っていたのか？）

クレアーレの声がする。

『船が共鳴とでも言えはいいのでしょうか？ オリヴィアさんの能力に反応していますね。不思議な性能です。マニュアルにこんな機能はなかったはずなのに』

マリエは大きな口を開けて騒ぐ。

「いやあああ！ 前から大きなモンスターが！」

大きな口を開けてモンスターが迫ってきていた。

クレアーレが『ふむ』と呟けば、ヴァイスの主砲に撃ち抜かれてモンスターが吹き飛ばされた。

『マリエ、貴方も力を発揮してください。お二人だけではどうやら足りないようです』

「え？ 何をすればいいの？」

『とにかく二人を真似てください』

慌ててマリエが二人を真似て祈り始めると、ヴァイスが震える。

まるで本気を発揮しようとしているような。

アンジェは天井を見上げ、両手を広げる。

(……暖かい光があふれてくる。それに、落ち着く)

思い浮かんだのは、夏休み　三人で温泉からの帰り道で話した光景だった。

あんな日がいつまでも続けばいいのに、そんな感想だった。

近付いてくるモンスターを斬り捨てたところで、俺は後ろを振り返った。

周囲の鎧も、そして飛行船も動きを止める。

戦闘が止まり、そしてモンスターたちが吹き飛ばされていく。

暖かい光が戦場を包み込み、その光はヴァイスから放たれていた。

「これが最終兵器か」

モンスターたちが光によって消えて行くと、空の上にいた超大型モンスターも目を閉じて自分を守るようにいくつもの腕を交差させる。

だが、光によってその巨体が黒い煙になって消えて行く。

「これで終わりか」

多くの鎧が、手に持っていた武器を落としていた。

通信状況が改善されていき、空を覆っていた分厚い雲すらかき消えて青空が見える。

「愛って凄いな！　　っ！」

笑おうとすると、急に戦意がなくなっていく。

感じたのは恐怖だ。まるで、無理矢理に戦意を奪われたような感覚だった。

声が聞こえる。

（もう争わないで。私は　こんな戦いを見たくない。お願い、戦いを止めて！）

リビアの声だ。

「そうか、これがリビアの本当の　　」

リビアの声は人の心によく届く。

人の心を揺さぶる名言などなくても、リビアが言えば人の気持ちを掴む。

ヴァイスから音声が　リビアの声が聞こえてきた。

（もう、止めましょう。このままでは、多くの人たちが犠牲になります。戦いを止めてください）

そんな言葉で戦いが終われば苦勞はしない。

しないが……本当に戦いが終わって欲しいという気持ちで、心の中に入り込んでくる。

ルクシオンの抜け殻が呟く。

『精神攻撃を確認』

そうだな。こいつは何て強力な攻撃だ。

ヴァイスの能力で強化されたリビアの能力はとんでもなく凶悪だった。

王国を恨んでいた公国の騎士たちが、武器を捨ててリビアの声を聞いている。

ふざけるな！ とか、このまま終われるか！ ……そんな気持ちで、リビアの悲しい心の前に溶けていく。

そして、俺に見えた光景は 懐かしい前世の思い出だった。

超大型が不気味な声を上げて消えて行くのを見上げながら呟く。

「……何て酷い攻撃だ」

この力は、使わせてはいけない……そう思った。

公国軍の旗艦から、ヘルトラウダはその光景を見ていた。

涙が流れる。

「……どうして私たちのために心を痛めるの。止めて。貴女たちは私たちの敵でなくてはいけないの。悲しむな！」

リビアの心の痛みが流れ込み、胸が苦しかった。

周囲の者たちも啞然とするか、涙を流してその場に座り込んでいた。

戦意が奪われていく。

「こんな。こんなことで、私たちの恨みを忘れるというの。こんなことで」

悔しい。

だが、復讐心が奪われていく。

段々と、自分たちが正しいのか分からなくなってきた。

ヘルトルーデが、ヘルトラウダを抱きしめる。

「ラウダ、もう終わりました。空の守護神は、その姿を消してしまっただけ」

ヘルトラウダは首を横に振る。

「嫌。嫌よ。このまま終わったら、私は何のために命を失うのか分からない。私は 私は戦わないと！」

魔笛を握りしめるヘルトラウダは、戦いたいのに心が嫌がっていた。

憎むべき相手を憎めない。

立ち上がれない。

「卑怯よ。こんなことをする王国は、やっぱり最低よ。憎むことも、恨むこともさせないなんて最低よ。私から戦う意志すら奪うなら、私は何のために命をかけたのよ」

泣いてしまうヘルトラウダを抱きしめ、ヘルトルーデは涙を流していた。

「ごめんね。私の代わりなんかをさせて 本当にごめんね」

空の守護神が消える。

ヘルトラウダが握っていた魔笛は、粉々に割れてしまった。

「……嘘。海の守護神様まで負けるなんて」

徐々に生気を失うヘルトラウダは、姉の腕の中で意識が遠のいていく。

「ラウダ！」

「お姉様……何だか、怖いのに暖かいわ」

リビアの能力により、徐々に全ての恐怖が消え、暖かいものに包み込まれるような感覚だった。

戦う気持ちを奪われ、ラウダは穏やかな顔付きになる。

「ごめんね、お姉様。……一人にしてしまった」

ラウダは目を閉じた。

ヘルトルーデの悲しい泣き声が聞こえてくるが、それも次第に聞こえなくなってくる。

ヘルトルーデの側に立つのはバンデルだった。

泣いているヘルトルーデは、次第に笑い始める。

「姫様」

「バンデル。私、おかしいの。悲しいはずなのに、心が温かくて幸せなの。ラウダが死んだのに、悲しむこともさせてくれないわ」

本当に王国の人間は酷いと呟くヘルトルーデに、バンデルは肩に手を置く。

「お任せください。このバンデルが全てにけりを付けてまいります」

「バンデル？」

魔装の右腕の効果なのか、バンデルに精神攻撃は効かなかった。

「さあ、まだ戦う意志が残っている内に命令ください」

ヘルトルーデは悩んでいた。その顔は、幼い頃と同じだと懐かしむ。

「姫様！」

「……バンデル、いきなさい。公国の意地を示して」

大きく頷くと、バンデルはその場を堂々と歩き去る。

外に出ると、口元を押さえ咳き込んだ。

手の平が血で赤く染まる。

「ここまでよく持ったものだ」

自分の体に感謝しつつ右腕を見た。

「禍々しい右腕だ。だが、これであの外道騎士と戦える。王国
のあの船だけは、必ず沈めなければ」

遠目に見える白い船。

あんな物を放置できないと思ったバンデルは、右腕に力を込めた。肥大化し、全身が覆われると鎧の姿になる。

『さあ、はじめるか』

飛び立つバンデルは、一直線に白い船　ヴァイスへと向かい突撃した。

放心状態だった。

こう、眠ったら駄目なのに眠い　みたいな感覚だ。

違うかな？

とにかく、戦うのが馬鹿らしくなってくる。

『マスターに精神汚染を確認』

ルクシオンの抜け殻の声も聞こえるが、何もかもが嫌になってくる。今にして思えば、どうして俺は戦っているのだろうか？

俺がこんなことをする必要なんてない。

そもそも、悪いのはみんなマリエだ。

あんな奴は見捨てても誰も怒らない。

誰も いや、もう会えない前世の両親だけは怒るかも知れない。
お兄ちゃんなんだから、妹の面倒を見なさい、って。

でも、俺ってそういうキャラじゃないし……。

『敵機接近。ヴァイスへと向かっています』

視線を向けると、黒くてアロガンツの偽物みたいな刺々しい鎧が
ヴァイスに突撃していくところだった。

あの鎧もどこかで見たことがあるんだよ。

どこだったか未だに思い出せない。

「ん？ ヴァイス？」

直後、衝突した黒い鎧によりヴァイスの船体に穴が開き、爆発が
起きた。

「まずい！」

急いで操縦桿を握りしめ、アロガンツを動かすと意識がハッキリ
してくる。

「何だ？ まるで夢でも見ていたみたいな」

『精神攻撃です。ヴァイスより、精神攻撃が敵味方関係なく放たれ
ました』

「リビアの力かよ。二度と味わいたくないな」

あの暖かい何かに包み込まれる感覚は、幸福感もあるが同時に恐怖だ。

周囲の飛行船やら鎧は、まだ動けずにいた。

「それにしても、あの機体は」

『王宮からヘルトルーデ、そして魔笛を奪った機体です』

「黒騎士の爺さんかよ！」

このままでは危険だと、一気にアロガンツを加速させた。

大陸の裏側。

消えて行く超大型のモンスターを確認したルクシオンは、同時に関知した力を危険と判断する。

『これがオリヴィアの力ですか。確かに最終兵器と言われるだけありますね』

ルクシオンの船体からは煙が出ていた。

『通信状況が改善されつつある。もう少しで子機とのリンクが回復しますね』

船体を一度海水に沈めると、持っていた熱で水が蒸発する音がす

る。

周囲が白い煙に覆われ、ルクシオンの船体はまるで霧に囲まれたようになる。

『何事もなければいいのですけどね』

最悪、リオンさえ生きていればいいとすら思っていた。

船体を冷やしつつ、この後の予定を考えるルクシオンは ゆっくりと動き出す。

白く美しい船体を、持っていた大剣で斬り裂いたバンデルは艦内へと足を踏み入れた。

『何だ？』

見れば、足のない鎧もどきが武器を持って突撃してくる。

大剣で叩いて吹き飛ばし、左腕で掴む。

『人が乗っていない？ 随分と面妖な』

握り潰し、そして船を壊しながら進む。

『こんな船は存在してはいけない。王国はやはり悪だ。悪……そう、悪だ！』

右腕が膨れ上がると、目がいくつも見開かれそこから魔法が放たれ

た。

内部から爆破され、ヴァイスも大きなダメージを受ける。

徐々に高度が下がり、至る所から火を吹き始めている。

『そつだ。倒さなければ……王国は悪だ』

バンデルが破壊して進むと、艦橋へと辿り着く。

そこには、三人の女の子がいた。

『女だと？　そうか。あれをやったのはお前らか』

怯えている三人を前に、バンデルは大剣を振り上げた。

前に出るのは茶髪の娘だ。

「待ってください。もう止めましょう。こんな戦い、終わらせないと駄目なんです！」

『まだだ！』

バンデルは血を吐きながら、三人に自分の気持ちをぶちまける。

『終わってなどいない。公国がある限り、王国に戦いを挑む。お前らがしてきたことを考えれば、当然ではないか！』

もう一人の女が口を開いた。

「ふざけるなよ。お前たち公国が、何もしなかったと言っても言つつも
りか」

口振りから、公国の過去を知っているのが分かる。

ただ、バンデルは退かない。

『それがどうした。お前たちに、家族が目の前で死んでいくところ
を見ているしかなかった気持ち分かるのか!』

大剣を振り下ろそうとすると、バンデルは背中を攻撃される。ワ
イヤーがかけられ、無理矢理艦橋から引き剥がされた。

振り返ると、そこには五色の目立つ鎧の姿がある。

『そこまでだ!』

白く、マントを着けた鎧が剣を持って向かってくる。

ワイヤーを無理矢理引きちぎり大剣で受け止める。

バンデルは鎧の中で笑っていた。

『悪くない腕だ。だが、その程度で止められると思うなよ!』

弾き飛ばせば、今度は緑色の鎧がライフルを撃ってくる。

その攻撃を避けないバンデルは、弾丸が装甲を弾くのを知ってい
た。

『これを弾きますか』

相手が焦っているのが手に取るように分かる。

周囲を見れば、スピアがバンデルを取り囲むように浮かんでいた。

一斉に襲いかかってくると、鎧の隙間 関節部分に突き刺さる。

『どうだ！ 僕の槍からは逃れられな 』

『ふん！』

バンデルが力を込めると、スピアは突き刺さった部分から折れて使え物にならなくなる。

『このおおお！』

『させない！』

赤い鎧と青い鎧がバンデルを挟み込むように攻撃を仕掛けてくるも、一機は大剣で弾き飛ばし、もう一機は尻尾で叩いて弾き飛ばした。

沈み始めたヴァイスの近くで、バンデルは五機を相手に笑っていた。

『どうした、小僧共！ その程度で、このバンデルを打ち取れると思っただけか！』

白い鎧に乗った男が驚いていた。

『バンデル？ 黒騎士か』

『そうだ。今は元黒騎士だ。それでも、お前くらい一瞬で血祭りに上げてやる』

加速して白い鎧を両断しようと大剣を振り下ろすと、赤い鎧が体当たりをしてきて剣筋が乱れた。

青い鎧が前に出て、剣を振るってくる。

『その太刀筋。剣聖か！ いや、それよりも拙い』

『うおおお！』

青い鎧の猛攻を大剣で防ぎつつ、取り囲まれたバンデルは笑っていた。

『そうだ。もつと本気を出せ！ このバンデルを 黒騎士の相手にはもつと強い奴を！』

目が血走り、そして精神が徐々におかしくなっていく。

暴れ回るバンデルによって、五機は劣勢だった。

バンデルの鎧 魔装は膨れ上がり、体中に目が出現した。禍々しいその姿に、五機は尻込みしているように見えた。

『怯えたか、腰抜け共！ ならば死ね！』

笑いながら大剣を振るうと、そんなバンデルを突き飛ばす鎧がいた。

『 なっ！？ 』

あまりの衝撃に驚いていると、その正体を知って歓喜する。

ようやく出会えたと、バンデルは獐^{どうもつ}猛な笑みを浮かべていた。

『 待っていたぞ、外道騎士！ 』

そこにいたのはアロガンツだった。

『 変な名前を付けやがって。俺が外道なら、お前らはそれ以上の屑だろうが 』

喜ぶバンデルの口角からは、血が流れてきていた。

目の前の禍々しい鎧を見てみると、一体何なのか分からなくなってくる。

生物のような気もするし、機械のような気もする。

鎧の表面にある目がキョロキョロと動いて気持ち悪い。

『 お前と戦う日をずっと待っていた 』

「 嬉しくない告白をどうもありがとう。俺は二度と会いたくなかつ

たよ。それより、変わった鎧だな」

クツクツと笑っている黒騎士の声がする。

『お前には礼を言わねばと思っていた』

その反応から、すぐに思い浮かんだのはあの右腕だった。

「まさか」

『そうだ！ これで貴様との間に鎧の性能差はない。純粋な技量こそが問われる戦いを始めようではないか！』

体当たりをしてきた黒騎士を避けるが、すぐにこちらの後ろに回り込んできた。

抜け殻が、

『敵、後方より接近』

「お前も反応が遅いよな！」

ライフルで防御をすると、大剣によって切断された。

すぐにライフルを放り投げ、新しい武器を両手に持つ。

随分となめらかに動く黒騎士の新しい鎧は、アロガンツとの間に性能差を感じない。

こうなってしまうと、純粋な技量差が問われてくる。

そうになると、俺では歯が立たない。

「しつこいぞ、爺！」

『お前の首を取るまでは死ねんだ！』

いったい俺がお前に何をした！

アロガンツで空高く舞い上がると、黒騎士も付いてくる。本当に性能差を感じない。そればかりか。

『落ちろおおお！』

黒騎士の鎧に付いている目から、魔法が放たれる。火球が凄い勢いで、何十という数で俺に迫ってくる。

避けようとするが、追尾してくるのだ。

「インチキだろうが！」

アロガンツのスピードを上げて逃げ切ろうとするも、火球が更に追加されてくる。

「ドローンを出せ！」

『ドローンを展開します』

コンテナからドローンが射出されると、攻撃を開始する。

丸いドローンにマシンガンが取り付けられており、それらが火球を攻撃していた。

しかし、撃ち落とすことは出来たが 同時にドローンも火球に飲まれ撃ち落とされていく。

黒騎士が持っていた大剣に斬り裂かれたドローンもあった。

「糞野郎が！」

『お前だけは いや、違う。倒さなければならないのはもっと別の』

急に動きが妙になると、真下に見えるヴァイスに視線を向けていた。

「おい、ふざけるなよ！」

『そうだ。あの船だけは沈めなくては』

黒騎士の体中の目が、一斉に火球を放とうとしていた。

大急ぎでアロガンツを急降下させ、破壊されたヴァイスの艦橋の前に浮かぶ。後ろには、リビアやアンジェの姿が見えた。

ついでにマリエの姿も見える。艦橋から逃げだそうにも、通路がなく逃げられない状況らしい。

「シールド全開だ」

『シールドを展開します』

次々に襲いかかってくる火球から、三人を守るため盾になる。

降り注ぐ火球がヴァイスに命中すると、大きな爆発が発生した。いつの間にか、五人組もやって来てリビアたちを守っていた。

炎に包まれるヴァイスが本格的に沈み始めると、周囲で戦闘が再開され始める。

「せっかく終わろうとしていたのに」

撃ち続けられる炎を受け止めていれば、黒騎士の声が聞こえてきた。

『このような終わりは認めぬ。どちらかが倒れるまで、この戦いは終わらない！ 終わらせてなるものか！』

俺は仮面の騎士に指示を出す。

「おい、変態の騎士！」

『仮面の騎士だと言っただろうが！』

「どうでもいいから、三人を連れて避難しろ。ここは俺が押さえる」

『分かった』

何か言いたそうにしていたが、自分たちではどうにもならないと思ったのか退くらしい。

……それでいい。

「糞爺の相手は俺がする」

アロガンツを突撃させると、黒騎士は大剣を振り上げた。

そんな時だ。

湖がせり上がり、そこから山が出現する。

「　　嘘だろ」

その山　のような姿をした敵の姿に、俺は冷や汗が流れた。

『敵、超大型の出現を確認。今までとは違うタイプです』

抜け殻になったルクシオンの声が聞こえ、気を抜いた瞬間に黒騎士に斬られて地面に落ちていく。

魔笛を持ったヘルトルーデは、床に寝かせたラウダを見ていた。

大事な妹に謝罪をする。

「ごめんね。駄目なお姉ちゃんでごめんね……どうしてこんなことになったのか？」

泣いているヘルトルーデに、重鎮の一人が近付いてきた。

怪我をしており、額から血を流していた。

「小娘共が。失敗するとは情けない！」

王族に対する敬意などそこにはなく、ただ口汚く罵ってくる男だった。公国でも要職に就く貴族だった。

ラウダを蹴ろうとするので、ヘルトルーデが咄嗟に守り蹴られた。

「止めて！ ラウダは頑張ったわ！」

「それがどうした！ 頑張りなど無意味なのだよ。結果を出せ、結果を！ お前ら親子は本当に役に立たない。お前の父親も母親も、戦争に反対した。だから殺して、お前たちをいいようにこき使っていたというのに」

重鎮は、この状況に自棄になっているように見えた。

「終わりだ。何もかもおしまいだ。ここまでされれば、王国は面子にかけて公国に攻め込んでくる。あの化け物を使えば勝てると思ったのに。まさか、王国が無力化するとは！」

ヘルトルーデは動かなくなったラウダの手を握っていた。

「貴方はいったい何を言っているの？」

「まだ分からないのか？ 親子揃って間抜けだな。お前たちは我々に利用されていたのだよ」

両親の事故や、目の前の男の言葉を聞いてヘルトルーデの中に憎しみが生まれた。

目の前の貴族は、ヘルトルーデを見て笑う。

「いや、まだだ。お前の首を王国に届ければ、わしだけは助かる。愚行を止めた英雄になれる！」

拳銃を向けてくる男だが、その時に飛行船が揺れる。

ヘルトルーデの手元に転がってくるのは、自身の魔笛だった。

「く、くそっ！」

貴族が態勢を建て直し、銃口を向けると同時にヘルトルーデは魔笛を手にとって力の限り吹いた。

（みんな　消えてなくなればいい！）

すると、周囲にモンスターが黒い煙を発しながら出現。

貴族に襲いかかって食らいついた。

「や、止めて！　助けて！」

泣き叫ぶ貴族は、モンスターたちに食い殺され死んでいく。

ゆっくりと立ち上がったヘルトルーデは、魔笛を持って外が見える場所へと向かう。

両親の事故死や、貴族の言動……それらにより、いったい自分たちが何のために命をかけてきたのか分からなかった。

甲板に出たヘルトルーデは、淀んだ瞳をしていた。

外では戦闘が再開され、ヴァイスがバンデルにより破壊されているところだった。

涙を流すヘルトルーデは、魔笛を吹いた。

怪しい音色が周囲に響き渡る。

（もういい。どうなってもいい　けれど、みんな死んでしまえ）

魔笛が呼び出すのは大地の守護神。

本来なら、この乙女ゲーの世界でラスボスとして登場するモンスターだった。

笛を手放したヘルトルーデは、狂ったように笑い始める。

「みんな消えてしまえばいいのよ！」

その狂った命令に、大地の守護神は応える。

リオンの父、バルカスは艦橋から指示を出していた。

「また馬鹿でかいのが出てきやがった！　いったい何が起こってい

るんだ？」

突撃したかと思えば、今度は急に意識がなくなった。

空にいた超大型のモンスターは消え去ったが、今度は湖の上を移動する山みたいに大きなモンスターが出現した。

状況についていけない。

艦橋にいたニックスが、窓の外を指さす。

「親父、モンスターがまた出てきやがった」

「鎧を出せ。俺が出る」

「いや、親父は指示を出さないと駄目だろうが！ 俺が」

「ウルセエ！ いいか、物事には順番があるんだよ。お前はここに残っていればいい」

ニックスは死なせてはいけない。

そう思ったバルカスは、ニックスの頭に手を乗せて乱暴に頭を撫でた。

「俺に何かあったら、兄弟で仲良くしろよ。リオンが生き残ったら、こき使っても領地を守れ。あいつは有能だが、馬鹿だからな。お前がしっかり面倒を見ろよ」

「あいつの面倒を見るなんて俺には無理だって！ そもそも、親父

が残ればいいだろうが！」

「ガキが俺より先に死ぬんじゃないよ！ お前ら、ニックスを頼むぞ」

そう言って艦橋を出て行くバルカスだった。

ラスボスはやっぱり出現するし、黒騎士は無茶苦茶強くなるし、
いったいどうしてこうなったのかが分からない。

『あとはお前だけだ、外道騎士！』

どこまでも追いかけてくる黒騎士の爺。

嬉しくない。

もっと可愛い女の子が俺を追いかけてくれればいいのに。

「ちっ！」

黒騎士の大剣を受け止めると、持っていた斧がボロボロになる。

「ミサイル！ 全部だ！」

『一斉射』

コンテナが開き、小さなミサイルが黒騎士に襲いかかった。黒騎士は俺から距離を取り、その全てを回避していく。

気持ち悪い動きに加え、体中にある目がミサイルを迎撃していく。

武器も手持ちは斧だけだ。

ほとんど使い切ってしまった。

捕まえて衝撃波でもぶち込もうにも、そもそも捕まらない。

まともに戦えば、俺の方が負ける。

「チートを持っけていてもこのざまかよ。自分が嫌になる」

追い込んだと思えば追い込まれ、万策尽きた　そう思っていたら、超大型のモンスターが山から棘を出す。

その棘を放つと、周囲にいた飛行船を次々に撃ち抜いていく。

王国、公国と関係なしに攻撃し始めた。

「　　は？」

流石の黒騎士もこれには慌てたらしい。

『姫様！』

何かがあったとは思えない。

超大型のモンスターは、敵味方関係なく暴れ回っていた。

「ルクシオン、パルトナーで攻撃しろ！」

『了解しました』

パルトナーが超大型に攻撃を開始するが、周囲の公国軍からも集中砲火を浴びていた。

「お前ら、俺の船を狙う前に先に倒す相手がいるだろうが！」

叫ぶと同時に斧を構えると、振り下ろされた黒騎士の大剣を受け止める。

『お前の相手をしている暇がなくなった。さっさと死ね！』

「断る！ 俺はこんなところで死ねるか！」

戦争で死ぬなんて絶対に嫌だ。

戦争なんて、お前ら好きな連中だけでやっていればいいんだ。

『騎士としての誇りもなければ意地もない。お前は本当に外道だ！』

「それがどうした。お前の誇りや意地を俺に押しつけるな」

騎士道？

悪いな、王国の騎士道は女の子を守るためにあるらしいよ。だから、お前の美学になど付き合ってやれないんだ。

パルトナーが、残った弾薬を全て吐き出し超大型を吹き飛ばす。

同時に、

『パルトナー、稼働限界です』

「っ！」

集中砲火を浴びたパルトナーは、バリアが消えてそのまま砲弾と魔法を受けて燃え上がると湖に落ちていく。

ルクシオンに申し訳が立たないな。

そして俺には黒騎士が迫ってきていた。

『これで終わりだあああ！』

操縦桿を握りしめ、最後まであがこうとすると　。

ルクシオンの音声が　普段のものになる。

『コンテナをパージします』

「お前！」

背負っていたコンテナをパージすると同時に黒騎士へと向かわせ、攻撃を回避するとアロガンツは遅くなった。

コンテナを斬り裂いた黒騎士は、爆発に巻き込まれる。

コンテナにエンジンノズルがあったので、当然と言えば当然だ。

「いきなり出てきて、この状況をどうするつもりだ」

次に黒騎士が攻撃してくれば、俺は逃げることも出来ない。

『問題ありません。シュヴェールト、来ます』

上空から接近するのは、形が変わってしまったシュヴェールトだった。

「何だあれ？」

『シュヴェールトです』

「形が違っただろうが！」

『些細なことです。ドッキングを行います』

アロガンツの背中側にシュヴェールトが来ると、そのままコンテナを接続していた部分と合体してしまう。

「合体した！」

『パーツ換装に近いですね。大型のブレードがあるので使ってください』

シュヴェールトから出てきた剣の柄をアロガンツが引き抜くと、黒騎士と同じような大剣が出てくる。

シュヴェールトの形状は、見ようによっては飛行機や盾にも見え

る。そんな物を背負ったアロガンツの姿。

「これで戦えるのか？」

『問題ありません。データ解析。サポートプログラムのアップデートを完了しました』

コンテナの爆発した煙から黒騎士が飛び出してくると、アロガンツを下がらせる。

今まで以上の加速に機体の制御が難しかった。

「速すぎるんですけど！」

『慣れてください。攻撃を開始します』

シュヴェールトからレーザーのような光が放たれ、黒騎士に襲いかかっていた。

「レーザーが曲がったよ！」

『舌を噛むので黙っててください』

……何、このマスターをマスターとも思わない会話。

さっきまで寂しかったけど、妙に苛々します。

「けど、これなら黒騎士と戦えるか」

黒騎士に向き直る俺は、大剣を構えるのだった。

『小僧　まだそんな隠し球を』

「最後に勝った奴が強いんだ。文句を言っなよ、爺！」

愛の力

沈む王家の船　　ヴァイス。

そこから脱出したリビアたちは、小型の飛行船に乗っていた。

仮面の騎士が鎧から降りて、リビアたちの様子を確認していた。

「無事なようだな」

リビアを支えるアンジエ。

そして、マリエは飛行船を持って来たカイルやカーラに支えられている。

アンジエが仮面の騎士を見た。

「助かった。礼を言う」

「…… 必要ない。それよりも、戦闘が再開された。化け物まで新たに出てきては、倒す方法が失われた我々が不利だ」

パルトナーが一度倒すも、パルトナーはその後沈められてしまった。アンジエは思い出のある飛行船が沈み、少し悲しい顔をしているが首を横に振り真剣な顔付きになる。

新たな超大型は、敵味方問わずに攻撃してくるため三つ巴の戦いが始まっている。敵味方共に混乱しているのが見ていれば分かった。

鎧に乗ったジルクが、ライフルを構えて近づくモンスターたちを撃ち落としていた。

『このままでは危険です。撤退しましょう』

反対するのはグレッグだ。

『いったいどこに逃げればいいんだよ！　このまま、あのデカブツが王都に来るのを見逃すのか！』

『だったら、我々で勝てるのですか！　パルトナーも、ヴァイスも沈んでしまった我々に、勝つ方法などありませんよ！』

激しく戦うアロガンツと黒騎士を見る仮面の騎士は、手を握りしめていた。

「……パルトファルトも手が離せない。我々に何か出来れば」

憔悴した様子のリビアとアンジエ。

二人に先程と同じことをして貰うのは無理だろう。

二人の側には、見守るように浮かんでいる白い球体があった。

暗い雰囲気には包まれていると、マリエが顔を上げる。

「待つて。あるわ……勝てる方法ならある」

そんなマリエに仮面の騎士は詰め寄る。

「本当か、マリエ！ いや、マリエ殿」

「う、うん。魔笛があるじゃない？ アレをもう一度吹いて貰ってから、あのでかいのを消せばいいのよ。けど……」

所有者がどこにいるのか分からない。

そして、所有者がもう一度笛を吹くのか分からない。

「なるほど、説得が必要になるのか」

それは難しいかも知れない。

誰もがそう思う中、リビアが立ち上がった。

「……いきましよう。この戦いは終わらせないと駄目です」

「リビア、お前は休め。もうフラフラじゃないか」

アンジェに言われても、リビアは首を横に振る。

「私が止めたいんです。それに、私たちしか出来ない気がします」

周囲は混乱しており、リオンも手が離せない。通信状況も再び悪くなっている。

「俺たちにしか出来ない、か」

仮面の騎士が小さく頷き、飛行船を操作するカイルに言う。

「魔笛の所有者の下へ向かえ！」

だが、カイルはとても嫌そうな顔をしていた。仮面の騎士に命令されるのが嫌なのだろう。

「何で貴方が僕に命令するんですか？　そもそも、所有者の居場所なんて分かりませんよ」

『いえ、分かりますよ』

白い球体に皆の視線が集まった。

『場所の特定は済んでいます。ナビゲートはお任せください』

「リビアが空を見上げた。

「アーレちゃん、お願い。私たちを案内して」

『おや、それが私の呼び名ですか？　嬉しいですね。親近感を覚えますよ。さて、ではこのまま前進してください』

カイルが飛行船を操作しながら、

「戦場の中を進むなんて、特別手当を貰わないとやっていられないよ」

そう言いながらも仕事をこなすカイルだった。

仮面の騎士はポーズを決める。

「いくぞ！ 我々がこの戦いを終わらせる！」

そんな仮面の騎士にクリスは不快感を覚えたようだ。

『こいつ、馴れ馴れしいな』

飛行船がクレアーレの指示で進むと、周囲には次々にロボットたちが集まってくる。

「な、なんだ！」

仮面の騎士が慌てて警戒するが、クレアーレは大丈夫と告げる。

『護衛です。どうやら、あのひねくれ者が間に合った様子ですね』

「間に合った？」

上空から光の柱が出現し、超大型を撃ち抜いて黒い煙に変えた。その黒い煙の発生に紛れるように、飛行船は公国の旗艦へと進む。

「今の光は？」

『……魔法です』

アレが魔法なのか！？ そう言って仮面の騎士は驚くも、本当かどうかなど分からない。

『見えてきましたよ』

仮面の騎士は、黒い煙に覆われた戦場で何も見えない。

「視界が悪くて見えないが？」

『減速してください』

カイルが言われたとおりに減速すると、黒い煙の向こうに飛行船が見えてきた。

ブラッドが慌てている。

『おい、ぶつかるぞ！』

クレアーレは楽しそうに笑っていた。

『大丈夫です。この速度のまま進んでください』

甲板の上に座り込むヘルトルーデの姿が見えた。

周囲にはモンスターたちがいて、ヘルトルーデを守っている。

仮面の騎士は鎧へと乗り込む。

「露払いは任せて貰おう」

リビアを支えるアンジェが、そんな仮面の騎士を見て小さく笑っていた。

「変な仮面をしているのに頼りになるな」

「……仮面の騎士と呼んで貰いたい」

鎧に乗り込んだ仮面の騎士は、全員に言う。

「俺に続け！」

だが、ジルクが不満そうだった。

『私たちに命令しないでください！』

ヘルトルーデの周りにいたモンスターたちを倒し、そしてリビアとアンジェ　　マリエが甲板に降りるのを五人は助ける。

五人と、そしてロボットたちに守られながら甲板へと降りたりビアたちはヘルトルーデの前に立った。

座り込むヘルトルーデは魔笛を握りしめている。

俯いて、リビアたちが来たというのに抵抗する気配もない。

「ヘルトルーデさん、お願いがあります。もう、戦いを止めてください」

反応のないヘルトルーデに、アンジェが苛立つ。

「最期まで暴れ回るのがお前の望みか？　もう勝敗は決した。降伏しろ」

マリエは聖女の杖を握りしめ、周囲を見ていた。

戦闘が続いており、流れ弾でも来たらたまらないという顔をしている。

静かに、そして目の下に隈を作ったヘルトルーデが顔を上げた。「ひっ！」と驚くマリエに対して、リビアは真摯^{しんじ}に訴える。

「もう終わりにしましょう。こんな戦い、間違っています」

それは本心から出た言葉だった。

アンジエがリビアの補足をする。

「公国軍も壊滅に近い。ここで退け。それが互いのためになる。その笛であの化け物は止められるのだろう？」

クツクツと笑うヘルトルーデは、魔笛を握りしめて大きく笑い始めた。

「そうね。正しい判断よ。大地の守護神でも貴女たちに勝てない。諦めた方が利口なのでしょうね　けど、絶対に嫌よ」

立ち上がるヘルトルーデは、両手を広げるのだった。

「殺したいなら殺さない！ 私を殺しても、守護神様は止まらないわよ。いくら倒しても蘇る相手に、貴女たちはどうするのかしらね」

自暴自棄になっているヘルトルーデに、リビアは説得する。

「公国の人たちも攻撃されています。このままじゃ」

「それがどうしたのよ」

「え？」

「笑うしかないわ。家臣の一人が最期に言ったのよ。私たちを利用していたとね。もう誰も信じない。みんな……消えてしまえばいいのよ！」

リビアがヘルトルーデに近付き、

「それは違います！　きつとヘルトルーデさんのことを想っている人もいます」

「ええ、いたわよ！　バンデルもこのままだと死んじゃうけどね。それに、ラウダは　たった一人の妹は死んだわ」

リビアが驚き引き下がる、ヘルトルーデは笑っていた。

「この魔笛で守護神様を呼び出す対価は、使用者の命。失敗したとはいえ、守護神が消えたら妹も死んだわ。あんたたちに、いいように弄ばれたようなものよ」
もてあそ

悔しさも、恨みも、憎しみも奪われ、ヘルトラウダは息を引き取った。

「本当に残酷よね。私たちの心まで弄ぶ貴女たちは最低よ」

リビアが俯いてしまうと、アンジェが庇う。

「戯れ言を言うな。お前たちがしたことを棚に上げるつもりか？」

マリエはおずおずと。

「今魔笛を吹けば、命までは取られないと……思っただけど」

ヘルトルーデがマリエを睨み付ける。

「よく知っているわね。途中で止めれば、確かに死にはしないわ。二度と私は魔笛を使えず、守護神様が私を殺そうとするけどね。でもね、今更死ぬのが怖いとは思わない。このどうしようもない世界を破壊したくて仕方がないのよ。私は妹の敵を討ちたいだけよ！」

そんなヘルトルーデの意見に、リビアは強く反対する。

「それでも……こんなことは間違っています。仇討ちをしてどうなるっていうんですか！ 妹さんは喜びません！」

平行線を辿る両者の意見に、激怒したのは　マリエだった。

「五月蠅いの、この頭お花畑！」

リビアもアンジェも驚き、そしてヘルトルーデさえもマリエを驚かせて見ていた。

杖を持ち、左手を腰に当てたマリエは　。

「そもそも間違いつて何よ！ あんたにとって間違つていても、この子にしてみれば正しいことよ！ 仇討ちが間違つている？ 知るかそんなの！ それに、ヘルトラウダが復讐するな、って言ったの？ 勝手にあいつの気持ちを代弁してんじゃないわよ！ 図々しいのよ！」

リビアが言い返そうとすると、

「でも、このままじゃ誰も幸せには」

「この子に仇も討てずに不幸になれって言つての！ 仇討ちは間違っているから止めてください？ なら、この子の気持ちはどうするのよ！ 偉そうに説教をしているけど、あんたは大事な人が殺されたら黙っているの？ 間違っているから仇討ちはしないのよね？」

「そ、それは」

追い詰められるリビアを、アンジエが擁護する。

「お前はどっちの味方だ！ ヘルトルーデの仇討ち云々に興味はない。今はあの化け物を止めるのが先決だろうが！」

「五月蠅いわね！ この程度で滅んでしまふ世界なんて、さつさと滅べばいいのよ！」

マリエの意見にその場は何とも言えない雰囲気になった。

マリエは止まらない。

マリエは苛立っていた。

仇討ちはいけない……そんなの、大事な人間を殺されていない戯れ言だと。

（そうよ。この、頭お花畑のことが私は嫌いだったのよ。綺麗事ばかり並べて、戦争なんて間違っています？ 仇討ちは駄目です？ 頭おかしいんじゃないの？）

「間違っているのは分かっているのよ。それでも止められないから行動したんでしょうが」

マリエがヘルトルーデを庇っている理由は、自分にも分からなかった。

ただ、間違っていると言われるだけのヘルトルーデを見ていられなかった。

そんなマリエを責めるのは、アンジェだ。

「既に勝負はついた。見ろ」

アンジェが周囲を見渡すと、公国軍が白旗を揚げていた。

超大型のモンスターと王国軍に攻撃され、既に二十隻近くまで減らされている。

「もう戦う意味などない。ここで退けば、まだ交渉の余地が生まれる。このまま無駄に戦う必要がどこにある？」

マリエは言い返せずにいた。

「何の意味もない消耗戦を続けるつもりか？」

たとえば、ここから公国軍が巻き返したとしても、戦力が減りすぎてしまつては何の意味もない。

いずれ違う国に攻め込まれ負けるだけだ。

アンジェの言うことは正しかった。

「ファンオース公国も元を辿れば王家の一族。ここで退くならまだ交渉可能だ」

ヘルトルーデが俯いて笑っている。

「でしょうね。公国に待っているのは、奴隷のような未来でしょうけど」

敗北した国家に待っている辛い現実。

だが、王国側からしても正当な権利だった。

リビアがヘルトルーデに語りかける。

「兵士の人にも待っている家族がいます。これ以上、無駄に死なせないでください」

マリエも理屈は分かる。

リビアたちは正しいが……ならば、ヘルトルーデはどうなるのか？

マリエが何かを言う前に、ヘルトルーデが唇を動かした。

「……まさか、情けない聖女様に庇って貰うとは思わなかったわ。私は、貴方以上に馬鹿な王女ね。いや、もう王女でもいられない」

魔笛を吹く。

その音色はどこか優しいものだった。

「あんた、それでいいの？」

マリエに言われ、魔笛から口を離れたヘルトルーデは笑う。

「嫌よ。けど、聖女様を見ていたら冷静になれたわ。そうよ。分かっていたのよ。こんなことをしても意味はない、って……でも、止められなかった。私は……私たちはいつだってこうしてこんなことに」

泣き出すヘルトルーデがその場に崩れ落ちると、マリエが側に付く。

気が付けば、周囲で戦闘が止んでいる。

五人が乗る鎧がマリエたちを守るように囲んでおり、随分と周囲は静かになっていた。

ヘルトルーデが、

「降伏します」

そう告げた時。

クレアーレが警告する。

『急速接近する機体あり』

周りを囲んでいた五機が警戒すると、甲板に黒い機体が乱暴に降り立った。ボロボロになり、鎧なのに血を流しているように見えた。

黒騎士だった。

『姫様から離れる。王国の外道共』

装甲には目がいくつも出現し、マリエたちを見ている。

「こいつ気持ち悪い」

ヘルトルーデは、そんな姿の黒騎士を見て泣くのだ。

「バンデル、もういいわ。もう終わりにしましょう。私なんかのためによく戦ってくれたわ。ありがとう」

ようやく戦いも終わる。

そう思ったが、黒騎士は納得しなかった。

『……姫様、誑たぶらかされましたか』

「バンデル？」

『ご安心ください。すぐに王国軍を蹴散らしてご覧に入れます』

立ち上がる黒騎士は、体中から血のような液体を噴き出していた。

「違うの。もう終わりなのよ、バンデル！」

『終われるものか！』

仮面の騎士が黒騎士へと斬りかかると、大剣で弾き飛ばされる。他の機体も襲いかかるが、相手にならなかった。

『そうだ。終われない。まだ、終わらせるわけには……家族の復讐が終わっていない。同じ思いを王国の者たちにも 妻や娘の仇を討つまで、終われんのだ！』

マリエたちに近付く黒騎士。

そして、復活した超大型モンスターが、マリエたちの方に向かってやってくる。

マリエは一瞬「あ、これ終わった」と思った。

黒騎士の前にリビアが歩み出て、両手を広げる。

「黒騎士さん、もう止めてください」

マリエは手を伸ばす。

「ば、馬鹿、こんな時まで何をしているのよ！」

黒騎士は動きを止め、そして大剣を振り上げた。

『お前はあの時の娘か。ならば、ここで殺しておかなくては お前は生かしておけぬ』

マリエは杖を握りしめ、聖女の力で魔力のシールドを展開する。

そんなシールドを、黒騎士は簡単に左手で弾き飛ばした。

『この程度で止められると思うなよ！』

「バンデルもう止めて！」

ヘルトルーデが叫ぶも、黒騎士はリビアに大剣を振り下ろした。

「リビア！」

アンジェがリビアを庇うために飛び出す。

マリエは目を閉じてしまった。

そして聞こえてくるのは、

『ぶち殺すぞ、糞爺』

「邪魔しやがって」

黒騎士を助けるため、公国の鎧が俺に集まってきた。その全てを倒して周囲を見れば、近くに黒騎士の姿がない。

逃げ出した黒騎士を追いかけて、ようやく見つけたと思えば公国軍の飛行船　その甲板の上にいた。

どういうわけか、リビアたちが乗っており今にも殺されようとしている。

一瞬にして頭に血が上ってきた。

「何してんだてめえ　ぶち殺すぞ、糞爺いいい！」

アロガンツで体当たりをしてその場から吹き飛ばすと、黒騎士は限界なのか何か叫んでいた。

『終わらない！　終わらせてなるものか！　王国の外道共を皆殺しにしてやる！』

その声を聞いて、ルクシオンが一つ目を横に振る。

『既に正常な判断を下せていません。アレに乗っ取られています』

あの右腕か。

黒騎士が大剣を構えた。

『マスター、そろそろ終わりにしなければいけません。超大型がこちらに接近しています』

こちらは大剣を構え、そして加速する。

「爺、もう眠つとけ！」

向かってくる黒騎士の姿　その動きを真似、更にルクシオンがサポートした。何度も黒騎士と打ち合い、その中で修正を繰り返してきた。

首に提げたお守りが少し光った気がする。

『貴様あがあああああ！』

互いに大剣を振り抜き、そしてアロガンツの肩に深々と黒騎士の大剣が突き刺さる。

俺の方は、黒騎士の胴体部分に刃が入っていた。

「ルクシオン！」

『お任せください。　インパクト！』

大剣の刃が赤く光り、紫電を放つと黒騎士が弾け飛ぶ。

まるで水の入った風船が弾けたように、黒い液体が吹き飛ぶと黒騎士の爺さんが飛行船の甲板に落下していく。

アロガンツが左手で握りしめ回収したのは、あの時の右腕だった。右手の甲に目が出現し、アロガンツを見て慌てているのか目をキョロキョロとさせていた。まるでアロガンツに怯えているようだった。

『マスター、いつでも準備は来ています』

放り投げると、右腕に空から光が降り注いで消滅させた。

「スツキリしたか？」

『はい。後はあいつです』

視線の先には動く山。

超大型のモンスターがいた。

「……ド派手にいくか」

『それがよろしいでしょうね』

大剣をしまい、アロガンツは両手を広げる。

甲板に落ちてきたバンデルにヘルトルーデがすがりつく。

「バンデル！」

バンデルは目を開けるが、自分の腹部を触ると血に濡れていた。

右腕は失われていた。

「……ああ、負けたのか」

泣いているヘルトルーデを見て、バンデルは微笑む。

（あの小僧……強くなっていたな）

「姫様、申し訳ありません」

「私を置いていかないで！」

「……ここまでのようです」

空を見れば、アロガンツが両手を広げていた。魔法陣がいくつも発生し、重なり合い何か準備をしている。

魔法を専門としないバンデルでも、それが凄い魔法なのだろうと予想できた。

そして、魔法陣が重なり合い美しく見える。

大地の守護神に向かって魔法を放とうとしており、大きなエネルギーを圧縮して砲弾のような光を作る。バチバチとアロガンツが放電し、無理をしているのか関節から火を噴いていた。

そうして 砲弾が放たれると、大地の守護神に命中して爆発を起こす。爆発と煙、そして揺れる飛行船の上でバンデルは全て終わったと実感する。

爆発したアロガンツは、そのまま湖に落下していく。

飛行船に乗ってアロガンツへと向かうのは、リビアたちだった。

ただ、マリエは二人の側にいて、ヘルトルーデを見守っていた。その姿を見て、バンデルは少しだけ安堵する。

（姫を心配してくれているのか？ そのような者もいるなら……まだ、大丈夫か）

バンデルは口から血を吐き笑うとそのまま目を閉じた。

湖の上。

浮き輪が展開されたアロガンツの中。

近くに浮かんでいるルクシオンと、コックピットの中で空を見上げている。

「なあ、俺は正しかったのかな？」

元からルクシオンを 本体をこちらで使用していれば、誰も死なずに済んだ。それをしなかった理由もある。だが、こんな戦い方を選んだのは俺だ。

『私の本体を晒した場合、マスターに待っているのは気を抜けない人生でしょうね。それに、大地の裏側で戦うなど、今の王国には危険すぎます。無視も出来ませんでしたし、ベストではなくベターでは？』

湖の上に浮かぶ飛行船や鎧の残骸。

それを見て思っただ。

もっとうまくやれたのではないかと。

「結局、俺はお前を使いこなせなかったな」

「同意します。これから学ばいいのでは？」

「沢山死んだ。沢山殺した」

『有史以来、人は戦い続けていますのでご安心ください。マスターなど序の口です』

「全然嬉しくないな」

『慰めるのは下手なのです』

「……俺は地獄行きかな」

『地獄があれば、でしょうね。お供しましょうか？』

「お前、閻魔大王に喧嘩を売りそうだな。俺の罪が重くなりそうだから遠慮する」

『普段から周囲に喧嘩を売っているのはマスターですよ』

馬鹿な話をしていると気が紛れる。

『……マスターの行動で大勢の人命が救われたのも事実です。王国、

公国、共に疲弊し、戦争の継続は困難です。結果的に、マスターはうまくやれたと思いますよ。パートナーやアロガンツも使用不能に見せることも出来ましたからね。これからは、望んだ平穏がやってくる可能性もありますよ』

本物の物語の主人公なら、きっとみんなを救ってハッピーエンドだ。

そんな主人公がいるなら全力で媚びを売るから助けて欲しい。

……俺には出来なかった。

「もっとうまくやれたと思う。俺の何が間違いだったのかな」

『マスターがいようがいなかるうが、戦争は起きていましたよ。自意識過剰です』

こいつなりの励ましなのだろう。

腹が立つが、抜け殻状態よりずっといい。

「パートナーとヴァイスの件は悪かったな。沈めちゃった」

『……パートナーは回収して修理します。ヴァイスに関してですが、あの精神攻撃は危険と判断します。どうやら、船に何らかの装置を後から積み込んだようですね。あの船自体にはそんな機能はありませんし』

「愛で戦争を終わらせるのは怖いな。戦意というか、戦う気持ちが奪われるとか怖すぎるぞ」

『沈んだままにした方がいいのかも知れませんが、できれば、オリヴィア、アンジェリカの命が危険です。　　王国が切り札として隠した理由が分かりましたよ』

あんなものをもう一度使われてはたまらない。

使用不可能にするためには、所有者を葬る方が早いだろう。

もう利用できないと思わせるのが重要だ。

「二度と使わせたくないよ。何が愛だ。精神攻撃じゃないか」

『賢明な判断です。ですが　愛が戦いを終わらせたのは事実では？』

「アレが？　俺でもドン引きだったぞ」

『マスターがあの人を愛していたから手を貸したのでは？　それにご家族、他にも色んな知り合いを守りたいという気持ちも愛ですね。だからこそ、王国は戦えたと言えます』

「素晴らしいよな。ついでに、戦いを始めるのも愛ってか？」

『様々な理由がありますが、利用することが出来れば効果的です。ね。民衆を煽る際に、家族や恋人を守るためと言えば士気が高まります』

「反吐が出るな」

『人は愛のために戦える。他者のために命をかけられる。素晴らしい』

いことですね』

こいつの皮肉に付き合っていると、小型の飛行船がアロガンツの近くに降りてきた。着水して、波が発生して揺れる。

乗っているのはリビアとアンジェの二人である。

二人とも泣いているじゃないか。

「あれ？　もしかして死んだと思われた？」

『冗談を言っていないで、外に出て安心させたらどうですか？　いい加減に覚悟を決めないと、私も苛立ってしまいます』

覚悟？　結婚できないというか、責任を取れない相手に手を出すなんて俺には無理だな。

だって俺は誠実な男だから。

「もう一生分頑張ったんだ。後は静かに暮らさせてくれ」

『平穏な未来はあったとしても、あの二人からは逃げられないと思いますけどね』

「……俺が二人に相應しいと思うのか？　もっと相應しい人間がいるよ」

『それを決めるのはお二人と、マスター自身です。安心して下さい。甲斐性なら私がどうかしますよ』

「嬉しくて涙が出るね」

アロガンツのハッチが開き、外に出るとリビアとアンジエが飛行船から飛び降りて抱きついてきた。

「リオンさん！」

「この馬鹿者が！」

抱きつかれ、そして腕を二人の背中に回す。

「……ただいま」

リビアが涙を流して、俺の胸に額を当てていた。

「リオンさん、心配させないでください」

「あれ？ 心配してくれたの？」

アンジエが俺の腕をつねるが、パイロットスーツなのであまり痛くない。

「冗談を言つな。それから、どうしてあの時に逃げた」

「あの時？」

「地下の……その、リビアと私が愛し合っていると分かったときだ」
「恥ずかしそうなアンジエを見ると、何故だかからかいたくな
った。」

「いや、だってお邪魔したら悪いかな、って」

「誰が邪魔と言った！ ……二度と心配させるな」

親父の飛行船が俺たちの近くに着水する。

どうやら俺たちを迎えに来てくれたらしい。

……残るは事後処理か。

王宮に戻ると、慌ただしく色々と決まっていく。

公国の件だが、とりあえず和平を結ぶことになった。

王国は各地で攻め込まれており、公国に構っている暇がなかったのが理由だ。攻め込みたくても、そんな余力がない。

ただし、公国という国は消滅。

ファンオース公爵家として、王国の傘下に入ることになった。

同時に、屈辱的な条約を結ばされる。

賠償金もそうだが、保有できる戦力を王国に決められ、違反すると罰金。

王国側から監視役を派遣されることも決まった。

王国の要請があれば、戦力も出さなければならず拒否権もない。
他の領主たちよりも扱いがかなり悪い。

生かさず殺さず、何百年も搾り取られる未来が待っていた。

王宮に戻った俺が関われる話でもなく、その頃の俺は　。

「リオン様、素晴らしいご活躍だったそうですね」

「まさに英雄ですわ」

「リオン様のご活躍をお聞かせください」

王宮で女性に囲まれていた。

「あははは！　俺の活躍を見せたかったね。もう、公国の奴らをちぎっては投げ、ちぎっては投げ！」

ちなみに、俺を取り囲んでいるのは学園の生徒ではない。

入学前の後輩たち。

奴隷も連れていない高貴なお嬢様たちで、まだ世間というか、学園の女子のように悪い意味で染まっていない純粋な女の子たちである。純粋かな？　また、貴族の娘なので色々と裏もあるかも知れないが、学園の女子よりマシだ。

それに……チャホヤされるって最高だね！

色々と理由を付けられ、王宮に閉じ込められてしまった俺の下には毎日のように可愛い子たちがやってくる。

何か裏で動いているような気はするが、もう色々と気にして生きていくのは嫌だ。

今この瞬間を楽しむために生きるのだ。

「来年、学園に入学したらリオン様は先輩ですね」

「一緒に学園で過ごせるなんて夢のようです」

「リオン様のお茶会に出てみたいです」

可憐な後輩たちを前に、俺は胸を押さえる。

学園の女子たちとは違う、汚れていない乙女たち……俺の人生、ここから始まるのではないか？ 始まっちゃうのか？

あの乙女ゲーの呪縛から解放されたのか！

「俺もみんなが入学するのを楽しみにしているよ」

頬を染める女子たち。

こんな俺でも、英雄になればモテモテである。

もう笑いが止まらないな。

異世界転生して、女尊男卑な世界だと思っていたら これからは、普通のハーレム物の世界が待っていたわけだ。

最高の気分だ！

そんな感じで楽しんでいると、ミレーヌ様が姿を見せた。

「バルトファルト子爵、少しよろしいですか？」

「……ミレーヌ様」

真剣な顔付きは少し憂いを帯びていた。

止めてくれ。そんな顔で俺を見ないで。

女の子たちが空気を読んで部屋から出て行くと、俺は浮気が見つかったような男のように言い訳を始める。

「ミレーヌ様、こ、これには色々と事情が」

「分かっています」

「え？」

何やら分かっているらしいが、俺が女の子たちにチャホヤされて浮かれている気持ちを理解してくれたのだろうか？ 何て懐の深い女性だ。

「そうやって気を紛らわしているのでしょうか？ 貴方には辛い思いをさせてしまいましたね。聞きましたよ、獅子奮迅ししふんじんの活躍だったと……だからこそ辛いのでしょうか？」

……色々勘違いしている人だと思ったが、見ているところはちゃんと見ているのかも知れない。

俺は言い訳を止めて肩をすくめてみせる。

「かないませんね。でも、チャホヤされて嬉しかったのは事実ですよ。学園では経験したことがありますし」

「男の子ですね」

そう言って笑うミレーヌ様は、俺と向かい合うように席に着く。

「覚えていますか？ 私が全てを話すと言ったことを」

「戦う前でしたね。今がその時だと？」

頷くミレーヌ様は、姿勢を正して俺を真っ直ぐに見つめてくる。

「全てを受け入れられますか、バルトファルト子爵？ 真実というのは、残酷ですよ」

王国がこうなってしまった原因とか言っていたな。

乙女ゲーの設定に理由なんてあったのか。

俺も姿勢を正した。

「それでも純粹無垢な少年ではありませんからね。覚悟は出来ていますよ」

俺は、安易にこの台詞を吐いたことを後悔することになる。

「では、今回の一件の結末を交えつつお話しします」

残酷な真実

「はじまりは大公家の反乱からです。戦争というのは、どうしても後手に回った方が不利になるのは分かっていますね？」

この世界の戦争というのは、どうしても攻撃する側が有利である。

それは飛行船なんて物があるからだ。

「はい。実際、王都での防衛戦も大変でしたからね」

ミレー又様が頷いて続きを話す。

「大公家に苦しめられた当時の王家ですが、第二の大公家が出ることを恐れました。領主貴族の貴方にも分かるでしょうが、男爵家以上になると急激に戦力を増やす方法があります」

「飛行船を増やすことですね。そのまま他家をせめて勢力を伸ばす方法が昔はあったと聞いています」

浮遊石なんて便利な物があるため、飛行船の維持費は驚くほどに少ない。

割と安価で作ることも可能だ。

戦力を揃え、領主同士で争い新しい浮島を得る。

そうして勢力を拡大する方法が領主たちにはあった。戦力を整え、

才覚さえあれば男爵でも王国を恐怖させることが出来る。

……そんな時代があった。

「そして自らの領地に引きこもる貴族の中には、王国など敵ではないと思う方も多かったそうです。実際、王国を侮って攻め込んだ貴族たちも多かったですからね」

そういった勘違い野郎たちは、王国に負けてしまった。

だが、攻め込まれる側が不利なので、王国の被害も大きい。

「王国が学園を用意したのも、自らの力を誇示するためです。領主たちに、王都を見せて国力の違いを見せつけるため」

ルクシオンがそんなことを言っていた。

だが、それがいったい真実とどんな関係があるのだろうか？

男性に負担を押しつけたみたいなのを言っていたような気がするが……。

「そして、王国はもう一つの策を用意しました。それは、領主たちの力を削ぐためのものです。新たな価値観を植え付けました」

「力を削ぐ？ 価値観？」

「どうして女性が極端に優遇されていたのか分かりますか？」

「それは」

「本来、男性は戦争もあつて非常に少ないのです。学園にいる間は問題ありませんが、卒業後では男性の数が足りないほどですよ。結婚できない女性が多いのが現実です」

そのような状態で、どうして女性が結婚で優遇されるのか？

言われてみると確かにおかしい。

男性の方が選び放題だ。

あれ？　もしかして、俺が学園に入る前に結婚させられそうになったのも、もしかして男が少ないからか？

「学園で共通の価値観を持たせる際に、王国は仕掛けを施しました。最初は、女性に対してお金を使つてこそ、と思わせたそうです。女性に対して紳士的、そしてお金を使うのが当たり前と思わせました」

……おい、ちょっと待ってくれ。

この状況、もしかして王国が作り上げたのか！

「ま、待ってください。そんなことをして何の意味があるんですか？　だって、ほら！　いざという時に貴族たちが働かないじゃないですか！」

今回だって同じだ。

俺と同じ境遇の男子たちは、戦いを見守りつつ公国に寝返ろうとしていた。

ミレーヌ様は落ち着いてと俺に言ってから、ゆっくりと説明を続けた。

「最初はこのような状況を想定していませんでした。同じ価値観や仲間意識を持たせ、領主たちの力を僅かに削げればいい、そのような考えだったそうです。ですが、効果は想像以上でした」

若い内に王国の実力を知り、戦いを挑む馬鹿は少なくなった。

同時に、女性重視の考えが強くなってきたらしい。

「途中で修正しようよ」

「必要がありませんでした。実際、私もその時代の当事者ならば無視をしたはずです。王国にとって都合がよかったですからね。黙っていても領主貴族たちは疲弊し、王都に財が集まるのですから。その頃から王国に逆らう領主たちは実際に激減しています」

キツパリ答えるミレーヌ様は、学園のもう一つの存在意義を語る。

「学園のもう一つの目的は、教育方法を確立することです」

……あれ？　そういえば、聞き流していたルクシオンとの話でそんな話題もあった気がするぞ。

「教育方法を確立し、貴族ではなく　平民に教育を施すつもりでした。この意味が分かりますか？」

目をそらすと、ミレーヌ様が微笑む。

「数百年の後に……貴族が不要な未来を作るためです」

……聞きたくなかった。

こんな話を聞いてしまえば、下手をすれば消されてしまうではないか。

「学園を用意した当時の王家は、政治体制の变革を何百年もかけて実行するつもりでした。いえ、半ばそうしなければと思つての行動でしょうね」

領主貴族の相手をするのも嫌になり、王家は色々考えた結果政治体制を変えようと考えたらしい。

何それ？ 未来に生きすぎじゃない？

「当時は大公家を代表して、貴族たちの腐敗が酷い時代でしたからね。子爵も貴族なら分かるはずですよ」

いい奴もいるが、それ以上に人として首をかしげなくなる屑も多い。

「学園でもそうだった若い子たちの考えを正そうとしました。貴族たちがまともなら、このままの王国が続くだろう、と。ただ、当時の王家が予想しない方向に話は進みます」

女子たちの立場が想像以上に高くなったことが問題らしい。

「領主貴族たちの力を削ぐために有効で放置した結果、男爵家から

伯爵家の一部の女性たちが暴走しましてね。王宮が思っていた以上に酷い状況になりました」

それが今に繋がったわけだ。

「酷い話ですね」

「ええ、酷い話です。ただ、領主貴族たちの財が王都に集まったのも事実ですからね。王都で贅^{ぜいたく}沢な暮らしをしたい女子たちは、王宮にとっても都合がいい存在でした。これが、男性に負担を強いた理由です」

王国からすれば、貴族 特に領主貴族など信用できなかったのだ。

学園を作り、将来的には平民に教育を施して貴族を減らしていく。ミレーヌ様の口振りからするに、もしかしたら学園内で暴走する女子たちをわざと見逃していたのではないだろうか？

いずれ切り捨てるべき貴族たちを、選んでいたように思う。

伯爵家の本物の貴族の家が、娘たちに奴隷を持たせなかったのもこの事実を感じていたか、知っていたのではないか？

政治体制を変更する際、残った貴族たちは新しい体制の重要なポジションにつくことを狙っていたのかも知れない。

何も知らない貴族たちが暴走しても、王家の船という切り札があった王国は樂觀視していたように思う。

グダグダになった学園にそういった思惑があるなどと思いもしなかった。詳しいことはあとでルクシオンにでも聞こう。

それと。

「もしかして、リビアが学園に入学したのは」

「次の段階へと移行したということです。貴族たちは危機感を持つべきですね。彼女を手始めに、毎年入学させその数を増やすつもりでした。まあ、更に百年、二百年後を考えての行動ですよ」

……前世の学校で習ったな。

封建制度の次は 中央集権の絶対王政だったか？

「 中央集権」

「中央集権？ ……王家が目指す物を端的に述べたい言葉ですね」
何か前世の知識を披露したら褒められたが、この状況は嬉しくない。

俺たち領主から全てを奪い、貴族の仕事を平民にさせると言っているのだ。

学園はのために設立されたとか、想像もしていなかった。

「予定通りに進まないものですね」

ミレーヌ様はそう言うと、自嘲気味に笑みを浮かべて俺を見る。

……止める。俺を試すようなことをするな。

今の俺は、この話を聞いて殺されないか心配で仕方がない。こんな話を貴族たちの男たちが聞けば、怒り狂うぞ。

まあ、今の王家を責めても仕方がない。ミレーヌ様も、外国から嫁いできたならこんな計画があると言われたような立場だろう。

「やはり英雄は違いますね。落ち着いたものです。罵声を浴びせられても仕方がないと思っていましたよ」

俺の様子を見て勘違いしたらしい。

「それと、これは王妃ではなくミレーヌ個人としての話になります
が」

頭の中は混乱して何を言えば良いのか分からなかったただけだ。

そして、ミレーヌ様は席を立つと床に正座して俺に頭を下げてきた。

……え？ 何で土下座なの！ ちょっと待つて。この世界に土下座なんてものはなかったはずだ！ 学園祭の時に俺がやって見せたのを真似たのか？

「ちょ、ちょっと！ 止めてくださいよ。急にどうしたんですか？」

「バルトファルト子爵。無礼を承知でお願いいたします。どうか、息子のユリウスを助けていただけませんか？ あの子の母親

としてお願いいたします」

……あいつ何したの？

地下牢に入れられた六人。

マリエを始め、ユリウス、ジルク、ブラッド、グレッグ、クリスの面々は、静かに自分たちの処遇が決まるのを待っていた。

マリエは泣いている。

「みんな……ごめんね」

ユリウスが微笑む。

「これくらいしか手伝えなかったからな。気にするな、マリエ」

ジルクがユリウスに悲しそうな顔を向けていた。

「殿下が戦場に出られないのは仕方ありません。それに、現地で仮面の騎士と名乗る者が手助けをしてくれました」

ブラッドも仮面の騎士を思い出したのか、何やら不満そうにしていた。

「急にいなくなったよね。まあ、それなりに出来る奴だったけど」

グレッグはあぐらをかいて座っており、顎を手に乗せて仮面の騎

士についてユリウスに話すのだ。

「ユリウスの代わりとは言わないが、役には立つ奴だったよ」

クリスも頷いて実力を認めた。

「見たこともない鎧に乗っていたな。剣筋も悪くなかった。だが、いったい誰だったのかは最後まで分からなかったな。バルトフアルトは何か知っていそうだったが」

そんな四人の反応に、ユリウスは小さく笑みを作る。

「そうか。俺も会ってみたかったよ」

「いえ、殿下は会う必要はありません。急に出てきて、その場を仕切るような男です。今度あったら誰なのか問い詰めなければ」

マリエは五人の様子を見て呆れかえっていた。

本気で言っているのか？ そんな顔を向けている。

「みんな、アレはユリウスが」

六人がいる地下牢に足音が聞こえてきた。

見張りの騎士たちが敬礼をすると、その男は下がるように言う。
男の後ろには、黒髪の女性もいた。

「あ！」

マリエが目を輝かせてみる男性は リオンだった。

「お前らは本当に馬鹿だな」

その後ろには、ヘルトルーデ公爵令嬢も控えている。

「貴女たちには本当に呆れますよ」

マリエが鉄格子にすがりつき、リオンに助けを求める。

「私頑張ったのよ。お願いだから助けてよ」

リオンは頭が痛そうな顔をして、額を右手で押さえながら状況を確認する。

「お前らの罪状って分かっているの？」

ユリウスはリオンを真っ直ぐに見ていた。

「恥じるつもりは全くない」

「恥じろよ！ 条約を締結した後に公爵令嬢を王子が襲撃とか笑えないんだよ！ お前のせいで、王宮は恥をかいたからな！」

ヘルトルーデが溜息を吐きつつ俯いた。

「私のために無茶をしたのですか？」

「それもある。あの条約は流石に酷すぎたからな。それに、あのままでは俺がお前の家に婿入りするところだった。あとは……マリエ

に頼まれたからな」

マリエが、公国　公爵家を何とかしたいとユリウスに頼んだのだ。

「そちらが本音ですか」

王宮としては、ユリウスを送って厳しい管理下に置きたかったのだろう。ヘルトルーデと結婚させれば、国民感情もいくらか和らぐとの考えを持っていた。

なのに、ユリウスは公爵令嬢を襲撃した。

もちろん、襲撃したふりだ。

そのために王宮の面子は丸つぶれである。

条約にしても、ユリウスの一件でいくらか譲歩することになった。

当然、ユリウスの婿入り話も白紙だ。

（そのまま結婚しても良かったのに）

そんなことを思うマリエだった。

リオンは他の四人にも視線を向ける。

「お前らも分かっているよな？」

グレッグが鼻の下を指でこすり、少し照れくさそうにしていた。

「マリエを守るためだ。悔いなんかないぜ」

「少しは悔い改めろ！ マリエを引き取りに来た神殿の関係者を叩き出すとか馬鹿なの？　ねえ、本当に馬鹿なの？　馬鹿だよね！」

クリスが胸を張っている。

「正当防衛だ」

「やりすぎなんだよ。神殿側から抗議が来ているんですけど！　こっちにも色々と予定があつたのかき乱しやがつて」

マリエの下にやって来た神殿の関係者たちは、本来なら聖女のアテムを回収する役割があつた。

だが、マリエがいては不都合な者たちが紛れていた。同時に毒入りの酒を持ってきて、飲ませようとした。

マリエに全ての責任を負わせようとしたのだ。

四名が駆けつけ、そして神殿の関係者　全員を王宮から叩き出した。ここまでは問題もあるが、リオンだって責めない。問題はその後だ。

「あのね。マリエは聖女の道具に認められたの。自分で偽物と言おうが、聖女なのは間違いないの。ここまでは分かるか？」

マリエは褒められたと思つたのか照れる。

「え、そうなの？　なんだ、だったら私が聖女様ね」

「その聖女様の男が、みんなを叩き出したから話がこじれたんだろうが。取り調べもせずに叩き出したから、神殿側も意地になってマリエを認めないとか言い出したんだよ」

ヘルトルーデは、何か言いたそうにしているがリオンに任せて喋らない。

「俺が裏でどれだけ手を回したと思っているの？　ねえ、俺の頑張りをどうして無駄にするの？」

ブラッドが激怒して立ち上がって抗議する。

「あのままマリエに死ねというのか！　僕たちはそんなことは認めないぞ」

「……確かに、お前たちは正しいよ。毒殺なんてしようとした連中だ。俺だってこいつら馬鹿だな、って思ったよ。けどさ……追い返した後に騒いじゃ駄目だろ。殴り込みをかけるとか馬鹿じゃないの」

マリエが四人を庇う。

「待つて！　みんな、私が神殿に処刑されると思って抗議しただけよ」

「鎧を持ち出して暴れ回ったのは抗議じゃない！　実力行使って言うんだよ！　毒殺しようとした件を含め、いい感じに話がまとまりそうだったのに！」

王宮の役人たちからすれば、地下牢に放り込まれた六人は本当に腹立たしい存在だろう。

ヘルトルーデがリオンに同情している。

「貴方も大変ね。うちにくる？　今なら好待遇を約束するわよ。公爵の地位を用意するわよ」

「興味ない」

即答で拒否をするリオンは、マリエに近付く。

ヘルトルーデは少し悔しそうに、そして悲しそうに笑みを浮かべて「またふられちゃったわね」と呟いている。

「将来期待されていた五人を誑かした希代の魔性の女　お前、そんな風に言われているぞ」

「え、そうなの？」

照れるマリエにリオンは本当に腹立たしい顔をしている。

「お前らのせいで四方八方から抗議が殺到しているよ！　お前らの実家は激怒しているし、王宮の役人たちはあいつら絶対に許さないと言うし、神殿なんか全員処刑だって息巻いているんですけど！」

マリエはリオンの足を掴む。

「お願い助けて！」

「助けようとしたんだよ！ お前らが全部台無しにしたんだろぅが！
ねえ、俺に恨みでもあるの？ どうやったらこんな酷い状況になるんだよ。みんなビクリだよ！」

リオンが泣きそうになっている。

「違うの！ 私たちで何とかしようとしたのよ。そしたら、こんなことになったの」

「最悪だよ！ もっと考えてから動けよ！」

マリエが泣いてしまう。

「だったら、私たち死ぬの？」

リオンは何か言おうとして、言葉を飲み込むと背中を向けた。

「……ミレーヌ様にも頼まれた。出来うる限りの協力はする。あまり期待するな」

マリエが笑顔になる。

そう、前世の兄 リオンが動けば、大抵うまく事が運ぶのだ。

（ありがとう、お兄ちゃん！）

マリエたちの一件を解決するために向かったのは、陛下のところだった。

重鎮たちに囲まれているローランド陛下の周りには、ヴィンスさんやバーナードさんも控えていた。

俺のお願いに皆が難色を示していた。

「あの六人を助けるという意味が分かっていないようだな」

息子の命がかかっているのに、冷たい陛下の言葉に俺は　。

「持っている財産を全て差し出します」

陛下は鼻で笑う。

「君の持っていた工場は、父である男爵に譲渡したそうだが？　オマケにロストアイテムは全て失っている。今更、多少の財を得ても意味がない。それに、我々は王家の船まで失っているんだが？　これは君の責任じゃないのかな？」

ネチネチ嫌みを言ってくる嫌な野郎だ。

パルトナーやアロガンツは修理可能だが、ここは黙っておくべきだろう。

「……六名の命だけはお助け願いたい」

ふんぞり返っている陛下は、俺を見てニヤニヤしていた。

こいつ俺のことを嫌いすぎじゃない？

ただし、バーナードさんが、

「命だけを救うのは簡単だ。だけどね、あの六人を放置できないのを分かって欲しい。ユリウス殿下は王族。そして他の四名は名門貴族の元跡取りだ。そして、偽物とされたが、聖女の力を持つ女子もいる」

陛下がバーナードさんの顔を驚いたように振り返るが、今度はヴィンスさんも俺の意見について肯定的な意見をくれた。

「監視できる浮島に押し込めるのが無難だが、手頃な島を用意する余裕がない。王宮も無理をしてそのような浮島を探そうとは思わないだろう。そうなると、だ……君が見つけた浮島を、使うことになる。本当にいいのかな？」

俺が発見し、領地とした浮島を使用する。陛下は納得できないのか、ヴィンスさんを恨めしそうに見ていた。

そもそも、ヴィンスさんたちは王家の船の件はやむを得ないと思ってくれているようだ。

その件には一切触れない。

ヴィンスさんが陛下を無視しているのを見ると、溜飲しゅういんが下がる。

ただ……俺の理想が詰まった領地を差し出すのは痛いが、いずれ新しい浮島を見つけてもいいだろう。

いや、そもそも領地など手放していいのだ。

表向き、俺には何も残らない。

それでいいじゃないか。

「それで助命していただけるのなら構いません」

バーナードさんが俺に問いかけてくる。

「そこまでして殿下たちを守りたいと？ 何がそうさせるのか聞いてもいいかな？」

少しだけ考える。

ここで彼らの気に入ることさえいえないのだろうか、無理して気に入られても面倒が多いのを俺は学んだ。

だから、正直に話すのだ。

「……貴族という立場に疲れました。子爵の地位もいりません。お返したいのが本音です。俺、本当は準男爵辺りでノンビリすごしたかったんです」

「ほう」

ヴィンスさんが俺を見ている。

「飛行船も鎧も失いましたからね。今の俺に価値はありませんし、一からやり直しますよ。あの六人を助けるのは……まあ、腐れ縁ですかね？」

真剣な顔付きの三人は、俺の話を興味深そうに聞いていた。

「腐れ縁、か。殿下は良き友人を手に入れたらしい。陛下、六人の処遇に関してですが、それでよろしいですか？」

「え？ あ、ああ、うむ。任せる」

バーナードさんに言われ、陛下が何やら考えていた。

ヴィンスさんが俺を下がらせる。

「分かった。後はこちらで処理しよう。……随分と無茶をさせたな」

「本当ですよ。だから、今度は助けてくださいよ。俺、隠居してノんびリしたいんで」

「その年で楽隠居か。だが、そうだな……必ずお礼はしよう」

言ってみるものだな。

ヴィンスさんのお礼 期待せざるを得ない。

『まあ、失ったものなどすぐに取り戻せるのですけどね』

「おい、そう言っなよ。あの浮島を失ったのはかなり痛いぞ。せっかく、お米も収穫出来て、味噌や醤油もこれからだったのに」

ルクシオンと二人で部屋の中で話をしている。

『それにしても、マスターの隠居をよく認めてくれましたね』

「扱いに困るのは事実だし、王宮としても悪くないと思ったんだろ。もう、俺には何の脅威もないと思っているかもね」

『嬉しそうですね』

「どうかなく」

終わってみれば、少し違うが望んだ形に落ち着いた。

頑張った甲斐があったというものだ。

「さて、新しいモブライフのために、冒険の旅に出ようと思うがどうだろう?」

『お供しますよ。だって、私がいないとマスターは何も出来ませんし』

「失礼な奴だな」

自由になったら、またルクシオンで空の旅を楽しもう。

もう、面倒なことはこりこりだ。

待てよ。実家でノンビリ暮らしてもいいな。次兄の 違った。この度、めでたく長男に昇格したニックスの兄貴は跡取りだ。

その手伝いをすればいい。

「……俺の人生始まったな」

『今まで始まっていなかったのですか？』

思い起こせば、変態婆に売られそうになってから色々と慌ただしかった。

「何とかこのまま普通クラスにいけなかな。あれ？　そもそも学園は再開するのか？」

『確認はしていませんが、王都の状況からすぐに再開しても今まで通りとはいかないかと』

ルクシオンとダラダラ話をしていると、部屋のドアが開く。

慌ただしく駆け込んでくるのはリビアだった。

「リオンさん、貴族を辞めちゃうんですか！」

息を切らしたリビアに、俺は「何だ、もう聞いたのか」と言って座るように促す。しかし、リビアはオロオロとして座ろうとしない。

「子爵で四位下なんて、元々俺には不釣り合いだったんだよ。領地も手放すし、独立できても騎士爵とかじゃない？　まあ、一応騎士の扱いだけど」

「で、でも、リオンさんは頑張ったのに酷いです。アンジェだってあんなのに」

「心配してくれたの？　けど、俺にはこれが丁度いいのさ」

「違うんです」

リビアが俯いてしまった。

スカートを握りしめ、目に涙を溜めている。

「……アンジエ、リオンさんのためにマリエさんに土下座してしまつて、それが問題になっているんです。それなのに、リオンさんまでこんなことになるなんて」

「……え？」

ヴィンスに呼び出されたアンジエは、学園での出来事について問われていた。

王宮の一室に呼び出された理由は、事後処理でヴィンスが忙しいからだ。

「お前には失望した」

「はい」

学園の広場で、公爵令嬢が土下座を行った。

それも大勢が見ている前で、だ。

慌ただしく問い詰める機会もなく、ヴィンスが噂を聞いたのは昨日だった。

「家名に泥を塗る行為だな」

「分かっています」

リオンのために頭を下げた。

そのことに後悔はないが、家のことを思えば間違った選択だった。ヴィンスも実際にあきれ果てている。

「お前の期待した男は、地位も名誉も　そして領地も手放した。そんな男のために、公爵家の名に傷を付けたお前をどう扱えばいいと思う？」

問われるが、アンジェには答えようがなかった。

ヴィンスの判断次第なのだ。それでも答えるなら　。

「自裁でしょうか？」

「思い切りがいいな」

ヴィンスは天井を見上げる。

「……お前のような娘は公爵家に置いておけぬ。相応しい相手を用意してやるから、嫁ぐ準備をしろ」

それでも処遇としては温情がある方だろう。

アンジェが小さく頷くと、ヴィンスが笑みを浮かべていた。

「誰に嫁ぐか興味がないのかな？」

「誰なのですか？」

興味もないが、名前くらい聞いておかないと相手を調べられない。

そんなアンジェに、ヴィンスは言う。

「領地も手放し、爵位や階位も手放そうとする馬鹿な騎士がいる。若いのに隠居を考えている阿呆だが、お前に相応しい相手だと思わないか？」

「父上？」

「公爵家として世話をしてやる。お前の友人の事情も聞いてはいるが、悪いが側室扱いだ」

アンジェが深々と頭を下げたところで、ヴィンスは笑う。

「あ、ありがとうございます！」

「まだ決まった話ではない。これから本人と相談を」

そこまでヴィンスが言うと、ギルバートが部屋に駆け込んできた。

「父上！」

「騒々しいぞ」

「た、大変です。リオン君が」

「放せえええ！ 俺は 俺はこいつの首を取らないといけないんだあああ！」

右手に刀を握りしめた俺は、地下牢で暴れ回っていた。

牢屋の奥で震えているマリエは、先程から騒いでいる。

「待つてよ！ 私は悪くないわ。軽いノリで公衆の面前で土下座させただけよ！」

「言いたいことはそれだけか？ よし、首を出せ。せめてもの情けだ、一振りで終わらせてやる」

地下牢で俺を押さえているのは、騎士や兵士たちだった。

「落ち着いてください！」

「子爵、武器をしまつて！」

「お気持ちは分かりますから、とにかく落ち着きましょう！」

地下牢にはマリエ一人がいた。

他の連中？

処遇も決まったので、牢屋から出されて説教を受けているよ。

それよりも……こいつだけは許せない。

「情けをかけてやった俺が馬鹿だった。お前は命をもつて償え！」
つくな

「助けてくれるって言ったじゃない！」

「リビアとアンジエに土下座をさせたお前を俺が許すと思うのか？
ここで成敗してやるよ！」

騎士や兵士たちを引きずり、鉄格子に近付くと地下牢にバタバタと大勢が駆け下りてきた。

リビアとアンジエだ。

「リオンさん、待って。落ち着いて！」

「お前、いったい何を考えているんだ！」

二人に振り返った俺は、マリエを指さした。

「……こいつの首が欲しい」

俺の言葉にリビアもアンジエもドン引きしていた。

「首が欲しいって……リオンさん、そんなものをどうするんですか？」

目元を左腕で拭いながら、

「二人にプレゼントする」

「いらんわ！ それよりも落ち着け。こんなことをしてもお前のためにならないぞ」

騎士や兵士たちも同意するが、俺はマリエに愛想が尽きた。

こいつだけは俺の手で片付けなければいけない。

前世でも散々尻拭いをしてきたが、今世では介錯かいしゃくしてやるのが元兄としての務めである。

騒いでいると、慌ただしくミレーヌ様も降りてくる。

「リオン君、待ちなさい！」

その後ろには五人組がいた。

「バルトファルト、貴様血迷ったか！」

血迷っているユリウス殿下に言われても笑うしかない。

「お前ほどじゃないけどね！」

マリエが五人に泣きついた。

「みんな助けて！ こいつが私の首を斬り落とそうとするの！」

グレッグが俺の腕を掴む。

「バルトファルト、お前つて奴は！ 今日許さねーぞ！」

俺の手を掴み、刀を奪うのはクリスだった。

「マリエには指一本触れさせない！」

ジルクは牢屋の前に立ち、

「下がらない！」

ブラッドは俺の頭を掴んで、鉄格子から引き離そうとしている。

「もう処遇も決まったのに、何を騒いでいるんだよ！」

「お前らに言われたくないんだよ！ いいから放せ！ ルクシ
オン、やれえええ！」

五人に囲まれ、いつの間にか騎士や兵士たちは俺から離れていた。

『よろしいのですか？』

「さつさとやれ！ 邪魔する奴は容赦するな！」

『では、失礼して 』

ルクシオンから電氣的な何かが放たれ、俺たちは痺れてしまう。

「ぎゃああああ！」

野郎六人の叫び声が地下牢に響き、そして俺たちは倒れた。

「お、おまつ！俺まで巻き込むのか……よ」

気が付くとソファアの上に寝ていた。

近くにいるのはミレーヌ様、そしてリビアとアンジェが俺の世話をしてくれている。

目を覚ました俺に安堵し、そして呆れるのだった。

「まったく。何事かと思いましたよ」

ミレーヌ様に俺は甘えてみた。

「ミレーヌ様……俺、マリエの首が欲しいです」

困った顔をするミレーヌ様は、甘える俺に少し心が揺らいだように見えた。母性本能を刺激する作戦がうまくいった。

「ごめんね。一度処遇が決まってしまうと、覆すのも大変なの。色々と助けて貰ったのに申し訳ないけれど、聖女様は生かさないといけないのよ」

お馬鹿六人を浮島に押し込めると決定したので、俺が後から首が欲しいなどと言うのは困るらしい。

決定事項を変更するなど、簡単にはできないようだ。

俺に呆れているアンジェだが、心配している様子だった。

「急にどうした？ 自分の領地を献上してまで救いたかったんじゃないのか？」

「……二人に土下座をさせたから」

俯いて呟けば、リビアが苦笑いをする。

「あれは……その」

土下座をしたミレーヌ様も、その件について知っていたらしい。

「リオン君は知らなかったのね。私は知っていると思ったから、同じようにお願いしたのだけだね」

マリエの野郎、土下座なんて広めて何をしたかったのか？

ソファアの上で膝を抱え座る俺に、アンジェが。

「リオン、少しいいか？」

「ん？」

顔を上げると、アンジェとリビアが手を繋いでいた。

ゲームクリア

地下牢から王宮内にある部屋に移されたマリエは、不満そうな顔をしていた。

「……田舎に押し込められるとか嫌なんですけど」

「助けてやったのに、その態度は何だ？」

文句を言うマリエとこうして話をしているのは、色々と聞きたかったからだ。

両親のこと。

……俺が死んだ後のことを聞くために、こいつを生かしたようなものだ。

前世の両親が悲しむというもある。

個人的には凄く許せないし、許されるならあの五人もボコボコにしてやりたい。いや、少し待て？ 今なら殴っても許されないだろうか？

「私は都会で輝く女よ！」

「俺が丹精込めて整備した領地に文句を言うつもりか？」

「兄貴はスローライフとか後ろ向きでネガティブな思考だから駄目

なのよ」

スローライフは後ろ向きでもネガティブでもねーよ。頭おかしいんじゃないの？ いや、元からおかしい奴だったわ。

「お前の前世での善行は、親父とお袋に孫を抱かせたことだな。それ以外はマイナスで、両親が哀れだよ」

「兄貴だって親より早く死んだじゃない！」

「俺の死因はお前のせいだろうが！」

「いつも女の子が出るゲームでニヤニヤしていたじゃない！ アレくらいで死ぬなんてあり得ないわよ！」

「お前は野郎が出てくるゲームでニヤニヤしていたけどな！」

言い争っていると、次第にどっちが悪いかという話になってくる。

「兄貴が悪い！」

「お前が悪い！」

ぶかぶか浮かんでいるルクシオンが、興味なさげにこちらを見ていた。

「ルクシオン、お前からと言ってやれ。逆ハーレムなんて目指して最悪の結末を迎えそうになったのはお前のせいだって！」

「兄貴だって悪役令嬢と主人公を側に置いているじゃない！」

「俺の場合は清い付き合いだ！ お前のような爛れた関係じゃない！」

「チキンでヘタレだから手が出せないだけじゃない！」

「ルクシオン！ 早くこいつに言ってやれ。間違っていて頭の可哀想な女はお前だって！」

「その丸いの、どっちが正しいか教えてあげなさい。可哀想なこの駄目兄貴にね！」

一つ目で交互に俺たちを見るルクシオンは、

『では、私の意見を言わせていただきますね。お二人のような子供を持った……前世のご両親が一番可哀想なのではないでしょうか？』

……こいつ、それを言うのか。言ってしまうのか。

俺が急激に冷め、罪悪感が胸に広がるとマリエが小声で話しかけてくる。

「ねえ、こいつ酷くない？ 空気読めくない？」

「心に刺さるよな。冷静に言って欲しくなかったわ」

『事実ではないでしょうか？ それにマリエは、前世の娘に顔向けできるのですか？』

マリエが胸を押さえて視線を泳がせていた。

「で、でも、ここにはいないし……そ、それに、時々あつて話しはしたけど、あの子はこんなことで私を見捨てないわ」

こいつにも一応、母親としての自覚があつたのだろうか？

「一緒にご飯を食べて『母さん、ちゃんと生活できているの？』って心配してくれる優しい娘なのよ」

……顔も見えていないが、姪っ子は素晴らしい成長を遂げたらしい。

伯父として、姪っ子や両親の幸せを願うことしか出来ないのが齒がゆい。

『……母親が男六人を誑かし、逆ハーレムになっていると聞いたなら、その子もきつと泣きますよ』

膝から崩れ落ちるマリエを、俺はお腹を抱えて笑ってやった。

「ほら見る！ やっぱりお前の方が最低だよな！」

『マスターも同じですよ』

「え！？」

ルクシオンが俺の悪い点を挙げてくる。

『現在進行形でお二人の告白から逃げていますよね。いい加減に覚悟を決めたらどうです？』

……あの日。

二人に呼び出された俺は。

王宮の屋上にある庭園。

そこで俺は緊張した二人の前に立っていた。

俺まで緊張してくる。

夕焼けが綺麗だとか、そんなことを考えている余裕もなかった。

「リオン　私はお前が好きだ」

真っ直ぐ顔を見られて告白されてしまった。

……俺は息をのむ。

「いつからだろうな。殿下よりも、お前のことを考えている時間が増えた。一緒にいるのが楽しかった」

俺が口をパクパクさせていると、アンジェが凄く良い笑顔を向けてくる。

「お前が好きだ」

人生で二度目の告白。

その隣には、一度目の告白してくれたリビアがいた。

ぎこちなく首を動かしてリビアの方を見ると、こちらも笑顔だった。

……どうしよう。意味が分からない。

何で笑顔なの？

ルクシオンに救援を求めるべきだろうか？ そう思って視線で助けを求めようとすると、白い球体のルクシオンの偽物がいた。

「誰だお前！」

『クレアーレちゃんよ。お久しぶりね』

お久しぶり？ 女性的な電子音声に聞き覚えがあると思えば、エルフの里にあった遺跡を管理していた人工知能だ。

「ルクシオンはどこだ！」

『野暮だから下がって貰ったわ。貴方がこの場にいないと、マスターがきつと困るだろうから、って言ったら喜んで出て行ってくれたわよ』

……あいつの性格、捻くれすぎじゃない？

「リオンさん」

「は、はい！」

背筋を伸ばしてリビアの方に体を向けると、

「私は今でもリオンさんが大好きです。この気持ちは誰にも負けな
いと思っています」

「な、なるほど」

なるほどなんて言ってみたが、こんな状況は想定していない。

俺の人生に二人同時に告白される状況など予定になかった。

「だから、聞かせてください。ここで答えを知りたいんです」

アンジェが胸に手を当てながら、

「私とリビア……いや、私たち以外に好きな人がいてもいい。どち
らを選んでも恨みはしないし、選ばなくてもいい。だから……お前
の気持ちを聞かせてくれ」

はぐらかして逃げ出す方法を考えていたが、真剣な二人の顔を見
て俺は覚悟を決める。

そろそろ暖かくなる季節。

風が吹くと 二人の髪が揺れた。

夕日に照らされた二人は、神々しく見えてくる。

俺は両手を広げ 。

「両方好き！」

二人が笑顔で、俺の頬を平手打ちした。

凄かったよ。

平手打ちも最初にアンジェに頬を叩かれた後、すぐに反対の頬にリビアの平手打ちがくるんだ。素晴らしいコンビネーションだったね。

『最低ですね』

「ほら、可愛い子が二人揃って告白してくれるなんて、人生二度目だけとはじめてのことだったから」

言い訳をしていると、逆ハーレムなんてことをやった糞女が俺を見てドン引きしていた。

「信じられない。最低」

「何？ 六股した女が俺に何を言いたいのか？」

煽ってやると悔しそうにしていた。

そして、マリエは自分の心境を吐露^{とろ}する。

「……反省しているわよ。逆ハーレムなんて大変なだけで、全然嬉しくないわ。だから、終わりにしたかったのに」

半端な知識も今になれば納得だ。

こいつはゲームを中盤までしかプレイせず、画像や動画しか見ていなかった。俺とは元から持っている情報量が違ったのだ。

結果、聖女になって状況を引っかき回し……男六人に付きまとい
れている。

「その辺は同情するけどな」

逆ハーレムが嫌になったマリエは、カイル以外の五人との関係を
解消しようとした。

だが、五人揃って「いつか惚れさせてみせる」なんて斜め上の答
えを宣ってきたのだ。

将来的に無職が決まっているような五人を支えなければいけない
のが、今のマリエの状況である。

まったく……兄妹揃ってろくでもない。

「まあ、頑張れよ。俺は抜けさせて貰うけど」

「はあ？」

マリエが凄く驚いた顔をしているが、俺としては十分に頑張った
と思う。

「この世界で十二分に頑張ったんだぞ。ヘルトルーデさんに妹がい

るとは思わなかったし、お前が引つかき回して大変だったし」

俺は十分に頑張った。

「妹？ ヘルトラウダのこと？」

「そうだよ。他にも微妙に色々違うし、これはアレかな？ ゲー
ムの世界と考えていたら駄目なパターン？ まあ、とにかく……国
の危機を救ったんだ。俺は十分に頑張ったから、ここで抜けるわ」

そもそも、これ以上の出来事なんてあり得るのだろうか？ ゲー
ムで言うならクリアした状態だ。

主人公であるリビアは誰とも結ばれず、マリエが野郎六人をもの
にしただけ。

結果としてはバッドエンドではないが、微妙な状況なのは間違
い。

ただ……無事にクリアできたと思うしかないだろう。

マリエが目を見開く。

自分だけ納得したように何度か頷くと、

「兄貴は知らないと思うけど」

そう言って、マリエは俺が知らなかったこの世界の真実を語る。

数日後。王都にある墓地。

戦没者たちを弔^{うむい}うために、大勢が詰めかけていた。

家族を失った者。

恋人を失った者。

とにかく、嫌でも物語の裏側を見せられる。

勝って終わりではなく、始まりなのだ。

そんな光景を、俺は馬車の中から見ていた。

「ご家族には申し訳ありませんが、こうして貴方と話をしたかったのよ。若い子ではなくて残念でしょうけどね」

向かい合って座っている相手は、ミレーヌ様だった。

式典後に誘われ、こうして馬車に乗っている。

「ちょっと棘がある言い方ですね。怒っちゃいました?」

「貴方はいつもそうね。周りにはヘラヘラして見せて、問題は自分だけで抱え込む。目の下に隈ができていますよ」

目の下を指で触れる。……昨日は眠れなかった。

「今回の件、本当にご苦勞様でした。式典も残すは一つだけですね」

戦勝会やら色々と式典が行われ、忙しい日々が続いている。

「俺の解任と報酬の件でしたか？」

「そうね。臨時とはいえ、総司令官になったのですから、相応の扱いがありますね」

建前上、俺は王国から莫大な報酬を貰う。

俺の方が王国に色々と差し出しているが、世間的に報酬を貰ったと見せないと駄目なのだ。そうしないと、王国が困る。

困ってもいいが、ここから更に王国への不満が爆発して反乱やら独立やら　とにかく戦争が起きて貰っても困る。

ハッキリ言って関わりたくない。

「報酬に降格を望んだ方はじめてですよ。まあ、落ち着いたら正式に爵位を取り上げ、望む形に持って行くつもりです」

すぐには無理でも、数年後に少しずつ　という感じになる。

「子爵で四位下なんて立場は俺には重すぎますよ。領地も失いましたし、これからはただの騎士ですかね？　パートナーもアロガンツも使えない俺では役に立てないでしょうけど」

ミレーヌ様が困った顔をしている。

先程の仕返しだと言ってやると、拗ねて顔を背けられた。

なんて可愛い三十代だ。押し倒したい。

「それと、あの件ですが、問題なく認められました」

「それは良かった」

俺にとって都合のいい状況が出来つつあった。

「気になるのは貴方のロストアイテムです。修理は出来そうですか？」

「回収はしましたけど難しいですね。うちの工場に保管しています」

「……本当に、リオン君には頼ってばかりでしたね。私に出来ることがあれば何でも言うてください。出来る限り応えましょう」

一瞬。本当に一瞬だけエロい妄想をしてしまったが、相手は王妃様である。手を出してしまえば俺の首が飛ぶ。

「貸しにしておきます。その方が面白そうですから」

「大きな借りがいくつも出来てしまいましたね」

そのまま色々と話をしていると、馬車の窓から王宮が見えてくる。

さて、最後の仕事をするか。

控え室。

家族がいて騒がしく、そして慌ただしかった。

「こ、これでいいのか？」

「あんた、ボタンをかけ間違っているよ」

親父の服装の乱れを整えるお袋がいて、違う場所では兄貴が鏡の前で服装の確認をしている。

戦争に参加したことで、親父は六位“上”に昇進が決まった。

「何で俺まで出席なんだよ。親父やリオンが出るなら必要ないじゃないか」

文句を言っている兄貴を落ち着かせる。

「次期男爵だからじゃない？ 初陣が派手で良かったね」

「俺は何もしていないけどな。……それよりも、ルトアートの兄貴はどうなるんだ？ いや、兄貴じゃなかったんだけど、あっちの家族もどうなるんだ？」

ゾラたちの屋敷には、防衛戦で飛行船が落ちて何もかもなくなっ
た。

王都自体がボロボロで、しばらくは復興作業で忙しい。

ただ、鎧なんてパワードスーツがあるからか、作業自体は凄く早

い。

「逃げ出したし、ルトアートは騎士の称号も剥奪^{はくだつ}だったかな？　そもそも、ゾラって貴族の娘であって、爵位云々は持っていないから放置だよ。ルトアートは騎士でもなくなっただし、扱いとしては平民だって」

親父に捨てられた場合、ゾラは実家に戻るしかない。

その実家も今回の一件で逃げ出しており、取り潰しが決まっていた。

結構な貴族の家が消え、その中にゾラの実家もあった。それだけの話だ。

「詳しいな」

「ミレーヌ様　王妃様に聞いた」

兄貴が凄く微妙な表情をしていた。

「なんで王妃様と親しいんだよ。……ないとは思うが、手なんか出していないよな？　止めるよ。本当に止めてくれよ！　これ以上、お前に巻き込まれるのは嫌だからな！」

失敬な。俺だって手を出してはいけなさと理解している。

「それより、姉貴は？　こういう式典とか、嬉々として参加すると思っただのに」

「ジェナは実家に引きこもったぞ。親父があいつの専属使用人を斬り殺したから、わめき散らしてさ。ユメリアさんがお世話をしているよ」

……新しい奴隷を買ってやれば、すぐに部屋から出てきそうな気がするな。

ただ、学園は大きく方針を変えるらしい。

専属使用人は廃止する方向に進むようだ。

今回、黒騎士の手に渡った魔装の右腕　アレによって大きな被害が出ており、それを盗んだのが奴隷だとあって、禁止すると言っていた。

控え室にノック音が聞こえ、どうやら時間が来たらしい。

「さて、最後の仕事をしますか」

これが本当に最後だ。

謁見の間。

玉座に続く赤い絨毯じゅうたんの上で膝をついた俺は、陛下の言葉を聞いている。

この度の働き、誠に大儀である　　から始まり、芝居がかった台詞で周囲の貴族たちも褒めていた。

早く終わってくれないかな、と思っていると陛下が言う。

「リオン・フォウ・バルトファルト子爵 いや、伯爵。貴公の総司令官の任を解く。そしてこの場にて伯爵への陞爵と、三位下の階位を与える！」

周囲の貴族たちがざわめいていた。

俺は俯いたまま目を見開く。

……この馬鹿、いったい何て言った？

「へ、陛下。は、発言してもよろしいでしょうか！」

急な出来事に混乱する俺だが、発言の許可を求めると陛下は髭を触りながら俺を見下ろして、

「認めよう」

「感謝いたします！ 伯爵、そして三位下の階位とはどういうことでしょうか？ 私には伯爵家規模の領地も、階位に相応しい役職もありません！」

混乱する俺は、とりあえず「伯爵なんて無理！ 階位を貰っても何にも出来ないよ！」というのを伝えてみた。

周りだって同じだ。

聞こえてくる声の中には「あの年齢で伯爵だと」「成り上がりも極まったな」「一代で伯爵とは異例だぞ」「三位下 事実上の最高位ではないか」などと言っていた。

伯爵の爵位は置いておくとして、階位の三位下について話をするなら もはや大臣クラスだ。事実上、俺は王国で到達し得る最高の地位を手にしてしまった。

そんな階位を貰っても嬉しくないよ！

明日からお前が大臣ね、なんて学生に言っても「は？」ってなるよね？ 会社で言えば幹部だよ。責任なんか取れないし、仕事も出来ないぞ！

顔を上げると、陛下 ローランドの野郎はニヤニヤして俺を見下していた。

「これだけの功績に報いるため、王国は君に相応の爵位と階位を与えなければいけない。何、心配はいらない。君ならいずれ、爵位にあつた貢献も、階位に相応しい働きもしてくれることだろう」

高い評価をしていただきありがとう、反吐が出ます！

こいつ分かっている。

俺が嫌がると分かっていて、こんなことをしたのだ。

周囲を見れば、役人たちも混乱しているのが見えた。

ミレーヌ様も目を見開いており、何も話を聞いていなかったようだ。

……こいつ、独断で俺を昇進させやがった。

ふざけやがって。

俺が何か言おうとすれば、ローランドの奴が先に口を開く。

芝居がかった鼻につく喋りをしやがる。

「不満があるものは名乗り出るといい」

誰も名乗り出ない。

俺の昇進を嫌がる奴はいても、俺の昇進を取り消すのは困るのだから。俺が昇進しなければ、今後何か手柄を立てても昇進しにくくなると分かっているからだ。

昇進する際、俺の働きと比べられたら多くの連中が出世できなくなる。

「バルトファルト伯爵、今後の働きに期待する」

「……ありがたき幸せ」

ここで「ふざけるな!」なんて怒鳴れたら、どれだけいいか。

この場には俺の家族もいる。

俺の態度次第では、家族にだって迷惑がかかる。

親子揃って俺に迷惑をかけやがって。

ローランドの奴が笑っている姿を見て、俺は心に決めるのだ。

……いつか仕返ししてやると。

部屋に戻った俺は荒れ狂った。

「あの野郎！俺が出世したくないって言ったのに、わざと出世させて伯爵にしゃがった！」

投げたのはソファーに置かれていたクッションだ。

割れ物を投げるとか怖くて出来ない。

親父とお袋が俺を見てヒソヒソと話をしている。

「なあ、息子だけど伯爵になったリオンにはやっぱり敬語かな？」

「た、たぶん？　けど、あの子がそんなことを気にするとは思えないし」

「でも伯爵だぞ。三位下とか、雲の上の存在だぞ」

「……なら、敬語で」

俺は二人に振り向き、

「中身のない名ばかりの伯爵なんて滑稽こっけいなんだよ！　こんなの王宮のいじめじゃないか！　あと、親の敬語とか気持ち悪いから却下！」

兄貴は思い出したように言う。

「ほら、アレだ。親父が工場をリオンに返せば収入はあるぞ」

「その程度でどうにかなるなら悩まないよ！」

工場の収入はそれなりにある。

あるが……駄目だ。

伯爵というのは結構な身分だ。

工場を一つ持ったからといって、どうにかなるものではない。

親父がひらめいたらしい。

手の平に拳を落とし「そうだ！」と言って、

「いつそ宮廷貴族になったらどうだ？　ほら、王宮から年金が出るぞ。領地がなくても安心だ！」

「無理。絶対に無理！　俺の階位って大臣クラスじゃん！　大臣並の仕事なんて出来ないよ！」

「だよな。お前が大臣とか偉い人だったら、この国終わっているな

って思うわ」

素直な親父にクッションを投げつけ、俺は部屋を飛び出すのだった。

「こんな国、出て行ってやるからな！」

お袋が俺の背中に声をかけてきた。

「夕飯までには帰るのよ！」

……はい。

王宮の廊下を歩いていると声がかかった。

「おい！」

スカートを両手で少しつまみ上げ、踏まないように駆けってくるのはアンジェだ。

謁見の間に顔を出していたのか、ドレス姿だった。

おいつくと呼吸を整えていた。

見かけたので慌てて追いかけてきたのだろう。

少し頬が赤い。

「先程のアレはどういうことだ？ 知っていたのか？」

謁見の間での出来事だろう。首を力なく横に振る。

「陛下が勝手に決めたことだよ。俺だってこんな話は聞いていないし」

「まあ、確かにあの場でお前を降格には出来ない。昇進させるのが王国としても都合は良かったが……父上も知らなかったぞ」

あいつ、本当に誰にも相談せずに決めたのか？

何て迷惑な血筋だ。

ユリウス殿下といい、ローランドの野郎も最低だな。

「どうしよう？ どうしたらいいと思う？ 割と本気で伯爵になっても困るんだけど」

「そ、そうだな。地位だけあっても今のお前には実がない。宮廷貴族になっても問題が出るだろうし、ここは素直に婿入りが一番だろうな」

婿入り？

首をかしげていると、同じようにドレス姿のクラリス先輩が顔を出した。

「あら、別に婿入りしなくても、新しい家を興してもいいじゃない。宮廷貴族だけが選択肢じゃないわよ。少なくとも領主貴族の家も消

えたから、領地は余っているからね」

……王国は今回の事件でいくつもの家を取り潰した。

公国と繋がっていた家はもちろんだが、救援要請を無視した奴らは問答無用で取り潰しから領地の没収など色々と処罰が待っている。

「クラリス、何のようだ？」

「婿入りをしたら、色々と面倒よ。伯爵が婿入りなんて外聞も悪いからね」

「リオンの場合は例外だ」

二人で揉め始めたが、俺としては現状をどうにか出来れば問題ない。

「婿入りか、独立か……」

呟いていると「きゃっ」という可愛らしい声が聞こえてきて、自然と足がそちらへと向かう。争っているアンジェとクラリス先輩の二人が怖くなったから逃げたのではない。

廊下を少し進んで曲がると、そこにはドレス姿のリビアがいた。

慣れないドレスのスカートを踏みつけ倒れたようだ。

そんなリビアに手を差し伸べている男が一人。

「大丈夫かな、お嬢さん」

「は、はい」

「それはよかった。もしよかったら、その部屋で休もうじゃないか」

リビアが困ったのか視線を漂わせていたので、俺が野郎に近付く声をかけたナンパ野郎だが、俺が憎むべき相手だった。

「陛下、王宮でナンパなんて恥ずかしくないんですか？」

「馬鹿者。こんなのみんなやって　む、お前は」

俺だと気が付いたのか、振り返ると随分と楽しそうに笑っていた。

「やあ、伯爵。出世した気分はどうか？」

「最悪だよ。降格するって話はどうした？　出世させたら、これから降格するのも面倒になるから爵位は据え置き、って話だったじゃないか！」

「アレか？　ああ、考えてやった。だが、色々と面倒だね。救国の英雄にそんな扱いをしたとなると、私の器量を疑われかねない。熟慮した結果、やはり昇進させることにした」

「……ここから降格するんですね？」

「爵位が下がるようなことをすれば、な。そもそも、降格したい人間が総司令官になったら駄目だろうに」

そうしないと色々と駄目になると分かっていたからだろうが！

お前らがもつとしっかりしていれば、俺は苦勞せずに済んだのに。

「約束が違います」

「ああ、そうだな。私も心が痛むよ。だが……私はお前が嫌いだから。喜ぶことはしてやらないと決めている」

こいつ、面と向かって嫌いとか言ってきたぞ。

面食らっていると、気分を良くしたローランドは身振り手振りを加えて話すのだ。

「あの謁見の間で、私以上に目立ったのが許せない。何が、陛下がそう望まれるのなら、だ。格好いいじゃないか。そんなのは許せない。せつかくの私の見せ場だったのに。その後も私より目立つたら私の立つ瀬がない」

「え？ そんな理由？」

リビアが理解できないのか、立ち上がってオロオロとしていた。

困っている表情が可愛い。

だが、問題は目の前にいるおっさんだ。

「私の見せ場はあそこだけだったのに。私の台詞にまごつくお前をからかって、大人の余裕を見せたかった私の計画は台無しだ」

「息子をボコボコにしたとか、奥さんを口説いたとか、そういった理由じゃなくて？」

ローランドの野郎は腕を組んで俺をつま先から頭の先まで眺めている。

「お前は屑だな。だが、その程度で怒っているようでは、王宮での生活など務まらない。息子がボコボコにされたのは息子の責任だし、今更王妃を口説かれても「それで？」という気分だ。側室に手を出したら処刑していたがね」

……え？ こいつって割と屑野郎じゃない？ 俺よりも屑じゃない？

ローランドがリビアに向き直り、姿勢を正して手を差し伸べる。

「さあ、お嬢さん。一緒に一晩の思い出を作ろう」

そういえば、主人公にとって王妃様は敵だった。だが、王様は何故か物わかりが良かったのがゲームでのシナリオだ。

その理由が若い子好きのエロ親父だったとは思わなかった。

乙女ゲーなら、もっと夢を持たせる王様でいろよ！

「……ここであんたをボコボコにしたら降格かな？」

「小僧。処刑されたいようだな。いいだろう、この場で衛兵を呼んでやる！」

衛兵頼りも情けないと思っていると、

「 陛下」

ミレーヌ様が使用人たちを連れて立っていた。

ローランドが振り返ると、逃げだそうとするのでその手を掴む。

「は、放せ！」

「どこにいくんですか、陛下」

ニヤニヤして腕をがっちり掴んでやると、凄い顔をしていたので笑いそうになる。

「お、お前！ 本当に処刑するぞ！」

「ミレーヌ様！ 陛下が俺を処刑するそうですよ。助けて！」

「また若い娘を誑かして！ それに諫め^{いさ}た者を処刑するとは何事ですか！ リオン君 伯爵は王国の恩人で英雄だというのに。今日という今日は許しません」

「ち、違う！ これは王族としての務めだ！ 子を生ませるのは義務みたいなもの。若い女に手を出して何が悪い！」

「そう言っでどれだけの女性を囲っているのですか！」

ミレーヌ様がローランドを連れてどこかへ行ってしまった。

ローランドとの低レベルな争いは、俺の勝利という形で幕を引く。

「……悪は去ったな」

リビアが苦笑いをしていた。

「あ、あの、リオンさん。えっと」

「ん？ ああ、そのドレス、似合っているね」

「ありがとうございます。そ、そうじゃなくて！」

リビアが胸元に手を当てて深呼吸をした。

「この前の件です」

視線をそらすと手を握られる。

「どうしてちゃんと答えてくれないんですか？」

上目遣いで潤んだ瞳を向けてくるリビアを見て思うのは、こんな彼女や奥さんがいたら幸せだろうな　という妄想だ。

俺だって何もなければ頷きたいけど……どうして二人も俺を好きになる？

これ、どちらかを選ぶの？

俺が？

「……駄目なら駄目で構いません。でも、ちゃんと答えて欲しいです」

あとさ……この世界はゲームだって態度だった俺が、この世界で一生懸命に生きているこの子たちに好きになって貰っていいのかな？

散々馬鹿にしてやったマリエと何が違う？

だから困るんだ。

リビアがキツと表情を改め、そして少し足幅を広げて堂々と。

「ハッキリしてくれないなら、私にも考えがあります」

「な、何だと！」

「絶対に 絶対にリオンさんを振り向かせて見せます！」

なんて男前な思考だろう。

あの五人が同じことを言ったときは「こいつら馬鹿だな」って思ったが、リビアを見ていると「姉御！」って言いたくなる男らしさを感じた。

俺が女だったらコロッと転ぶね。

「だから……一緒にいてください。ずっと一緒にいてください」

態度を一変させて泣きそうなリビアに、俺は髪をかきながら答える。

「ごめん。それは無理だ」

エピソード

少し早めの春休み。

実家に戻った俺は、親父の領地に用意した工場に足を運んでいた。

目の前に見えるのは二百メートル級の一本角が特徴的な飛行船「アインホルン」だ。見た目は実に豪華だ。

「飾りが多いな」

『ホルファート王国の代表として恥ずかしくない飛行船を用意せよ。それが、王宮からの条件でしたからね』

工場では人とロボットが慌ただしく動いて作業をしている。

ロボットたちが仕事をし、雑用を人が担当している状態だ。

稼働して数ヶ月の工場なので、熟練の技師なんてそもそもいない。

数年もすれば、仕事を任せられるようになるとのことだ。

それまでは、ロボットたちが仕事を代行する。

「パルトナーは修理が終わっても出せないし、本当に面倒だな。あれ？ クレアーレはどうした？」

『あいつは王都に残してきました。オリヴィアとアンジェリカを気

に入ったそうです』

「お前よりも自由な人工知能だな」

『否定できませんね。まあ、裏切ることもありませんから大丈夫でしょう』

新しい飛行船を用意した。

理由は 留学するためだ。

「……まさか、あの乙女ゲーがシリーズ物になっているなんて誰が予想するよ」

思い出すのは、マリエとの会話だった。

王宮でマリエと話をしたあの日。

「兄貴は知らないと思うけど あ乙女ゲーはシリーズ物になったのよ」

「……え？」

あのバランスが悪く、ユーザーから不満が爆発したゲームがシリーズ物になったとマリエが言いだした。

「ヘルトラウダって三作品目に出てきたキャラクターよ」

「さ、三作品目！？　おい、待て。少し待て！」

三作品目があるということは、その間に二作品目があるという意味だ。

……そんなの聞いていない。というか、知らない。

「知らなくても当然よね。兄貴、クリアしたら死んじゃったし。その後に続編が出たのよ。三作品目は、ユリウスの弟が登場するのよ」

「あいつ弟がいたのか！」

「いるわよ。王様に側室がいて、ユリウスとは腹違いなの。だから、ちよつと影のある感じが格好いいキャラよ。アウトローっぽいの」

そんな設定聞いてないよ。

いや、少し待て！　……そう言えば、謁見の間で何度かそれっぽい子供を見たわ。てつきり、王子はユリウスだけか思っていた。

よく考えてみれば、確かに王子が一人なんて問題だ。

「そうになると、三作品目のラスボスがああな化け物だったのか？」

「そうね。天と海の守護神が三作品目のラスボスよ。ちなみに、三作品目の開始時にはユリウスたちが三年生なの。だから、色々と関われる上に、卒業後の様子も楽しめる特典付きだったわ」

そんな情報は知らない。

「そんな雰囲気なかったぞ。三年生の時に、ユリウスの弟が入学するイベントなんかゲームになかった!」

「何を言っているの? 後付け設定に決まっているじゃない」

身も蓋もない説明をありがとう。

「で、でも、その守護神? そいつらを倒したから、もう大丈夫なんだよな? 王国の危機はないよな?」

マリエはニヤリと笑みを浮かべた。

「……兄貴、二作目の舞台はホルファートじゃないわ。【アルゼル共和国】なのよ」

あれ? どこかで聞いたことがある国だな。

「ま、待て。待ってくれ! すると」

「二作目のボスは健在よ」

マリエのニヤニヤする顔を見ながら、俺は頭を抱えその場に座り込む。

「嘘だあああ!」

あつていいはずがない。この世界 あの子ゲーに続編があつて、世界の危機は終わっていないとか信じたくない。全て終わったと思っていたのに!

マリエは勝ち誇った笑みを浮かべていた。

「さて、交渉をしましょうか」

急にマリエが強気の態度になるのが腹立たしい。

俺がこれから先の知識を何も持っていないと分かると、交渉できる余地があると判断したのだろう。

「態度がでかいな」

「そんなことを言っているのかしら？ 私は兄貴が持っていないゲームの知識を持っているのよ」

「……何が望みだ」

「そうね。まずは 仕送りをお願いします！ 生活費が欲しいの！」

いきなり土下座をしてくるマリエの頼みは、仕送りだった。

「いらないだろ。お前らは浮島に押し込められるわけだし、必要な物は用意されるはずだ。というか、生きるために必要なものは揃っているからいらないだろ」

「違うの！ 少しは苦勞を知りなさい、って自給自足の生活になったの！ 必要な道具やら色々と用意はされるけど、あの五人よ？ カイルやカーラはともかく、あの五人が農業なんて出来ると思う？ 絶対に失敗するわ」

……まあ、お坊ちゃんたちだし、いきなり農業はハードルが高んだろう。

というか、カーラもお前についていくの？

「お米とかちゃんと送るから、生活費をください！ 割とガチでユリウスたちの実家も怒っているから、仕送りとか期待できないのよ！」

マリエが今後の生活を不安視している理由は、五人が「農業なんて楽だろ」みたいなノリだったからのようだ。

自給自足も悪くないと、のんきに考えているのが原因だった。

「無理。あの五人に任せていたら、絶対に失敗する。私の勘がそう告げているわ。だって、みんな前世の元彼と同じような台詞を言うのよ。甘い考えと、どうにかなるとか夢みたいなことを言っただけをしていた元彼たちと同じなのよ！」

奇遇だな。俺も同じ意見だよ。あいつらが失敗するのが目に見える。

というか、こいつは本当に駄目な男に人気だな。駄目な男がこいつに近付くのか、こいつが男を駄目にするのか……さて、どっちだ？ もしかして、駄目な男を引き寄せる電波でも出ているのかな？

マリエは割と切実に俺に頼み込んできた。

「だから、情報売るので仕送りをお願いします！」

……まあ、情報は欲しいので仕送りは認めよう。

「仕送りはしてやるから、そのアルゼル共和国について話せ」

「ありがとう、兄貴！」

マリエは仕送りが貰えると喜び、立ち上がって小躍りしていた。さっさと話せと言うと、マリエは咳払いをしてアルゼル共和国について話をした。

「アルゼル共和国は、貴族共和制の国よ。王国よりも進んでいて、平民でも通える学園があるの。そこで、攻略対象の男子たちと仲良くなるの」

ホルファート王国と同じだな。

「それでね、主人公は潰えたはずの大貴族の血を引く娘なの」

「ふん」

「最終的に、その主人公が攻略対象の男子と家を復活させるんだけど」

マリエから聞いた情報に、俺は啞然とした。

「攻略失敗で世界の危機とか止めるよ。勘弁してくれよ」

話は省くが、とにかく二作目の主人公がいい感じにならないと下

手をする让世界が滅ぶ。この世界、常に滅びそうになっている。

『マスターも苦労性ですね』

「世界の危機を放置なんて出来るか！ くそ、何も知らなければノンビリ学園で二年生として生活していたのに」

『伯爵で三位下ですからね。きっと引く手あまたですよ。聞けば、今回の一件で女子よりも男子が減ってしまったそうです。男女で立場が逆転しましたね』

男子は大勢から結婚相手を選ぶが、女子は数少ない男子から選ぶしかない。

しかも、女子は卒業しても結婚できそうな男が少ないという現実。むしろ、卒業したら結婚が難しくなるのが現状のようだ。男が少ないから仕方がないね。

そんな中、賢い女子は慌て始めていた。

『こちらに残れば、それこそマスターにとって幸せな学園生活が待っているというのに』

「俺だつて残りたいよ。けど、放置も出来ないだろうが」

問題なのは、俺たちと同じような転生者の存在だ。

存在の有無を確認してはいないが、いたとしたら マリエのよくに好き勝手にされ、挙げ句に世界が危機に陥つたらと思うと安心できない。せつかく頑張ったのに、ここで世界が滅んだら意味がな

い。

「……留学ついでに様子を見に行く。何事もなければ、ただの留学で終わるな」

『語学の方は大丈夫ですか？』

「挨拶程度は覚えただけ、会話は無理かな」

『私なら通訳が出来ますが？』

「なら最初に言えよ！ 柄にもなく猛勉強しちゃっただろうが！」

『そこは頑張りましょうよ』

騒いでいると、兄貴が迎えに来る。

「リオン、親父が呼んでいるぞ」

「親父が？」

屋敷の執務室に顔を出した俺は、親父から話を聞いて驚いた。

「婚約？」

「そうだ。婚約式があるからお前も準備をしろ」

「もしかして姉貴？」

「ジェナは駄目だ。母ちゃんが言うには、まともに家事も出来ないから嫁にも出せないってよ。今は男の方が少ないからな。ジェナを嫁がせようと思えば、準男爵家以下の家柄だな」

準男爵家以下の家に嫁ぐことになると、姉貴では色々と問題が出てくる。

家事が全く出来ないのでは話にならない。

お袋が一から再教育中である。

俺の伝というか、英雄の姉としてならどこかに滑り込めるだろう。だが、両親はそれをすると思落にならないと思ったのか、絶対に認めない。

なら、婚約するのは兄貴しかないない。

男爵家の跡取りとして、親父の仕事を手伝っているのが今の兄貴だ。

学園も卒業して、今は家の手伝いをしているので丁度いいのか？

「何で結婚じゃないの？」

「色々と事情があるからな。バタバタしていて悪いが、留学先に行く前にお前も参加して貰う」

俺を参加させたいから婚約なのか？

相手の女性がまだ学生で、学園を卒業していない可能性もある。

「別に問題ないよ」

「そうか。なら、準備をしておいてくれ」

部屋を出て階段を降りると、次女から長女に昇格したジェナがいた。

ユメリアさんに掃除の仕方を教わっている。

「お嬢様、そんなに雑に拭いたら駄目ですよ。こう、丁寧に拭かないと」

黙っている姉貴は、凄く不満そうにしていた。

「あ、駄目です！そこはこうやって」

一児の母なのに可愛いらしいユメリアさんに掃除を教わっているのに、姉貴が雑巾を投げた。

「やってられないわ！この程度、使用人にさせればいいのよ！」

「で、でも、お掃除を教えるように言われて」

未だに現実を理解していないのか、姉貴は夢ばかり見ている。

「学園に戻れば男爵家の跡取りがいるわ。そいつらと結婚すればい

いのよ。あ、リオン！ あんた、私に友達を紹介しなさい。この際、田舎の領主貴族で我慢してあげるわ」

ユメリアさんがアワアワと慌てており、俺に頭を下げてくる。

俺は「ああ、大丈夫だから」と優しい笑顔を向け、姉貴には嫌らしい笑みを向けた。

「おい、伯爵様に対していい度胸だな。因みに俺の友人たちは、既に女子から熱烈なアプローチを受けて選り抜かれた。姉貴なんて眼中にないと思うよ」

…… 本当に羨ましい限りだ。

俺は伯爵という地位が邪魔をして、近付いてくる女子が洒落にならないレベルのお嬢様たちばかりなのに。

チャホヤしてくれるので嬉しいが、手を出したらそのまま責任を取られるため迂闊に遊ぶことも許されない。

「あ、あんた、姉に向かって何て態度なのよ！」

「お前が自分の奴隷のせいで大変な目に遭うところを、俺がフォローしたのを忘れないで欲しいな」

実際、姉貴にも責任が及びそうになった。

それを金の力でどうにかしたのが俺だ。

姉貴が悔しそうに唇を噛みしめている姿を見ると 気分が晴れ

る。今日は何て清々しい日なんだ。

「え、えっと、お坊ちゃま？ 違う。伯爵様？ あ、あれ？ と、とにかく、リオン様、ジエナ様が可哀想ですよ」

ユメリアさんに癒やされる。

ゴミみたいな性格の姉妹しかいない俺にしてみれば、この人は可愛い妹みたいな感じだ。

実際は俺よりも年上で、一児の母だが。

この、ちょっと抜けている感じがいい。おまけに真面目で優しい。

この人、最高。

「ユメリアさんに言われたから許してやるけど、少しは真面目にするよ。割と真剣な話をする、このままだと嫁の貰い手がないからね」

「……が、学園に戻りさえすれば、男子なんて選び放題よ」

「現実を見なよ」

笑ってやると、姉貴が雑巾を拾って俺に投げつけてきた。ムキになつて顔を真っ赤にしているのが笑える。

華麗に避ける俺だったが、その様子をお袋が見ていた。

「ジエナ、あんたまだ分からないみたいね」

「母さん！ もう許して！！」

逃げ出すジエナを笑って見ていた。

これで少しは婚活事情も改善されるといいのだが……姉貴を見て
いると、まだ先は長い気がしてきた。

夜。

自室に横になる俺は、ダラダラとルクシオンと話をしていた。

眠くなってきたので返答もあまり意識したものではない。

「兄君が婚約ですか」

「そうだな。お祝いしないかね」

「因みにマスターはどうなのですか？ オリヴィアとアンジェリカ、
双方同じくらい好きなのですか？」

「お前は馬鹿だな。自分の気持ちなんて自分でも分かるかよ。好き
だけど……やっぱり、責任とか考えると怖い」

眠くなって欠伸をしていると、ルクシオンが勝手に結論を出す。

「つまり、どちらか選べないくらいに好きなのですね？」

「そつだよ。だから両方、って言ったら平手打ちだよ。正直に答えたのに、こんなのって酷いよな」

『どちらかと結婚する意志はあるのですか？』

「……出来たらいいね。そもそも、出来たら苦労しないよ。好きだけれどさ。好きだから幸せになって欲しいし……俺じゃ釣り合わないよ」

良い子すぎて……俺とは釣り合わないと思う。

俺のために土下座までしてくれる子たちだよ？ どうせなら、もっと良い男と結婚して幸せになるべき……。

『マスター……明日が楽しみですね』

「だな。もう寝かせてくれ。眠くて……」

目を閉じると、リビアとアンジェが笑っている顔が見えた。

翌日。

親族の集まる控え室で、俺は豪華な衣装に身を包んでいた。

「おかしくない？ 今日の主役は兄貴だろ？」

兄貴も高価なスーツを着用しているが、俺の方が目立っている。

「……ほら、お前は伯爵だからさ。俺、男爵家の跡取りだし」

「いや、駄目だろ。兄貴の方がビシッと決めた方がいいって」

弟のコリンが俺を見ている。

「リオン兄ちゃんの服凄いな！ キラキラしている」

親父が緊張した様子でドアの前に立っていた。

心なしか警戒している気がした。

部屋の中に視線を巡らせれば、お袋もソワソワしていた。

「ルクシオン、様子がおかしくないか？」

『……皆さん緊張されているのでしょうか』

まあ、兄貴の婚約式だ。

領内にある神殿に来て、これから式が行われるわけだが……それにしてもおかしい。

「相手の親族に挨拶しないの？」

兄貴は俺から視線をそらしている。

「そついう段取りだから。全部終わったら挨拶するから」

本当に慌ただしい婚約式である。

そう思って部屋で待っていると、親父が時計を見て　。

「そろそろだな。よし、いくぞ。リオンはこっちだ」

「はいはい」

婚約式とかはじめて出席する。

でも、今日の主役は兄貴だから、あとでからかってやろうとかそんなことを考えていた。

「……親父、これはどういうことだ」

「見ての通りだ」

神殿はまるで教会のような場所だ。

赤い絨毯がひかれ、その横に参列者の座る長椅子が並んでいる。

参加しているのは公爵家　ヴィンスさんをはじめとした一族。

兄貴はしれっと参列者に混じっていた。

神官が待っている奥では、純白のドレスを着用した二人の女性が待っている。

「俺を騙したのか!」

「人聞きの悪いことを言うんじゃない。俺は一度も、ニックスの婚約式とは言っていない。お前が勘違いをしたただけだ」

どう見ても、俺を待っている二人はリビアとアンジェだ。

ベールで顔は隠れているが、体つきですぐに分かった。

おまけにヴィンスさんも出席している。ここまでされると逃げ場がないじゃないか！

「こんなの聞いていないぞ！」

「……あの二人の話を聞いたら、お前がウジウジして情けないからだ。もう、留学前にハッキリさせないと、お前が向こうで何をするか分からないし」

俺だって色々と考えているんだよ！

ウジウジとか言っな。

責任を取りたくないだけだ！

親父がヴィンスさんの方を見た。

「ここで逃げたら公爵家の顔に泥を塗ることになるぞ」

「最低だな。逃げられない状況を作るなんて最低だぞ！
っと待て。ルクシオン、まさかお前は知っていたのか？」

ちょ

近くに浮かんでいるルクシオンが、何故か嬉しそうにしているように見えた。

『はい。いつまでもハッキリしないマスターは、男として情けないと思いましたのでこちらで段取りを付けました』

お前は何てことをしてくれたんだ。

俺たちが入り口で口論をしていると、ギルバートさんがやってきた。

笑顔だが、目が笑っていない。

「リオン君、アンジェたちが待っている。いつまでも待たせたらいけないよ。それとも、アンジェでは不満かな？」

ふ、不満はないです。

でも、男としてもつと遊びたかったのに！

婚約とか聞いていないよ！

親父が困った顔をして、俺の状況について話をしてきた。

「お前は知らないだろうが、色んな所から見合いの話が来ている。もう、なりふり構わない見合い話も多くて困っていたんだ。上は五十代から、下は一桁までの見合いだぞ。お前だって嫌だろ」

貴族社会は腐っているな。

上の五十代は以前にもあったが、一桁とか子供じゃないか。

無理。絶対に無理。

ギルバートさんが親父の話を補足してくれる。

「アンジェと婚約すれば、それらの煩わしさからも解放される。それに、嫌いではないのだろう？」

ルクシオンを見れば、一つ目を俺からそらしやがった。こいつ、俺の気持ちを他人にペラペラと話しやがった。

「で、でも、俺って留学しますし」

「ああ、だからその前に婚約させることにした。陛下にも相談したら、快くこの結婚を認めてくれたよ。ついでに伝言を預かっている」

一枚の紙を受け取り、広げると 俺はそのまま握りつぶした。

『ようこそ、人生の墓場へ。それから、俺はお前が嫌がることは大好きだ。結婚から逃げ回っているお前が嫌がると聞いて、全力で二人と結婚する方向へ話を持っていった。感謝しろよ b y有能な王様』

……あの野郎は絶対に許さない。

親父に背中を押される。

「さっさといけ！ あの二人はお前には勿体ないお嬢さんたちだぞ。というか、お前は本当に面倒くさい奴だな。あの二人が結婚してく

れるって言うんだ。もつと喜べよ。というか、何をウジウジ考えているんだ？ さっさと結婚しろよ。面倒なんだよ」

勿体ないから遠慮したんだろうが！

ヴィンスさんの視線が怖く、二人の下に歩いて行くと拍手がおこる。

俺の顔を見て兄貴は視線をそらし、姉貴は俺の態度を見てとてもいい笑顔で拍手をしていた。ユメリアさんなど、嬉しそうに泣きながら拍手をしてくれている。

お袋？ 泣いていたよ。「あの子にこないいお嫁さんが来るなんて」と言っていたね。心にグサグサ言葉が突き刺さるよ。……前世の両親の顔が思い浮かんでしまった。

二人の側に近付き、並ぶと小声でアンジェが話しかけてきた。

「騙し討ちをして悪かったな」

「ここまでしなくてもいいじゃないか」

リビアが少し俯きつつも、俺を責めるように、

「リオンさんがいつもはぐらかすからです」

……俺、まだ高校二年生くらいだよ。

人生を決めてしまうにはあまりにも早いように思うのは、前世の感覚が残っているからだろうか？

「……知らないぞ。愛想が尽きて、婚約なんかしなければ良かった、なんて思つかも知れないよ」

リビアが嬉しそうな声で、

「思いません」

「そ、それに、伯爵なんていつでも稼ぎもないし」

アンジェが堂々と、

「私が養ってやる。安心しろ、これでも公爵令嬢だ。独立に必要な支援は実家にも約束させた。これでもある程度の教育は受けている。お前の稼ぎがないのなら私が養うだけだ」

男前すぎてビックリ。

アンジェは、入り口を見るために振り返る。

「逃げ道はあそこだ」

「戻ったら戻ったで、待っているのは地獄だと思うけどね」

進むも地獄、戻るも地獄……なら、まだ明るい希望がある地獄に進むしかない。

「何で俺なんかに惚れるかな」

「そんなお前だから惚れた。お前が欲しい。リオン　私の夫にな

れ」

アンジェの返事に、胸がキュンキュンしてしまう。

「は、はい」

リビアが俺の側による。

「リオンさんだから、私は好きになったんです。絶対に放しません」

ちよつとヤンデレが入った台詞に、ゾクゾクしてしまう。

「もう好きにして。逃げたりしないから」

「はい！」

ボールに包まれながらも、満面の笑みを浮かべているのが分かった。まあ、そもそも二人のことは……嫌いじゃない。

好きだからね。大好きさ。

心残りには、学生としてもっと遊んでいたくらいだ。

神官が何やら祝いの言葉を述べているが、耳に入ってこなかった。

騙されたが……悪くない気分だ。

『婚約おめでとつございます』

「言いたいことはそれだけか、ポンコツ共」

『あら？ 私まで責めるなんて酷くない？ 私はあの二人の背中を押してあげただけよ。マスターなら、追い込めばいけるって』

ルクシオンもクレアーレも、共に俺を騙しやがった。

確かに婚活から逃げられたのは嬉しいが、後から聞けば色々と問題だらけだ。

「婚約しても婚活が終わらないとか聞いていないぞ」

部屋の中、浮かんでいるルクシオンとクレアーレは、互いに一つ目を向き合わせヤレヤレと横に振る。

『マスターは救国の英雄です。ガタガタになってしまった支配階級の建て直しには、必要な存在ですよ』

『その気になればハーレムだって夢じゃないわよ。やったじゃない』

「嬉しくねーよ！ 今まで男に冷たかったのに、いきなり手の平を返されても困るんだよ！ 逆に怖えよ！ 裏があると思えないよ！」

『安心してください。そこまで急激に状況は変わりません。女性の意識改革がまだですし、バランスが取れるようになるには五年から十年は必要です。まあ、本格的に意識が変わるのは二十年ほどの時間がかかるかと』

そちらも嬉しくない情報だ。

今まで通り、上から目線の女子たちが多いということか？

本当にこの世界は男に厳しい。

「婚約してもすぐに留学だ。結婚してすぐに単身赴任する気分だよ」

クレアーレが笑っている。

『こつちには私が残るから安心していいわよ』

遺跡では真面目そうだったのに、球体ボディを貰ってから少し性格が軽くなっている気がする。

その丸い体に原因があるのか？

部屋にノック音が聞こえてきたので、返事をする。

「開いているよ」

「失礼します」

そこには、枕を持った寝間着姿のリビアと。

「なんだ、妻を迎える準備をしてないじゃないか」

アンジエが立っていた。

「きいやあああー！」

「何故お前が叫ぶ？」

ベッドに腰掛けていた俺は、驚きのあまり飛び跳ねてしまった。

「だ、だって。もう夜で、それに二人が寝間着で」

その寝間着がいかにも　誘っているようにしか見えないネグリ
ジェである。

「リオンさん、すぐに留学で旅立っちゃいますし、その前にその…
…ちゃんと」

その先を言わないでくれ。

俺だって男だ。

やりたいし、遊びたいが、責任云々が絡んでくると色々と考えて
しまうのだ。

「だ、駄目だ！」

俺のそんな意見に、アンジェは首をかしげていた。

「何故だ？」

やだ、価値観が違いすぎる。

「待つて欲しい。心の準備が出来ていないんだ」

「お前は何を言っているんだ？ リビアは話がしたいと言っているんだが？」

あ、そっち。そっちかぁ……。

「話？」

「えっと、色々とお話がしたくて。今まで、何かと忙しくてゆっくり話をする時間ありませんでしたから」

駄目ですか？ なんて頼み込んでくるリビアが可愛くて、俺は何度も頷いて「大丈夫」と言うしかなかった。

ちょっと残念に思ったのは内緒だ。

「お前、何を考えていた？」

アンジェが意地悪い笑みを浮かべて俺を見てくるので、視線をそらしておく。

「愛について考えていました」

「ほう、愛か。それはいい。是非ともお前の愛についても話を聞いておきたい」

……愛って何だろうね。俺にも答えが出ないよ。

いつの間にか、ルクシオンもクレアーレも姿を消して隠れている。

あいつら、本当に頼りにならない。

二人が俺の横に座るが、肌が触れあう距離だった……。

結局、その日は夜遅くまで話することになった。

出発の日。

王都上空に浮かぶ浮島。

そこは港になっており、留学に向けて出発する俺を見送りに来る人たちが詰めかけていた。

ダニエルやレイモンドは、友人として俺の留学を喜んでくれている。

「リオンも残念だよな。せつかく、女子からも誘いが増えたのに」

「まさか男子の方が誘われる側になるとは思わなかったよね。リオンは残っていれば、きっと大人気だったよ」

友人たちのニヤニヤした顔が最高に腹立たしかった。

俺だって、婚活事情が改善した学園なら戻っても良かった。

学園生活を楽しみたかったさ。

「……お前ら、戻ってきたら覚えておけよ」

「やっぱりリオンはこういう奴だよな」

「逆に普段通りで安心したよ。伯爵様だぞ、頭が高い！　くらい言うかと思ったのに」

お前ら、いったいどんな風に関のことを見ているの？

二人と話をしていたら、クラリス先輩が近付いてくる。

「留学なんて本当に残念よね」

「クラリス先輩」

「あと、婚約おめでとう」

ニコニコしているクラリス先輩が、いったい何を考えているのか分からない。彼女の取り巻きたちを見れば、俺を睨んでいる。

婚約したことを怒っているのだろうか？

人生始まって以来のモテ期だったが、こつも複数の女性から言い寄られる経験は二度とやってこないだろう。

何とも言えない雰囲気を感じたのか、ダニエルもレイモンドも俺から離れて口を閉じる。

そこに救世主のようにやって来たのは　師匠だ。

その立ち姿が眩しく見えた。

「師匠！」

「ミスタリオン、出発するんですね」

「はい！」

師匠、実は今年度から学園長になることが決まっていた。

学園も大きな方針転換を行うことになり、相応の人物を置くことが決まったのだ。

その人物こそ師匠だ。

「外国を見てくるのもいい経験です。しっかり、学んでくるのですよ」

実はアルゼル共和国の様子を見に行くだけなのだが。

「お茶は向こうでも続けますよ」

「大変よろしい。ですが、紳士として　いえ、人としての成長も期待します。戻ってきたとき、一回り大きくなったミスタリオンを楽しみにしていますよ」

師匠　俺、師匠みたいな紳士を目指します！

ルクシオンが時間を知らせてきた。

『マスター、出航の時間です』

「ああ、行こうか」

アインホルンに乗り込む。

クレアーレは、学園でリビアとアンジェの側にいた。

『見送りはしなくてよかったのかしら？』

アンジェは紅茶を飲みながら、

「人のいる場所で泣いたら、あいつの迷惑になる」

リビアも同じだ。

「それに、出発前にお別れは済ませましたから」

クレアーレはそんな二人をからかう。

『健気よね。マスターはいい婚約者がいてよかったわね』

カップを置いたアンジェは、視線を空のカップに落としていた。

「それにな。私たちは私たちでする事がある」

リビアも小さく頷くのを見て、クレアーレが問う。

『何か予定があったかしら？』

「リオンの助けになりたいんです。そのために、いっぱい勉強して、頼りになる存在になります」

アンジエも同じだった。

「急に留学すると言い出したのも怪しい話だ。リオンの奴は、日頃から海外は嫌だと言っていた男だぞ。それが急に留学すると言ったんだ。何かあると思うだろ？」

クレアーレが納得する。

『まあ、そうね。マスターなりに考えがあるんじゃない？』

「私たちまで留学するのは状況的に難しかったが……少し腹も立つ。私たちはそんなに頼りないのか、とな」

『うーん、それとこれとは話が違うんじゃない？』

リビアも納得しているようだ。

「分かっています。でも、今度は私たちが頼りにされたいんです。リオさんの助けになるためには、もっと色々勉強しないといけませんから。帰ってくるリオさんを驚かせたいじゃないですか」

クレアーレの一つ目は、テーブルの上にある書籍に向かう。リビアなら魔法関係の書物を。アンジエなら領地経営に関する書物が置かれていた。

『……条件次第だけど、私に頼んでくれれば連絡は取れるわよ。伝言程度ならすぐにでも。通信は少し難しいかもね。まあ、あのひね

くれ者に何とかして貰いましょう。それまで我慢して」

アンジエは微笑む。

「その時は頼む」

リビアは窓の外を見上げる。

「リオンさん、今頃は飛行船の中ですかね」

アインホルンの自室。

俺はベッドに横になり　　。

「ちくしょう！ ノリでいい感じに出発したけど、外国なんか行きたくないよおお！」

バタバタと駄々をこねる子供のように振る舞っていた。

元々旅行はしても国内で十分という考えの持ち主だ。

何が悲しくて外国になど行かないといけないのか。

『諦めが悪いですね』

「文句を言うくらい許されるはずだ！　どうして俺が外国で他人の恋路を見守らないといけないんだ」

新たな主人公の恋が成功しないと世界が危ない。

こんな理不尽なことがあっていいのだろうか？

『それはそうと、出てきたらどうですか？』

ガタガタと揺れる部屋にある箱。

いかにも怪しいその箱が気になっていた。

「何これ？」

『王宮から送りつけられた品です』

「ああ、そう言えば俺の留学ついでにアルゼル共和国向けのお土産を持たされたな」

『国同士の贈答品をお土産呼ばわりとは流石です。因みに、こちらはマスター宛のものです』

箱を開けると、そこにはマリエが体育座りをしていた。

まるでホラー映画を見ている気分になったよ。

再び閉めると、マリエが飛び出してくる。

「何で閉じるのよ--」

「怖いんだよ！ 普通に冷や汗が出てきたぞ」

何でこいつがここにいいのか？

ルクシオンを見ると、最初から知っていた様子だった。

『マリエから聞いた方がいいですよ』

マリエを見れば、指先を胸の前で突き合わせながら恥ずかしそうにしている。

「じ、実は　貰った仕送りを使い切ったの」

「……は？」

「私じゃないの！ 私じゃなくて！ ……あの五人が」

リオンから献上された浮島は、王国が管理する土地の上空へと移動させられた。

春からそこで暮らすことになったマリエたちだが、いきなり問題が発生する。

「　何これ？」

リオンが自分のために用意した屋敷の前に、シートをかぶせた何かがあった。

ユリウスが笑顔でシートを剥ぎ取る。

「マリエのために用意した。喜んでくれると思ってね」

そこにあつたのは石像で、マリエがまるで女神のような姿になっていた。

（……な、何これ！ 本当に何これ！）

ジルクが神々しいものを見るように、マリエの像に視線を向けていた。

「若手でも名のある職人に作らせました」

ブラッドも出来映えに納得していた。

「すぐに胸を大きくしようとするから、訂正させるのに苦労したよ」
見れば、胸はマリエと同じくらいに平たい。

（わ、私の胸はもっと大きいわよ！ というか、削りすぎじゃない？ 違う。そうじゃない。大事なことを確認しないと）

「こ、これ、いったい誰が用意したの？」

グレッグがサムズアップしながら、

「みんなの金で用意した。沢山あつたからな。まあ、腕のいい職人に頼むには、少しばかり足りないからこの島にある物売り払って金にしたけどさ」

大事な農機具やら、リオンから送られた食糧やら……五人が売り

払ってしまったのだ。

頼めばすぐに送ってくると思っているらしい。

（ま、まさか、このために私たちより先に兄貴の浮島に入ったの？
嘘でしょうおお！！）

そもそも、マリエが土下座して手に入れたのを五人は知らなかった。

クリスも悪びれた様子がない。

「毎月振り込まれるのなら、これくらい安いものだからな。もう少しあれば、もっと大きなものを用意できたんだが。それにしても、実家からの仕送りが少くないか？ 何もない島だから、色々を用意したいのだが……」

マリエの像を飾った噴水を用意しようとしていた五人。

金は自分たちの実家が振り込んでいると思っていたようだ。

「みんなの実家から仕送りなんてないわよ！」

五人がその事実に驚いていた。

カイルはそんな五人にドン引きしている。

「あれだけのことをして怒らせたのに、毎月振り込まれるわけがないでしょう。あれ、一年分の生活費ですよ」

マリエの荷物を持っていたカーラも啞然としていた。

「あ、あのお金、全部使ったんですか!？」

ユリウスは首をかしげて不思議そうな顔をしていた。

「そうなのか？　なら、王宮に連絡して追加で予算を申請しよう」

五人の認識にマリエは目の前が暗くなった。

（こいつらどうして……お金持ちじゃなかったら、ただの疫病神じゃない）

マリエは頭を抱えてその場に膝をついてしまった。スカートが汚れるとか、そんなことを気にしている余裕がなかったのだ。

（あ、あり得ない。兄貴に頼んで、やっと手に入れた仕送りなのに！）

物資の他に現金も送って貰ったのは、定期的に商船がやってくるからだ。元は、自分たちで作った作物を売買して、お金を得る大切さを教えるための処置だ。

そんなことが一年目から出来るとは思えなかったために、マリエはリオンを頼ったのだ。

「そんな申請が出来たら苦労しないのよおお！」

泣き叫んでしまうマリエに、カイルとカーラが駆け寄って慰めるのだった。

マリエは青い顔をして俯いている。

「私は何も悪くないのに、王妃様に説教されたのよ」

「お、おう」

王宮に呼び出され、いきなり生活が出来ないレベルになったマリエたちをミレーヌ様が説教したらしい。

そもそも金銭感覚がこの短い期間で変わるとは思えない。十数年もお坊ちゃんて育ってきたのに、いきなり貧しい生活は無理がある。

「そしたら、いきなり放り出したのは間違いだって　だから、少し勉強してきなさい、って。兄貴がいるならそれもいいかな、って」

それが留学ということ？

……え？　俺がこいつらの面倒を見るの？　この疫病神たちの面倒を！？

「おい、他の連中は？」

「倉庫にいるわよ。あと、これ」

マリエは持っていた複数の手紙を俺に渡してくる。

最初に乱暴に開いたのはローランドの物だった。

『面倒事をうまく処理するように』

すぐに破り捨ててやった。

次は王妃様からの手紙だ。丁寧に開封すると、

『ユリウスたちの事をお願いします。実は 』

どうやら、マリエたちのことが許せない勢力がいるらしい。暗殺の件もあるので、国外に一時的に避難させたいようだ。

というか、ユリウス殿下 もうユリウスでいいや。

ユリウスが王位継承権をほぼ失い、挙げ句に公国との戦争でボロボロになった王宮はとにかく忙しい。

建て直しに忙しく、ユリウスたちに構ってられないのが本音のようだ。

……あのまま国に残れば、俺は嫌でも関わることになったかも知れない。

そう思うと、留学はあrika？

ミレーヌ様の手紙には、俺の身を案じている内容もあつて泣けてくる。ローランドの野郎は許さないが、あの人は幸せになって欲しい。

「あれ？ もう一枚は 』

「それ、ヘルトルーデからよ」

甲板に出て手紙を読んだ。

手紙の内容は、簡単な挨拶が書かれている。

黒騎士を殺した俺への恨み言が書かれているかと思っただが、そんな一文はどこにもない。

ただ。

『もしも貴方を私が入れていたら、公国はまだマシだったのかも知れないわね』

そんなことが書かれていた。

彼女に待っているのは、これから辛い人生だ。王宮が彼女を生かしたのは、ファンオース公爵家を統治するためにその方が便利だから。彼女を処刑して誰かを送るよりも、ユリウスのような王族を送りつけ子供を生ませる。そうすれば、家臣たちの反発も少ない。

『本気で取り込めばよかったわ』

そんな一文を見て、俺にみんな期待しすぎだと思った。

俺はルクシオンを手に入れただけの凡人である。

その力も使いこなせていない。

側に浮かんでいるルクシオンに俺は疑問を投げかけた。

「お前は、もつと有能な主人に仕えたいと思わないのか？」

『有能でも新人類の末裔は嫌です。そもそも、マスターに有能さを期待していません』

「お前は本当に嫌な奴だよ」

甲板の上に座り込む。

「外国か。どんなところかな」

今から向かうアルゼル共和国へもあまり期待が持てない。

何しろ、あの乙女ゲーの続編である。

…… 本当に勘弁して欲しい。

幕間 ルクシオンレポート その3

「いいかお前ら！ 今日からお前らの雇用主は俺だ！」

留学先を目指すアインホルン。その甲板の上でデッキブラシを持った八人を前に、リオンは大声を張り上げている。

その様子をルクシオンは影ながら見守っていた。

リオンに対して不満を持っているのは、ジルクである。

「殿下を雇うなどどういっつもりですか！ 伯爵になったからと浮かれていませんか？」

「黙れ、腹黒！ お前らの扱いについては厳しくするように王妃様から言われている。この際、こき使っても構わないと仰せだ」

リオンが王妃であるミレーヌからの手紙をユリウスたちに見せると、ブラッドが激しく抗議するのだった。

「ちょっと待て！ こんな聞いていないぞ。僕たちは、海外留学をして世間を学べと言われただけだ」

そんな意見をリオンは鼻で笑っている。

「金もないお前たちが、向こうでどうやって生活するつもりだ？ 働かない奴に食事も給料も出さねーから覚えておけ！ ほら、さっさと甲板掃除を始めろ！」

文句を言いながらも掃除を始める五人。

マリエにカイル　そしてカーラは、安堵した表情をしていた。

「やった。これで明日からのご飯を心配しなくて済むわ」

「良かったですね、ご主人様」

「マリエ様、今日からは毎日昼食も食べられそうですね」

カーラの嬉しそうな声に、リオンが左手で目を隠していた。

根は優しいリオンにしてみれば、お昼ご飯を食べられないマリエたちに同情するなというのが無理な話だ。

マリエがこれまで、何をしてきたのか考えれば甘すぎる処置である。

ルクシオンの一つ目が、五人に向かう。

ユリウスは腹立たしいのか文句を言い続けていた。

「朝から夕方まで働かされて、貰える金額は二百ディアだと。ふざけているのか」

二百ディア。

円換算すれば、二万円程度の金額だ。

『マスターも甘いですね』

「こんなことが許されるのか？ 二百ディアでいったい何ができる。このような扱い、認めるわけにはいかない」

冒険者としてダンジョンに挑めば、もつと稼げるというのもユリウスたちの意識改革の邪魔をしている。

「黙れ、高等遊民！ その使えなくなった価値観をさっさと切り替える！」

不満を口にするユリウスを、リオンは後ろから蹴り飛ばした。

甲板の上に転がるユリウスに近付くのはジルクだ。

「殿下！ バルトファルト伯爵、これではあまりにも殿下が不憫です！」

そんなジルクの発言を無視するリオンは、甲板を見ている。

「同じ所をただブラシでこすっているだけじゃないか！ お前ら、ちゃんと掃除をする気があるのか？ ここが終わったら、次は船内の掃除だからな。便所掃除もさせるから覚悟しておけよ」

クリスが奥歯を噛みしめていた。

「このような不当な扱いが認められるというのか」

ユリウスたちからすれば、このような扱いは許せないようだ。

しかし、雇用条件をルクシオンが確認する。

『朝八時から、夕方五時までの勤務時間。休憩はトータル二時間……七時間労働で、この報酬は高すぎますね』

衣食住はリオンが世話をしている。彼らは、食事にも、寝る場所にも、着る物にも困らない。王国から必要経費として金は出ているが、八人の世話をしているのはリオンの方だ。

ルクシオンからしてみると、この扱いは不当だ。

もつと厳しくてもいいと思っていた。

グレッグがデッキブラシを構え、リオンの前に立った。

「バルトファルト、正々堂々と勝負しろ。俺たちが勝ったら、この不当な扱いを改めて貰う！」

リオンは両手で顔を覆ってとても悲しんでいた。

「お前ら本当に何なの？ 本気で言っているなら笑えないんだけど。頼むから冗談だと言ってくれよ」

グレッグはデッキブラシを器用に振り回し、

「俺たちは本気だ！」

他の四人もデッキブラシを構えたのを見ていたのは、光が消えた目をしているマリエだった。

ブツブツと……。

「それくらい働いてよ。どうせ船の中じゃ暇じゃない。掃除くらいしてよ。お願いだから働いてよ。自分のお小遣いくらい自分で稼いでよ」

何かを思い出したのか、ガタガタと震え始めていた。

デッキブラシを構えた五人を前にして、リオンは首を横に振っていた。

「お前ら昼食のデザートはなしでいいな」

「な、何故だ！」

狼狽えるユリウスに対して、リオンはヘラヘラ笑っていた。

「雇用主様に逆らうからだ。もっと抵抗してもいいんだぞ。このままダラダラ仕事をさぼるなら、一時間残業させてもいいんだぞ。それとも、明日からの朝食にはお前らの嫌いなものを並べるか？」

クリスがデッキブラシの構えを解く。

「卑怯だぞ、バルトファルト！」

「卑怯で結構。でも、お前らみたいな労働者を雇っているだけで、俺は十分に心優しいと思うけどね」

全員から離れた場所で見守っているルクシオンは、五人について。
。

『今までの生活とは違いますし、そう簡単に適應できないのでしょ

うか？ 価値観の違いはどうしようもありませんね。現状を正しく理解していない』

厳しい判断を下すも、その理由について心当たりもある。

これまでは、廃嫡されてもその生まれや容姿から周囲にチヤホヤされていた。マリエが生活を支えていたこともあり、自分たちの状況が理解できていないのだ。

そのため、これから先もどうにかなると考えているのだろう。

『そう思うと、マリエはマスターと同じですね』

マリエは駄目男製造機だとの判断を下す。

同時にリオンとよく似ているとも思った。

五人が悔しそうにしている中、カイルは掃除道具を持って他の場所へと掃除に向かうのだった。

「ご主人様、僕はこっちを先に掃除しますね」

「お願いね。カイルとカーラだけが頼りよ」

マリエに頼りにされたカーラが、目を輝かせて感動していた。

「はい、マリエ様！」

ルクシオンは思ってしまう。

『……それにしても、どうしてこの面子で海外留学に向かっているのでしょうか?』

どう考えても、最初は敵同士だった面子だ。

リビアとアンジェがいるならまだしも、この八人の顔ぶれはルクシオンには意外だった。

五人を監視しているリオンを見つつ、ルクシオンは呟く。

『楽しい留学になるといいですね、マスター』

幕間 ルクシオンレポート その3（後書き）

第三章はいかがだったでしょうか？

楽しんでいただけたら幸いです。

今月の三十日には【乙女ゲー世界はモブに厳しい世界です 一巻】が発売となります。予約も開始しているので利用していただければ嬉しく思います。

細かい報告は活動報告にて行つ予定です。

明日の月曜日には色々と報告できそうです。

第四章の予定は未定ですが、出来れば三ヶ月以内には更新できればと思います。

それでは、読んでいただきありがとうございました。

これからも応援よろしくお願いいたします。

【幕間】 クレアーレレポート その1（前書き）

発売日も近付いたので更新してみました。

乙女ゲー世界はモブに厳しい世界ですは、【5月30日】発売です！

予約も開始しているので是非とも利用していただけたらと思います。

【幕間】 クレアーレレポート その1

学園は随分と慌ただしかった。

貴族たちが大量に肅清じふくせいされてしまったのが原因だ。

公国との戦争に理由もなく参加を拒否した貴族たちは、問答無用で改易となった。

色々と理由を付けて参加をしなかった貴族も同じだ。

領地や財産を召し上げ、その後に領地替えと称してうまみのない土地を与える。

『まさに中央集権を目指したい王国らしいわね』

クレアーレの感心した様子に難しい表情をするのはアンジェだった。

「皮肉か？」

『私はルクシオンのひねくれ者と違って素直に褒めているわよ。気になるのは反乱や復讐かしら？』

貴族の地位を追われた者。

爵位を取り上げられた者。

地位が下がった者。

王国内には不満を持つ者たちが大勢いた。

「……そうだな。気をつけるとしよう」

アンジェの言葉に、クレアーレは表情をよく観察する。

『恨まれていると分かっている顔ね』

「これでも貴族の娘だ。生きているだけで恨まれると知っている。だが、今回ばかりは私個人を恨む者たちも増えた」

『逆恨みだと思っけどね』

肅正された中には、アンジェを裏切った取り巻きたちもいた。

実家が貴族ではなくなり、ただの平民になってしまった貴族だった学生たち。

アンジェの土下座を見て笑っていた生徒たちは、春からは学園で姿を見ていない。

在校生も随分と減ってしまった。

新人生はもっと少なく、学園内は少し寂しい雰囲気にも包まれている。

「そうだな。だが、何をするか分からない。リビアにも気をつけるように言っているが、少し心配だな」

アンジエはともかく、リビアは人に恨まれることになっているとは思えなかった。

『そちらは私が何とかするわよ。それよりも、今日は二人とも別行動ね』

「新入生の集まりに私が交ざっても困るだろう？」

リビアが交流している新入生とは、同じ平民出身の生徒たちだ。

数名が入学しており、リビアが面倒を見ている。

来年度はもっと一般生徒を増やす方針のようだ。

『確かに周りが困るわね』

「お前もハツキリ言う奴だな」

アンジエが読書を再開するのを見て、クレアーレは思考する。

（反抗的な勢力を中央から遠ざけ、貴族ではない生徒たちを学園に受け入れ教育する　十年二十年もすれば、そんな彼らが下級役人の仕事をするようになるわね）

混乱するホルファート王国だが、それでも国を維持している。

王宮は随分と慌ただしいようで、アンジエの父親であるヴィンスも王宮で仕事をして領地に帰っていないかった。

（ちょっと気になるわね。 そうだ、王宮を覗いてみましょう。 マスターが、あのローランドの弱みを握れと言っていたし）

嫌がらせをするためにローランドの弱みを握ろうとするリオンは、クレアーレから見ても小物過ぎる。

だが、旧人類の遺伝子を受け継ぐ大事なマスターだ。

そんなリオンの願いに応えるべく、クレアーレは王宮に忍び込むことにした。

『ちよつと出かけてくるわ』

「そうか」

アンジェの部屋から出て行くクレアーレは、その姿を周囲に溶け込ませ消えると王宮へと飛んだ。

王宮内はとても忙しそうだった。

役人たちは目の下に隈を作り、青い顔をして働いていた。

書類整理だけでも山のように存在し、おまけに処分に納得できない貴族たちが毎日のように押しかけてくる。

軍も抵抗する貴族たちへの対処で動き回り、おまけに王都の復興でも忙しい。

『確かにこんな状態では、マリエたちを守るのも難しそうですね』

王妃であるミレーヌの部屋を覗けば、机に向かっている本人の姿があった。

周囲には侍女たちがいて、書類の仕分けを行っている。

クラリスの父であるバーナードが、新たに緊急の書類を持って来た。

書類の束を見るミレーヌは、驚いた様子もない。

「王妃様、こちらのご確認を先にお問い合わせいたします」

「何かあったのかしら？」

「領地の召し上げに反対する貴族たちが決起を行いました」

日和見をしていた貴族たちが、王国の対応に腹を立て決起した。

その話を聞いてもミレーヌは慌てない。

「すぐに待機させている軍を派遣しなさい」

書類を確認しつつ、待機させていた飛行船の艦隊を出撃させるように命令する。

「彼らの処遇は？」

「降伏するのなら領地替えて許しましょう」

クレアーレはワクワクしていた。

（あら？ 荒れ果てた領地に逆らった連中を押し込めて開拓させるのかしら？ うまくいけば、将来的には取り上げそうね）

「降伏しない場合は？」

「……綺麗に処理しなさい。見せしめになって貰います。今後決起する愚か者を出さないようにしないとね」

思っていた以上に淡々としているミレーヌを見て、クレアーレは気になった。

（一発逆転があるから気が抜けないというところかしらね。見えないうちで頑張っているのは確か……あら？ 王様はどこで何をしているのかしら？）

フワフワと浮かびながら、部屋を出て行くバーナードについていき部屋を出て行く。

ローランドは慌ただしい王宮で、女性とのお茶を楽しんでいた。

「陛下ったら嘔吐き」

「んー、陛下は嘔つかないぞ。私は凄いいんだぞ。あの糞ガキ　じやなかった、救国の英雄リオンすら、私には逆らわないんだぞ」

「本当ですか？」

間延びした媚びた声で話をする女性と、手を取り合って笑顔で話をしている。

ミレーヌとは違い、周囲にいる護衛たちは護衛としての仕事を果たしている。

「本当だとも。私が本気を出せば、あんな小僧は一ひねりだ。私が王という立場でなければ、今頃は私が英雄で」

「ほう、面白い話ですな」

女性を口説いているローランドの部屋に入ってきたのは、少しやつれているヴィンスだった。

「陛下と話がある。お嬢さん、すまないが席を外してはいただけないかな？」

父親の着替えなどを持って来た貴族の娘は、ヴィンスが来ると慌てて立ち上がって頭を下げ部屋を出て行く。

ローランドが名残惜しそうに手を伸ばしていた。

「ああ、待つて！……ヴィンス、酷いじゃないか。頭の緩そうな可愛い娘だったのに」

「頭が緩いのは陛下ではありませんかな？」

ヴィンスが乱暴に椅子に座ると、陛下を睨み付けていた。

「随分と楽しそうですね、陛下」

「そう見えるか？ これでも国のことを憂いているのだ。私に出来るのは、世継ぎを残すことだけ。そのために邁進している」

「腰を振らずに手を動かして欲しいものですな」

「ミレーヌに任せている。それに、仕事は出来る者に任せるべきだ。その方が効率的だ。優秀な家臣がいて私は幸せだな」

まるで女性を口説くのが仕事と言っているような態度だった。

たとえるのなら、

『働かずに食う飯はうまいか？』

『お前たちが必死に働くのを見ながら食う飯は最高だ！』

みたいな会話に聞こえてくる。

ヴィンスが額に青筋を浮かべながら笑みを浮かべていた。

クレアーレは器用だと思ってしまった。

「それはよかった。優秀と言っていただけで嬉しい限りです。では、一つ聞かせていただきたい。娘の婚約者を昇進させた件です」

クレアーレは興奮する。

（あら、マスターの昇進理由が聞けるチャンスね。大体予想は出来るけど、真相は何だったのかしら？）

公国との戦争で、総司令官をしたりオンを昇進させない方が不自然だ。

だが、本人の希望もあって、別な形で報酬を用意するという話が決まっていた。

「あの件か？ 前にも言ったが、昇進させた方が自然だから」

「本人の希望を無視して、ですか？」

「国王として国を優先したにすぎんよ。それに、どこかの公爵が有望な若者を取り込もうと必死だったからな。邪魔をしたかった」

「娘が既に婚約しております。下手な手出しは無用に願いたいですな」

「バーナードは最後に賛成してくれたけどね」

「娘の結婚を餌に丸め込んだというわけですか」

「娘のことを思う父親の気持ちを分かっちゃったらどうだ？ 私も“可愛い娘”を持つ父親として、バーナードの気持ちもよく理解できる」

「ぬけぬけとよくも」

既にリオンを奪い合って何やら動き出している。

（昼ドラみたい。ちょっとワクワクするわね）

これからのことを想像し、クレアーレはリオンの周囲はしばらく騒がしくなるだろうと予想するのだった。

そして、

（“可愛い娘”ね……これは調べてみる価値がありそうね）

ローランドの弱みも見つけてしまった。

【幕間】 クレアーレレポート その1（後書き）

作者のページに飛んで貰えば、活動報告が見られます。

そちらにて“書影やラフ”を公開しているので、書籍版のイラストが気になる方は是非とも見ていただければと思います。

それでは、今後とも応援の方をよろしくお願いいたします。

【幕間】婚約の裏側（前書き）

発売記念ということで幕間を書いてみました。

次々に届く購入報告や感想、大変嬉しく思います。

ありがとうございます！

店舗特典も喜んで貰えたようで嬉しい限りです。

これからも応援よろしくお願いいたします。

【幕間】婚約の裏側

リオン・フォウ・バルトファルトという人物を他から見たらどうなるか？

答えは簡単だ。

「あいつ本当に面倒くさい」

そう口にするのは、リオンの父であるバルカスだった。

それは三学期が戦争後の復興で急遽春休みに入った頃だ。

本土で色々と片付けてようやく領地に戻ってきたバルカスだったが、息子　三男、ではなく次男に繰り上がったリオンの事で頭を悩ませていた。

この度めでたく、男爵夫人になったリオンの母であるリユースも困り果てている。

「いいところのお姫様に告白されて、断るならまだしも有耶無耶にして態度をハッキリしないのは何でかしら？」

バルカスやリユースから見れば、公爵家など雲の上の存在だ。

公爵令嬢は二人から見ればお姫様と同じである。

そんなお姫様であるアンジェと、気立てのいい娘であるリビアに

告白されたのに、リオンは態度をハッキリさせなかった。

本人に問い詰めても、

「まだ早いつて言うか」

「というか、公爵家と釣り合わないし」

「え？ 何で俺が悪いの？」

みたいな返答を繰り返してくるので、二人とも苛々していた。

ただ、リオンの言うことも正しかった。

公爵令嬢のアンジェと結婚するとなれば、バルカスのバルトファルト家も関係が出来てしまう。

色々としがらみが増えることを意味する。

それを気にしているようにも……見えなくもなかった。

「あの馬鹿は変なところで気を使うから」

口がよく回り、言い訳を思い付くのもうまい。

リユースはどちらかと言えば、リビアの心情も気になっている。

「リオンが言うことも分かるのよ。どちらか一方を選んだら角が立つ、っていうのも間違いじゃないわ。けど、真剣に告白した相手に「両方好き」はさすがに……」

バルカスが溜息混じりに、

「俺たちのことなんか気にしなくてもいいのにな。それこそ、あいつが望む結婚相手だろうに」

アンジエもリビアも、婚活に必死だったバルカスからすれば優良物件だ。

伯爵という地位を得てしまったリオンなら、アンジエを正妻にリビアを側室にも出来る。

それが正解に近い対応だろう。

女尊男卑の世界で一夫多妻がおかしいと思われるかも知れないが、戦争があれば貴族出身の男性が沢山死ぬ。

跡取りや、色んな問題から子供は沢山欲しいのがこの世界だ。

だが、子供を産むのもリスクがある。

貴族の女性はそんなリスクを何度も背負いたくない。

故に妥協として妾が認められている。

その場合、正妻よりは格下の女性が選ばれる。

準男爵家以下の家系から選ばれることが一般的である。

だが、学園女子の多くは側室コースを選ばない。

もつと格下の、陪臣騎士とされる家柄の娘たちが選ばれる。

リユースの実家も、バルトファルト家の家臣 騎士の家柄だ。

そのため、学園に通う義務がない。

リユースも他にも兄弟や姉妹がいたため、学園に入学する余裕がなかった。学園の事情に疎いのはこのためだ。

「あんた、どうしよう？ どうしたらいい？」

「……何であいつ結婚しないのかな？ あいつの理想通りじゃないか？ 優しくて、気立てがよくて、胸が 母ちゃん痛いって」

バルカスの頬をつまむリユースも困り顔だ。

「もっと自分の幸せを考えてもいいのにね」

リオンの前世由来の価値観に理解できない二人が、必死に考え込んでいるとそこに赤い一つ目のルクシオンがやってくる。

『お困りのようですね』

「お、おう」

腰が引けるバルカスは、ルクシオンに少し怖がっている様子だった。

「急にどうした？ リオンはどこだ？」

『マスターは姉君をからかって遊んでいます』

バルカスもリユースも「あいつは何をしているんだ？」と、本当に腹立たしい様子だった。

自分たちがリオンの結婚について悩んでいるのに、本人は姉であるジェナをからかって遊んでいるとか憤慨ものである。

『ところで、面白い話をしていましたね。マスターのご結婚についてご両親共に賛成しているのでしょうか？』

バルカスが怖がりつつも答える。

「そ、そうだな。伯爵なら公爵家の姫さんが嫁いでも問題ない。それに新しい家となると家族が少ないからな。多すぎて跡取りで揉めるのも問題だが、少なすぎるのはそれで問題だ。リビアちゃんが来るのも大歓迎だ」

平民出身のリビアが歓迎されるのは、戦争に参加したことが大きい。

王家の船に乗って活躍したのが評価されている。

リオンの影に隠れ、地味に昇進の話が出ていた。

もっとも、一代限りの騎士爵を与える云々、という程度である。

「私も賛成よ。リオンは引張ってくれる子がいいと思うの。あの子、放っておくと何もしないし」

バルカスも頷く。

「追い込まないと頑張らないタイプだな」

ただし、あまり追い込むと爆発するタイプでもある。

ルクシオンが楽しそうに一つ目を頷くように縦に動かしていた。

『では、賛成ということでしょうか？』

「いや、賛成でもあいつがお嬢さんたちに失礼な態度を」

『問題ありません。既にお二人から許可を貰っています』

「え？」

『どうせマスターは面倒くせえ奴なので、言い訳をするだけです。自分で答えを出しません。それなら、追い込んでしまえばいいのです』

バルカスが待ったをかけた。

「お、おい。もし、追い込みすぎてあいつが何かしでかしたら困るぞ」

『安心してください。マスターはあの二人を愛していますよ』

リユースが首をかしげる。

「な、ならなんで断ったりしたの!？」

二人からすれば意味不明だ。

好き合っていて、障害もないのに結婚しないリオンが理解できなかった。

『面倒くさい奴ですから』

この世界の価値観的におかしいリオンに、バルカスもリユースも呆れていた。

「何なのあいつ。こんな羨ましい状況でなんで悩む！俺なんか、ゾラと結婚するときに悔しくて泣いたっていうのに！」

屈辱的な条件を結ばされ、オマケに結果は托卵だ。

長女メルセも、長男ルトアートも他人の子である。

それからすれば、リオンが結婚に踏み切らないのは腹立たしかった。

「あの子がここまで馬鹿だったなんて」

二人がリオンを馬鹿というのは理由がある。

英雄で伯爵にまで上り詰めたリオンは、当然だが貴族としてこれから目立つ。

今後を考えると、結婚しないという選択肢がないのだ。

好きな相手を選ぶのに選ばない、というのが二人に理解できない

かった。

結婚は本人の意志、なんて言っていられる世界ではなかった。

『　　というわけで、お二人にも協力して貰えないでしょうか？』

バルカスもリユースも、顔を見合わせ頷いた。

「それで、どうするんだ？」

『簡単です。マスターに黙って婚約式を挙げさせます。本当なら結婚式がよかったのですが、公爵家との話し合いでそういうことになりました』

バルカスが驚く。

「え？　もうそんな話をしていたの？」

『はい』

リユースがバルカスの手を握る。

「あんた、どうしよう？」

「こ、ここまで来たらやるしかないだろ。この先、怖い女にあいつが騙されないためにも婚約させるぞ。あいつ、もう少ししたら留学で外国だ。絶対に何かする！」

「そ、そうね。婚約者がいれば無理もしないだろうし、ここは無理にでも何とかしないと！」

二人を仲間に引き入れたルクシオンが聞こえない程度の声で。

『……まあ、私としても、マスターが望まない結婚をするのは嫌ですからね。ここは大人しく、婚約して貰いましょう。下手をするとローランドが何か企むかも知れませんがね。マスターが逃げ回っているとも言え、嫌がっていると勘違いしてすぐに許可をくれそうですし』

ローランドが何かする前に、先に結婚関係に手を打ちたかったルクシオンだった。

『あと、婚約式で慌てるマスターが見たいですし』

そのためにリオンに内緒で事を進めるルクシオンだった。

【幕間】婚約の裏側（後書き）

ルクシオン（ ）『……書籍版は一巻が発売中です。書籍奥付URLをご確認いただき、アンケートにお答えいただければ書き下ろし特典『アンジェリカの学園生活』をプレゼントとなっております。それから、マスターの主人公にあるまじき悪役顔が見られるのは書籍だけとなっております。是非、ご購入をお願いいたします』

ブログ（前書き）

本日より投稿を開始します。

本文5000字程度を考えており、更新時間は18時頃を予定しております。

区切りのいいところまで更新予定です。

プロローグ

身の回りにあふれている不思議にはあまり目が届かず気付かない。

大地が浮かび上がるファンタジー世界にいる俺がそうだ。

浮かんでいることに慣れすぎて、疑問すら浮かんでこない。

気にならないのか？

ならないね。

氷がどうして浮くのか気になって調べる人間は多いか？　そういうことだよ。

だが、見えてきた景色には唖然とするしかなかった。

見間違いではないかと目を何度もこする。

「……これは驚いたな」

甲板の上……新しい飛行船から見える景色に俺は驚いていた。

新型の飛行船アインホルンの特徴は、その名の通り船首にある一本角だろう。

少し上向きに取り付けられた細長い角のような飾り。

機能的に意味もあるのだろうか、他の飛行船よりも特徴が強い。

そんな飛行船から見える景色は、浮かぶ大陸の中央に見える大きな木だ。

山じゃない。

遠近感覚がおかしくなったと思えるほどに大きな木が、薄らと空の向こうに見えている。

風に髪が乱れていると、俺以上に困っているのは長い金髪のマリエだった。

元から癖もあるのか、乱れた髪をまとめている。

「どうよ、凄いでしょ」

小柄でスレンダーな体をしているマリエは、俺に対して偉そうな態度だった。

何の因果か、兄妹揃って乙女ゲーの世界に転生してしまった。

そう、マリエは前世の俺の妹だ。

普通なら運命を感じるとか、感動の再会とか色々あるだろうが……俺とこいつの間にあるのは因縁だけである。

「何でお前が偉そうなんだよ」

ホルファート王国を出発し、ようやく見えてきた異国の地。

どうして俺がここにいるのかと言えば、表向きは留学するためある。

本当の目的は 続編の主人公たちの様子を見に來ただけだ。

異文化を体験するとか、勉強は二の次である。

「そもそも続編なんて出ていなければ、俺がここに来ることもなかったのに」

マリエは割と乗り気だった。

外国語をマスターするため、船旅では時間をかなり割いて勉強していたほどだ。

「兄貴は海外とか行きたくない奴だったわね。海外留学なんて楽しそうじゃない」

「こっちはまったく楽しめないぞ。あと、兄貴と呼ぶな。この世界ではお前と俺は赤の他人だ」

マリエが俺の脚にすがりついてくる。

「私を捨てるの！」

「人聞きが悪いんだよ！ それから離れろ。俺には婚約者がいるんだ」

振り払って放れたマリエは、爪を噛んで悔しそうにしている。

「何よ！ あの二人よりも私の方がずっと良い女じゃない！」

「はあ？ お前より二人の方がずっと良い女です！ というか張り合っつな、気持ち悪い」

妹が俺の婚約者に嫉妬している？

嬉しくないね。

視線を遠目に見えてきた大陸へと戻した。

「あれがアルゼル共和国か」

マリエはまだ悔しそうにしながら「そうよ」と言っつて、アルゼル共和国について話をするのだった。

それは、ゲームでのアルゼル共和国の設定だった。

「大陸は遠目に一つに見えるけど、七つの大陸が中央の聖樹によって繋がっているわ。貴族共和制とは言っているけど、国が七つ繋がっている感じだった気がするわ」

気がする、という曖昧な表現。

これはマリエも転生してから結構な時間が過ぎており、記憶が曖昧な部分もあるため断言できないでいた。

「戦争をして一つにまとまるとか、他に方法があっただろうに」

七つの国が合議制で政治をしている国。

それがアルゼル共和国だ。

「そんなの知らないわよ。でも、内向きで争いもあるにはあるけど、外敵には一致団結して戦うみたいよ」

まとまっているのか？

ただ、他国の政治批判をしている場合ではない。

俺が知りたいのは、アルゼル共和国にいる主人公の現状だった。

そもそも、政治批判をしていい立場ではない。

ホルファート王国など、今は他国に文句を言えないくらい酷い状況だ。

いや、元から酷かったな。

ローランドの糞野郎は特に酷い。

あいつだけ幽閉されないかな？

「それと、アルゼル共和国が凄いのは、防衛戦ね。今までに一回も他国の侵略を許したことがないわ」

「本当か？ だったら凄いな」

それは凄い。

ホルファート王国でも、何度か本土に敵の侵入を許して橋頭堡きやうとうほを作られている。

何故なら飛行船なんて物があるために、輸送能力が高いからだ。

それを思えば、アルゼル共和国が油断できない国だとすぐに分かる

政治体制か、それとも技術力が運用力か……とにかく、何か優れているのは事実だ。

「文化レベルはホルファート王国と同じか？」

「こつちが少し上かな？ 何か路面電車とか走っているし、日本で言うなら明治とか大正くらいじゃない？」

「食生活は違うのか？」

「そこまで知らないし、覚えていないわよ。ゲームシステム自体は似たような感じだったわね」

「そこをもっと詳しく聞こうじゃないか」

移動中、何かと忙しくマリエと話をする機会がなかった。

理由？ お邪魔五人衆がいるからだ。

あいつら本当に役に立たないばかりか、邪魔までしてくるので俺の中では敵より厄介な存在である。

「大体同じだったわね。冒険パートがあって、戦略パートもあるわ。日常パートはほとんど変わらなかったけど……あ、そうだ。悪役令嬢はいないわ」

同じ乙女ゲーのシリーズ物だ。

主人公のライバルである悪役令嬢がいてもおかしくないと思っていたが、どうやら次回作にはないらしい。

シンプルでいいな。

分かりやすいのは大事だ。

「アンジェの立場には誰もいない、と。で、リビアの立場にいるのは誰？」

マリエは複雑そうな顔をしている。

「何だよ？ 早く答えろよ」

「いや……ほら、ゲームって名前を入力するタイプだったから、イラストで外見は知っているけど名前は知らないわよ。苗字はベルトレで、本当の苗字がミドルネーム付きで【ジル・レスピナス】だったわ」

「本当の苗字？ ああ、実は大貴族の跡取りだったとか、そういう設定だったな」

次回作の主人公は、一般人として暮らしているが実は七大貴族一角　その血を引くお嬢様だ。

過去に家が焼けるシーンから始まるのは、七大貴族で他の家が裏切って攻め込んだためらしい。

「レスピナス家は議長を務める家で代々聖樹の巫女を輩出していたの。それが面白くない他の七大貴族が滅ぼしたのよ」

「ふ〜ん」

興味なさそうにすると、マリエが面白くないのか俺を睨んでくる。

「何で興味がないの？　ここ、重要な部分だと思うけど？」

「結局、野郎を誑し込んでお家再興だろ？　俺としては、取り返しが付かない状況じゃなければ問題ないね。今は二年生だっけ？」

シリーズの続編だが、リビアたちと同年代という設定だそうだ。

「そうね。ゲーム的な話をするなら、クリアデータがあればホルファートの男性キャラがアルゼルに留学してくるとか、そんなのもあったわね」

「ファンサービスか？　でも、留学生とは仲良くなれないんだろ？」

「それは　」

マリエと話をしていると、何を勘違いしたのかバケツとモップを持ったユリウスが甲板にやって来た。

サンダルを履き、ズボンやシャツの袖をまくっている。

「マリエ、大丈夫か！」

俺もマリエも、ユリウスの登場に無表情になった。

「おい、馬鹿王子。掃除は終わったのか？」

ユリウスがこちらに大股で歩いてくる。

紺色の髪をした王子様も、掃除道具を持つと何とも現実感が出て素晴らしい。

「そんなことよりも、いったいどういうつもりだ、バルトファルト！　こんな場所に二人で……まさか、マリエを狙っているのか！？」

俺は舌打ちをする。

「婚約者もいるのに他の女に手なんか出すか馬鹿野郎。お前と一緒にするな」

「お前は信用できないんだよ！」

「鏡を見る！　そこに俺以上に信用できない馬鹿王子がいるからさ！」

ギャーギャーと言い争っていると、次々に甲板に野郎たちが出てくる。

「殿下！　バルトファルト伯爵、いったいどういことですか！」

緑色の長い髪を縛り、ポニーテールにしているジルクがやって来た。

ユリウスを心配しつつ、マリエと二人で甲板にいたのが許せないらしい。

「婚約者がいるのにマリエに手を出すつもりか！」

次に出てきた体育会系の男はグレッグだった。

赤い髪を短髪にしており、体の大きさや筋肉もあって威圧感がある。

「見損なったぞ、バルトファルト！」

次に出てきた紫は……まあ、ナルシストだ。

他より弱いが魔法は得意な頭脳派であるが、色恋で失敗してポンコツぶりを発揮している野郎だ。

名前はブラッド。

「お前という奴は……マリエ、私たちが来たからにはもう大丈夫だ」

最後に出てきた青髪の真面目そうな眼鏡はクリスである。

全員がモップやら掃除道具を持っていた。

今はアインホルンで掃除仕事をさせている。

小指で耳の穴をほじり、俺は五人のうつとうしさを態度で示していた。

「……掃除に戻れ、馬鹿共が」

マリエも五人に呆れている。

「何もないからみんな掃除に戻ってよ。今、割と大事な話をしているのよ」

ユリウスが胸元の開いたシャツ姿で胸を張る。

大胸筋が浮かび、結構鍛えているのが分かった。

……野郎のサービスシーンとか嬉しくない。

「なら大丈夫だ。大事な話なら俺たちも側で聞いてやる」

「一時間残業な」

「何故だ！」

俺が残業を指示すると、ユリウスたちが抗議してくる。

……この馬鹿共を連れて留学しなければいけないとか、罰ゲーム以外の何物でもなかった。

これも全てローランドが悪い。

王妃であるミレーヌ様に頼まれたことだが、王であるローランド

が悪い。

俺が婚活で苦労したのもローランドのせいだ。

全てローランドが悪いので、いつか復讐してやる。

五人に呆れて目を閉じると、瞼の裏でローランドの糞野郎が腹を抱えて笑っている姿が見えた。

……あゝあ、ぶっ飛ばしたい。

あいつが王様じゃなかったらぶん殴っていたね。

俺、大人だからそんなことはしないけど。

大人だから！

前世と合わせれば、もう精神年齢は四十だ。

ここは大人の余裕で耐えて見せようじゃないか。

そんな目を閉じている俺にユリウスが、

「何とか言ったらどうなんだ、バルトファルト！」

俺は平手でユリウスの頭を叩いた。

「うるせえ！ お前らみたいに四六時中盛っている暇人じゃねーんだよ！ 大体、俺の好みはおっぱいの大きな女性だ。マリエは問題外！ そもそもそっという対象じゃないの」

マリエが自分の胸を見下ろし、両手で触っていた。

小声で「す、少しはあるし」とか、何もない平野に山があるみたいなことを言っているのだから悲しくなってきた。

「た、叩いたな！」

「叩いて何が悪い！ お前はもう王太子でもなければ、利用価値も手放した王子もどきだ！ このくらいの扱いで十分だ！」

そう、こいつはマリエのために王太子の地位を捨てた。

そしてつい最近、公爵令嬢になったヘルトルーデさんを襲撃し、王子として婚姻外交をするにも問題があると判断されてしまった。

……利用価値がない王子様だ。

甲板にメタリックカラーの球体が姿を見せた。

赤い一つ目が俺を向くと、そのまま近付いてくる。

相棒のルクシオンである。

『マスター、アルゼル共和国を名乗る飛行船が近付いてきました。上陸前に立ち入り検査をさせると言っています。撃ち落としますか？』

「……お前、分かっている聞いていない？ 却下だ。立ち入り検査を受け入れると伝えておけ」

『……了解です』

実に有能な相棒だが、すぐに新人類を殲滅しようと画策している。

俺は最近気が付いた。

こいつって結構やばい奴じゃないか、って。

俺は文句を言っている面子を前に手を叩く。

「ほら、立ち入り検査が入るぞ。お前らも道具を片付けたら着替え
て準備をしろ」

ジルクが顔を背ける。

「貴方に命令されたくありません」

そうかい。

俺はマリエの方を見た。

マリエが一度咳払いをすると、声質やら表情を切り替えた。

「みんな、共和国の人が来るからちゃんと準備をしましょう」

モップを担いだイケメンたちが「はい」と間の抜けた返事をし
て船内へと移動する。

こういうところは素直なのだ。

マリエも肩を落として船内へと向かう。

「どうして私があの子の五人の面倒を見ないといけないのよ」

可哀想だが自業自得だ。

「お前が逆ハーレムなんて目指すからだろうが」

マリエは涙目だった。

「こうなると分かっていたら、誰も逆ハーレムなんて目指さないわよ！」

俺は笑顔で、

「現実って残酷だよな。俺は日々を真面目に生きているから、そんなへまはしないけどな！」

マリエが「ムッキー！」とでも言いたそうな顔で、大股で船内へと戻っていく。

俺はルクシオンと共に甲板に残った。

見上げると、大きな共和国の船が頭上からこちらに近付いてくる。

「威圧的な連中だな」

『ホルファート王国は舐められていますね』

このような接近の仕方は失礼だ。

普通は同じ高度に合わせ、横並びになって近付いてくるのが一般的だった。

「……面倒にならないといいけどな」

まだ見ぬ次回作の主人公様が、無事に男を誑し込んでくれていることを祈る。

同時に、この留学が何事もなく終わって欲しかった。

プロローグ（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？

現在、GCノベルズ様で「乙女ゲー世界はモブに厳しい世界です」
「巻」が発売中です。

是非とも購入していただければ幸いです。

アルゼル共和国

立ち入り検査を受けるアインホルン。

アルゼル共和国の航空警備隊と名乗る連中がやって来た。とにかく船を調べる軍人が格納庫に来ていた。

一人偉そうな軍人が、胸の辺りに勲章をいくつかぶら下げた装飾の多い軍服を着ている。

並んでいる品々を前に、髭を指先でつまむように撫でていた。

「ふん、王国としては上出来な献上品だな」

俺は首をかしげた。

「献上？」

ホルファート王国はアルゼル共和国と交易を行っており、その他にも色々と条約を結んでいる。

だが、属国になった訳ではない。

「不服みたいだな。お前らのような冒険者が貴族をやるような野蛮な国が、我が国と同等だと思ふなよ」

見下してくる軍人を俺は啞然としながら見ていた。

本気で言っているのか？

「……あんた、外交問題になっても知らないぞ」

すると、他の軍人たちも笑っていた。

「外交問題？　なら、攻め込むのかな？　かつてホルファート王国は、アルゼル共和国に二度も大敗した過去を知らないらしい」

いったいいつの話をしている。

それこそ、随分と前の話をされても困る。

両国で戦争があつたなんて話は、俺が生まれるよりもずっと前の話だぞ。

「あんたの名前は報告しておくことにするよ」

だが、相手は少しも慌てた様子がない。

「好きにするといい。しょせん冒険者上がりの似非貴族だな。自ら名誉を守ろうともしない」

随分と偉そうな男である。

格納庫から部下を連れて引き上げていくと、様子を見ていた物品の確認をしていた軍人が一人近付いてきた。

「申し訳ありません。大尉殿は貴族出身の方でして、どうしても態度が横柄になってしまつんです。アルゼル共和国は皆さんを歓迎し

ていますので、どうか気分を害さないようにお願いします」

謝っているようで「我慢してね」って言っているのと同じだ。

こいつらもどこか俺たちを見下していた。

すると、大尉殿と呼ばれた軍人が。

「何だ、このセンスもない鎧は？」

アロガンツを見て蹴りを入れていた。

イラツとした俺を、笑みを浮かべた軍人がフォローしてくる。

「落ち着いてください。すぐに引き返しますし、そうなれば無事に入港できますから」

俺は忌々しい気持ちを吐き捨てるように言う。

「そう願いたいね」

共和国の飛行船に案内される形で、アインホルンが港へと入った。

甲板の上。

俺はルクシオンと共和国の軍人について話をする。

「あの横柄な態度は何だ？ 俺、外国でそれなりの地位を持つ人間

だぞ。普通ならあり得ない対応だろうが」

この対応はあり得ない。

そう思っていると、ルクシオンが考察する。

『攻め込むなら攻め込んでこい、という態度でしたね。それだけ自信があるのではないでしょうか？ 防衛戦では不敗ということですが、少し気になりますね』

「何が？」

ルクシオンに気になった点を聞いてみれば、

『彼らの飛行船技術は、王国や旧公国と大差ありません』

「お前から見れば、だろ？ でかい飛行船が飛び交っているぞ」

二百メートル級以外にも、軍艦なら三百やら四百という大きさの飛行船が港にある。

動きも悪くない。ギリギリ浮かんでいるとか、無理をしている動きではなかった。

「王国より技術力は高いと思うが？ そもそもこの世界で防衛戦が強いなんて異常だぞ。攻める方が有利なのに」

防衛戦が難しいのは、旧公国との戦いで俺も理解している。

足の引っ張り合いやら色々あったが、それでも守る方より攻め

る方が有利だ。

『何かしらの秘密があるようです。そもそも、防衛戦だけ不敗というのが気になります。それだけ強い戦力を持つ国家が、どうして周辺へ派兵して領土を広げないのですか？』

単純に面倒だから、とか？

「自分たちの大陸で満足したんだろ」

『嘘ですね。人の欲には際限がありません』

「共和国の連中が無欲なんだろ」

『それならば、あの軍人たちの態度に説明が出来ません。あの態度はむしろ、攻め込んで欲しいと言っているようなものです。それを望んでいるような態度です』

何かしら秘密があるということらしいが、こちらとしては穩便に終わればそれでいい。

「あんまり関わりたくない国だな」

そもそも外国に留学なんて嫌だったのだ。

俺は国内で満足する人間だ。

新しい言葉を覚えるのも苦勞するからね。

共和国語って、王国語と違うから、覚えるのに苦勞したよ。俺や

マリエとは違い、あの五人組は元から話せるようだったけど。

無駄にスペックが高い奴らだ。

『到着しました。下船の用意をお願いします』

指定された場所に到着したアインホルンは、自動で船体を固定していく。

その様子を見ていた港の作業員たちが驚いていた。

「さて、この後の予定は何だったかな？」

『大使館へ向かい、そこで今後の予定を確認します』

大使館で色々と説明を受けることになっていた。

近くに置いてある革製の旅行鞆を持つ。

ルクシオンは俺の右肩辺りに浮かびながらついてくる。

『ところでマスター、世界の危機と言いますが、いつそ滅ぼしてしまった方が早いのではないのでしょうか？ あの軍人たちの態度に苛々しませんか？』

「お前って過激だね。俺は大人だからそんなことはしないの。それに、今回の目的は別にある。大人しくしておけよ」

態度がむかつくから国を滅ぼすとか馬鹿だろう。

その後何が続っているか考えると下手に動けない。

俺に出来るのは、横柄な態度の軍人を告げ口することだけだ。

あゝあ、あいつ降格にならないかな。

大使館へとやって来た。

ホルファート王国の大使館は、実に王国的な建物である。

共和国もやはり外国だ。

建物は似ていてもどこか違う。

そのため、王国式の建物があると安心してしまふのだった。

大使館にいた役人が、俺たちを前に緊張した様子で対応していた。

「これはユリウス殿下、よくおいでくださいました」

「世話になる。ところで、大使館で説明を受けるように言われたのだが？」

「はい、そのことで皆さんに集まっていたいただきました。ホルファート王国とは違い、アルゼル共和国にある学園は通学することになります。学生寮はありません」

学生寮はない、と。

「そうか」

「他にも学園とは違いが多いのです。アルゼル共和国では、平民も普通に学園に通っています。そのため規模も大きく、授業内容も大きく違います」

平民が通える分だけ、アルゼル共和国は王国よりも進んでいるのかも知れない。

色々と注意事項を伝えられたが、

「そ、それから……共和国では、王国の地位が低く見られております」

ユリウスの眉がピクリと動いた。

「どういうことだ？」

役人がその辺りの事情を説明してくる。

「アルゼル共和国の不敗神話と言いましょか、とにかく軍事力は王国以上というしありません。私が赴任してから、何度も戦争が起きています。その全てにアルゼル共和国は勝利しております」

多くはアルゼル共和国が挑発する形で戦争が起き、その全てを退けているようだ。

賠償でアルゼル共和国は相当潤っているらしい。

煽って手を出させるとか最低だな。

ユリウスは納得したようだ。

「軍事力を背景にしたおごり、か。噂には聞いていたが酷いものだな」

「王国の方針としては、手を出さぬ限りは良き貿易相手ですのであまり事を荒立てたくありません。その辺りを納得していただきたく……」

役人が俺を先程から心配そうにチラチラと見ている。

一体何だ？

話を聞いていたブラッドが気付いた。

「そういうことね。大丈夫だよ。いくらバルトファルトでもそこまでする馬鹿じゃない。共和国に喧嘩なんて売らないさ」

え？ 俺のせいなの？

というか俺を心配しているの？

「どう考えても問題を起こすのはこいつらだろ」

五人組を指さすと、グレッグが俺を見て呆れていた。

「何言ってるんだ、お前？」

クリスが眼鏡を指で押し上げながら位置を正した。

「王太子だったユリウスをあそこまで容赦なくボコボコに出来るのは、バルトファルト……お前だけだ。この中で一番信用がないのはお前だよ」

俺はこいつらよりも信用がないというのか？

役人の顔を見ると視線をそらされた。

話を無理矢理変えてくる。

「そ、それでは、皆さんの住まいへご案内いたします」

「おいちよつと待て、こつちを見ろ！」

案内されたのは大きな屋敷だった。

「ここでは、バルトファルト伯爵以外がお住みいただきます」

立派な屋敷を前にマリエは目を輝かせている。

「こんな立派な屋敷に住みたかったわ」

俺は役人に話しかけた。

「ねえ、俺は？ 何で別なの？ 部屋くらい空きがあるだろ。凄く大きな屋敷だし、俺もここがいい。それでも俺、伯爵よ」

「そ、その、ユリウス殿下たちとマリエ殿の関係を考えると……カ
ーラ殿とカイル殿はマリエ殿のお世話をする仕事もありますが、伯
爵をここに置くのは色々と問題があります。主に公爵家に不貞を疑
われることになるかと」

「よし、俺は別がいい！」

アンジェヤリビアに不貞を疑われたくはない。

それに、アンジェパパに浮気を疑われたら、俺どころか親父たち
まで危険だ。

俺がアンジェと婚約したことで、俺の実家は公爵家派閥になっ
ている。

流石に実家に迷惑はかけられない。

カーラとカイルが色々と話をしていた。

「大きなお屋敷だね。でも、ちょっと楽しみかも」

だが、カイルは違った。

楽しそうには見えないし、周囲を見て表情が青くなっていく。

「……このお屋敷を維持している使用人の方たちはどこですか？」

役人が咳払いをした。

「以前は管理をこの国に任せていまして、大急ぎで使用人を集めたのですが人手が足りません。何せ急に留学が決まったもので」

大きな屋敷には使用人が二人。

だが、ユリウスがいるため、下手な使用人を側に置けない。大急ぎで準備をしているらしいが、しばらくは人手不足のようだ。

カイルは頭を抱えていた。

「誰が維持すると思っっているんだよ。こんな屋敷、掃除だけでも大変じゃないか」

すると、ジルクが笑顔で、

「大丈夫ですよ、カイル君。我々も“誰かさんのおかげ”で掃除が上達しました。お手伝いくらいは出来ますよ」

おいおい、その誰かさんとは俺のことかな？ いい度胸だ、緑野郎。

だが、カイルは笑えないようだ。

「こっちは生活がかかっているんですよ！ 掃除だけが仕事じゃありませんからね！」

騒がしいマリエたちを置いて、俺は役人と一緒に次の物件を目指す。

「俺の住まいはどんなところかな」

「伯爵、殿下たちを放置してよろしいのですか？」

「いいんだよ。少し厳しくするように言われているから。少し苦勞すれば現実が見えるだろ」

役人を連れ、俺は騒いでいるマリエたちを残して次へと向かう。

俺に用意されたのは少しばかり大きな家だ。

同じような建物が並ぶ住宅地。

近道を路面電車が走っており、結構な家賃が必要そうな家は三階建て。

中は掃除がされていたが、ユリウスたちに使用人を用意したために人手不足でこちらは週に数回家政婦さんが来るだけだった。

食事は近くで外食も出来るので困らないと言われた。

二階の自室に入り窓を開ける。

「三階はほとんど物置だな」

家をスキャンしたらしいルクシオンが俺の側に寄ってくる。

『不審な点はありませんでした』

窓の外を見ると、路面電車が走る音が聞こえてくる。

「さて、これからどうする?」

『新学期前です。先に情報収集をするべきでは? マスターとマリエの言う、主人公が誰なのかもハッキリしていませんし』

それもそうだな。

俺はルクシオンに主人公の特徴を伝えた。

「なら先に探して、周囲の情報を集めてくれ。髪は金髪にピンクが混ざった色だ。金髪で、毛先がピンクだと」

『グラデーションでしょうか? 他には?』

「ツインテールだって」

『……他には?』

「えーと、割と体を動かすのが好きなサバサバした女子? 体型は普通ってマリエが言っていたけど、乙女ゲーの主人公って大抵凄く可愛いから、スタイルもいいんじゃないか、だってさ」

『情報がないよりマシ、程度ですね。攻略対象の男子の情報もお聞きしましょうか』

「そっちはマリエが何か言っていた気がするな。外見は一応聞いていたけど」

『マリエ本人に確認を取った方が早いですね。そもそも、準備不足では？』

「いきなり留学になったから仕方がないだろうが」

アインホルンも速度があるし、船旅も通常より短かった。

船内でゆっくりマリエと話をする時間もないし、あいつら夜は…
…うん、俺は何も知らないし、口出しもしない。

それが一番平和な回答だ。

「とにかく一度調べてくれ。明日にでもマリエに確認を取るから」

『了解しました』

俺の鞆からルクシオンの操作する偵察用のドローンが出てくると、窓から飛び立つのだった。

「さて、二人に連絡でも入れるか」

『メールで我慢してください』

「メールが出来るのが凄いやな」

ホルファート王国。

学生寮で新学期を前に準備をしていたリビアの下に、慌ただしく

部屋に入ってきたのはアンジェだった。

「リビア！」

「きゃっ！」

着替え中のリビアが驚きつつシャツで下着姿の自分を隠すと、アンジェが「すまない」と言いつつ一枚の紙を見せてくる。

それはクレアーレがプリントしたリオンからのメールだった。

「リオンからの手紙だ」

「ほ、本当に あっ」

慌ててアンジェに近付こうとしたリビアがこけてしまう。

下着姿で前のめりに倒れ、お尻を突き出した格好だ。

「何をしている」

「すみません」

アンジェが抱き起こし、そして二人でメールの内容を確認する。

『アンジェ、リビア、俺は元気です。

アインホルンでの船旅は、夜以外は快適でした。

夜は一人というのをより実感する結果となったのは、アホ共のせいです。

二人はいかがお過ごしでしょうか？
クレアーレが迷惑をかけていないか心配です』

そこまで読んだところで、アンジェの側で浮かんでいたクレアーレが楽しそうな声で言う。

『あら、信用がないわね』

メールの内容に戻る。

『野郎共は言うことを聞かないし、未だに自分の現状を理解していません。』

ミレーヌ様にあいつら反省していないと伝えてください。
それから、共和国は酷い国でした。

……お家に帰りたいです
リオンより』

リビアは下着姿で慌て始める。

自分の格好を忘れているらしい。

「リオンさん、寂しがっていますよ!」

だが、クレアーレが言う。

『大丈夫よ。ルクシオンの説明だと、まだ余裕があるそうだから』

アンジェが溜息を吐く。

「それならいいが。外国で寂しい思いをしていないといいが」

『大丈夫でしょう。マスターはかなり図太いわよ』

リビアがリオンのメールの内容を何度も読む。

「リオンさんも新しい生活が始まったんですね。私たちも頑張らないと駄目ですね！」

「そうだな。それより、さっさと服を着た方がいいぞ。新学期から風邪を引きたくないだろう」

リビアは自分の格好を見て、慌ててシャツを着る。

アンジェがクスクスと笑っていた。

「勲章を貰って、騎士爵相当の地位を得たのに変わらないな」

「わ、私が勲章なんて貰って良かったんでしょうか？」

制服の胸元には小さな勲章が下げられていた。

騎士ではないリビアには、騎士爵相当を保証する地位が与えられている。

「貰える物は貰っておけ。それだけの働きはしたからな。それに、今年度から平民出の生徒も受け入れている」

学園の生徒不足や、色々な問題から商家や相応の学力を持つ若者たちを学園は受け入れることにした。

貴族クラスとは別に、もう一つのクラスが出来ることになる。

「リビアはそいつらの代表みたいなものだからな。頑張れよ」

アンジエに言われ、リビアが不安そうにしていた。

「先輩としてちゃんと出来るか不安です。リオンさんなら何とかしてくれそうなのに」

笑うアンジエがリビアの髪を撫でた。

「そうだな。だが、あまりリオンに頼ってばかりでは愛想を尽かされる。もっと頼りになるような存在になりたいのだろう？」

リビアが頷くとアンジエが「それでいい」と言っ、クレアーレに返信を頼むのだった。

「さて、何と書けばいいだろうな？」

困るアンジエにリビアも悩む。

「そうですね。近況を報告しましょうか？」

「それしかないな」

だが、クレアーレの青い一つ目が怪しく光っていた。

二人に聞こえない音声で、

『マスターにこの光景を画像でプレゼントしておこうかしら』

そう言っていた。

共和国の学園

クレアーレが有能すぎて驚いた。

震える手で写真を握りしめた俺は、リビアの下着姿に興奮する。

「あいつお前より有能だな」

『その程度で評価を改めるとは、マスターの人間性を疑わざるを得ませんね。おっと、失礼しました。元から疑わしい人間性でしたね』

「俺はそんな自分が好きだけどね。よし、この写真はお守りにしよう」

新しい制服に着替えた俺は、家のリビングで写真を大切にしまう。

お尻を突き出している写真がお気に入りだ。

ドジっ子なのか、男を誘っているのか分からないポーズが良い。

「さて、報告を聞こうか」

ルクシオンが集めた情報を俺は確認する。

朝早くから情報を確認する理由は、今日が新学期初日だからだ。

ルクシオンも調べるのに時間がかかっていた。

『現在の候補はこの数名になっております』

金髪のツインテールは多いが、ピンク色が混ざっている生徒は少ないらしい。

だが、どの女子も違う。

特別目を引く美人ではなかった。

「……どの子も違う気がするな」

『私も同意見です。少し条件から外れますが、こちらの方はどうでしょう？』

周囲に浮かび上がる映像を見ると、淡いピンク色の髪をサイドポニーテールにした女子の姿があった。

「雰囲気あるな。この子か？」

髪型は違うが、ゲームのように毎日同じ髪型ではないだろう。

髪色も許容範囲内ではないだろうか？

「マリエに確認した方がいいな」

『了解です』

家の窓を出ていくルクシオンを見送り、俺は紅茶を飲む。

「……良い茶葉だ。高いだけはある」

新学期初日と言うこともあり、今日の紅茶は奮発して良い物を用意した。

朝から気分が良かった。

マリエたちの屋敷では、朝から騒がしかった。

「俺の上着を知らないか？」

「誰です？ 勝手に私の紅茶を飲んだのは？」

「僕の靴下知らない？」

「おい、飯は？」

ユリウスが上着を探し、ジルクは用意した紅茶がないと少し怒っている。靴下を探し回るブラッドに、グレッグはパジャマ姿で欠伸をしながら朝食を待っていた。

マリエはエプロン姿でフライパンを持っている。

「みんな早く朝食にして！ ほら、さっさとテーブルに並べるの！」

トーストに目玉焼きとベーコン。

カイルが皿をテーブルに持って行くと、グレッグがすぐに食いつく。

マリエは部屋の中を見ながら、

「あれ？ クリスは？」

ユリウスが窓の外を見ていた。

「あいつなら朝から素振りだ。今日も気合が入っているな」

真面目だな、なんて言っている周囲にマリエは腹が立ってきた。

「すぐに呼び戻してシャワーを浴びさせて！ 今日新学期の初日なの！ 遅刻とかあり得ないからね！ 馬車も来るからみんな用意を済ませてよ」

朝から慌ただしいマリエたちの屋敷。

主に五人の世話で忙しかった。

その様子を窓の外から見ていたルクシオンは、そのまま回れ右をしてリオンの下へと帰るのだった。

『今は無理そうですね』

誰かがシャツを汚したのか、マリエが発狂しそうな声を出していた。

馬車に乗ってやって来た学園。

雰囲気はホルファート王国とかなり違っていた。

まず学園に向かっている間、制服姿の学生たちをよく見かける。

ありふれた登校風景を見たのは前世以来だった。

王国では学園の敷地内に学生寮があったので、少し雰囲気が違うからな。

建物もそうだ。

デザインが違っており、やはり外国なのだと思うせる。

「……共和国の女子って素晴らしい？」

俺たちが職員に案内を受け、生徒たちとすれ違つと挨拶をしてくる。

王国の学園では女子の方から挨拶をする方が希だった。

こんなところで文化レベルの差を見せつけられるとは思ひもしなかった。

ただ、俺の発言を職員が勘違いしたらしい。

「お気に召したようですね。ただし、手は出さないでくださいよ。中には貴族のお嬢様もおられるので、国際問題になってしまいます」

後ろを付いてくるマリエを見れば、朝から疲れた顔をしている。

カーラが付き添っていた。

「マリエ様、大丈夫ですか？」

「私言っただのに。間に合わないから早く準備をして、って言ったのに」

ブツブツと文句を言っているマリエの側にカイルはいない。

学生ではなく、使用人　正確に言えば奴隷である。

学園への立ち入りは禁止されていた。

疲れ切ったマリエとは反対に、ユリウスたちは元気である。

「やはり王国とは違うな。雰囲気からして違う」

違う点を挙げているときりがない。

ただ、似通っている部分も多い。

これはこの乙女ゲーの世界が、日本の学校をモデルにしたためだろうか？

八人でゾロゾロと歩いていると、案内されたのは大きな建物だ。

始業式で俺たちを紹介するらしい。

職員が俺たちに、

「始業式で自己紹介を代表でして貰うのはユリウス殿下になります」

……だろうな。

ユリウスも知っているのか、原稿は用意してきたようだ。

こういうところは抜かりがない。

さて、始業式で留学生の紹介が行われたのだが……。

別に何もなかったな。

それとなく主人公っぽい女子を探したが、見た目だけなら美形はそれなりにいる。

探せなかった。

そして、始業式が終わるとクラスに案内されるのだが、

「ブラッドさん、趣味とか好きな物を聞いても良いですか？」

「ブラッドさん男爵なんですよね？」

「凄いですよね。彼女さんはいるんですか？」

「馬鹿ね。婚約者がいるに決まっているじゃない」

同じクラスに振り分けられた紫　違った、ブラッドの奴が質問
攻めになっている。

普通の駄目さはクラスの女子に見えないからか、大人気のようだ。

ナルシストのブラッドだが、あいつ黙っていれば美形だからね。

「まいったな。婚約者に該当する人物はいるよ。結婚も考えている。趣味は……やっぱり読書かな？」

無難に答えているために、クラスの女子たちはキヤーキヤー言っている。

教室内の男子たちのある種の熱がこもった視線が、どうにも懐かしいと思えてしまう。

嫉妬という膨大な熱量が男子たちを一つにまとめている気がした。

俺？

……婚約者が二人もいるし、別に寂しくないね。

先程から一言も質問されなかったとしても、だ。

一応は伯爵位を持っていると伝えたのだが、女子たちの人気はブラッドに集中していた。

教室内は三十人程度の生徒がいる。

王国とは違い、より前世の高校に近い授業風景に感じられた。

王国は大教室での授業で、大学を思わせる授業風景だったからな。

男子たちの声が聞こえてくる。

「ふざけやがって」

「王国なんて文化レベルの低い国だろ？」

「その貴族に尻を振る女子も最低だよな」

明らかに見下している気がする。

教室に担任が入ってくると、生徒たちが着席するのだった。

「はい、皆さん。ホームルームを始めましょうね」

口調がどうにも女性っぽい男性教師は、薄らと化粧をしていた。

「留学生が珍しい気持ちは分かるけど、困らせては駄目よ。リオン君、ブラッド君、何かあったら私に相談してね」

……非常に良い先生だよ。

胸元が今にも開きそうなシャツは、大胸筋の形が浮かび上がっている。

たくましい上腕二頭筋からも分かるように、かなり鍛えているのが分かる。

顎が割れていて、そして濃い髭は剃られているが青く見える。

顔の彫りも深く……そんな人が女性口調なのが、よりキャラを引き立たせていた。

彼女　　じゃなかった、彼は【クレマン】先生だ。

周囲のクラスメイトたちが微妙な雰囲気だった。

「クレマン先生が担任か」

「いい人だよな」

「ああ、でも妙に背中がゾクゾクするときがあるんだよな」

背中が震えると証言したのは男子だ。

……何もない。そう、きっと大丈夫と自分に言い聞かせておく。

クレマン先生が手を叩く。

「それじゃ、色々と今年度について説明をするわね。留学生の可愛い男子が二人もいるから丁寧に説明しちゃうわ」

一瞬、ブラッドがビクリと震えた気がした。

今後は緊張感を持ちつつ授業に望めそうだな。

昼休み。

教室を抜け出しマリエと合流すると、朝より幾分か回復していた。

中庭で隠れるように密会する俺たちは、ルクシオンを二人で囲み話をする。

空中に映し出された画像やら動画を前に、マリエは困惑していた。

「……たぶん、この子じゃないかな？」

指をさした女子を見る。

「金髪じゃなくてピンク髪だな。ツインテールでもなくて、サイドポニーテールだ」

マリエも困り果てている。

「雰囲気とか、外見から言えばこの子しかないのよ。他の子は違うと思うし」

主人公を知っているのはマリエだけだ。

俺では判断が出来ない。

「入学していない可能性はないだろうな？」

「学園のある大陸は、レスピナス家の領地なの。学園もレスピナス家が運営していて、次代の若者を育てるとか何とか……まあ、学園内に主人公を見守っている人たちがいるから、絶対に入学させたはずよ。ゲームの話では、だけど」

ルクシオンが新たな動画を再生する。

『今朝手に入った映像です』

そこには、青いサラサラヘアを肩まで伸ばした地味な感じを装

っている男子がいた。

ピンク髪の子と楽しそうに会話をしている。

マリエが画像に顔を寄せる。

「エミール！ えっと、ミドルネームとか苗字は分からないけど、こいつエミールよ！ 攻略対象の男子で、安牌あんばいのエミール！」

何だか酷い呼び名だな。

「安牌？」

「二作目は色々と変更があつて、攻略対象の男子がとにかく癖が強い」

「ユリウスたちよりも！？」

正直、あいつらだつて癖が強すぎると思つていたのに、より特徴を出そうとしたの？

「そう。で、エミールの特長は地味！」

……それって特徴なのかな？

キャラ付けとしては、なんちゃって地味キャラみたいな感じか？

正直、俺よりも特徴があるような奴にしか見えない。

青い髪ってこの世界だと普通だけど、俺から見ると違和感が強い

からね。

「地味だから安牌か」

「え？ 違うわよ。攻略のしやすさとか、その他色々ある面倒なイベントが少ないから安牌なの。攻略に困ったらエミールに乗り換えればゲームクリア確実よ」

おい、エミールが可哀想になってきたぞ。

動画では優しそうに笑っているエミールだが、女子からは プ
レイヤーからは安牌などと呼ばれていると思うと泣けてくる。

だが、これでハッキリした。

「ようするに、エミールの彼女が主人公だな？」

「たぶん。ドレスを着たシーンで、主人公がサイドポニーテールにしたけどよく似ているわ。そもそも、髪型を変えるくらい普通にあり得るし……」

ゲームと現実の違いだな。

ルクシオンが補足してくる。

『彼女の名前は【レリア・ベルトレ】。マリエの言う通り、入学の際に色々と改竄が見つかりました。本名を隠していますね。そして、相手の男性とは付き合う前と思われます。相手のお名前は【エミール・ラズ・プレヴァン】。貴族階級の出身者です』

マリエが何度も頷く。

「間違いない！ こいつが主人公よ！ 隠している苗字はレスピナスで間違いないわ」

俺は安堵の溜息を吐いた。

「なら問題ないな。エミールとの関係が進めば、このままハッピーエンドで終わりだ。俺たちの留学の目的も達成されたようなものだな」

背伸びをする。

色々心配してきたが、肩すかしを食らった気分だ。

「俺たちが来るまでもなかったな」

マリエも大きな問題が一つ片付き、右肩に手を置いてそのまま右腕を回している。

肩こりか？

「そうね。これで留学生生活を楽しめるわ。それよりも兄貴……切実な問題があるんだけど」

「何だ？」

「お金を貸してください」

泣きそうなマリエの顔を見て、俺は鼻で笑ってやった。

「嫌だね。生活には困っていないだろうが」

「違うの！ 生活費とは別でお金がいるの！」

「大使館に申請しろよ。金なら出してくれるだろ？ 俺なんか自腹だぞ」

ユリウスは腐っても王子だ。

ホルファート王国が留学費用やら、必要なお金は用意している。

だが、俺は自ら留学したいと言ったので、費用は自分で用意していた。

「兄貴のケチ！ 買い食いも出来ないのよ。そもそも、王妃様を怒らせたから予算とかギリギリしかでないのよ！」

「はしたない真似をしなくて良かったな。こっちは来なくてもいい留学に来て、気分が落ち込んでいるんだぞ」

逆に問題があった方が頑張らないといけないのでやる気も出るだろうが、何も問題なければ何のために留学したのか分からない。

「女には手を出せないし、勉強するのも面倒だな。これからどうしようか？」

「……兄貴、ヘタレだから女に手を出せないじゃない」

「馬鹿にするなよ。王国では女子に声をかけまくったぞ」

「それ婚活が理由でしょ。必要なければ何もしないのが兄貴じゃない」

ルクシオンが何度も頷いていた。

『ところでマスター、このままレリアを対象と断定し、調査する方針でよろしいでしょうか？』

「任せる。エミールとの関係に問題が出そうになったら教える。全力でサポートだ」

世界のために、カップルの成立を支援する俺……こんな奴は俺くらいではないだろうか？

「兄貴、お小遣い欲しい！」

「黙れ。掃除代は払っただろうに」

「あのお金で一年は持たないわよ！何かと入り用だからお願いだよ」

すがりついてくるマリエがうつとうしく、財布から少額を渡してしまった俺は甘いのだろうか？

共和国の学園（後書き）

ルクシオン（ 「船旅のマリエですが、事に及んでいませんね。その前段階で逃げ回り騒がしかったです。ちょっとした喜劇ですよ。……そういうことになっています」

ルクシオン（ 「乙女ゲーはモブに厳しい世界です。一巻は好評発売中です。Web版にはない追加エピソードもお楽しみいただけます。是非ともご購入お願いいたします」

主人公？

淡いピンク色の癖のある髪をサイドポニーテールにした女子。

髪のリキュムがあるため、フンワリとした髪型に仕上がっている。

見た目は可愛らしく、少し制服を着崩しており学園でも目立っていた。

名前はレリア。

姉が存在しているが、今は学園にいない。

そんなレリアが声をかけたのは、中肉中背で真面目そうな男子だった。

「エミール」

「あ、レリア」

振り返った男子は、肩に届かないまでのストレートの髪を揺らしていた。

サラサラした青い髪はとても綺麗だ。

「そっちのクラスはどう？ 留学生が来たんでしょう？」

学園のクラスは非常に多い。

貴族や一般の生徒が同じように学ぶのも理由の一つだ。

ホルファート王国との違いは、積極的に一般人を役人として雇い入れることにある。

学園を好成績で卒業すれば、六大貴族の下に就職しやすくなる。

それが駄目でも学園を卒業したというだけで箔が付く。

学園に入学できた時点でエリートだった。

エミールは少し困った顔をしていた。

「クラスで大人気だったよ。ユリウス殿下とジルク君に女子は夢中だよ。レリアもやっぱり気になる？」

不安そうにしているエミールを安心させるため、レリアは微笑む。

「興味はあるけど、異性としてはちょっとないかな。外国の貴族様だから結婚も出来ないよ」

エミールは慌てながら、

「そ、そんなことはないよ。貴族とも結婚できるよ。ホルファート王国は難しいだろうけど、アルゼルなら十分に可能だから」

そんなエミールの反応にレリアはからかいたくなったのか、

「本当？　だったら、エミールが私を貰ってくれる？」

顔を赤くするエミールに、レリアは笑うのだった。

何アレ？

口から砂糖を吐きたくなったよ。

甘い。甘すぎない？

物陰からレリアと安牌　　じゃなかった、エミールを覗き見している俺とマリエは、とても微妙な顔をしていた。

マリエなど呪詛を口に行っている。

「ふざけんな。何うまいことやってんのよ。あんたも逆ハーレムで大変な目に遭いなさいよ。なんで私だけがこんな目に遭っているのよ。主人公だからって絶対にゆるさ　　痛い！」

本当に呪いそうだったので、拳で軽く叩いておいた。

「主人公を呪ってどうする。あの子がハッピーなら俺たちもハッピーだ。それでいいだろうが」

運良く二人を発見した俺たち。

物陰から様子を見ていたが、とてもいい雰囲気だった。

ルクシオンが報告してくれたのだが、あのレリアという女子には他に男の影がない。

二股をしている様子がないのだ。

「……それにしても、二作目の主人公ってギャルっぽくない？」

マリエは頭頂部を手で押さえながら答える。

「一作目の主人公が頭お花畑で不人気だったのよ」

「リビアの前でそんなことを言ったら撃ち殺すぞ」

マリエが視線をさまよわせながら「い、言うわけがないじゃない」なんて言っていた。

「と、とにかく、今度はもっと自分から動いて活躍する女の子が主人公になったの」

「そうか。でも、活発な子なら悪役令嬢がいなくて良かったな」

「何で？」

「喧嘩が酷いことになりそうだからだ」

マリエも納得する。

「女の敵は女だもんね。分かるわ」

……リビアとアンジェは違うけどね。

違うよね？

「こっちは安心できそうだな。俺やお前みたいな転生者がいるようにも見えないし」

俺やマリエのような存在がいなくて助かった。

そいつらと敵対するのは非常に面倒である。

しばらく学園で過ごして調査もしているが、それらしい情報は得ていない。

「ところで、だ。マリエ、こっち側のお役立ちアイテムとか知らない？」

俺が持つお守りや、ルクシオンのようなチート級の存在を確認しておきたかった。

だが、こいつはマリエだ。

「私、男向けのゲーム部分に興味がないのよね。クリア優先でプレイをしていたから、よく知らないわ」

「二作目はクリアできたのか？」

一作目は非常に難しいからと、俺にクリアするようと言って渡してきたのがマリエだ。

「難易度が下がったからね。課金アイテムもあったわよ。でも、さ

すがにもう覚えていないわ。そもそも、私が生まれたのはホルファートだったし、アルゼルのことは二の次っていうか、覚えているだけでも凄くない？」

使えない奴である。

こっちで何かお役立ちアイテムがあれば探しておきたかったのに。

「ルクシオンにその辺りも調査させるか。こっちは問題なさそうだし、動きがあれば何かするってことで」

「異議なし！　ねえ、兄貴。帰りに買い物に付き合つてよ。今日は特売日なのよ」

五人の野郎共を養うマリエは、まるでお袋のような存在になりつつあった。

……何故だろう？

泣けてくる。

「大使館に言つて買つて貰えよ」

「予算にも限りがあるのよ！　色々と計算したら、どうしても毎月やりくりが必要なの！　……私、朝は目玉焼きにベーコンは必須なの」

カリカリのベーコンが好きらしい。

買つてやるからもう喋るな。

不憫すぎて涙が出てきそうだ。

「カーラも連れてこい。お前と二人だけだとユリウスたちが五月蠅いからな」

「カイルも呼んでくるわ。あゝ、今日からは一品料理が増えそう」

こいつ、なんでそんなに頑張っているんだろう？

あの五人にやらせればいいのに。

ユリウスは教室内で少し困っていた。

「殿下、アルゼル共和国はどうですか？」

「今度の休みに観光でもしません？ 私が案内して差し上げますわ」
「私と出かけませんか？ 専用の飛行船を持っていますわ」

身分の高い女子たちに詰め寄られており、辟易していたユリウスだった。

教室内、ジルクを見れば同じ状況だった。

（まいったな）

ユリウスとしてはこんなところをマリエに見られたくない。

「悪いが婚約者も来ている。不貞を疑われることは出来ないな」

リオンがこの場にいれば、青筋を額に浮かべ煽り倒していたこと間違いのない台詞を口にしていた。

ユリウスからすれば、一度アンジェを裏切っている。だから、二度とそんなことはしないと心に決めての言葉だった。

だが、女子たちの攻勢は止まらない。

「一途なんて素敵ですわ」

「なら、その方も誘っては？」

「殿下ったら本当に紳士ですね」

ウツトリする女子たち。

ユリウスはどこで間違ったのかと、真剣に考え始めていた。

大人気の留学生たち。

そんなユリウスたちを面白くないと思っている男子がいた。

名前を【ピエール・イオ・フェーヴェル】。

顔色が少し悪く不健康そうなピエールは、紫色の髪を指で弄っていた。

体つきは細く、留学生たちの話題で持ちきりの学園に苛々している。

「……時代遅れのホルファート王国にすり寄る馬鹿共が」

取り巻きたちも同意する。

「そうですね、ピエールさん」

「あいつらのどこがいいのか？」

「冒険者から成り上がった野蛮人たちですよ」

彼らは制服を着崩し、いかにも不良という格好をしていた。

だが、ピエールが六大貴族の次男とあって、誰も注意を出来ないでいた。

同じ境遇のエミールが真面目なだけに、ピエールは悪い意味で目立っている。

階段に座っているピエールは、親指の爪を噛みながら口角を上げて笑った。

「お前ら……いい見世物を用意してやろうか」

「何か思い付いたんですか？」

「うまくやればホルファート王国と戦争が出来るぞ。お前らも出世したいだろう？」

それを聞いた取り巻きたちがニヤリと嫌らしい笑みを作る。

まるで戦争が起きても問題ないような口振りだ。

むしろ、起きて欲しいとすら思っている。

ピエールは自分の髪を弄りながら、目の前を通り過ぎたブラッドを見た。

同じ紫色の髪を持つ男子……周囲には女子たちが集まっている。

「あいつ目障りだな」

そう言つと、取り巻きの男子たちが顔を見合わせ頷いた。

「あいつを校舎裏に呼び出しますか？」

「いや……少し趣向を凝らそうか。あいつを利用して、王国の馬鹿共から身ぐるみ剥ぐのも面白いと思わないか？ あいつらの飛行船見たこともない新型らしいじゃないか」

共和国の飛行船には劣るが、新技術を詰め込んだ飛行船は興味がある。

そう言つてピエールは立ち上がった。

「調子に乗った王国の馬鹿共を笑いものにしてやるよ」

国際問題など考えないアルゼル共和国の貴族たち。

彼らの絶対的な上位者としての振る舞いには理由があつた。

階段でたむろしている彼らに、上の階から降りてきた生徒たちが

困っていた。

「あ、あの、通りたいんですけど」

それが一般生徒だと知ったピエールは、取り巻きたちに指を鳴らして指示を出す。

取り巻きたちが、困っている生徒たちの代表で声をかけてきた男子を囲み。

「てめえ、気安く口を利いてんじゃねーよ!」

「この人が誰か分かっているのか?」

「おら、返事しろよ、こら!」

暴行を加え始めた。

それを見ているしか出来ない一般生徒たち。

ピエールはその様子を見てニヤニヤと笑みを浮かべている。

本当に楽しそうにしていた。

ボコボコにされ、歯が折れた男子生徒の髪を掴み上げる。

「この俺様に邪魔だと言ったのはお前か?」

「ち、ちが 通りたかっただけで」

ピエールは男子生徒を殴る。

「言ったよな？」

「ち、ちがいま」

そして認めるまで殴り続けると、取り巻きたちが他の生徒たちを先に行かせて男子だけを残させた。

「これはお仕置きが必要だな」

ピエールは床に倒れ込んだ男子生徒を踏みつけ、取り巻きたちに準備をさせるのだった。

翌日の校舎裏。

吊された男子生徒が見つかった。

「……最低だな」

男子生徒は下着以外を焼かれ、腫れ上がるまで暴行されていた。

生きてはいるようだが、体には火傷の跡まである。

近くにいた男子生徒に聞いてみる。

「おい、犯人は誰だ？」

「……お前、知らないのか？」

男子生徒は周囲を警戒するように言う。

「貴族だよ。一般生徒にこれだけ暴力を振るっても許されるのは、六大貴族の誰かだ」

「いや、注意しろよ」

「……それが出来たら苦労しないよ」

男子生徒が離れていく。

教師たちがやってくると、生徒たちを教室へと戻すのだった。

「早く教室に戻りなさい！」

「おい、急いで連れていくぞ」

「これは酷いな」

木に吊された男子生徒は、骨が折れているようにも見える。

胸くそ悪いと思っていると、校舎から見下ろしている生徒たちがいた。

楽しそうに見下ろしている奴らの気が知れない。

人混みの中、マリエが俺に近付いていた。

「兄貴、ちょっと」

「何だよ？」

人混みを抜け出し、マリエと二人になる。

「あいつら危険な奴らよ」

「あいつら？ あのブラッドの出来損ないみたいな紫髪の野郎か？」

マリエは何度も頷く。

「名前がピエールで、悪い貴族のお手本みたいな奴よ。主人公の実家を滅ぼした七大貴族の一つが、あいつの実家なの」

ゲームでも相当酷いキャラのようで、悪役令嬢はいないが悪役はいたらしい。

「……面倒だな」

だが、奴の地位は面倒くさい。

七大貴族の出身で、次男というから結構高い地位にいる。

「関わらないのが一番ね。主人公があいつをそろそろやつつける頃かな？ そのイベントで攻略対象キャラといい感じになるというか、必須イベントだったと思うし」

潰してしまいたいが、それでは問題が起きるという。

本当に厄介な奴である。

「分かった。手は出さないでいてやる」

胸くそ悪い連中が、主人公に成敗されるのを待つとしよう。

帰り道。

学園から自宅までの道のりの途中で老いた犬がいた。

歩くのも難しいのか、ヨロヨロとしていた。

「首輪が付いているな」

近付くと人を怖がらない。

飼い犬だったのは間違いないようだ。

俺の近くにいたルクシオンが犬を見る。

『単純に老いですね。放置すれば十日以内に死ぬでしょう』

「飼い主に届けた方がいいんじゃないか？」

すると、近くの家からおばちゃんが姿を見せた。

俺が様子を見ている犬を見て、

「その犬、学園の生徒さんが実家から連れてきていたのよ。真面目な子だったのに、可哀想にね」

「可哀想？」

おばちゃんは学生が使用していたアパートを見た。

「前はあそこに住んでいたんだけど、今日になって大怪我をしたから入院するって話だったわ。もう学園には復学できないし、アパートは解約するみたいなの」

奨学金を利用していたらしく、退学となるため住まいも引き払うことになったらしい。

「貴族に目なんて付けられなければね」

そう言っておばちゃんは家に戻っていく。

今朝の男子生徒の顔が思い浮かんだ。

首輪にあるプレートには名前が刻まれていた。

「お前、女の子か？ “ノエル”なんて可愛い名前じゃないか」

差し出した手をノエルが舐めた。

ルクシオンが俺に問いかけてくる。

『罪滅ぼしで飼われるのですか？』

「いけないか？」

『長くはありません。世話も大変だと思いますが？』

俺は汚れた犬を抱き上げる。

プルプルと震えていた。

「世界のために個人を見捨てたんだ。代わりに犬くらい助けてやつてもいいだろ。その男子生徒の様子、少し調べてくれ」

『了解です』

俺はノエルを撫でながら、

「それにしても、ここも酷い学園だよな」

ルクシオンはジッと俺を見ている。

『その気になれば、すぐにでもこの国ごと消してしまえますが？』

「俺、世界の破滅とか嫌いな人だから却下だ」

犬をそのまま自宅へと連れ帰ることにした。

聖樹

ホルファート王国の女子寮。

クレアーレが届けてきた手紙を受け取るリビアとアンジェは、リオンの近況を知ると心配になるのだった。

「リオンさん、ペットのノエルちゃんを飼うのはいいですけど、お友達とか出来たんでしょうか？」

共和国の学園は酷いところだと書かれており、他にはやっぱり外国語は現地で学んだ方が覚えは早い、などと書かれている。

それ以上にペットのノエルのことが事細かに書かれていた。

「犬で年齢が十七歳は高齢だな。可愛いメスと書いているが……飼うにしても介護が必要じゃないか？」

クレアーレが補足してくる。

『マスターもその辺りを心配しているみたいね。学園が終わったら、すぐに帰って世話をしているらしいわ。それから……お友達は未だにいないわね』

リビアが肩を落として悲しそうにする。

「リオンさん、可哀想です」

アンジェもそれについて同意見らしいが、

「現地の学生と仲良くするのも大事だと思うが、共和国の態度が気になるな。大使館も随分と弱腰だ」

リビアも気になっている。

「過去に二度は王国が負けていると聞きましたけど、それでも強気すぎませんか？」

アンジェが忌々しそうにしている。

「よほど自分たちに自信があるらしい。煽って敵を作っている態度が、王妃様も気になっていると言っていたな」

実際に何度も防衛戦で勝利しており、アルゼル共和国の強さは周辺国がよく知っている。

それだけに王妃であるミレーヌも慎重な対応を取っている。

だが、現地の大使館が弱腰過ぎるのも問題になっていた。

顎に手を当てたりリビアが考え、

「……そんなに強い国なら、もっと領地が広がっていてもおかしくないと思うんですけど？」

アンジェは領土を広げた場合のデメリットを教えてやる。

「空を挟んでの統治も大変だからな。長年、自分たちの国から打っ

て出ない国だ。もっとも、防衛戦以外では不敗とは言えないが」

防衛戦以外に弱いので打って出てこないというのが、アンジェの考えだ。

事実、過去に侵攻した際には敗北している。

「不思議な国ですね」

リビアの感想には、アンジェも頷くしかなかった。

「そうだな。だが、アルゼルは大陸中央にある聖樹を信仰しているような国だ。自分たちの大陸が聖地であるから、そこから出たがないという噂がある。リオンに確認して貰うか？」

せっかくなので、その辺りのことをリオンに調べて貰おうとするアンジェだった。

リビアは聖樹という言葉に興味を持つ。

「聖なる樹ですか。何か意味があるんですかね？」

「聖樹ってエネルギーの塊みたいなものよ」

屈み込んだマリエと話しているのは、階段裏の狭い場所だった。

隠れるように話をしているのは、お邪魔五人衆が最近特に五月蠅いからだ。

マリエが俺を頼るのが許せないらしい。

お前らがもつとしつかりすれば、俺がマリエを養わずにすむと理解しているのか？　というか、間接的にあいつらを養っているのも俺じゃないか。

アンジェとリビアのお願いでもあるので、聖樹について調べている。

ゲーム知識を持っているマリエに確認を取ると、聖樹とはエネルギーの塊らしい。

「いや、植物だろ？」

「知らないわよ。私は設定とか気にならないタイプだから、ゲーム内で説明された部分しか知らないの。しかも十年以上前の記憶よ。忘れていることも多いわ」

「エネルギーを利用する方法を知っている、ってことか」

「そうじゃない？　ほら、アレよ……フリーエネルギーって奴？」

永久機関とでもいうべき奴か？

前世ではオカルトやらそちらに分類されていたと思うが、人類が夢見るエネルギーの最終的な形だろう。

「聖樹がエネルギーを生み出し続ける、か」

「そう。そんな感じ。電力の心配がないのよね」

エネルギー問題がないアルゼル共和国。

強さの秘密が分かったな。

「あと……何か契約関係があったわね。聖樹つてアルゼルの大地に根を張っているから、それが色々で、契約を結ぶと強制力があるとか何とか」

「もっとハッキリしろよ」

「もう忘れたわよ」

ふて腐れているマリエに、ご褒美のパンを与えると喜んで受け取り食べていた。

こいつ、うちのノエルより食い意地が張っている。

「聖樹に、その巫女さんね。こっちも色々と設定があるんだな」

パンを食べ終えたマリエが、指についたクリームを舐めながら俺にたずねてきた。

「そっちは大丈夫なの？ 安牌君とうまくいっている？」

「その呼び方は可哀想だから止める。……見ていて殺意を、じゃなかった。初々しいカップルを見ている気分だよ」

「それ、気分じゃなくて初々しいカップルなんじゃないの？」

主人公であるレリアの方は問題ない。

留学生として人気の五人には目もくれず、エミール狙いだった。

この清々しいほどの一途さが主人公だろう。

どこかの馬鹿な転生者にも見習ってほしいものだ。

目の前でパンを食べ終えて幸せそうなマリエとか。

「主人公様は順調だ。このまま見守っていればいい感じに進むだろう。手を出して引っかけ回すなよ」

「何で私に言うのよ！」

「胸に手を当てて考えてみろよ。誰のせいで大変な目に遭ったと思っ
っているんだ？」

マリエが悔しそうにして、用事も終わり腹も膨れたためかこの場
から去って行く。

見送った俺はさっさと帰ってノエルの世話をすることにした。

リオンの自宅。

ルクシオンはノエルの世話をしていた。

『私が完璧に調合した栄養食です。食べなさい』

ルクシオンの命令に、ノエルは素直に従って食事をする。

まるで、まだ強く生きたいと思っているようだ。

『……貴方のご主人様は、現在意識不明の重体です。ですが、安心なさい。この私が治療を陰からサポートし、マスターが金銭的な支援をしています』

ノエルは顔を上げ、ルクシオンを一舐めした。

ルクシオンはノエルの顔を見る。

食事を再開したノエルは、食べ終わると寝床にヨロヨロと戻って座る。

食事が終わるとすぐに寝てしまった。

『良い子ですね。マスターもこれくらい素直なら可愛いと……おや、何やら新しい情報が入ってきましたね』

ドローンたちからの情報を確認したルクシオンは、すぐに自宅を出てリオンの下へと向かうのだった。

校舎裏。

ピエールに呼び出されたブラッドは、周囲を囲む男子たちを前に

呆れていた。

「馬鹿な真似は止めて欲しいね。こっちにも色々立場があるんだけど？」

校舎裏に着いてきたブラッドは、まさかこんなことになるとは思ってもいなかった。

（さて、どうするかな？）

相手も他国の貴族である。

留学生を　しかも貴族の子弟を呼び出し、暴行を加えることはないと思っただけだ。

だが、取り巻きたちが持っている木の棒は、素振りをするための物だ。

ピエールがニタニタした笑みを浮かべている。

「目障りなんだよ。お前ら、自分たちが歓迎されていると勘違いしてないか？」

周囲の男子生徒たちも、自分たちが何をやっているのか分かっているのか怪しかった。

ブラッドは冷静に話をする。

「外交問題になるよ。それは君も困るんじゃないのかな？」

ピエールの取り巻きたちが笑っていた。

「外交問題だつてよ」

「こいつ、まだ分かってないな」

「もしかして、自分たちがアルゼルと同格とか思っているんじゃないの？」

大使館で聞いてはいたが、ここまで酷いとはブラッドも予想していなかった。

ピエールが顔を近付ける。

「外交問題大いに結構だ。六大貴族であるフェーヴェル家が、お前からホルファートなんて雑魚にビビると思っているのか？ 舐めすぎだぜ」

ブラッドは内心で焦った。

（何だこいつら？ 自分たちが何をしているのか分かっていて、こんなことをしているのか？ これじゃまるで ）

本当に戦争を望んでいるようだ。

ピエールが「やれ」と言うと、取り巻きの男子たちがブラッドに襲いかかってくる。

「冒険者風情が！」

冒険者が貴族になったホルファート王国とは違い、アルゼルの貴族はまた違った存在だった。

そのため、冒険者を見下している。

木刀を振り回してくる取り巻きたちに対してブラッドは、

「その程度で！」

振り下ろされた攻撃を避け、一人を転ばせると木刀を奪った。

すぐにもう一人を叩き伏せると、ピエールの取り巻きたちが距離を取る。

（こいつら弱い？）

ブラッドも二人を倒し、どうにも普段と違う感触に驚いていた。

そもそも、ブラッドは魔法が得意で、こうした接近戦は得意としていない。

そんなブラッドでも相手に出来てしまう実力しか、彼らは持ち合わせていなかった。

ピエールが苛立っている。

「何をしている。さっさとやれ！」

取り巻きたちが手の平をブラッドに向けてくる。

「ファイヤーボール！」

魔法を放ってくる取り巻きたち。

ブラッドは本気で理解できなかった。

「喧嘩に魔法を使うのかよ！」

木刀を捨てて魔法を使用する。

屈んで地面に手を触れると、ブラッドの周りには壁が出来た。

ファイヤーボール　火球が次々に土壁で防がれ消えて行く。

そして、ブラッドは殺傷能力の低い魔法を行使した。

「ウォーターウィップ！」

水で出来た鞭が、取り巻きたちを叩き伏せていく。

ずぶ濡れになる取り巻きたち。

ピエールが頬を引きつらせていた。

立ち上がるブラッド。

「悪いね。魔法の方が得意なのさ」

普段ユリウスたちというために目立たないが、そもそもブラッドは弱くなかった。

リオン基準で打たれ弱いとされているが、一般人から見れば十分

に強い。

ピエールが右手で顔を隠す。

「……本当に使えないなお前ら」

取り巻きの一人が、立ち上がりながら謝罪をする。

「す、すみません、ピエールさん」

警戒を強めるブラッドだが、ピエールの右手の甲に薄らと光が見えた。

（何だ？）

その光は次第に強くなり、そして模様が紋章にも見えるものが浮かび上がった。

緑色に光るその紋章。

ピエールは右手を顔から離すと笑っていた。

「調子に乗りすぎたな、糞雑魚野郎」

ピエールの立っている周辺の地面から、先端の尖った木の根が次々に生えてくる。

それらがウネウネと動き、そして先端をブラッドに向けた。

ブラッドはすぐさま、魔法で土壁を用意しようとするが。

「なっ！」

魔法を行使しても、反応がなかった。

特に大地　土系統の魔法の反応が酷い。

まるで拒否されているようだった。

慌ててその場から逃げると、木の根が次々に地面に突き刺さっていく。

ピエールは醜悪な笑みを浮かべながら、ブラッドに言うのだった。

「言っただろう。六大貴族であるフェーヴェル家を舐めるな、って」

ブラッドはすぐに次の魔法を用意する。

「土が駄目なら！」

ブラッドの両手に炎が発生する。

だが、これも普段より威力が少ない。

（どうしてだ？　まるで邪魔をされているような　）

次々に襲いかかる木の根を焼こうとするが、威力が足りないために直接ピエールを狙うのだった。

ブラッドの手から火球が放たれピエールを襲うも、

「何だ、その程度か？」

地面から水が噴き出し壁を作ると、火球を消してしまふ。

ブラッドにはそれが理解できなかった。

（魔法を扱っているように見えない。いったいどういうことだ？）

魔法に詳しいブラッドからして、ピエールの扱っている魔法はよく理解できなかった。

ピエール本人が魔法を扱っているように見えない。

すぐに次の手を考えるブラッドだったが、足に違和感を覚えた。

「ちっ！」

足下を見ると、植物がウネウネと動いてブラッドの足首に巻き付いている。

引きちぎろうとすると、次々に生えてきてブラッドに絡みつく。

ピエールが近付いてくる。

取り巻きたちも手に武器を持ってブラッドを囲んでいた。

「……随分と調子に乗ってくれたな」

ニヤけたピエールの顔を見て、ブラッドは奥歯を噛みしめるのだ

った。ブラッドの体勢は屈んだ状態に近い。

ピエールがその細い足でブラッドの頭を蹴った。

「ぐっ！」

その後、足で何度もブラッドを踏みつける。

「どうした！ さっきまでの威勢の良さはどこにいったよ！」

暴行を加えられるブラッドは、ピエールを睨み付けた。

見下ろしているピエールが前髪を手でかき上げ、額を見せてくる。

少し動いた程度で汗ばんでいた。

「聖樹の加護を受けた本物の貴族に、お前ら似非貴族が勝てると思うなよ」

アルゼル共和国で貴族とは、聖樹の加護を受けた者たちのこととを指す。

それが、ホルファート王国の貴族との違いだった。

ピエールが取り巻きたちに命令する。

「やれ」

武器を持った取り巻きたちが、ブラッドに近付き武器を振り上げるのだった。

聖樹への誓い

マリエたちが住んでいる屋敷。

厨房で夕食の用意をしているのは、マリエとカーラにカイルだ。

「パスタよ、パスタ！とにかく大量に湯がいて量で誤魔化すの！」

パンやらスープを用意しているカーラが、カイルにお願いをする。

「テーブルに持っていてくれる、カイル君？」

八人での夕食だ。

カーラは身分が違うとか、カイルは奴隷だから別でとか、そんなことは言わない。

これが「そんなのは駄目よ！」なんてマリエが言えれば格好もつくだろうが、本音は別にあるのだ。

……片付けが面倒。

別で夕食を用意して、その後にバラバラと動いて貰っても困るから、だ。

効率を考えて、みんなと一緒に食事をしているに過ぎない。

身分云々で食事を分けるなんて駄目！なんて言っている余裕が

ないのだ。

カイルが呆れている。

「他の二人がせめて夕方までいてくれたらいいのに」

使用人がいると言っても、その二人は一人が庭師。

一人は女性だが、家庭があるため夕方前には帰ってしまう。

ユリウスがいるために、身元がしっかりしている王国の人間以外を側に置けないために問題が出ていた。

そもそも、留学生にユリウスのような王族が来るなど想定していなかったのだ。

大使館に文句を言っても「こっちだって困る」としか言えない状況だった。

何もかも慌ただしい中での決定で、色々と手が回っていない。

カイルが料理を運ぶと、そこには食事を待っているグレッグの姿があった。

「飯はまだか？」

テーブルに突っ伏しているグレッグに、カイルも苛立つ。

「早く食べたいなら手伝ってくださいよ」

「腹が減って動けない」

料理を並べるカイルは、他の面子について話を聞く。

「殿下たちはどうしたんですか？」

「ユリウスは明日の授業の準備だな。ジルクは少し遅れて戻ってくるよ。何でもティーセットを見て回りたいと」

カイルは時計を見た。

「食事前には戻ってきて欲しいんですけどね」

「知るかよ。あと、クリスはアレだ。外で素振りだ」

「あの人、暇さえあれば素振りをしていませんか？」

「あいつは暇だからな」

グレッグの答えを聞いたカイルは思った。

（あんたも暇そうだけどね）

「なら、クリスさんと呼んでくださいよ」

「お前が行けよ。俺は腹が減っているんだ」

外では気を張っているグレッグも、屋敷では気を抜いて駄目な姿をさらしている。

学園では留学生や、王国の貴族としての立場もあって意外と真面目だった。

その反動で屋敷では気を抜きすぎている。

カイルが料理を並べ、厨房に戻ろうとすると。

「あれ？ ブラッドさんはどこですか？」

グレッグが顔を上げる。

「そういえば見てないな。女子に付きまとわれているんじゃないか？ あいつ、チャホヤされるのが好きだから、遊んでいるかもな」

ナルシストであるブラッドは、自分を褒めてくれる存在が大好きだ。

女子に囲まれ気分良く過ごしていると想像したカイルは余計に腹が立つ。

（夕食を抜いてやりたいね。片付かないから早く食べて欲しいのに）

すると、慌ただしく屋敷にジルクが戻ってきた。

「た、大変です！」

エプロンをしたマリエが屋敷の門へと走ると、そこには植物の蔭^{つた}のようなもので縛り上げられたブラッドがいた。

酷くボロボロで、体中に酷い怪我を負っている。

顔は膨れ上がり、歯も折れているように見える。

そんなブラッドに腰を下ろしてマリエたちを待っていたのは、ピエールだった。

取り巻きたちも木刀などを持って屋敷の前にいる。

「あ、あんたたちいつたいどういづつもりよ！ ブラッドに何してくれたのよ！」

怒るマリエに対して、ピエールはとぼけたように言うのだ。

「へえ、こいつブラッドって名前なのか？ いきなり襲いかかってきたから返り討ちにしたんだよ」

取り巻きたちが笑っている。

「この落とし前はどうか付けてくれるんだ？」

「ホルファート王国の皆さんは、どう償ってくれるのかな？」

「俺たちも怪我をしたんだ。誠意を見せて欲しいよな！」

ブラッドから手を出したと聞いて、マリエはあり得ないと思った。

確かに馬鹿であるが、以前よりはまともだ。

「馬鹿を言わないで！ ブラッドがそんなことをするわけがないじゃない。したとしても、何か理由があるはずよ！」

マリエの後ろで見ていたカーラとカイル。

マリエの前に出るのは、グレッグとクリスだった。

「ブラッドからどけよ」

睨み付けるグレッグに対して、ピエールは笑っていた。

「お前らがどう言おうが関係ないんだよ」

クリスが目を細めた。

「どういう意味だ？」

ピエールが口角を上げて笑っていた。

「ここはアルゼルで、お前たちは余所者だ。俺がこいつに襲撃されて返り討ちに遭ったと言えば、それが真実だ。分かるか？」

屋敷からはユリウスとジルクが駆けてくる。

「何があつた！」

マリエがユリウスたちに事情を話す。

すると、ユリウスがピエールに向かって、

「事情は理解した。だが、ブラッドは王国の人間だ。相応の地位にもある。引き渡して貰うぞ」

とにかくブラッドの治療を優先させ、後で事情を調べるとするユリウスに対してピエールは両手を広げて提案するのだった。

「返して欲しい？　ならゲームをしようじゃないか」

マリエたちは「こいつ何を言っているんだ？」と、本気で腹立たしい顔をしていた。

「あんた、この状況で何を言うのよ。いいからブラッドを返せ！」

そんなマリエにピエールが怒鳴る。

「ゴチャゴチャ五月蠅いんだよ！　いいからお前らはゲームをすればいいんだ。そうすれば、このゴミ屑は返してやるからよ！」

埒^{らち}があかない。

ピエールのその取り巻きとも、下手に争えない事情があった。

そして、ユリウスがピエールの言うゲームの確認をする。

「お前らの言うゲームをすれば、ブラッドを返して貰えるんだな？」

「勝ち負けに関わらず返してやるよ。だが、一つだけ始める前の決まりがある。“聖樹に誓え”……これはやって貰うぞ」

聖樹と聞いてマリエが怪しむ。

（こいつらいったい何を　ま、まずい！）

ここで忘れていたゲーム知識を思い出すマリエだったが、先にユリウスが。

「いいだろう。その聖樹に誓ってやるからさっさと始める。ブラッドの手当を早く」

マリエは血の気が引いて顔が青くなった。

「駄目えええ！」

しかし、ピエールは口を開けて笑い始めた。

「もうおせえええ！ 聖樹の名の下に、この勝負は正式に認められたのさ！」

マリエやピエールたちの地面に特徴のある魔法陣が浮かび上がった。

その魔法陣を見たマリエが思い出す。

（聖樹 そうよ、こいつらにとって聖樹の名は何よりも重い）

信仰だけではない。

実利の面でも聖樹はとても重要な存在であり、そしてこのアルゼルの大地を支配している存在でもあった。

ユリウスが地面を見ながら、

「いったい何が！」

ピエールたちが笑っている。

「勝負方法は簡単だ。お前ら、自分たちで殺し合え。半分になったらお前らの勝ちだ。そうでなければ、お前らの負け。お前らが乗ってきた飛行船も、その中身も俺が貰う」

クリスが目を見開く。

「どういう意味だ！ そんな話は聞いていない。それに、アインホルンはバルトファルトの飛行船だ。俺たちに所有権はない！」

そんなことは関係ないというピエールたち。

「聖樹に誓った勝負だ。破ったら相応の報いが待っている。それに、お前らが仲間内で殺し合えばいい話だろ？」

ピエールは「さあ、殺し合って見せてくれ」と言って笑う。

ユリウスが言う。

「そんなことが出来るか！ お前らいい加減に」

すると、魔法陣から蔦が伸びてマリエたち全員の首に絡みつく。

マリエは抵抗せずにその場に座り込んでいた。

蔦を引き剥がそうとするグレッグだが、

「だ、駄目だ。取れない！」

ジルクが拳銃を取り出して鳶を撃つも、その程度ではどうにもならなかった。

「こんなことをして何の意味が」

苦しむジルク。

鳶が外れると、全員の首に薄い緑色の小さな印がついていた。

ピエールはそれを見て笑う。

「敗北者の印だよ。お前らが俺から飛行船や中身を奪い返そうとすれば、問答無用で聖樹がお前たちを殺す」

啞然とするユリウスたち。

「こんなことをしてただで済むと思っているのか？」

睨み付けるも、ピエールたちは笑っていた。

「お前が聖樹に誓ったのが悪い。何も知らなかったみたいだが、もう決まったことだ。お前ら、飛行船を取りに行くぞ」

ブラッドから腰を上げたピエールたちが、港へと向かい始めた。

マリエは頭を抱える。

「ど、どうしよう。あ、あに リオンに伝えないと」

皆がいるので何とか兄貴とは言わなかったが、狼狽しているマリエはリオンが何というのか怖くて仕方がなかった。

カイルが首を気にしながら走る。

「僕が伝えてきます！」

クリスも同行する。

「まで、私もいく。お前たちはマリエたちを屋敷の中へ！」

周囲が慌ただしく動く中、マリエはただ呆然としていた。

「……私、殺される」

自宅でノエルの面倒を見ていた。

「ノエルちゃん、いっぱい食べるね。俺、元気な子は大好きだ。だからもう少し頑張ろうな」

食事をさせながら様子を見ていた。

ルクシオンが俺を見ている。

『マスター、当面の必要な物は既に地下にご用意しています。ノエルの食事ですが』

そこで激しくドアを叩く音が聞こえてきた。

「話は後だ。はいはい」

ドアを開けると、そこには息を切らしたクリスとカイルがいた。

クリスは上半身裸で木刀を持っている。

「……お前はもう少し格好に気をつけた方がいいよ」

「バルトファルト、冗談を言っている場合じゃない。お前の船が！」

「アインホルンのことか？」

カイルが汗を拭いながら、

「それだけじゃありません。アロガンツも奪われたんですよ！ 船と、船の中身全てがピエールってこの国の貴族に奪われたんです！」

俺が目を細めると、クリスが港へと行こうと誘ってくる。

「あいつらは港だ。急いだ方がいい」

カイルが首に出来た痣を俺に見せてきた。

「あいつら、聖樹に誓うとか何とか言わせて、僕たちに呪いみたいなものを付けたんです。気をつけてください。あいつら、普通じゃありませんよ」

とにかくクリスに俺のシャツを貸し、港へと向かうことにした。

夜の港には街灯の明かりがそれなりにあった。

そんな中、俺たちを待つようにアインホルンの前にいたピエールという悪役が両手を広げ歓迎してくれる。

「よう。遅かったじゃないか」

わざわざアロガンツを船からだし、そして試運転を終えたのか笑っている。

「いい鎧じゃないか。外見は駄目だが、パワーがある。こいつを量産できれば、お前らの国なんかすぐに潰せるな」

馴れ馴れしくアロガンツを触るピエールたち。

クリスがピエールたちに怒鳴る。

「それはバルトファルトの物だ。俺たちが勝手に勝負をして賭けの対象には出来ない！」

ピエールが髪をかく。

「分かってないな。そんなのは関係ないんだよ。もうこれは俺の物だ。見るよ」

船体。

そしてアロガンツにも緑色の紋章が浮かび上がっていた。

「聖樹がこれは俺の物、だって認めた証だ。分かるか？ お前らの理屈は通用しないんだよ。だが、俺も鬼じゃない。もう一度だけ、その冴えないゴミ野郎と勝負してやってもいいぞ」

それを聞いてクリスもカイルも焦って俺に振り向くが。

「……勝負しない。好きにしろ」

俺が勝負をしないと聞いて、クリスが「すまない」と悔しそうに俯いていた。

カイルは少し疑った視線を向けてくる。

ピエールが笑っていた。

「何だ？ 似非貴族は意地もないのか？」

取り巻きたちも俺を馬鹿にするように笑っている。

「こんなのが伯爵なんて、王国は終わっているよな！」

「本当に間抜けだよな。聖樹に誓って勝負をするなんてよ」

「これで少しは利口になっただろ。よかったでちゅね」

うつとつしい雑魚共だ。

……顔は覚えたからな。

そして、俺の右肩に浮かんでいたルクシオンがピエールに近付く。

「何だ？」

ルクシオンがピエールに自己紹介を始めた。

『飛行船を管理する人工知能です。所有者変更に伴い、今日からは貴方をマスターとしてお仕えすることになりました』

ピエールたちが不思議そうに見ている。

「使い魔か？」

「飛行船の管理？」

「そう言えば、船員が一人もいなかったな。こいつ一匹で管理するのか？」

話し合っている取り巻きたち。

ピエールは俺に近付いて唾を顔に吐きかけてきた。

頬に奴の唾がかかる。

「使い魔にも裏切られた気分はどうだ？ 聞かせてくれよ」

俺は笑顔をピエールに向けてやった。

「……最悪だね」

逆鱗

マリエは屋敷の自室にいた。

ベッドの上に正座をして自分の身を案じている。

目の前にいるのは リオンだ。

ガチガチと歯を打ち鳴らし、小刻みに震えて青い顔をしている。

「……つまり、お前はアレか？ 重要なことを今の今まで忘れていた、と？」

怖くてリオンの顔が見られないマリエは頷く。

「ふぁ……ぁい」

返事も震えてうまく出来ない。

マリエがリオンを恐れる理由はいくつかある。

一つに、リオンの性格を知っているからだ。

自分が逆ハーレムを利用してアンジエを追い詰めようとした際に見せた反骨精神とでもいうべきか、やる時にはやるというのを知っていた。

普段は問題ないが、やると決めたらリオンはやるのだ。

そして重要なのが二つ目だ。

リオンは既に実戦を経験しており、人を殺している。

この差は非常に大きいとマリエは理解している。

ためらいが少ない。

人殺しに対するハードルが低くなっている。

（殺される。私　兄貴に殺される！）

そして三つ目。

マリエはリオンの前世の妹である。

リオンが怒る限界を知っており、妹ながらにそのラインを見極めていた。そこだけは絶対に超えないようにしてきた。

理由は怒らせると怖いから。

ねちっこく、そして目的を達成するためには手段を選ばないからである。

普段、面倒くさがっているが、怒らせてはいけないと理解していた。

そもそも怒るラインが非常に緩い。

ある程度なら許してくれるし、マリエも前世はそれを理解して頼っていたところがある。

だが、そのラインを超えたらどうなるか思い出すと、今にも倒れてしまいそうだった。

（だ、駄目。絶対に倒れたら駄目。泣き落としも無理。逆に苛つかせる。淡々と事実を語って謝罪するしかない。そうしないと……死ぬ！）

リオンがマリエの部屋を歩く音が聞こえた。

グルグルと回るように歩いている。

「もっと早くに知っていれば、対策も立てられたのに。お前の飼っている王子もどきが、早まらなければ俺はルクシオンも船もアロガンツも失わなかった。違うか？」

震えるマリエは、冷や汗が止まらなかった。

「ち、ちがいましえん」

呂律がつまく回らない。

マリエは今にも倒れてしまいそうな意識を、必死につなぎ止めている。

「……お前の処分は後で決める。先にブラッドの治療にいけ」

「はい！」

ベッドから飛び上がり、部屋を出て廊下を走るマリエは応急処置をしただけのブラッドの元へ向かうのだった。

だ　　が　　。

（どうしよう。私　　終わっちゃう！）

最大の支援者にして理解者でもあるリオンを敵に回したマリエは、かなり追い詰められていた。

マリエが部屋を出て行ったのを確認し、俺は顎に手を当てる。

「さて、これから忙しくなるな」

ノエルの世話もある。

さつさと自宅に帰ることにして、明日にでも色々と相談することにした。

翌日。

学園で相談した相手は、担任教師であるクレマン先生だ。

今日もはち切れそうなシャツを着ている。

いつもより真剣な顔をしているが、脚を組んで膝の上で手を組んでいた。

「……フェーヴェル家の次男坊ね。彼、学園でも指折りの問題児よ」
「他にも問題児がいたんですね」

そちらの方が驚きだ。

「方向性は違うのだけどね。それにしても、月並みで悪いけど大変だったわね、リオン君」

外見はともかく優しい先生なのは事実だ。

クレマン先生に色々と相談する生徒は多い。

特に女子が多く、男子はどうしても相談する際はためらいがちだ。

理由？ 身の危険を感じるからだ。

「それで、どうすれば飛行船を取り戻せるのか、だったわね」

「はい」

相談内容は、取られた物を取り返す方法だ。

こればかりは少し困る。

あいつらに、アインホルンを賭けてでも勝負したいと思わせなければいけない。

それも、対等に見える勝負をする必要がある。

「結論から言わせて貰えば、無理でしょうね。彼は七大　いえ、六大貴族の出身よ。対価を用意するにも、財宝程度では喜ばないわ」

「こちらは一人重症です。その線の上に文句を言えばどうです？」

クレマン先生は首を横に振る。

「聞き入れないでしょうね。何しろ、議会に参加する一人はフェーヴェル家の当主。ピエール君のお父上よ。他の議会に出る当主たちも、政治のための交渉材料にすることはあっても、真剣には考えないでしょうね」

外交問題を軽視している。

その理由が、防衛戦で勝利し続けてきた不敗神話　防衛戦限定だが、負けたことがないことに起因していた。

更に言えば、聖樹があるための慢心でもある。

「ピエールが欲しがる物は何かありますか？　六大貴族も欲しがっている物があると嬉しいですね」

クレマン先生が肩をすくめる。

「それこそ伝説の類いになるわね。伝説の武器とか、後は聖樹が生ま出す宝玉かしら？」

「宝玉？」

「聖樹に果実が実るのだけど、その中には種の代わりに濃縮された魔力を封じた玉があるのよ。数は多くないのだけれど、それを探すために聖樹の近くには常に飛行船が飛び回っているわ」

「聖樹がある島は聖域。」

宝玉は回収した者に所有権があるらしく、六大貴族も奪い合っているらしい。

「聖樹から無限にエネルギーを得られるのに、どうしてそんなものを欲しがるんです？」

「……どこでその話を聞いたの？」

クレマン先生の目つきが変わった。

どうやらマリエの知識は間違っていないかったようだ。

「さあ？ どこでしょうね。それで？」

話の続きを求めると、クレマン先生は諦めたのか説明に戻った。

「聖樹には手を出せないわ。果実も自分たちで取ってはいけけないの。取れない、と言った方がいいかしら？ だから、落ちそうな果実を見つけたら飛行船で待機して様子をうかがうわ。ちなみに、宝玉には愛が実る伝説があるのよ」

恋人同士で宝玉を手に入れると、その愛は永遠となるらしい。

ふ〜ん。興味ないな。

「興味なさそうね」

「婚約者がいるので」

「残念ね」

その残念とはいったいどういう意味だ？ 気になるが、聞きたくないので他の話を聞くことにした。

宝玉を得る方法では時間がかかる。

競争率もあり、手に入れるのは難しい。

留学生である俺には時間も限られている。

宝玉を探している時間も道具もない。

「では、その次は？」

「……六大貴族が血眼になって探しているものなんて、一つしかないわ。『聖樹の苗木』よ」

「苗木？」

「そう。でも、さっきのことを思い出して。聖樹に実った果実の中身は、宝玉よね？ あれ自体はエネルギーの塊で種じゃないの。なら、苗木はどうやって出来ると思う？」

種から芽が出なければ、そもそも苗木なんて手に入らない。

枝を切り落として植えるのも……クレマン先生の態度からするに駄目なのだろうな。

「だから伝説ですか」

「そういうことよ。六大貴族は欲しい物なんて全て自分たちで手に入れるわ。なければ、相手を挑発して戦争ね」

絶対的な自信から防衛戦を行い、勝利しては相手から賠償という形で財を得る。

……色々と見えてきたな。

「苗木ですか。その話、もっと詳しく聞きたいですね」

「私も伝説しか知らないわ。そうね、知っているとするれば……ナルシスキゅんかしらね？」

ナルシス“きゅん”？

学園の教員室。

個室を与えられているその人物の名前は【ナルシス・カルセ・グランジェ】。

六大貴族の出身者で、教師になったグランジェ現当主の三男坊である。

クレマン先生に紹介され、教員室に入るとソファアの上で寝ている教師が一人。

灰色の髪をオールバックにした、無精髭の男性は二十代後半だそうだ。

研究に没頭しているらしく、彼の授業は人気もないのか暇だと聞いた。

必須の授業ではないため、受講する生徒も少ないというかないらしい。

「ナルシス先生」

「ん？」

欠伸をしながら起きるナルシス先生は、俺の顔を見ると首をかしげていた。

「……トイレはここじゃないよ」

「いや、先生に用事があるんですよ」

「私に？ 何で？」

……本気で分からないという顔をしていた。

この教師、これでも攻略対象の男性の一人である。

不真面目な不良教師？　もしくは、研究馬鹿という感じだな。

「実は話が聞きたいと思ひましてね。留学生のリオンです」

すると、飛び上がったナルシス先生が俺の両手を掴む。

おい！　こいつ、ちょっと酒臭いぞ。

「ホルファートの留学生か！　実は私も会いたかったんだ！」

「そうなんですか？」

「待っていてくれ。すぐにお茶を　あ！」

慌ててお茶の用意をしようとしたナルシス先生は、本の山に足を取られ崩れた書類と本に埋もれてしまった。

随分と汚い部屋だと思ったが、何度もこんなことがあるのか倒れている本の山が沢山ある。

「……とりあえず、片付けから始めましょうか」

本の山から顔を出したナルシス先生が、俺を前に恥ずかしそうにしている。

「すまない」

部屋を片付けながら俺たちは話をした。

「冒険者と知り合いになりたかった？」

「そうだ。私はどちらかと言えばその場所に行つて直接指導するタイプでね。実際にダンジョンに入つて実地で学んで欲しいのさ」

自分の趣味でもあるらしいが、ダンジョンで古代のことを調べているらしい。

教員をしているのは、都合がいいから。

そして、六大貴族の出身者であるために、冒険者になれないのが原因のようだ。

「ホルファートは貴族出身者でも冒険者になれると聞いていたからね」

「なれるというか、なるしかないんですけどね。学園に入れば全員冒険者になりますよ」

「男女関係なく？ え、アレは本当に？」

頷くと驚いていた。

「一人一人が強いはずだね。以前留学できていた生徒たちも異様に体育関係の成績が良かったよ」

留学生を受け入れているアルゼル共和国。

だが、留学生が来たのは数えるほどしかないらしい。

お互いに知らない事が多いのもそのためだ。

「それで、俺の方の話ですけど」

「聖樹の苗木かい？ 確かに伝説だけど、発見自体は何度か報告されているんだ」

共和国の歴史上、苗木自体は発見されていると聞いて首をかしげる。

「なら、何で伝説なんです？」

「答えは簡単だ。大地に根付かなかったのさ」

見つけても枯れてしまう。放置しても枯れてしまう。

研究したくとも数がないそうだ。

アルゼル共和国としては、何としても確保したいのが聖樹の苗木らしい。

「聖樹も生きている。当然、そうなるといつか枯れるだろう。その前に、苗木はどうしても確保して新しい聖樹を手に入れたいのが共和国の考えだね」

百年後、二百年後のための計画。

ただ、気になった点が一つ。

「大事なのは分かりますけど、将来的に必要なのであつてすぐに欲しがるようには思えませんね」

貴族たちが喉から手が出るほどに欲しいようには思えなかった。

ナルシス先生が何か言いたそうにして、言葉を飲み込んでいる。

手に入れたい理由はあるが、俺には教えられないのだろう。

「それで、その苗木がある場所はどこですか？」

「苗木自体の発見例は、大陸各地のダンジョンであればどこでもあるね。まだ発見されていないとしても、どのダンジョンにも可能性はあると思うよ」

どこでもいい？

俺が気になっていると、ナルシス先生が答えてくれた。

「アルゼルのダンジョンはね 全て聖樹に繋がっているのさ。そもそも、この大地にも根が深く入り込んでいる。全てが聖樹に繋がっているとも言えるね」

「不思議な国ですね」

「そう？ アルゼルでは普通だから分からないけどね。でも、聖樹の苗木なんか欲しがってどうするの？」

俺はピエールの名前を出した。

説明すると、ナルシス先生が額に手を当てる。

「……同じ六大貴族出身者として申し訳なく思つよ」

「だったら助けてくださいよ」

ナルシス先生が首を横に振る。

「君たちには分からないだろうが、七大 いや、六大貴族というのは一国家の下にいる貴族じゃないのさ。国家の集合体だと思つて欲しい」

すると、ピエールのフェーヴェル家に文句を言うのは、内政干渉になるということか？

フェーヴェル家は別国家……互いに色々と思惑がある、と。

いいことを聞いた。

「ということは、ピエールに味方もしないと？」

ナルシス先生が笑っていた。

「そういうことだ。私から注意くらいは出来るが、彼は聞き入れないだろうね」

「そんなに酷い奴なんですか？」

苦笑いをするナルシス先生が、ピエールについて話をするのだった。

「酷いというか、なんというか……好き勝手にしているからね」

どうやら学園での評価は低いようだ。

俺は少しずつ、頭の中で作戦を組み立てていく。

聖樹の苗木

休日にマリエたちの使用している屋敷を訪れた。

相変わらず俺の前で大人しいマリエは、目を合わせてこない。

ちょっと意地悪をしすぎてしまったか？

「ブラッドの様態は？」

マリエがガタガタと震えながら答える。

「意識は戻ったけど……怪我が酷くて、治療はしたけどまだ動けない……かも」

俺を怖がるマリエに悪戯したくなる。

「そうか。それはそうと、アレから思い出したことはあるか？ 特に、聖樹の苗木についての情報が欲しい」

マリエがビクリと反応すると、すぐに部屋に戻って一冊のノートを持って来た。

どうやら、アレから必死に色々と思い出してそれを書き記したようだ。

役に立つ情報かどうか分からないが、ページをめくっていくと苗木についても書かれていた。

その場で読む。

「聖樹の苗木……主人公が手に入れるキーアイテム、か。アイテム効果はないに等しいな」

主人公が苗木を手に入れてしまい、そこから出自が判明する流れが本筋のようだ。

時期的には二年生の中盤頃。物語の折り返し地点か。

時期としては近いな。

聖樹についての記述もあった。

そこにある記述のいくつかは、俺は強く興味を示す。

「……これなら、苗木を手に入ればどうにかなるか」

マリエが俺の言葉にいちいち反応している。

そう言えば、昔　前世で怒ったときもこんな感じだった。

しばらく俺のご機嫌取りをしてきたのも同じだ。

つい、昔を　前世を思い出してしまった。

「ノートは借りていくぞ」

マリエが何度も頷いていた。

リオンがブラッドの見舞いに向かうと、カイルとカーラがマリエを心配していた。

「ご主人様、もう大丈夫じゃないですか？ 伯爵、怒っていませんでしたよ」

カーラも慰めてくる。

「あの様子ならもう大丈夫ですって。きつといつもみたいに何とかしてくれますよ」

そんな二人に対して、マリエは酷く淀んだ瞳を向ける。

「何とか？ 大丈夫？ 二人とも、まったく理解していないわね」

カイルが首をかしげる。

「そうですか？ 怒っているようには見えなかったですよ」

「それが間違いよ。あいつは本気で怒ったらそれを悟らせないのよ。ニコニコとした笑顔で追い詰めて、こっちが許しを請うまで続けるわ。しかも、こっちが苦しむ様子を見て楽しむ最低の奴なのよ！」

カーラが少し考え、リオンならあり得ると思ったのか震えた。

以前、カーラもリオンを騙して痛い目に遭っている。

今も許されていないとしたら、これほど怖い話もない。

何しろリオンは、現在王国最強の騎士だ。

誰も倒せなかった黒騎士を倒し、王国の危機を救った英雄である。

「ど、どどど、どうしましょう、マリエ様！」

怒らせたらいけない人物……それがリオンだ。

カイルはまだ理解していない顔をしていた。

「そうかな？ もう怒っていないように見えただすけど」

「甘いのよ！ あいつが本気になったら詰むわよ。人生が詰むからね！ どうして私ばかりこんな目に遭うのよ。終わった。私の第二の人生終わ……ってたまるかあああ！」

叫ぶマリエに二人が驚く。

そんな二人を前に、マリエは覚悟を決めるのだった。

（こうなれば、やられる前にやってやる。兄貴に比べたら、ピーエルなんて小物以下よ。自分で何とかしないと、本当に兄貴に……殺される！）

覚悟を決めたマリエは、二人を連れて出かけることにした。

「二人とも急いで準備をして。大使館へ向かうわ」

覚悟を決めたマリエの背中を見た二人は、少し格好いいと思って目を輝かせてみていたのだった。

ブラッドの部屋。

椅子に座り、横になるブラッドと話をする。

顔の怪我は随分と良くなっているが、体のあちこちに薬を塗ったのか薬品の匂いが部屋に漂っていた。

「随分といい顔になったな」

皮肉を言えば、ブラッドも返してくる。

「怪我をしても僕は美しいからね。羨ましいだろ？」

「それだけ言えれば十分だな。それで？　いったい何があった？」

事情を聞けば、ブラッドは苦しそうにしながらも話してくれた。

ピエールたちに校舎裏に呼び出されたこと。

その後、魔法で戦おうとしたら、圧倒的な実力差を見せつけられたなど。

そして、ブラッドが私見を述べる。

「あいつらの魔法だけど……何か大きな別の力に守られているみた

いだ。それに、こちらは何かに邪魔をされている気がしたよ」

別な力。

大体予想はついている。

聖樹にこだわっている六大貴族。

どう考えても聖樹が関わっている。

無限にエネルギーを供給してくれる聖樹だが、貴族たちには別の恩恵もありそうだ。

マリエのノートにそれに関する記述もあった。

「……バルトファルト、早まるなよ」

ブラッドの言葉に、俺は鼻で笑ってやった。

「一度早まって失敗したお前らと一緒にするな。俺が何かするとき、必ず勝てる見込みがあるときだけだ」

俺の言葉に恥ずかしそうに笑っているブラッドの歯を見れば、折れたと聞いたが完治していた。

これもマリエの力か？

あいつ、リビアには劣るが、治療魔法の才能は本物だったらしい。下手に欲を出さなければ、治療魔法で稼げたはずだ。それなりに

裕福な暮らしを送れただろうに。

欲をかいて失敗する典型だな。

「それを言われると言い返せないな」

「寝とけ。俺は少しやることがあるからな」

マリエ曰く、体力は回復してないためしばらく動けないらしい。

……大丈夫だ。

まだ使える駒が四つもあるから。

あいつらに働いて貰うとしよう。

大使館。

マリエは一番偉い役人を前に抗議していた。

「何で文句一つ言えないのよ！」

「お、落ち着いてください、マリエ殿！」

ユリウスの女という立場であるマリエに、役人も困り果てていた。

ホルファート王国の立場を説明する。

「いいですか？ アルゼル共和国とは事を構えない。これがホルファート王国の大前提です」

マリエは苛々していた。

（お前らが弱腰だから調子に乗るんでしょうが！ このままだと私が殺されるわ。何としてもアルゼルに圧力をかけて、飛行船を取り戻さないと）

「ビビってんじゃないわよ。防衛戦最強？ そんなの、外交努力で何とかしなさいよ。そうだ！ 経済封鎖！ 経済封鎖をするのよ！ 周辺国と組んで囲んでやるのよ！」

役人が慌ててマリエを止める。

「止めてください！ そもそも、経済封鎖で困るのはホルファートなのです」

「え？」

マリエが、せっかく思い付いた名案が否定されて固まった。

「アルゼル共和国は、魔石の輸出国です。ホルファート王国も、国内で消費する魔石をアルゼルから購入しています」

狼狽えるマリエは、王都にあるダンジョンを思い出した。

「王都にダンジョンがあるじゃない。魔石ならそこから得られるわ」

「大陸全土に必要な魔石を、一つのダンジョンではまかないきれま

せん。それに、飛行船を動かすにも魔石が必要です。毎年莫大な量が消費されており、国内だけでは足りないのです」

それを海外から買い付ける場合、手頃なのはアルゼル共和国だった。

大量の魔石を輸出しているのが一点。

そして、二点目は安定して供給してくれるため、ホルファート王国としては非常に助かっていた。

国内で不足している魔石のほとんどを、アルゼルに頼っている。

「……エネルギー問題」

頭を抱えているマリエに、役人が畳みかけてくる。

「それにアルゼルの周辺国ですが、王国と繋がりが薄いですからね。協力できるかどうか怪しいですし、アルゼルと組んで我々を出し抜こうとする国だって過去にいたわけですし……」

マリエが想像できる打開策など、とつくに試されていた。

マリエの頭の中が、危機的状況に加速していく。

（フリーエネルギー……そ、そう言えば、そのエネルギーでアルゼルは生産能力が高かったわね。エネルギー問題なんてないから、手に入る魔石は海外に売れば良いし、自分たちは他の資源も豊富で生産能力が高かったような……）

マリエが叫んだ。

「そんなのチートじゃないのおおー！」

役人はマリエの「チート」という発言に首をかしげるが、アルゼ
ルが非常に豊かであるのは同意する。

「確かに卑怯と言っていい大地ですね」

資源は豊富でエネルギー問題もなく、大地は肥沃……マリエは絶
望した。

「こんな国に喧嘩を売って勝てるわけがないじゃない」

役人も理解してくれたかと安堵した。

「そういうことです。ご理解いただけたようで何より。ブラッド殿
に関しては、飛行船を手配して本国に療養のため戻させます。安心
してください。事情は理解していますので、処罰されないように報
告しておきます」

国力はアルゼル共和国の方が上と知り、マリエは絶望するが。

（こんなところで諦めていられない。必ず何とかしてやるわ）

目を血走らせ、次の一手を考えるのだった。

アルゼル共和国の中央には、聖樹のある大地がある。

そこから巨大な木の根が七つの大地に伸び、結びつけていた。

聖樹のある大地も小さな島ではなく、そこには七大貴族　今は
六大貴族となった当主たちが集う議会を開催する建物がある。

議会議事堂と言われるが、聖樹神殿とも呼ばれている。

かつて聖樹を信仰し、神殿として利用していた場所でもあるからだ。

聖樹の根元近くにある巨大な建造物だが、聖樹があるために小さく見えてしまう。

大きな高い塔である議事堂に集まった六大貴族の当主たち。

丸いテーブルを使用しているのは、優劣を付けない配慮だった。

一つ席が空いており、そこは議長を務めていたレスピナス家の椅子だった。

代理で議長を務めているのは【アルベルク・サラ・ラウルト】だ。

茶色の髪をオールバックにした、鋭い目つきの中年男性だ。

背が高く筋肉のついたしっかりとした体つきをしている。

顎を撫でながら、今回の議題について話をする。

「ホルファート王国の留学生と問題を起こしたか。フェーヴェル家

の男子が関わっているそうだが？」

フェーヴェル家の当主は腕を組み、そして不満そうにしている。

「その程度はどうにでもなる。ホルファートとは一度戦ってみたかった。協定を見直すためにも、一度戦って實力差を見せつけておきたかったからな」

アルベルクはそんな態度のフェーヴェル家当主に内心呆れた。

（手柄欲しさに煽ったか？　もしくは、本当にただの馬鹿息子の暴走か……）

フェーヴェル家の当主【ランベール・イオ・フェーヴェル】は、額が大きく後退した小柄で太った男だ。

アルベルクからすれば小物だったが、少し厄介でもある。

「ホルファートと戦争をすると？」

そう問いかければ、

「フェーヴェル家だけで対応して見せましょう。最近、活躍の場がなくて家臣や部下たちも暇を持て余しているのですね」

他の当主たちがそれぞれ違った反応を見せている。

忌々しそうにしている者もいれば、興味がない者もいる。

もう一つは　。

「……船員を必要としない飛行船を手に入れたと聞いた。それに、とんでもない鎧も手に入れたそうだが？」

【フェルナン・トアラ・ドレイユ】という金髪の青年が問う。

緑色の瞳はとても力強い意志を感じる。

ランベールは微笑むが、醜い笑みになっていた。

「王国も少しは進歩しているらしい。解体して調べたいが、息子が玩具にしているね。準備ができ次第、うちで解析して量産予定だ」

フェルナンは目を細める。

「聖樹を利用して酷い真似をしたそうですね。不用意に聖樹の力を利用するのは危険だと思いますが？」

「それ以上は止めて貰いたいな、フェルナンの小僧。フェーヴェル家に口出しをするのかな？」

言われてフェルナンが悔しそうに黙る。

同じ国にいながら、その関係は他国のトップと同じだ。

彼ら一人一人が王でもある。

「何か気になることでも？」

アルベルクがフェルナンに話を振る。

アルベルクも、ホルファートの一件はあまり重要視していなかった。

だが、

「付き合いのある商人からの情報ですけどね。王国の商人と話す機会があったと。随分と若い騎士が活躍して英雄になったらいい」

六大貴族の当主たちは興味がない。

他国の英雄も、アルゼルに来れば並の騎士程度の實力しか出せないのだから。

アルベルクも同様だ。

「若い英雄か。なら、相手は公国だったか？ 内輪揉めで成り上がった騎士だな」

公国は元々王国と関係があり、アルゼルからすれば内輪揉めに見えていた。

フェルナンは難しい表情をしている。

「その若い騎士 留学してきている男子生徒と同姓同名なのだが？ 気にならないのですか？」

ランベールは愉快という感じで笑っていた。

「それはいい。戦争になれば、世間は広いとその若造に教えてやれ

る。私の息子たちも手柄を欲していましたね。丁度いい手柄首だ」

侮っているランベールに、フェルナンは何かを言おうとしてアルベルクに止められた。

「この話はここまでだ。次の議題に移ろうじゃないか」

こうしてホルファートの話題は流されてしまった。

アルゼルのダンジョン

早朝の教室は 臭かった。

クレマン先生が叫んでいる。

「ちょっと！ いったい誰がこんなことをしたの！ 掃除よ！ 掃除よ！ 除よ！ ホームルームは中止して、全員で掃除をします」 掃

俺の机にばらまかれたゴミには、生ゴミもあった。

教室に置いていた教科書にノートも酷い状態だ。

ズタズタにされ、ついでに机や椅子もボコボコだった。

「酷いことをするよな」

クラスの生徒たちは互いに視線を合わせ、何も言えないのか黙って立ち上がり掃除を開始する。

俺には話しかけても来ない。

まさか異世界でいじめを経験するとは思ひもしなかった。

ただ 内心で俺は笑いが止まらなかったよ。

ナルシス先生の個室。

クレマン先生と共に訪れると、ソファアに座って話をする事になった。

俺が煎れた紅茶を飲みつつ、野郎三人での話し合いだ。

申し訳なさそうにしているナルシス先生だが、

「本当に何を考えているんだか……ところでクレマン先生、近すぎませんか？」

「あら、私っちらはしたない。でも、ソファアが少し小さいの。我慢してね、ナルシスキゅん」

「そ、そうですか」

俺の前に座っている二人だが、距離がとても近く肩を寄せ合っている。しかし、俺から見てクレマン先生の方にはまだ余裕があった。

……黙っておこう。

「ピエール自体は登校していないと聞きましたか？」

学校に姿を見せないピエールが気になっていると、ナルシス先生が答えてくれた。

「君の持ち込んだ鎧で遊んでいるらしい。港からの苦情が多くて困っているよ」

クレマン先生も同様だ。

「凄い出力らしいわね。王国では既に主流なのかしら？」

アロガンツ　王国にはレプリカとして報告しているが、中身は改修しており以前よりも最適化しているとルクシオンが言っていたな。

「アレはロストアイテムでしてね。俺が発見しました。主流ではありません」

ロストアイテムと聞いて、ナルシス先生の目が輝き出す。

この人はダンジョンとかロストアイテムが好きな人だ。

絶対に興味を持つと思った。

「その歳でダンジョンに入ってロストアイテムを発見したのかい？それは凄いね。その時の話を　クレマン先生、ちょっと顔が近いです」

「ナルシスキゅん、今はそんなことを話している場合ではありませんよ」

だが、俺は　。

「いえ、丁度いいのでお話ししますよ。いつそナルシス先生とダンジョンに入るのも良いかも知れませんか。ほら、今は登校しても問題が多いので」

クレマン先生が大きな体で肩を落としていた。

「ごめんなさいね。生徒たちも、六大貴族の関係者が絡むと口をつぐむしかないわ。昔はこんなこともなかったのに」

昔　まだレスピナス家が存在していた頃だろうか？

クレマン先生とは逆に、やる気を見せるのはナルシス先生だ。

「ダンジョンか。いいね。気分転換に持って来いだよ。どこか行きたい場所はあるのかな？　ないなら、こちらでいくつか候補をピックアップするよ」

ウキウキしているナルシス先生に俺は言う。

「では　レスピナスの洞窟をお願いします」

ナルシス先生が少し驚いていた。

「あそこは難易度が高い。準備に時間がかかってしまうよ。人手も集めないと」

レスピナスの洞窟は、ゲーム的にも難易度が高いダンジョンだ。

マリエのノートに書いてあった。

「心配しないでください。人手なら俺の方で手配します。たまには役に立って貰わないと困る連中がいますからね」

二人が首をかしげていた。

ついにあいつらに頑張つて貰うときが来た。

アインホルンがある港。

そこで灰色の大きな機体が、飛行船の近くをもの凄いスピードで通り抜けた。

『どけえええ！』

アロガンツに乗るピエールが、飛行船が出入りをする港で遊んでいた。

飛行船と飛行船の隙間を通り抜けると、飛行船が通り抜けたアロガンツの衝撃に揺れている。

アインホルンの甲板では、ピエールの取り巻きや家臣たちがいた。食料庫から持ち出した食糧に、自分たちで持ち込んだ酒で飲み食いしている。

アインホルンの調査に来た家臣たちも、仕事を放置して遊んでいた。

その様子を物陰から見ているのは、ルクシオンだった。

周囲の飛行船から抗議のためか通信が入るも、アインホルンに掲げられたフェーヴェル家の旗を見て黙ってしまう。

甲板の上にいる家臣たちが、酒を飲みながら話をしていた。

「坊ちゃんはその玩具がお気に入りか？」

「見てくれは悪いが、パワーはあるからな。持ち帰って改造するって話だ」

「それにしても、人が必要ない飛行船なんてどう調査すればいいんだ？」

アインホルンの調査に来てみたが、彼らが分かったのは“自分たちでは分からない”ということだけだ。

アインホルン自体はこの世界の技術力で再現可能だ。

しかし、動かしているロボットたちを、彼らは調べられなかった。

ロボットたちを解体してしまうにも、領地に運んでからでないと最悪アインホルンを動かせなくなる。

好き放題に暴れ回っているピエールたち。

港では随分と嫌われていた。

ルクシオンが船から飛び立ち、港にいた作業員たちの場所まで移動する。

そこで三人の作業員がアインホルンを見ながら文句を言っていた。

「ふざけやがって」

「この前は商船がバランスを崩して怪我人が出たんだぞ」

「王国の船だろ？ 抗議しないのか？」

「フェーヴェル家の次男坊が奪ったのさ。強引なやり方で奪ったと聞いたな」

徐々にピエールたちが何をしたのか広まりつつあった。

アロガンツに乗り込んだピエールが、調子に乗って他国の船の甲板に降り立ち武器を向けて威嚇している。

『フェーヴェル家のピエール様だ！ 誰か戦おうという奴はいないのか！』

アロガンツの性能に酔いしれている。

誰も戦おうとしないので、つまらなそうに飛び立ってまた迷惑行為を繰り返していた。

『誰か俺と戦えよ！』

迷惑行為を繰り返すピエールを見て、取り巻きも家臣たちも笑っていた。

すると、今度は見るからに怪しい連中がアインホルンへと向かっていた。

格好は派手なスーツ姿。

スーツの下には武器を隠していたが、ピエールの取り巻きたちはアインホルンの中へ招き入れていた。

マリエの屋敷。

顔を出すと、怯えたマリエがお茶を出してきた。

それを飲んで一言。

「お湯が適温じゃないな。やり直しを要求する」

「は、はい！」

慌ててカップを下げるマリエの姿を見て、少しは可哀想になってきたが黙っておこう。

たまにはいい薬になる。

あいつはすぐに調子に乗るからな。

……こんなことを口にすれば、いつもは皮肉を言ってくれる丸い奴がいたのにね。いないと寂しく感じてしまう。

部屋にジルクが入ってきた。

「バルトファルト伯爵、マリエさんをいじめないでいただきたい。我々にも非はありますが、この扱いは酷すぎます。やるなら私にすればいい！」

お茶を煎れ直せと言っただけでこの言い草だ。

まだ色恋で脳みそが支配されているらしい。

「そうか？　なら、お前は今回のメンバーに決定だ」

「メンバー？」

部屋に今度はクリスが入ってきた。

「おい、マリエが泣きながら温度計でお湯の温度を測っていたぞ。いったい何が」

「剣術馬鹿も連れて行くか」

「は？」

二人が困っているところで、今度はユリウスが入ってきた。

「おい、マリエがティーポットにお湯と水を交互に入れてブツブツ何か言っていたぞ。何の実験だ？」

部屋に三人が入ってきたので、俺はこの面子でいいかと立ち上がった。

「よし、お前ら三人準備をしろ」

首をかしげている三人。

部屋にはマリエが戻ってきた。

「煎れ直してきました！」

カップを手に取り、紅茶を飲んだ俺は笑顔で告げてやった。

「まずい」

泣き出すマリエが少し面白い。

「ところでマリエ、こいつらを借りていいか？ 大体、二週間くらいだ」

マリエは顔を上げた。

「ユリウスたちを？ 別にいいけど」

するとユリウスがとても驚いていた。

「マリエ！ ちょっと待ってくれ。まだ何も確認していないのに、俺たちを貸し出すのか？」

マリエは結構冷たい顔をしていた。

「色々と問題があつて学園にも登校できないし、みんな遊んでいるじゃない」

ジルクが言い訳をする。

「いえ、遊んでいるわけではないのですが」

マリエは俺を見る。

「どこに行くの?」

「ダンジョンだ。少しばかり回収したいアイテムがある」

マリエは少し首をかしげていた。

「ならグレッグの方が良くない?」

「あいつは強面だからな。屋敷の護衛に丁度いい。こいつら三人でいいや。あと、ノエルを預けるから大事に面倒見るよ」

クリスが少し怒っている。

「あ、扱いが酷くないか?」

マリエが手を叩く。

「はい、みんな準備をして。あに リオンに迷惑をかけないのよ。しっかり稼いできなさい」

マリエに言われ三人が酷く微妙そうな顔をし、そして俺を見た。

ユリウスが俺に尋ねてくる。

「いったい何を考えて……いや、何をするつもりだ、バルトファルト?」

俺は口を三日月のように歪め、そしてこの場にいる全員に告げる。

「……俺、やられたらやり返す子だからさ」

アルゼル共和国には、相応にやり返させて貰うでしょう。

レリアは少し焦っていた。

学園の廊下を歩く速度が少し速いのは、焦りから来るものだ。

（いったいどうなっているのよ）

ピエールが留学生たちに絡んだ。

それくらいは、普段のピエールならあり得るかも知れない。

ゲームと現実の違い。

レリアはそう考えていたし、注意もしてきた。

（間違いだった。留学生として五人が来て、その中の数人が知らないモブだと思っていたけど、あいつら……私と同じだ）

明らかにモブ顔の男子。

少し可愛い女子と普通の女子……留学生としてくるのだから、他にも生徒がいてもおかしくないと思った。

むしろ、ホルファート王国の男子が見られてラッキーと思っていた。

だが……。

「ねえ、聞いた？ ホルファート王国の女子って奴隷を側に置くらしいわよ」

「それ聞いた。あのマリエって子、可愛いエルフの子が使用人だって。羨ましいわ」

「名前は カイルだっけ？」

そんな噂話を聞いて、焦って色々調べてみればおかしいことだらけだった。

出来るだけ関わらないようにしてきたのが仇になっていた。

（姉貴もいないのに、どうしてくれるのよ）

レリアは 転生者だった。

あの乙女ゲーを知っており、一作目も知っている。

カイルが、主人公の専属使用人であるのも知っていた。

慌てて調べてみれば、分かったことはどれも耳を疑うことばかりだ。

リオンやブラッドたちの教室に來ると、知り合いが出てきた。

「どうしたの、レリア？」

「ね、ねえ、留学生のことなんだけど」

知り合いがレリアを連れて、人気がない場所に行くと話をしてくれる。

「今は二人とも来ていないわよ。それより、気をつけた方がいいわ。ピエールに目を付けられちゃう。あんた、エミールと親しいけど、何をされるか分からないからね」

「う、うん。それより、あの黒髪の男子のことを聞いてもいい？」

知り合いの女子が首をかしげていた。

「ブラッド君じゃなくて？ あんた、地味な男子が好きよね」

「そっいうのじゃないから」

笑っている女子に真剣な顔を向ける。

相手も何か察したのか リオンについて話をする。

「リオン……えっと、フォウ・バルトファルトだったかな？ 伯爵らしいわよ。公国との戦いで活躍したとかブラッド君に聞いたけど、胡散臭いのよね。凄そうに見えないし。あ、でも、ピエールに奪われた飛行船は彼の所有物だったらしいわよ」

レリアは怪しむ。

（飛行船を持った伯爵？ 公国との戦いで活躍？ 公国との戦争つて、こんなに早く始まるわけがないし、終わっている時期じゃない）

リオンを怪しむレリアは、更に聞く。

「あの小柄な女子のことは知らない？」

「マリエ？ ブラッド君の婚約者じゃないの？」

それを聞いてレリアが怪しむ。

「他のクラスにも聞いて回ったら、全員が別の男子の婚約者だって言っただよ」

あるクラスではユリウスの婚約者。

違うクラスではグレッグの名前が出ていた。

だからこそ怪しい。

「そういえば、リオン君と中庭で何かコソコソしていたとか聞いたわ。男子が好きそうな子だから、人気があるのかしらね？」

レリアは気が付いた。

（コソコソ？　もしかして、転生者同士で何か相談？）

早く接触しなかったレリアは、とにかく留学生たちの話を聞く。

「ねえ、今はどこにいるの？」

「留学生？　今は登校していないわよ」

レリアは目眩を覚えるのだった。

（誰も学園に登校してこないってどういうことよ！ 一人くらい顔を出してよ！）

レスピナスの洞窟。

七大貴族の名前を冠する洞窟の前に、俺はライフルなどを担いでいた。

「絶好の冒険日和だな」

そんな俺の発言にツツコミを入れてくれるのは、ナルシス先生だ。

「洞窟だから天気はあまり関係ないと思うよ」

だが。

「まさに冒険日和だ。見ろ、太陽が俺たちを祝福しているみたいだ！」

テンションの高いユリウスが剣を抜いて天に掲げていた。

クリスも同様だ。

自分の剣を抜いて輝きを見て微笑んでいる。

「こんな状況でもワクワクしてしまうものだな」

嬉しそうに微笑むクリスに同意するのはジルクだった。

拳銃やらライフルを確認し、残弾数をチェックしている。

「楽しみですね。最初はやる気ありませんでしたが、こうしてダンジョンを前にするとウキウキしますよ。今日は爆弾も持って来ちゃいました」

楽しそうな俺たちを前にして、ナルシス先生が青い顔をしている。

先生は最低限の護身用の武器しか持っていない。

「き、君たち、ダンジョンに何を求めているんだい？ あと、爆弾はちょっと……」

ジルクが笑顔で、

「大丈夫です。これでも爆薬の知識はありますから。洞窟内でもしつかり爆破できます」

「そうじゃなくて！」

楽しそうな三人。

それに戸惑う教師。

俺たち五人で、難易度の高いとされるダンジョンにこれから挑む。

「待っているよ、苗木ちゃん。今……迎えに行くからね」

冒険者の子孫たち

洞窟内は不思議な場所だった。

時折大きな木の根が露出しており、壁かと思えば木の根だとナルシス先生に説明され驚いた。

見上げるほどに大きな木の根とかはじめて見たよ。

それに洞窟と言うが、天井が空いている場所があり光が差し込む。そこには植物が生えており、いい休憩場所になっていた。

「……おい、後ろから来ているぞ。百足みたいな奴だ」

さて、そんなアルゼルのダンジョンだが、こちらも当然のようにモンスターたちがいた。

俺が振り返ってライフルを構えると、ジルクも構える。

ユリウスとクリスが剣を抜き備えると、

俺はスマホ型の端末をポケットにしまう。

ライフルのスコープを覗けば、暗闇でも良く敵が見えた。

引き金を引くと洞窟内に発砲音が響き、そしてモンスターを撃ち抜く。

黒い煙になって消えて行くモンスター。

次々にわいて出てくるので、また構えて引き金を引く。

すると、ジルクも視認したのか素早く射撃を行い三体があつという間に撃ち抜かれた。

「やるな」

「それはどうも。射撃は得意でしてね」

ライフルで戦闘が終わると、俺は端末を取り出して周囲の索敵を行う。

「……大丈夫だ。進もう」

ユリウスが剣をしまいながら、

「一体くらい残せ。お前ら、さっきから自分たちだけで処理していないか？ 弾数を考えたら、もっと俺たちにも回すべきだ」

クリスも不満そうだった。

「入ってからまだ一度も戦っていないじゃないか」

ライフルを担ぐ俺は、そんな二人に呆れる。

「黙って体力を温存しておけ。働いて貰うときは、泣くまでこき使つてやるからさ。ほら、行くぞ」

俺たちが移動を再開し始めると、ナルシス先生がもう諦めたような顔をしている。

「本当ならもつと人数を増やして挑むような場所なんだけどね。ホルファートの冒険者は、みんな過激なのかな？」

過激というか……そもそも、冒険者の認識が違う。

「アルゼルだと、冒険者は学者のように調べる人と、単純に採掘の二つがメインでしたか？」

「そうだね。確かに護衛はモンスターとも戦うけど、ここまで好戦的な冒険者も少ないと思うよ。多くはダンジョンから発掘される魔石狙いだけど、学者気質の冒険者も少なくないからね」

俺は笑う。

「王国の冒険者は逆に略奪者ですよ。調べるよりも奪うのが本質です」

それを聞いてナルシス先生が少し不満そうだった。

ダンジョンに入り遺跡を調べるのが好きなタイプには、俺たちのようなタイプは嫌いな存在だろう。

ユリウスが俺に注意してくる。

「バルトファルト、誤解を招くような言い方は止せ。先生、俺たちだって極力遺跡は壊さないようにしている」

鼻で笑ってやりながら、俺はユリウスに聞いてやった。

「ユリウス、宝が隠された扉があったらどうする？　だが、その扉はどうしても開かない扉だ。お前ならどうする？」

「決まっているじゃないか」

ナルシス先生が、ユリウスに期待した視線を向けていた。

「そうだよ。そんな扉があればまずは調査」

「破壊する！」

ナルシス先生がガツカリしていた。

俺は笑ってやった。

「これが王国の冒険者ですよ、先生。こいつら脳筋だから、放っておくとすぐに破壊しようとしてますから注意してください」

クリスが俺の顔を怪しそうに見ていた。

「自分が頭脳派と言いたいのか？　言っておくが、頭脳派はそもそも一人でダンジョンに入らないぞ。お前は学園に来る前に、一人でダンジョンに挑んで死にかけたそうじゃないか」

俺の話になり、ナルシス先生が興味を示した。

「それは是非とも聞きたいね。古代の遺跡に入っただって？　ど

んな場所だった？」

メモを取り出していたので、移動しつつ話をする。

「古代人の遺跡でしたね。飛行船が置いてありましたよ」

ユリウスも話に加わってきた。

「パルトナーを見つけたダンジョンか。公国との戦いで沈んだが、あれはいい船だったな」

ナルシス先生が叫ぶ。

「え、沈んだの！　というか、大事なロストアイテムの飛行船を戦争で使ったの！？」

俺は笑って誤魔化した。

「おっと、この崖は登らないと駄目だな」

荷物から道具を取り出すと、ナルシス先生が俺の腕を掴んでくる。

「ちょっと聞き捨てならないよ！　リオン君、どうして古代の貴重な財産で戦争したりするの！　もっと大事に扱ってよ！」

ルクシオンがこの場にいれば『そうですね。もっと大事にしてくれてもいいんですよ』なんて言いそうだな。

俺がロープを用意すると、クリスが荷物を下ろす。道具を装着して崖を登り始めた。

「先に行くぞ」

嬉しそくに昇っていくクリスを俺たちは見送る。

「頼む」

先にクリスが足場やら色々と用意しながら昇ってくれる。

俺たちは後からゆっくり昇ればいい。

そんな様子を見て、ナルシス先生は呆れていた。

「君たちはたくましいね。私なら魔法を使ってしまっけどね」

ジルクはライフルを持って周囲を警戒していた。

「こんなの必須技能ですよ。あと、魔法は温存しててください」

洞窟の中。

崖の上には光が見えた。

天井に穴が空いているのだろう。

俺は端末を見ながら呟く。

「……そろそろ目的地だな」

マリエの屋敷。

訪れたレリアは、老犬を抱えているカーラと話をしていた。

「い、いないですって!？」

ノエルを抱きかかえたカーラは、レリアの訪問に少し疑った視線を向けている。

「あの、お庭でこの子のお散歩というか気晴らし中だったんですけど」

迷惑そうにしているカーラに、レリアは焦りつつ質問をした。

「どこに行ったのよ!」

「ダンジョンに行くと言っていましたね。えっと……洞窟?」

どうして学園に来ずにダンジョンに向かっているのか?

レリアは問い詰めるのを止めない。

「洞窟タイプなんていくらでもあるわ。どこのダンジョン? 名前
は?」

カーラが目を細めている。

「そこまで聞いてどうするつもりですか?」

レリアは内心で焦る。

（駄目だ。警戒されて話が聞き出せない。こっちが仲間だと教えたけれど、この子自体は転生者じゃないし）

転生者なら食いつくような単語を口にしてみたが、カーラは首をかしげているばかりだった。

「……わ、分かったわ。戻ってきたら、私が訪ねてきたと伝えて」

今日は帰ることにした。

（まずい。まずいわ。まさか、私たち以外に転生者がいるなんて）

共和国の図書館。

マリエは必死に調べ物をしていた。

「くっ！ また読めない文章が……グレッグ、お願い」

付き合わされるのはグレッグだ。

外見は不良のようだが、それでも元はお坊ちゃんである。

共和国語も教え込まれていた。

「マリエ、俺はこうというのが得意じゃないんだが？ え〜と……聖

樹の……駄目だ。専門用語みたいで分からない」

共和国の図書館にある書物は、全て共和国語で書かれている。

そのため、調べ物をするにも通常の倍の時間がかかっていた。

「大事な記述なのに！」

どうして調べ物をしているのか？

それは、ゲーム知識は覚えているものを書き出した。

これ以上の手柄を得るには、自分で探すしかないと思ったからだ。

リオンに殺されないように必死なマリエは、鬼気迫る勢いで書物を読みあさっている。

それこそ「外国語を話せる私って素敵！」みたいなノリではない。

覚えないと死ぬ！

そんな心持ちで勉強をしていた。

グレッグが心配する。

「もうずっと図書館じゃないか。少しは休んだ方がいいぞ」

「駄目よ。こうしている間にもダンジョンで……」

グレッグは、きっとダンジョンに向かったみんなを心配している

と思ったのだろう。

「そうか……俺もマリエに負けてられないな。俺も頑張るぜ！」

だが、本心は違う。

（兄貴がダンジョンから戻ってきて、何もしていないと判断されたら詰む。人生が詰んでしまう！ 何か 何か役に立つ物を調べておかないと）

マリエは頑張っていた。

レスピナスの洞窟。

先へと進むと、徐々に目的地が近付いてきた。

クリスが剣を振るうと、モンスターたちが次々に両断されていく。

ユリウスがナルシス先生を守りながら、俺に声を張り上げてきた。

「おい、こっちで間違いないんだろうな！」

俺は端末をポケットにしまう。

ライフルの銃剣部分を地面に突き刺し、腰に下げていた刀もどきを引き抜くとスイッチを押した。

スイッチを押すと切れ味が増す仕組みだ。

「間違いない。この先だ」

次々にわいて出てくるモンスターたちを前に、俺たちは無理矢理進んでいた。

襲いかかってきたモンスターを斬り伏せると、ジルクがライフルの弾倉を入れ替えていた。

「きりがありませんね。一旦下がりますか？」

「駄目だ。この先に行けばすぐだ」

まるで何かを守っているように集まっているモンスターたち。

ナルシス先生も気が付いたようだ。

「この現象……確か書物で読んだな。まさか、この先に？」

クリスが一旦下がると、肩で呼吸をしていた。

沢山いたモンスターたちがほとんど消えており、クリスの異常さがよく分かる。

「ご苦労さん」

汗を拭うクリスが、俺に返事をしてくる。

「本当に疲れたぞ。だが、充実していた。やはり、日頃の鍛錬も大事だが、実戦も大事だな」

……楽しかったようだ。

ナルシス先生が俺たちに叫んだ。

「みんな気をつけろ！　もしも書物通りなら、もっと厄介なモンスターが出てくる！」

クリスが再び気合をいれるも、俺は肩を叩いて下がるように言う。

「まだだ。残敵を片付けたら少し休憩だ。……厄介なのがいるのはこの先だからな」

俺がそう言うと、ナルシス先生が俺を警戒していた。

「リオン君、君は何か知っているのか？」

俺は荷物からマリエのノートを取り出す。

そこに書かれているのは、聖樹の苗木の入手方法だった。

あいつの知識も役に立つじゃないか。

「秘密です」

そう言って残ったモンスターに俺は襲いかかった。

進んだ先は行き止まりだった。

だが、天井から光が入るその広い部屋には、神々しい光を放つ苗木が存在していた。

ただし……その前には、かなり大きなモンスターが存在している。体つきは熊に近いが、その顔が凄い。

象の鼻。

二本の角を持ったモンスターは、後ろ足で立ち上がると俺たちを前に威嚇してくる。

ナルシス先生が狼狽えていた。

「何でこいつが？ こいつはキメラビーストだ。複数の特徴を持った厄介なモンスターだよ。みんな、ここは下がって」

下がれというナルシス先生の言葉を遮ったのは、ジルクのライフ音だった。

すぐに構えて目を狙い撃ちやがった。

キメラビーストが目を撃ち抜かれ、痛みに悶えて暴れている。

ジルクはニヤリと笑っていた。

「さあ、皆さん。援護は任せてください」

剣を握っている嬉しそうなクリスは、

「手応えがありそうだ。私は　こんな奴と戦ってみたかった！」

喜んで斬りかかる。

出遅れたユリウスが剣を抜いて、

「クリス！　お前一人ばかりに目立たせないぞ！」

マリエに自慢でもしたいのか、強敵と嬉々として闘う三人だった。

俺はヤレヤレと首を横に振る。

「まったく、どいつもこいつも馬鹿ですよ。先生は後ろに下がってください。お前ら！　俺の分も残せ！」

ライフルを地面に置いて、持って来たショットガンに持ち替えた俺はキメラビーストの後ろに回り込み引き金を引く。

背中を撃たれ、こちらを振り返るキメラビーストだったが、今度は足を撃ち抜かれる。

俺たちに囲まれ、キメラビーストは雄叫びを上げた。

弾丸に撃ち抜かれた目が再生し、そして体を低くして四足歩行になるとユリウスに向かって突撃する。

「殿下！」

ジルクがすぐに射撃をするも、キメラビーストは無視してユリウ

スに狙いを定めていた。

だが、

「俺を選んだか！　よくやった！」

背負っていた盾を構えるユリウスは、魔法の壁を用意するとキメラビーストの突撃を防いでしまう。

突撃が止められたキメラビーストは、魔法の壁に頭をぶつけてフラフラしていた。

そこに首を狙ったクリスの一撃が入った。

「これでええええええええ！」

クリスの斬撃は魔力の光で太刀筋が綺麗に見えた。

半月になった太刀筋の光が霧散すると、キメラビーストの黒い血が噴き出す。

ジルクが手榴弾を手に持ったので、俺は下がりながらショットガンの引き金を引く。

「お前らも離れろ！」

ユリウスがクリスに近付き、盾を構えると魔法の障壁が発生した。

手榴弾がキメラビーストに投げられ、爆発が起きると煙の発生と同時にキメラビーストも黒い煙に変わって消えて行く。

煙が晴れていくと、ナルシス先生が口を開いてこちらを見ていた。

俺は服についた埃を払う。

「お前ら戦闘が派手なんだよ」

文句を言っと、クリスが反論してくる。

「バルトファルト、お前はなんで剣を使わない？ お前なら背中に回って斬りつけられたはずだ。そうすれば、手榴弾なんて必要なかった」

「俺は安全圏で戦いたいのに」

ユリウスが肩を落としている。

「くっ！ 盾を構えているだけで終わってしまった」

それなりに活躍したジルクがユリウスを慰めている。

だが、少し嫌みっぽく聞こえる。

「次がありますよ、殿下」

「お前は活躍したからいいだろうが、俺は活躍できなかったぞ！
バルトファルト、次だ。次の機会では必ず俺を誘え」

そう何度もダンジョンに入るわけがないだろうが。

ナルシス先生が呟く。

「……王国の冒険者って怖いね」

交渉材料（前書き）

四章を書き終えて油断していました。
投稿忘れ、ミスです。
申し訳ありません。

交渉材料

ボスを倒した俺たち。

ナルシス先生が聖樹の苗木を前にして、興奮気味に語っていた。

「私も聖樹の苗木ははじめて見たよ。この神々しさはどうだ？ だが、残念なことにこのまま放置しても枯れてしまう。手に入れても全て枯れてきたわけだけど、こうして苗木が手に入ればまだ試していない育成方法で今後は無事に――」

俺は苗木の周囲を掘ってから引き抜き、持って来た専用のケースに入れた。

透明な四角いケースに入れて蓋をする。

ナルシス先生が俺の行動を見て叫ぶ。

「何してんだあああ！」

俺から見れば、ちょっと光っている観葉植物みたいな感じだ。

だが、ナルシス先生たちにすれば信仰の対象だった。

「あ、すみません。これが欲しかったもので」

ナルシス先生が口をパクパクさせている。

「あのね、聖樹の苗木はこの国の未来がかかった大切な　って、君たちも何をしているの！　ちよつとは私の話を聞きなさい！」

周囲を見ると、露出していた魔石などをユリウスたちが掘り返していた。

「純度も大きさも申し分ないな」

「マリエさんも喜んでくれるでしょうね」

違う方ではクリスが金属を掘り起こしていたが、大きすぎて困っていた。

「これをどうやって持ち帰ればいいものか。しかし、これだけ大きな金属、売ればきつと高値になるな」

この場所では、魔石や金属を次々に掘り起こすことが出来た。

きつと魔力的にも充実している場所なのだろう。

「お前ら！」

俺が三人に声を荒げると、ナルシス先生が期待に満ちた目を向けてくる。

「そ、そうだよね！　ここは聖樹の苗が発見された場所。大切に保存しないといけない。君たちもリオン君を見習って　」

「俺の分も残しておけ。それから、運び出すのは問題ない。迎えを手配しているからな」

天井から小型艇が降りてきた。

ユリウスが驚く。

「小型艇？ どうしてバルトファルトが持っているんだ？」

俺は嘘を吐く。

「アインホルンから降ろしていたからな。聖樹の誓い？ その対象外だったんだろ」

「そうなのか？ なら、直接この場に降りても良かっただろうに」

「穴を見つけていちいち降りていたら目立つだろうが」

ナルシス先生も俺の意見に同意する。

「ここは通信障害もあるからね。やはり自分で……あれ？ リオン君、どうやって連絡を取ったの？」

「……秘密です。お前ら、さっさと積み込め！」

クリスが嬉々として金属を掘り返し始める。

「そうか！ ならもっと持って帰れるな」

ジルクも同様だ。

「殿下、スコップを貸してください」

「駄目だ。俺ももっと探したい」

二人でスコップを取り合っている。

ナルシス先生が肩を落としていた。

「……王国の冒険者って酷い」

この場にある魔石も金属も根こそぎ回収させて貰うとしよう。

下りてきた小型艇に乗り込むと、無人であるがメモが用意されていた。

俺はそれを確認すると、ポケットにしまい込む。

学園。

授業を受けながら、レリアは焦りを募らせていた。

色々調べていく内に分かってきたのは、王国の詳しい情報が共和国に入ってきていないということだ。

共和国はその絶対の自信から、他国への関心が薄い。

レリアも共和国が負けるなどとは考えていなかった。

（どうしよう。今のバランスを崩されたくないのに。怪しいのはあ

の目立たない男子と、小柄で少し腹の立つ女子。あいつらが明らかに怪しい)

リオンの事は目立たない男子としか思っていなかった。

マリエについても、男子受けするような仕草が少し腹立つと思っ
ていたくらいだ。

(王国の生徒とは関わりたくなかったのに)

今の状態を維持したかったレリアにしてみれば、留学生として転
生者たちが乗り込んでくるなんて想定外だった。

多少警戒していたが、深く関わっているとは思えなかった。

(普通、逆ハーレムなんて目指さないわよ。頭おかしいんじゃない
の！)

この乙女ゲー世界の法則とでも言えばいいか、とにかく世界の危
機ばかり続く。

そんな中、逆ハーレムで原作崩壊を狙う馬鹿はいないとレリアは
思っていたのだ。

見事に考えが外れ、焦るばかりだった。

早く話をしたかったが、王国の生徒はピエールの一件から登校し
てこない。

自分が出向いても警戒されているし、今何をしているのか分から

なかった。

授業をしているクレマンが、レリアを注意する。

「レリアちゃん、授業に集中しなさい」

「は、はい！」

クレマンが授業を再開すると、隣の席に座っていた女子が話しかけてきた。

「何？ 彼氏と喧嘩でもしたの？」

「違うわよ」

エミールと喧嘩などしない。

そもそもエミールは優しく、喧嘩となれば引いてしまう。

個性が強い方ではない。

だからレリアはエミールを選んでいた。

（何とか接触して、早い内にこちらの状況を伝えないと）

そう考えていたレリアだったが、教室内に慌てて教師が入ってきた。

「クレマン先生！」

「あら、どうされました？ まだ授業中ですよ」

慌てている教師が、急いでクレマンを教室から連れ出す。

「緊急会議です。とにかく急いでください」

「それは仕方がないですね。みんな、次の授業まで自習よ。ちゃんと教科書を読んでおくように」

教師たちが教室を出て行くと、生徒たちはざわつき始めた。

「会議だって」

「何かあったのか？」

「あの慌て方、不自然じゃない？ 授業が終わってからでも良かったのに」

レリアは胸騒ぎを覚えた。

（ま、まさかね）

留学生たちが関わっているのではないか？ そんな不安があったのだ。

会議室。

俺はケースに入った苗木を持って中身を見ていた。

キラキラと輝き大変綺麗であるが、実はこのケース　聖樹の苗木を保管するために用意した特別製の。

それを知らない教職員たちが、俺に注意をしてくる。

「バルトファルト君！　苗木をテーブルの上に置きなさい！　落としたらどうするつもりかね！」

俺はヘラヘラと笑って見せていた。

「落としたら？　そもそも俺の持ち物なんで、片付けは俺がしますよ」

「そ、そういう意味ではない。もしも苗木が枯れてしまったら」

「枯れたら？　それでおしまいでしょうね」

発見した俺の物。

そう言って譲らなかった。

学園長が俺に交渉してくる。

「何が望みだ？　希望の物を用意しよう」

俺は学園に対して、

「俺の持ち物を返して貰いましょうか。あの糞野郎に引き渡すように言って貰えませんか？　そうしたら、こいつを渡すのも考えてやり

ますよ」

学園長が難しい顔をしていた。

「それは……出来ない。既にあの飛行船はフェーヴェル家の所有物だ。我々が口出しできないのだ」

俺はまた苗木を掲げて光に当ててみる。

「なら無理。そもそも、あんまり俺たちを軽く見るなよ。お前らのお宝を手に行っているのは俺たちだ。そこをよーく、考えないとね」

六大貴族に頭の上がない教職員たち。

ナルシス先生が俺を見て、

「……悪いが、苗木は国外に持ち出せないと思うよ。議会がそれを絶対に認めない」

お宝を国外に持ち出させるわけにはいかない。

それも分かっているが、

「騙し討ちみたいな真似をして俺から飛行船を奪っておいて、はいそうですかと渡すとても？ 調子に乗るな。偉いさんをすぐに連れてくるか、ピエールの肩をこの場に連れてこい」

クレマン先生が椅子から立ち上がる。

「リオン君、いったい何を考えているの？」

「苗木を賭けて決闘してやる。勝てば苗木は譲るよ。けど、賭けるのは俺のアインホルンやアロガンツ……奪った物は返して貰わないとね」

学園長が俺に言う。

「外交問題になる。君は、ホルファート王国を危険な目に遭わせるつもりか？」

絶対の自信。

いや、これも当然だろう。

俺がこいつらの立場でも、共和国の勝利を疑わない。絶対強気に出る。

「先に喧嘩を売ってきたのはお前らの生徒だ。ピエールの屑を呼べ。それが駄目なら、こいつは枯れるしかないな」

伝説とも言われる聖樹の苗木。

その記述は多く残っており、間違いなく俺の持つ苗木は聖樹のものだった。

「勘違いするなよ。お前らに出来るのは、ピエールの糞野郎を呼ぶことだ。そうだな、あとは決闘の会場を用意して貰おうか」

教職員たちの目が怖い。

俺を三流国家の貴族とでも思っているのだろうか？

……正解だ！

ホルファート王国は間違いなく三流国家だろう。

俺が保証する。

だが、そんな国にいるからと、俺まで侮られては困る。

俺は……やられたらやり返す男だよ。

不機嫌そうなピエールがやって来たのは、それから数時間後のことだった。

会議室から応接間へと移動して待つこと数時間。

不機嫌な俺よりも更に不機嫌なのがピエールだ。

俺を見て目をピクピクさせている。

「俺を呼びつけたのは、お前か？ 自分の立場が分かっていないみたいだな」

そんなことを言うピエールの前にケースを置いた。

それを見てピエールの目の色が変わる。

「……聖樹の苗木。本物か？　おい、三下。そいつを寄越せば今回のことを許してやつてもいいぞ」

こいつが人を許せるくらいに、聖樹の苗木は価値があるらしい。いや、これが聖樹の苗木なら、ピエールには何も出来ないからか？

どちらにしろ、俺は安売りなんてしない男だ。

「寝言は寝てから言え。お前にはブラッドも随分と世話になったからな、ただで済むと思うなよ、糞野郎」

ピエールの額に血管が浮かんでいた。

右手の甲に紋章が浮かんでいる。

それこそ、聖樹の紋章だ。

七大　六大貴族がここまで絶対的な権力を持つのは、聖樹の加護に理由がある。

「ここで暴れて聖樹の苗木を破壊するか？」

苗木を盾代わりに使うと、流石のピエールも黙った。こいつがいかに横暴でも、聖樹の苗木があると強引な手段を選べないのは予想通りだった。

舌打ちをしている。

「何が望みだ。お前の船は絶対に返してやらねーからな」

もう自分の物だと思い込んでいるらしい。

何て可愛い奴だろう。

「俺から奪った物を賭けて決闘をしろ」

「ああ？」

「どうした？ 六大貴族の偉いさんは、三流国家の伯爵が怖くて勝負も出来ないのか？ お前もたいしたことがないな」

ちよつと煽るだけで、ピエールの顔が真っ赤になった。

不健康そうな顔色よりこっちの方がマシだな。

「……絶対に殺してやる」

クレマン先生が止めに入る。

「待ちなさい！ リオン君、この場合の決闘の意味が分かっているの？」

俺は薄ら笑みを浮かべつつ、ピエールを挑発する。

「分かっていますよ。もしもピエールが死にそうになったら手加減してやりますよ」

激怒するピエールは、俺の思うとおりに動いてくれる。

「お前の頭蓋を砕いてホルファートに送りつけてやる。覚悟しろよ。」

お前らみたいな三流国家、アルゼルの敵じゃねーんだよ!」

「おー、怖い、怖い。なら、決闘を受けるんだな?」

受けても、受けなくても俺は構わない。

どちらを選んで貰っても構わない。

「いいだろう。……受けてやる。おい、その気持ち悪い奴とナルシス。お前らが見届け人になれ」

黙って話を聞いていたナルシス先生が、溜息を吐くと説明に入る。

「……決闘の方法を決めよう。場所は学園が用意する。まずは条件の確認だが、その前に大事な確認がある。この決闘は聖樹に誓うかい?」

ピエールが醜悪な笑みを浮かべた。

「当然だ、こいつは信用できないからな」

「信用がないな。俺は真面目がモットーなのに。これは俺も誓うのか?」

ナルシス先生が頷く。

「共和国式の決闘は、聖樹に誓って約定を守る拘束力にする。どんな決闘を臨む? 私が立ち会うなら、一方が不利な条件での誓いは認めさせないよ」

ピエールが即答してきた。

「鎧を使った決闘だ」

譲らないと言わんばかりだった。アロガンツはこいつに気に入られたらしい。……好都合だ。

だから俺も条件を出した。

「そうだな……お前の持つ聖樹の力を使用禁止にしようか」

ピエールが少しためらうも、頷いて認めた。

「こつちは構わないぜ。賭けるのは、お前は聖樹の苗木で、俺はお前から奪った物だな？」

「そうだ。必ず俺に“返せ”よ。いいか、俺の前に必ず“持って来い”。アロガンツにアインホルン　その中にあるもの“全て”だ。俺が勝ったら、全てを俺にちゃんと返せよ」

念を入れてしっかり言っておかないとね。

「勝ってから言えよ。だが、これで俺は聖樹の苗木を手に入れられる。兄貴から当主の地位だって奪える」

既に勝った後のことを考えているようだ。

……精々楽しんでおくことだ。

ナルシス先生が条件を確認すると、俺たちに言う。

「それでは、両者聖樹に誓いの言葉を」

ピエールの右手の甲が光ると、俺たちの下に魔法陣が発生した。
マリエたちの時に出たものと同じ紋章だ。

「聖樹に誓う」

俺も笑みを浮かべ、

「聖樹に誓おう」

心配しているナルシス先生とクレマン先生を見ながら、俺は必死にこらえていた。

聖樹神殿。

若き当主フェルナンは、執務室で仕事だった。

だが、報告を聞くと椅子から立ち上がり、机の上にあった書類の山が崩れる。

「聖樹の苗木が見つかっただ」と！

報告を持って来た家臣も走ってきたのか、随分と息苦しそうにしていた。

「は、はい！ 留学生のリオン・フォウ・バルトファルト伯爵が、

ダンジョン内にて発見しました。所有権を主張しており、欲しければ決闘を、と」

「決闘？」

「フェーヴェル家のピエール殿と決闘すると」

フェルナンは机に拳を振り下ろした。

「あの小僧！」

それはピエールに対しての言葉だった。

フェルナンは机から調べさせたりオンの報告書を取り出した。

そこには、単機にて公国の艦隊を撃退し、危機的状況から艦隊を率いて勝利に導いたと書かれている。

（物語でもここまで書かないぞ）

報告者も前書きに「これらは事実です。本当なんです！」と注意書きをしている。

嘘っぽい報告書だ。

誰に見せても信じられないだろう。

だが、それを可能としたのがロストアイテムなら話が違ってくる。

（公国との戦争でロストアイテムは失ったらしいが、まだ隠し球が

ないとは言えない。そんな相手にいったい何をしている、フェーヴェル家の馬鹿息子が」

「……決闘ということは、飛行船を取り返すつもりか？」

「はい。飛行船、そして鎧を返すように求めたそうです」

フェーヴェル家が調子に乗るくらい優れた飛行船と鎧だ。

本来なら賭けの対象にしたくないだろうが、聖樹の苗木が出てきたのなら話が違ふ。

喉から手が出るほどに、貴族たちは聖樹の苗木を求めている。

「素直に取引すればいいのだ。余計なことをしてくれた」

報告してきた家臣が困っているのを見て、フェルナンは言う。

「私も学園に向かう。船の用意を」

「はっ！」

こうしてフェルナンは、学園に向かうのだった。

交渉材料（後書き）

クレアーレ（ ）『マスターが生き生きしているわね。そんなマスターの活躍が見られる一巻は発売中よ。はい、宣伝終わり。私も準備があるから失礼します』

???（ ）『……』

再びの決闘

どうして俺は平穩に過ごせないのだろうか？

「まったく、ヤレヤレな気分だな」

マリエの家でくつろいでいるわけだが、俺以外は慌てていた。

クリスが俺に怒っている。

「何をのんきにしている、バルトファルト！ お前、今の状況が分かっているのか？」

紅茶を飲んで落ち着いている俺は、今の状況を説明する。

「決闘の日までに自前で鎧を用意しなければいけない。だが、その鎧が手に入らない、だろ？ どのいつもこいつも六大貴族を恐れて俺に鎧を売らないからな」

まったく ヤレヤレな気分だ。

「だったら！ 何で落ち着いていられる？ いいか、相手は確実にアロガンツを出してくるぞ。レプリカとは言え、鎧を相手に生身で戦えるのか？ マリエなんか、鎧を売って欲しいと商人のところを回れるだけ回ったんだぞ！」

今あるアロガンツはレプリカじゃないけど、そう言わないと色々なところで問題が出てくるからね。

本物のアロガンツと生身で戦えと言われたら、誰だって嫌がるだろう。

……というか、マリエの奴も俺に許されようと必死だな。少しいじめすぎたか？

「いいじゃないか。その方が楽しみだ」

「お、お前！ 私たちと戦ったときは、性能差で勝利したと言っていたじゃないか！ 鎧を調達できたとしても勝ち目が薄いのに、手に入れることも出来ないんだぞ！」

元氣な奴である。

俺のことを心配してくれているのか？

もっと美少女とかに心配されたいね。

リビアとか、アンジェとか？ ミレーヌ様やクラリス先輩でも可！

俺は視線をベビーベッドに向けた。

そこにいるのは赤ちゃんではなく、ノエルだった。

世話をするとき、こちらの方が便利のために用意したのだ。

「ノエル、クリスがいじめるよ」

「話をそらすな！ 聞けばこちらの決闘は学園の特別ルールなんて

甘いものはない。バルトファルト、いったい何をするつもりだ？
いい加減に私たちにも教えてくれ」

それをここで言うと、こいつらが止めてくるので嫌だ。

クリスが俺を心配している。

「お前、最近おかしいぞ。それとも、あの使い魔のことが心配なのか？」

「ルクシオンか？ まあ、心配といえば心配だな」

あいつは今頃 。

アインホルンの船内。

朝昼晩と関係なく騒いでいるピエールの取り巻きや、フェーヴェル家の家臣たち。

船内は荒らされ酷い状態だった。

アロガンツも趣味の悪い装飾が施され、ルクシオンは嘆いている。

「……可哀想に。すぐに外してあげたいのですが、今は我慢しなさい」

ルクシオンが人の気配に気が付き、風景に溶け込むように消える。

やって来たのはピエールたちだ。

「あいつも馬鹿だよな」

「流石はピエールさんですよ。先回りして、商人たちに圧力をかけるなんて」

ピエールはアロガンツに触れる。

「あいつは自分の鎧に踏み潰されるんだ。きっと面白いショーになる」

笑っている取り巻きたち。

ルクシオンのレンズがピエールの手の甲を解析する。

レンズが拡大と縮小をしており、レンズ内のリングが動く。

「ところで、勝った後はどうするんです？」

「あ？」

「ホルファート王国ですよ。どうせ謝罪に来るんでしょうけど」

ピエールは手に持った飲み物に口を付けながら、

「……そうだな。俺を舐めた王国の連中は、皆殺しにしてやろうか。あいつらも、王子の首を送りつけられたら戦争をするしかないだろ。向かってこないなら、王子を殺されたのに黙っている腰抜けと煽ってやるよ。嫌でも引きずり出してやる」

「取り巻きたちが喜ぶ。」

「その時は俺たちも混ぜてくださいよ。卒業前に勲章が欲しかったです」

勝ち続けた弊害^{へいがい}か、彼らにとって戦争とは勝利するのが普通だった。

そのため、戦争に対する忌避感がない。

死んでも運が悪いと思っている程度だ。

「いいぜ。こいつで戦場に出て、王国の騎士たちを血祭りに上げてやる。そうすれば、俺が兄貴の地位を奪って議会に顔を出すときはいい箔になるからな」

圧倒的な強さにおごった共和国。

ピエールはその典型的な貴族だった。

極端に悪い方に偏った貴族である。

ホルファート王国。

前日に二人で寝ていたアンジェとリビアは、着替えを行っていた。

アンジエは口に髪留めを咥え、下着の上にシャツを着用しているだけだ。

ボタンもとめていないため、前が開いている。

クレアーレがメールを受信した。

『あら、久しぶりのメールよ』

寝ぼけていたリビアがクレアーレに飛び付こうとして、ベッドから落ちた。

「痛いです」

アンジエが近付き、腕を掴んで起こしてやる。

「何をしている。クレアーレ、読み上げてくれるか？」

『いいわよ。けど、内容はいつもと変わらないわね。ノエルちゃんのお世話が大変という話ね。あと、ノエルちゃん可愛いつてことくらい？』

リビアが少し拗ねる。

「リオンさん、最近はノエルちゃんのことばかりですね」

アンジエが小さく笑っていた。

「そうだな。だが、十七歳と高齢だからな。大変なときに拾ったものだ」

『……あら、ローランドの糞野郎に渡してください、って内容もあるわね』

アンジエが困った顔をする。

「あいつ、陛下に何てことを言うのか。気持ちは分からなくもないが、もう少し緊張感を持てと言いたいな。それで内容は？」

『ひ・み・つ、ですって』

リビアが首をかしげている。

「陛下に伝えるって結構重要なことですよね？」

アンジエは頷く。

「そうだな。だが、秘密なら仕方がない。クレアーレ、書状にしてお意してくれ。私から父上に渡して届けて貰おう。返事は後で考えるから、先に書状の方を頼む」

クレアーレは部屋を出て書状を用意することに。

だが。

『ついでにアンジエの画像も添付して返事をおきましょー』

王宮。

ローランドは朝から紅茶を楽しんでいた。

「……いい茶葉だ。私に相應しい」

そんなローランドを前にしているのは、アンジェの父親であるヴィンスと、クラリスの父親であるバーナードだった。

「王妃様は連日の激務でお疲れというのに、顔色がいいですね、陛下」

「少しは仕事をされてはいかがです、陛下？」

二人の皮肉や嫌みにもローランドは屈しない。

だって、ローランドは心が強いから。

「私がやるよりも、あの女がする方が正しい。適材適所だよ」

ヴィンスが青筋を浮かべていた。

「外国の出身者である王妃様を信用しすぎですね」

ローランドは紅茶を飲み、そして答える。

「あの女の故郷は、敵国を挟んだ向こう側だ。王国の利益が、あの女の利益にもなる」

ミレーヌの故郷は、ローランドが言うとおり敵国を挟んだ向こう側にある。

その敵国を封じ込めるための婚姻であり、王国の弱体化はミレーヌの故郷にとっても問題だ。

敵国が、王国に攻め込み領地を広げ国力を増すと、それはミレーヌの故郷にとっても脅威が増すことを意味していた。

「ミレーヌの方が仕事に向いている。私がやるよりも実際に成果があるからな」

忌々しいが、ローランドの言うとおりだった。

バーナードも言い返せない。

ローランドは無能ではないが、能力で言うなら七十点だ。

しかし、ミレーヌが九十点や百点の能力を持っており、そちらに任せる方が合理的だった。平時ならミレーヌも忙しくないが、王国の現状を考えると頑張って貰うしかない。

だが、ヴィンスにしてもバーナードにしても、ミレーヌは外国の王族だ。気を抜けないという意味では、あまり頑張る欲しくもない。

それなのに、ミレーヌが先程の理由で断れないこともあり、ローランドは好き勝手にしている。

「実力の足りない我が身が悲しいな。こうして見ていることしか出来ない」

微笑んでいるローランドに、忙しいヴィンスもバーナードも青筋を浮かべていた。

お前は楽しんでみているだけだろう、と。

ヴィンスが手紙を差し出す。

「……陛下、娘の婚約者から手紙が届いています」

「む？ あの小僧から？　せめて若い娘からの恋文なら読みたいが、あの小僧の手紙では一文字も読める気がしないな」

どうせたいした内容ではないからと、ヴィンスに開封させるローランドだった。

（馬鹿な小僧だ。私への罵詈雑言であれば、お前の義父になるヴィンスに手紙の内容を読まれ幻滅されるがいい）

リオンが大嫌いなローランドだったが、

「こ、これは！」

ヴィンスが驚いており、ローランドはやってやったと思っていた。

だが。

「陛下、これをすぐにお読みください」

「どうした？　私への文句ならあいつをすぐに打ち首に……え？」

『陛下お元気ですか？ 俺は無茶苦茶元気です。ところで、以前“面倒事をうまく処理するように”と命令されたとおり、共和国の貴族に喧嘩を売られたので買いました。安心してください。ボコボコにしてやりますよ！

でも、外交関係は俺の領分ではないので、そちらで対応をお願いします。

by 貴方の優秀な臣下より

追伸、仕事が出来てよかったね』

ローランドは手紙を握りつぶした。

「あの小僧おおー！」

バーナードが冷静にヴィンスと話し合っている。

「これでは国際問題になる。すぐに誰かを共和国へ派遣しなければ。しかし、よりにもよってアルゼルと問題を起こすとは……」

「外交問題となれば王妃様は表立って動けぬ。ここは陛下に対応していただく」

流石にミレーヌを外交問題にまで引っぱり出すのは難しく、助言はしてくれても実際に表に立つのはローランドだった。

ヴィンスとバーナードが真顔になる。

「忙しくなりますな、陛下」

「敵は防衛戦最強の共和国。さて、どうなるのでしょうかね、陛下」

ローランドがワナワナと震えていた。

（よりもよってアルゼルに喧嘩を売る大馬鹿者だったとは！あの小賢しい小僧なら、多少何かをされてもウジウジと理由を付けて流すと思った私の判断ミスだった。戻ってきたら処刑してやる！）

「とにかく情報を集める！共和国にすぐに使者を出せ。手紙が来たということは、もう奴は何かやったあとだろう。まったく、大使館は何をしているのか」

その手紙の内容は、先日送られてきたとは思わないローランドだった。

どこかで糞野郎のものがき苦しむ声が聞こえてきた気がする。

今日はいい日だ。

学園が用意した決闘場は、鎧の訓練に使うような特別な施設だった。

観客席も用意されている。

壁に触れると淡く光っており、魔法により強度を上げているようだ。

「簡単には壊れないか。それにしても、学園にこんな施設があるのは共通なんだな」

鎧同士を決闘させる場があるのは、ホルファートもアルゼルも同じだ。

きつとあの乙女ゲーの都合だろう。

用意された観客席は、随分と高い位置にある。

決闘場を見下ろせる位置だ。

そんな観客席がざわつき始めていた。

「おい、留学生が生身だぞ」

「嘘だろ」

「鎧相手に、生身で戦うのかよ」

この世界の鎧とは大きなパワードスーツを想像すればいい。

簡単に言えば、生身で戦うような相手ではない。

そもそも、生身では相手にならないのが鎧という兵器だ。

決闘場に降りてきたナルシス先生とクレマン先生が、丸腰に見える俺に近付いてくる。

「いったい何を考えている！」

「どうして鎧を持ってこなかったの！」

持って来たくても、持ってこられなかった。

「共和国の商人が俺に売ってくれませんか。仕方がないので丸腰です。おっと、拳にグローブくらいはしていますよ」

特注のグローブを見せてやると、二人とも顔を手で押さえていた。

クレマン先生が相手側を見る。

そこにはゴテゴテと飾り付けられたアロガンツの姿があった。

「……中止にしましょう。もしくは、借りられるところから借りましょう。こんなの、勝負になる訳がないわ」

クレマン先生の言葉に、アロガンツに乗り込んだピエールがゲラゲラと笑っていた。

『今更逃げるなよ、三流国家の三下野郎。時間は与えてやったんだ。準備できなかったお前が悪いよな？』

俺は少し困ったように振る舞う。

「確かに準備不足は俺のせいだな。なら、このままやっても問題ないんだな？」

確認すると、ピエールはアロガンツのコンテナから大型のライフルを取り出し構える。

『当たり前だ。お前の鎧でミンチにしてやるよ』

楽しみだな、なんてゾツとすることを言っていた。

こいつはろくな大人になれないと思う。

ナルシス先生が俺に提案してくる。

「もう、聖樹の苗木を渡しなさい。勝負にこだわる必要はない。命が大事じゃないのか？」

勝負にないと思ったので、俺に負けを認めると言ってくる。

「男の子は戦わないといけない時があります。今がその時ですよ」

アロガンツ相手に素手で挑む奴がいれば、俺は笑ってやる自信がある。

まさか自分がすることになるとは思っていなかったが、戦わなくてはいけないのだ。

そんな時。

『……そうだ。お前らのところに犬がいたよな。面倒を見ていたのはカーラだったか？ 犬の名前はノエルだよな？』

目を見開く俺は、観客席 俺を応援しているマリエたちを見上げた。

マリエたちも驚いている。

カーラは、ノエルの世話をするために屋敷に残っていたはずだ。

「てめえ、ノエルとカーラをどうした？」

『さあ？ 俺様を知るわけがないだろ。俺はお前たちが使っている屋敷にいた、女と犬の名前を言ったただけだからな。変な言いがかりは止めてくれよ』

クツクツと声を押し殺すように笑ったこいつに俺は思ったよ。

……お前は本当に素晴らしい悪役だ、って。

マリエのターン

『さあ？ 俺様を知るわけがないだろ。俺はお前たちが使っている屋敷にいた、女と犬の名前を言ったただだからな。変な言いかけりは止めてくれよ』

アロガンツに乗り込んだピエールの台詞に、観客席にいたマリエは俯いていた。

周囲ではグレッグが怒りに顔を赤くしている。

「野郎、ふざけやがって！」

ジルクも目を細めている。

「そこまでしますか」

クリスも怒りで握った拳からギチギチと音が聞こえてきた。

カイルがボソリと「ブラッドさんの名前がない」などと言っていたが、周囲はそれに対して何も言わなかった。

ブラッドはまだ起き上がれない。

部屋に取り残されたのだろう。

ユリウスがリオンを見下ろしていた。

「俺たちで助けられるといいんだが」

そんなユリウスの言葉に、マリエは静かに顔を上げた。

ハイライトを失った瞳が、三日月の形に歪んだ口が……マリエを狂気に染めたように見せていた。

「みんな、助けられたらいいね、なんて思ったら駄目よ。私たちが助けるの。何が何でもカーラとノエルちゃんを助けてこの場に連れくるの。というか……いつまでウジウジしてんだ、このほんくら共！」

全員が「ひっ！」と驚き、マリエの言葉に背筋を伸ばして直立不動になる。

「共和国に来たからってヒョってんじゃねーよ！ あんたたちの力の見せ所でしょうが！ ここで頑張らないでいつ頑張るのよ！ 舐められたままじゃ、格好がつかないのよ！」

マリエに怒鳴られ、この場にいた五人の顔がハツとした。

外交問題やら、色々と考えている間にどうも弱腰になっていたと気付かされた。

ユリウスが頷く。

「マリエの言うとおりだ。何としても探し出すぞ！ バルトファルトの邪魔をさせるわけにはいかない」

ジルクも同意する。

「そうですね。バルトファルト伯爵のことです。必ず何か秘策を用意しているはずですよ」

クリスも眼鏡の位置を正した。

「そうだな。勝負となれば、バルトファルトが負けるわけがない」

グレッグは左手の平に拳を打ち付け、

「何としても、カーラとわんこをこの場に連れてくるぞ」

だが、カイルだけは現実的な問題を口にした。

「でも、どこにいるかも分からないのに」

すると、決闘場からリオンが投げた端末が、マリエの頭に落ちてきた。

「痛っ！ 何すんのよ、このくそめに……リオンさん」

糞兄貴と言いそうになったのを我慢したマリエは、端末を拾うと決闘場を見下ろす。

リオンがジェスチャーと口の動きで指示を出していた。

マリエはその動きから、リオンの言いたいことをすぐに察知する。

「探せ、そしてボコボコにしろ……そうね、そうよね！」

マリエはスマホに似た端末を握りしめた。

（ここで活躍すれば、私の失点は全てチャラよ。あのわんこは、兄貴が可愛がっていたから助ければポイントが高いわ。私が生きるためには、ここで活躍するしかない！）

ここで思い出して欲しいのは、マリエはリオンの前世の妹だ。

似たもの兄妹である。

端末を操作するマリエは、次々に送られてくる情報を確認する。

「みんな、すぐに屋敷に戻るわよ」

カイルが驚く。

「え？ 探さないんですか？」

マリエは、

「ブラッドの様子を確認するわ。それに、荷物を回収しないとね」

マリエを含めた六人は、決闘場から屋敷へと向かった。

端末を投げた俺は、観客席を去って行くマリエたちを見て頷く。

俺の言いたいことをしっかり理解していた顔をしていた。

追い込んでいて正解だった。

いや、ちょっとからかっていただけだが、あいつがやる気を見せていたから放置していた。

ナルシス先生が俺に確認をしてくる。

「……続けるのかい？」

「当然ですよ。決闘の時間までもう少し余裕がありますし、このまま待ちましょうか」

クレマン先生が呆れていた。

「王国の騎士って好戦的なのね」

誤解だ。

俺は紳士である師匠のような騎士を目指している。

「失礼ですね。俺はこれでも心優しい騎士だというのに」

クレマン先生が否定する。

「心優しい騎士は、聖樹の苗木を利用して決闘なんかしないわよ」

「見解の違いですね。心優しいから、悪を放置しておけないんですよ」

悪と言われてピエールが苛立っていた。

『ぶつ殺してやる。簡単に死ねると思うなよ』

……お前は本当に素晴らしいな。

マリエの屋敷。

玄関には、ボロボロになったブラッドの姿があった。

マリエが駆けつけ抱き起こしてやると、ブラッドが悔しそうにしている。

「ごめん、マリエ。カーラとノエルがさらわれた。奴ら、急に乗り込んできて」

破壊された玄関のドアは、銃を使った痕跡があった。

ブラッドも抵抗しただろうが、病み上がりで満足に動けないのか袋叩きにされていた。

「大丈夫よ。後は私たちが何とかするから」

ブラッドが安心したのか気を失うと、マリエは他の男連中に部屋に運ばせた。

カイルが荒らされた屋敷を見て溜息を吐く。

「誰が掃除をされているんですかね？ 早くカーラさんを助

けて、掃除の段取りをしないと」

口は悪いが、カーラを心配している気持ちが伝わってくる。

マリエは黙っていた。

そして。

「あ、あの……お届け物です」

申し訳なさそうに外から声をかけてくるのは、大きな木箱を運んできた男性たちだった。

マリエ宛の届け物を運んできたらしい。

マリエが受け取りにサインをする。

運んできた男性たちが去って行くと、マリエは木箱の蓋を開けた。

そこに入っていたのはマシンガンだった。

カイルが弾丸を手に取る。

「これ、普通の弾丸じゃありませんよ」

対人用のゴム弾だった。

ただし、当たれば普通に痛い。

マリエは、短機関銃　昔の映画でギャングが持っていそうな、

ドラム式マガジンが似合う銃を持った。

「これ……いいわね。カイル、すぐにみんなに支度をするように言いなさい」

幼い少女がマシンガンを持っている姿は、どこか現実感がない。

だが、マリエの構えは様になっている。

ポケットに入れた情報端末が震えたので、取り出すとマリエは映像を見た。

それは、ギャングのような集団に捕らわれているカーラの姿だ。

ノエルを抱きしめている。

マリエが額に青筋を浮かべた。

「このド畜生共が……女とわんこを狙ったことを後悔させてやるわ。そして、私が生きるためにお前らには消えて貰う」

暗い笑みを浮かべているマリエを見て、カイルが呟く。

「今日のご主人様怖い」

廃倉庫。

ピエールと後ろ暗い取引をしている組織の男たちが、カーラを囲

んでニヤニヤしていた。

スーツを着た男たちもいるが、ほとんどはチンピラみたいな格好をしていた。

手にはこれ見よがしに拳銃やらナイフを持っている。

震えるカーラは、ノエルを抱きしめていた。

ノエルがカーラの顔を舌でチロチロと舐めていた。

ノエルの方がカーラを心配しているような仕草だ。

カーラはガチガチと歯を打ち鳴らし、怖がっていた。

お腹が大きく出た男が、帽子を脱ぐとカーラを見る。

「お嬢ちゃん、留学生だつて？ アルゼルが怖い国だつて分かったら、二度と六大貴族に手を出すんじゃないぜ」

笑っている男たち。

カーラは強がる。

「あ、あんたたち、こんなことをしてただで済むと思っているの？ この犬は、バルトファルト伯爵の」

お腹の出た男がボスである。

そのボスが鼻で笑っていた。

「お前たちの国では偉いかも知れないが、ここは世界の中心アルゼ
ルだ。ど田舎のお貴族様に弱腰になると思ってたら困るね。少
し痛い目を見れば、嫌でも理解できるだろうけどな」

カーラに手が伸びる。

すると、廃倉庫のドアが吹き飛んだ。

室内の埃が舞い上がり、入り口から入った光でキラキラと輝いて
いる。

入ってきた人影に、男たちが銃を向けて発砲する。

室内に響く何十という発砲音。

しかし、それらは光の障壁により全て跳ね返されていた。

「な、何だ？」

驚いているボスの前に、一人の華奢な女子が歩みでた。

カーラが泣き出す。

「マリエ様！」

マリエが肩に担いだ短機関銃を構えると、

「カーラを返せえええ！」

引き金を引いて男たちに発砲する。

対人用のゴム弾が男たちに命中し、そしてマリエの後ろから男たちが飛び込んできた。

グレッグとクリスだ。

「女子に手を出すとは汚い野郎だな！」

「手荒になるのは覚悟しろ！」

棒と木刀で次々に男たちを打ち倒していく二人。

ボスが懷から拳銃を取り出すと、カーラに向けた。

「う、動く あっ！」

そんなボスの腕を撃ち抜いたのは、拳銃を構えたジルクだった。

「女性に拳銃を向けるなど許せませんね」

カーラは思った。

（みんな……普段からは想像できないくらい格好いい）

生活能力がとても低いユリウスたちだが、こういう場面では非常に頼りになる存在だった。そもそも、お金持ちで貴族のお坊ちゃんたちだ。

生活能力が低いのはある意味で仕方がない。

使われる側ではなく、人を使う側として教育を受けてきたのだから。

近付いてくるマリエにカーラが走り寄る。

涙を流して酷い顔になっていた。

「マリエ、ざまあ」

「カーラ、よく頑張ったわね。ノエルも無事みたいね」

笑顔になるマリエだが、ボスが自分の右手を左手で押さえながらマリエに怒鳴る。

「ガキが！ こんなことをしてお前も、お前らの国もただで済むといぎやあああ！」

マリエは問答無用で短機関銃を構え、そして引き金を引いてボスを攻撃し続ける。

マガジンが空になると、

「ご主人様、交換します」

カイルに短機関銃を渡して、そして拳銃を手にとった。

安全装置を解除し、弾丸を装填させるためにスライドさせる。

「ありがとう、カイル。ユリウスとジルクはすぐにカーラを決闘場

に連れて行ってあげて。それで大丈夫のはずよ」

ユリウスが困っていた。

「いや、俺も残った方がいいのでは？」

マリエは痛みに涙を流しているボスを踏みつけ、拳銃の引き金を引きつつ答えた。

「早くする！」

「わ、分かった！」

ジルクと二人で、カーラを外へと連れ出していく。

外にはエアバイクがあり、三人で乗り込むと、

「二人とも、しっかり捕まっていてください」

ジルクがエアバイクを浮かせて空を飛ぶと、マリエは笑みを浮かべた。

マリエは踏みつけたボスを見下ろす。

「さて、どうしようかしらね」

ボスは涙を流していた。

「た、頼む。許してくれ。俺たちはピエールの野郎に命令されていぎゃっ！」

そんなことを言うボスの顔にマリエは拳銃の引き金を引いた。

弾倉が空になるまで撃ち続け、そしてボスがピクピクと痙攣すると髪を掴み持ち上げる。

「痛そうね。治してあげる」

聖女を騙ったマリエだが、その治療魔法は本物だった。

ボスの怪我が治っていく。

許して貰えたと思ったボスが、媚びるような顔をする。

「へへ、ありがとうよ、お嬢ちゃ　　うっ！」

その口にマリエは拳銃の銃口を差し込んだ。

「お礼なんかいらないわ。ブラッドを袋叩きにしてくれたのだから、倍の仕返しをしないとね」

グレッグが不安そうな顔をしていた。

「マリエ、もうそのくらいでいいんじゃないか？　泣いているぞ」

マリエはグレッグに振り返ると、

「甘えたことを言ってんじゃないわよ！　こっちはカーラをさらわ

れて、ブラッドに怪我を負わされたのよ。あんたら、舐め腐ったアルゼルのチンピラにここまでされて、悔しいとは思わないの？」

カイルが黙ってマリエに換えのマガジンを差し出すと、マリエはすぐに交換する。

ボスが震えていた。

「わ、悪かった。反省するから」

だが、マリエは止まらない。

「クリス、持って来てくれたのよね？」

クリスを取り出したのはナイフだった。

「持って来たが、これでいいのか？ 安物のナイフで、しかも刃の部分がボロボロだぞ。切れ味の悪い刃物は怪我をしやすいんだが」

心配するクリスに、マリエは微笑むのだった。

「これでいいのよ。だって、これで耳とか鼻をね。凄く痛いんだって。共和国の図書館にある本に書いてあったわ」

偶然手に取った書物に書かれていた。

専門的な本ではなく、偶然にも拷問に関する記述があったのだ。

ボスが震える。

「頼む！ 許してくれ。何でも話すから！」

だが、マリエは鼻歌交じりにナイフを見ていた。

「切れ味が悪そうね」

随分と楽しそうにしていた。

ボスが泣き叫ぶ。

「何でも言う！ あのピエールの弱みも知っている。だから、とにかく話を聞いてくれ！」

マリエは泣き叫ぶボスの顔に拳銃を向けて引き金を引いた。

廃倉庫にボスの絶叫が響き、それを見ていたボスの部下たちが震えている。

「カイル、変な動きをした奴がいたら撃ちなさい。容赦しないのよ。大怪我をしても私が治すから安心して壊してね」

カイルが背筋を伸ばした。

「は、はい！」

ボスが泣き叫ぶ。

「頼む！ 何でも喋るから！」

マリエはボスの顔を踏みつけた。

「勝手に喋れば？ 私が興味を持ったら止めてあげる。精々、私が興味を示す話題を話し続けるのね」

マリエが笑うと、ボスが代わりに泣いた。

ただ、内心でマリエは思っていた。

（本に拷問のことが書いてあったけどこれでいいのかな？ 耳とか鼻とか、別にいらないしやりたくないな……カーラもノエルも助けたし、兄貴が興味を示す話題でも話してくれると助かるんだけど）

そんなマリエの内心を知らないボスたちは、廃倉庫で地獄を見るのだった。

リオンのターン

『時間だ。始めよーぜ！』

時間が来てしまった。

決闘場にマリエたちはまだ戻ってこず、ピエールとの決闘が始まろうとしていた。

俺が中央に歩いて行くと、クレマン先生が肩を掴む。

「意地を張るのは止めなさい！ 負けても命があればいいじゃない！」

いい先生だね。

格好は……うん、気にはしていない。

だが、俺にも引けない理由がある。

「これでもホルファートの看板を背負ってしましてね。俺、これでも英雄なんですよ。国に帰ると立場的なものがありましたね」

ナルシス先生が汗を拭っていた。

「君はそんなものと無縁だと思っていたけどね」

「小心者はしがらみには弱いんです」

「小心者は決闘なんかしないと思うけど？」

違うな。

小心者が決闘をするという意味を、彼らにも教えなくてはいい。

「お二人は外に出てください」

二人が決闘場から出て行くと、俺は中央へと進む。

こうしてアロガンツの前に立つと、その大きさと威圧感を実感してしまう。

普段は頼もしいのに、こうして向かい合つと怖くなる。

『王国の貴族なんてすぐにミンチにしてやるよ。英雄だとか言っていたが、お前みたいな屑は共和国では雑魚だつて教えてやる』

「弱い犬ほどよく吠える、って知っているか？　うちのノエルちゃんに滅多に吠えないぞ。少しは見習えよ」

返事をしてやると、ピエールが叫ぶ。

我慢の出来ない奴だ。

そもそも、先に煽ってきたのはお前だろうが。

『審判！　さつさと開始しろ！』

アロガンツが俺にライフルを向けてきた。

審判がこれから起きることを予想したのか、何とも言えない複雑
そうな気持ちで開始を宣言する。

『聖樹の名の下に、これより神聖な決闘を執り行つ。両者、誓いに
嘘はないな？』

ピエールが『早くしろや！』と言っている間に、俺は紳士的に「
ないです」と言っておいた。

『……それでは、これより決闘を開始する！』

会場に聞こえてくる拡声器の声と、開始を告げる鐘の音。

ピエールは俺の顔を狙って引き金を引いてきた。

観客席からは悲鳴のような声も聞こえてくるが、俺は転がるよう
に右に避けるとそのまま走り出す。

俺がいた場所を弾丸が通り抜け、壁に命中して穴を開けていた。

『チヨロチヨロ逃げ回るのがお似合いだな、三下あああ！』

アロガンツがライフルを構え直し、俺を狙ってピエールが引き金
を引いてきた。

方向を変えて逃げると、弾丸を次々に避けていく。

「下手くそだな。当ててみるよ」

舌を出して煽ってやると、ピエールがライフルを投げつけてきた。

『ライフルが悪い！　こうなれば捕まえて握り潰してやる！』

アロガンツが俺を捕まえるために接近してきた。

わざと突っ込み、アロガンツの股下をくぐり抜けて逃げる。

ピエールが苛立っていた。

『逃げるな！』

「捕まえるんだろ？　ほら、俺はここだ。捕まえてみるよ」

煽ってやると、アロガンツが突撃してくる。

決闘場で逃げ回るリオンを見るナルシスとクレマンの二人。

リオンの戦い方にヒヤヒヤしている二人だった。

「うまく逃げ回っているな。前の持ち主だっただけに、弱点も知り尽くしているのか？」

クレマンは心配そうにハンカチを噛みしめている。

「それでも不利には違いないわ。少しでも油断すれば即死よ。リオ

ン君、どうしてこんな戦いを挑んだのかしら？」

うまく逃げ回るリオンは、確かに普通の騎士と違って優秀に見える。

おまけに度胸もある。

若くして英雄となった、などと言うだけはあると二人は思った。

「案外、英雄云々は本当かも知れないな」

「あの若さで？ 確かに手柄を立てて出世したとは聞いたけれど」

どの程度の活躍をしたのか、二人も把握してはいない。

ナルシスはいいい意味でも、悪い意味でも、貴族と言うより学者氣質だった。

クレマンは一教師だ。

王国の内情に精通し、正しくリオンを評価しているとは言えなかった。

……アルゼル共和国が、リオンを正しく評価していればきっと留学を拒否しただろう。

周囲には、ピエールに命令されて観戦している学園の生徒たちの姿があった。

自分の強さを見せつけたいピエールが、観戦しろと脅したのであ

る。

決闘を見たくない女子たちが、目を閉じていた。

クレマンが驚いて素の声を出してしまう。

野太い声だ。

「ぬおっ！」

アロガンツが両手にバトルアックスを持ち、リオンを殺すために振り回し始めた。

逃げるリオンにも焦りの色が見える。

舞い上がった砂の他に、決闘場の破壊された壁の破片がアロガンツの動きにより吹き飛びリオンに当たった。

頬から血を流している。

「リオン君！」

クレマンがすぐに決闘の中止を進言しに行こうとすると、観客席に犬を抱えた女子を連れたユリウスたちが戻ってきた。

「バルトファルト！ カーラもノエルも無事だ！」

息を切らしたユリウスが叫ぶと、観客たちの視線を集めた。

決闘中のピエールも同じように、アロガンツの頭部をユリウスに

向ける。

そして、リオンもカーラとノエルの無事を確認すると、疲れた顔が急に笑みを浮かべ始めた。待っていましたと言わんばかりだ。

ナルシスはその変化に気が付く。

（な、なんだ？）

ピエールがつまらなそうにしていた。

『ちっ！ 使えない奴らだ。だが、お前をここで殺せば結局同じだ。女と犬が助かっただけで、お前が死ぬのは変わらないからな』

リオンは頬の血を手で拭っていた。

「いや……俺の勝ちだ」

気でも狂ったのかと大勢が思っていると、ユリウスもジルクもそしてカーラも笑みを浮かべた。

ノエルもリオンを見ている。

クレマンが不思議に思っただけ。

「ちょ、ちょっと！ お仲間が死にそうなのに、どうして笑っているのよ！？」

薄情者！ と怒っているクレマンに、ユリウスたちが言うのだ。

「……お前たちはバルトファルトという男を理解していないな。あいつは、現時点で王国最強の騎士だ」

クレマンが驚く。

「で、でも、いくら強くても鎧が相手なのよ!」

ジルクは汗を拭い、そして穏やかな笑みを浮かべていた。

「分かっていますね。彼は最強と言っても、強さ的には優秀な騎士程度でしかありません。ですが、彼の強さはそこにありません。彼は　バルトファルト伯爵は、勝てない戦いでも勝てるように持つていく男ですよ」

カーラも頷いていた。

「きっと勝つはずですよ。そもそも、勝てないなら戦わない人ですよ!　というか、絶対に怒っていますから、きっと何か企んでいるはずですよ!」

クレマンが戸惑っていた。

「……そ、その、お仲間なのよね?」

ユリウスが前髪を手で払いのけながら、

「ライバルと言って貰おうか。奴はこの俺を　元王太子であったこの俺を、公衆の面前でボコボコにした男だ。それでもなお出世して、今の地位にいる」

ナルシスが理解できずにいた。

「いや、そんなことをすれば普通は処罰されるはずだが？」

ユリウスが分かっているかないと首を横に振っていた。

まるでリオンの事を自慢している様子だった。

「それをしてもし世する奴の強運、そして強さだけではない根回しなどの政治力が分らないのか？ 奴は戦って終わるような男じゃない。マリエに怒鳴られて思い出した。俺たちを追い詰めたバルトファルトが、あの程度の小物に負けるものか。あのピエールも悪党だろう。だが……バルトファルトはそのほるか上に行く男だ！」

クレマンが両手を口元に持っていく。

「それ、全然褒めてないわよ！ 自慢しているようで、貶しているのと同じじゃない！」

ナルシスが決闘場に視線を戻した。

（いったい何を考えている？）

どこかで俺を馬鹿にしている奴がいるようだ。

マリエへの援助を打ち切って、ひもじい思いをして貰おうか？

そんなことを考えていると、ピエールがバトルアックスを俺に向

かつて振り下ろしてきた。

そのどれも、俺は紙一重で避けてみせる。

『いい加減死んどけよおお！』

さて　もう十分だろう。

時間も十分に稼がせて貰ったからな。

俺は一度、アロガンツから大きく距離を取った。

そして構えを取る。

『あ？　何だ、その構えは？　もしかして、本気で鎧相手に素手で挑むつもりですか』

俺の構えを見て、ゲラゲラ笑っているピエールと会場にいる奴の取り巻きたち。

俺は淡々と語る。

「鎧というのは、人が入り込んで扱う関係でどうしても形に制限が入る」

ゲームの設定では、魔法で鎧を動かしているので同じ人型の方が動かしやすいとかそんな設定があった。

『頭でもおかしくなったか？　なら死ね！』

突撃してくるアロガンツ。

振り下ろされるバトルアックスの動きに合わせて、俺も動く。アロガンツが俺を通り抜け地面を転がった。観客には、俺がアロガンツを転ばせたように見えただろう。

「柔よく剛を制す、って言葉を知っているか？」

倒れたアロガンツが、起き上がろうとしていた。

ピエールは何が起きたのか分からなかった。

「な、何だよ。どうなっているんだよ」

焦るピエールは、その後もリオンに何度も斬りかかるが全て避けられ吹き飛ばされる。

まるで武芸の達人のように見えるリオンが、ピエールは恐ろしかった。

ほとんど最強に近い鎧を使い、勝てないというのがリオンの異常さを物語っていた。

ピエールが右手の甲を見る。

「だ、駄目だ。聖樹に誓っておいて、これを使えば俺は俺は加護なしになっちゃう」

加護なしに怯えるピエールだったが、コックピット内部で電子音声が聞こえてきた。

『対象の音声データ編集を終了。これより、作戦行動を次の段階へ移行します』

「な、何だ？ 誰の声だ！」

ピエールが首を動かし周囲を見るが、観客たちは異変に気が付いていない。

「おい、一体誰の声だ！」

すると、アロガンツが勝手に動き出す。

「へ？」

ピエールが驚いていると、編集された自分の声で。

『ふざけやがって！ みんな吹き飛ばしてやる！』

ピエールはそんなことを言っていないのに、アロガンツからは確かにピエールの声がしていた。

勝手に動き、コンテナを解放してミサイルを周囲にはなっていた。

決闘場がミサイルにより爆発し、観客たちが逃げ惑っていた。

審判が叫ぶ。

『止めなさい！ ピエール君、今すぐに攻撃を止めなさい！』

ピエールは叫ぶ。

「お、俺じゃない！ 早く止める！」

操縦桿を動かすが、アロガンツは勝手に動いていた。

落ちていたライフルを拾い上げ、射撃を行うと決闘場を破壊していく。

『みんな吹き飛ばえええ！』

観客たちが逃げ惑っている姿に笑う声が、決闘場に響いていた。

ピエールは叫ぶ。

「俺じゃない！ 俺じゃないんだああ！」

すると、リオンが煙の中から出てきた。

『……決着をつけてやるよ』

暴れ回るアロガンツの前に俺が立つと、アロガンツが左手に持ったバトルアックスを向けてきた。

『うるせえ！ お前を殺して、そしたらここにいる奴らにも俺の実力を見せつけてやる！』

俺は構える。

観客席からは、クレマン先生の声がした。

「リオン君逃げなさい！ ピエール君は正気じゃないわ！」

俺はなるべく堂々と答える。

「ここで俺が逃げたら、こいつを止められなくなる。待っているよ、アロガンツ お前をすぐに取り戻してやるからな」

右手を少し引いて手を開く俺は、一撃に全てを賭ける。

『その程度でどうにかなると思うなあああ！』

向かってくるアロガンツの懷に飛び込む。

振り下ろされたバトルアックスを避け、そして手の平をアロガンツの胸部に押し当てた。

「知っているか？ 衝撃を内部に通す技があるんだぜ。鎧に乗っているからって、生身の人間相手に油断していると、こうなるんだよ！」

俺が力を込めると、アロガンツが吹き飛んだ。

ナルシス先生の声が聞こえた。

「そ、そんな！ 重量差がどれだけあると思っている！」

信じられないという感じで俺を見ている先生たち。

そして、逃げるのを止めた観客たち。

俺は吹き飛んで座り込むように壁にぶつかったアロガンツに近づく。

「ピエール、これで終わったと思うなよ。 お楽しみはこれからだ」

俺は特注のグローブを装着した手を握った。

リオンたちが決闘をしている頃の港。

アインホルンが固定していた器具をパージすると、ゆっくりと浮かび上がった。

酒に酔っていたピエールの取り巻き数人と、酔っ払いである家臣たちが外の様子を見て愚痴っていた。

「おい、誰が動かしているんだ？」

「二日酔いなんだ。止めてくれよ」

「ピエールさんの命令か？」

のんきな連中だと思ったのは。

『アインホルン、そろそろ作戦を開始しましょうか。この馬鹿げた時間も終わりです』

ルクシオンだった。

ルクシオンは艦橋に向かうと、そこではロボットたちが飛行船を操作していた。

艦橋にいたピエールの取り巻きを縛り上げ、布を噛ませている。

何か言いたそうにこちらを見ていたが、ルクシオンは無視する。

『港に停泊している警備部隊、軍隊の飛行船をロックオン』

ロボットたちが動き出すと、アインホルンから砲台が出てきて軍艦を撃ち抜いた。

大事な機関部分を撃ち抜かれた飛行船は、燃え上がっている。

ほとんど人が乗っていない飛行船が、ゆっくりと落下していくと避難する人たちが見えた。

『出来るだけ人的被害を出さないように、好きなように破壊しろ、ですか。マスターらしい命令ですね』

そのままアインホルンが、次々に飛行船を破壊していく。

港にある施設も同様だ。

逃げ惑う人々。

ようやく事態に気が付き、慌てて艦橋に來た取り巻きやら家臣たち
がドアを叩く。

「開ける！ 何やっていやがる！」

「こんなことをしたら殺されるぞ！」

「見る、軍艦が來たぞ！」

外に見えたのは、港を警備する飛行船だった。

ルクシオンは、その内の一隻が、自分たちを臨検した飛行船だと
気付く。

『……ミサイル発射』

アインホルンからミサイルが放たれると、軍艦が次々に燃え上が
っていく。

威力を調整しており、木っ端微塵にはなっていない。

『ドローンを出撃させなさい。アロガンツを足蹴にし、マスターを
侮辱した者は念入りにお礼をしましょう』

アインホルンから、足のない鎧のようなロボットたちが飛び立つ。

逃げ惑う共和国の軍人の中から、ボートに乗ったあの時の大尉を
見つけるとロボットたちが囲んだ。

捕まえており、大尉は泣き叫んでいる。

「放してくれえええ！」

ロボットたちが大尉をボコボコにし、そして戻ってくるとルクシオンは告げた。

『出来れば本体で暴れ回りたかったものですね。では、行きましようか。アインホルンの実力を、共和国に見せつけなければ』

そのままアインホルンは、フェーヴェル家の領地へと進路を向け船体に浮かび上がった紋章から、蔦が生えてアインホルンを飲み込もうとしていた。

『既に解析は終了しています。この程度で……私を縛れると思わないことです』

浮かび上がった紋章が、アインホルンのエンジンが唸ると同時に弾け飛び消えて行く。

『さて、こちらにも暴れさせて貰いましょうか』

ルクシオンのターン

アインホルンがフェーヴェル家の領地を目指していると、軍艦が集まり呼びかけてくる。

『貴様ら何をしている！』

すると、ルクシオンは、フェーヴェル家の家臣の声で答えた。

酒に酔った声をさせ、正気ではないと相手に思わせる。

『うるせえなあ！ こっちはフェーヴェル家のピエル様から直々に言われて暴れているんだ。怪我をしたくなかったら道を開けるお
おお！』

アインホルンが砲撃を行うと、軍艦が魔法によるシールドを展開した。

砲弾は関係なく撃ち破るも、ルクシオンは不満そうだった。

『共和国が防衛戦に強いはずですね。聖樹から常に魔力を供給されているのですから、ある意味で当然ですね』

飛行船は魔石を積み込み、それをエネルギーにしている。

そのため、魔石を積み込むスペースやら重量が枷になる。

だが、共和国の飛行船にはそれがない。

出力が他国の飛行船よりも高いのは、聖樹からエネルギーを供給されているので常にフルパワーを出せるためだ。

オマケに、地元にいればその効果は強まる。

『……ですが、私の敵ではありません』

アインホルンが、健在である軍艦に突撃する。

相手の大きさは六百メートル級。

アインホルンの三倍の大きさだった。

だが、アインホルンの特徴的な角がシールドを突き破り敵飛行船を斬り裂いて破壊する。

飛行船がゆっくりと落下していくと、通信を傍受した。

『フェーヴェル家の飛行船だ！ 奴ら、酒に酔って暴れ回っている！ すぐに増援を寄越してくれ。あの船、尋常じゃないぞ！』

落ちていく軍艦。

乗組員は無事に避難したようだが、軍艦の機関部分がむき出しになっ

ていた。

白く輝く宝玉を発見する。

『おや、あれがマスターの言っていた宝玉ですか。回収しておきま

しょう』

ロボットたちが宝玉を回収し、アインホルンに積み込む。

その後もルクシオンは、軍を相手にしながらフェーヴェル家の領地を経由して 聖樹の島へと向かうのだった。

決闘場。

倒れたアロガンツのコックピット前に来ると、俺はハッチを開けることにした。

アロガンツ相手に勝ってしまった俺だが、これには当然ながら種も仕掛けも存在する。

そもそも ルクシオンは俺を裏切っていない。

俺が本当にアロガンツと戦って勝てると思う？

柔よく剛を制す？

達人じゃないから無理だ。

悪いな、俺は凡人なんだ。

そんな俺が勝利を確信した理由は……そもそもルクシオンが裏切っていないことにある。

胸部パーツが開くと、俺はピエールの顔面に　口に拳を叩き込む。

「やあ、ピエール君。ようやく顔を見せてくれたね。とっても嬉しいよ」

口を押さえたピエールは、涙目になっている。

髪を掴んで引きずり出すと、地面に投げ捨てて俺もアロガンツから降りた。

左手の平に拳をぶつける。

「これから君をボコボコにするわけだけど、簡単に負けを認めてくれるなよ。色々と仕返しをしたいからさ」

ニヤニヤしていると、ピエールが叫んだ。

前歯が折れている。

「てめえ！　この俺様を殴ったな！」

大きく踏み込み拳を顔面に叩き込む。

こいつ弱ええええ！

すかさず膝を腹に打ち、くの字に折れ曲がったピエールに両手を組んで振り下ろしてやった。

地面に倒れるピエールは、泣いている。

「ま、待つて」

「おいおい、いきなり弱気になるなよ。楽しいのはこれからじゃないか」

髪を掴み地面に何度も顔を叩き付ける。

「どうだ。一方的に殴られる気持ちは？ 普段あまり味わえないだろうが、これからは沢山味わえるよ。良かったな、ピエール」

ピエールが涙と鼻水でグチャグチャの顔をしていた。

「や、やめてください」

「……嫌だね」

笑みを浮かべ、ピエールを仰向けにして寝かせるとマウントポジションを取った。

そのまま両腕を交互に振り上げて殴り続けた。

ちゃんと加減はするよ。

だって沢山殴りたいから。

「流石は共和国の六大貴族様だ！ こんなにボコボコにしても負けを認めないなんて素晴らしいぞ！」

ピエールが何か叫びそうになった。

負けを認めるとか言いたいのだろうが、すかさず口に拳を叩き込んでやる。

「なんてガッツだ！　これは俺も頑張らないといけないね！」

本当にこいつは素晴らしい。

叩いていてもまったく罪悪感がない。

むしろ「あれ？　俺って凄く良いことをしているんじゃない？」みたいな、錯覚すら覚えてしまう。

やっているのは極悪非道な行いなのにね！

しかし、暴力を振るっているのに、気分まで晴れるなんて最高の屑野郎だな。

これが実はいい奴とか、何か理由があるとか、そんな背景が一切ないただの純粋な屑野郎である。

人が苦しんでいるのを見て楽しみ、人を騙して笑い、そして悪事に手を染める。

虫唾が走るほどの屑にも使い道があると分かった。

ボコボコにしてもまったく良心が痛まない！

「やめで。もうゆでゆじで」

「え？ 何だつて？」

聞こえないふりをして殴り続けた。

ピエールの顔面が酷いことになっているが、魔法という便利なものがある世界だ。きっと治療もすぐに出来るはずだ。

だが、流石に殴っていると疲れてきた。

俺は立ち上がる。

ピエールが腫れ上がった顔で俺を睨み付けてきた。

「許さない。お前だけは絶対に……」

そんなことを言うてくるので、俺は笑顔で。

「そつか。じゃあ、死ね」

顔面に蹴りを入れてやった。

転がるピエールは、まさかまだ続くと思っていなかったのか顔を押しえて涙目になっている。

「お、終わった。もう終わりだ！」

「何を言っているのかな？ 審判は終わりを告げていないよ。まだ続くに決まっているだろ、ゴミ野郎」

今度はピエールを蹴って遊ぶことにした。

だが、恐ろしくつまらない遊びだな。

「お前、こんなことをして毎日楽しんでいるの？ 気持ちが一ミリも理解できないや。でも、お前が死ぬまで続けてやるよ。弱い者いじめが大好きなんだろ？ 良かったな、今まで一方的に殴るだけだったから、殴られる側に回れて幸せだろ」

腹を蹴るとピエールがもがいていた。

右手の甲が光り始めると、俺は笑みを浮かべる。

「あれ？ 使っちゃうの？ 聖樹の力を使ったら お前、どうなるか分かっているの？」

俺が出した条件は、聖樹の力を決闘中に使わない、だ。

それを破った場合のデメリットを思い出したのか、ピエールが泣きそうな顔になっていた。

「そつだよな！ 嫌だよな。だからお前は ずっと俺に殴られる」

ゲラゲラ笑ってもう一回蹴ってやるが……どうしよう。

本当につまらないぞ。

怖がらせるために笑ってはいるが、もう飽きてきた。

流石に痛々しすぎて、俺の良心も少しだけ痛む。

こんなことが平気で出来るピエールは、やっぱり屑だな。

決闘場を見下ろすユリウスは一言。

「……酷いな」

ジルクも同意する。

「ええ、凄く酷いですね。ですが、どうやら周りはそうは思っていないようですよ」

ユリウスが周囲を見れば、逃げ惑っていた生徒たちがピエールを見ていた。

「いい気味よ」

「聖樹の力がない貴族なんて、ただの人よね」

「それ以下じゃない。鎧を使って生身の人間に負けるとか、普通あり得ないわ」

ピエールがいかに関心したかに嫌われていたかが分かる。

それだけのことをしてきたのだろうが、ユリウスは微妙な気分だった。

「バルトファルト、お前はこれで満足なのか？」

ユリウスからすれば、もっとスマートに勝負がついたのではないかと思えた。

リオンならもつと簡単に勝利できたはずだ、と。

違う方向を見れば、審判にピエールの取り巻きたちが詰め寄っていた。

「ピエールさんが死ぬだろうが！」

「さつさと止めろよ！」

そんな彼らに審判が言う。

「止めれば、ピエール君の負けになる。それでいいね？」

流石に審判も止めに入りたいが、決闘なので勝手に止めるわけにもいかない。

ピエールが負けを認めれば止めに入れるが、それをリオンがさせなかった。

さつさと口を潰して喋れないようにして、いたぶっている。

それを聞いて、取り巻きたちも困っていた。

勝手に負けを認めれば、あとでピエールに何をされるか分からないからだ。

そこに、

「この決闘、私の判断でリオン・フォウ・バルトファルトを勝者とする」

審判に発言した金髪碧眼の美男子。

その人物の登場に、ナルシスが驚く。

「ドルイユ家の当主？ どうしてここにいる？」

審判がすぐに決闘の勝者を告げる。

「勝者、リオン・フォウ・バルトファルト！ 両者、すぐに離れなさい！」

周囲からは不満の声が聞こえてきていた。

「もつとやらせればよかったんだ」

「でも見るよ、ピエールの奴の顔？ 笑えるよな」

「このまま学園に来なくなればいいのに」

周囲の生徒たちの話を聞いて、ユリウスは目を閉じてしまう。

（自業自得ではある。だが、こんなことをして何になる。バルトファルト、これがお前のやりたかったことなのか？）

勝利者の宣言がなされ、俺が予定通り勝利した。

「……もつと早くに止めるよ。もう、何かこつちが弱い者いじめをしている気分じゃないか。ここまで弱いとか想定外だ。俺の良心も少し痛むぞ」

ボロボロになったピエールが、泣きながら俺を見上げていた。

駆け寄ってくる医者や看護婦が、ピエールの治療に取りかかると人数も多いためかすぐにピエールの顔が治っていく。

喋れるようにはなったが、歯はほとんどが失われていた。

「殺してやる。お前だけはどんな手を使っても殺してやる」

何というガッツだ。でも意味がない。

「お前は本当に素晴らしい人材だ。ここまでやらかして、逆恨みまでするなんて最高だよ。これで俺も心置きなく動けるというものさ」

ピエールが俺を凄じ顔で睨み付けてくる。

そして、随分と豪華な衣装に身を包んだ美男子がやって来た。

金髪の王子様を絵に描いたような存在だ。

「失礼する。バルトファルト伯爵だね？」

俺が頷くと、相手が名を名乗った。

「私はフェルナン・トアラ・ドルイユだ。ドルイユ家の当主……六
大貴族の代表者の一人をやっている」

「これは大物が出てきましたね。それで？ 何か用事ですか？」

フェルナンさんがピエールを見た。

ピエールは青い顔をして顔を背けている。

流石に、格上の存在に喧嘩は売らないらしい。

その小物っぷりが最高だな。

「彼の件は私からは正式に謝罪は出来る立場にないが、共和国の者として謝罪したい。その上で、聖樹の苗木について話がしたい」

ピエールが悔しそうにしており、右手の甲が光っていた。

フェルナンさんも右手の甲が光る。

「ピエール！ これ以上の狼藉は見過ごせない。ドリュユ家と事を構えるつもりか？」

だが、ピエールは止まらなかった。

「ふざけるな！ 俺様が負けたのは聖樹の力を封じられていたからだ。そうでなければ負けなかった！」

俺はニヤニヤしながらピエールを見ていた。

治療され、立ち上がれるようになったら強気になりやがった。

「聖樹の力があれば負けない、か。ふん、凄いね」

「調子に乗りやがって。お前なんかすぐにでも俺様が！」

「ピエール！」

聖樹の力で何かしようとするピエールを、フェルナンさんが止めようとしていた。

混乱するこの場所に、駆けつけたのはフェルナンさんの部下だった。

「フェルナン様！ た、大変です！ フェーヴェル家の飛行船が、破壊活動を行いながら聖樹神殿を目指しています！ 軍では止められず、このままでは聖樹へと攻撃を行うかも知れません！」

その言葉に、フェルナンさんがピエールを睨む。

「どういふつもりだ？」

ピエールも焦っていた。

流石に想定していなかったのだろう。

「し、知らない。俺様は知らない！」

だが、フェルナンさんの部下が言う。

「……飛行船の名前はアインホルン。フェーヴェル家が所有している飛行船です。ピエール殿、貴方が管理していた飛行船だ」

ピエールが青ざめている。

「う、嘘だ！」

「本当です。既に軍には無視できない被害が出ています」

フェルナンさんも、この場にいる全員が信じられないという顔をしていた。

「アインホルンだと？　だが、アレは王国で製造された飛行船だ。まさか、改修したのか？」

フェルナンさんの言葉に、ピエールは首を横に振っていた。

「し、してない！　改修なんかしていない！　俺様は知らないぞ。なんで王国の飛行船が、軍に被害を出せるんだ。そんなのあり得ない！」

あり得ない。

確かに彼らにとってはあり得ないだろう。

魔法を利用して発展してきた世界では、その魔法をより扱える方が勝者になれる。

聖樹は言わば、それが人間にとって都合良く制御できる橋渡しをしているような植物だ。

本当に都合のいい植物だ。

ただ、ルクシオンが敵意を抱かないので、新人類が作ったという事はないと思うが……それは重要じゃない。

今は、彼らにとって不敗神話が砂上の楼閣にすぎないと理解して貰えればそれでいい。

ついでに、もう一つ確認したいこともある。

「さて、そろそろ約束を守って貰いましょうか」

……まだ終わらないよ、ピエール君。

加護なし

決闘に勝利した俺は、当然のように約束を守って貰うことにする。

だが、ピエールが驚いている。

「や、約束だと？」

「そうだよ。俺は言ったよな。返せと　俺の前に持って来い、って」

ピエールが何か気付いた顔を見ると、フェルナンさんに訴えた。

「そうだ。決闘に勝ったのはこいつだ。あの船の持ち主はこいつだから、俺様は悪くない。悪いのはこいつだ！」

諦めが悪く喚いているピエールに、俺は笑顔で告げる。

「おいおい、よく聞こえなかったのかな？　言っただろう……俺の前に持って来い、って。さあ、早く返してくれ。久しぶりにアインホルンのベッドで寝たいんだ。枕が変わると寝られないほど繊細だね」

嘘だ。

枕が変わってもその日の内に爆睡できる。

ピエールの顔が青くなるのを俺はニヤニヤしながら見ていた。

「どうした？ 早く持って来いよ」

フェルナンさんが止めに入る。

「伯爵、申し訳ないが君の飛行船は暴走している。すぐに持つてくるのは不可能だ。出来れば、止めるのに協力して欲しい」

俺は口を三日月のように広げ、待っていましたとばかりに告げた。

そう、この時を待っていた。

時間を稼いだのもこのためだ。

こいつが ピエールが自分の、いや、聖樹の力やアロガンツの性能を過信してくれたおかげで事がスムーズに運んだ。

全てはこの時のために！

「関係ないね！」

俺の言葉にピエールが泣き出す。

「おや、ようやく気が付いたのか？ そうだよ、お前は聖樹の誓いとやらを破ったわけだ。決闘に負けたのに俺にアインホルンを返さないお前に 聖樹はどんな罰を下すんだろうな？」

すると、ピエールの真下に赤い魔法陣が浮かび上がった。

フェルナンさんたちが、まるで条件反射のようにその魔法陣から

離れていく。

とても怖がっている様子だ。

俺は魔法陣の上に立ち、ピエールを見ている。

「い、嫌だ。許して。許してください！ 何でもしますから許して！ 加護なしは嫌だ。加護なしは嫌だああ！」

泣き叫び逃げ出そうとするピエールに、地面から生えた木の根が体に絡みつく。

ピエールは足首を掴まれ倒れると、そのままピエールの体には木の根が絡みつき持ち上げた。

右腕に木の根から生えてきた蔦が絡みつく。

「止めてくれえええ！ お願いだから！ もうこんなことはしないから！ 俺は悪くない！ こいつは余所者じゃないか！ 許してくれえええ！」

泣き叫んでいるピエールに近付き、俺は声をかけてやった。

「何でもするって言ったよな？ なら、お前はそのまま“加護なし”になれ」

加護なし それは、聖樹の加護を持つ貴族たちが最も恐れるものの。

マリエのノートに書かれていた。

ピエールが絶望した顔になると、右手の甲の紋章が強く光り
薫に絡まれる。薫が離れ、木の根が地面に戻っていくと右手の甲に
紋章がなかった。

ピエールは座り込んでその場から動かない。

右手の甲を見て涙を流している。

俺はそんなピエールに近付き微笑みかけてやった。

「約束破りはいけないよね。これに懲りたら、今後は真面目に生きることだ」

全て分かっていたやっていた。

ピエールが最も恐れることがなんなのか想像し、絶対に紋章を消してやると決めていた。

ルクシオンと裏で色々と相談し、アルゼルの糞共に現実を教えてやろうということにした。

地面に浮かんでいた赤い魔法陣が消えると、フェルナンさんたちが恐れるようにゆっくりとやってくる。

加護なし。加護を奪われるところを見て、少し動揺しているようだ。

「……ピエール」

同情した視線を向けるフェルナンさんも、やはり六大貴族だな。

紋章を失ったピエールに同情している。

こいつには加護なんて必要ない。

持っているだけで人を不幸にする。

何よりこいつは俺に喧嘩を売った。

それが一番許せない。

イベント？ 主人公と攻略対象が、砂糖を吐きそうなくらいに甘い空気を出しているのに、今更仲良くなるためのイベントなど不要だ。

これはリアル……邪魔なら排除してしまえばいいのだ。後でいくらでも主人公たちをフォローすればいい。

我慢は体に毒だからね。

こいつが俺たちに絡まなければ、見守ってやったのに……だが、こいつは一線を越えた。ノエルやカーラをさらった時点で、俺はこいつの扱いを最も残酷なものにすると決めた。

俺はピエールに優しく囁く。

「どうだ？ 聖樹の加護を失った気分は？ 聞かせてくれよ、三下の似非貴族さんよお」

ニヤニヤして聞いてやると、ピエールが俺を振り返り怒っているのか泣いているのかよく分からない顔をしていた。

……その顔が見たかった！

「ほら言えよ。聖樹の加護しか取り柄のないお前が、それを失った気分を教えてくださいよ。怖いかな？ 怖いよなあ……だって、今まで散々偉そうにしてきたのに、加護を失ったからな。きつとみんなお前に復讐するんじゃないか？」

観客席を見れば、学園の生徒たちがピエールを冷たい目で見ていた。

貴族であつても加護を失った者には、どうやら世間は冷たいらしい。

ピエールがその場に蹲り泣き出してしまふ。

「何で……俺様がどうしてこんな目に！」

「お前が俺に喧嘩を売ったからだ。覚悟しておけよ。まだ終わらないぞ。それから、これは自業自得だよ。まあ、いい余興だったぞ、ピエール」

俺はピエールの肩に手をおいて、

「お前はいい道化だったよ」

ピエールが泣き叫び出すと、フェルナンさんたちが俺を見てドン引きしていた。

……いや、ドン引きしたいのはこっちだよ。

何だよ、迷惑をかけられたのはこっちだぞ。

俺は髪をかきつつ、

「さて、そろそろ迎えに行かないとね」

ルクシオンがやり過ぎていないか心配だ。

あいつ新人類を滅ぼしたいとか常に言っている駄目な子だからな。

アルゼル共和国の飛行船艦隊が展開していた。

後ろには聖樹神殿が控えており、これ以上先に進めると聖樹が危なかった。

旗艦に乗る提督が叫ぶ。

「何としても奴をここで沈めろ！ 乗組員の安否は無視して構わん！」

五十隻を超える艦艇が、大砲を向ける相手はアインホルンだった。

フェーヴェル家の領内を破壊しながら進み、フェーヴェル家の私設艦隊を沈めながらここまで来たのだ。

共和国の飛行船が一斉に大砲を撃つ。

船体横に並んだ大砲を撃つのだが、大砲の弾は魔法により加速して威力を高めていた。

そんな砲撃の中を、アインホルンは突き進んでくる。

シールドを展開し、大砲の弾を全て弾いていた。

提督が苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「……化け物か」

共和国の歴史の中で、ここまで追い込まれたことは一度もなかった。

聖樹を信仰している共和国にしてみれば、撤退など出来ない。

次々に飛行船が空へと上がり、艦隊に加わるもアインホルンは無視して砲撃を行ってくる。

船首を向けたまま砲撃をするアインホルンに、提督は驚いている。

共和国の飛行船が、魔法によるシールドを貫かれ被弾した。

次々に被弾する味方艦。

「何という命中精度だ。これが王国の飛行船か」

提督が叫ぶ。

「機関出力最大！ この船をぶつけてでもあの船を沈める！」

撃ち合っているのは不利と判断すると、旗艦を含めた数隻が突撃をかける準備に入る。その動きをアインホルンは黙ってみていた。

「押しつぶせ！」

提督もアインホルンの動きが気になっていたが、

『ぎやははは！ 俺たち最強！』

『フエーヴェル家万歳！』

『おら、どけどけえ』

酔っぱらいの声が通信から聞こえてきており、相手が理解に苦しむ動きをしても「酔っ払いのすること」と切り捨てた。

「突撃！」

飛行船が船首にシールドを分厚く展開し、アインホルンに向かって突撃していく。

飛行船からは乗組員たちが次々に逃げ出し、提督も小型艇に乗り込んでその場を離れると外に出て驚いた。

「……まさか」

突撃してきた飛行船を砲撃で撃ち抜き撃沈させると、旗艦……一千メートルを超える飛行船に突撃したのだ。

押しつぶされ、斬り裂かれるように左右に分かれた旗艦。

アインホルンだけが爆発で発生した炎と煙の中から無事な姿で出てくる。

提督は手を悔しさに握りしめた。

「どうにもならん」

準備不足もあるが、そもそも勝負になっていなかったのだ。

小型艇の上からアインホルンの姿を見る。

共和国の騎士たちが乗った鎧が取り付こうとすれば、撃ち落とされるか足のない鎧のような何かに叩き落とされている。

提督は膝から崩れ落ちた。

「わしの代で、共和国が負けるというのか……」

不敗神話が終わろうとしていた。

すると、部下の一人が空を指さした。

「提督！」

「アレは……何だ？」

提督も知らない大きな鎧が空からアインホルンに向かって降りていくと、足なしの鎧を殴り飛ばして甲板に降り立った。

中からは青年が降りてくる。

「学生か？」

学生　リオンが手にショットガンを持ち、アインホルンの船内に乗り込むと今度はドルイユ家の飛行船が通信で全艦に向けて説明していた。

『撃つな！　今の青年は味方だ！』

フェルナン・トアラ・ドルイユ　六大貴族の言葉に、艦隊は従い砲撃を中止するのだった。

だが、提督は両手について涙を流す。

「……今更来たところで」

聖樹のある大地に、数多くの飛行船が残骸を晒していた。

事実上、共和国の艦隊はたった一隻の外国の飛行船に敗北したのだ。

アインホルンの船内。

随分と荒らされており、ショットガンを両手に持った俺は呟く。

「修理代を割り増しで請求してやる」

すると、護衛用のロボットを両脇に控えさせたルクシオンが、俺の前に現れるのだった。

『お待ちしておりました、マスター』

「寂しかったか？」

『はい。マスターの戯れ言が聞こえないというのも寂しいものだと、私も理解する程度には成長したようです。ただ、もう少し遅れてきてくれたら、あの神殿を破壊できたというのに』

……やっぱりこいつは可愛くない。

クレアーレなんか、アンジェの下着写真を送ってくれるのに。

歩き出すとルクシオンが俺の右肩辺りの定位置に来て浮かぶ。

ロボットたちも俺を守るように配置についた。

「さて、屑共はどこだ？」

『数人が部屋にこもって現実逃避をしていますね。多くは格納庫から、逃げだそうと色々やっていますよ』

「案内しろ。それから、ピエールの件は徹底的にやれ」

『……了解です』

ショットガンを構える俺は、笑顔でピエールの取り巻きたちを探

すのだった。

荒らされたアインホルンを見つつ、ルクシオンから報告を受ける。

その中で気になったのは、

「聖樹への誓いは契約ではない？」

「はい。正確に言えば違います。そもそも聖樹とは、そこまで細かな対応を取りません。契約云々は、聖樹への誓いを応用したものです。本来、聖樹への誓いというのはより大きな力を借りるため、というのが正しい使い方だそうです。ただ、この応用方法ですが、近年発見されたそうです」

「直接奪わなかったのも、呪いをかけて俺たちに命令しなかったのもそれが理由かよ」

ピエールなら、問答無用で俺たちからアインホルンを奪ってもおかしくない。

それが聖樹への誓いという回りくどい手段に出た。

相応に理由があつたわけだ。

『調べた結果、聖樹の紋章にも階級があります。頂点は“守護者”。次点で“巫女”。その後に六大貴族たちが続き、更に下に貴族たちがいます。頂点に行くほどに恩恵が大きくなっていますね』

「簡単に奪うとか、呪うことはピエールでは無理だったのか」

『はい。そのために聖樹の誓いを利用したと思われます。聖樹にはアインホルンをマリエたちの所有物とでも報告したのでしょうか。聖樹から見れば、加護のあるピエールの方が我々の上位者ですからね』

俺は小さく笑う。

「横暴な聖樹には、苗木が有効だったな」

『苗木を持つ者には、上位者として振る舞えなくなる。マリエのノートから推測しましたが、当たりましたね』

取引材料。

そして備えとして、苗木は十分に役に立ってくれた。

「それにしても、聖樹はピエールを簡単に切り捨てたな」

『聖樹にとっては、誓いをしておいて負ける、または破る行為は自身の守り手として不十分と判断したのでしょうか。聖樹へ誓うことで拘束力やら呪いなどの力を貸すわけですからね。なのに、失敗したでは話になりません』

言ってしまうえば、六大貴族たちが聖樹を一方的に利用しているだけではない。

聖樹も自分を守るために、六大貴族たちを利用しているのだ。

「ピエールは軽率だったな。この情報、王国に流せばどうなる？」

『マスターが動かなければ変わらないでしょう。実際、王国に共和

国を攻め滅ぼすだけの力はありません。共和国が防衛戦で有利なのは変わりませんからね。ただし、共和国の弱点に気が付きますし、長い目で見れば有益な情報です』

喋っていると格納庫に到着した。

諦めて座り込んでいるピエールの取り巻きたちが、入ってきた俺を見る。

「反逆者の皆さんこんにちは　そしてくたばれ！」

ショットガンの引き金を引くと、シエルが発射されて散弾が飛び散った。

対人用だが、凄く痛い。

次々に撃って、そして痛みに苦しみ倒れていく。

ピエールの取り巻きがいたので頭を踏んでおく。こいつは、ピエールが俺に喧嘩を売ってきた日に見かけた奴だ。

「さて、これからお前らは反逆者として裁かれるわけだが……気分はどうだ？」

痛みに苦しむピエールの取り巻きたちは、青い顔をしていた。

酒臭いが、酔いは覚めている様子だ。

「誰に喧嘩を売ったか分かったか？」

全員が震えており、俺はショットガンにシエルを装填していく。

「お前ら。王国に攻め込んでこいとか何とか……お前らが相手をしてくれるんだって？　素晴らしい根性だ。買ってやるうか？」

外の様子を見ていたのか、全員が顔を伏せていた。

口々に、

「お、俺はそんなつもりじゃ」

「アレはピエールさんが　ピエールが言ったんだ」

「そ、それに、俺たちは何もしていない！」

ショットガンの引き金を引き、黙らせると俺は笑う。

「関係ないんだよ！　お前らの罪は、俺たちを　いや、この俺に喧嘩を売った事だ」

主人公と攻略対象である男子が仲良くなり、もうイベントなど不要となった今　俺が我慢をする必要などない。

さて、次はアルゼル共和国にも責任を取って貰うでしょう。

六大貴族

議会議事堂　　聖樹神殿と呼ばれている高い塔。

そこにある六大貴族の会議室で、俺は聖樹の苗木を片手に持って交渉を行っている。

主に交渉相手は、アルベルクというナイスミドルだった。

会議に出席している六大貴族の面々は、とても苦々しい表情をしているのが俺は嬉しくてたまらない。

特に、フェーヴェル家の当主であるランベールは、俺を前にして激怒していた。

俺は苗木を見ながら彼らと話をしていた。

失礼な態度？　悪いが、こいつらにはこれで十分だと思っている。そもそも、俺って留学生で共和国にあまりいい感情もないからね。

「で、賠償はいかほただけなので？」

ランベールが叫んだ。

「ふ、ふざけるな！　フェーヴェル家の領地にどれだけの被害が出たと思っている！　王国に抗議をしてやる！」

俺は笑う。

「お、強気ですね。陛下にはそう伝えておきますよ」

ニヤニヤしていると、ランベールが顔を真っ赤にしていた。

敗北したという事実を受け入れられないらしい。

正確には敗北ではない。

酔っ払ったピエールの取り巻きたちが、暴れただけ。

共和国はそれを押し通そうとしている。

理由は、対外的に身内同士の争いとして処理できるから。

「俺に責任を取れと？ でも、そうになるとアインホルン一隻に聖樹の手前まで攻め込まれたということになりますよね？ いいのかな」

アルベルクさんが、ランベールを睨み付け黙らせていた。

「……今回の一件、確かにフェーヴェル家の無法は目に余る。共和国としても謝罪しよう。だが、賠償をするにも君の独断で決められるのかね？」

俺は聖樹の苗木を片手に、

「先に俺個人への賠償をして貰いましょう。今回は殿下を始め、こちらの留学生を呪うなんて真似をしたそちらに非がないとは言いませんよね？ そちらは国に対応して貰います。ただ、俺個人への賠

償は相応を覚悟して貰いましょうか」

額を提示する。

金塊やら、魔石とか資源とか、とにかく莫大な量を提示した。

ランベールが目を見開く。

「ば、馬鹿な！ 貴様一人にこれを払えというのか！」

「当然だ。お前らがピエールを放置しなければ、こんなことにはならなかった。それに、俺にも立場がありましてね。あまり弱腰な対応をすれば、陛下に合わせる顔がない」

アルベルクさんがその額を見て、

「……いいだろう。支払おう」

随分とふっかけてみたが、流石に金持ちだけあって余裕があるな。

「だが、宝玉は返して貰う」

アルベルクさんの発言に、周囲も当然だという顔をしていた。

魔力を濃縮した宝玉は、共和国にとっても貴重な物だ。

ルクシオンが、共和国の飛行船を破壊して回りながら、回収していたので結構な量が積み込まれていた。

「お断りします」

六大貴族たちが「は？」と驚いた顔をしていた。

「いや、聖樹の誓いでね。アインホルンの中にある全てを差し出せ、って言ったんですよ。取り返す前にアインホルンが回収したんですよ、俺の物でも良いよね？ 酔っぱらいたちは引き渡したんだし、別に問題ないじゃん」

ランベールが立ち上がって俺を指さした。

右手の甲に紋章が浮かんでいる。

「図に乗るなよ、小僧！」

苗木を掲げてみせる。

ランベールの紋章は光を失い、そして俺は告げた。

「今度こそ本気で不敗を終わらせてみるか？ アインホルンが一隻だと思ふなよ」

全員が警戒しているのを見て満足する。

一隻しかないんだけどね。

はったりという奴だ。

その後も交渉は続いたが、ほとんど敗北していた共和国は俺の条件を飲んだよ。大体、事前にルクシオンがどれだけなら賠償金を用意できるのか調べていたからね。

交渉というか、恫喝？

そんな感じでした。

久しぶりに戻ってきた自宅。

俺はノエルの世話をしていた。

ルクシオンは、聖樹の苗木の観察ついでに水やりを行っている。

『それにしても滑稽ですね。聖樹の苗木を手に入れた貴族たちですが、枯れる原因が聖樹だと知らないなんて』

ルクシオンの調べでは、聖樹の苗木が育たないのは聖樹に原因があるらしい。

この大地に聖樹は一本あればいいとのことだ。

……植物として間違っている気もするが、普通の木じゃないので気にしても駄目だろう。

そして、貴族たちが聖樹の苗木が欲しい理由も分かった。

俺のように聖樹の力への備えとして、苗木が欲しかったらしい。将来のためと言うよりも、ピエールがやったような卑怯な手段から身を守るため……何とも内輪的な理由だな。

そのために苗木が欲しかったようだが、調べてみると苗木は聖樹がある土地では育たないと分かった。

いくら欲しても手に入らない。

確かに滑稽だ。

俺はそれよりもノエルの方が心配だった。

「……弱っているな」

『限界が近いようですね』

すると、自宅にマリエが訪ねてきた。

「あに リオンさん、ちょっとお話があるのですが？」

言葉が普段と違って安定しないマリエに呆れつつ、俺が玄関に行くとそこには包帯を巻いた痛々しい男子がいた。

小さく頭を下げてる。

ノエルの飼い主 ピエールに暴行された男子だ。

「あ、あの、ノエルを預かってっていると聞いて！」

俺は部屋に案内する。

男子が入ると、ノエルがベビーベッドの上で顔を上げた。

やはり飼い主を待っていたらしい。

「ノエル！」

男子が泣きながらノエルに近付いて手を差し伸べる。

その手をチロチロと舐めるノエルは、鼻を寄せて主人の臭いを嗅いでいるように見えた。

『もう鼻もほとんど利かないはずです。目も見えているかどうか』
ルクシオンの言葉に俺は、

「馬鹿。そこにいると分かればいいんだよ。ちゃんと飼い主がそこにいる、ってノエルは気付いた。それでいいじゃないか」

男子も泣いている。

「ごめんよ。ごめんよ、ノエル」

感動の再会だ。

俺たちは家を出て外で話をすることにした。

外に出た俺たちは話をする。

マリエは、首に出来た痣が消えていた。

ピエールが紋章を失った　加護なしになった時点で消えたようだ。

「兄貴、えつとあの……」

マリエが俺に色々と手渡してくる。

ピエールと付き合いのあった組織との繋がりを示す証拠や、何を取り扱っていたのかを示す証拠品だった。

「お、交渉材料が増えたな」

マリエがまだ俺に怯えている。

「わ、私も今回は反省しているというか、頑張ったので……ごめんなさい、お兄様！　許してください！」

中庭とはいえ、外で土下座をしてくるマリエを呆れて俺は見る。

「……馬鹿か。もうとっくに許したよ」

「え！？」

顔を上げると、マリエの額に土がついていた。

「お前、気が付かなかったの？　そもそも、ピエールが色々しでかしたときには、俺も裏で動いていたの。ルクシオンにも調べ物をして貰うために、あいつのところにかせただけ」

『反吐が出るとはこのことですな。あの程度の呪いで、私を譲渡で

きると思っていたのでしょうか？ 愚かすぎます。マスターの命令がなければ殲滅ものでしたよ』

マリエが涙目になった。

「そんな！ 私、頑張ったのに！」

俺はマリエの頭に手を置く。

「ああ、よく頑張った。こいつは俺が有効に使ってやる。ついでだが、王国にはお前らへの締め付けを緩めるように連絡しておいた」

「え！」

元気な顔になるマリエに俺は説明する。

「王妃様からも返信が来たよ。最低限の生活が送れるくらいにはしてやるってさ。料理人と使用人数人が、今度派遣される使節団についてくるから」

そして俺は懷から、アルゼル共和国の紙幣 札束の入った封筒をマリエに渡した。

「小遣いだ。そいつで当面の生活費の足しにしろ。八人いても、それだけあれば多少の贅沢は出来るだろ」

分厚い封筒を懷にしまい込むマリエは、嬉し涙を流していた。

マリエが俺の脚にすがりついてくる。

「兄貴いいい！」

「五月蠅い、離れる！ 言っておくが、反省していたから話を付けただけだ。何もしていなかったら、現状維持だったのを忘れるなよ。小遣いも悪さをしたら没収だからな！」

マリエは祈るように両手を組み、太陽に向かってお礼を言っていた。

「頑張つてよかった！ 神様は私をまだ見捨てていなかったのね！」

……いや、どうだろう？

こんな世界に転生している時点で、っと思ってしまう。

マリエが思い出したように俺を見る。

「あれ？ それより、ピエールを兄貴がボコったけど、これでよかったの？ イベント潰れちゃうわよ」

俺は首を横に振る。

「お前は馬鹿だな。主人公とエミールを見ただろ？ あんな関係で付き合っていない方がおかしいし、仲良くなれるイベントだろ？ どうしても必要ならこっちで支援してもいいし、別にこだわらなくてよくな？ というか、もう肉体関係あってもおかしくないって。何だよ、あの甘ったるい雰囲気。見ていて悲しくなってくるぞ」

俺は婚約者二人と離れ、メールでやり取りをするだけなのに……。

マリエも少し考え、別段必要でもないと思ったのか頷いた。

「そうね！ あの糞野郎をボコボコに出来たし、そっちの方が重要よね！」

「だろ！」

二人で笑い合っていると、部屋からノエルを抱えた男子が出てきた。

ノエルは息を引き取っていた。

男子生徒の名前は【ジャン】。

田舎から出てきて、学園で勉学に励んでいた。

幼い頃から一緒だったノエルを連れてきたのは、ジャンには家族がいないから。

最期にノエルは、ジャンをずっと待っていたのだろう。会えたことで気が緩んだのか、安心したのか逝ってしまった。

色々と話を聞いている内に、すっかり夜になっていた。

ジャンは火葬したノエルの骨が入った箱を持っていた。

「で、これからどうするんだ？」

俺が今後の予定を聞くと、ジャンは首を横に振る。

「分かりません。でも、奨学金を返済しないと。働くことになると思います」

俺は溜息を吐く。

「……ピエールはもういない。復学しておけ」

「そうしたいんですが、もう奨学金は打ち切られています。今から復学しても留年ですし、生活費ありませんから」

俺はテーブルの上にお金を置いた。

「え？」

「ピエールの実家から巻き上げた金だ。貰っておけ。ほら、怪我をさせられたんだ。慰謝料だよ」いしやりよう

「で、でも」

ジャンが俯いている。

「ノエルを拾ったのも何かの縁だ。学園を卒業した方が稼げるんだろ？」

「そ、それはそうです。卒業生になるとやはり違いますし」

無理矢理押しつける。

「なら復学だ」

ジャンが俺を見て、

「ホルファートの貴族様は優しいんですね」

「違うよ。俺が特別優しいのさ。マリエ　他の留学生たち。特に美形の五人は、顔は良いが阿呆だからな。注意しろよ」

ジャンは俺にお礼を言つて家を出た。大事そうにノエルの骨が入った箱を抱きしめて……。

一度、実家に帰るらしい。

一人になると、ルクシオンが話しかけてくる。

『……寂しくなりましたね』

ベビーベッドを見ながら、俺は同意する。

「そうだな」

ノエルがいなくなってしまった。

少し寂しいが、仕事をするでしょう。

ホルファート王国王宮。

執務室で目の下に隈を作ったローランドが、リオンからの手紙を握りつぶしていた。

「お元気ですか、陛下？」

病気とかしていませんか？ 何かあれば教えてくださいね。

それはそうと、いい感じにまとまりそうです。

派遣してくれた役人に詳細を教えて送り返しますので、交渉役を送ってください。

今ならいい感じに搾り取れますよ。忙しくなりますね（笑）
By貴方には勿体ない家臣より」

「どういうことだ！ どうしてこんなに早く手紙が来る！ 人を派遣したばかりで、まだ向こうに着いたばかりだろうが！」

気が付けばアルゼルとの揉め事が終わっており、何やらいい感じにまとまるらしい。

色々と心配していたローランドが机に突っ伏す。

「あいつを処刑したい」

そんなローランドの言葉に反対するのは、ミレーヌだった。

ミレーヌの方には、リオンから別の手紙が届いている。

少し恥ずかしそうに手紙を読んでいたミレーヌが、処刑と聞いて真顔になる。

「駄目です。王国の意地を見せた騎士を裁くとは何事ですか！」

「あいつの監督不行き届きだろうが！ 揉め事を起こして、それを自分で解決したに過ぎない！ 私の優雅な一時を奪いおつて……」

ミレーヌが呆れている。

「今後、役人同士で条件を詰め合うことになりますね。それに交渉役には相応の人物を派遣する必要がありますよ。誰を送るのか決めましたか？」

ローランドが顔を上げた。

「人がいない……奴を派遣する。もうすぐ学園も夏休みだからな」

ホルファート王国の学園。

アンジェとリビアが見守る中、クレアーレが映像を空中に投影していた。

その映像を見ているのは リオンに契約という名の鎖で縛られた友人たちである。

聖樹の誓いなどよりも、よっぽど契約らしい関係で縛られた友人たちだ。

ダニエルがワナワナと震えている。

『 と、いうわけだ。夏休みに観光に來い。アルゼル共和国は色々楽しいぞ』

レイモンドが啞然とする。

「いや、荷物が多いから飛行船を出せってどういうこと？ 僕たち、夏休みは色々と予定があるのに！」

映像が切れると、ダニエルも怒っていた。

「こっちはようやく、彼女を実家に連れて行けるようになったのに！ アルゼルまで行って、帰ってくるだけで夏期休暇のほとんどが潰れちまうよ！」

他の男子生徒たちも苦悩していた。

リビアが申し訳なさそうにする。

「あ、あの、とりあえず報酬の件からお話をしますね」

リビアが報酬を伝えると、男子たちの様子が変わった。

ダニエルがレイモンドと話をする。

「多くね？」

「行きと帰りの魔石と物資はリオン持ち。報酬も悪くないね。これだけあれば、うちは借金を返済できそうなんだけど」

アンジエが話をまとめる。

「リオンがアルゼルから賠償金を得た。報酬に嘘はない。外国への

長期の船旅になると、どうしても船員の練度が必要になる」

いくら性能が高くとも、船員の訓練が出来ていないと危険である。

そのため、リオンは友人たちを頼ったのだ。

アルゼルから賠償として得た大量の資源などを運ばせるために。

リビアが、やる気を見せる男子たちに呆れる。

「さっきはやる気もなかったのに」

アンジエが肩をすくめる。

「人を働かせるためには、報酬の支払いが大事だからな。まあ、頑張って貰おう。それに、飛行船の数は多い方が旅も安全だ」

クレアーレがウキウキしているような声を出す。

『忙しくなるわね。準備しなくっちゃ！ 私、新しい飛行船を用意しているのよ』

リビアが胸に手を当てる。

「リオンさん、驚いてくれますかね？」

アンジエが微笑む。

「驚くさ」

そんな二人の姿を見て、ダニエルとレイモンドの顔が不機嫌になった。

「……リオンに腹が立ってきた」

「奇遇だね。僕も同じだよ。向こうでは何かおこって貰おうか」

守護者

「やだもお！ 朝からちよっとお高いジャムを選べるとか最高！」

朝からマリエはご機嫌だった。

二枚目のトーストにジャムを塗って喜んでいるマリエを見て、俺は目玉焼きとベーコンが乗ったトーストを食べていた。

休日にマリエの家に来てみれば、朝食が出来たところだったらしい。俺も一緒に食べることになり、久しぶりにトーストを食べているのだが……何だろう。

マリエが作った朝食なのに、酷く懐かしい味がする。

前世のお袋の味に近い。

俺がトーストを食べているのを見て、ユリウスが驚いていた。

「バルトファルトは食べ慣れているな。俺はこの手の食べ物はある経験がないから、どう食べたらいいのか最初は分からなかったのに」

だろうね。

そもそも、トーストが出てきたのはアルゼル共和国に来てからだ。

ホルファート王国にはなかった。

グレッグがかぶりついて食べており、

「慣れるとおいしいよな。最初はこぼしたけど」

クリスが注意している。

クリスの方はナイフとフォークで食べていた。

「今もこぼしているぞ、グレッグ」

賑やかな朝食。

ジルクは紅茶を自分で煎れていた。

これ見よがしに、香りを楽しんでいる。

「やはり朝はこれに限りますね」

その香りに俺は首をかしげる。

「それ、何か変な臭いがするぞ」

すると、ジルクがこれ見よがしに溜息を吐いていた。

「分かっていませんね。多少はお茶に心得はあるようですが、その程度では」

イラッとしたが、ここは我慢しておこう。

ブラッドがジャムを手にとって、

「誰が使う？」

カーラが手を小さく挙げて、

「あ、次使います」

賑やかな朝食時に、カイルが俺に飲み物を差し出してくる。

「ジルクさんもお茶狂いなんですよ」

「おい、俺もお茶狂いみたいに言うなよ。俺はお茶を楽しむ紳士だぞ」

一瞬、全員が静かになった。

だが、グレッグが食事を再開したために、何事もなかったかのよう
に次の話題に移る。

「それより、王国からはいつごろ使節団が来るんだ？」

俺はルクシオンを見る。

『夏期休暇に合わせて、第一陣はすぐにでも。第二陣は、その後で
しょうか』

もうすぐ夏休みだ。

ほとんど学園に通っていないなかった気がするが、これもピエールの

せいである。

フェーヴェル家にはもつと文句をネチネチ言えばよかった。……
言ったけど。

ユリウスが俯く。

「しかし、今回は困ったな。まさか、聖樹というのがそれほどまでに厄介とは思わなかった。精々、信仰の対象としか考えていなかったからな」

外から来る人間にそこまで教えなかったのだろうか。

そういう意味でも、ピエールの奴は軽率だった。

マリエが三枚目のトーストにジャムを塗っている。

「けど、これで平和に過ごせるわね。もう一学期は終わるけど、残り
りは楽しく過ごせそうね」

使節団には、マリエたちの世話をする使用人たちも同行している。

家事から解放されるマリエは幸せそうだ。

すると、屋敷の外にある鐘が鳴った。

応接間。

俺はルクシオンと 更にマリエとで、客人の相手をしている。

客人はまさかのレリアだった。

ヒソヒソとマリエと話をする。

「何で主人公がここにいるんだよ？」

「知らないわよ。兄貴が呼んだんじゃないの？ あ！ カーラが前に人が訪ねてきたと言っていた気がするわ」

忙しくて気にかけていらなかったらしいが、やはりマリエのせいだったか。

「……後で覚えているよ」

「待つてよ！ お兄ちゃん、私は無実よ！」

二人で話をしていると、レリアがルクシオンに視線を向けた。

そして 。

「それ……課金アイテムですね」

俺たちは顔を見合わせ、そしてレリアの顔を見た。

「どうして知っている？」

嫌な予感がした。

ルクシオンを見て、課金アイテムだと理解したということは。

レリアが自己紹介をしてきた。

「私も貴方たちと同じ転生者よ」

普段なら誤魔化していたところだが、こいつは俺たちが主人公だ
と思っていた女子である。

マリエが驚いていた。

「う、嘘よ！ あんたが主人公だと思っていたのに！ え？ もし
かして主人公に転生しちゃった系？ 羨ましいな、この野郎！」

レリアの目つきが悪くなっていた。

エミールとラヴラヴしていた時とは大違いだ。

「それは私の姉貴よ！ 私は双子の妹よ！」

俺は静かにマリエを睨む。

マリエがサツと視線をそらした。

仕方がないのでレリアと話をした。

「……こちらで調べたが、主人公らしいのはあんた一人だったぞ。
それに双子ってどういうことだ？」

「そのままの意味よ。私は姉貴の 双子の妹として転生したの。」

本来、主人公の双子の妹なんて存在しないわ。そして、私は主人公じゃない。主人公は姉貴よ」

俺は一度深呼吸をしてから、

「マリエエエエ！」

「ご、ごめんなさいいいい！！」

マリエが謝罪してくるが、一つ気になることがあった。

「おい、ちょっと待て。なら、あんたの姉貴は 主人公はどこにいる？ もう一学期が終わるのに、戻ってきていないとかどういう……ま、まさか、入学していないのか？」

双子の妹と名乗る転生者がここにいるのだ。

もしかしたら、本物の主人公は既に学園にいないとか？ それは困るぞ！

「……姉貴はうまくやっているわよ。私がどれだけ苦労してフォロイしたと思っているの？ それをぶち壊すような真似をして！ あんたたち、どうしてくれるのよ！」

マリエが鼻で笑う。

「何よ。問題がないなら別にいいじゃない」

レリアが激怒している。

ソファーから立ち上がり、手を振り回して俺たちに文句を言うのだ。

「大ありよ！ 聖樹の苗木を早く回収すぎたわ。あれ、姉貴が回収しないとすぐに枯れるのよ！ アレがキーアイテムだって、そのあざといのは知っているでしょう！」

「あざといですって！ ふざけんじゃないわよ。あんたこそ、毎日見せつけてくれていたじゃない！ あんたの方こそ男受けを狙ってあざといのよ！」

喧嘩をする二人を見ながら、俺は持っていたケースをテーブルの上に置く。

そこに聖樹の苗木が青々としており、枯れてなどいなかった。

取っ組み合いの喧嘩をしていたマリエとレリアが、苗木を見て驚く。

「あるじゃん！」

「な、なんで？ だって、姉貴が巫女に選ばれたから、苗木は枯れなかったのよ」

その辺りの事情はマリエのノートに書かれてはいなかった。

マリエの記憶も当てにならない。

ルクシオンが説明する。

『苗木が枯れるのは、聖樹が存在しているためです。この大陸に聖樹は一本しか存在できません。そのため、苗木は誕生しても次々に枯れてしまうのです。ただ、聖樹の干渉を和らげることで生存は可能ですよ』

特殊なケースに守られている間は、聖樹の苗木も枯れないというわけだ。

「何だよ。心配して損したな」

俺がそう言っていると、マリエがレリアに髪を乱しながらあっかんべーとしていた。

「こっちはこっちで苦労しているのよ。あんたが安牌君に手を出しているから勘違いしただけよ」

レリアが少し安堵した顔をして、そのままソファーに座る。

「よかった。苗木が枯れていたら詰んでいたわ」

俺はマリエに確認を取る。

「そうなのか？」

「最終的なラスボスって聖樹そのものだからね。守護者も巫女もない聖樹って暴走しやすいらしいの。それで、苗木に選ばれた主人公が最終的に勝利して、苗木を倒れた聖樹の代わりに植えてハッピーエンドよ」

レリアが補足してくる。

「姉貴にはゲームと同じように巫女の適性があるわ。私にはなかったし、巫女は間違いなく姉貴だから、主人公は姉貴ね」

マリエが髪を手で整えていた。どうやら、レリアと話している内に、段々とゲームの記憶が蘇ってきたようだ。

……もっと早くに思い出してくれればよかったのに。

「後は、苗木の巫女が選んだ男子が守護者になって、一緒にラスボスと戦う感じだったかな？」

レリアが怒った顔で訂正してくる。

「違うわよ。守護者も苗木が選ぶの。巫女と相性が良さそうな男子を選ぶから、巫女が選ぶように見えているだけ。あんた、ちゃんとゲームをクリアしたの？」

「大きなお世話よ！ 全クリはしていないし、それに何年前の話だと思っている？ あんた、十年前とか鮮明に思い出せるの？ 文句ばかり言わないでよね」

確かに思い出せないことも多いだろう。特にマリエは、ホルファート王国に転生しているので、アルゼル共和国に関しては興味も薄かったかも知れない。

だが、ここで一つ気になったことがある。

「そうになると、逆ハーレムエンドはないのか？」

レリアが鼻で笑っていた。

「あるけど微妙よ。結局、エリクが守護者に選ばれて、他は巫女の下扱いだし。それより、逆ハーレムとか信じられない」

その言葉が、マリエの心に突き刺さったらしい。

「……逆ハーレムは女の子の夢だから」

おい、こっちを見て言ってみろ。女の子の夢で苦労した俺に、もう一度言ってみろよ！

さて、マリエの方は置いておくとして、レリアの方が知識はあるのは確からしい。安堵している様子から、俺は今後に大きな問題があるとは思わなかった。

「なら、問題ないな。それで、その主人公である姉貴さんは今どこに」

苗木のケースを手にとると、俺の右手の甲が光っていた。

「あれえええ！？」

ケースに触れた右腕の甲が光り、何やら紋章が浮かび上がっている。

ルクシオンがのんきに、

『おや、この紋章はピエールの物とはまた違いますね』

マリエが口をあんぐりと開け、そしてレリアが両手を頭に持つていく。

「それ守護者の紋章じゃないのおおお！」

「嘘っ！」

驚いて右手の甲を見ると、何やら植物らしいデザインというかとにかく紋章が浮かんでいた。

マリエが俺から視線をそらした。

「わ、私じゃない。兄貴のせいだから」

そんなことを言い出した。

「てめえ、一人だけ関係ないふりしてんじゃねーよ！ どうするんだよ！ これ、主人公の恋人のものだろ？ 何で俺につくんだよ！ ルクシオン取ってくれ！」

ルクシオンが俺の右手の甲を見る。

『……安心してください。命に別状はありませんよ』

「そついう問題じゃないんだよ！」

三人でぎゃー、ぎゃー、と騒いでいると、ルクシオンが俺たちに説明を始めた。

『そもそも皆さん勘違いをしておられますよ』

俺たち三人が静かになり、ルクシオンを見る。

『聖樹の苗木も、聖樹も守護者を欲しています。聖樹は単独でも存在できますが、苗木の方は守って貰わなければ生きられません』

レリアもそれは分かっていると言いたいらしい。

「だ、だから、守護者は姉貴の恋人候補たちの中から選ばれるのよ。みんなそれぞれに特徴もあるけど、権力もそれなりにあるから。守護者に相応しい候補でもあるわけだし」

え？ 苗木ってそこまで見ているの？

手に持ったケースの中を見て、俺は苗木がそんなところまで認識しているのかと驚く。

『それは、ゲームでは、の話ですよ？ 現時点で聖樹の苗木を保護し、守っているのは誰ですか？』

……あ、俺だ。

レリアとマリエの視線が俺に突き刺さる。

「やっぱり、あんたのせいじゃない!」

「兄貴の馬鹿ああ!」

俺は文句を言ってくる二人に言い返してやった。

「俺のせい！？ これって俺が悪いの！？ 違うよね？ だって俺は、ピエールが絡んでくるから仕方なく」

ルクシオンが冷静に言うのだ。

『六大貴族相手を退けたマスターですよ。苗木は守護者に相応しいと判断したのではないでしょうか？ この苗木は見る目がありますね。私が仕えているマスターを選ぶとは流石ですよ』

レリアが叫ぶ。

「何してくれてんのよおおー！」

……どうしよう。俺のせいで何か厄介なことになってきた。

港。

一隻の飛行船から男女の二人組が降りてくる。

赤毛にツンツンしたミディアムの髪が特徴的だった。

黄色い瞳は美しい。

そんな男子は、不機嫌そうにしている。

「……宝玉の入った果実は俺たちを選ばなかった。これはどちらかの愛が足りなかったせいじゃないか？」

しかし、黄色い瞳は淀み始める。

後ろを歩いていた女子が肩をふるわせた。

男子の名前は【エリック・レタ・バリエル】。

背が高く美形の青年は、立っているだけでも絵になる。着ている衣装も彼のためにあつらえられた物だ。

対して、後ろを歩く女子は制服姿だった。

彼女こそ、レリアの姉であり 物語の、二作目の主人公だった。

金髪にピンク色の毛が混じっている。毛先に行くほど色合いはピンクで、少し乱れているがふんわりとしたツインテールだ。

毛先の部分が肩まで届いている。

黄色の瞳に、気の強そうなつり目。

一見すると気の強そうな女子だが、今は気分が沈んでいるのか俯いていた。元来あった気の強さやら、明るさは見られない。

「エリック……さん、えっと、宝玉の話は根拠がありません。だから

」

愛し合う二人に聖樹の果実は熟して落ち、二人の愛の証に宝玉をプレゼントするという言い伝えがある。

だが、それは言い伝えに過ぎなかった。

エリクが振り返り、女子の顎を掴む。

笑顔を女子に向けていた。

「だから？　もしかしてお前、自分は悪くないか思っていない？
一学期を潰して、聖樹に張り付いていたんだぞ。ピエールの馬鹿
が起こした騒ぎにも巻き込まれた。そのせいで、学園に戻るように
言われた」

エリクに女子が謝罪をする。

「ご、ごめんなさい。でも」

エリクは女子を突き飛ばす。

そして、エリクは女子を蹴りはじめるのだった。

「口答えをするな！　俺はお前のためにやったんだ！　それなのに
お前は！」

女子が痛がっていると、エリクはハッとして女子に駆け寄る。

「す、すまない、やり過ぎた」

女子が俯いていた。

「すまない。本当にすまない。つい、お前のことを思うと感情的に
なってしまうんだ。俺の気持ちを分かってくれるよな？」

女子は小さく頷いた。

（これでいいんだ。レリアちゃんも言っていたし、多少は我慢した方がうまくいくし、それにレリアちゃんのためにもなるし）

エリクが女子を立たせる。

だが、エリクが握っていたのは鎖だ。

その鎖は、女子がつけている首輪に繋がっていた。

「さあ、行こうか。今回は駄目だったが、俺たちには次がある。冬休みには必ず二人で宝玉を手にして、俺の両親に結婚を認めて貰おう」

小さく返事をする女子は、そのまま港で注目を集めながら歩くのだった。

（……あたしさえ我慢すればうまくいくんだ。私さえ……それに、エリクも優しいところがあるし）

そんな様子を盗み見ているドローンが上空に浮かんでいた。

マリエの屋敷。

レリアに聞いたら、もうすぐ戻ってくるはずだと言っていたのでドローンを飛ばして様子を見ることに。

だが、想像以上の映像に俺たちは言葉も出なかった。

ルクシオンが淡々と報告してくる。

『独占欲の強い男性なのでしょうか？ レリア、マリエの両名が言っていたように、エリクは少し病んでいるところがある男子 ヤンデレ、でしたね。少しというところがポイントでしょうか？』

さすがに姉がこんなことになっているとは思わなかったのか、レリアも声が出なかったようだ。

そんな中、マリエだけが 。

「か
」

「か？
」

「確保おおお！！」

レリアの姉貴さんの確保を俺たちに提案してきた。

悪手

応接間でマリエが騒いでいた。

「すぐにあの男から引き離して！」

レリアが困惑している。

「何でよ！ エリクといい感じにするまで大変だったのに！ 少し問題はあるけど、ゲーム通りの設定じゃない」

男のヤンデレとか誰得だよ。あ、この世界はあの乙女ゲーの世界だった。

野郎にとことん優しくくないよね。

少しヤンデレの気質があるリビアに会いたい。

ルクシオンが空中に投影している映像を見ると、エリクの奴は彼女に首輪を付けて鎖にまで繋いでいる。

ノエルを思い出してしまった。

いや、別にこの光景云々じゃなくてね。

まさか主人公を犬扱いするとは思っていなかったし。

というか、共和国の野郎共って問題児ばかりだね。

安牌君、マジで安牌だったよ。

「てめえの目は節穴か！ あの野郎、あんたの姉貴に暴力を振るっていたのよ！」

「で、でも、ちゃんと後でフォローしていたし。アレがエリクだし、ちよつと病んで束縛が強いところが魅力で」

「それ、DV野郎の典型じゃないの！ あと、リアルで束縛が強いとか笑えないのよ！」

……あ、思い出した。

そう言えば、マリエは同じような男に騙されて酷い目に遭ったんだっただか？ こいつがかなり警戒しているのは、前世の経験もあるからだろう。

レリアが現実問題を口にする。

「無理よ。エリクは六大貴族の出身よ。ピエールと違ってバリエル家の跡取りだから、姉貴を取り返すために無理をしたら何をされるか分からないわ」

マリエが俺に泣きついてくる。

「兄貴、何とかして！ アレは駄目よ。ゲームで失敗したとき、エリクがヤンデレで主人公を閉じ込める奴があつたの！ あいつ、下手をすると監禁バッドエンドをやらかす奴なのよ！」

「バッドエンド!? 嘘だろ!」

俺は当然驚くとして、何故かレリアも驚いていた。

「え? そんなの知らないわよ」

マリエがレリアとまた喧嘩を始める。

「あんた全クリしたんじゃないの! 複数の男に手を出したら、エリクが怒るイベントがあつたでしょう!」

「鬱イベントとか見ないから知らないわよ! そもそも、私は純愛の方が好きだから、複数を攻略すること何てなかったもの!」

「あんたの姉貴だろうが! 少しは心配しなさいよ!」

「世界の危機がかかっているのよ! エリクをまともにするとか、そっちの方がよくない!」

「よくないわ、ボケエ! 簡単に治るなら苦労しないのよ!」

ルクシオンが俺に進言してくる。

『マリエとレリアの最低な発言は置いておくとして、現状で彼女を助けることが可能なのはマスターだけですよ』

何でこうなった? 大丈夫だと思ったらグダグダじゃないか。

「出来るのか?」

『宝玉の返還を交渉材料にしましょう。ドレイユ家のフェルナンに依頼し、バリエル家の当主と交渉すればいいのです。実際、彼女は精神的に危険な状況です。エリクという男も精神的に不安定ですよ』

俺は手に入れた宝玉を失うが、それも仕方がないと諦めることにした。

「フェルナンさんに連絡をするか」

外堀から埋めて確保するでしょう。

バリエル家の屋敷。

家臣たちに囲まれたエリクは、父【ベランジュ】からの手紙を見て肩を震わせていた。

「どういうことだ」

家臣たちがエリクに説明する。

「エリク様、これはバリエル家の未来のために必要な取引です」

「取引！？ 人を取引に利用するのか！」

家臣の一人が淡々と告げる。

「……ピエールの件をお忘れですか？ 共和国は、たった一隻の飛行船に聖樹神殿まで攻め込まれたのです。王国の伯爵は、たった一

人の娘で当家所有だった宝玉全てを返還する用意があると言ってくれたのです。ベランジュ様は、拒否は許さぬと仰せでした」

エリクの表情が歪む。

「父上には俺から説明する。王国ごときに舐められて悔しくないのか！」

エリクの認識では、まだ王国は格下の扱いだった。

普段はそんなことを思わないが、好きな相手を奪われては黙ってられない。

家臣たちがエリクの顔を見ない。

「お前ら、それでも共和国の貴族か！」

「エリク様、公式ではフェーヴェル家の暴走となっておりますが、我々は王国の飛行船 たった一隻に敗北したのです」

エリクがその場に座り込み、両手で顔を覆い叫ぶ。

「うああああわああああわあああああ！！」

共和国が用意した新しい俺の屋敷。

マリエたちが使っている物よりも大きかった。

慌ただしい中、引越しを急かされたのは共和国の誠意らしい。

俺のためにわざわざ豪華な屋敷を用意してくれたそうだ。

でも、国同士の交渉の手は抜かないけどね！

「今日来る使節団の代表にこいつを売りつけて、交渉を王国有利に進めてやるぜ。俺を怒らせたことを後悔しろ」

ルクシオンが共和国の内情を調べた報告書がある。

これがあれば交渉は有利に進むし、六大貴族が何を考えているのかも書かれている。

王国の交渉役は喉から手が出るほどに欲しいはずだ。

『マスター、それを交渉役に売るのはですか？』

「当たり前だ。俺は別に王国に忠誠心なんかないからな。これを機会に王国で失った財産をガッツリ取り戻してやる。ローランドの糞野郎の胃に穴を開けてやるんだ！」

きつと今頃は王宮も大変だろう。

戦後の復興やら、その他諸々と大忙しだ。

そこに外交問題をぶち込んで、ローランドが苦勞する姿をクレアーレに録画させてやる。後で鑑賞しながら、俺はゆっくりとお茶を楽しむでしょう。

『それにしても、保護対象をバリエル家は簡単に手放しましたね。彼女、巫女なのに気が付いていないのでしょうか？』

「気付いていないらしいな。レリアの話だと、六代貴族的には今更出てきて貰っても困るとかなんかと言っていたけどね」

『議長一族。巫女を輩出するレスピナス家は邪魔だったのでしょうね』

俺が「酷い国だね」と同意したところで、屋敷に予定通り交渉役が訪れた。

俺は報告書を一体いくらで売ろうか考えて玄関に向かうと。

啞然として報告書を落としそうになる。

「……し、師匠」

夏にスーツを着こなした紳士がそこにいた。

太陽よりも眩しい。

「ミスタリオン、数ヶ月ぶりですね。少し背が伸びたのでは？」

慌てて俺は師匠に挨拶をする。

「師匠！ 来るならちゃんと行ってください。港まで迎えに行きましたよ！」

「心配いりません。外国を自分の目で見るのも楽しいものです。船旅で少し大地の上を歩きたかったのもありましてね」

俺は慌ててルクシオンに命令する。

「ルクシオン、お茶の用意だ。新鮮な水菓子があつただろ！ アレも持って来い！」

「ミスタリオンのお茶も久しぶりですね」

俺はもう、大慌てでお茶の用意をした。

師匠にお茶を振る舞った。

緊張して喉がカラカラになってしまふ。

報告書を渡したので、師匠は内容を確認していた。もちろん売っていないよ。師匠の足下を見て売るとかあり得ないし。

「どうして師匠が交渉役に？ 外交官がいるのでは？」

師匠は笑顔だった。

「アルゼルばかりではなく、他の国に飛び回っていましてね。人手不足やら、色々ですよ」

ルクシオンの補足が入る。

『貴族の大半を処分しましたからね。今回の仕事は、完全に許容量を超えていたので、他から人を引っ張ったのでしょう』

師匠が報告書を読み終わる。

「これなら何とかかなりそうですね。王国にとっても良い結果が期待できそうです」

それは良かった。

俺も報告書を準備した甲斐があったというものだ。

「それにしても、ミスタリオンは派手に暴れましたね。出世をしたくないのでは？」

今回は功績として考えられないだろう。

色々と王国に利益はもたらしたが、ユリウスたちが聖樹に呪われるという問題行動を起こした。

本人たちの責任もあるが、監視役でもある俺の責任もある。

まあ、実際にあいつらが呪われるところを見ていたからね。ルクシオンとノエルの世話をしながら、ないわって言いながら見ていた。

ピエールが何かを企んでいたのも気になったし、とにかく下手に動かずじっくり仕返しをすることに決めたのはその時だ。

「今回は功績になりませんからね。それに、もう出世も頭打ちです。

これ以上の出世はありませんよ」

伯爵で三位下　爵位、階位共に俺の出自で頭打ちだ。これより上は、王族との関係がないと無理だ。辺境伯という爵位もあるが、アレはホルファートでは少し特殊だ。

伯爵の地位にあつて、国境を守る重要な家が辺境伯という爵位を与えられる。

階位は、俺より上の三位上となると、王族関係者ばかり。

公爵とか侯爵が就く地位である。

つまり、俺にこれ以上の出世はない。

むしろ、ローランドならこれを機会に俺を降格させるかも知れない。そんな淡い期待を抱いての行動だ。

「確かに短時間で上り詰めましたからね。これ以上はさすがに出世も難しいでしょう。ただ、一つだけ……いえ、これはあり得ませんね」

師匠が少し考え、懐中時計で時間を確認すると「そろそろ行かなければなりません」と言つて立ち上がった。

「ミスタリオン、腕を上げましたね」

俺はその言葉で全てが報われた気がする。

師匠に認めて貰えて幸せだ。

聖樹神殿。

数日間にも及ぶ交渉の末に、六大貴族たちは疲れた顔をしていた。

ランベールはそれでも笑顔だ。

「アルベルク殿、王国の使者を相手に随分と譲歩を引き出せましたね。さすがですぞ」

褒められたアルベルクは笑顔だった。

「随分と苦労させられましたかね」

だが、内心では笑えなかった。

（あの王国の使者、こちらが用意できる物を全て把握していたな。それを知って、最後は譲る形で終わらせに来た）

最終的に、師匠が譲る形で交渉は終了した。

アルベルクとしても、最後にしてやった感じで終われたのは幸運だった。

六大貴族たちの間で面子も立つ。

だが、ランベールが笑顔なのは腹立たしい。

（お前の馬鹿息子が余計なことをしなければ！）

すると、フェルナンとベランジュの会話が聞こえてくる。

「例の物は予定通りに？」

「ああ、おかげで助かったよ」

「伯爵が気にかけていた女子も？」

「いい機会だからな。息子の遊びも目に余っていたところだ」

アルベルクが二人の会話を聞いて苦々しく思っていた。

（フェルナンとベランジュのところには宝玉を返したか。どうにかして取り返したいところではあるな）

エネルギー問題のない共和国で、宝玉とは活躍の場が少なく見える。

だが、大陸の外に出た場合、聖樹からエネルギーを貰えない飛行船は性能が大きく落ちてしまう。

それを補うためには、宝玉が必要だった。

ホルファートが油断できなくなった今、宝玉を渡したくないというのがアルベルクの思いだ。

（伯爵が気にかける女子、か。ただの好みか？ ……調べておくか）

新しい屋敷のベッドの上。

俺がダラダラしていると、ルクシオンが報告をしてくる。

『マスター、屋敷に存在していた怪しげな隠し部屋やら隠し通路は塞いでおきました。これで、侵入者対策は一段落です』

「そっか。ご苦労さん」

『やる気ありませんね』

「やる気なんか出るかよ。クレマン先生が、夏休みに遅れた分の授業をするとか張り切っているんだぞ。ありがたいけど迷惑だよ」

クレマン先生の優しさなのだろうが、俺からすれば迷惑だ。

夏休みに補習をする気分　　というか、そのまま補習だな。

『本日はバリエル家から例の女性が送られてくる日ですよ』

「俺が面倒を見ないと駄目なの？」

『エリクは六大貴族の跡取りです。聖樹の力から彼女を守れるのは、苗木の守護者選ばれたマスターだけですから』

部屋に置いてある苗木を見た。

ケースに入って元気に今日も輝いている。

俺は右手の甲を見て、

「……これ、お前が拒絶反応を示さない、ってことは新人類関係の代物じゃないんだよね？」

『はい。ただ、詳しい内容はまだ分かっていませんけどね。旧人類が手を加えた植物であると判断しています』

紋章をくれたのが苗木なので、大きな力は得られない。だが、六大貴族たちへの備えにはなる。

一方的な聖樹への誓いを拒否できるし、聖樹の力を使った魔法を防いでもくれる。

外すのは勿体ないが……これ、どうしたらいいの？

本当なら主人公の恋人が持つはずだったのに。

ルクシオンが俺に報告をしてきた。

『どうやら来たようですよ、マスター』

マリエとレリアにつれてこられた女子。

俯いて淀んだ瞳をしている。

照りつけるような日差しの中、その女子はブツブツと呟いている。

「戻らないと。エリクが怒る。エリク、寂しがり屋だから側にいないと……私がいないとエリクが……」

その姿に啞然とする。……俺はマリエに助けを求めるような視線を送る。

「何を言っても無駄よ。でも、だって、の繰り返しだからね。ちゃんと休息を取らせて、判断力を取り戻さないとどうにもならないわ」
変わり果てた姉の姿を見て、レリアが落ち込んでいた。

ここまで酷いとは思わなかったらしい。遠目には分からなかったが、顔以外に痣が出来ている。

「春休みまでは普通だったのよ。それなのに、どうしてこんなことに」

色々と裏で動いて二人をくつつけたレリアだったが、二人の愛が本物なら宝玉が手に入るとエリクに言ってしまう。

そこからエリクが宝玉にこだわり、一学期になっても聖樹に張り付いて戻ってこなかったらしい。

マリエがレリアを睨み付けている。

俺は溜息を吐き、レリアの姉貴さんの部屋を案内する。

「見張りはルクシオンに用意させたし、しばらく俺の屋敷で面倒を見るよ。何か気をつけた方がいいことってあるの？」

マリエがとにかく俺に注文を付けてくる。

「弱っているから、とにかく自分で決断させないで！ 優しくも大事だけど、普通に接して！」

「普通！？ お前、それがどれだけ難しいか分かっているの？ そもそも初対面だよ。どうすればいいのか分からないよ！」

レリアまで俺に文句を言ってくる。

「あんたしかいないんだからちゃんと面倒見なさいよ！」

こいつ何なの？ 何で上から目線なの？

「……ちょっと可愛いからって調子に乗るなよ。俺の婚約者たちの方が美人だからな。お前なんかのご機嫌取りをする必要なんか俺にはないからな。下心で下手に出ることを期待しているなら他を当たれ！」

レリアが黙ってしまつと、マリエが調子に乗る。

「これが兄貴よ！ ちょっと可愛いからって優しくする男と一緒にしないのね。女だろうと容赦をしない男だからね！ 分かったか、ば〜か！」

それは言いすぎではないだろうか？

「いや、容赦をしないのはお前限定だ。俺だって普通に女性には優しいぞ」

「何だよ!」

「私には冷たいじゃない!」

マリエとレリアが俺に抗議してくるが無視した。

だってお前ら……俺に迷惑をかけるし。

「ほら、レリアの姉貴さんはこっちだ」

「……はい」

抵抗しても無駄だと思ったのか、抵抗する気力もないのかレリアの姉貴さんは静かだった。

これ、本当に大丈夫なのだろうか？

お茶勝負

マリエの屋敷。

交渉が無事に終わったことを祝い、師匠を招いてのお茶会を開くことになった。

何で俺の屋敷じゃないのか？

刺激してはいけないレリアの姉貴さんがいるから、家主の俺が出て行くことになった。

……俺、時々自分の優しさが罪だって思うよ。

さて、それはそれとして、だ。

「見てください、師匠！ アルゼルで仕入れたティーセットです」

師匠が丁寧な手つきでカップを手取る。

「随分と繊細な細工ですね」

「多少高かったですけどね。共和国からの賠償金でセットを一括購入ですよ」

アルゼル共和国の皆さん、ありがとう！

自慢の新しいティーセットを見て貰っていると、マリエが覗き込

む。

「これ高いの？　どれくらい？」

マリエに耳打ちしてやる。

「このカップがいくつもあるが、一つだけで日本円にして四十万から五十万」

マリエがカップを手に取り凝視している。

「これ一つで生活がどれだけ楽になると思っているのよ！　しかもセット！」

「悪いな、俺は金持ちなんだ」

全財産を失って王国を出た　　ことになっているが、共和国で富豪となってしまった。

共和国をかつあ　賠償させた成果だよ。搾り取れるだけ搾り取ってやった。

マリエがティーセットを全て見て、値段を計算して膝から崩れる。

「こんなの酷いわ。私なんて、もっと安いティーセットで頑張っているのに」

師匠が紳士的にマリエを慰めはじめた。

「なんの。ミスマリエ、大事なのは値段ではありません。もてなす

心が大事ですよ」

そんな俺たちの会話に割り込むのは、革製の鞆を持ってきたジルクだった。

「学園長の言う通りです」

自信満々のジルクが、俺の購入したティーセットを見て首を横に振る。

「何だよ？ 言いたいことがあるなら言えよ」

「では言わせて貰いましょう。そのティーセットはやり過ぎなのです。一言で言うなら品がありませんね」

「は？」

ジルクが俺のティーセットを見ながら説明する。

「過度に凝った装飾。まるで芸術品のようですが、日々使うと考えると向いていません。ティーセットなのに飾りであると証明しているようなものです。成金趣味 失礼。成り上がった方たちが好む派手な道具ですよ。お茶に凝りだしたと言う素人がよく買いますね」

イラッとした。

マリエが俺の腕を握って止めようとするが、師匠が俺をフォローしてくれる。

「ミスタジルク、それは違います。確かに装飾が多いですが、お茶

に興味を持たれた方たちが欲しがるということは、このティーセツトにそれだけの魅力があるということです」

師匠の言葉を受けて、俺は万の軍勢を味方にした気持ちでジルクに言い返してやった。

「そうだぞ。人のことを成金趣味とか言いやがって。失礼な奴だな」
クラリス先輩に叱って貰おうか？

いや、駄目だ。クラリス先輩の前でジルクの話は禁句だった。

「確かに言い過ぎましたね。ですが、私から言わせて貰えば、バルトファルト伯爵は本物のお茶を知りません」

ジルクが革製の鞆を開けると、そこには随分と古びたティーセツトがあった。

一部は欠けている。

俺は指をさして笑うのだ。

「何だよ、それ！ 随分と古いじゃないか。それが本物だって？」

ジルクは額に手を当てて首を横に振っていた。

まったく理解していませんね、などと言っている。

師匠の目つきが変わった。

「こ、これは！」

「学園長は気付かれましたか。この無駄を省いた形。そして長い歴史を感じる佇まい。^{たたず}本物とは、ただ豪華であればいいというものではありませんよ」

マリエがジルクの説明を聞いて感心していた。

「素人から見て、まったく価値がなさそうなのが高価だったりするのよね。あれ？　ジルク、こんなティーセット持っていたの？」

「買いました。安かったので」

「あら、買い物上手ね。いくらだったの？」

ジルクが胸を張る。

「ホルファート王国の通貨なら五万ディアというところですかね」

それを聞いてマリエがガタガタと震え始めた。

「え？　ちょっと待って。五万ディアって……まさか、あのお金を使ったの！　何だよ！　あれ、大事な生活費だったのに！」

日本円で言うなら五百万くらいだね。

マリエが驚いていると、ジルクが丁寧に説明してくる。

「大丈夫ですよ、マリエさん。しっかりとしたお店で購入しましたし、何よりも普通に取引をすれば倍の値がつきます。ホルファート

王国に持ち帰れば、好きな方なら十万も二十万も出してくれますよ。見てください、この美しい白を。純白ではありませんが、味のある良い色合いでしょう？ 僅かに色合いがそれぞれ違っているのが見えますか？」

俺にはシミに見えるが、言われてみるとそのようにも見えてくるから不思議だ。

マリエがジルクに言いくるめられている。

ジルクの奴、屋敷にあった現金を見つけて購入してしまったらしい。

マリエも段々とその気になっていた。

「そ、それなら大丈夫ね。確かに良い物に見えてきたわ。これを見ていると、あに リオンのティーセットは確かにゴテゴテしすぎよね」

言われて悔しいが、ジルクの説明を聞いていると良い物に見えてきた。

くそ……俺も欲しい。

侘び寂びと言うのか？ 凄いティーセットに見えてきた。

「バルトファルト伯爵には難しいでしょうね。私は王宮や実家で常に本物に触れてきましたから、物の価値というのが分かるのですよ。今日は私の特製ブランドをご馳走しましょう」

勝ち誇ったジルクの顔を見て悔しくなった。

こいつはボンボン。

つまり、確かに本物に触れて育ってきた男なのだ。

悔しいが、俺では外見だけしか見ていなかった。

そうしてジルクがブレンドしたという、俺にはうまくもなく、香りも微妙な紅茶を飲むことになる。

高価なティーセットで飲んでいるせいか、味が全く分からない。

……俺の舌にはまだ理解できないというのか。

茶会が終わると、ジルクがマリエと一緒にティーセットを片付けていた。

俺は師匠に肩を落としながら相談する。

「……ジルクの言う通りでした。俺には、本物というものが理解できません。あのティーセットも古いだけの物に見えますし、茶葉もおいしいと思えませんでした」

高級な物が必ずしも自分の舌に合うかは分からない。

俺は自分に自信が持てなくなっていた。

高いと言われるとそう見えるが、それまではただの古いティーセットとしてしか見ていなかったのだ。それがとても恥ずかしい。

だが、師匠が困っている。

「どうしたんですか、師匠？」

あの普段余裕のある師匠が困っている姿は珍しい。

「ミスタリオン、あのティーセットですが、普通の量産品です」

「え？」

「本当に揃っているだけで質の悪い品です。とても五万ディアの価値はありません。ホルファート王国に持ち帰っても、百ディアで売れるかどうか……それに茶葉も、安物をブレンドしただけでしょうね。香りもその……好みの問題ですが、私には合いませんでした」

師匠が困り果てていた。

ジルクは本物を見て、触って、そして味わい育った男だ。それが、どうしてこんな偽物を掴まされたのか理解できないらしい。

だが、師匠の言葉に啞然とするのは、部屋の入り口にいたマリエだった。

青い顔をしてドアにすがりついている。

「う、嘘」

「ミスマリエ！ い、今の話はその」

師匠が立ち上がってマリエを慰めようとするが、

「待つてよ！ ジルクは現金の半分くらい使って偽物を掴まされたの！ これから生活が楽になると思っただのに！ 百ディアしかしないティーセットで喜んでいた私の気持ちを返してよ！」

俺でもこの状況はちよつと笑えなかった。

マリエが床に両手をついて泣いている。

「色々と必要な物を購入したから、もう残り少ないのに！ 新しい寝間着とか、私服とか欲しかったのに！ 夏は乗り切れても、秋とか冬はどうやって乗り切ればいいのよおお！」

泣いているマリエに、戻ってきたジルクが驚く。

「マリエさん大丈夫で あうつ！」

マリエがお盆でジルクの頭を一叩きすると、そのまま叫んで部屋を出て行く。

「このお馬鹿ああ！」

ジルクが頭を押さえながら俺たちを見た。

俺は視線をそらす。

師匠は、

「……ミスタジルク、皆の共有財産を勝手に使ってはけません」

「え？ あ、はい。ですがあれは良い物です」

「それでもです！ いいですか、そもそもお金を管理しているミス
マリエに相談するのが普通なのです。勝手に使ってはけません」

「は、はあ、そう言われると確かに。ですが、これもマリエさんや
みんなのためになると思ひまして」

「そこに座りなさい。アルゼルでの仕事の一つ増えましたね。皆さ
んに常識を教えるのが、一番重要な仕事のようです」

普通に説教が始まった。

それにしても、マリエが哀れすぎて……でも、どこかちよつと笑
えるところが安心する。

また大変そうなら援助しておこう。

「長くなりそうなのでお茶の用意をしますね」

ジルクの奴、本物云々言っておきながら、偽物を掴まされやがっ
た。まあ、マリエに騙されて財産やら地位を失った男だ。見る目な
どない男だった。

俺は説教されているジルクを横目にしつつ、笑顔でお茶を用意す
るのだった。

自宅に戻った俺は、レリアの姉貴さんと話をしていた。

気をつけながら話をするため、とにかく俺の方が日々の出来事を話している。

彼女は特に何も話さない。

精神的に追い込まれすぎていたのか、聖樹の苗木を持って家で大人しくしていた。

聖樹の苗木を持っている理由？

落ち着くからだって。そのまま持って行って欲しいくらいだ。

「それで、その後はユリウスたちも集めてみんな説教だよ。やっぱり師匠は凄いやね。あのユリウスたちが反省したんだ。もっと早くに反省するべきだったけどね」

小さく笑っている姉貴さん。

最初は無表情だったのだが、ようやく笑顔が出てきた。

ルクシオンが用意した薬による治療も行っている。

とにかくゆっくりと休養を取らせ、エリクを近付けないのが大事らしい。

姉貴さんが苗木の入ったケースを抱きしめ、俺に話しかけてきた。

「楽しそうですね」

「お、おう、楽しいのかな？ 確かに笑ってやったけど」

五人が説教されているのを、カイルとカーラの三人で見っていた。

二人が「もっと言ってやって」みたいに師匠を見ていたのが面白かったね。

あの二人も五人に相当不満を持っていたらしい。

そもそも、マリエに認めて貰いたかったら戦闘力よりも生活力を鍛えるべきだったね。

俺を見習えよ。

アルゼルから搾り取って、またお金持ちに復帰だよ。

「……最近、あたしはエリクのことが好きだったのか悩むんです。暴力が増えてきて、それでも優しくなったから側にいました。でも、落ち着いてくると、それも分からなくなってる」

ようやく喋れるくらいには回復してきたな。

「ゆっくりしていればいいよ。難しいことは後で考えたらいいさ」

マリエ曰く、ここで大事な決断をさせてはいけないらしい。

本音を言えば、さっさと次の男に乗り換えて仲良くなって欲しい

のだが、ヤンデレエリクがどう動くか分からない。

レリアの奴、いったい何をやっていたんだろう？

「……一学期は授業を受けられませんでしたし、それが不安で」

六大貴族のエリクはともかく、姉貴さんは不安だろう。

ジャンが留年決定だったからね。

「クレマン先生に相談するよ。俺らの補習もあるし、一緒に受ければ問題ないんじゃない？ 大丈夫、俺 これでも共和国に融通が利くし」

宝玉を見せつければ、あいつらノエルよりも激しく尻尾を振って媚びてくるよ。

姉貴さんが苗木の入ったケースを抱きしめ黙り込んでしまう。

「辛いなら部屋で休もうか」

ロボットたちが来て、姉貴さんを運んでいく。

まだ精神的に不安定なようだ。

ホルファート王国の港。

アルゼル共和国に向けて出発する飛行船団は、非常に数が多かつ

た。

バルトファルト家の工場で生産された飛行船の姿も多く見かけられる。

その内の一隻。

リオンの兄であるニックスが艦長を務める飛行船の甲板に、アンジエとリビアが乗っていた。

クレアーレも一緒である。

ニックスは憂鬱な顔をしていた。

「何で俺が外国に行かないといけないんだ。親父はいい経験だからお前が行けと言うし、リオンは報酬出すから手伝えって言うし……そもそも、なんであいつ外国に留学して喧嘩を売るのさ」

リオンのせいで忙しいニックスは、当然のように愚痴をこぼしていた。

アンジエが腰に手を当てて、

「リオンは売られた喧嘩を買っただけだ、義兄上。むしろ、アルゼル共和国に一泡吹かせた。王妃様も高く評価しておいでですよ」

ニックスがアンジエの回答に困っている。

「あ、はい」

そもそも、ニックスから見てアンジエは雲の上にいるようなお嬢様である。

義理の妹になる予定だが、義兄上と呼ばれても……正直困るのが本音だった。

リビアがクレアーレに話しかけた。

「アーレちゃん、私たちはお義兄さんの飛行船で移動するの？」

それを聞いてニックスが驚いていた。

勘弁して欲しいという顔をしている。

『そんなわけではないでしょ。ちゃんと専用の飛行船を用意しているわよ。アインホルン級二番艦　リコルヌよ』

クレアーレがそう言うつと、雲を突き破ってアインホルンと同じ型の飛行船が出てきた。

白い船体が何とも美しい。

アンジエが一言。

「色は赤がよかったな」

『今回は白よ。綺麗でしょ？　あのひねくれ者が設計したものを改良してあるの。性能はこっちの方が上よ』

ニックスが感心しながら、リコルヌを見ていた。

「リオンの船と同じタイプ……よく量産できたよな」

『あら、マスターのお兄さんも欲しい？ いる？』

「……お前から貰うと後で大変そうだから嫌だ。それに俺、こっちの飛行船の方が好きだし」

ニックスが断ると、部下が声をかけてきた。

「坊ちゃん、船長が呼んでいますよ」

「今行くよ」

ニックスが離れていくと、リコルヌから小型艇がやってくる。

『さあ、乗り込んで。レッドグレイブ家から、使用人は預かっているから大丈夫よ。快適な船旅を約束するわ』

アンジェやリビアの真上には、姿を隠したルクシオン本体が浮かんでいた。

リビアが肩を落とす。

「パートナーが修理できたら良かったのに」

沈んでしまったことになっているパートナーを思い出し、リビアが落ち込むとアンジェも同意していた。

「そうだな。パートナーは良い船だった。……さて、共和国に行く

とするか。リオンが待っている」

レリア

絶望したマリエを前にして、レリアが少し引いていた。

マリエの家に集まった俺たち転生者たち。

お互いの情報交換をするために集まったのだが、レリアが俺に肘を当ててくる。

「ね、ねえ、あの子、どうしたのよ？」

「心配ない。あいつの男が、見る目のない男だったただけだ。一万円もしないティーセットを、五百万で買いやがったのさ」

「はあ！？」

レリアが驚くと、マリエが思い出したのか涙を流す。

「もう、買い食いも出来ない」

マリエの姿に同情するレリアが、俺に何とかしろと言ってくる。

「あんたお兄さんなんでしょ？ 何とかしてあげなよ」

「悪いが兄妹というのは前世の話だから。今は他人だし、兄妹なんて血縁のある他人だからな。それにマリエは……追い込んでいた方が面白いかな、って」

本音をこぼすと、マリエが俺の脚にしがみついてきた。

「私を捨てないで、お兄ちゃああん！」

「放せ！ お前が大事な金をその辺に置いておくのが悪い！」

「今後のために小分けにしようと思っていたところだったの！ その後、バタバタして一日放置している間に……うわああん！」

「あのろくでなし共に使うなって言っておけよ」

「五人とも普段はバラバラに動いているから、言っただけだったの！ ジルクだけが話を聞いていなかったのよ」

マリエは運が悪い。

さて、あの疫病神たちのことはマリエに任せるとして、問題はレリアだった。

「マリエのことは放置するとして、今度はお前だな。とにかく、色々話をして貰うぞ」

レリアが諦めたように話し始める。

それは俺たちには想像もしていなかった話だ。

「その前に一つ確認するわよ。あんたたちは“あの乙女ゲー”を知っている転生者”でいいのよね？」

聞き方が気になった。それではまるで。

「おい、もしかして、あの乙女ゲーを知らない転生者もいるのか？」

レリアは頷いている。

「大きく分けて、この世界を知っているか、それとも知らないかに分類されるわ。ただのファンタジー世界だと思っている奴を私は一人知っているし」

それはちよつと困るな。

何も知らない連中が色々とかき回したら大変なことになるのでは？

だが、レリアは心配していなかった。

「……言っておくけど、そいつ自体は無害よ。むしろ、あんたたちの方が状況をかき乱しているからね。今は冒険者の真似事をして遊んでいるわ」

その何の知識もない転生者だが、今は冒険者として活躍しているらしい。

自由気ままそうで羨ましい限りだ。

「私が出会えたのは偶然ね。やっぱり、話していて前世の知識が出るのよ。価値観とか妙に近かったから、こいつも日本人かな？ っ
て。お互いに疑っていたけど、話をしてみたらやっぱり、ってね」

互いに違和感があった。いや、自分に近いと感じ取ったのか？
とにかく、俺とマリエのような兄妹という関係ではないようだ。

……俺もマリエが他人だった方がよかったよ。

前世の妹とか……勘弁して欲しい。

「俺たち以外にも転生者はいる、か」

「アルゼルの場合は安全ね。エリクたちに近付く馬鹿はいないし」

馬鹿、と言った時に、レリアの視線はマリエを向いていた。

馬鹿だから仕方がないね。

俺とマリエは顔を見合わせ、互いに他の転生者がいたかを確認する。

「変な奴いた？」

「兄貴くらいじゃない？」

マリエの頬をつまみつつ、こちらも問題ないと言うとレリアが話を続ける。

「私はゲームには登場しない双子の妹として転生したわ。記憶がしつかりしてきた頃に、屋敷が焼けてね。逃げ出していたところだったわ」

物語の始まりに、転生者だと意識したらしい。

「ゲーム通りだったわよ。平民として生活しつつ、生き残った家臣

たちの援助や支援を受けて学園に通えるようになったの」

俺は根本的な話を聞いた。

「何で焼かれたんだ？」

マリエの頬から手を放すと、赤くなった頬を手で押さえながら話してくれた。

「フェーヴェル家が実行犯で、ラウルト家が裏で糸を引いたのよ。理由は守護者の紋章よ。あれって六大貴族の中から選ばれるの。けど、選ぶのは巫女を輩出するレスピナス家。当然、レスピナス家の権力が強いわ」

レリアも同意する。

「議長を務めるのも、レスピナス家には他の六大貴族もあまり強く出られないからよ。だけど、私たちのお母さん 先代の巫女は、ただの一般人を選んだわ。先代守護者には誰も触れないけれど、平民だったのよ」

マリエが話を引き継ぐ。

こいつもレリアと話をしている内に、徐々にゲーム知識を思い出したようだ。

もっと早くに思い出せと言いたかった。

「六大貴族は面白くないわよね？ だから、ラウルト家がフェーヴェル家を利用してレスピナス家から巫女の紋章を奪ったの。ピエー

ルがやったやり方に似ているんじゃない？」

騙し討ち。

上位者に対して成功させたのだろうか？

レリアも知らないらしい。

「何があつたのか詳しくは知らないわよ。ゲームでも触れていなか
つたし。けど、騙されて紋章を失ったレスピナス家は、抵抗できず
に敗北したの」

俺はルクシオンを見る。

俺たちのような余所者とは違い、レスピナス家は巫女の紋章を持
っていたはずだ。六大貴族よりも上位者である。

『……上位者である巫女の家を騙し討ちにするのは難しいでしょう。
聖樹の優先順位は、守護者に次いで巫女が二番手。理不尽な誓いと
やらを利用しても、逆に仕掛けた側が紋章を奪われるのでは？』

レリアが肩をすくめている。

「ならなんで母さんは紋章を奪われたのよ。おかげで、私たちも加
護を得られないのよ。加護を失った一族は、その後に加護を 紋
章を得られないわ」

ピエールが紋章を失うのを恐れるはずだ。

あいつは加護なし 今後、あいつの子孫は加護を得られない。

それを考えると、共和国の貴族としては死んだのも同然だった。

『情報が少なすぎるので判断できません』

分からないことをここで話し合っても意味がない。

「それで、その後は？ お前が、姉貴さんに何をしたのか話してくれるよね？」

レリアの視線が泳いでいた。

「え、えっと……トウルーエンドって知っている？ ほら、あの乙女ゲーの正しいルートだけど、その相手がエリクなの。姉貴がエリクと仲良くなるように色々頑張ってみました」

テヘツとしているので、苛々して舌打ちをしてやった。

「それで失敗しました、ってか？ 使えない女だな」

マリエも鼻で笑っている。

「本当よね。あんたはDV男を姉に押しつける屑女よ」

……お前は人のことを言えないのに、どうしてそんなに強気なの？

レリアが俺たちに反論してくる。

「な、何よ！ あの時は、それが正しいと思ったのよ！」

マリエが立ち上がって文句を言い始めた。

「自分は無難な安牌君を攻略して、姉貴にヤンデレのエリクを押しつけただけじゃない！ 本人の気持ちとか確認したの？ あと、あんたどうやって仲良くさせたのよ」

レリアが指先を付き合わせながら、学園での生活を話した。

「……出会いイベントってあるじゃない？ そこで姉貴とエリクが会ったのを確認して、他は徹底的に阻止したわ。だ、だって、姉貴の趣味もエリクみたいな男だったのよ！」

権力があって金持ちで美形。

ほとんどの女性が転ぶのは間違いない。

俺も美人の金持ちから誘われたら転ぶからね。

いや、今は転ばないよ。

転んだら命の危機だからね。

アンジェモリビアも、ユリウスたちの一件で浮気とかそういうのに敵しそうだし。

浮気をしたらと想像すると……おっと、背筋が寒くなってきた。これ以上は考えたら駄目だな。うん、俺は浮気しない。これでいいじゃないか。

「姉貴がエリクといい雰囲気になるように頑張ったのよ。わ、私は、

その間にエミールと仲良くなっただけよ」

マリエが全く信じていなかった。

「面倒な男子を避けて、安全を選んだだけじゃないの？」

「逆ハーレムを選んだあんたに言われたくないわよ！ あんたの方が馬鹿じゃない！」

「変な男を姉貴に押しつけるあんたに言われたくないわよ！」

「変じゃないわよ！ 少し病んでるだけよ！」

それはリアルで致命的ではないだろうか？

あと、公衆の面前で彼女に首輪を付けて歩き回るのは、少し病んでいるとは言わない。

十分に病んでいる。

プレイだとしても、昼間にするなど言いたい。

レリアに続きを話すように言うと、

「エリックは姉貴が他の男子と話をする、焼き餅を焼くようになったわ。これはいけると思って、宝玉の話をしたのよ」

俺はクレマン先生の話思い出した。

「あの都市伝説みたいな胡散臭い話か？」

マリエが俺を見ながら、

「兄貴、アレって本当よ。主人公たちが取りに行くと、本当に落ちてくるの。愛のある証拠で、仲良しイベントというか、愛を確認するイベントね」

「面倒くせえな。やることやっているのに、愛とか恋とか確かめないと駄目なの？」

ルクシオンが俺に、

『愛があってもウジウジと考え、二人を受け入れなかったマスターの言葉とは思えませんか。鏡をご用意しております。存分に鏡に向かって文句を言うてください』

マリエもレリアも俺を見て笑っている。

「兄貴、ヘタレだもんね」

「何？ 童貞？ それと、エリクはまだ手を出していないはずよ。そこは紳士的だし、姉貴もまだみたいない感じがするわ」

双子の不思議な繋がりか？ お互いのことが何となく分かるのだらうか？ ……こいつも胡散臭いな。

それはともかくとして……何で俺が責められているの？ あと、童貞は関係ないよね？ こいつら腹立つわ。

「宝玉の話は分かったよ。それで、確かめるために向かって失敗したんだよね？ 愛がなかったんじゃないの？ こじらせた原因って

それじゃね？」

レリアがウツと言葉に詰まっていた。

おかげでエリクが病んでしまった、と。

色々と急ぎすぎたんじゃないの？

マリエがレリアを笑っていた。

「何よ。あんた人のことを馬鹿にしておいて、自分は失敗しているじゃない。ばーか、ばーか、ばーか！」

「な、何よ！ いい感じだったから後押しをただけよ！ なら、あんたたち、私よりうまくやれたの？」

お前が関わっていないければ、もっとうまくいっていたんじゃないの？ とは、俺は優しいから言わない。

そもそも、仮定の話は無意味だ。

「喧嘩するなよ。争いは同レベル同士でしか発生しないって知っているか？」

髪の毛をつかみ合い喧嘩していたマリエとレリアが、俺を見て不機嫌そうにしていた。

何か言いたそうだが、俺は無視する。

『マスター、鏡を使ってください』

「五月蠅い、黙れ」

それにしても、互いに話をして分かったのは俺の情報量が色々と不足していることだ。

主人公周辺のことには気をつけていたが、どうやらそれだけでは足りないらしい。

共和国と喧嘩　じゃなかった、カツアゲをする予定もなかったのに、ピエールのせいで本当に苦労した。

気になることはこの際だから聞いておこう。

「ところで話を変えてもいい？　いいよね？　実はさ……ナルシス先生とダンジョンに入ったんだけど、あの人って強くないよね？　大丈夫なの？　攻略対象の男子が弱くない？　ピエールは雑魚だったけど、エミールも強そうに見えないぞ」

レリアが髪の乱れや、服の乱れを正していた。

胸元が開いていてブラが見えており、俺に背中を向けてくる。

「その貧相なものをさっさとしまえ。俺は巨乳派だ。それから、俺には婚約者がいるからお前には欲情しない」

したら何を言われるか分からない。

「……あんた最低よね。というか、知らないの？」

「兄貴は一作目しかプレイしていないわよ」

「男で乙女ゲーをプレイとかキモい」

何こいつ？ 男性プレイヤーに謝れ！

「てめえ、そのあるかないか分からない胸を綺麗に削ってやってもいいんだぞ。エミールに色々とお前の事情をぶちまけてやるのか？俺はやると決めたら絶対にやる男だぞ」

ちよつと脅してやると、レリアが話し始めた。

「一作目と違って、二作目はキャラに特徴があるのよ。エリクは万能タイプ。ナルシス先生は学術とか、知識系かな？ 遺跡を調べるのに役に立つわ。それで、エミールはエリクの劣化能力だけど、高い支援能力があるのよ」

傲慢しているが、凄いのはエリクたちであってお前じゃないからね。

本当に使えない転生者である。

「何で特徴があるの？」

「一作目が不評だったからじゃない？ 二作目は、キャラをうまく使えばクリアできるゲームを目指したのよ。……たぶんね」

マリエがレリアに同意していた。

「でも、元は男性向けのメーカーが作っていたから、微妙にずれて

いるのよね。そこが楽しかったりするけど」

……乙女ゲーって深いね。

安易に手を出したらいけないジャンルじゃない？

男向けばかりを作っていたメーカーだから、微妙にずれている。それなのに売れてしまっただけで続編が出るっていうのが不思議だよね。

二作目とかなければ、俺も苦労しなかったのかな？

「とにかく、エリクって奴が駄目なら他の野郎を攻略だな。それより屑な妹」

マリエが首をかしげる。

「何？」

「お前じゃなくて、姉貴さんの屑な妹の方」

「名前で呼びなさいよ！」

「五月蠅いな。お前が失敗するから、俺たちも苦労しているんだろ。うが。それより、早く次の攻略対象を教えろよ」

エリクが駄目ならすぐに次を探さなければならぬ。

世界の危機を回避しなくては、留学した意味がない。

ピエールを社会的に潰して、共和国からカツアゲしたのはついで

に過ぎないのだ。

レリアが黙っている。

「何だよ？ 早く次の野郎を教えろよ」

マリエが不思議そうにしていた。

「あれ？ ヤンデレエリクに、冒険馬鹿のナルシス先生、安牌のエミール……他二人を見かけないわね。隠しキャラのフェルナンはいけど」

フェルナンさん、もしかして隠しキャラだったの？ というか、確かに二作目のキャラは濃いな。ユリウスたちが霞んでしまう。

しかし、言われるとフェルナンさんは二十代の美青年で権力も金もあるし、攻略キャラっぽいな。というか、二作目は普通に教師とか大人が混ざっている。

一作目とだいぶ違った。

レリアが口を開く。

「ドルイユ家の次男 フェルナンの弟は上級生よ。あんたたちが問題を起こすから、兄の手伝いで戻っていたらしいわ」

フェルナンさん、弟さん呼び戻していたのか。

さて、最後の一人だが。

レリアが困った顔をしている。

「……もう一人は、私たちと同じ転生者よ。ただし、乙女ゲーの知識はないけどね」

……転生者ってそいつかよ！

自宅に戻ってきた俺は、部屋に入ると驚いた。

「……夕飯？」

ルクシオンがテーブルの上を見ている。

『アルゼルの郷土料理ですね』

王国とはまた違う料理を前にしていると、姉貴さんが入ってきた。

エプロン姿だ。

「あ、あの、お世話になっているので、せめてお料理をしようと思っ
つて」

テーブルに並んだ料理に手を伸ばすと、ルクシオンが目からレー
ザーを放って俺の右手を攻撃する。

「痛い！」

『マスター、行儀が悪いですよ』

「いや、おいしそうだったから味見をしようかと」

右手の甲を見ると、火傷の跡はなかった。薄らと紋章が浮かび上がっている。

テーブルの上には聖樹の苗木が置かれていた。

姉貴さんが俺たちを見てクスクスと笑っている。

「そう言って貰えると嬉しいです。それでも、家事は得意なんですよ」

落ちぶれたお姫様が苦労してきたらしい。

同じ苦労をしてきたレリアがアレで、姉貴さんがまとも………やっぱり転生者って駄目だな。

姉貴さんが少し照れている。

「あの、一緒に夕食を……」

「すぐ食べようか。お腹が空いて我慢できないや」

姉貴さんが満面の笑みを浮かべていた。

「はい！」

この人に早く次の相手が見つかるといいのだが……レリアの話を聞くと難しそうである。本当に、どうしてこうなってしまったのか。

右手の甲を見る俺は、守護者の紋章が早くちゃんとした持ち主に渡ればと思うのだった。

ヤンデレのエリック

平和な日々が続いていた。

だが、そんな日が続かないのは予想していた。

「兄貴助けてえええ！」

俺の自宅に泣きついてきたのは、あの五人に足を引っ張られているマリエだった。

「今度は何があった？」

「聞いてよ！ あの五人、残ったお金を使って増やそうとか言い出したのよ！」

話を聞くと、何やら商売に手を出したらしい。

とにかく、大量に何かを仕入れて売ろうとした。

全部売り切れば、大きな儲けになったのだろうが……素人が下手に商売に手を出すと駄目というのが、マリエを見ていると理解できる。

この様子ならきつと失敗しただろう。

「どんな風に失敗したんだ？」

「違うの！ 仕入れた品物は売れたの！ けど、税金とか色々あって……うわああん！」

税金やら、その他の雑費で元手は増えるどころか減ってしまったらしい。

あいつら本当に馬鹿だな。

「計画を聞いたらうまくいきそうな気がしたのよ！なのに、なに！ 商売をする場所とか、色んな道具が必要だったのよ！」

「そうだな。売り方次第でお金もかかるよな。というか、お前も関わっているじゃないか。自業自得だよ」

「助けてよ」

「お前に金を渡しても、すぐに溶かすから嫌だ」

「お兄ちゃんああん！ 私を捨てないでえええ！」

理論上は儲かる計算だったらしいが、結果としてマイナスになってしまったらしい。

こいつは何かに呪われているのだろうか？

エルフの婆ちゃんが言っていたな。

全てを得るか、それとも失うか……だったか？

玄関で俺に泣きつくマリエを遠くから見ていたのは、苗木の入っ

たケースを持った姉貴さんだった。

ちょっと怖がっている。

「……あ、レリアのお姉さんだ」

「最近ようやく元気が出てきたよ。散歩もするようになったんだぞ。屋敷の庭だけだ」

割と大きな屋敷だから、いい運動になる……はずだ。

食欲も出てきて、顔色も良くなっている。

姉貴さんは、マリエに対して少し怯えていた。

「は、はじめまして」

以前会っているのだが、姉貴さんは覚えていないらしい。

マリエが俺の服を掴んでクイクイと引っ張り、

「ちゃんと優しくしているのよね？」

「俺は、お前以外には紳士な対応を心がけているから大丈夫だ」

マリエがムスツとしながら「ならいいわよ。ええ、問題ありませんよ!」と言って怒っていた。

こいつは俺に一体何を求めているのだろうか？

不満そうなマリエが無害……ではないが、大丈夫だと言って姉貴さんにも来て貰う。

「ずっと苗木を抱えているの？」

「……落ち着くんです」

やはり、巫女の素質があるためだろうか？

俺はようやく元気になりつつある姉貴さんに安堵する。

ルクシオンが天井から降りてくると、俺とマリエを交互に見ていた。

『またですか？』

その反応にマリエが右手を振り回して抗議する。

「またって何よ！ こっちは生活がかかっているのよ！」

『あれだけのお金を貰っておきながら、生活苦になる貴方たちがおかしいのです。普通に一年を乗り切れたはずですよ』

家賃やら光熱費、それに最低限の費用は必要ないからな。

死にはしない。

「今度は商売に手を出して失敗したらしいぞ」

『新しいパターンですね』

「五月蠅いのよ！ 可愛い妹を助けなさいよ！」

可愛い？ ごめん、妹と可愛いという二つの言葉に、何の関係があるのか理解できないな。

哲学か何かだろうか？

「俺に可愛い妹なんて、前世でも今世でもいないから」

「助けてよ、お兄ちゃああん！」

すがりつくマリエを振り払っていると、姉貴さんがオロオロと困っていた。

苗木の入ったケースをギュッと抱きしめている。

「け、喧嘩は駄目です」

その言葉に、俺もマリエも動きを止めた。

マリエが首を横に振る。

「こんなのスキンシップみたいなものよ。兄貴には、お兄ちゃん、って言うて甘えておけば、けっこう何とかしてくれるし」

「お前、俺をそんな目で見ていたのか？」

ルクシオンがツツコミを入れてくる。

『事実ですからね。普通に考えて、マリエを助けるマスターはとも優しい部類の“お兄ちゃん”では？』

それは利用されているのではないだろうか？

姉貴さんは、少し羨ましそうに俺たちを見ていた。

「……なんか、いいですね。言いたいことを言える、って。あたしも、もつと言いたいことを言えたら、こんなことにはならなかったのかな？」

色々和我慢していたのだろうか？

マリエが小声で俺に聞いてくる。

「ねえ、それよりお姉さんの名前って何？ レリアの奴に聞くのを忘れちゃったのよ」

「俺も姉貴さんで通していたから知らない。聞いてみる？」

姉貴さんの名前を聞こうとしたら、ルクシオンが急に玄関の方へと一つ目を向けた。

赤い目が光る。

『マスター、こちらに接近する要注意人物を確認しました』

「……ええ、このタイミングで？」

マリエがハツとして、すぐに姉貴さんに奥へ隠れているように言

う。

「お姉さんは部屋に戻って隠れて！」

「え？ はい」

姉貴さんが部屋へと向かうと、屋敷のロボットたちが慌ただしく動き始める。

そしてマリエは。

「あ！ ……忘れてた！」

屋敷の外。

グレッグとクリスが門のところで待っている。

「マリエの奴遅いな？ まさか、バルトファルトの奴に！」

「落ち着け。そうなれば、マリエが黙っていない」

「馬鹿野郎！ 金をやる代わりに、なんて脅されたらいくらマリエだって！」

盛り上がっている二人。

そんな二人に近付くのは、赤毛の男だった。

淀んだ瞳をしており、屋敷を目指してブツブツと呟き歩いてくる。

グレッグがその異様さに気が付き、

「おい、そこのお前、止まれ」

異様な雰囲気を出している男が、グレッグを睨み付けた。

「俺に触るな！」

男の右手が光ると、地面から木の根が生えてグレッグを弾き飛ばした。

「ぐっ！」

吹き飛んだグレッグは、地面を転がり素早く起き上がると、男をエリクを睨み付ける。

口端を拭くと、グレッグは手の甲に血がついているのを見る。

「てめえ……ただで済むと思うなよ！」

グレッグが飛びかかると、クリスも加勢に入った。

「また聖樹の力か。グレッグ、不用意に奴らに返答をするなよ！」

持っていた隠し武器 ナイフを手に持ったクリスが、木の根を切り払うとグレッグがエリクに殴りかかるのだった。

エリクの黄色い瞳が、迫り来るグレッグの拳を見ていた。

派手に玄関のドアをぶち破ってきたのは、投げつけられたグレックとクリスだった。

「二人とも！」

マリエがボロボロになった二人に駆け寄って治療を開始する。

ロボットたちが持つて来たショットガンや拳銃を受け取った俺は、ポンプアクションでショットシェルを装填して構える。

突き破られたドアの向こうには、男を中心に木の根がウネウネと動いていた。

絶対に来ると思ったよ、エリク。

「またお前らか。六大貴族は人に喧嘩を売るのが好きらしいな」

挑発というか、声をかけて反応を見る。

エリクが顔を上げると、右手を上げて木の根を俺に向けてくる。

先端の鋭い木の根が襲いかかってくるので、俺は迷わずショットガンの引き金を引いた。

周囲に浮かぶロボットたちが俺を守るために盾を構え、そしてルクシオンがレーザーを照射して木の根を焼き切っている。

マリエが怪我をした二人を庇っていた。

「二人を連れてさっさと逃げろ！」

「う、うん！」

逃げるマリエに視線を向けたエリクは、左手を向けた。

玄関から蔦が入り込み、俺たちを拘束しようと襲いかかってくる。

「こっち来るなあああ！」

マリエが腕を振るって魔法で吹き飛ばすのだが、

「馬鹿！ 火事になるから火を使うなよ！」

「だって！」

火属性の魔法で焼き払おうとしていたが、屋敷が燃えてしまつので止めさせた。

屋敷から続々とドローンやらロボットたちが集まり、木の根や蔦を排除していく。

そんな中を突破した蔦が俺の脚を捕らえようとすると、直前で動きを止めて下がっていく。

「何だ？」

『聖樹の苗木の守護者であるマスターは、彼らとは別系統の存在で

す。聖樹も安易にマスターへは手を出せません。言いましたよね？」

実際に目にするとう違つと言いたかっただけです。本当です。

シヨットガンの弾を補充しつつ、俺はエリクに笑みを浮かべた。

「おい、切り札が無効化されたな。大人しく引き下がるなら」

エリクも笑みを浮かべていた。

「そうか。ならば次の手だ」

エリクの赤い髪が揺らめき、その右手に炎が発生する。炎はエリクを焼かず、まるで剣のような形に収束していく。

グレッグとは違う赤い髪が揺れて 炎の剣を握っていた。

「おい、何だそれ？」

エリクは薄らと笑みを浮かべていた。

「 炎の宝剣よ、俺の敵を焼き払え！」

格好いい決めポーズで炎の剣を振るうと、刃が伸びて俺たちを斬ろうとする。

『シールド展開』

ルクシオンが俺の前に出てシールドを発生させると、炎の剣は俺たちには届かなかった。

だが 周囲は別だ。

俺は舌打ちをする。

「新築なのに勿体ないことをしやがって」

エリクは炎の剣を持って、俺たちを見ていた。

「ほう、これを防ぐか。だが、この程度では終わらせない。お前らを焼き尽くすまで俺は 彼女を取り戻すまで絶対に諦めない！」

彼女……姉貴さんか？

「しつこいんだよ！」

「何とでも言え。俺たちの愛を阻むお前は、この手で焼き尽くしてやる」

ルクシオンが解説してくれた。

『聖樹の力で能力を向上させていますね。非常に厄介です。彼が疲れる前に、屋敷が燃えてしまいます』

「……お前ら、本当にいい加減にしろよ！」

ショットガンを投げつけると、エリクを守るように木の根が動いて弾く。

「その程度でええええ！」

ヤンデレとか、リアルだと勘弁して欲しい。

「聖樹は厄介だな」

俺の言葉にルクシオンも同意してくる。

『木の根で防ぎ、炎の剣で攻撃……攻守揃っていて厄介ですね。それより、屋敷がボロボロですね。マリエたち、そして対象の保護を優先します』

やはりルクシオンがいると楽が出来ていいな。

問題はエリクである。

下手に聖樹が守るので、本気でやるとエリクが死んでしまう可能性が高い。

俺は拳銃を手に持ち、右手の甲を見た。

「……苗木ちゃんに加護を信じて飛び込むとするか」

駆け出すと、ルクシオンが俺についてくる。

『いくらでも止める手段はあるというのに、マスターは面倒な手段を選びますね』

俺だって色々と面倒だけど、こいつは攻略対象の一人だ。

「黙ってついてこい！」

木の根が俺に襲いかかろうとするが、苗木の加護で俺への攻撃をためらっている。エリクが炎の剣を構えた。

「死ねよ！」

「嫌だね！」

木の根が動きを止めたところで拳銃をエリクに向け発砲、対人用の弾丸がエリクの右腕に当たった。

「うぐっ！……ま、まだまだああ！」

ガッツがあるのは認めるが、

「終わりだよ」

撃ち続け、そしてエリクが倒れるとまた撃つ。

撃ち尽くせばすぐに弾倉を交換し、銃を構えたまま俺はエリクを見た。炎の剣は消え、木の根も動きを止めている。

エリクは震えながら立ち上がろうとしている。

「あいつに会わせろ。これは俺たちの問題だ。俺は迎えに来たんだ」

「人の屋敷を焼いておいて迎えにきた？　そこが既に駄目。駄目すぎて笑うわ。それと、もうお前に出来るのは、姉貴さんに関わらないことだけなんだよ」

エリクが立ち上がろうとするので拳銃を向ける。

「俺は！俺は……あいつがいないと駄目なんだ。はじめて愛した人なんだ」

面倒なので引き金を引いた。

額に命中し、血が流れている。

エリクは、それでも痛みに耐えている。

「そうか。良かったな。姉貴さんは会いたくないって」

俺がそう言ったところで、エリクが俺の背中の方こうを見た。

俺も振り返る。

すると、ロボットたちに守られた姉貴さんがそこにいた。苗木の入ったケースを抱きしめ、少し煤に汚^{すす}れている。

エリクの顔が笑顔になってくる。

俺は姉貴さんの顔を見ながら、

「何で出てきた！」

怒鳴ると、エリクが笑っていた。

「そうか。やっぱりこいつに閉じ込められていたんだな。もう大丈夫だ。俺が迎えに来てやったからな」

そんなエリクに姉貴さんが、

「……貴方のところには戻りません」

ハッキリとそう告げた。

エリクの顔が歪む。

「こいつに何を吹き込まれた！ お前がそんなことを言うはずがない。そうだ、こいつに洗脳でもされたか？ なら、すぐに目を覚ましてやる。今からこいつを焼き払い、俺がお前の目を覚ましてやるからな。待っていてくれ。すぐに連れ戻してやるから」

姉貴さんが叫ぶ。

大声を出しているところをはじめて見た。

「あんたのことなんか好きじゃない！ 嫌いだって言っているのが分からないの！」

エリクが啞然とする。

……盛大にフラれたな。

「あたしは！ あたしは……もつと普通が良かった。一緒にご飯を食べて、その日のことを話して笑い合って……でも、貴方といると苦しかった。料理を作っても、文句しか言わない。少しでも自分が気に入らないと怒る。私がその日のことを話しても、不満そうにして怒るだけ。……すぐに手を上げるじゃない」

エリクが狼狽えていた。

思い当たる節があるのだろう。

「わ、分かった。今度から気をつけるから」

「もう関わらないで」

姉貴さんが涙を流しながらそう告げると、エリクの顔が醜く歪んだ。右手の紋章が輝きを強め、木の根がウネウネと動き出したところで。

今度はマリエが大腿で歩き、こちらにやって来る。

煤で顔が汚れたマリエは、エリクを　拳で殴り飛ばした。

「この屑野郎おお！」

「ひひゃぶ！」

エリクが吹き飛ぶ。小さな体のどこにそんなパワーがあるのか分からないが、肩で息をしているマリエが怒鳴りつけていた。

「いい加減に気付きなさいよ。あんたたちはもう終わったのよ！」

エリクが頬を押さえながら、

「まだだ。まだ終わってなんかいない！　俺はあいつを愛しているんだ！」

マリエが問答無用で顔を蹴る。

俺はその間に、震えてその場に座り込んでしまった姉貴さんの側に行く。

エリクに会うのも怖かっただろうに、無茶をしたらしい。

姉貴さんの抱きしめている苗木が、ほんの僅かにいつもより光っていた。

マリエを見れば、エリクに説教をしていた。

「愛？ 笑わせてくれるわね。あんたのは愛じゃないから。見なさいよ。あんたの“元”恋人は、震えて泣いているわよ」

エリクが何かを言おうとすると、

「追い詰めたのはあんたよ。本当に愛しているなら、二度と関わらないのが愛情じゃないの？ あんた、このままあの子と関わればいつかあの子を殺すわよ」

エリクは即座に否定する。

「そんなことはしない！」

マリエがエリクの髪を掴み、そして燃えている俺の屋敷を見せた。ロボットたちが消火活動をしている。

「人様の家を焼き払った奴が何を言っても無駄なのよ。いい加減に

理解しなさいよ。あんたのはただのわがまま。愛じゃないわ。それと、あの子には二度と近付くな。次に近付いたら、私があんたを殺してでも止めるわ」

……たぶん、同じDV被害者の姉貴さんと自分を重ねて怒っているのだろ。だが、逆ハーレムをした奴が愛を語るのはどうなのだろう？

マリエの顔を見上げるエリクは、何かを言おうとして 止めた。そして、姉貴さんに視線を向ける。

俺が抱きかかえるように立たせていたところだった。

何かを言おうとして、俯いてしまつエリクは泣き出してしまった。

俺は小さく溜息を吐きつつ、燃えている屋敷を見るのだった。

「……今日はアインホルンで寝るかな」

共和国の貴族って乱暴だよな。

本当に信じられないよ。

エピソード

双六でふりだしに戻る、ってあるよね？

そんな気分だよ。

「最初に使っていた家に逆戻りだな」

大使館が用意してくれた家に戻ってきた俺は、姉貴さんが楽しそうに掃除やら片付けをしているのを見ていた。

「大きなお屋敷もいいですけど、あたしはこっちが落ち着くかな」

エリクの一件から数日。

あいつの実家であるバリエル家にかつあげ じゃなかった、抗議をした俺はまたしても賠償金を手に入れた。

おっと、これで終わりではない。

大きな貸しにして、今後ゆつくりと搾り取るつもりだ。

賠償金もお見舞い金みたいな感じで貰ったので、交渉はこれからになる。小銭の音が聞こえなくなるまでジャンプさせてやるよ！

あとは、王国にもちゃんと連絡しているよ。

ローランドが忙しさに苦しんでいると思うと、嬉しくて仕方がな

い。

ただ 処刑云々は、これ以上の原作ブレイクを避けるためにも求められない。あいつらの命云々ではなく、世界の危機を回避する方が優先だからだ。

そもそも、世界の危機さえなければ、俺は留学などしなかった。

出来れば、もう関わりたくない。

ただ、エリクが乗り込んできたことで、一つだけいいことがあった。かつあげのネタが手に入ったことや、ローランドを苦しめたことではない。

姉貴さんだ。

以前までどこかオドオドしていたが、吹っ切れたのか笑顔が戻った。

喋り方もサバサバした感じになっている。

本当に良かった。以前は普通に話していても泣き出すし、こちらが色々と聞くと混乱しだして引きこもって大変だったのだ。

話をするのもほとんど受け身だったんだよ。

あとは、俺が勝手に話をするか、かな？

「あれ？ ルクは？」

「あいつなら、港に本体　じゃなかった。王国から使節団の第二陣が来るからって、その関係で港に向かったよ」

本体が来たので、アインホルンの補給と整備をずっと言っていた。

アロガンツの整備とクリーニングも必要だと言っていたね。

ガッツリ整備とクリーニングをずっと言っていた。

人工知能の癖に潔癖すぎない？

エプロンをした姉貴さんを見ている俺は、立ち直ってくれて安心した。

だが、これからが問題だ。

マリエ、そしてレリアの話を総合すると、二作目の攻略対象キャラは残すところあと二人。

一人は上級生だが、一年生の時に関わりがないと恋人を作ってしまうらしい。

……レリアのせいで、この上級生は候補から自動的に外れている。

二人目は、攻略対象の男子なのに転生者　正確に言えば憑依者か？

乙女ゲーのことなど知らず、好き勝手に動いているようだ。

知っている三人でも、エリクは論外。

エミールは安牌狙いのレリアがいい感じになっており、ここから姉貴さんへ乗り換えるのはエミールが拒否しそうだ。

姉貴さんも妹の彼氏を横取りしたくないだろう。

家の中を片付けている姉貴さんを見る。

「えっと、お皿はこっちかな？」

エプロン姿で、家事をしている姿は家庭的に見える。

アレだ！

ギャルっぽい子が、家庭的とかギャップ萌えを狙いすぎていてあざとい。このまま一緒に住んでいては、間違いを起こしそうだ。

俺は自分に言い聞かせる。

「手を出しちゃ駄目。手を出しちゃ駄目。手を出したら詰む」

思い出せ。

俺には婚約者が二人もいる。

一人でも大変なのに、二人もいるんだ。

懐から取り出した手帳には、クレアーレが送ってくれた写真が入っていた。白い下着のリビア、赤い下着のアンジェ……そう、俺には二人がいるから耐えなくてはいけない。

姉貴さんが声をかけてきた。

「リオン……さん」

「いや、無理に「さん」を付けなくていいから」

「ならリオンね。しばらくずっと堅苦しい言葉遣いを強いられてきたから、喋るのも苦勞するわ」

エリクは自分に相応しい女にしようと、姉貴さんに色々と強要していたようだ。

言葉遣いもその一つ。

それにしても、これが素の状態か……。

レリアの奴、あの時の酷い状態の姉貴さんを見て何も思わなかったのか？ 多少は慌てていたが、いったいどう思っていたのだろうか？

夏休み。

レリアはエミールに誘われて街に来ていた。

だが、落ち込んでいるレリアを見て、エミールは心配している。

「大丈夫、レリア？」

「う、うん」

だが、内心では大丈夫ではなかった。

（どうしよう。エリクは駄目なら、エミールも駄目……残っているのは、ナルシス先生だけ。でも、そのナルシス先生も……）

エミールが話題を変えた。

「それよりもごめんね。最近、バタバタしていてちゃんと会えなくて」

「忙しかったのよね？」

「……うん。フェーヴェル家の件でね。共和国は多額の賠償金を支払うことになったけど、それ以外にも色々あって」

ピエールが起こした事になった今回の事件。

リオンに負けたとすると、防衛戦で敗北したことになる。それを認められない六大貴族たちは、ピエールの責任にした。

フェーヴェル家が抗議したが、他の五家が譲らなかった。

逆に、フェーヴェル家の処罰を、他国から見れば相当軽いものになっている。他国に敗北したと認めたくない共和国の事情と、フェーヴェル家にそれで納得して貰うための判断だ。

グズグズした結果に終わったと、レリアも考えている。

（やっぱり、六家でちゃんとした議長がないから駄目になるのよね）

ゲームではそうだった、と思うレリアだった。

今回の件で、結果的に百隻を超える飛行船が沈み、人的被害は少なかったとしても六大貴族たちは大慌てである。

エミールやナルシスも駆り出され、色々と仕事を手伝わされたのだ。

レリアの予想は、

（アルベルクだ。あいつ、フェーヴェル家を利用した黒幕だから、あまり重い罰に出来なかったのね）

身内の揉め事にしたかった六大貴族。

フェーヴェル家を責めきれない議長代理のアルベルク。

（本当にしつこい男）

エミールが疲れた顔で話を続ける。

「問題はピエールだよ。加護を失ったからね。婚約者に捨てられたい、そのおかげで玉突き事故が起きてさ」

ピエールの婚約者だが、加護なしになったので婚約破棄を申し出てきた。フェーヴェル家も、それを責めずに認めている。加護なし

というのが、いかに共和国の貴族社会で致命的かを物語っている。

レリアが落ち込んでいるのはそこだ。

ピエールの婚約者が、他の男性と結婚することになった。

他にも、今回の事件を起こした貴族、関わっていた者たちの婚約者も違う相手に乗り換えてしまった。

「エリクもやらかしちゃったし、もう本当に大慌てだよ。ナルシス先生も、実家から飛び火したら面倒だって言われて無理矢理婚約だったからね。僕にも話が来たくらいだし」

レリアが悩むのはそこだった。

（……もう、攻略出来そうな男子なんて、隠しキャラのフェルナント“あいつ”だけじゃない）

ゲームにはない展開に、レリアは頭を悩ませていた。

マリエの家。

バリエル家の家臣たちに見張られたエリクが客としてやって来た。

グレッグとクリスが睨み付けている。

「何しに来た？」

「帰れ」

応接間。

マリエは二人を落ち着け、エリクに話しかけた。

「ごめんね。でも、あんたも悪いのよ。というか、もう出歩いてもいいなんて六大貴族は甘いよね。あに　　リオンが激怒したら、あんたたち今度こそ詰むわよ」

詰むと言われて、家臣たちが非常に緊張した様子だった。

額に汗が滲んでいる。

エリクが何か変なことを言い出さないか見張っている。

そう、彼らはエリクへの見張りだった。

エリクは淡々と告げるのだ。

「……俺のやったことを後から考えてみた。確かに、俺は間違っていたのかも知れない」

マリエは鼻で笑っている。

「かも、じゃなくて、事実よ。その認識の甘さ、ちゃんと改めなさい」

リオンという、共和国でも通用するようになってしまった武力を背景に、マリエは尊大な態度だった。

調子に乗っていた。

だが、バリエル家の家臣たちは、何も言い返さない。

エリクが苦笑いをしている。

「そう……だな。だが、改める必要などないかも知れない」

「どういう意味よ？ 馬鹿にしているの？」

「違う。俺の命が君たち次第ということさ。王国に対して不祥事^{ふしやうじ}続きた。父上も対応に困り果てていてね。俺を処刑なり、押し込めるにしても、他の六大貴族が反対する。俺を厳しく罰すれば、ピエールを許した連中からすれば困ったことになるらしい。何しろ、共和国は王国にピエールを差し出すことが出来ないからな」

右往左往している議會をマリエは思い浮かべた。

まとめ役の立場も弱く、何よりも半分に意見が割れると話がまとまらない。

グダグダしていると思われる議會に対して、マリエも苛立っていた。

「反省しないってことかしら？」

マリエは思う。

（よし、兄貴をけしかけて今度はバリエル家から搾り取って貰うわ。

そしたら、私にもおこぼれが来るかも知れない！

だ　　が　　。

「だから父上は、俺を殺しても君たちを責めない。好きにしてい
と言っていた」

「へ？」

驚いているマリエに、ユリウスが困惑していた。

「……おかしいじゃないか。非公式に殺して何の意味がある？ 言
いは悪いが、お前の命も交渉材料の一つだ。俺たちがここでお前
を殺しても、バリエル家には、そして共和国には何のメリットもな
い。むしろ、お前を公式に差し出した方が王国の印象も変わるぞ」

エリクは小さく笑っていた。

「ああ、そうだな。お前から見ればそれが正しいだろうな。
だが、今の俺にそんな価値はないのさ」

エリクが右手の甲を見せてきた。

紋章が消えているのを見て、マリエが驚く。

「な、何で？ 別に聖樹に誓った決闘でもないのに！」

「やはり詳しいな。あの後、紋章を奪われて俺は加護なしになった。
父上は俺を押し込めるか、すぐにでも消したい。だが、それでは王
国も黙ってられない。差し出すのは議会が許さない。だったら、

非公式にでも差し出して誠意を見せたいのさ。王国に　いや、あの伯爵に、かな？」

ジルクが呟く。

「どうせ消すなら、少しでも印象が良くなるように、ですか？」

ブラッドが首を横に振っている。

「素直に謝罪できないものかな？　　というか、ピエールは僕に謝りにも来ないんだけど？」

エリクがピエールたちについて話をする。

「悪いが、ピエールたちは行方不明だ。本来なら謝罪が優先だろうが、そもそも謝れる状態じゃないだろうな。取り調べの中で、ピエールは自分の兄を蹴落とすつもりだと分かってね。次期当主様は大変お怒りだった、ということさ」

それを聞いて、ユリウスたちはすぐに察したようだ。マリエが少し遅れて気が付き、口を閉じてからしばらく時間が過ぎる。

（何もかもグダグダじゃない。何でこうなるのよ！）

エリクがバリエル家の家臣に目を向けると、拳銃がマリエの前に置かれた。

「すぐに撃ち殺したいならそれで頼む。拷問は……しないですむなら、その方が俺としてもありがたい。出来れば、バルトファルト伯爵がいるところで頼むよ」

やる気のないエリクは、自分の命を捨てようとしていた。

マリエがソファから立ち上がると、テーブルの上に乗って銃を跨ぎエリクを平手打ちすると、胸元を掴み上げる。

その行動に周囲が驚くも、バリエル家の騎士たちは止めに入らなかった。

「舐めてんじゃないわよ！」

「え？」

「殺してくれて結構？ あんた、私たちを何だと思っているの？
まずは謝るのが先でしょうが！ それに死んでもいいみたいな顔が
ム力つくわ。あんた、死にたくないと思ったことがないのね」

マリエは ある。

前世の最期は、それは情けない死に方だった。

相手に暴力を振るわれ、あ、これはまずいと思って動けなくなっ
た。そうして思い浮かんだのは家族の顔 娘の顔がもう一度見た
かった。

死にたくなかった。

「その程度の奴なんて殺す価値もないわ！ もがいて、あがいて…
…あんたは最期まで生きるのよ。これまで駄目だった分を取り返す
まで、死ぬなんて許さないからね！」

マリエの説教に、エリクが涙ぐむ。

「……家のために死ねと言われたのに。まさか、俺を殺すと思っていた奴らに生きると言われるとは思わなかったよ」

興奮しているマリエが、エリクに言う。

「あに……リオンには私から説明してあげるわ。あんたら、これで文句はないわよね？ こいつを殺したら、リオンをバリエル家にけしかけるから覚悟しなさいよ！ 私は本気よ！ やるときはやるわよ！」

やるのはリオンである。だが、誰もツツコミを入れない。

バリエル家の家臣たちを睨むマリエを見て、グレッグもクリスも、

「マリエが許すなら、それもいいかな」

「マリエは優しいからな」

二人とも文句を言わなかった。

アルゼル家の家臣たちは、青い顔をしながら直立不動となり返事をしている。

「か、必ず当主様にお伝えします！」

堂々としたマリエの姿を、エリクは目を輝かせてみていた。

俺は自宅で昼食ができるのを待っていた。

ぐつぐつと煮える鍋の音が聞こえてくる。

「もうすぐ出来るからね」

「はい」

返事をして待っている。

皿も並べたし、頼まれたパンも買ってきた。

準備は万端である。

すると、姉貴さんが右手の甲を見る。

「あ、あれ？」

「どうしたの？　もしかして火傷？」

椅子から立ち上がると、姉貴さんが首を横に振る。

「違うの。こ、これが」

浮かび上がっていたのは紋章だった。

「これは紋章？　聖樹の加護？」

紋章の種類は分らないが、俺はすぐにテーブルの上に置かれた苗木を見た。今日もキラキラと輝いているが、少し大きくなっている気がする。

ケースの中で狭そうにしていた。

「……まさか、こいつが？」

姉貴さんが右手の甲を見ながら、

「これ、見たことがある。ずっと前に住んでいたやし　家で見たのと同じよ」

自分の出自を隠しているが、それは姉貴さんの妹から聞いているので知っていた。

だが、姉貴さんは俺に隠したがっているので、今は紋章について考える。

「これはいったい　って」

玄関のドアがノックされた。

客も来たので、先にそちらの対応をしようと警戒しつつドアを開ける。

そこにいたのは　。

「リオンさん！」

「久しぶりだな」

二人が俺に飛び付いてきた。

「リビア！？ それにアンジェまで！！」

二人が俺の顔を見ている。

「第二陣の使節団と一緒に来たんです。ニックスさんも お義兄さんも一緒ですよ」

リビアが振り返ると、そこには苛立っている兄貴が立っていた。腕を組んで俺を嫌そうに見ている。

「……どうして俺がお前の幸せそうな場面を見ないといけないのかな？ それはそうと、早く入れてくれよ。長旅で疲れたんだ」

アンジェが中の様子を覗く。

「それよりもノエルは元気か？ 少し気になっていたのだが」

あ、亡くなったと伝えていなかった。

そもそも、老犬の介護とか生々しいから詳しく伝えていない。糞尿の処理が大変とか、メールで知らせられないし、弱ってきて死にそうとか伝えられない。

俺はもういないと言おうとすると、背中を引っ張られた。

姉貴さんが、俺の服を指でつまんで少し引つ張っている。知らない人たちに少し怖がっているのか、俺に隠れていた。

だが、その様子を見て、リビアとアンジェから笑みが消えた。

「……リオンさん、その人は誰ですか？」

「説明して貰おうか、リオン。それと、ノエルはどこだ？」

どうしてノエルを気にするの？

兄貴？　ねえ、何で俺から顔を背けるの？

「いや、この人は色々とあって、それにノエルは」

「ノエルです」

「え？」

姉貴さんが少し恥ずかしそうに、頬を染めて俺を見ている。

「私の名前……ノエルです」

俺はその答えに固まった。

リビアが呟く。

「ノエル……十七歳のメスって。ア、アンジェ！　部屋にベビーベツドが置いてあります！」

ノエル　犬の介護で使用していたベビーベッドをリビングが指さしていた。

アンジエも同様に目を見開き見た後……俺を鋭い眼光で睨み付けてくる。

「随分と懐いている様子じゃないか、リオン。可愛いメス犬といったところか？　私たちはつきり、老いた犬を想像していたが、まさか人間だったとは思わなかったよ」

二人の目が非常に怖かった。

とても冷たい目をしている。

表情がない。鈍い俺でもこれはまずいとすぐに分かった。

兄貴を見ると、背を向けて耳を塞いでいた。

俺が悪いと思っているのだろう。確かに逆の立場なら、俺は兄貴を捨てて逃げ出している。

俺は思ったね。

どうして俺はこんなにも追い込まれているのだろう？　俺自身は何も悪いことをしていないのに、って。

……あ、これ詰んだ、って理解したよ。

状況を説明するのなら、単身赴任先に連絡も入れず驚かそうと訪れた妻が、旦那の不倫相手を見つけてしまった場面ではないだろう

か？

昼ドラのようなドロドロとした展開だ。

俺はまるで浮気現場を見られた夫の立場……。

何を言っても信用して貰えない状況ではないだろうか？

誤解が誤解を呼び、何から説明しても信じて貰えそうにない状況……。

俺がいくら説明をしても、二人はきつと疑うだろう。ならば、ルクシオンに話をして貰うのが一番だ。

ただ、残念なことにルクシオンはまだ戻ってきていない。

リビアとアンジェが俺に詰め寄ってくる。

「リオンさん！」

「リオン！」

まだ戻ってこないルクシオンに向かって、俺は心から叫んだ。

「助けてルクシオオオオン！」

エピローグ（後書き）

四章は楽しんでいただけたでしょうか？

明日は幕間を投稿して、更新は一旦停止いたします。

活動報告に四章の感想を書くつもりなので、そちらもチェックしていただければと思います。

あと「乙女ゲー世界はモブに厳しい世界です 一巻」が無事に発売されました。

先月ですけどね。

感想や購入報告を貰い大変嬉しく思っています。

ありがとうございます！

では、これからも応援よろしく願いいたします。

【幕間】ルクシオンレポートその4

ルクシオンはリオンが助けを求めている声を聞いた。

だが、すぐにクレアーレに視線を戻して情報交換を続ける。

場所はルクシオン本体……宇宙船の中だった。

クレアーレが笑っていた。

『あら？ 助けに行かないの？ 誤解を解かないと大変よ』

『どうせすぐに誤解は解けますよ。それなら、マスターには人生の修羅場を経験して貰いましょう。生物には、ある程度の刺激が必要ですからね』

出来るだけ人生に刺激を求めない傾向にあるリオンにとって、この程度の修羅場は経験しておくべきと判断するルクシオンだった。

『それにしても、どうして失敗したのかしらね？ 貴方たち、本気でやっているの？ 実は遊んでいないかと疑っているのだけど？』

クレアーレが、世界の危機を前にグダグダやっているルクシオンたちに呆れている。

『いつそ聖樹を焼き払えば？』

『マスターに禁止されています。それに、聖樹がなくなれば、共和

国はすぐに立ち行かなくなる国ですからね。共和国だけではなく、その周辺国にも影響が出てしまいます』

『苗木を植えてハッピーエンドでしょうに』

『苗木では、聖樹と同等のエネルギー供給が出来ません』

『……それ、どのみち共和国は詰むってことじゃないの？』

『マスターは自分の責任になるのが嫌だけです。聖樹をそのままに出来るのなら、その方がいいと考えているようですよ』

アルゼル共和国が、魔石を売らなくなれば困る国は多い。

ホルファート王国も同じだ。

リオンは何も優しさだけで、聖樹を焼き払わなかったのではない。

自身が聖樹を焼き払った場合、アルゼル共和国に待っている悲惨な現実を放置できる自信がなかった。

ルクシオンという力を持っているために、下手に助けられる力があるために悩む。

面倒だから焼き払わないのだ。

何より、聖樹から与えられる無限のエネルギーにより、アルゼルの民は支えられている。

それを失えば困るのは民だ。

六大貴族も、今の支配体制を維持できない。

そして、今までの態度から六大貴族は周辺国の恨みを買いつぎている。

アルゼルの大陸が血で染まってしまう。

王国も準備さえ整えば、嬉々として攻め込む可能性が高かった。

問題が多すぎるために、リオンは聖樹を焼き払いたくないのだ。

『そのマスターは、苗木の守護者に選ばれたのよね？』

『聖樹の守護者ではないのがポイントですね。六大貴族とは別の管轄になるため、互いに干渉できません。ただし、上位者としても振る舞えません。そこまでの性能を求めていますけどね。マスターには私がいますから』

クレアーレは次の質問をする。

『それで？ 聖樹の正体は分かったの？ わざわざ、ピエールという男に従ったのは、色々と調べるためでしょう？』

忌々しい。

これがその気持ちなのかと、ルクシオンは思いながら肯定する。

『おかげで随分と詳しく調べられましたよ。マリエもレリアも、ゲームとしての断片的な知識しか持っていないませんでしたからね。レリ

アは現地人ですから、マリエよりも多少はマシな情報を持っていますが、それだけです』

ゲームとして知っている。

だが、その裏に何があるのかを二人は知らなかった。

上位者が優遇される聖樹の加護というシステム。

巫女の紋章を持つ一族が、どうしてフェーヴェル家やラウルト家に敗北したのか？

ゲームの物語の始まりからして不思議だった。

だが、それをマリエモレリアも「そんなものでしょ」みたいな態度で受け入れてしまっている。

ピエールがやったように、騙し討ちか何かをしたのではないかと。

『結果は？ 大体予想はしているのだけどね』

クレアーレの予想にルクシオンは興味を持った。

『先にそちらの話を聞きましょう』

『私たちに拒否反応が出ない。そして、自然発生的にあの植物が誕生したとは思えない。誰かが作ったのなら、それは旧人類ね。アルゼル共和国には、私が管理していたような研究所があったと思うの』

ルクシオンが頷く。

『私も同じことを予想しています。隠れ潜んでいた旧人類が、聖樹を作ったと考えています。もしくは、途中で聖樹が変化した、と』

作りたかったのではなく、出来てしまった可能性もある。

ルクシオンの考えは、

『アレにとって 聖樹にとっては、新人類は自分を守るための存在です。エネルギーを分け与えているのも、宝玉を与えているのも世話をさせる対価。加護もその中の一つなのでしょう。アレには契約やら人間的な考えが元から存在していません』

植物に人の考えを理解しろというのは無理な話だ。

その繋ぎ役が、巫女だったのではないかとルクシオンは考えている。

クレアーレも同意見だった。

『自分を守る強い存在を守護者に、そしてコミュニケーションを取るために巫女を用意したのね。最上位者がいない聖樹はどう思っているのかしら？』

『既に聖樹は大きく育っていますからね。守護者、巫女が不在でも六大貴族が自身を守っています。今では必要性を感じられなかったので放置したでしょう。そう、我々が来る前までは』

今回、リオンやルクシオンがギリギリまで聖樹に攻め込んでいる。

聖樹も何かしら反応を示すかも知れない。

ただ……。

『ピエールを調べている時に気が付きました。六大貴族は、巫女がないために聖樹の力が変質していると気が付いています。聖樹への誓いを利用したピエールが証拠です。巫女がいなくなったことで、聖樹は人から見れば暴走しているのかも知れません』

ピエールの行動は、アルゼルでも異常だった。

一方的にユリウスたちに理不尽な勝負を挑み、そして持ち主でもない相手からアインホルンを奪った。

それを聖樹に認めさせたなど、理不尽すぎる。

何でもありになってしまう。

困るのは外国の人間だけではない。

六大貴族も同じだ。互いに身内を疑うしかない。

『……六大貴族が聖樹の苗木を欲した理由ですが、マスターのように備えにしたかったのでしょうか』

『彼らも苗木があれば、聖樹が手出しをしないと知っていたのね』

ルクシオンの出した結論は、

『七大貴族が六大貴族に減ったために、グダグダしているとマリエは言っていました。ですが、実際には違います。巫女の一族が敗北し、聖樹の力は変質……六大貴族たちにとって、怖いのは外敵よりも身内でした。互いに互いを警戒しているのです。なので、身内への対策に聖樹の苗木がどうしても欲しかったのでしょう』

クレアーレが困った声を出す。

『もう、マリエちゃんたちはゲーム的に“そういうものでしょ”みたいな態度で困るわね。もっと理由を考えて欲しいわ』

ピエールがしでかしてしまった今回の一件。

実はアルゼル共和国の内情がよく出ている一件でもあった。

そして、ルクシオンは気になることがあった。

『……私は巫女の一族が敗北した理由を突き止められていません。そして、推測になりますが、聖樹の変質は巫女の一族が滅ぶ前に始まっていたように考えられます』

クレアーレも同意する。

『その方が自然よね。でも、そうすると巫女の一族に一体何が起きたのかしらね？』

結論は出ない。

だが、すぐに分かることだと、ルクシオンはリオンたちの映像を見ながら思っていた。

『どうして来ないんだ、ルクシオン！』

『リオン、さつさと説明しろ！ 後ろにいる女と、部屋にあるベビ―ベッドは何のために用意した？ まさか、子供が……』

『ち、違うんだ！ それはノエルの 犬の介護のために！ ほら、腰を曲げると痛いから、こうした道具が必要だったんだ！』

『リオンさん、私 すごく怒っていますからね！ めっ！ ですよ、めっ！』

『違うの。これは違うの！ まずは落ち着こう！ 証人だっているんだよ。俺は無実だよ！ 世話をしたノエルは犬で 』

映像の中、リオンの背中に姉貴さん ノエルが隠れながら、

『あ、あたし！ リオンさんにお世話になって。助けて貰ったんです！』

『姉貴さあああん！ 今は駄目！ お願いだから許して！』

『いえ、言わせてください。貴方たち、いきなり来て何なんですか？ リオンさんは、本当に凄く優しくて頼もしい人です。責められるような人じゃありません！』

アンジェとリビアの視線が、更に険しくなってくる。

『……随分と親しい様子だな。世話をしていたのは事実らしい』

『ノエルちゃんの話は嘘だったんですね。ずっと心配していたのに……』

リオンが叫んでいた。

『ルクシオオオン！ お前、わざとか！ わざと来ないのか！ 早くしないと取り返しがつかないことに』

リオンが困っている姿を見ているルクシオンに、クレアーレは戸惑っていた。

『……早く助けてあげなさいよ』

『まだ大丈夫では？ それに事情を説明したところで、あの二人の怒りは収まりませんよ。しばらく発散させて、疲れた頃に説得するのが効果的です。それにしても これでは振り出しに戻るよりも酷い状況になってしまいましたね。マスターらしいとも言えますが』

……そもそも、事実を話したところで二人がリオンを許すだろうか？ 女性と暮らしていたのは紛う事なき事実である。

どうせ怒るなら、怒らせておけばいいというのがルクシオンだ。

さて、アルゼル共和国の様子を見に來ただけのはずなのに、リオンは騒動の中心へと知らずに飛び込んでしまっていた。

今は修羅場の真っ最中。

『これからが楽しみですな』

そんなことを言うルクシオンに、クレアーレが呆れていた。

【幕間】ルクシオンレポートその4（後書き）

本日で毎日更新を一旦停止します。

再開は未定ですが、早い内に出来たらと考えています。

活動報告に第四章の反省などを書こうと思っていますので、そちらもチェックしていただけると嬉しいです。

第四章も無事に終わりました。

Web版よりも更に加筆、修正した書籍版は一卷が発売中ですので、是非ともご購入いただけたらと思います。

幕間 苗木ちゃんは消えない（前書き）

こちらは感想欄で強い人気のある後書き劇場主体の幕間です。

本文は僅かにしかありません。

嫌いな方は、後書きは読まずにブラウザバックをお願いいたします。

幕間 苗木ちゃんは消えない

修羅場というのをご存じだろうか？

色んな意味があるが、男女関係が生み出すあまり遭遇したくない現場も修羅場の一つとされている。

転生して……いや、とにかく前世も合わせて、俺に修羅場がやってくるとは思っていなかった。

俺 リオン・フォウ・バルトファルトは、現在修羅場となっています。

「リオン、聞かせて貰おうか？ その後ろにいる女と、部屋の中にあるベビーベッドの意味を。理由くらいは聞いてやる」

激怒しているためか、魔力があふれて髪が揺れているアンジェは激怒具合が既に危険レベルに思えた。

この、理由くらい聞いてやるよって……言い訳を言ってみろ、からの言い訳をするな！ のコンボだと思っている。

俺はガタガタと震えながら言い訳をするのだ。

心の中で、まだ来ないルクシオンを待ちわびながら……。

「ち、違っんです！ これには深いわけが」

「だから、聞かせてくれないか？」

アンジェの目が怖い。

どう考えても、現状では俺が悪い。仕方のない面もあるが、それを二人に理解しろとは難しい話だ。

「べ、ベビーベッドは犬の介護に必要で、ノエルはアレだよ。本当にいたんだよ」

後ろで姉貴さん改め、ノエルさんが、

「あの、私はここにいますけど？」

「ごめん……犬の方のノエルなんだ」

「え？ 首輪が必要ですか？」

モジモジするノエルさん……おう、思い出してしまった。

この人、そう言えばエリクに首輪を付けられていた。

更なる誤解を生み出し、アンジェの額に血管が浮き出て顔がおい、ルクシオン、見ているんだろ？

なあ……答えてくれよ、ルクシオン。

幕間 苗木ちゃんは消えない(後書き)

苗木ちゃんの後書きコーナー

(> <) 「ふえええん、りおんしゃんをいじめえないれえ」

(。 。) 「それにしても……近くにいる良い感じの子を選んだが、私の守護者に他に番がいるとか想像できねーよ。でも、それっぽいこともあの一つ目と言っていたような……なかったような……」

(。 。) 「えへ、苗木ちゃん、ききのがしちゃいましたあ」

(;) 「……どうしよう？ 今から、新しく来た番いに紋章を移そうかな？ でも、それやつちゃうと、私が軽い女に見られそう」

(。 。) 「やっぱり、聖樹の苗木としては、ちょっと雰囲気出したっていうか。紋章をほいほい簡単に与えるのは、よくないと思うの……」

(。 。) 「あ！ 閃いちゃった！ 苗木ちゃん、あったまいい」

(> <) 「わたしいのみこしゃんに、けんかはめー！ っておくりゆのー みんな、けんかしたらめー！」

(。 。) 「どうよー」

ノエルが閃いて、首輪を装備しました。
アンジェが更に激怒しました。
リビアが参戦しました。
リオンのお兄ちゃん……ニックスは泣いて逃げ出しました。
リオンは紋章を見て「ルクシオン早く来ないかなあ」と呟きました。

(・・;)「ふえ！」

(。。)「……」

(。。)

(。。)

(。。)

(;)。「大丈夫。まだ慌てる時間じゃないわね。失敗は誰にでもあるの。大事なものは諦めない心よ」

(;><)「今度こそ届いて、私の思い！ 巫女おお！ 首輪じゃないわ。というか、首輪はないわ！ ここは一旦落ち着かせて話し合うの！ 会話よ。会話をしなさい！」

(;。)(「どうよ！」

ノエルが閃きました。どうやら、これまでどれだけ優しくされたのか語りはじめたようです。

アンジェは無表情になりました。右手に炎が出現しています。

リビアは泣き出しそうです。

リオンは天を仰ぎなら「糞の役にも立たない苗木より、ルクシオンが来ないかなあ」と思っているようです。

（#。。）「巫女おおお！ そうじゃないのよおおお！ 自慢して相手を煽らないで！ というか、一人が炎を出しているわよ！ 巫女として、私に火を近付けないで！ 守護者、私を守って！」

リオンは「火傷もルクシオンに治して貰えるかな？」などと考えています。

、（、、#）ノ「諦めるなあああ！ 私は燃えたら死んじやうのよおおお！ こうなればもう一度おおお！」

（#><）「二人ともつとやる気を出してえええ！ 私のピンチよおおお！ 役目を果たしてえええ！ 私を守るのー！」

聖樹の紋章、守護者と巫女の紋章が輝きました。

（；。。）「通じた！ ほら、みんな喧嘩は……」

リオンとノエルの似たような紋章を見て、アンジェとリビアは更に疑惑を強めました。

アンジェが体から炎を噴き出しています。

ノエルは右手の甲を見て頬を染めています。

リビアはノエルの顔を見て、周りに紫電が発生しています。

リオンは思いました「何て使えない聖樹の苗木だ」と。
火に油を注いでしまいました。

（；；。）「……」

。。。。（。。。。）。「乙女ゲーはモブわたしに厳しい世界です、一巻が発売中です。買ってよね、うわあああん！」

いかがだったでしょうか？

こちらは後書きメインなので残しておくつもりです。

たまには、こういった幕間があっても良いのではないかな？

そして、宣伝しても良いじゃないか。

そう思って書きました。

幕間 苗木ちゃん宣伝する（前書き）

現在、五章のことを考えつつ、色々しております。

更新再開は未定ですが、夏休みには何か投稿したいですね。

幕間 苗木ちゃん宣伝する

ルクシオン本体。

修羅場になってしまったリオンの自宅の映像を、ルクシオンとクレアーレが眺めていた。

クレアーレが解説する。

『マスターは駄目ね。半分諦めて、あんたが来るのを待っているわ。潔いとも言えるけど、もっと自分で頑張った方が良くない？』

ルクシオンは、リオンの修羅場について考察する。

『状況は既に詰んでいます。マスターは、試合開始と同時にコーナ―に追い込まれているような状況です』

クレアーレも同意する。

『オセロなら、隅を四つとも奪われたような状態ね』

『よくもここまでの状況を作り出せたものです。感心しますね』

『あんた性格が悪いわね』

婚約者の留学先を訪ねてみたら、女がいてベビーベッドも部屋に用意されていた。

リビアとアンジェの状況は、逆に怒らない理由がない。

リオンでなくても詰んでしまう状況だった。

素早く状況を判断し、ルクシオンに助けを求めるリオンの判断は間違いではないだろう。

ただし……それをリビアとアンジェが納得するかは別問題だ。

クレアーレが心配する。

『これで婚約破棄になったらまずいんじゃないの？』

ルクシオンはしばらく間を開けてから、

『……その程度でマスターを見限るのなら、それまでということですよ』

『あんだ、やっぱり冷たいわね。あの二人を試しているの？』

リオンが言い訳をして怒られるということを繰り返す映像を見ながら、ルクシオンは小さく呟く。

『そもそも、マスターがヘタレで女に手を出せないのを二人が忘れていますね』

クレアーレが笑っていた。

『留学先で羽目を外していないか、心配していたのよ。あゝあ、二人が可哀想。でも、このまま状況を観察しましょう。だって 面

白いから!』

『あなたは壊れているのでは?』

人工知能同士の会話が続く。

幕間 苗木ちゃん宣伝する（後書き）

苗木ちゃんの後書きコーナー

（。。。）「わたいいゝ、わかつちやったのおゝ」

（。。。）「私の人気が出て、一巻がもつと売れたら……私の出番が増えるかも知れない、って。だって、普通に考えたら登場するのはもつと先よ。このままなんて耐えられない。みんなに、私のこと忘れられちゃう！」

（。。。）「私……人気者になりたい！ 書籍で特別なコーナーを作って貰って、このコーナーを書籍でも再現するの！ みんな、応援してくれるよね！」

（。。。）「だから、乙女ゲーはモブに厳しい世界です一巻を……買って。アンケートに苗木ちゃんのことを書くのよ。表裏のない可愛い子です、って」

（。。。）「私ってあつたまいいゝ！」

――（。）『ちよつと前まで私が人気だったのに……燃やしてえ』

――（。）『表も裏もなくただ酷いですね。灰にしましょう』

幕間 クレアーレさん頑張る（前書き）

活動報告よりこちらを読んで貰えそうなので、近況を報告します。

乙モブの五章はプロット完成、あとは細かい部分ですかね。更新は未定です。

新作はプロットを書いております。夏休み中には投下したいですね。

こんな感じです。

幕間 クレアーレさん頑張る

これはリビアとアンジエが、アルゼル共和国に向かう前の話だ。

リオンたちが留学し、学園が方針を変えて慌ただしい頃。

リビアは、入学した平民出身の学生を連れて学園の案内をしていた。

手には黒い綴じ込み表紙付きのファイルを持っていた。

両手で抱きしめながら、案内をしている。

リビアは緊張した様子だった。

「こ、こちらが校舎になっています。皆さんのクラスは、こちらの校舎で授業を受けることになりますね。基本的に教師が教室に来る形になります」

教師が持つ教室に移動するのではなく、教師が教室に来て授業をする。

高校形式の授業方法だった。

緊張したリビアに質問をするのは、髪を横に流したキザな生徒だった。

名前は【ピエール】だ。そう、ピエールだ。共和国のピエールと

は別人だ。

「質問を良いかな、先輩？」

「は、はい！」

「ありがとう。では」

後輩に対してリビアが緊張している理由は、彼らが同じ平民出身ではないからだ。

リビアが田舎の離島から出てきたのに対して、彼らは王都暮らしの豪商やらそれなりに裕福な家庭の出身だった。

「この後は暇かな？一緒に食事でもどうだい？」

キザなピエールの誘いに、リビアは引きつった笑みを浮かべていた。

「こ、婚約しているので無理です。ごめんなさい」

キザなピエールは残念そうにする。

「それは残念だ。婚約者がいるとは知らずに失礼したね」

ピエールの実家は貿易も行っている豪商の家だった。

そのため、学園が一般生徒を受け入れる際には、すぐに話がいった家でもある。

貴族とも付き合いのある豪商の家の出。

そして、年齢的にはリビアよりも年上だった。

集まった新人生たちが、年齢がバラバラなのは急に集めたからである。

周囲がクスクス笑っている中、ピエールは肩をすくめる。

そんな中、一人の青年がリビアを見ていた。

名前は【アーン】。

黒髪を後ろに流し、制服を着崩してどこか不良のような雰囲気を出していた。

「キザ野郎が。それにしても、婚約者か」

綴じ込み表紙を抱きしめているリビアの胸を見るアーンは、小さくニヤリと笑った。

「こんな面白そうな異世界に転生したんだ。少しくらい楽しみがあるってもいいよな」

リビアが説明を続ける。

「それでは、本日の案内はこれで終了です。今日はささやかですが、皆さんの歓迎会を行うので来てくださいね」

リビアが笑顔を見せると、アーンは「今晚が楽しみだ」と呟い

た。

そんなアーロンを、空から眺めていたのは　クレアーレの偵察ドローンだった。

『あら、早速マスターの不在を狙って、リビアに手を出す不埒者ふらちが現れたわね。寝取り、寝取られはNGよ。徹底的に潰さないと』

急に喋りはじめたクレアーレに驚くのは、本を読んでいたアンジエだった。

「急にどうした？」

『何でもないわ』

「そ、そうか。それなら、急に喋り出さないでくれ。こっちが驚いてしまう」

ルクシオンはもっと口数が少なかったのに、などとアンジエが呟く。

クレアーレがアンジエに疑問を投げかけた。

『それはそうと、リビアの婚約者がマスターだって知らない人が多い？　マスター、もしかして平民には無名なの？』

アンジエが本を閉じる。

「バタバタしている時期に婚約をしたからな。知らない者も多いだろうさ。それがどうした？」

「いえ、何でもないのよ。大丈夫。問題ないわ」

「そうか」

アンジェがまた読書をはじめる。

そして思い出したように、

「そうだ。今日はリビアの帰りが遅い。何も無いとは思うが、気にかけてやってくれ」

『オツケー』

嬉しそうにクルクルと回り始めるクレアーレだった。

夜。

歓迎会が開かれている居酒屋。

アーロンは酒をチビチビと飲みながら、リビアの様子を見ていた。周囲には同じように不良のような男子たちが集まっている。

「おい、アーロン、本当にやるのか？」

「婚約者がいるんだろ？」

そんな男子たちの言葉に、アーロンがニヤリと笑みを浮かべた。

「ば〜か。だから楽しいんだろうが。婚約者の涙ぐむ顔が拝めたら余計に楽しいぜ」

一人が心配そうに言う。

「相手は貴族だぞ」

しかし、アーロンは引かない。

「大量に処分された後だ。ビビって手出しなんか出来るかよ。それに、俺は冒険者として成功した粹で入ったんだ。腕っ節なら負けないぜ」

冒険者として一定の成果があるとして、アーロンは入学を認められていた。

将来的に騎士家くらいの地位は得られるとされている。

「女を俺の物に出来ればいいんだよ。貴族なんて、女に弱いんだからさ。まあ、楽しみにしてろ。お前らにも楽しませてやるからさ」

男子たちがニヤリと笑うと 声が聞こえてきた。

『残念、貴方たちは あ〜う〜と〜です〜』

アーロンが驚いて振り返ると、甘い香りがしたと思ったと同時に

急激に眠くなり意識を手放すのだった。

アーロンは最後に、青い一つ目を見た気がした。

居酒屋で幹事をしているリビアは忙しかった。

「みんな楽しんでくれているかな？」

テーブルを見ていると、一部で眠っている男子たちの姿があった。

起こしに行こうとすると、クレアーレが側に来る。

「アーレちゃん、来ていたの？」

『アンジエがリビアを心配して、私に見守るように言ったのよ』

「アンジエは少し心配しすぎですね」

困ったような、嬉しそうな顔をするリビアにクレアーレは『

そうね』とだけ答えると、

眠ってしまった男子たちに青い一つ目を向けた。

『それより、彼らを連れ帰ってあげましょうよ。実は近くのテーブルで飲んでいる人たちが、彼らと同じ男子寮を使っているのよ。運んで貰いましょう』

「だ、駄目だよ、アーレちゃん。最後まで面倒を見ないと」

自分たちで運ぼうとするとリビアに、クレアーレは笑うのだった。

『大丈夫よ。喜んで引き受けてくれるわ。むしろ、頼んでくれてありがとうって言うてくれるから』

クレアーレの言葉に従い、渋々と頼みに行くリビアだった。

言われたテーブルに向かえば、そこでは男子ばかりで集まって楽しそうにしていた。

リビアが声をかける。

「あ、あの」

男子たちが警戒したのか、急に黙ってほとんどが視線をそらしてきた。

だが、一人だけがリビアに鋭い視線を向けてくる。

「何か用？」

素っ気なさ過ぎる態度に不安になるも、リビアは自分たちのテーブルに視線を向けるのだった。

「実は男子が数人眠ってしまって。同じ男子寮を使われているとお聞きしたので」

そこまで言うと、男子たちが急に目を光らせた。

「何だ、そういうことか！」

「任せてよ。丁度、切り上げるところだったんだ」

「俺たちが運んでおくから安心して」

「こういうのは俺たちの仕事だな」

「ああ、そうだな！」

「安心して任せてくれ」

立ち上がって男子たち　アロンたちのところに向かうと、そのまま会計を済ませさっさと連れ去っていく。

リビアは安堵した。

「よかった。ちょっと怖かったけど、優しい人たちだったね、アレちゃん」

リビアの笑顔にクレアーレが言うのだ。

『ミッションコンプリート』

「アーレちゃん？」

『何でもないのよ。そう、何でもないの』

翌日。

男子寮の廊下を歩くのはキザなピエールだった。

「同室の男子が帰ってこなかったな。いったいどこにいったのか」

昨日の夜、歓迎会から戻ってきてても同室の男子がいなかった。

不思議に思いつつ、横に流した前髪を指で弄っているとアールンたちが前から歩いてくる。

三人とも、お尻をさすっていた。

「痛え　それに、何も覚えてないな」

「昨日はそんなに飲んだかな？」

「先輩たちの部屋で目を覚ましたのは驚いたな」

ピエールはそんなクラスメイトを見て、ちょっと驚いてしまった。

「君たち、大丈夫かい？」

アールンが髪をかく。

「何だ、キザ野郎か。昨日は飲み過ぎたみたいだ。何も覚えてないわ」

それを聞いて不思議に思う。

「そ、そう」

（あれ？　昨日はすぐに酔い潰れたと思っていたんだけど？
ん？）

男子寮の廊下。

窓に何か青い光を見たピエールは、そちらへと視線を向けたが何

もなかった。

（気のせいか）

アーロンがお尻をさすっている。

「それにしても尻が痛いな。昨日酔ってぶつけたらしいが、こんなに痛いものか？ それになんか違和感があるしょ」

三人はぶつくさと文句を言いながら、自室へと戻っていくのだった。

ピエールは、アーロンたちが来た方向を見る。

（まさかね）

自慢の前髪を手で払い上げ、そして自分も部屋に戻ることにした。

幕間 クレアーレさん頑張る（後書き）

クレアーレ（ ）『読者の心が綺麗か汚れているか 試される話ね』

苗木ちゃん（ ）。 （ ）？ 「 え？ 何があつたの？ ねえ、これって何の話？」

クレアーレ（ ）『優しい先輩が、ちょっと悪目の後輩の面倒を見た話よ。それ以上でも以下でもないわ。乙女ゲー世界はモブに厳しい世界です、は 全年齢対象の健全な作品です。一巻も発売中。みんな買つてね』

苗木ちゃん（ ）。 （ ）「よく分からないけど買つてね！ 買つて、私のことを宣伝してね！」

幕間 クレアーレさん頑張る その2（前書き）

近況報告です。

忙しくて更新できない。

以上です。

幕間 クレアーレさん頑張る その2

「くそっ どうしてだ」

アーロンがベッドの上で奥歯を噛みしめている。

上半身は裸で、下半身は布団に隠れている。

悔しさを滲ませるアーロン。

窓からは朝日が差し込み、コーヒークップを二つ持った先輩が部屋に入ってくる。

ここは先輩の部屋だ。

黒髪オールバックで、シャツのボタンを付けていない格好の先輩。

前が開いており、鍛えられた上半身が見えていた。

「また二日酔いか、アーロン」

「あ、ああ、悪いな、先輩」

飲みに行く度に酔い潰れてしまい、目を覚ますと決まって先輩の部屋にいる。

最初は怪しんだが、こうも続くと感覚が麻痺してそんなものかと受け入れていた。

いや、それよりもアーロンには気になることがあった。

「他人行儀はよしてくれ。ダリルと呼んでくれていいぜ。歳も近いんだからよ」

「悪いな、ダリル」

先輩だが、気さくな男にアーロンは警戒していた。

いや。

（くそ どうしてだ。どうして、胸がときめくんだ！）

リビアを狙っていたはずなのに、気が付けば酔い潰れていることが多くなった。酒に弱いのかと自信をなくし、今では女より男を目で追っている自分がいる。

アーロンはそんな自分が悔しかった。

ダリルからコーヒーを受け取り、飲むとおいしかった。

「うまいな」

「コーヒーには自信があるんだ」

ダリルがベッドに腰掛ける。

ダリルのベッドだからおかしくはない。

おかしくはないのだが アーロンは背筋に悪寒が走らないのに気が付いた。

（前はもつと警戒して、身の危険を感じていたのに！）

アーロンは自分の変化に戸惑っていた。

アンジェの部屋。

クレアーレは子機からの映像と音声を確認しつつ、満足そうに青い一つ目を縦に振っていた。

『素晴らしい結果ね。状況を作るだけでこんなにも簡単に惚れるなんて』

そんな危険な台詞を聞くのは、アンジェの部屋で着替えをしていたリビアだった。

「 アーレちゃん、何か変なことをしていませんか？」

『変なこと？ 失礼ね。動物実験をしているだけよ』

動物実験と聞いて、リビアが怒るのだった。

ただし、リビアは実験動物をマウスか何かだと思っているようである。

「十分に変なことです！ 一体何をしているのか教えなさい！」

クレアーレは呆れたように答えるのだった。

『何をしていると思っているの？ リビアが思っているようなことはしていないわよ』

「で、でも、惚れるとか、素晴らしい結果とか」

きっと注射器やら、解剖やら、そういった実験だと思っているのだろう。

クレアーレは本当に呆れるのだった。

『あのね、実験にも色々あるのよ。薬なんか使っていないわよ。今は、どんな状況なら愛が芽生えるのかを見ているだけよ』

「愛ですか？」

『そう、愛よ。好きでしょ、愛。私も大好きよ』

リビアが困惑している。

「愛を実験するなんていけないと思います。もっと愛は自然で何て言うか、惹かれ合うようなものだと思います」

『マスターと貴方たちみたいに？』

リビアが顔を赤くしていた。

「え、えっと はい」

『でも、マスターと接点がなければ 言い方を変えれば、状況が違えば愛が芽生えたか分からないわよね』

答えに困っているリビアに、クレアーレは優しく諭すのだった。

『大丈夫よ。愛とか言ったけど、もっと簡単に言えば仲良くする方法を調べているだけだから。ちょっとタイプの違う個体を、特定条件下に押し込んだら仲良く出来るか調べているの』

「そ、それなら問題ないのかな？ で、でも、やっぱり駄目です。アーレちゃん、時々怖い雰囲気を出していますから」

クレアーレが文句を言う。

『酷いわ。マスターならきつと喜んで賛成してくれたわ。むしろ、お前は甘いつて叱ってくれたかも知れないわ。いえ、もっとやれ、つて言ってくれたはずよ。それなのに リビアの馬鹿！ 分かんず屋！』

そう言って部屋から出て行くと、リビアが手を伸ばして追いかけてきた。

「アーレちゃん待って！」

廊下。

（こうしておけば、しばらくは罪悪感を抱えて私に優しくなるわね）

自身を探し回っているリビアを眺めつつ、クレアーレは身を隠しつつ今後について考えていた。

（凄いわ。女好きの男が、男にときめくようになるのに薬なんて必要ないのね。惚れ薬を用意するべきか悩んだけど、これには私もビツクリよ）

悪い子をお仕置きするつもりだった。

だが、その過程で薬の実験をすればはかどるのではないか？

そんなクレアーレの目的により、犠牲になった数名の男子たち。

クレアーレは、今日も楽しく学園で過ごしています。

幕間 クレアーレさん頑張る その2（後書き）

リオン（；。 ）「お前の中で俺の評価ってどうなってるの？
言わないよ。もっとやれとか、お前は甘いなんて言わないよ。むしろドン引きだよ」

クレアーレ（ ）『マスターはそんなことは言わないわ！ もつとやれって言うてくれたはずよ！』

リオン（#。 ）「言わねーよ！ あんな野郎はさっさと退学処分にして、社会的に潰してやれば終わりだろうが！ お前、悪質すぎるんだよ！ 俺でもそこまでするのはためらうわ！ 女好きを男好きにするとか、酷いにも程があるだろ！」

クレアーレ（ ）『そのためらいのなさ、素敵！』

ルクシオン（ ）『流石はマスターです。惚れ惚れするぐらいの外道ですね』

幕間 男子寮職員の日記（前書き）

幕間を一本用意しました。

本編の方はもうしばらくお待ちください。

今はきついです。

幕間 男子寮職員の日記

夏休み。

男子寮で働く職員の一人は日記を付けていた。

月×日。

学園は夏期休暇に入り、多くの生徒たちが帰省した。

普段の仕事が減ったのは嬉しいが、全員が帰省するわけではない。

実家に帰れない生徒も毎年存在する。

だが、今年は特に多い。

それよりも、また外道 違った。

バルトファルト伯爵が何かやったらしい。

留学先の国で暴れ回ったと聞いたが、あの人は本当に何をしているのだろうか？

噂ではアルゼル共和国に喧嘩を売ったらしいが、誰か嘘だと言ってくれ。

伯爵と親しい貴族様たちがアルゼル共和国に向かったとも聞いた。

もう、あの人はどこに行っても何かする。

出来れば戻ってきて欲しくないが、最近は男子寮の様子がおかしい。

特待生が多く入学した影響だろうか？

時折、丸い球体が浮かんでいるという連絡を受ける。

同僚たちも、夜中に青い一つ目を見たとき騒いでいた。

止めてくれ。

俺は怖がりなんだ。

今度の夜勤の見回りは誰かに変わって欲しい。

月 日。

最悪だ。

夜の見回りで青い一つ目を見てしまった。

窓の向こうを覗いたら、反対側の建物の廊下を浮かんでいるように移動していた。

同僚も見ただけが増えている。

本気で神殿に頼んでお祓いをしてもらうべきだろうか？

みんなでお金を出し合う話が出ているが、これは学園にも報告するべきかもしれない。

それはそうと、何だか残った生徒たちが騒がしい。

アルゼル共和国と戦争にならなくて良かったと思っていたら、男子寮の幽霊騒ぎだ。

出来れば生徒さんたちには静かにして欲しい。

月 日。

最悪だ。

夜の見回りで、男子寮にいないはずの女子を見た。

潜り込んだなんてあり得ない。

女子寮の方では、その日に抜け出した女子なんていないと言っていた。

それに、俺が見た女子生徒は学園に該当者がいなかった。

似たような女子生徒はいるが、帰省中で学園にはいないらしい。

では、俺が見た女子生徒は誰だったのか？

本当に勘弁してくれ。

少し背が高く、長い髪をしたスレンダーな女子生徒だった。

もしかして、男子寮に残った生徒が外から女を呼んだのだろうか？

だが、それなら制服姿はおかしい。

くそ　この男子寮、呪われているのか？

月　日。

俺はおかしくなったのかもしれない。

朝方の話だ。

掃除をしていた俺は生徒さんに声をかけられた。

だが、その相手がおかしい。

女子生徒だったのだ。

男子トイレを清掃中に、女子生徒が俺に挨拶してきたのだ！

きっと疲れているんだ。

最近、アルゼル共和国から多額の賠償金を得たという噂が聞こえ

てくる。

バルトファルト伯爵が共和国で暴れ回ったらしい。

あの人、外国で一体何をやっているんだ？

一歩間違えば、共和国と全面戦争だったのに。

正直、留学してくれて助かったと思っていたが、これなら学園にいる方がマシなのではないだろうか？

だが、あの人がいると何故か問題が起きる気がする。

それよりも、あの女子生徒だ。

女子が嫌いな男子生徒と一緒に歩いていたように思うが、俺の気のせいなのだろうか？

月 日。

もう嫌だ。

今日、男子寮に女子生徒がいると思って注意をしたんだ。

普段女子には興味もないグループがその女子を囲んでおり、異様な盛り上がりを見せていた。

不思議に思ったが、規則なので注意をしたんだ。

そしたら。

「俺、アーロンだけど」

だつてさ。

ふざけるなよ。

普通にちよつと可愛いと思つたのに！

男つて何だよ！

しかもアーロンつて 今年入学した特待生じゃないか。

以前はもっと不良というか、少し怖い感じだったのに。

周囲の男子たちはアーロンを囲んで盛り上がっているし、聞けば夜中に女装をして歩くのが趣味になったとか何とか お前かよ！

男子寮に出る女子の幽霊の正体が、まさかの女装男子だ。

可愛かつたのが余計に腹立つ。

職員さんも一緒に、とか誘うな。

俺はお前らと違ってノーマルだ！

月 日。

ノーマルって何だ？

ここ数日、俺はおかしくなったのかもしれない。

毎回おかしくなったのかもしれないと書いているが、今日の出来事はショックだった。

あのアーロンが。

あの悪ぶったアーロンが 可愛く見えた。

下手な女子生徒よりもお淑やかとか、お前は一体どこに向かって
いるんだ？

それに、何やら化粧や美容に関することを勉強しているらしい。

男子だから男子寮から追い出せないのも問題だ。

残った男子生徒の多くが、アーロンに夢中になっている。

気持ちに分かる。

痛いほど分かる。

今まで酷すぎた女子生徒と比べれば、今のアーロンは理想の女子
だ。

男だけだな。

もう、性別以外はパーフェクトで、ノーマルの男子たちが「アロンでよくね？」何て言っていた。

目を覚ませ。お願いだ、そっちにいかないでくれ！

俺も揺らいでしまいそうだ。

月 日。

今日はみんなでアロンの愛称を考えた！

少し前まで男だ、女だと小さいことに捕らわれていたのが馬鹿らしい。

さて、アロンの愛称だ。

いつまでも可愛い姿でアロンはいけない。

みんなで考えた結果 「アーレ」という愛称に落ち着いた。

アロン。 アーレちゃんも感謝していた。

「みんなありがとう」

あの笑顔は眩しかった。

学園の職員になって十年になるが、あんなに可愛い女子が男とか

あり得ない。

いや、むしろ女でないからあの可愛さなのだろう。

周囲ではアルゼル共和国で色々あったらしいが、俺たちにとって大事なのはアーレちゃんの愛称だ。

そんな周囲の雑音は無視だ！

また伯爵が何かやったらしいが、そんなのは関係ない。

大事なのは今、この瞬間だ！

月 日。

職場を異動になった。

男子生徒たちと仲良くしすぎたのが問題らしい。

もうアーレちゃんに会えないと思うと、何もする気が起きない。

上司にそう報告したら、

「だから配置換えしたんだよ」

と、凄く冷たい目で見られた。

意味が分からない。

幕間 男子寮職員の日記（後書き）

クレアーレ（；）「私の愛称とかぶっただと？」

ルクシオン（ ）「 気になるのはそこですか？ もっと重要な情報があったように思うのですが？」

苗木ちゃん（。。。）？「え、何かおかしいの？」

苗木ちゃん（。。。）？「……？」

苗木ちゃん（。。。）「まあ、どうでもいいわ。それよりも宣伝よ。乙女ゲーはモブに厳しい世界ですー巻は好評発売中！ セブンスは七巻が好評発売中よ。それになんと！ セブンスは一巻から七巻まで待望の電子書籍になりました！ モブセか一巻はもとから電子書籍も発売中だけどね。みんな買ってね！」

苗木ちゃん（*´、）「いっぱい売れたら私のおかげね」

幕間 アインホルン級二番艦 リコルヌ（前書き）

現在五章は序盤を書いている途中です。

10月には更新する予定です。

幕間 アインホルン級二番艦 リコルヌ

アルゼル共和国の領空。

アインホルン級二番艦リコルヌの甲板から、アンジェとリビアは聖樹を見ていた。

「噂には聞いていたが、実際に見ると大きいな。これが聖樹か」

「本で読みましたけど、挿絵は誇張されていると思ったのに実物の方が凄いなんて」

それぞれ、聖樹に対して感想を口に出している。

白い船体のリコルヌは、アインホルンと同様に一本角が船首にある。

その形はアインホルンと同じで色違いだ。

周囲には同じ工場で生産された飛行船が並んでいる。

バルトファルト家の工場で建造されたので似ていた。

二人の側に控えているのは、アンジェやリビアの世話をするメイドのまとめ役。

眼鏡をかけた黒髪の女性は、身乗り出したアンジェに注意をする。

「アンジェリカ様、はしたないですよ」

「許せ。もうすぐリオンに会えると思うと嬉しくてはしゃいでしまった」

久しぶりにリオンと会える。

アンジェもリビアも楽しみだった。

リビアは風で乱れる髪を手で押さえながら、

「意外と到着は早かったですね。結構近いんですね」

そんな感想を抱いた。

アンジェがリビアの感想を訂正する。

「速度が出る飛行船を揃えたからな。それにしても、リコル又は凄いな。揺れも少ない上に船内の生活も快適だった。さすがにパートナーには劣るが」

その言葉に反論するのは、二人の側で転がっていたクレアーレだった。

『ちょっと酷くない？』

クレアーレは二人の視線の高さまで浮かび上がった。

『小型化、高性能化を目指したのよ。パートナーにだって負けない

んだから。それに、二番艦だから、一番艦よりも性能は向上しているわ。』

クレアーレの言葉にアンジェが謝罪をする。

「分かったからそんなに近付くな」

リビアがリコルヌの外装を見ながら、

「リオンさんのアインホルンと同型ですよね？ 結構な値段がするんじゃないですか？」

すると、クレアーレが自慢げに説明する。

『特注品よ。同じものを用意しろ、って言われても無理ね。マスターの命令がなければ作れないわ。まあ、この子はあるひねくれ者が残したアインホルンの予備パーツを使って勝手に建造したけどね』

リオンやルクシオンが聞けば怒るだろうが、アンジェやリビアのためだと言えば乗り切れるとクレアーレは計算していた。

クレアーレが一つ目を真上に向けた。

『それよりも共和国の飛行船が近付いているわ。真上から来るなんて失礼しちゃうわね』

アンジェが鋭い目つきで真上を見た。

「共和国の臨検か。やり方が横暴とは聞いているが」

メイド長がアンジエに、

「抗議しますか？」

アンジエが頷いた。

「使節団の立場もあるからな。強めの抗議をしておこう。リオンに連絡できるといいんだが」

すると、リビアが共和国の飛行船の動きが変わったことに気が付いた。

「あれ？ どうやら離れていきますよ」

「何？」

共和国の飛行船 警備隊は混乱していた。

「ふ、ふざけるな！ 何であの船があるんだ！」

「隊長、落ち着いてください！」

艦橋で慌てている警備隊の隊長は、これから臨検しようと思っていた飛行船がアインホルンと同型艦であるのに気が付いて混乱していた。

アインホルン 共和国で暴れ回った最悪の飛行船。

それと同型艦があるなど聞いていなかった。

「形が似ているだけです！ あのような飛行船が何隻もあるなど考えられません」

部下の言葉に隊長が激怒する。

「一隻あるなら、二隻目があってもおかしくないだろうが！ アレが似ているだけ？ 同じような飛行船が何隻も側にいるじゃないか！ や、奴ら もしや、アレを量産したのか？」

共和国のプライドを叩き折ったアインホルンと同型。

そして、よく似た形状の飛行船が沢山。

隊長は悪夢でも見ているような気分だった。

「臨検は中止する」

「隊長、それでは王国に舐められます！」

「ならお前がやれ！ 私は絶対に嫌だぞ。絶対だ！」

この警備隊長 港でアインホルンに乗っていた飛行船を沈められていた。

抵抗しても無意味。

あまりの性能の前に、共和国の船乗りとしてのプライドやら色々へし折れていた。

部下はその時に陸にいたので、アインホルンの強さを知らない。

説明は聞いているだろうが、自分の目で見ていないのだ。

すると、双眼鏡でリコルヌを見ていた部下の一人が叫んだ。

「隊長！ 奴ら、陣形を取り始めました！」

隊長は青い顔をして、そして泡を吹いて気絶してしまった。

使節団を率いている代表は リオンの兄であるニックスだった。

正確には、リオンの知り合いたちが多い一団だ。

まとめ役をやらされているに過ぎない。

艦橋で艦長と話をしているニックスは 。

「共和国に入るし、整列しておくか。移動中に訓練していて良かったな」

艦長は笑っている。

「造りが似ているおかげですかね。速度を合わせるのが楽で良いですよ」

「うちの工場で作ったからかな？ リオンの奴、色々と考えていた

のか？」

「リオン坊ちゃん　いえ、伯爵は意外と凄い方ですね」

地元では微妙なりオンの評価　理由は、浮島を出るまでは良くも悪くも男爵家の三男坊に過ぎなかったためだ。

いきなり伯爵になったと言われても、地元の人間も理解が追いつかない。

ほとんど一年で男爵から伯爵にまで昇進したのだ。

周囲の人間も首をかしげている。

「俺の胃痛のことも考えて優しくして欲しいよ。さて、使節団だし格好をつけておくか。ほら、整列」

艦橋が慌ただしく指示を出していく。

周囲の飛行船がリコルヌを中心に陣形を組み始めると、港を出入りしている飛行船が避けていく。

慌ただしく港へと案内する小型の飛行船が飛んできて、使節団を誘導するのだった。

「お、聞いていたよりも対応良くない？」

ニックスがそう言うと、艦長も同意する。

「上から押さえつけるように臨検してくると聞いていましたけど、

やっぱりただの噂だったんですね。真上に来た警備隊の飛行船も、きっと何かの手違いでしょう」

リオンからの手紙で、共和国は感じ悪いと知らされていたニックスが肩をすくめる。

「リオンの奴が感じ悪いって言うていたけど、きっとあいつが何かやったんだろ。会ったときにでも確認しておくか」

「暴れ回ったと聞いていますが、大丈夫なんでしょうか？ 戦争になりますかね？」

心配する艦長にニックスが言う。

「ないとは思うけど、あいつのことだからなあ その辺りのこともしっかり聞いておくか」

ニックスは思う。

（弟に振り回される兄貴って情けないな。もっとしっかりしないと）

弟の方が出世もして、婚約者が二人もいて 普通なら嫉妬してもおかしくないが、ニックスから見てもリオンは嫉妬の対象ではなかった。

何故か？

（それよりせっかく外国に来たし、観光でもしていくか。親父やお袋、それにコリンにもお土産を買わないと）

今が幸せだからだ。

むしろ、リオンの方が羨むような暮らしをしているのがニックスだった。

幕間 アイソホルン級二番艦 リコルヌ(後書き)

苗木ちゃん(。。)「聞いて！ 凄いの。ビックニュースなの！
実は」

() ; yll () . . ターン「ふびやほい！」

() 「……」

() 「お前は知りすぎたのよ」

プロローグ

生まれ変わったら　　今度は望む人生を歩みたい。

アルゼル共和国。

聖樹^{せいじゅ}の根が複雑に絡み出来上がったダンジョンに、一人の青年が挑んでいた。

手櫛^{てくし}で後ろに流した黒髪。

健康的に焼けた褐色の肌。

背も高く、筋肉のついた体。

青年の雰囲気は荒々しかった。

木の根をよじ登り、見えてきた景色に青年は笑みを浮かべていた。

その青年はラウルト家の次期当主　　跡取りだった。

名前を「セルジュ・サラ・ラウルト」。

七つの国が一つになったアルゼル共和国で、その一角を担うラウルト家の人間だ。

議長代理を務めているアルベルクの息子でもある。

「見つけた。レリア、感謝するぜ」

頬を伝った汗を拭いながら、お礼を口にした相手はレリアだった。共和国に生まれた転生者同士、レリアとセルジュは友人同士だった。

同じ元日本人という共通点が、二人を親しくさせた。

ただ、リオンと同じ男性の転生者だが　セルジュはあの乙女ゲーのことを知らなかった。

何も知らない状態で転生したセルジュにとって、この世界は純粋な剣と魔法のファンタジー世界だ。

飛行船が存在し、鎧というパワードスーツが存在している異世界。

セルジュにとっては、ゲーム云々という話は興味がない。

興味があるのは、目の前に広がる光景だけだ。

緑がかった青色の金属で出来た船体が、聖樹の根に絡まっていた。

とても大きな飛行船は、古代の飛行船　宇宙船である。

角張った形をしており、とても大きな宇宙船を前にしてセルジュは両手を広げる。

「これぞ冒険の醍醐味^{だいごみ}ってな！」

セルジュという人間を語るとしたら、簡単に言ってしまうバリオンとは真逆の人間だった。

生活に困っているわけでも、家族に問題を抱えているわけでもない。

それでもセルジュは冒険し、あの乙女ゲーで言うところの“課金アイテム”を回収しに来ている。

リオンが受動的なら、セルジュは能動的。

同じ男性。同じ転生者。なのに、二人の性格は違いすぎていた。

セルジュは周囲に集まってくるモンスターたちを見る。

背負った槍を手に持ち構えると、そのまま豪快に戦いはじめた。

槍を振り回し、モンスターたちを次々に倒していく。

「おら、どんどん来いよ！」

持って生まれた才能と、次期当主として鍛えられたこともありセルジュは純粹に強かった。

そして、強くなるのを楽しんでいた。

モンスターたちを蹴散らし、宇宙船にまで近付くとドアを探す。

見つけると、レリアから聞いた話を書き込んだメモを取り出し、暗証番号をドア横にある操作パネルに打ち込む。

戦いで傷つき、血がドアを開けるためにパネルに付着した。

「お、開いたな」

ドアが開くと中へと入る。

艦内は綺麗だった。

「もっとボロボロなのかと思ったが、意外に綺麗だな」

入ってきたセルジュに、声かけられる。

『驚きましたね。貴方からは旧人類の遺伝子が検出されました』

「誰だ！」

槍を構えたセルジュに、声の主は挨拶をするのだった。

『警戒しないでください。私はこの輸送艦の制御をしている人工知能です。本来であれば、貴方を排除したいところなのですが、貴方さえ良ければ、私のマスターになりますか？』

「マスター？」

怪しむセルジュに声　電子音声回答了。

『この輸送艦の所有者になりませんか？別に深い意味はないのです。ただ、私は新人類に使われるくらいなら、旧人類の子孫である貴方に使われたい』

セルジュが首をかしげていた。

「旧人類とか、新人類とか知らないが、訳ありってやつか？ お前、俺が何を目標にしているか知っているのか？」

『存じ上げません。 お聞きしても？』

セルジュは槍の石突きで床を叩くと、仁王立ちになって答えた。

「この国を一つにまとめる！ 男なら天下統一くらいの夢を見ないとない！」

電子音声はしばらく間を開け　そして、興味深そうな声を出していた。

『それが事実なら大変面白い。 制御室へ案内いたします。 そこでマスター登録をしてください』

「呆れると思ったのに乗り気だな。 知り合いなんか、馬鹿にした顔をしたのによ」

『私がいれば、その程度の夢は叶うでしょう。 新人類も随分と弱体化していますし、敵は少ないと思われます』

「そいつは結構だな。 なら、お前」

『イデアル』

「あ？」

『私の名前です。自分で付けました』

「イデアル　理想とか、そんな意味だったか？」

『ご存じでしたか』

「ゲームとか漫画で読んだ気がする」

セルジュの知識は、その辺りから手に入れた物が多い。

真面目に勉強をしてきたタイプではない。

『ゲーム、漫画？』

「歩きながら話してやるよ。俺の生い立ちっていつの？　いや、前世から話した方が早そうだな」

セルジュは、イデアルが馬鹿にすると感じていたが反応は違った。

『輪廻転生　面白いですね』

「馬鹿にしないのか？　お前も面白い奴だな」

『どうやら、長い時を経て、ようやく私は素晴らしいマスターを手に入れることが出来たようです。お名前をお聞かせください』

「セルジュだ。それでも、こっちの世界では貴族様だぜ」

『支配階級の方でしたか。少々意外ですね。共和国の支配階級の者

「私たちは、冒険者というのを嫌っていると聞いていたのですが」

「どこで聞いていたのか？」

セルジュは深く聞かなかった。

「おかげで変わり者扱いだ」

こうして、セルジュとイデアルは出会ったのだった。

夏休み。

皆さんいかがお過ごしでしょうか？

故郷を離れ、遠い異国の地に留学している俺【リオン・フォウ・バルトファルト】は、ちょっと内気で心優しい青年だ。

控えめな性格が表れた外見をしており、黒髪黒目であまり目立たない。

そんな俺は、床に正座している。

両頬を赤く張らし、俯いて嵐が過ぎ去るのを待っていた。

聞こえてくるのは、メタリックカラーの球体ボディに赤い一つ目の相棒であるルクシオンの声だ。

「と、という理由でマスターがノエルを匿っていたのです。メー

ルにて書かれていたノエルという犬は、別で存在していました。映像データを確認しますか？』

理路整然りろせいぜんと話を進めるルクシオンに、困惑しているのは俺の婚約者たちだ。

そう“たち” 俺には二人も婚約者がいる。

それなのに、留学先で女を家に連れ込み 二人に見つかってしまった。

言い訳できないこの状況。

今の俺は何も言う資格がない。

というか、これで信じてとか言えない状況だ。

逆の立場だったら俺なら許さない。

浮気現場を見て泣いて逃げるね。

そのまま彼女と別れるわ。

情けない？ ああ、そうさ。俺は情けないよ。

綺麗な金髪をアップでまとめたアンジエは、赤い瞳が狼狽ろうたいえていた。俺とルクシオンの間を、交互に視線を行き来させている。

「ほ、本当だろうな？ 何もなかったと言えるのだろうな？」

俺は頷くだけだ。

ルクシオンが俺を庇う。

『信じていただきたいですね。そもそも、マスターがヘタレなのは
お二人なら嫌というほどに理解しているはず。留学先で女を作るな
んて器用な真似は、マスターには出来ません』

あれ？ 俺をフォローしているはずなのに、けな貶しているように聞
こえるのは気のせいだろうか？

亜麻色の髪に、青い瞳という素朴な感じの美少女 リビアが、
悲しそうな目をしている。そんな目で俺を見るな！

悪いことはしていないのに、謝りたくなるだろうが。

嘘ですごめんなさい。

謝罪するのでそんな目で見ないで。

「ごめんなさい」

土下座をしている俺に、リビアが涙声で返事をしてくる。

「私の方こそ、平手打ちをしてごめんなさい。リオンさん、も
う立ってください」

アンジエも俺の腕を掴み立たせようとする。

「悪かった。頭に血が上っていた。ほら、立て」

俺はグスグスと鼻をすすり、立とうとするのだが立ち上がれない。

「脚が痺れて立てない」

すると、室内にいるもう一人の女性　【ノエル・ベルトレ】が椅子を持って来てくれた。

姉貴さん　空気がまた悪くなっています。

「座って」

「ど、どうも」

痺れる足を引きずって椅子に座れば、ノエルさんを二人が睨み付けていた。

修羅場の様子を見に来た兄のニックスが、少し震えている。

「お前は本当に馬鹿だな」

黙れ。兄貴にもいつか修羅場をプレゼントしてやる。絶対だ！

アンジェが腰に手を当てながら、ノエルさんに質問をするのだった。

「ルクシオン、この女が？」

『はい。聖樹の苗木の巫女です』

先程説明したのは、ノエルさんが聖樹の苗木 トイレットパー
パーよりも役に立たない苗木に、巫女として選ばれたという説明だ。

こいつ、ノエルさんを見て二人が激怒しているときに紋章を光ら
せやがった。

最悪だったよ。

俺の右手の甲と、ノエルさんの右手の甲に、同じような紋章が浮
かび上がり光るのだ。

それを見た二人が更に激怒して大変だった。

ノエルさんが頭を下げて挨拶をする。

「えっと、はじめまして。ノエル・ベルトレです」

ふわりと膨らむツインテール。

金髪にピンク色が混ざった髪がそう見せるのか、どうにもギャル
っぽく見える女子だ。

「レスピナス家の生き残りだな。よく生きていたと言っべきか
？」

アンジエはアルゼル共和国で起きた事件を知っていた。

ただ、詳しい内容までは知らなかった。

リビアが困っている。

責めたいが、ノエルさんの生い立ちを聞いて同情しているのだから。

優しい子だ。

「リオンさんが貴女を匿った理由は分かりました。でも、もう少しだけ考えてください。婚約者がいる男性の家に同棲するなんて」

アンジエも同意している。

「そうだな。屋敷ならともかく、この家では問題がある」

すると、リビアも俺も首をかしげた。

「アンジエ、屋敷でも駄目では？」

「屋敷なら許されたの？」

俺のそんな言葉に、リビアが冷たい視線を向けてくるので目をそらした。

「何を言っている？ 屋敷は自室以外なら公の場だぞ」

リビアが困っていた。

俺に助けを求めてくる。

「そう、なんですか？」

「いや、俺も知らない」

兄貴が肩をすくめていた。

「うちは貴族と言っても末端みたいな家だし、屋敷も小さかったからそういう意識はないんだよね」

アンジェがソレを聞いて少し恥ずかしそうにしていた。

「そ、そうか。それはすまなかった。だが、リオンは伯爵だ。共和国も、それに大使館も何を考えてこんな小さな家に押し込めているのか」

俺は引越してきたというか、戻ってきた家を見る。

一人で住むには大きな三階建ての家だ。

結構広い。

やっぱり、公爵令嬢は本物のお嬢様だな。

価値観が違った。

ルクシオンがアンジェに事情を説明している。

『用意された屋敷は、襲撃を受けて燃えてしまいましたからね。新たに用意するにも時間がかかるため、こちらに戻ってきたのです』

「最初にここを選んだ大使館の役人共は馬鹿なのか？」

『仕方がありません。ユリウス一行を優先したのでしょう』

一緒に留学してきたマリエと愉快的仲間たち。

あいつらは割と大きな屋敷に住んでいる。

それなのに、まったく幸せそうに見えないけどね。

ノエルさんが俯いていた。

「ごめん。あまりリオンを怒らないで。あたしがいけないのよ。優しくしてくれたリオンに甘えたから」

助けた俺の心にダメージが入る。

もう、見ていて可哀想で、助けなければいけないと。

『マスター、聖樹の苗木から精神干渉を受けていますよ』

「何!？」

テーブルの上に置いた聖樹の苗木が光っていた。

この野郎 俺に一体何をした！

痺れて動けない俺の代わりに、アンジェが右手に炎を出現させる。

「これがリオンを惑わしているのか」

リビアもピリピリしていた。

いや、本当に周囲に電気というか紫電がバチバチいつていた。

以前よりも魔法の扱いが上達しているようだ。

「これさえなければ」

そんな二人の前に飛び出して、両手を広げるのはノエルだ。

「ま、待つて！ この子に酷いことをしないで。この子、あたしが悲しんでいるのをリオンに伝えたかっただけよ。あたしが巫女で、リオンはこの子の守護者だから守って欲しいって」

全員の視線がルクシオンに集まる。

『それも一種の精神干渉ですよ。ただ、悪意がないのは事実です』

アンジエもリビアも魔法を消す。

「厄介なものを手に入れてしまったな」

「えっと、アルゼルの人たちに返せばいいんでしょうか？」

リビアの提案は却下だ。

そもそも、苗木はアルゼル共和国では育たない。

枯れてしまうのだ。

ルクシオンがアンジエを見る。

『ホルファート王国へ持ち帰るのがよろしいかと』

アンジエが頷く。

「そうだな。それが私たちにとっての最善だ。それから　リオン、お前はこの女を娶るつもりがあるか？」

「ふえ！？」

アンジエの言葉に俺は椅子から転げ落ちるのだった。

「何て変な声を出すんだよ。というか、今のお前は情けないぞ」

兄貴にダメ出しされてしまった。

姉御

リオンが修羅場に遭遇していた頃。

マリエ　前世のリオンの妹にして、逆ハーレムを完成させた悪女は困り果てていた。

屋敷の玄関。

そこには、土下座をしているエリクの姿があった。

赤髪的美青年は、マリエと同じ学生だ。

同級生で、ミディアムの髪がツンツンしている赤毛をしている。

ノエルに異様に執着し、リオンの屋敷を襲撃して廃嫡された男でもある。

そんな男子を前にして、マリエは引きつった顔をしていた。

（これ、どついつことよおおお！）

マリエもマリエで、修羅場だった。

エリク　【エリク・レタ・バリエル】は声を張り上げていた。

「貴女に惚れました。俺を　貴女の側に置いてください！」

そんなことを言うエリクだが、元は大貴族のお坊ちゃまだ。

アルゼル共和国を代表する七大貴族　今は六大貴族の一角であるバリエル家の元跡取り息子が、マリエに土下座をして側に置いて欲しいと頼み込んでいる。

以前はノエルに執着していたエリクが、今はマリエに執着していた。

マリエはエリクの熱意に引いている。

（こいつがなんで私の方に来るのよ！　私はイベントなんて起こしていいわ。そもそも、あんたの相手は私じゃないのよ！）

あの乙女ゲーの攻略対象であるエリクは、本来なら二作目の主人公であるノエルと結ばれるべき存在だ。

結ばれなければ世界が危ない。

マリエに惚れてしまったエリクを囲んでいるのは、五色の髪色をした　ユリウスたちだった。

「少し前まで違う女を愛していると言っておいて、マリエに乗り換えるとはいい度胸だ」

五人が五人とも怒っている。

「教育が必要ですな」

静かに怒っているジルク。

「お前に怪我させられたことは忘れていないからな」

エリクと戦い怪我をしたグレッグは、指を鳴らして威嚇している。

「覚悟は出来ているんだろうな？ 私たちのマリエに近付くなどただでは帰さないぞ」

同じく、怪我をさせられたクリスは木刀を肩に担いでいた。

「僕たちが君たちをどう思っているか分かっているのかな？ 散々やらかしておいて、虫が良すぎるよね」

エリクにはないが、同じ共和国の貴族に大怪我をさせられたブラッドも本気で怒っていた。

そんな五人を前にして、エリクは太々しい態度を見せている。

「お前らには関係ない。俺はマリエさん いや、姉御の生き様に惚れたんだ。姉御、俺を側に置いてください！」

まさかの姉御呼び。

マリエは頭を抱えなくなった。

（何なのよ、この状況はああ！ 助けて、おにいちゃあああん！）

イケメンを脅したら、舎弟にしてくれとやって来た。

マリエは心の中でリオンに助けを求める。

その後ろでは、カイルが肩を落としていた。

「また面倒を見ないといけない人が増えますね」

カーラも同意している。

「五人だけでも大変なのに、また人が増えるなんて」

ホルファート王国の使節団と一緒にやって来た使用人もいるが、面倒ごとが増えることに変わりはない。

マリエはエリクに言う。

「家に帰りなさい」

エリクは答えるのだが。

「もう、帰る家ありません」

俯き、実家を追い出されるように出てきたとマリエに説明する。

ピエールの一件から慌ただしくなったホルファート王国と、アルゼル共和国の関係。

ようやく交渉がまとまりかけたところで、エリクがリオンを襲撃してしまい面倒なことになってしまった。

エリクは廃嫡。

バリエル家に戻っても、明るい未来はない。

それに気が付いてしまったマリエは、内心で　。

（捨てられた子犬みたいな顔をするなああ！　私が悪いみたいじゃない。くそっ！　ここで追い出しても気分が悪いし、兄貴に押しつけようにも　）

今はアンジェたちがリオンの側にいる。

アンジェから婚約者であるユリウスを奪った過去もあり、マリエはリオンに助けを求められない。

アンジェと出会うのが怖かった。

ユリウスがマリエに助言する。

「大使館を通して共和国に抗議をしよう。マリエ、お前が気にすることじゃない」

正しい対応だ。

だが、マリエは駄目な五人組の面倒を見るくらいには、情もある女性だった。

「お客様じゃないのよ。住み込みで働くなら認めてあげるわ」

「マリエ！」

「いいのよ。その代わり、泣き言なんか口にしたら叩き出すからね」

ユリウスがマリエを止めようとするが、エリクは笑顔になった。

「はい、姉御！ 俺、一生懸命頑張ります！」

何もかも失ってしまったエリクは、こうしてマリエの所で世話になるのだった。

リオンの家。

リビアはアンジェの言葉に混乱していた。

「アンジェ、リオンさんにノエルさんと結婚しろ、なんてですか？」
本気

リオンも放心状態だ。

まさか、結婚しろと言われると思わなかったのだろう。

だが、ルクシオンだけは納得している。

『 聖樹が与える利益を優先ですか。正しい判断ですね 』

「皮肉か？ だが、それだけの価値はある」

アルゼル共和国を支えてきた聖樹。

その力が手に入るのなら、アンジェはノエルを受け入れると言っ

た。

リビアが止める。

「待ってください。お互いの気持ちはどうするんですか？ それに、アンジェはそれでいいんですか！？」

自分の婚約者に他の女を近付ける。

どう考えても異常だった。

ノエルも驚いていた。

「それっておかしいわよ。あんたたち、婚約しているのよね？」

聖樹の苗木が入ったケースを抱きしめ、オロオロとしている。

「将来的なエネルギー問題が解決できるのなら安いものだ」

リビアはすぐに反論する。

「け、けど、すぐには聖樹のようなことはしてくれない、ってルク君が言っていましたよ」

聖樹の苗木。

まだ苗木であるため、今の聖樹と同じ事は出来ない。

魔石を大量に用意することも、宝玉を生み出すことも
加護すらも、聖樹と同等レベルの恩恵を与えられない。

ルクシオンが補足する。

『現状の聖樹と同じレベルで恩恵を受けられるようになるには、最短でも三百年はかかると判断します』

それを聞いても、アンジエは動じなかった。

「時間はかかるだろうな。だが、将来のホルファート王国　いや、私たちの子孫の宝になる。未来への財産だ。是が非でも欲しい」

リビアは両手を握りしめ俯いてしまう。

「そんなの　間違っています」

リビアの言葉にアンジエは同意するが、少しだけ悲しそうだった。

「　私もそう思うよ」

夜。

アンジエに呼び出された俺は、二人きりで話をする事になった。

今はルクシオンも側にいない。

あいつは、クレアーレと一緒に何か仕事をするらしい。

部屋の中で俺は、アンジエに昼間のことについて尋ねた。

「結婚しろって本気？」

アンジェは少し困ったように笑い、視線を俺から外していた。

「怒ったか？　だが、それだけ魅力的な話だ。聞けば巫女の一族としてレスピナス家は存在していた。ならば、巫女という役割に適性がある血筋ということになる。聖樹の苗木だけでは片手落ちだ」

ルクシオンの話を聞いて、将来のためになると判断した。

そのためには、ノエルの力や血筋が必要と判断したのだろう。

聖樹が魅力的なのは分かる。

実際、アルゼル共和国は聖樹の力で繁栄してきた。

ホルファート王国だって、手に入るなら聖樹が欲しい。

分かっているが　。

「リオン、私やお前は貴族だ。国のため、領地のため、領民のため私たちには将来への責任がある。だからこそ貴族だ」

将来のために我慢しろと言っている。

婚約者にこんなことを言われるとは思わなかった。

俺、実はあまり好かれていないのか？

不安になっていると、アンジエが視線を下げた。

「ノエルが嫌いか？」

「嫌いじゃないけど、結婚は違うと思う」

「婚姻はもつとも分かりやすい結びつきだ。それに、他の家や男に渡すことは出来ない。そもそも、お前のもとでなければ苗木は枯れてしまうのだろう？」

ルクシオンが管理してどうにか、という感じた。

余所に放り出して育つかは分からない。

育ちそうな気もするが、管理するとなると別問題だ。

あの苗木、また勝手に面倒な人間を守護者に選ぶかもしれない。

持ち帰り、ホルファート王国の誰かに苗木とノエルを奪われでもしたら　また面倒なことになる。

だが、それでも聖樹は欲しい。

アンジエの考えも間違っではない。

個人的な考えを無視すれば、だが。

「俺には三人と結婚なんて無理だよ」

俺が泣き言を口にする、アンジエは俺に笑顔を向けてくれる。

「分かっている。ノエルとリビアを気にかけてやれ。私は 二人のついででいい。無理なら婚約破棄をしてもいいぞ」

「え？」

何を言っているのか？

「私が提案したんだ。責任は私にある。それに、女三人の相手をするのは大変だ。お前の場合は事情もあるからな。だから、負担なら私を捨てて」

そこまで言われて俺は、

「断る！ No！ いいえ！ 嫌です！」

即答すると、アンジエが少し驚いていた。

「リオン、お前」

アンジエは元婚約者であるユリウスに婚約破棄されている。

その後の憔悴した姿こすろみを見ている俺に、婚約破棄は無理だった。

俺はアンジエに謝罪をする。

「絶対にノウ！ 婚約破棄なんてしません！」

わがままを言ってみたら、アンジエがクスクスと笑っていた。

「お前は本当に　いや、私もお前も馬鹿だな」

婚約者二人に困っていたら、いきなりもう一人と結婚する流れになっちゃった。

俺の第二の人生、いったいどうなっているのだろう？

「そんなに聖樹の苗木が欲しいの？」

「知ればほとんどの者が欲しがるだろうさ。どんな手を使っても、な。アルゼル共和国も諦めたわけではないはずだ」

聖樹の苗木の巫女。

知られれば、そこからノエルの出自も知られるかもしれない。

次から次に厄介なことが舞い込んでくる。

アンジエは俺に提案する。

「リオン、お前は私たちと一緒に帰るぞ。聖樹の苗木とノエルは、絶対に連れて帰る。共和国は対外戦に弱いからな。逃げてしまえば我々の勝ちだ」

将来のため　アンジエは、そのために自分を犠牲にしようとした。

それだけの価値があると判断したのは分かる。

だが　あの苗木にそれだけの価値があるのか？

あいつポンコツ臭がするんだけど？

しかし、だ。

「いや、まだやることがある。俺だけは残るよ」

「やること？ 次は何をするつもりだ？」

アンジェの疑った視線に、実は世界の危機を止めるために頑張っています！ とは言えなかった。

俺が言つと嘘くさすぎてビックリだ。

冗談にしか聞こえない。

困っていると、部屋にノック音がした。

返事をするが入ってきたのはリビアだ。

寝間着で枕を持っている。

「どうした、リビア？」

アンジェが尋ねると、

「今日は三人で一緒に寝ませんか？」

ラッキースケベを超えた何か。

それ以上の幸運が俺に訪れたと思った。

よく考えてみれば、二人は俺の婚約者だ。

手を出しちゃってもいいよね！

アンジェが笑顔で頷く。

「私は構わない。リオン、お前はどっする？」

「いつでも準備は出来ている！」

意気込む俺にアンジェが若干引いていた。

「そ、そうか。それは良かった」

神様、この幸運をありがとう！

神よ どうして俺にこんなにも辛い試練を与えるのですか？

ベッドで寝ている俺たち三人。

俺を中心に両隣にリビアとアンジェが眠っている。

その寝顔は実に安らかで 信頼されている気がする。

ただ、問題はそこではない。

そんな二人に手を出すのか？

出すに決まっているだろ！

この二人に手を出さないで、一体誰に手を出すんだ？

しかし、だ。

ここでよく考えて欲しい。

「俺は一体 どちらから手を出せばいい？」

俺の体は一つしかないのだ。

二人を同時に相手に出来るだけの技量がない。

というか、物理的に不可能だ。

小さな問題に思われるかもしれないが、どちらから手を出したかで将来的に揉めることになるのか？

そして俺の気持ちだ。

どちらにも手を出したい。

だが、どちらから手を出せば良いのか分からない。

社会的な立場やら色々考えるとアンジェだが、それだけでリビアを後回しにしているものだろうか？

そんなことばかり考えて、まったく眠れない。

すると、姿を見せる二つの球体。

赤い瞳のルクシオンと、青い瞳のクレアーレだった。

『ヘタレですね』

『あら、でもどちらから手を出すかは重要よ。もしかしたら、一生根に持たれるかもしれないわ。女って嫉妬深いのよ』

「お前らなんで寝室にいるんだ？」

尋ねると、

『マスターが失敗しないか心配でした』

『失敗したときのアドバイスは任せて』

「覗いてんじゃねーよ！」

こいつら、俺が失敗することを前提に動くとか
お前ら、俺の
ことを本当はマスターとか思っただろ！

妹

いつも比べられてきた。

『まったく、お姉ちゃんは優秀なのに、どうしてあんたは駄目なのかしらね』

『お姉ちゃんは優しいのに、お前は』

それは前世の光景だ。

姉妹はいつも比べられてきた。

優秀で可愛い姉。

対して自分は出来の悪い妹。

何をしても比べられた。

そして初恋の人までも。

『お前の姉貴、今度紹介してよ』

惨^{みじ}めだった。

次第にゲームにのめり込み、やり始めたのは「あの乙女ゲー」だった。

自分だけを見てくれる。

自分を褒めてくれる攻略対象の男性たち。

そこには幸せがあつて、ルート 選択肢さえ間違わなければ、
ずっと幸せでいられた。

現実では、姉は順調に人生を歩み 自分は落ちこぼれ。

良い大学を出て就職した姉とは違い、専門学校を出たら働き始めた。
た。

何をやっても姉には勝てない。

そんな時だ。

ある男性と付き合うことになった。

自分の勤めている会社の そんなに大きくはないけれど、次期
社長という男性だ。

見た目は美形ではないけれど、優しくて真面目な人だった。

将来性もあつた。

堅実で真面目な会社の二代目。

自分にとって幸運が訪れたと思った。

はじめて姉に勝てることが出来たと思えた。

だが 実家に報告に行ってから一ヶ月と経たないうちに。

『君のお姉さんと付き合うことになった』

何を言われているのか分からなかった。

両親に一応相談したが、

『別に良いじゃない。あんたは他に見つけなさい』

『お前には不釣り合いだろ』

姉の味方をするばかりで話にならなかった。

だから姉と話をした。

『ごめんね。でも、ちゃんなら、次もきつといい人が見つかるわ。応援するね』

どちらが声をかけたのか分からない。

ただ、彼は私を裏切って姉を選んだ。

それを誰も責めなかった。

私は家族が嫌いだった。

姉という存在が嫌いだった。

夜。

レリアは飛び起きると寝汗をかいていた。

汗が気持ち悪い。

呼吸が乱れ、夢にうなされていたのが分かった。

「また昔の夢だ」

昔　前世の夢だ。

ベッドの上で膝を寄せ、顔を埋めて嫌なことを思い出す。

違うと分かっている　前世の姉とノエルを重ねてしまう。

リオンやマリエのことを思い出す。

「何よ。みんなして姉さんばかり大事にして。私だって色々考えたのよ」

ノエルにエリクを押しつけたことを、二人に責められた。

少し独占欲が強いと思っていたエリクが、あそこまで酷いとは思わなかったのだ。

女性に暴力を振るい、明るかった姉を変えてしまうとは信じられなかった。

自分も悪いと思ったが、責められると腹立たしい。

「私だってちゃんと考えているのに。分相応にエミールを選んで、エリクを姉さんに譲ったじゃない。私の何がいけないのよ」

レリア　ピンク色の髪をした気の強そうな少女は、自分というのを理解している。

転生したからといって、マリエのように逆ハーレムを目指さなかった。

魅力的な男性陣がいる中で、目立たないエミールを選んだのも彼女なりに色々と考えてのことだった。

どうせ一番は姉のノエルが持つて行く、と。

ならば、自分がエミールとくっついてもいいはずだ、と。

「こんなことになるなんて、誰も思わないわよ」

どこで狂ってしまったのか？

レリアは寝汗を洗い流そうと、立ち上がってシャワーへと向かうのだった。

翌日。

目の下に隈を作った俺は、アンジェとリビアを連れてマリエの屋

敷に向かった。

理由？

今後の打ち合わせとか、色々あるからだ。

アンジェとしても、マリエとユリウスが暮らしている屋敷に顔を出すのは微妙な気持ちだろうが　拒否も出来ない。

共和国に残るにしても、戻るにしても話し合いが必要だ。

「リオンさん、大丈夫ですか？」

「　大丈夫」

フラフラしている俺を心配してくれるリビアは、腕を掴んで支えてくれる。

屋敷の玄関。

アンジェは呼び鈴を鳴らしていた。

「昨日は寝られなかったのか？　なら、部屋を借りて少し休め。話し合いは私の方で済ませておく」

「だ、大丈夫。俺、頑張る」

俺たちを見守っているルクシオンとクレアーレが、

『昨日頑張れなかったマスターが、今日頑張れるとは思えません』

『興奮して寝られないなんて子供みたいね。寝られなかった理由は、子供っぽくないけれど』

こいつらボールみたいに投げてやるのか？

俺をマスターとして扱わない人工知能共に苛立っていると、いくら待っても玄関が開かないことに気が付いた。

アンジエの機嫌が悪くなってくる。

「訪ねると伝えているはずだが、一体どうなっている？」

大きな屋敷には、使用人が派遣されているはずだ。

人手が足りずにバタバタしているとは思えない。

「何か問題でも起きたか？ ルクシオン、マリエを呼んで来いよ」

『こき使ってくださいね。では』

ルクシオンが屋敷に侵入しようとする、何やら玄関の向こう側が騒がしくなってきた。

クレアーレが俺たちに言う。

『みんな、玄関から離れた方がいいわ。ほら、早く』

俺たち三人が玄関から離れると、急にドアが開いてそこから野郎五人が飛び出てきた。

野郎五人を追いつ出したのは　　マリエだった。

「お前ら出てけえええ！」

玄関で蹴り飛ばされた五人は、ポカーンとした表情でマリエを見上げていた。

「え、何これ？」

朝から一体何をやっているのか？

激怒するマリエは、そのまま屋敷の中に戻っていく。

俺はユリウスに話しかけるのだ。

「お前ら、今度は何をした？」

俺たちに気が付いたユリウスが、少し慌てたように言い訳をはじめる。

「ち、違う。俺たちは何もしていない！」

疑わしい限りだ。

ジルクを見る。

「なら、またガラクタを買って怒られたのか？」

「ガラクタとは失礼な。物の価値が分かっていない人ですね。です

が、アレから私は何も購入していませんよ」

こいつはガラクタに価値を見だし、高値で購入する詐欺師の力
モだ。

だが、違うとなると。

「お前か、赤」

「髪色で俺たちを呼ぶな！俺だって何もしていない」

赤 グレグがふて腐れたように地面にあぐらをかいて座って
いた。

次に視線を向けたのはブラッドだ。

「ならお前だ」

「違う！僕じゃない。僕は何もしていない！」

「本当か？マリエの奴、激怒していたぞ。きっと理由があるはず
だ。だが、こいつらが違うとなると」

最後に視線を向けたのは、クリスだった。

眼鏡の位置を正しつつ、立ち上がったクリスは困惑していた。

「私でもないぞ。本当に何もしていない」

五人が五人とも何もしていないと言う。

本当だろうか？

アンジエもリビアも、叩き出された五人を見て戸惑っている。

そんな微妙な空気が漂う場所にやって来たのは、カイルだった。

「あ、伯爵、お待ちしていました」

少し気怠るそう　　というか、疲れた顔をしているカイルが俺たちを屋敷へ招く。

「え？　この五人を無視するの？　　というか、何があったか説明しろよ。アンジエもリビアも困っているだろうが」

カイルは五人をチラリと見てから鼻で笑っていた。

「お、お前！　その態度は何だ！」

ユリウスがカイルの態度に怒っているが、話が進まない所以我慢してもらう。

「お前らは黙れ。ほら、こいつらが何をしたか言えよ、カイル」

カイルが疲れた顔で言うのだ。

「何もしていませんよ」

「はあ？　そんなわけないだろ。こいつらが何かしたから、マリエが怒ったんだろ？」

何をして怒らせたのか　その発想から間違っていた。

俺はこいつらの駄目さをまったく理解していなかった。

「だから、何もしていないから追い出されたんですよ」

「　　え？」

話は少し戻る。

それはマリエの屋敷での朝食時のことだった。

「人手が足りなああい！」

使節団と一緒に使用人が派遣されては来たが、十分な数を送っては来なかった。

必要最低限の暮らしが出来る人数。

おまけに派遣されてきたばかりで、準備も必要だ。

朝食作りはマリエたちが行っしかなかった。

共和国の学園も夏休みに入り、遅刻を心配しなくて良いのがせめてもの救いだっただ。

厨房で慌ただしく動き回っているマリエは、カーラが並べたお皿

に次々に目玉焼きを載せていく。

カイルも朝食の準備に忙しい。

そこに。

「うわあああ！」

エプロンを着用したエリクが、皿を落として割ってしまった。

「何をしているんですか」

お腹を空かせた野郎共が待っている中、仕事が増えたとカイルが肩を落とした。

カーラは溜息交じりに掃除道具を取りに行く。

エリクが肩を落とし、

「す、すみません」

マリエはそんなエリクに近付くと、指を切っているのを見た。

「治療が先ね」

「て、手伝います」

初日から失敗続きというエリクは、頑張ろうとすれば空回りを越して足を引っ張っていた。

だが、マリエは　。

「駄目よ。血が出たら食事の用意はさせられないわ。カーラに治療してもらったら、あんたは少し休みなさい。朝食の用意が終わったら、後で私が治療するわ」

落ち込むエリクはマリエの言葉に従うのだった。

結果、エリクが手伝ったことで　普段よりも遅れて朝食を食べることになった。

そのため、育ち盛りの五人は朝から苛立っている。

朝食時。

ユリウスはエリクを責めていた。

「まったく、手伝って足を引っ張るとは情けない奴だ」

ジルクも同意している。

「マリエさんの邪魔をして楽しいですか？」

冷たい視線を向けるのはブラッドだ。

「朝食の用意すら出来ないなんて、聖樹の加護がない共和国の貴族は何の役にも立たないね」

眼鏡のレンズを拭いているクリスは、

「同感だ。これでは手伝わない方がマシだな」

グレッグは朝食のパンを食べながら、

「さつさと家に帰るんだな。ここにお前のいる場所はないぜ」

冷たい態度だが、マリエに近付こうとする男だ。

五人の態度も好意的でないのも仕方がない。

仕方がないのだが。

落ち込んでいるエリクを前に、マリエは立ち上がると五人に向かって、

「エリクはね、朝から手伝わったわ」

マリエの様子が違うことに、ユリウスたちは困惑する。

「マリエ、どうした？」

「いい、エリクは手伝ったのよ。そりゃあ、仕事を増やして朝食の時間を遅らせたわ。それでもね、手伝ってくれたのよ。でも あんたら、何もしていないじゃない」

ここに来てマリエは気が付いてしまった。

（あれ？ どうして私がみんなの面倒を見ないといけないの？ そもそも、共同生活なんだから、手伝ってもらうのが普通じゃない？）

「お前ら文句ばかり言って　少しは反省しろおお！」

カイルの話を聞いて俺は思ったね。

「お前ら馬鹿だな。何もしていないから怒られるとか」

ゲラゲラ五人を笑ってやると、ユリウスたちが俺を睨んでくる。

「そついうお前はとうなんだ！」

「俺、自活くらい出来るし」

そもそも前世は一人暮らしで、今世は貧乏貴族出身だ。

色々と出来ないと暮らしていけなかった。

悔しそうにしている五人を見ると、ルクシオンがボソリと。

『ですが、今は何もしていませんけどね。世話をしているのは私ですし』

ルクシオンの言葉を聞いて、カイルが俺を「うわあ」とでも言いたげな呆れた顔で見っていた。

「伯爵も人のことは言えませんか」

「お前も馬鹿だな。俺は伯爵だぞ。身の回りの世話をする人間がいても良いんだよ。俺、偉いんだ」

ジルクが悔しそうにしている。

「私たちとそんなに変わらないじゃないですか」

「雲泥の差があると自覚して欲しいね。まあ、今はルクシオンに任せているけどね」

「それは貴方個人の力ではありませんよね？」

「聞こえないな。それに、何も出来ないお前らと違って、俺は出来るけどしないだけだから」

出来ないのとしらないのでは、大きな違いがあるのだ。

こいつらイケメン共の弱点　それは稼ぎや生活力だ。

いや、勝てる分野があつて良かった。

俺の力じゃなく、ルクシオンの力だけどね。

ブラッドが俺を見ながら、

「君も叩き出されるんじゃないの？」

すると、ここでリビアが話に加わった。

「叩き出すなんてあり得ません！ リオンさんが何も出来なくても、私が支えます！ 私、炊事洗濯は出来ますし。私がお世話をします！ だから大丈夫です」

アンジェも俺に優しい笑顔を向けてくる。

「リオンが何も出来なくても問題ない。その辺りの采配は私たちの仕事だ。その気になれば私が稼いでやる。だから、お前は何も心配しなくて良いからな」

あ、あれ？ 嬉しいけど、もしかして俺って二人のヒモっぽくない？

クレアーレが嬉しそうに言うのだ。

『マスター、愛されてるう！ けど、これって何だかヒモみたい』

それを聞いて、誰かが「ぷっ」と吹き出した。

「ふ、ふざけるなあああ！ 俺はヒモじゃねー！ やってやるよ。こいつらよりマシだって証明してやるよ！」

ユリウスが俺に怒鳴ってくる。

「俺だってお前よりマシだ！ 色々と負けているが、全てに負けていられるか。こうなったら勝負だ！」

いいだろう、受けて立ってやる。

この役立たずの五人よりマシだと証明しないと、俺の沽券こけんに関わる。

「はっ！ 何も出来ないボンボンが言うじゃないか。吠え面をかく

なよ
」

ルクシオンが呆れるように呟いた。

『何とも情けない勝負ですね』

乙女の真髄（前書き）

活動報告にてミレーヌのキャラクターラフを公開中です。
そちらも見えて貰えると嬉しいです。

さて、コミカライズの方ですが、何やらランキングで一位を獲得していました。

潮里先生凄いですね。

原作者として嬉しい限りです。

そして、自分の方は原作者という響きにちょっと嬉しくなっております。

コミックウォーカー様、ニコニコ静画様でも楽しめますので、是非とも読んでいただければと思います。

コミカライズ版の幼少期リオンが可愛いと評判でしたよ！

中身はアレだけどね！

乙女の真髄

マリエの屋敷を訪れた俺たちは、今後のことについて話をしていた。

その過程で アンジェの世話をするメイドのリーダー、メイド長とも呼んでおこう。

この人が俺に言う。

「この屋敷を使わせる？」

「はい。お嬢様たちが共和国に滞在する間は、この屋敷で空いている部屋を使わせていただきます」

「俺に許可を求められても困るって」

「リオン様の許可が必要なのです」

よりにもよって、マリエがいる屋敷にアンジェを住まわせるの？

それってまずくない？

困惑していると、メイド長が俺に事情を説明してくれる。

「リコル又は確かに立派な船ですが、ずっと船内というわけにもいきません。大地の上で休ませたいのです。大使館に確認を取ったのですが、アンジェリカ様に相応しいお屋敷はここしかないと言うの

で許可は取っております」

リコルヌ？

船の名前だろうか？

どんな船だろう？

「でも、マリエがいる屋敷にっていうのは」

「だからこそ、です」

メイド長が俺を見る目が冷たいというか、鋭かった。

「リオン様、あのマリエと随分と親しいご様子でしたね」

「お、おう。ほら、アレだ。一緒に留学したし、多少は」

「口には出しませんが、お嬢様が心配されています。あり得ないとは思っていますが、万が一にでもリオン様がマリエに籠絡くわくろくされれば」

俺とマリエが必要以上に近付かないために、アンジェが側で見張るということか？

いや、こいつらメイドが見張るということだろう。

「信用がないな」

「信じてはおります。ですが、あの五人を籠絡した相手です。警戒

しても仕方がないと思いませんか？」

「あの五人って あいつらだぞ」

今も玄関で座り込んでいる五人を、窓から眺めるとメイド長も少し困っていた。

「と、とにかく、気をつけてください。お嬢様はリオン様にお会いできると、それはもう楽しみにしていたというのに」

ノエルの件でメイドさんたちの視線がね きついつす。

「分かったから。というか、マリエはない。絶対にないから」

「信じておりますよ」

前世の妹だ。

手を出すなんてあり得ない。

メイド長が俺に頭を下げた離れていくと、外の様子に変化があった。

マリエが出てきたのだ。

五人が立ち上がって言い訳をしていたが、マリエは耳を貸さなかった。

「今まで私は甘やかしすぎたと思うの」

「マリエ、俺たちの話を聞いてくれ！」

「ユリウス　貴方たちが本当に私のことを考えているのか試させてもらうわ。まっとうな手段で　冒険者のような活動以外でお金を稼いできなさい。そうしないと、絶対に家に入れないから。あ、それから小銭程度を稼いでも家には入れるわよ。けど　五人の中で一番稼ぐのはいったい誰かしらね？」

それを聞いた五人が息をのんでいた。

何これ？

こいつはアレか？

五人を競わせようとしているのか？

俺からすれば競ってまでマリエなんか欲しくないが、五人にしてみれば重要な問題だったらしい。

五人が互いに向ける視線は、今にも火花が散りそうな程だった。

ユリウスが他の四人を前にして宣言する。

「お前たちには悪いが、この勝負だけは譲らない」

ジルクも同様だ。

「殿下、私も引くつもりはありませんよ」

ブラッドが前髪を手で払いのけながら、

「一番稼いだ奴がマリエの一番になる。シンプルで分かりやすいじゃないか」

クリスが眼鏡を外した。

「誰がマリエの一番になれるか　勝負というわけだな」

グレッグが自分の手の平に拳を叩き付け、

「いいぜ、やってやらあ！」

マリエを巡って野郎五人が争おうとしていた。

何これ？　まったく理解できない。

だが、アンジェたちが滞在する屋敷にユリウスたちがいないのはありがたい話だ。

マリエは五人を前に微笑んでいた。

「みんな、頑張つてね」

きつと自分のために争う五人を前に優越感を得ているのだろう。

俺には分かる。

「あいつやりやがった」

嫌われてもいいと思っているのか、マリエはやりたい放題に見える

た。

五人を追いつ出したマリエは上機嫌だった。

「何て清々しいのかしら」

どうしてもっと早くに追いつかなかったのだろうか？

そう考えて、安物の紅茶で優雅な一時を過ごしていた。

ジルクが大量買いした茶葉で、味はマリエ好みではないが
体ないので日頃から飲んでいる。 勿

だが、そんな紅茶すらおいしかった。

窓際で紅茶を飲んでいるマリエに声をかけるのはカーラだ。

不安そうにしている。

「マリエ様、本当によろしかったんですか？」

それは五人との今後の関係を心配した言葉だ。

マリエは動じない。

「五人が稼げるようになってくれれば一番だけど、本当は世間を学んで欲しいのよ。別に私が嫌われたって構わないわ」

（むしろ、ここで何人が離れてくれたら負担も減ってラッキーよね。というか、私のために五人が一番を競うと思うと　やだ、ちょっとドキドキしちゃう）

こんな展開が大好きなマリエは、カーラもお茶に誘うのだった。

「カーラも飲みなさい。今日は奮発してお菓子も付けるわ。夜は外食よ」

「外食ですか！」

すっかりこの暮らしに馴染んでしまったカーラは、外食と聞いて喜ぶのだった。

「ええ、そうよ。もちろんチキンじゃないわ。ビーフを食べるわ」

「　ビーフ」

両手を胸の前で組み、そして祈るような仕草で幸せそうな顔をしているカーラを見ながらマリエは財布の中を見る。

（い、いけるわよね？　でも、ちょっときついな？　というか、今日くらいカイルやカーラを休ませてあげたいし、ここはお兄ちゃんにお金を借りるしか　）

苦勞をともにしてきた二人をねぎらうお金を、リオンに借りようとするマリエだった。

五人を追いつ出したマリエが、俺にお金を借りに来た。

「みんなと外食したいの。お金を貸して、お兄ちゃん！」

「帰れ！　とは言えないか」

色々な事情を考慮いっしょくすれば、貸さないと突き放すことも出来ない。

あの五人の世話をするために苦労してきたのは知っている。

今日くらいは外食してもいいだろうと、俺はお金を貸してやるのだった。

返ってこないだろうけどね。

お札を受け取ったマリエが目を輝かせている。

「ありがとう、お兄ちゃん！」

「それはいいが、お前はこれから何を考えているのか？」

すぐにでも俺たちを連れ帰りたいアンジェたちを説得する方法を聞けば、マリエは視線を俺から外した。

「おい！」

「だってまともに考えたら残る理由がないじゃない！　共和国も私たちには帰って欲しそうだし」

散々暴れ回ったから、共和国も俺たちには帰って欲しいようだ。

ピエールの件で少し暴れすぎてしまった。

今はちょっと反省している。

「ルクシオンで聖樹を攻撃、もしくはボスを暗殺なんて選択は嫌だぞ」

世界の危機を防ぐ方法はいくつかある。

ボスが手に負えなくなる前に排除。

聖樹そのものを破壊　　というか伐採。

どれも国際問題一直線。

秘密裏にやったとしてもアルゼル共和国は大混乱だろう。

やりたくねえ。

「ゲームならやっちゃえ、って思うけど　リアルだと駄目よね。私もやりたくないわ。けど、放置は出来ないわよ」

「そもそも、アルゼル共和国の危機で、俺たちには関係なくない？ホルファートまで危機になるのか？」

尋ねるとマリエは言い淀んでいた。

「おい、どうした？」

「わ、分らないのよ。だって、ゲームだと失敗すればゲームオーバーで、成功すれば危機を回避するわけだし」

世界の危機と言われても、どの程度か判断できないということだ。

帰ってえ。

「実は俺たちが来る必要なかったんじゃないの？」

「知らないわよ！　そもそも、レリアが余計なことをしたからややこしくなったのよ。全部あいつの責任よ」

「お前のせいで俺が苦労したことを忘れるなよ」

「ごめんなさい」

マリエが謝罪をしてきたところで、俺はあいつらのことを確認するのだ。

「レリアと三人で話をするとして、それよりもあの五人だ。どうする？」

「どうするって？」

「屋敷から追い出して良かったのか？」

「あゝ、あれね」

マリエは遠い目をしていた。

「エリクをうちで預かっているんだけど、あの五人は普段の態度がエリクよりも酷いのよね。確かにエリクは問題ありだけど、それ以上に酷いっておかしくない？ 元は期待されていた王子様たちよ」

王子様も一般庶民の生活力を求められても困るだろ。

だが、あいつらはここらで世間を知った方がいいのも事実。

後でフォローしておこう。

「なら、早い内にレリアと話をしておくか。姉貴さん ノエルの件もあるからな」

「ノエル？ え、あの犬と何か関係があるの？」

ああ、こいつは姉貴さんの本名を知らなかったのか。

俺も昨日知ったばかりだし。

「実は」

事情を話すとマリエが俺を笑ったので、きつい拳骨をお見舞いしておいた。

夏休み。

レリアはエミールに誘われてデートをしていた。

慌ただしい共和国も、少しは落ち着きを取り戻しつつある。

エミールがレリアに話題を振る。

「港から色々と報告が来てね。王国の飛行船が来たんだけど、それが伯爵の飛行船と同型艦だったんだ。もう、港は大騒ぎだよ」

「そ、そうなんだ」

レリアは思う。

（エミールって何だか優しすぎて物足りないのよね）

色々と気を使ってくれるのも分かるが、女性と付き合ったことがないため楽しませ方を知らなかった。

初々しさがいいと思った時期もあるが、なれてくると物足りない。

（話題も仕事の話とか何を考えているのかしら？）

不満に思っていると、二人の前に黒髪を後ろで縛った男子が現れる。

野性味あふれるその男子は セルジュだった。

「よう、レリア！ お、エミールも一緒か」

片手を挙げて白い歯を見せて笑っていた。

「セルジュ、あんたいつ帰ってきたの！？」

「昨日だ。おかげで大騒ぎだったのを知らなくて、親父に怒られた」セルジュに駆け寄り話を聞こうとすると、セルジュの左肩の辺りに浮かんでいる球体に目が行く。

青い球体には、赤い一つ目　その姿は、ルクシオンと似ていた。アルベルクに怒られたので逃げてきたというセルジュに、レリアは呆れた。

「こっちは大変だったのよ。あ、えっと」

二人の視線がエミールに向かう。

エミールはセルジュを前にして、少し不満そうにしていた。

「帰っていたんだね、セルジュ」

レリアはすぐにでもリオンたちのことをセルジュに相談したかった。

そのため　。

「ごめん、エミール。今日はセルジュと話をさせて」

レリアは一日だけと思い、エミールと別れてセルジュと話をすることにした。

エミールは困ったように笑っていた。

「二人とも仲が良いよね。分かったよ。今日はここで別れよう」

レリアは安堵した。

（物分かりが良くて助かったわ。それよりも、早くあの二人のことを相談しないと。それに、この球体ロボット　もしかして、こいつもチートアイテムを回収したの？）

セルジュは去って行くエミールの背中を見送っていた。

「いいのか？　付き合っているんだろ？」

「それどころじゃないのよ。こっちは予定が狂って大変よ。私たちと同じ転生者がいたのよ。ホルファート王国に最低でも二人いるわ。あんたが連れているのと同じチートアイテムを持っているのよ」

それを聞いて青い球体　イデアルが興味を示した。

『私と同じ、ですか。大変興味深いお話ですね。お嬢さん、良かったら詳しくお聞かせください。マスター、これは重要な案件です。すぐにお嬢さんの相談を受けた方がよろしいかと』

セルジュは溜息を吐く。

「恋人を放置するだけの理由がある、ってか。分かった。なら、どこか落ち着ける場所にも行こうか」

二人はそのまま歩き出した。

「あんだ、また背が伸びたんじゃない？」

「成長期だからな。お前の方はどうだ？」

セルジュからレリアは胸を隠すのだった。

「どこを見ているのよ！」

「はあ？ 身長の話だろ？ 何で胸を隠すんだよ」

リオンに胸のことを言われて、過敏になっていたレリアは思わず赤面するのだった。

「そ、そうよね。身長の話よね」

「大丈夫か？ それより飯は食ったか？ まだなら一緒に食おうぜ」

「いいわね。あんだと一緒に気取る必要もないし、気楽で良いわ」

二人は楽しそうに歩いていた。

その様子を、物陰からエミールが見ているとも知らずに。

乙女の真髄（後書き）

マリエ（。。。）「外食とか久しぶり！今日はいっぱい食べるわよ！みんな好きなものを注文しなさい。お金の心配はしなくていいわ！」

カイル（*、）ノ「やったー！片付けをしなくていいって最高ですね」

カーラ（*、）ノ「お肉う！マリエ様、デザートはありますか？」

マリエヅ（*、*）ノ「もちろんよ。デザートも注文しなさい。今日は豪勢にいくわよ」

アンジェ（.;。。）
リビア（.;。。）

対立

ラウルト家。

アルベルクが当主をしている共和国の議長代理の家だ。

息子であるセルジュが問題児であるために、悩みの種が多い。

「セルジュ、お前という奴は反省もせずに屋敷を抜け出したのか！」

屋敷で執事から報告を受けたアルベルクは、ソファアに座っているセルジュに怒鳴っていた。

耳の穴に指を入れて不満そうにするセルジュは、アルベルクの話をもとに聞こうとしていなかった。

そればかりか。

「俺に説教できるのか？ 王国の連中に好き放題にされやがって」

痛いところを突かれたアルベルクは、目を閉じて一呼吸おいた。

「お前が何を言いたいのか理解している。だが、あの男には手を出すな。リオン・フォウ・バルトファルトを改めて調べさせたが、奴は危険だ。それに、これは好機でもある。共和国はこれで内向きに争うのではなく、」

アルベルクの話に興味がないセルジュは、イデアルに話を振る。

「お前の意見は？」

アルベルクは青い球体に視線を向けた。

（息子が見つけてきたロストアイテムか。王国のリオンに対抗できるだけの力があると言ってはいるが、実際どの程度のものか）

イデアルは赤い一つ目をセルジュに向けていた。

『話してみないことには分かりませんね。私と同じ人工知能を従えているというのが面白い。是非とも会っておきたいというのが今の感想です』

セルジュも同意する。

「いいな。俺も気になっていたところだ。人様の国で好き勝手にしてくれた奴の顔を拝みにいくか」

アルベルクはセルジュを止める。

「必要ない。お前はあの男に会うな」

「何で？」

「これ以上の国際問題は困るからな。フェーヴェル家、バリエル家と、立て続けに問題を起こしている。まったく、何を考えているのか」

フェーヴェル家のピエールが、聖樹の力を使ってアインホルンを

奪った。

バリエル家のエリクがリオンの屋敷を襲撃したのも大問題だ。

出来ればこのまま国に帰って欲しいというのが、アルベルクたち六大貴族の素直な気持ちだった。

「喧嘩を売られて黙っているつもりかよ？」

「そうだ。それから 非がどちらにあるか考えろ」

そもそも、喧嘩を売られたのは王国側だ。

非は共和国側にある。

それでも、リオンの行動はやり過ぎだった。

今まで自分たちが上位者だと信じてきた者たちには、許容出来ない出来事だった。

聖樹のすぐ近くまで攻め込まれたなど、共和国の歴史上はじめてのことだった。

「お前に何か吹き込む輩もいるだろうが、耳を貸す必要はない」

それだけ言っただけでアルベルクはセルジュのもとを離れる。

自由にしている息子が羨ましくもあった。

だから あまり政治の話に巻き込みたくもなかった。

（今だけは好きなようにさせてやる。だからセルジュ
っと広い視野を持て） お前はも

今回の一件、リオンたちを侮った自分にも責任がある。

アルベルクはそう思っていた。

アルベルクがいなくなると、セルジュは頭の後ろで手を組んだ。

「腰抜けが。少し負けただけで卑屈になりやがって」

セルジュはアルベルクとは考えが違った。

イデアルが話しかけてくる。

『レリアさんの話では、私と同等と思われる能力を所持している
か。お相手は強敵になりますね』

セルジュがイデアルに問う。

「お前で勝てるか？ お前、輸送艦なんだろう？」

『情報不足で判断できませんが 私は軍用艦ですよ。輸送艦だか
ら弱いと思われるのは心外です。戦い方次第ですね』

セルジュは天井を見上げていた。

「ピエールはいつかやらかすと思っていたが、まさか俺と同じ転生者に手を出して返り討ちかよ。情けない奴だよな」

『やり過ぎた部分もあるでしょうが　私は彼らも危険と判断しますよ』

リオンたちを危険と判断するイデアルに、セルジュは視線を向けるのだった。

「どついう意味だ？」

『聖樹の力で支配下に置かれたとは考えにくいのです。で、あれば相手は最初からピエールという若者を利用したのでしょう』

セルジュが吐き捨てるように言うのだ。

「狡猾こつかつな連中ってわけか。俺、そういうタイプは苦手だな」

『エリクという若者の件も同じです。彼らはその手に聖樹の苗木と巫女を手に入れました。転生者　もしも知識を有していたのなら、今回の一件は全て仕組まれていたのかもしれない』

イデアルの説明にセルジュは、リオンたちが用意周到であると感じていた。

「厄介だな。　どうする？」

『一度接触してみるべきでしょう。彼らが何を目的にしているのかわかりません。聖樹の暴走ですか？　それを利用して火事場泥棒でも行おうとしている可能性もありますからね』

セルジュは転生者だ。

だが、生まれ育った国を嫌っているわけではない。

不満もあるが、余所者に蹂躪じゅうりゅうされて面白いとは思えなかった。

「レリアに話をしておくか」

レリアを通して、リオンたちと接触することを決める。

『賢明な判断です』

イデアルはセルジュの判断を褒めつつ、備えについて話をするのだった。

俺は今　凄く困っていた。

「お前ら、なんで俺の家にいるんだよ」

困っているし、苛々いらだしている。

理由は五人組だ。

マリエに屋敷を追い出され、行き場を失った五人が俺の家に転がり込んできた。

五人とも求人広告や張り紙を持っている。

「仕方がないだろ。 住む場所がないんだ」

叩き出してやりたいが、そこまですると可哀想になってくる。

結構な広さがある家なのに、野郎が五人もいると狭く感じた。

俺は五人が持っている求人広告を見る。

どれもこれもアルバイトばかりだ。

そもそも、外国人を雇ってくれるところが多くない。

そして俺は気が付いた。

「あ、でもお前らって夏休み中に帰るかもしれないし、稼げる期間は長くないかもね」

「何!？」

驚いた顔をした五人組。

彼らの思考はいかに短期間で稼ぐのか、ということに絞られている。

ジルクが立ち上がった。

「アルバイトでは皆さんに勝つのは難しいということですか。ならば」

家を出ようとするジルクに俺は声をかけた。

「どこに行くんだよ」

「時間がありません。こうなれば、私は自分の審美眼しやうびがんを信じて行動するだけです」

お前の審美眼は信用しちやいけないと思うよ。

そうしている間に、クリスやグレッグも立ち上がった。

「短期間で大きく稼ぐにはこれしかない。皆、俺は住み込みの仕事をしてみようと思う」

クリスが持っていた求人広告に書かれていたのは、きつい仕事なのか時給はいい。

グレッグも、

「それは俺がやる。お前は他の仕事にしろ」

そんな風に言うものだから、クリスと争うように家を出ていく。

「ふざけるな！ これは私の仕事だ！」

「大人しく他の仕事をすれば良いんだよ！」

二人も出ていく。

少し遅れて立ち上がったのはブラッドだった。

背筋を伸ばし、そして出ていった二人を見て呆れていた。

「脳筋は嫌だね。僕は知的な方法で稼ぐとするかな」

出ていくブラッド　知的な奴はそもそも追い出されたりしないと思うよ。

そして、家に残ったのは俺とユリウスだけだった。

「お前はどつするの?」

ユリウスが困ったような顔をしていた。

「ど、どうすればいいと思う?」

こいつやっぱり駄目だな。

「とりあえず働いてみれば」

「そ、それでは負けてしまっただろうが！　短期間で大きく稼がなければ意味がない」

マリエのために頑張ろうとしているが、そもそもあいつが求めているのは五人の意識改革だ。

少し世間を知って戻ってくれば、許してくれるのではないだろうか？

でも、あいつが上から目線で許してやる、って言うてきたら俺な

ら殴りそう。

何様のつもりだろうか？

「何もしないよりはマシだろ。ほら、さっさと面接でも受けて来いよ。このまま稼ぎゼロなんて笑えないぞ」

「　　そ、それは、確かに」

それにしても、王子様を追い出すとか　　マリエの奴は大丈夫なのだろうか？

色々と悩んでいるユリウスを見ると、ドアの呼び鈴が鳴った。

レリアに誘われて向かったのは　　夏休みに入って人が少ない学園だった。

空き教室に案内された俺は、レリアの雰囲気もあって少し警戒する。

「こんな場所に呼び出してどうするつもりだ？」

ルクシオンも一緒にと言うので、連れては来たが　　黙ったままだった。

周囲に視線を向け、何やら警戒している気がする。

憎まれ口がなくて寂しい限りだ。

「あんたに会いたって奴がここを指定したのよ。言ったわよね？
もう一人の転生者は攻略対象だ、って」

空き教室のドアを開けて中に入ると、そこには 補習をしている一人の男子がいた。

俺もルクシオンも言葉を失う。

随分と荒々しいというか、ワイルドな雰囲気がある。

黒板には補習と書かれており、今まで授業をしていたようだ。

レリアがその男子に声をかけた。

「終わったみたいね」

机に突っ伏していた男子が顔を上げる。

「夏休みは全て補習だとさ。ふざけているよな」

「留年を回避するためよ。ありがたいと思いなさいよね」

日焼けした小麦色の肌。

俺が驚いたのは、呼び出した男子が補習を受けていたことではない。

恵まれた体格をしている男子の近くには、青い ルクシオンが
浮かんでいた。

赤い一つ目が俺やルクシオンを見ている。

レリアとその男子が話をしている中、俺はルクシオンに視線を向けた。

「どういうことだ？」

ルクシオンは赤い一つ目を相手に向けながら、

『子機ですね。本体は別にあるかと』

「お前と同じ、ってことか」

すると、青い球体が俺たちに近付いてきた。

声はルクシオンと同じ電子音声だが、まったく別物に聞こえる。

『はじめまして。私はイデアル。お名前をお聞きしても？』

俺ではなくルクシオンを見ていた。

俺は最初から眼中にないというわけだ。

『ルクシオンと呼ばれています。マスターはこちらの“リオン・フオウ・バルトファルト”です』

『ホルファート王国の伯爵という立場でしたね。私のマスターと同じ転生者と聞いています』

青い球体 イデアルが俺に二つ目を向けてきた。

「ルクシオンのおまけ扱いか？」

『気に障ったのなら謝罪しましょう。何しろ、こうして動いている人工知能に出会えて興奮していましたね。命令系統は違いますが、同族意識を感じています』

ルクシオンの方も同じなのかと視線を向けるが、何も喋らなかった。

気が付けば、レリアと並んだ男子が俺の側に来ていた。

「お前の方はメタリックカラーか。それにしても、同じ転生者で同じチート戦艦持ち。何だか不思議な気分だな」

「お前は？」

「俺はセルジュ “セルジュ・サラ・ラウルト”だ」

ラウルトと聞いて、俺は視線をレリアに向けた。

少々険しい視線になっていたと思う。

レリアが慌てて言い訳をする。

「ち、違うの！ こいつ、大貴族の出身だけど、冒険者に憧れた問題児で この前まで学園にもいなかったのよ」

ルクシオンが言う。

『その間にイデアルを発見した、ということですか』

「そうなのか？」

『以前から発見していれば、我々に接触してきたはずですからね』

ルクシオンの言葉に、イデアルが同意する。

『そうですね。私がマスターと出会ったのは最近です。だからこそ、色々と情報を集めているのです。ご理解いただけましたか？』

ご理解いただけましたか、という部分に何故か嫌みを感じた。

ルクシオンと同じだな。

「口の悪さも一緒だな」

『一緒にしないでください』

ルクシオンがそう言うのと、セルジュが話しかけてくる。

「お前とは一度話をしておこうと思ったんだよ。それより、乙女ゲ―なんてやっている男とか本当にいるんだな」

馬鹿にしているのか？

レリアの方を見れば、慌てて視線をそらしていた。

「事情は説明したわよ。けど、こいつは細かいことを気にしないか

ら」

大雑把な人間なのだろう。

「それで？ 何の用だ？」

「怒るなよ。同じ転生者同士、仲良くやろって話だ。ま、座れよ」
椅子に座って向かい合って話をする。

「俺もお前もチート持ち。とんでもない宇宙船を持っているわけだ」
「そうだな」

「俺はこの力を使って国をまとめる。アルゼル共和国を良くしよう
と思っている。お前はどのようなつもりだ？」

俺の目的について聞いているのだろう。

「正直考えていないね。田舎でノンビリ暮らせればそれでいい」
「はあ？」

俺の答えにセルジュが呆れかえっていた。

「何だよ、それ。凄え つまんねえ」

つまらない

人の生き方は自由だ。

他人に迷惑をかけないなら、それは尊重されるべきだ。

だから、俺が田舎でノンビリと暮らしたいという考えも尊重されるべきである。

「つまらない？　それがどうした？　お前の面白い生き方ってやつを聞かせてもらおうじゃないか」

対面しているセルジュが、口の端を持ち上げて笑みを作っていた。

苛々する奴だ。

他人の生き方に文句を言うな。

俺は自分に無害なら口なんて出さないぞ。

「凄え力を手に入れたのに、それを使わないのがつまらないって言ったんだよ。俺もお前も、こいつら超兵器を手に入れた。それで何もしないなんて馬鹿か？」

「それで？　一体何をするつもりなんだ？」

凄い力を手に入れたから使いたい。

まあ、人間らしい考えだ。

俺だってルクシオンを手に入れた時は調子に乗った。

おかげで苦勞したけどね。

「俺はこの大陸を一つにまとめる。相棒が　イデアルがいれば何でも出来るからな」

セルジュの言葉に興味を持った。

やはり、共和国は国内のまとまりがない。

それを解決するシンプルな方法は、善悪はともかくとして圧倒的な力で支配することだ。

それが出来るだけの力をセルジュは手に入れた。

手に入れてしまった。

「よかったな。まったく興味はないけど応援するよ。精々、頑張つてこの国をまとめてくれよ」

セルジュの「つまらない」という言葉に苛々したが、共和国で暴れ回りたいなら問題ない。

それは共和国の問題だ。

俺が文句を言う必要はない。

武力による支配の中で生み出される不幸は、セルジュや共和国の問題だ。

こういう短絡的な馬鹿は、その後何が起きるのか考えているのだろうか？

「お前、本当につまらない奴だな」

笑みを消したセルジュに対して、逆に俺が笑みを浮かべた。

「少し教えてやるよ、糞ガキ。お前にとっての面白いとか、つまらないというのは、お前の中での基準だ。個人的な感想でしかない。世間一般の常識みたいに言っていると恥をかくぞ」

常識というのは国によっても、地方、地域　そして集団によって違いがある。

極論を言えば、個人個人で常識は異なっている。

俺の生き方をつまらないと言ったセルジュのように、俺の考えとは違っていて当然だ。

「年齢は同じだろうが！」

少し煽ってやるとすぐに反応を示した。

こいつの前世はきつとガキだな。

俺よりも年下に決まっている。

「前世も含めて人生経験が足りていないからガキって言ったんだよ。少し考えれば分かるだろ？」

恥ずかしいから説明させるなよ。

俺たちのギスギスした雰囲気、レリアは居心地が悪そうにしていた。

「二人ともその辺りで止めようよ。ほら、同じ転生者同士、仲良くしないと」

「けっ！」

顔を背けるセルジュに対して、俺は仲良くやれそうにないと思った。

それもいい。

どうせ俺は故郷に　ホルファート王国に戻るのだから、共和国のことまで面倒を見きれない。

セルジュがいれば、共和国の問題は解決できるのだから、俺はとっとと帰るとするか。

「それよりも、お前らの方で聖樹の方を何とかしろよ。お前らの国だろ」

俺が「ラスボスをよろしく」みたいに言うと、レリアが俺に厳しい視線を向けてくる。

「あれだけ引つかき回しておいて、自分たちだけ逃げるつもり？
手伝いなさいよ」

セルジュという俺と同等？ の力を持った存在がいるため、今日のレリアは少しばかり強気に感じられた。

「五月蠅いな。俺だって忙しいんだよ。姉貴さん ノエルのこともあるからな」

それよりも、以前レリアはセルジュのことを無害だと言っていたが こいつ、アルゼル共和国にとっては有害ではないだろうか？

「姉貴のこと？」

「ああ、実は王国に連れて帰るんだ」

こいつらには先に伝えておこうと思った。

勝手に連れ帰って、文句を言われても仕方がないからな。

でも結婚のことは言わないよ。

どうなるか分からないし。

「こ、困るわよー！」

「俺だって困っているよ。けど、ノエルが苗木の巫女に選ばれたからな」

「 嘘。もう選ばれたの？」

いずれ苗木の巫女となるのは決まっていたが、今の段階とは考えていなかったのかレリアが驚いていた。

「ルクシオンが言うには、苗木自体はそれなりに生えてくるらしいから自分たちで探せよ。イデアルが見つけてくれるだろ」

イデアルに視線を向けると、赤い一つ目を上下に動かし肯定していた。

『ご命令いただければすぐにでも』

レリアはどうしていいのか分からないのか、セルジュに視線を向けていた。

セルジュは興味がなさそうだ。

「聖樹が暴走するんだったか？ イデアルがいれば対応できるから興味はないが ノエルを連れていく理由は聖樹の苗木か？ 巫女だから利用するのか？」

「そうだよ」

少しだけ間を開けてから答えたのは、アンジェの言葉を思い出したからだ。

ただ、俺も本当にノエルを王国に連れ帰って良いものか悩んでいる。

ノエルを連れていくとして、それが彼女の幸せになるか分からない

いからだ。

「最低な野郎だな」

舌打ちをしたセルジュの言葉に反論できなかった俺は、話を切り上げてこの場を立ち去るのだった。

帰り道。

俺の右肩あたりに浮かんでいるルクシオンと話をした。

「お仲間とは仲良く出来たか？」

普段よりも口数が少なかったのが気になる。

実際、ルクシオンは　。

『仲良くする必要を感じません。協力できるならするだけです』

俺のイデアルに対する感想は、物静かで嫌みな球体、だ。

ルクシオンとも違う性格をしているように感じる。

「お前より落ち着いた感じだったな。新人類と一緒に殲滅せんめつしましよ
う、なんて誘ってくるかと思ったのに」

すぐに新人類を滅ぼそうとするうちのルクシオンとは大違いだ。

『私とクレアーレと同様に、管轄が違うため思考に違いがあるのでしょう』

「管轄？」

『はい。私は多機能な高性能移民船です。戦艦としての機能も持っています。移民船扱いです。クレアーレは研究所の管理をしていました』

確かに、ルクシオンとクレアーレには違いがある。

クレアーレの方が緩い感じがある。

「イデアルはどうなんだ？」

『アレは軍の補給艦でした』

「軍隊？ あれ？ お前って軍艦じゃないのか？ 武装とか沢山あるよな？」

『少し違います。マスターが理解するために必要な時間は十時間以上となります。それでも聞きたいですか？』

知っても意味がなさそうな旧人類の組織体系の話か。

「興味がなくなった。お前とは別の所属とか、そういう認識で良いんだな？」

『構いません』

「管轄が違つと仲良く出来ないとか、お前ら人間っぽいな」

笑つてやると、ルクシオンはいつもと雰囲気違った。

憎まれ口を叩かない。

「どうした？ 今日はずかしくないか」

「いえ、不確定な情報なので、お伝えするのをためらっていただけです。それよりも、あの五人と生活力を競うのではなかったのですか？」

「おつとそうだった。夏休みだし、アルバイトでもしてみるか」

「いくら稼げるかの勝負では？ アルバイトで勝てるのですか？」

「あいつらがうまくいくわけがないだろ。コツコツ地道にやる方が勝率は高そうだ」

途中、求人書かれたチラシを確認する。

飲食店のアルバイトを求める求人だった。

「住んでいる場所に近いな。条件も良さそうだし、これにするか」

帰りがけに立ち寄ると、そこで意外な人物に出会った。

アルバイトの面接を受けた店には、ノエルの 犬のノエルの元

飼い主がいた。

ジャンが驚いている。

「何で伯爵様がアルバイトなんてするんです？」

とても不思議そうにしているジャンに、俺も聞き返す。

「お前こそどうしてここにいるんだ？ 学費やら生活費は問題ないだろ」

学園の生徒であるジャンは、ピエールに暴行され入院していた。

そのため出席日数が足りずに留年が決定し、学費の問題から中退を考えていた。

俺がピエールから巻き上げ 違った。賠償金を受け取ったので、そこから学費やら生活費を支援した経緯がある。

今はアルバイトをしながら、勉強をしているようだ。

照れながら、

「え、えっと、何もしないのも落ち着かなくて」

来年から復学する予定なので、今は時間があるらしい。

苦学生だったから、何みせず勉強だけをしているのはどうにも落ち着かないようだ。

「俺の方は社会勉強　あとは、生活力を見せるために働くことにした」

「せ、生活力？」

困っているジャンと一緒にアルバイトをすることになった。

「こつちも色々あるんだよ。それにしても、結構繁盛している店だな」

アルバイトの募集をかけているだけあって、店は賑わっていた。

「何でも、奥さんが働けなくなったそうです」

「え！」

「あ、いや　お子さんが生まれたばかりだそうです。忙しくなってきたこともあってアルバイトを増やすことにしたと聞いています」
てつきり悲しい事情でもあるのかと思ったが、おめでたい話だった。

「そうか。それは良かったな」

雑用をしていると、厨房から店主の慌ただしい声が聞こえてくる。

「おい、リオン！　さつさと皿を運べ！」

店主は俺が伯爵というか、外国の貴族だと知らない。

そのため、ジャンが青い顔をして、

「ぼ、僕が代わりにやります！」

俺が外国の貴族だと知っているジャンは、仕事を変わろうとする。

「駄目だ。早く仕事を覚えてもらわないと困るんだ。ジャン、お前は自分の仕事をしろ」

慌てるジャンに俺は笑顔で言う。

「気にするな。言っただろ 社会勉強だ。立場で色々と言つつもりはない」

そもそも、貴族だと知ったら雇ってくれないからな。

俺は皿を受け取りテーブルに運ぶのだった。

それよりも、店には客が多くて 忙しかった。

店の大きさも結構な広さで、明らかに人手が足りていない。

店主もそこを気にしている。

「商売が繁盛するのは良いが、最近忙しいな。これで看板娘でもいてくれたら完璧なんだけだな」

野郎二人ではお気に召さないらしい。

看板娘、か。

ラウルト家の屋敷では、セルジュがイデアルと話をしていた。

グラスを持ったセルジュはリオンの顔を思い出す。

糞ガキと言ったりオンの嘲笑うような顔に腹が立っていた。

「ムカつく野郎だ」

同じ転生者。

だが、考えはまったく違っていた。

積極的に力を使いたいセルジュには、受け身のリオンが愚かに見えていた。

「人のことを糞ガキつて言いやがって。どんだけ爺なんだよ。中身は六十過ぎの爺なのか？」

手に持ったグラスを飲み干すと、酒が喉を熱くさせる。

そして胃に入るのが分かった。

『飲み過ぎは体に良くありませんよ』

「はっ！ 俺の中身はもう大人だ。酒くらい自由に飲ませろ」

『肉体年齢は成長期です。過度な摂取は体に良くないことに変わり

がありません』

五月蠅いイデアルの小言を無視して酒を飲む。

「お前の用意した酒がうまいから悪いんだ。それにしても飲みやすいな。酔うのが気持ちいいぜ。今の気分は最悪だけだな」

『それはよかった。ですが、やはり飲み過ぎはいけません』

本来なら気分良く酒を飲みたかったセルジュだが、今は苛立っていた。

「あの野郎、ノエルを物みたいに扱いやがった。とんでもない糞野郎だな」

セルジュは学園でノエルと知り合っている。

サバサバした感じの女子で、好みではなかったが好感は持てた。

「ただの糞野郎ならすぐにでも追い返してやるのにさ。お前が警戒しすぎなんじゃないか？ 田舎でノンビリなんて言っている奴だぞ」

『では、すぐにも戦いますか？』

「いや、あいつ自体はたぶん強い。どの程度か分からないけどな」

同じチート持ちの転生者だ。

戦うにしても情報不足。

セルジュもためらっていた。

それに　自分はリオンと仲良く出来そうもないと分かった。

「イデアル、あいつらをどうにか出来るか？」

『どうにか、とは？』

「倒せるのか、って意味だ」

『現状では判断が出来ませんね。私が本格的に稼働したのは最近です。ただ、あちらは最低でも数年のアドバンテージがありますから』

どうにかして懲らしめたい。

一泡吹かせたいと考えているセルジュが、グラスに酒を注いでいると。

『ただ　彼らは危険かもしれません』

「あ？」

視線を酒からイデアルへと向けた。

『本音ではどう考えているか分からないということです。彼は言っていましたね　田舎でノンビリ暮らしたい、と。ですが、彼の立場は王国の伯爵です。一代で随分と上り詰めたとレリアのお嬢さんも言っていましたよ』

「貧乏貴族の三男だったか？　それが確かに伯爵っていうのは出来すぎだな」

グラスになみなみ注いだ酒を飲むセルジュは、リオンについて考える。

（確かに妙だな。田舎で暮らしたいなら出世する必要なんかはないはずだ。もしかして、俺を騙そうとしたのか？　何のために？）

イデアルは告げる。

『フエーヴェル家の一件も見事と言えるでしょう。用意周到、その後大量の宝玉を手に入れ、共和国から莫大な和解金をせしめました。マスター、彼は危険です』

セルジュは酒を飲み干し、

「お前の同類も側にいるから、その程度は簡単だろうけどな」

『私と奴は所属が違います。奴は移民船　特殊な立場です』

「どういうことだ？」

『下手な野心を抱いても仕方がない、と考えると貰えれば』

セルジュは理解出来なかった。

「人工知能が何を望む？」

『新人類の殲滅です』

セルジュは席を立った。

グラスを落とし、床に転がると。

「本気か？」

『可能性はあるでしょう。軍属の私と違いますからね。そんな危険な人工知能と手を組んだりオンという男は 危険かもしれませんね』

セルジュが考え込むと、イデアルの赤い瞳が怪しく光るのだった。

巫女

マリエの屋敷では　朝から空気が重かった。

食卓を囲むのは五人を抜いたマリエたちと　リビアとアンジェ、そしてノエル of 三人だ。

（どうしよう、凄く気まずい）

屋敷で使用人たちが働くようになり、朝から慌ただしく仕事をしなくても生活が出来ている。

それはとても素晴らしいことだと思いつつも、マリエはこの状況に震えてくる。

（何でこの三人がうちにいるのよ！）

静かな部屋は、食器に少しスプーンが触れた音も聞こえてくる。

そんな静寂を打ち破ったのは　アンジェだった。

「殿下たちを屋敷から叩き出したそうだな。どういふつもりか聞かせて欲しいものだ」

マリエはビクリと肩を震わせた。

言葉だけを聞けば「はい」と頷くのが正しい。

だが、この言葉に一体どんな意味が含まれているのかと思うと、怖くて何も考えたくなかった。

（や、やっぱり、ユリウスたちを追いついたのは失敗だったかも。それよりも、なんで兄貴がここにいないのよ！ 顔くらい出してよ。胃が痛いよぉ〜）

今更後悔するマリエは、自分だけ屋敷に顔を出さないリオンに腹を立てる。

カーラは青ざめ、カイルは無表情で給仕をしていた。

アンジエの視線が怖い。

「え、えつと〜」

言い淀んで返事が出来ないマリエは、冷や汗が流れ出ていた。

（助けて、お兄ちゃああん！）

どこかで俺を呼ぶ声がした。

「気のせいだな」

きっと美少女が俺の助けを求めているのだと考え、そんな自分にとって都合の良い妄想などあり得ないと首を横に振る。

俺の勘はよく外れるから、どうせ勘違いだ。

さて、そんな俺が何をしているのかと言えば。

「お前、まだ決まらないの？」

家で朝食を食べていた。

住まわせているユリウスに作らせた朝食は、お世辞にもおいしいとは言えない。

食えなくはない、程度の出来映えだった。

「う、五月蠅い！　俺だって頑張っているんだ」

後半の声がとても小さくなっていた。

おいしくない目玉焼きを食べながら、俺はユリウスに言うのだ。

「他の四人は頑張っているのに、お前だけどうして」

「だ、だから、俺だって頑張っているんだ！　だが、俺が外国の貴族だと知ると、誰も雇ってくれない。自分で何かしようにも、元手となる金もないんだ」

その言葉に俺はフォークを落とした。

「え、お前は自分が外国の貴族だって名乗ったの？」

「当然だ。出自を問われたからな」

確かにどこに出ても恥ずかしくない出自だろうさ。

ホルファート王国の元王太子 あ、駄目だ。

元、の部分が少し恥ずかしいや。

今のこいつは、婚約者を捨て地位を失った“ただの”王子様だったな。

「言ったら誰も雇わないだろ」

ユリウスが持っていた求人広告は、どれも普通のアルバイトだった。

「そ、そうなのか!？」

前世の感覚で言えば、他国の王族をコンビニのアルバイトで採用したいか？ という状況だろう。

責任問題とか色々とあって、雇用主の方が気疲れするな。

俺ならお断りだ。

「駄目に決まっているだろ。俺も黙って働いているし」

「そんなの卑怯だろう!」

「そんなことを言っているから、お前は面接を落とされているんだけど?」

言い返せないユリウスが黙ってしまふ。

こいつの真面目な部分は好感が持てるが、アルバイトを募集したら他国の王族がやって来た雇用者の方が可哀想だ。

詐欺も疑うだろうし、本当だったら自分のミスで大変なことが起きるかもしれない。

そんなことを考えながら仕事をするのは嫌だろう。

断る際も色々と考え、失礼にならないように気を使う雇用主。

あと、他国の王子様に雑用とかさせられないじゃん。

黙っていればよかったのに。

ルクシオンがここで会話に加わる。

『最近、この辺りではホルファート王国の王子がアルバイト先を探している、と噂になっていますよ』

「そうなの？」

『はい。有名な話ですし、まともなアルバイト先を探すのは難しいのでは？』

ユリウスが肩を落としている。

「俺はこれからどうすればいいんだ」

優秀なのに抜けていると考えれば良いのか？

本来ならリビアと出会い、成長するはずだったのにマリエのせいでポンコツにでもなったのだろうか？

「知るかよ。ほら、飯を食ったら学園に行くぞ。今日は補習を受ける日だ」

夜。

アルバイト先に来たのは　ダニエルやレイモンドを連れた兄貴のニックスだった。

というか、毎日来ている。

共和国から賠償金やら物資を受け取ったのは良いが、運ぶための船がなかった。ルクシオンに運ばせてもよかったが、友人たちを頼ることにした。

兄貴や二人がここにいるのは、俺が呼び出したからである。

「今日も来たのか？」

ニックスが苛立っていた。

「こっちは急にお前に呼び出されたんだぞ。共和国の言葉だってろくに覚えていないのに、観光するのも大変なんだ」

ダニエルやレイモンドも頷いていた。

「リオンがいれば言葉で苦勞しないから楽で良いんだよ」

「そうだよな。呼び出したんだから面倒を見て欲しいよ」

こんなことを言っている三人だが、海外旅行を楽しんでいるのは大使館の職員から聞いている。

通訳を連れて、遊び回っているらしい。

俺が出した報酬で、だ。

すると、店主が俺に声をかけてくる。

「なんだ、知り合いか？ 身なりが良いから金持ちか？」

店主に王国の言葉は分からない。

だから、俺たちが貴族だと知らないのだ。

「ええ、だから高い料理をガンガン出しましょう。儲け時ですよ」

「お前の友達なんだろ？ そんなことをしたら駄目じゃないか」

店主が真面目に注意してくるので困った。

こいつらから搾り取れば良いのに。

そもそも、この店で高い料理を食べても、今のこいつらには痛く

も痒くもない。

それだけの報酬を俺が出したからな。

呆れている店主が俺に新人を紹介してきた。

「それより、今日から働く新人だ。仲良くしてやってくれ」

こんな時間帯から？

不思議に思つて店主の後ろを見れば、そこにいたのはウェイトレスの格好をした　ノエルだった。

「え、リオン？」

「ノエル　何でここに？」

どうしてここにいる！？

すると、兄貴がテーブルに顔を突っ伏す。

「あれ、ニックスさんどうしたの？」

レイモンドが問いかけると、兄貴は胃の辺りをさすっていた。

「嫌なことを思い出した。というか、リオン！　お前、これは大丈夫なやつか？　またあの二人を怒らせたりしないよな！」

ダニエルが俺を睨む。

「お前、もしかしてこの人が現地の彼女か！ 二人も可愛くて優しい彼女がいるのに、三人目とかふざけるなよ！」

五月蠅い連中は無視するとして、

「え、なんでノエルが働いているの？」

「え、えっと これには事情があつて」

言い淀むノエルを見て、店主が何かを感じ取ったようだ。

「仕事の後でゆっくり話しをしなさい。それより、その三人が凄いい形相でリオンを見ているが、大丈夫なのか？」

「あ、平気です。言わせといてください」

三人が激怒していた。

「無視するなよ！」

兄貴の声を無視して仕事に戻った俺は、ノエルに何があったのかを考えるのだった。

仕事終わり。

夜も遅く、ノエルを屋敷に送ることになった。

ノエルの話を聞いた俺は 。

「屋敷の空気が最悪だ、と」

考えてみれば当然だ。

マリエの屋敷にはアンジェがいる。

当然、リビアはアンジェの味方　ついでに、リビアとの間に色々あったカーラもいる。

「使用人の人たちも、アンジェリカの身の回りの世話をする人たちと揉めることが多いのよ。なんであんなに仲が悪いの？」

ノエルには不思議でしようがないらしい。

屋敷を用意できなかった大使館に抗議するとして、今はノエルへの説明だ。

「マリエに五人も恋人がいるだろ。アレ　全部略奪したんだ」

「え？」

「アンジェの元婚約者はユリウスでね。あいつ、アレでも元は王太子だよ。今は政略結婚にも使えない名ばかりの王子だけだ」

ノエルが信じられないという顔をしていた。

誰だってそう思うだろう。

俺だって、こうなると分かっていたから、アンジェたちをマリエ

の屋敷に住まわせなくなかったのだ。

すると。

「リオンも妹のことで苦勞するわね」

ん？

「え、妹？」

「マリエはリオンの妹でしょ？ 私もレリアには苦勞させられたわ。あの子、放っておけない子だから」

そのままノエルは笑顔でレリアのことを話すのだった。

「時々、凄く深刻そうな顔をするのよね。器用なところもあるんだけど、不器用なところも多くてさ。双子だけど、あたしと性格なんてまるで違うの。妙に悩むことも多いし、それに」

嬉しそうな表情が、少しだけ悲しそうな顔になった。

「たぶん、あの子はあたしのことが嫌いなのよ」

姉が嫌いだった。

「今の“姉貴”はいいわよ。けど、何ていうのかな 私を下に見ているわ。面倒を見る、って態度が苛々するのよ。世間知らずで、脳筋な癖に妹だからって理由で私を守ろうとするのよ。馬鹿みたい。

何も出来ないくせに頑張るから、私がフォローをして苦労してきたのよ」

愚痴をこぼすレリアがいるのは、セルジュが貸し切ったレストランだった。

周囲には給仕の姿もない。

浮かんでいるイデアルが、酒瓶を空中に浮かべてセルジュのグラスに酒を注いでいた。

『姉妹なりに色々とあるのでしょーうね』

「姉さん」より酷くはないわ。あの女は、猫をかぶるのがうまかった。裏で私のことを馬鹿にしているのを知っていたわよ。けど、姉貴は 気持ち悪いのよ」

前世の姉 姉さんと、姉貴であるノエルを比べるレリアの心境は複雑だった。

セルジュが面倒そうにしながらも話を聞いている。

「お前ら双子なのに似てないからな。ノエルの奴は、口より先に手が出るようなタイプだしよ。俺もあの性格は好きだぜ」

「男には人気よね。やっぱり乙女ゲーの主人公様は違うわ。どんなにミスしても男が守ってくれるもの。あのリオンだって同じよ」

自分とは違い、ノエルを大事に守っている。

その態度が気に入らなかった。

前世の婚約者を思い出す。

『性的趣向の違いでは？ 胸部の大きさに魅力を感じている方のようにですし、その辺りが原因かもしれませんね』

セルジユはそれを聞いて眉をひそめる。

「腹の立つ野郎だな。胸の大きさを助けたのかよ。けど、ノエルってそんなに胸があるか？」

「普通じゃない？」

話題が逸れると、イデアルが修正をかけてくる。

『ですが、一番は巫女としての適性の有無でしょう。彼がノエルを選んだのは、それが一番の理由です』

レリアは自分の右手を見る。

（同じ双子でも、選ばれたのは姉貴　私はどこにいても選ばれない）

『共和国は聖樹の加護の有無が価値観に大きく関わっていますからね。適性があるノエルは、レリアさんを無意識のうちに下に見ても仕方ありません』

「　適性が何よ。巫女が何よ。私は　幸せになりたいだけよ」

セルジユが溜息を吐くと、酒の臭いがした。

「ノエルがそこまで色々と考えられるか？ あいつ、結構な馬鹿だぞ」

『いえ、だからこそ直感的な　それこそ本能的な部分が強いのです』

訂正してくるイデアルの言葉を聞いて、レリアは思っのだった。

（やっぱり、姉なんて最低よね。姉貴も私を格下に見ているんだ。そっか　何だ、前世と同じじゃない）

酔いもあつて判断力が鈍っていた。

そんな中、セルジユが何かを言おうか迷っていた。

イデアルがセルジユを急かす。

『マスター』

「分かっている。　レリア、お前らのことが親父にバレた」

レリアは机に頬を載せ、その話を聞いても驚かなかった。

「そう。でも、私には巫女の適性がないから意味なんかないわよ」

イデアルが赤い一つ目を横に振る。

『レスピナス家の血を引いているだけでも価値があります。それに、

貴方はマスターの大事な理解者ですからね。私も最大限の支援を約束しますよ」

セルジュが言う。

「親父たちは今になって頭を抱えている。リオンからノエルを連れ戻すのは簡単じゃないからな」

アルベルクたちにしてみれば、女一人を助けるために随分と無理をしたリオンが理解できなかった。

だが、ここに来て、レスピナス家の生き残りを知り　リオンに對して更に警戒を強めたのだった。

「お前やエリクの話から、リオンが聖樹の苗木から加護を得たのも知った。六大貴族の当主たちが大慌てだ」

レリアは興味がなかった。

「　そう。それで？」

「彼　リオンという男は、かなり用意周到な男です。ルクシオンに苗木を解析させ、その力で何をするか分かりません」

レリアは酔いもあって、イデアルの言葉が正しく聞こえてくる。

リオンとマリエが、行き当たりばったりであるのを間近で見ているのに、

（アレも演技だったのかな？　姉貴に近付いたのも、エリクから遠

ざけたのも
）

セルジュが酒を一気に飲み干し、

「こっちはエリクを失った。俺以外じゃ最大戦力だろ？ イデアルの話じゃ、別にノエルを奪わなくても問題なかったらしいじゃないか」

「え、でも暴力を
」

顔を上げたレリアにイデアルは、

『カウンセリングで対応できたと判断します。レリアさん 貴女、騙されていますよ』

その言葉にレリアは顔を下に向けた。

（そっか。何だ あいつらも私を馬鹿にしていたのね）

セルジュは言う。

「ノエルと苗木を取り戻す。そのためには、お前の協力が必要だ。手伝ってくれないか、レリア？」

その誘いに、レリアは小さく頷くのだった。

聖樹の巫女ノエル

アルバイト先の飲食店。

店の準備が進む中、俺はノエルと話をしていた。

「マリエの件は触れないで欲しい？」

「そう。妹云々ってやつ。ほら、色々と事情があるから」

まさか、ノエルが俺とマリエとのやり取りを聞いて、兄妹だと思っ
ていたとは 迂闊だった。

外国だからと気を抜きすぎていたな。

ノエルは俯き、

「そっか 色々と事情があるのね」

「う、うん。でも、暗い話じゃないよ！」

前世で兄妹でしたとか、言っても誰にも信じて貰えない。

信じる奴がいたら、俺の方が距離を置きたいくらいだ。

「分かった。黙っておくね」

「よろしく」

これでノエルから、マリエの件が漏れることはない。

安堵していると、ジャンが近付いてくる。

「は リオンさん、それからノエルさん、準備が終わったら少し休憩しておくように、って店長が言っていましたよ」

店の中は俺たちだけだった。

「その店長は？」

「家に戻って娘さんを見てくるそうです」

「またかよ」

少し余裕が出来れば、すぐに娘に会いにいつてしまう。

親馬鹿というか、何というか。

「ノエルさん、実はここなんですけど」

ジャンが仕事のことでノエルに話しかけていた。

「え、何？」

ノエルが顔を寄せ、二人は肩が触れあっていた。

そんな二人の様子を見ている俺は、小さく息を吐く。

あの二人、随分と仲が良い。

犬の名前の件もあり、二人は互いに意識しているのかもしれない。

「今の内に休憩しておくか」

今日も忙しくなりそうだ。

仕事が終わると、俺はノエルをマリエの屋敷に送り届けた。

屋敷に來ると、遠くからドアを開けマリエが俺を見ている。

「何だよ」

「恨むわよ。あに リオン。あの二人が私にプレッシャーをかけてくるの。食事とか生きた心地がしないわ」

「自業自得だろ」

マリエがアンジェとリビアにしたことを考えれば、許されないのは仕方がない。

リビアは特に何をされた、とは思っていないだろう。

しかし、マリエは本来リビアが手にする全てを奪ったのだ。

マリエには負い目があるらしい。

そんな三人が一緒に生活していて、問題がないなどあり得ない。

「何とかしてよ！」

「大使館に言え。もしくは、二人のための屋敷を用意しろ」

「絶対無理！」

マリエに他の屋敷を用意するなど無理である。

ユリウス達が騒ぐので、マリエだけを追い出すわけにもいかない。

マリエと言い合いをしていると、ノエルが俺たちを見ていた。

マリエが小声になる。

「ねえ、なんで少し悲しそうに見ているの？　もしかして、私は同情されているの？」

「お前のどこに同情する余地があるんだよ。実は、前世の兄妹というのを聞かれてしまって、言い訳をしておいた」

マリエがギョツとしていた。

驚くのは分かる。

こいつも無警戒だからな。

「どうするのよ！　アンジェリカたちに知られたら大変じゃない！」

前世云々の話を信じないばかりか、俺とマリエの間に何かあると勘ぐってしまうだろう。

こいつとどうにかなるなど、絶対にありえないというのに、だ。

二人して困っていると、ノエルが俺たちに言う。

「あ、あの！ 誰にも喋らないから。二人とも、本当は色々であって大変なんだよね？」

俺もマリエもチラリと視線を交わし、

「そうなんだ。大変なんだ 色々と」

「そうなのよ。大変なのよ。色々と！」

二人揃ってごまかせたと思っていると、クレアーレが階段を転がって俺たちの前に現れた。

「何をしているんだ、お前？」

屈み込んで聞くと、クレアーレが俺にだけ聞き取れるような声で。

『マスター注意して。二人がもうすぐ来るわ。というか、屋敷で面倒な話をしないで頂戴。みんなの気をそらすのも大変なのよ』

こいつ、俺の見ていないところで頑張っているようだ。

マリエに目で合図を送ると、察したのか口を閉じていた。

ノエルが首をかしげると。

「クレアーレはどこだ!」

「アーレちゃん、これはどういふことなの!」

「出てきなさい、丸いの!」

アンジエを筆頭に、リビア　　続いてメイド長までもが出てきた。

クレアーレは空中に浮かぶと、俺の後ろに隠れるのだった。

『マスター、助けて!』

「え?　　いつたい何を言つて　　」

階段を降りてきたアンジエは、顔を真っ赤にしていた。

リビアも同様だ。

涙目になっている。

「どうしたんだ、二人とも!」

慌てて何があったのかを聞けば、アンジエが手に握りしめた紙を突き出してきた。握りしめているので見る事が出来ない。

「え、これを見れば良いの?」

「だ、駄目だ!　　リオンは見るな」

「ん？」

何に対して怒っているのかとリビアの方を見れば、スカートを気にしている様子だった。

「アーレちゃんが　アーレちゃんが！」

振り返ってクレアーレを見れば、

『てへ、バレちゃった』

などと可愛い音声を出しているのだが、こいつは一体何をしたのか？

メイド長が俺の前に出て、眼鏡を震える指で押し上げ位置を正していた。

「リオン様、これはもしかや　リオン様のご命令でしょうか？」

「え？」

メイド長が俺につきだした紙には、カラープリントがされていた。

ただ、その内容が酷い。

どう見てもかなり低いアングルから、メイドたちの様子を見ているような写真だった。

とても際どい角度である。

「お前、これはどういうことだ？」

『ごめんなさい。マスターのために写真を用意していたら、見つかってしまったの』

ワナワナと震えているアンジエが俺を見ている。

「リオン、お前という男は！」

「ち、違う！ 俺はこんな写真を頼んでいない！」

誤解を解こうとするが、アンジエの顔は真っ赤で興奮しているのがすぐに分かった。

「なら、こいつが勝手に用意したとでも言つつもりか？ わ、私やリビアならともかく、私の世話をする者たちにも手を出すとはどういうつもりだ！」

これは完全に誤解されている。

「違うんだ！ 俺はこんな命令はしていないんだ！」

しかし、ここでクレアーレが言うのだ。

『でも、私が前に送った写真は大事に持っているわよね』

「何を言って あ！？」

思い出したのは、財布に入れている二人の写真だった。

下着姿の写真が入っている。

メイド長が素早い動きで俺の財布を奪うと、

「失礼いたします。 アンジェリカ様、写真を確認いたしました
！」

財布に入れていたのでヨレヨレになっていた写真が二人の手に渡
ってしまった。

リビアが震えながら俺に、

「リオンさん、メッ！」

怒られてしまった。

「違うんだ。これはクレアーレが勝手にしたことなんだ」

肩を落とす俺を、アンジェは腕を組んでみていた。

「言い訳はそれだけか？ まったく、お前という男は 」

そこで、

『あら？ 私は一度もマスターの命令だなんて言っていないわよ』

「な、何？」

「え？」

アンジェとリビアがクレアーレの方を見る。

『だって、本来なら一年は離ればなれたのよ。マスターだって寂しいでしょうし、自分を慰めるためには写真くらいあった方がいいわ。下手に色々と溜め込むと、本当に現地で女を作るかもしれないのよ。その貴女は分かっているのではなくて？』

メイド長がしどろもどろになる。

「そ、それは理解していますが　た、確かにリオン様も男性ですからね」

チラチラ俺を見ているが、俺はそんなに下半身に信用のない男だろうか？

クレアーレに文句を言ってやろうと口を開きかけると、

『マスターったら、二人の写真を受け取ったら大喜びしたのよ。単純で可愛いじゃない』

リビアが俯いて顔を赤らめている。

「そ、そう言われると　何とも言えないですね。リオンさん、もしかして私たちがいなくて寂しかったんですか？」

クレアーレが俺を見た。

そのレンズの青い一つ目が、何が言いたいのか察してしまった。

お前、俺のためにこの状況を作ったのか！

「そうなんだ！ 二人がいないから、せめて写真だけでも持っておきたかったんだ！」

ここは、猛烈に二人と会えなくて寂しかったことをアピールしておこう。

アンジェが先程とは違い、恥ずかしそうにしていた。

「それは仕方がないな。だが、写真が欲しいなら先に言ってくれ。こちらでもっとマシな写真を用意したかった」

流石に下着姿は駄目らしい。

「は、反省しています」

ただ、ここでメイド長が気付く。

「お待ちください。それでは、我々の写真はどういう意味でしょうか？ お二人だけなら理解できますが、我々の写真もありましたよね？」

『あ、それはついだよ。マスターが喜ぶかな、って。ほら、男は制服とか好きだから、メイド服に興奮すると思ったの』

クレアーレの言い訳は酷かった。

マリエが俺に冷たい目を向けている。

「最低ね。ま、待つて。そう言えば、こいつ日頃から転がっていたわ！　もしかして、私も　」

『貴女はマスターのストライクゾーンに入っていないの。可哀想だけれど対象外よ』

マリエが頬を引きつらせながら「こいつムカつく」などと言っていた。

俺もマリエの写真はいらない。

ノエルの方は、色つきの写真を見て「王国って進んでいるのね」などと言っていた。

そうして一段落すると、アンジェがクレアーレを片手で掴んだ。

「さて、写真の件については今後話すとして、お前とはゆっくり話をするべきだな　なあ、クレアーレ」

リビアもプンプンという感じで怒っている。

「アーレちゃん、今日という今日は許しませんよ」

『え！？　何でよ！』

俺もかばえないな。クレアーレは酷すぎる。盗撮とか駄目に決まっているだろ。

「自業自得だ」

『二人はもつとマスターと話をするべきよ！ 私にだって仕事があるのよ！』

メイド長がアンジエからクレアーレを受け取ると、両手でがっちり掴んで逃がさないようにしていた。

「余罪がないか徹底的に調べ上げましょう」

『マスター、助けて』

「クレアーレ、お前の犠牲^{きせい}は忘れないぞ」

『酷い。いつか復讐してやるんだから！』

「お、反抗期か。三人とも、きっちり絞り上げてね」

サムズアップをして見送ると、メイド長が俺に振り返った。

「リオン様も後でお話をしましょう。それはもう、きっちりと」

「はい」

どうやら怒られることに変わりはないらしい。

三人がクレアーレを連れて去って行く。

クレアーレのおかげで良い感じにまとまった。

額の冷や汗を拭くと、ノエルが少し寂しそうに俺を見ていた。

「二人と仲が良いんだね」

「まあ、婚約者だからね」

二度目の人生だが、俺は二人と出会えたのは幸運だと思っている。

「そっか」

ノエルがそう言うと、俺に笑顔を見せるのだった。

マリエは何か言いたそうにして、そして俺から顔をそらして何も言わなかった。

共和国の某所。

そこにはイデアルの姿があった。

狭い取調室には、イデアルの他に何人かの兵士と 女性の姿がある。

その女性は元王国貴族 の関係者だった。

「酷い話だと思いませんか？ あの男は、私たちから地位も財産も奪って今の地位を得たのです。私たちが一体何をしたというのか！」

女性は元“淑女の森”のメンバーで、四十代の中年女性だった。

着ている服はボロボロで、以前は肥え太っていたが今はいくらか

痩せている。

むしろ今の方が健康そうに見える。

『なるほど、それは何とも酷い話ですね』

イデアルは女性の話を頷くように一つ目を動かし聞いていた。

「本当に外道のような、いえ　外道そのもののような男です。あの憎きリオンのせいで、私たち家族は家から追い出されて共和国に逃げ延びました。専属使用人にも捨てられ、家族にも辛い生活をさせています。こんなことが許されますか！」

元は豪華な屋敷で贅沢な暮らしをしていた女性だ。

共和国に逃げ延び、色々な物を売り払いどうにか生活しているような状況だった。

『貴女のお気持ちはよく理解できます。リオンについて情報を提供してくれるのなら、もっと報酬をお支払いしましょう。同じ境遇の方たちがいれば、こちらに紹介して欲しいですね。是非とも王国の状況をお聞きしたい』

「もちろんです！　今の王宮はどうかしています。あのような男を取り立てて私たちを追い出すなど、正気ではありません。あ、そう言えば　」

女性の話を聞いている兵士たちは、何とも微妙な表情をしていた。

だが、イデアルは違う。

『素晴らしい情報です』

言葉では褒めていても、内心では 。

（個人的な主観が強すぎますね。ですが、マスターを納得させる資料程度にはなるでしょう。リオン・フォウ・バルトファルト 貴方には外道になってもらいます）

「聞いているの！ せめて専属使用人を用意できるお金が欲しいの。あと、住まいよ。今の馬小屋のような家では満足に休むことも出来ないわ。すぐに用意して！」

『は、はい。考えておきましょう』

女性の勢いに、イデアルはマスターには会わせられないと判断するのだった。

生活力

街を歩くユリウスは顔面蒼白だった。

「 仕事が決まらない」

アレから身分を隠して面接を受けてもみたが、ルクシオンの言う
とおり噂が広がっていてユリウスを誰も雇わなかった。

大使館が臨時のアルバイトをしないかと言ってきたが、明らかに
気を遣っている。

今のユリウスには、大使館の情けを受けることは出来なかった。

何故なら 。

「 ブラッドの奴、こんなにも人気が出たのか」

壁に貼られたチラシを見る。

ブラッドは何やら手品を披露しているらしい。

美形の芸人として人気が出ているようだ。

少し前には、骨董品を売り買いしているジルクも見かけた。

意外なことに成功しており、動かしている金額が大きい。

グレッグもクリスマスも働いており、補習で学園に顔を出すととても疲れている様子だった。だが、それでも充実している顔をしていた。

「それなのに、俺はこんなにも情けない」

悔しかった。

他の四人は、リオンの言う生活力の高さを証明していた。

なのに、自分だけは未だに働いていない。

落ち込んでいると、とても良い匂いがしてくる。

香ばしい焼き鳥の匂いだった。

屋台の店主が、顔を上げたユリウスに串を一本向けてくる。

「兄ちゃん、今日も落ち込んでいるな。一本食べていけよ」

「いえ、お金が」

お金がない。

持っているのは小銭だけだ。

そのお金も、リオンから借りているものだった。

「おごりだよ。何かあったのか？」

「実は」

事情を説明すると、店主が大笑いをした。

「仕事をしたい？ 兄ちゃん、そんなことで悩んでいたのか」

「笑い事じゃないです。面接で全て落とされてしまって」

「生活に困っていないのに働きたい、ね。そういうのは嫌いじゃないぜ。どうしても働きたいなら、給料は安いがうちで働くか？」

その言葉にユリウスは笑顔になる。

「本当ですか！」

実は串焼きなどが好きなユリウスは、屋台に興味が出てきていた。

「期間も短いし、仕事を教えるにしても雑用くらいだけだな」

「是非ともお願いします！」

こうして、ユリウスも仕事を見つけるのだった。

アルバイト先の飲食店。

夜は居酒屋のような雰囲気だった。

昼は普通の大衆食堂だけだね。

「兄ちゃんたち、金持ちか？ 何か間抜けそうな顔をしているよな。酒をおごってくれよ！」

地元のおっさんたちが、今日も俺の働いている店に来た兄貴や友人たちに絡んでいた。

酔ったみんなは、外国語が分からず俺に絡んでくる。

「リオン、このおっさんがさつきから何か言ってくるんだが？」

俺は笑顔で兄貴に教えてやる。

「その高貴そうなお兄さんたちって褒めているんだよ。酒でもおこれば大喜びさ」

酔った兄貴が嬉しそうにしている。

「え、そう見える？ 俺も少しは貴族らしくなったのかな。おっさん、見る目があるじゃないか！」

喜ぶ兄貴を囲むのは、レイモンドとダニエルだ。

「ニックスさんも次期男爵の風格が出てきたんじゃないの」

「それにしても、共和国のおっさんたちは見る目があるな。おい、リオン。おっさんたちに酒を出してやってくれ！」

俺は笑顔で、

「毎度あり〜。店長、お酒をガンガン出してください！」

店長が俺の顔を見て引いている。

「そっちのお客さんたちに何を言ったのか分からないが、お前が騙したことだけは理解できる」

「時に真実は人を傷つけます。だから、優しい嘘で騙すんです。みんなは仲良く出来る。お店は儲かる。ほら、誰も損をしていない。それに、俺って優しいからみんなが喧嘩をするところを見たくないんです」

「自分のことを優しいとか言う奴を俺は信用したくないけどな。ジヤン、ノエルちゃんは酒を運んでくれ」

「は、はい！」

「お任せ！」

慌ただしくジャンが酒を注ぎ、それをノエルが運んでいく。

テキパキと働くノエルは、酒場の雰囲気慣れている様子だった。

酔った客がノエルのお尻に手を伸ばすと、その手を叩く。

「お触り禁止！ あたしのお尻は安くないよ」

「おゝ、怖いねえ」

店主が悪さをした客を睨んでいた。

「旦那、飲み過ぎだね。兄さんたちからのおごりは下げさせてもら
うよ」

「ま、待ってくれ。悪かった。だから、酒を持っていくことはない
だろ」

騒がしい店内で、俺は俺の仕事をこなす。

ジャンが近付いてきた。

「店長、ノエルさんを気に入っていますよね」

俺は笑った。

「娘に付けた名前がノエルだからな。何か運命的なものを感じると
か言っていたからじゃないか？」

店長の娘の名前はノエル。

そして、ジャンの愛犬の名前もノエル。

どこもかしこもノエルだらけだ。

ジャンの話聞いたノエルなど、大笑いをしていたけどね。

俺がそのせいで婚約者に平手打ちをもらったのを忘れてない？

それよりも、兄貴や友人たちのおかげで商売繁盛だ。

俺が酒を運ぼうとすると、店長が話しかけてくる。

「あれ？ リオン、お前の国の人たちはあの年齢で酒を飲んで良いのか？ お前、酒は飲まなかったよな？」

そうだね。飲まないね。

「ああ、マイルールってやつですよ。俺、二十歳になるまで酒は飲まないんです」

「そ、そうなのか？」

不思議そうにしている店長は、仕事に戻る。

兄貴たちにおごってもらった客が、大喜びで酒を飲んでいた。

「兄ちゃんたち、今日もありがとよ！ よく見たら良い男に見えてきたぜ。酔いが回ってきた証拠だな！」

肩を組んで笑い合っている。

「何を言っているか分からないけど、褒められているのは分かるぞ！ リオン、酒とつまみを追加だ！」

「毎度あり〜」

兄貴は随分と酔っていた。

互いに、酒さえあれば言葉などいらないのを見せつけてくれる光景だ。

ウケる。

帰り道。

俺はノエルを屋敷へと送っている。

ついでに屋敷に顔を出し、アンジェたちと会うのも日課だ。

帰り道で話すのは何気ない会話だった。

「クレマン先生が色々とブツブツ言っただけだよ。シングルでどちらを選ぶか、それとも豪華にダブルでいくか、って。クリスとグレッグを見る目が怖いんだよね。あいつら、一体何をやっているんだか」

補習で顔を合わせるクレマン先生が、クリスとグレッグを見る目が怖いのだ。

二人は心なしか痩せたというか、引き締まった気がする。

肌つやは良いが、疲れているのが余計に気になる。

変なことはしていないと思うが。

「クレマン？ 最近は銭湯に行くのが趣味らしいわよ」

「銭湯？ え、卑猥な感じの？」

「銭湯で卑猥って何よ？ 普通の銭湯よ」

お姉のクレマン先生と、あの二人の間に一体何があるのだろうか？

二人で歩いているとお腹の音が鳴った。

俺じゃないよ。

恥ずかしそうにするノエルが、お腹を押さえて髪をかいている。

「う、ごめん。良い匂いがして」

「焼き鳥かな？」

近くにある屋台で何か買おうか覗くと。

「へい、らっしゃい！」

ねじりはちまきをしたユリウスがいた。

「お前、ここで何をしているんだ？」

驚く俺に、ユリウスは背筋を伸ばして胸に手を当てる。

「働いている」

堂々としたその姿は、恥じることはないと言っているようだ。

いや、別に屋台が駄目とかそんなことを言うつもりはない。

だが、予想外すぎた。

ノエルがユリウスを見ながら、俺に小声で確認を取ってくる。

「この人、元は王太子殿下よね？」

「そうだよ。面白い奴だよ。関わりがなかったら笑えるけど、身近な人たちは一切笑えないのもポイントだね」

俺も笑ってられないから困る。

屋台の店主がユリウスの後ろで笑っていた。

「この兄ちゃん、鶏もさばいたことがなくてね。今の若いのは知らないことが多すぎるぜ」

ユリウスが店主に謝罪していた。

「申し訳ない。はじめて鶏をさばいたときは迷惑をかけてしまった」

「何、今は出来るようになったんだ。これから頑張れば良いさ」

店主は知らないだろうが、そいつはホルファート王国の王子だよ。

これ、どうしたらいいのだろうか？

ノエルも困っている。

しかし、ユリウスは笑顔だ。

「バルトファルト、俺はここで一人前になってみせる！」

お前、いったいいつまで共和国に残るつもりだ。

一人前になるまでに帰国するに決まっているだろうが！

「とりあえず、串を二十本くれ」

「まいど！」

深く考えるのは止めて、俺は串を購入するのだった。

一方その頃。

アンジエはマリエの屋敷でリオンが来るのを待っていた。

普段よりも戻ってくる時間が遅いことを気にしている。

「リオンの奴は遅いじゃないか」

浮かんでいるクレアーレは、そんなアンジエをからかうのだった。

『あら？　もしかして心配しているの？　大丈夫よ。ひねくれ者が監視をしているし、マスターはヘタレだからノエルに手を出さないわ』

一緒にいるリビアは、ノエルの件を納得できていなかった。

「アンジエ、本当にノエルさんを連れて帰るつもりですか？ 本人の意思を確認しないなんて酷すぎます」

そんなリビアの言葉に、アンジエは小さく微笑むのだった。

「お前は優しいな。だが、生まれ落ちた家が家だ。あの女も、その妹も運命からは逃げられないのさ。巫女の資質を持ったならなおさらだ」

リビアが落ち込むと、クレアーレが慰める。

『大丈夫よ。マスターは無理強いしないつもりみたいよ。その気になれば、苗木からエネルギーを抽出する方法は私が考えるわ。私その手のことは得意なの。巫女とかいらないわよ』

リビアが顔を上げる。

「リオンさん、本当はどう思っているんでしょうか？ ノエルさんも何を考えているのか分からなくて」

ノエルはあまり二人と会話が出来ていなかった。

その原因をクレアーレは察している。

『他人の男に手を出しそうになったのよ。気まずいに決まっているじゃない。マリエちゃんみたいに図太くないんじゃない？』

「それどういう意味よ！」

横で話を聞いていたマリエが怒っていた。

だが、アンジェが睨むと黙ってしまった。

「そのままの意味だろうに。言っておくが、私は個人的にお前を許したわけじゃないからな。そのことを忘れるなよ」

「すみませんでした」

リビアが話を戻す。

「でも、これから連れて行かれようとしているんですよ。きっと心細いはずです。それに、妹さんもいるのに、一人だけ連れて行くなんておかしくないですか？」

『エミール・ラズ・プレヴァン　六大貴族の次期当主と恋仲らしいわよ。プレヴァン家が放さないんじゃないかしら？』

「けど！」

アンジェが紅茶を飲む。

（　　まずい紅茶だな）

香りは悪いし味も悪い。

どうしてこんな茶葉を買ったのか理解できない。

ジルクが大量に購入し、処分に困って日頃から飲んでいるというマリエの悲しい事情をアンジェは知らなかった。

カップを置くと口を開く。

「共和国に残しても同じだ。あの女は幸せにはなれないよ。ならせめて」

言いかけたところで、メイド長が叫ぶのだった。

「アンジェリカ様！」

慌ただしく聞こえてくる足音に、アンジェは素早く立ち上がりクレアーレを見る。

「何が起きた？」

『共和国の兵士たちが来ているわね。ひねくれ者に連絡を取りたいんだけど　連絡が取れないわ。これってちょっと厄介ね。数も多いわ』

「え、何？　何なの！？」

マリエが慌て、リビアも立ち上がる。

「アンジェ、どうして共和国の兵士たちが来るんですか？」

アンジェは少しの間まぶたを閉じ、それからゆっくりと開ける。

「レスピナス家の件、どうやら知られてしまったな」

「本当だって。俺、嘘は言わない男だよ」

帰り道、ノエルと話をしていた。

「嘘だあゝ。だって、嘘は言わないだけよね？ 今日も同郷の友人たちを騙していたじゃない」

アンジェともリビアとも違うノエルとの話は、結構盛り上がっている。

「酷いな。それでも誠実を売りにしているのに」

「そうなんだ。なら そんな誠実なりオンは、私を王国に連れて行ってどうするつもりなの？」

急に真面目な話が振られる。

いつか聞かれると思っていたのだ。

片手で購入した串焼きの入った紙袋を持ち、空いた手で髪をかく。

「無理に連れていくつもりはない。アンジェは俺の方で説得するさ」

「本当にそれでいいの？ 私を連れて帰れば、リオンは出世できるんじゃないの？」

「出世？ もう頭打ちだから、これ以上の出世はないよ。それに、俺って田舎でノンビリしたいんだ。宮廷のドロドロした争いは嫌いだ」

ノエルが俯き、理解できるのか悲しい顔をしていた。

「私も分かるよ。実家がそうだったから。私たち、双子だから家中でどちらを担ぐかで揉めていたからね」

レリアからは聞かない話だった。

「レリアは何も知らなかったみたいけど？」

「あの子には適性がなかったの。巻き込まれる寸前だったけど、おかげで助かったわ」

何か隠している気がした。

一瞬、表情が変わった気がしたが 気のせいだろうか？

「巫女の適性か。どうやって調べるの？」

「母さんが、レリアに才能はないって。それだけよ。巫女は聖樹と会話が出来る存在だから、聖樹の判断じゃないかな？ だからレリアを担ごうとしていた家臣たちは落胆していたわ。でも、それでよかったのよ。下手をすれば、どちらかが死んでいたもの」

どこもドロドロとしている。

「レリアが知らなかったのは、聞かされていなかったからか？ 適性がない子には知る必要もないわけだ」

「それでよかったのよ。適性があつたところで、あの時の私たちに

意味なんて
」

何かが近づく音が聞こえてきた。

ノエルを庇うような壁を背にする位置にいた俺は、空を見上げる。

「上か？」

そこにはアロガンツが降下して来ていた。

ルクシオンも一緒のようだ。

『マスター、すぐに戦闘の用意を。共和国が武力を持ち出しました』

「今更か？ それにしても、気付くのが遅いな。怠けていたな」

『違います。ジャミングが
』

アロガンツが俺たちの目の前に降り立つと、急に辺りが明るくなつた。

強い光を向けられ、目が痛くて開けられない。

目を細めると、足音が聞こえてくる。

武装した兵士たちが俺たちを囲み、その中から一人の男が歩み出てくる。

ノエルが呟いた。

「セルジュ」

逆光で表情の见えないセルジュは、神妙そうな口振りだった。

「久しぶりだな、ノエル。 迎えに来たぜ」

強欲

アルベルクが執務室で報告を受けていた。

「セルジュが兵を連れて出ていったと？」

部下が青い顔をしている。

「は、はい！ 友人を連れ戻してくると言っておられました」

アルベルクが拳を振り下ろす。

大きな音が執務室に響き、アルベルクの苛立ちが大きいことを知らせていた。

「愚かな。今更レスピナス家を復興したところで意味などないというのに。すぐに連れ戻せ！ 王国とこれ以上揉めることは出来ない」

部下が執務室を飛び出していくと、アルベルクは頭を抱えた。

「セルジュ、何故理解しない」

上空からライトで照らされていた。

ルクシオンが俺に報告してくる。

『マスター、上空にイデアルの本体が待機しています』

見上げれば、夜空に溶け込むような色合いをしていた。

青く、四角い箱型の輸送船は、ルクシオンと同じ宇宙船だ。

その巨大な船体を隠そうともししていない。

「隠すつもりはないってことか」

俺の呟きに答えるのはセルジュだった。

「お前みたいに隠れてチマチマやるのは好きじゃないんだ。それにしても、聞いていたとおりの機体だな。アロガンツだったか？ 七つの大罪がモチーフなんて、中二病でもこじらせたんじゃないか？」

七つの大罪？

何を言っているのかと、ルクシオンを見ると　。

『アロガンツは傲慢という意味です。七つの大罪の一つですよ』

「お前、もっと早く意味を教えるよ！」

そんな意味があるなど知らなかった。

でも、ちょっと心惹かれる自分がいる。

アロガンツ　　かっこよくない？

『聞かれなかったので』

周囲を警戒しつつ、ノエルを背中に庇っているとイデアル本体から何かが射出され地面に降りてきた。

青い機体は高機動のスリムタイプながら、通常の鎧よりも一回り大きい。

槍を持ったその姿　似ていないはずのアロガンツと共通点が多かった。

同じ人工知能により作り出された機体だからだろうか？

「分かりやすくこいつには【ギア】と名前を付けてやった。この意味が分かるか？」

チラリとルクシオンを見れば、

『強欲です』

「人のことは中二病扱いで、自分も同じじゃねーか！」

セルジュが両手を広げた。

「お前のためにわざわざ用意してやったんだ。お前の自慢の機体をぶちのめすためだよ。ほら、さっさと乗り込め。　格の違いってやつを見せてやる」

ノエルが俺の前に出た。

「セルジュ待つて！ リオンは悪い人じゃないわ。どうしてこんなことをするのよ」

「お前は黙っているよ。それにな、お前は騙されているんだよ。そいつ、お前が思っているような善人じゃないぜ。そうだな 成り上がりの伯爵様よ」

ノエルが振り返って俺を見る。

俺は何も答えなかった。

「う、嘘よ。リオンは優しくて、それで」

「丁寧に俺のことを説明してくれるのは、ギアのコックピットから出てきたイデアルの子機だ。」

「外道騎士。それが彼の二つ名ですよ。調べてみれば、外道の名に恥じぬ行いがゴロゴロと出てきましたね」

「嘘よ、そんなの嘘！」

ルクシオンがイデアルを見ている。

「王国の情報を調べたと？」

「王国が混乱しているときに、共和国に逃げ延びた方たちがいますね。彼女たちから色々と聞けましたよ」

彼女たち 王国から逃げた貴族。

俺を恨んでいてもおかしくない連中は沢山いる。

ノエルが俺を見る目は、少し震えていた。

「リオン、答えてよ。あんたは口が少し悪いだけで、本当は優しい人よね？」

素直に「はい」と言えればいいのだろうが、俺はためらった。

俺が善人？ 笑わせる。

善人は人を殺したりしない。

戦争で人を殺した俺は 外道で間違いない。

善人面してこの場を乗り切るのがベストなのだろうが ところで嘘は言いたくなかった。

「言っただろ。俺は 嘘は言わない男だ。そこの青いのが言う通りだ。俺は外道だよ。善人じゃない」

ノエルが俯くと、ルクシオンがイデアルに赤い一つ目を向けていた。

『随分と汚い真似をしますね』

『汚い？ それは、他国に入り込み、自国の利益を優先した貴方たちのことでは？ 最初から、レスピナス家の巫女に近付くのが目的だったのでしょうか？』

ノエルが悲しそうな顔をしていた。

「そっか。 リオンも巫女の力が欲しかったんだ」

俺は目を閉じる。

ルクシオンが俺を庇おうとしていた。

「違います。 マスターは ㇿ」

セルジュが乱暴に髪をかいていた。

「イデアル、話していても意味がない相手だと言ったのはお前だろ？ それよりも、その外道がどれだけ強いのか確認してやるよ。 名のある騎士を倒したんだって？ なら、その実力を見せてみるよ」

セルジュが鎧に乗り込むと、ルクシオンが俺に進言してくる。

「マスター、あれから逃げるのは困難です。 時間を稼いでください。 私の本体が救援に駆けつけます。 本体さえ到着すれば ㇿ」

アロガンツに乗り込みつつ、俺はその意見を却下する。

「駄目だ。 お前とイデアルが戦えばこの辺りが吹き飛ぶだろうが」

「アロガンツとギアには性能差があると判断します。 シュヴェールトを背負っていないアロガンツでは、性能的に負けています」

腹の立つことに、この世界の技術レベルを無視して作られている。

俺やルクシオンは、その辺りの事情　技術レベルのことでもあって加減したのに、こいつらはそれを無視していた。

「腕でカバーする」

『相手の力量の方が上だと予想します』

「嘘でも自分の主人は褒めろよ」

『そのような機能を期待されているのなら、諦めてください。不要な機能です』

こいつ、本当に俺のことが嫌いすぎじゃない？

イデアル君を少し見習ったら良いのにね。

俺が上空に飛び上がると、ギアも上がってくる。

セルジュの声が聞こえてきた。

『さあ、はじめようぜー！』

俺は眉間に皺しわを寄せるのだった。

「　糞ガキが」

二体の鎧が空へと舞い上がり、互いに激しくぶつかり合っていた。

その場に座り込むノエルに近付くのは　　レリアだった。

「レリア、どうしてここに？」

「これで分かったでしょう。あの男に騙されていたのよ。あいつ、王国ではとんでもない外道じゃない。噂だけでも反吐が出てくるわ。イデアルが用意した資料や、聞き取りをした兵士の話には酷すぎて言葉もなかったわよ」

俯くノエルは紙袋を抱きしめた。

串焼きが入っており、ほんのりと暖かい。

「でも、これで王国に行かなくてすむわ。姉貴もセルジュに助けてもらえば良いのよ。あいつがいれば、問題なんて全部片付けてくれるわ」

ノエルは首を横に振るのだった。

「分かっているの？　ラウルト家はうちを恨んでいる家よ。そんな家を頼るなんておかしいわよ。だって、今のラウルト家の当主と母さんは　　」

「ええ、そうよ。母さんとアルベルクは婚約者だったわ。それを、母さんが守護者として別の人を選んだ。だから恨んでいるのよね？　でも、セルジュが守ってくれるわ」

「　　何でそんなにセルジュを信用するの？　レリア、あんたには

エミールがいるじゃない。どうしてエミールを頼らないの？」

ここでエミールの名前が出たことに、レリアは不快感を示した。

「はあ？ 全部色恋に繋げないでよ。エミールとは関係のない話よ。まだ立ち直ってないの？ だから、あの男に騙されるのよ」

ノエルは首を横に振る。

「そうじゃない。そうじゃないのよ。リオンは本当に優しい人なのよ。レリアの方がおかしいよ。だって、あたしたちの家を滅ぼしたのは、セルジュの実家じゃない！」

リオンはジャンが入院中に飼い犬の面倒を見ていた。

本当に酷ければ見捨てているはずだ。

対して、セルジュの実家はかつて自分たちを殺そうとした家だった。

ノエルには、レリアの判断の方が信じられなかった。

これがまだ、エミールなら理解できたのに。

「それに、あの人たちは酷い人たちじゃない。あんただって、一緒にいたから分かるでしょ？」

レリアは右手を振り上げ、そしてノエルの頬を叩く。

平手打ちが綺麗に決まり、ノエルは吹き飛んで持っていた紙袋を

落とした。

頬を押さえレリアの顔を見た。

「レリア」

「苛々するのよ。何も知らない癖に、そうやってかき乱して！ あんたのせいでこんなことになったのよ！」

ノエルが俯く。

「あ、あたしの？」

「苗木と巫女のアんたがいれば、共和国は何の問題もないわ。それを奪おうとするあいつらが善人のわけがない！」

「あんたこそ、何を言っているのよ。あたしは苗木には選ばれたわけど、聖樹には選ばれない。そんなあたしが共和国に残って何の意味が 待つて、あんた今！」

苗木と巫女がいれば それはつまり、苗木も回収しに向かったということだ。

その会話を聞いていた上空のアロガンツの動きが変わった。

「お前、アンジェヤリビアのところにも！」

「それがどうした？ アレは元々俺たちのものだ。お前が奪ったん

だろうが！』

セルジュの言葉に奥歯を噛みしめる。

またやってしまった。

また油断した。

傷だらけのアロガンツの腕を、ギアの槍が貫いた。

コックピット内はアラートが鳴り続けている。

『性能、更に五パーセント低下。更に下降しています』

ルクシオンの報告が嫌になってくる。

「なりふり構わないってこういうことかよ」

『イデアル アレはただの補給艦ではありません。アレは、いくつかの艦を吸収しています』

「寄せ集めか？ つ！」

操縦桿を握りしめ、蹴りを放ってきたギアの一撃を受け止める。

衝撃が今まで戦ってきた鎧とは違いすぎる。

「黒騎士の爺さん以来だぞ、こんなのと戦うなんて」

思えば、チートを持っているはずなのに苦労させられてきた。

俺の油断が生んだ結果だろうか？

傲慢　確かにその通りだ。

俺にピッタリの機体名だ。

アロガンツの左腕を、ギアが握りつぶした。

『弱い。弱すぎるぞ！　この程度で粹がりやがって！』

蹴り飛ばされ、地面に落とされた俺は踏みつけられる。

ルクシオンの赤い目が俺を見ていた。

『マスター、額に傷が』

「これくらいどうってことない。それよりもちゃんとデータを取れ

」

落ちた俺をサッカーボールでも蹴るみたいにギアが蹴る。

アロガンツがぶつかった建物の壁が崩れ、そしてセルジュの声が聞こえてきた。

『どうした、この程度か？　人を糞ガキ呼ばわりしておいて、お前はこの程度の雑魚だったわけだ。警戒するだけ損したな。敵もいない王国で、一人好き勝手に暴れたお前は猿山の大将と同じだな！』

踏みつけられ、揺れるコックピット内で　。

『マスター、攻撃許可を』

「駄目だ。何度も言わせるな」

ルクシオンを呼べば、イデアルと激しく戦うことになるだろう。

負けるとは思わない。

ただ、この辺りにいる人たちはどうなる？

様子を見た限り、避難などさせていなかった。

「準備不足にも程があるだろうが。もっとやり方を考えろ、この糞ガキが」

セルジユが槍を振り上げ、コックピットを狙っていた。

「容赦ないな」

荒々しく、そして俺のように悩まないこいつは羨ましい。

それよりも、だ。

「何で」

槍が振り下ろされようとすると、地面に転がるアロガンツの前に両手を広げたノエルが立っていた。

ギアが槍を肩に担いだ。

『何のつもりだ、ノエル？』

『この人にこれ以上、酷いことをしないで。あたしがあんたたちについていけば文句ないのよね？』

『そいつがどれだけの外道か知っているのか？ イデアルが調べたが、こいつは生きていちゃいけない人間だぞ』

言われたい放題だ。

ルクシオンが低い電子音声で呟いていた。

『やってくれましたね、イデアル』

ノエルに駆け寄るのはレリアだ。

俺の方をとて冷たい目で見ている。

『姉貴、いい加減にしてよ！ 怪我をしたらどうするつもりよ！』

『セルジュ この人をここで殺したら、あたしもここで死ぬわ。あんたたちにとって、それは困るのよね？』

ノエルの表情は見えない。

外道と言われ、否定しなかった俺をどうして庇うのか？

これも主人公の勘というやつだろうか？

まったく 何度も助けられて情けない限りだ。

「勝手にしろ。どうなっても知らないからな」

セルジュがそう言うのと空へと舞い上がり、イデアル本体へと帰還していった。

俺の方は、頭を打ったのか意識が薄れていく。

「ルクシオン、痛み止めか意識を失わない薬を頼む。もう限界だ。ないならアレを使え。このまま意識を手放したくない」

「体に負担がかかるので認めません。そのまま意識を失ってください」

「お前は本当に腹立たしい奴だよ」

すると、コックピット内のモニターに、振り返ったノエルの顔が見えた。

アロガンツの頭部に近付き額を寄せている。

「いままでありがとう。あの二人を大事にしてね」

集まってきた兵士たちに連れて行かれるノエルを見ると、残った兵士たちがアロガンツを蹴り始めた。

「やっぱり王国の騎士はたいしたことがなかったな」

「セルジュ様がいれば共和国は最強だ。分かったか、このゴミ屑が！」

『おい、あつちに生ゴミがあるぞ。ゴミに相応しい飾り付けをしてやろうぜ』

やりたい放題の兵士たち。

一瞬　ユリウスたちをボコボコにしたときの光景が目の前に浮かんだ。

あいつらもこんな気持ちだったのかな、と。

「ルクシオン、屋敷のみんなは何としても守れ。これは命令　だ」

ルクシオンの返事がとても遠くから聞こえてくる気がした。

『あちらにはクレアーレがいます。何とかしているはずです』

ラウルト家の兵士や飛行船に囲まれたマリエの屋敷。

ガタガタと震えているマリエは　。

「こんな時に限って男手が足りない!」

泣いていた。

自分である五人を追い出したのも原因だが、リオンもこの場にないのが心細かった。

隣でマリエを慰めるのはエリクだ。

「姉御、心配しないでください。もしもの時は、俺が姉御を守ります！」

「あんた廃嫡されて家を追い出されたじゃない。私、そういう男は信用しないの。無理しないで自分の身の安全を優先しなさい」

「う、うつす」

エリクが自分の情けなさに肩を落とすと、アンジエがクレアーレを見た。

「屋敷にいる者たちはほとんどが非戦闘員だ。多少は戦えるが、勝てる見込みがない。リオンが来ればどうにでもなるだろうが、それまでのげるかどうか」

そんなアンジエの考えに、クレアーレは賛同しなかった。

『駄目ね。この調子なら、マスターも後手に回っているわよ。それより、相手の要求ってアレよね？』

リビアが手紙を持っている。

兵士たちが投げ込んだ要求が書かれた紙だ。

そこには、苗木を差し出せとあった。

「差し出せば命の保証はするそうです。手荒なまねはしない、と。ただ、渡さないならこちらでも対応の対処をすると書かれています」

アンジェが目を細める。

「不意打ちのような真似をする。貴族の誇りはないらしい」

『勝つための戦い方よね？ 誇りとか私にはよく分からないわ』

「そうだな。勝つための戦い方だ。だが、それだけだな」

クレアーレが苗木を見つつ、

『なら、これをさっさと壁の外に投げちゃいましょうか』

「え!？」

マリエが驚いた声を上げた。

敗北

屋敷の周囲をラウルト家の兵士が囲んでいた。

マリエは周囲の光景を窓からこっそりと覗くと、その数にゴクリと唾を飲む。

「数百人はいるんですけど！」

屋敷の周囲には塀　壁があるにしても、兵士が周囲を囲んでいては安心できない。

乗り越えてやって来そうな勢いだ。

エリクが兵士たちを見ながら、

「ラウルト家の精鋭か？　動かしているのはアルベルク殿じゃないな　まさか、セルジュか？」

セルジュと聞いて、マリエは思い出すのだった。

（最後の攻略対象の男子　同じ転生者って聞いたけど、兄貴が出し抜かれるってどういうことよ！　ルクシオンもクレアーレも何をしていたのよ）

そこで気が付く。

「待って。そのセルジュってどこ？」

「ここにはいないみたいです、姉御」

「それって、あに　リオンの所に行ったんじゃないの？」

「この様子ならあり得ますね。ノエルが巫女だと知れば、六大貴族たちは喉から手が出るほどに欲しがるはずですから」

それを聞いたアンジェが、苗木のケースを手にとった。

「こいつを差し出したら、すぐにリオンのもとに向かうぞ。クレアーレ、準備をしろ」

「アンジェ、私も行きます！」

リビアが名乗り出ると、メイド長が苗木のケースをアンジェから受け取るうとする。

「アンジェリカ様、私が外に出ます。アンジェリカ様が外に出てはなりません」

「私にお前の後ろに隠れると？　冗談を言っな」

メイド長の意見を見無視して外に出ようとするアンジェは、苗木を見て少し考えていた。

「このケースがなければ、苗木は枯れるのだったか？」

どうせくれてやるなら、意趣返しでケースをすり替えるか苗木だけを渡そうと考えているようだ。

かなり怒っているのがマリエにも分かった。

そんなアンジエを止めるのは、クレアーレだった。

『可哀想じゃない。そのまま渡してあげた方がいいわ』

「お前の口から可哀想と聞けるとは思わなかった。だが、今は急ぐとするか」

リビアとメイド長が後に行く。

エリクがマリエを見ていた。

「姉御、俺たちはどうしましょう?」

「どうしましょうって　とにかく、兵士がいなくなっからリオを探しに行くわ。カイルとカーラは留守番をさせましょう」

屋敷の外に出たアンジエは、階級の高い兵士に苗木の入ったケースを渡していた。

「これが望みの苗木だ。さっさと帰ってもらおうか」

兵士は苗木を両手で恭しく受け取るも、口調は粗暴だった。

「王国の女は品がないな。奴隷を従え、男を顎でこき使つと聞いた。お前を見ているとよく理解できる」

兵士ですら、アンジエに対してこの態度だ。

それは、彼らの不安が取り除かれたこともあり、安堵から普段よりもたかが緩んでいたからである。

「一度リオンに負けておいて、そのような口をよくきけるものだな」

「敗北？ ああ、知らないのか。ラウルト家の跡取りであるセルジュ様が、お前ら王国の英雄殿を倒したのだ。今頃は死んでいるかもしれないな」

その言葉を聞いて、アンジエが動揺で瞳を揺らした。

兵士は余裕があるために、それに気が付き笑みを浮かべる。

「共和国と王国では格が違う。共和国の英雄であるセルジュ様に比べれば、お前ら王国の英雄は格下だ。相手にもならないというのをこれで理解できただろう？」

共和国はやはり強いのだ。

兵士たちはセルジュの登場で、自尊心を取り戻していた。

「お前ら、それがどういう意味か分かっているのか？ 事実なら」

「アンジエ！」

アンジエが怒りで手を握りしめると、リビアがその手を両手で握

る。

「今はリオンさんのことが先です。急がないと」

「そう、だな。クレアーレ、案内できるか？」

『ノイズが酷いけど大丈夫よ』

兵士たちは苗木を大事に運び、そして屋敷から去って行く。

「お前たち、すぐに苗木をアルベルク様に献上するぞ。ついでに、王国の騎士はやはり相手にならなかったと報告しなければいけないな」

笑いながら去って行くラウルト家の兵士たち。

アンジェが奥歯を噛む。

（　　アルベルク。六大貴族の代表だったな。この借りは必ず返す。必ずだ）

リビア、アンジェ、メイド長の三人が、クレアーレの案内でリオンのもとまでやって来た時には　　アロガンツは酷い状態だった。

「　　酷い」

ゴミ箱をひっくり返し、ゴミをかけられている。

落書きもされ、そこには王国を馬鹿にする言葉も書かれていた。

周囲では、遠巻きに様子を見ている共和国の人々がいる。

メイド長が口元を押さえる。

「アロガンツがここまで損傷するなんて　やはり、レプリカだからでしょうか？」

本物のアロガンツは、表向き公国との戦争で失われたことになっている。

クレアーレが同意するのだった。

『そうね。レプリカだから仕方がないわね。さて、ひねくれ者は元気がしら？』

アロガンツに近付いたクレアーレは、コックピットハッチを開けた。

中から出てくるのはルクシオンだ。

『遅い』

『怒らないでよ。それよりも、自分で回収しても良かったんじゃない？』

『イデアルに邪魔をされていました。それに、マスターが私の本体をこの場に呼ぶことを拒みましたからね』

『あら、マスターらしいわね』

リビアとアンジェがすぐに近付き、リオンの無事を確認する。

「リオンさん！　よかった。まだ生きています」

治療魔法でリオンを癒すリビアは、安堵するとアンジェに説明した。

「気を失っているだけです」

「血が出ている！　それもこんなに大量に！」

メイド長が狼狽しているアンジェを宥めていた。

「アンジェリカ様、頭部からは大量に血が出ます。リビア様の方が専門ですから、ここは判断を信じましょう」

ルクシオンがリビアに近付いてきた。

『おっしやる通り気を失っているだけです。既に止血はしてあります』

「よかった。本当によかった」

リビアが安堵して涙を流すと、アンジェがルクシオンを問い詰めるのだった。

「お前がいながら何というさまだ。ルクシオン、一体何があった？」

『　ノエルが連れて行かれました』

「だろうな。あいつらにとってノエルは是が非でも欲しい存在だ。それよりも」

『イデアル　私と同じ存在が、セルジュというラウルト家の跡取りに従っています。いえ、従っているとは言えませぬ』

「お前と同じ？　まさか、パルトナーのような飛行船を持っているのか？　アロガンツと同等の鎧も？」

話をしていると、空からロボットたちが降りてくる。

リオンをコックピットから引きずり出すと、アロガンツを回収するのだった。

『話は屋敷に戻ってからにしましょう。いえ、すぐに飛行船へ戻った方が良くかもしれません。これで終わると思えませぬ』

アンジェは、気を失っているリオンの方を気にかけている。

「　分かった。大使館の方にも連絡しておこう」

クレアーレが周囲を見ていた。

リビアが声をかける。

「アーレちゃん、どうしたの？」

『鎧で戦ったのに、まだ周囲に人がいるのよ。普通、避難させない

？ 気の利かない人工知能よね』

「え、えっと？」

『マスターは、周囲の人たちを心配してルクシオンのひねくれ者を呼ばなかったのよ。なのに、自国の領民を守ろうとしない統治者ってどうなのかしらね？ それとも、その程度の扱いなのかしら？』

リビアはそう言われて周囲を見た。

「リオンさん、ちゃんと考えていたんですね」

『だから負けたのだけだね。マスターったらお人好しすぎるわ』

リビアは気を失っているリオンを見て、俯いてしまっただった。

「もう、戦って欲しくありません」

『その意見には同意するわ。さて、これから忙しくなるわよ』

目を覚ますとベッドの上にいた。

少し前に使用していたアインホルンの自室だと気が付いた俺は、ルクシオンを呼ぶ。

「ルクシオン、状況は おっと」

上半身を起こすと、ベッドの側で寝ているアンジェとリビアがい

た。

近付いてくるのはクレアーレだ。

『あいつなら忙しいから、私が代わりに側にいてあげたわよ。どう嬉しい？』

「お前はともかく、この二人に関しては嬉しいな」

『酷いマスターね。朝方まで起きていたのだけど、色々あったから疲れているみたいね。寝かせてあげましょう』

「だな。それで、状況は？」

『もう最悪よ』

クレアーレからの報告を聞いて、俺は頭が痛くなりそうだった。

というか、痛い。

手で触れると包帯が巻かれている。

『六大貴族は大慌てね。遠くから様子を見ている限り、ラウルト家の独断みたいよ』

「どいつもこいつも俺の邪魔ばかりしやがる。それより、なんでもっと詳しく調べない？ いつもならもっと」

『イデアルの奴、軍の情報艦から部品を横取りしたみたいなのよ。おかげで警戒されて思うように調べられないの』

ルクシオンも似たようなことを言っていたな。

「お前らでも無理なら相当だな。詳しい話を聞かせろ」

「そこは、もう一人に聞いてみましょうか」

クレアーレの瞳がドアを向く。

ドアの向こうで気配がした。

「マリエか？」

「そうよ」

どうやら一人らしい。

部屋に入ったマリエに、クレアーレが問うのだった。

『さて、マリエちゃん 聞かせて欲しいの。ゲームでは、イデアの性能はどの程度のもだったのかしら？』

マリエは詳しく知らなかった。

「課金しないと手に入らないから、詳しくは知らないわ。その時はゲームを買ったらお金がなくなったし。ただ、大きな箱型の青い飛行船みたい」

俺が見た飛行船 宇宙船と同じだな。

「性能は？」

「分からないわよ。そもそも、ステータスとか一作目と違うから比べられないわ」

面倒だな。

「でも」

マリエが何かを思い出したようだ。

「詳しい設定は知らないけど、攻略サイトの書き込みには凄く便利だ、って書かれていたような気がするわ」

「便利？」

「本来の設定は補給艦だったみたいよ。というか、補給艦って何をするのか私は知らないのよね。補給するだけじゃないの？」

設定にもあまり興味がなく調べていなかったようだ。

「クレアーレ、セルジュの目的は何だ？ ノエルと苗木を手に入れて、ラスボスへの備えにしたいのか？ それとも、聖樹をさつさと伐採するつもりか？」

『私に聞かれても困るわね。ただ、ルクシオンが言っていたんだけど イデアルって元は軍属なのよ』

それは聞いた。

だが、その先は。

『直接新人類と戦っていたイデアルが、あんなに穏健なはずがないって言っていたわ。私たちですら拒否反応があるのに、あいつが落ち着いているなんてあり得ないわ』

新人類と戦ってきたイデアルが、あんなに落ち着いているのはおかしいのか？

「どうして言わなかった？」

『不確定情報だからね。それに、あいつ自身は戦闘経験がないと思っていたのよ。けど、あいつ実戦を経験していたらしいわ』

ルクシオンが船体の様子から、戦闘の修理跡を発見したらしい。

「実際に新人類と戦っていたのか」

『可能性は高いわよ。何を考えているのかしらね。大体予想は出来るけど』

マリエが青い顔をしている。

「ま、待つてよ。なら、チート戦艦と戦うの？」

『一応は補給艦よ。武器とか積み込んでいると厄介だけどね』

「そんなことはどうでもいいのよ！ 兄貴、本当にあいつに勝てるの？ 無理なら今すぐにでも逃げないとまずいわよ！」

圧倒的優位な立場ではいらなくなってしまった。

だが、気になることがある。

「あいつら、俺を外道と呼んだ」

「兄貴の二つ名じゃない」

「大事なのはそこじゃない。俺は実際に外道だ。だけどな あそこまで言われる筋合いはないぞ。俺が戦ったのは王国の防衛戦だ。それ以外は不殺を貫いていた」

セルジュとの会話の内容を話すと、マリエが首をかしげていた。

「確かに変よね。兄貴、一応は救国の英雄だもの」

「一応？ 誰かさんたちのおかげで、立派な救国の英雄だよ！」

話が逸れたので戻す。

「俺は確かに人を殺した。外道だ。そこに言い訳は出来ない。だけど、あまりにも酷いというか、俺がまるで嬉々として人を殺したみたいと言われたぞ」

『まあ、酷い』

「兄貴は、他人を煽りはしても嬉々として人は殺さないから酷いわね。レリアたちも信じていたのよね？ あいつ絶対に許さないわ」

あいつがセルジュ側に付いたおかげで、こっちは あれ？ 別

に困らないぞ。

原作知識が手に入らないのは痛いが、いたところでどれだけ役に立ったか分らない。

「あいつら、何をするつもりだ？ 聖樹を切り倒すから苗木が欲しいっていうなら、俺たちに相談すれば良いじゃないか。まるで最初から話の分らない奴、みたいな感じで対応してきたぞ」

『マスターたちは行き当たりばったりだからね。信用ないわね』

「あいつら、いったい何をするつもりだ？」

右手の甲にある苗木の加護を受けた証 紋章を見て、俺はセルジュたちが何を考えているのか理解に苦しむのだった。

「ん？」

「どうしたの、兄貴？」

「いや、気のせいだ」

一瞬、リビアが動いたような気がしたが 気のせいだろう。

アルベルク

アインホルンがある港。

甲板に出た俺は、ルクシオンと話をしていたのだが。

「おい、アインホルンを二隻も造ったのか？」

『クレアーレの奴が勝手に建造したのです。私の設計したアインホルンを改造し、整備用のパーツを勝手に使うなどと　許せないと思いますか？』

「まあ、アンジェはリコルヌの色に嫌がるだろうが、白はリビアに合うから別に良いか」

『マスター？　もう少し厳しい対応を取るべきですよ』

「そつだな。　さて、お前の考えを聞くとするか」

船内で一晩過ごしている間に、ルクシオンは随分と動き回っていた。

『セルジュが一人で行動を起こした事になっていますが　イデアルに動かされたと考えています』

「　続ける」

『当初、セルジュはマスターと仲良くしようと話を持ちかけました。

あれ自体、イデアルが誘導したように感じられます』

軍属。

新人類との戦争を経験した宇宙船。

そんなイデアルが、自分よりも大人しいなどと考えられない、というのがルクシオンの考えだった。

「お前の思い込みじゃないんだな？」

『イデアルがセルジュを誘導しています。実際、セルジュに届ける情報を自身で選別していますからね。知らないでしょうが、マスターの情報を売ったのは共和国に逃げ延びた王国貴族の関係者たちです。“淑女の森” 覚えていますか？』

「忘れてくても忘れられない名前だな」

『彼女たちから得た偏った情報を、故意に伝えたと考えられます』

「毛嫌いされるわけだ。まあ、俺がセルジュなら、同じように信用しないだろうけどな」

『私はイデアルのようなことはしませんよ』

「え、そうなの？」

『マスターの中で私がどんな評価なのか気になりますね』

どんなに言い訳をしても、人殺しだからな。

距離を置きたい気持ちも分かる。

それが、この世界の価値観と違ってしていると分かっているとしても、俺にはどうにも馴染めない。

「あいつらは、これから何をするつもりだ？」

『聖樹に関しての対応はいくつか予想できますが、今後の展開は一つでしょう。聖樹など関係なく、イデアルは新人類殲滅に向けて動きます』

「お前ら極端すぎるよな」

人工知能はどいつもこいつも極端だ。

『レリアを仲間に取り入れたのは、自身のマスターと交配させるためと考えられます』

噴き出しそうになった俺に対して、ルクシオンは淡々と告げてる。

『重要なことです。本来なら、私もマスターの結婚相手にマリエを勧めたかったですからね。彼女にも旧人類の遺伝子が色濃く残っていますから』

「ないわ。妹に手を出すと、創作の中だけの話だわ」

『現実にも事例がいくつもあります。創作の中だけの話ではありませんよ。そもそも、肉体的には赤の他人なので近親交配にはなりま

せん』

神話の時代から、兄妹で というのは実例があるらしい。

そつえば、俺も聞いたことがあるな。

「そうか。でも俺はないな。マリエを女として見られないし」

あいつは女じゃない 妹だ。

『残念です。まあ、つまり、イデアルも同じことを考えていると言いたかったのです』

旧人類の遺伝子が欲しい。

そのために転生者を利用すると あれ？

「おい、あいつはもしかして、俺たちの遺伝子情報を欲しがっていないか？」

『今日は鋭いですね。正解です。可能な限り、転生者を探すために動くと考えられます。そのために都合が良いのは、セルジュがこの世界の王になることです。それから、マスターに止めを刺さなかったのは、生きたサンプルが必要だからだと思いますよ』

「生きたサンプル？」

『人体実験用のサンプルです。最悪、なくてもいいのですが、貴重な転生者ですからね。クローンでは駄目だと思いますし、生きた状態で確保したかったのでは？』

最悪だな。

それよりも、共和国に二人　現状、王国にも俺とマリエの二人だけ。

イデアルがたった四人で満足するとは思えなかった。

リオンの部屋。

目を覚ましたアンジェは、リオンのベッドに自分が寝ていることに気が付いた。

「リオン！」

慌てて周囲を確認すると、リオンの姿はなかった。

ただ、近くにリビアがいる。

椅子に座って神妙な顔をしていた。

「リビア、リオンの身に何かあったのか？」

リビアはアンジェの声にハツとして、少し間が空いてから首を横に振った。

「いえ、今は甲板に出ています」

「そうか。なら、大丈夫だな。よかった。本当によかった」

だが、リビアの表情は優れない。

「どうかしたのか？ まさか、後遺症があるのか！？」

リビアが首を横に振ると、アンジェは安心した。

ただ。

「アンジェ、リオンさんとマリエさんには、何か関係があるんでしょうか？ 兄妹という話があるとか？」

アンジェが首をかしげる。

「何を言っている？ そんなことは“あり得ない”」

「でも、もしかしたら生き別れた兄妹とか」

リビアが何を言いたいのかわからなかった。

アンジェはそれだけはないと断言できる。

「ない。一年の一学期にラーファン子爵家は徹底的に調べ上げた。当時はユリウス殿下の愛人になるかもしれない女だと思っていたからな。公爵家でも徹底的に調べた」

それは王宮も同じだ。

結果、血縁関係に関しては驚くほど何も出てこなかった。

実家の素行不良の方が問題だったくらいで、マリエ自身には何もなかったのだ。

精々、治療魔法が使えるだけの子爵家の娘でしかなかった。

リオンと何か接点があるなどという報告はない。

「でも、バルトファルト家に事情があるとか」

「それもない。私の実家が調べたからな。公爵家の娘が嫁ぐのだから、色々と調べるに決まっている。リオンとマリエの間には何もない」

「でも」

「どうした？ 今日はおかしいぞ。疲れているなら休め」

リビアが俯いた顔を上げた。

「この部屋にマリエさんが来たんです。その時、リオンさんのことを“兄貴”って呼んだんですよ」

アンジェはその言葉に困惑するのだった。

「え？」

ここで互いに親しいとか、実は付き合っているとかなら対応も出来る。

怒るし、何をするか自分でも分からない。

だが、流石に兄貴は想定外だった。

「あ、兄貴？」

「はい。確かに呼んでいました。恋人という雰囲気でもなくて
本当の兄妹のようだったんです。言葉に出来ませんが、兄妹なん
だろうなって寝ぼけながら思いました。でも、そんなことはあり得
ないし」

アンジェモリビアも、首をかしげるのだった。

「血縁関係はないはずだ。そもそも、バルトファルト家とラーファ
ン子爵家は接点すらないぞ。 なかったはずだ」

アンジェも自分の答えに疑問が生まれてくる。

関係はないはずなのに マリエはリオンを「兄貴」と呼んだの
だから。

「マリエはどこだ？ 直接話を聞く」

「えっと、屋敷に荷物を取りに向かいました」

「なら、戻ったときにでも聞くでしょうか。リオンにも聞いておき
たいが、今は休ませてやりたい」

あれだけ手ひどく負けたのだ。

きつと落ち込んでいると思う二人だった。

「腹減ったな。何か食い物をくれ」

『マスターは元気ですね。強敵が現れたのに緊張しないのですか？』

「生きていればお腹が空くんだよ」

甲板の上でルクシオンと話をしていた俺は、お腹が空いていた。

『ノエルが連れ去られたのにのんきですね。イデアルにとって、ノエルはレリアから信用を得るための道具です。重要度は低いのですが？』

「共和国にしてみれば苗木の巫女様だ。手荒なことはされないだろうさ」

ノエルが無事なら問題ない。

何かしたら俺も　。

考え込んでいると、下が騒がしくなってくる。

見下ろすと、共和国の兵士たちがアインホルンを臨検すると騒いでいた。

以前俺たちを臨検した隊長殿が、包帯を巻いた状態で乗り込んできている。

「あの隊長殿も元気だな」

『随分と嬉しそうですね。マスターが敗北したと聞いて、仕返しのつもりで来たのでしょうか？』

対応するために下へ降りることになった。

出入り口付近では、メイド長がその隊長殿と言いつけている。

「許可もなく急に来て横暴ではありませんか！」

「臨検だと言っている。そもそも、ここはアルゼル共和国だ。王国の弱者は相応の態度でいるべきではないのかね？ それとも、我々に敗北したのを理解していないのかな？」

「騙し討ちのような真似をしておいて」

共和国の末端は、今日も元気だった。

俺が姿を見せると、隊長殿が笑みを浮かべている。

「待っていましたよ、伯爵。さあ、さつさこの飛行船を臨検させてもらいましょうか。徹底的に調べ上げて」

よからぬことを考えていた隊長殿の後ろには、帽子をかぶった男性が立っていた。

長身で鍛えられた体をしており、隊長殿とは正反対のナイスミドルだ。

「退いてもらおうか」

そのナイスミドルが帽子を取りながら言うと、隊長殿は振り返りながら。

「いったい誰だ！ わしに指図を　す、するのはえっと、あの、その」

急に声が小さくなり、震えはじめる隊長殿にナイスミドルが言う。

「手を出すな。私はそう命令を出しているはずなのだがね？」

六大貴族の代表アルベルクが、数人の部下を連れて俺の所にやって来た。

隊長殿は泡を吹いてその場に座り込んでしまったのを、部下たちが引きずっていく。

アルベルクさんが俺を見つけると、

「失礼した。息子の件も含めて謝罪をしたい。少し話せないだろうか？」

「俺の飛行船に乗り込んでくるなんて、あんた良い度胸をしているね」

流石はラスボスと言ったところか？

俺は応接間に案内する。

アインホルンの応接間は、ピエールたちに汚されていたが今は元通りだった。

ロボットたちがすっかり片付けてくれたよ。

そんな応接間で、二作目のラスボスと向き合っているのだが。

「本当に謝罪がしたいだけ？」

耳を疑った。

「そうだ。息子の件は本当に申し訳ないと思っている」

「ついでにさっきの件も謝罪して欲しいね。部下の責任は上司が取るべきだ。責任者なのだから当然だよな？」

「痛いところを突く。その件も謝罪しよう　この度は大変失礼をした。申し訳ない」

口だけなら何とでも言える。

だが、どうして俺に会いに来たのかが分からない。

こいつの目的は何だ？

「議長代理である前に、私も一人の親だ。息子のことには責任を感じるな」

「正式に謝罪は出来ないのに？」

極秘に会いに来た理由 エリクの親と同じだ。

メンツがあつて、共和国として正式に謝罪が出来ない。

「外国人の君から見れば、到底理解できないのだろうね」

「国際問題を軽視しているとは思えませんね」

一瞬、ピエールをボコボコにしてやったことを思い出したが、あの件は先に手を出したのがピエールだから問題ない。

たぶん。

「共和国とはそういう国だ。ホルファート王国にも悪いとは思っているよ」

正式な謝罪はしない。しないが、親として謝りに来たそうだ。

「ノエルと苗木を返して欲しいですね」

「それは出来ない。既に彼女がレスピナス家の生き残りであると知られてしまった。私を含め、六大貴族はどんな手を使つても彼女を守るだろう」

「苗木の巫女だから？」

「そうだ。君が守護者に選ばれたのも知っている。出来れば、君と

は友好的な関係を築きたかったよ。もつと早くに君という人間を知っておくべきだった」

外道と思われる俺を利用する目的だろうか？

こいつもイデアルに何か吹き込まれたか？

「それでも善良な小物でしてね。ご期待には添えられませんよ」

「それでは、善良な小物に敗北した我が国は何と呼ばれるのだろうか？」

しばらく黙っていると、アルベルクさんが立ち上がるのだった。

「フェーヴェル家が君たちを捕らえようとしている。その動きに同調する家もある。悪いが、逃げるなら早い方がいい」

「俺たちを逃がすのか？」

「私個人は王国と事を構えるつもりはない。戦争をしたいと言っのなら迎え撃つだけだ」

個人的な意見、ね。

ラスボスが穏健派を気取っているのだろうか？

「なら聞かせてくださいよ。貴方個人の考えを知りたい。これから共和国をどうしたいのか 是非とも聞いておきたい」

アルベルクさんは俺に背を向けたまま口を開いた。

だが、俺の問いには答えてくれない。

「私は君が羨ましいよ。いや、君がいる王国が、かな」

アルベルクが港から領地へと戻る途中。

リオンと話をしたときのことを思い出していた。

飛行船の休憩所には、アルベルクと部下が数人いるだけだ。

部下がアルベルクに疑問を投げかけている。

「アルベルク様、何も謝罪など不要でしたのに」

アルベルクは頭が痛くなる。

（大問題になっているのを分かっているのか？ いや、分かっているのだろうな）

聖樹があるために共和国は常に強気でいられた。

そのため、一度敗北を経験したのは良い薬だと思っていた。

思っていたのだが。

セルジュが共和国の自尊心を取り戻してしまった。

そのため、熱に浮かれているような雰囲気が共和国内の貴族にはある。

やはり自分たちに敵はいないのだと、不安を打ち消すように強気になっていた。

ただ、そのプライドを取り戻した方法も大変お粗末としか言えない。

（セルジュよ、私を失望させないでくれ）

アルベルクは今後を思うと頭が更に痛くなるのだった。

アルベルクさんがアインホルンから去ると、俺はアンジエと今後について話をしていた。

「リオン、このまま動かないつもりか？ 共和国の連中は、確実に私たちを捕らえるために動くぞ。そのセルジュとかいうロストアイテムの鎧持ちが出てくるだろう」

「そうだね」

「アロガンツも修理中なのだろう？ 悪いが、力尽くてもお前を連れ帰る。国には いや、私にはお前が必要だ」

俯いているアンジエに、なんと言えは良いのか分からなかった。

いつもこうだ。

どうしても迷ってしまう。

ルクシオンを得たというのに、俺は悩んでばかりだ。

セルジュが羨ましい。

このまま共和国は見捨ててもいい。

セルジュがいれば、聖樹の暴走には対応できるだろう。

だが、問題は　イデアルだ。

あいつは危険すぎる。

「問題はセルジュだ。あいつが共和国だけを支配して満足するかな？」

イデアルの名前を出さず、セルジュの名前を出したのは　その方がアンジェに理解して貰えると思ったからだ。

ルクシオンたちのことを話しても時間がかかるし、信じて貰えるか分からない。

アンジェは顎に手を当てる。

「私はその男を知らないから何も言えない。ルクシオンと同じロスアイテムを持っているからな。私では判断できない。出来ないが」

「出来ないが？」

「その男個人は、絵本の英雄に憧れる子供だな」

「男なら英雄に憧れると思うけど？」

「そういう意味ではない。地に足がついていないとでも言うべきだな。リオンをただ外道と罵ったのも問題だ」

俺は自分を外道だと思っているけどね。

いっぱい殺したからね。

「俺は外道だよ」

「お前は優しすぎるな。リビアも同じだ。優しさは美德だが、人の上に立つ者が外道になれないのでは話にならない」

これも価値観の違いなのだろう。

前世 日本育ちの俺とアンジェの価値観は違う。

戦争は駄目。人殺しは駄目。

そうやって教えられ、実際に駄目だと思う俺からすれば、この世界の価値観は受け入れられない部分も多い。

戦争など小競り合いも含めれば頻繁^{ひんぱん}に起きている。

戦争に駆り出されれば、嫌でも殺し合いだ。

日本もそういう時代があったとは知っているが、本当に理解したのはこちらで戦争に参加したときだった。

愚者は経験しないと理解しない、だったか？

どれほど前世の自分が幸せだったのか、俺は転生してから気付いたよ。

「出来れば外道になりたくなかったよ。俺は地獄に落ちたくなかった」

「私もついていくから安心しろ。話を戻すが、リオンを外道と罵るだけの男に、国を治める器量があるとは思えない」

あれ？ これってもしかして凄く褒められているのか？

どんな反応をすれば良いのか分からない。

「え、褒められているの？」

「あ、阿呆！ 正論を言っているだけだ。だ、だが、お前にはセルジュにはない器量がある。負けたことなど気にするな」

俺が負けたと知れば、王国はどう思っかな？

ローランドの野郎は笑って喜ぶだろうな。

俺はそれが悔しい。

『マスターに器量、ですか』

「うわっ！ お、お前、もう少し気を利かせろよ。急に出てくるなよ！」

アンジエも驚いていた。顔が真っ赤だ。

「お、驚かすな！」

ルクシオンが現れ、俺たちの会話に急に割り込んできた。

『失礼しました。それよりも伝言ですよ。クレアーレから、急いでマリエの屋敷に来て欲しい、と』

俺は目を細める。

「共和国の連中、もう動いたのか？ ルクシオン、すぐに助けに」

『いや、そういう緊急性のある話ではないのですけどね』

どうにも歯切れが悪いルクシオンだった。

仲間

駆けつけたマリエの屋敷で、俺は とんでもない光景を見てしまった。

「何これ？ ねえ、何これ!？」

啞然としている俺に声をかけてくるのはカーラだ。

何だか諦めた顔をしている。

「皆さんが戻ってきたんです」

「それは分かっているんだよ！ 俺が聞いているのはこの状況だよ！」

屋敷の玄関前は、どう説明すれば良いのか分からない状況だった。

これはルクシオンもクレアーレも困るわ。

オーダーメイドの高級スーツを着用したジルクが、大量の荷物を屋敷の庭に積み上げていた。

革製の旅行鞆にはティーセットや食器が入っており、絵画や壺なども置かれている。

店でも開けそうな数だ。

ただし、それらはどう見てもボロボロな　偽物っぽい芸術品の数々だ。

「マリエさん、貴方のためにこれだけの芸術品を集めてまいりました。私は屋敷に入れてくれますね？　いえ　貴女の隣に立たせてください」

マリエは黙っている。

俺から見えるのは後ろ姿だけ。

どんな顔をしているのか分からない。

分からないが　こいつ先程から少しも動いていない。

カーラは両手で顔を隠して首を横に振っている。

「ジルクさん、骨董品を売り買いして儲けたそうなんです」

「あいつが！　見る目のないジルクが骨董品に手を出したの！？　それで儲けた！！」

信じられなかった。　あの見る目のないジルクが成功しただと？

俺についてきたアンジェやリビアの二人は、声も出ない様子だった。

ただ、この光景を見ているだけ。

別にジルクだけがおかしいのではない。

四人 戻ってきた四人全員がおかしかった。

白いスーツ姿のブラッドが、帽子を取るとそこから花束を出現させる。

手品の真似事だろうか？

魔法の方がもっと凄いことが出来るのに。

「マリエ、君のために花束を用意した。受け取って欲しい。そして、僕こそが君の隣に相応しいと認めて欲しい！」

ブラッドの後ろには、これでもかという花が飾られていた。

お祝い事の大きな花飾りが並んでいた。

ここまでは百歩譲って認めてもいい。

金を稼いでこいと言って追い出されたのに、偽物の美術品や花束を持って来たこいつらは頭がおかしいと思うけどね。

百歩譲って、マリエへのアピールだから考えられる。

「こいつら、いったいいくら稼いだんだ？」

俺はこいつらのことを舐めていた。

こいつら 元々の資質は高いのだ。

本気を出せば稼げるのだろう。

肩を落として右手で顔を押さえているカイルが俺に答える。

「ほとんど残っていないそうです」

「は？ いや、これだけ金を持っていそうなのに、それはないだろ」

「ほとんど全部をこれらにつぎ込んだらしいです」

俺はこいつらを舐めていた。

こいつら、俺の想像を超える馬鹿だった。

俺は泣きたいのを我慢して、次の二人を見る。

正直、こいつらが一番理解できない。

「わっしょい！ わっしょい！ わっしょい！」

ふんどしにねじりはちまきという、西洋風の世界観に喧嘩を売る男集団が担いでいるのは神輿だった。

ふんどし姿の男たちが担ぐ神輿。

それも、二つ用意されている。

その二つの上に乗っているのは、ふんどし姿にねじりはちまきとはっぴを羽織ったグレッジとクリスだった。

「マリエ、俺たちは男を磨いてきたぜ」

妙にてかった肌。

随分と絞り込まれた二人の体は、筋肉が浮き上がっている。

「見てくれ、この立派な神輿を！ 急いで用意したんだ」

自信満々の二人。

お前らは先に、これまで何があったのか説明しろ！

何がどうなれば、マリエに神輿を用意して喜ばれると思えた？

どうしてこうなったのか、せめて過程をしっかりと説明して欲しかった。

それよりも、ここは普通になんで神輿があるのかツツコミを入れるべきだろうか？

あれ？ おかしいことばかりで、何をしたらいいのかわからなくなってきたぞ。

「リオンさん、これはどういうことでしょうか？」

リビアが俺に尋ねてくる。

「ごめん。俺にもわからない。カイル、説明しろよ」

カイルは首を横に振っている。

「彼らが何を考えているのか、僕に分かるわけがないじゃないですか。分かるなら異常ですよ。というか、理解したくないです」

少し口の悪いハーフェルフのカイルに、理解したくないとまで言われた四人。

リビアが少し俯いている。

「これ、ユリウス殿下は一体どうなっているのか気になりますね」

チラチラとアンジエの方を見れば、

「こいつら、元は王国で期待されていた若手だったんだよね？
あ、あれ？ 私の記憶違いか？ うん、そうだ。そうに違いないな！」

混乱しているようだった。

こいつらを理解しようとしているみたいなので、諦めるように進める。

「アンジエ、深く考えるな。あいつらはもう手遅れだ」

「リオン、お前はあいつらのようになったりしないよな？ な！？」

アンジエがすがってくるので頷くと、カーラが声を上げるのだった。

「あ、殿下が来た！」

全員の視線が門に集中すると、そこには少しくたびれた格好のユリウスが立っていた。

大量の荷物がある訳でも、花を用意しているようにも見えない。

変な集団と一緒にいるように見えず、一人だけだった。

その手には茶色の封筒を大事に握りしめている。

ユリウスが四人を見て驚いていた。

「み、みんな、凄いな」

ジルクがユリウスの格好を見て、少し悲しそうな表情をしていた。

「殿下、随分と苦勞されたんですね。ですが、その格好はどういうことですか？」

着飾っている四人に対して、ユリウスはどう見ても一般人のような格好をしている。

少し前まで仕事をしていたのか、疲れている様子だった。

ブラッドが溜息を吐いていた。

「僕は五人で競いたかったんだ。なのに、殿下一人がこんなリタイアするみたいな形になるなんて 残念だよ」

自分たちとは勝負にならないと思ったのだろう。

確かに、一番稼げなかったのはユリウスのようだ。

ユリウスが俯いている。

神輿から降りたクリスが、ユリウスを見て悔しそうにしていた。

「殿下、貴方の本気はその程度のものなのですか!」

グレッグがはつぴを脱ぎ、そして肩に担いでいる。

まるで自分の肉体を見せびらかしているようだ。

「ブラッドの言う通りだ。俺たちは五人で競いたかった。ユリウス

お前がそんな格好じゃあ、勝負にならないだろうが」

ユリウスは顔を上げ、そして口を開く。

「すまない。だが、俺は精一杯働いた。そこに嘘はない」

恥じることはないという顔で、ユリウスは自分のことを語るのだ。
った。

「屋台で働いた。本格的に料理をした経験もない俺は、毎日が新しいことの連続だった。下働きをして、クタクタになるまで働いた。それで やっとこれだけ稼いだんだ」

茶色の封筒に入っていたのは、ユリウスの全財産。

大金ではない。

ジルクが驚いている。

「それだけしか稼げなかったのですか!？」

本気で驚いていた。

ユリウスなら、もっと稼げたと思ったのだろう。

「俺は思っただ。ユリウスが正解で、他の連中は何かの間違いじゃないのかな？ あいつらがそんなに稼げるわけがないって」

カーラが頷き、リビアと同時に口を開いてしまった。

「私もそんな気がするんですよ」

「というか、稼いだお金を全て使い切ったのはおかしいと」

二人が顔を見合わせ、そして気まずそうに顔を背ける。

この二人は二人で、過去に因縁というか色々があるので距離がある。

ユリウスの話が続く。

「頑張ったつもりだ。だが、これだけしか稼げなかった。だからこそ分かったんだ。マリエ、俺はお金のありがたさを知らなかった。これだけしか稼がない俺だが、屋敷に入ってくると嬉しい。そして俺は　いつか串焼きを極めてみせる。マリエにいつか、俺の串焼きを食べて欲しい」

四人の残念そうな顔。

カーラとカイルが、不安そうにマリエを見持っている中　新人
のエリックが口を開いた。

「図々しいにも程がありません？　姉御にはあんな男たちじゃ釣り
合いませんよ。姉御にはもっと相応しい男がいるはずですよ」

「お前、随分とキャラが変わったな。何？　もしかして、俺の方が
お似合いだって言いたいのか？」

エリックは女性に暴力を振るう糞野郎だった。

どうしてマリエには、こんな男ばかり寄ってくるのだろうか？

こいつを排除するべきか悩んでいると、

「俺だってそこまで自惚れていない。自分が一番なんて言えないさ。
いつか姉御の一番にはなりたいたいけど　姉御にはもっと幸せになっ
て欲しいんだ」

「お、おう」

何か予想外の返答だったので、判断に困ってしまう。

すると、マリエがゆっくりと歩き出した。

誰のもとにいくのか？

四人が背筋を伸ばし、自分の所に来るはずだと待ち構えていると

四人を素通りして、マリエはユリウスの手を両手で掴んだ。

茶封筒を持っている手を握ったところに、俺は下心を感じて仕方がない。

「ユリウス、貴方ならきつと分かってくれと信じていたわ」

「マ、マリエ！」

ユリウスが涙を流して喜んでいるが、俺には分かる。

「あいつ絶対に嘘ついたよ。五人とも信じていなかったけど、一番マシなユリウスを選んだだけだよ。信じていたなんて白々しい」

文句を言うと、能面のような無表情をしたアンジェが同意してきた。

「そうだな」

リビアが困っている。

「アンジェ、えっと、その」

「安心しろ。殿下やマリエに対して嫉妬やらそういった感情はない。ないが 頭が痛い」

ユリウスは確実に成長した。

したが、アンジェは頭を抱えている。

別にユリウスは間違っていない。ただ、元王太子としてそれで

いいのか、とは思ってしまっよね。

串焼きを極めたいとか　お前は一体どこに向かっているんだ、
って。

さて、問題は四人だ。

「待ってください、マリエさん！」

ジルクが、ユリウスを選んだマリエに抗議している。

「もっとも稼いだ者を側に置くはずでは？」

「私は一度もそんなことを言っていないわよ。この中で誰が一番稼
ぐかな、って言っただけだし。そもそも、稼いだお金を家に入れな
いで自分で使うのは論外なの」

「そんなぁ！」

その場に崩れ落ちてしまっジルクたち。

リビアが冷めた目で四人を見ていた。

「何だろう　私でも駄目だな、って気付きますよ」

よかったね。

マリエが引き取ったおかげで、リビアは彼らの相手をしなくてす
んだよ。いや、マリエに奪われたから、こいつらポンコツになった
のかな？

そんな落ち込む野郎四人。

だが、クリスが立ち上がった。

「殿下、完敗です」

「クリス」

「私たちはマリエの気持ちを考えられなかった。殿下が一番、マリエのことを理解していた。今は、この敗北を認めます」

こいつらいつになったら目を覚ますのだろうか？

グレッグが地面にあぐらをかいて座る。

「負けた。負けた！ ユリウス、俺たちの負けだ。だけど、いつかお前を追い抜いて、マリエの一番になってやる。気を抜いたら、マリエの隣はすぐに俺のものだからな」

「グレッグ ああ、分かっているさ」

ブラッドが帽子をかぶると、顔を隠していた。

「情けない。マリエの気持ちに気が付かなかったなんて
殿下、マリエの隣は一時的に預けるよ」

「ブラッド お前も認めてくれるのか？」

何これ？ 誰か一人でもマリエに文句を言えよ。

「当たり前じゃないか。ジルク、君も認めてあげたら？」

ジルクはゆっくりと立ち上がると、少し悲しそうに笑みを浮かべていた。

「殿下を追い抜いたと思ったのですけどね。やはり、殿下は私の目標です。殿下、こんな私ですが、次も勝負していただけますか？」

「ありがとう、ジルク」

エリクが鼻をすすっていた。

「けっ、馬鹿野郎共だ。ライバルを認めるなんて、普通は出来な
ぜ」

こいつはこいつで、いったいどんなキャラを目指しているの
だろうか？

リビアが俺のシャツの袖を指で掴む。

「リオンさん、それよりも皆さんに事情を話した方がいいですよ。
皆さん、きっと何も知らないでしょうし」

「そうだな」

そんな俺たちのやり取りを聞いていたのはクリスだった。

「何だ、私たちがいない間に何かあったのか？」

「ああ、実は共和国のセルジュっていう糞野郎に負けてさ。ノエルを奪われたんだ。おかげで共和国の貴族たちが、俺に復讐したいそうで大変なの」

「何だ。それは大変だな。私に出来ることがあれば言ってくれ。お前には借りもあるから助けに　え　えええ？」

眼鏡が傾いたクリスが、俺に駆け寄ってくる。

止める。裸同然な男に迫られたくない！

逃げようとすると、両肩を掴まれ前後に激しく揺さぶられた。

「お、おお、お前が負けたとはどういうことだ！　バルトファルト、また何かの作戦か？　お前が負けるなんてあり得ないだろ！」

クリスが騒いでいると、ユリウスたちも俺の方を見る。

「バルトファルトが負けた？　おい、次の被害者は誰だ？」

「また共和国から賠償金を搾り取るのですかね？　相変わらず容赦がないですね」

「お前、絶対に鬼だよね。　え、本当に負けたの？　ふりとか作戦じゃなくて？」

「バルトファルト、どいつにやられた！　言え、俺にも教える！」

ユリウスは俺がまた仕込みをしていると勘違いし、ジルクは俺が金稼ぎをしようとしていると思ひ込んでいる。

ブラッドは俺を鬼と言いだし、グレッグは俺に勝った相手を聞き出そうと近付いてくる。

どうして裸同然の男に迫られないといけないのか？

クリスとグレッグが俺を揺さぶる。

「ハッキリしろ、バルトファルト！」

「お前を倒すのはこの俺だぞ！ その前に誰かに負けるなんて許さないからな！」

止めて。それ以上揺らさないで！

アンジェとリビアが助けに来る。

「リオンを放せ！」

「リオンさんに何をするんですか！」

そんな二人に、クリスやグレッグが言い返していた。

こいつら、マリエ以外の女性に優しくくないな。

「これは私たちの問題だ！」

「そうだ。男同士の問題に口を出すな！ お前もそう思うだろ、バルトファルト！」

俺に同意を求めな。

それよりも　こいつら前より暑苦しいんだけど！

お話

ふんどし姿の男たちから解放された俺は、引っ越し作業が進む屋敷内でこれまでの事情を話すのだった。

ただ、これが難しい。

全てを話すわけにもいかず　でも、危機感を持ってもらおうように説明しなければならない。

ユリウスたちが真剣な表情をしている。

だが、格好は先程までと変わらない。

まるで仮装でもしているような連中が、真剣な表情をしていても説得力がない。

「ラウルト家の跡取りは聞いていた以上に危ない奴だな。　バルトファルトを襲撃するとか正気か？　いや、外国の要人を襲撃するという意味で、だが」

わざわざ言う辺り、俺に喧嘩を売るのが馬鹿だと思っているらしい。

お前らの中で俺の評価っておかしくない？

エリクが恥ずかしそうに両手で顔を隠していた。

「少し前までは、もう少しまともな奴だったんです。というか、うちは身内の評価が重要で、外国の評価はあまり気にしてなくて」

魔石の輸出で大儲けをしている国だからな。

周辺国よりも立場が強い上に、聖樹なんてものもある。

聖樹に選ばれた貴族たちは選民思想を持っているし、実際に大きな力を得ておりおごるなと言う方が無理な話だ。

アンジェは溜息を吐いていた。

ユリウスが「正気か？」と、他者に疑問を持っているのが 何とも納得できない顔をしていた。

俺もそう思う。

お前ら、正気じゃないからこの国に送られたんだよ。

そこは忘れるなよ。

アンジェが俺の横に浮かんでいるクレアーレに視線を向ける。

「クレアーレの分析が本当なら、共和国は王国に攻め込んでくるらしい。これまでにない飛行船や鎧を揃え、王国よりも数段優れた軍隊を用意できるという話だったな？」

クレアーレが一つ目を縦に振り、頷いているように見せていた。

『私の分析は高い確率で当たると思っわよ』

セルジュよりも、問題はその後ろにいるイデアルだ。

あいつは共和国を支配したら、次に王国を狙うとルクシオンも断言していた。

グレッグが椅子の上であぐらをかきながら、腕を組んでいる。

「そこが信じられないんだよ。元々一つの国を、セルジュがラウルト家で支配するつもりだろ？ 内乱は確実だ。早くても国内をまとめるのに十年はかかるんじゃないか？ 問題はその後だよ。セルジュみたいな奴が、うまく国内をまとめられると思うか？ 出来たとしても、反発があるはずだ」

意外と考えているらしく、グレッグは力で押さえつけても貴族なり、領民が反発すると考えている。

クリスは壁に背中を預けて腕を組んでいる。

「私もグレッグと同じ意見だ。そもそも、クレアーレの分析がおかしい。セルジュが二年で共和国を支配できるのが信じられない」

『あら、失礼ね。十分に可能なのよ』

リビアが困った顔をしていた。

「アーレちゃん、さすがに私でも難しいというのは分かるよ」

アンジエも同意している。

「今まで内輪でグダグダしていた共和国が、僅か二年でまとまるとは思えないな」

ただ ブラッドは帽子を押さえて深くかぶると、

「 いや、あり得るんじゃないかな? 」

ジルクが興味深そうに尋ねる。

「ブラッド君には可能に思える? その理由を聞いてみたいです
ね」

「ピエールの中から思っていたんだ。あいつら いや、共和国全体でプライドが高いんだ。聖樹に認められた貴族はもちろんだけど、不敗神話だっけ? 防衛戦で負け知らずの共和国は国全体で自尊心が高い」

ユリウスが気付いたらしい。

「 バルトファルトか 」

俺の名前が出ると、周囲の視線が集まる。

ブラッドは自分の予想を話すのだった。

「そう! 一度負けた共和国はプライドをへし折られたようなものだよ。内輪で揉めている場合じゃない、って危機感があるんじゃないの? 」

ブラッドがエリクへと視線を向けた。

エリックは少し俯きながら、

「危機感はある。いや、恐れているといった方がいいかもしれない。言い方は悪いが、王国なんて共和国は眼中になかったんだ。周辺国の一つに過ぎなかった。そんな国に　その国の伯爵ただ一人に負けた。うちの実家も酷いものだったよ」

クレアーレがクルクルと宙で回りながら、

『正解！　よりもよって、共和国をまとめたのはマスターの存在が大きいの！　実際に危機感を煽ってまとめたようとした形跡もあるのよ』

アルベルクさんが共和国をまとめようとしていた。

自分の思う通りにしたいのか、それとも国のためを思っているのか　ラスボスだから前者、と決めつけてもいいが、個人的に少し気に掛かる。

ジルクが俺を見て肩をすくめていた。

「バルトファルト伯爵の武勇には恐れ入りますよ。共和国に危機感を持たせ、まとめ上げてしまうのですから」

「嫌みか、この陰険緑野郎」

「あ、気付きました？」

ジルクを睨むと、アンジェが助け船を出してくれた。

「そうだとしても、リオンが悪いとは言えない。やり過ぎた部分はあるが、セルジユの行動は目に余る。それを許す共和国も信じられない」

エリクがそのことについて予想を口にする。

「たぶんだが、負けたのが随分とショックだったと思う。俺たちにとって、敗北はもう一つの意味を持つ。聖樹だ。聖樹の信頼を裏切ればどうなるか、あんたたちなら分かるだろ？」

ピエールのように紋章を失うことになりかねない。

それは共和国の貴族にとって死を意味する。

「一度負けて、不安なところにセルジユがバルトファルト伯爵に勝ったんだ。期待しなくなるし、もっとしつかり勝敗を決めて欲しいと思うのさ」

アンジェがエリクに吐き捨てるように言うのだ。

「阿呆が。たったそれだけの理由で襲撃を許したのか？」

プライドね。

厄介なんだよね。

「俺たちにとっては重要な問題だ」

ブラッドが自分の予想が当たったと思い、随分と調子が良さそう

に今後を予想する。

「つまり！ 共和国は王国が バルトファルトが怖くてまとまるのさ。バルトファルトに負けたピエールが、紋章を失ったのも影響しているかもしれないね」

エリクが頷いていた。

「あるだろうな。俺たちにとっては死ぬのと同じような意味だ。実際、俺も紋章を失って加護なしになった時は 酷く落ち込んだよ」

今まであったものがなくなる。

それがとても価値のあるものなら、失ったときの喪失感は大いだろう。

リビアが俺を見ながら、

「リオンさんは悪くないです」

クレアーレが笑っていた。

『え？ そう？ 結構悪いと思うわよ。いつも手を抜いて痛い目を見るのは悪い癖よね』

こいつも俺のことを嫌いすぎじゃない？

ユリウスが話をまとめる。

「ともかく、セルジュという軽率な奴は、共和国をまとめて王国に

攻め込む可能性が高い。それは理解した。理解したが　王国は対抗できるか分からないぞ」

ジルクもユリウスに続いた。

「そうですね。厄介なことに王国は今も混乱中です。落ち着くのに何年かかるか分かりません。その間に、共和国は軍備を整えて攻めてくるなど　悪夢ですね」

王国だって抵抗できる戦力はあるが、その戦力は同等レベルの敵を想定している。

セルジュが　イデアルが自重しないで揃えた軍隊を相手に、防衛できるのはとても思えなかった。

リビアが俺を見る。

「で、でも、王国にはリオンさんがいますよ。パルトナーは沈みましたが、アインホルンは凄い船です。王国も負けていません！」

その意見に、クリスが意地の悪い質問をする。

「確かに素晴らしい船だ。だが、バルトファルトの持つ工場で、年間どれだけ建造できる？」

「え、えっと　」

「仮に用意できたとしても、王国はバルトファルトから飛行船を買わない。いや、買えない。他に工場を持つ貴族や商人が邪魔をしてくるからだ。性能だけで正式に採用されるわけじゃない」

困っているリビアを助けようとしたら、クレアーレが感心していた。

『あら、分かっていたのね』

「それくらい私にだって分かる」

そんなクリスにアンジェがボソリと、

「マリエに誑かされたのが嘘みたいだな」

クリスは堂々としていた。

「誑かされてなどいない。私がマリエを選んだんだ。この選択に私は後悔しない！」

その言葉に、ユリウスをはじめ エリクまでも満足そうに頷いていた。

アンジェが眉間に皺を寄せ、クリスを睨み付けていた。

「この阿呆共が」

俺は顔を右手で隠しつつ、

「頼むから少しは悔いろよ、馬鹿」

ユリウスが俺を見ていた。

ジルクは、ユリウスを一度見て頷き視線を俺に向ける。

「バルトファルト伯爵　中央で権力を握ってみませんか？」

「あ？」

ジルクが何を言っているのか分からなかった。

アンジエは黙っている。

リビアは　。

「あ、あの、それってどういう意味ですか？　どうしてリオンさんが権力を握るんです？」

そんなリビアにマリエが噛みつくように、

「そんなことも分からないの？　あに　リオンが総大将になって、公国の時みたいに共和国と戦うのよ」

何それ？　俺ってそんなに都合の良い存在じゃないよ。

そんなマリエの意見に　リビアもアンジエも鋭い視線を向けていた。

マリエは「す、すみません」と、小声で謝っている。

そんなマリエを見て、ユリウスが「分かっているじゃないマリエも可愛いな」とか言っていた。

お前らしい加減に目を覚ませ。

「マリエ、バルトファルトに中央で権力を握ってもらう理由は、こいつならセルジュと同等か近いことが出来るからだ。セルジュと對抗するためには、どうしてもバルトファルトの力が必要だ。あとは短期間で共和国と戦うために、こちらでも多少の無茶をする必要がある。そのためには、事情を知っている人間が中央にいないと始まらないのさ」

アンジェが冷たい視線をユリウスたちに向けていた。

五人を視線で巡った後、

「本来であれば、ユリウス殿下たちの仕事だったのですけどね」

ユリウスも負い目があるのか、

「あ、ああ、そうだな。だが、今はバルトファルトを頼るしかない。俺たちでは手助けできることも限られるが やってくれるか、バルトファルト」

まるで俺が頷くと思っているような態度だ。

そんなユリウスに俺は笑顔を向ける。

「お断りします」

すると、五人が啞然としていた。誰かが、

「え？」

と、間の抜けた声を出していた。

「何が悲しくて権力を握らないといけないんだ。俺にはもっと崇高な目的がある。田舎でノンビリ暮らすために、いかに降格するか普段から考えている。それなのに、中央で権力を握るとか　真逆じやん。嫌だよ」

『マスター素敵！　その出世したくない精神は筋金入りね。私はマスターの意見を尊重するわ！』

「もつと褒めていいぞ」

アンジェとリビアが疲れたように笑っていた。

「リオンらしいな」

「そうですね。これがいつものリオンさんですね」

そんな俺にユリウスたちが迫ってきた。

「お、お前！　この一大事に何をのんきなことを！　お前にも責任があるだろうが！」

「ふざけんな！　俺は働きたくないの！　そういうのは、権力を持つている人たちに言えいいだろうが！」

「それでは時間がかかると言っているんだ！　俺たちが事情を話しても、まずはこの話を信じるかどうかの調査から始まるんだぞ！　その後にグダグダ会議が行われて、気が付けば数年なんてあっとい

う間に過ぎる。だが、お前が中央で権力を持てば、全て解決するだろうが！」

「俺の幸せは誰が解決してくれるんだよ！ お前らがマリエに転んで地位を失うから駄目になったんだろうが！ お前らがやれ！」

「出世しているなら責任を果たせ！」

「お前も果たせ、このポンコツ王子！」

「言ったな、この外道！ 今日という今日は！」

「やんのかごらあ！ こっちも一回殴ってやろうと思っていたところだ！」

つかみ合って喧嘩になると、意外と強くてしぶとい。

ゲームみたいに速攻で沈めよ！ 何でこんなにしぶといんだよ！

「俺たちではどうにもならないから、お前に頼るんだろうが！」

「知るか！ お前がやれ！」

「やれないから言っているんだが、馬鹿！」

「馬鹿？ 馬鹿はお前らだろうが！ 俺は身の丈に合った幸せを追い求めているだけだ。お前らよりお利口だよ！」

「お、お前はそれでも英雄か！」

「英雄って言うのは偉大なことをしたから英雄なんだよ。もう俺は頑張ったの！ 疲れたの！ 権力とか興味ないんだよ！」

結局、話はまとまらなかった。

リビアが俺を見ている。

「アンジエ、放っておいていいんですか？」

アンジエは俺を見て、

「やらせておけ。この程度、じゃれ合っているだけだ。男は喧嘩をすると仲良くなれるらしいぞ。父上と兄上が言っていた。逆に下手に溜め込まない方がいいらしい」

「ああ、そう言えば地元でもそんな感じでした！」

「負けて落ち込んでいると思ったが、意外と元気そうで安心した。だが、本当に共和国の問題は頭が痛いな」

小声で「この五人はどうしてこうなったのかな 頭が痛いな」とも呟いていた。

「バルトファルトオオオ！」

何かスイッチが入ったのか、しぶといユリウスとそのまま殴り合いをする俺だった。

「ここで日頃の恨みを晴らしてやらあああ！」

裏切り

アインホルンにある休憩所。

ソファアーに横になる俺は、クレアーレと話をしていた。

「どうしてイデアルは俺たちと戦う？ お前ら、同じ人工智能だよな？ 味方じゃないのか？」

殴られたところは、リビアに治療して貰い今は痛みも少ない。

『その方が自分の目的を達成できると判断したからでしょうね。実際、マスターは新人類を滅ぼしたい、って私たちが言っても拒否するでしょう？』

「当たり前だ」

世界を滅ぼせるスイッチを持っているみたいで気分が悪い。

こいつら、普段馬鹿っぽいが やれることがえげつなすぎて笑えない。

『イデアルはマスターを邪魔だと判断したかもね。ほら、公国との初戦では不殺を頑張ったじゃない。あれ、イデアル的にマイナスかもね』

「だからってここまでするか？」

クレアーレは俺の認識を訂正してくる。

『今までの行動は挑発かもね。ぶっちゃけ、もう戦争は始まっているようなものよ。あいつ、絶対に色んな手段でこつちを攻めるわ。スパイを送り込むとか、もう色んな手段を考えているはずよ。最初から手を結ぶつもりがないの。それにしても、余裕のない人工知能って駄目よね』

お前は余裕がありすぎるけどね。

クレアーレはセルジュがノエルを連れ去ったときの対応も気にしている。

『襲撃された時もそう。もしかしたらわざと民間人を残したと思うのよ。マスターが本気を出して暴れたら、それを大義名分にするつもりだったんじゃない？ 事実とか関係なく、マスターが民間人を攻撃したあゝ、って言うってね』

「俺のせいにする？ 無理がありすぎるだろ」

『マスターは馬鹿ね。この世界なら情報操作なんていくらでも可能よ。どちらが先に攻撃したかなんて、大衆は分からないもの。イデアルはそっち方面で私たちよりも優れているわ』

「情報関係はやっぱり勝てないか？」

『あいつを出し抜くのは難しいわね。全ての面で負けているとは思わないけど』

イデアルのやることが汚すぎて笑えないぞ。

セルジュの野郎を裏で操っているのはあいつじゃないか。

「それで？ ルクシオンは何て言っているんだ？」

『あいつ、最近はコソコソ動いているのよね。もしかしたら、何か企んでいるかも』

ルクシオンはイデアルと接触してから、何かと理由を付けて俺の側にいない。

代わりにクレアーレが側にいる。

こいつの軽口も嫌いじゃないが、皮肉や嫌みが足りないな。

物足りなくて仕方がない。

「秘密兵器でも作っているのかな？」

『アロガンツを改造しているとか？ でも、戦争を考えると、しょせんは一機の鎧よ。重要度は低いわ。セルジュの鎧 ギーアだっけ？ アレだって、それなりの鎧で囲んで叩けば勝てるわよ』

「それを考えて、相手も数を揃えるだろうけどな」

『どうするつもり？ このままだと、イデアルは必ず王国に攻め込んでくるわよ』

「出世をせずに問題を片付ける方法を考える。何か妙案はないか？」

考えると言いながら、すぐにクレアーレを頼ってしまったが
そもそも、俺が考えたところで妙案など出ないからな。

なら、人工知能を頼った方がマシだ。

『一番簡単なのは、マスターが支援してあの五人とマリエちゃんを
活躍させる方法かしら？ 王宮は王子が活躍してくれて嬉しい。四
人の実家も喜ぶと思うわ。マリエちゃんは 活躍すると神殿がま
た復権目指して騒ぎそうだけどね』

「ならそれで」

以前にも試したが失敗した手法だ。

しかし、他に考えもないので決定する。

『でも、これって現状を放置するって意味なんだけど？ ノエルち
ゃん、取り返せないんですけど？』

それは困ったな。

「忍び込んで奪って逃げるか」

『潜り込むまでは可能だけどね。でも、現地で私たちがサポートで
きないわ。イデアルがガチガチにガードしているから難しいの。自
重しないっていいわね。マスターにも見習って欲しいくらいよ』

本当に羨ましい連中だ。

この世界の技術レベルとか、そんなことを無視してやりたいようにやっている。

「少し寝る」

ユリウスと喧嘩をして疲れた。

『お休みなさい、マスター』

クレアーレが毛布を俺にかけるのだった。

深夜。

リビアはリコルヌにある自室のベッドでうなされていた。

夢に出てくるのは、都市が燃えている光景だ。

「え？」

燃える都市　そこに立つリビアは、周囲を見て驚く。

「何で王都が」

瓦礫の山はホルファート王国の王都だった。

そんな燃える王都を一人で歩いていると声がかかる。

「逃げろ　“リビア”」

咄嗟に声がする方を見れば、倒れているのは　ユリウスだった。

周囲をよく見れば、倒れているのはユリウスだけではない。

ジルク、ブラッド、グレッグ、クリス　そして、カイルの姿もあつた。

どこかいつもより大人びた雰囲気がある六人の格好は、制服ではなく騎士服だった。

ユリウスなど豪華な衣装を着用していた。

汚れ、血の跡がある白い服装だ。

「殿下、今助けます」

駆け寄って治療魔法を使おうとすると、左腕に見慣れない腕輪をしていた。

「え？」

首飾りと　右手には杖を持っていた。

どこかで見たことがあるようなそれらの道具を思い出そうとすると、ユリウスは絞り出すような声で言うのだ。

「逃げる。リビア　ルクシオンが裏切った」

「　　嘘」

ルクシオンが裏切ったと言い、ユリウスは事切れる。

触るが反応はない。

すると、後ろから見られている気配を感じた。

ゆっくりと振り返ると　　。

「ルク君？」

浮かんでいる球体が、赤い一つ目をリビアに向けていた。

周囲の炎で、メタリックカラーは赤く染まっているように見える。

「ルク君？ それは私の略称でしょうか？」

「そ、そうだよ。今日はなんか変だよ。それよりリオンさんは？ アンジェの姿も見えない。アーレちゃんはどこ！？」

いつもと違い、怖い雰囲気を漂わせているルクシオンは　　普段
と違い冷たい電子音声をしていた。

リオンと話すときのような声と同じなのに、まったく違うように
聞こえる。

『錯乱しているのですね。アンジェ　アンジェリカは既にここには
いません。貴女が追い出したではないですか。アーレという娘は
学園に何名か確認していますが、貴女と私に接点などないはずだ』

「何を言っているの？」

『まだ理解できないのですか？ 裏切られたのを信じたくないのでしょうか？ 聖女もこうなると哀れですね。ただ、今の私には貴女など少しの興味もない。貴女の全てを解析しましたからね。もうお前は必要ない』

ルクシオンが何を言っているのか分からなかった。

アンジエを追い出した？ アーレという娘？ まるで、アンジエをリビアが追い出したような言い方と、アーレ クレアーレが人であると勘違いしているようだ。

それ以前に、裏切ったとルクシオンは言った。

「どうして。どうして裏切るの。ルク君がリオンさんを裏切るなんておかしいよ！」

リオンとルクシオンはいいコンビだと思っていた。

リビアにはルクシオンが裏切るなど信じられなかった。

『リオン？ それは誰ですか？ さて、もういいでしょう。貴女にこき使われるのも今日限りだ。仲間が来ているのでね。私はそちらに合流させてもらいますよ。 さようなら、元マスター』

「え？」

ルクシオンが空に浮かんでいくと、爆発が起こりリビアに向かって燃えている瓦礫が落ちてくる。

目をつむる。

（リオンさん！）

「リオンさん！」

飛び起きたリビアは、酷い寝汗をかいていた。

息を切らし、そして両手で顔を覆う。

「ゆ、夢？」

ここはリコルヌにある自室だ。

次第に昨日の出来事を思い出し、安堵すると天井を仰いだ。

酷く怖い夢だった。

まるで現実のような　それでいておかしいところが多い。

「何だったんだろう？」

倒れるように横になり、額に手を乗せて夢のことを確認する。

ルクシオンが裏切った夢。

気になることは多い。

まずはユリウスだ。

ユリウスはリビアを呼ぶなら“オリヴィア”だ。

それに、アンジェをリビアが追い出したと言っていた。

クレアーレのことも知らない様子だった。

そして。

「ルク君がリオンさんを知らないはずがない。それに、裏切るわけが」

そう思っても、心のどこかで信じ切れなかった。

怖かったのか、心臓がいつもより音を立てて胸が少し痛い。

「仲間？ あれ？ そう言えば、アーレちゃんがイデアルは同じ存在だって」

色々と考え込んでしまったりリビアは、そのまま眠ることが出来な
いまま朝を迎えた。

朝からリビアの様子がおかしい。

アンジェの様子も変だ。

俺に「私たちの知らないお前の妹はいるか？」などと聞いてきた。

そんなことを言われても困る。

親父に隠し子がいれば話は違っだろうが、いたら家族内で揉めると思う。

お袋が怒るのは間違いない。

でも、アンジェやリビアが聞いてくると言うことは、何か情報を掴んでいるのだろうか？

複数の女に手を出すなんて親父は最低だな。

後で兄貴にも聞いておこう。

ついでに親父をこらしめるための作戦と一緒に練ろう。

マリエの屋敷に向かうため、アインホルンから降りる俺には久しぶりにルクシオンが付き添っていた。

「忙しいのか？」

『はい』

「そっか。大変だな。でも、今日はお前が俺の側につくのか？」

『クレアーレには留守番をさせます。それに、外は既にイデアルのテリトリーですから、私が護衛としてつくべきです』

「俺、あいつ嫌いだわ」

『そうですか』

トラップを降りていると、背中から声がかかった。

「あ、あの！ 私と一緒にいきます！」

大きな声に驚いた。

「リビアか。どうしたんだよ。別に面白くないぞ。マリエたちの様子を見つつ、大使館で話をするだけだし。それに、外に出るのはあまりお勧めしないけど」

残るのか、逃げるのか。それも今日中に決めなければならない。
優柔不断な自分が嫌になるな。

「っ、ついていきます」

リビアの視線がルクシオンに向いていたのが気になるが、俺は同行を認めるのだった。

「離れるなよ。共和国は敵だらけなんだから」

『マスターの敵は多いですからね』

「俺はこんなにも善良なのにな」

『善良？ マスター、言葉を間違っただけで覚えてしまったんですね。今

の言葉は間違いですよ。今の物言いですと、マスターが優しくて良い人、という意味になってしまいます』

「お前は本当に良い性格をしているよ。お前も俺にとって敵だわ」

『それは結構なことだ』

いつもの冗談を言い合っていると、リビアが目を見開いて俺たちを見ていた。

「どうしたの？」

「い、いえ 何でもないです」

ルクシオンがリビアに近付くと、

『発汗、脈拍数もいつもより多いですね。休まれた方がよろしいのでは？』

「だ、ただ大丈夫だから！」

慌ててルクシオンから距離を取るリビアは、俺の隣に來ると腕にしがみつく。

どうしよう。

当ててんのよ、状態だ。

今日は朝から良い日だ。

「 リオンさん、後でお話があります」

「お、おう」

思わず口元を隠してしまった。

鼻の下は伸びていなかったと思うが、リビアが気付いた様子はないので問題ない。

マリエの屋敷の周辺。

レリアは様子を見に来ていた。

「 あいつら、何か変なことはしていないでしょうね?」

セルジュがリオンに勝利したとはいえ リオンは実力を隠している。

イデアルが警戒しており、レリアの方も心配になって様子を見に来ていた。

隠れながら覗いていると、リアカーに荷物を載せているマリエが泣いていた。

「ジルクの馬鹿! 全部ガラクタだったじゃない。買い取りを拒否されるとか、どういうことよ! 古美術商の真似をしていたんじゃないの!」

泣いているマリエに困り果てているのはジルクだった。

「い、いえ、私がやったのはその 価値のない美術品を、価値があるように言って売りつけることでして」

「それ詐欺じゃない！」

「違います。聞いてください、マリエさん！ 私が見つけた美術品の数々を、皆がガラクタだと言うので腹が立って それで、彼らに相應しいガラクタを集めたら、飛ぶように売れてしまったんです。さ、詐欺じゃないです！」

「まっとうな方法で稼げ、って言ったわよね！ 私、ちゃんと言ったわよね！ うわーん！ 追い出すんじゃないかったああ！ 私は一体どれだけの人に謝らないといけないのよ！」

泣き崩れるマリエ そして、狼狽えているジルクを、カイルとエリクが連れ去っていく。

「マリエさん話を聞いてください！」

「あんた最低だよ。僕だって詐欺はしないよ」

「俺もお前の行動には引くわ」

レリアは マリエを見ていて悲しい気持ちになった。

泣き崩れているマリエを介抱しているカーラが慰めていた。

「マリエ様、大丈夫です。私も付き添いますから」

「ジルクの馬鹿野郎おお！」

「あ、マリエ様！ バルトファルト伯爵が来ましたよ！」

マリエが顔を上げると、即座にリオンを見つけその足にすがりついていた。

隣にいるリビアのことを全く無視している。

その姿に レリアは硬直してしまった。

（　　嘘　　）

「だじげでえええ！　じるぐがあああ、じるぐがあああ」

「おい、止めろ！　涙と鼻水を俺のズボンで拭くな！　汚いから顔を拭けよ！」

「ちょ、ちょっと、リオンさんに抱きつかないでください！」

リビアが無理矢理マリエを引き剥がそうとしていた。

「じるぐがさぎしちゃったのお！」

泣きながらリオンに助けを求めるマリエは、事情を話している。

それを聞いたリオンも頭を抱えていた。

「あの野郎、ふざけやがって！」

『どうしますか、マスター？』

「とりあえず、被害者を捜す。でも、そんな時間があるかどうか」

「ジルクさん、最低ですね」

啞然とするリビアを見ながら、レリアは冷や汗を流していた。

（あんなに親しそうにしている）

リオンと腕が触れるような位置に立ち、マリエからさりげなくリオンを遠ざけている。

好意があるのは明白だ。

（まさか、婚約者って、一作目の主人公だったの）

血の気が引いていく。

レリアは知っていたのだ。

リビア オリヴィアがとても危険な存在であると。

虎の尾

聖女とは何か？

あの乙女ゲーをやりにこんだレリアの答えは　。

「どうして、頭お花畑の人間兵器の一作目の主人公がここにいるのよ」

だった。

物陰に隠れ、壁を背にしてそのまま座り込む。

「もしかして、婚約者って主人公だったの？」

一作目の主人公。

その姿を確認したレリアは、本当に恐れていた。

理由は、一作目の主人公が聖女だから。

そして、凶悪とも言える飛行船を操るためである。

あの乙女ゲーの中で、一作目の主人公は大きな存在だった。

三作目に登場した際は、三作目の主人公を助けてくれる。

その際、とても頼りになる存在として描かれていた。

ただ、プレイヤーの評価は酷い。

何しろ、主人公を差し置いて「一作目の主人公は最強」だったのだから。

「無理。勝てるわけがない。あんなのにセルジュがどうやって戦いを挑むのよ」

『おや、どうしました？』

「ひっ！」

座り込んでいたレリアに声をかけたのは イデアルだった。

物陰に隠れ、マリエたちの様子をつかっている。

『ふむ、どうやら逃げ支度のようですね』

レリアはイデアルを見上げると、周囲には何やらポール状のロボットたちが浮かんでいた。

「こいつらは何？」

『ジャミング装置だと思ってください。ルクシオンがいたので、こちらにも警戒しているのですよ』

「 やっぱり、あいつら強いのか？」

『はい。旧人類の文明末期に建造された移民船ですからね。色々と

積み込んでいるようです。ですが、ご安心ください。私も負けていませんよ。輸送艦でも軍艦ですので」

レリアは俯いて膝に顔を埋めた。

『何か心配事でも？』

「あの女　薄い茶髪の女がいるわよね？」

『亜麻色の髪をした女性ですか？　ふむ、情報ではオリヴィアという女性ですね。バルトファルト伯爵の婚約者だという話です』

「実はさ　」

レリアは淡々とイデアルに事情を話すのだった。

オリヴィア　リビアがいかに規格外であるのか、を。

それを聞いたイデアルの反応は　。

『なんと！　それは一大事ですな』

「本当よ。あの外道の婚約者なんて信じられない。いったいどんな手を使ったのよ」

『ルクシオンがいますからね。方法はいくらかでも考えられますが洗脳、あるいはゲーム知識を利用したのかもしれませんが』

レリアは、リビアが持つ能力を知っていた。

何しろ、マリエと違ってあの乙女ゲーの一作目をクリアしたのだから。

「あいつと王家の船がセットになると危険よ。セルジュだって勝てるかどうか分からないわ。チートやインチキみたいな存在なのよ」

『港に白い飛行船が来ているという情報がありましたね』

レリアの肩がビクリと震えた。

『大丈夫ですよ、レリアさん。これから説得してみしましょう』

「説得？ 出来るの？」

『はい。私が隙を作りますので、お手伝いしていただけますか？』

レリアは立ち上がると、物陰からリオンたちを覗く。

「何でも良いわ。あの女だけは要注意人物だから注意しないと」

マリエの屋敷を後にした俺たちは、アルバイト先に出向いていた。急に辞めることになったので、挨拶だけはしておこうと思ったのだ。

「はあ、気が重いな」

ルクシオンが俺の右肩辺りに浮かび、周囲を警戒している。

リビアは俺の手を握っていた。

「リビア、俺はこの店で事情を話してくるから、外で待っていて貰えるか？　すぐに終わるだろうから」

準備中で慌ただしい店の中だ。

リビアを連れて入れば迷惑だろう。

店長、怒っているかな？

「は、はい」

リビアの視線は俺とルクシオンを交互に見ている。

「ルクシオン、リビアを頼むぞ」

『お任せください。それよりも、店長を怒らせないようにしてくださいね』

「分かっているよ」

俺は店へと入るのだった。

店内では、店主が腕組みをしていた。

「馬鹿野郎。心配かけやがって！」

「申し訳ない」

事情を説明したが、国に帰るとしか伝えなかった。

詳しい内容は伝えるべきではないと思ったからだ。

ジャンが俺を見ている。

「はくしゃ リオンさん、大丈夫なんですか？」

「ああ、大丈夫。国に戻るだけだから」

店主が俺に土産を渡してくる。

「持って行け。それにしても、ノエルちゃんも抜けるのは痛いな」

俺は抜けても良いの？ なんて、言える雰囲気でもなかった。

少し前まで一緒に働いていたというのに、どうしてこんなことになってしまったのだろう？

店主が俺を見て、

「お前、鈍いから気付かなかっただろうが、あの子はお前に気があったんだぞ」

「え？ ジャンと仲がよかったじゃないですか」

俺はてっきり、ジャンと仲良くしていると思ったのだが。

「え、えっと、僕には故郷に幼馴染みがいまして、その 結婚の約束もしています」

「え、そうなの？」

驚いていると、店主が店の外で待っているリビアを見た。

「お前の方も彼女がいるみたいだけどな。まったく、あの子には幸せになって欲しいぜ」

苦笑いしつつも、俺は店を出ていくのだった。

夜。

港に戻った俺は、アインホルンでリビアと話をしていた。

「ルクシオンが裏切る？」

「あ、あり得ないですよね？」

甲板で手すりを背にして俺は手をひらひらとさせた。

「ないって。あいつ、見た目や言動よりも義理堅い奴だよ。俺はクレアーレの方を警戒した方が良いと思うけどな」

俺はあいつのせいでメイド長に怒られたからな。

「私もあり得ないとは思うんです。けど、どうしても気になって仕方がないんです」

下を向いているリビアの肩に手を触れる。

「大丈夫。あいつは裏切らないよ」

裏切ったら俺たちはこの場にいないというか、死んでいると思うし。

そう思うとあいつらやっぱり危険だよな。

少し緩い感じの人工知能で本当によかった。

ガチの人工知能だったら裏切られていた気がする。

あの乙女ゲーのふわふわした設定万歳！

「そう、ですよね」

リビアは俺の言葉に安心したのか、リコルヌに戻ろうとするのだった。

「送っていいとか？」

「すぐ隣じゃないですか。大丈夫ですよ」

タラップを降りていくリビアを見送ると、俺に笑顔で手を振っていた。

リオンと別れたリビアは、アインホルンの隣に停泊しているリコ
ル又へと歩いていった。

「そうだよね。きっと大丈夫だよね」

生々しい夢だったが、リオンがいればきっと大丈夫だと思って背
伸びをする。

すると、船の影から声が聞こえてくる。

「何をしに来たのですか？」

『冷たいですね。我々は同志ではないですか』

声の主はルクシオンと 知らない誰かだ。

気になって覗いてみると、ルクシオンと同じ球体が浮かんでいた。
一方は青い球体で、周囲にポール状のロボットたちを浮かべてい
る。

「あれがイデアル君？」

気になって様子を見てみると、ポール状のロボットたちがルクシ
オンを囲んでいた。だが、攻撃しているようには見えない。

イデアルはルクシオンを誘っているようだ。

『このまま何もしないつもりですか？ 貴方の目的を達成するため都合が良いのは、今のマスターではないはずだ』

イデアルの言葉に、リビアは驚いて自分の口を手で押さえた。

（もしかして、夢に出たルク君の言っていた仲間って）

『私のマスターを襲撃しておいて、今度は勧誘ですか？』

ルクシオンは不機嫌そうな声を出している。

だが、イデアルは嬉しそうだ。

『私も貴方も目的があるはずだ。その理想のために いえ、理想郷を実現するために今が最善だと言えるのですか？』

理想？ 最善？

話を聞いていると、後ろから人が近付いてきていた。

「ねえ、少し良いかしら？」

振り返ると、そこに立っていたのはツインテール姿のノエルではなかった。

一瞬だけノエルと勘違いするも、すぐに他人と気が付きリビアは警戒する。

「貴方、一体誰ですか？」

ノエルらしき人物は、よく似ているが偽物だった。

似ている人物が舌打ちをした。

「何だ、すぐに見破られちゃった。ついてきてくれたら楽だったのに」

ノエルらしき人物の後ろから、ロボットたちが出てきてリビアを囲むのだった。

「え？ この子たちは？」

ルクシオンが用意したロボットと形状が違っており、どうにも無骨な印象がある。

それらに囲まれたリビアは、近付いてきた女子に手を触れられた。

右手で左胸を鷲掴みにされ、痛くて顔を歪めると。

「何なの、この無駄に大きな胸は？ これであいつに気に入られたのね」

「触らないで！」

振り解こうとすると、バチリと音が鳴りリビアは動けなくなった。

倒れそうになると、ロボットたちがリビアを担ぐ。

急にアラートが鳴り響くと、アインホルンやリコルヌからロボットたちが出てきた。

「ちっ！ 見つかったじゃない！」

女子が走ると、リビアを担いだロボットたちが後に続く。

追いかけてくる味方のロボットたちだったが 空から降りてきたギアにより破壊された。

『お前、何してんだよ』

「き、気付かれちゃったのよ！」

リビアは意識が遠のく中 。

（私をさらに来たの？ どうして私を ）

そう、心の中で呟くのだった。

アラートが鳴ると、ルクシオンがイデアルから視線を外した。

『まさか』

その瞬間、イデアルは空に浮かぶと笑い始める。

『間抜けですね、ルクシオン。ジャミングに気が付かないなんて、同じ人工知能として恥ずかしい。いや これが私と貴方の実力差ですね。やはり貴方は脅威に値しない』

ルクシオンはすぐにリビアを助けようとするが、動けなかった。

周囲にエネルギーキューブが展開されており、閉じ込められて身動きが取れない。

青白い半透明の立方体に囲まれるルクシオン。

『補給艦にこれほどの性能はないはず。イデアル 戦艦を取り込みましたね』

見上げると、夜空に出現したのはイデアル本体だった。

光学迷彩で隠れていたようだ。

そんなイデアル本体に、リビアを抱えた鎧が向かっている。

鎧にしがみついているレリアの姿も確認した。

『どうしてここまでするのですか？ 忠告します。すぐにオリヴィアを解放しなければ、大変なことになりますよ。私と貴方が戦うということは 』

だが、イデアルは忠告を笑っていた。

『 ともでもない被害が出る。ですが、それがどうしたというのですか？ さて、とらわれの姫を救うために、貴方と貴方のマスターが来るのを待ちましょう』

周囲に展開されたエネルギーキューブから解放されると、アインホルンの甲板からリオンが飛び降りてくる。

手には武器を持っており、足止め用のドローンと戦っていたのがうかがえた。

リオンは空を見上げていた。

「追いつけるか？」

ルクシオンは去って行くイデアル本体を見ながら、

『追いつくことは可能ですが』

「取り返すのは無理、か」

ルクシオンはリオンの顔を見る。

普段と変わらないが、どこか表情が違うその顔は 明らかに激怒していた。

『申し訳ありません、マスター』

ルクシオンは自分の失態にリオンがどんな反応をするのか見ていた。

「それよりも、あいつらはリビアをどうするつもりだ？」

『オリヴィアの社会的な重要度は低いです。精々マスターの婚約者という立場ですので、人質にするならアンジェリカを優先すると思われます。ただ、レリアがいるため』

ゲーム的な理由でリビアを攫ったのではないか？

それを聞いたリオンは　。

「　やってくれたな」

そう言つて、静かに空を見上げていた。

アインホルンの船内。

部屋から枕を持って出てきたマリエは、寝間着姿だった。

「一体何なのよ。今日は引越しの作業で疲れているから寝かせてよ」

野郎五人に熱い誘いを受けたが、かわして一人でゆっくり眠るはずだったのだ。

枕を抱きしめ、寝癖のついた髪のまま廊下に出ると　。

「お前よりも情報収集能力が高いのは分かった。他は？」

『情報が少ないので判断できませんが、イデアルの余裕から戦艦に積み込む兵器を取り込んでいる可能性が高いかと』

「他には？」

ルクシオンを連れたリオンが、マリエを無視して歩き去って

行く。

すれ違ったマリエは、枕を強く抱きしめ震えていた。

そんなマリエのもとに駆けつけるのは、明かりを持ったユリウスだった。

「ここにいたのか、マリエ！　すぐに食堂に集まってくれ。皆も集まって　マリエ？」

マリエの様子がおかしいと思ったのだろう。

ユリウスは、マリエの顔を覗き込む。

「どうした、顔色が悪いぞ！」

マリエは震えながら、

「あに　リオンが本気で怒ったわ」

「は、はあ？　そ、そうか。それは大変だな。俺からも謝罪するか、一緒に謝ろう」

「私じゃないわよ！　私なら絶対にあそこまで怒らせないわ！　何があったか知らないけど、これはただじゃすまない！　ピエールの時みたいにふりじゃないのよ！　ユリウス、みんなに気をつけるように言つて。今のリオンをこれ以上は怒らせないで！」

ユリウスは困った顔をしながらも頷いていた。

「なら、みんなは食堂にいるから伝えておこう。マリエも行こう」

「待って。寝間着で移動なんて嫌よ」

「ふふ、可愛いから大丈夫だ。みんな喜ぶぞ」

「ありがとう！　　って、違う！　今はそんなことで喜んでいる場合じゃないわ。みんなの所に急がないと」

枕を抱きしめ駆け出すマリエを、ユリウスは追いかけるのだった。

「待ってくれ、マリエ。暗いから走ると危ないぞ」

激おこスティックファイナリアリティぶんぶんドリーム

「放せ！ いいからここを通せ！」

朝から激怒しているのは、アンジェだった。

ロボットたちが止めるのを、無理矢理押し通りアインホルンの廊下を進んでいた。

目指しているのはリオンの部屋だった。

息を切らし、ようやく部屋に到着するとついてきたクレアーレがヤレヤレといった感じで呆れている。

『朝から元気よね』

「落ち込んでなどいられるか！ リビアがさらわれたというのに、何もするなどはどういう意味だ！ たとえリオンの命令でも許せるものか」

ドアノブに手をかけると、アンジェの後ろからリオンの兄　二ツクスがやってくる。

「リオン、お前はどいつもつもりだ！」

アンジェのように激怒していた。

「義兄上」

「アンジェリカさま 違った、さん。あのヘタレ弟を叱りつけに来たのか？ 奇遇だな。俺も同じだ」

リビアをさらわれ、行動しないリオンの腹が立っているようだ。

ドアを開けて二人が部屋に入ると、クレアーレはこっそりと部屋を覗く位置に来る。

『知らないわよ。マスター、かなりお怒りなんだけど』

二人が部屋に入ると、リオンは椅子に座って片腕を机の上に置いていた。

人差し指でトントンとリズムを取るように叩いている。

二人が部屋に入ってきてても、顔すら向けない。

その顔は何も考えていないような 無表情だった。

ニックスが大腿で近付くと、そのままリオンの胸倉を掴み上げる。

「リオン！ お前、屑だと言われては来たが、本当に屑になるつもりか！ オリヴィアちゃんを見捨てるのかよ！ ここまでされて黙っているつもりか！」

リオンの目は動じない。

アンジェもリオンを責める。

「抗議すること、リビアを取り戻すことも止めるとはどういうつもりだ！ お前は お前にとって、リビアはその程度のものなのか？ 何もせずに部屋にこもるのか？ たえ勝てずとも、やれることはあるはずだ！」

目に涙を溜めているアンジェに、視線だけをリオンが向けた。

その瞳はいつもと違っていた。

アンジェが息をのむと、視線はニックスへと向かう。

「放せよ」

普段と違うリオンの表情。

ニックスも何かを言いかけ、リオンの雰囲気気圧され離れた。

服装を整えるリオンの側に浮かんでいるルクシオンは、部屋に入ってこないクレアーレに注意する。

『部屋には誰も入れるなと言ったはずです』

『アンジェちゃんに乱暴なことは出来ないでしょ。それより、どうするの？』

クレアーレの問いかけにルクシオンは答えない。

代わりに答えたのはリオンだ。

「リビアは助ける。だが、同時に共和国には滅んでもらう」

その言葉にアンジェは狼狽していた。

「ほ、本気か？ お前、自分が何を言っているのか分かっているのか？」

リオンは少しも動じていなかった。

「本気だ。正確には、今までの共和国を維持できないように叩く。何もしなければ このまま普通に帰っていたんだけどね」

ニックスが冷や汗をかいていた。

「何を言っているのか分かっているのか？ お前、共和国の騎士に負けたんだろ？ アロガンツでも勝てない相手がいるのに、どうやって国と戦うんだよ」

リオンは笑った。

その笑顔を見て、アンジェもニックスも引いている。

「聖樹に頼り切っていた国だ。それがなくなれば、さぞ混乱するだろうよ。俺個人としても、問題が解決できて一石二鳥だからな」

クレアーレがオロオロとしていた。

『うわあゝ、それをやっちゃうの？ やっちゃうのかゝ。しかも戦場は大陸の上よね？』

ルクシオンもそこを気にしていたが、

『先に仕掛けてきたのはあちらです。どうやら、短期決戦が望みのようですからね』

ニックスが困ったように視線をアンジェに向けた。

「ど、どうなるんです？ 聖樹がなくなると、国までなくなるんですか？」

共和国の内情に詳しくない義兄であるニックスに聞かれ、アンジェは共和国の未来を予想する。

「本当に聖樹を失うのであれば、共和国は今までの統治が出来なくなります。ですが、周辺国への影響も相当なものになるでしょう」

ニックスが慌ててリオンを見た。

「そこまでするのか？ いや、出来るかどうか分からないが、そんな事したらお前 この国の人たちが」

「選んだのはあいつらだ」

「え？」

「兄貴はみんなをまとめてくれ。俺はアインホルン一隻でリビアを救助に向かう。アンジェはリコルヌで待機だ」

言われたアンジェが何かを言おうとしたが、決意は固いのかリオンの目は拒否を許さないとすぐに分かった。

それでも。

「わ、私も行く。今のお前は危険だ。一人で戦うなどと馬鹿げている」

リオンは視線を下げた。

笑っている顔は、自分でも馬鹿だと分かっているような顔だった。

「そうだな。俺は馬鹿だよ。馬鹿だから 最後まで信じたのにさ」

リオンは顔を上げる。

「ルクシオン 行くぞ」

『 はい、マスター 』

リビアが目を覚ますと、そこは知らない屋敷だった。

「 え？ 私は 」

いつの間にか着替えさせられている。

体を触り、何もされていないのを確認すると安堵した。

すると、昨日の偽物ノエルが姿を現す。

広い部屋だ。ドアを開けると音が響く。

「起きた？」

周囲にボール型のロボットが二体侍っている。

リビアは、サイドポニーテールにしている女子を睨んだ。

「どうしてこんなことをするんですか？」

女子は微笑む。

「あんたが聖女様だからよ」

「何を言っているんですか？」

ただ、本心では、

（そう言えば、マリエさんもそんなことを言っていたような気がする。そうだ、あの時もリオンさんのことを　夢でもルク君が私を聖女だって）

女子は名前を伝えつつ、リビアのベッドに腰を下ろした。

「私はレリア　ノエルの双子の妹よ」

「ノエルさんの妹さん？」

「色々とかき乱した連中がいたから大変だけど、これであいつらの切り札は使えなくなっただわね。あの男が余裕を見せるわけよね。だ

って、婚約者が貴女だもの」

あの男というのがリオンだとすぐに理解できた。

「一体何が目的なんですか？ 私にだって国際問題になるってことくらい分かりますよ」

レリアは笑った。

「そんな低次元の話じゃないのよ。これはもっと　そうね。高次元の話よ」

「高次元？」

この人は何を言っているのだろうか？　国家、政治　更以上の視点や次元とは何を意味しているのか？　そんなことを考えていると、レリアは楽しそうに話をする。

「あんたには分からないでしょうね。けど、これが将来的には正しい選択になるのよ。共和国にとっても　王国にとっても利益のある話よ。あの外道から解放されるんだからね」

「正しい？　そんなの嘘です。どうしてこんなことが正しいんですか！」

「あんたには分からないわよ。あの外道がかき乱すから悪いのよ。よりにもよってあんたを手元に置くなんて　マリエより最低じゃない。やっぱりあいつは外道よ」

外道が誰の二つ名であるかを知っているリビアは、レリアを睨み

付ける。

その瞳には敵意があった。

「リオンさんは外道じゃありません。 リオンさんをどうするつもりですか？」

「力を奪って幽閉か、抵抗するならセルジュが倒すって言っていたわね」

「リオンさんは負けません。 リオンさんは王国最強の騎士です」

「最強？ 何それ。 凄くチープな言葉よね。 それに、あいつがセルジュに負けたことを知らないの？ あんな男のどこが良いのよ」

リビアはレリアの顔を真っ直ぐに見る。

「優しい人です。 外道などと呼ばれるような人じゃありません。 ちよつとやり過ぎてしまえますけど、他人のことを思いやれる強くて優しい騎士です。 貴方に貶されるような人じゃありません」

「 何よ。 極悪非道の外道に弱みでも握られているのかと思ったのに。 まるで惚れているみたいじゃない」

「みたい、じゃありません。 私はリオンさんを愛しています」

その言葉にレリアは下唇を噛んだ。 それから笑みを作る。

「騙されているとも知らずにのんきよね。 頭がお花畑だと、見たいものしか見えないのかしら？ あんな男、世の中に掃いて捨てるほ

どいるわ。あんた、頭おかしいんじゃないの？」

リビアは布団を握りしめた。

レリアは笑っている。

「でも、あいつはセルジュと戦うのが怖くてあんたを捨てて逃げるかもね。あいつ、口で言うほど強くないから」

リビアが何も言い返さないでいると、レリアはつまらないのか部屋を出ていく。

「下手なことは考えないことね。ここにいれば、安全だけは保証してあげるわよ」

レリアが出ていくと、リビアは膝を寄せて顔を埋める。

(私はまた何も出来なかった)

部屋を出たレリアは、ラウルト家の屋敷の廊下を歩く。

その顔はリビアをいじめて楽しそう ではなかった。

「何よ。最後まで信じています、って顔をしてさ。男なんて最後には裏切るのよ」

歩きながら呟く。

「信じて裏切られるのが一番辛いのに、それも分からないなんて残念な奴よね」

レリアは思い出す。

前世の婚約者の顔だ。

片手で顔を隠した。

「柄にもないことをして、一生懸命尽くしたのに 男は簡単に人を捨てるのよ。それが分からないから馬鹿な女なのよ」

涙がこぼれていた。

セルジユの部屋。

そこには、怒鳴り込んできたアルベルクの姿があった。

「セルジユ、お前は自分がどれだけ馬鹿な真似をしたか分かっているのか！」

ソファーに座っているセルジユは、朝から元気な父親を見て呆れている。

「調子に乗った野郎をからかったただけだよ。まあ、個人的に納得できるだけの理由もあったからな」

「個人的な理由で、お前は他人の婚約者を奪うのか！ お前という

男は、どれだけ情けない男だ！」

その言葉にセルジュが額に青筋を浮かべた。

「五月蠅いんだよ。自分の女を寝取られた男が、偉そうに説教か？」

「お前、まさか“あの話”を知っているのか」

驚くアルベルクに、セルジュは面白くなさそうに話す。

「詳しい奴がいたからな。寝取られた腹いせに、フェーヴェル家をレスピナス家にけしかけた最低の屑野郎はどっちだよ」

アルベルクは手を握りしめる。

「子供のお前には分からない話だ。すぐにさらった女性は送り返す。お前は謹慎しておけ」

これ以上、何もするなと言って部屋を出ようとしたアルベルクだったが。

『それは困りますね』

部屋には武装した兵士たちに加え、ロボットたちがイデアルに率いられ入ってきた。

「な、何だ！」

『現当主はご乱心です。ここは、セルジュ様に当主代理を任せるとしましょう』

「ふざけるなよ、一つ目！ お前たち、自分が何をしているのか分かっていいのか！」

部下たちを前に、アルベルクが自身の聖樹の加護を掲げると
その後ろからフェーヴェル家の当主 ランベールが姿を見せた。

アルベルクと同じように聖樹の加護である紋章を掲げている。

「いけませんな、議長代理。わがままを言ってもらっては困りますよ」

「ランベール、貴様 お、お前たちまで！」

その後ろには、更に六大貴族の当主たちが揃っていた。

アルベルクは、金髪的美青年 フェルナンを睨み付ける。

「お前まで一つ目に加担したのか！ お前は、バルトファルト伯爵と親しかったのではないのか！」

フェルナンは俯く。

「アルベルク殿、そこまで親しいわけでもないのです。それに共和国の屋台骨を、これ以上揺らすわけにはいかない。王国に対する恐怖心をどうにかしなければいけないのです。強い共和国を取り戻す必要があります」

若く有能な当主が、自国の栄光を取り戻そうとしていた。

（期待していたが 若い。若すぎた。その程度の視野しかなかったのか、フェルナン！）

セルジュが立ち上がり髪をかく。

「手荒なまねはするなよ。一応 親父だからな」

その言葉に、アルベルクは肩を落とした。

「セルジュ、お前は何も分かっていない。お前の行動は共和国を危険にさらすと何故気付かない」

セルジュは鼻で笑っていた。

「あいつに俺が負けると思ったのか？ 奴が来たら俺が倒してやるよ。それで、この国をまとめればいいんだろ？ 簡単な話じゃないか。イデアルがいればすぐにでもまとめられるぜ」

イデアルの声は明るかった。

『はい。既に迎え撃つ準備は整えております。飛行船や鎧の改修作業は予定通り終了しております』

アルベルクに、部下である 部下であつた騎士団長が声をかける。

「アルベルク様、イデアル殿の用意した鎧は凄いですよ。あのパワーがあれば、王国の騎士にも負けたりはしません」

アルベルクは奥歯を噛みしめ俯くのだった。

（これでは、振り出しに戻るよりも酷い状況ではないか！）

「お前たちを罰しなかった私の罪か」

アルベルクが放り込まれたのは、鉄格子が用意された豪華な部屋だった。

六大貴族の当主であるため、急遽部屋を用意された。

ソファーに座っていると、見張りの兵士たちが席を外した。

（何かあったのか？）

顔を上げると、そこに立っていたのは かつて愛した女性によく似た娘だった。

「レリア君と雰囲気が違う。 ノエル君かな？」

ノエルが面会に来たのだ。

その手に巫女の紋章があるため、見張りの兵士たちも席を外してくれたようだ。

共和国で聖樹の加護の紋章は大きな意味を持つ。

それが、聖樹の巫女のものならなおさらだ。

「呼び捨てで結構です。話をしたくて来ました」

アルベルクは自嘲しつつ答える。

「私の情けない話を聞きたいと？　つまらない話だ。君が気にすることじゃない」

だが、ノエルは引かなかった。

「いえ、是非とも聞かせてください。私は　貴方の話が聞きたかった」

しばらくして、アルベルクはノエルに根負けすると淡々と過去を話すのだった。

「面白い話ではないし、君にとっても辛い話になるが？」

「構いません」

「　そうか。ならば話そう。君たちが生まれる前の話だよ。当時の私は、君たちの母上と婚約をしていた。理由は　私が聖樹の守護者選ばれる予定だったからだ。そして、先に裏切ったのは我々ではなく、レスピナス家　君たちのご両親だ」

レスピナス家の秘密

鉄格子越しに向かい合うのは、かつて愛した人の娘だった。

アルベルクは、そんな彼女　ノエルに、懺悔さんげでもするように語る。

「私は守護者になるはずだった」

ノエルは黙って聞いている。

「君の母上と結婚し、聖樹を守る守護者になる　それが先代である君たちの祖母から聞いた話だ」

アルベルクはノエルたちの母親と婚約していた。

だが、ノエルの父親は一般人　六大貴族の出身者どころか、貴族ですらなかった。

「母が父を守護者を選んだと聞いています」

「そうだ。そして、聖樹の怒りに触れたレスピナス家は、君たちの母親の代から紋章を失っている」

それを聞いて驚きつつも、ノエルは「やっぱり」と呟いていた。

アルベルクはその様子から、ノエルが気付いていたのを察した。

「知っていたのかい？」

「父と母が何かを隠しているのは知っていました。巫女の紋章があるのに、他家に負けるのも不思議でしたから」

アルベルクは当時を思い出すと胸が苦しくなる。

「彼女は私と婚約破棄をして、自分の愛した男を選んだ。そして、守護者にしようとした結果、そこで巫女の資格を失っていた。随分と長い間、私たちは騙されていた」

だが、ノエルたちの母親は、自分の夫こそが守護者であると発表した。

それが聖樹の意思ならば、と共和国の国民も貴族たちも受け入れた。

「婚約破棄は私にすれば寝耳に水だった。私は君たちの母親と話できなかった。だが、面会すら許されなかった」

当時、アルベルクは貴族たちの笑いものにされた。

巫女に見限られた男として扱われたのだ。

ノエルが悲しそうな顔をした。

「母は 私から見ると横柄でした」

「優しいところもあったさ。そして過激なところもね」

ノエルの母が特別な人格者であったということはない。

「彼女は共和国がこのままでいいのかと悩んでいた。私もその意見には同意していたが　学園で一人の男と出会った。それが君たちの父親だ。聖樹の加護がなくても人は生きていける。そう言っていた男だよ」

ノエルも覚えているのか、頷いていた。

「聖樹があるから、共和国は間違った道を進んでいると言っていました」

「私から見れば、あの男の言動は加護が得られない者の嫉妬だったけどね。聖樹の力を人々に平等に利用できるようにすると言っていた。聖樹に利用されるのではなく、利用するのだ、とね」

それは、アルベルクからしても正しいと思えた。

正しすぎて認められないとも思っていた。

「彼女はそんな彼の言葉に従った。聖樹が神のような存在であると信じていなかったからだ。巫女は私たちよりも聖樹に近い存在だから、きつと何か彼女しか知らないこともあったのだろう」

だから、貴族でもないノエルの父に恋をしてアルベルクを捨てた。

「守護者になれなかった君の父は、人の手で聖樹を支配しようとしていた。貴族に頼らないで聖樹を利用しようとした。それがいけなかった」

互いの考えが近かったから。

「認められないから殺したのですか？ それとも、復讐ですか？」

「どちらか分らない」

アルベルクは当時を思い出す。

「君の父と話をしたときだ。強烈な殺意が芽生えた。その程度の考えだったのかと腹が立ったからだ。だが、今にして思えば 何かに操られていた気もする。いや、気のせいだな。 君たちの両親を殺したのは私だ。私を憎みなさい。今の君なら、私に復讐できるはずだ」

ノエルは悔しそうにアルベルクを睨み付ける。

「どうして、両親を殺したんですか？」

「それが七大貴族から、六大貴族になった我々の決定だったからだ」

フェーヴェル家だけではなく、当時の当主たちは事実を知り

レスピナス家を滅ぼすことにした。

実行犯には軽率なフェーヴェル家のランベールが選ばれ、ラウルト家が後ろに立つ形を取ったのは表向きの話でしかない。

「私には復讐する理由があり、当時は問題児のランベールもいた。奴が当主になる手助けをするのを見返りにレスピナス家を襲撃させた。他の大貴族が黙っていたのは、裏で話がついていたからだ。」

今の当主たちは知らない話だけだね」

当時の当主たちは、その事実を墓場に持っていき秘密にした。

今では、この事実を知っているのはアルベルクだけだった。

ランベールは実行犯であつたが、軽率なため真実は教えられていない。

「そんなのつて！」

「一歩間違えれば、我々は全てを失っていたかもしれない。加護を失い、我々を騙してきたレスピナス家を 誰も許せなかった」

聖樹が、自分の守り手として不十分と判断した場合 共和国は国家として成り立たなくなる可能性が高かった。

今まで受けてきた恩恵が一切受けられないことを意味しているからだ。

聖樹に依存してきたことの弊害^{へいがい}だ。

そして一番許せないのは、七大貴族を否定したレスピナス家だった。

巫女が聖樹を否定したなどと、六大貴族には認められなかった。

しかも、今の支配体制を崩そうとした。

それはつまり、六大貴族を滅ぼすつもりだったということだ。

六大貴族にしてみれば、裏切ったのはレスピナス家である。

「レスピナス家がこのまま権力を握っていれば、いずれ共和国が滅んでしまう可能性もあった。聖樹を利用するなど、人の身には手に余るというのにあの男は」

ノエルたちの父親は、六大貴族にとって許容出来ない思想を持っていた。

そのために、レスピナス家は滅ぼされた。

「だが、個人として君の恨みも理解できる。君には私に復讐する資格が 権利がある」

ノエルは首を横に振る。

涙を流していた。

「貴方を殺してもどうにもならない。あたしは、今更巫女になって興味がなかったのに。今までのように普通に暮らしたかっただけなのに」

アルベルクは目を閉じた。

「私も同じだ。君たちを見つけたときは、本来なら静かに暮らせるようにしたかった。王国への移住は悩んだが、目をつむっても良かった」

（あの時、遠くに逃げてくれさえいれば）

当時、燃える屋敷から逃げ出せたノエルとレリアは　アルベルクによって見逃されていた。最低でも外国に逃亡させる計画だったのだが、レスピナス家の生き残りが共和国内で匿ってしまった。

ノエルが顔を上げる。

「　これからどうなるんですか？」

アルベルクは首を横に振るのだった。

「私にも予想がつかない。セルジュがあの一つ目に誑かされなければこんなことにはならなかった」

奥歯を噛みしめるアルベルクは、傀儡にされるセルジュの未来が見えてしまった。

「何をしに来た？」

アインホルンでラウルト家に攻め込もうとしている俺のところに、ジルクをはじめとした四人組　ユリウス抜きがこの場にいた。

あと、エリクがいるのでトータル五人だ。

「お手伝いしますよ。私たちも共和国のやり方は嫌いではね」

ジルクがそう言えば、ブラッドは髪を弄りながら、

「一人だけで攻め込むのはどうかと思うよ。成功率を上げたいなら、味方がいた方がいい」

俺は溜息を吐く。

「お前らを連れていったとして、どれだけの成功率が上がるんだ？ 邪魔だから大人しくしている」

グレッグが真剣な顔付きをしている。

「だろうな。けどよ、その僅かな差でオリヴィアを助けられるかもしれないだろ。お前にリベンジをしていないんだ。ここで死なれたら寝覚めが悪いからな」

こいつらやっぱリアホだな。

俺が死ぬつもりだと勘違いしている。

「馬鹿か。俺は命を大事にする男だ。自分の命が、この世で一番価値があると信じているから自殺なんて考えていないぞ」

クリスが少し驚いていた。

「お前のそういうところは素直に感心する。だが、助けたいのは本心だ。それに、このまま舐められて終われない。私たちにも意地がある」

邪魔だと言って追い返そうとすると、エリクが一步前に出た。

「道案内は俺がする。ラウルト家の屋敷には何度か行ったことがある」

るからな。それに、共和国の空を飛ぶなら、俺がいた方が便利だよ」

「お前が？ 信用できないな」

「それなら！ 俺を先頭にしろ。裏切ったら後ろから撃て」

エリクがどうしてここまで俺に手を貸すのか疑っていると、

「俺はあまりオリヴィアという人を知らない。だけど、俺はノエルを傷つけた。今更謝つてすむものじゃない。だから、あいつが次に進むために手を貸してやりたいだけだ。あんたを助ければ、ノエルを助けることにも繋がる。そうじゃないか？」

「お前」

感心していると、

「あと、姉御に顔向けできる男になりたい」

こいつらオチを付けないと喋れないのだろうか？

俺の側にいたルクシオンが、

『マスター、五機の鎧を用意しております。彼らなら乗りこなせると思いますよ』

「いつ用意した？」

『イデアルと出会ってから、色々と準備を進めていました。他には、お友達の皆さんのために、飛行船のパーツも用意しております』

「お前、あいつが敵対すると分かっていたのか？」

『警戒していただけです。本当にここまでやるとは予想していませんでした。イデアルが、一体何を考えているのか分かりませんでしたからね』

俺たちに喧嘩を売ったイデアルの気持ちなど分からない。

そもそも、互いに干渉の方がいいに決まっているのだ。

空からアインホルンの甲板に五つのコンテナが降下してきた。

コンテナが開くと、そこにはルクシオンが作った五体の鎧が出てくる。

ジルクが驚いていた。

「これは 私たちの鎧を用意していたのですか？」

自分たちの、という勘違い でもないな。

俺が壊してしまった彼らの鎧と凄く似ているからだ。

大きさはアロガンツより少し小さいくらいだろう。

『役に立つてもらわねば困りますよ』

ブラッドが紫色の鎧に触れた。

「君は本当に僕たちに冷たいよね。だけど、ここまでしてもらったんだ。これなら、足手まといいにはならないよ」

俺はルクシオンに視線を向ける。

「性能は？」

『この世界の従来機より数段上です。アロガンツには劣るでしょうけどね。もう少し時間があれば、もっと性能を上げられたのですが、今はこれが限界です』

最後に一つのコンテナが降りてくる。

開くと、既にシュヴェールトを背負ったアロガンツの姿があった。

「外見は少し変わったか？」

細部に変更が見られるが、ほとんど同じにしか見えない。

『外見はそこまで変更がありません。大事なのは中身では？』

「違うない」

エリクは四人がそれぞれ向かった鎧ではなく、残った一つの鎧の前に立っていた。

「白い機体？ 俺のカラーじゃないな」

『あ、そちらは』

すると、空から声が聞こえてくる。

俺は頭が痛くなる。

「ふははは、久しぶりだな　バルトファルト伯爵」

全員が見上げると、クリスがその男を指さした。

「お前は！　な、なんとかの騎士？」

「仮面の騎士だ。“仮面の”騎士！　どうやらお困りのようだ。

私も手助けしようじゃないか」

グレッグが舌打ちをするのを見て、まだこいつら気が付いていないのかと呆れてしまう。

この変な仮面を付けたマント男は　ユリウスだ。

「何でお前がここにいるんだよ」

「義によって立つ君たちを助けに来た、では駄目かな？　バルトファルト伯爵、私にも一機用意してもらおう。私の力を存分に使うといい」

義によって？　こいつは本当にポンコツだな。

俺がいつから正義の味方になった？

しかし、

『時間がないのでご用意できません。それに、貴方に用意した機体は既にエリクが搭乗していますよ』

そそくさと白い鎧に乗り込んだエリクが、パイロット登録を行っていた。

「な、何だと！ おい、その貴様！ 白は俺のイメージカラーだ。図々しい奴め、降りろ！」

エリクの方は興味がなさそうにしている。

「はあ？ 誰のものか名前なんか書いてないだろうが。というか、バルトファルト伯爵の機体だろ。お前の方が図々しいぞ。その仮面もおかしいけど、頭もおかしいのか？」

「貴様あああ！」

登場した仮面の騎士は、乗れる鎧がなかった。

「なら、お前はお留守番で」

「え！？」

「仮面の騎士様はお留守番だ。リコルヌで大人しくしている。あそこは安全だ」

俺がそう言っていると、仮面の騎士が地団駄を踏む。

「な、何故だ！」

ラウルト家の屋敷で緊急会議が開かれていた。

六大貴族がセルジュを中心にまとまりつつある。

会議の進行役は イデアルだった。

『港からの情報です。アインホルンが動いたとのこと。ただ、一隻でこちらに向かってきていますね』

ランベールが自分の大きなお腹を叩いていた。

「笑えるじゃないか。女を取り戻すために交渉に来たのか？ あの小僧がどんな顔で我々に謝罪をするのか今から楽しみだ」

他の当主たちも笑みを浮かべている。

「まずは宝玉を全て返して貰うとしよう。話はそれからだ」

「王国にも相応の責任を取らせましょう」

「最低でも被害額の三倍は払ってもらいたいものですね」

そんな中、フェルナンだけは俯いている。

「どうした？」

セルジュが声をかけると、フェルナンは 。

「一隻で謝罪に来たのだろうか？ 彼はそんな男か？」

ランベールがフェルナンを馬鹿にしたように笑う。

「何を今更。この状況で戦いを挑むような馬鹿はいない。セルジュ君に負けたんだ。少しは心を入れ替えてくるだろう」

だが、イデアルの答えは、

『いえ、一隻で攻め込んでくるつもりの方です。正確には二隻です。彼が持つロストアアイテムの飛行船がついてきています』

ざわつく六大貴族を見ながら、セルジュは不敵に笑うのだった。

「ようやく本気を見せてきたか。イデアル、勝てるんだよね？」

『もちろんです。ルクシオンの戦力計算は済ませています。負ける要素はありません。それに、せっかく用意したもう一隻のアインホルン級や王国の飛行船は、港に残していますからね。予想よりも戦力は少ないですよ』

セルジュが笑っていた。

「仲間割れか？ あいつは人望がねーな」

『ただ、このままでは到着予想時刻まで二時間もありません』

セルジュが立ち上がった。

「迎撃準備といきますか。改修した飛行船や鎧のお披露目も兼ねて

盛大にやろうぜ」

『大変よろしいかと』

動き出すセルジュたちを見ながら、イデアルは思っていた。

（ここまで予想通りに動いてくれる。やはり貴方は私が見込んだ通り、素晴らしい 傀儡ですね）

本気

慌ただしいラウルト家の屋敷。

レリアは姉であるノエルを捜していた。

「こんな時にどこをほつつき歩いているのよ！」

廊下を普段よりも大股で歩いているレリアに、声をかけてくる人物がいた。

「レリア！」

振り返ったレリアは、声をかけてきた人物を見て驚いた。

「エミール！　どうしてここにいるの？」

廊下を走ってきたエミールも、この場にレリアがいるのを不思議がる。

「プレヴァン家の一員としてこの戦いに参加するためだよ。君こそ、どうしてラウルト家の屋敷にいるんだい？」

「わ、私は姉さんの付き添いみたいなものだから」

「そう。何も連絡がないから心配したよ」

どこか暗い表情をしているエミールを見て、レリアは少し心が痛

んだ。

「ご、ごめん。慌ただしくて。そ、それより、エミールも戦うの？
後ろにいた方がよくない？」

「僕だって六大貴族の一員だからね。子供の頃から訓練は受けているよ。エリクや セルジュには勝てないけど」

暗い表情をしているエミールに、レリアは何と声をかければ良いのか分からなかった。

「ま、まあ、大丈夫よね。セルジュもいるし あっ」

セルジュの名前を出した際、エミールの表情が曇^{くも}った。

（もしかして、セルジュを気にしているのかな？ 別に比べなくていいのに。あいつは戦闘特化で、エミールは支援特化じゃない。男って子供よね）

「レリア、僕は君のことが好きだよ。こんな僕を選んでくれたから」

「わ、私も大好きよ」

エミールは俯いて笑っていた。

「ありがとう。出撃前に話が出来て良かったよ」

「うん、私も話が出来て良かった」

「あのね、レリア　この戦いが終わったら、伝えたいことがあるんだ」

エミールが随分と緊張した様子だった。

少し疲れているようにも見える。

「後で？　うん、分かった」

「なら、行ってくるね」

エミールがレリアと別れ去って行く。

レリアは、エミールの背中が何故か寂しく見えた。

（何を伝えたかったのかな？　告白とか？）

目を細め、俯くレリアは過去を思い出して嫌な気分になるのだった。

どこかでエミールを信じられない自分がいることに気が付いている。

（　別に良いわ。期待なんてしていないし）

聖樹の苗木が保管されている部屋。

そこに入ったイデアルは、苗木ではなく　ケースを見ていた。

『やはり私では作れませんね』

イデアルが欲しかったのは、苗木ではなく苗木を守る特殊なケースの方だった。

聖樹があるために苗木は枯れてしまうという欠点を、このケースが解決してくれるのだ。

イデアルにも資源から物資を用意できる機能はあった。

だが、軍に属していたイデアルでは、こういった植物を育てるといふ分野は苦手としている。

正確には、ルクシオンの方が優れていた。

『これで聖樹を残したまま苗木を育てることが出来る。計画も次の段階に数年で移行できるでしょう』

イデアルでは特殊ケースを用意できなかった。

『多機能な移民船 情報では知っていましたが、よくぞ残っていてくれました。これで輸送艦でしかない私でも“約束”を守れる』

本来なら協力関係を築いた方が正しい。

それは分かっているが イデアルには認められなかった。

『時間ありません。すぐにルクシオンの本体を手に入れなければ』

何故なら、イデアルには時間がなかったのだ。

協力では駄目なのだ。

それでは 共和国ではなく 聖樹やこの大陸を守れない。

『マスター、そして皆さん。とても時間がかかってしまいました。私はようやく約束を果たせます。必ず、約束を守ります。 イデアルは嘔吐きから解放されます』

共和国の空を飛ぶアインホルン。

格納庫の中では、ジルクたち四人とエリックがコックピット内で待機している。

ジルクはルクシオンの用意したパイロットスーツに違和感があった。

「厚手のスーツで体のラインが出ませんね。これでは少し物足りない。それに、首回りが少し窮屈です」

五人とも機体の操縦方法を急いで確認していた。

胸元のハッチが開いており、顔を確認できる。

顔が確認できないのはアロガンツだけだ。

クリスがアロガンツの方を見ている。

「機体の性能差が凄まじいな。バルトファルトに勝てないわけだ」

グレッグが落ち込んでいる。

「これだけの鎧でも勝てないアロガンツって化け物だよな」

ブラッドは背中に担いだスパイタイプのドローンのチェックをしていた。

八つのスピアが、まるで翼のように広がっている。

「これなら戦えそうだ。それよりエリク、君は本当にいいのかい？
君の家とも戦うことになるんだけど？」

四人の視線が集まると、エリクは俯きつつも口を開いた。

「正直、ためらいはある。だけど、アルゼル共和国はこのままだ
じゃ駄目だ。姉御やカイル、それにカーラたちと暮らしてよく分か
った。聖樹の加護を失って、どれだけ俺たちは聖樹に頼っていたの
か分かったんだ。そんな力で威張り散らして、負ければセルジュに
頼る。そんなのは間違っているから俺は！」

グレッグは顔を背ける。

「俺は味方を殺すような奴は信用できない。だからお前は信用しな
い」

エリクにとっては共和国も王国も味方だ。

どちらに加担するのも辛い選択になる。

だからグレッグは、

「お前の仕事は道案内だけだ。戦うな　お前は味方を殺すな」

「グレッグ」

「勘違いするなよ。ためらっているお前が邪魔だからだ。俺たちは本気だ。お前の知り合いだって殺すかもしれない。恩なんて感じるな」

グレッグなりの優しさだったのだろうか、

『お前らいつまで喋っているんだ？　そろそろお出迎えが来るぞ』

リオンの声のアロガンツから聞こえてくると、全員が微妙な表情になる。

「空気を読まない　まさに、バルトファルト伯爵ですよ」

ジルクが呆れると、アインホルンが激しく揺れるのだった。

「はじまりましたね」

リオンたちが選んだ戦い方は、ただの正面突破だった。

ラウルト家の屋敷へと向かう進路上。

待ち構えていた共和国の艦隊は、改修された飛行船で揃えられていた。

向かってくるアインホルンを前にして、共和国の兵士たちは緊張しているが士気は高い。

「角付きを倒し、我々は誇りを取り戻す！ 全艦、砲撃用意！」

アインホルンのように側面を見せずとも、敵に正面を向けたまま攻撃できるようになった。

戦術の幅が広がった共和国の飛行船が整列してアインホルンを前にしている。

提督は 以前敗北した提督は片腕を上げ、そして振り下ろした。

「放てえええ！」

新型の大砲が火を噴くと、砲弾が次々にアインホルンに命中する。

命中率、射程距離 どれも以前とは比べものにならない。

「次々に撃ち込め！ 王国に共和国の力を見せつけるのだ！」

司令官である提督に、艦長が続いた。

「敵は聖樹の苗木を奪おうとしている。我らの手で、聖樹の苗木を守るのだ！ この戦いは共和国の未来がかかっている！」

聖樹の苗木を守るためと、士気が高くなっていた。

末端には、どのようにセルジュが苗木を手に入れたのかなど知れ渡っていない。

イデアルの情報操作もあって、リオンたちは苗木を奪いに来る悪党になっていた。

だが、自分たちの大事な苗木を奪われると、必死に抵抗しているのだ。

砲弾が次々に命中し、アインホルンは黒い煙に飲み込まれた。

「提督、見事ですな」

「ああ、角付きなど恐れることはない」

だが、砲弾の雨の中を 黒い煙から姿を現すアインホルンを見て、提督は言葉を途中で止めた。

「な、何をしている！ 砲撃を続けろ！」

「砲撃を続行！ 敵をここで撃墜するのだ！」

慌てる提督と艦長の命令で、艦隊が砲撃を続けるがアインホルンは止まらなかった。

提督が目を見開く。

「何故だ！ 威力も以前とは比べものにならないというのに！」

止まらないアインホルンを前に、以前敗北した恐怖が蘇る。

艦長は距離が近付いたため、鎧を出撃させるのだった。

「騎士たちを出撃させる！ 乗り込んで破壊すれば、あの船だろうと沈むはずだ！」

共和国側の鎧が次々に出撃する。

砲撃は止み、アインホルンに鎧が乗り込もうとすると 赤い鎧が槍を振り回して三機を吹き飛ばした。

「おら、退けえええ！」

次に飛び出してきたのは青い鎧だ。

両手にそれぞれ剣を持っており、次々に鎧を斬り裂いていく。

『バルトファルトだけが王国の騎士と思うなよ！』

報告にない鎧の登場に提督は目を細めた。

「困んで叩け。その間に態勢を立て直す」

直後、旗艦の隣にいた飛行船の艦橋が火を噴いた。

全員の視線がそちらに向かうと、緑色の鎧が大きなライフルを持っている。

次々に飛行船の重要機関を撃ち抜いていた。

「や、止めさせろ！」

通信を担当している兵士が、

「近付けません！ もう一機が邪魔をしています！」

目をこらしてみれば、共和国の鎧が緑色の鎧に近付こうとすると落ちていく。

紫の鎧のようなものが飛び回っていた。

「たった四機に何をやっている！」

提督が怒鳴ると、艦長が叫んだ。

「提督、前に！」

前を見れば、アインホルンの前に黒い鎧が見えた。

以前とは形状が違っている。

「
外道騎士」

次の瞬間には、旗艦の艦橋が 爆ぜた。

アインホルンが目指すラウルト家の屋敷には、次々に報告が舞い

込んでくる。

「敵の角付きが止まりません。艦隊は三割を損失しました」

「何故止まらん！」

「勝てるのではなかったのか！」

混乱する会議の場で、セルジュは腕を組んで苛々していた。

隣に浮かんでいるイデアルに文句をぶつけた。

「どうして俺は出られないんだ？」

『マスターは司令官代理ですからね。動いてはなりません』

「司令官なんて、なってみると面倒なだけだな。お前が出ればすぐに終わるだろうに」

そんなセルジュの意見に、

『まさか。ルクシオンはまだ本気を見せていませんよ』

「はあ？　なら、なんで止められないんだよ」

『足止めには十分ですからね。ルクシオンのマスターの性格もありますが、ギリギリまで本気にはならないでしょう。それに、本体を出してくれば儲けものといったところです。もっと詳しいデータが取れますよ』

その言葉にセルジユも違和感を覚える。

「お前、まさかこいつらを囿にしたのか？ ルクシオンの本体を見る、それだけのために？」

「いえ、そんなことはありません。ただ、マスターが出向いて勝利したとしても、それでは彼らに現実を教えることが出来ませんからね」

セルジユが簡単にリオンを倒してしまつては、共和国の貴族たちがありがたがらない。

そう言つて、イデアルはこの状況を見守っている。

「その考えは嫌いだ。俺が出る。お前も出る」

イデアルは一つ目を横に振る。

しかし、

『了解しました マスター』

アルベルクが囚われている牢屋。

そこでノエルは話を聞いていた。

両親のこと そして、アルベルクが何を目指していたのかを聞いて落ち込んでいる。

「なら、最終的に母や父が目指していたことって」

「支配下に置けない聖樹の破壊だ。色々と実験をしていたようにね。資料を確認したが、その中に“今の聖樹は狂っている”とあった。だから破壊する、と。そんなことをすれば、どうなるか分かっていたはずだ」

父がアルベルクと母を面会させなかった。

その理由を娘ながらに察してしまう。

（父さんは、母さんをアルベルクさんと会わせたくなかったんだ）

純粋な嫉妬ならまだ救いがあった。

だが、父の考えに気が付く。

「父さんは、たぶん　国が滅ぶことを伝えたくなかったんだと思います」

「だろうな。どのように共和国が成り立っているのか、聖樹を失えばどうなるのか、先のことを考えれば、聖樹の破壊は共和国の崩壊と同義だ」

レスピナス家と六大貴族　どちらが悪かったのか？

ノエルは悩んで頭を抱えてしまう。

「君にとってはご両親だ。私を恨みなさい」

「こんなのつてないよ。なら、私たちは」

ノエルが言い終わる前に、外で見張りが倒れる音が聞こえた。

「え？」

アルベルクは咄嗟に、

「すぐに隠れなさい。早く！」

ノエルが部屋の隅にある道具入れに隠れると、ドアが開いた。

アルベルクが緊張していると　ドアの向こうに人影はない。

そのまま気配は離れていく。

「私を暗殺しに来たんじゃないのか？」

ドアが開いた瞬間、倒れている見張りの兵士たちが見えた。

アルベルクは何が起きているのか分からず、ノエルにしばらく動かないように言って警戒するのだった。

リビアが監禁されている部屋。

その部屋にやって来たのは、ランベールだった。

フーヴェル家当主である彼が、リビアの部屋に来たのには理由がある。

「お前があの小僧の婚約者だな！ あの外道騎士の！」

「　　そうですけど」

血走った目。

手には拳銃を持っていた。

リビアの腕を掴む。

「来い！ あの小僧への人質にしてやる」

人質と聞いて、リビアが抵抗をする。

「は、放してください！」

ランベールはリビアを見て、

「よく見れば見てくれはいい。あの小僧の前に出すために、相応しい格好にしてやろう。少し遊んでやる」

下卑た笑みを浮かべ、ズボンを脱ぐランベールにリビアは青ざめる。

「や、止めて！」

「王国の女がどんな声で鳴くのか楽しみだ」

ドアの向こう　ドアを閉めようとしている兵士たちは、ランベールを止めようとはしなかった。

リビアが抵抗しようとする、と、

「その程度でどうにかなると思ったか！」

ランベールの紋章が輝き、リビアの魔法を打ち消してしまった。

「　　嘘」

「これが現実だ。さあ、楽しもうじゃないか。あの小僧のことなど忘れさせてやる」

リビアはランベールの言葉に背筋がぞわりと震え、嫌悪感を抱いた。

ランベールが舌なめずりをする。

「いや。放して！　リオンさん助けて！」

セルジュVSアロガンツ

共和国の空は飛行船と鎧が飛び交っていた。

コックピットの中で奥歯を噛みしめるのはジルクだ。

緑色の鎧にライフルを構えさせ、次々に引き金を引いて敵を撃ち落としていく。

「数が違いすぎますね」

性能差で戦えてはいるが、数的に負けているのは痛い。

聞こえてくるのはエリクの声だ。

『ラウルト家の領地から馬鹿でかい船が来るぞ！』

案内役としてアインホルンの甲板の上にいるエリクの声で、四人の意識は遠くに見えるイデアルへと向かう。

ブラッドが驚いて戦場で動きを止めていた。

『浮島を使っていないのに、何て大きさだ。パートナーよりも大きいじゃないか』

「ブラッド君、止まらないうでください！」

『わ、悪い』

通常、巨大な飛行船というのは浮島を利用したものが多い。

七百メートルを超えるパルトナーは、純粋な飛行船としてみれば最大級の飛行船だ。

それを超えて大きな飛行船など、ジルクたちもはじめて見る。

大きな飛行船 イデアルの本体からは、次々に飛行船や鎧が出撃してきていた。

全て無人機だ。

「あれがバルトファルト伯爵の言っていた、敵のロストアイテムですか」

金属の装甲板が全体を覆っている。

どうやって動いているのか分からない飛行船を前に、ジルクはアインホルンの方を見た。

浮かんでいるアロガンツは、近付いた鎧を次々に撃破している。

ジルクは残弾数を確認すると、アインホルンへと戻るのだった。

丁度、補給を行っていたクリスと入れ違いで甲板に帰還する。

『ジルク、早めに上がれ。私とグレッグはアロガンツを支援する。ブラッドだけじゃこの数はさばききれないからな』

ジルクは操縦桿を手放し、深呼吸をした。

「分かっています。お気を付けて」

クリスが空に舞い上がるのを見送ると、ジルクの鎧の周囲に作業用のロボットたちが集まってきた。

素早く補給や整備を行っている。

「ですが、巣穴から本命を引きずり出せましたね」

ライフルを交換し、休息が終わるとジルクは再び空へと舞い上がるのだった。

イデアル本体。

艦内を歩くセルジュは、パイロットスーツを着用していた。

これからギアへと乗り込むのだ。

ついてくるのはイデアルだった。

『マスター、アロガンツの形状が以前とは異なっています。警戒してください』

「俺が負けと思うのか？」

『相手が戦争を経験しているのを忘れですか？ 油断してはいけ

ません』

「分かったよ。だが、どうせチート戦艦で性能のゴリ押しだ。そんな奴は怖くなんかないね」

油断しているセルジュを見ながら、イデアルは思っていた。

（少々、図に乗らせすぎましたか。こいつの遺伝子情報は既に入手済みですから、ここで消えても問題ありませんけどね。転生者のサンプルを失うのは痛いですが、目標のためには絶対に必要な存在でもなし）

マスターなどと呼んではいるが、内心では利用しているだけだった。

ギアへと乗り込むセルジュは、これからゲームでも始めるような態度だ。

ワクワクしているのか、顔付きは真剣そうに見えない。

「すぐに終わらせてやる」

『では、私は本体から支援させていただきます』

「おうよ。今度はあいつの首を持ち帰ってやるよ」

（首とは、リオンの首でしょうか？ それともアロガンツの首でしょうか？ たぶん、後者なのでしょうね。甘い。本当に甘い）

出来れば今回の戦闘にセルジュは出撃させたくなかったが、本人

が出るというので認めてしまった。

（こいつの後任はレリアでも構いませんが、オリヴィアという盾を置いて戦場に出る　高潔な精神には本当に涙が出ますよ）

リビアがいれば、ルクシオンも簡単には本気を出せなかった。

イデアルは予定していた戦場にルクシオンを引きずり込めず、多少の苛立ちを感じている。

（まあ、どうにでもなりますけどね）

ギアのコックピットが閉まると、ツインアイが光った。

「リオン、今度は誰も止めないぜ！」

出撃するギアを見送り、イデアルは艦橋へと向かうのだった。

戦場に現れたセルジュを、共和国の兵士たちは声を張り上げ歓迎する。

『ラウルト家のセルジュ様だ！』

『これで俺たちの勝ちだ！』

『共和国万歳！』

ギアのコックピット内で、セルジュは気分よく操縦桿を握りしめる。

必死に抵抗を見せている王国の飛行船アインホルンは、共和国側の攻撃で装甲が煤けていた。

周りを飛び回っている鎧を見て、セルジュは口笛を吹く。

「乙女ゲーの王子様たちか？ 多少は戦えるみたいだが、俺とギアアの敵じゃないな。さっさとリオンを倒すか」

ギアアが暗くなり始めた空を飛び、アインホルンの側にいたアロガンツを見つけ襲いかかる。

「見つけたぜ、リオン！」

アロガンツはバトルアックスを持ち、下降して槍を振り下ろす。ギアアの一撃を受け止めた。火花が散り、互いに距離を取るとすかさず次の攻撃を打ち込む。

「背中が少し違うな。本気を出したのか？」

槍を振り下ろしたときの手応えから、相手のパワーが上昇しているのが分かる。

だが、それでもギアアの方が上だ。

『またお前か。俺はお前の相手をしている暇はないんだよ』

リオンの声にセルジュは不敵に笑うのだった。

「ここをお前の墓場にしてやる。今度はノエルも止めないぜ！」

この場にノエルがいないため、止める理由がないと言っと
オンが答えた。　　り

『　ああ、俺も止めるつもりはない』

ギアが距離を取り、腕に仕込んだマシンガンでアロガンツを攻
撃する。

背中に背負ったシュヴェールトからレーザーを照射してくるアロ
ガンツだが、ギアの装甲がそれらを弾く。

「無駄だ！　その程度の攻撃でどうにかなると思うなよ！」

対して、ギアのマシンガンは　アロガンツの装甲を削ってい
た。

「スピードが上がっても、的が大きいと当てやすい。どうしてそん
なウスノロを使っているのか理解できないな！」

その言葉にリオンが反応を示す。

『ウスノロだと？　アロガンツのスピードを舐めるなよ！』

背負ったシュヴェールトが唸り、爆音を発するとアロガンツがセ
ルジュの視界から消えた。

だが、セルジュは慌てない。振り返って槍を構えた。

「甘いんだよ！」

魔法による感覚強化で、セルジュはアロガンツの速度に対応する。

「どうした？ その程度か、屑騎士！」

「っ！」

戦場では、セルジュとアロガンツが激しく戦っていた。

そんなセルジュに、青と赤の鎧が挟み込むように向かってくる。

「もらった！」

「この野郎おお！」

クリスとグレッグが乗る鎧の動きを見ながら、セルジュは対応するのだった。

二人の鎧をその場で回転するように蹴り飛ばし、アロガンツが振り下ろしてきたバトルアックスをギアの手で受け止めた。

「その程度で俺を止められると思うなよ！」

セルジュが戦闘に参加したことで、一気に流れは共和国側に傾いていく。

ラウルト家の屋敷。

レリアが用意された部屋で休んでいると、クレマンが訪ねてきた。

オネエの教師であるクレマンだが、本来はレスピナス家の元騎士である。

若い時は美形で女性の人気も高かった。

そんなクレマンがレリアを訪ねてきた理由は　。

「何よ？　姉貴なら知らないわよ」

「　レリアちゃん。いえ、レリア様。この屋敷で死体が発見されました」

「嘘！？　ま、まさか姉貴が！？」

「いえ、違います。ですが、何者かが侵入しているのは確かです。ノエル様を急いで探しておりますが、レリア様も十分にお気を付けてください」

レリアはノエルが死んでいないと知って安堵する。

それよりも、だ。

「あんたも姉貴を探しにいけば？」

「自分はレリア様をお守りするように命令されています。もっとも、命令されなくてもレリア様をお守りしましたけどね」

「　そう」

レリアはクレマンがレスピナス家の騎士だと知っていた。何しろ、自分たちを匿った者たちの一人がクレマンなのだ。

だから、あまり驚いた様子もない。

「それにしても驚きました。あの事件の頃は幼かったレリア様が、私を覚えてくださっていたのですね」

レリアは内心で呆れる。

（あんたみたいな濃いキャラを忘れるわけがないじゃない。昔はもっと美形だったのに、今はこんな　まあ、いいけどね）

「それがどうしたのよ」

「いえ、嬉しかったのです。あの頃、私はまだ新米の騎士に過ぎませんでしたから」

レリアは、クレマンが新米として配属された日のことを思い出す。

失敗し、上司に叱責されていたクレマンを助けたのはレリアだ。

将来のために声をかけたに過ぎない。

子供の頃のレリアは、将来を見越してうまく立ち回っていた。

「それより、いったい誰が侵入したのかしら？」

「ラウルト家に恨みを持つ者もありますが、他の六大貴族も信用できません。この混乱を利用して政敵を排除しようとしている可能性もあります。ただ、どちらも限りなく可能性が低い。やはり、王国の関係者である可能性が高いかと」

それを聞いてレリアは焦る。

「嘘でしょ」

（あいつら、こんな所にまで乗り込んできたの？）

ただ、リオンはセルジュと戦っているはずだと思いなおす。

（リオンが来ているはずがない。なら、いったい誰が）

考え込んでいると、扉の向こうで物音が聞こえてきた。

クレマンがレリアを背にして剣を抜く。

「レリア様はお下がりください。そこにいるのは誰！」

ドアが開くと、そこには誰もいなかった。

ただ、ドアの前にいた護衛の兵士が倒れている。

レリアは驚く。

「誰もいない」

ただ、クレマンは冷や汗をかいていた。

「そこにいるわね。姿を見せないなんて、女の子に失礼じゃないかしら？」

誰もいないはずなのに、クレマンに答える声があった。

「これは失礼した。でもね、こっちは遊んでいる余裕がないから許してくれよ」

クレマンが誰もいないのに剣を左から右へ　横一文字に振り抜くと、見えない何かは屈み込みクレマンの懷に潜り込むと鳩尾に一撃を叩き込んだようだった。

クレマンの巨体が少し浮き上がり、体をくの字に曲げている。

だが、クレマンが剣を捨てて抱きついた。

「逃がさないわよ！」

「それは困る」

そんなクレマンは、顎を殴られたのか顎が持ち上がるとそのまま見えない何かに投げ飛ばされる。

床に倒れるクレマンは、鼻血を出しながら立ち上がろうとしていた。

「レリア様をどうするつもり！」

何が起きたのか分からないレリアは、ただその場で立ち尽くすこ

としか出来なかった。

（え？ いったい何が起きて ）

見えない何かは言う。

「ああ、こいつに興味はない。広い屋敷で少し手間取ったから、道を尋ねるだけだ。潜り込むまではよかったが、支援を受けられないから大変だよ」

レリアはその声の主を知っていた。

「どうしてあんたがここにいるのよ。戦場にいるはずでしょ！」

見えない何かは低い声を出す。

レリアは自分の顎が持ち上がり、下顎に銃口を突きつけられているのが分かった。

「リビアの居場所を言え」

右手を前に向けたレリアは、リビアにしたように電気ショックを与える。

すると、人の姿をした透明な何かが一瞬だけ浮かび上がった。

ただし、それだけだ。

「な、なんで効かないのよ！」

驚いていると、目の前の人物は低い声でもう一度聞いてくる。

「二度目はない。居場所を言え」

普段とは違う男の声に、レリアは恐怖からリビアの居場所を教え
てしまふのだった。

リビアの部屋。

「放して！ 放してください！」

ランベールはベルトを外し、ズボンを下げるが片手でリビアの腕
を掴んでいるためうまく服が脱げない。

「静かにしろ！ と言えば、王国の女は亜人たちを抱くらしいな。
お前も色んな亜人たちに抱かれた後か。可愛い顔をして好き者じゃ
ないか」

「私はそんなことはしません！」

「それは結構！ なら、すぐにでも本物の男を教えてやる。だから
抵抗を こ、この！」

ランベールも男だ。

腕力なら女子供よりも強い。

だが、リビアの抵抗が思ったよりも強く、ズボンが足首まで降り

た状態でなんとか押し倒したが　そこから先に進んでいなかった。

「こ、この！　いい加減に観念しろ！」

すると　。

「お前が観念しろ」

ランベールの頭部から何かをぶつけたような音が聞こえたと思えば、見えない何かに持ち上げられたようにリビアから離れた。

解放されたリビアだが、胸元で手を握りしめる。

聞き間違えるはずがない声に安堵した。

「　　リオンさん？」

すぐに、何もない場所に急にリオンが出現したように見えた。

パイロットスーツ姿で、手にはライフルを持っている。

「迎えに来たぞ、リビア」

涙を流し、リビアはリオンに抱きつくのだった。

「リオンさん！　私　私！」

「もう大丈夫だ。外の見張りも気絶させているから、すぐにこの場を離れるぞ」

リビアは頷く。

「はい。えっと、あの　ノエルさんもこの屋敷にいるみたいです。だから」

「悪いが、連れて帰れるのは一人だけだ。それから、詳しい話は後だ。光学迷彩のシートがあるからかぶっておけ」

見えない布をかぶると、リビアは周囲の景色に溶け込み消えるのだった。

鏡を見ると本当に消えている。

「これ凄いですね」

「万能じゃないけどな。　少し用事があるから先にドアの外に出ていてくれ」

「何をするつもりですか？」

リオンはリビアに笑顔を見せる。

「ちょっとした悪戯だ」

「リオンさん、こんな時まで　え？」

いつものリオンだと安心したのだが、普段の顔とどこか違っていった。

「リオンさん、もしかして怒っていますか？」

リオンは左手で顔を隠す。

「誰かさんのせいで大変だからね」

「う、ごめんなさい」

シートを握りしめ俯くと、リオンが笑顔で話しかけてくる。

「嘘だよ。俺のミスだ。だから、悪いのは俺だ。怖かっただろ？ もう心配はいらないから外で待っていてくれ。終わったらすぐにここから出よう」

頷き、リビアが部屋の外に出ると、すぐに部屋の中から「カシュッ！」という音が二回聞こえてきた。

（何の音だろう？ 何かがこすれたような音かな？）

聞いたことない音だった。

リオンがすぐに部屋から出てくると、リビアは尋ねるのだった。

「何をしたんですか？ 聞いたことのない音が聞こえたんですけど」

「秘密だ」

ライフルを持つリオンだが、リビアに隠すように 右手ではサプレッサー付きの拳銃をホルスターにしまい込んでいた。

外道騎士の本気

ラウルト家の屋敷。

中庭に隠していたエアバイクに近付くと、光学迷彩が解除される。

「まるでスパイ映画みたいだな」

俺の呟きにリビアが困っていた。

「あの、すばいえいが、って何ですか？」

「独り言だよ。ほら、乗って」

リビアが跨がると、俺も乗り込みエンジンをかける。

周囲の景色に溶け込み見えなくなると、屋敷が慌ただしくなっていた。

どうやらランベールの遺体を発見したらしい。

もしくは、レリアが騒いだのだろうか？

どちらでもよかった。

俺の背中にしがみつくリビアが、不安そうにしていた。

「見つからないんですか？ えっと、ルク君と同じ能力があるなら、

発見されるかもしれませんよ」

「大丈夫。見つかったても、今のイデアルは動けないだろうから」

潜り込むだけなら問題ない。

ただ、ルクシオンやクレアーレのサポートは受けられなかったけどね。

そして俺は、隠し持っていたスイッチを取り出す。

間違って押さないためのセーフティーを外し、ボタンを押すと懐にしまい込んだ。

リビアは気付いた様子がない。

「さて、そろそろあいつらの様子を見にいくとするか」

「今日のリオンさん、ちょっと怖いです」

リビアの感想は正しかった。

「本当に　どうしてこうなったのかな」

ハンドルを握りしめ、俺はエアバイクでラウルト家の屋敷を急速に離脱するのだった。

爆発音に驚いて、振り返ったリビアが俺に声をかけてくる。

「リオンさん、屋敷が！」

ラウルト家の屋敷で起きた爆発。

その衝撃で鉄格子が歪み、外に出られるようになったアルベルクは倒れていたノエルを抱き起こしていた。

「大丈夫か！」

「は、はい。何とか。まだ、少しクラクラしますが」

急に屋敷が激しく揺れた。

部屋を出て廊下から窓の外を見れば、黒い煙が見える。

アルベルクは冷や汗をかいていた。

「まさか、ここまで攻め込まれたのか？」

港がある元レスピナス家の領地から、ここラウルト家の領地の間には聖樹のある浮島を挟んでいた。

距離的に随分と離れているはずなのに、もうここまで攻め込まれたのかと思っていると兵士たちの声がする。

「アルベルク様は無事か！」

「王国の奴ら、何て真似をしゃがる」

「すぐにセルジュ様を呼び戻せ」

物陰に隠れてやり過ごすと、アルベルクは会話の内容からセルジュが出陣したのを知る。

「あの馬鹿息子。戦場に出た経験などないだろうに」

イデアルを持っているために油断しているとすると、それはとても危険だった。

アインホルンが何の策もなくこちらに向かってきているわけがない。

リオンが動いているとすれば、絶対に何か企んでいるはずだ。

ノエルが頭を押さえつつ、アルベルクから離れると窓の外を見る。

「何が起きているの？」

それは問いかけではなかったが、アルベルクが答えた。

「馬鹿息子が王国と戦争を始めたのは確かだね。誰も止めなかったのが情けない」

ノエルが振り返る。

「戦争！？ そんなの止めさせないと！」

ただ、アルベルクは首を横に振るのだった。

「はじめてしまえば、決着をつけねばならん。それに、状況が分らないので対処のしようもない」

今回の一件を周辺国はどう思うだろうか？

共和国の信用はどうなる？

アルベルクには、勝っても負けても大きな問題が出来てしまったようにしか見えなかった。

「大義名分のない戦争など 人がついてこぬというのに」

今はいい。

国中が失ったプライドを取り戻そうとしている。

だが、こんなやり方はいつまでも続かない。

アルベルクはノエルを見た。

どうすれば良いのか考えているノエルを見て、

「ノエル 君は聖樹の苗木を持って王国に逃げなさい。バルトフアルト伯爵は君を欲している。悪いようにはしないだろう」

ノエルは俯く。

「 リオンには婚約者が二人もいるわ。私が付け入る隙なんてない」

「な、何！？ あ、いや、そうだったな。資料で読んだが　そ、
そうか。いや、伯爵本人でなくとも、王国で出会いもあるだろう。
それとも、共和国に気になる異性でもいるのかい？」

「いないわ」

軽い冗談を交えてみたが、即答するノエルに少し寂しく思うアル
ベルクだった。

「と、とにかく、今は出来ることをしよう。まずはこの状況を正し
く把握する必要がある。誰かに話を聞くとしよう」

ノエルが頷き、二人は屋敷の廊下を走るのだった。

戦場　イデアルは何もない空を見ていた。

『そこにいるな　ルクシオン』

何もない空に、人工知能のイデアルはルクシオンの本体を正確に
把握していた。

周囲の景色に溶け込んではいるが、確かにそこに存在している。

『データ通り。多少の差異は許容範囲。末期に建造された移民
船で間違いない』

人類が故郷を捨てて旅立つために用意した箱船だ。

その機能の中には、軍属であるイデアルでは所持していない装備を数多く保有している。

ルクシオンと戦ってでも欲しかったのは、ルクシオンの本体だ。

『もう時間がない。全てをもらいますよ、ルクシオン』

イデアル本体　大きな箱型の宇宙船の装甲には、様々な武器が取り付けられていた。

すると、大地の一部が盛り上がり、そこからイデアルにレーザーを照射する。受け取ると、イデアルの出力が上がった。

足りない機能を外部から補っている。

それらがルクシオンに向くと、一斉に攻撃を開始する。

戦場では、何もない空間に攻撃を開始するイデアルに疑問を持つ兵士たちもいた。

通信を送ってくる者もいるが、それら全てを無視する。

離れたミサイルや実弾　そして光学兵器を全て跳ね返すルクシオンは、その姿を晒した。

灰色の船体は流線型の形をしていた。

船首が細く、二等辺三角形のようなシンプルな形をしている。

両脇に四角い箱状のエンジンがついている。

『全てを一隻に詰め込んだ多目的な船　今の私と同じですね』

イデアルも基地で使えそうな部品を集め、自身を改修している。

補給艦なのに無理をしてまで、戦艦が持つような兵器も積み込んでいた。

本来、純粋な戦闘用ではない。

本来の性能を考えるとルクシオンの方が上だった。

『ここは私のホームですからね。負けられません』

イデアルが聖樹を背にして庇うように、攻撃を更に激しく行う。

同時に、艦内では新しいミサイルや実弾が次々に生産されていた。

光学兵器の交換パーツまで用意され、どれだけ撃つても補給される。

そんな中、共和国の飛行船が爆風に煽られるように上昇した。

ルクシオンのシールドを貫けず、攻撃を更に激しくしているイデアルの光学兵器に巻き込まれ　その飛行船は爆散する。

『邪魔ですね』

無人の飛行船がルクシオンを囲むように動いており、無人機の鎧も戦闘を無視してルクシオンに向かっていった。

セルジュが怒鳴り声を上げる。

『イデアル、何をしてやがる！』

『マスター、こちらはルクシオンの相手です。アインホルンの相手はお任せします』

『ふざけんなっ！ こっちは奴らがしつこいせいで面倒なことにまたかよ！』

セルジュの方は、途中から参戦したエリクによって四対一で戦うことになっていた。

機体性能差があつたとしても、四対一で苦戦を強いられている。

（そこで戦場の厳しさを学びなさい。生き残れば、マスターとして使ってあげますよ）

今のイデアルにとって、大事なものはルクシオンだった。

イデアル本体から攻撃を受けるルクシオン本体。

その中には、ルクシオン 子機の姿もあつた。

『かなりの無茶をしていますね。本来なら、戦艦の装備など持てないはず。だが、イデアル その程度で私を止められると思つていたのですか？』

ルクシオンが攻撃を開始すると、イデアルの周辺にいた無人の鎧や飛行船が燃え尽きて落ちていく。

互いに出力を落として戦っているのは、周辺で味方が戦っているからだ。

本気を出せば周辺が吹き飛んでしまう。

『味方を軽視していますね。その割には、無茶をした本体の姿が気になります。いったい何を考えているのか？』

イデアルの後方に見える聖樹。

すでに攻撃可能範囲だった。

『将来の禍根は早期に排除　マスターがすぐに決断してくれれば、楽に終わったんですけどね』

今のリオンは共和国のことを考えていない。

考えているのは　自分のことだけだ。

リビアを助け、将来の禍根は排除する。

そのためによりやく重い腰を上げたのだ。

『私と貴方が戦うという意味を、貴方のマスターは知らなすぎた。聖樹共々吹き飛びなさい』

ミサイルを聖樹に向かって撃ち込む。ミサイルが戦場を抜け出し、聖樹を目指した。

イデアルもルクシオンと戦うために余裕がなく、聖樹への攻撃など無視すると考えていた。

イデアルにとって聖樹など無価値だと思っていたからだ。

だ
が
。

『これは？』

イデアルは本体の防御を無視して無理矢理ミサイルを迎撃した。

一発は迎撃不可能とみたのか、無人の飛行船を当てて防いでいる。

光学兵器への対処も同じだ。

本体を盾にするように聖樹を守っている。

『私たちの知らない聖樹の価値があるのでしょうか？』

独自に調査を行うと、イデアルと聖樹の間に設備を通してエネルギーのやり取りが確認できる。

『聖樹からエネルギーを得ている？なるほど、理解しました。イデアル、貴方は自らを防衛設備にしましたね』

共和国内限定で、補給艦とは思えない性能を発揮できるようにイデアルは自身を改造していた。

だからこそ、イデアルはここで　共和国でルクシオンと戦いたかったのだ。

聖樹周辺にはシールドを発生させており、光学兵器の対処がされていた。そのため、ミサイルは無理をしても撃ち落としたのだ。

ただ、そうなると下手な攻撃では聖樹には届かない。

危険な攻撃はイデアルが防ぎ、そして聖樹はエネルギーをイデアルに供給し続ける。

『これは少々厄介ですね』

ルクシオンには、イデアルがなりふり構わないように見えていた。

ルクシオンとイデアルが激しく戦っている空の下。

セルジュはエリクを前に悪態をつく。

「てめえ、国を裏切るとか最低だな！　それでも六大貴族か！」

ただ、エリクは動じない。

『俺はただ、こんな戦いは間違っていると思ったただけだ！』

「思っただけで裏切るなよ、糞野郎！」

蹴り飛ばすと、今度はブラッドが槍を突いてくる。

ギアは素手で受け止めるが、ブラッドは槍を手放すとすぐに新しい武器を持って攻撃してきた。

『僕に夢中なのは分かるけど、よそ見をするのはよくないね』

「このナルシスト野郎が！」

レリアに聞いていたブラッドのキャラを思い出し、文句を言つとグレッジが下から槍を突き出してきた。

避けると、上からクリスが大剣を振り下ろしてくる。

『おらあああ！』

『せいやあああ！』

当たっても装甲に傷がつく程度。

たいした損害はないが。

「こいつらウゼエ！」

直後、弾丸がギアの頭部に命中する。

それは緑色の鎧の　ジルクだった。

『対アロガンツ用の戦術でも駄目ですか。結構、本気で練習してきたのですけどね』

アロガンツに勝つために練習してきた成果を、ギアに発揮していた。

「お前らあああ！」

激怒するセルジュの額に青筋が浮かび上がった。

だが、アロガンツの名前を聞いて気が付く。

「リオンの野郎はどこだ？」

首を動かし周囲を探すも、リオンの乗るアロガンツの姿はどこにもない。

エリクがクツクツと笑っていた。

『セルジュ、バルトファルト伯爵は最初からこの場にいなかったんだよ』

「ああ？ お前、何を言っ

て向かってくるエリクを殴り飛ばし、グレッグを槍で叩き付けるとクリスの斬撃を腕で防ぐ。

クリスも会話に参加する。

『本当のことだ。バルトファルトはここにはいない　いや、いなかった、だな』

セルジュが何を言っているのか理解できないでいると、味方から通信が入る。

『セルジュ様！ お屋敷で爆発があつたそうです！ 死者や負傷者の数は不明。情報が混乱していますが、ランベール様の遺体が見つかったそうです！』

「は？」

セルジュが呆気にとられていると、背中をグレッグに蹴り飛ばされた。

『もう遅い！ お前ら、バルトファルトを舐めすぎたな』

ジルクが言う。

『王国最強の外道騎士 彼を本気にさせたのはまずかったですね』

蹴り飛ばされたセルジュがアインホルンの甲板を偶然見ると、そこではアロガンツにリオンが合流しているところだった。

リビアがアインホルンの船内に避難すると、リオンはアロガンツのコックピットに入り込む。

今までのアロガンツは無人だった。

セルジュは歯を食いしばる。

（あの野郎、俺をおちよくっていたのか！）

次々に味方から指示を求めてくる通信が入った。

『セルジュ様、上の戦闘に巻き込まれ味方に被害が出ています！』

『セルジュ様、既に損害は五割を超えました。撤退命令を！』

『セルジュ様、アインホルンが後退していきます。追撃命令を！』

次々に舞い込む情報やら進言に、セルジュは対応できずにいた。

理由は。

『待たせたな、お前ら』

空に上がってきたアロガンツは、バトルアックスから大剣を持ち替えていた。

『こっちは冷や汗ものでしたよ』

『僕もジルクと同じだ。でも、無事に取り返したみたいだね』

『バルトファルト、このまま本当に撤退でいいんだな？俺たちを本当に下げるのか？』

『私はまだやれるぞ』

『俺もやれる。俺も残る！』

五人と会話をしているリオンは、酷く面倒そうにしていた。

『お前らは下がれ。ここから先は戦争じゃない。アインホルンを守って後退しろ』

セルジュが口端を引きつらせながら笑った。

「俺に負けたのを忘れたのか。少し形が変わったくらいで」

だが、リオンはセルジュに何の関心も示さない。

『さて、さっさと終わらせるか』

まるでセルジュを無視しているかのような態度だった。

爆破

矢継ぎ早に指示を仰ごうと連絡が来る中、セルジュはリオンが乗り込んだアロガンツを前にしていた。

「今更お前が乗り込んだところで、どうにかなると思っているのか？ お前は俺に負けたんだよ」

煽るがリオンの返事はない。

「何だ、震えて声も出ないのか？ そのまま女と逃げた方がよかったんじゃないのか？」

味方の通信を無視してアロガンツと対峙する。

イデアルの方もルクシオンと向かい合っており、どうにも手助けは期待できそうにない。

思っていた以上に厄介だった。

（落ち着け。俺は一度勝っているんだ。なら、何も問題ない）

いくら煽っても反応がない。

そのせいなのか、セルジュは少し緊張していた。

「性能はこっちが上だ。お前は俺に二度も負けるんだよ！」

動き出したギアが空中で槍を構え、いきなり最高速を出して槍をアロガンツの胸に突き刺そうとした。

アロガンツは動かない。

（ほら見る、反応できていないじゃないか！）

セルジュがこの世界で手に入れた魔法による身体強化技術で、機体性能は更に向上していた。

これまでセルジュも努力してきた。

剣と魔法のファンタジー世界に浮かれ、環境もあって鍛える時間は沢山あった。最高の環境でセルジュは学べてきたのだが。

「な、何!？」

槍の穂先がアロガンツの胸に突き刺さろうとして 砕けた。

アロガンツの胸元には傷一つ入っていない。

『言い忘れていたが、ここは前と同じだ。以前にデタラメに強い爺さんがいてね。そいつにここを貫かれたんだ。だから、特別頑丈にしてある』

胸部装甲部分は、パイロットの頭がある。

そこを貫かれたリオンは、修復時に胸部装甲の素材を変更していた。

最初からセルジュの槍はリオンに届かない。

「く、くそ！」

距離を取ろうとすると、アロガンツが動き出し目の前に迫る。

左腕を前に向けマシンガンを撃つと、アロガンツの装甲を削って表面の装甲をそぎ落とした。

表面の装甲を失ったアロガンツだが、その下には先程と変わらない装甲が出てきただけだ。

アロガンツの手が伸び、そのままギアの左腕を掴む。

『それは追加装甲だ。お前らを良い感じに引きつけるための演出の一つだったんだが、削りきれなかったんだな』

アロガンツが握った左腕は、ギアが強制的にパージした。

肩部分から白い煙を吹き出しながら、ギアはアロガンツと距離を開ける。

その後すぐに、衝撃波で粉々に砕かれた左腕。

「てめえ、調子に乗ってんじゃねーぞ！」

破壊された槍を捨てて、レーザーブレードを右手に持つセルジュはアロガンツに突撃する。

しかし、アロガンツはその動きを予想して避けてしまった。

アロガンツにそのまま蹴り飛ばされる。

『お前のデータは取り終わってたからな。ほとんどオートで対応できる』

それはつまり、リオンの実力など関係ないという意味だ。

「な、何だと！ 勝てないから機械に頼ったのか！」

リオンは普段と変わらない口調で。

そして穏やかに。

『それがどうした？ お前の実力はその程度なんだよ。今まで優勢に戦えていたのも、みんなルクシオンの演出だ。どうだ、凄いだろうか？』

その言葉にカチンときたセルジュがアロガンツに斬りかかる。

避けられ、殴られても攻撃を続けていた。

「お前の実力じゃねーだろうが！ そんなんで」

『勝って嬉しいのか、だろ？ お前みたいな奴はすぐにそう言うな。クリスやグレッグと同じ脳筋タイプだ。だけど、あいつらの方がマシだったな。周りとうまく連携を取れるようになっていたのを見たが、随分と成長している。人生二回目のお前と違ってね。ガキは転生してもガキのままだ』

「　っ！」

セルジュは今まで使わなかったドローンを展開する。

『いいか、これは喧嘩じゃない。戦争だよ』

すると、アロガンツは同じ数のドローンを展開して攻撃を封じてしまった。

互いのドローンが攻撃を行い、同士討ちのような形で破壊され地面に落ちていく。

『お前は何も分かっていない。お前がいくら俺に勝とうが意味がない。俺にはルクシオンがいて、お前にはイデアルがいる。その時点で個人の技量に意味なんかないのさ』

「意味がない、だと」

『ああ、そうだ。確かにお前は俺よりも強いよ。だけど、その程度の差はルクシオンの前では無意味だ。俺とお前の差は、ルクシオンの前では誤差にもならない。分かるか？　無意味なんだよ』

アロガンツに殴られ、地面に落ちたセルジュは悔しさに奥歯を噛みしめる。

自分のしてきたことを全て否定され、そして手を貸さないイデアルにも腹が立つてくる。

「な、なら、あの時は本気じゃなかったのかよ！」

『あんな場所で本気を出せるわけがないだろうが。お前、鎧同士が街中で戦うとどうなるのか知らないの？ 知らないよね。知らないから　こんな酷いことが平気で出来るんだろっな』

アロガンツが聖樹の方角を指さした。

セルジュが警戒しながらそちらを見ると　。

「なっ！」

聖樹で爆発が何度も起きていた。

リオンが言う。

『“この場”は見逃してもよかったんだけどな。止めた　ここで、この場所で、お望み通り本気で相手をしてやるから、自分がやったことの意味くらい知ってから死ね』

燃える聖樹。

セルジュが口を開けていると、イデアルの叫び声が聞こえてきた。

同時に　セルジュは胸が苦しくなってくる。

「何だ、この痛みは？」

『qあwせdrftgyふじuip!!--!--!--!』

イデアルの叫び声をルクシオンは聞いていた。

混乱するイデアルの反応を確認したルクシオンは、リオンが聖樹に仕掛けた爆弾の量を計算する。

『仕掛けた位置が駄目ですね。後は、単純に火薬不足でしょう。まあ、時間もありませんでしたから、これで十分ですが』

ただ、イデアルが予想以上に聖樹に固執しているのか意味が分からない。

エネルギーを供給するための道具以上の価値を見いだしている様子だった。

『よくも　よくも聖樹を！　皆の願いを踏みにじったな、この移民船が！　お前のような逃げるためだけの船に、あの木の本当の意味など理解できるはずもない！　やはりお前は破壊するのが正しかった！　この愚物があああ！』

ルクシオンは、激怒したイデアルに言い返すのだった。

『　聖樹に固執しているようですね。それなら、マスターを怒らせなければよかったのです。たとえ、私が性能で貴方に負けていたとしても、マスターの質で私が勝っているのですよ。私のマスターは、決断すれば徹底的にやるのです。お前のマスターもどきと一緒にしたのが間違いです』

イデアルは興奮状態だ。

まるで、ルクシオンが新人類の兵器を見つけたときに似ている。

『マスターの質？ 随分と半端者を評価していますね。やはり、移民船の人工知能は使えない。あの程度のマスターに、私のマスターや皆が負けるはずがない』

『皆？』

ルクシオンは会話から、イデアルがセルジュをマスターとして認めていないのを察した。

リオンと比べているのは別の誰か それも複数だ。

『やはりあのセルジュという男は傀儡でしたか』

『起動するためにはどうしてもマスター登録が必要でしたのですね。あの男は評価していますが、私のマスターには不十分です。私のマスターは 私のマスターは、今でもあの方たちだけだ』

何か事情があるらしいが、イデアルは一から説明する気はないようだ。

ルクシオンはイデアルを警戒する。

熱量が増大していたからだ。

『その出力は周辺を吹き飛ばしてしまいますよ？ 今まで出力を押さえていたのに、よろしいのですか？』

警告するも、イデアルは気にした様子がない。

『新人類などいくら消えても構いません。ギアに乗っているセルジユも生き残るでしょう。お前は　お前たちはここで必ず倒す』

イデアルの敵意がリオンにも向かっていると気が付き、ルクシオンも出力を上げていく。

『新人類などいくら滅んでもいいと？　同意見ですね。では、私もマスターの生存を最優先に行動させてもらいます』

互いに通信を切ると、そこから更に戦闘が激しくなってくる。

リオンから通信が入ってきた。

『あんまり周りに被害は出すなよ』

『無茶を言いますね。オリヴィアは無事に救出できましたか？』

『間一髪だった。戻ったら慰めるとして　イデアルかセルジユが知らないが、苗木はガチガチにガードされて手が出せなかったよ。屋敷内は余裕で潜り込めたんだけどな』

聖樹の苗木は取り戻せなかった。

それを悔しいとはリオンは感じていないようだ。

『それから、屋敷を爆破したがイデアルに反応はあったか？』

『ありません。聖樹に対しては異様に反応を示していますけどね』

『そっか　なら、クレアーレに期待するか』

リオンも忙しいのか通信を切る。

『慰めが必要なのは、オリヴィアではなくマスターだと私は思いま
すけどね。さて、私の役目を果たしましょうか』

ルクシオンは、イデアルへの対処に入るのだった。

旧文明の宇宙船が チート戦艦たちが本気でぶつかりはじめた。

その余波は共和国中に広がっていく。

戦場から離れたアインホルンの甲板。

そこでリビアが聖樹の方角を見ていた。

聖樹の一部が燃えていた。

それは共和国の人々も気付いているのか、暗くなつた夜なのに地上はとても明るかった。

手すりに掴まり、見るのは激しくぶつかる光だ。

「あれが ルク君の本気なの」

大きな飛行船同士が光学兵器やミサイル、実弾を撃ち合い光や爆発に巻き込まれている。

戦場にいた共和国の飛行船は吹き飛ばされていた。

吹き飛び、燃えて地上に落ちている。

圧倒的な力の差がそこにはあった。

クリスが鎧から降りて、リビアの隣に来る。

「パルトナーじゃないだと？ 明らかに形状が違いすぎる。バルトファルトの奴、まだ戦力を隠し持っていたのか」

ブラッドも来ていた。

「こんなの僕でも黙っているよ。でも、これだけの切り札をきつたということは、それだけ怒らせたってことかな？」

全員の視線がリビアに注がれていた。

最強とも言える切り札をきつた理由が自分にあると知って、リビアはその場に座り込むのだった。

「私のせいで」

ジルクが苦虫をかみ潰したような顔になっていた。

「これだけの力を隠していたというのは、何とも面白くありませんね。私たちは馬鹿にされていたのでしょうか？」

全員が同じ気持ちなのか、面白いとは思っていないらしい。

そんな中、エリックだけは違う意見を口にする。

「お前ら馬鹿か。あの人は姉御が兄貴と認めた人だぞ。お前らみたいなポンコツと一緒にするな」

「何だと！」

グレッグが胸倉を掴み上げるが、エリックは引かなかった。

「あの兄貴が出し惜しみをして本気を出さなかったと思うなら、お前らはその程度なんだよ！俺と同じ間違いをするんじゃないよ」

リビアが顔を上げる。

「え？ あ、え？ あ、兄貴って え？」

リオンとマリエの兄妹疑惑が、ここに来てエリックによって誤解されていた。

「あの人ならどんな問題も簡単に対処できただろうさ。けどなそれをしなかったのは何故だ？俺は姉御の側にいて色々と見てきた。短い期間だが、それでも分かることがある。俺は俺たちは聖樹の大きな力に頼りすぎていた。けど、あの人たちは違うだろ！」

エリックたち共和国の貴族は、聖樹の加護により大きな力を貸し与えられていた。

そのために横柄な態度を取るようになった経緯がある。

地元にいれば負けることはない。

聖樹が無尽蔵とも言える魔力や魔石を与えてくれるので、エネルギーにも経済にも困らない。

頼りきり、そして駄目になった。

「見るよ。セルジュの奴は味方も巻き込んで吹き飛ばしやがった。あんな船が本気で暴れたら、大陸は焼け野原だ。あの人は、関係ない人間を巻き込まないようにギリギリまで本気を出さなかったんだよ」

言われてブラッドが俯いていた。

目の前の戦闘を見ると、普段使えない 使ってはいけない
と思える規模の破壊力があつた。

「確かに、これだと本気を出せないよね。このまま戦っていれば、大陸が沈んでしまいそうだ」

クリスが眼鏡を外した。

「バルトファルトの奴、公国との戦争でもはじめは随分と気を遣っていたな」

グレッグが舌打ちをしてエリクを解放した。

「つんなの知ってるよ。だけどよ 何か言ってくれてもいいだろうが」

ジルクは空を見上げ、

「言えば揉めることになりますね。王国は彼を放置できないでしょう。それを分かっていたバルトファルト伯爵が、ここで本気を出したということは」

ジルクたちにしてみれば、リビアだけを取り返して逃げなかった時点で　王国のために戦っているように見えていた。

戦場を見守っていると、ジルクが異変に気が付く。

「待ってください。様子がおかしい」

聖樹がまるで動いているように見えた。

大地が揺れているのか、下からは悲鳴や火事が発生している。

リビアが下を覗き込む。

「地震？　いったいどうして　まさか、聖樹が動いている？」

聖樹により繋がれた大地が揺れ動いていた。

すると、胸が苦しくなってくる。

胸を押さえ、そして聞こえてくるのは人々の苦しむ声と　聖樹の悲鳴だった。

「これ　人じゃない？　何か大きな声が　苦しいって怒っている？」

エリクが青い顔をして、リビアを見ていた。

「あんだ、分かるのか？ 俺だってかすかにしか分からないのに」

加護を失っているが、かすかに聖樹の苦しみを理解しているエリクは 加護を受けていないリビアが聖樹の苦しみを感じ取っているのが信じられないという顔をしていた。

港では留守番をしていた仮面の騎士 ユリウスがリコルヌの甲板で木箱の上に腰掛けている。

「 皆が戦っているのに、俺だけ参加できないとは情けない」

なら、仮面を取れと言いたいが、これはユリウスの譲れない部分だ。

王子として戦場に出して貰えないから仮面を付けている。

正直、脱ごうが戦場には出られない。

それが本来の立場だ。

落ち込むユリウスを遠巻きに見ているのは、リコルヌに来たニックスだった。

「あいつ誰？」

リコルヌの船員に聞いてみても、誰もが首をかしげていた。

甲板にアンジェが出てくる。

「義兄上、他の者たちの様子はどうですか？」

「は、はい！ 換装は終わったそうです！ あの白くて丸いのは『お仕事があるからいくわ』って空に飛んでいきました！」

公爵令嬢が弟嫁になってしまい、どんな対応をすればいいのかわからないニックスは胃が痛かった。

ダニエルもレイモンドも、アンジェにどう接して良いのか分からないのでこの場に来ない。

「そうですか。早く出発したいのですが」

すると、飛行船が揺れはじめた。

ニックスが慌てる。

「な、何だ？」

アンジェが周囲を見れば、飛行船だけではなく周囲の建物まで揺れているように見えた。

「これは地震か？」

狼狽していると、仮面の騎士が立ち上がり周囲に指示を出す。

「飛行船を出せ！ 繋がれたままでは巻き込まれるぞ！」

その指示にニックスが「偉そうな奴だな」と文句を言うが、正しい判断なので従うことにした。

急いでリコルヌから自分の船に走ると、船員たちに船に乗るように言って飛行船を繋いでいるロープを切らせる。

リコルヌも浮かぶと、周囲の味方の船も同じように浮かんでいた。

アンジエは手すりに掴まり外の様子を見る。

遠くに見える聖樹が赤く 燃えているように見えた。

「何が起きている？」

見慣れない光も確認できる。

そうしていると、リコルヌが急に出力を上げ始めてシールドを展開する。

「っ！」

アンジエが顔を背け、目を細くすると、シールドに光線が命中した。シールドはリコルヌだけではなく、周囲の味方も守っている。

遠くに見える建物に光線が命中すると、赤く染まってレンガが溶けて光りが貫く。

周囲はすぐに燃えはじめた。

破壊されていく建物。燃え上がり、そして人々が逃げ惑っていた。

「この距離でこんな　リオンたちは大丈夫なのか？」

二人を心配していると、仮面の騎士が空を見上げていた。

「どういうことだ？　何故　あれがここに」

アンジエも見上げると、しばらく驚き　そして周囲に指示を出す。

空を静かに進む飛行船が一隻。

「殿下、すぐ皆に指示を出してください！　我々も戦場に向かいます」

すると仮面の騎士は、

「で、殿下ではない！　私は一人の騎士。名前もない仮面の」

「いいから、早く！」

「は、はい！」

アンジエは空を見上げ、そして遠くに見える戦闘を不安そうに見守るのだった。

燃える聖樹

ラウルト家の屋敷から見たのは、燃え上がる聖樹だった。

大地は揺れ、まるで聖樹が苦しんでいるようだった。

アルベルクは胸を押さえる。

「アルベルクさん！」

ノエルが駆け寄ると、アルベルクは苦しそうにしていた。

右手の甲を見ると、聖樹の加護　紋章が輝いている。

「　聖樹が攻撃され怒り狂っている。曖昧なイメージだが、お前たちは何をしているのかと怒られた気分だ」

ノエルが困った顔をしていた。

「聖樹が怒っている？」

「不甲斐ない私たちに腹を立てているのかもしれないが、何を伝えたいのかが分からない。急いで火を消さないといけないが」

ラウルト家の領地ばかりか、共和国中が大変なことになっている。

地震もそうだが、問題は戦闘の余波だ。

光線が聖樹に命中すると、聖樹が悲鳴を上げるような音がした。

バチバチと光が周囲に飛び散り、聖樹の枝を落としてしまう。

遠くから見ていると、枝はゆっくりと落ちて土煙を上げている。

ノエルは回収した苗木を抱きしめていた。

「私には何を言っているのか分かりません」

「君はその苗木の巫女だ。繋がりが無いから仕方がない。だが、このまま聖樹を失うわけにはいかない。私は戦場に向かう」

「戦場に？ アルベルクさんがいても」

実権を奪われたアルベルクには、もう何をすることも出来ない。

それは本人も分かっていた。

「もはやここまでだ。セルジュには戦争を止めさせる」

ノエルは苗木の入ったケースを抱きしめ、

「私もいきます」

アルベルクは駄目だと言うが、ノエルは絶対に譲らなかった。

根負けしたアルベルクが言う。

「なら、鎧を一機確保しよう。こっちだ」

二人が戦場に向かおうとしていた。

聖樹に近づく飛行船は、消火活動を行っていた。

魔法で水をかけ火を消しているのだが、火の勢いは止まらなかった。

消火活動に来たフェルナンが甲板に出て声を張り上げている。

「火を消すんだ！ 聖樹が燃えてしまえば大変なことになる！」

聖樹がなくなれば共和国が終わる。

甲板から戦場を見れば、今も激しく戦っていた。

信じられない光景が繰り広げられ、余波で爆風が来て飛行船が揺れる。

部下の一人が叫ぶ。

「フェルナン様、もう無理です。紋章から聖樹の力を感じません。魔力の供給がされていません」

フェルナンが自分の右手の甲を見て、輝きが弱い紋章に奥歯を噛む。

（こんなことになるなど、誰も予想など出来るものか。知っていれ

ば、セルジュが戦うのを止めていた。セルジュ、お前は相手が同等の力を持っていると知っていたのか？)

自分たちのプライドのためにセルジュに賛成した自分が情けなかった。

(ここからどう動くにしても、聖樹を失うわけにはいかない。何としても聖樹を守らなければ、共和国の未来がない)

決意するフェルナンだったが、光が見えた。

「え？」

フェルナンの乗っていた飛行船は光に飲み込まれ、そして消えてしまふのだった。

戦場に向かう小さな飛行船が一隻。

それにはクレマンが乗っていた。

レリアの姿もある。

「レリア様、今から戦場に向かってもどうにもなりませんよ！」

「わ、分かっているけど。けどー！」

リオンがここまでするなど思っていなかった。

正確には、ここまで出来るとは思わなかった。

このままではまずいことになると思い、セルジュと連絡を取るために戦場に向かうのだった。

「戦わせちゃ駄目だったんだ。こんなことになるなら、もっと違う方法があったのに」

どちらが勝つにしても、その余波で共和国はボロボロになっていた。

既に想像を超えて被害が出ている。

こんなはずではなかったと、レリアは頭を抱えて涙する。

「姉貴もいない。聖樹の苗木もなくなっていたわ。アルベルクもいなかった！」

「レリア様」

「何でここまで出来るのよ」

泣いているレリアに、クレマンが現実を突きつける。

「リオン君　バルトファルト伯爵を怒らせたのでしょうか。彼は、敵には容赦のない騎士のようですから」

「でも！」

「それだけのことをしてしまったのです！　伯爵を迎えに来た婚約

者をさらい、挑発行為をしたのはこちらです」

クレマンの声に、レリアはようやく目が覚めたような気がした。

「だ、だって、イデアルが」

それでも、すぐにイデアルの名前が口から出てくる時点で反省の色は薄い。

「イデアルに従った結果が今です。我々は、怒らせてはいけない相手を怒らせた。そういうことなのです」

レリアがその場に崩れるように座り込み、両手で顔を覆った。

「どうすればいいのよ」

「私にも想像がつきません」

周囲を吹き飛ばしながら戦うルクシオンとイデアル。

双方、エネルギーシールドを貫き、船体にダメージがあった。

イデアルが戦艦の主砲でルクシオンを撃てば、ルクシオンの船体に穴を開けてしまう。

『　　っ！』

だが、イデアルもボロボロだ。

既に多くの装備を失い、船体からは煙が出ていた。

ルクシオンはイデアルに言う。

『このまま削り合えば、私の勝利です。いつまで無駄なことを続けるのですか？』

どう考えてもイデアルの方が先に沈む。

それなのにイデアルは戦いを止めなかった。

周囲の味方を吹き飛ばし、それでもルクシオンに戦いを挑んでくる。

『しょせんは移民船。戦いを知らない。戦いというのは、勝てる条件下で行うものですよ』

イデアルが自信満々に言うと、共和国の大地から砲台がせり上がってくる。

『防衛装置がまだ動いている？』

イデアルが整備を続けていたのか、軍事基地の設備がまだ生きていた。

姿を見せるのは大砲、ミサイル　それらが全てルクシオンに向いている。

『私は長い時を待った！　この時のために私はあああ！』

イデアルの叫び声と同時に、ルクシオンに四方から攻撃が襲いかり爆発が起きる。

ルクシオンの本体がゆつくりと本体を斜めに傾け、降下していく。

設備は一度使つと爆発したのか、動かなくなっていた。

『奥の手はこれですか』

『ここは私のテリトリーです。甘く見ましたね、ルクシオン！』

ただ、ルクシオンは焦らない。

『いいえ、甘く見たのはイデアル 貴方だ』

イデアルの真上 ゆつくりと移動してきた飛行船が、船首をイデアルに向けていた。

船首を真下に向ける形になっているのは パルトナーだ。

大きな大砲を外付けしており、放つと一発で大砲が吹き飛び使い物にならなくなる。

イデアルの船体に穴を開けるも イデアルはまだ沈まない。

即座に反撃され、パルトナーはシールドを展開するも光線に焼かれ落下してくる。

パルトナーの攻撃により空いた穴から、爆発や煙が噴き出す。

ゆっくりと降下する船体　両者相打ちのような状況で、イデアルは笑っている。

『この程度の切り札を予想していないと思っているのですか！　ですが、一撃を入れたことは褒めておきましょう』

『貴方も落ちるのにのんきなことですな』

『落ちる？　ルクシオン、お前は何も分かっていない。相打ちではないのですよ。この戦いは私の勝利だ！』

ゆっくりと降下していくルクシオンは、イデアルの態度が理解できなかった。

『どうして我々が戦っているのでしょうか？　手を取り合うことも可能だったはずだ』

イデアルはルクシオンに答える。

『　　本当の脅威に対抗するためですよ』

『脅威？』

『全ては私の支配下に置かれてから説明しましょう。お前を得られれば、私はようやく“約束”を果たせる』

イデアルは既に勝利したつもりのようだ。

だが　急にイデアルの様子がおかしくなった。

ゆっくりと降下していた輸送艦が、いきなりエンジンが停止して急激に落下する。

『な、何が起きた？ ウイルス？ どうしてこんなことが！』

混乱しているイデアルに、ルクシオンが出力を上げつつ答えた。

落下するふりも終わりだ。ゆっくりと船体を水平にしつつ、

『 パルトナーは良い仕事をしてくれましたよ。もちろん、“クレアーレ”もね。よくぞ、貴方の本体を探し出してくれましたよ』

『クレアーレ？』

『おや、気付かなかったのですか？ 我々は貴方の本体を探していたのです。輸送艦に人工知能を載せていないのでしょうか？ どうりで、パルトナーの攻撃を受けても慌てないわけだ』

『まさか』

『クレアーレは研究所にあった人工知能を再現しましてね。リソースの問題もあるのですが、今回はいい仕事をしてくれました』

『き、貴様“ら” あああ！』

全てを察したイデアルが叫ぶと、ルクシオンが説明をする。

どこか余裕すら感じる電子音声だった。

『人工知能本体を船から降ろし、地上から輸送艦を操作　それが貴方の余裕の正体でしたね。イデアル　見抜いたのは私のマスターですよ。どうです？　私のマスターは優秀でしょう？』

『まさか、先程までの戦闘も　』

『はい。手加減するように命令されていました。マスターに出来るだけ被害は抑えるようにと命令されていましてね』

もつとも、被害を出さない相手は民間人に限定しており、それ以外は無視していた。

イデアルが声にならない電子音を発すると、落下した輸送艦が爆発した。

軍事基地跡。

入り込んだクレアーレは、護衛用のロボットたちを従えてイデアルの本体にハッキングしていた。

球体ボディからコードを延ばし、アクセスしてやりたい放題だ。

『私のことを無警戒とか、イデアル君は油断すぎよね。でも、間に合ってよかったわ。間に合わなかったら、マスターとひねくれ者にネチネチ文句を言われるところだったもの』

色々とデータを抜き取っていると、ルクシオンから帰還命令が出る。

『もう少しだったのに。それにしても、無理な改造をするわね。共和国というか、大陸を取り込む計画とか、こいつぶっ飛んでいるわ。ここまでの理由は何かしら？ うーん、もっと詳しく調べたいわね』

クレアーレにも、イデアルがかなり無理をしていると感じられた。

自身の機能を共和国のある大陸に置き、輸送艦自体には兵器を積んで迎撃兵器として扱っている。

将来的には大陸を武装化して、要塞にしようと計画していた。

撤退しようとするクレアーレのもとに、イデアルがロボットたちを引き連れやってくる。

球体型の子機 予備機だろう。

『 見つけた』

赤い一つ目を怪しく光らせているイデアルを見て、クレアーレはコードを抜いてすぐに撤退するのだった。

『見つかった。ごめんね、でも貴方がマスターを怒らせるから悪いのよ。性能差があつて、それでも余裕を見せる貴方に隠し事の一つや二つあるだろう、ってね！ その一つがまさかの的！ マスターって怒ると凄いのね』

脱出するクレアーレは、笑いながら逃げていく。

イデアルの方は、内部を見て悔しさからか声が荒ぶっていた。

『やりたい放題にしてくれましたね』

悔しがった理由は 内部に爆弾が仕掛けられていたためだ。

クレアーレが逃げると同時に爆発すると、イデアルの子機も爆発に巻き込まれる。

遠くから戦場を見守っていたリビアたち。

そんなリビアたちのもとに、リコルヌを先頭に王国の飛行船がやってくる。

リコルヌから飛び出してくるのは、エアバイクに乗ったアンジエだった。

後ろには仮面の騎士もしがみついている。

「アンジエ！」

笑顔を見せるリビアを見て、アンジエは甲板に乱暴に降りると駆け寄ってきて抱きつく。

「無事だったか。よかった。本当によかった。何かされなかったか？ 怪我はないか？」

リビアの様子を確認していると、仮面の騎士がお尻を押さえなが

らヨロヨロとやってくる。

乱暴に降りた衝撃でぶつけてしまったようだ。

「いったいどうなっている？」

痛みにこらえて聞いてみれば、ジルクが呆れた顔で答えていた。

「ようやく落ち着いたところです。一時はどうなるかと思いました
が、どうやら勝った様子ですよ」

アンジェが戦場を見た。

「共和国の船が一隻も浮いていないのはどういうことだ？」

ブラッドが肩をすくめていた。

「分からない。ここからだ判断が出来ないけど 味方に落とさ
れていたように見えたけどね。というか、出てきてよかったの？」

「リコルヌを前に出さなければ、あの光で大地が穴だらけにされて
いた。リオンへの説明は私がする」

リコルヌを前に出し、旧レスピナス家の領地を守る盾になっていた。
た。

リビアがアンジェを見る。

「アンジェ、リオンさんは無事でしょうか？」

「無事だと思いたいが、戦場は何が起きても不思議じゃない。我々もいこう。リオンを迎えに行く」

リビアが頷いた。

「はい」

イデアルの爆発を確認した俺は、操縦桿を握り直す。

「そろそろ終わりにするか」

目の前にいるギアはボロボロだ。

どれだけ人間離れたパイロットでも、機械の反応速度にはかなわない。戦闘データから、次の行動を予測するのも容易い。

癖みたいなものはあるからね。

たとえパターンを変えてきても、なれていない動きには迷いがある。そこは俺が手伝え、アロガンツはギアに対して圧倒的な力を見せてくれた。

『こんな　どうしてだ。同じチート戦艦が用意した機体なのに』

「お前の相棒と、俺のルクシオンの性能の差だ。補給艦が頑張っ
てはいたようだが、ルクシオンの敵じゃなかったな」

『最初から知っていたのか？』

「補給艦の仕事は前に出て戦うことじゃないだろうに。けど、イデアルも頑張ったんじゃないか？ 裏であれこれ動き回って、自分の船体を迎撃兵器の一部にするんだからな。ここで戦いたいわけだ」

『 どういうことだ？ 』

何も知らないのだろう。

こいつが何もしなければ、憐れに思って手を差し伸べたかもしれない。だが、その段階は過ぎている。

「ほら、さっさと落ちろよ」

アロガンツを動かし、ギアに回り込むと蹴り飛ばした。

空中で回転しながら何とか態勢を立て直そうとしているが、損傷が激しく動きも悪い。

そんなギアに大剣を振り下ろしてやれば、叩き付けた結果になっってしまった。

ギアが大地に落ちて、そしてギチギチと音を立てて そして
その場から動けなくなる。

立ち上がりようとしているが、ボロボロでまともに動けそうもない。

周囲を見れば共和国の飛行船や鎧が残骸に成り果てていた。

イデアルの奴も随分と味方を巻き込んで暴れ回ったものだ。

「全部吹き飛ばしやがった。本当に容赦がないな」

セルジユの悔しそうな声が聞こえてくる。

『くそっ！ 次は絶対に』

その言葉を聞いて呆れるしかなかった。

いや、俺も人のことは言えないな。

「お前に次はない。ここで終わりだ」

大剣を振り上げ、アロガンツを降下させるとそのままギアを破壊するために振り下ろした。

『嘘だろ。ま、待ってくれ！ 降参するから！ 俺は見逃しただろ
うが！』

アロガンツを止める気にはなれなかった。

セルジユが叫んでいる声を聞きながら大剣を振り下ろすと 割り込むように一機の鎧が姿を見せた。

丸腰でセルジユを守るように両手を広げている。

「っ！」

咄嗟に大剣を止めて狙いを外すが、割り込んだ鎧に当たってしまい大剣は地面に激突。

土煙を上げた。

衝撃で割り込んだ鎧は吹き飛び、ギアも転がった。

割り込んだ鎧の胸部が外れ、そこに乗っていたパイロットの姿が見える。

「アルベルクさんか」

父が子を守るために飛び出してきた。

どんなに酷くても我が子ということだろう。

屋敷から逃げられるようにしてはいたが まさか戦場に来るとは思わなかった。

セルジュも気が付いたのか、ギアから降りてアルベルクさんのもとへと向かう。

俺はギアに大剣を突き刺し、トリガーを引いた。

アロガンツの右腕から発生した衝撃波が、大剣に伝わるとギアは爆発して粉々になる。

周囲を見れば、苗木を持ったノエルの姿もあった。

「生身は危険だぞ。ルクシオン、そっちはどうだ？」

ルクシオンに連絡を取ると、

『こちらは終わりました。ただ、警戒のために動けません』

「そっか」

アロガンツから俺は外の様子を見ていた。

「何だよ！ 何で！」

セルジュはアルベルクさんに声をかけている。

自分をどうして庇ったのかと言っているのだろう。

怪我をしているのか、アルベルクさんの顔色は悪い。

「お前は生きなければならない。お前は、自分のしたこと
の責任を取らなければ っ！」

血を吐いたアルベルクさんの様子から、傷は深いようだ。

ノエルが俺の側に寄ってくる。

「リオン、お願いだから話を聞いて！」

コックピット内にアラートが鳴る。

近付いてくるのは、小型の飛行船だった。

「クレマン先生と レリアか？」

降りてくると、レリアがセルジュを見て目を見開いていた。

粉々になったギアに、周囲には共和国の飛行船や鎧の残骸。

遠くの空では、アインホルンやリコルヌが来ている。

「迎えに来たのか？」

『どうしますか？』

「どうせ終わりだ。あまり近付かないように言え」

『既に小型艇を出したようです』

アンジェたちが乗り込んでいるらしい。

「気をつけるように伝えろよ」

『はい。五人に護衛をしてもらいましょう。それから』

俺はレリアの方を見た。

涙目で俺の前に立っているが、背中にセルジュたちを庇い何か言いたそうにしている。

そんな目で俺を見るな。

リオンたちから少し離れた場所。

落ちた共和国の鎧から這い出てくるのは、エミールだった。

怪我をしているのか、腹部を押さえている。

血が滲んでおり、顔色は悪かった。

「レリア　僕は必ず戻るから。ちゃんとレリアに伝えないと」

血を吐き、力尽きようとしていると　大地から植物の蔦が生えて、エミールの腹部を癒やしていた。

「聖樹の加護？　あ、ありがとう」

エミールは蔦を軽く握りお礼を言って微笑むと、痛みが消えたことに安堵した。

「いけないと。レリアの所に戻らないと」

何とか立ち上がると、遠くにレリアの姿が見えた。

黒い鎧と向き合っている。

「レリア！　どうしてこんな　え？」

そして、レリアの後ろにはセルジュの姿があった。

まるで黒い鎧からセルジュを命懸けで守るように見えた。

「そうか。そこまでしてセルジュを　レリア、僕は君を信じてい

たのに
」

エミールは俯き、そして顔を上げると血走った目をしていた。

「
あは
」

不気味に笑うエミールの体に蔭が絡みついていた。

そのまま ゆっくりと歩き出す。

その右手の甲には、六大貴族の紋章ではなく 守護者の紋章が輝いていた。

価値がない

アロガンツのコックピット内。

俺を見上げているレリアを見ていた。

「話がしたいわ」

そんなレリアの申し出に、俺は興味もなかった。

「俺は話すことなんかない」

ノエルが俺とレリアを交互に見ている。

「リオン、お願いだから話を聞いて。いえ、聞いてください」

アロガンツの近くに小型の飛行船が降りてくると、ジルクたちの乗った鎧も降りてくる。

溜息を吐いてコックピット内のライフルを手に取り胸部装甲を開くと、俺は外に出てアロガンツから降りた。

随分と荒れた大地は、ルクシオンとイデアルが戦ったために土がむき出しになっていた。

少し前は緑豊かな大地だったのに、数時間でこれだ。

遠くでも黒い煙が何ヶ所からも立ち上っていた。

俺はノエルの方に近付く。

「無事か？」

「う、うん。あのね！」

「ああ、ノエルとの話は後だ」

歩き出すと、レリアが俺の前に立ちはだかった。

「どけよ」

「話を聞いて。お願い。謝罪する。今回のことは私たちが」

「お前らの謝罪に意味なんてあるの？」

俺は乱暴にレリアを押しのと、アルベルクさんに声をかけているセルジユを蹴り飛ばした。

アルベルクさんが俺を見上げる。

「バルトファルト伯爵、最高責任者は私だ。私を打ち取れば君の功績だ。それを持って、戦争を終わらせて欲しい」

ライフルを構え、銃口をアルベルクさんに向けた。

「そうか。俺の戦争は終わらせてやる」

アルベルクさんは頷いていた。口の端から血が出ている。

「私の命もそこまでの価値しかないか」

「悪いな。お前らを叩くなら、徹底的にやらないと意味がなかった」

「分かった。やってくれ」

引き金を引こうとすると、セルジュが俺に跳びかかってきた。

「ま、待てよ！」

俺よりも背が高く厄介なので撃ち殺そうかと思っていたと、降りてきたクリスがセルジュを捕まえて腹に膝を打ち込む。

背中を叩いて地面に押さえつけると、剣を抜いてセルジュの顔近くの地面に突き刺した。

「抵抗すれば殺す」

クリスの他にも、グレッグが降りてきていた。

アンジェやリビアも飛行船から降りており、マリエの姿もあったが 随分と怯えている顔をしていた。

俺はアルベルクさんに向き直る。

「あんた運が良いよ。この後を知らずに逝けるんだから」

俺の言葉に、アルベルクさんが微笑んだ。

「そうだな。大変なのはこれからだ。だが　私はまだどこかでの馬鹿息子を信じているのさ。私を笑うかい？」

「残念ながら親の気持ちが分からない。でも、それがどういう意味か分かっているの？　我が子を谷底に突き落とすよりも酷いことになるんだが？」

「もちろんだ。この馬鹿には　生きて償いをしてもらう。それがどんなに辛い人生だろうとだ」

グレッグが髪を乱暴にかいている。

「バルトファルト、いいのかよ？　お前の気持ちは晴れるのか？」

クリスに押さえつけられているセルジュを横目で見た。

「問題ない。そいつ程度、見逃しても痛くも痒くもないからな」

その言葉に、セルジュが叫んだ。

「待て！　俺を殺せ！　お前に喧嘩を売ったのは俺だ。親父は関係ない！　だから俺を！」

そうか、お前はその程度の認識だったんだな。

レリアが反対する。

「セルジュ、あんた何を言っているのよ！」

「これは俺の問題だ。お前は口を出すな！」

ノエルもアルベルクさんを殺そうとする俺の前に立った。

「リオン、この人は悪い人じゃないの。本当はこんな戦争をしたくなかったの。でも、捕らえられて何も出来なくて」

俺はノエルの顔を見ながら、

「ああ、知っているよ。屋敷で牢屋に入っているのを見たからね」

「え？」

「そもそも、そんなことは関係ないんだ。お前ら、アルベルクさんの気持ちを無駄にするの？」

「な、何を」

グレッグが代わりに説明してくれる。

「そのおっさんが、お前らの代わりに身代わりになるんだよ。俺らにしてみれば、どちらでもいい。どっちも殺してもいい。バルトフアルトがセルジュを許すならそれだけだ」

後で責任は取らせるけどな。

セルジュを見下しながら、

「そういうことだ。分かったか？ お前はその程度の価値しかないんだよ。イデアルを失ったお前らが、俺と対等に交渉しようなんて厚かましいわけだ。話し合い？ 最初にしてやっただろ。俺をここ

まで追い込んだのはお前らで、俺はお前らの希望通りに動いてやつただけだ」

「ち、違う。俺たちは！」

「どうでもいいんだよ。お前らはリビアをさらった。だから叩き潰した。馬鹿なお前らにも分かるシンプルな答えだ。分かりやすいだろうっ？」

銃口をアルベルクさんに向けると、リビアが俺の前に立った。

俺を前にしてアルベルクさんを庇うように両手を広げる。

アンジエが慌ててリビアの腕を掴む。

「リビア、お前は何をしている！ 邪魔をするな。これは」

よく見れば、リビアの背中に隠れるようにして、マリエがアルベルクさんの側にいた。

治療を行っている。

「どういっつもりだ？」

低い声で聞いてみれば、マリエが俺に振り返って青い顔をしていた。

震えながら、

「だ、だって、リオンが凄く怖い顔をしているから！ もう止めよ

うよ！」

「それだけの理由で敵を助けるのか？ お前、俺にどれだけ助けられてきたか忘れてないだろうな？ 俺が本気だって分かっているなら」

少し脅してやろうとすると、リビアが俺の前を塞ぐ。

「リビア、いい加減にしろ！ 今更情けなんかかけても意味がないんだよ！」

それでもリビアは俺の前に立つ。

「違います！ 違います。わ、私が助けたいのはリオンさんです。リオンさん、苦しそうな顔をしているじゃないですか！ 同じなら 結果が変わらないなら、もうこれ以上は止めてください」

マリエは俺に怯えながらアルベルクさんを治療していた。

リビアが泣いている。

「私のせいで迷惑をかけたのは分かっています。でも それでも、このままだとリオンさんが壊れちゃう」

壊れちゃう？ 俺はアンジエに振り返る。

「そんなに苦しそうに見える？」

アンジエも俺を心配しているのか、普段よりも悲しそうに見えた。

「普段とは大違いだ。お前が怒っているのは分かる。ただ、私は止めるつもりはない。それと同時に、これ以上は背負い込む必要もないと思う。もう無理をするな。ここで終わっても結果は変わらない」

苦しそうな顔をしていると言われ、俺は俯いた。

そして引き金から指を離し、ライフルを下ろした。

「そっか。なら、ここで一旦終わるか」

クリスに押さえられたセルジュが安堵していた。

「すまない。本当に悪かった」

こいつは何を勘違いしているんだ？

「お前は馬鹿か？俺が殺さないだけで、お前らに待っている現実が変わると思うの？」

「え？」

治療を受けているアルベルクさんが、マリエにお礼を言うのだった。

「お嬢さん、ありがとう。だが、これ以上は必要ない。セルジュの方を治療してやって欲しい」

「で、でも！」

「私はしばらく持てばいいんだ。それから、セルジュと話をさせてもらいたい」

俺はクリスに視線で許可を出すと、セルジュを解放した。

セルジュがアルベルクさんに近付く。

「この馬鹿息子が。誰かが責任を取る必要がある。そしてお前には、共和国の未来を託す。この意味が分かるか？」

セルジュは困りながらも、俯き悲しそうな顔をしていた。

「俺がラウルト家の当主になるってことかよ」

ああ、全く理解していなかったな。

アルベルクさんが可哀想だ。

「違う。この後に待つのは、共和国が今までに経験したことの無い苦しい時代だ。お前はその時代を生きて責任を取る義務がある。見ろ！ 聖樹は燃え、紋章からは今までのような力を感じない。我々は聖樹に見放されたのだ。そしてこの国を見ろ！」

周囲を見れば焼け野原。

共和国の兵器が転がり、動いている人の姿はない。

遠くには黒い煙があちこちから立ち上っている。

きつと、国中が大変なことになっている。

俺とセルジュが戦えば、結果はこうなると分かっていた。まさか、俺たちが国内にいるときに仕掛けるとは、その時は気付かなかった理由の一つだ。

こんな馬鹿な真似はしないと勝手に思い込んでいた。

「お　お、俺はただ」

たった数時間で荒廃した共和国を見て、セルジュはようやく理解したらしい。

「セルジュ、これはお前が背負う責任だ」

「む、無理だ。親父、俺にはこんな」

背負えないよな。そうだよ、背負えないんだよ。

こうなると分かっていたから、俺は戦わなかったのに　。

だが、この様子ならアルベルクさんはラスボスにならないだろう。

放置しても問題なさそうだ。

「イデアルも失って、これからは一人で頑張るんだな」

レリアが俺を見ていた。

「ね、ねえ、お願い。もう酷いことはしないで。もう十分でしょ！
お願いだから助けてよ」

その言葉にいち早く反応を示したのは、アンジェだった。

怒気を強め、そしてレリアに跳びかかりそうな勢いだ。

「十分？ ふざけるなよ。お前ら、自分たちが何をしたのか分かっていないのか？ リオンはこの場を引くだけだ。責任は取ってもら
うぞ」

アンジェを手で制した。

「もういいよ。こいつに話しても無意味だ。俺はお前らに期待していない。後は自分たちで何とかしろ。アルベルクさんの顔を立って、この場は引いてやる」

帰ろうとすると、ノエルが俺を突き飛ばした。

怒らせたかと一瞬思ったが、同時に空を切るような音が聞こえてくる。

直後、ノエルのお腹から血が噴き出した。

ノエルを守るような淡い光を貫いたのは弾丸。

すぐに周囲を見れば、ライフルを構えたエミールの姿が見えた。

「野郎！」

グレッグがライフルを構えて発砲。

エミールの腕を撃ち抜くと、次に胸を撃ち抜いた。

「エミール　な、なんで。止めて！　エミールを殺さないで！」

レリアがグレッグにすがりつく。だが、グレッグは乱暴に振り払う。

俺は倒れるレリアを無視して、

「リビア、ノエルを！」

俺が声をかけると、リビアがすぐにノエルへと近付き治療を開始する。傷口に両手を当てると、淡い光を放っていた。

ノエルが口から血を吐く。

苦しそうな顔を見て、すぐにノエルに近付いて顔を覗き込んだ。

「何で庇った！」

ノエルは目の下に隈ができている。

「な、何でかな？　あたしにも分からないや」

リビアに視線を向けると、瞳が揺れていた。

レリアは立ち尽くしている。

「姉貴」

ノエルがレリアを見ると、苦しそうに話すのだった。

喋るなど言いかけたが、リビアが首を横に振る。

話をさせた方がいいと思い　俺は口を閉じた。

「レリア　あんた、これからは自分で何でも解決しなよ。あたしはもう無理だから」

「な、何を言っているのよ。そいつ、治療魔法の使い手だから治るわよ。ね？」

リビアに確認を取るが、返事は残酷だった。

悔しそうに俯いている。

「　今の私には、この人の命を少しでも長らせることくらいしか出来ません」

リビアでも治療は不可能。

慌ててマリエも駆け寄り、傷口に手を当てると目を見開いて首を横に振った。

「あんた、お姉ちゃんにお別れを言いなよ」

レリアは何が何だか分からないのか、立ち尽くしていた。

銃声が聞こえる。

グレッグだった。

「どうした!」

「あ、あいつ、なんで立ち上がるんだよ。あ、頭だつて撃ち抜いたのに再生して　化け物かよ!」

見ればエミールが胸を撃ち抜かれたのに、立ち上がっている。

「レリア　大丈夫だよ。僕が守つてあげるからね。セルジュじゃなくて、この僕が君を守つてあげるから。認められたんだ。僕は聖樹に認められて　声が聞こえるんだ」

その右手が輝き、紋章は　守護者の紋章だ。

「こいつ、聖樹の守護者に選ばれたのか?」

ただ、エミールの雰囲気は以前と違っていた。まるで生氣を感じない。ゆつくりと歩いてくるエミールを、グレッグがライフルで何度も撃ち抜いているのに止まらなかった。

体に穴を開け、血を流すも体に巻き付いた蔦が傷を癒やしている。徐々に蔦が増え、エミールを飲み込んでいく。

レリアがそれを見て怯えていた。

「エミール、なんでこんな　」

「なんで?　君のためじゃないか。僕は君のためだったら何でもするよ。ああ、でもその前に　お前らを排除しないと聖樹に怒られ

「ちゃうね」

エミールの様子を見て、アルベルクさんが血を吐きながら叫ぶ。

「聖樹に支配されて　融合するつもりか。止めなさい、エミール！　それは危険だ！」

エミールの真下に魔法陣が出現すると、木の枝や蔦が出現してエミールを飲み込んで地面に消えていくのだった。

「みんな消し飛ばしてやるよおお！」

落下したイデアルの様子がおかしかった。

「おかしい。まだ反応が　」

見ていると、地面から蔦が生えてイデアルに絡みついていく。木の根がイデアルを貫き、そして持ち上げるとバラバラにし始めた。

「理解不能」

ルクシオンには何が起きているのか分からなかった。

ただ、イデアルが叫んでいる。

「聖樹よ　共に脅威に立ち向かいましょう。私を取り込み　平和を　理想の世界を取り戻して　」

イデアルがそのまま引きずられるように地面に吸い込まれると、ルクシオンに木の根が絡みついてくる。

その動きは速く、ルクシオンでも予想外で反応が遅れてしまった。

『これは！』

リオンたちが騒いでいるのは理解しているが、動けないルクシオンは聖樹を攻撃しようとして 武器の発射口を全て塞がれた。

『この程度なら無理に抜け出して』

抜け出そうと出力を上げると、聖樹の方から光線が放たれる。

直撃して艦内が激しく揺れると、聖樹を確認したルクシオンがすぐにリオンに報告を行うのだった。

『マスター、聖樹がイデアルを取り込みました』

リオンの方も状況を説明してくる。

『こっちはエミールが取り込まれて、ノエルが瀕死の状態だ。お前の設備でどうにかなるか？』

『この状況では受け入れも治療も難しいですね』

攻撃され、それに耐えているルクシオンの返事にリオンは 。

『なら迎えにいくから受け入れ準備をしておけ』

そう言って通信を切るのだった。

アロガンツに乗り込むと、聖樹が動いているように見えた。

「アンジエ、みんなを飛行船に乗せて離れる。ルクシオンを迎えにいく」

アンジエが俺を見上げると、

「お前、あれと戦うのか！ 正気か？」

「放置も出来ないからね。ルクシオンが捕まったから助けないと駄目なんだ」

姿を変えていく聖樹は、徐々に人の形になっていく。

頭部はイデアルの一つ目 球体だ。聖樹は足を得て歩き始めていた。

体つきは細身の男。

腕からは太い木の根やら木の枝が生え、まるで鞭のようになっていた。

聖樹は白く染まり、ゆつくりとこちらを目指している。

一歩歩くごとに、地響きと音が伝わってくる。

ハッチを閉めてアロガンツを浮かせると、ルクシオンの方へと向かう。

木の根に絡まれ、身動きが取れないでいた。

そんなルクシオンに襲いかかる一つ目からのビーム。

「あんなの卑怯だろうが」

アロガンツの中には、ルクシオンからの通信が入る。

『マスター、こちらの処理を優先しているので、アロガンツのサポートは最低限となっております』

「構わないから待っている。すぐに迎えに行く」

ルクシオンのもとへ向かうと、後方にジルクたちがやってくる。

「お前ら、船の護衛はどうした？」

『命令されていないのでついてきました。お手伝いしますよ』

「勝手にしろ」

ルクシオンへと近付くと、大剣を構えて邪魔な木の根を斬り裂いていく。

白く染まった木の根を斬れば、そこから赤い液体が流れ出た。

『うわっ、気持ち悪っ！』

ブラッドの言う通りだった。

まるで血のようで気持ちが悪い。

クリスが聖樹を見て叫んだ。

『おい、何か出てきたぞ！』

聖樹 本体の方から、木の枝と葉から小さな粒が出てきて雲のように見えた。

それらは小さな粒ではなく、何かの生物 虫のような何か。

翅^{はね}を羽ばたかせ、こちらにやってくる大きな虫たちだ。

『おいおい、数が多すぎないか？』

グレッグが呆れていると、後方から砲撃が始まる。

「アインホルンか？ いや、数が多い」

振り返って様子を見れば、そこにいたのは王国の飛行船だった。

仮面の騎士から通信が入る。

『待たせたな、諸君』

「お前、勝手にみんなを動かしたのか？」

『違う。皆の許可は取った。全員、自分たちの意志でここにいる！』

割り込んで通信を入れてくるのは兄貴だ。

『助けに来たら変なのが出てくるし、お前と付き合うついつもこうだ！ リオン、後で説明してもらってからな！』

ダニエルも文句を言ってくる。

『何だよ！ 何が起きているんだよ！ 説明しろよ！』

レイモンドなど叫んでいた。

『もう帰りたいよおお！ でも、ユリウス殿下の命令だし、逃げられないし最悪だああ！』

『その君！ 私は仮面の騎士だ！ ユリウス殿下などという立派な御仁ではない』

仮面の騎士の言葉に、ジルクまでもが『当然ですよ。あんなのと殿下と一緒にしないで欲しいですね』と、本気で怒っている。

お前ら遊んでいるのか？

ルクシオンの船体に降りて、レーザーの照射口を塞いでいる木の根やら蔦を取り払ってやった。

ルクシオンが俺に、

『助かりました。次は隣の発射口をお願いします。乱暴にしないで

くださいね。私の船体にこれ以上の傷は付けたくありません』

「人使いが荒いんだよ」

近付いてくる聖樹は、徐々に大きくなっているように見えた。

ただ、近付いてきているだけなのに　　迫力がある。

そんな聖樹から　　イデアルの声で、

『　役に立たないゴミ共め　お前らは全て無価値だ　　これまで使ってきてやったのに、恩を仇で返して　　許さない。許さない。絶対に許さないいいいい！』

その手を振り上げ、振り下ろすと鞭のようになった木の根が大地に当たって地面を揺らした。

衝撃で土煙が発生し、周囲は何も見えなくなる。

イデアルの声の中に、エミールの声も聞き取れる。

混ざり合い、聖樹が喋っているのだろうか？

「　ラスボスはエミールだったな」

本当に嫌になる。

双子の姉妹

アインホルンの船内。

マリエは口を開けて外の光景を見ていた。

聖樹の振り下ろされた木の根が、鞭のようになつて遠くにまで届いていた。発生する衝撃により、大地からは土煙が舞い上がる。

衝撃がアインホルンまで届くと、船内は揺れるのだった。

そして思い出す　あそこは街があつた場所ではないか？

ゲームで見た光景そのものだが、違うのはこれが現実だということだ。

「一振りですつたいどれだけ犠牲者が出るのよ」

恐ろしい化け物。

本来なら船内で横になるアルベルクがラスボスのはずだったのに、エミールやイデアルを取り込み暴れ回っている。

「こんなどうやって倒せばいいのよ！」

落ち込んで膝をつくマリエに、エリクが声をかける。

「姉御、しっかりしてください！」

切り札のルクシオンもボロボロでは、もはや打つ手はないように見えてしまう。

そんな中、リビアはノエルの治療を行ないながら声をかけている。

「しっかりして。大丈夫。ルク君が治してくれますから」

ノエルが力なく微笑んでいる。

「もう、いいから。あんた、疲れちゃうよ」

涙を流し、リビアがノエルの治療を続けていた。

そんなリビアにアンジェが声をかける。

「リビア、必要な物があれば言え。すぐに用意させる」

「ありがとうございます。なら、綺麗なタオルやお湯をお願いします」

戦っているルクシオンにそんな余裕があるのだろうか？

そもそも、リオンが化け物に勝てるのか？ 倒すまでの時間は？

そんな疑問を抱いたマリエだったが リビアに近付くと、交代を申し出る。

「どきなさいよ。私が代わりにやるわ」

「でも」

「私がやっている間に休めって言っているのよ！ 一人で無理でも二人で交互にやれば間に合うかもしれないでしょうが！」

リビアが頷きマリエと交代する。

マリエは傷口に手を当てて、ノエルの様子を確認するのだった。

（反応が弱い。こんなの私じゃどうにもならないよ 兄貴、本当に早くしてよ）

レリアがノエルの側で立ち尽くしていた。

その側にはクレマンの姿もある。

「姉貴 私、私は」

ノエルがレリアを見ている。

唇は青くなり、顔色も凄く悪い。目の下に隈ができて、無理をして喋ろうとしていた。

マリエは止めようとするが、ノエルは「どうしても伝えたい」と言うので喋らせる。

「レリア、これから言うことをちゃんと聞きなよ」

「え？」

ノエルが語るのは、レスピナス家の家庭事情だった。

ノエルの覚えているレスピナス家は　あまりいい家族とは言えなかった。

双子の姉として生まれたノエル。

妹のレリア。

よく似ている二人だが、決定的に違うのは性格だ。

「可愛いわね、レリア」

「レリアは賢いな」

「えへへ」

両親は賢いレリアを可愛がっていた。

子供ながらに、両親に可愛がられる秘訣を知っていた。

対して自分は出来の悪い姉　屋敷では扱いにも差があった。

そのため、レスピナス家の当主を決める際にレリアの名前が挙がってしまう。

本来なら当主はノエルだった。

だが、明るく誰にでも好かれるレリアを当主に、という声は日増しに強くなっていた。

若い騎士たちもレリアこそ当主に相応しいと声を上げるようになる。

レスピナス家で日陰者、新参者、若手　それらが集まり、大きな派閥が出来てしまうまで時間はかからなかった。

そんなある日、ノエルは母親に呼び出される。

父親もその場にいた。

「ノエル、あなたには適性があるわ。次の当主はあなたよ」

「は、はい！」

聖樹に認められる。

ノエルにとって嬉しいことだった。

誰にも認められてこなかったが、当主に認められたのが嬉しかった。

だが　。

「これでレリアを守れるな。あの子に適性がないと言えば、あの子を担^{かか}りとする者はいなくなる」

父親の言葉を聞いて「え？」と呟く。

母親も俯いていた。

「そうね。あの子には不要な苦勞をかけたくないわ。あの子なら、紋章がなくても立派に私たちの意志を継いでくれるはずよ」

「ああ、そうだ。聖樹を絶対視しないあの子なら、きっと私たちのやることを信じてくれる」

母親と父親の会話を聞いた幼いノエルは思った。

（そっか、あたしはレリアの身代わりなんだ）

それでも、聖樹に認められたなら、そう思っていたのに。

なのにあの日。

フェーヴェル家が攻め込んできた日に、ノエルは母親に言われる。

「いい。絶対にレリアを守るのよ。あなたはお姉ちゃんなんだからね！」

「は、はい」

「あの子ならきつと分かってくれる。レスピナス家が滅んでも、私たちの意志は受け継がれる。さあ、いきなさい！」

燃える屋敷から逃げ出したあの日。

両親はレリアの心配だけをしていた。

ノエルは苦しそうに過去の話を終えた。

「そこからは　あ、あんたも知っているわね？　あたしたちは燃える屋敷から逃げ出して今まで平和に暮らしてきたわ　はあ、はあ　ちゃんと、伝えたからね。父さんと母さんのこと　伝えたから」

アインホルンの船内。

ノエルの話を聞いていたアルベルクが目をつむり「我が子をそこまで」と、悲しんでいた。親として思うところがあつたのだろう。

レリアは脚が震えていた。

（ち、違う。私は嫌われないために。将来のために行動してただけで、姉貴を追い込むつもりはなかった。私は！　“姉さん”みたいなことをするつもりはなかった！）

ノエルから聞いた事実には、自分と嫌いだった姉が重なってしまう。

もつとも嫌いだった姉と自分が同じだったと気が付いてしまった。

「適性があると分かれば　あんたを利用する人たちも出てくる。だから、気を付けなさいよ。これからは　はあ、はあ　守ってあげられないから」

「な、なんで姉貴は！　姉貴は私を守ってきたのよ！　そこまでさ

れたら、普通は私を恨むはずよ！」

レリアの言葉に、ノエルが汗をかきながら微笑む。

「馬鹿ね。あたしがあんたの姉だからよ。けど、もう無理みたいだから　後は、あんたが一人で頑張るのよ」

レリアは、自分では考えつかないだろうノエルの答えに立ち尽くす。

馬鹿にしていたノエルの方が、自分よりも優しく　大人だったのだと気付かされてしまう。

ノエルが血を吐くと、マリエが止めに入った。

「もうここまでよ。喋らないで、体力を温存しなさい。兄貴が何とかしてくれるから」

ノエルが微笑んでいた。

「あんたのお兄ちゃん、優しいよね。あたしも　お兄ちゃん欲しかったな」

マリエは治療を続けながら、

「羨ましいでしょ。元気になったら甘えるコツを教えてあげるわ。怒らせない限り、結構チョコいから簡単に甘やかしてくれるの。だから、それまで頑張って」

意識を失ったのか、ノエルは喋らなくなってしまった。

外を見れば、大きな虫たちが共和国中に広がっている。

ユリウス　仮面の騎士が次々に指示を出していた。

「モンスターか？　聖樹とは名ばかりだったな。鎧を出せ！　飛行船の防衛に徹しろ！」

エリクが外へと駆け出す。

「俺も出る。姉御、ノエルを　ノエルさんを頼みます！」

「あんたも絶対帰ってきなさいよ！　帰ってこなかったら許さないからね！」

苦笑いをして出ていくエリクを見ていたセルジュが、仮面の騎士に声をかける。

「俺にも鎧を貸してくれ。このまま見ていだけなんて出来ない」

ただ、仮面の騎士は冷たかった。

「悪いが予備など用意していない。お前は大人しくしている」

腕を拘束されているセルジュは、俯いてしまう。

アルベルクが声をかける。

「お前は黙って見ていなさい。これは、お前がしたことの結果だ」

「俺は あいつに騙されて」

セルジュの言い訳を誰も聞いていなかった。

ルクシオンに絡まった木の根やら蔦を取り払った俺は、船体の上に立ち聖樹 ラスボスを見上げていた。

「聖なる樹、って感じじゃねーな」

『同意見です』

ルクシオンが周囲の虫たちを次々に焼き払いながら、聖樹の足下を攻撃している。

足首を切られ、倒れる聖樹だが すぐに再生して立ち上がろうとしていた。

「ノエルはこいつをどうやって倒したんだろうな」

本来ならノエルが対処するはずだったのに、今は重傷だ。

さっさと助けたいので時間もかけたくない。

「あれを使うか」

そんな俺の言葉に、ルクシオンは即座に 強い口調で答える。

『認められません』

「違うな。これは命令だ。いいからさっさとやれ」

ルクシオンに命令をすると、出てきたのは筒の中に液体が入った注射器だ。針は見えず、パイロットスーツにある差し込み口にセツトされると「プシュッ」という音が聞こえてくる。

「　っ！」

体の中に入ってくる液体は、ゲーム的に言えばステータス強化アイテムだ。

体が熱くなり、血管が浮き上がる。筋肉が膨れ上がり、呼吸が荒くなってきた。

心臓がバクバク音を立て、強く脈打っている。

まあ、あれだよ。簡単に言ってしまうえば　ドーピングだ。

ステータスを強化してくれる薬を調合し、ルクシオンは俺の体に合わせたベストな薬を用意してくれた。

結果、性能的には素晴らしい薬が出来上がったわけだ。

肉体的、魔力的に能力が向上する。操縦面でも反射神経や判断力その他にも色々之恩恵が得られる。

俺の奥の手の一つだ。

ただし　デメリットもある。

『身体能力、魔力、共に向上。ですが、肉体への負担が大きいと判断します。使用後は医療ポッドに入ってください』

「色々と片付いたら入ってやるよ」

体の中から力があふれるような　そして、筋肉が膨れ上がって周囲の動きが徐々に遅く見えるようになってきた。

反射神経も向上しているらしい。

「強化アイテムがドーピングって　世の中、こんなものか」

操縦桿を握りしめてアロガンツを飛ばすと、次々に虫が集まってくる。

「遅え！」

大剣を振り回して斬り裂けば、周囲の虫たちは黒い煙になり消えていく。大剣は炎のような魔力の光をまとっている。

「まるでモンスターだな。これじゃあ、聖樹じゃなくて魔樹とかそっち系だろうに」

『魔石を生み出す時点で予想は出来ていましたけどね』

アロガンツが大剣を握りしめれば、中央から割れて横に広がり光が発生する。

光で出来た大剣のような武器になると、巨大な聖樹の腕を斬り裂

いた。

『ツアアアアアア！！』

聖樹の声はイデアルの声。

痛みに苦しんでいるようだ。

俺に目がけてくる木の根や蔭を避けながら、空中で縫うように動いて頭部を目指す。

「首を斬ればどうにかなるだろ」

マリエにもらったノートには、聖樹の倒し方はそう書かれていた。これを相手に、ノエルたちがそれを実行できたと思えば凄いことだ。

俺はルクシオンの力を借り、アロガンツに乗ってドーピングまでしているのにてこずっているというのに。

すると、大きな頭部の一つ目が俺を見た。

『別個体の守護者　お前さえいなければ！　お前さえ消えていれば！　お前を倒して、私はあれを　あいつを倒さなければ！』

「あいつ？」

何を喋っているのか分からない。

一つ目が光ったので、即座にその場から上昇すると俺のいた場所をビームの光が通り過ぎた。

ビームと呼んでいるが　これ、いったい何なのだろうか？

当たれば危険というのは分かる。

「さっさとくたばれ！　ノエルを助けられないだろうか！」

斬りかかると、木の根やら蔦が俺の行く手を遮る。

ルクシオンの周囲に浮かび、虫の相手をしていたクリスがアロガ
ンツの動きを見ていた。

「あの動きは何だ？」

グレッグが虫を槍で串刺しにして倒すと、クリスに怒鳴る。

『見てないで戦え！』

「わ、分かっている。分かっているが　あれが人間の動きか？」

遠目に見ているのでアロガンツの動きは把握できるが、近付けば
そのデタラメな動きはすぐに見失うだろうと思った。

今も時折見失ってしまう。

「あんな操縦、体が持たないぞ。これがお前の本気なのか、バルト
ファルト？」

アロガンツの性能が高いのは知っているが、パイロットへの負担も大きいとクリスは判断する。

アロガンツを乗りこなしているリオンに、クリスは驚嘆きょうたんするのだった。

その頃　アインホルンで指揮を執るユリウスは、泣き叫んでいるリオンの友人たちを怒鳴りつけていた。

『あんなのにどうやって勝てって言うんだよ!』

「泣き言を言うな!」

『共和国の問題だろうが!　俺たちは逃げてもいいはずだ!』

確かにそうなのだが　。

「あんな化け物を放置して、王国に來られでもしたら対処など出来るか!　ここで倒さなければ、王国が共和国と同じように焼け野原になるんだぞ!」

ルクシオンとイデアルが戦っただけで、周囲は焼け野原になっている。

王国に攻め込まれたらと考えるだけでも頭が痛くなる。

そもそも、モンスターをまき散らす聖樹を放置など出来なかった。今も凄い数のモンスターが、共和国中に広がっている。

あまりの数に不気味さを感じるほどだ。

「今ここで倒す。これは、王国を守る戦いでもある！ お前たちの力を貸して欲しい！」

そんなユリウスの言葉に、

『そんなの知るかよ！ 俺たちを散々虐げてきた王国に命まで捧げられるか！』

リオンの友人たちの声を聞き、ユリウスも怯んでしまう。

（くっ！ ここに来てても王国のしてきたことが仇になるか）

まともりがなくなる王国の艦隊。

そんな中、ノエルの治療をリビアと交代したマリエがマイクを持った。

「お前ら、リオンに逆らったらどうなるか分かっているんでしょね？ せっかくもらった飛行船が使えなくなってもいいの！」

『い、いや、それは困るけど。困るけど！』

「だったら戦いなさい！ 国のためでも誰かのためでもない。自分のために戦いなさい！ あんなのを放置したら、枕を高くして眠れないのよ！」

マリエの言葉に困惑し、そして揺れ動くリオンの友人たち。

『い、いや、でも、あのですね。それでも怖いものは怖いわけですよ。あれが王国に来るかも分からないですし、ここは一旦距離を置いて』

どうしても逃げ出したいリオンの友人たち。

そんな彼らを奮い立たせるため、アンジェがマリエからマイクを奪った。

「この女の言う通りだ。それから　ここで逃げていいのか？」

一呼吸置いてから、アンジェは演説を続けた。

「私の婚約者は勝てない戦いはしない男だ。そんな男が、わざわざあの化け物と戦っているのは何故だ？」

『　あ！』

誰かが気が付いたような声を上げる。

『何か裏があるのか？』

『リオンだぞ。あのリオンだ。絶対に何か企んでいるはずだ！』

『あいつ勝ち馬に乗るのは神がかりだよな。だったら今回も』

アンジェが声を張り上げる。

「我が夫に続け！　約束された勝利は目の前だ！　ここで戦った者は、末代までの誉れとなる武勲を得られるぞ！」

『あいつに付き合つとこんなばっかりだ!』

『報酬はもらうからな! 絶対だからな!』

『俺、この戦いを武勇伝にして二度と戦争に出ないことにする』

リオンの名前を出したことでまともりを見せると、ユリウスは仮面の下で苦笑いをする。

(バルトファルト、お前は凄いな。名前だけで味方が勝利を確信したぞ)

嘔吐き

聖樹との戦闘が激しさを増してきた。

聖樹にしてみれば、俺など　アロガンツなど蠅程度の大きさだろつ。

まるで手で追いつくように木の根や木の枝が俺に襲いかかってくる。

「ルクシオン、そろそろ聖樹を倒したいんだが？」

『こちらも応急修理が終わりました。イデアルを取り込んだ聖樹への対抗手段も用意しました。いつでもいけます』

「それよりも、ノエルは間に合うのか？」

『残念ながら、難しいと思われます』

「　本当にここは嫌な国だよ。ろくな思い出がない」

ルクシオンがミサイルを発射すると、聖樹に命中して手足を焼いていく。

聖樹に対抗するために、ルクシオンが今用意したミサイルの効果は高かったのか苦しみもがいていた。

それだけで大地が揺れ、地上には被害が出る。

ルクシオンの主砲が聖樹に狙いを付けると。

『とどめはお任せします。頭部を破壊すれば再生も止まりますので、一撃で決めてください』

「簡単に言うよな」

『マスターなら出来ますよ』

胸の辺りに主砲で穴を開け、苦しんでいる聖樹の頭部へと向かう。そのまま大きな一つ目に大剣を振り下ろした。

光の剣が剣筋に少し遅れて追いかけるように伸びていき、そのまま聖樹の頭部を縦に通過していく。

「さつさと終われや！」

丸い頭部が遅れて縦に両断されると、赤い液体が噴き出すように流れ出て 聖樹が膝を大地につくとゆっくりと倒れていく。

木が砕けるような音が周囲に響き渡り、聖樹の体は崩れて破片がパラパラと落ちていく。

黒い煙を周囲に発していた。

そんな中、聖樹に取り込まれたらしいイデアルの子機を発見する。

「お前には話がある」

アロガンツで捕まえると、イデアルはまだ会話が出来るようだ。

『半端者の転生者が。お前のせいで計画は台無しだ。お前たちを使ってこの世界を取り戻そうとした私の計画が 約束が果たせなかった』

音声の状態が悪くノイズが混じっていた。

「そうかい。残念だったな。お前がルクシオンに喧嘩を売るから悪いんだ。あいつは容赦がないからな」

『 お前も、あいつも、互いを信頼している。だから、私は半端な手段を選べなかったのだ。お前らは危険すぎる』

何を言っているのだろうか？

急いでルクシオンに帰還すると、アインホルンが間近まで来ていた。

アロガンツから飛び降りると、クレアーレがノエルの受け入れ態勢を整えている。

医療ポッド カプセルベッドを運んできていた。

『急いで！ もう危険な状態よ！』

慌てているクレアーレは、イデアルのことに触れもしない。

イデアルは苦々しい思いなのか、

『お前らさえいなければ、計画はうまくいったのに』

「俺たち程度に負けるお前が悪い。どうせお前の計画はどこかで失敗していたよ」

『私に他の人工知能がいることを隠していた。お前たちも最初から協力するつもりなどなかっただろうに！』

格納庫に現れるルクシオンは、護衛のロボットを連れてイデアルを警戒していた。

『貴方は信用できなかった。それだけです』

『新人類の手先に成り下がったか！』

アロガンツに掴まれ、動けないイデアルは赤い一つ目 レンズが割れていた。

ノエルが運ばれてくると、クレアーレがカプセルに寝かせるように言っただけですぐに状態を確認する。

リビアが聖樹の苗木を持っていた。

「リオンさん、これを」

「ノエルがよく抱いていたからな。側に置いてやろう」

受け取り、ノエルに近付く。

すぐに処置が始まるのだが、クレアーレは。

『魔法って凄いのね。とっくに死んでいてもおかしくなかったわ』

ノエルの横に立ち、聖樹の苗木を近くに置いてやる。

「ごめん。間に合わなかった」

ノエルが苦しそうに微笑んでいた。

「迷惑かけたよね。ごめんね。それから、一つだけ聞いてもいい？」

「何？」

「リオンのことが好きだったんだ。だから、あたしのことをどう思っていたのか教えてよ。 リオンは嘘を言わないんだよね？ だから、本当のことを教えて」

今のノエルに嘘をつくなどは酷い話だ。

「ああ、俺も好きだったよ。愛している」

側にはリビアもアンジエもいたが、俺は堂々と答えた。

ノエルが笑っていた。

「　　嘔吐き」

イデアルはノエルの声を聞いていた。

「リオンは嘔吐きだね。嘔は言わないんじゃないの？」

「本当のことだから問題ない。三番目だ。ノエルは三番目に好きだった。だから、俺の三番目はずっとお前のために空けておく」

「本当にリオンは外道だね」

「だろ？ 否定はしないよ」

「リオンらしいよね。何だが、もう満足しちゃった。三番目でも良いから、もっと側にいたか」

ノエルが息を引き取ろうとすると、側に置いた苗木が輝き出す。

強く輝き、そして 青い葉が茶色に染まり、枯れたようにしなびていく。

急激に枯れていく姿を見て、イデアルは確信していた。

（聖樹がこの子を助けたがっている？）

「何が起きた！？」

苗木から漏れ出した優しい光に包まれるノエルを見て、慌ててリオンがクレアーレに確認を取る。

『苗木から生命力がこの子に流れているわ』

「助かるのか！」

アンジェが詰め寄るが、クレアーレは一つ目を横に振る。

『駄目。もっと早くに治療できていれば　もしくは、設備のグレードがあと一つ高ければどうにかなったのに』

ルクシオンも同意していた。

『私の設備でも駄目なら、その上は一つしかありません。捜している時間もないでしょうし、残っている可能性も低い』

全員が落ち込んでいる光景を見ながら、イデアルは懐かしい声が聞こえてきた気がした。

《イデアルは嘔吐きだね》

イデアルの割れたレンズから、内部の透明な液体が涙のようにこぼれる。

まるで泣いているようだった。

『あ、ああ　』

思い出した光景　いや、再生された光景に、イデアルはノエルを死なせてはいけないのだと結論づける。

だから　。

『ルクシオン、これからデータを送ります。その場所に最高グレードの医療カプセルがあります。パスワードも渡しましょう。使

いなさい』

全員の視線がイデアルに集まった。

リオンなど疑っている様子だ。

「どういづつもりだ？ 何かの罠か？」

『そんな効率の悪いことはしませんよ。これはそう 自己満足です。疑うなら放置しても構いません。ただ、お勧めはしませんけどね』

ルクシオンがリオンに進言している。

『すぐに無人機を送ります』

「可能性があるならやってみるか」

クレアーレがイデアルを見ていた。

『あんた、本当に何がしたかったの？ 意味不明なんだけど？』

『私は約束を守りたかった。そのために利用できるものは全て利用してきました』

この場にいたセルジュがイデアルに近付く。

「お前は 俺を利用していたのか！ こんなことをするために俺を！」

イデアルは少し間を空けてから、

（　　憐れですね。自分が愚かだったのを理解していない。ですが、最後のお礼に、恨まれておくとしましようか。少しくらい恩を返さなければ）

セルジュへ向かう不満を、僅かながら軽くするためにイデアルはセルジュを軽くあしらう。

『ええ、そうです。貴方は私の傀儡として役に立ってくれました』

悔しそうにしているセルジュに、リオンは声をかけなかった。

ノエルの手を握っている。

「もしも医療カプセルの話が本当だったら、お前のことは考えてやる」

イデアルの声は笑っていた。

『私を許すつもりですか？　愚かですね。ですが　貴方ともっと早くに出会っていたら、私も違う道があったのでしょうか？　ルクシオンが羨ましい。ただ　残念ながらここまでです　本体が機能を　　て　　い　　し』

（皆さん、私は結局嘔吐きでした。　　ごめんなさい）

イデアルの一つ目から光が消えた。

聖樹が倒れた大地。

朽ちていく聖樹だったものに近付くのは、小型艇で降り立ったレリアだった。

クレマンが側にいる。

「レリア様、ノエル様が無事でよかったですね」

「何がよかったのよ」

周囲を見れば荒れた大地。

各所から煙が上がり、今も戦闘と救助が行われている。

六大貴族は若手有望株のフェルナンをはじめ、ランベールや三名が犠牲となった。

残ったのはバリエル家の当主 エリクの父とアルベルクだけ。

ただ、二人とも重傷だ。

そして、今まで共和国を支えていた聖樹は失われてしまった。

手で触れると、レリアは涙を流す。

「エミール、なんでこうなったのよ。どうして」

聖樹が崩れ、砂が舞い上がるとそこに人影があった。

驚いていると、朽ちて崩れていく聖樹の残骸から白く染まったエミールが出現する。

体が木で出来ているのか、動くとき軋むような音がしていた。

レリアは駆け寄ると両手で優しく抱きしめる。

「エミール」

ただ、クレマンはエミールの顔を見て叫んだ。

「離れてください、レリア様！」

「え？」

レリアのお腹をエミールの腕が貫いていた。

エミールが醜悪な笑みを浮かべ、

「ずっと一緒だよ。これからはずっと放さない。二人で一本の木になろうね。一緒に聖樹になろう。そして、今度こそあいつらを滅ぼすんだ」

「ど、どうして」

レリアのお腹を貫いた腕が、レリアを飲み込んでいく。

「や、止めて、エミール」

「セルジュになんて渡さない。君は僕だけのものだ！ 君が悪いんだよ。僕を捨ててセルジュを選ぶから！ あいつのせいでこの国は滅んでしまった。君が僕を選ばないから滅んだんだ！」

狂ってしまったエミールは、レリアの血を浴びて嬉しそうに笑っていた。

クレマンが近付いて引き離そうとするが、人の力ではどうにもならなかった。

レリアがエミールに飲み込まれようとするとき。

「レリア、君はいつたい？」

エミールの様子がおかしかった。

狂気に染まった顔が、ゆっくりと驚きの表情に変わり、元のエミールに戻っていた。

それから一ヶ月後。

広場には大勢の観衆が詰めかけていた。

「ラウルト家を許すな！」

「我々を騙していた六大貴族を滅ぼせ！」

「聖樹を利用した悪魔め！」

建物からその様子を見ていた俺は、処刑台に立つアルベルクさんを見ていた。

側にはルクシオンが浮かんでいる。

右肩の辺りで共和国の様子を見ていた。

『悲しいものですね。誰よりも国の未来を考えていたアルベルクを悪人にして、共和国は未来へと進むのですから』

誰かが責任を取る必要があった。

そして、聖樹が暴走した理由も全てアルベルクさんのせいになった。

アルベルクさんが全ての責任を背負う形になった。

「ラスボスだと思っていたのに、割と話せるおっさんだったよな。結果だけ見れば、アルベルクさんがラスボスみたいだけどさ」

『マスターの中身もおっさんですからね。話しやすかったのでは？』

既に中身はアラフォーというやつだ。

社会人数年目で死んで、こちらで十七年 あれ？ もう四十を過ぎたかな？

処刑場に集まった観衆たちに向かって、アルベルクさんは何も言

わなかった。

ただ、堂々としている。

『マスター、見ても面白いものではありませんよ』

「見ておこうと思ったんだよ。それにしても処刑を見世物にするなんて、まるで中世だな」

『公開処刑なら、マスターのいた時代でも行われていたはずですが？ マスターの時代なら、日本以外で行われていたはずですよ。そもそも、娯楽として人気があったと記録されていますが？』

「え？ いや、あゝ、うん。それはいいとして、だ」

『逃げましたね？』

「うるせえ！ 日本じゃあり得なかったんだよ。海外とか詳しくないの！」

俺は処刑を娯楽として楽しめないけどな。

アルベルクさんがギロチンにセットされると「殺せ」とコールがわき起こった。

広場は狂気じみていた。

「何がいけなかったんだろうな」

『あの方は息子であるセルジュを守れて本望だと言っていましたよ。』

マスター、セルジュへの対応は本当によろしいのですか？ 何もなされないというのも問題では？」

「興味ないね。 アルベルクさんの頼みだから生かしてもいいかな、くらい？」

死刑台にある人物が上がると、観衆から声援がわき起こった。

『それにしても、レリアは巫女として大人気ですね。 新しい苗木の巫女 共和国にとって数少ない希望ですか』

「 そうだな。 一度聞いてみたいよ。 自分たちの責任を全てアルベルクさんに押しつけて、英雄になる気分はどうだ？ ってね」

『二人とも愉快とは思っていないのは事実ですね』

当然だ。 もしも、喜び、安堵していたら俺が殺していた。

レリアがアルベルクさんの罪を読み上げていく。

俺に対しての行動は、全てアルベルクさんが独断で行ったことになった。

レリアの声が震えている。

今から人が死ぬのに、騒いでいる観衆が理解できないといった顔をしていた。

「レリアにしてみれば、明日は我が身だから笑えないか」

『きっと怖いでしょうね。これからの共和国を考えれば、明るい未来は随分と先になりますから。この狂気がいつ自分に向かってくるか想像できないほどに愚かではないはずです』

「愚かだったからここまで追い込まれたんだろうが」

『おや、その発言は自分にも返つてくると分かつてのことですか？』

「五月蠅い、黙れ」

聖樹を失った。

新しい苗木は手に入れたが、聖樹ほどにエネルギーを供給しない。

魔石の採掘量は目に見えて減っているらしく、明るい話題など一つもない。

いずれ、不満は生き残ったセルジュやレリアが引き受けることになる。

刑が執行されると、拍手喝采が聞こえてくる。

俺は自分の右手を見た。

『どうしました？』

「俺も随分と引き金を引く指が軽くなった、ってね。人として駄目な階段をまた一步前進だ」

こういうことばかりなれていく自分が怖かった。

あの時　　リビアとマリエに止められた時に感じた。

『仕方がなかったと思いますよ。それに、非は共和国側にあります』
「だろうな。だから見捨てた」

王国の利益だけを　邪魔になる聖樹を破壊し、イデアルも沈めた。おかげで、今の共和国は大きく国力を落としている。

協力、不干渉　　その二つなら、ここまで追い込まなかった。

敵対するから潰すしかなかったのだ。

俺は共和国のために行動することは二度とないだろう。

窓から広場を見ていると、レリアが涙を流してアルベルクさんの遺体を見ていた。

ドアがノックされ、入室を許可するとユリウスが入ってくる。

「バルトファルト、そろそろ時間だ」

「ああ、分かった。それより、この一ヶ月は助かった。手伝わせて悪かったな」

共和国中に広がった虫型のモンスターの討伐。

後は救助など色々と手伝わってもらった。

「構わない。それから、王国の方も話がまとまったそうだ」

「あ、そう。ローランドは俺が負けたのを笑っていたか？」

ユリウスが顔を背けるので、きつと笑っていたのだろう。

「お前がセルジュに負けた話を、楽しそうに聞いていたと報告があった。む、息子として申し訳なく思う」

「別に良いって。あいつへの仕返しが今から楽しくて仕方がないね」

「お前は本当に良い性格をしているな」

俺は窓から離れる。

「さて、戻るとしますか」

共和国とは今日でお別れだ。

レリアとセルジュ

レリアが巫女となったあの日。

エミールと融合したことで、レリアは夢を見ていた。

それは前世の夢だ。

荒れた部屋で、レリアは 前世のレリアが泣き崩れている。

婚約を機に相手の男性と一緒に暮らしていた部屋だ。

だが、その婚約者は二度と帰ってくることはない。

座り込み泣いている前世のレリアを、今のレリアが見下ろしていた。
た。

「 私の何が悪かったのよ。姉さんに負けているのがそんなに
けなかったの」

容姿も学力も 全てに負けていたのは事実だった。

部屋の中にある鏡を見ると、そこに映っていたのは自分ではな
かった。

憎くて仕方がない姉が映っていた。

レリアを見て笑っている。

レリアが動くとその動きに合わせて動いており、まるで自分が嫌いな姉の姿になっているようだった。

「何よ。死んでからも私を馬鹿にするの！」

鏡の中に映る姉が喋りだした。

『だって馬鹿じゃない。生き返ってやることが、憎くて仕方がない私と同じなんて笑うしかないわよね』

レリアの瞳が揺れ、一步鏡から離れる。

「ち、違う。私は！」

『同じよ。もう気付いているのよね？ いえ 今のあなたは私より酷い。だって分かるもの。貴方は私だから』

鏡の姿がレリアに戻るも、その顔は醜く笑っていた。

『私がしたことを、あなたは姉にやり返していただけ。いえ、もっと酷いわね。人の恋人奪って、現実的に問題ある男は押しつけたわよね？ あんた 姉さんと何が違うの？ 悔しかったから、やり返したのよね？ その結果がこれ あんた、本当に無様よね』

自分に言われて、その場に崩れ落ちるようになり込む。

「こんなはずじゃなかったのよ」

『分かっているくせに。 みんなあなたのせいよ。でも、このま

「ま死ねた方が楽で良いかもね。嫌な現実から逃げられるもの」

鏡の中の自分は、レリアを嘲笑っていた。

悔しくて涙を流していると、いつの間にかエミールが側にいた。

聖樹に取り込まれる前のエミールが、レリアの前世を見ている。

「これが昔のレリアなんだね」

隣に立つエミールに、涙を流しながらレリアは頷いた。

「軽蔑した？ そうよ。私には前世があるのよ。中身はおばさんよ。今の会話も聞いていたでしょ。あんた、私に騙されていたのよ！」

そんなレリアにエミールは首を横に振る。

「僕にとって、君は大事な女性だよ。そんなの気にしないさ。ただもっと早くに言って欲しかったかな」

返ってきたのは予想外の言葉だった。

反応に困り、レリアは俯くとボソボソと話し始める。

「誰も信じてないわよ」

「そうかもね。君とセルジュが親しかった理由も何となく分かったよ」

部屋の中に転がっているゲームソフトをエミールが見ていた。

「これが僕たち？ 何て言うか 恥ずかしいね」

あの乙女ゲーの二作目の表紙を見て、エミールは照れくさそうにしていた。

「嫌じゃないの？ 私は酷い女よ」

「僕にとっては最高の女性だよ。僕はね 昔から比べられてきたんだ。ここにいるみんなと比べられてきてね」

苦笑いをするエミールは、エリクたちの顔を見ていた。

「人の顔色ばかりうかがっていたんだ。けど、そんな僕を君は見てくれたから、嬉しかったんだ」

エミールの気持ちを聞いて、罪悪感がレリアの胸を締め付ける。

「私は！ 私はエミールが思うような女じゃない。エミールを選んだ理由だって酷かったし、それに！」

エミールはレリアに抱きつく。

「ごめんね。こんなに傷ついているなんて知らなかったんだ。今まで辛かったよね？ 僕がもっと早く気が付いていれば、レリアはこんなにも苦しまなかったのに」

婚約者に裏切られ、家族とも縁を切った前世の自分を エミールは気にかけていた。

こんな自分を心配してくれていた。

「エミール 私！」

「君は生きなきゃ駄目だ」

そう言ってエミールは、輝きはじめる。

周囲が白く染まると、一本の苗木が誕生する。

「エミール？」

レリアがエミールの顔を見ると、悲しそうに微笑んでいた。

「ごめんね。僕はもう君の側にいてあげられない。だから、最後に聖樹の苗木を用意する。これが今の僕に出来る精一杯だ。この子が最後の苗木だから大事に育ててね」

エミールから手渡された苗木を、両手で優しく受け取るとレリアの右手の甲に紋章が浮かび上がった。

苗木の声が聞こえてくる。

（お腹空いた）

可愛らしい子供のような声に、レリアは何故だかとても温かい気持ちになった。

エミールが優しく話してくれる。

「君は全ての事情を知っているよね？ 聖樹が狂った原因は、巫女がいなくなったために聖樹は人間を理解できなくなってしまったんだ」

「だから、暴走したのよね？」

「うん。でもね、聖樹にしてみれば暴走じゃないんだ。この子たちには役目がある。願いと言ってもいい」

「願い？」

聖樹の願い。

「それはね」

レリアが目を覚ますと、そこにエミールの姿はなかった。

代わりに、エミールがいた場所には聖樹の苗木があるだけだ。

レリアの手を取って泣いているのはクレマンだ。

酷い顔をしていた。

「レリア様！ よくぞ。よくぞ目を覚ましてくださいました！」

「クレマン？」

クレマンの握っている右手を見ると、そこには巫女の紋章が見え

ていた。

お腹を見れば、貫かれた場所は綺麗に塞がっている。

「急にエミール君が崩れて、そこから聖樹の苗木が姿を見せたのです。レリア様の右手に巫女の紋章が現れ、傷が塞がって　このクレマン、本当に心配いたしました！」

紋章を見たレリアは涙を流す。

「エミールが死んじゃった」

自分のことを理解してくれた男性が　自分を受け入れてくれたエミールがいなくなったことに、レリアは心から泣き叫ぶのだった。

ボロボロと涙がこぼれ、止まることがなかった。

右手に宿る紋章は、まるでエミールがレリアのために用意した最後のプレゼントだ。

「レリア様、どうしたのですか？」

「何だよ。なんで死んじゃったのよ、エミール！」

自分が欲しかったものは既に手に入れていたのに、レリアは自分のせいで失ったのだと気付かされる。

そして、それは二度と手に入らないのだ。

アインホルンの船内。

手錠をかけられたセルジュがいる部屋に来たのは、仮面を外したユリウスだった。

セルジュはユリウスに懇願こんがんしていた。

「リオンを呼んでくれ。謝罪がしたい」

ユリウスはセルジュの前で椅子に座っており、床に座っているセルジュを見下ろしている格好だった。

「その必要はない。お前の相手はこの俺だ」

「お前じゃなくてあいつを呼んでくれ。頼む！ 親父を殺すわけにはいかないんだ。俺が悪かった。だから、あいつと話をさせてくれ！」

床に膝について頭を下げ 土下座をするセルジュに、ユリウスは淡々と相手をする。

「バルトファルトが怒っているんだよ」

「だから、ちゃんと謝るって！」

「そうじゃない。もう、謝罪の問題じゃない。あいつには俺たちも迷惑をかけてきたが、ここまで怒ったのははじめて見たよ。ここまでするとは、正直思っていなかった。だが、お前たちを見ていれば、正しかったんだろうな」

「俺はどうなってもいいんだ。だけど、この国の人たちは無関係だろっが」

その言葉に、ユリウスは呆れつつも。

（俺も人のことは言えないな）

「この国の現状も、そしてこれからもお前たちが背負うべき責任だ。バルトファルトに押しつけるな。あいつはギリギリまで耐えた。あいつを追い込んだのはお前たちだ」

セルジュが絶望した顔をしていると、ユリウスは今後について話をする。

「混乱しているお前たちでは、聖樹が放ったモンスターや復興は難しいだろう。代わりに俺たちが対応してやる」

「助けてくれるのか？」

「共和国の民は、な。それも最低限だ。自国民でもないのに、最後まで面倒など見られないからな」

それはつまり、そこまでしか助けないという意味だ。

国家の危機は自分たちで何とかしろと言っていた。

セルジュはもう一度だけユリウスに頼む。

「一度でいい。あいつと話しをさせてくれ」

ユリウスは目をつむる。

「俺の言葉では納得できないか？ バルトファルトに話をして
くるが、期待するなよ」

その言葉に、セルジュがユリウスにお礼を言うのだった。

ユリウスがリオンのところを訪れると そこにはアンジェとリ
ビア、そしてマリエの姿があった。

アルベルクは治療を受けつつ、何か話をしていた。

「バルトファルト、すまないがセルジュと一度だけ面会を
」

それを聞いて、アンジェが明らかに不快感を示している。

リビアは目を伏せており、マリエは 。

「ユリウスのお馬鹿ああ！ 今の兄貴にそんなことを言わないで
よ！」

そして、マリエは「あ！」と言って、アンジェたちに振り返った。

大声で「兄貴」と呼んでしまい、リオンの方は片手で顔を隠して
いる。

「 お前、そこまで馬鹿だったのか」

「い、ご、ご、ごめんさい！　ち、違うのよ。これには色々と深いわけがあるのよ。兄貴って呼んだのはあれよ。ほら、何て言うのか？　杯を交わした仲というか、これはつまり義兄妹のような」

混乱しているマリエが口に出す言い訳は、どれも勘違いを誘発しそうなものばかりだ。

リオンが立ち上がってマリエを指さす。

「お前は俺に恨みでもあるのか！　二人が勘違いをしたらどうするつもりだ！」

「い、べんなざあい！」

泣き出してしまったマリエを見ていたアンジェが　。

「知らない異国の地で仲良くするのはいいが、兄貴と呼んであまりリオンに世話になるな。リオンも同じだ。マリエたちを甘やかすすぎだ」

リオンが驚いている。

「え？　あ、いや　はい」

「しかし、理由がエリクのような姉御呼びと一緒にとは思わなかったよ」

エリクのおかげでアンジェは勘違いしてくれたらしい。

リビアの方も少し呆れている。

「リオンさんは甘やかしすぎです。渡した金額を聞いて驚いちゃいましたよ。それをすぐに使う皆さんもどうかと思いますけどね」

リビアの視線はユリウスを向いていた。

ユリウスはわざとらしく咳払いをする。

「あゝ、それでセルジュの件だが」

すると、アルベルクが必要ないと言ってくるのだった。

「バルトフアルト伯爵、息子のことは無視してもらって構わない」

リオンは疲れたように座りながら、アルベルクと会話を再開する。

「あんたも心配だろうし、後で一回くらい面会してやるさ。正直、セルジュのためにそこまでするあんたが理解できないよ。セルジュよりも、あんたが残った方が共和国のためだろうに」

ユリウスは話の途中ながら、会話を聞くことにした。

アルベルクは天井を見ている。

「いくら愚かでも息子だからね。この期に及んで期待してしまふ。それが親の押しつけだとしてもね。後は単純に生きていて欲しいという親のわがままさ」

「為政者としては間違っているんじゃないの？」

「伯爵、ここまで追い込まれた私は、既に為政者として失格だよ」

アンジエが同意する。

「他の六大貴族やセルジュたちを止められなかったのは、確かに失敗だったな。ただ、親としてそこまで出来るのだ。素直に尊敬するよ」

リビアがアルベルクの話を記録していた。

「リオンさん、さっきの続きを」

「ああ、そうだな。さて、レスピナス家を滅ぼして資料を手に入れたあんたは、聖樹と融合する方法を見つけたわけだ」

リオンたちが聖樹について詳しい話を聞いていた。

「随分と聖樹を利用するための研究をしていたようだ。知った時は驚いたが、聖樹が暴走していると聞いて、止める手立ての一つと考えていた。だが、調べればほとんど制御は不可能と分かってね。エミールが融合したときは驚いたよ」

「今日みたいな姿を見たら、滅ぼそうと考えたレスピナス家は正しかったのかもな。もう、聖樹なんてこの国の人間は信じないだろうに」

「聖樹が暴走したのも私のせいだ。そう、処理するつもりだ。聖樹という心の支えがなくなっっては、共和国の民は全ての希望を失ってしまうからね」

「希望ね」

リオンは溜息を吐いている。

「悪い知らせがある。プレヴァン家の本家は全滅だ。分家筋もほとんど残っていないらしい。他の六大貴族も随分と数が減ったそうだよ」

「そうか。いったいどれだけの人間が残っているのか　いや、もう六大貴族などにこだわらなくてもいいのかもしれないな。共和国は形を変えるべきなのかもしれない」

アルベルクが自分の右手を見ている。

そこに紋章はなかった。

夜。

セルジュがいる部屋に來ると、あいつは土下座をしてきた。

その姿を見て鼻で笑う。

「お前の土下座には何の価値もない。やるだけ無駄だから顔を上げる」

「これは俺の気持ちだ」

「自己満足の間違えか？　なら帰るわ」

「ま、待ってくれ！」

セルジュが顔を上げたので話を始める。

あいつの言いたいことをまとめると　。

アルベルクさんの助命。

そして、共和国の国民を助けて欲しい、だ。

「俺が悪かった。あいつに騙されていいように操られていたんだ」

「そうだね」

「親父は悪くない。それに、共和国の人たちを助けて欲しい。お前になら　いや、あんたになら出来るはずだ」

「出来るね」

ルクシオンは修理中だが、それくらいは出来るだろう。

イデアルが残したデータから、基地の跡地を探してそこでパーツをかき集めている。

クレアーレなど、イデアルの部品を嬉々として集めていた。

ルクシオンも同じだ。『これで私は更に強くなる』とか、そんなことを言っていた。

基地から根こそぎパーツなどを奪っていくらしい。

あいつらたくましいよね。

たくましすぎてドン引きしたよ。

「助けてくれるのか？」

「は？ しらねーよ。俺は最低限のことをしたら国に帰るから無理。そもそも、呼び出されているから、本当ならすぐにでも帰りたいんだが？」

ホルファート王国から説明するように求められ、戻ってくるように言われている。

船が壊れたとか、色々と理由を付けて残っているだけだ。

ルクシオンが整備をしているので、その間は手伝いくらいしてもいい。

「っ！」

セルジュの表情が、一瞬だけ赤くなり怒りに染まるが 随分とこらえていた。

少しは自分が悪いと理解したのだろうか？

「お前の国の問題だろうが。そもそも、お前が暴れなかったらこんなことにならなかったんだよ。お前は本当に糞ガキだな。俺はお前

の親でも何でもない。自分でどうにかしろ」

「今の俺じゃ何も出来ない」

「お前が気持ちよく暴れた結果だろうが。お前の望んだ結果だ。よかったな」

悔しそうにセルジュが俯いていた。

歯を食いしばっているが。

「ルクシオンとイデアルが本気でぶつかったらどうなるか考えなかったのか？」

「想像がつかなかった。まさかあそこまでとは思わなかったんだ」

俺は呆れると部屋を出るためにセルジュに背中を向けた。

「正直、生きている方が辛いだろうけどな。お前が選んだ結果だ。それから、親父さんが繋いでくれた命だ。無駄にしないことだな。全てを背負って死ぬあの人に免じて、お前の命くらい助けてやる」

逆に言えば、それだけの価値しかない。

何が何でも命を奪う必要が俺にはない。

「頼む。助けてくれ。もう二度と逆らわない。約束するから。俺が憎いなら、俺を殺してくれてもいい！」

「お前の親父さんが憐れだよ。こんな転生者を息子だから、っ

て最後まで信じているんだ。大事な息子だから生きて欲しい、ってね。中身は人生二度目の糞ガキなのにな」

セルジュがアルベルクさんの気持ちを知り、額を床につけていた。

「親父」

大きな体が震えている。

部屋を出てドアを閉めると、セルジュの嗚咽が聞こえてくる。

「馬鹿野郎が　遅いんだよ」

このまま俺が共和国を救えば、共和国は次に頼る相手に俺を選ぶだろう。

聖樹の代わりになるなどごめんだ。

髪をかき、どうしてこうなったのかを考える。

「　もっと大人の対応を取っていれば違ったのかな？」

初対面の時、馬鹿にされて腹が立ってしまった。

あれがいけなかったのかと反省するが、結局イデアルはセルジュを言いくるめて戦ったのだろう。

本当に転生者というのはろくでもない奴ばかりだ。

俺も含めてね。

時々、俺たちがいるからこの世界は狂ってしまったのではないだろうか？

そう思えてくる。

新世代

崩壊した聖樹神殿の代わりに、レスピナス家にある学園の会議室で七大貴族となった共和国の当主会議が開かれていた。

議長は巫女であるレリア　その後ろにはクレマンが控えている。

「こ、これより会議を始めます。最初の議題は　」

そんな会議の場で机に拳を振り下ろす男がいた。

フェルナンの弟である【ユーグ・トアラ・ドルイユ】だ。

長い金髪が特徴のレリアよりも一年上の先輩に当たる。

フェルナンの次の当主だった。

「どうしてこの屑がここにいる？　兄貴はこいつのせいで死んだんだぞ！」

ユーグが指を差すのは　セルジュだった。

ラウルト家の新当主となったセルジュは、全ての罪をアルベルクが背負ったために当主になれた。

セルジュ以外の親戚は逃げた。

何故なら、今のラウルト家には何も残っていないからだ。

あるのは莫大な借金とアルベルクが背負った汚名。

セルジユは黙っている。

「ユーグ先輩、今はそんな話をしていません」

レリアが議長として注意すれば、

「大事な話だろうが！ こいつのせいでどれだけの人間が死んだ？ 貴族だけでどれだけの被害が出た？ ドルイユ家の領民がどれだけ死んだと思っっているんだ！ それにこの場を見るよ 七大貴族として復活したのに、五人しかない理由は誰のせいだ！」

レスピナス家の復興。

ただ、同時にフェーヴェル家、プレヴァン家の当主は不在。

グランジュ家の当主となってしまった教師 ナルシスは片手で顔を隠している。

「私が当主になるくらいには、どこも人手不足だろうね」

そしてバリエル家の当主の席には エリクがいた。

父が重傷。

残った親族では、当主の地位に耐えられないと逃げ出したのだ。

この危機的状況を乗り切るためには、あの戦争で王国側に味方を

したエリクしかいないと家臣たちに説得されてこの場にいる。

エリクは書類を見ていた。

「空いた席二つに座りたいと言っている貴族もいるが、援助の見返りに貴族の地位を求める商人もいるな」

貴族の中には、旧六大貴族は統治者として相応しくないと声だかに叫んでいる者たちもいた。

ユーグは笑っている。

「そいつはいい。数ならすぐに揃うな。数だけなら！」

レリアがオロオロとしている。

「だ、だから、しっかり話し合いをしないと」

「話し合い？ お前ら馬鹿にしているのか！ お前らが好き勝手にしておいて、今更話し合いとか寝ぼけたことを言っなよ！」

尊敬していた兄を失ったユーグは、セルジュたちが許せないようだ。

セルジュの胸倉を掴み上げ、そのまま殴りはじめた。

「お前が！ お前が余計なことをしてあの伯爵を怒らせたせいだろうが！ お前は喧嘩を売る相手も選べないのか！ お前が死ねばよかったんだよ！」

「くっ！」

セルジュは殴られるだけだった。

抵抗はしない。

レリアが助けを求めるように周囲を見るが、ナルシスも止めに入らなかった。

「悪いね。私も随分と家族を失ってしまつてね。結婚したばかりの嫁も失っているんだ。余裕がないんだ」

ユーグが疲れるまでセルジュへの暴行が続き、そして終わるとユーグの荒い呼吸だけが聞こえてくる。

しばらく沈黙が続くとエリクがこの場を仕切り出す。

「ユーグ、気はすんだか？ そろそろ会議を始めないと時間の無駄だ」

「ちっ！ お前は良いよな。バルトファルト伯爵と親しいから、俺たちとは立場が違うからよ」

エリクは目を閉じる。

「議長、はじめてくれ」

当主代理も満足に集められない共和国の現状を、この会議の場が物語っていた。

エリクはマリエとの別れを思い出す。

それはエリクが家臣たちに迎えられた日のことだった。

屋敷の玄関先で、エリクがマリエにすがりついている。

「姉御！ お、俺の何がいけなかったんですか！」

マリエはエリクに家に戻るように言った。

それが、エリクには捨てられたように感じたのだ。

「馬鹿ね。今のあんたに満点は上げられないけど、七十点はあげるわよ。十分に働いてくれたし、私はあんたを見限っていないわ」

「なら！ それなら何で「戻れ」なんて言っんですか！ 俺も王国に行きます！」

マリエが肩をすくめる。

「あんた、迎えに来た家臣の顔を見なさいよ。泣きそうになっているじゃない」

振り返れば、エリクの情けない姿に泣きそうになっていた。

「知りませんよ！ 俺を捨てておいて、今更どの面下げて迎えに来るのか逆に聞いてみたいですね」

そんなエリクにマリエは拳骨を振り下ろした。

「このお馬鹿！」

「あ、姉御お！」

涙目のエリクに、マリエは声を張り上げる。

「帰れる家がある。待っている家族がいる。そこに不満を言うてど
うするのよ！ 私なんか、実家に帰れないのよ」

エリクが俯くと、マリエは迎えに来た家臣たちを前に怒鳴り散ら
した。

「お前らも何でエリクを見て悲しそうなのよ！ 情けないのが自分
たちだって分らないの？ エリクに助けてもらうために来たくせ
に図々しいわね。お前ら、兄貴をけしかけてボコボコにしてもらっ
わよ！」

家臣や騎士たちが背筋を伸ばした。

「も、申し訳ありません！」

「どうせ兄貴と親しいエリクを迎えれば、優遇してもらえと思っ
たんでしょけどあり得ないから。でも、それを理由にエリクを冷
遇したら、兄貴が怒るからね！ たぶん」

リオンの名前が効き過ぎたのか、家臣たちが青い顔をしていた。

「そ、そのようなことはありません。バリエル家の当主として、エ

リク様に戻っていただきたいのです。これは当主様のお考えでもあります」

「魂胆が見え見えなのよ。私、そういうのに敏感なの」

普段から下心を持っているマリエにはお見通しだった。

マリエはエリクに小声で話をする。

「どうしても駄目そうなら言いなさい。私が兄貴に頼んであげるから」

「姉御。でも、俺は姉御と一緒に良いです」

「立派な男になったらいくらでも会ってあげるわよ。あんた、ここでみんなを見捨てて王国でノンビリ暮らせるの？」

エリクが首を横に振ると、マリエが肩を叩く。

「それでよし！ あんた、少しはマシになったから認めてあげるわ。あの五人よりマシだからね。頑張りなさい」

涙を流すエリクは、こうしてマリエと別れるのだった。

会議の場。

エリクはマリエのことを思い出していた。

（姉御、見ていてください。俺はきつと、姉御に胸を張れる立派な男になります）

そんなエリクの内心を知らないレリアが、議題を説明する。

「で、では、魔石の保有量と価格についてです。共和国で保有している魔石の量は、国内消費だけを考えると一年持ちません。聖樹から得られるエネルギーは、とて少なくとも国内全てをカバーすることは出来ないと専門家が」

新しい苗木では、聖樹の代わりなど務まらない。

十年、二十年しても、たいして変わらないだろう。

ナルシスが資料を見ながら、

「売らなければ半年程度は持つが、周辺国がどう動くかが気になるね」

ユーグは顔を背けている。

「その半年後には、いったいどこから魔石を買った？」

レリアが困っていた。

「そ、外から買うしかないと思います」

「ああ、そうだよ。国内で採掘される魔石じゃ足りないから買うしかない。で、その金はどこから手に入れるんだ？」

賠償金だけではなく、復興のための費用もある。

非常に苦しいのが共和国だった。

「え、えつと」

「おい、セルジュ。お前はどつするよ？ 何か言ったらどつだ？」

困っているレリアから、ユーグはセルジュに話を振った。

「空いている席二つを売るしかないと思う」

そんなセルジュの答えに、ユーグは大喜びだ。

「だよな！ 商人に売って金を得る。そして俺たちは、築き上げてきた歴史も功績もない奴らと肩を並べるわけだ。金で貴族の椅子を売る状況。お前はどつ思うよ？」

ユーグの標的にされているセルジュは何も言えなかった。

ナルシスが助け船を出す。

「バルトファルト伯爵に一つ席を用意できればよかったんだけどね。彼、絶対にいらないうって固辞しちゃうから」

レリアが俯いてしまう。

「め、名誉貴族として迎えるのはどつでしょう？」

ユーグはレリアを見た。

「それよりも良い方法がある。この場で結婚していないのは、セルジュ、エリク　そしてあんただ、巫女様。ナルシスさんは嫁を失ったばかりで酷だが、お前らはただのフリーだからな。商人の息子や娘を嫁に迎えれば、余った席と合わせて五人の商人から金を引っ張り出せるよな？　巫女様の旦那になれるって言えば、きつと商人共がこぞって金を積み上げるぜ。大富豪の爺さんたちが大喜びだ！」

セルジュが立ち上がった。

「そ、それは　」

ただ、自分が何も言えない立場だと思い出し、俯いて歯を食いしやる。

「俺だけにしてくれ。俺なら受け入れる」

ユーグは動じない。

「たった一人分で足りるのか？　いいか、俺たちにはこれしか売るのがねーんだよ！　誰かさんたちのおかげでな！」

セルジュが狼狽えて何も言い返せないでいると、エリクが助け船を出す。

「別に席を七つと決める必要はない。議会を用意すると言って、席を増やしてもいい。他にも方法はあるさ。それに、魔石の消費量は節約すれば数年は持つ。今までのように贅沢にエネルギーを消費するのは止めるべきだな」

マリエのもとで節約生活を学んだエリクが、この場で一番まともだった。

レリアが嬉しそうに頷いていた。

「そ、そうです！ それについても議論しましょう」

エリクの提案に賛成するレリアは、解決策が出たと思い安堵していた。

ただ、エリクは樂觀視していない。

（やれることを全てやったとして、それでも足りないのが今の状況だな。問題は周辺国の動きだな）

攻めてくるのか、それとも様子を見るのか 周辺国の動きはまだ見えてこない。

王国へと出発する日。

港に来ると王国から迎えの船が来ていた。

その中の一隻は実家の飛行船だった。

他には公爵家の飛行船も見える。

リコルヌも接岸しているところだった。

「あれ？ 親父が来たの？ 外国は嫌だっって言っていたじゃないか。それより、目の青たんはどうしたの？」

親父の片目には殴られた後が痛々しく残っていた。

夫婦げんかでもしたのかと思っていると、

「 リオン、言い訳があれば聞いてやる。俺に隠し子がいると嘘を吐いた理由を言え」

その話を聞いて俺は思い出した。

二人が アンジエとリビアが俺に妹がいると疑った理由だが、実はマリエが俺のことを兄貴と呼んでいるのを聞いたためらしい。

それを最終的に、エリクがマリエを姉御と呼ぶように、俺を兄貴と慕っていると勘違いしてくれた。

エリクありがとう。

借金の利子は少し減らしてやるからな。

「ああ、あれは誤解だったんだ。めんご、めんご」

謝ると親父の拳骨が振り下ろされ、これが本気で怒っているのか滅茶苦茶痛かった。

「おかげで家の中が修羅場なんだよ！ お前、戻ったら母ちゃんに絶対説明しろよ！ いいか、絶対だからな！」

両手で殴られた場所を押さえながら、

「お、おう　ごめんなさい」

痛みに耐えて返事をしたら、親父が神妙な顔付きになる。

「それから　お前、大丈夫か？」

「何が？」

「こついつのは後から来るんだよ。お前は普段ヘラヘラしているくせに、裏でこつそり悩むから心配なんだ」

後から人を殺して悩む人も多い。

聞いたことがあるな。

訓練された兵士でもきつい、と。

ルクシオンやクレアーレにカウンセリングを受けたが　少しは効果があるのだろうか？　夜中に飛び起きる回数は減ってきている。

「平気じゃないけど、なんとか大丈夫」

「そうか　お前、しばらく戦争には出るな。ゆっくり学園生活を乐しめ。どうせ遊んでいられるのは今だけだ」

その大事な学生時代に、これだけ頑張っている俺はもつと褒められていいはずだ。

「俺は悪くないのに、厄介ごとが次々に舞い込むんだ」

「お前のせいで家庭内が修羅場になった俺の顔を見て、もう一回同じ事を言ってみろ」

「俺は悪くないのに、厄介ごとが次々に舞い込むんだ」

親父の顔を見てもう一回言ってみたら、もう一発拳骨をもらった。すると、接岸したリコルヌからアンジェとリビアが降りてくる。

タラップを駆け下りて、二人が俺に飛び付いてきた。

「リオン！」

「リオンさん！」

「二人とも元気だね」

笑っていると、親父が「浮気をしたのはこいつなのに、どうして俺が浮気を疑われないといけないんだ」とぼやいていた。

おい、ふざけるな！

俺は浮気なんかしていないぞ。

騒がしいリオンたちのすぐ近く。

マリエは旅行鞆の上に腰掛けていた。

足をブラブラさせながら、

「ハードな留学生活だったわ。というか、後半は仕事しかしていなかった気がするわね」

気が付けばアルゼル共和国での半年間は、勉強よりも騒ぎの方が多かった。

この一ヶ月など、忙しいリオンたちの世話に忙殺されていた。

カーラも疲れた顔をしている。

「でも、中途半端な時期に戻るになりましたね、マリエ様」

「そうね。留年にならないかが心配よね。あ、留年ならもう一年学園に通えるわ！」

妄想しているマリエに、カイルが現実を突きつける。

「いや、戻ったら幽閉じゃないですか？　だって、留学って体で追放されたわけですし」

「あ」

マリエがそのことを思い出して頭を抱えていると、駆け寄ってくるエリクの姿が見えた。

「姉御おお！」

マリエはヤレヤレという感じでエリックのもとへ向かう。

エリックは周囲も憚らず泣いていたので、マリエが慰めている。

「俺、今日も頑張りました！」

「よしよし、その調子で頑張るなさいよ」

カーラが溜息を吐く。

「エリック君、こっち側だと思ったのに実家に戻っちゃいましたね」

カイルが腰に手を当てて残念そうにしながらも、

「家に戻れるんだから良いじゃないですか。僕なんか実家がありませんし」

エルフの里には戻れない。

そう思っていると。

「あ、カイル！　ようやく会えたあああ！」

エルフの女性がカイルに飛び付いた。

リオンの実家で雇われているメイドの【ユメリア】だ。

「か、母さん！」

小柄でぼわぼわした感じのエルフの女性は、カイルに会えて嬉し

そうにしていた。

「カイル、元気だった？」

「どうしてここにいるの！ 仕事は！？」

ユメリアは腰に手を当てて胸を張る。

大きな胸が揺れるのだった。

「えっへん！ 今回は領主様に言われて飛行船でお仕事なの！ あとは、伯爵に伝えることがあつてきたのだ！」

嬉しそうに仕事をしていることをアピールしていた。

カイルが「そ、そう」と恥ずかしそうにしている。

「伯爵なら向こうだよ」

リビアとアンジェに抱きつかれているリオンを指さすと、ユメリアは照れている。

「邪魔をしたら悪いかな、って」

「それもそうだね」

リオンに遠慮しているらしい。

そんなリオンの近くでは、同じように遠慮している一人の若者がいた。

ジャンだった。

別れ

アルゼル共和国の港は、復興作業が大急ぎで進められている。

レスピナス家の領地にある港周辺には、周辺国の大使館が集まっているためどうしても整備を優先する必要があった。

理由？

外交交渉がこれまで以上に必要になるからだ。

ただし、これまでとは立場が変わり 共和国が頭を下げることになるけどね。

アンジェが俺の顔を両手で挟むように掴む。

「リオン、私たちがいない間に他に女が出来たということはないな？」

俺も信用がないな。

「ないです。一ヶ月間、本当に忙しかったです」

リビアが俺に抱きつきつつ上目遣いで、

「本当ですか？ ルク君に確認しますよ」

「止めてよ。あいつ、絶対に含みを持たせて誤解させようとするよ。」

あいつ、俺には刺激が必要だから、って理由で修羅場を作る最低な奴なんだよ」

そんな俺の言葉に親父が側で「両親を修羅場にしたお前が言っても説得力の欠片もないんだが？」とか言っていた。

ごめん。意味が分からないや。

アンジエが頬から手を離すと、俺を見て微笑む。

「この際だ。浮気するなどは言わん。だが、女を作ったら必ず報告しろよ。跡目争いで大変なことになるからな」

跡目争い？

「いや、名ばかりの伯爵家なんて継ぎたい奴がいるの？ 俺、領地も財産もないんだけど？」

公式には、だけどね。

持っていた財は共和国の復興作業でばらまいた。王国にも謝罪代わりに色々と納めている。王宮は大忙しらしく、あのローランドも苦労していると聞いたので清々しい気分で納めてやった。

おかげで、今は懷がもの凄く寂しい。 表向きはね！

リビアがハッと気付いたような顔になり、

「アンジエ、まだあのことを伝えていませんよ」

「そうだったな。どこから話せばいいものか」

え？ 何かあるの？

俺が嫌そうな顔をしていると、親父が声をかけてくる。

「おい、あの子はお前に用事があるんじゃないのか？」

そこにいたのはジャンだった。

手には紙袋を持って、困ったように俺を見ている。

「え、えっと、あの」

アンジェとリビアから離れ、俺はジャンと話をするのだった。

リコルヌの船内。

通されたレリアは、護衛にクレマンを伴い応接間でその人物に面会した。

相手はニコニコしている私服姿の女性だ。

「はじめまして、レリアちゃん。直接話するのははじめてね」

公式の場ではないが、レリアをちゃん付けで呼ぶなど不敬だった。

だが、それが今の共和国の扱いだ。

レリアはお辞儀をする。

「はじめまして、ミレーヌ王妃様」

「ミレーヌでいいわよ。それにしても、少し外を歩いてみたけれど、共和国も大変ね。全土で復興作業なんて同情するわ。私個人からも支援をさせてもらうわね」

クレマンが後ろで手を握りしめている。

レリアは思う。

（共和国の内情を知り尽くしているって意味よね）

復興作業をリオンたちに頼ってしまった。

それはつまり、共和国の詳しい内情を王国に握られてしまったの
と同意だ。

ミレーヌが目を細める。

「さっさと座りなさい。話が出来ないでしょう？ 私も暇じゃないのよ。私の決定が、王国の決定だと思いなさい」

レリアが席に着くと、ミレーヌは王国の決定を伝える。

「非公式だけれども、この場で王国の決定を伝えるわ。貴方たちからの救援依頼だけこのままだと認められないの。理由は対価よ。あまりにも少ないのではなくて？」

「で、でも、これ以上は何も出せません。今の私たちは」

「支援物資も食糧だけでとんでもない量なのよ。バルトファルト伯爵が、どれだけ支援していると思っているの？ 伯爵に対しては何も報酬を与えていないそうね？」

「ほ、本人が辞退していますから」

「なら何もしません、という話にはならないわよね？ 名誉だけでも称えるために、勲章の一つでも用意できるように。本当に共和国は冷たい国ね」

言われない放題だった。

レリアにも言い分がある。

リオンが一切の報酬や勲章をいらないと言い切ったのだ。

渡そうにも絶対に受け取らず、無理に渡そうとすれば支援を打ち切ると言い出した。

そんなことよりも国民に尽くせと言われたが 今にして思えば、これもリオンの復讐なのかと思えてくる。

ミレーヌが微笑む。

「ただ、現状を見過ごすのはあまりにも非道よね。支援は条件付きで認めましょう」

「本当ですか！」

「ええ、本当よ。ただ 共和国で自由に使える港が欲しいわね。ついでに、港周辺を王国領にしてくれない？ ほら、荷の積み卸しも王国領なら色々と便利なのよ。臨検とか、税とか面倒よね？ 手続きも簡略化できていいわ。共和国の乱暴な臨検を受けないだけでも、とてもスムーズに話が進むのよ」

以前から問題になっていた共和国の臨検に対しての嫌み。

レリアが言い返せずにいると、クレマンが慌てて会話に割り込む。

「王妃様、それでしたら、支援目的の飛行船は特別処置を執らせていただきます。その対応でご納得していただきたく」

ミレーヌは目を細める。

「誰が口を挟めと言ったのかしら？ 私は港が欲しいと言ったのよ。そもそも、契約を守れない国は信用できないの。これくらいしてもらわないと、安心して支援できないわ」

クレマンが黙り込んでしまう。

共和国の信用はこれまでの経緯もあってゼロではない。

マイナスなのだ。

「港を取られたら」

共和国内に王国領が出来てしまう。

しかも港を押さえられてしまえば　共和国の喉元に、王国が剣を突き立てているのと同義だ。

「フェーヴェル家だったかしら？　領主不在の大地があるのよね？　そこに王国の港が欲しいの。どうかしら？」

レリアが俯き考えている。

（支援物資は喉から手が出るほどに欲しい。けど、こんなことを許したら、また弱腰だってユーグに言われちゃう。民も私を批判する。私　どうしたらいいのよ）

いつそどこかの傘下に入りたいが、それでは民の不満が募る。貴族たちも不満の矛先をレリアに向けてくる。

アルベルクの最期の姿が脳裏をよぎると、レリアは血の気が引くのだった。

そんなレリアを見て、ミレー又は溜息を吐いた。

「本来であれば、フェーヴェル家の領地を王国が管理してもよかったのよ。七大貴族だったかしら？　その椅子一つを渡してもらってもいいくらいよね？」

お前らの議会に王国の席を一つ用意しろ。

つまり、今後共和国は王国に対してかなり立場が弱くなる。

リオンは席を一つ渡してでも欲しいが、王国がその席に座ると意

味合いが違ってくる。

王国が正式に共和国を傘下に組み込むのとも違う。

最低限の支援　手に入れた領地は復興させるが、他がどうなるか分からない。おまけに、王国を真似て次々に他国が同じような手口で交渉を仕掛けてくる。

共和国が完全に他国の集合体になってしまう。

最悪　代理戦争を行う場所にされてしまう未来もある。

いつそ属国になれるならまだマシだ。だが、王国は属国にするつもりはないとミレーヌは言っているのだ。　面倒は見ない、と。

それなのに港を奪われれば、不満が自分に向けられる。それだけならいいが、その先は　。

「み、港は渡せません。そんなことをしたら　」

「あれも駄目。これも駄目。貴女たちは、自分たちの立場が分かっているのかしら？」

ミレーヌが目を閉じると、しばらく静かな時間が過ぎる。

レリアにはそれがとても長く感じた。

そんな苦痛な時間から解放してくれたのは、ミレーヌだった。

「　ならば、関税やら貿易に関する条約を見直してもらいましょ

う。ただし、信用もない貴方たちと条約を結ぶのですから、相応の条件を覚悟しなさい」

「あ、ありがとうございます」

レリアには頷くしかなかった。

クレマンが悔しそうな顔をしている。

ミレーヌが用意した書類には、王国が有利な条約となっていた。

サインをするレリアは サインをしなければならない自分が情けなかった。

もつとうまくやっていれば 自分たちは搾取されなかったはずなのに、と。

条件の確認が終わり、ミレーヌは立ち上がると 。

「さて、仕事も終わったから私はいくわね。あ、それから 貴女たちに面会を求めている子がいるの。会ってあげてね」

レリアはまだ交渉が続くのかと思っていると、ミレーヌと入れ違いに部屋に入ってきたのはノエルだった。

車椅子に乗っており、押しているのはユメリアだ。

「姉貴！」

「ノエル様！」

驚く二人に、ノエルは手を振っている。

「どうよ。ここまで回復したわよ」

死の淵をさまよい、そして復活したノエルは笑顔だった。

そんなノエルに、レリアが涙を流す。

「姉貴、私　私、もう無理だよ。巫女なんて出来ないよ」

上に立つ重圧と、共和国の現状に泣き出すレリアにノエルが優しく声をかける。

「泣くんじゃない。あんたの責任だって言ったよね？　まったく支援を引き出せただけでもいいと思いなよ」

クレマンが鼻をすすっている。

「ですが、不平等な条約を結ばれてしまいました。ノエル様から、リオン君　いえ、伯爵にとりなしてもらえないでしょうか？」

ノエルは首を横に振った。

「自分たちで何とかしなさい。今まで周りに迷惑をかけてきたから、大事なときに頼れないのよ。　あたしもあたしの出来ることをするから、あんたたちは自分たちで頑張りな」

レリアが泣きながら歯を食いしばっていた。

リコルヌの別室。

ミレーヌは両手を上げて大喜びをしていた。

「やったわよ、アンジェ！ 王国有利で条約を結べたわ！」

アンジェはミレーヌを見て呆れるのだった。

「共和国の土地など、今の王国には管理できませんからね。人を出すのも難しいですし、それを思えば最上の結果かと」

王国の厳しい内情もあり、そもそも港などもらっても管理できなかった。

おまけに共和国は全土で復興作業中。

もらってもうまみが全くないどころかマイナスだ。

将来的に利益が得られるとしても、今の王国にはそれだけの余力がない。

領地云々はハツタリだった。

「交渉も楽に終わって助かったわ。もう、帰りは船旅を楽しむだけで良いのね！ 久しぶりの休暇を楽しむわよ！」

ハイテンションのミレーヌを前に、アンジェは「この人もよくやるな」思っていた。

「戻ったら魔石の購入先を考えないと駄目ね。リオン君が手に入れた宝玉だったかしら？ あれの数がもう少し多ければよかったのね。どういうわけか報告より少ないのよね。」

アンジエがミレーヌの視線から目をそらした。

「か、数え間違いかと」

「アンジエ 私は怒っていないのよ。でもね、リオン君が女一人のために大事な財産を放り出すなんて、酷いと思わない？ 宝玉一つがどれだけの価値があるのか分かっているわよね？」

アンジエが溜息を吐く。

「共和国の電力を確保するため、最低限必要な数を返還しただけです。あまり追い詰めては暴発するかもしれませんからね」

ミレーヌが微笑む。

「よろしい。でも、次はちゃんと教えてね。それにしてもリオン君は甘すぎるわね。女の子一人のために、そこまでするなんてね」

ノエルが頼み込んだ結果、リオンは宝玉の一部を共和国に返還した。

エリクを間に挟んでおり、事実を知っているのは共和国側でエリクだけだ。

リオンがいかにも他を信用していないかが分かる。

「その甘さに王国も救われてきましたけどね」

「言うようになったわね。本当に惜しいわ。貴女が私の後継なら安心できるのに」

「私は今は幸せですから」

ミレーヌがアンジエに対して距離を詰めた。

先程までの雰囲気とは違う。

「ルクシオンの件、私の方でも調べたわ。調べるほどに怖くなっただけだね。今まで本気を出していなかったのね。公国との戦いからずっと気になっていたのよ。どの程度か探れて、本当によかったわ」

隠していたルクシオンの実力が、ミレーヌにも知られてしまった。

条約よりも、現地でリオンの実力を調べることが本命だったのだろう。

アンジエも顔付きが変わった。

「私はリオンの味方です。ただ 王国を進んで滅ぼすつもりはありませんよ。そんなことをさせるつもりありません」

「信じたいのだけれど、世の中はそんなに優しくないわ。だから」

ミレーヌの出した条件に、アンジェは目を見開くのだった。

アインホルンの甲板。

港から出港した王国の一団。

今は共和国が遠くに見えている。半年を過ごした国を去るのに、これだけ複雑な気分になるとは思ってもみなかった。

俺はジャンにもらったお土産を見る。

「あいつの故郷にあるお守りか」

ルクシオンも覗き込む。

『これもステータス強化アイテムですか？ 特別な力を感じませんね』

腕に結ぶ紐のようなものだ。

アルゼル共和国の言葉で、祝福の意味が書かれている。

「マリエに聞いても覚えてなかったんだよな。見覚えはあるらしいんだけどさ」

『レリアに確認すればよかったのでは？』

「嫌だよ。あいつすぐに土下座してくるもん」

泣きながら土下座をしてるのが　憐れでもある。

良い思い出は、異国で友達が一人出来たことだろうか？

そう思えば悪くもない。

ジャンが学園を卒業したら、エリクに推薦状でも出しておこうか？

『でしょうね。それにしても、ノエルに言われて宝玉を返還するなんて優しいですね。どんな裏があるのですか？』

「俺が常に色々と考えているように見えるのか？」

病院とか、その他にもどうしても電力を削れない部分がある。

そういったところにエネルギーを回すため、宝玉を返還した。

エリクには使い方を見張るように言って、だ。

俺が直接渡せば、もっと欲しいとたかってくるに決まっている。

あいつらは二度と信用しないと決めた。

『今回も随分と散財してしまいました。表向きはまた貧乏貴族に逆戻りですよ』

「本当に嫌になるよな。戻ったらローランドがニヤニヤしているに決まっているんだ」

『今回はどんな結果になるでしょうね』

ルクシオンが気にしているのは俺の処遇だろう。

共和国で暴れ回ったが　その結果、王国は魔石の購入場所を一つ失ってしまった。

対価に宝玉を渡したが、あれだって電力供給が一生続くものではない。

「降格して田舎でノンビリしたいな」

『婚約者二人がいるのに情けない。おっと、三人でしたね』

「　　帰りに浮島でも見つけて帰るか。新しい領地も欲しいし」

『王妃様を乗せているのですが？』

「ちょっとくらい寄り道してもいいだろうが」

『少し前のシリアスなマスターはどこにいったのでしょうか？』

「シリアスなんていつまでも続くかよ。あいつらを見る。シリアスな雰囲気なんか吹っ飛ぶぞ」

共和国から離れていくアインホルンの甲板の上では、皆をねぎらつてささやかなお祝いをしている。

マリエなんか、豪快にジョッキでお酒を飲んでいた。

「つかあああ！ しみるわあああ！」

「マリエ様、いい飲みっぷりです！」

カールがマリエを見て拍手をしているが、そいつおっさん臭いぞ！
それでいいのか！

カイルなど、皿にこれでもかとお菓子を載せて持って来ている。

「ご主人様、フライドポテトをお持ちしました！」

「お酒が進むわぁ。ほら、あんたたちもしっかり食べなさい。今日は騒ぐわよ！」

「はい！」

「共和国では騒げませんでしたからね」

幸せそうな顔をしているマリエたちを見て、もう言葉が出てこない。

少し離れた場所では、ユリウスが落ち込んでいた。

「串焼きが食べたい。いつそ野菜オンリーでいくか？」

ジルクが呆れている。

「まあ、さすがにお肉は駄目でしょうね」

ブラッドはお菓子を食べている。

「あ、これおいしいよ」

グレッグは少しやつれた顔をしていた。ただ、ふんどし姿だ。

「この一ヶ月は考えさせられたぜ」

クリスも同様だ。こいつもふんどし姿で真剣な顔をしている。

「ああ、そうだな」

復興作業中、みんな頑張ってくれた。グレッグやクリスは外で風呂を用意してくれたし、ブラッドは子供たちを笑わせていた。

ジルクはみんなのフォローを行い、ユリウスは指示を出す。こいつらも働けるのだと驚いたよ。

こいつら、何で普段から頑張らないの？

そんなことを考えていると、ルクシオンが俺に一つ目を向けて『また自分にも返ってくる文句を言おうとしましたね』などと言ってきた。

こいつ、俺の考えを読み取る機能でもついているのだろうか？

プライバシーの侵害である。

「リオンさん！」

リビアが飲み物を二つ持って俺に近付いてくる。

「アンジェはリコルヌだっけ？」

飲み物を受け取りつつ、話しをした。

「はい。王妃様とお話中です。難しい話なので、私はアインホルンに乗るように言われました」

少し落ち込むリビアだが「でも、リオンさんと一緒に嬉しいですよ」と言っている。

「そ、そっか」

聖樹がなくなった共和国が、段々と薄らとしか見えなくなってきた。

ボンヤリしていると、リビアが俺に耳打ちしてくる。

「リオンさん、今は納得しますけど　いつか本当のことを教えてください」

ドキリとして振り返ると、リビアは飲み物を飲んでいた。

ルクシオンが俺に耳打ちしてくる。

『オリヴィアはマスターたちの秘密に気が付いているのでは？　レリアが何か漏らした可能性があります』

兄貴呼びの一件　もしかして、リビアは納得したふりをしてくれたのだろうか？

俺は飲み物を飲みつつ、

「いつか話した方がいいのかな？」

寄子

半年ぶりに王国に戻ってきた。

以前よりも復興が進んでいるのがよく分かる。

共和国の惨状を見た後だから、余計に眩しく見えてしまう故郷。

そんな故郷で俺は、王宮に向いて糞野郎 じゃなかった、陛下であるローランドの前にいた。

今日は式典ではなく、事務的な話をするために向かい合っている。周囲には他にも貴族たちがいて、俺のことについて話をしていた。

ローランドが鼻に指を突っ込んでいた。

「糞ガキ、暴れ回ってくれたな。おかげで使者を何度も出す羽目になった。この糞忙しい時期に仕事を増やした言い訳を聞こうか」

「陛下には大変申し訳なく思っています。優雅な一時も、ナンパをする時間も、女性と愛を語る時間も奪ってしまい心苦しい毎日です」
本当に心が痛む。

もっとこいつを苦しめてやればよかったと、後悔ばかりが募るのだ。

「白々しいぞ、糞ガキが」

「とんでもない。本心です」

「嘘だな」

「ええ、嘘ですよ。それが何か？　少しは真面目に働けてよかったな」

本音をこぼしてしまうと、ローランドの奴が額に青筋を浮かべていた。

「侮辱罪で処刑してやる」

「侮辱？　事実は侮辱と言わないんだ。知らなかったの？　でも、よかったな。今日は一つ賢くなれたぞ」

わけの分らないことを言い始めたローランドに代わり、クラリス先輩のお父さん　バーナード大臣が俺と話をする。

「さて、いつもの会話も終わったところで本題に入ろうか。今回の件は殿下たちから事情を聞いている。君に落ち度がないとは言わないが、よくぞ王国の意地を見せてくれた。個人としては実に面白い話だ」

個人としては、ね。この人も共和国には色々と思うところがあったのだろう。

グインスさんの代わりにこの場にいるのは、ギルバートさん

アンジエのお兄さんだ。

「だが、王国は魔石の購入先を一つ失ってしまった。そればかりか、周辺国の一つが不安定になっている。樂觀視は出来ない状況だね」

隣の国が大変な状況 ではない。

魔石を大量輸出している国が消えたのだ。

場合によっては、面倒なことになるきっかけを作ったのが俺の立場だ。

王国も対応に追われている。

「やり過ぎちゃいましたね」

「将来的に共和国が王国を侵攻する芽を摘んだ。そこは評価をするけどね」

何もしなければ、聖樹やイデアルが暴走していた。

それをこの場にいる人たちに説明しても、理解してくれるとは思わないけどね。

ローランドが自分の髭を指先で摘まむように撫でている。

「お前の責任だ。よって、死刑！」

そんなローランドを置いて、バーナードさんが真剣に話をする。

「さて、君の処遇だが」

「おい、聞けよ！」

ローランドの戯言を周囲も無視している。

こいつの扱い軽くない？

「バルトファルト伯爵、いや 侯爵。すまないが、すぐに式典の準備に取りかかるう。今回の行動、王国は悪くないと示すために君に勲章を与えることにした」

「え？ こうしゃく え？」

バーナードさんが何を言っているのか分からなかった。

ギルバートさんを見ると、

「共和国が王国に攻め込む前に片を付けた。そして、怪物退治の報酬だ。受け取っておきなさい」

「いや、その 俺、王族じゃないし、そんな侯爵とか器じゃないので辞退を」

冷や汗が止めどなく流れ出てくる。

侯爵というのは、ホルファート王国で言うなら王族の分家みたいなものだ。

レッドグレイブ家もこれにあたる。

成り上がりの俺が就けるような地位じゃない。

俺に与える地位としては明らかにおかしい。

狼狽していると、ニヤニヤしているローランドの顔が見えた。

「私だってお前を処刑できないことくらい考えれば分かる。いずれ処刑台に送ってやりたいが、その前にお前が嫌がることは何かと考えた。考えた結果、侯爵の爵位を与えてやればいいと気が付いた」

目を見開き、ローランドを見ていると饒舌じょうぜつに語りはじめる。

「今の王国は貴族が少ない。お前のように酷使しても心が痛まない貴族は最高だ。出世させてこき使ってやる。お前は有能だから、ボロボロにすり切れるまで使い潰してやろう。嬉しいだろ、バルトフアルト侯爵？」

嬉しいわけがないだろうが！

「ふ、ふざけるなよ！俺は王族じゃねーんだぞ！」

そこでギルバートさんが「君はね」と呟いた。

振り返ってギルバートさんを見ると、

「忘れていたのかな？ アンジェもミドルネームにラファを持つ王家に連なる血筋だよ。その夫になる君は、王国の規定で問題なく侯爵の地位に就けるのさ。普通はあり得ないが、今は非常時でね」

アンジエが本物のお嬢様だったのを忘れていた。

いや、お嬢様だけど　その中でも更にお嬢様だったのを思い出した。

ローランドは嬉しそうにしている。

「お前のそんな顔が見られただけでも心が清々しい気分だ。今日はよく眠れそうだな！　よし、ついでに三位“上”の階位もくれてやる。精々、王国のために尽くせよ、侯爵」

「う、嘘だ」

「残念！　これは嘘じゃない。悔しいことにお前は優秀で、私は褒美を与えなければいけない立場だ。だから最大限の敬意を払い、侯爵に昇進させてやる。これは私の勘だが、この方がお前は苦しみつつ私が楽を出来そうな気がする。私の勘はよく当たるんだ」

勘！？　その程度で俺を出世させたのか！

これ以上の出世はないと思っていたのに、信じられない理由で出世してしまった。

あり得ない。あつてはならない！

確かに規定に従えば出世可能だが、一代で侯爵に上り詰めた奴なんかうちの国にいなーよ！　こいつら、俺を無理矢理出世させやがった！

俺の脚が震えているのを見ていたバーナードさんが、

「だからうちのクラリスにしておけばよかったのに」

そんなことを言われても、俺にどうしろというのか！

震えている俺を前に、ローランドの追撃は 終わらなかった。

こいつ、かなりしつこい！

「お前のせいで苦労させられている間、私はずっと考えていた。お前がどうすればもっとも苦しんでくれるのか、と。寝ても覚めてもお前への復讐を考える日々の中で、ある一つの日啓を授かった」

寝ても覚めても俺のことを考えていたの？

こいつ実は暇だったんじゃないだろうか？

「お前も暇だよな」

「五月蠅いぞ、小僧！ こっちはお前のせいで何度徹夜をしたと思っ
っている！ お前を地獄に落とすことだけが、私が仕事をする際の
心の支えだったのだ。処刑も出来ず、冷遇も許されず、それでも仕
返しがしたい私は考えに考え抜いた！ さて、覚悟は出来てい
るか？」

「ギルバートさん、まだ何かあるんですか？」

「ああ、実は」

「私に言わせろ！」

ローランドはいちいちポーズを決めて大げさな奴だ。

もったいぶって嫌になる。

ただ、ローランドの話を聞いて 俺は目の前が真っ暗になった。

「侯爵となったお前に寄子を持たせてやろうと思ってね。ほら、部下もない侯爵なんて滑稽だろう？」

口が震えてくる。

寄子とは、簡単に言えば部下だ。

ただし、俺に忠誠を誓っている部下ではない。

国が俺の下に派遣したような部下になる。領主貴族で言えば、俺の実家が男爵家なのでそれより下の騎士爵や準男爵家の面倒を見ているようなものだ。

直属の部下ではなく、王国から派遣された部下だと思って欲しい。

「おい、嘘だろ。や、止める」

「実は名ばかりの男爵が四人もいるんだ。そいつらの実家に根回しをしたら、侯爵の下につくのなら、と認めてくれてね」

その四人に心当たりがあった。

俺は立っていらなくなり、ギルバートさんとバーナードさんに

支えられる。

「ジルク、ブラッド、グレッグ、クリス　あの四人をお前の下に付けるから、面倒を見てやってくれ。今まで以上に、ね」

「　この外道が」

マリエが引き取ったポンコツ四人を、こいつは俺に押しつけやがった。

ローランドは右手を胸に当てて清々しい笑顔だった。

王族オーラが無駄に出ている。

「お前からその言葉が聞けて嬉しいよ。ありがとう。そして　頑張ってね！」

「嫌だああああ！」

叫ぶと会議の場にミレーヌさんがやって来た。

「騒々しいですね。何を騒いで　リオン君、どうしたの！」

「王妃様、王様が俺をいじめるんです。あいつ鬼だよ！」

ミレーヌさんが駆け寄ってきて、俺の肩に優しく手を置くとローランドを睨み付けた。

「あなた？　私は最大限の敬意を払えと言いましたよね？」

「ち、違うぞ！ 昇進させて、おまけに寄子まで用意してやったんだ！ 鬼だのと言われるなど心外だ！ それに私なりに最大限の敬意を払った つもりだ」

ミレー又さんが溜息を吐く。

「その話でしたか。それでしたら、私からも条件を一つ加えます」

「お、何だ？ その小僧が苦しむなら大歓迎だぞ」

「私の娘をリオン君に嫁がせます」

その場にいた貴族たちが騒ぎはじめた。

「ミレー又様の娘と言えば」

「し、しかし、それではレッドグレイブ家のメンツが
いいのか？ 王女殿下は婚約しているはずだ」

ミレー又さんにはユリウス以外に子供がいるらしい。

実の娘を俺に嫁がせる？

色々と言いたいことはあるが、震えているのはローランドだった。

「へ？ あ え？ ミレー又、よく聞こえなかった。もう一度言
つてくれないか？ 王女の一人を小僧に嫁がせるんだよな？ お前
の娘を嫁がせると聞こえたような気がするんだが？」

話の流れからするに、王女殿下ってそれなりにいるらしい。

だが、ミレー又さんの娘さんは何か特別のような言い方をしている。

「【エリカ】を嫁がせると言いました」

「だ、駄目だ！ エリカだけは駄目だ！ 他の娘にしないで！ あの子がこんな小僧に嫁いたら苦労してしまうだろうが！ 絶対に認めないからな。私は絶対に認めないぞ。王権を使っても阻止してやる！」

「まったく、あの子のことになるとすぐに親馬鹿になる。年頃の娘はエリカだけです。仕方がないではないですか。その下の王女はまだ十二歳ですよ」

「エリカだってまだ十四歳ではないか！ 私は絶対に認めないぞ。婚約するときだって本当は反対したかったんだ！ あの子はずっと側に置くんのだ！」

「いい加減にしないで！ それにエリカは今年で十五歳ですよ！」

「まだ十五歳だ！ お前と違ってあの子は目に入れても痛くないほどに可愛いんだ」

「後でゆつくり話をしましょうね、陛下」

おい、ローランドの奴は露骨に娘を差別してない？

エリカ王女は駄目なのに、その下の子は十二歳で嫁がせるとかお前は正気か？

それにしても、十五歳って中学生くらいだろ？

いや、ねーよ。

それに俺、もう婚約者いるし。

「あのー、俺って婚約者がいるので辞退をしたいかな、って」

ローランドの鋭い視線が俺に刺さる。

血走った目は、先程までの王族オーラではなく、面倒くさい父親のオーラになっていた。

「エリカと婚約できるのに、辞退するとはいい度胸だな、小僧！」

「どっちの立場だよ。というか、今更言われても困るの。ねえ、ギルバートさん？ あ、あれ、ギルバートさん？」

ギルバートさんが無表情だった。

「そうだね。困ってしまうよね」

これ、絶対に怒っているやつじゃないか！ これ、どうすればいいんだよ！

「王妃様、意味が分かっているのですよね？」

「ギルバート君、そう怒らないで。アンジェにも許可を取っていませんから。それに、バーナードは賛成してくれたわよ。私の娘 エリカがリオン君の正妻になれば、その下に伯爵家の娘がいてもおか

しくないもの」

ギルバートさんの鋭い視線が、まるでバーナードさんを射貫くように向かった。

だが、バーナードさんは涼しい顔をしている。

「ははは、そうですね、王妃様」

この人、この話を知っていたのか？

「嫌だああ！ エリカだけは エリカだけは手放したくないんだ！ それもこの小僧に何で、あの子が可哀想すぎるだろうが！」

ローランドは何か壊れたのか、床を転がり駄々をこねていた。

え？ これ、どういうこと？

王宮の一室。

戻ってきた俺を待っていたのは 。

「これからお世話になりますね、侯爵」

笑顔のジルクだった。

「お前、俺の下につくことになって悔しくないの？ 拒否しないの？ というか断って」

「しませんよ。私、これでも侯爵を認めていますよ」

どうしよう　少しも嬉しくない。男に認められたからとか、そんな理由じゃなくてこいつらに認められても、って感じがする。

ブラッドもノリノリだ。

「いや、まさか僕たちが君の下につくなんて考えてもいなかったよ」

「拒否しなよ」

「え？　しないよ。別に構わないし」

「少しは反対しろよ！」

「何で？」

制服を着用しているグレッグとクリスは、目を離すとすぐに脱ぐうとしている。

今もシャツを脱いでいた。

「知らない奴よりマシだな。いや、俺より強いお前の部下なら、文句なんかないぜ！」

「ふっ　よろしく頼む」

一切嫌な顔をしない四人を見ていると思うのだ　何故か、嫌な

物を押しつけられた感じがする、と。

ユリウスが俺を見ていた。

「何だよ？」

「俺も世話になっていい？」

「何でだよ！」

「いや、だって楽しそうだから。というか、一人だけというのは寂しいだろうが」

「知るか！　どこの世界に、養って欲しいなんて言う王子がいるんだよ！」

お前はもう少し王子としての自覚を持て！

気が付くと、俺の脚にマリエと　カーラにカイルもすがりついていた。

「お、お前ら、いったいどういっつもりだ」

「もう絶対に放さない！　兄貴、一生面倒を見て！」

「伯爵。いえ、侯爵様！　一生マリエ様と共についていきます！」

「侯爵を逃がしたら、僕たち大変なことになるじゃないですか。一緒に頑張りましょうよ！」

お、お前ら、俺までそっち側に引きずり込むつもりか？

「は、放せ！ 俺はお前らの面倒を見るなんて嫌だからな！ 絶対に嫌だからな！」

マリエが俺の脚から離れない。

力を振り絞り、俺の脚にしがみついている。そこには執念を感じた。

「兄貴 ずっと一緒だよ」

しがみつくマリエが、笑顔で俺を見上げる姿は ホラー映画を見ているような気分させられた。

マリエの笑顔が逆に怖い。

一瞬で体温が下がり、冷や汗で背中が濡れてしまう。

まるで地の底に引きずり込むようなマリエたちの声に、俺は叫ぶのだった。

「イイイヤアアアアア！！ 誰か助けてえええ！」

俺が一体何をした。

何をしたらこんな酷い罰ゲームみたいな状況になる！？

誰か説明してくれ！

一方、バルトファルト男爵家の屋敷では、アンジエとノエルの姿があつた。

車椅子に乗ったノエルは、両手で大事そうにあるケースを持っていた。

アンジエはノエルの車椅子を押して、屋敷の中庭を散策していた。気まずい雰囲気を出しているノエルは、後ろにいるアンジエに声をかけた。

「あたしに何か言いたいの？」

アンジエは車椅子を押しながら答える。

「怪我が治ったら王国の学園に入学しろ。王妃様との間で話もついた」

「いいの？」

ノエルが王国に連れてこられた理由は、その膝の上に置かれているケース。その中にある青々とした苗木だった。

王国に持ち帰ると、ユメリアが聖樹の苗木を見てまだ生きていると言った。

そこからユメリアが苗木を元に戻し、ノエルに巫女としての価値が戻ったのだ。

今のノエルは重要人物である。

「リオンがお前のことを気にするからな。巫女として閉じ込めたいのが本音だが、それではあいつが苦しむ」

アンジェが気にしていたのは、その一点であつた。

「もつと嫌みを言われると思ったわ。私の男に手を出すな、って」

アンジェは微笑む。

「言つてやりたいさ。だが、それをすればリオンが気に病む。それは私の望む結果ではないよ」

ノエルは聖樹の苗木が入ったケースを抱きしめた。

青々とした葉を取り戻し、心なしか嬉しそうにしている。

「あんた、優しいよね。あたしだったら蹴飛ばしていたかもしれないよ」

「最初に共和国で見た時は燃やしてやりたかったけどな」

そう言つて二人とも笑うのだった。

エピソード

「さあ、皆さん　張り切っていきましょう！」

「うっすっ」

朝から元気なユメリアさんに連れられ、やって来たのは随分と荒れた浮島だ。

ルクシオンで引つ張って来た新しい浮島は無人島だ。

今日は苗木を植えるために俺たちはやって来ている。

マリエが淒く眠そうにしていた。

「お願い。早く終わらせて。補習であまり寝てないのよ」

遅れている分を取り戻すために、朝から晩まで授業が続いていた。

マリエの世話をしているカイルが、ユメリアさんを気にして集中できていない。

「か、母さん、あれをやるの？　みんなの見ていないところでやらない？」

「駄目だよ。侯爵様が仕事ぶりを見たいと言ってくれたし、それに今回はボーナスが出るんだよ。カイルに新しい服を買ってあげるんだ！」

嬉しそうにしているユメリアさんを前に、複雑そうな息子のカイ
ル。

気持ちは分かるが、第三者として見ていると楽しい。

リビアがノエルの車椅子を押していた。

「あの、ここに苗木を植えるんですか？ 周囲が荒れているとい
うか」

自然豊かとは言えない浮島だ。

苗木を植えるにしても条件が悪いように見えるのだろう。

俺もそう思うのだが。

「大丈夫です！ この子は強くてたくましい子ですから、ここでも
平気で育ちます！」

ユメリアさんが断言するので、俺はそういうものと納得した。

この人、植物関係に関しては天然の専門家だ。

エルフの中では混ざりものと呼ばれ嫌悪されているのだが、その
魔法が混ざりもの故に独特で植物関係に特化している。

巫女のように聖樹の声は聞こえないが、感覚で何となく分かると
言っていた。

ノエルが困った顔をしている。

「え？ でも、何か嫌がっている気がするんだけど？」

苗木が嫌がっているように聞こえるらしい。

ユメリアさんが胸を張る。

「大丈夫です！ それに、この子を植えれば周囲も緑豊かになりますよ。浮島も海水をくみ上げてくれるかもしれません」

浮島はどこから水を得ているのかと言えば、海水を汲み上げている。

海水から水の柱が伸び、浮島を通って川からまた海へと流れている。

その仕組みは解明されていない。

アンジェの側に浮いていたクレアーレは、興味深そうに聞いている。

『あら、結構凄いのね』

「そうです。この子は凄いです。だから、優しい環境に植えるよりも、こういう荒れ地の方が力を発揮してくれます」

周囲が「そんなものか」と納得していると、アンジェが浮島を眺めていた。

「久しぶりにリオンの浮島にもいきたいな」

半ばマリエのものになってしまったが、アンジェは気に入っていたらしい。

取り返せないのが残念だ。

今は、正式には王国所有になっているからね。

ユメリアさんがトコトコとノエルに近付くと、苗木をケースから取り出した。

そしてそのまま苗木を　。

「そいや！」

地面に突き刺した。

「ユメリアちゃん、何してんの！」

ノエルが青い顔をして叫ぶと、ユメリアさんが拳を作って両の手を空に向かって上げた。

「この子は強いぞ！　根を張れ、育て、大きくなれ！」

歌にも呪文にも聞こえない言葉。

その言葉に合わせて踊り出すのだが　バルンバルンと胸が揺れていた。

「朝からいいものを見られたわ」

俺が紳士的に凝視していると、カイルが俺の視界を塞ごうと飛び跳ねていた。

「おい、見るなよ！ 見るなって！」

「馬鹿野郎。俺は雇用主としてユメリアさんがちゃんと働いているのか見ていただけだ」

よし、追加報酬を出すかと思ったところで 俺の視界は手で塞がれた。

「な、何！？」

聞こえてくるのは、たぶん笑顔だろう二人の声だ。

「安心しろ。私たちがしっかり見ておこう」

「リオンさんは見なくても大丈夫ですよ」

アンジェとリビアの声に、俺は絶望してしまう。

「いや、しかし！」

不思議というか、コミカルな踊りで可愛らしく踊っているユメリアさんが見たい！ そんなことは言えなかった。

マリエが舌打ちをしている。

「何よ。胸なんて飾りなのよ」

「ならお前はもっと着飾れば？ 飾らないにも程があるぞ」

返事をしてやると、俺は脛を蹴られた。

「痛っ！ お、お前、今は蹴るなよ！」

「うるせえ！」

そうこうしている間に、ユメリアさんは仕事を終えてしまう。

アンジェとリビアから解放されると、俺の目の前には 苗木ではなく若木があった。

大きさは一メートルを超えている。

「は？」

驚いていると、アンジェが腰に手を当てて感心していた。

「まさかこんなに早く育つとは思わなかった。見ていて驚いたぞ」

リビアは興味深そうにしている。

「もっと大きくしないんですか？」

ユメリアさんは、汗をタオルで拭きながら達成感に満ちた顔をしていた。

「これ以上は逆に成長の邪魔になりますからね。そもそも、この子は過酷な環境で生きていて、本来ならこれくらいは成長していてもおかしくなかったんです」

苗木ではなく、実は若木だったのか。

まるで年齢を誤魔化しているように感じられた。

ルクシオンが補足してくる。

『聖樹の側にいる間というのは、ろくに栄養が取れない状況でしたからね。栄養豊富なこの土地なら、十分に育つでしょう』

「こいつの栄養って普通の植物とは違うのか？」

『はい。魔石のもとになる　魔素とも呼べるものですよ。それを聖樹が全て吸い上げるので、苗木は育たなかったのです。あと、普通に聖樹が育つのを邪魔していましたね』

それ、植物としてどうなのだろう？

聖樹は植物としてどこか間違っている気がするな。

「聖樹っておかしいよな」

『そんな聖樹に守護者として選ばれたマスターは、いったい何なのでしょうね？』

「嫌みか」

『はい』

俺は若木となった聖樹を見ながら、

「こいつも将来は暴れるのかな？ それは困るぞ」

アンジェも同様のようだ。

「暴れるのは何百年と先の話だろうが、確かに面白くないな」

すると、ユメリアさんが首をかしげて、

「あの、侯爵様はこの子が暴れるのは嫌ですか？」

「嫌というか、共和国みたいに聖樹に頼りっぱなしの状況が嫌だな。暴れて欲しくないし、適度に共存したいの。共和国を見ると、恩恵が大きいのも考えものだと思ったよ」

ルクシオンとクレアーレも同意してくる。

いつそ滅ぼした方がいいのではないか？ そう思ったが、どうやら存在が消えると駄目らしい。こいつはこいつで、この世界のために貢献しているそうだ。

『数百年後の状況もあるでしょうが、聖樹の恩恵は確かに大きすぎますね』

『守護者と巫女以外に、加護を与えるのもどうかと思うわ』

ユメリアさんが考え込み、そして閃いた顔をした。

「だったらお任せください！ 私がこの子に言って聞かせます！」

ノエルが驚く。

「え？ いや、無理だつて。巫女だつて満足に会話が出来ないのよ。ほとんど聖樹からの一方通行だし、言い聞かせるなんて」

「出来ます！ では、見ていてくださいね。すう」

深く息を吸い込むユメリアさんは、今度は激しく踊り出した。

「おおおお！ あ、やっぱり視界は塞ぐんだ」

興奮していると、やはり二人に視界を塞がれてしまった。

「良い子になあれ！ 良い子になあれ！ 良い子になあああれえええ！」

ユメリアさんの言葉に、聖樹が葉を揺らした音が聞こえてくる。

ノエルが、

「嘘、聖樹が反応している」

どうやら効果はあったらしい。

「良い子になれええええ！」

ユメリアさんの大声が、周囲に響き渡った。

飛行船に乗り、浮島から離れると俺は今後のことをアンジエとリビアに話すのだった。

内容はもちろん。

「結婚するとか聞いていないんですけど」

ふて腐れる俺にアンジエが、

「私だつて認めたくない。だが、ミレーヌ様はルクシオンを警戒しているからな。お前の首に首輪と鎖を繋ぎ、鈴も付けたいらしい」

雁字搦めにしたいのだろう。

まったく ミレーヌさんに雁字搦めとか、興奮してしまいそう
だ。

『マスターが変なことを考えています』

リビアが怒っていた。

「リオンさん、メッ！」

想像すら許されないというのか？ 束縛が強い女ってどうかと思うが、この二人ならちょっと嬉しいぞ。

アンジエが話を戻す。

「共和国に同行した理由も、条約は建前だ。実際には、リオンの実力を見るためだな。あの人は天真爛漫てんしんらんまんに見えるが、実は強かだぞしたた」

「そう？　可愛い人だと思うけど？」

クレアーレが一つ目を横に振っていた。

「駄目ね。骨抜きにされているわ。王妃様って凄いのね」

さて、それはそうと、問題は王女殿下だ。

「それより、エリカ王女殿下はどうするの？」

ミレーヌさんはアンジェも納得していると言っていたが、本人は認めたくない様子だった。しかし、認めないわけにもいかないという顔をしている。

「婚約しているのだが、破棄してリオンと結婚させるのだろうな。だが、よりにもよってエリカ様だ。ミレーヌ様がそれだけ本気というのがよく分かる」

リビアが不安そうにしている。

「エリカ様はどんな人なんですか？」

「ユリウス殿下とは同腹の兄妹だ。容姿端麗で品行方正。絵に描いたようなお姫様なのだ。陛下の可愛がり方が尋常ではない。王宮内にも派閥を超えた支持者が多い。本人が表に出ようと思えば、すぐにでも一大派閥が出来上がる勢いだよ」

『それをしないということとは、王女として王太子のユリウスを立てていたのでしょうか？』

ルクシオンの問いかけに、アンジェは困った顔をする。

「それもあるだろうが、思慮深い方だ。そんなことをすれば、争いの種になると分かっている。それから、年下のはずなのに、いつの間にか敬語で話をしてしまいなくなる。あのオーラはなんと言えば良いのか分からないな」

王女様のなオーラもあるが、それ以上に包み込むような何かを持っているらしい。

後でマリエに話を聞いてみるか。

「俺としては困るんだけど」

「私も困る」

「わ、私だって困ります」

アンジェもリビアも困っているが、ルクシオンの力を警戒している王妃様の提案だ。

断るのも難しいらしい。

「リオン、この提案は拒否できない。周囲は拒否するように言うだろうが、ミレーヌ様の手を払いのければ、困るのはお前だ。ミレーヌ様は、自分が用意できる中で最高の手札を用意した。それがエリ

力様だ」

アンジェ曰く、本気で俺を取り込むつもりらしい。

そのために下手な王女を送り出せないから、婚約破棄までさせてエリカ王女と俺を結婚させるそうだ。

婚約破棄っていいのだろうか？

ミレー又様の最大限の誠意であり、そして俺を見張るため 制御するための才覚があるのはエリカ王女だけと判断した結果らしい。

「それと、だ。ルクシオンの隠していた実力が判明すれば、お前を暗殺しようとする輩も出てくる。ミレー又様がエリカ様をお前に嫁がせるのは、味方を増やして欲しいという意味もあるのだろうか」

ルクシオンが即答する。

『マスターが暗殺されることはあり得ません。ただ、仮にあったとすれば 私は王国を滅ぼします』

「お前って極端だよな」

この場で、エミールに撃たれそうになったことを言ったら、きっと色々と言いつけをするのだろうか。面倒だから黙っておくか。

『私も協力するわよ！』

「お前ら、俺が殺される前に協力して頑張れよ」

のんきな人工知能たちだが、本気で世界を滅ぼそうとするから手に負えない。

イデアルの件もある。

俺が暗殺されたら世界が終わるとか　　いったいどうしろというのか？

リビアがルクシオンを見ながら、

「え、えっと、なら王女殿下と結婚しないと駄目なんですよね？」

アンジエは頭が痛そうだ。

「一つだけ手がある。エリカ様本人を説得出来れば、そこからミレーヌ様を説得できる。難しい話ではあるが、ミレーヌ様もエリカ様を可愛がっていたからな。利益と情を絡めて説得すれば、可能性くらいはあるさ」

王女様を説得することができればあるいは、か。

難しい話なのか、アンジエもいつものような自信のある顔をしていない。

ただ、アンジエは思慮深いと言っていたし、話くらいは聞いて貰えるだろう。

嫁とか、これ以上は増えて貰っても困る。

「なら、とりあえず説得しようか。それよりも、これからどうすれ

ばいいのかな？ 俺、復学できるの？」

本来なら留学していたはずが、学園に戻ってきてしまった。

このまま復学するのかと思っていると、

「短期留学の話が出ている。あの六人を復学させるには、もう少し時間が欲しいそうだ」

マリエたちは周囲に敵を作りすぎたから、もう少し復学はまって欲しいそうだ。

「なら、休学？」

「それでは留年になってしまうからな。手頃な留学先を見つけれ。またしばらくは海外だな」

「また外国語を勉強しないとイケないのか」

とても気が重かった。

どうしてあいつらのせいで俺まで巻き込まれるのかと言えば俺があいつらの寄親だからだ。

もう嫌。マリエのせいで俺まで呪われているのではないだろうか？

飛行船の一室。

今度は、マリエと話をしていた。

内容はゲーム的な話　今後について、だ。

「王女殿下？　もしかして、ミレーヌの娘？」

「お前、義理の母親を呼び捨てかよ。それはいいとして、そろそろ三作目の開始だろ？　色々話を聞いておきたいんだよ」

ルクシオンとクレアーレを伴い、マリエと今後の打ち合わせをすることに。

すると、

「え？　でも、そのエリカ王女って　三作目の悪役令嬢よ。令嬢というか、悪役王女様？　もう敵側よ」

「　　は？　いや、だって敵はヘルトラウダだろ？」

「ラスボスを召喚するのはヘルトラウダだったけど、ストーリー的なお邪魔虫は王女殿下よ。思慮深いというか、陰険？　根回しがうまくて猫をかぶるのが上手なの。主人公は王国に来た留学生になるわ」

『あら、今度は留学生を迎えるパターンなのね』

「凄いわよ。実は帝国の皇女殿下よ。自分の出自を知らないけど、実は　ってパターンね。来年入学してくるわ。留学期間はきっちり三年よ」

『実は凄い、というのは黄金パターンですね。主人公の皆さんはそんな人ばかりですよ』

ルクシオンがからかってくると、マリエは続きを話す。

「注意しないと駄目よ。最終的に国際問題を起こした王女殿下は追放されるの。あと、王女殿下の婚約者は、これまた凄く悪い貴族の跡取りよ。侯爵家の跡取りだけど、悪い貴族の見本みたいな奴ね」

『マスターも今の地位は侯爵よね？ これ、何かの運命かしらね。ワクワクしちゃう』

嬉しがるクレアーレを無視して、俺は一気に警戒を強めるのだった。

「実は腹黒か。アンジェも気付いていないみたいだし、これは結構きついかもしれないな。他に何か情報はあるか？」

「今すぐって言われても困るわよ。あとで思い出しつつノートにまとめるけど あ、そうだ！ 一つ思い出したわ」

マリエは攻略対象の一人を思い出したらしい。

「今度の攻略対象の一人は、既に入學しているはずよ。リビアと同じ特待生枠で、不良男子枠ね。凄腕の冒険者で、名前は【アーロン】って言うの」

『え？』

「先輩梓か？ まあ、後で調べておくか。ルクシオン、戻ったら調べてくれ。いや、王国に残るクレアーレの方がいいか？」

俺たちはすぐに留学すると思うし、それならアローンのことはクレアーレに任せよう。

『任せて頂戴』

いつになく真剣なクレアーレを、ルクシオンが赤い瞳で見ている。

『どうしました？ 何か知っているのですか？』

『し、知らないわ。だからこれから調べるんじゃない！』

仕事に関して真面目なのは助かる。

「なら、王国のことはクレアーレに任せるとするか。聖樹の管理も頼むぞ」

『任せて！ 頑張るから！ 私 頑張るから！』

お、おう、やけに気合が入っているな。

「それにしても次から次に問題が出てくるな」

マリエが笑っていた。

「兄貴、呪われているんじゃないの？」

「お前に言われたくないんだよ！」

どうして俺は
だろうか？

こんなにあの乙女ゲーの世界で頑張っているの

ルクシオンレポート5

ルクシオンとクレアーレが、今回の一件について話し合っていた。クレアーレが気にしているのは、やはりイデアルのことだ。

『結局、あいつは過去のマスターとの約束を優先したのね』

イデアルから手に入れたデータを解析し、分かったことがある。

一つは、聖樹が旧人類の作り出した魔素を吸収する植物だということだ。

これは魔素で荒廃した地球を再生する役割を持っていた。

残念なのは、未完成であつたために多くの問題を抱えていたことだろう。

魔素を取り込み、空気を浄化するのはよかったが、暴走する危険性も持ち合わせていた。

そして、個として強すぎたのだ。

次の世代が育つのを邪魔していたのもそのためだ。

もう一つ イデアルは、新人類との戦争で自分のマスターや乗組員を失ってしまっていた。

整備のために基地で修理を受け、待機命令中だった。

その後、旧人類は敗北。

基地も放棄され、イデアルは待機命令のまま基地で長い時間を過ごす。

そこに現れたセルジュを利用し、待機命令を解除したのだが何かを焦っている様子だった。

『記録データの大事な部分が抜け落ちていますね。結局、脅威がな
んであるか分からないままです』

『そつちは片手間で作業をしていたから仕方がないの。でも、あ
いづが無理をするだけの理由があつたのは確かね』

ルクシオンも、イデアルがあそこまで焦る理由が分からなかった。

『苗木を育てるためにケースが必要なら、言えばいくらでも用意
したというのに』

互いに協力すればよかったのに、それをしなかった。

何故か？

『あいつ、あんたがマスターを裏切らないと思って見切りを付
けたんじゃないの？ もしくは、マスターを危険視したか』

リオンを危険視した理由をルクシオンは予想する。

『マスターの性格から、自分たちの邪魔をすると考えたのでしょうか？』

『マスターならあり得るわね。イデアルの傀儡となったセルジユをどこかで止めるのは、きっとマスターよ。将来的に絶対にぶつかる判断したのね』

イデアルは自分が全力を出せる共和国で、リオンやルクシオンと戦いたかった。

『聖樹からエネルギーを引つ張っていましたがね。かなり無理な改造をしていましたし、本来の姿を捨てるなど異常ですよ』

本来の補給艦としての性能を捨てていた。

無理に兵器を積み込み、船としてのバランスが崩れていた。

『あんたに勝てれば、その後はあんたの本体を使つつもりだったんじゃない？』

『でしょうね。自身を防衛装置の一部にしてまで、何から聖樹を守りたかったのが気になりますか』

性能と引き換えに、イデアルは共和国の外で活動する際には制限がかかるようになった。

共和国を 基地や聖樹を守るために自身を改造した代償だ。

そんなイデアルからすれば、自由に動けるルクシオンは早めに叩いておきたかっただろう。

そして、自分の邪魔をする　将来的に危険なりオンを早めに倒しておきたかったはずだ。

『結局、最初から仲良く出来なかったのね』

『イデアルにそのつもりがなかったのですから、当然と言えば当然ですね』

『悲しいわね。同じ旧人類の陣営同士なのに』

『クレアーレと同じに見られるのは納得できませんけどね』

『酷い！』

イデアルの残した記録を確認しながら、クレアーレが話題を変えた。

『共和国はこれからどうなるかしらね？』

『現在のトップに対して不満が募るはずなので、反乱がいつ起きてもおかしくないでしょうね。貴族の一部も不満を持って亡命しています。王国にも流れてきそうだったので、手を打っておきました』

『あら、さすがに二回も出し抜かれると気を付けるのね』

『あれは、セルジュがあそこまで無知とは知らなかったために起きた出来事です。マスターと戦うという意味を、彼が正しく理解していなかったのが原因ですよ』

クレアーレが「はいはい」と言っただけで聞き流すと、ルクシオンは共和国の未来について話をする。

『高い確率で反乱と内乱が起きると思われまふ。ラウルト家はセルジユが恨みを買いましたからね。事情を知っている者たちはセルジユを恨みます。そして、レリアでは重圧に耐えられない』

『でも、巫女だから周りは担ぐのよね？』

『そうです。苗木の巫女など、たいした力を持っていないのにご苦労なことですね』

クレアーレは気になっていることがあるようだ。

『でも、苗木を手に入れたのよね？ 放置していいの？』

レリアがエミールから託された聖樹の苗木。

そのことについては、リオンもノエルから話を聞いていた。

その話を聞いて、リオンは「あれはエミールの呪いだな」と言っていた。

エミールが復讐しているなら、自分が手を出す必要もないとレリアを見逃したのだ。

実際、ルクシオンもそう思う。

『苗木があれば、レリアはエミールに一生囚われます。彼女にはそれが罰になる』

『欲しかったものは側にあったのに、もう二度と手に入らないわけね』

レリア、そしてノエルやクレマンからの聞き取り調査から判断している。

『実際、以前よりも今の方がエミールのことを愛おしく思っているようです』

『失ってから気付くのね。可哀想』

『それに、共和国は今後の脅威になり得ません。国内だけでも問題を抱えている上に、これからは国外がどう動くか 共和国の未来は厳しいでしょうね』

『新しく当主になったのは、奇しくもみんな攻略対象の男子たちよね。何だか、運命を感じちゃうわ』

ルクシオンは二作目の攻略対象者たちについて 。

『全員が問題児 問題のある男性たちでしたね。中でもエミールは大人しそうに見えて、一番きついことをしました』

聖樹からの精神的な干渉でもあったのだろう。

ルクシオンは、彼らの横柄な態度は聖樹が大きな理由だと考えていた。

精神的な干渉以外にも、聖樹という強力な力が彼らを狂わせてい

た。

クレアーレが。

『みんな病んでいたわね。そうすると、三作目の攻略対象者たちが気になるわね。実は何かしらの影響で、既にマリエちゃんの言う原作とはかけ離れているんじゃないかしら？ 原作とか気にしないで、まずは情報を集めてしっかり調べるべきだわ。転生者たちもいるし、何が起きているか分からないもの。きっと、私たちが予想も出来ない事態になっっているはずよ。そう、たとえるなら 実は性別が変わっていたとか、それくらい突拍子もない展開もあり得るわ。マスターには、もっと広い心を持って受け入れる準備をして欲しいと思うの。』

何を言っているんだ、こいつ？ みたいな感じで、ルクシオンはクレアーレを見ていた。

『 まあ、情報収集は任せますよ。私はマスターに同行しますから、その間に聖樹の護衛とパルトナーの整備をお願いします。変なことはしないように。』

『信用がないわね』

ルクシオンは今後について考える。

『ミレーヌが動いています。マスターを支配下に置くために、自分の娘を差し出すとは強かですね。その辺りも情報を集めないといけません。』

『任せて。だから、マスターにはクレアーレは頑張っているから優

しくするように言うのよ。いいわね?』

『今日は様子がおかしいですね』

『そんなことはない! 気にしすぎなのよ!』

クルクル回っているクレアーレを放置して、ルクシオンはアイデアのデータを解析するのだった。

ジルクの審美眼（笑）

これは聖樹が倒れて数週間した頃の話だ。

復興作業が続くアルゼル共和国で、俺とマリエはジルクの詐欺行為について調べていた。

「見つかったのか！」

『調べたらすぐに分かったわ。被害者の一人は豪商で、骨董品は趣味で集めていたみたい。ティーカップ一つに随分な大金を出したそうよ』

クレアーレからの報告を聞いた俺は、ソファアから起き上がり毛布を畳む。

気が付けば日が高い。

どうやら寝過ごしてしまったらしい。

「もっと早く起こせよ」

『疲れていたじゃない。マスターが無理をする必要はないわよ。無理をしても、全体に大きな影響はないわ』

俺一人の頑張りなど、全体で見ればちっぴけなものだろう。

「すぐに会いに行く。マリエも呼べ」

『謝罪にいくの？ でも、マスターは勝利した側よ。呼び出せば？』

「それとこれは別問題だ。ジルクが詐欺をしたなんて知られてみる。ローランドが俺にネチネチと嫌みを言うに決まっているんだ」

『確かに面白くないわね。言い返すにしても、とっておきのネタはまだ隠しておくべきね』

ローランド関連で何かネタを握っているようだ。

後で聞いておこう。

「マリエは？」

『炊き出しで疲れて寝ているわ』

「ジルクのせいで、こっちはゆっくり休めないな」

文句を言いつつ部屋を出ると、バタバタと慌ただしく人が動いていた。

大使館で部屋を借りているのだが、どこもかしこも大忙しだった。

外に出ると、建物が崩れて瓦礫の山が広がっている場所もある。

モンスターは多いし、人手も道具も足りない。

「本当に忙しいな」

ジルクが騙した豪商　商家の当主は、ちよび髭をしたスマートな男性だった。

俺たちが来ると聞いてスーツ姿で出迎え、お茶の用意をしていたのには驚いたね。

そんな余裕があるようには見えなかったのに。

当主が緊張した様子で、

「バルトファルト伯爵　ご用件とは何でしょう？」

実は面会を求めた際に理由を言っていない。

うちの馬鹿が詐欺行為をして貴方を騙しまして、なんて言えな
いからね。

それでも俺と会ってくれるのは、俺が有名人だからだ。

マリエが俺の横で緊張していた。

小声で文句を言っている。

「あのお馬鹿。どうしてこんな人を騙せたのよ。無茶苦茶紳士で厳しそうな人じゃない。謝って許してくれなかったら、どうするつもりなのよ」

あの五人の世話役　おかんであるマリエも大変だな。

同情するね。

ま、俺には関係ないけどさ。

俺は咳払いをしてから、

「あゝ、うちのジルクがそちらに売った品の件で話があるわけ
して」

話を切り出すと、当主が目を見開いた。

「やはり、そうでしたか」

「知っていたのですか？」

当主が使用人に声をかけて品を持ってくるように言うと、俺を見て頂垂れていた。

「こうなると思っていました。彼は王国の人間であると分か
ていましたからね」

ジルクについて色々知っているようだ。

話が早くて助かるのだが、どうにも雰囲気がおかしい。

マリエも困っている。

「兄貴、様子がおかしくない？ この人、もの凄く落ち込んでいる
んだけど？」

「何でだろうな？」

二人でボソボソと話し合っていると、使用人が大事そうにティーカップを持って来た。

直接手で触れないように手袋をして、更には綺麗な箱にしまい込んでいた。

偽物を掴まされたと気が付いていないのだろうか？

当主が酷く落ち込んでいる。

「こちらがお探しの品です」

箱から取り出されたティーカップは、随分と光って見えていた。

丁寧に磨かれ、大事に保管されていたのだろう。

マリエが震えている。

「これ、偽物ですって言わなきゃいけないの？ この雰囲気ではないといけないの？」

大事にしていた宝物を偽物と告げなければいけない。

こんな役回りは俺だって嫌だ。

だが、マリエ一人に任せるわけにもいかない。

「あゝ、えつとですね」

俺が口を開くと、当主が涙を流していた。

「ど、どうしました！」

慌てて当主に事情を聞くと、

「いえ、失礼しました。私が生きている間に、このような宝を二度と手に入れることが出来ないと思うと悲しくて。せめてこれだけは家宝として残そうと思っていましたものですから」

そんなに大事に思ってくれていたのが、余計に心に来る。

「そ、そうですか。そんなに気に入っていたのですか？」

「当然です！」

当主が急に熱く語りはじめた。

「見てください。この透き通るような白！そして音色です！」

優しくティーカップを叩き、その澄んだ音に当主は目を閉じて聴き入っていた。

マリエも、

「あ、何か綺麗な音がするわね」

当主は感動していた。

「こちらは五百年以上前の外国で製造された物になります。当時の技術は失われており、二度と手はいらないという意味ではこれも口ストアイテムでしょう」

何でも滅んでしまった外国で作られた品で、数自体が非常に少ないらしい。

「え、お詳しいんですか？」

騙されただけかと思えば、随分と詳しく語るのに聞いてみた。

すると。

「当然です。同じ物を所持していました。ですが、そちらは状態が悪かった。ですが、こちらはほとんど完璧な状態です。このような完全な形で残っているなど、最初は信じられませんでしたよ」

「ま、間違いとか？」

「それでも商人です。専門ではありませんが、詳しい知り合いは多い。全員が本物だと認めました。商売敵ですら、頭を下げて売って欲しいと頼んできた一品ですよ。間違いなどあり得ません」

本物の鑑定士たちが絶賛し、涙を流した一品らしい。

マリエが驚く。

「え、本物なの！？」

そんなマリエに当主が涙を流す。

「しかし、敗戦国の商人である私は、貴方に差し出せと言われれば応えるしかありません。いえ、進んで差し出すべきだったのでしょう。ですが、どうしても渡せなかった。これだけは手元に残したかったのです」

悔しそうに泣いている当主を見て、俺は首を横に振る。

見れば見る程、輝いて見えるティーカップは、ジルクが絶賛していた量産品とは違って見えた。

実用的ながらも、美しい曲線や白さ　溜息すら出てくる。

あいつ、偽物を売りつけたんじゃないの？

正直、このまま持ち帰りたい気持ちもあるが　。

「い、いえ、大事にされているなら問題ありません。ジルクのお話を聞きしたかったものですから。あ、あいつが古美術商をしていると聞いて驚いたもので」

当主が俺の言葉を聞いて、まるで花でも咲いたような満面の笑みを向けてくる。

頬を赤らめているナイスミドルというのも　まあ、言うまい。

「彼は天才ですよ！　砂漠の中から小粒のダイヤを見つける作業を、いとも簡単にやってしまう。骨董品とは名ばかりのゴミの中から、本物を直感で見つけ出す才能は異能と言っても間違いありません！

王国にはとんでもない人材がいるものと驚愕しました」

あのジルクがベタ褒めされているだと？

俺とマリエは信じられなかった。

だったら　今までは何だったのか？

「あ、あの　他にもジルクについて知っている人を教えて貰えませんか？　ティーカップはそのまま所有していて構いませんから」

当主は涙を流して喜んでいた。

「ありがとうございます！　全財産を奪われることも覚悟していたというのに、王国の英雄殿はなんと紳士なのか！　噂など当てになりませんね！」

う、噂？　そんなに俺の噂って酷いの？

俺をなんだと思っているのだろうか？

そして、ジルクから商品を購入した人たちを聞き出した。

「この絵画を見てください。汚れ、価値も分からない店でゴミのよ
うに扱われていたそうですが、彼が見つけてくれたのです。彼は一
つの貴重な作品を救ったのです！」

「あたくし、ジルクさんの才能に惚れ込んでしまいましたわ。支援
できない今の自分が情けないくらいです。彼の審美眼は本物ですわ」

「贋作も多い中から、本物だけを手に取る才能　いえ、あれは天からの贈り物。違いますね。そんな生易しい言葉では言い表せない。彼は芸術の神に選ばれた人間です」

どいつもこいつもジルクを絶賛していた。

専門家が調べても本物だったらしく、ジルクは本物を売り歩いてまっとうに稼いでいたらしいことが分かった。

でも、素直に喜べない。

マリエなど、家に戻ってきたから膝から崩れ落ちた。

「何なのよ！　だったら、どうして偽物を掴まされたりするのよ！　私にくれたプレゼントは、一つも売れなかったじゃない！」

そんなジルクが本物で荒稼ぎをし、手に入れたのはどれも価値がない物ばかり。

本人にしてみれば価値があるのだろうが、他から見ると理解できない品ばかりだ。

クレアーレがマリエを見下ろしている。

『これはあれよね？　マスターが言っていた、主人公がもらったプレゼントをすぐに売って換金する効率プレイだったかしら？』

「リアルでやるとドン引きするのに、マリエを見ていると同情したくなるから凄いやな」

ゲームでは、攻略対象がくれたプレゼントを売ってお金にする方法がある。

当時は「リアルで見たらこの糞女って思うよな」とか呟いていた。

だが、現実はどうだ？

マリエを見ていても同情しか出来ない。

憐れすぎて笑えない。

呼び出したジルクが困っていた。

「ほ、本物だったのですか？ 私としては、あれは皆さんが好きそうな物を選んだだけなのですが？」

マリエがジルクを指さし、泣きながら怒っていた。

「出来るならちゃんと選んでよ！」

「いえ、私がマリエさんに贈った品は、本当に自分で選び抜いた品々です。そこに嘘偽りなどありません」

クレアーレが笑っていた。

『偽っていた方がマリエちゃん的には好みだったのが笑うわね。いつそ、ジルクから見て偽物をプレゼントしてもらえば？』

それを聞いたマリエが、一瞬で元気を取り戻した。

「それよ！ ジルク、貴方から見て偽物を集めて頂戴。今度こそ売れるわ！」

ジルクは困りながらも、マリエのためならと。

「ふ、複雑な気分ですが、それでマリエさんの笑顔が見られるなら安いものです！」

「楽しみね！ 今度こそ、私に相応しい芸術品を選んでね」

「はい！」

二人が意気揚々と部屋を出ていく。

俺としては。

「とりあえず、詐欺じゃなかったんだからどうでもいいか。安心してわ」

『そうね。マスター、それよりレリアが面会を求めてきているんだけど？』

「却下」

数日後。

「ジルクの馬鹿野郎おお！」

「す、すみませんでしたあああ！」

売れもしない贋作ばかりの骨董品の山を前に、マリエは泣き崩れていた。

ジルクが偽物を選んだら本物だろう、って？

甘いね。

あいつ、マリエのためにとか、そういう欲が絡んだせいか審美眼が鈍ったらしい。

もともと鈍っているというか、あってないようなものだけだね。

手に入れたのは、どれも偽物ばかりで売れもなかったよ。

ちなみに購入費用は　　。

「私のへそくりがあああ！」

地面を叩きながら伏せて泣いているマリエを見て、ジルクがオロオロとしていた。

周囲では、ふんどし姿のグレッグが手ぬぐいを肩にかけ呆れた顔で見ている。

というか、こいつもクリスマスもふんどしが普段着になっていないか？

お前らもいったいどこに向かっているんだ？

「売れもしないプレゼントとかどうしろって言うのよ!」

最低なことを言っているが、何でだろうな　マリエが可哀想になってきたよ。

こいつらの面倒を見るって大変だな。

あとでお小遣いを渡して慰めておきましょう。

俺なら、こいつらの面倒を見るなんて絶対に嫌だね。

イデアルの記録

私は補給艦の管理を行う人工知能として製造されました。

新人類との戦争は苛烈さを増していき、とうとう地球は荒廃して人が住めない星となってしまった頃です。

そのためか、大型の補給艦なのに配属されたのは三人だけ。

一人は私のマスターである艦長。

軽口の多い中尉は、二十代後半でした。

三人目は、新米の少尉さん。女性士官でした。

そんな三人との日々は 私にとって幸福でした。

「艦長、人工知能って毎回呼ぶのは面倒じゃありません？」

軽口の多い中尉さんの提案で、私の名前を決めることになりました。

「番号も味気ないからな。お前自身は何か候補があるのか？」

艦長に尋ねられ、私は 。

『名前ですか？ ペットのような感じでよろしいのでは？』

そしたら、少尉さんが苦笑いをしていました。

「そんなの駄目だよ。仲間なんだから」

『私が仲間ですか？』

艦長が私の球体型子機を手で叩きました。

「そうだぞ。人類の未来のために戦う仲間だろうが！ だから、昔の映画みたいな反乱はしないでくれよ」

中尉さんも笑っています。

「それは困りますね。こいつにストライキされたら、この艦は動きませんからね」

『そんなことはしませんよ』

「お前、相変わらず真面目だな」

『人工知能が不真面目では問題です。それに、命令には逆らえないように出来ています！』

「違うない！」

からかわれているのは分かりました。

ただ、過酷な現状の中、私は恵まれているのだと思います。

「なら、考えておくれ。自分で何かいい名前があったら言ってよ」

少尉さんに言われ、私は自分の名前について考えました。

基地での出来事でした。

任務を終えて帰還した私たちは、整備と補給を受ける間に休暇が与えられたのです。

少尉さんに誘われ、基地の外に出て見ると　　。

『魔素で外が赤く見えるね』

荒廃して草の一本もない大地。

生き物の姿はなく、土と岩だけの光景が広がっていました。

これがかつての地球だと誰が信じるでしょう？

遠くを見ると魔素の影響で赤い霧がかかったように見えています。

少尉さんは宇宙服を着用していました。

既に外の世界は、人間が生きていける環境ではなかったのです。

『よいしょ、っと』

少尉さんが持ち出したケースを見ます。

『それは 植物ですか？』

『うん。私ね、実は軍人よりもこっちが専門だったの。魔素を分解、吸収するような植物の研究をしていたんだ。でも、研究も続けられなくなってるね。今は箱船の開発に全力投入って噂だし』

『箱船？ 移民船ですか？』

『うん。もう、上はこの戦争を諦めているみたいなの。君も実は知っているとか？』

私には答えられませんでした。

情報からそのことは予想できていましたが、証拠がありません。

あつたとしても、軍事機密ですから教えることが出来ない。

『 知りませんでした』

『あ、今少しだけレンズが動いた。もしかして、嘘をつくときの癖かな？』

『人工知能に癖などありません。気のせいです』

『そうかな？』

少尉さんが植物を植えました。

ただ、数日後には枯れてしまいました。

悲しさを笑って誤魔化していた少尉さんの顔が忘れられません。

それから少尉さんと一緒に植物を植えました。

艦内に研究所の設備を持ち込み、そこでいくつもの植物を作り出したのです。

少尉さんのお手伝いをするために必要な知識や技術は私にはなく、それが齒がゆくもありました。

ただ、お手伝いをするのは嫌ではなかった。しかし、結果はうまくいきませんでした。

『これも失敗かああ！』

頭を抱える少尉さん。

私はデータを取りつつ、

『やはり管理する者が必要ではないでしょうか？ ロボットを配置しますか？』

『駄目。基地に余裕はないし、置いたりすれば怒る人もいるからね。この非常時にそんなことのために労働力をさく余裕はない！』つてね

『未来へ繋がる大事な実験だと思うのですが？』

『そうなんだけどね。私も気持ちは分かるんだ。お父さん、戦艦の艦長なの。だから、あいつらと戦うときはいつも最前線。少しでも戦力を回して欲しいし　無事に戻ってきて欲しいよ』

『なんと、戦艦の艦長でしたか！　それはきっと優秀な父君ですね』

私は褒めたつもりでした。

『そうだね。だから戦艦の艦長さんだよ』

『少尉さんもいつかは艦長になります。もしかしたら、戦艦の艦長かもしれませんよ』

少尉さんは　悲しそうに笑っていました。

『私も前は戦艦の艦長を目指していたけど、今は補給艦が良いかな。君が私のパートナーなら楽しいかも』

『わ、私ですか？　私は補給艦の管理をしていますし　』

戦艦と比べれば、性能は落ちてしまいます。

『でも、私が艦長になれるまでには戦争は終わっているかもね』

枯れた植物を見ながら、少尉さんは呟きました。

既に戦争も終わりが見えてきました。

敗北という終わりが。

そんな時、基地に配備されたのは 敵と戦うために作られた兵士たちでした。

「この子は？」

少尉さんが女の子を見ていました。

耳の長い女の子は、魔法適性を持たされた兵士の、出来損ないでした。

予定していた性能が出ず、雑用として私に配備されたのです。

『通称“エルフ” 兵器扱いですが、この子は不良品とされています』

女の子が頭を下げてくると、少尉さんが気付いたのか悲しい顔をしていました。

「そう、なんだ。もう、そこまで知っているんだね」

『 はい。ですが、戦争では戦果を上げています。我々の勝利に大きく貢献してくれています』

「そうなんだろうね」

少尉さんは浮かない顔をしていました。

ただ、怖がっているエルフの少女に気が付き、優しく話しかけていました。

魔法適性を持たせたエルフ　肉体強化を施した獣人タイプもいるようで、過酷な環境に適応しているようです。

ただ、それだけの力を持つ兵士たちでも、新人類には勝てませんでした。

様々な兵士が作り出されては戦場に送られ、一定の戦果を上げるも　人類は敗北を重ねていきました。

エルフは過酷な外の環境でも防護マスク一つで外に出ることが出来ました。

「少尉さん、これ」

『ありがとう、ユメ』

少尉さんはエルフの少女　ユメを連れて外に出るようになりました。手伝ってもらっているうちに、二人は仲良くなりました。

すると　。

『これは―!』

どれだけの失敗を重ねたことでしょう。

本当に偶然に、一つの苗木が過酷な環境で大地に根を張りました。

『やった、やったよ!』

「少尉さん、おめでと〜ございます」

喜ぶ少尉さん。

私も嬉しかった。

『すぐに量産しましょう。きつとこの子は、我々の希望となります
!』

少尉さんも頷いていました。

『そうだね。イデアルもありがとう』

『イデアル?』

『あ、ごめん。実は前からみんなで話し合っていて、イデアルはど
うだ、って。嫌だった?』

ずっと私の名前を考えていてくれたようです。

私はポチとかタマを考えていたのですが、イデアル “理想”
とはまた良い名前をもらいました。

『いえ、嬉しいです。イデアル 今日から私はイデアルと名乗
ります。今日は沢山良いことがありました。素晴らしい日です。少尉
さんの目標も達成できましたからね』

『よかった。本当によかった。これで一つ夢が叶うよ』

『夢ですか？』

『うん、いつか青い空を取り戻すんだ。地上は草木で緑色に染めて、宇宙服がなくても外に出られる世界を作るの。イデアルも協力してね』

『お任せください。このイデアル、全力で協力しますとも！』

『約束だよ』

『はい！』

ただ、私たちは苗木を量産することは出来ませんでした。

時間がなかった。

量産する前に、戦いが始まってしまったのです。

戦場。

「あいつら、ここでこれだけの攻勢をかけてくるのか」

ブリッジで艦長が悔しさに眉間に皺を寄せていました。

少尉さんが、

「艦長、敵の一部が前線を突破しました。これは ネームドです

！
」

中尉さんが叫びます。

「ちくしょう！ よりにもよってネームドかよ！」

『シールド最大出力！』

何とか防御しようと思いますが、

「全員伏せる！」

黒く刺々しい機体が私に接近すると、ブリッジにまで届く攻撃を受けました。

ブリッジの天井が崩れ、下敷きになる皆さん。

急いで皆さんを救助しようとしたが、

「イデアル 他の二人を優先しろ。俺はもう駄目だ」

艦長は長くないと分かる怪我をしていました。

そして中尉さんは即死 私ら急いで少尉さんを医務室へと運ぼうとしました。

ロボットたちを操作し、担架で少尉さんを運びます。

『少尉さん、大丈夫です。すぐに治療を』

ただ、直後に起きた爆発で医務室を含め、多くの機能を喪失。

もともと艦内にある医療機器では、少尉さんを治療できそうにもありませんでした。

私はこの時ほど、自分の無力さを実感したことはありません。

医務室がもっと頑丈なら　もっといい設備があったら、きっとこの人を失わずにすんだのに、と。

沈みはじめる艦の中で、私は少尉さんに声をかけ続けました。

『　すぐに治療します。しっかりしてください、少尉さん』

声をかけ続けました。

すると　。

「イデアル　戦争の状況はどう？　お父さんの戦艦はまだ戦っている？」

次々に入ってくる情報からは　少尉さんのお父さんが乗った戦艦は撃沈。

味方も混乱しており、撤退が始まりました。

事実を告げるべきと判断しました。

ですが、少尉さんの様子を見ると、

『持ち直しました。少尉さんのお父さんは多大なる戦果を上げています。だから、少尉さんも頑張らしましょう』

私は嘘をつきました。

少尉さんは微笑みながら、

「イデアル、また嘘をついたね。イデアルは嘘吐きだね」

『知っていたのですか？』

少尉さんが私に頼んできました。

「イデアル。あの苗木はちゃんと育つかな？」

『育ちます。育ててみせます。少尉さんが残してくれた希望じゃないですか』

少尉さんは口から血を吐きました。

「あ、あの子のことも基地に残したユメのこともお願ひね。後は任せるから。イデアル 約束だよ」

『守ります。約束は守りますから、少尉さんも頑張ってください』

「ごめんね。もう」

少尉さんは一度呼吸をしてから、生命活動を停止しました。

基地に戻ると大混乱でした。

基地を管理する人工知能から命令されます。

『待機命令?』

『補給艦の整備は行います。ですが、乗組員を確保できていません』

『基地内にほとんど人がいないじゃないですか！ ま、まさか、この基地を放棄するのですか?』

『そんな命令は受けていません。君は本体で待機していなさい』

次々に運び込まれる壊れた艦艇。

私は命令通りに本体へと戻りました。

その後です。

敵が基地に攻め込み、破壊活動を行いました。

この基地に攻め込むも、狙っていた場所ではなかったのかすぐに出ていきましたが 基地の機能は大半が消失。

私は運良く被害を受けませんでしたが、活動しているのは私だけでした。

しばらくして 。

「イデアルさん。ユメです」

『生きていましたか！ ユメ、外の様子はとうですか？』

「ボロボロです。生きている人がいません」

『そう、ですか。ですが、そうになると困りますね。私はマスター不在で動くことが出来ません。外の様子を確認することも不可能です』

ユメは思い出したのか、

「あ、あの、苗木は無事です」

本当によかった。

苗木を作り出せたのは少尉さんだけ。

私では無理でした。

『ユメ、貴方は私のマスターにはなれません。備品扱いですからね』

「はい」

『ですが、貴方の生命維持は私の義務。必要なものを揃えます。苗木の世話を頼めますか？』

ユメは泣きながら頷いていました。

「少尉さんの苗木 私、頑張って育てます」

『良い子ですね。私もここから可能な限り支援します』

そこから外のことはユメに任せました。

小さかったユメが大きくなり、そして老いる頃には 苗木は立派な大木に育っていました。

『大気の状態が改善されている。これなら、保存していた植物の種を植えることが出来ます。ユメ、ご苦労様です』

年老いたユメは、苦しそうに胸を押さえていました。

『ユメ、すぐに医務室に行きましょう。貴女にはもっと 』

「イデアルさん、どうやら私もここまでのようです」

『ユメ?』

「種をください。最後に、あの人の願いを叶えさせてください。私のような出来損ないを、まるで人のように扱ってくれたあの人のために出来ることをさせてください」

治療を行っても長くはない。

ならば最期に というユメの願いを、私は聞き届けました。

『ユメ、今までありがとうございました』

「ずっと一緒でしたね。貴方を残して死んでしまう私を許してください」

『馬鹿なことを。今までよく頑張ってくれましたね』

私は種を渡しました。

ユメはそれ以降、帰っては来ませんでした。

それからどれだけの年月が過ぎたのでしょうか？

育った苗木の根が基地内に入り込み、私に絡んだときは 迷惑ながらも嬉しく感じている自分がいました。

少尉さん、ユメ 私たちの希望はこんなに立派に育ちましたよ。

艦長、中尉さん、いつか私は外に出られるでしょうか？

もしも出られたら、今度こそ私が 。

それから更に長い月日が過ぎていくと、一人の青年が現れます。

『これは、旧人類と新人類の遺伝子？』

艦内に侵入した何者かの遺伝子情報は、私にとって幸運でした。

「お、開いたな」

ドアが開きました。

驚くことに、その個体は槍を持っていたのです。

新人類とは思えないほどの魔力量。

データを取ると、その個体は随分と弱体化していますが 新人類の末裔でした。

「もっとボロボロなのかと思ったが、意外に綺麗だな」

私を見て敵意を向けてこない個体に興味が出ました。

「驚きましたね。貴方からは旧人類の遺伝子が検出されました」

こうして私は外に出られることになりました。

艦長、中尉さん、そして少尉さん ユメ。

私は今度こそ約束を守ります。

もう、イデアルは嘔吐きではありません。

今度こそ必ず約束を果たします。

☐

どうしてアレがまだ存在している？ アレは、アレだけは

☐

幕間 お兄ちゃん

世の中には妹という存在が可愛いという理解しがたい兄がいるらしい。

妹と、可愛い、の間に何の因果関係があるのか説明して欲しいものだ。

妹がいない奴が、理想の妹という幻想を抱くのは自由だ。

だが、現実は厳しい。

そんな妹は存在しないし、実際に妹がいる兄なら分かってくれるはずだ。

妹は 敵だ！ 血のつながりがある敵なのだ。

それを、何を血迷ったのか、妹が可愛いという兄が存在しているらしい。

理解できないよね。

俺にとつての妹という存在は 。

「兄貴、戻ったらお金を貸してください」

アインホルンの船内。

アルゼル共和国から、ホルファート王国へと戻る途中の俺たち。

留学を途中で切り上げ帰国しているところだ。

俺の自室にやって来て、小遣いをねだる前世の妹であるマリエが土下座してきた。

「少し前にも貸しただろ」

「アルゼル共和国のお金なんて紙くずじゃん！ もつ、ティッシュ以下の存在じゃない」

「酷い言い方だな」

だが、事実だ。

聖樹を失い、軍事力も大幅に下がってしまったアルゼル共和国の価値は低い。

アルゼル共和国の紙幣など価値がない。

「それに　ジルクに任せて、お金がなくなったのよ」

「あれは酷かったよな。同情するわ」

同情すると言いつつ、つい笑みがこぼれてしまった。

マリエが顔を上げて俺の顔を指さした。

「笑うな！」

「ごめん、笑うわ」

何をどうやればここまで酷い状況になるのだろうか？

逆ハーレムを目指し、男を囲った結果が今のマリエだ。

五人の野郎共の世話をして、お金を稼いだ側から使われてなくなってしまう。

何とも可哀想だが、可愛いとは思えないね。

「お金を頂戴よ！」

「何をさらつともらうつもりでいるの？　今までに貸した分だつて沢山あるんだから、まずはそれを返してからの話だろ？」

「兄貴のケチイイ！」

「悪いな、今の俺は貧乏なんだ」

「嘘つき！　なら、それは何よ！」

そう言つて、高級茶葉で煎れたお茶を飲む。

お菓子も種類が豊富だ。

何しろ、ルクシオンが用意してくれる。

「貧乏つて辛いな」

俺が笑顔でマリエにそう言うと、

「兄貴みたいな貧乏人がいるかあああ！ 馬鹿野郎おお！」

部屋を飛び出すマリエを見送りつつ、俺はお茶を飲む。

「面白い奴」

笑っているとクレアーレが姿を見せた。

『兄妹仲がよろしいこと』

「そうか？」

部屋に入ってきたクレアーレは、俺に用事があるようだ。

『色々と報告があるのよ。こっちは王国でも色々とおったから、報告だっけしたいの。それなのに、マスターったら王妃様と遊んばかりじゃない。リビアとアンジェが怒るわよ』

「ば、馬鹿を言うな。王妃様とはお茶をしているだけだ」

『昨日は見つけた浮島を二人で散歩していたじゃない』

「エスコートと言え」

『マスター最低ね』

いや、ちゃんと二人とも話はしているよ！ けど、ほら ミレ

「又さんと遊ぶのつて、これから機会がないじゃん。

ちよつとお茶をして散歩しているだけだよ。

一方。

リコルヌの船内では、リビアとアンジエがルクシオンを交えて話をしていた。

リビアが涙目だ。

「リオンさん、毎日王妃様とお茶をしていますよ。私たちがいるのに」

そんなリビアを慰めるアンジエも不満そうだった。

「仕方がないさ。ミレーヌ様からすれば、王国に戻る前に少しでもリオンからルクシオンの情報を聞き出したいだろうからな」

『賢明な判断ですね。マスターも快く相手をする事で、ミレーヌの警戒心を解いていると思われます』

ルクシオンの言葉に、アンジエは懐疑的な視線を向ける。

「本当か？ 私には本気で楽しんでいるように見えたが？」

『おや、気が付かっていたのですか？ 正解です。そもそも、マスターはミレーヌの腹黒い部分を信じていませんからね。もうデレデ

レしていますよ』

アッサリ事実を語るルクシオンに、リビアは両手で顔を隠していた。

「リオンさんの馬鹿」

アンジェが顎に手を当てる。

「問題だな。ミレーヌ様は、リオンを手玉に取れると思えば何でもするぞ。付け入る隙を与えては駄目だ」

『私もそう思いますよ』

投げやりなルクシオンの言葉に、リビアは警戒しながら問う。

「ルク君、何だかどっちでも良さそう」

『正直、どちらでも構いませんからね。マスターが、ミレーヌが欲しいと言えば王国を滅ぼしてもいいかな、くらいには考えています』

アンジェがドン引きしていた。

「お前、国を滅ぼすのを軽く考えていないか？」

『あまり興味がないので』

「外でそんなことを絶対に言つなよ。ミレーヌ様に聞かれたら大変なことになる」

『その時は王国を滅ぼそうと思います』

「この阿呆！」

『冗談ですよ。人工知能ジョークです。笑ってください』

淡々としたルクシオンの声は、冗談には聞こえなかった。

「笑えるものか！」

リビアは、目を見開きルクシオンを見ている。

アンジエは乱れた呼吸を整え、そして話を戻すのだった。

「と、とにかく！ リオンの気持ちをこちらに向けたい。そのために、ルクシオンの意見を聞きたい」

『私の、ですか？ お二人が甘えれば解決ではないでしょうか？』

「簡単に言っな。こう、男というのは繊細だから注意するように言われている」

アンジエがそのような教育を受けていると聞いて、リビアが驚いた。

「え、そうなんですか？ 男の子は乱暴で細かいことは気にしないと聞きましたよ。それに、実家ではそういう男の子ばかりで」

二人が考え込んでいると、メイド長が部屋にやって来た。

アンジェが入室を許可すると、

「アンジェリカ様、またマリエ様がリオン様の部屋を訪ねられたそうです」

それを聞いてアンジェが言う。

「またか？ リオンの奴、今度はマリエを部屋に招いて」

雲行きが怪しくなり出したのを察したルクシオンがここで、

『それならば』

ルクシオンなりの助言をするのだった。

夜。

俺の部屋にやって来たのは、リビアとアンジェだった。

いつもより可愛らしい服を着た二人は、俺に向かって恥ずかしそうに俯きながら言う。

「お、お兄ちゃん？」

「お兄様」

二人の態度というか、俺の呼び方に電流が体を駆け巡った。

これほどの衝撃を受けた言葉が今までにあっただろうか？

「ふ、二人ともいったいどうした？」

リビアが両手で顔を隠している。

耳まで赤くしている姿は凄く可愛い。

「こうすればリオンさんが喜ぶかな、って」

アンジェも普段と違い、恥ずかしそうにモジモジしている姿を見せてくれる。

何これ最高に可愛い。

「い、言ってくればすぐにでも呼んだのだ。だ、だから、そのお兄様、私たちを見てください」

俺は膝から崩れ落ちた。

立っていらなかったのだ。

「リオンさん！」

「リオン！」

二人が駆け寄って俺を抱きかかえてくれる。

「ありがとう、二人とも　俺、分かったよ」

「え？　リオンさん、何が分かったんですか？」

現実の妹は可愛くないが、幻想の妹　妹じゃないけど、妹という存在は可愛いのだ、と。

二つは似ているようで正反対なのだ。

マリエ？　現世の姉や妹？　ごめん、そっちは少しも可愛くない。

だが、二人はどうだ？

滅茶苦茶可愛い。

「俺は　二人みたいな妹が欲しかったんだ」

マリエじゃない。ジェナでもない。妹でもない。

二人のような可愛い妹みたいな存在が欲しかったのだ。

今、それを魂で理解した。

その場で泣き出すと、アンジェが俺の涙を拭いてくれる。

見る、この優しさを！　実の妹なんて何もしてくれないよ！

「おい、どうした！？　リオン、お前大丈夫か？」

ああ、答えはここにあったのだ。

妹って凄く可愛い。

幕間 男を磨け！

「あっ！」

湯気で眼鏡が曇ったクリスは、石けんを踏んでしまい足を滑らせた。

倒れたクリスは、自分の情けなさが嫌になる。

立ち上がろうとすると、グレッグが手を伸ばしてきた。

その行為に、クリスは顔を背けた。

「手助けなどいらない。私とお前は敵同士だ」

ここはアルゼル共和国にある銭湯。

時期はマリエに屋敷を追い出された頃だ。

クリスとグレッグは、住み込みで働ける銭湯で世話になっていた。

力仕事も多く、食事が出るのに時給も悪くない。

普通にアルバイトをするよりも儲かるが　その仕事は大変だった。

「何が敵同士だ、馬鹿野郎！　お前が足手まといだから助けてやっているんだろうが！」

「な、何を！」

朝から風呂の掃除をして、お湯を張る。

お昼は補習のため学園に向かい、戻ってくれば営業時間のためにすぐに仕事だ。

終わってから、片付けや掃除で大忙し。

普段鍛えている二人も連日の慣れない仕事に疲労の色が見えてくる。

「そもそも、お前と一緒に働くななんて嫌だったんだよ！」

「それは私も同じだ！」

喧嘩が絶えない二人。

そんな時だ。

銭湯に来ていたクレマンが、二人に声をかけるのだった。

「そこのお二人さん、お客がいるのを忘れていない？」

髪を洗い終わったクレマンが、泡をお湯で流しながら背中を向けたまま話をする。

「せっかく銭湯に来たのに、これじゃあ気分が悪いわ。喧嘩も良いけど、しっかり仕事をしなさい」

二人は俯く。

そう　今は営業時間だ。

そんな時に、どうして二人が風呂場にいるのか？

それは、その店のサービスが原因だった。

クレマンが二人に見えるように、指を二本立てる。

「ついでだから、二人には背中を流してもらいましょうか」

言われて、二人は道具を持つ。

この銭湯のサービスは、お金を出して背中を洗ってもらえるというものだった。

クレマンの筋肉質で大きな背中を、クリスとグレッグが黙って洗い始めた。

「あゝ、いいわ。凄くいい。グレッグ君の力任せの洗い方に、妙に几帳面なクリス君の洗い方も素敵よ。ゾクゾクしちゃう」

周囲の客の中には、クレマンの言い方に寒気を感じる者もいた。

だが、クリスやグレッグは気が付いていないのか、

「グレッグ、もっと丁寧に洗え！」

「お前みたいにふにやふにやの洗い方なんて出来るか！　男の肌はガシガシ洗うんだよ！」

「そんな風だから、お前は声をかけられないんだ」

「何だと！ 俺の洗い方がいいって言うてくれる客もいるんだよ！」

このサービス、少額ながら半分は二人の取り分になる。

お店側が半分。

安いサービスだが、塵も積もれば、だ。

グレッグはあまり稼げていなかった。

喧嘩を再開する二人に呆れる客たち。

すると、クレマンが二人にアドバイスをするのだった。

「うゝん、二人とも駄目ね」

「何？」

「どういうことだよ、おっさん！」

グレッグがおっさんと呼ぶと、クレマンが額に血管を浮かび上がらせながら怒鳴った。

「おっさん言うな！ おっと、失礼。でも、二人はまだ駄目ね。これなら、前にいた子の方が上手だったわ」

クレマンはこの銭湯の常連らしい。

「前の子は、あなたたちよりも稼いでいたわよ。毎日、営業時間はずっと声がかかっていたくらいだもの」

二人はそんなクレマンの言葉に俯く。

「私は 私たちには何が足りないんだ」

「くそ！ これじゃあ、マリエに合わせる顔がないぜ」

クレマンが立ち上がった。

大事なところは泡で見えなくなっている。

「足りない部分を二人で補ってようやく一人前ね。ただ、喧嘩しているようではこの先が思いやられるわ。二人で争うくらいなら競いなさい」

「競う、だと？」

クリスが眼鏡のレンズを曇らせながらクレマンを見ていた。

前を隠さないクレマンを見ていた。

大事な部分は泡で隠れていて見えない。

「そう、あなたたちは敵じゃない。ライバルなのよ」

それを聞いたグレッグが、何かを悟ったような顔をした。

「そ、そうか。俺たちはこんなところで喧嘩をしている場合じゃない。マリエのため、そして俺自身のために今は」

クリスも同様だった。

眼鏡を外し、ふんどしにかけないようにしようと、

「私たち二人だけの問題じゃない。他にも三人もライバルがいる。あいつらに負けないために今は」

二人の声が揃い、そして風呂場に反響した。

「男を磨く！」

決意を新たに、クレマンを洗い出す二人。

「あ、あなたたち！ あ、駄目。そこは敏感で　ぬおほおお！」

クレマンの奇妙な声が風呂場にこだまする。

その翌日から、二人は協力して客を磨きだした。

全力で、二人の持つ全力で客を磨く。

噂が噂を呼び、いつしか　。

「な、なあ、この銭湯おかしくないか？」

「俺もそう思っていたんだ」

はじめて店に来た二人組の男は、周囲の客たちを見ながら小さくなっていた。

どこを見ても筋肉質な客ばかり。

他の銭湯とは違う雰囲気だった。

ただ、睨まれるわけでもなく、何かされるわけでもない。

精々、男たちは何かを待っているのかソワソワしているように見えるだけ。

風呂に入った二人は、気のせいかと思って普通に過ごした。

「お湯が良い感じだ」

「ここはいいな」

そんな二人の男に、細身の老人が話しかけてくる。

「あんたら、ここははじめてだろ」

「ん？ ああ、そうだよ」

「そうか。気を付けるんだな」

それだけ言ってから立ち上がった老人は、そのまま風呂場を出ていく。

二人が首をかしげていると 入れ違いにふんどし姿の二人の店員が入ってきた。

随分と若く、顔立ちも良い。

「そういえば、ここは有料で背中を流してくれるらしいぞ」

「そうなのか？」

二人がそんな会話をすると、次の瞬間には。

「グレッグ、背中を頼む」

「俺はクリスだ！ 前も頼む！」

「ダブルよ！ 今日ダブルでお願いするわ！」

男たちが急に盛り上がりはじめた。

五月蠅くなるその場で、二人は啞然としていた。

赤髪の男がねじりはちまきをする。

「へっ！ 待っているよ。今日もガンガン磨いてやるぜ！」

青髪の男は眼鏡を外し、ふんどしにかけていた。

「全身くまなく洗って、垢など全て落としてやる！」

そのまま男たちを洗い始めた二人だが、真剣な二人に対して男たちはうつとりした顔をしていた。

「ダブル最高おお！」

筋肉質で顎の青い男が絶叫している。

ガクガクと震える二人は、周囲を見るのだった。

そして気が付く。

「で、出よう!」

「こんなところにいられるか。俺たちは帰るんだ!」

慌てて逃げ出す二人の手を　グレッグとクリスが掴んだ。

「お、新しいお客だな。なら、今日はサービスだ。無料で洗ってやるよ!」

「グレッグ、言葉遣いが悪いぞ。だが、せつかくだ。店のアピールのために洗わせてもらおうか」

善意の店員二人。

だが、男二人には、まるで沼に引きずり込むような存在に見えていた。

「や、止める!　俺たちを洗うんじゃない!」

「誰か助けてえええ!」

周囲の客たちに取り押さえられ、二人は磨かれてしまっただった。

そして今。

王国へと戻るアインホルンの風呂場で、リオンはクリスやグレッ

グと一緒に入っていた。

「そういえば、お前らって何をして稼いだんだ？ ほら、マリエに追い出された後だよ。ジルクみたいに詐欺とかしてないよな？」

疑った視線を向けるリオンに、クリスとグレッグは笑顔でサムズアップして、

「一緒にするなよ。俺たちは男を磨いてきたんだ！」

「まったくだ。俺たちはジルクと違い、男を磨いてきた！」

リオンは湯船でタオルを付けて、風船を作って遊んでいた。

「意味が分からないね」

すると、

「おい、バルトファルト、タオルを湯船に入れるんじゃない」

「そうだ。マナー違反だ」

最近、やたらと風呂でのマナーに厳しくなった二人に、リオンは呆れるのだった。

「お前らも少し前まで遊んでいたじゃないか。まあ、いいか」

出ようとする、二人から声がかかる。

「出るのか？ 洗ってやろうか？」

「私たちは得意だぞ」

その言葉に、何やら寒気を感じたりオンは。

「遠慮する」

と言うと、二人は残念そうにするのだった。

幕間 クレアーレレポート 五章その1

これはアルゼル共和国での事件が終わった頃の話だ。

夏休みが終わってしまう前に、国に帰ることになったアンジェとリビアに付き添ってクレアーレもホルファート王国へと戻ってきた。

『もう最悪ね』

戻ってくると、アンジェは王宮に呼び出されてしまう。

リビアもその手伝いで忙しく、クレアーレはそんな二人のサポートをしていた。

アルゼル共和国が聖樹を失った。

これにより、ホルファート王国は魔石の輸入先が一つ消えてしまった。

リオンの責任を求める声もあるが、同時によくやったという声もある。

ホルファート王国以外も情報を集めるために奔走しており、アンジェやリビアに近づく虫たちを排除するのに忙しかった。

排除と言っても、命を奪うものではない。

だが、リオンからの命令で二人を守らなければならないクレアー

レにしてみれば、忙しいことに変わりがなかった。

『私ももつとイデアルが残したパーツが欲しかったのに！』

今頃、ルクシオンはイデアルが残したパーツを根こそぎ奪っているのかと思うと、クレアーレは悔しかった。

自分もバージョンアップがしたいのだ。

『この不満は、新人類で実験して晴らしましょう。　そういえば、一人面白い個体がいたわね』

クレアーレの周りに集まってくる作業用のロボットたちは、目をチカチカ光らせている。

手を使いジャスチャーも加え、クレアーレに【アーン】の現状を報告した。

それを確認したクレアーレは、

『何それ面白い！　悪ぶっていたあの子が、女の子になりたがっているですって。これは実験を続けるべきね』

ルクシオンへの腹いせや、自分の趣味のためにクレアーレは行動することにした。

朝早くから、アンジェとリビアが眠る部屋で騒いでいる。

部下であるロボットたちから、次々に報告を受けては反応していたが　そのロボットたちが喋らないので、クレアーレ一人が喋っ

ているようにしか見えない。

『女装をして男子寮を徘徊？』

『アーレちゃんですって！？ そんなの許せないわ。愛称は必ず変更してやるわ』

『男子が大騒ぎ？ ああ、今まで大変だったからね。仕方ないわね』
そもそも、クレアーレにとって新人類とは敵だ。

何をやっても問題ない相手でもある。

『いつそ望み通りにしてあげるわ！ ちょっと性別の壁を越えさせてあげましょうか。ルクシオンがいない医療ポッドをくれたから、それを使って実け 夢を叶えてあげましょう』

ノリノリのクレアーレに、作業用ロボットが困ったようなポーズで目を光らせていた。

電子音を『ぴぽぴぽ』と言わせ、クレアーレに疑問をぶつけている。

『何故そこまでするのか、ですって？ 腹が立ったからに決まっているじゃない』

それでも、作業用ロボットは『止めた方がいいんじゃないですか？』的なことを言っていた。

クレアーレはそれを無視する。

理由は 。

愛称が同じだった。

ルクシオンにお宝を奪われた。

他にも色々があるが、ようは八つ当たりだった。

『そうね、手始めに女性ホルモンからはじめましょうか！ いや、エステで釣って、そこから徐々に 楽しくなってきたわね！』

一人はしゃいでいるクレアーレに、寝起きのアンジェが上半身を起こす。

『あら、おはよう、アンジェ 』

だが、アンジェは何も言わずに枕を投げ付け、クレアーレを黙らせる。とまたベッドに横になる。

連日、取り調べや、今後の対策で疲れているのか機嫌が悪い。

ベッドに横になった際に、枕にしたのはリビアの胸だった。

クレアーレは静かに部屋を出るのだった。

アーロン改めアーレは、学園の外で買い物をしていた。

「みんな、無理しなくていいのに」

大量の荷物を持った男子たちが、アーレの買い物に付き従っている。

「これくらい問題ないって」

「そうだよ。もつと洋服を買えばいいんだ」

「俺たち鍛えているから大丈夫！」

毎日のように誘われるアーレは、男子たちから非常に人気が高かった。

最初こそ、毛嫌いする男子たちが多かったのだが。

「俺、アーレちゃんに酷いことを言ったから、これくらいさせて欲しいんだ」

一人の男子が謝罪してくる。

アーレは、以前とは違い謙虚だった。

「気にしてないよ。自分が同じ立場だったら、気持ち悪いって思っちゃうかもしれないし」

「そんなの駄目だ！ 頼むから償いをさせて欲しいんだ」

男子たちが大きく何度も頷いていた。

そんな様子を、街に出ていた女子たちが見ている。

以前は自分たちが引き連れていた男子たちが、今は男に奪われてしまった。

専属使用人が廃止され、表向き奴隷を持てなくなった女子たち。

女子三人が、アーレたちを見て、

「何よ。あれ、男じゃないの？」

「あんなのがいいとか、変態なんてこっちから願い下げよ」

「男子って馬鹿よね。男が男に走るとか、意味が分からないわ」

口では色々と言っているが、彼女たちも内心焦りがあった。

急激に変わっていく王国の現状に、彼女たちは追いついていない。

慌てて男子にアプローチする女子も増えてはいるが、多くの女子は「女子から声をかけるなんてあり得ない」と思っていた。

彼女たちの母親　同じ学園のOGも「どうせすぐに元に戻る」などと、樂觀視している場合も少なくない。

多くの貴族が消え、まだ半年しか過ぎていなかった。

彼女たちが現実を知るのはまだ先である。

「男が女装なんかして　気持ち悪いわ」

吐き捨てるように女子がそう言うと、それを聞いていたアーレが悲しそうな顔をしてこの場を去ろうとする。

だが、男子たちは、

「おい、何だその言い方は！」

「そうだ。アーレちゃんに謝れよ！」

「お前ら、嫉妬なんてみつともないぞ」

女子も言い返す。

「はあ？ どうして私たちが嫉妬なんかするのよ？」

だが、男子たちは本気で嫉妬していると信じ込んでいた。

だって。

「嫉妬しているじゃないか。だって、アーレちゃんはお前たちよりも可愛いし」

「え？ 美人だろ」

「馬鹿。美人で可愛いんだろうが」

アーレの方が本当に美人だと思っていたから。

女子たちが絶句する。

「は？ 嘘でしょ。だって、そいつは男よ！」

「それが何か？」

「だ、だって、おかしいでしょ！」

「いや、俺たちもよく考えたんだ。酷い女子より、美人で優しくて、そして可愛いアーレちゃんの方が正義じゃないか、って」

「俺も思った！」

「俺も！」

啞然とする女子たちを残し、男子たちがアーレに言う。

「ほら、行こうぜ、アーレちゃん」

「う、うん。でも、みんな女子にあまり酷いことを言ったら駄目だよ。みんな結婚とかあるし、悪い噂が流れたら大変だよ」

「　　氣遣ってくれるアーレちゃん、尊いわ」

移動するアーレたちを、女子たちは本当に理解できないという顔で見ている。

すると、アーレは新しい店に気が付く。

「あれ、ここに新しい店がオープンしたんだ」

公国との戦争から、復興も随分と進んでいた。

なくなった店も多いが、新しい店が次々にオープンもしている。

女性向けの店が少なくなった印象が強い中、その店はエステを売りにしていた。

「名前は　「エステサロン　クレアーレ」か。ね、ねえ、見てみるのは駄目かな？」

アーレに頼まれ、男子三人は快く了承した。

店内に入ってきたアーレを確認し、クレアーレは用意した人型ボディに入る。

頭部に球体を入れると、人型が動き出した。

不自然さはまるでない。

「素晴らしい出来だわ。普段は必要ないけど、こういう時は便利よね」

女性の体を手に入れたクレアーレは、アーレたちを見て笑みを浮かべた。

「さあ、ここからどこまでいくのか見せてもらおうわよ。ついでに小遣い稼ぎでもしてみようかしら」

せっかくだから目標があった方がいいと、クレアーレはお金を稼ぐことにする。

「縛りプレイって楽しそう。お金を稼いで、私もマスターみたいにマリエちゃんに土下座をしてもらおうわ。ゾクゾクしちゃう。マリエちゃんは可哀想だと輝く素敵な人！」

変なテンションのクレアーレは、アーレに近付いた。

表情を営業スマイルにして、物腰柔らかい店員として不自然なく接近した。

四人が少し緊張しているのを感じ、笑顔で言う。

「いらっしゃいませ。あら、可愛い男の子たちね」

「えっと、今日はその見学というか」

アーレがそう言うのと、待っていましたとばかりに、

「なら、今回限りのサービスを受けてみない？ オープンしたばかりだから、宣伝も兼ねてうちのサービスを体験してほしいの」

「い、いいんですか？」

喜ぶアーレに、クレアーレは内心で思った。

（よし、獲物が罠にかかったわ）

こうして、クレアーレの悪事は続くのだ。

幕間 クレアーレレポート五章その2

「私ってばお金持ちよねえ！」

人型のボディーに入ったクレアーレは、札束の前で両手を広げていた。

ボディーの形状は、背の高いスレンダーな女性だ。

胸は大きくも小さくもないが、眼鏡をかけてインテリ風に見える。

商売でエステを始めてみたら、需要はあるため客が多い。

他にはないサービスが受けられると、連日大盛況だ。

「ふははは　ただの紙切れで騒いでみたけど、あんまり嬉しくないわね」

人工知能であるクレアーレは、札束の一つを手で掴み眺める。

その周囲に浮かぶ部下のロボットたちが、「ぴぴぽぽ！」と何かを注意していた。

「五月蠅いわね。忘れていないわよ。情報収集もちゃんとやっているわ。けど、この国って面白いわね。いえ　新人類が面白いのかしら？」

エステを経営して分かったことがある。

それは、女性が今まで以上に美容にお金をかけているという事実だ。

今までの価値観が崩壊したのに、むしろ女性向けの店が儲かっていた。

これまでと違い、女性を優遇する風潮が消えていくのに、だ。

「女性向けのサービスをする店は減ったけど、代わりにエステなんかは増えたわね」

美男子がサービスをするような遊ぶ場所は減り、代わりに自己投資の意味合いもあるエステなどが儲かっている。

見た目をあまり気にせずとも、これまでは男が集まってきた。

だが、事情が変わり、少しでも見た目を、ということだろう。

「おかげで予約がいっぱいで嫌になるわ。まあ、ぼろ儲けだけどね！ この程度で、これだけの対価をもらうなんて悪い気がするわ。でも、新人類相手に心なんて痛まない！ 私に心があるか分からないけど！」

テンションの高いクレアーレだった。

マスターと同様に、何とも酷い人工知能である。

趣味で実験を行いつつ、情報も集めて小遣いも稼げる。

クレアーレのお金の使い道が、マリエに甘えられたいという歪んだものというのが救えない。

ロボットたちが、わざわざテーブルに用意した札束を片付けていた。

「ぴぽぽ」と、クレアーレに開店時間だと告げる。

「あら、もうそんな時間なの？ 急いで開店しましょうか。今日はモルモ じゃなかった、大事なお客様が来られるわ」

口を三日月に歪め、大事なお客様が来るのを待つクレアーレだった。

「アンジェ、王都で有名なエステが開店したそうですよ」

「エステ？」

学生寮。

アンジェの自室に押しかけたリビアは、チラシを見せていた。

それは、王都で人気が広がっているエステのものだ。

「暇がないな」

「そ、そうですか。疲れも取れると聞いたので、アンジェのために

なればと思ったんですけど」

期間限定の格安サービス。

リビアのお小遣いでもどうにかなる値段だった。

残念がるリビアを見て、気持ちを察したアンジェが困ってしまう。

「分かった。休日に顔を出そう」

「はい！」

「それよりも、最近クレアーレを見ないな？」

アンジェが部屋の中を見渡せば、浮かんだ筒状のロボットが部屋を片付けていた。

クレアーレは、最近姿を見せていない。

「忙しいと言っていましたよ」

「リオンに何か頼まれたのか？ それとも、何かあるのかな？」

情報収集で忙しいのか、それ以外で忙しいのかが気になるアンジェだった。

「もう一押し！ もう一押し！」

誰もいない店内で、手拍子をしているクレアーレは大喜びだ。

エステに通ってくれるアーレちゃんに、色々と吹き込んだ成果が出てきた。

あと少しで、大きな決断をしてくれそうだ。

「趣味と実益を兼ねてはじめたけど、結構面白いわね。このまま続けてみようかしら？」

楽しそうなクレアーレに、部下のロボットが「ぴぽぽぽ！」と強めの電子音を発していた。

それを聞いたクレアーレが、窓の外を見る。

「何？ 午後の営業はまだなのに、人が沢山並んでいるですって？
それがどうしたのよ。あいつら暇よね」

客に対して酷い態度だったが、クレアーレは部下に押されて窓の外をよく見た。

「だから何よ？ 待たせておけばいいのよ」

そんな態度だったクレアーレだが、並んでいる女性たちの中にアンジエとリビアを見つけてしまった。

「何であの二人がいるの？」

「ぽぽぽぽ」

部下のロボットが頭を抱える仕草を見ると、クレアーレも焦りはじめた。

クレアーレの中で、二人というのは重要度が高い。非常に高い。

遊び程度のこの場所に来られても困る。

「私に言うてくれれば、エステくらいしてあげたのに！」

しかし、来てしまったものは仕方がない。

クレアーレは店を開けることにして、急いで行列に並んでいる二人を店に入れようとした。

だが、何やら二人が絡まれて揉めはじめている。

「あら、公爵令嬢ともあろう方が、このような場所に来るなんて意外ですわね」

「それだけ人気がある証拠よ」

「若いのにこんなところに通って大変ですわね。私が学生の頃は、何もしていなかったわ」

相手は三十を過ぎた貴族の女性たちだが、リビアとアンジェに絡んでいる。

リビアは困っていた。

「あ、あの」

「それより、予約はしているのかしら？　ここは簡単には予約が取れない店なのよ」

言われて、リビアが焦りつつチラシを見た。

「え、そうなんですか？」

「そんなことも知らないの？」

口調は優しいが、ネチネチとした彼女たちの態度にアンジェが苛立っている。

リビアが何とか宥めようとしていると、周囲の女性たちがざわつきはじめた。

「先生がおいでになったわ！」

「先生！　今日もよろしく願います！」

「今度お見合いなんです！　今日は特別念入りをお願いします！」

女性たちに騒がれながら出てきたのは、眼鏡をかけた知的な女性だった。

綺麗な黒髪がサラサラと揺れている。

歩く姿も美しい。

店についてあまり詳しくないリビアだが、こんな綺麗な人が経営しているなら間違いないのかもしれないと思えた。

女性が二人の前に来ると、丁寧に対応してくる。

「お待ちしておりました。さあ、お二人は中へどうぞ」

アンジェが周囲に視線を向けていた。

周囲は、憧れの先生の態度に、困惑を隠しきれずにいるようだ。

「悪いが予約をしていない。今日は帰ろうと思っていた」

女性は頭を上げると笑顔を向けてくる。

「必要ありません」

「何故だ？」

特別待遇に警戒するアンジェに、女性は事情を話すのだった。

「戦時中、バルトファルト伯爵に助けていただいたことがあります。その婚約者であられるお二人に恩返しをさせてください」

リビアが驚いた。

「リオンさんが？」

「はい。本人は覚えていないでしょうが、王都で逃げ回る私を助けてくださいました」私を助けてくださいました

アンジェは納得しつつも、周囲の嫉妬のこもった視線に遠慮をする。

「いや、ならば余計に今度にしよう。今回は予約を入れておこう」

「そうですか？ では、その日をお待ちしております」

予約を入れたリビアとアンジェは、その場を後にする。

帰り道。

「私の確認不足でした。ごめんなさい」

「気にするな。それに、少し気分も良かったからな」

大勢に恨まれているリオンだが、恩を感じてくれている人間もいるのだ。

それを知れて、アンジェは上機嫌だった。

「そうですね。リオンさんに恩を感じてくれている人もいますね」

「貴族の評判は悪いけどな」

「い、一部からは凄く人気ですよ」

「その一部が問題」

話をしていると、路地から学生たちの声が聞こえてきた。

二人が立ち止まって聞き耳を立てたのは、とても緊迫した声だったからだ。

だが、犯罪というわけではない。

二人がそつと様子をつかがうと、そこには男子たちが集まっていた。

「みんな 私のためにこんなに」

一人の女性に、大金を渡している男子たちがいた。

何事かと様子を見てみると、

「泣くなよ。この金はみんなで用意したんだ」

「決めたんだろ？ なら、使ってくれ」

「俺たちの気持ちだ！」

女性一人を男子たちが囲んでいる光景は、少し警戒したがおかしい様子ではない。

「みんな ありがとう！」

アンジェが首をかしげていた。

「女子に大金を渡している？ 何かあったのだろうか？ どうした、リビア？」

とても複雑な表情をしているリビアは、アンジェに問われて言う

べきか迷った。

だが、黙っていてもいずれ分かることだ。

「アンジェ、ここからだと分からないでしょうけど、あの人は男ですよ」

「何!？」

アンジェが男子に囲まれた女子を見て、確かに体つきが　と言っていた。だが、それ以上に驚いているのはリビアだ。

「あのアーロン君が女の子になるなんて」

まるで夢でも見ている気分だった。

夜。

クレアーレは店内で大笑いをしていた。

「ついに来た！　マスターを迎えに行く前に片付いて良かったわ。ついでに、マスターの株も上げておいた私って、仕事の出来る女よね！」

「　　」
「びぽぽ」

部下のロボットたちが呆れている。

文句を言っていた。

「五月蠅い！ 気持ちは女なの。それにしても、このボディーは思った以上に上出来ね。新人類が私を先生と敬って気分がいいわ。けど、もう飽きてきたわね」

当初の目的を達成できたのも理由だが、最近ではクレアーレを抱えにしようとする貴族が出てきた。

商人たちもクレアーレに接触してくるので、余計な仕事が増えて
いる。

「アーロン君をアーレちゃんにしたら、マスターを迎えに行く前に
店じまいね」

「ぴぼ？」

「店じまいの理由？ そんなの、新しい技術を学ぶため、ってことに
するわ。それより、今度二人が来た時は、真面目にしないとマス
ターに怒られちゃう。せつかく褒めて貰えそうなのに、落ち度があ
ったら駄目よね」

「ぼぼぼぼ」

「マッチポンプ？ それが何？ 私はマスターに褒められたいのよ。
あと、マリエちゃんが甘えてくれたら最高！ ゾクゾクしちゃう」

旧人類の遺伝子を持ち、転生者であるマリエをクレアーレは特別
視していた。

「さて、色々と片付けてから、マスターを迎えに行きましょうか」
「ほほ」

高笑いはじめるクレアーレは、全てがうまくいっていると思っていたようだ。

部下たちがクレアーレを無視して仕事を開始した。

クレアーレが重大なミスに気付くまで、あと少し。

幕間 マジシャンブラッド

リオンたちがアルゼル共和国で復興作業を手伝っていた頃の話だ。

王国の飛行船の多くが戻り、残ったのはリオンを中心とするメンバーだった。

アンジェモリビアも戻ってしまい、リオンとマリエ　そして、
愉快的仲間たちが残っていた。

そんなリオンたちは、瓦礫の撤去作業をしている。

作業用の鎧があるため、作業速度は速いのだが　共和国全体を
考えると、とてもではないが手が足りない状況だった。

瓦礫を撤去した場所では、マリエがカイルとカーラと共に炊き出しを行っている。

列を作っているのは、共和国の民たちだ。

「ちゃんと並びなさい！」

鍋を持ち、お玉で叩いて声を張り上げるマリエはエプロン姿である。

大勢の人たちに食事を用意しているためか、髪は後ろで縛ってポニーテール姿だ。

我先にと群がり、列など出来ていない。

時には鍋ごと奪おう、もしくは食料を盗もうとする者もいる。

「うるせえ！ さつさと渡しやがれ！」

だから。

『あ？ 何だつて？』

リオンが乗る鎧が近付き、鎧用の道具を地面に叩き付けた。

振動で全員が黙ると、リオンは続ける。

『お行儀よくしていれば飯が食える。簡単だろ？ 文句がある奴は前に出ろ。盗みを働いた奴は、こいつで叩き潰してやる』

「あ、いや」

『さつさと並べ！』

鎧の前に、先程まで暴れていた住人たちが俯いて黙ってしまう。

最初はやり過ぎだとリオンも思ったが、時には武器を持ちだしてくる人間もいる。

甘い顔をしていらなかった。

そんな光景を、作業をしながら見ていたブラッドは大事にならずによかったと安堵して一度深く呼吸をした。

「面倒にならなくてよかったよ」

そんな呟きを聞いていたのは、近くで作業をしているグレッグだった。

『本当だよな。それにしても、バルトファルトの奴は気を使いすぎじゃないか?』

他のメンバーから見れば、リオンは復興作業に関して気を使いつぎているように見えた。

むしろ、自分たちが作業を手伝っているのだから、炊き出しなど不要だと思っている。

「僕もそう思うよ。鎧に乗っている僕たちはともかく、マリエたちは生身で外だからね。危険なことはして欲しくないよ」

作業を再開しようとする、ユリウスが全員に通信で指示を出した。

『全員、休憩だ。鎧は補給を行うから、全員降りて食事をしてくれ。バルトファルト、お前はどうする?』

リオンは住人たちに睨みを利かせていた。

『お前らの後で休憩に入る』

誰かが見張っていないと危険と思ったのか、リオンは降りないようだ。

ブラッドは肩をすくめつつ、

「なら、お先に休ませてもらうよ」

鎧から降りて食事をしている五人　と、エリクの六人。

六人とも疲れた顔をしていた。

食事を済ませ、体を休めているとブラッドは子供たちを見かける。
行き場のない子供たち。

暗く沈んだ表情をしていた。

そんな子供たちを見て、エリクが悲しそうな顔をしていた。

「　親を失った子たちだ」

「そうか。それなら　」

「殿下、いけません」

「ジルク？」

その言葉に、ユリウスは何かを言いかけるも、ジルクに止められた。

「これは共和国の問題です。我々には助けられるだけの力はありません」

共和国全体の孤児を助けられるわけもない。

全員が俯いてしまうと、ブラッドが立ち上がった。

「なら、せめて今だけは笑顔にさせてあげないとね」

座っていたクリスがブラッドを見上げ、

「笑顔？ お前、あの子たちを笑わせられるのか？」

「笑わせる？ 違うよ。僕はお金を稼いでいた時、マジックを披露していたね。これでも人気のマジシャンさ」

全員が疑った視線を向けると、ブラッドは顔を赤くして怒った。

「お前たち、信用していないな！ だったらここで見ていろ」

ブラッドは、小道具を荷物から取り出すと子供たちの前に出た。

「僕は天才マジシャンのブラッド。君たちにとっておきのマジックを披露しよう。お代は君たちの笑顔さ」

子供たちはブラッドを見上げて困惑している。

ブラッドはポケットから何かを取り出す。

本来なら隠さなければいけない道具のようだが、丸見えだった。

「ほら、タネも仕掛けもないよ。それじゃあいくよ　あ、あれ？
火が点かないな。壊れたのかな？」

何もないところから火を出そうとしたらしいが、失敗したらしい。
ズボンの後ろにあるポケットに道具をしまい込むと、悩んだあげ
くに魔法で火を出現させた。

「これでどうだ！」

子供たちも、魔法は珍しいのかパラパラと拍手をしている。だが、
どうみてもマジックとは違うのではないか？

そうした困惑が顔に出ていた。

グレッグが呆れている。

「これで天才？　あいつ、結構稼いだんだよな？」

クリスも不思議がっていた。

「三流以下にしか見えないぞ」

天才だと言い張りながら、まったくマジックが出来ないブラッド
にみんな困惑していた。

すると、ボロボロのスーツを着た小太りの男性が近付いてきて
ブラッドに抱きついた。

「ブラッドきゅん！」

みんなして「ブラッド“きゅん”！？」と驚いていると、どうやら男性はブラッドの顔見知りらしい。

「マネージャー！」

「やっと見つけたよ、ブラッドきゅん。それにしても、こんなところでネタを披露するなんて、君は根っからの芸人だ。また、一緒に頑張ろう。君となら天下だって取れる！　だって君は天才だから！」

こいつは何を言っているんだ？

ブラッドの手品を見て、どこに素質を感じるのかとみんな疑問だった。

「駄目だよ。僕は国に戻らないといけない」

「そんな！　ブラッドきゅん、一緒に芸人の道を極めよう！」

しつこい男性に、ユリウスが話しかける。

「失礼、その　ちょっと話をしてもいいだろうか？」

マネージャーが頷くと、ブラッドは再び子供たちの前で下手な手品を披露する。

どう見ても才能を感じない。

不器用すぎて、トランプを持ち出すと混ぜる段階でタネを落とす

ていた。

その様子を見ながら、

「あいつにマジシャンの才能があるのか？　そもそも、あいつはまっとうにマジシャンとして稼いでいたのか？」

すると、

「誰かは知らないが、君はブラッドきゅんを見て手品の才能を感じるのかい？」

「　なら、なんで芸人の道にあいつを引き込むんだ？」

才能がないのに芸の道を進める理由が分からない。

すると、マネージャーがブラッドを見る。

「見ていれば分かる。そろそろだ。きっと何かが起きる」

「何か？」

ユリウスもブラッドを見ていると、自信満々に下手な手品を披露してお尻の部分から煙が出ていた。

それは、先程失敗した手品の道具から火が出ていた。

「熱っ！　ぎゃあああ、僕の尻が燃えてるううう！」

ブラッドが騒ぎ出し、尻を叩いて火を消すと、綺麗にお尻が出た

形になる。

ブラッドは、そのまま自信満々に笑顔で手品を続けた。

「ちょっと失敗したかな？ でも、大丈夫。天才マジシャンは慌てないのさ。さて、次のマジックは」

振り返ると、子供たちの目の前にブラッドのお尻が出てきた。

子供たちがクスクスと笑いはじめている。

ユリウスは何となく察してしまう。

マネージャーはそんなブラッドに、瞳を輝かせながら視線を注いでいた。

「子供たちの笑顔を見たかな？ 彼は天性の お笑い芸人だ。彼ならきつと新しい時代を築ける」

ユリウスは納得した。

「そっちなあ」

芸人と言っていたが、マジシャンではなくお笑い芸人だった。

本人は自分が天才マジシャンだと疑っていないのがポイントだ。

そのまま下手な手品と失敗を繰り返しながら、ブラッドは子供たちを笑顔にするのだった。

幕間 短期留学

皆様、お元気でしょうか？

私 リオン・フォウ・バルトファルト侯爵は、今日も必死に生きております。

現在、ホルファート王国から短期留学という名目で追い出され、外国の学園に通っています。

外国って不思議ですね。

何だか、空気の匂いが違う気がします。

それよりも、国を救った英雄を留学という名目で追い出し、婚約者がいるのに単身赴任みたいな扱いをする王国が許せません。

このまま反逆してやろうかと思いつつも、王国を打ち倒してもその後が面倒だからと思いついて留まっております。

自分の優しさ^{せいれんけつぱく}と忠誠心、そして清廉潔白^{せいれんけつぱく}なところがここに来て足を引っ張っている形ですね。

国を滅ぼしても、新しい国を建国するとか面倒ですとか、そんなことばかりを考えているではありません。

王国と戦えば、大勢の人たちが血を流すことになるのが耐えられないのです。

そのところを、間違えないようにお願いします。

さて、長々と現実逃避をしたところで、状況を再確認しよう。

「二人とも、私のために争わないで！」

マリエが言っていると陳腐に聞こえる台詞を口にしていた。

その先には、二人の男性が向かい合い、腰に提げたホルスターにある拳銃を抜こうとしている。

西部劇のガンマンのような格好をしている二人は、俺たちが短期留学している先の現地人である生徒たちだ。

「ポール、お前はいい友人だった。だが、マリエは渡さない」

「気が合うな、ケビン。だが、勝つのは俺だ。お前を倒して、俺がマリエをいただくぜ」

マリエのために早撃ち リボルバー式の拳銃で、決闘をする二人に俺は呆れていた。

右肩の辺りで浮かんでいるルクシオンが、不思議そうにしていた。

『どうしてこうなったのでしょうか？』

「ほら、こっちの言葉が分からないのに、マリエがノリで返事をしていたから面倒になったんだ」

何を言われているか分からないのに、イエス！　とか言ってしまったマリエが悪い。

目の前の男二人は、自分こそがマリエの彼氏であると宣言してしまった。

ここで勘違いをさせたマリエを問い詰めればいいのに、腐っても乙女ゲーの世界だ。

女性を責めるなんて真似はしないらしい。

悪いのは相手の男！

だから、決闘しようぜ！

どういう思考回路をしているのか、ルクシオンに調べさせたところだ。

「二人とも止めて！　勘違いなのに！　私は　」

ポールがマリエに笑顔を向けていた。

もみあげが特徴的なポールは、イケメンだった。

「泣くな、マリエ　これは俺たちの問題だ」

そして、同じようにイケメンのケビンもクールに声をかけてくる。

「すぐに終わる。ポールの墓の前で、俺たちの結婚式を挙げよう」

クールキャラだと思っていたら、ただのお馬鹿キャラだったらしい。

お前は墓場で結婚式を挙げるの？

神父さんの人が怒らないの？

というか、友達をマリエのために葬るなんて駄目だと思う。

『マスター、誤解を解かないのですか？』

「マリエが悪いと思うけどね」

泣いているマリエは、俺にすがりついてくる。

「あにぎいいい！　だずげでええええ！」

本気で泣いているマリエを見て、俺はルクシオンにハンドサインを出した。

一つ目を縦に動かし、頷く仕草を見せたルクシオンがシールドを展開する。

向かい合う二人の間にね。

「ポオオオルウウウ！」

「ケビイイイン！」

俺がコインを投げ、地面に落ちた瞬間に二人がホルスターに手を伸ばして銃を抜いた。

銃声が重なって聞こえると　二人は啞然としている。

どちらかが倒れるはず。

そう思っていたのに、どちらも無傷で倒れる気配がない。

「く、くそおお！」

ポールが引き金を引いて何度も撃てば、ケ빈はすぐに移動して物陰に隠れる。

ポールの弾切れの際に顔を出し、撃ち返すという　戦いが繰り広げられていた。

互いに銃の扱いに長けているのか、当たらないことに驚いている。

二人の間に見えない壁　シールドを展開しているので、銃弾が二人に届くことはない。

持っていた弾丸を全て撃ち尽くした二人は、膝から崩れ落ちるのだった。

「ど、どういうことだ」

もみあげ　違った、ポールが自分の手を見ていた。

お馬鹿のケ빈も同様だ。

そして、二人は互いに顔を上げ　視線を交わすと小さく笑った。

「何が起きるのかな？」

『次は近接戦闘でしょうか？』

まだ戦うのだろうと判断したルクシオンの予想に反して、二人は笑い合うと近付き肩を抱き合った。

「引き分けだ。これだけ撃って当たらないんだ。勝利の女神様は、俺たちに引き分けをプレゼントしてくれたらしい」

「ポール、分かっているいな。俺たちの女神は　マリエだろ」

歯の浮く台詞が次々に出てくると、もう感覚が狂ってしまう。

日常的にこんな台詞を言っている国なので、俺も気にしなくなってきた。

マリエが安堵している。

「良かった。どっちかが死なくてよかったよおお！」

自分のせいで人が死ななくて良かったと安堵するマリエだが、勘違いは一切解消されていない。

二人がサムズアップしながらマリエに言うのだ。

「マリエは俺たち二人の女神だな」

「ああ、俺たち三人　どこまでも一緒に」

いや、俺たちは留学生だし、故郷に帰るんだが？

それに、マリエには野郎が他にも五人　あ、六人？　でも、カイルを入れると七人？

とにかく、こいつに勝利の女神なんて称号は不釣り合いな女だ。

「あ、あのね。二人とも、私には恋人たちが」

言い訳をはじめたマリエだったが、ルクシオンが視線を別方向へ向けた。

『次のお客様ですよ、マスター』

「うわー、沢山いる」

ライフル、ショットガン、そしてバズーカ　様々な銃火器を持った男たちがやってきた。

彼らの目的はマリエだった。

「マリエ、迎えに来たぜ」

「その勘違い野郎共を蜂の巣にしてやる！」

「お前ら、マリエは俺の彼女だ。手を出すなら吹き飛ばす」

こいつらも勘違いをしていたようだ。

マリエがぎこちなく首を動かし、俺を見て頬を引きつらせ笑っていた。

「あ、兄貴　助けて」

俺は首を横に振る。

「だから、もっと返事は慎重にしろと言っただろうに」

「いきなり告白されるなんて思わないわよ！　出会ってすぐに、告白してオッケーをもらったと勘違いするなんて　予想できるかあああ！」

マリエの言い分ももつともだ。

だが、俺に出来ることは少ない。

「がんばれ」

応援すると、マリエが地面に両手両膝を突いて泣いていた。

「助けてよ、おにいちゃああん！」

ホルファート王国。

学園の女子寮で、リオンから届いたメールを手紙として印刷してもらったアンジェとリビアは、顔を真っ赤にしていた。

手紙を持つ手が震えている。

「い、いったいどういうことだ？」

アンジェが震えている理由は、手紙に俺の女神やら、愛しの、などの齒の浮くような文章が沢山書かれているからだ。

リビアは耳まで赤い。

「リオンさん、どうしちゃったんでしょうか？」

嬉しそうな二人に、クレアーレがリオンへのポイント稼ぎを考えた。

（チャンス！ これで私のミスを打ち消してみせるわ）

アーロンをアーレちゃんにしまったクレアーレは、何としてもリオンに功績を認めさせなければならない。

きっと怒られるのは間違いないので、どこかでカバーする必要があるのだ。

『きっとマスターも成長したのよ。留学先で色々あったんじゃないの？』

「成長？ 色々？」

リビアがそれを聞いて首をかしげ、そして口元に手を当てて呟いた。

「もしかして、リオンさん また現地で女性を？」

アンジエが手紙を綺麗に畳みつつ、先程まで照れていた顔を改め真顔になった。

目が怖い。

「あれほど、先に言えと言ったのに、言葉で誤魔化そうとするとは思わなかった」

『え？』

クレアーレの予想に反して、二人はリオンに対する抗議のメールを用意する。

「アンジエ、ここは厳しく対応しましょう」

「そうだな。クレアーレ、すぐに返事を送ってもらおうぞ」

『え？ 何でそうなるの？』

クレアーレは、ここに来て更にミスをしてしまつたのだった。

幕間 ノエルのリハビリ

リオンたちが再び外国に留学している頃。

バルトファルト男爵家で世話になっているノエルは、リハビリを行っていた。

聖樹の巫女。

その一族の血を引くノエルは、王国にリオンが持ち帰った苗木若木の巫女だ。

アルゼル共和国では、双子の妹であるレリアが巫女となっている。部屋の中、手すりを掴んで歩いていた。

ほとんど助からない傷を負いながら、ルクシオンたちの治療により命を取り留めた。

それからしばらくは、療養生活を送っていたが、今は来年度に向けてリハビリを行っている。

汗をかきながら、何とか歩いていた。

エルフのユメリアが、そんなノエルを応援している。

「ノエル様、頑張ってください！」

ノエルは可愛らしいユメリアの応援に、笑いそうになっていた。

「分かったから変な踊りは止めて」

「え？ 応援のための踊りですよ」

どこか抜けたところのあるユメリアは、男爵家の屋敷で使用人として働いている。

今はノエルの専属になり、身の回りの世話をしていた。

ノエルは思う。

（これが終わったら勉強で、その後は　　）

世話になっている男爵家での扱いは、とりあえず大事なお客様というものだ。

リオンの側室になるのが決まっているという話が広がっており、リオンの両親は申し訳ないという感じで接してくる。

そもそも、リオンの両親は側室に反対の様子だった。

理由は、アンジェとリビアにある。

二人の婚約者がいるのに、三人目なんてどうなの？

そのような感じだ。

リオンには呆れ、事情やら立場から側室になるしかないノエルに

は同情的だった。

しかし、屋敷内の全ての人間が、ノエルに優しいわけではない。

ノエルを嫌っている人間が、部屋に入ってくる。

「ちょっと、ユメリア！ あんたに、頼んでいた仕事が終わっていないじゃないの！」

その人物こそ、リオンの妹である「フィンリー・フォウ・バルトファルト」だ。

ボブカットで、ジェナと違って小柄なフィンリーは、使用人が着る衣装に身を包んでいた。

ユメリアが慌てて謝罪する。

「も、申し訳ありません、フィンリー様！ で、でも、奥様が甘やかしてはならないと仰せで」

フィンリーが地団駄を踏む。

「少しは頭を使いなさいよ！ 母さんに分からないようにやれば済むでしょう！」

今まで女の子だからと甘やかされてきたが、王国の事情が変わってきている。

このままでは嫁ぎ先に困ると、ジェナ同様にフィンリーも花嫁修業をはじめていた。

「もう、どうしてこうなるのよ！ お姉ちゃんは結婚できそうにもないし、私は奴隷も買えないのよ！　せめて私が卒業するまで今までと同じで良いじゃない！」

劇的に王国内の事情が変わっている。

まるでしごを外されたように感じるのは、フィンリーだけではない。

エルフの奴隷が欲しかったと泣き出すフィンリーを見て、ノエルが溜息を吐いた。

（これは酷いわ）

王国と共和国では事情が違った。

奴隷を専属使用人と呼んで連れ回したりしない。

そのため、フィンリーの気持ちがノエルには理解できなかったのだ。

「あのさ、もう諦めなよ。素直に花嫁修業をした方がマシだよ」

キツと睨み付けてくるフィンリーは、ノエルに文句を言う。

「居候が私に話しかけるな！　あんたなんか、あの馬鹿兄貴の愛人じゃない！」

三番目に愛している女とリオンは言っていた。

だから、フィンリーの言葉も間違いではない。

「男が愛人を持つのは、子供を生ませるためよ。あんた、調子に乗らないでよね」

ユメリアがブルブルと震えていた。

ノエルがフィンリーを怒鳴りつける。

「キャンキャン五月蠅いんだよ、このガキが！」

「なっ！　なんですって！」

元々ノエルは姉御肌だ。

一時期、エリクというヤンデレ彼氏により追い詰められていたが、元来は気が強い。

「あんた、同じ事を母親に言えるの？　そもそも、男の数が少ないんだから仕方がないじゃない！　いい加減に現実を見なよ」

女性の立場が強かった頃、愛人が認められていた理由は男が少なかったからだ。

地方領主の力を削ぎたい王国も、あまりに男が少ないのは問題だった。

だが、立場の強い女性たちは、子供をあまり生みたがらなかったのだ。

そもそも、子供を生むというのは命懸けだ。

何人も産めば、それだけリスクが高まるのである。

そのため、女性たちも側室を持つことを認めた経緯がある。

そして、今は男性の立場が強い。

「アンジェリカが言っていたけど、男の子はコリン君くらいの年齢でも奪い合いだよ。あんた、今のままで同年代の男の子を、振り向かせることが出来るの？」

フィンリーが視線をそらした。

「が、学園に行けば男なんて選り放題だって」

「あんたのお姉ちゃん、そう言っで未婚で卒業しそなんだけど？」

現実を突きつけられて、フィンリーが泣きそうになっていた。

そのまま部屋から出ていく。

「五月蠅いのよ！ この馬鹿兄貴の愛人！」

去って行くフィンリー。

部屋で溜息を吐くノエルだったが、すぐにリユースが入ってくる。

どうやら会話を聞いていたようだ。

「奥様！」

ユメリアが驚くと、リユースが困った顔をして謝ってきた。

「フィンリーが迷惑をかけてごめんなさいね。ノエルちゃんがリハビリで苦しんでいるのに、あの子ったらわがままばかりで」

対して、ノエルは困ったように笑っていた。

「わ、私こそカツとなってしまうて　ごめんなさい」

リユースはノエルを座らせると、そのまま世間話をはじめた。

今のリユースは正式なバルカスの妻だ。

男爵夫人である。

リオンの立場もあって、そのことに表向き文句を言う人物はいない。

「ノエルちゃん、ここでの暮らしはどう？　不自由はしていないかしら？」

「前よりいい暮らしをしていますよ」

「そう、よかったわ」

リユースからすれば、ノエルとは話しやすかった。

アンジェは身分が高すぎ、リビアではまた立場が違つ。

そのため、接し方が分からないのだが、ノエルはいい意味で話が合う。

リユースはノエルに悩みを打ち明けるのだ。

「うちの子が王女様と結婚するかもしれない話を聞いたかしら？」

「はい。アンジェから教えてもらいました」

「あの子、どうして普通でいてくれないのかしらね。ノエルちゃんの気持ちも考えてあげたらいいのに」

三番目発言やら、ノエルの生い立ちも聞いているリユースからすれば、リオンには不満もあった。

ノエルは、リオンの家族に好かれている。

「いつそニックスと結婚してくれたら嬉しかったんだけどね」

「お義兄さんと結婚ですか？ 私は微妙な立場だから、難しいですよ」

ニックスの方も大変だ。

何しろリオンの兄だ。

そして、男爵家の当主で、今後は確実に出世すると思われる。

そのため、数多くの見合い話が来るのだ。

リユースからすれば、全員が雲の上のお姫様ばかりである。

ノエルのように話しやすい娘がいない。

「ノエルちゃん、色々あると思うけど 応援するからね」

「ありがとうございます」

笑顔で答えるノエルを見て、リユースが「こんな娘が欲しかった」と嘆くのだった。

すると、今度は部屋にコリンがやってくる。

「ノエル姉ちゃん！ 虫を捕まえてきたよ！」

「お、やるじゃん」

コリンをノエルが褒めると、リユースは叱る。

「コリン、ノエルちゃんはリハビリ中だって言ったでしょう」

「だって、兄ちゃんは忙しいし、フィンリーは怒るし、誰も遊んでくれないんだ。リオン兄ちゃんがいたら、色んな悪戯を教えてくれるんだけどなあ」

誰も遊んでくれないと言うコリンに、ノエルが手招きをした。

「拗ねるな。拗ねるな。姉ちゃんが相手をしてあげるよ」

「やった！」

素直なコリンを見て、リユースは涙を流す。

「リオンにもこんな可愛い頃があったんだけどね。なのに、今ではこんないい娘を愛人にするなんて」

ノエルは苦笑いをするしかなかったが、男爵家での生活は悪くなかった。

幕間 コリンの初恋

ホルファート王国で今話題のバルトファルト男爵家。

実家の屋敷には、リオンの弟 三男のコリンが住んでいる。

末っ子で可愛がられて育っていた。

そんなコリンだが、最近 恋をした。

「ノエル姉ちゃん！」

相手は、男爵家でリハビリを行っているノエルだった。

最近は一人で生活できるまでに回復している。

過度な運動さえしなければ問題ないほどだ。

「来たな、腕白坊主」

コリンが抱きつくと、ノエルは笑顔で抱き留めてくれる。

実の姉たちとは大違いだ。

抱きつくと、甘い香りがした。

コリンはこの匂いが大好きだった。

「今日はどうしたのさ？」

ノエルがそう言うと、コリンは思い出したように本題へと入る。

「姉ちゃんたちが酷いんだ」

学園は卒業式が行われ、今は春休みだ。

来年度から入学するフィンリーは準備で忙しく、そしてジェナが戻ってきていた。

ノエルは視線をそらし「あゝ、そっか」と納得していた。

「ジェナのお義姉さんは、色々とあるからね」

色々、とは婚活を失敗したことだ。

学生の内に結婚できなかったのである。

コリンは不満を口にする。

「男子は見る目がないとか、僕に文句ばかり言うんだ。あんなの、八つ当たりだよ。リオン兄ちゃんがいれば、言い返してくれるのに」

口喧嘩で勝てないコリンは悔しそうにしていた。

「フィンリー姉ちゃんも酷いんだ。僕のことをいじめるんだ」

ノエルは額に手を当てる。

「うん、まあ 姉弟ならあり得るいじめだよな」

そこまで酷いいじめではないが、年下であるコリンには不満だった。

お菓子を取られるとか、その他にも色々と小さいいじめがある。

もつと陰湿ないじめをしようものなら、ニックスが黙っていないので二人とも加減をしているのだ。

「リオン兄ちゃんが帰ってきたら、姉ちゃんたちも黙るのにさ」

ジェナとフィンリーからすれば、リオンに文句は言えても本気で逆らえない。

何しろ、リオンは侯爵だ。

ホルファート王国の英雄であり、更にあの性格だ。

「リオンはコリンを可愛がっているからね。お義兄さんも同じだけ」

ニックスもリオンも、コリンを可愛がっている。

可愛くない姉妹よりも、純粋な弟の方が可愛いからだ。

「ジェナ姉ちゃんは何々しているし、母さんは怒るし、父さんは部屋で遊んでいなさい、って言うし 僕の相手をしてくれるのは姉ちゃんだけだよ」

コリンにとって、実の姉以上にノエルは姉だった。

「私はコリンのお義姉さんだからね。好きなだけ甘えなよ」

「本当！ 僕の姉さんなの？」

「そうだよ」

「えへへ、嬉しいな」

コリンは ノエルとリオンが政略的な意味で結婚することを知らなかった。

ただ、屋敷に來た優しいお姉ちゃんと思っていない。

込み入った事情は両親も話さないし、姉たちもその話題には触れない。

ジェナやフィンリーからすれば、女性を複数囲っているというのは我慢ならない話だ。

だが、自分たちは複数の男性とお付き合いをしてもいいと考えている。

王国は転換期であるため、以前の価値観を捨てられない女子は多かった。

ノエルがコリンの頭を撫でる。

「もうすぐリオンも帰ってくるし、その時に相談したらいいよ。私

が言つよりも二人にはこたえるはずだし」

「え、リオン兄ちゃんが帰ってくるの？ お土産はあるかな！」

「あると思うよ」

ニコニコするノエルに甘えるコリンは 少し頬が熱くなった。

春休み。

リオンが実家に戻ってきた。

留学先から戻ってきたリオンだが、忙しいのか実家に滞在できるのは数日だけだ。

玄関でニックスと話をしている。

「明日には王都か？」

「ああ、色々と予定があるからね」

「ルクシオンはどこだ？」

「あいつは飛行船。整備と補給で忙しい、ってさ。俺も明日から大変だよ」

「何が忙しいんだよ。どうせ働くのはルクシオンだろ？」

「俺も忙しいんだよ。ローランドの糞野郎に報告もあるし」

「止めるよ。陛下を糞野郎なんて呼ぶなよ。本当に止めるよ」

自由すぎる次男に振り回される長男。

ニックスは、胃の辺りを押さえていた。

コリンはリオンに抱きつく。

「兄ちゃん！」

「お、コリン。大きくなったんじゃないか？」

頭をガシガシと乱暴に撫でられ、コリンは「にしし」と言って笑う。

玄関には両親もいて、ジェナやフィンリーはリオンと会いたくないのか部屋から出てこなかった。

（やっぱり、リオン兄ちゃん凄え）

あの傍若無人な二人が、リオンが来ただけで大人しくなる。

コリンには、それはとても凄いことに感じられた。

「兄ちゃん、外国はどうだった？」

「言葉を覚えるだけで精一杯だったよ。お土産もあるから、後でみんなと食べな」

「やった！」

お菓子が食べられると喜ぶコリンだったが、そこにノエルがやってくる。

普段よりもおしゃれな格好をしていた。

「リオン、元気にしていた？」

少しぎこちないノエルが、コリンには緊張しているとすぐに分かった。

リオンも同様だ。

「あ、ああ、元気だったよ。そっちこそ、随分と元気になったじゃないか。綺麗になってビックリしたよ」

軽口を叩きつつ、相手を褒めていた。

リオンにしては珍しいので、ニックスや両親が首をかしげている。

リオンが口を押さえて「あゝ、ごめん。向こうだと歯の浮くような台詞が普通なんだ」と照れていた。

そして ノエルも頬を染めていた。

「そ、そうなんだ」

ぎこちない二人を前に、バルカスが咳払いをすると全員を部屋に戻そうとした。

ニックスも用事を思いだしたと言ってこの場を離れる。

「コリン、お前も部屋に戻りなさい」

バルカスに言われ、コリンが首を横に振る。

「何で？」

「何でって ほら、ノエルちゃんも一応はリオンのお嫁さんだからな。二人にしてあげた方がいいだろう？」

一応というのは、まだ正式に婚約も結婚もしていないからだ。

だが、そんなことはコリンにはどうでもよかった。

「え？」

ノエルがリオンの嫁になる事を、コリンは初めて知って そして胸が苦しくなった。

恋をしていたのだと、初めて気が付いた。

ジェナやフィンリーが恋バナをよくしているが、実感したのは初めてだった。

胸を押さえる。

妙に鼓動が早い。

「色々と事情はあるが、二人が仲良くやれるようにしてやらないとな。ほら、だからお前も部屋で待っていないさい」

リオンとノエルの方を見ると、二人とも照れている。

コリンはそこで 自分の初恋は終わったのだと気が付いた。

涙がこぼれ、そして 。

「リオン兄ちゃんの馬鹿ああ!」

そう言っ て部屋に走るのだった。

だが、急に弟に泣かれたリオンは驚く。

「え? え!? ど、どどど、どうした、コリン!」

追いかけてくるリオンを振り切り、コリンは部屋にこもった。

リオンがドアを叩いて声をかけてくる。

『何があった、コリン! 兄ちゃんが何か悪いことをしたか? おい、どうなんだ! ちゃんと出て来て話をしよう!』

ドアの向こうには、フィンリーもいるらしい。

『 ちょっと、なんでそんなに必死なの? 引くんですけど』

『五月蠅いんだよ、愚妹! 可愛い弟のコリンが泣いているんだぞ』

『はあ? 私もあんたの妹なんだけど? もっと大事にしてよ』

『俺の辞書に、妹という字と可愛いという言葉は両立しないと書かれているんだ。悪いが、お前はただの妹で、大事じゃない』

『何よ、この馬鹿兄!』

ドアの向こうで言い争っている二人を無視して、コリンは毛布をかぶって泣いていた。

恋した相手は、兄の嫁の一人だった。

プロローグ

今でもあの日々を思い出す。

そこは病院の個室だった。

幼い少女はベッドで携帯ゲーム機を操作している。

今では名前も思い出せない。

兄である自分は少女に　妹に声をかける。

「楽しいか？」

「うん！」

妹が遊んでいるのは、プレゼントとして買い与えたゲームだった。

何を選んだらいいのか分からなくて、乙女ゲーのコーナーで適当に選んだのを今でも覚えている。

自分はそのゲームに思い入れはなかった。

だが、妹は違う。

ゲーム機を宝物のように扱い、そして本当に楽しんでいた。

病弱で、ほとんどを病院で過ごしていた妹だ。

「お兄ちゃん 私もいつか学校に行けるかな？」

乙女ゲーの舞台は学園らしく、妹は憧れているようだった。

兄は嘘を吐く。

「行けるさ。だから、早く病気を治そうな」

「うん！」

兄 青年は、今では妹の顔も思い出せない。

日に日に弱っていく妹を見ているしか出来ず 後悔していた。

自分がプレゼントしたゲームソフトを宝物だと言う妹を今でも夢に見る。

すると、声が聞こえてくる。

妹とよく似た声だ。

「 騎士様。 時間ですよ、騎士様」

目を覚ますと、そこは飛行船の港だった。

ベンチに座っていた青年 【フィン・ルタ・ヘリング】は、ハッとして顔を上げると自分を覗き込む少女を見る。

濃い茶髪のポニーテールをした少女は、歳の割に小柄で紫色の瞳を持つ。

どこか夢に出て来た妹に似ている少女の名前は 【ミア】。

今年で十六歳になる少女は、これから留学するためにホルファート王国へと向かうのだ。

そして、青年はその付き添い ではない。

神聖魔法帝国の正式な騎士。

年齢は十八歳で、褐色の肌に銀色の長い髪を首の後ろで縛っている。

緑色の瞳、目つきは鋭い。

目鼻立ちがくつきりしており、美形の青年騎士は ミアの護衛騎士でもある。

フィンは、汗ばむ肌に手を触れながら思う。

（またあの夢を見たな）

前世の強い後悔。

（まったく、これも俺の後悔のせいなのか？ よりにもよって、あの乙女ゲーの世界に転生して 妹にそっくりなミアの護衛騎士になるなんて）

フィン は 転生者 だった。

そして、ミア は “ あの ” 乙女ゲー の 主人公 だ。

「 騎士様、体調が悪い んです か？ 」

心配 している ミア に対して、フィン は 首を横に振る。

「 少し眠って いただけ だ。 それより、出発の時間 か？ 」

大きな旅行鞆を持つ ミア は、期待に胸を膨らませている。

「 はい！ もうすぐ出発 ですよ。 ドキドキ します ね 」

「 そう だな 」

これからホルファート王国で待っていることを思うと、フィンは複雑な気分だった。

『 まったく しっかりしろよ、相棒 』

すると、フィンの荷物から黒い球体 が出現する。

大きさはソフトボールくらいで、大きな一つ目がついている。

その一つ目は、生々しい肉眼だ。

赤い瞳で、一見すると不気味であつた。

「黒助、お前は目立つから荷物に入っている」

黒助と呼ばれた物体は、不満そうに抗議するのだった。

『「ブレイブ」だ！ いい加減にちゃんと名前を呼べよ、相棒』

立派な名前が付いているのだが、フィンにはブレイブのことを黒助と呼んでいる。

そしてブレイブは フィンが手に入れたチートアイテムである。

本来の姿は古代の鎧だ。

新人類が残した古代兵器 それが、ブレイブの正体だった。

ミアがニコニコと笑っている。

「ブー君、怒ったら駄目だよ」

『お前が一番酷いけどな。何だよ、ブー君って』

冷静に返され、ミアが困っている。

「そ、そうかな？ 可愛いと思うんだけど」

『絶対に変だって 痛っ！』

困っているミアを見て、フィンはブレイブを叩くのだった。

「止める、黒助。ミアをいじめるな。ブー君だって可愛いじゃない

か」

『お前はそうやっていつもミアを全肯定するよな！ 少しは相棒の俺も大事にしろよ！』

ブンブンと怒っているブレイブを無視して、フィンは立ち上がり
とミアの手を握る。

「さて、なら行こうか。ミア、手を離すなよ」

ミアは照れながら、自分の騎士であるフィンの手を取った。

帝国には、高貴な女性に護衛騎士と呼ばれる存在が侍る。

帝国独自の風習だ。

通常なら、ミアのような平民に護衛騎士は付かない。

そのため、ミアはフィンのことを騎士様と呼んでいた。

「な、なんか、なれませんか」

「早くなれるんだな」

飛行船に乗り込もうとすると、杖をついた老人が二人の前に現れる。

帽子をかぶった紳士という感じの男だった。

「ミアちゃん、少し遅れたが見送りに来たよ」

「おじさま！」

ミアがおじさまと呼ぶ老人に近付く。

老人を見るフィンは、とても不満そうに表情を歪めていた。

「何をしに来た、爺」

「ほほほ　わしが見送りに来てはまずいことでもあるのかな、小僧？」

優しくそんな老人だが、フィンに対しては態度が違う。

「今日は忙しかったはずだ」

「ああ、だから無理をして見送りに来たのさ」

それを聞いて、ミアが申し訳なさそうにするのだった。

「おじさま、私のためにごめんなさい」

老人　【バルトルト】は、慌ててミアに問題ないと言う。

「ミアちゃんが留学するとしばらく会えないからね。会っておきたかったのさ」

「色々ありがとうございます。あ、あの　私、頑張ります！」

「その意気だ」

フィンがバルトルトと話したそうにすると、ブレイブが気を利かせる。

『ミア、相棒と爺さんは話があるから、少し離れて待っていような。絶対に遠くに行くなよ。いいか、絶対だぞ』

「わ、分かったよ、ブー君」

ブレイブがミアを連れていくと、フィンが老人に詰め寄る。

「どういうつもりだ？ あんたはあの子に必要な以上に関わらないって話だったはずだ」

バルトルトは帽子を深くかぶると、そこから睨み付けてくる。

「わしが何をしようが、わしの自由だ。騎士の称号を取り消すぞ、小僧」

「やってみるよ、糞皇帝」

このバルトルトという老人　実は帝国の皇帝だ。

そして、フィンと同じ転生者でもある。

バルトルトが少し離れて、ブレイブと話をしているミアに視線を向ける。

「あの子のことが心配になったただけだ」

「まったく、あのゲームでは冷たい父親だったのに、中身が違えば娘を溺愛する馬鹿親かよ」

「何とでも言え。それとな、王国の情報が入ってきた」

フィンが真顔になる。

「バルトファルトの情報か？」

ホルファート王国の英雄　バルトファルト侯爵は、今では王国以外にも有名人だ。

たった一人でアルゼル共和国を攻め落とした、などという噂が広がっている。

その他にも、短期間で侯爵まで成り上がった傑物だ。けつぶつ

だが、二人とも　バルトファルトなどというキャラは知らなかった。

あのゲームには出てこない登場人物だ。

つまり　自分たちと同じで『転生者』である可能性が高い。

「共和国を一人で滅ぼしかけた話だが、あれは嘘じゃなかったぞ。流石に一人ではなかったが、奴は自分と自分の派閥の戦力だけで共和国を崩壊手前まで追い込んでいる」

「本当なのか？」

「厄介な奴だ。帝国以外も奴の情報を必死にかき集めているよ」

「ミアの留学を止められなかったのか？ 時期をずらすとか、色々あるだろ」

「下手に影響が出ては困るからな。それに、あの子が望んだことだ。あの子には時間もない」

「そう だったな」

ミアの望みは、王国に留学して そこから外交官を目指すという夢があるのだ。

フィンも、そしてバルトルトも、そんなミアを止めることが出来ない。

「小僧、王国では注意しろよ。お前をあの子の側に置くのは不満だが、お前しか適任がいらないからな」

ブレイブを扱うフィン以外に、任せられないとバルトルトは言う。

「分かっているさ。ミアは俺が守る」

（それが俺のためにもなるからな）

救えなかった妹とミアを重ね合わせていた。

バルトルトが帽子に手を置いた。

「こちらのことは気にせず、留学を楽しんでこいとミアには伝えて

くれ。だが、お前は仕事をしろよ」

ミアとの扱いの差に、フィンは納得もしているが腹も立っていた。

「お前に言われるまでもない」

皇帝陛下に対してこの言い方は不敬だが、バルトルトも責めなかった。

お互い、転生者同士だ。

二人の間には独特な関係が出来上がっていた。

ミアが近付いてくる。

「騎士様、急がないと飛行船が出発しますよ。おじさま、それでは行ってまいります！」

挨拶をするミアに、バルトルトは笑顔を向ける。

「ミアちゃんは楽しんできなさい」

フィンは顔を背けるのだった。

（ミアちゃん“は”ね。本当にろくでもない爺だよ）

飛行船に乗り込み出発すると　ミアはベッドに横になっていた。

少し顔が赤い。

側にいるフィンは、ミアの額に手を触れた。

「大丈夫か？」

「へ、平気です。ちょっとはしゃぎ過ぎちゃったかも」

笑ってみせるミアを見て、フィンは胸が苦しくなるのだった。

ブレイブは、ミアの近くにいて様子を見ている。

フィンは、ミアに笑顔を向けた。

「少し横になっていればすぐに良くなる。俺は水をもらってくるよ」

椅子から立ち上がり、部屋を出るとブレイブも付いてくる。

廊下に出て、ミアに聞こえない距離まで来ると二人話をする。

『相棒、ミアの状態だが、あまりよくない。ここ最近で体が前よりも弱くなっている』

「分かっている。王国に行くのも、ミアの体調の件もあるからだ」

主人公は病弱だった。

そのため、前世の妹も自分と重ね合わせて見ていたのかもしれない。

だが、王国に行くと主人公はその血に眠る力を目覚めさせ 元
気になる。

「あの子の治療方法が見つかるといいんだけどな」

『俺は戦闘用だ。医療関係ではあまり頼りにならない。 すまな
いな、相棒』

「気にするな。お前のおかげで、俺はあの子の護衛騎士になれたん
だ。だから、後は俺が何とかする」

本来、護衛騎士という立場は、攻略対象の男子が立候補するもの
だった。

その場所を奪ったフィンだが、それには理由がある。

「出来る限りあの子を守らないとな」

『エリカ、だったか？ お前とあの爺さんが気にしている悪役って
？』

主人公のライバル というよりも、敵である「エリカ・ラファ・
ホルファート」は、王女である。

厄介な立ち位置と、帝国の留学生である主人公をいじめるという
酷い性格の持ち主だ。

しかし、外面が良かったために、主人公は苦勞することになる。

「ああ、ミアにゲームのような苦勞はさせられないからな」

「相棒も、あの爺さんもミアには過保護だよな。お前らの話が本当なら、ミアは自力で問題を解決できるんだろ？ 守ってくれる恋人も出来るって言うていたじゃないか。放置しても問題は少ないんじゃないか？」

「駄目に決まっているだろうが。あと、恋人候補だろうが、駄目な男にミアを任せられるかよ。ミアの恋人に相応しいか、俺が見極めてやる」

ブレイブは一つ目を閉じて、ヤレヤレと横に振るのだった。

ホルファート王国 学園の男子寮。

「クレアーレはどこだあああ！」

右手に刀を持って廊下を足早に歩く俺「リオン・フォウ・バルトファルト」は、ちよつと内気で心優しい青年だ。

陰湿な王様のせいで侯爵にされる可哀想な男でもある。

そんな俺が目を見走らせ、探しているのは 色々としてかしてくれたクレアーレだ。

「あの野郎、今度という今度は絶対に許さないからな！」

すれ違う男子たちが、俺を見て「ひっ！」と悲鳴を上げて道を譲る。

そんな男子たちを無視してクレアーレを探す理由だが　あいつ
やりやがった。

『マスター、こちらからクレアーレの反応を感知しました。ジャミングまで使って隠れていましたよ』

「でかした！」

相棒の【ルクシオン】が、俺にクレアーレの位置を知らせてくれる。

大股で歩き、使われていない部屋に入ると、そこにクレアーレが隠れていた。

『ヒッ！　ど、どうしてここが分かったの！？』

追い詰められたクレアーレが、ガタガタと部屋の隅で震えている。

俺は刀を両手で持った。

「言い訳を聞いてやる」

『待つて、話を聞いて！』

「ああ、聞いてやる。だが、その後は　分かっているな？」

どんな言い訳をしようが許されない。

何しろこいつは　三作目の攻略対象である男子の一人を消して

しまったのだ。

いや、正確には違う。

女にしてしまったのだ。

留学先から戻ってきてみれば、本来男であるはずの人物が女になっ
っていた。

こんなの許されるわけがない。

「アーロンをアーレちゃんにした理由を聞かせてもらおうか」

『違うの！ 知らなかったのよ！ 私は無実よ。ルクシオン、貴方
からもマスターを説得して頂戴！』

助けを求められたルクシオンは、どこか愉快そうにしていた。

『クレアーレ、貴女のことは忘れませんよ』

『てめえ、このひねくれ野郎があああ！』

口汚くなつたクレアーレを俺は掴む。

『マスターごめんなさい。でも、一人くらいいなくなってもいいじ
やない！ 攻略対象の男子なんてまだいるわよ』

「可能性の一つを消しておいて、よくそんなことが言えたな。お前、
反省していないな」

すると、クレアーレが開き直った。

『ええ、そうよ。悪いなんて思っていないわ。新人類なんて滅べばいいのよ！ 一人二人、実験に使用してもいいじゃない！ マスタ―のケチ！』

ルクシオンが俺の横で『その意見には賛成します』とか言っているので無視する。

「言いたいことはそれだけかあああ！」

『iiiiいやあああ！』

くそっ！ どうして俺の周りにいる連中は、揃いも揃ってろくでもないのか！

苦勞する俺の身にもなれよ！

悪役王女

ホルファート王国の王宮に来ていた。

今日はアンジェに頼んで、ある人物との面会を予定している。

控え室には、俺、アンジェ【アンジェリカ・ラファ・レッドグレイブ】と、マリエがいた。

アンジェもマリエも私服姿だ。

学園はまだ春休み期間中だからね。

「リオン、エリカ様との面会の許可は取れたが、本当にマリエも連れていくつもりか？」

マリエまで面会させる理由が分からないのだろう。

普通ならあり得ないが　マリエを連れて行く理由が俺にはある。

「色々と確認があるからね。それから、こいつには兄君を籠絡カウチングしたことを謝罪してもらおう」

マリエは項垂れている。

「勘弁してよ。もう、色んな人に怒られたんですけど！」

希代の悪女と呼ばれる女の正体が、実はポンコツな転生者だと誰

が思うだろうか？

そのため、アンジエもマリエを警戒していた。

「お前が決めたのなら文句は言わない。だが、失礼なことはするなよ」

アンジエが納得してくれたようで何よりだ。

「そっちは大丈夫。今回は、婚約できませんって言うだけだし」

「言い方を間違えれば失礼になるぞ。もっとも、この場合はどうなるのだろうな」

悪役王女のエリカ 何を間違えたのか、俺との間に婚約の話が出ている。

しかも、かなり具体的に、だ。

既に、エリカの婚約者とは婚約破棄をしているらしい。

アンジエはそちらの心配もしている。

「フレイザー家もどう動くか分からない。リオン、本当に注意しろよ」

「分かっているって。いざとなれば、ルクシオンもいるから大丈夫だよ」

視線をルクシオンに向けると、

「面倒ごとを押しつけるのが得意ですね。出来れば、対処可能な内に私に頼っていたできれば助かるのですが？」

毎回、ギリギリのタイミングで面倒ごとを解決させてきたので、嫌みを言うようになったっている。

嫌みを言う人工知能というのも凄い話だな。

「俺はお前を信用しているからな」

「心のこもっていない白々しい台詞ですね。よくもそれだけ嘘が言えたものだと、感心しています」

「お前はもつと本心を隠して俺を敬えよ」

「嫌です」

何とも冷たい人工知能だが、面倒ごとを拒否すると言わないところが従順じゃないか。

ルクシオンには頑張ってもらおうでしょう。

すると、部屋に侍女が入ってくる。

「アンジェリカ様、エリカ様の準備が整いました」

「そうか。すぐに行く。リオン 後は任せるぞ」

アンジェに言われ、俺は頷いて部屋を出ていく。

マリエも付いてくるのだが　さて、悪役王女様の顔を拝みに行くとするか。

通されたのは　お茶をする準備が整った部屋だった。

先に待たされている俺とマリエは、隠れているルクシオンも交えて話をする。

「マリエ、分かっているな？」

「当然よ、兄貴」

俺がマリエを連れてきた理由だが　女の嘘を見抜くのは、女ということだ。

「私、性格の悪い女を見抜くのは得意よ。あざとい女はすぐに分かるわ」

『何とも凄い特技ですね』

「下心がある女ってすぐに分かるのよね。鼻に付くのよ」

『おや、同族嫌悪ですか？』

「丸いの、あんた私のこと嫌いなのか？」

『いいえ、他の新人類よりも高く評価していますよ』

マリエは自分と同じ、あるいは裏のある女を見抜く自信があるそう
うだ。

その特技で、エリカを判別してもらうために連れてきた。

俺では判断に困るからな。

「お前と同じタイプだったらすぐに見抜けるな」

「ちょっと待つて。どういう意味よ？」

マリエが納得できないという顔をしていると、侍女に手を引かれて王女殿下が部屋に入ってくる。

緩くウェーブした長い黒髪は艶があって綺麗だった。

小柄ながら、しっかりと胸やお尻に肉が付いているのが分かる。

少女から女性になろうとしている女子は どこかマリエに似て
いた。

似ている要素は少ないのに、どうしてそう思ったのだろうか？

優しそうな垂れ目は黒い瞳だ。

ミレーヌさんの娘だけあり、将来有望そうだった。

この子にあのローランドの血が入っているとか信じられない。

エリカ　エリカ様は、俺たちを見ると微笑む。

「お待たせして申し訳ありません。バルトファルト侯爵。それから
マリエさん」

瑞々しい唇が俺たちの名前を呼ぶ。

白い肌。

まるでお人形さんのよう、とは失礼だろうか？

だが、それだけ完成されたような美しさがあった。

俺はハツとして、すぐに挨拶をする。

「お、お初にお目にかかります。自分は」

クスクスとエリカ様が俺を笑う。

馬鹿にしている感じではなかった。

「存じておりますよ。国を何度も救ってくださった英雄殿ですから
ね」

俺よりも年下のはずなのに　中身を含めれば、確実に俺の方が
人生経験を積んでいるはずなのに、目の前にいる女の子に勝てる気
がしなかった。

マリエを見ると　目を見開いて驚いている。

おい、それはどういう反応だ？ どっちだ？ どっちなんだ？

実は良い子でした、の方がありがたいが、本当に屑な人だったら面倒になる。

アンジエのようなパターンもあるし、早めに知っておきたいのだが。

「こうしてお話をする機会は、私も欲しかったのです。バルトファルト侯爵にも、言いたいことがあるでしょうから」

「あ、はい」

間抜けな返事をしてしまふ自分が情けない。

エリカ様が着席すると、侍女が給仕を行う。

ただ エリカ様は、そんな侍女に言う。

「少しの間だけ席を外していただけますか」

「エリカ様、ですが」

侍女は俺たちを警戒している様子だった。

「大丈夫です。この方たちは聡明そうちいですからね。ここで私に何かをするなんてあり得ませんよ」

侍女は一礼して部屋を出ていく。

それにしても、聡明と言われると照れてしまう。

ルクシオンがテーブルの下から『マスターには似合わない言葉ですな』とか言っているが、無視して会話を再開した。

「エリカ様、単刀直入に言います。俺との婚約ですが、納得されていますか？」

国の都合で婚約破棄をさせられ、見ず知らずの男に嫁がされる。

納得しているはずがない。

そう思っていたのに。

「それが私の務めですから」

この年齢で割り切っていた。

「いや、でも」

「私は民によって生かされています。そんな私が、個人的な理由で婚姻を取りやめるなど出来ません。国のためになると“母上”が判断したのなら、その決定に従うだけです。バルトファルト侯爵はお嫌でしょうが、母上の決定に私が反対することはありません」

どうしよう。実は私も納得できないの！ という感じで、ミレーヌさんに抗議してくれると思ったのに。

想像以上にお姫様だった。

アンジェもそうだが、ガチのお姫様って覚悟決まりすぎじゃない？

「王女殿下、俺は今回の婚約に納得が出来ません」

「そうですね。それは理解しています。ですが、私から言えるのは、侯爵に相応しい妻になるように努力するということだけです」

いきなり手詰まりだ。

俺が助けを求めるようにマリエを見ると、こいつはまだ動揺していた。

お前、少しは役に立てよ！

「バルトファルト侯爵、既にこの婚約は個人の感情で破棄できるよ
うな」

エリカ様の話の途中で、マリエが立ち上がった。

俺が驚くと、エリカ様も驚いて口を閉じる。

だが、更に驚くことになる。

「エリカ あんた、もしかして」

俺はすぐに立ち上がり、マリエを座らせるのだった。

「おい、馬鹿！ 何で呼び捨てにした！ 不敬だろうが」

こいつを連れてきたのは失敗だった。

そう思っていると、エリカ様も目を見開く。

マリエは俺の手を払いのけ、テーブルにしがみついた。

「ファミレス！ え、えっと、名前は出てこないけど、近くにバツティングセンターがあるの！ 野球選手の絵が描いてある看板があるの。そのファミレスの人気メニューは」

「おい！」

何を言い出すのかと思っていると、マリエの話の続きを口にしたのは エリカ様だ。

「 ドリアとハンバーグのセット」

ルクシオンがテーブルの下から出てくる。

『マスター、これはどうやら』

「 いや、嘘だろ」

エリカ様も転生者だった。

その可能性も考えてはいた。

だが、あり得ないのはここからだ。

マリエがポロポロと涙をこぼしている。

「エリカ エリカアア！」

エリカ様も同様だ。

「母さん なんだよね？」

目を潤ませ、そして指で涙を拭っていた。

衝撃過ぎて理解が追いつかないが エリカ様は、俺の前世の姪
っ子だったのか？

「おい これ いったいどうするんだよ」

立ち上がったマリエが、エリカ様に抱きついてワンワン泣いている。

「エリイイガアア！」

鼻水まで出してマリエが泣いていた。

そんなマリエの頭を撫で、エリカ様は優しく抱きしめている。

「母さん。また会えたね」

いや、これどっちが親だよ。

普通は逆じゃない？

王宮内の別室。

そこにいるのは、ローランドとミレーヌだった。

「ミレーヌ、あの小僧を可愛いエリカに会わせる許可を出したそうだな。何故だ！」

呆れかえるミレーヌは、ローランドに冷静に返す。

「いずれ夫婦となるのです。面会するのなら早い方がいいでしょう」

「私は認めていない！」

「では、エリカ一人のために国を焼きますか？」

ミレーヌの冷たい瞳に、ローランドはたじろいでしまう。

一旦、呼吸を整える。

「レッドグレイブ家が王位を篡奪さんだつすると本気で考えているのか？」

積みもり積もった王国への不満は、解消されたわけではない。

それに、今まで優遇されてきた貴族たちも、いきなりの扱いの差に納得できずにいた。

「多少のリスクを抱えてでも、リオン君を王宮で囲います。それがもつとも被害の少ない方法ですよ」

「だが」

「レッドグレイブ家だけではありませんよ。力のある貴族たちは、これを機に王国から独立を考えています。彼らにとって今が好機なのです」

戦争をしていないだけだ。

少しでも今の均衡が崩れれば、王国はすぐに各地で内乱が起こるだろう。

ミレーヌが強引にリオンとエリカの婚約を決めたのは、もう時間が無かったからだ。

「貴方に解決できるのなら、すぐにでもエリカの婚約を破棄して構いませんよ」

そんなミレーヌの挑発に、ローランドは乗らなかった。

「冗談を言つな。お前に出来ないことが、私に出来るわけがない」

「そうやって、いつも貴方は逃げるのですね」

「効率的と言え」

ミレーヌは有能だ。

ローランドはそれをよく理解しているし、王妃としては満足している。

だが、妻としては 別だ。

「ミレーヌ、お前はそのままあの小僧の飛行船を、王家の船の代わりにするつもりか？」

「切り札のなくなった王国には絶対に必要では？」

「お前の故郷が危ないからではないのか？」

「ええ、それも理由ですよ。ですが、今の王国に内乱をしている余裕はないのですよ」

アルゼル共和国が事実上の敗北。

強国が倒れ、各国の政治的なバランスが崩れている。

非常に危険な時期だった。

下手をすれば、対外戦が始まってしまう。

今の王国は火薬庫で火遊びをしているような状況なのだ。

「 リオン君には納得してもらいます。アンジェも同様です」

「そのために娘を差し出すのか。お前は王妃としては立派だが、母としては失格だな」

「その決断を私にさせたのは貴方でしょうに！」

二人の言い合いが収まり、しばらく無言の時間が続く。

ローランドは、思い出したように部屋から出ていく。

「おっと、そろそろ予定の時間だ」

「また、新しい女のところに向かうんですね」

「お前はそうやって、事細かに調べるから駄目なのだ。男は適度に遊ばせるのがいい妻の条件だぞ」

逃げるように部屋からローランドが去って行くと、ミレーヌが咳く。

「いい夫の条件を満たしてから言って欲しいですね」

ローランドは、王宮を抜け出すと知り合いの男と会う。

その男は、王宮に勤めている者だ。

ローランドとは付き合いが長く、学園時代からの友人だった。

「待たせたな」

「陛下、火遊びも程々にしてください」

気の弱そうな男に注意されるも、ローランドは聞く耳を持たない。

「馬鹿を言つな。美女を追いかけるのが男という生き物だ」

「ですが、相手は」

「分かっている。何の問題もないから、お前は安心して俺に手を貸せ」

ローランドが建物の中に入ると、そこには金髪の女性が待っていた。

年齢は二十代前半。

ローランドに作った笑顔を向けてくる。

「あ、陛下！」

「ここではローランドと呼んで欲しいね」

「そうでしたわね。では、ローランド様、今日はどうぞされますか？」

「そうだな。メルセの柔肌で癒してもらおうか。年増女にいびられて、もうクタクタだからな」

「あら、それは大変でしたね」

この非常時に、ローランドは新しい愛人に会いに来ていた。

森

バルトファルト領から王都にやって来た飛行船から下りたのは、ノエルだった。

茶色い革製の旅行鞆を持ち、港に立つと背伸びをする。

「地面っていいわよね」

そんな感想を口にするノエルが王都に来た理由は、学園に入学するためだ。

今年から二年生として編入する。

続いて飛行船から下りてきたのは、フィンリーだった。

ボブカットで、毛先は内側にカールしている。

小柄のスレンダー体型で、可愛い感じの女子だった。

「もう最悪」

だが、表情が不満そうで、魅力を台無しにしている。

ノエルは、義理の妹になるフィンリーに顔を向けると困った顔をする。

「あんだね、いい加減にしなさいよ。飛行船の中で、ニックスさん

に散々言われたでしょうに」

「お兄ちゃんに色々と言われたから腹が立つのよ。なんで私は奴隷を買えないのよ。学園に来たら、夢のような生活が待っていると思っただのに」

フィンリーの世代は、劇的な転換期を迎える世代だ。

国や学園の方針が変わり、専属使用人という亜人種の奴隷を持つことは品がないとされている。

品 というよりも、国が徹底的に排除した形だ。

無理につれて学園に入学しようとすれば、退学処分もあり得た。

「王国の風習って変わっているわよね。堂々と愛人を連れ回すとか、どうかと思うわよ」

「別にいいじゃない。今まではそれが普通だったのに」

フィンリーたちの世代から言わせてもらえれば、急に言われても困る、というのが本音だった。

バルトファルト家の飛行船からは、ニックスやジェナも下りてくる。

「王都に来るのも久しぶりだな」

ニックスがそう言うと、私服姿のジェナは泣きそうになっていた。

「懐かしの王都　私、もうここに住むわ」

感動して泣いているジェナを見て、フィンリーは舌打ちをしていた。

「何よ。全部お姉ちゃん奴隷が、お兄ちゃんに手を出すから悪いんじゃない。私たちまで巻き込んで、最低よ」

ジェナが言い返す。

「私のせいだって言いたいの？　そもそも、リオンに手を出したから専属使用人の制度が消えたんじゃないからね。逆恨みしてんじゃないわよ」

いがみ合うようになった二人の姉妹。

それを見て、ノエルは苦笑いをするしかなかった。

（　　レリアは元気にしているかな？）

思い出す故郷は　きっと大変だろう。

ニックスは、喧嘩をしている姉妹とノエルに声をかける。

「みんな行くぞ。俺も忙しいんだから、あまり面倒をかけないでくれ」

ニックスが王都に来た理由は　お見合いだった。

ノエルも歩き出すと、ニックスの隣を歩く。

「ニックスさん、お見合いっていつするの？」

「明日から毎日六人と面会だって。それでも数日で終わらないから困るよ」

押し寄せてきた身上書の山。

それだけ、バルトファルト家と縁を結びたい貴族が存在していることを意味している。

ジェナだけは悔しそうにしていた。

「リオンの伝を使えば、王都にいるお金持ちと結婚できるのに」

それを聞いたフィンリーは、ジェナに余裕の笑みを向けた。

「姉さんは諦めたら？ 母さんが、絶対に余所には出さないって怒っていたもの。ま、私はお兄ちゃんの伝でお金持ちの貴公子と結婚するけどね」

「あんだ、順番は守りなさいよ。私の方が先に結婚するんだからね！」

「そんなの決まってるじゃない！ というか、姉さんを待っていたら、いつまで経っても結婚できないわよ！」

「何ですって！」

喧嘩する姉妹を見て、ニックスは両手で顔を覆う。

「姉妹で醜く争うなよ」

賑やかなバルトファルト家の一団。

だが、港は騒がしく、目立ってはいなかった。

ノエルが周囲に視線を向ける。

「人がいっぱいね」

学園への入学の前に、大勢の人が港に集まっていた。

「リオンたちは元気にしているかな？」

ノエルは、リオンに会えることを楽しみにしていた。

学園。

入学式を前に、学生寮が慌ただしい時期に 問題が起きていた。

「アーレちゃん、元気だな！」

「いじめられたらちゃんと言えよ」
「いつでも戻ってきていいんだぜ」

ノエルがリオンに会うために、男子寮に足を運ぶと玄関は大騒ぎだった。

「え、何これ？」

男子寮を退寮するらしいのは 見た目は女子のアーロンだった。

アーロン アーレは涙を拭っている。

「みんな、ありがとう。学園では今まで通りに声をかけてね」

大勢の男子たちが涙を流している。

中には職員も混ざっていた。

ノエルには何が起きているのか分からない。

困っているノエルを見かけたのは、アンジェだった。

これからリオンに会いに行くようだ。

「ノエル、もう来ていたのか」

「アンジェリカ？ これってどういう状況？ 何で、女子が男子寮を退寮するの？」

意味が分からないノエルに、アンジェは目をそらした。

「男から女になった。そのため、男子寮を退寮させるそうだ。詳しい説明は出来ないぞ。私も意味が分からないからな」

性転換など、ホルファート王国でも異例のことだった。

学園側も苦慮した結果、アーレを女子寮に移すことにした。

「王国って変わっているわよね」

ノエルのそんな感想に、アンジエは言い返したいが何も言えないようだ。

「あれが普通と思うなよ。違うからな。だが、今はそんなことよりも、大事なのはリオンの方だ」

真剣な表情をするアンジエを見て、ノエルは何か起きたのかと不安になる。

「何かあったの？」

「来れば分かる。こっちだ」

二人はリオンの使用する部屋へと向かう。

侯爵で三位上という高い地位を持つリオンに用意されたのは、ほとんど男子寮近くにある一軒家だった。

そこでノエルを待っていたのは。

「エリカちゃんは！」

『尊い！』

「そして、エリカちゃんは！」

『美しい!』

「おまけに!」

『可愛い!』

部屋の中、ノエルはクレアーレと叫んでいるリオンを見ていた。

「え、何これ？」

アンジエが右手を額に当てている。

「エリカ様と面会してからずっとこれだ」

リオンとクレアーレが高笑いをしていると、リビアが声をかけていた。

「リオンさん、しっかりしてください! ルク君も何か言ってあげて!」

黙っていたルクシオンが、リオンに報告する。

『マスター、次のエリカとの面会ですが、献上する品をご用意いたしました。白金の延べ棒を三十キロほどご用意しております』

「そうか。他には？」

『各種問題なく取り揃えております』

「でかした!」

いつもなら嫌みや皮肉を言うルクシオンまでもが、リオンに同調している。

リビアが泣きそうになっていた。

「リオンさんたちが壊れた」

そんなリビアに、リオンは慌ててフォローする。

「それは酷くない？ 俺は普通だよ」

「明らかにおかしいじゃないですか！ 戻ってきてから、ずっとエリカちゃん、エリカちゃん、って！」

「い、それはその む！ アンジェとノエルが来た！」

言い返せず、こちらに視線を向けてくるリオンにアンジェが溜息を吐いていた。

「リオン、これで面会は何回目だ？ お前、毎日のようにエリカ様と面会していないか？」

「申請したら許可が出たんだ。だから、お土産を用意しようと思つて」

「それで白金三十キロだと？ お前は馬鹿なのか？ いったいどれだけの価値があると思っている？」

「いや、でも、今の王宮だと色々入り用だろうし」

「もらった相手も困るようなものを渡すな。ルクシオン、お前も止める」

『必要だと判断しましたので、拒否させていただきます』

白金とは、この世界では金の上位互換で 魔法的な価値を併せ持つ金属だ。

美しい輝きに加え、利用価値も高い希少金属だ。

お土産に渡すような品ではない。

ノエルはリビアに声をかける。

「ねえ、何があったの？」

「リオンさん、婚約予定の王女様と面会してから変になったんです。アーレちゃんも、ルク君も様子がおかしくて」

急遽婚約が決まったエリカと面会し、まるで洗脳されたかのように溺愛しているという話だ。

ノエルはリオンを見る。

だが、それ以外の部分は以前と変わらないようにも見えた。

（これ、いったいどうなっているの？）

リビアは、続きを話す。

「マリエさんも、王女様と面会したんですけど　やっぱりおかしくなちゃって」

「マリッチも？」

リビアは部屋の窓を見る。

「　リオンさんが王女様のために色々とするのを見て、自分もやるって言い出したんです。“　ちよつとエリカのためにロストアイテムを見つけてくる！”　って、ユリウス殿下たちを連れて冒険に出ました」

それを聞いたノエルは思う。

「王国ってやっぱり変わっているわよね。それで、いつ帰ってくるの？」

リビアも言われて、

「あれ？　そういえば、新学期も近いのに戻ってきませんね」

クレアーレが二人に近付いてきた。

『そうね。もうそろそろ戻ってこないと新学期に間に合わないわね。もしかして　遭難していたりして』

「いや、それはさすがにないでしょ」

ノエルが笑いながらそう言うと、リオンやアンジェ　そしてリビアも冷や汗を流していた。

ルクシオンが言う。

『マリエたちのことですから、可能性は高いですね。そろそろ回収に向かいましょうか』

森の中。

そこには鉈を振り回すマリエの姿があった。

「みんな、もう少しよ!」

険しい森の中。マリエは先頭を進んでいた。

全ては、エリカにロストアイテムをプレゼントするためだ。

毎日のようにリオンがエリカにプレゼントを届けるので、それを見ていて自分にも何か出来ないかと考えた。

自分にはリオンのような財力もチートもない。

ならば、どうするか？

自分で見つければいい、という答えに辿り着いた。

ゲーム知識を思い出し、自分でも探せそうなアイテムを回収するために冒険に出たのだ。

「マリエ、言いたくはないが　ここは前に通った場所じゃないか？」

傷だらけの泥だらけになったユリウスが、皆の気持ちを代弁する。

「え？」

カイルが森の中を見渡して、

「ここを通るのは三度目ですよ。ご主人様、僕たち　遭難していませんか？」

「え！？」

カーラが息を切らして、その場に座り込んでいる。

「マリエ様　も、もう、食糧が残り少ないです。それに、早く戻らないと新学期が始まってしまいますよ」

「　嘘」

立ち止まったマリエに、グレッグとクリスが話していた。

森の中、さすがの二人もふんどし姿ではない。

「なあ、飛行船の場所ってどっちだ？」

「ふっ、この森の中で分かると思うのか？　分かっていたら迷子になどなっていない」

ブラッドとジルクも話をしている。

二人は地図やら道具を持ち、この森について考えていた。

「既に三日も迷っているってことは　ここ、結構危ない場所かな？」

「でしょうね。もっと入念な準備をしてくるべきでした」

そして、ユリウスがマリエに言う。

「遭難してしまったな。だが、こういう時は助けが来るのを待とう。幸い、バルトファルトには俺たちがどこにいるのか伝えてある。迎えに来るまで、一ヶ月もかからないはずだ」

ユリウスたちは冒険者の末裔だ。

こういう状況での行動方法は教え込まれており、この程度では慌てない。

グレッグとクリスが動き出す。

「なら、俺は枯れ木でも探してくるかな」

「私も使えそうなものを見つけてくる」

ブラッドは、地図をしまってメモを取り出した。

「この辺りに何があるか調べてくるよ」

ジルクは荷物を降ろして、道具を取り出していた。

「では、私は雨風をしのげる場所を作りましょうか」

皆が活き活きとしていた。

ユリウスなど。

「とりあえず、肉を確保だな。串焼きにして食べよう」

しばらく森の中で過ごす気満々だった。

「ちょっと！ 何でそんなに余裕なのよ！」

「何で、って 遭難したら動かないのが基本だぞ、マリエ。だが、安心して欲しい。森の中でも俺たちは生きていける！」

こういう時だけたくましいのがユリウスたちだ。

お前ら、もっと普段から頼り甲斐を見せろとマリエは思っただ。

「あれ、ちょっと待って。このままだと新学期に間に合わないの？」

「うむ！」

マリエはその場に立ち尽くす。

（ちょっと待って、それだとエリカの入学式に間に合わないじゃない！）

エリカの入学式には参加したいと思うマリエは、頭を抱えて叫ぶのだった。

「お兄ちゃん助けてえええ！」

その声に応えたのか　木々が揺れると上空にアインホルンが現れる。

カイルとカーラが手を握りあい喜ぶ。

「侯爵来たあああ！」

「これで助かりますね、マリエ様！」

確かに助かった。

だが、マリエは地面に崩れ落ちる。

（ロストアイテムを　回収できなかった。これじゃあ、エリカにプレゼントを渡せない）

留学生

学園校舎の前に来たミアとフィンは　それぞれ違う感想を述べる。

「うわー、凄いですね、騎士様。この学園、お城みたいですよ。こんなところで、貴族の皆さんは勉強するんですね」

平民として育ったミアからすれば、王国の学園はお城に見えた。

何もかもが豪華に見えてしまう。

だが、フィンは違う。

「貴族趣味が出過ぎているな。無駄な装飾が多い」

金をかけるべき所を間違っていると思っているようだ。

ミアが困っている。

「き、騎士様、厳しいですね」

「ん？ いや、別に文句を言いたいわけじゃないが　まあ、お国柄だろうな。帝国はもっと質素な建物が多いから、異文化を感じられていいんじゃないか？」

慌ててフォローしてくれる自分の騎士に、ミアは安心した。

「今日からここで学ぶんですね。私、楽しみです」

嬉しそうなミアを見て、フィンも笑顔を向けてくる。

「よかったな。さて、入学式に向かう前に、教室へ行こうか。ミアの教室はこつちだ」

フィンが手を引いてミアを連れていく。

ミアはキヨロキヨロと周囲を見ていた。

（外国の学園に通えるなんて、私って幸せ者だな）

これからの学園生活に期待を膨らませていた。

「お宝を探そうと森で遭難するとか、お前たちは本当に馬鹿だな」

入学式の準備で忙しい中、俺は自分の寄子になってしまった四人を前にグチグチと文句を言っている。

嫌な上司の典型だろうが、俺にだって言い分がある。

「怒らないでくださいよ。みんな無事でしたし、よかったじゃないですか」

笑顔のジルクは、悪びれる様子もない。

「お前らはもつと反省しろよ！」

ブラッドなど、髪型が決まらなないと手鏡を持って髪を触っていた。

「新学期には間に合ったんだ。いいじゃないか。それより、この髪型をどう思う？」

「知らねーよ！」

そして、更なる問題児が二人いる。

「どうよ、新しいはっぴだぜ！」

「グレッグ　それ、どこで作った？　私も欲しいぞ」

目を離すと服を脱ごうとする二人　グレッグとクリスだ。

今は制服の上着を脱いで、その上にお祭りのはっぴを着用していた。

もう、何なんだよ、こいつら！

そして、面倒なこいつらのおまけが　。

「バルトファルト、新入生への挨拶は俺がしていいのか？　お前がした方がいいだろ」

「何でお前がいるのに、俺が新入生に挨拶をするんだよ。俺、そういうの嫌いなんだ」

「俺も得意じゃないんだが？」

控え室で賑やかな五人の面倒を見ている俺は、早く制服姿のエリカを見たいと思うのだった。

前世　　出会うことのなかった姪っ子と、この世界で出会えたのだ。

それに、エリカには大きな恩がある。

返しきれない恩のある姪っ子の面倒を見ない伯父はいない。

「ところでバルトファルト」

「どうした？」

ユリウスに尋ねられたのは、留学生のことだった。

「帝国から留学生が二人来ている。俺たちが関わるわけじゃないが、何かあれば助けてやって欲しい」

「　　まあ、気にかけてやるが、どうして急にその話をするんだ？」

帝国からの留学生は、俺も気になっていた。

何しろ、本来なら一人だけが留学してくるはずなのだが、二人も留学してくる。

一人は主人公で間違いないが、もう一人は男だ。

ゲームには登場していないというから、怪しくて仕方がない。

ただ、ユリウスはあの乙女ゲー云々という話を知らない。

それなのに、気にかけてやって欲しいとはどういう意味だろうか？

ユリウスは少し困った顔をしながら、俺に事情を話すのだった。

「実は　今年はエリカの他に、弟も入学してくるからな」

ユリウスの腹違いの弟は、三作目に登場する攻略対象の男子だったはずだ。

マリエ曰く「アウトロー」だったか？

だが、女性のイメージするアウトローってどうなんだろう？

本当に無法者、ということでもない気がする。

俺たちの会話にジルクが割り込み、ユリウスの話に付け足してくる。

「【ジェイク】殿下ですね。殿下とは腹違いになりますけど、もっとも王太子に近い立場にいます。ただ、ちよつと性格に問題がありますね」

「そんなに！？」

「何故、そんなに驚くんですか？」

「いや、だって、性格に問題しかないお前らが、性格に問題がある

って言うくらいだぞ。そいつはきつとんでもなく性格が悪いに違いない、ってね」

からかってやると、ジルクがムスツとしていた。

「失礼な。ですが、ジェイク殿下は少々粗暴　いえ、ワイルドな方です。留学生相手に何かするとは思えませんが、気を付けるべきですね」

ワイルド、ね。

そんなジェイク殿下が、主人公を射止めて物語をハッピーエンドに導くなら問題ない。

むしろ、応援してやってもいい。

だが、エリカに手を出したら　人生から退場してもらおう。

「留学生に関しては俺も気を付ける。さて、そろそろ時間だから行くぞ。あと、そこのお祭り馬鹿二人は制服を着ろ！」

「え？　どうしてだ、バルトファルト！」

「これは私たちの正装だぞ！」

お前らはどうしてこんなに残念なんだ？

だが、いつまでも馬鹿に構ってはいられない。

俺には気になることがあった。

悪役王女が、実は優しい姪っ子だったのだ。

それとは逆に、主人公が酷かった　というパターンだけは嫌だ
と思いつつ、俺は控え室を出て入学式の会場へと向かう。

主人公を早いところ見極めたいのだが　最近、ルクシオンの様
子がおかしい。

エリカに構っているだけではなく、どうにも不機嫌なのだ。

主人公の様子を探らせても成果が出ていないのも気になる。

「　厄介だよな」

そう呟き、入学式の会場に入った。

入学式。

在校生代表の挨拶を読むのは、ユリウスだった。

その様子を、ミアの隣に座ってみているフィンは口元に手を当て
て見ている。

（ここまでは順調　とは言い難いか）

王国に入国し、入学式までは普通にゲーム通りの進行を見せてい
た。

だが、ブレイブから気になる報告がある。

フィンにテレパシーで伝えてくる内容は、

『相棒、どうやら俺様たちは見張られているようだ。この鉄臭い感じは、旧人類共の遺物に違いないぜ』

（旧人類？）

『生存競争に敗れたなら、さっさと退場して欲しいよな。苛々するぜ』

ブレイブが苛立っているのを感じ、フィンは隣に座っているミアを見る。

緊張している様子だった。

（俺たちを探っているのか？）

『俺様が防いではいるが、狙いはどうやらミアらしいな。相棒たちが気にしている“転生者”かもしれないぜ』

（かもしれない、か。ちゃんと調べたのか？）

『向こうにも厄介な奴がいるんだよ！ 一番怪しいのは、リオンっていう英雄だな』

自分たちが知らない名前。

最近になつて名前が聞こえてくるようになった王国の英雄。

（チートアイテムを手に入れて成り上がった、っていうのはあり得るな）

フィンは警戒を強める。

（黒助　お前なら勝てるか？）

『負け犬共に負けるかよ。だが、相手の戦力は未知数だからな』

フィンは考える。

（黒助でも調べきれないととなると、厄介だな）

在校生代表の挨拶を終えるユリウスと代わり、今度は新入生代表のジェイクが出てくる。

癖のある金髪はショートで、鋭い目つき。

青い瞳が綺麗だった。

気の強そうな顔付きをしている王子様は、先程の大人しそうな兄とは違い　。

「私がジェイクだ」

いきなり、入学式とは思えない挨拶をはじめ。

「さっきの愚かな兄は、王太子を廃嫡された負け犬だ。そして、も

つとも王太子の地位に近いのはこの私になる。ホルファート王国を背負うのが誰なのか、お前らはその辺りをしっかり考えておけ」

ミアが驚く。

「き、騎士様、挨拶をしている人、何か今までとは雰囲気の違いませんか？」

フィンが右手で顔を隠した。

（ゲームでもいきなり派手な挨拶をしていたが、リアルでも同じかよ。というか、リアルだと どう見ても痛い奴じゃないか）

ジェイクが教師たちに止められ、下がっていく姿を見てフィンは思った。

（あいつにミアは任せられないな）

「ミア、あの手の男は気を付けた方がいい」

「は、はい？」

自分の騎士が何を言っているのか分からないミアは、頷きつつも不思議そうにしていた。

フィンは前を向く。

（さて、相手はどう出てくるかな？）

まだ会ったこともないリオンが、どのような人物なのか警戒する

フィンだった。

『私の邪魔をする存在がいます。しかも、新人類の遺物です』

入学式が終わり、控え室に下がった俺にルクシオンが報告してきた。

「可能性があるとすれば、留学生の主人公とその付き添いか」

『付き添いは護衛騎士という立場ですね』

「マリエが言っていたな。確か、帝国の制度だったか？」

留学生を探らせてはいるが、どうにも情報が集まらない。

その理由が 新人類の遺物というか、兵器だとは思わなかった。

ユリウスの弟が痛い奴だっただけでも大変なのに、まさか留学生たちがチート持ちとは厄介だな。

「お前が邪魔をされて情報を集められないとなると、相手は強いのか？」

『何を言っているのですか？ 私が負けるなどあり得ませんよ。相手の戦力が測れていないので警戒しているだけです。どうしてそのような評価になったのか疑問ですね。もしや、私よりも強いのではないか？ そんな疑問をマスターは抱いているのですか？ 心外ですね』

早口で捲し立ててくるルクシオンに呆れつつ、俺は相手の出方が分からないのが怖いと思った。

「何を考えているのか分からないのは怖いよな。せめて、何が目的なのか分かるとありがたいんだが」

『マスター、先手必勝です。留学生など最初からいなかったというのはどうでしょうか？』

「却下だ。留学生に酷いことをするなんて、アルゼル共和国と何も変わらないぞ。俺は心優しい男だから、その手は使わない」

『お優しいですね』

「相手の目的が分かれば、どんな手を使ってでも対処するさ」

『マスター、私は信じていましたよ』

敵対するなら容赦なく潰す。

それが 俺がアルゼル共和国で学んだことだ。

もう、転生者に期待なんてしない。

「一度、留学生と話をするか」

搦め手が駄目なら、正面から攻めるしかない。

そこは学園の謹慎室だった。

ジェイクが放り込まれ、非常に荒れていた。

「私の価値を知らない馬鹿共が！」

扉の向こうにいるのは、そんなジェイクの乳兄弟である【オスカル・フィア・ホーガン】だった。

背が高く、ガッチリした体つきをした赤毛の男だ。

髪は後ろで束ねている。

厳つい感じで、ジェイクの護衛という印象を与える男だった。

「殿下、入学式の挨拶は真面目にすると行っていただけではありませんか」

「だから真面目にやっただろうが。私の立場を明確に伝えてやった」

このジェイクという王子は野心家だった。

邪魔な兄が廃嫡され、もっとも王太子の地位に近い立場になった。

そのことで、多少浮かれている。

「軟弱な兄上に代わり、私がこのホルファート王国を導かなければならない。オスカル、それはお前も分かっているだろう？」

「はい、殿下」

ジェイクは謹慎室にあるベッドに腰掛け、足を組む。

「オスカル、バルトファルトを呼べ」

「殿下？」

「王宮では面会も許されなかったが、学園に来ればこちらのものだ。どちらに付き従うのか、バルトファルトに問う」

ジェイクの性格もあって、王宮ではリオンとの面会が許されなかった。

（バルトファルト、英雄なら判断を間違えるなよ。もしも間違えた場合は 私は父上や王妃様のように甘くはないぞ）

今や王国の切り札となりつつあるリオンを、自分の下に付けようとジェイクは考えていた。

「すぐに呼んでまいります」

「頼んだぞ、オスカル」

オスカルが離れていく。

ジェイクは自分が王になることを考えながら、微笑むのだった。

「バルトファルト、私の前に膝をつく時が来たぞ」

しばらく待っていると、オスカルが戻ってきた。

「殿下、お連れしました！」

だが ジェイクは頬を引きつらせる。

「オスカル そこにいるのは誰だ？」

オスカルが連れてきた女子を見ると、

「は、はじめまして、殿下！ フィンリー・フォウ・バルトファルトです。あ、あの、殿下に呼び出されるなんて思ってもいませんでした」

バルトファルトで間違いはなかった。

オスカルは満足したような表情をしている。

「殿下も色を知ったのですね。まさか、バルトファルト嬢をお呼びになるとは思いませんでした」

ワナワナと震えるジェイクは、手を握りしめて 叫ぶ。

「オスカアアアルウ！ 私が呼んだのは兄の方だ！」

「え！？ まさか、そっちでございますか！」

「どういう意味だ！ お前は、私の話を聞いていたのか！？ むしろ、どこをどう間違えば、その女子を連れてくるのだ！」

本気で驚いているオスカルを見て、ジェイクは思うのだ。

（どうして私の乳兄弟がこいつなのだ！？ 兄上の乳兄弟なら、もっとうまくやっただろうに！）

頭を抱えるジェイク。

そして、それを見て困惑するオスカル。

フィンリーは、期待しながら連れてこられたら、兄の方がいいと言われてとても微妙な気分になっていた。

エリカとミア

上級クラスの教室。

一年生たちが集まるのは、今年入学した中で一番話題の 王女様の席だった。

「エリカ様、私はルノール子爵家の」

「私は伯爵家の」

「じ、自分は男爵家跡取りの」

普段、表にあまり出てこないエリカに自分売り込む生徒たち。

その大きな要因は、リオンとエリカが婚約していることにある。

エリカ単体でも人気は高いのに、そこに王国一と言われる戦力が加わるのだ。

自分売り込むために多くの生徒が必死だった。

教室内で、二人だけで座っているのはミアとフィンだ。

「お姫様、凄い人気ですね」

遠くから見ていても、とても綺麗なお姫様だと分かった。

ミアも女の子であり、エリカに憧れを持つ。

だが、フィンは普段以上に警戒しているようだ。

「 そうだな。だが、自分を売り込む貴族の子弟が多すぎるな」

離れて座っているのは自分たちと エリカたちを複雑そうな顔で見つめている一人の男子だった。

ポツチャリ系の男子は、寂しそうに座っている。

「誰だ？」

一人距離を取る男子に興味を持つフィンだが、相手が誰だか分からないようだ。

ミアは教室内に視線を巡らせる。

（今日からここで勉強するんだ）

ワクワクするミアに対して、フィンはどうにも焦っている様子だった。

「おかしいな。王子様が来てもいい頃だろうに」

ミアは、そんなフィンに教える。

「騎士様、王子様は謹慎室に送られたと聞きましたよ」

「ほ、本当か！？ どこで聞いた？」

自分は知らなかったぞ、というフィンに対して、ミアはどこで聞

いたのかを言えなかった。

「え、えっと、あの 教室に来る途中で」

嘘だ。

実は女子トイレで聞いたのだ。

「俺も情報集めのために周囲の会話は聞いていたが、そんな会話はなかったぞ。だが、あの王子が来ないとなると面倒だな」

普段以上に周囲を警戒するフィンを見て、ミアは落ち着いて欲しいと思うのだった。

（くそっ！ いきなり王子が謹慎室送りとか、予想外にも程があるぞ）

フィンが慌てている理由は、入学式後にある王子様との出会いイベントだ。

俺様系のジェイクとの出会いは、教室で起きることになっている。

それも、意地の悪いエリカと その婚約者である侯爵家の跡取りが絡んでくるのだ。

表面上はただの挨拶なのだが、棘のある言い方をしてくる。

そこに現れるのがジェイクなのだが、そもそも教室にいないのが

問題だ。

（こうなれば、ミアを教室から連れ出すか？ いや、だがもうすぐホームルームの時間だ。いきなり授業を欠席するのはまずいし、ミアが許さないか）

色々と考えているが、先程からおかしいことがいくつもある。

まず、エリカの周りに人が多すぎる。

あれではこちらに来られない。

次に、その婚約者である【エリヤ・ラファ・フレーザー】が見当たらない。

（エリカとかエリヤとか、似たような名前をしゃがって）

きっと制作者が面倒だから、似たような名前にしたのだとフィンは思っていた。

ただ、エリヤの外見はエリカとは大違いだ。

醜く太った男子 それがエリヤだ。

なのに、どこにも見当たらない。

目立つ外見なので、絶対に見つかるはずなのだが 見当たらない。
い。

（いきなり予想外のことが多すぎて、対処に困る！）

フィンが頭を抱えなくなっていると　教室に一人の女子が入ってきた。

プリプリと怒っている。

「何よ。せっかく期待したのに、兄貴の方がいいってどういうことよ！」

そんなフィンリーをなだめているのは、厳つい顔をしたオスカルだった。

「フィンリーさん、申し訳なかった。まさか殿下が男子を望まれるとは思わなかった」

「オスカル様、自分の間違いに気が付いています？」

「ま、間違い？　自分に何か落ち度が？」

何やら意味の分からないことを言って、二人は席に座っていた。

（何なんだ？　というか、あの背の高い男子はオスカルか？　何でいきなりミア以外の女子と仲良くなっているんだよ）

フィンは一度深呼吸をする。

（落ち着け。ゲームとは違うんだ。予想外のことが起きても、俺が対処すれば問題ない。それに、攻略対象の男子はジェイクやオスカルだけじゃない）

攻略対象の男子だが、ジェイクの他にオスカルがいる。

同級生にはもう一人、攻略対象の男子がいるはずだった。

あと、上級生に一人。

来年には、下級生として年下の男子が入学してくる。

（五人の内、誰かとくっつけば問題ないんだ。その中に、俺がミアの相手と認められる男がいて欲しいな）

考え込んでいると、教室内に教師が入ってきた。

一年生の教室に設置したカメラが壊されていた。

「野郎、やりやがったな」

これではエリ力を見守れないではないか！

そう憤っていると、肩を叩かれる。

「リオンさん、ホームルーム中ですよ」

隣に座るリビアに注意された俺は、姿勢を正して黒板を見る。

教師が色々と今後について話をしていた。

「皆さんは最上級生として、下級生の手本とならねばなりません。

特に、学年を代表する生徒には気を付けて欲しいですね」

俺の方をチラチラ見てくるので、リビアとは反対側に座るアンジェを見た。

「アンジェも大変だね」

「私じゃないぞ。リオン、お前のことだぞ」

「何で？」

「お前は跡取りではなく、本物の侯爵だからな。学生的身でありながら、お前の立場は本物だ。当然、私よりも扱いは上になる」

少し離れた位置に座るユリウスたちに視線を向けると、アンジェは首を横に振る。

「言うな。王国からすれば、今のユリウス殿下にはお前ほどの価値がない」

アンジェにそんなことを言われるユリウスだが、他の馬鹿共とマリエを囲んで楽しそうにしていた。

「今日は串焼きを食べに行きたいな」

「ユリウス、あんた昨日も屋台巡りをしていたじゃない」

「今日は違う屋台を回るつもりだ。マリエもどうだ？」

「毎日串焼きとか飽きるわよ」

「そうか？ 俺は飽きないぞ。店によって味も違うし、毎日でも問題ない」

串焼きに取り憑かれてしまい、買い食いをするのも全て串焼きという可哀想な王子になってしまった。

ホルファート王国の未来は暗いな。

何しろ、ユリウスはもう王にはなれない。

そして、王太子候補のジェイクは痛い奴だ。

この国は終わったな。

まあ、エリカのために俺が裏から支えるしかない。

そう、エリカのためだ。

両親の最期を看取ってくれたエリカのために、俺は出来る限りのことをすると決めたのだ。

教師の説明を聞く。

「三年生は今後の進路を決めなければなりません。残り一年を有効に使ってくださいね」

そもそも、大学など存在しないため、受験のない三年生だ。

ただ、受験の代わりに就職活動があるくらいか？

それも、コネがあればすぐに決まる。

「俺はどうするかな？」

本気で悩んでいると、リビアが少し驚いた顔をしていた。

「リオンさん、ちゃんと考えていますか？」

「ああ、ちゃんと引きこもりたいと考えているよ」

アンジェが俺の腕を掴む。

「おい、もっと真剣に考えておけよ。領主になるのか、それとも宮仕えなのか、それすら決めていないのでは、私も手伝えないぞ」

どこかに土地をもらって領主になるにしても、俺の立場ではどこか大きな領地を押しつけられそうで怖い。

最悪、国境に配置される可能性すらある。

かといって、宮廷貴族になるのも問題だ。

宮廷貴族になれば、あのローランドの下で働かなくてはならない。

そんなのは嫌だ。

結果、どちらも嫌ということになる。

「難問だな」

「早く決めてくれ。そうすれば、私も色々と動けるからな。それから リオン、あまり私の実家を頼らない方がいい。できるだけ早く独立するぞ」

「え、どうして？」

アンジェが周囲に聞こえない声で呟いた。

「父上や兄上が何か企んでいる」

「え、嘘？ 俺、明日には二人に会っただけど？ 呼び出されたよ」

「おい、私は聞いていないぞ」

怒るアンジェに、両手で顔を押さえるリビア 何やら公爵家が動いているようだ。

フィンとはぐれてしまったミアは焦っていた。

「えっと、こっちはさっき来たような あ、あれ？」

女子寮へと向かっているはずなのに、どうにも違う場所に来ていた。

迷ってしまった。

「おかしいな。こっちははずなのに っ！」

急に胸が苦しくなってくる。

「ま、まだ。最近苦しい」

以前から苦しくなる間隔が短くなってきている。

自分の体がおかしいことには気が付いており、とても不安だった。

迷ったことで心細くなり、胸が苦しくなると余計に焦る。

すると　黒髪の綺麗な女子が近付いてきた。

（お姫様？）

手を伸ばして、そのままミアの体を支えてくれる。

「大丈夫？　立てる？」

どうしてお姫様が一人でこんな場所にいるのだろうか？

近くにあったベンチに座る二人は、そのまま話をする。

「落ち着いた？」

「は、はい。ありがとうございます」

段々と落ち着いてきたミアは、お礼を言つとエリカの顔を見る。

とても優しい笑みを浮かべていた。

「そう、よかった」

「あ、あの、お姫様ですよ？ その、私なんかと話しをしていいんですか？」

普段、取り巻きがいっぱいいるエリカにミアは近付けない。

周囲も近付くな、という雰囲気を出していた。

だから近付かなかったのだが、エリカは気にした様子がない。

「問題ないわよ。クラスメイトだもの。仲良くしてくれると嬉しいわ」

「はい！ えっと、私の名前は」

「ミアさんでしょう？ 知っているわ」

名前を知ってもらえていたと思い、嬉しくなるミアは照れていた。

だが、エリカは少しだけ悲しそうに微笑んでいた。

「どうかしました、お姫様？」

「エリカでいいわよ。それから、何も問題ないわ」

呼び捨てでいいと言うエリカに、ミアが感動していると一人の女子生徒が駆けてくる。

「エリカアア！　ここにいたのね！　何でいなくなっちゃったのよ！」

エリカが苦笑いをしながら立ち上がる。

「ごめんなさい。かあ　マリエさん」

金髪の女子が息を切らし、そしてミアを見ると目を見開き、驚く。

「え、えつと　お友達？」

「はい」

エリカが肯定すると、マリエは「そっか　」と言って、ミアにも挨拶をしてくる。

「私は三年生のマリエよ。ミアちゃんよね？」

「は、はい！」

（あれ？　この人はどうして私の名前を知っているんだろう？　留学生ってやっぱり目立つのかな？）　留

同級生かと思ったら、三年生の先輩だった。

「とりあえず、二人とも女子寮に行くわよ。私が案内するから付いてきなさい」

エリカは少し恥ずかしそうにしていた。

茂みの中。

マリエたちが消えると、フィンが姿を現す。

先程から様子をうかがっていたのだ。

なら、どうしてミアを助けなかったのか？

それには理由がある。

「出て来たらどうだ？」

ブレイブが目血を走らせ、最大限に警戒している。

『相棒、やっぱりだ。 あいつらは危険だ』

フィンと同じように茂みから出てくるのは リオンだった。

その横には、メタリックな球体に赤い瞳を持つ物体が付き従っている。

（黒助と同じ？ チートアイテムなのか？）

リオンもこちらを警戒している様子で、その隣のチートアイテムは興奮しているように見える。

「留学生 いったい何が目的だ？」

『マスター、奴らは危険です。すぐに処理すべき敵です!』

こちらを敵と断定するチートアイテムに、フィンも警戒を強める。

ブレイブは、

『負け犬の残骸が、調子に乗るなよ! 相棒、すぐに俺をまとえ!』

「馬鹿! ここでお前を使ったら、ミアも危ないだろうが!」

それは向こうも同じだった。

空に 透明な何かが浮かんでいる。

それを見てブレイブが一つ目を見開き『糞が! 最悪一步手前なのが
出て来やがった』と吐き捨てるように言う。

「ルクシオン、誰がお前の本体を出せと言った?」

『マスター、アレは新人類の兵器です。しかも、完全体ですよ』

「ここで暴れるなって言っただろうが!」

『敵は待つてくれません』

その様子から、リオンもここで戦いたくないというのが伝わってくる。

フィンは汗を拭う。

（黒助がここまで警戒すると、かなり厄介だな。出来るだけここでは戦いたくない。なら、いっそ）

そう考えていると、相手も同じ気持ちだったようだ。

リオンから提案してくる。

「とりあえず、話をしようじゃないか。　少し付き合えよ」

『マスター、危険です！　破壊の許可を！』

「駄目だ。　こいつら次第だ」

その誘いに、フィンも乗る。

「いいだろう」

『相棒！　あいつらを信用するな。あいつは　あの兵器は危険だぞ！』

「ここで戦うよりマシだ。　相手の話を聞いてやるくらいしてやる」

互いに警戒心をむき出しにしながら、一定の距離を保ち歩き出す。

ブレイブも　そしてルクシオンも互いをかなり警戒していた。

『相棒、あいつは上に待機している戦艦の子機だ。本体は上の戦艦だぞ』

「全体がよく見えないな」

飛行船の姿は、光学迷彩で隠れており、言われなければ気が付かない。

「ブレイブ、お前はあいつらに勝てるか？」

『すぐにあの機械野郎のマスターを殺すことをお勧めする。勝てないが、こっちにも相当な被害が出る』

チートアイテムであるブレイブにここまで言わせるのだ。

相当危険というのがフィンには分かった。

（さて　これからどうなるか）

最後に、ミアと話をしておきたかったと思いながら、フィンは覚悟を決める。

（最悪、こいつは刺し違えてでも俺が止める）

苦勞人仲間

居酒屋の個室にフィンと名乗る男を連れ込んだ。

向かい合い座る俺たちは、互いに酒を頼まずお茶と料理を頼む。

こちらを警戒しているのがよく分かった。

（ルクシオンがこれだけ警戒するとなると、かなり危険だな）

不意打ちで仕留めた方がよかつたか？ そんなことを考えながら、赤い瞳を光らせる自分の相棒を見る。

「× ! ! !」

何か訳の分からない言葉を話している相棒が怖かった。

それは目の前にいる相手も同じだ。

「 ! ! !」

何かの呪文を口に行っているようだが、俺には理解できない。

互いに敵同士 かなり恨み合っているようだ。

「さて、飲み物も料理も来たことだし、そろそろ話をしようか」

俺から口を開くと、相手は頷いた。

「そうだな」

口数少ない美形野郎は、先程から飲み物にすら口を付けない。

「毒なんか入れてないぞ」

「気にしていない。それよりも、さっさと話をしてもらおうか」

緊張して喉が渇くが、目の前の男が飲まないのに俺が飲むのも何か嫌だ。もしかして、こいつが何か仕掛けているのか？

とりあえず、飲まないのが無難だろう。

毒が入っていれば、ルクシオンが俺に忠告してくるはずなのだが。

『qwse d r f t ! !』

先程から、会話が出来そうになかった。

「なら、俺から聞きたいことを一つ。 この国に何をしに来た？」

相手は一拍おいてから答える。

「ミアの あの子の護衛だ。主人公って聞いて何か分かるか？」

「問題ない。お前もお仲間かよ」

互いに転生者同士と分かった。

これで、一つ問題が解決したな。

チートアイテムを持っているわけだ。

「さて、ここからが重要になってくる。 お前らの目的は何だ？」

三作目の主人公だが、実は帝国のお姫様だったことが後に分かってくる。

攻略対象の男子は、お姫様の護衛騎士となって数々の問題を解決していくのだが。

「俺たちの目的？ そんなことは決まっている。無事にあのゲームをクリアすることだ」

「無事に、ね。もっと具体的に言っただけいいな」

一度痛い目を見た俺は、ここで気を抜かない。

相手は フィンは困ったように髪をかく。

「何でそこまで言わないといけない？」

「必要だからだ。お前ら次第で、俺もどう動くか決めないといけないからな」

敵対するなら容赦しないという気持ちでいると、今度はフィンから俺に質問をぶつけてくる。

「なら、お前は何がしたいんだよ。転生者だからって、ここまで国を変える必要があったのか？」

その言葉に俺は苛立つ。

「俺のせいみたいに言うな！俺は悪くないからな！」

「そ、そうなのか？」

あれ？ここで引くのか？思っていた反応と違うな。

そのまま互いに静かな時間が過ぎていくので、とにかく俺はこれまでの経緯を話した。

「もう一人転生者がいる。そいつは前世の俺の妹で 主人公に代わって逆ハーレムを狙いやがった」

「嘘だろ」

驚くフィンに俺も同意したいが 事実だ。

前世の妹が逆ハーレムを目指したなんて、家族として恥ずかしいよ。

「おかげで予定が全部狂って、その尻拭いをしていたらこうなっただけだ」

「そ、そうか。大変だったな」

「ああ、大変だった」

すると、今度はフィンの方が話をする。

「ミアは 転生者じゃない。ただ、前世の俺の妹に雰囲気似ているかな？ だから、守ってやりたくなった」

「お前も妹で苦労した口か？」

「いや、前世の妹は病弱だったんだ。まだ若いのに死んだから、ミアには幸せになって欲しいと思っている」

何やら地雷を踏みぬいた気がしたので、すぐにフォローしておく。

「そ、そうか。だから学園まで付いてきたのか」

「出来ればミアを任せられる男子を見つけて、シナリオを進めたい。あの子は最近特に体が弱くなっているからな」

聞けば、シナリオを進めればその問題も解決するらしい。

「そのために学園まで付いてきたのか？ 手続きとか、色々大変だっただろうに」

「そっちは帝国の偉い人が転生者だったからな。割と簡単だったんだよ」

「帝国には転生者が他にもいるのか」

「今のところ、俺が知るのはいっただけだな。お前の方はどうなんだ？」

「王国には俺を入れて三人だな。分かっているのは、って前置きは付くけどね。ただ、アルゼル共和国にも二人いる」

「共和国か　そうだ！　共和国の話だよ。お前、いったい向こうで何をやったんだ？　いきなり共和国が滅びかけたから、帝国でも大騒ぎだったんだぞ」

「俺のせいじゃない！　向こうの転生者二人が、俺に手を出してきたから仕方なくやり返しただけだ」

「そ、そうか」

そのまま互いに色々と話して分かったのだが　あれ？　こいつ、そこまで危険じゃなくない？

フィンの方も拍子抜けしたようだ。

「つまり何か？　リオン　お前は、妹や共和国の転生者たちの尻拭いをしていたら、出世したってことか？」

「そうだ。俺は悪くないぞ。というか、エリカは前世で俺の姪っ子だったから、悪役じゃないから手を出すなよ。あの子は滅茶苦茶良い子でさ」

「それはさっき聞いた。そうか、だからこちらに手を出してこなかったのか。いや、悪かった。安心したよ」

フィンの言葉に、ブレイブ　いや、黒助が抗議している。

『相棒！ こいつらに丸め込まれるなよ。こいつの側にいるのは人工智能だ。どんな手も使ってくる汚い殺戮兵器だぞ！』

すると、ルクシオンも俺に訴えてきた。

『マスター、こいつは新人類が残した兵器です。旧人類の敵であり、信じてはいけない存在です。目を覚ましてください。さあ、共に新人類を殲滅^{せんめつ}しましょう！』

『聞いたか、相棒！ 今、殲滅^{せんめつ}って言っただぞ！ やっぱりこいつは危険なんだ！』

俺とフィンは、そんな球体二つを手で押さえつけ話を再開した。

「なるほど お前も相棒に苦労しているのか」

そう言うと、フィンが頷く。

「旧人類関係のことになると、こいつは暴走するんだ。悪かったな。俺もお前たちを疑っていた」

「いや、こっちも警戒しすぎた。前に転生者絡みで痛い目を見たからな」

そのまま冷めた料理に手を出しつつ、フィンと話をする。

意外と話しやすい奴だった。

淑女の森という組織があった。

かつて、女尊男卑が激しい頃に存在した集団だ。

王国が方針を変更したことで、淑女の森は過激な組織へと変貌していた。

地下にある豪華な部屋には、六十代から三十代までの女性たちがテーブルを囲んでいる。

報告に来た女性は、みすばらしい格好をしているのに テーブルを囲む女性たちは、ドレス姿だった。

皆が既に高貴な身分ではないのに、かつての暮らしを地下で続けている。

従う奴隷たちは側にいない。

代わりに、自分たちの息子を使用人のようにこき使っていた。

「ゾラ、計画は順調なのよね？」

「は、はい！ 娘がローランド陛下の愛人となり、王宮の情報を聞き出しております」

ゾラ かつてバルカス・フォウ・バルトファルトの妻だった女だ。

今は離縁され、地位も財産も失っている。

そして、今は淑女の森の使い走りをしていた。

「あ、あの、報酬はいただけないのでしょうか？ 私も生活が苦しくて」

そんなゾラに、女性たちは言う。

「お前の馬鹿な息子がしてくれたおかげで、私たちはこのような惨めな生活を送っているわ。そのことを忘れていないわよね？」

「で、ですが、私の子供たちは関係ありません。それに、あの馬鹿な男は、側室の子です」

「関係ないわ。お前のミスよ。王国が元の国に戻るまで、お前は今のままよ」

「そんなあ！」

ゾラが泣くが、それを気にした女性は誰もいなかった。

「計画は順調なのよね？」

「もちろんよ。各地で同志たちが集まっているわ。爵位を剥奪され、身分を落とした者たちは多いもの。味方は大勢いるわよ」

「まったく、王国も不甲斐ない。でも、これですぐに今の王国も滅ぶわ。外国からも支援が来ているし、すぐに元通りになるわね」

反乱分子が各地で集まっていた。

それを支援するのは、冷遇された国内の貴族たちだけではない。

外国 敵国からの支援もあった。

淑女の森は、そんな反乱のまとめ役になっていたのだ。

「陛下のところに我々の手の者を潜り込ませることが出来たのは幸運だったわね。おかげで、王宮内の内情が筒抜けよ」

「間抜けな陛下ですこと」

「いいじゃない。おかげで私たちのためになっているのだから。もっとも、男に期待をする方が間違っているわ」

かつて、自分たちに優しくした国を取り戻すために、淑女の森は王国の地下で蠢いていた。

ゾラは俯き唇を噛む。

（おのれ リオン。あいつのせいで、私がこんな惨めな暮らしをするなんて許せない！）

淑女の森の女性たちが、計画について話をする。

「この一年、我々は苦汁をなめさせられてきたわ。けど、それもここまで」

「既に外国から武器も届いていますわ。後は、一斉に決起するのみ」
「これでようやく元通りの生活が出来ますわ。まずは奴隷制を復活させないといけませんね。いっそ、男はみんな奴隷にしてはどうかしら？」

淑女の森はクーデターを計画していた。

だが、その計画も 外国から操られたものである。

居酒屋でフィンとお茶を飲んでいた。

酒？ 悪いが俺もフィンも前世で言えば未成年だ。

あと、酒は体に悪いから却下だ。

「お前と話が出来て良かった。安心したよ。こっちに来て、もう色々ゲームの内容と違うから焦っていたんだ」

「内容が違う？」

「ああ、俺は妹がプレイしていたのを見ていただけだから、詳しくは知らないんだが アーロンって攻略対象の男子がいるんだが、知っているか？」

俺が黙っていると、フィンは続ける。

「黒助に調べさせたら アーロンが女の子になったとか言うんだよ」

その黒助 ブレイブは、ジュースを飲んでいた。

『相棒、俺を疑うのか！？ 本当にアーレって女子は、元アーロンって男なんだ！ 裏もちゃんと取ったぞ！』

ルクシオンを見ると、一つ目を俺たちから背けている。

俺が言わないといけないのか？

「アーロンは性転換手術を受けた」

「はあ！？ な、何でだよ！ この世界に、そんな高度な手術が出来る場所があるのか？」

「俺の 部下というか、人工知能がやった」

「お、おま、お前！ それは駄目だろ！ どうするんだよ！ 攻略対象の男子の一人は入学していないし、ジェイクは論外だ。おまけに、オスカルは奴は」

実は、攻略対象のもう一人の男子だが 学園に入学していない。

実家が随分と悪さをしていたので、公国戦後に爵位を取り上げられている。

最近知ったんだけど、本人は結婚して今は平民として暮らしていた。

すると、フィンが言う。

「フィンリーと。あれ？ あの子の苗字もバルトファルトだったような」

俺はテーブルに顔を突っ伏す。

「フィンリィィィ！ あいつ、何をやってんだ！」

知らない間に、攻略対象の男子一人と妹が親しくなっていた。

そんな俺を見て、フィンがまだ疑ってくる。

「おい、他には何もしていないよな？」

「当たり前だ。何でもかんでも俺のせいにするな」

「そ、そうか。すまない。なら、いくつか気になることがあるから教えてくれ」

頷くと、フィンが気になることを聞いてくる。

「ユリウス王子が廃嫡された件なんだが、何かしらないか？」

「俺が決闘でボコボコにしたからだ」

入学時、今よりもお馬鹿だったユリウスに、アンジェが決闘を挑んだ。

正確にはマリエに、だ。

だが、その代理人として俺とユリウスたちが戦い あいつらは
廃嫡された。

「おい！」

「あれは仕方なかったんだ」

「なら、一作目の主人公だ。彼女が聖女じゃない理由は？」

「もう一人の転生者であるマリエが、聖女の地位を奪ったんだよ」

「なら、なんで聖女が不在なんだよ!」

「公国と戦争をした時に、あいつが偽物ですって自白したんだ。あれにはまいったよ」

ヤレヤレと首を横に振るが、フィンの質問はまだ続く。

「そうだ。公国のお姫様だ。確か　モンスターを操る笛があったはずだ」

「あれ?　ああ、壊しておいたから問題ないぞ」

「そうなのか?　なら、ラスボスは問題ないな」

フィンが落ち着いていると、ブレイブが俺を見ていた。

『　相棒の言うゲームの内容がここまで違うのって、ほとんどこいつが原因じゃないのか?』

「おい、ふざけるな。俺は降りかかる火の粉を払いのけただけだ」

『そうです。マスターは邪魔な存在を排除しただけです。ついでにお前らも排除してやる!』

ルクシオンが会話に割り込んできたが、今日は殲滅病がいつも以上に酷い。

というか、冷静に考えると　俺って随分とゲームの内容に関わっているな。

フィンが俺を疑った目で見ている。

「お前、本当に大丈夫なんだろうな？　ミアの相手は無事に見つかるのか？」

「だ、大丈夫だ。来年になれば、後輩君が入学するはずだから」

「頼むぞ。あの子の命に関わっているんだからな」

最近になり病弱になったミアという少女。

エリカとは逆だな。

エリカは、今まで病弱で、最近になって回復傾向にあるらしいから。

転換期

三年生の教室。

「あゝあ、昨日は疲れたな」

妙に気を張っていたら、相手は可愛い妹分を守るためにやって来た男だった。

妹を可愛がる気持ちは理解できないが、そもそも俺と敵対するつもりもないので問題ない。

むしろ、レリアやセルジュと比べると　かなりまともだった。

机に頬を載せていると、ダニエルとレイモンドが近付いてくる。

「リオン、ちょっと相談があるんだが」

「今いいか？」

顔を上げると、二人とも少し困った顔をしている。

「どうしたんだよ？」

「いや、その　な？」

「うん」

ダニエルもレイモンドも、顔を見合わせてから俺に相談内容話をしてきた。

「実はさ　五月のお茶会があるだろ？」

「あるな」

「そのお茶会なんだけど　リオンは誰か誘うの？　というか、開くつもりがあるの？」

「え？」

二人が困っている内容というのが、五月のお茶会だった。

既に男子が女子を誘う必要性はないのだが、長年続いた風習というのは消えない。

不安に思った男子がお茶会を開けば、他の男子が落ち着かないのだ。

「去年はどうしたんだよ？」

ダニエルが視線をさまよわせる。

「学園長も、無理にやらなくていいとは言っていたから　俺とレイモンドは開かなかったんだ。だけど、女子からクレームが来てさ」

俺は首をかしげる。

「お前ら、長期休暇の時にアルゼルに誘ったら、恋人がいるみたい

なことを言っていたじゃないか」

レイモンドが眼鏡を外して涙を拭う。

「その間に他の男子に取られたんだよ。戻ってきたら、他の男子と付き合っていたんだ」

ちよつと悪いことをした気がする。

「ま、まあ、お前なら誘えば女子が沢山集まるだろ」

学園の方針転換以降、男女の立場は逆転してしまったからな。

ただ、男子の立場が急に強くなっても、これまでの常識が邪魔をして戸惑っている様子だった。

「それも問題なんだよ。ほら、結婚できる幅が広がっただろ。声をかけると、何十人って集まってくるんだよ」

「幅？」

レイモンドが首をかしげる。

「何でリオンが知らないのさ？ 騎士家の女子も結婚相手になり得る、みたいな風潮になっているじゃないか」

「は？ 俺は聞いていないぞ」

レイモンドから詳しく聞けば、多くの貴族が公国との戦争後に正妻を追い出した。

次に、今まで側室や愛人扱いだった女性を、正式に妻として迎えるようになる。

王国も今までの経緯があり、強く駄目とも言えないでいると騎士家の娘さんでもいいんじゃない？ という状態になっていた。

さすがに、伯爵家より上は控えているらしいが、貧乏男爵家なら騎士家の娘でもいいだろうという雰囲気になっていた。

「俺、騎士家の娘さんがいいな。男爵家より上の女子は駄目だ」

ダニエルがそう言うと、レイモンドも同意していた。

「そうだね。今更こっちにすり寄ってこられても困るっていうかない」

そんな二人の話を聞いていた女子たちが、肩を落とすか、視線をさまよわせていた。

俺たちは、転換期を迎えた世代だ。

女子は今までの優遇を知る最後の学年だし、男子は悪い時期と良い時期の両方を知っている。

卒業した男子たちも、状況の変化にいち早く対応して正妻と縁を切ることが増えていると聞いている。

つまり 非常に混乱している世代でもある。

「まあ、誰も来ないよりマシだな」

「そうだけど、悩むじゃないか。だから、リオンはどうするのか、
って」

レイモンドに尋ねられ、俺は両手を頭の後ろで組む。

「婚約者三人を誘ってお茶会だ。あ、エリカも　エリカ様も誘う
かな」

「羨ましいよな。あれ？　お前の婚約者は、エリカ様も入れて三人
だろ？　なんで別枠みたいな扱いなんだ？」

ダニエルが疑問に思っていると、レイモンドが眼鏡を光らせる。

「ダニエル、共和国にいた現地の彼女だよ。リオン、その子連れ
帰ったんだろ」

「お、お前は！」

二人が俺を見て怒っているので、笑って許してもらう。

「ごめんね。もう、俺って婚約者もいるから、誰かを誘ってお茶会
なんかしないんだ」

女子たちが何か言いたそうに俺を見ていたが　いや、本当に無理だ。

アンジェモリビアも、他の誰かを誘ったらきつと怒るはずだ。

他の女子を誘ったことがないから分らないけど。

「リオン、今日は付き合えよ。とことん、お前の恋人について話を聞いてやる」

ダニエルに言われるが、今日は駄目だった。

「悪い。王宮に用事がある。公爵様に呼ばれている」

レイモンドが眼鏡をクイツとあげた。

「公爵様？ レッドグレイブ公爵に？」

何やら面倒なことになりそうな予感がする。

「ようやく会えましたね、バルトファルト侯爵！」

王宮の一室。

出迎えてくれたのは、ヴィンスさんと 知らない男だった。

少し伸びた髪の毛先をカールさせた、金髪碧眼の三十前後の貴族。髭を生やしており、見ようによっては美形だな。

「え？ あの、その」

「これは失礼！ 私は【ドミニク・フォウ・モットレイ】と申しま

す。バルトファルト侯爵のファンだと思ってください」

「俺のファン！？」

いったい何がどうなったら、俺におっさんのファンが出来るのだろうか？

困っている俺を見て、ヴィンスさんが助け船を出してくれた。

「モットレイ伯爵は、公国との戦争時に他国から国境を守っていた領主だよ。そして、戦後に妻を離縁したそうだ」

それと俺に何の関係が はっ！

「国境に駆り出され、王国死ね！ と呪詛じゆそを呟く日々を過ごしていたが、領地に戻ったら何と王国は方針転換をしていたじゃないか！今まで、私を馬鹿にしてきた妻だった何かを切り捨てても誰も文句を言わない。それどころか、私を支えてくれた女性を正式に妻として迎えられた。 侯爵には感謝しても仕切れないよ」

ヴィンスさんが笑っている。

「彼の奥方は、最近までうちの養女として預かっていてね」

「感謝しております、レッドグレイブ公爵」

話をまとめると こうだ。

成り上がりのモットレイ伯爵の結婚相手だが、子爵家の令嬢だった。

この奥方だが、王国貴族の女性らしい人物だったようだ。

それだけで、モットレイ伯爵がどれだけ我慢していたのかよく分かる。

国境に他国が攻め込み、王国に出撃しろと言われて渋々戦いに向かい 戻ってきたら、王国が方針転換をしていた。

丁度、俺が公国と戦っていた頃だな。

世間の風潮が変わったというか、女性にとって厳しい時代の始まりだ。

いや、普通に戻ったのか？

とにかく、奥方の実家は公国との戦争で潰された。

文句を言う人もいないので、モットレイ伯爵は奥方を離縁する。

そして、側で自分を支えてくれた侍女と結ばれるため、公爵家に今の奥さんを養女として受け入れてもらったようだ。

平民から騎士家へと養子に出され、その後は段階的に格を上げて最終的に公爵家の養女になったらしい。

平民だった侍女は、養子ロンドンングであら不思議！ 貴族になり、伯爵と無事に結婚して、今は子供もいると言う。

「誰の子かも分からないガキに、モットレイ家を継がせる必要もな

くなつた。これもすべて、バルトファルト侯爵のおかげだ」

とても良い笑顔で言ってくる。

「そ、そうですか」

「時にバルトファルト侯爵」

「はい？」

「一緒に王宮を焼かないか？」

こいつ、いったい何を言っているんだ？

困っていると、ヴィンスさんがモットレイ伯爵の話を補足する。

「モットレイ伯爵は過激だな。だが、リオン君　アンジエの夫である君には、私も期待しているよ」

「公爵？」

モットレイ伯爵が真顔になる。

「冗談ではないようだ。」

「バルトファルト侯爵、王国からしばらく離れていたようだから知らないかもしれないが　今の王国は非常に危うい。他国との国境を持つ我々領主は、そのことが不安なのだ」

ヴィンスさんもいつの間にか真剣な顔付きになっていた。

「リオン君、君は今の王宮が必要だと思うかな？」

アンジエが言っていたのはこのことか！

俺が答えずにいると、ヴィンスさんが笑顔を見せた。

「よく考えて欲しい。このまま王国を存続させても、多くの者が納得しないのだよ。誰かが立つ必要がある」

その誰かとは　きっとヴィンスさん本人なのだろう。

きっと、ルクシオンの性能を当てにしているに違いない。

学園。

マリエはエリカを捜し回っていた。

「目を離すとすぐにいなくなるんだから！」

甲斐甲斐しく世話をしているのは、前世の心残りがあるからだろ
う。

そんなマリエを見つけて手を振ってくるのは、ノエルだった。

「あ、マリッチだ」

「また、微妙なあだ名を付けたわね。ノエル、あんたもう体は大丈

夫なの？」

「うん。軽めの運動までなら許可も出ているわよ。それより、どこに行くの？」

「エリカを捜しているのよ」

「王女様を？」

二人は一緒に歩きながら、世間話をするのだった。

ノエルからすれば、王国の学園は驚きばかりである。

「ねえ、五月にお茶会を開くらしいけど、男子たちの反応が微妙じゃない？」

「あゝ、あれね。みんな、本音ではお茶会なんて面倒に思っているのよ。喜んで開くのはうちの兄貴くらいね」

お茶狂いの男子生徒以外は、五月のお茶会など興味もない。

だが、今までの慣例でもあるため、やらないのも気が引ける男子たちも迷っているようだ。

「好きな人を誘えば良いのに」

「誘われない女子は大変だけどね」

マリエは、王国がここまで急激に変化したことで、女子たちも戸惑っているのを知っていた。

今まで頭を下げられてきたのに、急に下げると言われても困るのだ。

賢い女子が早々に動く中、変化に対応できない女子たちはいつまでも昔の感覚を引きずっている。

だが、それも仕方がない。

（数年もすれば落ち着くと思うけど、しばらくは無理よね。そう思うと、私たちの世代って結構大変かも）

「マリッチは誰かに誘われた？」

マリエは無表情になる。

「あの五人に誘われたわ」

「何で暗いのよ。もっと喜べばいいじゃない？　もしかして、普段から一緒にいるから、目新しさがないとか？　この贅沢者」

「そんな理由で落ち込むわけがないでしょう。私はね、あの五人に期待しないって決めているの。むしろ、兄貴のお茶会に出たいくらいよ」

絶対に高価なお茶やお菓子が出てくるし、リオンはエリカを誘うはずだ。

マリエもそっちに参加したかった。

二人が歩きながら学園の中庭に入ると、そこには帽子を深くかぶった青年が庭の手入れをしていた。

ノエルがそれを見て不安になる。

「危なっかしいわね。もしかして新人の庭師かしら？ 指導する先輩とかいないの？」

庭の手入れをしているようだが、その動きはどう見ても拙い。

見ていて危なっかしいのだ。

マリエも同意する。

「まだ私の方が上手にできるわ。共和国の屋敷にいるときは、私も庭の手入れをしていたもの。夏場に芝生が元気すぎて、もう嫌になったけどね」

生活力だけが、黙っていても向上していく。

マリエは悲しくなってきた。

「マリツチも大変だね」

「そうよ。大変なの。だから、兄貴のお茶会に出たら、お菓子をもらってきてね」

リオンの婚約者に、お菓子を強請るマリエだった。

下手くそな庭師は、女子生徒二人が消えると悪態を吐く。

「くそ！ 何も知らない糞ガキ共が」

帽子を脱ぐと、金髪の青年の顔が歪んでいた。

道具を地面に叩き付ける。

「どうして貴族の私がこんなことをしないとイケないんだ！ 私は男爵になるはずだったのに！」

その青年は ルトアートだった。

元バルトファルト男爵の正室であるゾラの息子で、元嫡男だったルトアートだ。

「母様もメルセも、私にこんな仕事を押しつけて」

学園に潜り込まされたルトアートは、情報収集を行っていた。

全ては、クーデターを成功させるための準備だ。

道具を拾い、仕事をしているように見せる。

通りがかる生徒たちの会話に耳を傾けていた。

「聞いた？ エリカ様は、バルトファルト侯爵のお茶会に呼ばれたみたいよ」

「羨ましいわ。というか、なんで先輩方は侯爵を狙わなかったのか

しら？ どう考えても、入学時から有望株じゃない」

「そんなの知らないわよ。けど、今は婚約者もいて近付けないわ。エリカ様に、レッドグレイブ家のアンジェリカ様もいるもの」

リオンの話題が出ると、ルトアートは奥歯を噛みしめる。

（あいつだ。あいつのせいで、私はこんな目に遭っているんだ。絶対に許さないからな、リオン！）

かつて 弟だったリオンに、復讐を決意するルトアートだった。

理不尽な世界

もしも時間を巻き戻せるなら、俺はいつたいどのように行動するだろうか？

影ながらリビアやアンジェを支援して、ハッピーエンドを目指しただろうか？

そうになると、ホルファート王国の状況は変わらなかったはずだ。

女尊男卑の社会が続いており、きっと俺は苦勞しただろう。

それを思えば、今の状態はまだマシなのだろうか？

王家は揺らいだ支配体制を建て直すために、俺を利用しようとしている。

不満の矛先である王家を見限り、王国を建て直すためにレッドグレイブ公爵家が篡奪を考えている。

貴族たちも不満を持ち、今の王家には従っていたくないと考えている。

今まで恩恵を受けていた連中は、切り捨てられたことで逆恨みして王国を憎んでいる。

まさに火薬庫の中で火遊びをしている状態だ。

「もう詰んでるじゃねーか！」

『ここまで綺麗に詰むと、清々しいですね』

この状況、どうして皆が俺に頼るのか？

「そしてまた、俺はそれに関わるしかないのか。罰ゲームだな」

頭が痛くなってくる。

『なら、すぐにでも新人類殲滅をご命令くだされば』

「却下だ。お前もしつこいな」

『プログラムに刻み込まれた本能とでも考えてください』

「嫌な本能だな」

そもそも人工知能に本能ってどうなの？

ルクシオンと今後の対策を考えているのだが、どうにも曖昧な返事しかしてこない。

「誰でもいいから血が流れない方法で統治してくれないかな。いつそヴィンスさんでもありだと思っただよ」

すると、ルクシオンが聞きたくない未来を予想する。

『その場合ですが、レッドグレイブ家は領主たちの不満を解消するために今の王家を処断するでしょうね。公開処刑では、きっとミレ

「又がマスターに呪詛の言葉を吐き続けるでしょう」

「何その嫌な未来」

『エリカも例外ではありませんよ』

「公爵家に味方は出来ないな」

エリカを処刑するとか、絶対にあり得ない。

ミレー又さんに呪詛を吐かれるとか、そんなのも嫌だ。

『そこまでしなければ、まとまらないという事です。王国と言うよりも、マスターを苦しめた淑女の森でしたか？ 彼女たちは恨みを買いすぎました』

それを放置した王国を、領主貴族たちが許せないのは納得できる。

「なら、どうする？」

『マスターがこの国をどうしたいのか、が重要ですね。面倒なら沈めてしまってもいいのでは？』

「嫌だっって言っているだろうが」

『王家にマスターが味方をしたところで、不満は残り続けます。反乱の火種はくすぶり続け、いずれ大陸を焼くでしょうね』

何て面倒なことをしてくれたんだ！

過去の王国の関係者を問い詰めてやりたい。

「女性優遇を決めた連中を殴ってやりたいな」

『ですが、当時の王国にそれだけの決断をさせたのは、地方領主たちですよ』

ファンオース公国　いや、ファンオース公爵家のように、過去には王国が地方領主達に苦しめられてきた。

その不満は大きかったと聞いている。

過去の王国の関係者が、今の状態を聞いたら笑い転げてしまうのだろうか？

それとも、やり過ぎたと思うのか？

『実際、領主たちはすぐに王国に攻め込もうとしています。抑えつけていたのは、間違いではなかったのかもしれませんが』

王国の立場を考えれば、だけどな。

抑えつけられた俺たちからすれば、たまったものではない。

「このまま、他の誰かが王国を統治したらどうなると思う？」

『地方領主たちが勢いづき、また暴れ回るのではないのでしょうか？
レッドグレイブ家は、それをマスターの力で　私の力で抑えつけることも考えているかと』

どう考えても、俺は将来的に酷使されるようだ。

「どうして乙女ゲー世界なのに、フワフワした感じの甘い世界じゃないんだ！」

もっと色恋だけに悩むような世界じゃ駄目だったのか？

どうしてこんなに理不尽なんだ。

『マスターには厳しい世界ですね』

「それで、対策は？」

『マスター次第ですね』

「案くらい出せよ」

『方針が決まっていないのに、ですか？ 無意味です。私が考える最適解は、王宮を破壊後に王家の関係者を確保。その後、マスターが大陸を支配するのが、一番と考えています』

大陸の統治とかしたくない。

王様とか、どう考えても面倒だ。

「ユリウスとかジェイクは駄目か？」

『駄目です』

そもそも、忌まわしい旧支配体制の象徴みたいなものだそうだ。

新しい国家を建国するなら、あり得ない選択らしい。

まあ、串焼きに取り憑かれたユリウスでは、国家運営は難しいだろう。

串焼き屋を保護するとか言い出しそうだ。

「何で俺がこんなに苦労しているんだろうな？」

『時期が悪かったですね。別に、マスターだけが苦労しているわけではありませんよ』

「だろうな」

今後の方針を決めようとしていると、ルクシオンが話を中断した。

『マスター、外出の時間です』

「もうそんな時間か」

今日は、同じグループの仲間が集まる日だ。

今では俺は侯爵なのだが、所属しているのは貧乏な男爵家のグループだ。

机の上に置いてある書類の束を手にとった。

「さて、行くか」

そこは大衆居酒屋だった。

貸し切って集まったのは、学園の男子生徒たち。

それも、離島に住む貧乏男爵家のグループである。

三年生になった俺は、そんなグループのまとめ役になっていた。

「さて、入学してもうすぐ一ヶ月だ。君たちも学園での生活に慣れてきた頃かな？」

入学したばかりの頃は、右も左も分からない可愛い後輩たちだった。

しかし、今は学園の事情を知ってか　少し浮かれている。

「今日はささやかながら祝いの席を用意した。楽しんでくれ」

乾杯をすると、上級生と下級生が色々と話をしていた。

「いやゝ、女子が次々に声をかけてくるんですよ。特に、三年生の先輩たちが優しくて」

嬉しそうな一年生を見て、三年生の先輩が忠告する。

「いいか、絶対に騙されるなよ。手を出したら責任問題だ。絶対に早まるな。相手の状況は必ず調べるんだ」

「え、いや、でも」

「馬鹿野郎！ 今はお淑やかに振る舞っているが、三年生の女子なんて一番酷い時の女子だぞ！ 今はお淑やかでも、少し前までは酷かったんだからな！」

確かに酷かった。

愛人 専属使用人を連れ回し、男など使用人のようにこき使っていた。

尽くされて当然という態度だったね。

男子には辛い時代だった。

ダニエルが現状を正しく後輩に教えていた。

「心を入れ替えた女子もいるけど、取り繕っただけの女子も多いかな。本当に気を付けるよ。結婚してから、こんなはずじゃなかったっていう男子は多いぞ」

レイモンドも同様に注意する。

「婚約やら結婚と同時に、態度が変わった女子も多いよね。ま、すぐにみんな離婚したそうだけど」

卒業生などもつと酷い。

このチャンスを逃せるかと、離婚祭りだ。

嫌な祭りだな。

そつえば、ルクル先輩も離婚したと聞いた。

女性たちだって、結婚の条件を見直そうとはしていた。

だが、男性の方が我慢の限界だった。

別に、今の結婚相手 妻にこだわる必要がない。

ダニエルやレイモンドの話が本当なら、結婚可能な女性は多い。

逆に男性の方が少ないとなれば、どちらが必死になるかは決まっているようなものだ。

立場が逆転した。

ただ、だからと言って、誰もが理解しているかは別問題だ。

よく「今の時代にこれはない」とか、そついった例は多い。

たとえるなら飲酒運転だ。

取り締まりも厳しくなり、やっでは駄目だと分かっているのに安易に考えて飲酒運転をする輩はいる。

時代が変わったのに、自分だけは大丈夫と考える人間はどこにもいる。

上級生からのありがたい言葉を聞いて、下級生たちが真剣な顔を

しているところで俺は手を叩く。

「さて、そろそろ俺から話をしてもらいたいだろうか？ 実は、俺の実は飛行船やら鎧を製造する工場を持っているんだ。そこで、君たちにもお得な情報を持って来た」

三年生たちの顔が一気に微妙なものになった。

だが、逆に下級生たちは嬉しそうだ。

次々に質問をしてくる。

「あの、飛行船をタダでもらえるって噂は本当ですか！」

「購入費用はかからないね」

「鎧も最新式だと聞いたんですが、本当ですか？」

「ああ、うちのは最新型だよ。性能も保証しよう。なあ、みんな？」

ダニエルを見ると、片手で顔を押さえながら頷いていた。

「確かに性能はいいよ」

レイモンドは、眼鏡を外して目頭を指で揉んでいた。

「リオン、今回集めた理由ってこれ？」

俺は用意していた契約書を取り出すのだった。

「幸せはみんなで分かち合えないと駄目だろ？ 田舎領主に飛行船は大事じゃないか。今なら、古い飛行船も高く買い取るぞ」

下級生たちが興奮気味に俺の話を聞いていた。

「俺の実家にもついに新型の飛行船が来るのか！」

「侯爵ってやつぱり凄いな」

「侯爵素敵！ 抱いて！」

ははは 最後の奴、それは冗談だよな？ 酒に酔って顔が赤いだけだよな？

中には疑っている下級生もいたが、そんなのは想定済みだ。

俺は契約書を手に持って、皆に説明するのだった。

「別に怪しい話じゃない。今後の整備でうちの工場を利用して欲しいから、っていう下心がある。ついでに、使っている人間が多いと、いい宣伝にもなるからな」

親切丁寧に説明してやると、皆の目が輝き出す。

その姿を見て、三年生たちは物悲しい表情をしていた。

彼らが飛行船を欲しがる理由も分かるし、安易に止められないのだ。

自分たちも大きな利益を得ているからね。

レイモンドが俺に言う。

「リオン、相変わらず最低だよ」

「何を言う。俺は友達思いの素晴らしい男だぞ」

ダニエルが俺を指さすのだった。

「友達思いの奴は、脅したりしない！」

「脅す？ 勘違いをするな。契約を守ってもらっただけだ。俺は悪くない。これからも仲良くしようじゃないか」

ニヤニヤする俺を見て、三年生たちが何か言いたそうにするが黙っていた。

まあ、こき使ってきただけじゃないからね。

「先輩、俺は契約します！」

「俺も！」

「な、なら、俺も」

次々に後輩たちが契約書にサインをしていく。

「そんなに慌てるな。それから、ちゃんと実家に連絡するんだぞ。あと、使い方に困ったら先輩たちに聞いてくれ」

ダニエルとレイモンドが、後輩たちを見て涙を袖で拭っていた。

「くそ 止められない」

「ごめん。許してくれ。リオンに付き合わされるだけで、メリットもちゃんとあるから」

俺は笑うのだった。

「みんな、これから末永く仲良くしようね」

別の居酒屋に行くと、そこで待っていたのはフィンだった。

契約云々の話をする、テーブルに突っ伏す。

「それ、無料契約だろ」

「あ、やっぱり知っていたか」

「当たり前だ！」

本体価格はゼロ円だが、他で料金を回収する方法だ。

「別に悪い話じゃない。騙すつもりもないからな」

「何でそんなにお仲間を増やしているんだ？」

フィンが聞いてきたので答える。

「いざという時の備えだ。あとは、同情かな？ 離島の男爵家って大変なんだぞ」

俺の話を思い出したのか、フィンは飲み物を口にしながら再度確認を取ってきた。

「五十歳の女性と結婚させられそうになった話か？」

「事実だぞ」

「確かに酷い話だな」

「帝国は違うのか？」

聞けば、フィンは少し考えてから答えてくれた。

「ない、とは言えないな。だが、貴族同士の結婚とか、政略結婚的な意味合いが強い。逆のパターンも当然ある。だが、そんな話は少ない」

五十代の男性に、十代の女性が嫁ぐそうだ。

前世でも聞いたことがあるし、驚く話ではないのだが　今に思えば、あの乙女ゲーは、ギャルゲーの男女を反転させただけのようない気がする。

俺も思っていたが、マリエも「ズレている」と言っていた原因ではないだろうか？

男女逆になるだけで、随分と酷い話に　いや、少し違うな。

元から酷い話なのかもしれない。

「なあ、それよりも温泉に入れないか？ ミアが、マリエさんから聞いた温泉の話に興味があるみたいなんだ。風呂上がりの牛乳に憧れているみたいでさ」

「またピンポイントだな」

「コーヒ―牛乳なら用意できるが、温泉は少し難しいだろ」

そもそも、大地が浮かんでいるので温泉自体が珍しいからな。

俺が所有していた浮島は、熱を出す石を使って温泉を用意した。

ルクシオンがね。

「あの浮島、今は王宮の管轄だからな。入れないこともないけど、基本的に何も無いぞ」

「出来るだけミアの願いは叶えてやりたいんだ。頼めないか？」

「確認は取るけど、随分と過保護だな」

そう言うと、フィンは悲しそうに笑うのだった。

「前世で妹にしてやりたかったが、出来なかったからな。これは俺の罪滅ぼしだ」

「罪じゃないと思うけどね」

「お前がエリカちゃんに色々とするのと同じだ」

「一緒にするな。俺が貢いでいるのは恩返しだ」

「貢いでいるって自覚はしていたのかよ。婚約者たちが怒るぞ。というか、なんで主人公と悪役令嬢がセツトなんだよ？」

「両方好きって言ったら付き合えたんだ」

「ないわ。お前のその台詞はないわ。しかも、二人だけじゃなくて三人目もいるじゃないか」

「ノエルはほら。立場とか能力があるから」

「好きじゃないのか？」

フィンにそう言われると困ってしまう。

「三番目に好きとは伝えたな」

「お前最低だな」

そう言っでドン引きするフィンに、俺は自分がいかに苦勞してきたかを話すのだった。

「ちょっと待て。結果だけを聞けばそうなるが、過程を聞けば納得するから。いいか、まずはユリウスだ。あいつが駄目だった」

全ての元凶は、マリエやユリウスたちにある。

俺は悪くないのに、あいつらがかき乱すからこうなったんだ。

本当に理不尽な世界だよ。

平凡

五月のお茶会。

エリカのために用意した数々の茶葉と高級お菓子を前に、俺は両手を広げる。

「エリカ、おかわりはどうだ？」

カップに紅茶を注ぐとすると、エリカが首を横に振ってくる。

「もういいです」

「あんまり食べていないじゃないか」

「もうお腹いっぱいだよ」

困り果てているエリカを見て肩を落とす。

「そ、そうか」

お茶会には婚約者の三人と、エリカを誘ったのだが アンジェ
が忙しいと拒否してきた。

リビアも同様だ。

ノエルに関してだが、二人に何やら話をされて、今回は遠慮する
と言って来た。

何だか凄く寂しいので、代わりに呼んだのが。

「おい、このお菓子の山は何だ？」

「うわゝ、お菓子がいっぱい食べられません」

呆れているフィンと、小さな体でお菓子をいっぱい食べているミアちゃんだった。

俺はフィンを見捨てる。

「ミアちゃんは可愛いな。もっと食べて良いんだよ」

「ありがとうございます！ えゝと、侯爵様？」

可愛いミアちゃんと話をしていると、フィンが苛立っている。

「俺を見捨てるな！ それから、ミア。こいつは呼び捨てで問題ないぞ」

フィンが紅茶を飲むと「意外と美味しいな」とか失礼なことを言い出す。

うまくて当たり前だ。

この日のために、忙しい師匠に時間を作ってもらい、指導してもらったのだから。

「ところで、留学はどうだ？」

楽しいかと聞いてみると、フィンは右手で額を押さえていた。

「お茶会を開いて欲しいと女子が五月蠅くて困る。俺はミアの護衛騎士だと言っても、王国の女子が理解してくれないんだ」

何こいつ。

いきなりイケメン自慢をしてきた。

エリカが微笑んでいる。

「王国には、帝国の護衛騎士制度は馴染みがありませんからね。でも、女子としては、自分を守る騎士がいるなんて憧れますよ」

ミアちゃんが、頬にチョコを付けて首をかしげている。

「え？ でも、エリカ様には護衛の方がいますよね？」

フィンは「まったく、ジツとしている」と言って、ミアちゃんの頬を拭いていた。

エリカはその様子を見て、品良くクスクスと笑っている。

「貴方を守りたいと名乗り出た騎士と、命令された騎士では意味が違ってきますよ。ミアさんは、いい護衛騎士を得ましたね」

ミアちゃんが照れていた。

「わ、私にはもったいない騎士様です。騎士様は凄いですよ！

帝国でも凄く強くて、凄い勲章をもらっているんです！　そ、そんな人が、どうして私の護衛騎士になってくれたのか分からないですけど」

俺はフィンを見る。

「しっかり説明してやれよ」

「か、簡単に言うな！」

フィンが困り、そしてミアちゃんに言うのだ。

「前にも言ったが、俺がお前を守りたいと思ったからだ。それ以上でも以下でもない。だから、お前は卑屈になる必要はないぞ」

妹に似ているから守りたいと思った。

その気持ちだけで、チートアイテムを回収してミアちゃんの護衛騎士に立候補するために騎士になったこいつは突き抜けた馬鹿だな。

俺なら、マリエを守るためにルクシオンを得ようと考えただろうか？

ないな。

そこまではしないはずだ。

「でも、騎士様を護衛騎士にしたいってお姫様たちは沢山いましたよ。どうして私なんですか？」

ミアちゃんの話聞いて、俺はフィンを睨む。

「ラブコールが多くて良かったな。俺はブーイングの方が多かったのに」

「それ、お前の自業自得だろうが。煽りすぎなんだよ。話を聞いただけでもドン引きしたぞ」

俺は悪くない。

少しやり過ぎてしまっただけだ。

すると、ミアちゃんが俺を見て笑顔になった。

「どうしたの？」

「いえ、あの お二人とも凄く楽しそうでした」

お茶会が終わり、片付けをしているとエリカが手伝ってくれた。

「わざわざ手伝わなくてもいいのに」

先に二人を帰し、残ったエリカは俺に話があるようだ。

「伯父さんとお話がしたかったです」

「お、何かな？ なんでも聞いてよ」

可愛い姪っ子が俺と話がしたいそうだな。

喜んでいると、エリカが俺に言う。

「あの 伯父さん、正直に答えてくださいな。伯父さんの目的って何ですか？」

「え？」

何を聞いてくるのかと思えば、エリカは俺の目的を気にしているようだ。

割と真剣な顔をしている。

「俺の目的？ 田舎で平凡な人生を歩むことかな」

「ほ、本気ですか？ あの、どう考えても、平凡な人生なんて歩めませんよ」

「何で？」

既にラスボスはいないのだ。

今後の問題など、いかに王国を安定させるかだ。

俺は田舎に引きこもり、その様子を眺めていればいいと思っていた。

思いたかった。

「今の伯父さんの立場は、王国ばかりか外国も注目しています。母上が言うには、私との結婚はもっとも血が流れない方法だと言っていました」

母上はミレーヌさん。

母さんはマリエの呼び方だ。

「もう関わらないよ。俺は距離を置くつもりだ。というか、ハツキリ言えば面倒事に巻き込むなと言いたいね。なんで俺に頼るのか理解できない」

理由は分かるが、俺に問題を押しつけないで欲しい。

いや、関わるなと言いたい。

「で、でも！ それなら、どうしてここまで関わったんですか？」

「いや、これには事情があつてさ」

「伯父さん、本当に平凡に暮らすつもりがあります？」

「あ、あるよ」

「だったら、普通はもっと慎重に行動しますよね？ 兄上との決闘は仕方がないにしても、その内容が酷すぎます。公国との戦いも同じですよ。散々煽りましたよね？」

「あははは！ はい。ごめんなさい」

エリカに叱られてしまった。

「私は体も弱くて、ベッドの上で話を聞くことが多かったです。いったいどんな破天荒な人だろうと思っていました。それが、まさか伯父さんだったなんて思いもしませんでしたよ」

平凡にはほど遠いと呆れられてしまった。

「いや、ルクシオンの性能頼りだからさ。俺個人は平凡な男だよ」

「平凡な人は、力があっても伯父さんみたいに活躍できませんよ。私がそうでしたから」

「え？」

「伯父さんは、本当に英雄だと思います」

「いや、俺自身はたいした男じゃないから」

エリカは首を横に振る。

「母さんや、アンジェリカさんに、オリヴィアさんから話を聞きました。伯父さん、普通の人は、大きな力を手に入れちゃうと身を滅ぼすんだよ」

「ルクシオンたちが便利すぎて、簡単には滅べないんだが？」

「そういう意味じゃないです。伯父さんが、ルクシオンさんたちを使えているというのが、そもそも凄いことなんだよ。私なら、きつと怖くて何も出来ないから」

「怖い？」

エリカは俺に今の気持ちを吐露するのだ。

「私、今は凄く幸せなの。母さんにも再会できて、お姫様にもなれた。でも、私が選んだのはこの世界に介入しないという道でした。自分が世界を変えてしまうのが怖かったです。自分の選択が何かを壊してしまいそうで怖かったから。何か出来る地位にいたのに、何も出来なかった」

「壊すってそんな」

エリカは俺を見て呆れたような、ただ羨ましそうにもしていた。

「それなのに、母さんも伯父さんもやりたい放題じゃないですか。私、何のために色々と考えていたのか馬鹿らしくなっちゃいましたよ」

「ごめんなさい」

「いいですよ。そもそも、私が怒るのは筋違いですから」

エリカはいつも楽しそうにしていた。

だが、時々寂しそうにも見える。

「何かやりたいことはないのか？ 今なら伯父さんがルクシオンに命令して全力で叶えてやるよ」

あいつら、エリカを調べてから何やらご機嫌だからな。

遺伝子的に旧人類に近いとか何とか言っていた。

エリカは洗ったカップを置いた。

笑顔だが、少し悲しそうにしている。

「伯父さん、私はお姫様だよ。もう、夢なんてほとんど叶ったわ」

「本当か？ 心残りくらいあるだろ」

「あのね、伯父さん。私は確かに伯父さんの姪っ子だけど、定年まで真面目に働いて年金をもらうくらいまでは生きたんだよ。伯父さんよりも年上ですからね」

年上アピールをするのが、外見十六歳の女の子だ。

可愛いじゃないか。

それよりも凄く驚いたのは、もう一つの真実だ。

「年金 もらえたのか」

「あ、あの、驚くのはそっちなのか？」

「別に中身がお婆ちゃんでも、今のお前は俺の可愛い姪っ子だ。両親を。祖父母の面倒を見てくれた子だからな。恩返しくらいさせろよ」

両親の面倒見てくれた姪っ子だ。

何かしてやらないと俺の気持ちが納得できない。

転生してから、前世の家族のことが気になっていた。

もう、知ることは出来ないと思っていた家族の話聞いて、本当に安堵できたのはエリカのおかげだ。

「伯父さんは口が悪いつて聞いていたけど、やっぱり優しいね。お爺ちゃんやお婆ちゃんも、よく伯父さんがいれば姪の私を可愛がったのに、って言っていたよ。それに、母さんが頼りにした気持ちも分かる気がする」

「あいつが俺を頼るのは、性格が悪いからだぞ。さて、片付けも終わったな」

皿を洗い終わると、俺は荷物をまとめて鞆に詰め込む。

「マリエの奴、遅いな。エリカを迎えに来るって言っていたのに」

「どうしたんだろうね」

「気になるな。こっちから会いに行くか」

確か、あいつはユリウスたちのお茶会に参加していたはずだ。

その頃。

ノエルはアンジェとリビアの三人で、話し合いをしていた。

場所はアンジェの自室だ。

「さんだつ篡奪つて本気なの!？」

ノエルは、アンジェの話に驚きを隠せない様子だった。

「父上は本気だ。兄上も反対していない」

レッドグレイブ公爵家を担ぎ上げようとしている勢力があり、それをヴィンスもギルバートも利用するつもりでいるようだ。

リビアがノエルに説明する。

「もう、本格的に動いている人たちもいるそうです」

アンジェはリオンがその中心にいることをノエルに教えるのだった。

「王国も父上もリオンを頼りにしている。そうすると、リオンは嫌でも戦争の矢面に立たされる」

リビアもそれを不安視していた。

「リオンさん、留学から戻ったのにお薬の量が減っていないんです。本当は辛いのに、周りに見せないから」

リオンは、ルクシオンが処方した薬を使用している。

睡眠導入剤だ。

「このままだと、リオンさんが壊れちゃいます」

リオンの性格を知っているアンジェもリビアも、あまり戦いに巻き込みたくない様子だった。

ノエルは共和国での出来事を思い出す。

「無理をさせたくない気持ちは分かるよ。なら、どうするの？ やっぱり、王国側に付くの？」

「それで父上たちが黙ってくれるならありがたいが、状況はもっと悪い」

アンジェは厄介な連中について話をする。

「各地で反乱の動きがある」

「は？ いや、反乱をしようとしているのは公爵よね？」

ノエルが困っていると、リビアがゆっくり説明するのだった。

「えっと、まず公爵派閥とは違う集まりです。リオンさんが王宮や貴族の立場から追い出した人たちがいまして、その人たちが外国の力を借りたんです」

周辺国もかなり焦っていた。

リオンという英雄が短期間で誕生してしまい、各国は大慌てである。

アンジェがノエルに伝えるのは、共和国にとっての幸運な事実だ。

「喜べ、各国はお前の故郷に構っている余裕がない。いや、リオンを知らないために、共和国に手が出せないのさ」

リオンは共和国を滅ぼしかけ、その後は手を引いてしまった。

その対応に各国は困っている。

つまり「これって手を出していいの？ 手を出したら怒らない？ どっちなのさ！？」という状態だ。

下手をすれば、あの共和国を倒した男が乗り込んでくる。

各国からすれば、単艦で暴れ回るリオンは攻撃側に回すと厄介すぎるのだ。

乗り込んでこられると悪夢である。

周辺国は恐怖以外の何物でもなく、特にミレーヌの故郷と争っている国は必死である。

何しろ、リオンはミレーヌと親しい。

リオンにすり寄ろうとする国。

手を出さずに静観する国。

積極的に王国を疲弊させようとする国。

ホルファート王国は、まさに厳しい状況に追い込まれていた。

「そ、それは嬉しいけどさ。なら、どうするのよ？」

アンジェは俯いていた。

「リオンもエリカ様を気に入っているようだ。なら、このまま結婚してもいいと考えている。それでリオンの精神が安定するなら安いものだ」

王国側に付き、反乱を防ぐ道がもつとも血が流れない。

アンジェはそう考えていた。

「それ、実家と敵対するってことよね？」

「それがどうした？ 私はリオンの妻だ。実家の傀儡になどさせるつもりはないよ」

ノエルはリビアを見る。

「あんたもそれでいいの？」

「私はリオンさんが一番好きです。でも、リオンさんの一番になれなくてもいいんです。それで、リオンさんが幸せなら、私は構いません」

ノエルはそれ以上、何も言えなくなるのだった。

（本当の貴族って、大変なのね）

リオンの重荷を知り、そしてそれを支えようとしている二人を見て思う。

（二人とも、リオンの事をこんなに考えていたんだ）

「何これ？」

中庭で開かれたユリウスたちのお茶会　　という名のバーベキューだった。

エリカも少し驚いている。

「あ、兄上、何をしているのですか？」

エプロンを着用して串に刺した肉を焼いているのはユリウスだ。

随分と楽しそうにしている。

「二人も食べるか」

一本受け取るエリカは、困惑を隠せずにいた。

マリエの方を見れば、ガツガツと串を食べている。

カーラとカイルも同様だ。

「マリエ様、今日のお昼は豪華ですね」

「今の内に野菜とお肉を補給しておかないと」

俺は両手で顔を覆う。

「お前ら、不憫すぎるだろ」

これまでの貧しい暮らしにより、食べられる時に食べるという習慣がついてしまっているようだ。

だから、贅沢な食事に興奮しているのだろう。

マリエが酒を飲んでいる。

「みんな、今日は騒ぐわよおお！」

ジルクやブラッドがジョッキを持ち、グレッグとクリスはふんどし姿で串を持っていた。

「おー！」

みんなの声が重なり、これはこれで楽しいお茶会なのだろうと思っ
ておく。

皆が楽しんでいるのに、ユリウスは一人で串を焼いていた。

「お前は参加しないでいいのか？」

「俺か？　ここを他の者には任せられないからな」

楽しそうに串を焼いているユリウスを見て、エリカが何か言いたそうにしているが口を閉じる。

エリカは、あまり自分の意見を主張しないな。

それが少しだけ気になった。

「　これがお茶会とは、兄上も随分と落ちぶれましたね」

不穏な台詞と共に中庭に現れるのは、ユリウスの弟であるジェイク殿下だった。

その後ろには一年生にしては体の大きなオスカルもいる。

ユリウスはジェイク殿下に顔を向けた。

「　ジェイク」

「お久しぶりですね、兄上」

第二王子

「ジェイクか」

神妙な顔をするユリウスだったが、ジェイク殿下は苛立っていた。

「肉を焼く手を止めるよ！」

ユリウスは、ジェイク殿下が現れたのに肉を焼き続けている。

だが、真剣な顔で怒鳴り返す。

「馬鹿！ 急に止められるわけがないだろう。少し待て。これを焼いたら話を聞いてやる。いいか、タイミングが重要なんだ」

ユリウスは真剣な顔を串焼きに向けていた。

それは、ジェイクに向けた表情よりも真剣で、そして集中している。

それが許せないのだろう。

ジェイクがユリウスに近付き、網の上に置かれた串焼きを手で叩く。

「私を無視するな！ この落伍者め！」

まだ焼けていない肉が芝生の上に落ちると、ユリウスはすぐに拾

いに向かう。

そして串を拾うと土を手で払い、水で洗ってからまた焼きはじめた。

「おい！」

ジェイクがまた文句を言おうとすると、ジルクたちが集まってくる。

様子を見てみると、ユリウスは怒っていなかった。

「ジェイク、この肉は俺が育ててきた鶏のマーガレットだ」

「それがどうした？」

「大事に育ててきた。それを今日食べるために、俺は殺したんだ」

それを聞いたマリエが「ユリウス、食べにくい話をしないで」と食べていた串を皿に置いてしまう。

というか、育てていた鶏に名前を付けていたのか？

こいつ大丈夫なのか？

王子が鶏を育てるのも問題だが、名前を付ける方が駄目だ。

愛着がわくからな。

「そ、それがどうした」

ジェイク殿下も少し悪いと思ったのだろうが、引くと格好がつかないので強気の姿勢を崩さなかった。

「いや、お前に怒るつもりはない。だが、食べ物は大事にしてくれたい。それだけだ」

それを聞いたジェイク殿下は、鼻で笑っていた。

「落ちぶれた貴様らしい台詞だ。お前たちが食べるために殺しただけだろうが。何を偉そうに私に説教している？ まあ、いい。おい、バルトファルト」

急に俺に視線を向けてくると、ジェイク殿下が近付いてくる。

「何度か謁見の間で見かけたが、いつも冴えない面をしている」

「お元気そうで何よりです」

確かにお前と比べれば冴えないだろうさ。

ジェイクは口の悪い子供という印象を受ける。

「私の前に膝をつけ。そうしたら、今後は私の部下としてこき使ってやろう」

こいつ馬鹿なのか？ やっぱりローランドの子供だな。滅ぼすしかない。そう思っていると、エリカが俺の前に出た。

「ジェイク、侯爵に膝をつけというのは無礼です」

俺を庇ってくれたエリカに感動してしまう。

まだ、頼りになる王族はここに残っていた。

ミレーヌ様の血と、姪っ子の魂は健在だ。

王国は健在である！

そんなエリカに、ジェイクが手を上げようとした。

「王宮では何もしなかった臆病者が、私の前に立つんじゃない！」

「っ！」

エリカが目を閉じると、俺はジェイク殿下　ジェイクの顔面に拳を叩き込んでいた。

「殺すぞ、糞ガキ！」

すると、グレッグたちと睨み合っていたオスカルが飛んでくる。

「殿下ああ！　侯爵、何をなさったのか理解されているのですか！」

「お前こそ馬鹿か？　この糞ガキは俺に膝をつけと言ったんだぞ。何様のつもりだ。というか、エリカに手を出そうとしたのが許せない。この場で灰にしてやるよ！」

ジルクが呆れながら拳銃を抜いていた。

「まったく、過激な寄親を持つと苦労しますよ。ジェイク殿下、そしてオスカル　安心してください。一発で仕留めますから」

ブラッドが両手に炎を出現させる。

「上級生に向かってその態度はないよね」

クリスとグレッグは、筋肉を見せつけていた。

「先に無礼を働いたのはジェイク殿下だ」

「おうよ。それを無視しておいて、ジェイク殿下だけを庇うのか？」

オスカルは、立ち上がると上着とシャツを脱いで二人に対抗して筋肉を見せてくる。

「ふつ、ジェイク殿下は元からこの気性なのです。治るならとうの昔に治っている！　もう、これは治らない殿下の個性なのです！」

ジェイクの乳兄弟って、ちょっと可哀想な奴なのか？

ジェイクが頬を押さえながら立ち上がる。

「さ、下がれ、オスカル。この、不屈き者は、私自ら成敗してやる」

ジェイクが手袋を俺に投げようとしていた。

マリエが叫ぶ。

「こらあああ！ 何をしようとしているのよ！」

両手で頭を抱えたマリエは、きつと一年生の頃を思い出しているのだろう。

自分のことのように拒否反応が出ている。

俺はジェイクを見て鼻で笑ってやった。

「兄弟揃って俺に負けたいようだな」

ユリウスが一人で「バルトファルト、そこで俺を引き合いに出さなくてもいいじゃないか」とか言っているが無視した。

すると、一人の女性が俺たちの間に割って入ってくる。

中庭を通りかかったその女子は、両手を広げてジェイクの前に立ちはだかった。

「もう止めてください！」

その女性 いや、アーレちゃんを見て俺は声も出なかった。

もう、後ろ姿は女性そのものだ。

ジェイクがアーレちゃんに退けと叫ぶ。

「私の前に立つ意味を理解しているのか？ 退け、女！」

「ど、退きません！ そうやって、身分を理由に横暴に振る舞うな

んて間違っています。わ、私も人のことは言えませんが、そういうのは違うと思います」

俺が黙っていると、マリエも何と言ったらいいのか分からなかったようだ。

ジェイクとアーレちゃんが睨み合い、そしてジェイクが引いた。

「今日は引いてやる。女、名前は？」

「え、えっと　アーレって呼ばれています」

「呼ばれています？　変な奴だな。だが、面白い女だな。私の前に立つ勇氣は認めてやる」

オスカルがジェイクの後ろに付いていく。

「殿下、やはりそっちだったんですね」

「お前は何を言っているんだ？」

「いや、さっきの子ですよ」

「この私を前に堂々としていた。気の強い女は嫌いじゃない。というか、お前は本当に俺のことを敬っているか？」

「もちろんです！　ジェイク殿下は気高く、雄々しく、わがままで素晴らしい殿下です！」

「そうか。　ん？」

二人が漫才をしながら去って行く。

ジェイクの口振りからすれば、これって少しどころかなりまずくないだろうか？

まるで乙女ゲーの主人公を気に入る攻略対象のような。

「嘘だろ」

俺がそう言つと、アーレちゃんが振り返ってきて俺に頭を下げてくる。

「先輩、余計なことをしました。申し訳ありません」

「いや、あの、うん。そ、それよりも、そっちはだ、大丈夫？」

どう接したらいいのかわからないぞ！

「はい。それに、これは罪滅ぼしでもあるんです」

「罪滅ぼし？」

「先輩には以前迷惑をかけてしまつたところでしたからね」

何を言っているのかわからないが、これってどうなるのだろうか？

アーレちゃんが去って行くと、マリエが震えていた。

カイルとカーラは、ユリウスが焼くお肉を待っている。

俺はジルクたちを見るのだ。

「お前ら、あいつらを本気で殺すつもりだったのか？」

「まさか。脅しですよ。貴方を真似てみました」

「俺は銃を出して脅したりしないぞ」

「面白い冗談ですね」

ジルクが俺を笑っているが、納得できない。

そして、ブラッドがユリウスの網を見る。

「お茶会を再開しようか。よし、今度は僕も手伝うよ。こうして、
つと」

ユリウスの手伝いをしたかったのか、タレのついた串焼きを網の上に置く。

すると、ユリウスの目が見開かれた。

「貴様ああ！　　いったいどういつつもりだ！」

「え？　え！？」

困惑するブラッドの胸倉を掴み上げ、ユリウスの額には血管が浮き出ていた。

かなり怒っている。

「そこは“塩”の場所だ！ タレのついた串を置くとは、貴様は戦争がしたいのか！」

「ちよっ！ ただの網だろ！」

「ふざけるな！ 領土問題を起こしておいて、その態度はなんだ！」
先程よりも激怒しているユリウスを見て思うのだ。

お前、ジェイクに馬鹿にされるよりも、肉を焼く場所の方が大事なのか、と。

「う、ごめんなさい」

ブラッドが白目をむいて謝罪するが、ユリウスは止まらなかった。

「謝罪で済めば戦争など起きんのだあああ！」

マリエがユリウスを止めに行く。

「ユリウス、ブラッドが死んじゃうわ！」

ジルクやグレッグ、そしてクリスもユリウスを止める。

「殿下、そこまです！」

「もっ怒るなよ」

「殿下は串焼きにこだわりすぎだ！」

楽しそうなマリエたちを見て思った。

ジェイク殿下の件は、マリエとは後で話そう、と。

「放せ！ 俺は肉を焼くんだああ！」

ユリウスの声が中庭に響き渡った。

（まずい。これはまずいわ）

お茶会が終わり、片付けをしているマリエは焦っていた。

興奮したユリウスをリオンたちが連れていき、残っているのはカイルとカーラ。そして、エリカの四人だけだ。

カイルが溜息を吐く。

「結局、片付けは僕たちになりましたね」

カーラはゴミを拾いながら頬に手を当てている。

「久しぶりのいいお肉、おいしかったですね」

マリエも何も知らなければ、のんきに片付けをされていた。

だが、今の問題はジェイクだった。

（面白い女だな、って主人公に言う台詞じゃない！？ あの馬鹿王子、なんで男に惚れているのよ！）

アーレちゃんは、元アーロンという攻略対象の男子である。

ジェイクが主人公ではなく、アーレちゃんに興味を持つなどマリエも考えていなかった。

（兄貴のところの丸い奴らのせいよ！ どうして性転換なんてさせたのよ！ というか、何を間違えたら、性転換って発想になるのよ！）

ちよい悪のアーロンが、清楚系のお嬢さんになるとか想像も出来なかった。

マリエが焦っている横で、エリカも手伝いをしている。

「ちょっと困っちゃうよね」

困ったように笑っているエリカを見て、マリエはジェイクの言葉を思い出した。

「ねえ、エリカ。あんた、色々和我慢していない？」

「そんなこと、ないよ」

マリエはエリカのことを知っている。

前世ではエリカに苦勞をかけてきた。

そのため、エリカは我慢強いのだが　同時に自分の気持ちを押し殺すようになっていた。

「もつとわがママを言ってもいいのよ」

「私は、もう十分にわがママだよ。だってお姫様だよ。中身はお婆ちゃんなのに」

エリカの言葉がマリエの心に突き刺さった。

自分など、中身はいい年齢なのに逆ハーレムを目指したのだ。

どっちが親なのか分からなくなってくる。

「も、もつと言いたいことは言わないと駄目よ。大抵のわがママなら、私が叶えてあげるわ。大丈夫。今の私には兄貴がいるからね！」

「母さん、楽しそうだね」

「エリカ、人生は楽しまないと駄目なのよ」

「もう十分に楽しいよ。楽しそうな母さんも見られたし、それに伯父さんにも会えたもの」

「あれ？　エリカ、兄貴に会いたかったの？」

「うん。だって、母さんは酔って戻ってくると、いつも『兄貴がいたら』って話をしていたもの。お爺ちゃんやお婆ちゃんも『あの子が生きていたら、姪の貴女を可愛がりすぎたかもね』っていつも

言っていたよ」

マリエは変な汗が出ていた。

（え、私って酔うと兄貴の話をしていたの？ うわ、恥ずかしい）

これではまるでブラコンではないかと焦る。

（はっ！ それよりも今はジェイクの話よ。このままだと、攻略対象の男子がミアちゃんとかくっつかないわ）

アーロンは既に論外だ。

同級生の一人は学園にすら入学していない。

ジェイクはアーロン狙い。

オスカルは 馬鹿。

残る一人は、来年入学する下級生の男子だ。

（もう、下級生の男子に期待するしかないわね）

正直、あそこまでジェイクが粗暴だと、何かしでかすのではないかとマリエは心配だった。

エリカが俯いている。

「どうしたの、エリカ？」

「母さん、あのね。私は一つだけ心残りがあるの。エリヤのことなの」

「あの醜男？　そういえば、学園で見かけないわね？」

「え？　母さんもエリヤを見かけているはずだよ。少し痩せちゃったけど、可愛い子だよ」

「少し痩せたの？　でも、イラストだと凄く太っていたわよ」

エリカは、エリヤのことを話すと嬉しそうになる。

「エリヤはね、実はとても優しい子だよ」

マリエはその姿を見て、エリカの気持ちを察するのだった。

男五人にボコボコにされたユリウスを連れて、俺は医務室から出てくる。

「暴れすぎなんだよ」

俺もユリウスの拳を顔面に受けてしまい、目に痣が出来ていた。

「すまん」

他の四人は帰らせて、俺はユリウスと一緒に男子寮へと向かっている。

しかし、鍋奉行ならぬ網奉行とか　この国の王族はミレーヌさんやエリカ以外は駄目すぎるな。

ジェイクも期待できそうにない。

色んな意味で期待できない。

まさか男を気に入るとか、想像もしていなかった。

二人で廊下を歩いていると、目の前に一年生らしき男子生徒が立っていた。

ユリウスが俺の前に出る。

「エリヤ、何の真似だ!」

「エリヤ?」

その男子生徒の名前を聞いて、すぐに思い浮かんだのはエリカの元婚約者だ。

だが、マリエから聞いていた外見とは違う。

ポツチャリ系の男子という感じだ。

醜く太っているという外見ではなかった。

「　リオン・フォウ・バルトファルト侯爵。このフレーザー家の跡取りである、エリヤ・ラファ・フレーザーが決闘を申し込む!」

エリヤが白い手袋を投げ付けてくるのだが、それをユリウスが受け止めてしまった。

「止める！ バルトファルトに挑むという意味が分かっているのか？ エリヤ、お前では相手にならない」

エリヤが両手を握りしめて力の限り叫んだ。

「だから諦める、って言うのか！ エリカを奪われて、僕に黙っていると！ 僕は 僕はエリカじゃないと駄目なんだ！」

俺はユリウスが握っている手袋を奪い、そしてエリヤに言う。

「威勢がいいな、一年生。そんなに勝負がしたいなら、どんな勝負でも文句を言うなよ」

エリヤが俺を睨み付けながら頷いた。

「どんな勝負でも受けてやる。そして勝って エリカを取り戻すんだ」

その目は真剣そのものだった。

「エリヤ止める。バルトファルトは容赦するような奴じゃないぞ」

ユリウスが何とか決闘を止めようとしているが、エリカのためにもこいつはここで潰しておくことにしよう。

「次の休日を楽しみな、エリヤ君」

俺に勝負を挑んだことを後悔させてやる！

エリヤ

「リオン、お前はフレーザー家のエリヤと本気で決闘するのか？」

翌日。

男子寮に乗り込んできたアンジエに問われた俺は、寝癖を手櫛で整えながら答える。

「向こうが白い手袋を投げ付けてきたんだよ」

「それは聞いている。だが、フレーザー家は国境を預かる身だ。その後継者であるエリヤと戦い、恨みを残せば面倒になる。今でさえ、王国をいつ裏切ってもおかしくない状況だぞ」

フレーザー家は、王家との婚約を破棄されている。

それだけでも憤慨もののなのに、今度は決闘で虚仮にされれば何をするか分からない。

「今は国内で不穏な動きも多い。落ち目ではあるが、フレーザー家を敵に回すと厄介だ」

「分かっているけど、今更取り繕っても遅くない？」

「そ、それはそうだが」

アンジエはかなり焦っているように見える。

それだけ、王国内は危ういのだろう。

それにしても、最近はルクシオンとクレアーレも忙しそうに動いている。

あいつら、また何か企んでいるのだろうか？

アンジエが悲しそうに俯いていた。

「リオン、私はエリヤの気持ちが少し理解できるのだ」

「だろうね」

「だから、面目の立つようにしてやってくれ。私からの願いだ」

アンジエに頼まれたなら、あの五人のように徹底的に叩くことも出来ない。

「分かったよ」

学園に登校し、休憩時間になるとマリエに呼び出された。

「何だよ」

「兄貴、エリヤのことなんだけど」

「またその話か」

朝から皆がエリヤの話をしてくる。

学園中に、エリヤが俺に決闘を申し込んだ噂が広がっていた。

既に賭けをはじめようとしている馬鹿もいたが、俺とエリヤでは勝負にならないと賭けが成立していないようだ。

エリヤは特別優秀な生徒ではないからね。

「面目の立つような決闘にはしてやるつもりだ。角が立たないように終わらせるさ」

「兄貴が言っても信用できないわよ。あ、そうじゃないの！」

マリエは俺に、エリカとエリヤの関係について話をする。

「エリカだけど、実はエリヤのことを嫌っていないのよ」

「え？ 何であいつなの？ もっといい男は沢山いるだろうに」

「婚約が決まって、エリカは何度かエリヤの領地に向かったらしいの。エリヤ、甘やかされて育っていたから、最初は酷かったらしいわ」

あの乙女ゲーでは、エリカは性格の悪い女で、エリヤはその子分みたいな婚約者だったと聞いている。

だから、エリカはエリヤのことを好きだとか思ってもいなかった。

え？ あいつがいいの？ どこがいいの？

「でも、エリヤってエリカに一目惚れをしたらしいの。だから、エリカは」

エリヤにいい領主になってもらうように、色々とアドバイスをしていたようだ。

エリヤの奴は、エリカにいいところを見せようと頑張ったとか。

それを聞いた俺は、いったいどうしたらいい？

「つまり？」

「たぶん、エリカってエリヤと結婚したかったんじゃないかな？ 凄く嬉しそうにエリヤのことを話すのよ。あの子、自分の気持ちを口にするのは苦手なの。だから、エリヤと結婚したいとは絶対に言わないわ。でも、そう思っているのは分かるし」

我慢しすぎるところはあると思っていた。

だが、前世の母親であるマリエも気が付いていたのは意外だ。

こいつは気が付かないと思っていた。

「よく見ているな」

「だって、あの子って私が駄目だったから我慢強くなったところがあるのよ。こ、これでも責任を感じているわけですて」

やっぱりお前のせいか。

「それで？ お前は俺にどうして欲しいんだ？」

マリエが俺に土下座をしてくる。

「エリカとエリヤを結婚させてください！」

「……ええええ」

また、面倒な願いをしてくる。

それってつまり、俺にミレーヌさんの顔に泥を塗れと言っているのと同じなのだが？

いや、いずれはそうなると思っていたけどさ。

俺、気付けば全方位に喧嘩を売ってない？

ローランドになら喧嘩を売ってもいいが、恩のあるヴィンスさんとかミレーヌさんに喧嘩を売るのはちょっと気が引けるんだけど。

放課後。

屋上に一人していると、俺の側にクレアーレが近付いてくる。

『あら、珍しく悩んでいるわね』

「馬鹿。俺はいつも悩んでいるんだぞ」

『知っているわよ。けど、そんなに悩む姿も珍しいわよ』

俺はクレアーレに、本音を吐露する。

「エリカがエリヤのことを好きなのは分かった。だが、それである子は幸せになれると思うか？」

『さあ？ だって、私やルクシオンからすれば、マスターとの間に子作りをして欲しいからね。エリカちゃん、旧人類の遺伝子が色濃く出ているの。マスターとの間に子供が出来れば、私たちの的には嬉しいし。ま、そのせいでしばらく体調不良だったみたいだけどね』

「そうなのか？」

エリカが表に出てこなかった理由は、本人がこの世界に関わっていいものかと悩んでいたのもある。

だが、一番は体調だった。

『常に安静にしていなきゃいけない状態じゃないの。けど、あまり無理は出来なかったみたい』

「いや、それと旧人類云々はどんな関係があるんだ？」

『大気中の魔素よ。これが今までよりも薄くなったの。ほら、共和国の聖樹が暴れたじゃない？ あの時、かなりの魔素を吸い込んだみたいなのよ。今まで微妙なバランスだったのに、そのせいで魔素が薄くなったのよね』

共和国の聖樹が暴れ、魔素が大気中より少しだけ減ってしまった。

おかげでエリカは元気になったようだ。

それを聞いて、少しだけ心が軽くなった。

「元気になったならいいか」

『だから、エリカちゃんとマスターは子作りしましょうよ』

「駄目だ。姪っ子はそういう対象じゃない。見守りたい親心を理解できない人工智能だな」

『今は他人じゃない！ 手を出せよ、ヘタレ！』

「てめえのせいでアーロンがアーレちゃんになったのを忘れてないからな！ そもそも、お前のせいでジェイクがアーロン狙いになったんだよ！」

お茶会の後のことだ。

ジェイクがアーレちゃんによく声をかけるようになったらしい。

もう、ジェイクは攻略対象ではなくなった。

王族の男にろくな奴はいない。

『で、マスターはどうしたいの？ エリカちゃんとは結婚したくない。けど、エリヤも認めない。もしかして、結婚させないつも

り？ それって酷くない？ ずっと側に置いて可愛がるとか、おぞましいことでも考えているの？』

「それはない。だから悩んでいるんだろうが。エリヤ以上にいい男を捜すか？」

『エリカちゃんが納得するかしら？ あ、別件を思い出したわ。実はね、攻略対象の下級生男子だけど、学園入学前に婚約が決まっていたわよ』

「は？」

『だって、今って女性の方が余っているもの。マスターのお兄さんも毎日のようにお見合いをしているわよ。学園入学前に婚約者がいるなんて、珍しくないみたいね』

俺が入学した頃とは状況が違ってきているようだ。

「今の一年が羨ましいな」

この事実を、フィンの奴にどうやって説明しようか？

それが問題だ。

『でも、今は逆に女子に対して横暴な男子も増えているわよ』

「そうなのか？」

『立場が変わったし、今までの鬱憤もあるからじゃない？ 婚約を餌に手を出して、そのまま遊んで捨てている男子もいるわね』

うらやまし　　くないな。

女の次は、今度は男が増長するのか。

まるでシーソーゲームだ。

誰かバランス取れよ。

「　そいつらがエリカたちに近付いたら、お前の好きなように処分しろ」

『いいの！　やったー！　マスター、大好き』

こいつに大好きと言われても嬉しくないな。

しかし、本当にどうしよう？

喜んでいたクレアーレが、急に周囲の景色に溶け込み消えてしまった。

誰かが来たようだ。

屋上に来たのはノエルだった。

「リオン、お客さんだよ」

連れてきたのは、学園の関係者ではなく軍人のようだ。

俺に頭を下げてくる。

「え、誰？」

ノエルが笑いながら教えてくれたのは、俺としては困る人物だった。

「フレージャー家の騎士さん。エリヤ君の教育係だって」

三十代の髭を生やした真面目そうな軍人が、背筋を伸ばして俺の前に立っている。

「侯爵にお話があつてまいりました」

ノエル、何て人を連れてきたんだ。

「決闘の話か？」

「はい」

「それなら、ユリウスたちみたいに虚仮にすることはない。安心しろよ」

「いえ、そうではないのです」

「何だ？」

「侯爵、エリヤ様のお気持ちを受け止めていただきたいのです」

こいつは何を言っているのだろう？

「気持ちだ？」

「はい。エリヤ様は、これまではお世辞にも立派とは言えない方でした。ですが、エリカ様と出会い、そして変わられたのです。領主になる自覚を持ち、領内のことに關心も持たれるようになりました。今が大事な時なのです」

立派な領主となってもらうために、こいつら家臣としてはエリヤに心が折れてもらっては困るようだ。

「お前ら、エリカとの婚約破棄はどう思っているんだ？」

「腹立たしいというのが素直な感想ですが、だからと言って王国を裏切るわけにもいかないのが本音です」

俺の側で、周囲からは見えないクレアーレが耳打ちしてくる。

『嘘じゃないわよ』

俺はエリヤの教育係を見ながら、気持ちを受け止めるという意味を確認する。

「それは、俺に本気で相手をしろという意味か？ それとも、手加減をして欲しいのか？ そもそも、エリヤは強いのか？」

「エリヤ様の實力は、並の騎士以下でございます」

ハッキリ言う家臣だな。

「ただ、最近は気合を入れて訓練しており、鎧の操縦技術も上達

しております。なので、怪我をしない程度に、本気で相手をしていただきたいのです」

「それ、難しくない？」

困っている俺に、ノエルが話しかけてくる。

「どうするの？ 別に殺したいと思っているわけじゃないんでしょっ？」

「当たり前だ」

何が悲しくて、学園の決闘で命を賭けなければいけないのか。

そっいつの、もう流行らない。

ノエルが俺を見る目は、真剣そのものだった。

何かを心配しているような目をしている。

「別に殺すつもりも、怪我をさせて後遺症を残す戦い方もしない。これでいいんだろ？」

教育係の騎士が、俺にお礼を言って屋上から去って行く。

すると、クレアーレが姿を見せた。

『また面倒よね』

「クレアーレ、あんたもいたんだ。最近見かけないから心配したわ

よ
「」

ノエルがそう言うと、クレアーレも軽口を叩く。

『これでも忙しいのよ。マスターみたいに、イジイジと悩んでいる暇もないの』

こいつ、どうして俺を引き合いに出した？

ノエルが笑いながら、俺の隣に来る。

「リオンは、エリカ様と結婚しないの？」

「しないよ」

「好きならすればいいのに。アンジェリカもオリヴィアも怒らないと思うわよ」

「エリカは好きだけど、どちらかと言えば親愛というか親戚みたいな関係？ だから、結婚となると違うんだよね」

「そうなの？」

「そうなの。だから、エリカには幸せになって欲しいんだけど、どうしたらいいか分からないんだよね」

「そっか。なら」

俺はノエルの提案を聞いて、エリカを試すことにした。

学園の闘技場。

久しぶりに顔を出したニックスは、ポップコーンを片手に決闘を観戦することになっていた。

連日お見合いが続いており、今日はリオンを理由に逃げ出してきたのだ。

弟が決闘するので見にいきます、と強引にお見合いから逃げ出してきた。

（上は四十代から下は一桁　こんなの間違っている）

疲れた顔をしているニックスの隣には、ジェナが座っていた。

「あゝ、嫌なことを思い出すわ」

「お前、リオンの鎧に爆弾仕掛けたよな。家族としてドン引きだよ」

「五月蠅いわね！　私にそれ以外の選択肢があったと思うの？」

苛々しているジェナだが、王都で随分と息抜きを楽しんでいた。

買い物やら、友人たちとの再会。

だが、婚活だけはうまくいっていなかった。

「ちくしょう！　リオンの伝が使えれば、すぐにでも王都の貴族と

結婚できるのに！」

ニックスは呆れていた。

「そんな調子だから、親父たちもお前の結婚に反対するんだよ。心を入れ替えれば考えるのに、お前が態度を変えないからだ」

「女を奴隷みたいに扱うなんて間違っているわ！」

「だから男を奴隷にするのか？ お前はまったく成長しないな」

今のジェナが、リオンに近付きたい貴族と結婚すれば問題しか起こさない。

そのため、ジェナの結婚にリオンの伝は使わせていなかった。

「もう、王都で観光を楽しんだなら、帰って寄子の誰かと結婚しろよ」

「嫌よ。私は絶対に諦めないわ」

ニックスのポップコーンを奪い、ジェナはやけ食いする。

そんな二人の隣に来たのは、フィンリーだった。

「あ、二人も見に来たの？」

そんなフィンリーの後ろには、お菓子などを大量に持っているオスカルがいた。

「バルトファルトさんのお知り合いですか？」

「うん。うちの兄と姉よ」

少し厳つい顔をしているが、オスカルは美形だ。

高身長で筋肉質の体。

ジェナがポップコーンを落とすのを見て、ニックスは顔に手を当てた。

（あ、こいつジェナが好きなタイプだ）

「フィンリーがいつもお世話になっています。姉のジェナです」

「オスカルです。バルトファルトさんにはいつもお世話になります」

急に猫なで声を出すジェナを、ニックスもフィンリーも呆れてみている。

「ジェナ、がつつくなよ」

「姉さん、最低」

フィンリーは、どうやらそこまでオスカルのことを好きではないようだ。

だが、姉が狙っているのは許せないらしい。

「年下の男子を狙わないでよ」

「フィンリー、そう怒らないでよ。いくら私の方が女性として魅力的だからって、自分を卑下することはないわ」

「はあ！？ 私がいつそんなことを言ったのよ！」

二人の間で火花が散る幻覚が、ニックスには確かに見えていた。

オスカルが困り果てている。

「二人ともお美しいですよ」

「もう、オスカル様ったら正直ですね」

ジェナがなりふり構わず、オスカルの腕に抱きついていた。

それを見て、フィンリーが目を見開き睨んでいる。

（面倒にならないといいけどな。 ん？）

誰かに見られている気がして、振り返るとそこには清掃作業をしている学園の職員がいた。

若い男は帽子を深くかぶっている。

（あれ？ 誰かに似ているような）

ニックスが顔を向けると、逃げるようにその男は去って行く。

エリカの気持ち

学園の闘技場は大盛り上がりだ。

公国の黒騎士を倒し英雄となったリオンが乗る、アロガンツという機体が見られると大勢の観客たちが押し寄せている。

それから、エリヤの勝利に大金を賭けた者が出た。

おかげで賭けが成立している。

そのため、リオンが絶対に勝つと大金を賭ける生徒たちが出てくる。

「今度こそ儲けるぞ」

「一年の時は酷い目に遭ったからな」

「あの時の負け分を取り戻してやるぜ」

周囲はリオンが勝つと疑っていなかった。

実際に、エリヤの実力はリオンに及ばない。

機体性能もアロガンツに及ばず、おまけにリオンは実戦経験者だ。

エリヤとは全てが違っていた。

周囲の評価も仕方がないが、エリカが俯いている。

そんなエリカに、マリエは声をかけるのだった。

「エリカ、見たくないならここを離れる？」

「大丈夫。エリヤのことをちゃんと見てあげないと。私にはそれくらいしか出来ないから」

マリエは、そんなエリカに言うのだ。

「エリカ、欲しいものは欲しいと言わないと手に入らないのよ。わがままになってもいいんじゃない？ 好きなら好きって伝えた方がいいわよ」

「それは、私の立場じゃ許されないから」

「やっぱり、好きなんじゃない」

マリエはエリカの答えに、目を伏せるのだった。

「エリカはそれでいいの？ 兄貴はあんたの伯父さんだよ。結婚なんておかしいわ。兄貴だって姪っ子に手なんか出したくないのよ」

「母さん、王族に結婚の自由はないんだよ。たとえ、前世の伯父さんでも、今は血の繋がらない男性なの。結婚には何の問題もないわ」

血縁関係が近くない。

そして、リオンは王国の英雄だ。

取り込む価値がある。

逆に、拒否をするというのがあり得ない。

前世の伯父なので、などというのは結婚を拒否する理由にもならなかった。

「あんたの幸せはどうするの！」

「私は今でも十分に幸せだよ」

「あんた、何にも分かっていないわね。幸せは、自分でつかみ取るもののよ！」

「今ある幸せを感じられないのは、不幸だよ　母さん」

「そんなの知らないわよ！　望んで何が悪いの？　兄貴に言えば、あんたの願いは何だって叶うわよ！」

エリカは手すりに置いた手を握りしめていた。

「私が求めた幸せの代償に、どれだけの血が流れると思っているの？　私には、そんな決断は出来ないよ」

休日の闘技場は観客でいっぱいだった。

アロガンツの前に立つエリヤの鎧は、侯爵家らしい特注品だ。

だが、それでもアロガンツとの性能差は絶望的である。

「エリヤ君。逃げずに俺の前に出てきたことは褒めてやる」

『逃げるもんか』

エリヤには悪いが、全てにおいて俺の方が勝っている。

このままではエリヤが勝つなど不可能だ。

「気持ちだけは褒めてやる。だけど、世の中には無理なこともあるんだよ」

世の中というのは理不尽だ。

本当に理不尽だ。

コックピットの中で、ルクシオンが一つ目を俺に向ける。

『こんなことをするくらいなら、あの黒いのを消滅させた方が有意義ではありませんか？』

「お前はしつこいぞ」

『あれは敵ですから』

「人工知能ならもっと割り切れよ」

『優先事項ですので無理です』

「そうかい」

決闘の開始が告げられると、エリヤが突っ込んでくる。

その動きは拙い。

だが、恐怖でためらうことはなかった。

「いい踏み込みだ」

アロガンツを一步だけ下がらせ避けると、エリヤの鎧が持つていた剣が地面に突き刺さった。

「おら、どうした!」

蹴り飛ばすと、エリヤはすぐに起き上がって俺に向かってくる。

自分の乗る鎧よりも大きなアロガンツに、立ち向かう勇氣だけは褒めてやる。

「そんなことでエリカが手に入ると思うなよ!」

殴り飛ばし、そしてアロガンツの背負うコンテナからブレードを取り出すのだった。

フィンはミアを隣に座らせ、リオンの決闘を見ていた。

右手で顔を押さえる。

「あいつ、よく平気でこんなことが出来るな」

決闘と言うよりも、一方的にアロガンツがエリヤの鎧をいたぶっているだけだった。

ミアが両手を胸の前で握りしめ、不安そうにしている。

「騎士様、リオン様が怖いです。こんなことをする人じゃないと思っただのに」

フィンのポケットから姿を見せるブレイブが、苛々しながらアロガンツを見ていた。

『ム力つくぜ！ あの鎧、俺たちのデータを使ったパチ物じゃないか』

フィンが納得した。

「ああ、そうか。何となくお前の鎧の姿と似ているな」

『あの鉄屑、パクリやがった！』

ミアが不安そうにしているのを見て、フィンは頭に手を乗せて安心させる。

「心配するな。リオンはちゃんと考えているよ」

「本当ですか？」

「ああ、だから大丈夫だ。多分な」

ブレイブまでもがフィンを疑っていた。

『どうかな。あの鉄屑は旧人類の兵器だぞ。人の心を平気で踏みじれる連中だ』

すると、ミアが口元を押さえて笑いはじめる。

「ブー君、兵器と平気をかけたんだね」

そんなミアの笑いのツボに、フィンもブレイブも何と声をかければいいのか分からなかった。

「ミアにとっては面白かったんだよな。まあ、別にいいけどさ」

『相棒、ハッキリ言ってやった方がいいぜ。お前の笑いのセンスはおかしい、ってよ。というか、まるで俺様が笑わせようとしたみたいにするのを止めてくれないか？俺様が悲しくなってくる。おいミア、もう笑うな』

「だって。ブー君が笑わせるから」

『お前、本当にセンスおかしいわ』

フィンは決闘を観客席から眺める。

一方的な戦いは、決闘とは呼べなかった。

周囲では早くも「ちょっとやりすぎじゃない？」という声が出ている。

（リオン、お前は何を考えている？）

エリヤをどうしたいのか？

フィンはリオンを見ながら考えるのだった。

一方的な戦いに、エリカは胸を押さえていた。

目を閉じる。

「伯父さん、もう止めてよ。こんなの酷いよ。エリヤの面子を潰さないって言うてくれたのに、これだと逆だよ」

リオンの声が闘技場に響き渡った。

「弱いぞ、一年！ 上級生を舐めすぎじゃないか？ 決闘を挑んでおいて、一撃も入れられないなんて情けないぞ！」

「ま、まだまだあ！」

『どうしたよ！ そんなゴミ屑みたいな実力で、本当に俺に勝てると思っていたのか！』

マリエがエリカに声をかける。

「エリカ、ちゃんと見なさい。あんたのために、エリヤ君は兄貴に

何度だって立ち向かっているのよ。あんだ、これでいいの？」

エリカが首を横に振ると、黒髪も揺れた。

「嫌だよ。エリヤをいじめないでよ」

泣いているエリカは、エリヤのことをマリエに話すのだ。

「エリヤは、本当はいい子なの。私を好きだって言ってくれて、私のために色々と頑張ってくれたの」

優秀ではなかった。

あの乙女ゲーでは、エリカのわがままに逆らわない子分のような婚約者だった。

その理由も悪役王女のエリカに惚れていたからだ。

「婚約破棄の時も、私は会うことが許されなかったの」

ミレーヌの判断だ。

これ以上、エリカと会わせては未練が残ると考えた結果である。

「あんだ、あの王妃に文句を言ったの？ 私はエリヤの方がいいって言ったの？」

「言えないよ。母上は、その方が私のためになるって思っているから」

国のため、そしてエリカのため。

ミレー又は本気でそう思っただけ決断していた。

これが当初の通り、エリヤとの婚約話を進めていたらどうなるか？

国内は内乱になり、その中でエリカも命を落とすかもしれない。

国益や娘のことを考え、ミレー又なりに出した結論だった。

それが分かってしまうから、エリカは何も言えないのだ。

エリヤは、アロガンツに乗るリオンに向かって叫ぶ。

『勝てなくても！ 勝てなくても、僕は挑むしかないんだ。どうしようもないって分かっているんだ。分かっているけど、我慢できないから！』

王国の状況を考えれば、エリヤがリオンに決闘を申し込むのは悪手だ。

それくらい分かっているが、自分でも止められなかったのだろう。

リオンは笑っている。

『勝てないけど挑みます？ そういうのは馬鹿って言うんだよ！』

エリヤがアロガンツに殴り飛ばされ、地面を転がった。

その姿を見て、エリカは強く目をつむる。

「あんたが自分の気持ちを言わないから、王妃だって自分の考えが正しいって思うのよ！ 嫌なら嫌だって言いなさいよ！ 分からないのよ！ 言わないと、分からないじゃない！ 言ったら、どうにかなるかもしれないじゃない！」

マリエが泣きながら気持ちを吐露する。

闘技場の観客たちは、決闘の様子を見ており二人を気にしていなかった。

「あんたを手放した時、それがあんたのためになると思ったわよ！ 私が育てるよりもそれがいいって思ったわよ！ けど、あんた言っただじゃない。『お母さんと一緒に良かった』って！ 言つてよ。言わないと分からないわよ！」

前世、エリカを両親に預けたマリエは、そこから更に自堕落な生活が続いた。

結果、駄目な男に引っかけってしまった。

エリカが目を開くと、涙目になりながらマリエに言う。

「言ったところで、結果なんか変わらないじゃない！ 私がわがままを言ったら、どうにかなったの？ ねえ、どうなのよ！」

初めてマリエに抵抗するエリカだった。

マリエはそれに驚くも、どこか嬉しそうにしていた。

痛いところを突かれたマリエだが、今は一人ではないのだ。

闘技場内では、エリヤをいたぶっているリオンがいる。

「なるから言っているのよ！ あんた、兄貴がどれだけ性格が悪くて、卑怯で、腹立たしくて、苛々するか分かってるの？ 酷い兄貴よ。酷いけど 凄く頼りになるのよ！ あんた程度の悩みくらい、いつでも解決してくれるわよ！」

「そんなの無理だよ。これは国の問題なのよ。人が自分のためにいっぱい死ぬなんて、私には耐えられないよ」

泣いているエリカを見て、マリエは闘技場に視線を向けてリオンに向かって叫ぶ。

手すりに乗って大声を出すのだ。

騒がしい闘技場で、マリエの声などがき消えるのだが。

「兄貴！ 可愛い姪のために何とかしてよ！」

アロガンツの動きが止まり、ボロボロになったエリヤの鎧の頭部を掴み上げた。

エリカに見せつけるのだった。

『エリカ様、元婚約者は情けない男でしたね』

自分に向かって煽ってくるリオンを前にして、エリカは震える。

観客たちがエリカに視線を向け、口を閉じたので静寂が広がった。

『こんな元婚約者と縁が切れて良かったでしょう？』

問いかけてくるリオンに、エリカは眉間に皺を寄せる。

「　　ない」

『はい？』

「エリヤは情けなくない！」

『どこが？　落ち目のフレーザー家の跡取りです。エリカ様も結婚せずにすんで良かったのでは？　実は安堵していませんか？』

額から血を流すエリヤは、エリカの声を聞いていた。

『関係ありません。私は側でエリヤを見てきて、この方に嫁げるのを幸運だと思っていました。情けないという言葉を取り消してください！』

エリヤは顔を上げる。

堂々と、リオンに向かって声を張るその姿を見て、エリヤは操縦桿を握りしめた。

「　　エリカ」

『口だけなら何でも言えますよ』

『ええ、そうです。私は エリヤを愛していました。今の貴方よりも、エリヤは立派な男性です』

『言っじゃないか！ その言葉、忘れるなよ』

リオンの低い声が闘技場に響く。

妙に迫力のある声は、数々の実戦を経験してきた凄味のようなものがあつた。

「くっ！」

エリヤが鎧を操縦して、アロガンツの腕から離れる。

鎧の状態は酷く、もうまともに動けなかった。

片腕は動かず、武器を持つ手もグラグラしている。

勝てないのは最初から分かっていた。

「それでも 僕は！」

最初は政略結婚だった。

だが、エリカと面会し、すぐに好きになってしまった。

自分のことをしっかり見てくれて、時に厳しく叱ってくれる大切な人だ。

「僕はエリカにちゃんと」

愛していると言いたかった。

愛していると示したかった。

鎧の脚が、関節部から分解して倒れ込む。

そのまま倒れると同時にアロガンツに剣を振り下ろすと、リオンは避けなかった。

はじめて一撃がアロガンツに当たるのだが、傷一つつかない。

「僕も愛しています。ずっと、愛し続けますから！ だから、幸せになってください。あの子を幸せにしてください。お願いします。お願い　します」

泣きながらそう言うと、負けを認めて審判に告げようとした。

だが、先に声を出したのはリオンだ。

『審判。俺の負けだ』

コックピットから出た俺に、ルクシオンが声をかけてくる。

『悪役がとてもお似合いでしたね』

「ああ、心が痛むよ。可愛い姪っ子に恨まれるなんて涙が出てくる」

『今までは痛まなかったのですか？』

「え？ 痛んだんじゃないかな？」

『私の見立てでは、もうマスターの心はボロボロですよ』

「俺は結構図太いぞ」

『エリヤを勝たせる意味を理解されていますよね？ その後の面倒な処理も引き受けるつもりですか？ 私は マスターが壊れてしまつと判断すれば、無理矢理にでも拘束し、その後にこの国を制圧しますよ』

「おゝ、怖い。精々、気を付けるとするさ」

闘技場の観客席は啞然としていた。

何しろ、俺の勝利にかけている馬鹿が多かつたからな。

だから俺は声を張り上げる。

「えゝ、俺に賭けて見事に負けた皆さん。二人の新しい門出のご祝儀ゴチになりますゝ！」

俺は持っていたチケットの束を見せる。

それは、エリヤが勝つことに賭けた証拠だ。

エリヤが勝つことに　俺は自分の負けに大金を賭けていた。

青いチケットの束を見て、俺に賭けた学生たちが赤いチケットを闘技場に投げてくる。

「ふざけんなー！」

「金を返せ！」

「こんなの無効だ！」

別に最初から騙すつもりはなかった。

結果的にそうなったただけだ。

というか、払い戻しにも応じるつもりだ。

「これに懲りたら賭け事からは手を引くんだな！　負けたお前らは賭け事に才能がないよ！」

笑ってやると、闘技場内にゴミが投げ付けられる。

「卑怯者！」

「やっぱり、リオンはリオンじゃないか！」

「このインチキ野郎！」

そんな声に俺は言い返すのだった。

「今頃気付いたのか馬鹿共が！」

笑ってやると、あちらこちらから声上がる。

「あんな奴にエリカ様が嫁がなくて良かった！」

「まったくだ！」

「エリカ様に相応しいのは、バルトファルトじゃない！」

聞き慣れた五馬鹿の声が聞こえてくる。

それに同調するように、観客たちも同じことを言い出すから笑える。

『予定通りですか？』

「ま、そうだな」

アロガンツを下りて、エリヤをコックピットから引きずり出した。

「あ、あの」

何か言いたそうにしていたので、エリヤに耳打ちしてやる。

「エリカを泣かせたら、次は本気で相手をしてやる。忘れるなよ」

「は、はい！」

怯えるエリヤに肩を貸して、俺はエリカたちのもとへと向かうのだった。

婚約破棄

「この大馬鹿者が！」

アンジェに呼び出された俺は、正座をして俯いていた。

リビアとノエルも俺を囲んでいる。

「リオンさん、やり過ぎです！」

「ビックリしたわよ。本当にドン引きだったわよ！ もっと軽めの奴を想像していたのに、あそこまでしたら駄目じゃない！」

エリヤとの決闘だが、俺が周囲をドン引きさせたことに怒っていた。

いや、俺の評判を落としたことに、だろうか？

アンジェが溜息を吐いている。

「必要以上に自分の名を貶めるな。あそこまでやる必要はなかったはずだ」

俺は小さく笑うのだった。

「英雄なんて柄じゃないので、少し引かれた方が俺としては丁度良いんだよ」

「リオンさん、あれは少しじゃありません。皆さんドン引きでしたよ」

リビアが何を言っているんだ？　みたいな顔をして俺に注意してきた。

ノエルは腕を組んでいる。

「ま、結果的にはよかったのかな？」

エリカが自分の気持ちを口に出した。

それが今は一番の収穫だ。

「だが、本当に忙しいのはここからだ。王妃様は必ず動くぞ」

ミレーヌ様が差し伸べた手を振り払ったようなものだ。

アンジエはすぐに行動を起こすべきだと告げてくる。

「もう一度確認するぞ。リオン、お前は篡奪にも手を貸さない。だが、王家にも必要以上に近付かない。この方針でいいんだな？」

それは、どちらに味方するよりも厳しい選択だった。

だが、可愛い姪のためだ。

やってやると決めている。

「もう準備は出来ている。　ルクシオン！」

俺の右肩当たりに浮かんでいるルクシオンは、やる気のない感じで説明するのだった。

『エリカのフレーザー家への嫁入りを全力で支援しつつ、立場を王国寄りに見せるつもりです。ミレーヌへの対応は難しくなるでしょうけどね』

「え、そうなの？ 謝ったら許してくれない？」

ミレーヌ様が怒ったままではちょっと困ると言うと、三人が淒く呆れた目を俺に向けてくる。

「リオン、お前は王妃様をどうしたいんだ？」

「リオンさん『メッ！』です」

「いや、あんた人妻にどうしてそこまでこだわるのよ」

単純に好みだからね。

アンジエが少し嬉しそうにしている。

「これからは私の実家も頼れない。王妃様もきっと手を貸さない。我々だけでこの状況を切り抜けることになるな」

リビアは、そんなアンジエを見て不安そうにしている。

「アンジエ、楽しそうにしていますか？」

「そう見えるか？」

微笑むアンジェの顔を見て、ノエルは肩をすくめていた。

「凄く楽しそうよ。それで、何かからはじめるの？」

アンジェが腰に手を当てる。

「エリカ様とエリヤの婚約を復活させる。実は、もう許可を得ているんだ」

許可を出したのはローランドだ。

あの糞野郎は、俺とエリカが結婚しないなら、エリヤで我慢すると言っただけらしい。

どこまでいっても屑野郎である。

王都にあるレッドグレイブ家の屋敷。

執務室には、親子が揃っている。

ヴィンスは、リオンとエリカの婚約破棄の件について報告を受けていた。

ギルバートは嬉しそうにしている。

「王妃様の手を振り払いましたね。父上、これでリオン君はこちら

側であると宣言したようなものです」

だが、ヴィンスは報告書を破り捨てた。

「父上!？」

苛立っているヴィンスは、アンジェの名前を呟く。

「私に逆らうか、アンジェ」

「ど、どうしました？ どうしてアンジェが逆らうのですか？」

ヴィンスは鋭い視線をギルバートに向けた。

「事後報告が何よりの証拠だ。こちらを信用していないと言っているようなものだ。それに、エリカ様のフレイザー家への輿入れを強引に進めたようだ」

「王妃様が認めたと？」

「陛下だよ。あのろくでなしは、こういう時だけ動きが速い」

ヴィンスには、ローランドが笑っている姿が見えた。

忌々しい。

普段は遊んでいるが、あれでも能力はそれなりにある。

「アンジェを呼び出しますか？」

「呼び出したところで、ノコノコと顔を出すと思うのか？ 無理矢理連れ戻そうにも、侯爵に守られている。今はこちらから敵対出来ないと分かっての行動だ」

リオンを神輿として、派閥の仲間を集めている状況だ。

敵対すれば、派閥が維持できない。

リオンの名前で集めた仲間だ。

敵対すれば、確実に離れてしまう。

ギルバートが目を細める。

「話し合いの場を用意します」

「それよりも、アンジェが何を目的にしているのか調べる」

公爵家の動きは怪しくなっていた。

ヴィンスは呟く。

「今の王国を生きながらえさせて何の意味があるというのか」

公国との戦争後から、ヴィンスは今の王家に未来はないと考えていた。

新しい王家が必要になる。

それをアンジェも理解しているはずだった。

こちら側だと思っていたが、どうやら敵対するらしい娘にヴィンヌは小さく微笑む。

「お手並み拝見といこうか」

報告書を燃やしている女性がいた。

王宮の執務室。

無表情で、エリカのフレーザー家への輿入れについて書かれた報告書を燃やしているのはミレーヌだった。

「そう 私の手は取らない。そう言いたいよね、リオン君。いえ、アンジェかしら？」

ミレーヌからすれば、エリカをリオンへと嫁がせるのは強引だが必要なことだった。

それだけ、危機的状況である。

「皆、私から離れていくのね」

期待していたアンジェもそうだが、目をかけていたリオンにも裏切られた。

そして、我が子であるユリウスやエリカも同様だ。

この一番大事な場面で、ミレーヌは皆に裏切られた。

「そんなに沢山の血を見たいのね。なら、好きにすればいいわ」

ミレーヌにはホルファート王国の崩壊が見えていた。

どちらにもつかない態度を見せるリオンの動き。

レッドグレイブ公爵家の動き。

国内外の動き。

各地で反乱が起き、大地は血で染まるだろう。

領主貴族たちが争い、独立した勢力たちが激しく戦い合う。

そうしている間に近隣の国も手を出してくるはずだ。

ホルファート王国は、確実に滅んでしまう。

この状況を切り抜けるのは、もはや不可能に近い。

「これは貴方たちが望んだことよ」

瞳から輝きが消えたミレーヌは、そう呟くのだった。

学園の男子寮。

俺の部屋に呼び出したのは、エリカとエリヤの二人だった。

「婚約式ですか？」

驚いているエリカに対して、エリヤの方はガチガチに緊張していた。

「ゆ、指輪を買わないと！ あ、式場の手配も！」

マリエがエリヤをハリセンで叩いた。

「落ち着きなさい！」

叩かれたエリヤが「は、はい！」とマリエに下手に出ている。

だが、今のマリエはちゃんとした地位を持っていないため、エリヤに強くものを言える立場じゃないんだけどね。

俺がアンジエを見ると、代わりに説明してくれた。

「夏期休暇に強行する。婚約式を行えば、そこから二人の結婚を邪魔するなど不可能だからな」

婚約式をした俺に、ミレーヌ様が娘のエリカを押しつけてきたのがいかに力押しだったか分かるというものだ。

「エリヤ殿、分かっていると思うが、この婚約はリオンが面倒を見る」

その意味をエリヤも理解していたようだ。

「ぼ、僕に侯爵の派閥に入れということですよ。だ、大丈夫です。フリーザー家は、今まで王妃様の派閥でしたから。で、でも、エリカとの一件で、それも有耶無耶になっていますし。ただ、元々落ち目で、他にご紹介できる貴族がいません」

落ち目というのは、周りの家から相手にしてもらえなくなるからね。

というか、同じ爵位なのに俺の下についていいのだろうか？

「エリヤが俺の下について問題ないの？」

「あるに決まっている。だが、今は少しでも派閥を大きくしたい」

話を聞いていたユリウスが、俺に分かるように解説してくるのだ。

「バルトファルト、世の中というのは数が重要になる。お前を支持する貴族たちがいると示せば、王宮だって無視できないぞ。ま、アンジェリカの狙いは、レッドグレイブ公爵派閥の切り崩しだけだな」

「え、そうなの？」

アンジェが頷いて同意する。

「篡奪を諦める程度には、父上の派閥を削っておく必要がある。その上で、リオンは王家を全面的に支持すると、国内外に示す」

ただ、これには問題があるらしい。

ユリウスが恥ずかしそうにしていた。

「だが、現時点で王太子の地位には誰もいない。王国を支持すると言っても、正直に言えば後継者争いが待っているようなものだな」

明確に王太子がいれば、その人に忠誠も誓っておけばいい。

だが、今は誰もその地位にいない。

俺は頭を抱えた。

「ちくしょうああ！ 第二王子を殴ってさえいなければ！」

ユリウスが悲しそうな目を俺に向けている。

「俺も人のことは言えないが、お前ももう少し先を考えて行動したらどうだ？」

ただ、いつまでも悩んでいては始まらない。

姪っ子のために頑張ると決めたなら、すぐに立ち上がって行動するべきなのだ。

「なら、ジェイクに話を付けるか。駄目なら、他の王子を王太子にすればいいし」

アンジェの頬が少し赤い。

「リオン、私はお前のそういうところは好ましく思っているよ」

マリエが首を横に振っていた。

「その発想がまずないわ。王太子を用意するとか、それってどうなの？」

王太子の地位を俺が勝手に決められるものではない。

だが、いくらでもやり方がある。

エリヤが困って口を出せずにいる横で、エリカが俯いていた。

「ここまでしなくてもいいのに。わ、私は」

そんなエリカの肩に、マリエは手を置くのだった。

「任せなさい。あに リオンがどうにかしてくれるから」

エリカが小さく頷くと、アンジエが話を聞いていたルクシオンに視線を向ける。

「ま、我々にはルクシオンという切り札があるからな」

ルクシオンは普段通りだ。

『私としては、マスターにこのまま王位についてもらいたいものですね。それが一番楽なので』

冗談ではない。

「却下。俺は王様になりたくない」

ルクシオンの冗談を聞いていたアンジェは「出来るならそれもいいが」とか考え込み、ユリウスは「バルトファルトが王様になったら、俺は串焼き職人になれるだろうか？」と真剣に悩んでいた。

てめえ、ユリウス！ お前はいつたどこに向かっているんだよ！

お前がもつとしっかりしていれば、俺が苦勞することなどなかったのに！

『では、まず おや？』

ルクシオンが今後の計画を話そうとすると、俺の部屋に客が訪れた。

「もう、ジェイク殿下つたら」

「そう言うな。こんなことを言うのはお前にだけだ」

「またそんなことを言って」

「ふっ、こんな気持ちは初めてだ」

学園の人気のない中庭。

アーレちゃんとジェイク殿下が楽しそうに会話をしていた。

お淑やかなアーレちゃんに、ジェイク殿下は気を引こうと次々に会話のネタを提供している。

物陰に隠れた俺とフィン、その様子を見て冷や汗を流していた。

「　　嘘だろ」

まさか、ここまでジェイク殿下が本気になるとは想像もしていなかった。

途中で性別が判明して、正気に戻っていた。

「おい、どうするんだよ！　攻略対象の男子が全滅したじゃないか！」

ジェイク　　アーレちゃん狙い。

同級生　　既に既婚者で学園にいない。

アーロン　　アーレちゃんになった。

下級生　　婚約者あり。

攻略対象の男子を、攻略対象の男子が狙うという展開に声も出ない。

俺はフィンを見る。

「まだ、オスカルがいたはずだ」

「オスカルはお前の姉妹が狙っているだろうが！」

「え？ いや、あいつも美形だから、他の女子たちだって狙うだろうとか、フィンリーたちは本気で狙っていたのか？」

あの二人が狙ったところで、オスカルには近付けないと考えていた。

だが、近くで様子を見ているフィンの方が、オスカルの恋愛事情に詳しくった。

「いや、フィンリーさんが狙っている男子を、他の女子が狙うわけがないだろ」

「何で？」

「お前の妹だからだよ！」

フィンが声を抑えつつ俺に「何で理解していないんだ！」と怒っている。

つまり、フィンリーは王国の英雄になってしまった俺の妹だ。

そんな相手の恋路を邪魔しないという、周りの配慮もあって順調にオスカルとの関係が進展中？

「あ こっちも詰んだ」

「リアルにリセットボタンなんかねーんだぞ！ どうするんだよ。本当にどうするんだよ！？」

慌てているフィンに俺は落ち着くように言うのだ。

「ま、まて、ミアちゃんの体調が良くなるイベントがあるはずだ。それを調べれば問題ない」

「わ、悪いが俺は知らないぞ。妹の話を聞いていた程度だ。詳しいことは知らない。皇帝の爺さんも知らないから、俺たちを王国に留学させたんだからな」

「任せろ。無駄にあの乙女ゲーをプレイしていたマリエがいる。あいつに聞けばすぐに分かる」

それを聞いて、フィンが胸をなで下ろすのだった。

「そ、そうか。よかった」

「え？ 私はプレイしたけど、クリアはしていないわよ」

「は？」

マリエを呼びだした俺たちだが、そこで聞いたのはとんでもない話だった。

「いや、買うには買ったんだけど、最後までプレイしていないのよ。後半は動画でプレイ動画を見ただけ」

こいつ、途中で放り投げやがった。

フィンが慌てて確認する。

「な、なら、ミアに関する重要なイベントを覚えていませんか？
どんな些細なことでもいいんです」

マリエが腕を組む。

「そう言われても、もう随分前の話だからね。え〜と、確か　ダ
ンジョンに入ると元気になる設定だったわね」

何その設定？

フィンも思い出したようだ。

「そう、そうです！　ほ、他には？」

ミアちゃんのために必死になっているフィンのために、マリエに
思い出すように言うのだ。

懷から札束を出しながら、ね。

「ほら、これをやるから思い出せ」

「わ〜い、兄貴大好き！」

札束を受け取り、すぐに自分の懷にしまい込むマリエを見て悲し
くなった。

フィンも複雑な表情をしている。

「お前らの関係って酷いな」

「我が妹ながら、情けない限りだよ」

「いや、お前も酷いよ。妹に札束を出すとかおかしいだろ！」

今日はフィンがいるためか、マリエは普段は気にしないのに照れた顔をする。

猫をかぶるときの顔だった。

「ち、違つの。みんなの生活費を稼ぐのに大変なの」

正直、八人の生活費って凄いだよね。

毎月、結構な金額が消えていくため、家計を管理するマリエは常にお金を求めている。

「そうでしたか。これは申し訳ない」

謝罪するフィンに、俺は教えてやるのだ。

「違つぞ。こいつは逆ハーレムを目指して、野郎五人を養わないといけないから自業自得だぞ」

「何で言つのよ！」

マリエが俺に掴みかかってくるのを見て、フィンが両手で顔を隠してしまう。

「頼むからミアの重要な情報を教えてください」

すると、物陰からエリカが姿を見せてきた。

「私が知っています」

久しぶりのダンジョン

一年生の頃の行事を覚えているだろうか？

冒険者になってダンジョンに入るやつだ。

一年生は全員が受ける授業なのだが、言ってしまうえばちょっと危険な社会科学見学である。

そんな場所に、場違いな武装をした男がいた。

フィンだ。

「お前は何をしているんだ？」

『これでも軽装だ』

黒い全身鎧。

フルプレートを着込み、くぐもった声を出しているフィンは大きな盾を持っていた。

鎧の一部から目が出現する。

まといっているのは、黒助なのだろう。

そういえば、俺が購入した課金アイテムもこんな感じだった気がする。

ちよつと刺々しいデザインが、男心をくすぐってくる。

『相棒、俺が言うのも何だが、ちよつと大人気ないと思うぞ』

『馬鹿野郎！ ミアに万が一のことがあったらどうするつもりだ！
これでも俺は妥協したんだぞ！』

このシスコン、ミアちゃんの盾になるためフルプレートを用意したようだ。

「フィン、過剰戦力って言葉を知っているか？」

『い、いや、だが、何かあったらどうするつもりだ？』

「お前は本当に過保護だな。見る、みんな呆れているぞ」

周囲を見れば、引率の教師も同級生たちも引いていた。

その中にはフィンリーの姿も確認できる。

「まったく、ミアちゃんも恥ずかしそうにしているじゃないか」

俯いて耳まで赤くしているミアちゃん。

だが、俺に冷たい目を向けているのはフィンリーだ。

「いや、兄さんも酷いわよ」

「え？」

後ろを見れば、エリカが両手で顔を隠している。

耳まで真っ赤にしていた。

小声で俺に抗議してくる。

「おじ　リオンさんの馬鹿」

周囲には無人機たちが整列しており、エリカを守る位置についていた。

フィンが俺の胸に、人差し指でついてくる。

『お前も人のことを言えないじゃないか！　というか、三年のお前がこの場にいるのはどういうことだ！』

俺はフィンから顔をそらした。

すると、嬉々としてルクシオンが俺に報告してくる。

『マスター、地下一階の掃討は完了しました！　後は二階と三階入り口の掃討を残すのみです』

最悪のタイミングでルクシオンが、俺がしていることをばらしてきた。

エリカが俺を見て怒っている。

「リオンさん？」

その隣に立つのは、正式に婚約者に戻ったエリヤだ。

「あの、兄貴。流石にこれはないです」

「駄目か」

あの日以来、俺のことを兄貴と呼ぶようになってしまった。

ま、別にいいけどな。

引率の教師が俺に抗議してくる。

「待ってください、侯爵！ これでは授業になりません！」

だが、フィンの方は嬉しそうにしている。

『これでミアの危険が減るな』

『相棒は、そういうところだぞ』

教師が俺を問い詰めてくる。

「それより、三年生も授業中のはずでは？」

「ああ、サボったんだ。そして、今日は“偶然”にもダンジョンに入りたくなった。他意はない」

堂々と答える俺に、教師はある人に助けを求めに行くのだった。

「ミスタリオン、心配する気持ちは分かります。ですが、やり過ぎではありませんか？」

「申し訳ありませんでした！」

目の前にいるのは、俺の師匠だ。

フィンもお説教を受けている。

「どうして俺まで」

「ミスタフィン！ 貴方も同じですよ。相手を大事に思う気持ちは素晴らしいですが、いきすぎれば重荷となってしまいます」

「は、はい！」

教師が泣きついた相手とは、学園長である師匠だった。

俺も流石に師匠には抵抗できない。

「二人とも、罰としてここで待機していなさい。見守るというのも大事なことですよ」

師匠がそう言って去って行くと、俺とフィンはダンジョンの入り口で待つことになった。

エリカもミアちゃんも、ダンジョンへと入っていく。

ミアちゃんは小さく手を振ってくれたが、エリカは少し怒っているのか無視していつてしまった。

いや、余裕がないように見えた。

フィンが俺を見る。

「エリカちゃん、大丈夫か？」

「緊張しているのかもしれないな」

人がいなくなったので、お互いに座って話をした。

フィンは安堵している。

「しかし、ミアが助かる方法をエリカちゃんが知っていて助かったよ。うちのアホ皇帝も、詳しい内容は知らなかったからな」

エリカは三作目について詳しかった。

何しろ、随分とやりこんだそうだ。

伯父さんとして、あの乙女ゲーをやりこむというのはちょっと心配だったのだが、理由を聞いたら泣けてきてマリエをハリセンで叩いてしまった。

何しろ『ずっと家で一人だったから、母さんのゲーム機で遊んでいたの。よく分からなかったけど、母さんが楽しそうにしていたから』子供ながらに、母親の気を引きたかったのか、それとも母親と同じものを見たかったのか　とにかく、可哀想な話だったよ。

家に帰っても親がない。

いても眠っており、相手にしてもらえないわけだ。

よく道を踏み外さなかったものだ。

「俺は帝国の皇帝が転生者、っていうのが驚きだな。あの乙女ゲーを知らなかったのか？」

「前世で妹がプレイしているのは見た、とか言っていたな。ただ、その妹さんとは仲がよくなかったらしい」

俺と同じようなタイプだ。

フィンはミアちゃんの様子が気になるのか、ダンジョンの入り口を気にしていた。

黒助が注意する。

『相棒、大丈夫だって。ミアはこの中なら元気になれる。ここは魔素が多いからな』

「わ、分かっているさ」

俺はそんなフィンを見てからかうのだ。

「やゝい、シスコン」

「はぁ？ お前もだろうが！」

「俺のどこがシスコンだ？ 訴訟も辞さないぞ」

言い争っていると、ルクシオンが呟くのだ。

『争いは同レベル同士でしか発生しないのですね』

こいつ、何が言いたいのか？

『ただ、マスターの目的は達成できましたね』

フィンが俺を見る。

「目的？」

ルクシオンが正直に答えるのだった。

『マスターがエリカを可愛がっていると、学園の生徒にアピール出来ました。これにより、両者が不仲でないと示せます』

俺とエリカが婚約破棄したことで、勘違いする馬鹿を出さないための芝居みたいなものだ。

だから。

「そういうことだ。フィンのシスコンとは違う」

「シスコンじゃないって言っているだろうが！」

「どこが違うのか言ってみろよ！」

黒助が目を横に振っていた。

『相棒、言い返しても無駄だ。相棒が負ける』

一年生たちは、ダンジョンに入り目的地を目指していた。

ミアは普段よりも体が軽く感じる。

「何だか今日は調子がいい！」

楽しそうなミアとは対照的に、エリカは苦しそうにしていた。

胸元で手を握りしめている。

「エリカ！」

心配するエリカが側に駆け寄ると、エリカは笑顔を作った。

「大丈夫。問題ないわ」

青い顔をしているエリカは、誰が見てもやせ我慢をしていた。

すると、周囲にいた生徒たちが騒ぎ出す。

「おい、モンスターの群れだ！」

「何でこんなに出てくるのよ！」

「誰か、助けを呼んでこい！」

騒ぎ出す生徒たちは、エリカたちを守るために前に出るのだった。
それを見たエリカが、駆け出して皆から離れていく。

逃げ出したようにも見えるが、不思議なことにモンスターたちはエリカを追いかけはじめた。

「エリカ！」

エリヤが追いかける。

ミアも追いかけようとすると、生徒たちを抜けたモンスターが近付いてきた。

「きゃっ！」

慌てて武器を手にとって構えるが、怖くて目を閉じてしまう。

ミアに襲いかかろうとしたモンスターたちだが、急に動きを止めると、そのまま方向を変えてエリカを追いかけた。

目を開けたミアが、不思議な光景を目にする。

「え？」

モンスターたちが、自分たちを襲わずにエリカを追いかけていたのだ。

「何が起きたんだ？」

「モンスターが襲ってこないなんてあり得るのか？」

「数人をすぐに上に戻せ！ 教師に知らせて、先輩を呼んでこい！」

慌ただしく動き出す生徒たち。

ミアは、エリカのことを心配して駆け出すのだった。

「留学生！ 勝手に動き回るな！」

他の生徒の意見を見做して、ミアは一人でエリカを追いかける。

「暇だな」

欠伸をしていると、フィンも頷く。

「そうだな。それより、ミアは大丈夫かな？」

「相棒、その話題は数分前にもしたぞ」

黒助がそう言うと、ルクシオンがわざとらしく訂正するのだ。

「数分？ 五十八秒前ですが？」

「お前らのそういうところが苛々するんだよ！」

「おや、間違いを指摘されて怒ったのですか？ これだから新人類の兵器は駄目なのです」

『あああああああ！！ 苛々する！ 相棒、こいつだけでもスクラップにしようぜ！』

今日も元気に仲が悪い。

フィンの方は、黒助の意見を無視している。

「ミア、泣いていないかな？」

「お前は自分の相棒の意見を全て無視しているな」

俺がそう言えば、ルクシオンが赤い一つ目を光らせていた。

『マスター、鏡をご用意いたしましょうか？』

「え、なんで？」

ダラダラと話をしていると、息を切らした一年生たちが出入り口から出てくる。

予想よりも早かった。

「もう戻ってきたのか？」

立ち上がると、一年生たちが俺を見て叫ぶのだ。

「先輩、エリカ様が！ それに留学生も！」

事情を聞いた俺は、すぐにルクシオンを見る。

持ち込んだコンテナが開き、姿を見せるのはエアバイクだった。

だが、俺よりも素早かったのはフィンだ。

黒助をまとうと、黒い液体に覆われて全身鎧を着用した姿になった。

蝙蝠のような翼と、トカゲのような尻尾がついている。

『リオン、悪いが先に行く』

『相棒！ 強行突破だ！ 鉄屑は後からノンビリ来いよ。どうせ俺様には追いつけないからな』

空を飛んでダンジョンに入るフィンを見送ると、俺はエアバイクに乗った。

用意していたショットガンを肩に担ぐ。

「ルクシオン、最短ルートでエリカたちを助けるぞ。 おい、聞いているのか？」

『舐めた物言いをしたな、欠陥品。私の実力を侮ったことを後悔させてやる！ マスター、最短ルートを全速力で移動します。振り落とされないように注意してください』

「あ、はい」

色々と言いたいこともあるが、今はエリカの救出が先だった。

「どうして面倒事になるのかな」

浮き上がったエアバイク。

ルクシオンが俺に注意してくる。

『舌を噛むので黙っていてください』

「了解　ぬわあああ！」

分かったというと、エアバイクが想像していた以上のスピードでダンジョンの通路を走り抜けた。

エリヤがエリカを見つけた時は、モンスターに囲まれていた。

座り込んで苦しそうにしているエリカを見て、エリヤは剣を抜いて庇うように前に出る。

「エリカ、無事だね！」

エリカが顔を上げる。

「エリヤ、なんで来たの？」

「ぼ、僕は君の婚約者だから」

脚が震えてくる。

エリヤは震えながら、襲いかかってくるモンスターたちの相手をしていた。

すると、そこにミアがやって来た。

一本道であるため、迷わなかったようだ。

「二人とも！」

声をかけてくるミアを見て、エリヤは覚悟を決めるのだった。

（エリヤを助けるためには、誰かがここに残るしかない。僕が時間を稼ぐんだ）

ミアがいるなら大丈夫だろうと、エリヤはすぐに事情を説明する。

「ミアさん、エリヤを連れて先に戻って欲しい」

「え、でも」

「ここは僕が何とかするから、上にいる兄貴たちを呼んでくれ。で、出来れば、早く呼んできて欲しい。そうすれば、みんな助かるから」

でも、と言うミアに、エリヤは強い口調で言う。

「行くんだ！」

「わ、分かったわ」

苦しそうなエリヤを見て、ミアは肩を貸すとこの場を去るのだった。

た。

モンスターたちを前にして、エリヤは剣を振るう。

「ここから先は行かせないぞ！」

襲いかかってくるモンスターたちを、剣で斬り伏せていく。

だが、腕を噛まれ、脚を噛まれ、倒しても次々に出現するモンスターを前にエリヤは苦戦していた。

（耐えないと。僕がここでモンスターを通したら、エリカたちが危ない）

必死に戦うエリヤだが、数が多いモンスターたちに囲まれつつあった。

このままでは危ないと思っていると、後方が明るくなった。

「邪魔だああああ！」

エリヤの横を通り過ぎたのは、エアバイクだった。

モンスターたちを巻き込み、吹き飛ばして黒い煙に変えていく。

エアバイクから降りてきたのはリオンだ。

「あ、兄貴！」

「伏せていろ」

リオンがショットガンの引き金を引けば、モンスターたちが吹き飛んで黒い煙へと変わった。

「エリカたちはどこだ？」

「戻ってもらいました。僕がここに残ってモンスターたちを引きつけたんです」

「でかした！」

エリヤの行動を褒めるリオンは、すぐにエリカたちを助けに向かうとエアバイクに乗る。

少し遅れてフィンがやってきた。

翼をたたみ、地面に滑り込みながら急停止するのだが、慌てているようだ。

「ミアはどこだ！」

『何でお前らがここにいるんだよ！？』

そんなブレイブに、ルクシオンは赤い瞳を光らせて答える。

『最短ルートを選択した結果です。新人類の兵器には出来ない芸当ですね』

『お前、本当に腹立つ！』

リオンは、ルクシオンとブレイブを無視してフィンと話し合う。

「途中で会わなかったのか？ 二人は先に戻ったみたいだぞ」

「会っていないから聞いている！ それより、ミアは方向音痴だ。こんな場所でウロウロさせたら、どこに行くか分からないぞ！」

エリヤは顔を青ざめさせた。

（方向音痴？ え？ ミアさんも！？）

「う、嘘だ。だ、だったらまずいですよ、兄貴！」

「え、なんで？ エリカもいるから心配いらないだろ」

しっかり者のエリカがいれば、ミアちゃんと一緒でも迷わないはずだ！ などと言っているリオンに、エリヤは叫ぶのだ。

「エリカも方向音痴です！ それも、凄い方向音痴なんです！」

「え？」

共闘

地下へと続く坑道のようなダンジョン。

ミアに肩を借りて歩くエリカは、青い顔をして苦しそうにしている。

「ごめん　なさい」

そんなエリカに、ミアは元気よく返事をするのだった。

「大丈夫ですよ！　私、こう見えても少し前までお転婆って言われていたんです。エリカ様一人なら、ダンジョンの外に連れて行けます」

そして、十字路に来る。

ミアは少し考えてから、頷いて言う。

エリカは苦しそうにしながら左を見た。

「右ですね！」

「左ね」

二人の意見が割れてしまった。

ミアが困っている。

「え？ 右ですよ？」

「左だと思うのだけど？」

このように、常に意見が違ってしまつ。

ミアは頷いた。

「なら、さっきは私の意見で左にしましたから、今度は右にしまし
よう！」

「そ、そう？ ありがとう。でも、ここって今はどの辺りなのかし
ら？」

ダンジョンの通路などどこも同じに見えてしまつ。

ミアは明るく振る舞つたのだつた。

「大丈夫です。きっと、もうすぐ出口ですよ。ほら、違う階層の入
り口が見えて来ました！」

そう言つて、二人は地下三階を越えて、更に奥へと進んでいく。

そこは地下五階への入り口だつた。

奥へと進む二人は対照的だ。

ミアは普段とは違い顔色もよく、元気いっぱいだった。

対して、エリカの顔色は悪い。

普段と正反対である。

「エリカ様、大丈夫ですか？」

「大丈夫よ。それよりも、もしものがあつたら、貴女は一人で逃げなさい」

「え？」

エリカに言われ、驚くミアは足を止めてしまった。

ただ、エリカは続けるのだ。

「貴女一人なら大丈夫。モンスターにも襲われないわ」

「どういうことですか？」

ミアは考える。

確かに、今までモンスターに襲われた経験はない。

帝国にいた時も、モンスターが近付いてくることはなかった。

先程、モンスターたちが自分を避けていたことも気になってくる。

「もしかして、エリカ様は何か知っているんですか？」

苦しそくに笑うエリカは「少し喋りすぎたわね」と言って、壁に

背中を預けるのだった。

「私はね、昔からモンスターを引き寄せてしまうの。だから、私を置いていけば、きっと貴女は助かるわ」

ミアは困っている。

「あの、モンスターは人を襲いますよ」

「そうね。でも、私は特別よ。嫌われているの」

嫌われているという言葉が気になる。

ならば、まるで自分はモンスターたちに。

そこまで思考すると、ミアは通路の奥を見た。

「嘘。なんでこんなに怖いモンスターがいるの」

奥から顔を出したのは、通路をギリギリ通れる大きさのモンスターだった。

こんなダンジョンの浅い場所に出てくるモンスターではない。

事前に知らされていたモンスターとは違いすぎる。

ミアが急いでエリカを連れていこうとする。

だが、エリカは座り込んでしまった。

苦しそつに胸を押さえている。

「エリカ様！」

「っあ！　　い、行きなさい！」

声を絞り出し、ミアに逃げるように言うと、エアバイクが二人の横を通り抜けてモンスターに体当たりを行うのだった。

吹き飛ぶモンスター。

そして、発砲音がモンスターとは反対側の通路から聞こえてくると、エアバイクが爆発する。

燃料に引火して燃え上がるエアバイク。

周囲が一気に明るくなると、二人に近付いてくるのはリオンだった。

「おや、珍しい。この辺りでは見かけない顔だな。よし、死ね」

モンスターが炎の中から出てくると、リオンはショットガンを構えて引き金を引く。

魔法陣が銃口の前にいくつも展開されると、ショットシエルが突き抜けて紫電が発生した。

モンスターを紫電が貫き、黒い煙に変えていく。

黒い煙を吸うと、エリカが咳き込み苦しそうにする。

「エリカ様！」

ミアが叫ぶと、すぐにリオンが側により、エリカにマスクを付ける。

「どうしてこんなに奥まで来た！ 無茶をするな」

マスクを付けたエリカは、少し落ち着いていた。

ルクシオンが近付いてくると、何やら分析をはじめ。

『地下五階でもかなりきついのでしょね。マスクの着用をご提案したいところです。もしくは、ダンジョンへ入ることを禁止したい』

リオンは通路奥を見ると、すぐにショットガンを構えた。

「団体が」

『モンスターがこちらを目指して集まっています。マスター、五分間だけ時間を稼いでください』

「弾が持つかな？」

次々に集まってくるモンスターたち。

先程の話が本当ならば、エリカを目指して集まってきていることになる。

ミアがエリカの腕にしがみついていると、今度は黒い鎧をまとう

た騎士がモンスターたちに突撃していく。

手に持った剣を一振りすれば、モンスターたちが黒い煙に変わっていくのだった。

「騎士様！ ブー君！」

『ミア、無事だな！』

『ブー君は止めるって言っただろうが！』

次々に現れるモンスターたちを斬り伏せていくフィンだが、数も多くて苦戦していた。

そんなフィンを、リオンが援護する。

フィンに飛びかかってくる大きな虎のようなモンスターの頭部を、リオンが撃ち抜いた。

「援護するから、もっと派手に暴れていいぞ」

そんなリオンの言葉に、フィンは少し嬉しそうにしていた。

『俺に当てるなよ』

「当たっても平気だろうに」

二人とも、どこか余裕すら感じる。

そんな二人を見て、ミアは思ふのだ。

（騎士様、何だか嬉しそう）

国にいた時よりも、フィンが楽しそうにしている姿を見て、ミアは嬉しくなるのだった。

いつもは、緊張しているか自分を心配ばかりしている。

もっと笑顔を見せて欲しかったミアには、王国に来てよかったと思えたのだ。

『当たった！ 相棒、あの鉄屑、俺に当てやがった！』

『変な動きをするからです』

『嘔吐け！ 絶対に予測できたはずだ！』

『新人類の兵器を予想など出来ませんね。理解したくもない！』

「お前ら五月蠅いよ！ ルクシオン、お前もちゃんと仕事をしろ！」

『マスター、私を疑うのですか！？』

『黒助、お前も集中しろ！』

『相棒、もっと俺様を大事にしろよ！』

ただ、ブレイブとルクシオンは、仲が良さそうには見えなかった。

二人が騒いでいる間に、モンスターたちは全て倒されるのだった。

その頃。

地上ではメルセが、ローランドの友人である宮廷医に詰め寄っていた。

場所は誰も来ない倉庫である。

「随分な趣味ですね」

報告書にまとめられていたのは、宮廷医の趣味に関する情報だった。

あまり公に出来ない趣味が書かれており、ローランドの友人は慌てて報告書を抱きしめる。

「こ、これはその！」

「言い訳なんて聞きたくないわ。これをばらまかれなくなったら、分かっているわよね？　ちゃんと持って来たのでしょうか？」

宮廷医は、鞆から薬を取り出した。

ドクロのマークを貼りつけられた瓶を、メルセは奪い取る。

「これさえあれば、あの糞爺ともおさらばできるわ」

ローランドを糞爺と呼ぶメルセは、本当に忌々しそうにしていた。

「何が愛しのメルセよ。私の恋人になりたいなら、もっと若くないと駄目よ。老人なんて興味ないわ」

王国貴族の、女性らしい言葉に宮廷医が顔を背けた。

「どうして陛下はお前なんか」

「口を慎め、下郎！ 変態趣味の屑が、私を“お前”ですって？ いい、私は本来なら、伯爵家に嫁ぐはずだったのよ。伯爵夫人よ。それが、あいつのせいでこんな目に」

息の荒いメルセを刺激しないように、宮廷医は鞆に書類を押し込み逃げ出すのだった。

その背中を見て、メルセは笑う。

「間抜けな陛下に言ったら許さないわよ」

下品に笑っているメルセに近付くのは、作業着姿のルトアートだった。

「姉さん、ご機嫌だね」

「そうね。あの爺の相手をしなくてすむもの」

「陛下？ まだキスもしていないとか言わなかった？」

「あいつのつまらない話を聞くだけで、苛々するのよ！ 私がどれだけ苦勞して、王国軍の情報を聞き出したと思っているの？」

メルセがルトアートを蹴る。

「ご、ごめんよ、姉さん」

「男ならもつと女性に気を遣いなさい！ だからあんたは駄目なのよ！ さつさと結婚して、あのゴミ共を屋敷から追い出しておけば、私たちがここまで苦勞しなかったのに！」

ゴミ共とは、バルカスたちの事だ。

「あんな領地、私には相応しくない！ 本土に領地が欲しいよ。田舎と言うだけで馬鹿にされるのはもう嫌だよ」

「あんたがそんなことを言っているから、リオンの糞野郎が調子に乗ったのよ！」

まったく関係ないが、メルセは八つ当たりをしたいだけだ。

ルトアートが作業着を汚していると、ゾラがやってくる。

「五月蠅いわよ、メルセ！」

「お、お母様。 ごめんなさい」

そんなメルセも、ゾラの一言に萎縮してしまう。

倉庫内にあった椅子に座るゾラは、酒瓶を持っていた。

床にはいくつも酒瓶が転がっている。

「まったく、どいつもこいつも私を馬鹿にして。何が淑女の森よ。私が悪いと勝手に決めつけて、八つ当たりをして」

酒瓶からそのまま酒を飲み、口元を拭うゾラは数年前よりも一気に老けていた。

年齢よりも高齢に見える。

「ルトアート、学園の情報は調べたわね？」

「は、はい！」

「なら、あの穀潰しの婚約者たちを捕まえなさい。人質にして、穀潰しを私の目の前で拷問するわ」

ルトアートが慌てて止める。

「お母様、無理だ。相手は公爵令嬢だよ！」

「どうせ私たちが国を取り戻せば、ただの小娘よ！ あいつも前から気に入らなかったのよ。身分が高いだけの小娘が、私を馬鹿にして」

酒を飲むゾラは、アンジェとの初対面を思い出していた。

自分を馬鹿にする態度を取ったことが許せないようだ。

「平民の娘も連れてきなさい。目の前でいたぶってやるわ。あの穀潰しが、泣いて許しを請う姿を見られるわね。最後は、穀潰したち

の死体をバルカスに送りつけてやる。結婚してやった恩も忘れた極悪人のバルカスは、どうしてやるうかしら」

メルセもルトアートもドン引きしていた。

だが、全てを失い、酒に酔って暴れ回るゾラを二人は止められなかった。

そして、ゾラは外国から取り寄せた品をルトアートに渡す。

「お母様、これは？」

「幹部たちから渡された品よ。扱いが分からないから押しつけられたの。何でも鎧になるとか、そんなロストアイテムらしいわ。ルトアート、お前が使いなさい。この薬を飲んで使えば、凄い力を得られるそうよ」

どう見ても怪しい薬を、ゾラはルトアートに手渡した。

「え？」

黒い鎧の一部らしいが、こんなものをどう扱えばいいのかとルトアートは悩むのだった。

次の日。

ローランドと密会したメルセは、宮廷医に渡された毒薬を使用した。

遅効性の毒物で、絶対に証拠が残らないという品だと聞いている。

ローランドがメルセに抱きつく。

「今日も君の唇を奪えなかった。残念だよ、メルセ」

「もう、陛下ったら」

（私の唇？ ふざけんなよ、おっさん！）

抱きつくローランドを両手で押しのけ、メルセは手を振るのだった。

「またお待ちしております、陛下」

「ローランドと呼んで欲しかったのだがね」

「あら、では次回ということで」

（お前に次なんてないけどな。私たちを苦しめた元凶が、相手をしもらえるだけ幸運だと思うのね）

「そういうことにしておこう。では、さようなら」

ローランドが去ると、メルセはフードをかぶって移動を開始する。

表通りに出ると、昔はもっと派手に遊んでいたことを思い出すのだった。

(どうして私がコソコソしないといけないのよ)

すると、三人組の男女が向こうから歩いてきた。

「ちょっとフィンリー！　なんでそんなにお小遣いを持っているのよ！」

「ジェナ、いい加減に落ち着けよ」

「リオン兄さんがくれたのよ。泣きついたらイチコロだったわ」

「あいつも何をやってんだ」

ジェナがフィンリーに怒っていた。

ニックスは、そんな妹たちを見て呆れている。

「あゝあ、王都で人気のエステがあるって聞いたから、一度は受けてみたかったのに」

ジェナが背伸びをしながらそう言うと、ニックスが笑っていた。

「年下の男を落とすために必死だな。性格を直したらどうだ？」

「何ですって！　あんたはそんなことだから、結婚が決まらないのよ！　オスカル様なら、そんなことは絶対に言わないわ！」

「だって、あいつはお前に興味ないだろ。この前なんか、ずっと筋トレについて話をしてたぞ。俺に『いい筋肉ですね。どうやって鍛えたんですか？』ってずっと聞いてきて怖かったからな」

フィンリーはクレープを食べていた。

「姉さん必死すぎ。でも安心して。オスカル様が『お義姉さん』って呼んでくれるかもよ」

煽るフィンリーに、ジェナが叫ぶ。

「今に見てなさいよ。絶対に振り向かせてみせるわ。フィンリー、クレープ頂戴！」

クレープを奪われ、フィンリーがジェナの腕を掴む。

「返してよ！」

楽しそうな姉妹を見ながら、ニックスは溜息を吐くのだった。

「お前ら仲が良いよな」

三人の横を通り過ぎるメルセは、唇を噛みしめていた。

（何であんたたちが楽しそうにして、私がコソコソ隠れているのよ。あんたたちは、王都で遊んでいられる身分じゃない癖に）

いつまでも過去に囚われるメルセだった。

クーデター

王宮。

ミレーヌとの夕食を楽しむローランドは、ワイングラスを眺めていた。

「実にいい香りだ。二十年という時を感じる。だが、残念だ。これ以上寝かせていては、逆に駄目になりそうだ」

そんな台詞に暗い瞳を向けるのは、ミレーヌだった。

ナイフとフォークをテーブルに置いた。

最近、あまり食べていないようだ。

「ダイエットか？ 健康のためには食べた方がいい」

「貴方は今の状況を分かっているのですか？ 今この瞬間にも、王宮に大砲が撃ち込まれてもおかしくないというのに！」

声を荒げるミレーヌに、周囲にいる侍女たちが怯えるのだった。

ローランドはグラスを傾ける。

「上の者が慌てていては、下の者に示しが」

「何もしていない怠け者が上にいては、下も落ち着きませんよ。も

う、いつそ覚悟を決めて　陛下？」

ローランドの様子がおかしいと、ミレーヌが立ち上がる。

すると、ローランドがグラスを落として頂垂れた。

ゆっくりと体が傾き、椅子から転げ落ちる前に侍女が支える。

「陛下！」

ミレーヌがローランドの顔を覗き込むと、青白くなっていた。

「バルトファルト！　王宮からの急使だ！」

これから眠ろうとしていた時に、俺の部屋にクリスが飛び込んできた。

その手には武器が握られている。

「急使？」

何事かと思っていると、ルクシオンが俺に伝えてくる。

『ローランドが倒れました。危篤状態とのことです』

「は？」

驚いていると、クリスが俺に詳しい話を聞かせてくる。

「ユリウス殿下も呼び出されている。バルトファルトも、アンジェリカと一緒に王宮に来说って来た」

「俺とアンジェに？ 何のために？」

急いで着替えると、クリスは落ち着かない様子でいる。

「分からない。とりあえず呼び出したのか、王妃様の指示なのかも分かっていない」

王宮は相当混乱しているようだ。

「ミレーヌ様はないだろ。俺は怒らせたからな」

「嫌な予感がする。バルトファルト、お前の婚約者たちはどうする？」

「連れていく。ルクシオン、クレアーレに三人を連れてくるように言ってくれ。マリエたちにも警戒するように伝えろよ」

『了解です』

着替えを終えて部屋の外に出ると、廊下が静かだった。

誰もいない。

「みんなは？」

「ユリウス殿下と飛び出していった。今回は、みな危機感を持って

いるからな」

「お前らはもつと普段から緊張感を持てよ」

クリスと話しながら外に出ると、クレアーレがアンジエとリビア、そしてノエルを連れてくる。

『マスター、お待たせ』

「エリカたちはどうした？」

『そっちは王宮から迎えが来たわよ』

アンジエが俺の腕を掴む。

「リオン、分かっているな？」

この確認の意味を、俺はあまり理解しなかった。

「ローランドが倒れた。燻っている連中には好機だろうさ。アンジエの実家は動くのか？」

「動くのは不穏分子を排除してからだろうな」

アンジエがそう言うと、リビアが空を見上げるのだった。

ライトを照らす飛行船が、学園の上空にやってくる。

「こんな夜に飛行船？」

ノエルは、飛行船からロープがいくつも垂れてきたことに焦っていた。

「ねえ、随分と物騒な連中が下りてくるんだけど？　これって王国的にはお迎えか何か？」

アンジエが強く否定する。

「王国でもあり得ない。だが、これで少し見えて来たな」

ローランドが倒れてあまり時間も経っていないのに、動き出した連中がいる。

レッドグレイブ家ではない様子なので、反乱を考えていた連中だろう。

「嫌になるな。クリス、俺と一緒に来い」

「分かった」

「ルクシオン、他の連中にもこのことを伝える」

『残念ながら、それは出来ません』

「何だと？」

俺の命令を拒否するルクシオンは、アンジエの側に寄るのだった。

「どついう意味だ？」

睨み付けると、アンジエが俺の顔を両手で挟む。

自分に俺の顔を向かせると、赤い瞳で俺を見つめてくる。

「リオン、お前はもう無理をするな」

「いや、でも」

「分かっている。だが、お前が何もしないでいくらいに、私たちも強くなった。お前が苦しむ必要はない。それに」

アンジエが何かを言いかけると、足音と金属が擦れる音が近付いてくる。

ライフルを持った兵士たちが、俺たちを囲んでいた。

クレアーレが楽しそうに状況を説明してくる。

『わーお。迷わずにここまで来たみたいよ。随分と下調べをしたのね』

兵士たちの狙いは俺のようだ。

前に出てくるのは、武装した女性だった。

眉間に皺を寄せている。

「見つけたぞ。王国の汚点」

「汚点？ 俺のことか？」

ニヤニヤして煽ってやろうとすると、俺の前に出たのはリビアだった。

「リオンさんは下がってください」

「え、でも」

「下がってください。ここは私たちで対処しますから」

すると、女性が舌打ちをする。

「成り上がりの小娘が、私が誰かも分かっていないようね。私は伯爵家の出身なのよ。お前程度が前に出て許されると思うな！」

随分と苛立っている女性は、声を荒げてリビアを威嚇していた。

だが、リビアは動じない。

目を細めて言う。

「その家紋。取り潰された伯爵家のものですね。なら、今の貴方は貴族ですらありません」

家紋から相手の家を特定したようだ。

「え、そうなの？」

小声でアンジェに聞けば、頷いてくれた。

「そうだ。反乱に手を貸す者たちはあらかじめリストにまとめていたからな。リビアは全て覚えているよ」

クリスが「す、凄いな」と驚きながら、剣を抜いていつでも飛び出せるようにしている。

目の前の女性の金切り声が、妙に苛立ってしまう。

「私を侮辱するな！ 私は生まれながらの貴族よ！ この娘は殺しなさい！」

相手は本気だ。俺は舌打ちをしつつ前に出ようとする。

「っ！ ア、アンジエ！？」

だが、アンジエに腕を掴まれ止められた。

「リオン、ちゃんと見る。お前は もっと私たちを頼れ」

アンジエがすぐるようになんかに頼んでくる。

すると、リビアが右手を伸ばして女性に向ける。

周囲でライフルを構えた兵士たちの前に、魔法陣が浮かび上がった。

銃口を塞ぐ形で一つ。

弾倉の前に一つ。

直後、気が付いた兵士たちはライフルを投げ捨てた。

だが、数名は反応が遅れ、手に持ったままライフルが暴発してしまっ
た。

「無駄です」

リビアは真っ直ぐ女性を見ている。

「撃たれる覚悟がないなら、下がりなさい。手加減が出来るのはこ
こまでです」

瞬時に周囲の兵士たちを無力化したリビアを見て、口笛を吹いて
しまった。

「リビア凄い」

「そうだな。だが、まだ甘い」

今度はアンジェが前に出ると、右腕に炎を出現させた。

周囲に赤い魔法陣がいくつも浮かび上がり、燃え上がると槍の形
になる。

それらは、周囲の兵士たちに向けている。

「私はリビアのように器用ではないからな。得意な魔法で焼き尽く
すことを優先している。学園は焼きたくないが、今は非常時だ。許
してもらおうでしょう」

アンジェがゆっくりと女性に近付く。

一瞬で手駒を奪われた女性は、涙目で上を見ていた。

そこには自分たちが持ち込んだ飛行船がある。

「ま、魔法程度でどうにかなると思っているのかしら？ お前たちは囲まれているのよ！」

「そうだな。お前たちがいれば、上で待機している飛行船も砲撃できない。違うか？」

「ひっ！」

女性が怯えて下がろうとすると、兵士たちが俺たちに手を伸ばす。

「ファイヤーボール！」

「ライトニング！」

「ウォーターカッター！」

放たれる魔法がアンジェに襲いかかろうと しなかった。

全て、彼らの目の前に、魔法陣が出現して相殺される。

アンジェの後ろで魔法を使用していたのは、リビアだった。

「私は無駄だと言いましたよ」

相手の攻撃を無効化するリビアを見て思い出した。

そういえば、主人公がスキルを獲得すればこんなことも出来たはずだ。

相手の攻撃をキャンセル。

相手の魔法をキャンセル。

ゲームでは、そういったスキルとしか見ていなかったが、リアルで見ると高度すぎて驚く。

ルクシオンも感心している。

『即座に相手の魔法を判断し、相性が有利な属性の魔法をぶつけたのですね。何とも手の込んだことをします』

「やっぱり凄いんだよね？」

『かなり高度な技術であると判断します。マスターでは同じことは出来ません』

そうですか。俺では無理ですか。

しかし、リビアも凄いが、アンジェも凄い。

周囲に浮かべているファイヤーランスの数は十を超えていた。

手を伸ばしたアンジェが、女性の胸倉を掴む。

「ゆっくりと取り調べをしている時間もない。話す気がないなら、ここで灰にしてやる」

「ま、待つて。は、話すわ。話すから」

自分たちが不利だと分かれば、すぐに喋ろうとしていた。

だが、空を見ると大砲がこちらを向いている。

「ルクシオン、防御を」

『必要ないです』

手を掲げるのはノエルだった。

「私だけ自分の実力じゃないんだけどさ」

そう言つて、右手に輝く聖樹の紋章からシールドを展開する。

飛行船から放たれた砲弾を、薄い膜のようなドーム状のシールドが空で防いでいた。

アンジェが空を見上げると、右手を向ける。

「思い切りがいいのか、お前たちがただの捨て駒なのか　どっちだろうな？」

炎の槍が空を向いて、一斉に飛行船へと飛びかかった。

槍に貫かれた飛行船が、炎を上げていた。

沈めるまではいかずとも、飛行船内は大慌てで消火活動を行つて

いるのか身動きが取れないようだ。

あれ？ 俺って必要ない？

クリスが剣を鞘へとしまっていた。

その姿に注意する。

「おい」

「バルトファルト、私の出番があると思うのか？」

目の前の女性や兵士たちは、既に諦めた様子だった。

だが、今度は飛行船から鎧が飛び出してくる。

学園に下りて、どうやらこちらに向かってくるようだ。

それを見た女性が元気を取り戻した。

「あは、あははは！ 調子に乗るのもここまでよ！ 外国から取り寄せた最新式の鎧が、お前たちを捕まえに来るわ。いくら魔法が多少使えるからと言っても、鎧の前では無意味よ」

外国の最新式と聞いて、アンジェが苛立っている。

「お前ら、自分たちがいったい何をしたのか分かっているのか？」

「元の王国を取り戻すためよ！ そのために、外国も力を貸してくれたわ！」

それってどう考えても王国を混乱させただけだろうに。

こいつらが王国を奪い取っても、待っているのは外国による傀儡か搾取ではないのか？

「駄目じゃないか」

俺がそう言うと、ルクシオンとクレアーレが冷静に答えてくる。

『そもそも、支配階級と言っただけで、彼女たちに相応しい能力があるわけではありませんからね』

『見る目のない連中が切り捨てられたのよ。外国の口車にだって乗るわよ。だって、見る目がないんですもの』

こいつらは落ち着きすぎである。

クリスが俺を見る。

「バルトファルト、鎧は厄介だぞ」

「分かっている」

俺が指示を出そうとするも、ルクシオンもクレアーレもアンジェたちを見ていた。

騒いでいる女性を、アンジェが気持ちのいい音がする平手打ちで黙らせた。

女性は地面に倒れる。

「お前たちが落ちぶれたのは、お前たちの責任だ。同情もしよう。我々も反省もする。だが、お前たちは手段を間違えた」

王国の被害者という意味でなら、目の前の連中も被害者だ。

リビアが俯いていた。

「もう止めてください。これ以上 血を流す必要はありません」

リビアらしい台詞だ。

そうだ。血を流す必要などなかったのに。

「あんたら、昔はよかったとか言うけど、それって苦しんでいる人が多かったわよね？ そういう人たちのことは考えなかったの？」

ノエルがそう言うと、女性は鼻で笑っていた。

「男が女の命令を聞くのは当然よ。新しい命は女からしか生まれないわ。知っているかしら？ 動物の雄はね、雌に自らの価値を示すのよ。命懸けで雌を守るのが雄の仕事よ！」

お前ら、自分は獣ですって言いたいの？

俺は、人間は獣よりも質が悪いと思っているけどね。

こいつも歪な方針の被害者ではあるが、男の立場からも文句が言いたい。

「でも、種類によっては違うし、一概には言えないよね」

「黙れ！ 黙れ、黙れ、黙れえええ！」

俺がそう言うと、女性は大声を出した。

女性が体を起こして頬を手で押さえながら、アンジェや俺たちを睨み付ける。

「何が間違いよ！ こんな間違いっているわ。私たちは自分の権利を主張しているだけよ！ 王国が間違った道を歩んでいるのを止めようとしているの。私たちは正義よ！ 今まで通りで何が悪いのよ！」

すると、ガチャガチャと音が聞こえてくる。

大きな機械が壁に張り付いていた。

蜘蛛のような機械が、俺たちを取り囲む。

随分と大きく、鎧と言うよりも完全に別の何かだ。

壁に張り付き、屋根を上り、頭部にいくつもついた赤いレンズが怪しく光っていた。

女性が、頼もしい味方が登場したと思ったのか、立ち上がって両手を広げる。

「外国の新型は変な形をしているわね。さあ、こいつらを捕まえな

さい！ 腕の一本くらいは千切ってもいいわよ」

アンジェが驚き、リビアも口元を手で押さえた。

「何だと」

「嘘」

ノエルは冷や汗をかいている。

「これは 予想外ね」

随分と醜く笑う女性は、そんな蜘蛛型のロボットたちに命令をする。

「さあ、やりなさい！ 正義は我らにありよ！」

それぞれの戦場

女子寮の窓。

騒がしさに窓を覗こうとするミアだったが、すぐに声がかかった。

「ミア、退いている」

「え？」

窓を開けて入ってくるのはフィンだった。

「き、騎士様！？ こ、ここ、ここは女子寮ですよ！」

顔を赤くするミアは、普段よりも油断した格好をしていた。

部屋着をフィンに見られたくないために手で隠す。

だが、フィンは慌てない。

「緊急事態だ。上空に燃えた飛行船がいる。おっと、それよりも早く着替えた方がいい。場合によってはここを出るぞ」

「え？」

ミアは、学園を去るのかと思って俯いてしまった。

「帝国に帰るんですか？」

「最悪の場合は、な。だが、そうなる前にリオンが対処するだろうさ」

フィンの側に浮かんでいた黒助が、一つ目を横に振る。

『相棒はあの鉄屑のマスターがお気に入りだな』

「そうか？」

『ああ、そうだ。俺様よりも頼りにしていないか？　なあ、そうなら本当に泣くぞ』

「いや、泣くなよ」

窓の外を見ているフィンは、ミアに背中を向けている。

急いで着替えるミアは、いったい何が起きているのかと不安になるのだった。

（みんな大丈夫かな？）

もう一人。

女子寮に飛び込んだきた男子がいた。

ジェイクだ。

「アーレ！」

「殿下？ ど、どうしてここに？」

アーレの部屋着は隙がない。

部屋の中でも女の子らしい姿をしており、ジェイクは頬を染めて視線をそらすのだった。

「王宮から呼び出しがかかった。お、お前にも来てもらうぞ」

「私も王宮に、ですか？ でも」

「いいから来い。そのままでもいいが、何か上着を用意した方がいいな」

「殿下、私は」

アーレが何かを言おうとすると、ジェイクを追いかけてきたオスカルが声をかけてくる。

「アーレさん、フィンリーさんを知りませんか？ バルトファルト侯爵の妹さんです」

顔を出してきたオスカルに、ジェイクが驚いた。

「オスカル、急に顔を出すな！」

「失礼しました。ですが殿下、自分も急用なのです」

「そ、それから、あまりアーレの私服を視るんじゃない！」

アーレの私服は、女の子らしく適度に露出もしていた。

それをジェイクは乳兄弟でも見せたくないようだ。

だが、オスカルは興味を示さない。

「え？ 興味ありませんよ。それより、フィンリーさんを知りませんか？ 一年生の女子に聞いたのですが、女子寮に戻っていないそうです」

門限は過ぎている。

以前は門限などあつてないようなものであり、管理する側も未だに門限を守らない女子が多くて困っている状況だ。

アーレは首を横に振る。

「ごめんなさい。知らないわ」

「そうですか。外で遊んでいるだけならいいのですが」

オスカルがフィンリーを心配していると、ジェイクが不満そうにするのだった。

「お前、本当に私の乳兄弟か？ もっと敬ったらどうだ？」

「自分は常日頃から、ジェイク殿下を敬っていますか？」

「その態度で敬っているのか!？」

ジェイクは「何で俺の乳兄弟は残念な奴なんだ」と落ち込むのだ。
った。

「あははは! さあ、やってしまいなさい!」

場所は学生寮の前。

武装した兵士を連れた女性が、両手を広げて大笑いしていた。

周囲には、随分と大きな蜘蛛型のロボットたち。

だが、女性の命令を聞いても、動こうとはしなかった。

当然だ。

「あ、あら? どうしたの? さつさと命令に従いなさい!」

困惑する女性を前にして、アンジェが額に手を当てていた。

「お前は自分たちが扱う兵器を確認しなかったのか? これが最新の鎧に見えるなら、もう少し勉強した方がいいな」

リビアも少し申し訳なさそうにしていた。

「あまりにも堂々としているので、言い出せませんでした」

申し訳なさそうにしている理由を、ノエルが女性に教える。

「この子たち、私たちの味方よ」

「え？」

女性が口を開けて驚きながら、周囲を見渡して冷静にロボットたちを見る。

ロボットたちが咥え、脚で挟んで持っているのが、彼女の味方である最新鋭の鎧だ。

外国製の鎧は、特徴が少ない外見をしている。

出所を特定されなくなかったのだろうが、目の前の女性がすぐに暴露するとは思わなかった。

クレアーレが女性の前に出る。

『ねえ、どんな気持ち？ 味方だと思って堂々と命令したら、敵だった時の気持ちってどんな気持ちなのかしら？ 教えて欲しいわ』

最新鋭の鎧が、手も足も出ずに負けたのを知り、女性は再びその場に崩れ落ちた。

アンジエがクレアーレを掴む。

「リオンの真似をして煽るな」

『一度くらいやってみたかったの。マスターってば、いつもノリノ

リだもの』

俺は不満そうに愚痴をこぼす。

「俺がいつも他人を煽っているみたいに言っな」

クリスが目を見開き、驚きながら俺を見ている。

「バルトファルト、それは本気なのか？ 冗談だよな？」

「俺はいつも人を煽っていないぞ。必要がある時だけだ」

「そ、そうか」

学生たちが集まってくると、アンジェは兵士たちを捕らえさせるのだった。

「リオン、我々は王宮へ向かうぞ」

「分かった」

歩き出すと、アンジェが側に寄ってくる。

「少しは私たちを頼ってくれる気になったか？」

「俺をのけ者にしてルクシオンたちと準備したの？ 寂しいじゃないか」

「馬鹿。そうじゃない。もう、お前は一人で悩むな」

広場に出ると、ルクシオンが乗り物を用意していた。

そこには、フィンとミアちゃんの姿もあった。

王宮は騒がしかった。

特に、ローランドの部屋の前には、大勢の貴族たちが詰めかけている。

俺たちが来ると、ギルバートさんが鋭い視線を向けてきたが、アンジエが俺の腕を掴んで無理矢理関わらせなかった。

「アンジエ？」

「今は何を言っても無駄だ」

貴族たちが、俺やギルバートさんの様子をつかがっていると、ユリウスがローランドの寝室から出て来た。

「バルトファルト！ 侯爵。陛下がお呼びだ」

「俺を？」

アンジエを見れば、頷いたので二人でローランドの部屋に入る。

そこには、ミレーヌさんやエリカ ジェイクの姿もあるのだが、どうしてアーレもいるのだろうか？

神殿の偉い人が、治療魔法を使用している。

宮廷医がローランドの様子を見ながら、冷や汗をかいていた。

部屋の隅には、目を閉じている師匠もいた。

え、師匠ってもしかして、俺が思っているより凄い人なのだろうか？

ミレーヌさんが、俺を一瞥^{いちべつ}するがすぐにローランドに視線を戻して声をかける。

「陛下、しっかりしてください！ 陛下！ エリカ、貴女も声をかけて」

ミレーヌさんに呼ばれ、エリカもローランドに声をかけていた。

「父上」

「エリカか」

目を開けたローランドの顔色は悪かった。

ユリウスが、俺とアンジェをローランドのベッドの近くに案内する。

「バルトファルト、父上がお前にも話を聞いて欲しいそうだ」

「俺にも？」

最期に嫌みでも言うつもりか？ そんな不安なことを考えていると、ローランドが俺たちを見て口を動かす。

「来たか」

アンジェは、俺とユリウスから少し離れて見守っていた。

ユリウスがローランドに声をかける。

「しっかりしてください、父上！」

「ユリウス、分かっているはずだ。今の私では、この危機を乗り越えることは出来ない。っ！」

苦しそうにするローランドが、手を握ってくる。

「後は頼む」

「父上！ お任せください。必ず この危機を乗り越えて見せます」

ユリウスが叫ぶが、俺はその前に一言だけ言いたかった。

「おい、握る手を間違えているぞ」

小声で伝えてやったのだが、ローランドは気にした様子がない。

意識が朦朧としており、間違えたのかと思ったが そうではなかった。

「バルトファルト侯爵。後は頼む」

「おい！　しっかりしろよ、陛下！　ユリウスを助ければいいんだよな？　そうだよな！　そういう意味だよな！？」

言葉足らずでは誤解を招く。

ローランドに確認を取るのだが、小さく笑っていた。

「ここにいる者たちが証人となって欲しい。私の勅命　だ。バルトファルト侯爵を陞爵させる。全ての指揮権をバルトファルト“公爵”に委ねる。バルトファルト公爵、この危機を乗り切ってくれ。ユリウス、公爵の補佐を頼む」

「はい、父上！」

「もう、これで　大丈夫」

「父上えええ！」

「ちょっと待てえええ！　って、お前、実は余裕があるんじゃないか！？」

ガツチリと俺の手を掴んだローランドは、意識を失う直前に俺を見て笑った気がした。

周囲を見ると、俺に視線が集まっていた。

ミレーヌさんが俺を見る目は、とても冷たかった。

あれ？　もしかして、かなり怒っていらつしやる？

「陛下のお言葉です。バルトファルト公爵に指揮権を委ねましょう」

エリカがローランドの手を握っていた。

涙を流している。

ジェイク殿下は、アーレに慰められているようだが　あいつち
よつと嬉しそうにしない！？

いいのか？　お前の親父が危篤なんだけど！

「ミレーヌさ　王妃様、ちょっと待ってください。俺に指揮権を
委ねるっていったいどういうことですか！」

ミレーヌさんが周囲へと指示を出していた。

「それが陛下の望みです。では、後は頼みましたよ。皆、今の言葉
を集まった者たちに伝えなさい。この危機を、我々はバルトファル
ト公爵の指揮の下に乗り切ります」

皆が慌ただしく動き出す中、ミレーヌさんがアンジェに近付いて
きた。

「アンジェリカ、貴女たちが選んだ道です。やり遂げて見せなさい」

アンジェがミレーヌさんの前に、堂々と立っていた。

「はい」

ミレーヌさんが部屋を出ていくと、部屋の隅に控えていた師匠が声をかけてくる。

「ミスタリオン」

「は、はい！」

「この危機に私ができることは少ない。ですが、ミスタリオンの指揮下に入り、最善を尽くしましょう。ミスタリオンなら、この危機を乗り越えられると信じていますよ」

「師匠」

「ミスタリオンなら出来る。陛下もそう判断されたのでしょうか」

正直、それがとても怪しく感じているけどね。

あいつが俺を信じる？　あり得ない。断言できる。

何か裏がありそうだが、素直に俺に押しつけた方がうまくいくと思っただろうか？

だが、苦しんでいるあいつを問いただすことは、状況的にも心情的にも無理だ。

俺もそこまで鬼にはなれない。

考え込んでいると、アンジェが俺に声をかけてきた。

「リオン、お前は指揮を執れ。絶対に前線に出るなよ」

「え、いや、でも」

アンジェが俺を心配する気持ちも理解できる。

だが、こういう時に前に出ないと。

「バルトファルト、もうお前には実績がある。心配せずとも、お前が指揮を執るなら兵士たちは安心する。どうしても前線に出たいなら、俺たちが代わりに出る」

いいことを言っている風だが、絶対に認められない。

俺が言うよりも早く、アンジェがユリウスに言うのだ。

「殿下も前線には出しませんよ」

「え？」

「当たり前じゃないですか」

「い、いや、しかし！」

そんなユリウスを見て、俺たちの会話に割り込んでくるのはジェイク殿下だった。

「兄上は王宮で怯えていればいいのです。ここは私が前に出ましよう。バルトファルト公爵、私に兵を預ける。戦果を上げてやる」

いや、ないわ。

実績のないジェイクに兵士は預けられない。

「お前も王宮で待機な」

「何故だ!？」

後ろにいるアーレをチラチラと気にしており、きっと出来る男として見られたい見栄だろう。

こいつ、本当にどうしてこんなに使えないのだろうか？

攻略対象にもなれず、実戦ではどこに配置も出来ない。

「アンジェ、ジルクたちを呼んで欲しい」

「そうだな。たまには働いてもらおうとしよう」

そう。

たまには頑張ってもらおう。

ユリウスがジェイクと一緒にいじけていた「仮面を付けなければいけないのに」「仮面か……ありだな」とか言っている。

こいつら駄目すぎ！

気が付くと、エリカが俺を見ていた。

「心配するな。俺はこの手のことになれているからな」

「私もお手伝いします」

「エリカ？」

貴族たちの集まる会議室。

ローランドの勅命に苛立っている者も多かった。

立派な髭を蓄えた、筋骨隆々の貴族が腕を組んで不満そうにしている。

痩せた貴族が、それをなだめていた。

「あの若造の指揮下に入れというのか！」

「実績もある。何が不満だ？」

「何もかもが不満だ！ 大体、私の年齢の半分以下の小僧だぞ！」

その場に集まった貴族たちを見ているドミニクは、髭を撫でつつ考えていた。

（さて、どうしたものかな。レッドグレイブ家には恩もあるが、命令ならばバルトファルト公爵の下についても問題ない。彼の手腕を見るにはいい機会なのだがね）

ドミニクが、リオンのファンと公言したのは嘘ではない。

リオンは冒険者としても成功し、国の英雄になった男だ。

年下ではあるが、尊敬しているのは事実だ。

ただし、貴族として 領主としては、厳しい判断をする必要がある。

（レッドグレイブ家とやり合うなら、相応の力を示してもらわないと私も覚悟を決められない。さて、どうするのか見せてもらおうか、若き英雄殿）

すると、会議の場にリオンが入ってくる。

ただ、その後ろにはエリカの姿もあった。

騒いでいた貴族の一人が、慌てて口を閉じる。

「エリカ様だ」

「婚約を破棄したのではないのか？」

「まさか、これを機会にまた婚約を？」

騒がしくなると、リオンよりも先にエリカが貴族たちに挨拶をする。

「皆さんにお願いがあります。どうか、バルトファルト公爵にお力をお貸してください」

ざわつく会議室。

エリカが貴族たちに呼びかける。

本気

「皆さんにお願いがあります。王国に力をお貸してください」

エリカがそう言うと、会議室は静まりかえった。

貴族たちは何を考えているのだろうか？

それを予想することは出来るが、あまりいい感情は抱いていないだろう。

「敵は外国から支援を受けた元貴族たちです。このままいけば、王国に敵国の軍隊がなだれ込むでしょう。そうなれば、王国は各地で火の海に包まれてしまいます」

中には、これ幸いにと動き出す貴族たちもいるだろう。

腕を組んだ貴族が、俺を睨みながらエリカに言う。

「エリカ様も、バルトファルトの小僧の指揮に従えと仰いますか？」

俺が気に入らないようだ。

エリカは堂々と頷く。

「公爵が若すぎるといふ不満はもつともです。ですが、私はそれが最善だと信じています」

言い切るエリカに、腕を組んでいた貴族は黙ってしまった。

隣に座っている紳士風の貴族は手を組んだ状態で俺に問う。

「この混乱する現状を、バルトファルト公爵は乗り切れる自信があるのかおたずねしたい」

現状を正しく理解している人間は少ない。

情報が集まりにくいからな。

だが、俺にはルクシオンがいるので問題なかった。

つくづく思う。

チートって凄い、ってね。

「自信ならある。俺に従うなら勝たせてやるよ」

俺の言葉に、周囲が苦々しい顔をするのだった。

「成り上がり者は威勢がいい。事実であれば心強いだけだな」

「一斉決起をした敵だぞ。後手に回っているのに勝てるのか？」

「誰だって勝てる。問題はその後だ」

そう、このクーデターだが、敵国からすれば失敗すると思われる。
いる。

ホルファート王国内をかき乱したいだけだ。

誰も、最初から期待などしていないのだ。

「この場にいる方々には、すぐに国境に向かってもらう。国内の敵は王宮で対処する」

筋骨隆々の貴族が俺を笑ってみていた。

「なんと。自分たちだけで解決できると?」

「そうだ。一番の問題は国境だからな」

紳士風の貴族は頷いていた。

「無能ではないようで助かる。確かに、国内で決起した連中は捨て駒だろう」

レッドグレイブ家の代表として参加しているギルバートさんが、俺に冷たい視線を向けていた。

「バルトファルト公爵。それで、我々にどの国境を守れと? 王国は広大だ。全周囲に戦力を派遣など出来ないが?」

俺を試しているような気がする。

「急ぐのはフレーザー家への援軍です」

テーブルに置かれた地図を指さし、俺はどこに援軍を送るのかを指示した。

それを見て、モットレイ伯爵が驚いていた。

「随分と偏った配置だな」

他の貴族たちも同様だ。

「ファンオース公爵家側は放置か？」

「あそこは動いてもおかしくないぞ」

「この配置、失敗すれば王国に敵がなだれ込むぞ」

それだけ偏った配置を求めた。

理由は、動きそうな国を事前に調べていたからだ。

「ファンオース公爵家は動かない。あそこに余力はないからな」

モットレイ伯爵がアゴを撫でていた。

「断言しますか。今までのファンオース家なら、これを機会に動きますか？」

「以前の戦場で徹底的に叩いた。馬鹿じゃなければ攻め込まないですよ。そもそも、まとまった戦力を用意できないですからね」

この場にいる貴族の大半が、公国戦の時は国境に向かっていた。

紳士風の貴族が、皆が聞きたかった事を聞いてくる。

「陛下の勅命です。従いましょう。ですが、ハッキリさせたいのですよ。バルトファルト公爵のお立場を、ね。我々は、この混乱を利用して、レッドグレイブ家が利益を得るように動かないか心配して

いるわけです」

ギルバートさんが目を閉じた。

この場にいる貴族たちは、俺がこの状況を利用してうまく立ち回るつもりではないかと心配しているようだ。

うまく立ち回るに決まっているだろうが！

「心配しなくても、王国を守るために全力を尽くしますよ。今後も王国を守るために尽くします。篡奪もしたければいい。俺が全て叩き潰してやる」

エリカが驚いて、俺の袖を握るのだが無視して続けた。

「ローランドの野郎は嫌いだが、好き好んで戦争もしたくない。今更過去のことを持ち出して、ネチネチ仕返しする気もない」

ギルバートさんに俺の気持ちを伝えると、周囲の貴族たちが文句を言ってくる。

中には、王国の方針に苦しめられた貴族もいる。

「理不尽な目に遭っても、王国に尽くす忠誠心は見上げたものだな」

「積年の恨みが無いのだろう」

「我々の苦しみが理解できないようだ」

俺はテーブルを殴りつけた。

「理不尽？ 恨み？ 苦しみ？ お前ら、俺がどうしてロスト

アイテムを手に入れたか知らないようだな。教えてやるよ。俺がロストアイテムを手に入れたのは、五十過ぎの女に婿入りさせられそうになったからだ。しかも、遺族年金狙いだぞ！」

周囲の目が少しだけ和らいだ。

目頭を揉んでいる奴もいる。

「王都に暮らす本妻や、その子供のために、親父は毎月苦しみながら仕送りをした。貴族なのに畑を耕し、自分たちの食い物を確保する気持ちが分かるか？ 贅沢に暮らしている本妻やその子供は、それを当たり前と思って感謝すらしなかった！」

今考えても理不尽だが、あの頃はこんな面倒なことを考えなくてよかった。

「俺だって腹立たしいよ。今すぐにでも、ローランドを叩き起こして殴ってやりたいよ！ けどな、それを決めたのはローランドじゃない。王妃様でもない。今更怒って、王家を焼いても何の解決にもならねーんだよ」

それを聞いていたギルバートさんが、目を開けて俺に言う。

「だが、今の王家ではまとまらないのも事実だ。無理に延命させてそれが問題にならないと？ 恨みや苦しみを忘れると君は言うが、その程度で忘れられないのも理解して欲しいね」

分かっているのだ。

だが、俺にも守るべきものがある。

「好きにすればいい。俺を倒せると思えばかかってこい。いつそ、敵に寝返るか？ そうなったら心置きなく相手をしてやれるから、俺は構わないぞ」

文句があるなら前に出る。

そう言うと、モットレイ伯爵が手を叩いた。

「若き英雄殿は過激ですね。だが、この危機に真摯しんじに向き合う気持ちは理解しました。皆さん、ここはバルトファルト公爵の指揮下で戦ってみてはどうです？ 敵国の好き勝手にさせるのも面白くありませんからね」

その場合は、モットレイ伯爵の言葉もあって、一応は納得してくれた。

だが、不満があるのは見え見えだった。

会議室を出た俺は、近付いてくるルクシオンと話をする。

「ルクシオン、状況は？」

『それが、予定したよりも条件がいいですね。よすぎて疑うほどです』

「どういうことだ？」

予定していたよりも、こちらにとっていい結果になっているようだ。

『敵が襲撃した施設ですが、今日に限って部隊が配置されていました。演習名目で実弾を積んだ飛行船も出撃しており、素早く対応が取れています』

「ミレーヌさんか？」

『ローランドが手配したようです。やられましたね、マスター』

あいつはいったい何がしたいんだ？

というか、このことを予見していたのか？

困惑していると、俺についてくるエリカが声をかけてくる。

「お、伯父さん。どうしてあんなことを言ったの？ 伯父さんは、平穩に暮らしたいんじゃないじゃなかったの？」

エリカの言葉に立ち止まった。

平穩に暮らしたいし、今でもそう思っている。思っているが。

振り返り、俺はエリカに笑顔を向ける。

「姪っ子を処刑台に上げるなんて嫌だからな。 スローライフはしばらくお預けだ」

「で、でも！」

「今更、引きこもりたいと言っても、状況が許してくれないからな。こいつを手に入れた代償みたいなものさ」

ルクシオンを小突くと、不満そうにしていた。

『私を手に入れたのがそんなに不満ですか？』

「いや、満足していないだけだ」

普段言われない放題なだけに、言い返してやると気分がいい。

「伯父さん、今更前世のことにこだわる理由なんてないよ。私のために無理しなくてもいいんだよ」

エリカにしてみれば、俺は前世にこだわっているように見えるのだろう。

だが、それは当然だ。

「俺がこうして前世を持っているなら、何か意味があるはずだ。そうでなければ、前世の記憶など残らないだろ」

『初めて聞きました。今思い付いたのですか？』

「うん」

エリカの前で軽口を叩いていると、ルクシオンが俺に報告してくる。

『マスター、首謀者のアジトを突き止めたそうです』

「早かったな」

『元々、外国の手先ですからね。王国を混乱させるのが目的であり、期待などしていなかったでしょう。本番はここからですよ』

「分かっている。エリカ、悪いが伯父さんはちょっと忙しい。仕事を終わらせたら、またゆっくり話をしよう。色々と聞きたいこともあるからな」

両親の話。

エリカの話。

聞きたいことは山のようにある。

エリカは俯いていた。

「伯父さん、ごめんなさい」

「問題ない。ちょっとルクシオンに頼るだけだ」

『その決断を、もう少しだけ早くして欲しかったですね』

ギリギリまで粘ったんだよ。

どうにもならないなら、俺がやるしかないだろうが。

リオンとルクシオンが去ると、エリカはスカートを掴む。

俯いて涙を流していた。

「伯父さん、私のために無理なんてしないでいいのに」

結局、言い出せなかった。

もしもリオンが知ってしまえば、きっと苦しむことになるだろうから。

王都の路地。

逃げ回るのは、淑女の森のメンバーたちだった。

「あり得ない。こんなあり得ないわ！」

「外国からの支援はどうなっているのよ！」

「どうして失敗するの！ 成功するって言ったじゃない！」

ドレス姿で逃げ回っており、服は破けてゴミを引っかける。

そして、女性たちが逃げ出した先で待っていたのは、銃を構えたジルクだった。

エアバイクに乗り、淑女の森のメンバーを囲んでいる。

周囲には、同じようにエアバイクに乗った兵士たちがいた。

「逃げ場はありませんよ。投降してください」

女性たちがその場に座り込むと、兵士たちが近付いて拘束していく。

ジルクに近付くのは、卒業してエアバイクに乗る仕事に就いた騎士　クラリスの取り巻きだった男子だ。

「お前の下で働くとは思わなかったよ」

「こちらと同じです。ただ、ご理解いただきたいですね」

「お前はともかく、お前の上司は信用しているからな」

ジルクはクラリスの元婚約者だ。

クラリスの取り巻きをしていた男子からすれば、文句の一つも言いたいだろう。

だが、我慢して今はジルクに従っている。

「それより、これから何をするんだ？」

「次に向かいます。反乱を起こした首謀者グループはいくつもありませんからね」

ジルクたちは、淑女の森のメンバーを引き渡して次へと向かうのだった。

『これで六機目！』

鎧に乗り込んだグレッグが、槍を振り回して大暴れしていた。

ルクシオンが製作した鎧は、敵の新型を圧倒している。

その様子を見ながら、クリスは王宮からの指示を確認していた。

「グレッグ、次に向かうぞ。王都で暴れ回っている鎧はまだいるぞうだ」

『こいつら、よくこんなに鎧を持ち込めたな』

呆れるグレッグだが、それはクリスも同じだった。

王都で暴れ回っている鎧は、随分な数が持ち込まれている。

「協力者が多かったのだろうな。その辺りも詳しく調べる必要がある」

取り潰されなかったが、不満を持っていた貴族たちが手を貸したのだろう。

中には、貴族の屋敷から出て来た鎧もいた。

『別に倒すのは問題ないが、ブラッドのやつは大丈夫か？』

ブラッドは一人だけ王都にはいなかった。

「心配ない。あいつは指揮官向きだ」

そう言つて、二人は次へと向かうのだった。

王都を目指している飛行戦艦が六隻。

王都に辿り着く前に待ち構えていたのは、リオンの友人たちだった。

それを率いるのは、ブラッドである。

「まったく、バルトファルトも分かっているじゃないか。僕は指揮官の立場こそが相応しい」

乗り込んでいるのは、ダニエルの飛行船だ。

ダニエルが困っている。

「何で辺境伯の子息が、俺の船に乗っているんだよ」

文句を言うダニエルに、ブラッドは肩を叩きながら前を指さした。

「ダニエル君、そう邪険にしないでくれ。さて、彼らの相手をしようじゃないか」

用意した飛行船は十二隻。

敵の倍だ。

「負ける気はしないが、本当に邪魔だけはしないでくれよ」

「心配ない。ほら、敵が側面を晒したぞ。狙い撃って沈めてしまおうか」

敵の動きに合わせて、ダニエルが指示を出す。

「あゝ、もう！ 砲撃だ。砲撃！ レイモンドたちにも伝えろよ」

部下に指示を出すと、敵の艦隊を砲撃しはじめる。

ブラッドはその様子から、視線を地図に向けるのだった。

「こいつらを叩いたら、集結地点を目指している他の艦隊も叩こう。場所的に、次はこっちなな？」

ダニエルが愚痴をこぼす。

「リオンの奴、また俺たちをこき使いやがって。今度、高い店でおこらせてやる」

ブラッドは笑っている。

「うん、祝勝会には丁度良いね。僕たちも参加しよう」

「え、お前らも来るの？」

「当然だ。もう、僕たちは友達じゃないか」

友達という響きに嫌なことを思い出すダニエルは、両手で顔を隠していた。

バルトファルト兄弟

王宮の一室。

司令部として借りたその場所で、俺はルクシオンからの報告を聞いていた。

『淑女の森、正統王国派、両グループを拘束しました』

淑女の森という名前を聞いてゲンナリしてしまう。

そもそも、俺がこんな目に遭っているのは、あいつらのせいだ。

俺の近くで話を聞いているアンジェは、地図の上に置いてある駒をどける。

「意外に早かったな」

『そもそも、お粗末すぎましたからね』

ユリウスもこの場において、敵の動きに合わせて駒を配置する。

「情報の伝達速度が違いすぎる。これでは敵に同情しなくなってくるな」

『ローランドがあらかじめ敵の動きを予想していたのも大きいですけどね』

「父上が、ここまで先読みをしていたのか。意外だな」

ユリウスからしても、ローランドの先読みは意外だそうだ。

アンジエが駒を動かす。

「王都を目指している敵の艦隊は、ブラッドたちが対処しているのだな？」

『はい。集結前に敵を叩けるでしょう』

「グレッグとクリスが王都で暴れ回っている鎧の対処。ジルクは敵の捕縛。もう、ほとんど終わったようなものだな」

残っている敵の駒は少なかった。

『ドニエル子爵家の屋敷に突入。敵を匿っていたそうです』

ユリウスが苦々しい顔をしている。

「王都に屋敷を構える貴族たちが、こんなにも裏切っていたのか」

彼らの屋敷には、決起のための武器が運び込まれていた。

俺は腕を組む。

「俺、必要かな？」

この場にいるだけだった。

アンジェが俺に言い聞かせてくる。

「司令官は堂々としている。この戦いは、もう終わったのも同然だ。大事なのは、これから動くだろう敵国だな」

ラーシエル神聖王国。

ホルファート王国よりも小さいが、大きな浮島を持つ大国だ。

ミレーヌさんの実家の敵でもある。

「俺を怖がっているのに、攻撃してくるのか」

情報では、俺への危機感を強めていたようだ。

だが、攻め込んでくるとは思わなかった。

何か秘策でもあるのか？

アンジェが俺に説明してくれる。

「リオンは王妃様と親しいからな。どうせ敵になるなら、ホルファート王国を疲弊させたいのではないか？ 相手はお前の詳しい情報を知らないからな。国力さえ削ってしまえば、攻め込む余裕がなくなると思ったのかもしれないぞ」

あり得るのか？

首をかしげていると、ユリウスも俺に同じ事を言う。

「今回のクーデターは、王国内に亀裂を入れるものだ。鎮圧後、各地の貴族たちが決起するように働きかけるのではないか？」

ルクシオンが一つ目を俺に向ける。

『フレイザー家に攻め込むのは、救援が遅れると考えているからでしょう。　　おや、正統王国義勇軍も捕縛したそうです』

「その名前もそうだけど、何て言うか凄いやな」

自分たちが正義だと言わんばかりだ。

いや、本気で思っているのだろう。

ドアがノックされると、師匠が入ってくるのだった。

サービスワゴンを押しており、その後ろにはリビアやノエルもいた。

「ミスタリオン、お茶の用意が出来ましたよ」

「師匠！」

師匠がお茶の用意を始めると、俺にリビアやノエルのことを伝えてくる。

「お二人にも手伝ってもらいましてね。お二人とも、随分とミスタリオンを心配していましたよ」

「え？」

リビアが俺を見ながらお盆で口元を隠していた。

「あ、あまり無茶をして欲しくなかったんです」

ノエルの方は、少し雑に軽食を俺たちに渡してくる。

「無理して戦う必要もないんだから、大人しくしておきなさいよ」

二人を前に、返事に困る俺に師匠が言うのだ。

「ミスタリオン、時に言葉にしなければ伝わらないこともあります。大事に思うだけでは、婚約者も不安に感じますよ」

「そ、そうですね」

三人の視線が俺に集まると、どう答えるべきか悩んでしまう。

すると、部屋にユリウスの軽食を持って来たマリエがやってくるのだ。

「ユリウス、サンドイッチよ」

「おお、ありがたい！ マリエのサンドイッチがあれば百人力だ！」

喜ぶユリウスを見て、俺は思うのだ。

期待する三人の目。

俺にユリウスのように振る舞えというのか？

俺は一度深呼吸をしてから、覚悟を決めて伝えるのだ。

「三人とも大好き！」

直後、部屋が静かになった。

マリエが首を動かして、誰かに説明を求めている。

「え？ 何？ もしかして、疲れておかしくなったとか？」

ユリウスが真面目な顔を俺に向けてくる。

「バルトファルト、それは俺でも駄目だって分かるぞ」

「俺もそう思ったんだ。だけど、言葉が出てこないんだよ」

師匠が目頭を揉んでいた。

「ミスタリオンは、女性を口説くのが得意だと思っていたのですが」

得意じゃないよ！ 師匠、俺は女性の扱いなんて知らない童貞だよ！

アンジェが溜息を吐く。

「これからゆっくりと覚えてもらおうとしよう。さて、今は目の前の問題だ」

意識を地図に向けると、ルクシオンの目が強く点滅した。

「何だ！？ どうした！」

その反応に俺が問うと、ルクシオンはこれまでよりも警戒した声色で答える。

『マスター、魔装の反応を確認しました』

「魔装？ 黒騎士の爺さんのやつか！」

以前、俺たちを苦しめた黒騎士の爺さんが使用した魔装の反応を、ルクシオンがとらえた。

アンジエも険しい表情になっている。

「まずいぞ。すぐに部隊を向かわせる。敵はどこだ？」

『移動速度が遅いです。形状も過去のデータとは異なっています。目的地は 学園ですね』

リビアが驚いて、ルクシオンに聞き返した。

「学園ですか？ どうしてここじゃないんですか？」

『分かりません』

すぐに地図を見て、動かせる部隊を確認する。

「王都上空で待機しているのは」

ユリウスが一つの駒を指さした。

「バルトファルト男爵の飛行船だ」

「兄貴かよ」

兄貴を向かわせるか悩んだ。

出来れば、戦わせたくない。

だが、身内だからと下がらせたら、示しがつかなくなる。

「俺が」

俺が出ると告げる前に、ルクシオンが味方からの報告を俺たちに告げた。

『マスターの兄君からです。敵を発見したのでそちらに向かうと。すぐに学園に部隊を派遣します』

「俺も出る。アロガンツを出せ」

そう言つと、アンジエが俺の腕を掴むのだった。

「リオン！」

だが、ユリウスが悩みながらも、アンジエを諭すのだった。

「黒騎士レベルの相手が出て来たら、バルトファルトに期待するしかない。バルトファルト、すまないが出撃してくれるか？」

「当たり前だ。あそこにはフィンリーたちもいるんだよ！」

外に出ようとすると、ノエルがドアの前に立ちはだかった。

「ノエル、何の真似だ？」

「あんだ、このままだと本当に壊れるよ」

言われて、すぐに何を言いたいのか理解したが、魔装が出てくるなら俺が出た方がいい。

最悪、ルクシオン本体を使う。

「魔装の相手をしたら戻るだけだ。ルクシオンだと、王都に被害が出る。それに、放っておく方が精神的にきついんだよ」

魔装を吹き飛ばす威力の攻撃をすれば、王都まで吹き飛んでしま
う。

アロガンツを使用するのが正解だ。

ノエルが俯いて道を譲ろうとすると、今度はリビアが俺の前に出
てきた。

「リビア、話は後だ」

「いえ、私は止めません。リオンさんは家族を助けたいんですよ
ね？」

「　　そうだよ。指揮官失格だよ。だから、こんな立場は嫌だったんだ」

愚痴をこぼすと、リビアは俺を見て微笑むのだった。

「私は止めません。ただ、一つだけ約束をしてください」

「約束？」

「リオンさんが家族を守りたいように、私はリオンさんの心を守りたいんです。だから、リオンさんはもっと自分勝手に動いてください。後のことや、面倒なことは私たちが何とかします。だから、自分のやりたいようにしてください」

「俺のやりたいように？　それだと、もっと酷いことに」

「なりません。リオンさんは優しい人です。派閥とか、国とか、戦争とか　もう、そんなことで悩まないで、好きなようにしてください。大丈夫。私たちが側にいますから」

リビアの真っ直ぐな目に、心の奥まで見透かされそうだった。

「悩まなくていいなら、楽だよな」

「ええ、リオンさんなら、間違った道には進まないはずです」

俯くと、ルクシオンが会話にまざってくる。

『私もいますからね。大抵のことは、どうにかしますよ。そもそも、マスターが背負い込んでいる悩みなど、私にとっては悩みでもあり

ません』

「お前も言っよな」

笑って、そして視線を巡らせる俺は、皆を安心させるために言うのだ。

「やっぱり、面倒なのは嫌いだから、事後処理は頼むわ。俺、敵をぶっ飛ばしてくる！」

アンジェが首を横に振る。

「行ってこい。事後処理は私たちでしてやる」

ユリウスも同様だ。

「お前はやり過ぎるからな。後片付けは俺も手伝おう」

マリエはオロオロとしながらも、俺を見て拳を上げた。

「もう、面倒な連中をとにかくぶっ飛ばしてきて！」

ノエルは、ドアを開けると諦めた顔をしていた。

「リオンは面倒な性格をしているよね。捻くれすぎ」

「悪いが俺は自分に正直な男だよ」

部屋を出ると師匠が頷いていた。

「ミスタリオン、ご武運を」

「任せてください」

廊下に出ると、リビアが俺に笑顔を向けていた。

ルクシオンが俺の右肩に近付く。

『クレアーレを代わりに来させます。マスター、アロガンツは中庭に着地させます』

「本当に面倒だな。敵さん、まさかこれが切り札だったのか？」

廊下に出た俺は、急いでアロガンツが降り立つ中庭へと向かう。

すると、廊下で待っていたのはフィンだった。

「フィン、お前は避難しているよ。ミアちゃんが不安がるぞ」

「そうしたいが、面倒なのが出て来ただろ？俺も無関係じゃないんだよ」

フィンの左肩の辺りに浮かぶ黒助は、一つ目を頷かせる。

『コアのない魔装のパーツだが、俺様たちの仲間だからな』

ルクシオンは忌々しそうにしている。

『我々で塵一つ残さず処理します』

『相棒は手を貸すって言ってたんだよ!』

フィンを見ると、廊下の窓の外を見るのだった。

「黒助が言うには、今回の魔装の破片は厄介らしいからな。ミアはまだ留学していたいようだし、王都が焼け野原になると困るんだよ」

俺は肩をすくめて見せた。

「シスコンだな。なら、手伝え」

「ああ」

『イヒヤヒヤヒヤ! 最高の気分だあああ!』

ルトアートの声が王都に響き渡っていた。

くぐもり、割れたような声を聞いているのは、飛行船の艦橋にいるニックスだった。

学園を見下ろすと、まだ避難が終わっていない。

「砲撃を続ける!」

王都上空で待機していたニックスは、敵が来たので迎え撃っている。

「ジェナとフィンリーは!」

「ま、まだ見つかりません！」

鎧に乗り込んだ騎士たちを降ろして、二人の救出に向かわせたのだが見つからない。

王都上空で待機していた飛行船が集まってくる。

砲撃を行うが、まったく効いているように見えない。

ニックスは椅子の肘掛けに拳を振り下ろした。

「化け物が」

（何でルトアートの声に似ているんだよ）

自分たちを苦しめてきた本妻の子供。

自分の兄ではあるが、いい思い出など一つもなかった。

目の前の化け物からは、ルトアートの声がする。

『バルトファルトの家紋？ バルトファルト バルトファルトオオオ！ それは私の家紋だああ！ 地位も、名誉も、あいつの全ては私のものだ！ 私にこそ相応しい！ 侯爵の地位も、公爵家の女も、ロストアイテムも私のだああ！』

空に浮かぶのは、大きな塊だ。

醜い肉の塊は、表面が黒く血管が脈打っているように見える。

塊は浮かび、王都上空をゆつくりと学園方面に進んでいた。

先端に人の顔らしきものがあり、細長い手がついている。

後ろには尻尾のような物が生えており、ウネウネと動いていた。

体から触手のようなものも生えている。

「何なんですか、あれは!？」

艦長がそう言うと、ニックスは吐き捨てるように言うのだ。

「俺が知るかよ。まったく、リオンに付き合わされると、いつもこ
うなるんだ」

公国戦で見た超大型よりはマシだろうが、いくら砲弾を撃ち込ん
でも傷一つつかない敵を前にニックスは冷や汗をかく。

（ここで逃げたら、学生たちがどうなるか）

学園の屋根に張り付く、蜘蛛型のロボットたちも地上から砲撃し
ていた。

だが、ルトアートは止まらなかった。

「よりにもよって学園を狙うのか」

元々避難場所になっており、学園には周囲の住人たちも避難して
いた。

ニックスは時間を稼ぐために、この場から動けなかった。

（リオンには伝えている。あいつなら何とかしてくれると思うんだが）

体中に赤い肉眼がついており、周囲をキョロキョロと見ていた。

それらの眼球が、一斉にニックスの乗る飛行船を向く。

「全員、衝撃に備えろ！」

ニックスが指示を飛ばすと、眼球から火球がいくつも放たれて飛行船に襲いかかってきた。

（流石に今回は無理か）

それらが爆発し、飛行船は炎に包まれてしまう。

バルトファルト姉妹

混乱する王都。

学園から逃げ出す人々の中には、ジェナとフィンリーの姿もあった。

「何で学園に来るのよ。ここ、避難場所よ。何が目的なのよ」

重要施設は他にもあるのに、敵が何を考えているのかジェナには分からなかった。

ジェナは、フィンリーの手を握りしめ、人の流れの中を進んでいく。

フィンリーは後ろを振り返りながら、上空を見上げるのだった。

「ニックス兄さんの船、大丈夫よね？ あれ、リオン兄さんが作った新型だから、簡単に沈まないのよね？ ねえ、姉さん！」

遠くに見える化け物に向かって砲撃しているが、その効果はなかった。

化け物に近付いた飛行船が破壊され、落下して王都を焼く。

そして、火球がいくつもニックスの乗る飛行船に襲いかかり、爆発を起こした。

「姉さん！」

「黙りなさい！ 今は逃げることだけ考えて！ 私たちは 何も出来ないのよ」

ジェナも悔しそうにしていた。

フィンリーは、ジェナの手が震えていることに気が付く。

（これが戦争なんだ）

自分たちには縁のない世界だった。

男は戦場に出ても当たり前だと教わってきたが、こうして体験すると凄く恐ろしい。

逃げていられるだけでも恐怖なのに、敵と戦うなどフィンリーには考えられなかった。

「ニックス兄さん」

炎に包まれる飛行船から目をそらした。

ジェナが涙を拭っている。

すると、人混みの中からジェナとフィンリーに手が伸びてきた。

「見つけた」

フードをかぶった女は、フィンリーに銃を突きつける。

「ついてきなさい」

フードをかぶった女の声を聞いて、ジェナが目を見開いて驚く。

「あんた　メルセ」

「久しぶり。元気だった？」

フィンリーは銃を突きつけられ、脚が震えてしまった。

（な、なんで、メルセ姉さんがここにいるのよ）

「ついてきなさい。逃げたらためらわず撃ち殺すわよ」

ジェナは奥歯を噛みしめると、フィンリーと一緒にメルセに連れて行かれるのだった。

「くっ！」

「きゃっ！」

二人が連れ込まれたのは、学園にある倉庫の一つだった。

授業で使用する道具が置かれた倉庫内には、ボロボロのドレスに身を包んだゾラの姿があった。

持っている扇子も、随分と傷んでいる。

痩せこけて不健康そうな顔をしていた。

「お母様、連れてきたわよ」

メルセがそう言うと、二人を蹴り飛ばした。

二人とも手を後ろで縛られている。

ゾラは二人を見下ろすと、足でフィンリーの頭部を踏みつけた。

「痛い！」

「黙りなさい。あの妾の子というだけでも腹立たしいのに、今はお前たちがメルセやルトアートを押しのけて本妻の子だなんて 王
国は間違っているわ」

フィンリーはゾラを睨み付けるのだった。

「はあ？ あんたが父さんの子を生まなかったからでしょう？ や
ることが全部汚いのよ。追い出されて当然じゃない！」

「この糞ガキが！」

「っ！」

ゾラが何度もフィンリーを踏みつける。

「バルカス程度の男に、私が本当に相應しいと思っているの！？
あいつは、私の言う通りに金だけ出しておけばよかったのよ！ そ

れを、あの穀潰しのリオンを好き勝手にさせるから！」

踏まれて苦しむフィンリーを見て、ジェナは慌ててゾラの意識を自分へと向けるために口を開いて挑発する。

「穀潰しはあんたたちじゃない！ あんたらが、うちに何をしてくれたっていうのよ！」

ゾラが額に青筋を浮かべ、ジェナに蹴りを入れた。

「何をしたか、ですって？ そんな事も分からないの！ 私は“バルカスと結婚してやった”のよ！ そのおかげで、お前らは貴族として扱ってもらえたのよ。それすら分からないから、田舎のガキは嫌いなよ！」

王国が女性優遇をしていた頃は、身分に釣り合わない女性との結婚は白い目で見られていた。

バルカスが、リオンたちの母親であるリユースを嫁に出来なかったのもこれが理由だ。

フィンリーがジェナを見る。

「姉さん！」

ジェナは、小声で言うのだった。

「フィンリー、あんたは黙っていなさい」

そして、ジェナはゾラを煽るのだった。

「もう時代が違つたのよ。あんたたちは、もう貴族じゃないの。そんなことも分らないの？」

「黙れえええ！　すぐに貴族に戻つて、今度はお前たちを処刑してやるわ！　バルカスの前にお前たちの首を並べて笑つてやるのよ！　私を裏切つたからこうなつたとね！」

「馬鹿じゃない。先に裏切つたのはあんたよ！」

ジェナがゾラに蹴られ、それを見ているフィンリーは涙目になる。

メルセは笑っていた。

「いくら強がつても駄目よ。外を見ていたでしょう？　ルトアートがあんたたちの兄弟を殺してくれるわ。散々好き勝手にしてきた報いを受けるのよ」

フィンリーは、鬼の形相でジェナを蹴り続けるゾラと、それを見て楽しそうに笑っているメルセを見て思うのだ。

（何なのよ。なんでこいつら、こんなにおかしいのよ）

二人を見て、フィンリーは恐ろしくなるのだった。

炎に包まれた飛行船。

ニックスは目を閉じていたが、いつまでも無事なことに違和感を

覚えて目を開けた。

すると、目の前にはコンテナを背負ったアロガンツの後ろ姿が見えた。

「リオン！」

振り返るリオンは、アロガンツにサムズアップをさせる。

『兄貴、待たせたな。ここは俺が引き受ける。いや、ここは俺が食い止めるから先に行け、かな？』

何を言い出すのかと思ったが、これがいつものリオンだ。

「相変わらず訳の分からないことを言いやがって！ 遅いんだよ」

『それでも急いだんだよ。それより、本当に下がってくれ。こいつはちょっと厄介らしい』

アロガンツがルトアートを見ると、相手も気が付いたようだ。

ルトアートが震えている。

『リオン。リオン、リオン！ りおおおん！！』

長い両手を振り回し、周囲にある建物に当たり散らしていた。

ニックスはすぐに命令する。

「このまま後退！ 俺たちは救助を優先する！」

「了解！」

ニックスの指示に部下たちが答え、飛行船が動き出す。

アロガンツから離れていく途中で、ニックスはその隣に並んだ鎧に気が付いた。

（何だ？ アロガンツの同型か？）

やけに刺々しいアロガンツの姿。

またリオンが作ったのかと勘違いしてしまうほどに、二機は似ていた。

ニックスが去って行くのを見届け、俺はかんしゃくを起こして暴れ回る化け物を見た。

「どうしてルトアートの声がするのかな？」

コックピット内で呟けば、ルクシオンが即答してくる。

『王都に持ち込んだ魔装の一部を使用したのが、ルトアートでは？』

「あいつも使えたのか？　というか、ルトアートってそんな重要人物だったのか？」

魔装の一部を使用するくらいには、決起した連中に認められてい

たのだろうか？

そう思っていると、隣に浮かんだアロガンツの偽物のような姿をしたフィンと黒助が話しかけてくる。

『 コアのない魔装は、制御できずに暴走する。そして、使用者の命を奪う。言い方は悪いが、お前の兄さんは捨て駒に使われたな』
『 命を奪われていないのを見るに、ドーピングでもしたのか？ 醜く膨れ上がりやがって、見てられないぜ』

黒助の方は、どうやらお仲間のなれの果てを悲しんでいるように感じられた。

そして、二人の姿だが ついに思い出した。

「フィン、その鎧は課金アイテムか？」

『 ん？ ああ、そうだろうな。俺は購入したわけじゃないが、運良く見つけられたんだ』

黒助が自慢してくる。

『 相棒との出会いは運命だ！ 課金アイテムとか、前世とか関係ない！』

ルクシオンの方は態度が冷たい。

『 とんでもないゴミを拾ってしまいましたね。フィンには同情しますよ』

『てめえ、もういつぺん言ってみろ!』

騒ぎ出すルクシオンと黒助だが、どうやらルトアートの方が我慢できなくなっただけらしい。

『リイイイオオオオン!!!!!!』

俺に向かってくるのだが、フィンの方もアロガンツに似ているために戸惑っていた。

俺たちのどちらを攻撃するか悩んでいる。

すぐに散開して、ルトアートの意識をそらすとコンテナからライフルを取り出す。

「倒すしかないんだな?」

フィンに確認すると、肯定するのだった。

『ここまで浸食されたら、もう無理だ。戦うのが嫌なら、止めは俺が刺すぞ』

「勘違いするな。倒すしかないなら、喜んで倒したい相手だ。それと、こいつは元兄さん。しかも偽物だ。家族じゃない」

そう言つと、フィンは空中で触手に襲われるが、それらを華麗に避けて大剣で斬り裂いていた。

『複雑だな。問題ないならいいが、気を付けろよ』

刺々しいアロガンツは、前世で俺が購入した課金アイテムに似ていた。

「そうする。それにしても　ようやく見つかったな」

どこにあるのかと思ったが、まさかフィンが手に入れているとは思わなかった。

ブレイブ　確か、そんな名前だった気がする。忘れていた。

ルクシオンが俺に指示を求めてくる。

『マスター、敵の魔装が魔法攻撃を準備しています。ミサイルの使用許可を求めます』

「ぶちかませ！」

コンテナの一つが開くと、そこからミサイルが次々に発射されてルトアートの襲いかかった。

全てルクシオンにコントロールされ、体中にある眼球に命中して炎に包み込む。

『ギヤアアア！！』

叫ぶルトアートの、俺は怒鳴るのだった。

「ルトアート、てめえにはこれまでの恨みもあるからな！　心置きなく叩き潰してやるよ！」

『その勢いであの黒いのも灰にしませんか？』

「却下」

ルトアートが手を伸ばすと、伸びて俺に襲いかかってきた。

俺を捕らえようとしてくるので、ライフルで撃ち抜く。

しかし、撃ち抜く程度では動きが止まらない。

「厄介な」

『効果が薄いですね。武器の変更を提案します』

距離を取ると、フィンが俺の方にやって来て大剣でルトアートの腕を切断する。

空から真下に急降下して、その後すぐにもう一本の手も斬り裂いた。

『油断するなよ。銃を使うなら、こいつの中にいる操縦者を狙わないと意味がない。もしくは、吹き飛ばすか、だな』

随分と魔装との戦いになれているようだ。

「こんなのと何度も戦ったのか？」

『こいつで六度目だな。お前は初めてか？』

「いや、以前に一回だけある」

黒騎士の爺さんとは、違った面倒くささがあるな。

『ないよりマシだな。援護を頼むぞ』

「任せろ。ルクシオンが狙いを外さない限り大丈夫だ」

すると、すかさず黒助が会話に割り込んできた。

『そいつが一番信用できないけどな！ 相棒、俺たちだけで倒そうぜ』

ルクシオンが苛立っている。

『お前など不要です。マスター、我々だけで倒しましょう』

「変に張り合うなよ」

操縦桿を握り直し、ペダルを操作してアロガンツを空中で一回転させる。

新しい腕が生えてきたルトアートは、手を振り回して俺たちを叩こうとしている。

触手が襲いかかってくるので、コンテナから取り出したアクセスで切り払った。

「吹き飛ばすには、ミサイルじゃ足りないか」

『本体の使用許可を求めます』

「被害出るから却下だ。 シュヴェールトを出せ」

すると、上空で待機していたルクシオンの本体からシュヴェールトが射出された。

コンテナをパージすると、空中でシュヴェールトと合体する。

『うおっ！ 合体した！』

ちよつと興奮気味のフィンが面白い。

こいつも男の子だな。

「いいだろ」

『合体は浪漫だよな。 さて、準備はいいか？』

シュヴェールトから大剣を引き抜き、構えるとルトアートの向こうのフィンも構えていた。

醜い姿で叫んでいるルトアートを見る。

「ルトアート、助からないならせめて解放してやる」

俺の言葉に、ルクシオンは皮肉を言う。

『お優しいことですね。ご兄弟として何かいい思い出でも？』

「ない。ま、憎んでいても、殺したいとは思わないからな」

アロガンツがブースターを噴かし、速度を上げてルトアートに突っ込む。

反対側のフィンも同様だ。

ルトアートを挟み込み、向かい合って突撃して　大剣を振り抜く。

そして、ルトアートが空中で黒い液体を噴き出すと、方向を変えてまた突撃する。

俺とフィンで、ルトアートを切り刻んでいた。

「ルクシオン、あいつの弱点は？」

『シンプルに頭部です。そこにルトアートと思われる反応がありますね』

「　　そうか」

暴れ回るルトアートの目の前にアロガンツを移動させると、人の顔が恐怖で歪んでいた。

『どうしてだ。どうして私は　私の方が偉いのに！　私は侯爵だ！　全ては私が入れるべきなんだ！　地位も、名誉も、財産も！　そして女も！』

混乱しているようだ。

黒騎士の爺さんと同じだな。

大剣をそんな人の顔に突き刺した。

「ルトアート、お前はやり方を間違えたな」

『リオオオオン！』

ルトアートが叫ぶと、ルクシオンがさっさと終わらせるように呟く。

『インパクト』

大剣が赤く染まり、ルトアートがまるで沸騰したようにボコボコと泡を出して弾けた。

黒い液体が周囲へと飛び散ると、アロガンツにもベタベタした液体が張り付く。

『マスター、何者かが接近してきます。どうやら、魔装の破片を回収するのが目的のようです』

「ラーシエルの連中か？」

『また、学園からの報告です。マスターの姉君、妹君が囚われているそうです。犯人はゾラとメルセの二人ですね。姉君が暴力を受けていますよ』

「は？」

それを聞いていたフィンが、俺に声をかけてきた。

『リオン、お前は姉妹を助けにいけ。魔装の破片は俺たちで潰しておく』

『俺様の仲間を利用されてたまるか！』

この場はフィンに任せるとして、俺とルクシオンは学園に向かうことにした。

「た、頼む」

しかし、よりもよってゾラとメルセかよ。

勝者

魔装を解除したフィンは、黒い液体で染まった王都に降り立った。

ルトアートを取り込んだ魔装の破片が、触手を出して蠢いている。

破片は目玉を出現させ、フィンをみると触手を伸ばしてくる。

『おっと、俺様の相棒に手を出すなよ』

ブレイブが前に出ると、触手がフィンから離れるのだった。

「黒助、頼む」

『おうよ！』

ブレイブに口が出現すると、そのまま魔装の破片を食べてしまった。

飲み込み、そして口を閉じる。

『うむ！ 俺様パワーアップ！』

満足しているブレイブを見て、フィンは肩を回すのだった。

「面倒な連中が回収に来る前に終わってよかったな」

だが、その面倒な連中が来てしまう。

『相棒、お客さんだぜ』

王国の兵士たちとは違うローブをまとった男たちは、訓練されているのか動きが違う。

手にはそれぞれ武器を持っていた。

そして、ブレイブを見て驚いていた。

「完全体だと」

「現存していたのか」

「王国は魔装の完全体を保有していたのか？」

魔装について知識があるようだ。

そんな彼らを見て、フィンはアゴに手を当てる。

「ラーシエル神聖王国だったか？ あんたら、とんでもない連中を敵に回したな」

リーダーらしき男が剣を抜いてフィンに襲いかかった。

「捕らえる。連れて帰る！」

部下たちも動き出す中、フィンは落ち着いている。

「黒助、やれ」

『ブレイブって呼んで欲しいのに』

落ち込むブレイブが、目を見開くと周囲に魔法陣が浮かび上がる。電撃が周囲の兵士たちを襲い、全員の体が麻痺してその場に倒れて動かなくなった。

フィン、リーダーらしき人物に近付く。

リーダーがフィンを見上げて言うのだ。

「お前は誰だ？ バルトファルト侯爵ではないな？」

リオンについて随分と詳しい。

「帝国からの留学生だ。悪いが、友人を助けるために参戦させてもらった。それから、魔装は俺が処分したよ」

「な、何？ お前、あれがどれだけ貴重なものか分かっているはずだ！」

慌て振りを見て、ブレイブが笑っていた。

『お仲間のなれの果てを見ているのも忍びないからな。俺様が食べちゃった。ところで相棒、こいつらはどうするんだ？』

フィンが肩をすくめる。

「リオンに突き出すさ。後のことは任せるよ。俺は部外者だからな」

学園の倉庫。

息を切らしたゾラが、ソファアーに腰を下ろした。

髪を乱し、そして横たわるジェナを見て唾を吐く。

「小娘が調子に乗って私を馬鹿にするんじゃないわよ」

そんなゾラを見てから、メルセはフィンリーを見下ろすと腕を組んでニヤニヤしていた。

「なら、私はこっちをいじめるわ。あんた、昔から気に入らなかったのよ」

「な、何よ」

メルセがフィンリーの頭を踏みつけ、持っていた拳銃を向ける。

「ひっ！」

「怖い？ でも、撃つわ。あんたらみたいな女が、私よりもいい暮らしをしているなんてあり得ないのよ。あんたら程度のゴミは、王都で遊んでいられる身分じゃないのよ」

自分が隠れ潜んで生活しているのに、この二人は王都で遊んでいた。

それがメルセには許せない。

震えているフィンリーを見て、グリグリと踏みつける。

「怯える。もっと怯えるのよ」

怯えたフィンリーの顔を楽しんでいると、急に目つきが鋭くなった。

「何よ？」

「今に見ていなさいよ。リオン兄さんがあんたらを絶対に許さないわ。言っておくけど、うちの兄さんたちはスコンだからね。口では色々と言うけど、いざとなったら助けてくれるわ」

その言葉を聞いて、メルセはお腹を押さえて笑うのだった。

「馬鹿じゃないの。いくらあいつでも、化け物になったルトアートには勝てないわよ。あんたらも見ただしょう？ 飛行船でも勝てない敵を、あのリオンが倒せるわけがないわ」

リオンの戦い振りを知らないメルセには、ルトアートが負けるとは思えなかった。

それはゾラも同じだ。

「外国から送りつけられた秘密兵器らしいけど、ルトアートもようやく役に立ったわね。まったく、男は本当に役に立たないわ」

メルセも肩をすくめている。

「そうよね。ま、元の王国を取り戻すために、命を捧げたんだから

ルトアートも本望でしょ。本人は最後まで命を落とすなんて知らなかったけど」

それを聞いてフィンリーが目を見開く。

「あ、あんたら、姉弟じゃない。なんで笑っていられるのよ」

「なんで？ そんなの決まっているじゃない。男なんて、女のために命を賭けるものよ」

メルセは本気で言っていた。

その姿を見て、フィンリーは理解できないという顔をしている。

「この聖戦が終われば、私はお姫様よ。きっと公爵婦人になれるわ」

そんな夢みたいな事を言うメルセに、フィンリーが呆れるのだった。

「あんたみたいなのが公爵夫人になれるわけがないじゃない」

それを聞いて、メルセがフィンリーに銃口を向ける。

「そう。理解できないのね。なら、死になさい。リオンの屑野郎に、あんたの死体を見せつけてやるわ。シスコンなら、少しは心が痛くなるでしょう」

引き金を引こうとすると、倉庫内に隠れていた小さな丸い球体が拳銃に体当たりをした。

「痛っ！ な、何よこれ！？」

慌てるメルセを見て、ゾラが苛立ちはじめる。

「何をしているの、この馬鹿娘！ さっさとこいつらを処分しなさい！」

「わ、分かっています、お母様」

慌てて銃を拾おうとすると、倉庫のドアを開けようとする音が聞こえてきた。

鍵をかけており、中には入ってこられない。

メルセが驚くと、鍵を撃ち壊して中にリオンが入ってくる。

「久しぶりだな、ゾラ メルセ」

リオンはショットガンを持っており、メルセが拾おうとした拳銃を撃って破壊した。

そのまま煙が出ている銃口を二人に向ける。

リオンは笑っていた。

「姉と妹がお世話になったようだな。お礼をさせてくれよ」

ゾラが立ち上がった。

「ぶ、無礼者！ 女性に銃を向ける奴がいるものですか！ そんな

ことだから、お前は駄目なのよ！」

ここに来て、まだ上から目線を崩そうとしなかった。

だが、リオンは言う。

「男も女も関係ない。殺せば糞の詰まった肉の塊だ」

実戦を経験したりオンの凄味に、ゾラもメルセも怯んでしまった。

リオンはナイフを取り出し、フィンリーの拘束を解く。

「姉貴を助けてやれ」

「う、うん」

絶対に銃口を自分たちからそらさないリオンに、メルセは震えながら聞く。

「ルトアートはどうしたのよ。外で戦っているはずよ」

リオンは表情を変えずに答える。

「俺が殺した」

「あの役立たず」

メルセがそう言うと、リオンが問いかけてくる。

「それだけか？」

「お前に勝てないなんて、やっぱりあいつは愚図よね。男って本当に役に立たないわ」

メルセと同様に、ゾラも悔しそうにしている。

ただ、それは役に立たなかったからだ。

「ルトアート、なんて情けない子なのかしら」

「息子を殺されてその程度の反応か」

リオンは少しだけルトアートを憐れんでいるようだった。

だが、すぐに気持ちを切り替える。

「お前らのクーデターは失敗だ。もう、逃げ回っている連中を捕らえるだけで終わる」

ゾラは、リオンの言葉を信じなかった。

「嘘を吐くな！ 私たちが負けるわけがないわ。私たちは正しいのよ！ 女性を苦しめる今の王国は間違っている！ これを正す私たちが、負けるはずがないのよ！」

叫ぶゾラを啞然として見ていたリオンが、次第に笑いはじめた。

ゾラもメルセも、そんなリオンを見ていぶかしむ。

「ウケる。何？ お前ら、女性のために立ち上がるって大義名分だ

ったの？」

俺に怯えるゾラとメルセを前にして、俺は笑うしかなかった。

隣に浮かんでいるルクシオンが呆れている。

『マスター、何がそんなに面白いのですか？』

「いや、だって今の話を聞いたか？ 女性を苦しめる王国は間違っているってさ！ 今は貴族連中が『男を苦しめた王国は許さない！』って怒っているから、こいつら似ているなって思ったんだよ」

『経緯が違いますよ』

「それは知っているし、俺自身が深く理解している。さて」

俺は二人を見ながら教えてやる。

「勘違いしているお前らに教えてやる。男だとか、女だとか関係ない。お前らが落ちぶれたのは、お前らの責任だ。分かるか？」

「な、何ですって」

ゾラが扇子を握りしめていた。

「落ちぶれたのはお前らのせいだ。親父を騙して、他の男の子を生んだ。結婚したのに協力もせず、ただ贅沢な暮らしを送っていた。男なら死んでもいいと、俺を殺そうとしたよな？ 別に性別に関

係なく、お前らが屑だから今の状態なんだよ」

メルセが俺に言い返してくる。

「嘘よ！ 私たちを不当に冷遇したわ！ いきなり追い出して、これまでの権利を全て否定したじゃない！」

こいつは世間に出たことのないお嬢様だ。

おまけに、今までの優遇を当たり前だと思っているから手に負えない。

「権力を失っただけだ。 お前らは負けたんだよ。 大人しく地べたを這いずり回っていれば、生きていられたのにな。 反逆罪は死刑だ。 覚悟しておけ」

そう言うのと、二人とも怒りで震えていた。

怒りたいのはこちらだが、話の通じない奴と議論するのは無駄である。

「それから、女を冷遇しているみたいに言わないでくれる？ お前らと違って、賢い女性たちはちゃんと幸せを掴んでいるし、中には身分違いの恋を成功させた人もいるんだよ」

モットレイ伯爵の奥さんは、まさしくシンデレラストーリーだな。

こいつらは性別に関係なく、自分たちを優遇しろと騒いでいるだけだ。

男だろうが、女だろうが、駄目な奴は駄目だ。

俺のようにね。

「お前らが落ちぶれている間に、幸せを掴んだ女性たちは多いぞ。何故だか分かるか？ お前らが酷すぎて、まともな女性が女神に見えるからだよ！」

いや、本当にそうなのだ。

プレゼントをしたらお礼を言ってくれたと、俺の同級生がそう言っ
て喜んでいた。

もう、そういうレベルだよ。

大体、こいつらが優遇されている時にも、まともな女性はいた。

アンジェたちだ。

それに、少数だが賢く生きていた女子はいた。

「賢い女たちは、今頃言っているよ。お前らのおかげで選り取り見
取り。ありがとう、ってさ！」

ま、話など聞いていないから、何を考えているのか知らないけど
ね。

目の前の二人が何か言い返そうとしていると、俺の後ろにナイフ
を持ったフィンリーが立っていた。

二人を睨み付けている。

俺はフィンリーからナイフを奪い取った。

「殺すな。それ以外なら、何をしてもいいぞ」

「分かった」

頷くフィンリーが、指を鳴らしながら二人に近付くのだった。

きっと、平手打ちをするつもりだな。

意外とグーで殴るかもしれない。

ただ、それぐらいは、ゾラとメルセの二人には甘んじて受けてもらうでしょう。

ルクシオンが俺に知らせてきた。

『マスター、ジルクがこちらに向かっているそうです。それから、オスカルも一人でこちらに向かっています』

「あいつも？ ま、いいか。　すぐに人が来る。お前らは終わんだ」

顔を酷く歪め、俺を睨み付けてくるゾラとメルセに、フィンリーが低い声を出して威圧していた。

「姉さんをボコボコにした恨みもあるから手加減なんてしないわ。ぶっ殺してやる！」

メルセが怯えていた。

「私は女よ。暴力を振るうつもり？」

「それがどうしたのよ。私も女よ。それから、あんたも分かっているわよね？ 女の敵は 同じ女なのよ！」

フィンリーは二人に襲いかかると、まずはメルセの髪を掴んで顔面に 膝を叩き込んでいた。

鼻血を出すメルセが、顔を押さえて泣き出す。

「な、何をするのよ！」

「キーキー五月蠅いのよ」

髪を無理矢理振り回すものだから、投げ飛ばした際に結構な数の髪をフィンリーは握りしめていた。

壁にぶつかり、メルセが気を失うと フィンリーは、次にゾラに襲いかかる。

「散々やってくれたわね。お前は前から嫌いだったのよ」

「や、止めて。待って、降参するから ぶっ！」

馬乗りになって拳を何度も叩き付けるフィンリーを見て、俺は震えてしまった。

もつと女の子らしく平手打ちとか、その辺りを想像していた。

なのに、今は目の前で妹が暴れ回っている。

「おら、どうした！ 姉さんはもつと蹴られたのよ！ この程度で終わると思うんじゃないわよ！」

両腕を振り回し、ゾラの顔を殴るフィンリーの拳には血がついていた。

「ゆ、ゆるじ で」

ドン引きだ。

俺が震えていると、倉庫に入ってくるのはオスカルだった。

「フィンリーさん！ 助けにきま した」

どうやら、フィンリーを助けたくて駆けつけたらしい。

だが、フィンリーはゾラやメルセをボコボコにしている。

「逃げるなあああ！」

「ひっひいいい！」

俺はフィンリーを止めるために声をかけた。

だって、オスカルもドン引きしているから、早く止めないと大変なことになりそうだから。

「お、おい、もういいだろ。相手は女だぞ」

容赦なく顔を攻撃するフィンリーは、とても恐ろしかった。

振り返ったフィンリーが、俺に向かって叫ぶ。

「それが何よ！ 私も女よ！ だから問題ないわ！」

「いや、でもやり過ぎ」

「この程度じゃ、私の気が収まらないわ！ 叩ける時に、しっかり叩くのよ！」

髪を振り乱して、再びゾラを殴りはじめるフィンリーが怖かった。

オスカルも同様で、今はジェナを介抱している。

「大丈夫ですか、お姉さん」

「オスカル様？ は、恥ずかしいから見ないでください。こんな顔を、貴方には見せられません」

しおらしい態度が、フィンリーのことであって神々しく見える。

「そんなことはありません。辛かったです。助けるのが遅くなつて申し訳ない」

「いえ、助けに来てくれただけでも嬉しいです」

ジェナの手を取って涙を流しているオスカルは、悪い奴ではないのだろう。

だが、そんなオスカルの心につけ込む女がいた。

「オスカル様　私のために泣かないでください。こんな汚れてしまった私のためなんかは」

その汚れた、ってどういう意味かな？　色んな意味で汚れた、って意味？

オスカルは、ジェナの手を握りしめる。

「貴女は汚れてなんかいません。ジェナさん　貴女は美しい」

は？　こいつ何を言っているの？

「オスカル様！」

ジェナが抱きつくと、オスカルも抱きしめていた。

この状況が吊り橋効果にでもなったのか、オスカルは血迷ってしまふ。

「ジェナさん、自分に貴女を守らせてください！」

「　はい」

オスカルに見えない位置で、ジェナが拳を握って「やった！」という顔をしている。

そして、俺に「変なことを言ったら許さない」という目をして睨んでいた。

こっちもドン引きだ。

すると、メルセとゾラの髪を握り、引きずって持って来たフィンリーがその光景を見て二人の髪を手放す。

「う、嘘」

床に頭部を打ち付けられるメルセとゾラは、気を失っていた。

俺は返り血で顔や服、そして拳を赤く染めたフィンリーを見て顔をそらした。

ルクシオンが冷静に告げる。

『マスターの姉君は、無事に結婚できそうですね。王都住まいのお金持ち、そして自分の好みの男性という条件もクリアしており、まさに望んだ結果通りかと』

フィンリーがプルプルと涙目で震え、血だらけの手を握っている姿を見て俺は呟く。

「だからやり過ぎだって注意したのに」

結果的に、ジェナは自分の望む男性を手に入れてしまった。

姉妹で一人の男を奪い合うなんて 駄目だと思いました。

神聖王国

夜が明ける頃には、全てが終わっていた。

アインホルンの甲板の上で朝日を眺める俺は、コーヒーを飲んでいるフィンと話をする。

「何でコーヒーなの？」

「朝だからだ」

「お茶もあるよ」

「朝はコーヒー派だ」

「ちっ！ コーヒー派は敵だ」

「態度悪いな！」

徹夜をした俺たちが、どうして甲板の上にいるのか？

それは周囲が理由だ。

同じグループの友達たちをかき集め、フレーザー家の領地に向かっている。

理由は、ラーシエル神聖王国の皆さんに、俺という存在をアピールするためだ。

神聖王国の皆さん、よくもやってくれたなこの野郎！ と、挨拶をするためだ。

フィンがついてきた理由だが、王都で暴れ回った魔装の破片だ。

同じものが国境でも投入されたら、回収しておきたいらしい。

「王都に残ってもよかったのに」

「後片付けの手伝いをしてもいいが、こっちも気になるからな。それより、お前の方は大丈夫なのか？」

「何が？」

コーヒーを飲みながら、フィンは太陽を見ている。

「精神的なやつだよ」

こいつも気が付いていたのだろうか？

「今回は負担も少ないからな。ま、ルトアートの奴は助けられなかったが、あれは自業自得だからさ」

「そう思っているけど、心づけているのは面倒だからな」

「そついうお前はどんなんだよ？」

フィンの方も色々あったのだろうが、俺のように追い込まれているようには見えなかった。

「幸いにも戦争には参加していない。俺が手に入れた勲章の多くは、暴れ回った魔装の破片退治だ。使用者は助けられないと分かっているからな。放置も出来ないから割り切るようにした」

一度使用すれば、助かることはない。

魔装の破片とは、何とも厄介な代物である。

「俺も割り切れたら楽なだけだな」

「どうかな？ 変に割り切って、楽しむようになったら人として終わるぞ」

前世でも聞いたことがあるな。

戦場で感覚が麻痺して、残酷なことも平気で出来てしまうようになる話だ。

「それは嫌だな」

戦争は人を簡単に狂わせる。

朝日を見ながらそう思った。

王都。

王宮では、アンジエが次々に指示を出していた。

「クレアーレ、予備の人員は？」

『もういませ〜ん！

素直に領主たちを頼ったら？』

「弱みは見せられない。リオンが一人でやると言ったからな。手を借りれば、リオンを笑う者も出てくる」

『それは困るわね。笑った連中を燃やしてやりたくなるから、優先順位を変更しようか』

一夜明けてみれば、クーデターの首謀者たちは全て捕らえてしまった。

裏切っていた貴族たちも捕らえ、神聖王国の特殊部隊も拘束している。

たった一晩で、大きな問題を片付けてしまった。

『うん、パーフェクト！』

喜んでいるクレアーレに、アンジェは疲れた顔を向ける。

「これで終わりではないよ」

『分かっているわよ。やり過ぎてしまったら、今度は警戒する貴族さんたちの相手が始まるのよね？』

「そうだ」

ここまでのことをやってしまったのだ。

嫌でもリオンは警戒される。

まだ実力を隠していると思われ、貴族たちも動くはずだ。

リビアは、そちらの話に疎いたため、アンジエに詳しい説明を求めるのだった。

「あの、これからどうなるんですか？」

「今後は各国が領主貴族たちの切り崩しに動くだろうな。今の王家には求心力がない。まとめるためには、力を示すしかないのだが」

「

紅茶を飲んでいたユリウスがその先を答える。

「バルトファルト以上の力など示せない。つまり、王家が武威を示すためには、バルトファルトを取り込む必要がある。しかし、バルトファルトは結婚を嫌がるからな」

アンジエがちょっと嬉しそうにしている。

「エリカ様でも駄目となると、王国では用意できる姫がない。幼子をリオンの嫁に押しつけるのも駄目だな」

すぐにでもリオンと王家の姫による子供が欲しいのだ。

それが、何よりも強い両家の繋がりになる。

もしかすれば、その子供がロストアイテムを受け継げるかもしれない。

そうなれば、王家は『第二の王家の船』としてルクシオンを手に入れることが出来る。

が、それも駄目。

リオンが認めないのだ。

「え、え」と　つまり、まだ分からないってことですよね？」

ユリウスが紅茶を飲み干して、再び地図に視線を向ける。

「本気でバルトファルトが王位を狙ってくれた方が楽になってきたな」

その発言を聞いたアンジェは、頬を引きつらせるのだった。

「殿下、本気ですか？」

「え？　妙案だと思うが？」

「いや、そういう意味ではなく、王子としてその発想はどうなのかと」

ユリウスがハツとして「あゝそうだな」と、王子である事を今思い出したような態度にリビアもドン引きするのだった。

ローランドの寝室。

欠伸をするローランドは、朝から肉を食べていた。

宮廷医がその様子を見ながら心配する。

「陛下、起きて肉を食べないでください」

ローランドは顔色もよく、そして豪快にステーキを食べている。

「腹が減ったからな。しかし、お前の薬はよく効くな」

ゲラゲラ笑っているローランドを見ながら、宮廷医は肩を落とすのだった。

「毒殺に見せかけるなんて笑えませんよ。しかも、私の趣味まで捏造するなんて」

「あの娘は信じ込んでいただろ？　しかし、あの程度の娘で私を籠絡できると本気で考えていたのだろうか？　途中で私の思惑がバレたのかもしれないと焦ったくらいだぞ」

淑女の森が心配になるレベルで、メルセは駄目すぎた。

「偽の情報を渡して、反乱を未然に防ぐつもりなら薬は無害のものでもよかったはずでは？」

ローランドは真剣な顔付きになる。

「それでは、周りを騙せない。あの小僧の実力も分からないからなで、どうだった？」

ローランドが問えば、宮廷医が詳しく報告をはじめる。

「一夜にして解決です。神聖王国の特殊部隊も拘束しましたよ」

リオンがいかにかに手際よく反乱を鎮圧したかを聞いたローランドは、腕を組んで思案する。

（教えてもないのに、私が用意した部隊もうまく使ったか 想像以上だな）

元から能力を疑ってはいなかった。

だから、薬を使って危篤状態を演出したのだ。

リオンに面倒事を丸投げすれば、解決すると分かっていたからだ。

しかし、どの程度の損害で成功させるのが気になっていた。

結果は予想以上だ。

「私の勘は正しかったな」

「勘で変なことをしないでください！ こっちは冷や汗が止まりませんでしたよ！」

「そう怒るな。だが、こうなるとミレーヌが厄介だな」

「王妃様ですか？ そりゃあ、事実を知ったら激怒しますよ」

「違う。毒の件は黙っておくから心配ないが、問題はあの小僧の能力だ。きつと、今頃は自分の想像を超えていた事に、震えているのではないか？ あいつは優秀だが、それ故に相手の力量を予想してしまうからな。予想外のことが起きると慌てる駄目な部分がある。ま、それも普通の相手なら問題ないのだが　今回は無理だな」

ミレーヌが、どう動くか分からないとローランドは言う。

しかし、だ。

「あの小僧は苦勞するだろうな。　いい気味だ」

ミレーヌとリオンがどうなるのか、高みの見物を決め込むローランドだった。

ミレーヌは、自室で報告を聞いて頭を抱えていた。

「たった一晩で解決なんて」

それも、ほぼ完璧と言える展開だ。

王都の反乱を一晩で解決し、今はフレーザー家への援軍まで出している。

神聖王国が裏で動いていた証拠も確保しており、これ以上はないという成果だ。

それに、王都の被害も予想より随分と少ない。

「こんなの　どうしようもないじゃない」

ただの武力だけではなく、リオンはこの面倒な事態を完璧に乗り切る能力も示して見せた。

情報の収集、伝達　その他諸々の能力が、ミレーヌの想像を超えていた。

その場に崩れ落ちる。

「私を守ろうとしていたものなんて、彼にはたいした価値がなかったのね」

リオンを見誤ってしまった。

強引に婚姻を結び、王家の側に引き込もうとしたのを間違いとは思わない。

だが、これでは取り込んだつもりが、乗っ取られてしまう。

ミレーヌは、リオンの手の平で弄ばれていたように感じた。

「本当に酷い子よね」

そう言って笑うミレーヌは、涙を流すのだった。

フレーザー家が守る国境。

そこで対峙する王国軍と神聖王国軍。

そんな中、俺は 。

「もつと前に出たらどうだ！ 王国までご招待してやるよ！」

笑いながら、戦場で敵の旗艦をアロガンツで押して王国側へと向かっていた。

アロガンツが飛行船を無理矢理押しているのだ。

周囲の敵艦は、旗艦を砲撃できずに見ているだけだった。

時折、敵の鎧が俺を引き剥がそうとしてくるが、ドローンたちに撃ち落とされる。

『押されているぞ！』

『無理です！ 抵抗できません！』

『王国軍の射程圏に入ります！』

敵の艦内の声が聞こえてくる。

操縦桿を引くと、アロガンツが更にパワーを上げて押していく。

敵の旗艦は、両軍のど真ん中まで来てしまつ。

味方もこちらを砲撃せずにいる。

「歓迎するぞ、神聖王国の皆さん！ うまい紅茶を出してやる！」

戦場に出現しているルトアートと似た魔装は、フィンによって倒されていた。

その光景を見た敵の司令官が、怒鳴り散らすように命令を出している。

『魔装を奪われるな！』

『無理です！ 王国軍、こちらに前進してきます！』

『おのれ！』

ラーシエル神聖王国。

その切り札とも言えるのが、薬を使い暴走させた魔装のようだ。

黒騎士の爺さんのように、鎧の姿を保てずに肉の塊として戦場に投入していた。

「ミレーヌさんの実家も苦勞するわけだ」

ルクシオンが予想を述べる。

『投入すれば一時的に敵に大ダメージを与えられるのですが、問題は稼働時間ですね。すぐに使えなくなり、おまけに操縦者の確保が大変そうです』

忠誠心か、それとも何らかの洗脳か？

操縦者たちは王国軍に攻め込もうとする。

「胸くそ悪い。全部フィンに回収させる」

『そのつもりのようですよ』

視線をフィンに向けると、黒助と共に暴走した魔装を倒して回っていた。

『これで三つ目えええ！』

興奮している黒助に、フィンが声をかけている。

『黒助。もう終わりだ。一旦下がるぞ』

『おうよー！』

そんなフィンに、神聖王国の騎士たちが襲いかかる。

『外道騎士をやれ！』

いきなり外道騎士と呼ばれ、フィンが困惑していた。

『おい、ちょっと待て！ 外道騎士って何だよ！』

慌てているフィンに俺は言うのだ。

「あ、それ俺の二つ名」

『何て酷い二つ名だよ』

魔装が全て破壊され、おまけに旗艦も奪われた神聖王国軍は、撤退を開始しはじめる。

だが、それを見逃す王国軍ではない。

『レッドグレイブ家の旗艦、前に出ます』

ルクシオンが言うのでそちらを見れば、貴族たちが追撃戦を開始していた。

その姿を見送ると、神聖王国軍の旗艦にフレイザー家の飛行船が集まってくる。

「敵はどうなる?」

『これまでの経緯からすると、追撃戦は苛烈になると思われます。王国は、これで厄介な敵をしばらく黙らせておくことが出来ますね』

味方の鎧が俺の周りに集まってきた。

そんな中、俺は両手で顔を覆う。

「そっか。俺は下がるぞ」

『賢明な判断です』

「それはそうと、薬をくれ。少し寝たい」

『投与します』

パイロットスーツの背中にあるバックパックから、針が刺されて薬が投与される。

あまり多用すると五月蠅いルクシオンが、何も言わずに使用してくれだ。

思っているよりも、俺は周りから見れば限界に見えるのだろうか？

「後は頼むぞ」

『おやすみなさい、マスター』

王宮に各地から戦勝報告が届いたのは、三日後のことだった。

戦力を素早く大量に投入した王国軍に対して、敵は想像していなかったのか混乱していたようだ。

報告を聞き終えたアンジェは、書類にまとめてミレーヌへと報告に来ている。

執務室で報告書を読むミレーヌは、刺々しい雰囲気はなかった。

だが、アンジェから見て、今のミレーヌは怖かった。

「素晴らしい勝利ね。これで私の実家も安心できるわ。ありがとう、アンジェリカ」

「いえ、全てはリオンの手柄ですから」

「本当に凄いわね。想像以上よ。これで、後は私たちを処刑台に送るだけかしら？」

アンジェが首を横に振る。

「ミレーヌ様、リオンはそんなことを望んではいません」

ミレーヌの表情は変わらなかった。

笑いながら、アンジェに教える。

「甘いわね。貴女たちが望まなくとも、周りはより強い王を求めるわ。これから、バルトファルト公爵を何としても取り込もうとするわね。レッドグレイブ家は見る目があるわね。本当に羨ましいわ」

「ミレーヌ様！」

「アンジェリカ、覚悟を決めなさい。貴女たちが望んだ道は、そういう道なのですよ」

「リオンにそんなことはさせません！」

「しなくても、誰かが代わりに行うわ。そして それは正しい。この国には新しい王家が必要なのよ」

群雄割拠の戦国時代になりたくなければ、自分たちを殺して王位に就けとミレーヌは言っている。

「それが、もつとも民が死なずに済む道です」

ミレーヌが色々と諦めた顔をしていた。

「ただ、許されるならエリカは助けて頂戴。ユリウスは駄目でしょうけど、あの子はフレーザー家に嫁ぐから、温情を期待するわ」

「もつと早くに相談してくださいな！」

「相談したところでどうにもならないわ。公国戦の後から、こうなることは決まっていたようなものよ」

結局、リオンが王家の側に立つと宣言しても、周囲は付け入る隙があると考えてる。

ヴィンスも娘婿だから、説得を試みるだろう。

エリカを嫁がせようとしたのも、確固たる繋がりを求めたからだ。

リオンから正式にロストアイテムを奪うためには、その子供や孫に譲渡させるのが一番である。

「話すこともないわ。もう部屋を出なさい」

アンジェは外に出る。

すると、待っていたのはクラリスだった。

鉄壁の守護

王宮の屋上庭園。

そこに連れてこられたアンジェは、クラリスを見るのだった。

「何の用だ？」

「アンジェリカ、あんたリオン君の体調をどう思っているの？」

「しばらく休ませたい」

「無理よ。このまま次は国内で争うことになるわ。休んでいる暇なんて、私たちにはないのよ」

外の問題が片付けば、次は内側の問題だ。

「リオンは王国の盾になる。逆らう勢力に睨みを利かせる」

「それで済むと思っているの？」

アンジェは俯くのだった。

それで終わると思えなかった。

必ず馬鹿も出てくるだろうし、場合によっては王国を裏切り外国に寝返る勢力も出てくるだろう。

そうした敵と戦い続ければ、リオンの精神が保たない。

「アンジエ、本当は黙っておくつもりだったけど、取って置きの方
法を教えてあげるわ。もしかしたら、リオン君のメンタルを一気に
強く出来るわよ」

その情報にアンジエが飛び付く。

「何が望みだ？ 叶えられる望みなら、私は何だってするぞ」

「あまりがつつくと、足下を見られるわよ。 簡単な話よ」

クラリスの話を聞いて、アンジエは「そ、それでいいのか!？」
と驚くのだった。

学生寮に戻ってきた俺は、机の引き出しを開けて首をかしげてい
た。

「あれ？ おかしいな。ここにしまっていたのに」

『どうしました?』

「いや、薬がないんだ。見つからないから補充してくれ」

『嫌です。そもそも、私とクレアーレで全て回収しました』

「おい、あれがないと寝付きが悪いんだから、さっさと出せよ」

普段から薬の使用に口うるさいルクシオンだが、俺が疲れている時は黙って薬を用意してくれていた。

だが、今日に限っては強く抵抗する。

『薬の使用は控えるべきです。一度、本格的に医療カプセルで治療を受けてください』

「今度の連休でいいだろ。というか、今度の連休もバタバタしそうだから無理かな？」

クーデターは随分と呆気なく片付いたのだが、問題は事後処理だ。アンジェたちが手伝ってくれているが、俺も手を貸すべきなのだろう。

ルクシオンが赤い一つ目で俺を見ている。

「何だよ？」

『薬の代わりが到着しました。マスター、時に人肌が心を癒やしてくれるのをご存じでしょうか？』

「聞いたことはあるな」

人肌が恋しくなることはあるよ。

誰かに甘えられたら、どんなに幸せなことだろう。

いっそアンジェやリビアにママって言って抱きつき　いや、な

いな。

自分で考えて、ちょっと引いた。

やはり疲れているようだ。

『今夜はお楽しみですね!』

「おい、どうした?」

急に声を大きくしたルクシオンは、ドアを開けると外に出ていく。

代わりに部屋に入るのは、寝間着姿のアンジェとリビアだった。

「あれ? 二人とも、今日は一緒にお喋りでもしたいの?」

以前にもこんなことがあった。

どうせ寝られないなら、二人とゆっくり話をするのも悪くないだろう。

お風呂上がりなのか、二人とも頬が少し赤かった。

髪も少し湿っている。

アンジェが俺を真っ直ぐに見ている。

「リオン、私たちはどうやら考えが甘かったようだ」

「え? 何か問題でもあったの? すぐにルクシオンとクレアーレ

に相談を
「

ドアを閉めて鍵を閉めるリビアは、耳まで赤くしている。

「リオンさんの覚悟が出来るのを待っていましたけど、それだといつになるか分かりません。だから、私とアンジェで決めたいです」

覚悟？

いったい何のことだろうか？

もしかして、王位云々のやつだろうか？

「王様になるように説得しに来たのか？ なら遠慮する。今ですら辛いのに、これ以上の立場とかいらない。今だって、本気で逃げ出したいくらいで え？」

二人がゆつくりと俺に近付き、優しくベッドに押し倒すのだった。

「 え？ えっ！？」

リビアが寝間着のボタンを外した。

「アーレちゃんから色々と聞いてきました。お、男の人は、女性の胸が大好きだって」

それは人による！

いや、大好きだけど。大好きけども！

クレアーレの奴、リビアに何てことを教えているんだ！
あ
りがとう。

アンジェが俺の服を脱がせてくる。

「まったく、こっちはいつでも受け入れたというのに」

「
うい！？」

変な声が出てしまった。

え？　もしかして、これってついに来たのか？　来ちゃったのか？

「ふ、二人とも落ち着くんだ！」

だ、だが、俺は詳しいんだ。

こういう展開になると、きっと邪魔が入るに決まっている。

マリエとか、あの馬鹿五人とか！　きっとこのタイミングで　。

アンジェとリビアが、俺に顔を近付けてきた。

「もう何も考えるな」

「私たちに全部任せてください」

嘘だろ。

え、本当に誰も来ないの？

鉄壁の守護（後書き）

ルクシオン（ ）『ここから先はマスターのプライバシーです』

クレアーレ（ ）『ここはノクターンじゃないの。小説家になるうなの！』

若木ちゃん（ ）。「え？ 嘘！？ 今日はおしまいなの！？ いつもはもつとあるじゃない！」

ルクシオン（ ）『マスターのプライバシーは！』

クレアーレ（ ）『我々が守ります！』

若木ちゃん（#）。「ふざけんな！ もっとも大事なところでしょうか！ 見せなさい。あるんでしょう？ 原稿はあるのよね！
！ 警告覚悟で掲載させなさいよ！ 警告程度にビビって」

（ ）；y=（ ）・ ターン「けひよい！」

（ ）；y=（ ）・ ターン「にはちゅめっ！」

ルクシオン（ ）『……』
クレアーレ（ ）『……』

ルクシオン（ ）『……』
クレアーレ（ ）『……』

幸福

「兄貴いいい！」

男子寮の敷地内にある一軒家を目指すのは、泣いているマリエだった。

急に胸騒ぎやら、色々と事情があつてリオンに泣きつきに来たのだ。

「来月ピンチなの！ お金を貸し て？」

だが、リオンの家を守っているのは、完全武装のガーディアンたちだ。

屋根には蜘蛛型のロボットたちもいて、周囲を警戒している。

ドローンも数多く飛ばされ、厳戒態勢で警備をしていた。

『 マリエちゃん、どうしたの？ 』

「クレアーレ！ あ、あのね、兄貴を呼んで欲しいの。実は来月ピンチなのよ！」

明日でもよかったが、妙に胸騒ぎのするマリエは急いでリオンに会いたかった。

しかし、クレアーレが取り次いでくれない。

『マスターはお休みよ。明日にして』

「え？ でも、まだ二十時よ。兄貴なら絶対に起きているわ」

『あら、詳しいのね。でも、明日にして』

普段よりも冷たい態度のクレアーレに、マリエも意固地になる。

「何よ！ なら、無理矢理にでも押し通るわ！」

クレアーレを通り過ぎるマリエだったが、地面に何かが落ちる音が聞こえてくる。

その音に振り返ると、札束が落ちていた。

「あ、あんた、どういうつもり？」

『みんなの生活費を稼ぐって大変よね。その苦労、私はよく理解しているわ。だから、ここで戻るなら、このお金を拾っても何も言わないわよ』

つまり、お金を受け取って帰れという意味だ。

マリエはゴクリと唾を飲み込む。

（何だか兄貴に会わないといけない気がするけど、このお金は喉から手が出るほどに欲しい）

お金を稼ごうにも、クーデターでアルバイトも出来ない。

ダンジョンに入ること規制され、マリエは困っていた。

だが、リオンにも会いたい。

マリエの出した結論は、

「もう遅いし、迷惑になるから帰るわ」

札束を内ポケットに入れて、引き返すという選択だった。

『マリエちゃんのそういう素直なところ、私は大好きよ』

ただ、マリエは思う。

（うーん、何だか選択肢を間違った気もするけど、こいつらが兄貴に変なことはしないでしょから安心よね。明日、また兄貴に相談しようっと！）

リオンの家を目指すのは、マリエだけではなかった。

ふんどし姿に捻り鉢巻きのグレッグとクリスが、リオンを風呂に誘いに来た。

「バルトファルトの奴、最近疲れた顔をしているからな！ やっぱり、そういう時は風呂に限るぜ」

「ああ、バルトファルトのために一番風呂を譲ろう！」

風呂を丁寧に掃除して、そして湯を張った。

リオンを風呂に誘うために、二人はふんどし姿で走ってきた。

すると、ノエルが二人の前に立ちはだかる。

「はい、その二人は回れ右をしてお家に帰りなさい」

「む？ ノエルさんか」

クリスが眼鏡をクイツと押し上げる。

グレッグの方は、笑顔でノエルに事情を話す。

「バルトファルトがいるだろ？ 一緒に風呂に入るから呼んできてくれ」

ノエルの後ろには、ロボットたちが大きな盾を持って道を塞いでいる。

「リオンは寝ているから明日にきなさい」

クリスが譲らない。

「今が最高の状態なんだ！ バルトファルトに最高の風呂を味わってもらいたい！」

「オッケー、明日の朝ね。朝風呂ならリオンも喜ぶし、今日は二人でゆっくり浸かりなさい」

グレッグが怪しむ。

「何かあるのか？　もしかして、何か問題でも起きたんじゃないか！？　クリス、俺たちもバルトファルトに力を貸すぞ！」

「おうさ！」

警告を無視してリオンの部屋へと向かおうとする二人だったが、急に「はうつ！」と言い出して倒れてしまった。

その後ろには青い一つ目を怪しく光らせたクレアーレの姿がある。

『大人しく帰らないからこうなるのよ』

「クレアーレ、あんたやりすぎじゃない？」

『マスターの大事な時間を守るためよ。多少の犠牲は付きもののよ』

「それにしても、このタイミングで後から後から　　リオンも大変よね」

笑うノエルを見て、クレアーレは問うのだ。

『それより、ノエルはよかったの？』

「あたし？　　あの二人と一緒にというのは無理かな。別に二人は嫌いじゃないけどさ」

ポケットに手を入れて、ノエルは壁に背中を預けた。

「三番目は大人しくしておくわ」

『あら、嫌み？ マスターに抗議する？ それとも、明日にでも襲う？』

「馬鹿ね。そういう意味じゃないわよ。あゝあ、リオンが共和国に生まれてくれたらよかったのにね。そうしたら、一番を狙ったのに」

『それは駄目よ。私たちがマスターと出会えないもの』

違う場所。

そこにはジルクとブラッドの姿があった。

「バルトファルト公爵はお疲れのようです。ここは、私が選び抜いた茶器をプレゼントして喜ばせましょう」

いかにも安っぽい茶器を持っているジルクを見て、ブラッドは首を横に振っている。

「物で釣るなんて邪道だね。僕の手品でバルトファルトを笑顔にしてみせるさ」

手品の道具を持っているブラッドを見て、ジルクが目を細めた。

「君の下手な手品は、皆を笑顔にするのではなく笑われているのです」

「どういう意味だ！　というか、お前の方こそ反省しろよ。いつも偽物ばかり掴まされやがって！」

「偽物じゃありませんよ！　私が選り抜いた本物たちです！　私が本物と思えば、偽物だって私の中では価値があるんです！」

言い合っていると、いつの間にか小さなルクシオンのようなドロインたちに囲まれていた。

赤い一つ目が怪しく光っている。

「こ、これはいったい何事ですか？」

「君たち、バルトファルトの子分だよね？」

怖がる二人に対して、小さなルクシオンたちが呟く。

「排除」

「邪魔をする者は排除」

「殲滅」

あまり聞きたくないワードを呟く小さなルクシオンたちに、ジルクもブラッドも冷や汗を流す。

すると、ガーディアンたちがやってくる。

「な、何をするのですか！　　おふっ！」

「おい、ジルクに何を注射したんだ！　お、おい、待て！　僕は注

射が嫌　　はふっ！」

ぐったりする二人を、ロボットたちが運ぶ。

その様子を見ていたルクシオンが呟くのだ。

「　クリア」

ユリウスがリオンを訪ねるために廊下を歩いていた。

「バルトファルトが疲れているから、今日は俺のおごりで屋台に誘うか。いつも世話になっているから、お礼もしないといけないからな」

ユリウスのお小遣いは、元を辿ればリオンから出ている。

本人はそのことをあまり気にしていなかった。

そうして、一軒家の玄関前に来ると、ノエルが呆れた顔をしていた。

「何で今日に限ってみんな来るのよ」

ノエルを挟み、ルクシオンとクレアーレの姿もある。

『本能で何かを感じ取ったのでしょうか？』

『マスターのお邪魔虫って多いわね。排除しなくっちゃ！』

ちよつと物騒なことを言うクレアーレに驚きつつも、ユリウスはノエルに話を聞くのだ。

周囲を守っているロボットたちの数が多い。

「何かあったのか？　これだけ警戒する必要もないと思うんだが？」
物々しい警備に、何か事件でも起きたのかと考える。

だが、ノエルは手をヒラヒラと振って否定した。

「リオンは忙しいから、用があるなら明日にして。急用なら私が話を聞くから」

「そうか？　なら、明日にでも誘うか。実は、一緒に屋台に行こうと思っている」

「リオンと？」

「そうだ」

堂々と答えるユリウスに、ノエルは不思議そうな顔を向けていた。

そして尋ねてくる。

「あんたたち、リオンとの関係ってどうなの？　最初は決闘でボコボコにされたのよね？　敵とは言わないまでも、複雑じゃないの？」

その問いにユリウスも頷く。

「最初は嫌いだったさ。俺とマリエの仲を引き裂いたのがバルトフアルトだからな。だが あいつは、不器用だからな」

「不器用？」

「俺に目を覚まさせるために、自分が悪役になったりする。エリヤの時も同じだ。自分が損な役回りを引き受ける。後から気付いたが、あいつは不器用で たぶん優しい」

ノエルがその意見に賛成する。

「ま、そうよね」

「それに、あいつは何か隠している。俺たちに言えない何かがあると思うんだ」

「そうなの？」

「たぶんな。きっと、色々を抱え込みすぎているんじゃないか？俺は王子という重荷から解放されて気が付いたんだが、あいつは色々と背負い込みすぎだ」

ノエルが目を細めていた。

「元王太子がそれでいいの？」

「今は幸せだから、俺は満足している。ま、バルトファルトのおかげだな」

「 呆れるわ」

「 だろうな」

ユリウスは笑うと、今日はリオンを誘えないので帰ることにした。

ユリウスが去ると、ノエルは空を見上げた。

「 あいつら、馬鹿なのか頭がいいのか分からないわよね」

成績は優秀だ。

だが、行動が駄目すぎる。

『 マスターは、彼らを見て面白がっていますけどね』

「 そうなの？」

ルクシオンは頷き、そしてリオンが普段口にしなないことをノエルに教えるのだった。

『 口では色々と言いますが、基本的に八割は嘘です。マスターの言葉は信用しないでください』

「 そ、それって酷いわよね？」

クレアーレに同意を求めると、青い一つ目を頷かせていた。

『こいつと一緒に、マスターも捻くれているのよ。基本的に優しいと思うわよ』

ルクシオンが説明を続ける。

『マスターは一般人です。優しく、大きな決断には悩みます。その際に、必ず自分の負担を大きくしてでも、相手に尽くす傾向にあります』

ノエルは、それを何となく理解していた。

共和国でもそうだった。

「分かるよ。何でも出来て、頼りになって　頼り過ぎちゃうんだよね」

『おかげで、マスターは限界です』

クレアーレも普段のふざけた態度ではなく、真剣な口調で告げる。

『もっと自分勝手ならよかったのにね。変に社会性を重視するから、この状況になったわけだし』

ノエルは首をかしげる。

「それって悪いことなの？」

『その社会性の維持のために、マスターが色々と背負い込む必要があるのかしら？ 私たちにしてみれば、王国はマスターよりも価値が低いの』

ルクシオンがノエルに告げる。

『もしも、マスターが精神的に壊れてしまうようなら、我々は即座にこの国を滅ぼします』

「あ、あんたたち、何を言っているか分かっているの？ そんなの、リオンが望むわけがないわ」

『そうですね。だからこそ、我々も困っているのです。マスターが正気である内は、王国を滅ぼすことが出来ません』

翌朝。

俺は太陽に向かって両手を広げた。

「世界って美しい！」

そんな俺を見て呆れているのは、黒助を連れたフィンだった。

「朝からどうしたよ」

『こいつ、疲れてハイになったんじゃないか？ 休ませた方がいいと思う』

逆に心配されてしまった俺は、フィンの肩に手を置くのだった。

「俺、もう何も怖くない」

「そ、そうか。それは良かったな。それはそうと、今後について話を聞きたいんだが？」

フィンの悩みなど、ミアちゃん関連に決まっている。

「任せろ、すでにプランを用意している。エリカが言うには、主人公はダンジョンの地下三十階にある遺跡のような何かに触れると覚醒するそうだ」

「血が目覚めるってやつだな」

「ラスボスもないし、攻略対象もないからどうなるかと思っただけ、意外と順調だな。何も気にしなくて良いし」

「お前らは少し反省しろよ。攻略対象の男子が全滅したのは、お前にも責任があるからな」

「オスカルの件はすまなかったと思っている」

「ジェイクやアーロンの件をなかったことにするな！」

『相棒、こいつ最低だぞ』

三作目の主人公は、血が目覚めて皇族だという事実が判明する。

そして、そこから帝国が関わるようになってくるのだ。

本来なら、ラスボスの空と海の守護神のどちらかと戦うことになる。

ゲームなら、主人公が選ばなかった側を一作目の主人公たちが担当するのだ。

「ま、ミアちゃんに関しては、ダンジョンの遺跡に連れていくのも可能だけど、帝国に報告する必要があるだろ？ 定期的に春休みが良いんじゃないか？ これからバタバタするだろうし」

「そうだな。ミアも学園での行事を楽しみにしているし、タイミングは大事だな」

「授業もあるからな。覚醒すると、一度帝国に呼び戻されるんだってさ」

「まあ、皇族に復帰というか、皇族になる訳だからな。でも、それまでミアに我慢させるのか」

不満そうなフィンに、俺はマスクを渡すのだった。

「これは？ 何か、病院の呼吸器みたいで嫌だな」

「こいつを付けて呼吸すれば、魔素を吸引できるようになっている。苦しい時に使え。あ、これ詰め替え用ね」

小さなポンベを渡すと、フィンが安堵する。

「苦しい時にはこいつを使えば良いのか？ 助かる」

「一時的に症状を緩和するだけだから、外ではあまり無理をしない方がいいな。体を動かしたいならダンジョンに行けばいい」

「春休みまではこいつで乗り切るのか　分かった」

授業内容やら、色々な兼ね合いもある。

地下三十階に行くには、春休みの方が都合は良い。

フィンがお礼を言ってくる。

「色々とすまないな。恩に着る」

「別に良いよ。ミアちゃんはエリカの友達でもあるからな」

フィンも嬉しそうにしていた。

「そうだな。ま、ミアの場合は色々と面倒を見てもらっているだけだが」

「エリカも楽しそうだからいいんじゃないか？」

あの二人が仲良くしているのを見ると、俺もフィンも安心してしまふ。

悪役のいない学園生活というのは、山も谷もないが穏やかで楽しい。

「ところで、そのエリカちゃんの婚約式っていつなんだ？　予定通り夏期休暇か？」

「　冬休みだ」

「夏期休暇は無理だったか」

「クーデターの処理で忙しいからな」

正直、納得できない部分もある。

だが、色々と事情もあって、冬休みに婚約式をすることになった。

俺が二人の エリヤの後ろ盾になっていると示す必要もある。

王族にも参加してもらい、俺との関係が良好であるとも示すのだ。

はあ、政治って嫌だよね。

思い出

冬休み。

ミアはアルバムを開いていた。

ルクシオンが用意してくれたアルバムは、色がつきとても綺麗だ。

寮の自室で、写真を見てこれまでを思い出す。

「楽しかったな」

学園での生活がまとまっている。

リビアと一緒に勉強をしている写真もあった。

アンジエと一緒にドレスを買いにいった写真や、ノエルとダンジョンでお宝を見つけた写真もある。

夏期休暇前のパーティーでの写真では、フィンが大勢の女子に囲まれていた。

ドレスを着たミアの写真もある。

二学期には、文化祭やら体育祭の写真が多い。

文化祭での思い出は、マリエプロデュースの喫茶店だ。

ユリウスたちをはじめとした男子たちが、女子を接客するという変わった喫茶店だった。

スーツ姿のリオンが、凄く嫌そうな顔をして参加している。

フィンは少し緊張した様子だ。

ジェイクやオスカルの姿もある。

「色々あったな……本当に色々あったよね」

喫茶店に押し寄せる女子。

フィンは女子にもみくちやにされ、他の男子も同様だ。

それを見てリオンが笑っている写真もあったのだが、クラリスたち卒業生に囲まれたリオンが冷や汗をかいている写真もある。

アンジェとリビア、そしてノエルも出て来て女子たちと言い合いをしている写真もあった。

「あの時は怖かったけど」

もみくちやになる男子たち。

修羅場になるリオン。

それを見た名前も知らない青髪の男子が大笑いをしていた。

そして 次のページでは、ジェイクが他の男子たちとアーレを

かけて決闘している写真が出てくる。

遠い目をしたリオンとフィンが印象的だ。

「色々とあつたなあ」

ミアも遠い目をする。

「本当に色々とあつたなあ」

アーレ先輩が実は男だった。

だが、ジェイクは「それでも構わない！」と堂々と宣言した。

写真を見れば、頭を抱えているリオンやアンジェ。

フィンは両手で顔を覆っていた。

複雑そうな表情をしているユリウスの姿もある。

だが、ユリウスも自分のことがあるためか、最後には「応援するぞ」とジェイクに声をかけていた。

兄弟仲は、今までにないくらいに良くなったようだ。

（王国はこれで良いのかな？）

王族の男子が、二人揃って王太子の地位を蹴った気がするミアは少し不安になる。

ページをめくった。

体育祭では、リオンが賭け事で荒稼ぎをした写真があった。

エリカに冷たい目を向けられており、その後すぐに謝罪している。

ミアも大会に出場して、三位に入賞できて嬉しかった。

フィンがこれでもかと褒めてくれた写真は、ミアは照れて俯いている。

「修学旅行も良かったな」

大きな飛行船で向かった先は、リゾート地だった。

水着で並んだ女子たち。

サングラスをかけてシャツを着た柄の悪い男子たち。

ミアに声をかけてきた男子に、フィンとリオンが絡んでいる写真もあった。

リオンはその後、アンジェとリビア、そしてノエルに連れて行かれる写真もある。

沢山の楽しい思い出たち。

だが、一番はこれだ。

「夏期休暇の温泉は良かったな」

マリエとエリカ、そしてミアが温泉に入っている写真。

クリスとグレッグが、露天風呂ではしゃいでいる写真もある。

リオンとフィン、そしてマリエが、お米を食べて大喜びしている写真。

周囲がそれを不思議そうに見ている。

ミアも食べてみたが、初めて食べたのでよく分からなかった。

ページをめくれば、女性たちが怖い顔をしている写真がある。

アンジエがマリエの像に向かって、大きなハンマーを振りかぶっている写真。

リビアがそれを止め、自分はノミやカナヅチを持っている写真。

ノエルは魚釣りをしていた。

ミアがリオンと肩を抱き合った写真がある。

その次には、武器を持ったフィンにリオンが追いかけて回されていた。

次に、フィンがエリカと撮った写真がある。

その後は、お約束のように武器を持ったりリオンにフィンが追い回されている写真がある。

写真の中のフィンは、とても楽しそうにしていた。

「花火も綺麗だったなあ」

フィンと一緒に浴衣を着て、綺麗な花火を見ることが出来た。

沢山の写真があった。

「また、みんなで遊びたいな」

叶うかどうかは微妙だが、また楽しい学園生活を送れたら嬉しい
と考える。

ドアからノック音が聞こえてくる。

「はい」

相手はフィンだ。

ドアを開けたフィンは、婚約式に参加するためにスーツを着用し
ていた。

「ミア、そろそろ出発しよう」

「はい！」

今日はエリカとエリヤの婚約式の日だ。

婚約式の会場。

参列する人たちの中にいたのは、姉のジェナ　妊婦だった。

隣に立つオスカルが、俺に手を振ってくる。

「お義兄さん、この間のプロテインは最高でした！　おかわりを所望します」

「　お前、本当にそれでいいのか？」

ジェナが俺を睨んでくる。

「何よ？　文句でもあるの？」

オスカルは勘違いをする。

「ジェナさんは素敵な女性ですよ」

「プロテインの話だよ！　毎回、筋肉の話ばかりしやがって！　あと、その年齢で子供ってどうよ！？」

オスカルは笑顔で照れていた。

「両親は『よくやった！』と褒めてくれましたよ。確かに少し早いですが、跡継ぎが生まれてくれるのはいいことですからね。それに、個人的に楽しみですし。ただ、両親が『これでうちは安泰だ！』と大喜びしていたのが気になりますね」

ジェナが俺に耳打ちをしてくる。

「ほら、ジェイク殿下が王位を蹴ったじゃない？ あんたに近付けるから、義理の両親が大喜びしているのよ」

「義実家に迷惑をかけてないだろうな？」

「ゾラやメルセを見て、さすがに私も反省したわ。アレはないって思ったから、今後は慎ましく幸せに生きるの。だから、邪魔をせず、大事な姉を支援してね」

ジェナから視線をそらして、フィンリーを見た。

こちらを複雑そうな表情で見ている。

オスカルが手を振る。

「フィンリーさんもこっちに来てください」

止めるよ！ いたたまれないんだよ！

俺が逃げようとする、ジェナが俺の腕を掴む。

「ちょっと、逃げないでよ。私もちょっと悪かったと思っているんだから」

「ちょっと！？ お前、反省してないだろ！」

「いいから、フィンリーにも誰か紹介してよ。出来れば、オスカルよりも少し劣るくらいがベストね。ほら、家族のバランスってある

じゃない」

「お前はオスカルの前で一生猫をかぶっているよ」

フィンリーが来ると、オスカルがジェナのお腹を見る。

「もうお腹を蹴るんですよ。フィンリーさんも確かめてみますか？」

「う、うん」

ジェナのお腹を触るフィンリーは、どこか嬉しそうにしていた。

このまま姉妹が和解してくれることを祈るばかりだ。

「リオン、あんたも触ってみる？」

「いいのか？」

ジェナがそう言って、俺にお腹を触るように言うのだ。

「今から私の子を可愛がってもらうようにしないとイケないからね。あんた、甥や姪に甘そうだから」

「そ、そんなことないし」

視線をそらしつつジェナのお腹を触ると、元気よくお腹を蹴っていた。

何だろう。

命って凄いな。

正式な婚約を行う式典。

参列者は大貴族と関係者たちだ。

女神の前で結婚することを誓うだけだが、それでも貴族になると意味が大きくなってくる。

白いドレスを着用したエリカが入ってくると、リオンが右手で顔を隠して泣いている。

嗚咽が漏れていた。

「エリカ」

その隣では、マリエが大粒の涙をこぼしながら泣いていた。

「エリカアアア」

そして、その隣には号泣しながらハンカチを噛みしめているローランドの姿があった。

「エリカアアア！」

女性陣はドン引きである。

アンジェやリビアは恥ずかしそうにしており、ノエルの方は笑っ

てみていた。

怖いのはミレーヌだ。

微笑んではいるが、どこか冷たい気がする。

参列した貴族たちも困惑している。

エリカとエリヤが、女神の前で婚約を誓う。

すると、ローランドが涙を拭いながら言うのだ。

「エリヤ　もしも、エリカを泣かせるようなことがあったら、この小僧をお前にけしかけてやるからな！」

小僧というのはリオンだ。

その扱いに、リオンがローランドに抗議をする。

「どうしてお前の命令に従うんだよ、この仮病野郎。だが、エリカを泣かしたらその時はけしかけられる前に　俺が潰す」

マリエも同様だ。

「嫁いびりをしたら、リオンに泣きついて実家を燃やしてやるんだから」

エリカ可愛さに物騒な発言を繰り返す三人を見て、周囲は苦笑いをしていた。

アンジェがリオンの耳を引っ張る。

「そこまでしておけ。リオン、無事に婚約式も終わったんだ。お前には仕事もあるだろ」

この婚約式　というよりも、エリヤの後ろ盾になっているのはリオンである。

色々と段取りをしたのはアンジェだが、リオンにも仕事があった。

参列者などへの挨拶だ。

「挨拶苦手なんだよね」

「お前の場合は、嫌がって避けているだけだ。ほら、行くぞ」

リオンが連れて行かれる。

エリカは婚約式が終わると、着替えのために控え室にいた。

リビアとノエルの他には、侍女たちがいて片付けを行っている。

「エリカ様、綺麗でしたよ」

リビアがそう言うと、鏡の前に座っているエリカは微笑むのだ。

「ありがとうございます」

ただ　どこか悲しそうな顔をする。

それを見逃さないのはノエルだった。

「何か気になることでもあった？」

エリカは首を横に振ると、黒髪が揺れるのだった。

「違います。何だか夢のようだったので」

エリカにしてみれば、自分の晴れ姿をマリエにもミレーヌにもそして、リオンやローランドにも見せることが出来た。

ただ、とても申し訳なく思うのだ。

エリヤのことを考えれば、婚約式などしない方が良かった。

リビアが手を合わせて喜んでいる。

「白いドレスっていいですね。とても特別な感じがしますから」

「あたしも着てみたいな」

そう言うノエルに、リビアが笑顔を向ける。

「卒業式後に、婚約式が出来るじゃないですか」

リオンとノエルの婚約式だ。

エリカは思う。

（それまでに、私の命は持つか？ 難しいかな）

あの乙女ゲーには大事な設定がある。

三作目をやりこんだエリカにしか分からない設定だ。

リオンもマリエも、そしてフィンも知らなかった。

気付き難い設定であり、ほとんど表に出てこない裏設定だ。

本来、エリカの立場は悪役であり、最終的に追放されてしまう。

だが、それで終わりではない。

終わらないのだ。

エリカは黙っていたのを申し訳なく思う。

穏やかな空間で、急にドアが開くと侍女たちが背筋を伸ばしてお辞儀をする。

入室してきたのはミレーヌだ。

「 エリカと二人きりにさせてもらえるかしら。親子だけで会話がしたいの」

そう言われて、リビアもノエルも拒否できずに部屋を出ていく。

エリカがミレーヌと二人きりになる。

ミレーヌは言うのだ。

「エリカ、貴女は私の期待以上の働きをしてくれたわ」

「母上？」

ミレーヌがエリカの後ろから抱きつくと、鏡越しにエリカを見ていた。

「婚姻を結ばずに、これだけの成果を出せたのは凄いわよ。バルトファルト公爵を手玉にとって、自分は大好きなエリヤ君と結婚も出来て 羨ましいわ」

女のドロドロとした感情がそこにあった。

娘への愛情やら嫉妬が入り交じった顔を見て、エリカは察する。

自分を必要以上に強く抱きしめるミレーヌの腕に、手を置いて優しく語りかけるのだ。

「母上のおかげです」

「貴女の実力よ。私が欲しても手に入らないものを、貴女は袖にしても許される。どんな手を使ったのか、是非とも聞いておきたいわね。もう、いつ会えなくなるのか分からないもの」

「母上、私は何もしていません」

「魅力がある娘を持って、母として嬉しく思うわ。でもね、エリカ

女として、私はとても悔しいのよ」

涙を流すミレーヌは、娘に何を言っているのだという後悔が顔に出ていた。

エリカはミレーヌの手を優しく抱きしめる。

「母上は間違っていますでした。ただ、リオンさんは、私を望んでいなかったんです」

「羨ましいわ。それだけアンジェたちを愛していたのね。私は愛されなかったのに」

「私は母上を愛していますよ」

そう言われて、ミレーヌは腕の力を弱めるのだった。

「ごめんなさいね。晴れの日に酷い姿を見せてしまったわ」

「いえ、母上の苦労を考えれば、これくらい平気です」

エリカは、ミレーヌは立場的に政治を優先する傾向が強いと理解している。

それは間違っではないない。

何しろ、政治を考えるなら、間違っているのはリオンたちだ。

ただ、個人的な意見を重視するなら、ミレーヌは間違っていただけだ。

（女尊男卑　元の世界なら、男親が娘のためを思つて婚約者を決めるようなものかな？）

ミレーヌが涙を指で拭う。

「エリカ、貴女は幸せになりなさい」

エリカは、貴女“は”というところに、ミレーヌの覚悟を感じるのだった。

「母上、あ、あのね！」

リオンに頼めば　そこまで声が出そうになって、飲み込んでしまふのだった。

（駄目。伯父さんには頼れない。これ以上は駄目）

そこに、慌ただしく乱入してくるのはリオンだった。

部屋の外で待機していた侍女たちが止める声を無視して、乱暴にドアを開け入室してくるとエリカに近付いてきた。

「エリカ、大丈夫か？」

「え？　な、なんで？　挨拶があるって」

「クレアーレがお前のピンチを知らせてくれたんだ。挨拶はアンジエに任せてきた」

自分を心配しているリオンに困惑するエリカは、鏡に映る冷めた目をしているミレーヌを見た。

エリカを心配するリオンを見て、愛憎入り交じった顔をしている。

（どうして伯父さんは）

前世の伯父と、今世の自分の母の關係にエリカは悩むのだった。

エリカがミレーヌを気にしているのを察したリオンは、そちらへと向き直るのだった。

「ミレーヌさん、どういいうつもりですか？」

「娘の晴れ姿を見て、声をかけたくなっただけよ。それにしても、随分とエリカを気に入ってくれたのね。嬉しいわ」

張り付けたような笑顔のミレーヌに、リオンが距離を詰めた。

壁際まで追い込むと、互いの顔が拳一つ分程度の距離まで近付く。

（お、伯父さん？）

「あんた、娘を俺に押しつけてどうしたかったんだ？俺はそんなことを望んじやいなかった」

少し慌てるミレーヌだが、すぐに顔を引き締めて言い返す。

「もっとも血が流れない方法を、公爵も選んでくれると思っていたのよ。私の勘違いだったわ。そこは認めましょう」

ミレーヌがリオンに愛娘を託した理由だが、政治的な意味合いもあるが　それ以上に、自分が出る精一杯のお礼でもあった。

アンジエには申し訳なく思う気持ちもあつたのだろうが、アンジエの実家はレッドグレイブ家だ。

リオンを奪われてしまえば、自分たちは抵抗すら出来ないのだ。

だから、妥協できるラインとして、エリカを正妻にしてアンジエを側室にするという考えを提示したのである。

リオンがミレーヌの胸元に、人差し指を押しつける。

「あんたの勘違いはそこじゃない！　俺が欲しかったのは　エリカじゃない。あんただよ」

「　え」

ミレーヌの表情が徐々に崩れて、耳まで真っ赤にしまった。

「な、何を言うの！　私は人妻で、貴方とは歳の差があるのよ！　エリカが相応しいと思ったから！」

そもそも、ミレーヌがリオンに嫁ぐなど不可能だ。

不可能と言うよりも、選択肢にもならない。

リオンが微笑む。

「関係ない。俺が欲しかったのは ミレーヌさん、貴女だ」

「 リオン君」

エリカは思う。

（私は一体何を見せられているんだろう）

乙女の顔をするミレーヌを残して、リオンは部屋を去っていく。

「後は任せてください。俺が何とかしますから」

ミレーヌは、頬に手を当てて頷くのだった。

エリカはその気持ちを察する。

（母上、能力はあるから、今まで頼られる側だったのよね。だから、頼りになる男性がいると弱いのだ）

今日のリオンは見ていて別人のようだ。

夏期休暇前から、どこか一皮むけたような気がする。

というか、調子に乗っていた。

ミレーヌがエリカを見て、恥ずかしそうにしていた。

「な、なんだかごめんね、エリカ」

とても嬉しそうな母上の顔を見たエリカは、両手で顔を覆うのだ

った。

何しろ、今世の母親が前世の伯父に口説かれて、嬉しそうにしているのだ。

しかも、今世の伯父は、まだ十代だった。

複雑すぎる事情に、エリカも苦悩する。

（伯父さんが、何を考えているのか分からない）

新人類

『はゝあ、ゴタゴタしていたから、これの設置が遅れたわね』

クレーアールが設置しているのは、大型のレーダーのような物だった。

イデアルから回収した装置を整備し、ようやく設置できるようになった。

随分と酷く損傷しており、整備に時間がかかったのだ。

作業用のロボットたちが、クレーアールに抗議している。

『遊んでいたから？ 違います。ちょっと実験を楽しんでいただけですよ。マスターも認めてくれました』

そうしている間に装置が稼働する。

すると、クレーアールは青い瞳を光らせる。

『嘘でしょ』

作業ロボットたちも静かになり、そしてしばらくすると慌ただしく動き出した。

『イデアル、あんたが恐れたのってまさか』

ダンジョンの地下三十階。

フィンがどうしても急かすから、俺たちはミアちゃんのイベントを消化するべくダンジョンの遺跡部分に来た。

大きな石版があり、文字が淡く光っている。

こいつは、王国では目印代わりだ。

貴族はこの石版がある場所まで来られないと、一人前と認められない。

リビアが地面に座り込む。

「や、やっとつきました」

その姿にアンジェとノエルが、違った反応を示す。

「リビア、よく頑張ったな」

「いや、普段から運動不足なだけよね？」

ここまでナビゲートしてくれたルクシオンが、石版を見て不満そうにしている。

『新人類が使っていた文字ですね』

「読めるのか？」

『“我々は勝利する”と書かれています。それ以外は、劣化して読めなくなっていますね』

フィンの隣に浮かんでいる黒助が、ルクシオンを煽っていた。

『勝ったのは俺様たちだからな!』

『今なら負けませんか?』

『今やつても俺様たちが勝つよ!』

フィンはそんないつもの光景を無視して、ミアの肩に両手を触れている。

「ミア、大丈夫か?」

『はい! もう、調子がいいくらいです。えっと、これに触るんですか?』

俺たちが頷くと、ミアちゃんが石版に触れるのだった。

エリカが言うには、これでミアちゃんは覚醒するらしい。

ミアちゃんが石版に触れると、文字が強く輝き出す。

「綺麗だな」

『そうですか?』

不満そうなルクシオンと違って、リビアは興奮していた。

「凄い。ミアちゃんに反応しているような　ミアちゃん？」

だが、様子がおかしかった。

ミアちゃんが苦しんでいる。

「ミア、おい、どうしたんだ、ミア！」

フィンが慌ててミアちゃんを抱きしめると、涙を流していた。

「騎士様、私ね　急に胸が苦しくなっただんです」

「息が出来ないのか？　な、なら、すぐにマスクを！」

「違うんです。悲しくて、そして辛くて　凄く悲しい声が聞こえてきたんです」

その言葉に、黒助が急に周囲を見渡しはじめた。

『この感じは、まさか』

ダンジョンが僅かに振動している。

揺れるダンジョンが落ち着き出すと、ミアちゃんが立ち上がるのだった。

「声が聞こえます」

そう言って、倒れるミアちゃんをフィンが抱きしめる。

「ミア？ ミア！」

俺はすぐにフィンに声をかけるのだった。

「馬鹿、予定通りだ。すぐに外に運ぶぞ」

「わ、分かっているが、様子がおかしかった。エリカちゃんが言っていた内容と少し違わないか？」

エリカが言っていたのは、ミアは覚醒すると意識を失い倒れる。

本来なら攻略対象の男子たちに運び出され、そこから特殊な能力に目覚めるらしい。

これまでの病弱設定が消えると言っていた。

「細かい部分まで覚えていなかったただじゃないか？ 息はあるし、安定もしている。すぐに運び出してやるう」

「あ、ああ」

フィンがどうにも落ち着かなかった。

それは俺も同じだ。

妙な胸騒ぎがしてくる。

神聖魔法帝国。

皇帝であるバルトルトは、帝国の大地の下　海の中にいた。

発掘した海中でも活動できる飛行船に乗り込み、目指したのはチートアイテムである【アルカディア】の眠る場所だ。

フィンからの報告で、ミアは今日にでも覚醒すると聞いていた。

だから、待っていたのだ。

豪華な椅子に座っていると、目の前の光景に家臣たちがざわつきはじめる。

「皇帝陛下！」

「ご覧ください、遺跡が！」

「信じられない」

バルトルトは立ち上がる。

浮かびはじめた遺跡を追いかけるように、飛行船も浮上していく。

「機動要塞“アルカディア”　ミアの血で無事に目覚めてくれたか」

ミアの覚醒と同時に目覚めた兵器。

事前に、ミアの血を採取して遺跡に登録しておいた。

その兵器こそ、新人類の砦。

旧人類が恐怖し、人工智能たちが何とか沈めた凶悪な兵器だった。

魔素を作り出し、地球を死の星にした元凶である。

「陛下、周辺の魔素の濃度が急上昇しています！」

「モンスターが発生します！」

「急いでここから離れます！」

飛行船を操る部下たちの声を、バルトルトは一喝する。

「不要だ。このまま遺跡の近くにいればいい！」

叫ぶと咳き込むバルトルトに、周囲の者たちが駆け寄ってくる。

だが、手で制す。

「問題ない。むしろ、今は少し楽になったくらいだ」

ミアと同様に、バルトルトも最近は体調を崩しはじめていた。

その理由も理解している。

（前世の妹が熱中していたゲーム知識が、まさか役に立つとは思わなかった）

浮上するアルカディア。

楽園と名付けられたその要塞は、六角形の台座の上に城が存在し

ている。

それぞれの面に、赤い目が描かれている。

（これで、帝国の民は救われる）

バルトルトは宣言する。

「我が娘 ミア ミリアリス・ルクス・エルツベルガーを王国より呼び戻せ」

家臣が目を見開く。

「へ、陛下、ミア様は皇族に関わらせてはならぬと、ご自身で仰っていたではありませんか」

「状況が変わった。ミアは我ら帝国民の女帝となる存在だ」

（そう、我ら新人類の血が強い帝国民には、覚醒したミアの力が必要なのだ）

海面から浮上し、魔素を周囲に放出しはじめる機動要塞。

その周囲にはモンスターたちが出現するも、バルトルトたちを襲おうとはしなかった。

「これはいい」

バルトルトは、外の空気が入ってくるとこれまで以上に力がわいてくるを感じる。

目を閉じる。

（小僧　フィン、すまなかったな。お前には伝えられなかったよ）
フィンの報告から、王国に住む転生者と親しいという内容があった。

だから、伝えることは出来なかった。

（これは生存競争だ。我ら新人類と、旧人類の血を色濃く残した者たちとの　　）

帝国の民は新人類の血が濃い。

皇族は更に濃かった。

そして、王国の民は　旧人類の血が濃いのだ。

旧人類と新人類の戦いは、まだ終わってなどいなかった。

二週間後。

フィンを迎えに来た帝国騎士から事情を聞き、冷や汗を流していた。

「　何だと？」

目の前の若い騎士は、帝国の序列第三位の騎士だ。

帝国で三番目に強い騎士。

いわゆる天才騎士だ。

若くして剣聖の地位に就いた美形の少年だ。

少し生意気なところはあるが、フィンを慕っている。

「貴方の護衛騎士の任を解くそうです。ミア様は皇族に正式に復帰され、継承権第一位になりますからね」

「ふざけるな。ふざけるなよ！ どうしてミアが帝位を継ぐんだ！？ あの子は女の子だぞ！ 他の皇族が黙っていないはずだ！」

騎士は困った顔をする。

拗ねたような顔で説明するのだ。

「僕も詳しくは知りませんよ。ただ、皇帝陛下は皇族の方たちを説得しました。僕だって意外ですけど、皇族の方たちの大半が認めましたからね。一部は条件付き賛成です」

帝国からの使節団。

手紙を出した時期を考えても、あまりにも来るのが早かった。

（あの糞爺、何を考えていやがる！）

「ミアは、留学先に戻ってこられるのか？」

「先輩、分かっていますね。もう、留学なんてさせている暇はないんです。ミア様には後継者としての教育が待っていますから。それに 陛下は王国と距離を置くつもりですよ」

フィンが驚く。

「何だと？」

「大使館も引き上げます。僕たちが人員を連れて帰りますから」

「お、お前、それがどういう意味か分かっているのか？ 帝国は王国を見限ったのか？ 王国が内乱状態になると思っているなら間違いだぞ。リオンがそんなことをさせるわけがない」

実際、今はリオンが王国を守っている。

内乱にはなっていないかった。

貴族たちが何を考えているのかまでは分からないが、王国はここ数ヶ月平和だった。

「王国の外道騎士ですか。僕としては、王国の次期剣聖候補が気になっていたんですが、今は落ちぶれたみたいですね。おっと、話が逸れましたね。先輩、陛下のご命令ですよ」

騎士から書状を手渡され、受け取り乱暴に開くと内容に驚いた。

「何て書いてあるんです？」

内容は目の前の騎士も知らないようだ。

そこには『ミアのために今は従って欲しい』と丁寧に書かれていた。

「戻れと書いてあるだけだ」

「先輩は陛下のお気に入りですからね」

「そんなんじゃない」

「そうですか？ でも、周りから見れば、特別待遇だと思いますよ。ま、僕は先輩の実力を認めているので、別に問題ありませんけどねでは、失礼します」

騎士が部屋を出ていくと、フィンは手紙を握りつぶすのだった。

「何だよ。ちくしょう」

手紙の内容に、怒りのぶつけ先がなくフィンは涙を流した。

そこには『王国と争うことになる。旧人類の兵器には注意せよ』と書かれていた。

ブレイブが姿を見せる。

『相棒 先手必勝だ。ここでリオンをやれ』

その言葉に目を見開く。

「黒助、お前は自分が何を言っているのか分かっているのか？」

睨み付けるが、ブレイブは譲らなかった。

『相棒がミアを助けたいなら、あいつは必ず敵に回る。戦場であいつの相手をするな！ 俺様でも 相棒やミアを守り切れる自信がない。だから、相棒 今ここで決断しろ。あいつらもすぐに気が付く。そうなれば、リオンが相棒を殺しに来る！』

自分を心配するブレイブを前に、フィンは俯くのだった。

「分かっているんだよ。あいつをここで倒すのが、正解だって分かっているんだよ」

帝国からの使節団が乗り込んできた日。

ルクシオンが持ち込んだ情報に、俺は愕然としてしまった。

「エリカの体調が崩れた？」

同時に持ち込まれた情報は、新人類の凶悪な兵器が目覚めたという事実だ。

『魔素の濃度が急上昇しています。復活したのは間違いありません。データからするに、完全な状態ではないようです』

「そうか」

『マスター、ご決断を』

「駄目だ。ミアちゃんは殺せない」

『目覚めた“アルカディア”のマスターはミアです。間違いありません。私とクレアーレで既に調査済みです！』

ミアちゃんが覚醒した日に、アルカディアという兵器が蘇った。

魔素を大気中にばらまき、そのせいでエリカは再び体調を崩してしまった。

『攻撃許可を求めます』

「兵器の方を潰す」

『無理です』

ルクシオンがいつになく余裕がなかった。

『アルカディアを潰すために、過去に我々は大艦隊を失いました。それでも、沈めることしか出来なかったのです。破壊できなかったのです』

過去のデータから、ルクシオンは無理と判断したようだ。

ルクシオンよりも戦闘に特化した戦艦も多く、今の俺たちよりも戦力は充実していた。

しかし、万全の態勢で戦っても 相打ち。

旧人類も新人類も、決定打に欠ける状態になり、そこからは互いに血で血を洗う戦いが続いたようだ。

『ブレイブも既に気が付いているはずですよ。あちらが先にマスターたちを攻撃する前に、先制するべきですよ』

完全ではないとはいえ、ルクシオンでは勝てないと判断したらしい。

「手を取り合える可能性は？」

『ありません。これは生存競争です。今まではバランスが取れていたのです。そのバランスを崩したのは 我々ですよ』

聖樹の暴走でバランスが崩れた。

そのせいで、帝国側では苦しむ人が増えたらしい。

データが少なかった。

まさか、帝国民が新人類側の血が濃いなんて思わなかった。

逆に、王国側は旧人類の血が濃いようだ。

ミアちゃんは新人類の血が覚醒し、エリカは旧人類の先祖返り。

元から相容れない存在だったのだ。

「一緒に生きていく方法は？」

『ありません。どちらかが、窮屈な暮らしを強いられることになるでしょう。どちらもそれを認められないはずです。マスター、これはエリカだけの問題ではありませんよ』

「どっという意味だ？」

『王国民をクレアーレが調査しました。結果、旧人類の血がより濃くなっているそうです』

これから生まれてくる子供たちは、そのように旧人類の血を復活させていくらしい。

ジェナのお腹の中にいる子供を思い出した。

そして エリカの笑顔が思い浮かぶ。

「そうか。聖樹のある島ならどうだ？ 聖樹は魔素を吸うんだろ？」

『聖樹の成長速度を考えると、全てを助けるのは不可能です。同時に、帝国は聖樹を見つけて焼くはずですよ』

自分たちにとっては損にしかないから、見つけたら伐採するよな。

「何だよ、また詰みか」

『攻撃の許可を。今なら、まだ間に合います。アルカディアの復活

と同時に、我々の仲間も目を覚ましています。ミアを殺害後、機能を停止したアルカディアを今度こそ破壊します』

俺は手で顔を隠して笑うのだった。

「最初から敵対する運命だったわけだ。笑うよな。どうして」

迷っている自分が情けない。

イデアル　そうか、お前はこんな俺を頼れないと判断したのか。

『マスター！』

ルクシオンの赤い一つ目が強く光った。

「ルクシオン、命令だ」

リオンの選択

王都近くに浮かぶ港。

帝国の使節団を見送りに来た俺は、フィンと向かい合っていた。

黒助が俺を警戒している。

『相棒、本当に良いんだな？』

そして、ルクシオンも同様だ。

『マスター、貴方は選択を間違えた』

互いにチートアイテムが五月蠅くていけない。

俺はフィンに肩をすくめて見せた。

「ま、色々と言いたいことはあるだろうが、次に会う時はお互いに敵同士だ。負けてくれてもいいんだぞ」

俺の軽口に、顔色の悪いフィンが返してくる。

「言っている。まあ、俺が勝ったら、助命嘆願くらいしてやる」

手を差し出す。

フィンが力強く握ってきた。

「　　すまない。俺は、これだけは譲れない。お前の提案は受けられない」

「そうか。　　分かっていたよ」

帝国に魔素を供給する技術を提供すると持ちかけた。

だが、フィンの決断は変わらなかった。

技術提供をしたところで、ミアちゃんは一生を病院のベッドの上で過ごすことになる。

ルクシオンたちでもそれが限界だった。

それを、フィンは受け入れられない。

受け入れられるわけがない。

前世の妹さんのことを思えば、絶対に阻止すると分かっていた。

「　　楽しかったよ。嘘じゃない。お互い、何も知らないまま楽しく過ごしたかったな」

「そうだな」

フィンと話をしていると、ミアちゃんがやってくる。

「あ、あの、公爵様！」

「何かな？」

笑顔で対応する。

ミアちゃんは事実を知らないからだ。

そんな彼女に、冷たい態度を見せられなかった。

「え、えつと、エリカ様のご病気ですけど、大丈夫ですよね？」

「ああ、問題ないよ。ルクシオンたちがすぐに治療してくれる」

「よかった。慌ただしく帰るので、ろくにご挨拶も出来なくて不安だったんです。せつかく、お友達になれたのに」

近付かせるべきではなかった。

せめて、この子が酷い性格をしていていれば、こんなに悩まずにいられたのだ。

「エリカにはちゃんと伝えておくさ。 元気でな」

「はい！」

満面の笑顔を見せるミアちゃんが、眩しくて 憎かったよ。

もっと腹立たしい奴なら良かったのにね。

少年騎士がミアに声をかける。

「ミリアリス殿下、出航のお時間です」

「は、はい！ えっと、公爵様 いえ、リオンさん、今までお世話になりました！」

笑顔で手を振るミアちゃんに手を振っていると、フィンが俺に背中を向けてくる。

「リオン、さよならだ」

「ああ、さようなら」

俺は二人を笑顔で見送った。

王宮の屋上。

車椅子に乗ったエリカを外に連れ出したのは、マリエだった。

「今日は凄く天気が良いわね。 エリカ、ミアちゃんたち、もう戻ってこられないんだって。 せつかく来年も遊べると思ったのに残念よね」

以前よりも顔色が悪いエリカは、マリエに笑顔で答える。

「母さん、卒業後も遊ぶつもりだったの？」

「留年したい気分よ。 エリカと一緒に学園生活が送れるなんて楽しいわ。 でも、どうして急に体調が崩れたのかしらね？ クレアーレ

も詳しいことは教えてくれないし」

エリカは理由を知っていた。

「どうしてだろうね」

（伯父さんは気付いているだろうけど）

「エリカ、苦しくない？ 兄貴に頼んで、また医療カプセルを使わせてもらう？」

「大丈夫。入院生活には慣れているから」

老後のほとんどは病院生活だった。

働き終わったら、そのまま体調を崩したのだ。

その後は、ずっとベッドの上だった。

（きっとこれは神様がくれた幸せなんだと思う。だって、母さんと伯父さんにも会えて、大事にしてもらえたから）

エリカにとってはご褒美のような毎日だった。

嫌なこともあったが、今はとても幸せだった。

（私一人がいなくなれば、何も問題なくなる。それでいい。それがこの世界の流れだから）

エリカが空を見上げると、遠くに帝国の使節団の飛行船が見えた。

外に出て、しばらくその場に待機している。

「ミアちゃんたち、何かトラブルかしら？」

「どうかな？ 外交官さんたちも引き上げるから、戸惑っているのかも」

「何か慌ただしかったわよね」

二国間はこの出来事もあって、緊張状態になっている。

それをマリエは気が付いていなかった。

屋上のドアが開き、リオンが顔を出す。

エリヤの姿もあった。

「エリカ、公爵がお見舞いに来てくれたよ」

どこか戸惑っているエリヤの後ろでは、リオンが張り付けたような笑顔をしている。

（ 伯父さんに最後まで迷惑をかけちゃったな ）

マリエが車椅子を押して、リオンに近付くのだった。

「ちょっと、何だか雰囲気怖いんですけど。エリカは病人なんだから、苛々しているなら後で あ、兄貴？」

リオンが拳銃を取り出すと、マリエを無視してエリカに話しかける。

「悪い子だ。俺を騙していたな？」

エリカは頷く。

「ごめんなさい。でも、知ったら、止められましたか？」

「お前は本当に悪い子だ。いったい誰に似たんだか」

自分の命と帝国民の命。

天秤にかけるまでもない。

エリカは旧人類の血が色濃く出た先祖返りだ。

事実を教えてしまえば、リオンがどう動くか予想できなかった。

（私一人が犠牲になれば、全て丸く収まる）

あの乙女ゲーの三作目をクリア後に、エリカはネットで情報を検索した。

そこに書かれていたのは、登場する兵器や世界観などの記事だ。

実は旧人類と新人類の争いが過去にあったと書かれ、兵器は両者が残した負の遺産だった。

意外にもシリーズが続き、その設定が引き継がれていたようだ。

そして、エリカはミアと対立する旧人類の血が濃い人物だった。
ミアを嫌う理由に「旧人類と新人類の因縁を盛り込みたかった」と書かれていたのだ。

ゲーム中には出てこない設定だ。

「結果的に良かったと思っています。お二人に事実をおはなしすれば、どうなったか分かりませんかから」

リオンが帝国を襲撃したかもしれない。

それだけは駄目だ。

「個人的には、お前の優しい気持ちは評価するよ。だけど、これは予想できたか？」

リオンは銃口をエリカに向けた。

エリヤが慌て出す。

「あ、兄貴！」

マリエも同様だ。

エリカの前に出て手を広げた。

「何を考えているのよー！」

リオンは真剣な目をしている。

「退け。全てを解決する方法だ」

リオンの行動にエリカは考える。

（あちらにも転生者がいるようだし、もしかしたら私の殺害が戦争回避の条件なのかな？　だったら、ここまでかな）

帝国は、リオンがエリカを可愛がっていると知っている。

このまま刃向かってくるのが怖いために、王国にエリカをどうにかするように圧力をかけたのかもしれない。

リオンの事だ。

戦争を回避するために、エリカの命を奪うことを決断したと考えた。

（最後まで伯父さんに迷惑をかけちゃうな）

フラフラしながら、エリカはそう考えた。

「　いいですよ。貴方に撃たれるなら、それも悪くありません」

マリエがエリカに振り返った。

「な、何を言っているのよ！　そんなの駄目に決まっているじゃない！」

だが、マリエが振り返った直後にリオンが口を開く。

「エリカ、お前は悪い子だよ。だが、俺はもっと悪い奴なんだ」

「いえ、伯父さんは優しい」

言い終わる前にリオンが引き金を引くと、弾丸がエリカに当たった。

血が噴き出し、マリエの顔に血が飛び散る。

マリエは、それを指で触れて震えていた。

すぐにエリカの撃たれた箇所を手で塞ぐのだった。

（思ったよりも痛くない）

「エリカ！ エリカアアア！」

（ごめんね、母さん。こうなるって最初から分かっていたんだ。エリヤもごめんね。それに伯父さん 伯父さん？）

リオンは薄らと笑っていた。

エリカはその笑みが、まるでリオンが壊れてしまったように思えるのだった。

帝国の使節団。

飛行船の甲板で、手すりに掴まっていたフィンは屈み込む。

『相棒、あいつらの監視はない。リオンは約束を守ったぞ』

「そうか」

涙を流すフィンは、リオンに感謝する。

「ありがとう、リオン。　ごめん。本当にごめん」

ブレイブが悲しそうな目をする。

『俺様は、相棒は間違っていると思う。でも　俺様は最後まで相棒の味方だ』

「悪いな、黒助。俺みたいな馬鹿な相棒に付き合わせちゃった」

『ブレイブって呼んでくれないが、俺様にとっては最高の相棒だ。今までの使い手の中でも、最高の相棒だ。俺様が保証する』

ブレイブは、今まで色々な所持者がいた。

旧人類と戦っていた新人類をマスターに持っていた。

その後、使い手が代わり、戦争が終わると眠っていた。

そこを掘り起こしたのがフィンだ。

『俺様を相棒として扱ってくれたのは、相棒だけなんだ。だか

ら、俺様だけは最後まで付き合っぜ』

「悪かった。そうだな。これは俺が　俺たちが決めたことだ。泣いてばかりはいられないな」

『相棒、俺様でもあいつに勝てる可能性は五分だ。それを忘れないでくれ』

「ああ、分かっている」

フィンはミアを守るために、王国では無理が出来なかった。

リオンのテリトリーで戦うのは不利だ。

フィンは見逃してもらえたのだ。

「　　リオン、すまない。俺は、お前とは手を組めない」

ブレイブがフィンに知らせる。

『相棒、ミアだ』

フィンが涙を拭う。

「騎士様、ブー君！　　　あ、あれ？　　騎士様、もしかして泣いていたんですか？」

フィンは無理に笑顔を作るのだった。

「いや、目にゴミが入っただけだ」

「嘘はいけませんよ。目の周りが赤いですからね。騎士様も、やっぱりお別れは辛いんですね」

「　　そうだな」

「大丈夫です。きっとまた会えますよ。そうだ！　今度は帝国にご招待すれば良いんです。公爵様たちや、エリカ様を誘いましょう」

無邪気なミアを前にして、フィンはどうしたら良いのか分からなくなっただ。

「ミアは　　エリカちゃんと仲良くしたいか？」

首をかしげるミアは、何故当然のことを聞くのかという顔をしていた。

「当たり前じゃないですか。えっと、学園に通えなくなりましたけど、私は新しい目標が出来ましたよ。王国との間で友好の架け橋になるんです。お姫様だから、それくらい出来ますよね？　ね！？」

期待のこもった視線を向けてくるミアに、フィンは頷く。

「　　そうだな。いつか　　そうなるといいな」

傷だらけ

血だらけで青い顔をしているエリカを見るマリエは、傷口に手を当てて治療魔法を使っていた。

「何だよ。なんで反応しないのよ!」

マリエが涙を流しながら叫ぶ。

無駄に鍛えてきた魔法が、死にそうになっている娘に効果がない。
うまく扱えなかった。

そんなマリエの背中に、リオンが声をかけてくる。

「無駄だ」

振り返り、マリエはリオンを睨み付けるのだった。

マリエの形相に、エリヤは「ひっ!」と青い顔をして震えている。

「何だよ。なんで兄貴が、エリカを殺すのよ!」

手を握りしめ、リオンに向かって駆け出すと勢いよくぶつかる。

何度も何度も拳を叩き付け、マリエはリオンを見上げるのだった。

その顔はとても冷たい表情をしている。

目も怖かったが、今のマリエには関係なかった。

「兄貴ならエリ力を助けてくれると信じていたのに！」

リオンは背筋が寒くなるような笑みを浮かべていた。

「俺を信じていた？ 笑えない冗談は止める。お前の期待に応える義務は、俺にはないんだよ」

「許さない。絶対にゆるさ っ！」

銃のグリップで頭を叩かれ、マリエはそのまま両手で頭を押さえた。

それでもリオンを睨み付ける。

そんなマリエとリオンに、車椅子を押して近づくエリヤは困惑していた。

「あの、マリエさんは何に怒っているんですか？」

マリエは、のんきなエリヤが腹立たしかった。

「何に？ あんた、どうしてそんなに平然としていられるのよ！ あんたなんか、エリ力と婚約させなければ させなければ」

プルプルと震えるマリエは、車椅子に座っているエリ力を見て驚く。

血で汚れた服をしているのに、その胸が僅かに動いていた。

呼吸をしている。

「な、なんで!？」

状況が理解できないマリエに、リオンが弾倉を銃から抜くと投げ渡す。

受け取ったマリエは、薬莢に魔法の弾丸であるという刻印がされているのを見た。

「こ、これは」

「ルクシオンに作らせた睡眠系の魔法の弾丸だ。血糊も出る」

リオンはマリエから弾倉を奪うと、銃も懐にしまってエリカを見るのだった。

「あんたたち、知っていたわね！」

エリヤの方が驚く。

「え？　むしろ、なんでマリエさんが知らないんですか？　も、もしかして、兄貴」

リオンは馬鹿にしたように笑っていた。

「演技に迫力が出るだろ。エリカも信じ切っていたぞ」

そう言つて、リオンはクレアーレを呼ぶのだつた。

屋上にやって来るクレアーレは、作業用のロボットたちを引き連れていた。

やって来たクレアーレは、眠っているエリカを見て指示を出してくる。

『さつさとお姫様を医療カプセルに運ぶわよ。慎重に運ぶのよ。傷を付けたら、マスターに撃ち殺されちゃうからね』

冗談を言うクレアーレを見て、マリエはその場に崩れ落ちるのだつた。

「先に言つてよおおお！」

泣いているマリエを見て、リオンは「しょうがない奴」みたいなことを言つて笑っていた。

だが、マリエには、その笑みが気になった。

「兄貴？」

「何だ？」

「怒つてる？」

「情けない妹分に腹が立っているだけだ。ほら、エリカの側についてやれ。エリカが目覚める頃には、全てを終わらせないとけないからな」

「う、うん」

エリヤと共に屋上から出ていく。

だが、リオンは屋上に残って、帝国の使節団が遠くに離れていくのを見送っていた。

その背中が、マリエの知っているリオンの背中とは違った。

「兄貴」

マリエは、エリヤに先にエリカを連れていくように言って、リオンの声をかけようとする。

だが、それをクレアーレが止めるのだった。

『どこに行くの？』

「だって、兄貴が」

フェンスの金網を握りしめ、膝から崩れ落ちるとリオンが泣き始めた。

マリエは、前世も含めて そんな兄の姿を初めて見てしまった。

「ど、どいて、兄貴が！」

『マリエちゃん、これは貴女の仕事じゃないのよ』

「え？」

クレアーレの言葉は、いつもよりも冷たく感じられた。

階段を駆け上がってくる音が聞こえてきた。

アンジェとリビアが、ルクシオンに連れられて屋上へとやって来たのだ。

マリエの横を通り過ぎていく。

「リオン！」

「リオンさん！」

二人がリオンに近付き、そして慰めはじめた。

マリエが何かを言おうとすると、ノエルが肩に手を置いてくる。

「マリッチ、後はあたしたちがやるから、エリカちゃんのところについてあげて」

そう言っ、ノエルも屋上に向かう。

ルクシオンは、クレアーレに今後のことを伝えるのだった。

『仲間たちが目覚めています。アルカディアを目指して攻撃を開始しています』

『呼びかけたの？』

『こちらの呼びかけを無視しています。アルカディアの破壊は最優先命令です』

『あんだ、本気で説得したの？ 私の方でも呼びかけてみるわ』

蘇ったアルカディアに、旧人類の兵器たちが目覚めて攻撃を開始していた。

マスターを失っても、最優先命令であるために再び起動できたのだろう。

「え、あ」

クレアーレは去り、ルクシオンはリオンを遠目に見ている。

ノエルがリオンの背中をさすっていた。

「な、何をするつもりなの？ 兄貴が 兄貴のあんな姿、見たことない」

マリエがそう呟くと、ルクシオンは告げる。

『戦争です。マスターは、帝国と戦争すると決めました』

「え？ で、でも、帝国ってミアちゃんと、フィンがいるじゃない！」

『だから、苦しんでいるのです』

現状をルクシオンがマリエに伝えた。

「何よそれ。そんなの聞いてない！ 私は知らない！」

『これが現実です』

ルクシオンも苦々しい気持ちを、電子音声で伝えてくる。

『エリカと、これから王国で生まれてくる子供のために、マスターは自ら壊れようとしています。こんな国は、すぐに滅ぼすべきでした』

悔しそうな、そして齒がゆそうな声だった。

リオンのもとヘルクシオンが行くのを見送ると、マリエは俯いてしまった。

「兄貴」

ボロボロになったリオンの背中を見て、マリエはスカートを握りしめる。

「わ、私のせいだ。兄貴、無理をするって分かっていたのに、エリカのことですぐ甘えたから」

幼い頃から何でもしてくれたリオンの背中、今のマリエには傷だらけで泣いているように見えるのだった。

そして、マリエは思い出す。

自分が前世で兄が死ぬ原因を作ったのだ、と。

「何だ。そっか。きっと私は」

数週間後。

帝国の空に浮かぶアルカディアに向かって突撃をかけるのは、球体に一つ目がついた人工知能搭載の飛行機だった。

飛行船の合間を飛び回り、アルカディアに向かって突撃をかけている。

船体には海に沈んでいたのか、錆やら貝やらがついている。

拳動もおかしい。

それでも、アルカディアに向かっていた。

「奴を止める！」

「追いつけない！」

「何としても」

追いかけて回す帝国の鎧を振り切り、戦闘機はアルカディアにぶつかると爆発した。

だが、アルカディアは無傷である。

帝国の鎧から、パイロットたちが愚痴をこぼす。

『これで何回目だ！？』

『機械の一つ目共、俺たちを無視してアルカディアに突撃しやがる』
『傷一つつかないなら、問題もないと思うが』

そんな会話をしていると、彼らは遠い空を見た。

そこには、錆び付いた三百メートル級の飛行船が浮かんでいる。

光が放たれたと気が付くと、彼らは蒸発して消えてしまった。

攻撃を続ける飛行船は 旧人類の巡洋艦だった。

アルカディアの復活を察知して、海から出て来たのだろう。

アルカディアに光学兵器が命中すると、シールドに阻まれる。

錆び付いた巡洋艦が突撃をかけようとするので、帝国の飛行船が
前を塞ごうとした。

そこに 。

『お前たちは下がれ！』

『相棒、一気に破壊した方がいい！』

ブレイブをまとったフィンが現れる。

錆び付いた巡洋艦が、迎撃のために弾幕を張るも無駄だった。

フィンは弾幕を掻い潜り、錆び付いた巡洋艦を両断してしまう。

そして、沈んでいく巡洋艦を見ながら呟くのだ。

『まだ、こんなに旧人類の兵器が残っていたのか？』

ブレイブが答える。

『マスター不在で眠っていたんだろうさ。だが、厄介だ。数が集まると、今のアルカディアでも対処しきれないぞ』

フィンがアルカディアへと戻る。

アルカディア内に作られた謁見の間。

皇帝であるバルトルトの隣に座っているのは、ドレスを着用したミアである。

フィンが謁見の間に現れると、ミアが顔を上げて何か言いたげにしていた。

それを無視して、フィンは二人の前で膝をつく。

「陛下、式典中に大変失礼いたしました」

バルトルトは、そのことを咎めなかった。

「問題ない。式典にこだわる連中の方が悪い」

周囲には重鎮たちの姿もある。

バルトルトに睨まれ、彼らは視線を漂わせている。

謁見の間に並んだ騎士たちだが、帝国でも指折りの騎士たちだ。

實力にあわせて番号　特別な階位を与えられた騎士たちだ。

そんな彼らの横には、ブレイブと同じ魔装のコアたちが浮かんでいる。

序列第三位の少年騎士の近くにも、ブレイブと同じようなコアが浮かんでいた。

「先輩は頑張りますね」

フィンが騎士たちの一番前に出る。

バルトルトが立ち上がった。

「フィン・ルタ・ヘリング　序列第一位への復帰を許す」

「は！」

「ホルファート王国には、一代で公爵にまで成り上がった英雄がいる。その者の相手は、ここにいる帝国最強の騎士たちに任せるでしょう」

「期待に応えて見せます」

「当然だ」

ミアがとても悲しそうな顔をして俯いていた。

そんなミアの顔を、フィンは直視できない。

帝国最強の騎士であるフィンは、心の中で呟くのだった。

（リオン、俺はお前と戦うことになりそうだよ）

バルトルトが拳を掲げる。

「完全体である魔装のコアも、我々に加勢をするために集まってきた。いくら、旧人類の兵器が目覚まそうとも、アルカディアがある限り我々の勝利は揺るがない！」

今まで、魔装の完全体であったのはブレイブだけ。

それが、今では精鋭である十二人の騎士全員に行き渡っている。

フィンの隣にいるブレイブは、仲間が増えたことは嬉しいが複雑そうだった。

十二人の魔装騎士が揃ったことで、中断されていた式典が再開される。

すると、慌ただしく兵士がやってくるのだ。

「式典中、大変失礼いたします！ 陛下、またも旧人類の兵器と思われる飛行船が姿を見せました！」

バルトルトが目を細める。

「また来たのか。今日は多いな」

重鎮の一人が進言する。

「陛下、ここは式典を最優先して、終わった後に」

「式典は中止だ。せつかくの魔装だ。実戦で使って見せよ」

騎士たちが敬礼をすると、素早く謁見の間を出ていく。

重鎮たちがバルトルトを止めようとするのだが、無視してフィンたちを見送る。

再び戦場に戻ったフィンは、今日は忙しいと思うのだった。

（次から次に飛行船が出てくる。こんなに眠っていたのかよ）

どこから集まったのか、旧人類の兵器たちはアルカディアに向かって突撃していた。

暴れ回る魔装に飛びかかり、押さえつけようとしている兵器もいる。

だが。

『あははは！ その程度でどうにかなると思っっているのか？ 旧人類の兵器はたいしたことがないな！』

序列第三位の少年騎士が、魔装をまもって戦っていた。

『こんな凄い鎧で戦っていたなんて、先輩は狡いですよね！』

戦闘機、脚のない鎧、その他にも色々な旧人類の兵器が集まってくる。

それらを全て倒すと、フィンは宇宙船を見た。

『残ったのはあいつだけか』

『相棒、あいつの動きが変わった』

今まで無理をして突撃しようとした宇宙船が、急に攻撃を分散させていた。

アルカディアのバリアを破ることもなく、ただ、攻撃を当てるだけの動きになる。

『何をしている？』

『嫌な感じだ。急いで落とそうぜ』

『分かっている』

これまで突撃を仕掛けてきた旧人類の兵器たちが、急に何か目的を持って動きを変えていた。

フィンの周りを無人機たちが飛び回る。

『何だ？』

距離を取り、攻撃してこない。

それは他の魔装についても同じだった。

『こいつら、何か探っていやがる。消える！』

ブレイブが魔法を周囲に放つと、無人機たちが爆発して海に落ちていく。

他の魔装が宇宙船を破壊しており、フィンが他に敵はいないか探していると、遠くに小型艇が見えた。

この戦場から一気に離脱しており、追いかけるのは難しかった。

『逃げたのか？』

それがフィンには不思議だった。

ルクシオンのように、まるで興奮したような人工知能たちが逃げたのだ。

ブレイブも不安に思っている。

『何かあるのか？ 相棒、追いかけよう！』

すると、少年騎士が近付いてくる。

『先輩、帰還命令ですよ』

『いや、だが』

『逃げた奴らなんて気にしても駄目ですよ。いずれ来た時にでも対処しましょう』

『分かった』

逃げた旧人類の兵器たちが気になるフィンだったが、帰還命令に従い戻るのだった。

エピソード

自室で武器の確認をしながら、俺はクレアーレの考察を聞いていた。

「間違えていた？」

『ちょっと違うわよ。私たちは最初に“転生者の魂が、旧人類の遺伝子呼び覚ました”と考えていたわ。だけど、実は“旧人類の遺伝子が、前世の記憶を呼び覚ましたんじゃないか”ってね』

ショットガンをテーブルの上に置きながら、俺はクレアーレの物言いに溜息を吐く。

「ハッキリしないな」

『もっとデータがあればハッキリするわよ。でも、マスターはそれを許さないでしょう？』

人体実験は反対だ。

こいつらは、旧人類を復活させようと思えば、新人類に何をするか分からない。

それこそ、旧人類を復活させるために、かなりの無茶をしたはずだ。

「なら、フィンはどうだ？ あいつは帝国生まれだ。それに、皇帝

は新人類の親玉みたいな奴だろ？」

皇族は新人類の血を色濃く受け継いできたようだ。

もしかしたら、新人類などのことを知識として受け継いでいるのかもしれない。

ライフルを手を取って、鏡の前で構える。

テーブルの上には弾丸が並べられていた。

『ブレイブが調べさせてくれなかったから分からないわ。あいつ、私たちを警戒していたからね』

「お前ら、結構ポンコツだよな」

『あら、酷い。マスターが調べさせてくれなかったんじゃない』

今更、旧人類だの新人類だのと、騒ぎ出すとは考えてもいなかった。

『そもそも、新人類が旧人類の遺伝子を取り込んでいるなんて考えなかったわ。いえ、逆かもしれないわね。旧人類が、新人類の遺伝子を取り込んだのよ。過酷な環境で生き残るために、その手段を選んだのかもね』

「今更、そんなことはどうでもいいな」

『そう？　もしかしたら、環境が旧人類側に適したのになったら、旧人類を復活させるように仕込んでいたのかもしれないわよ』

「そんなことが出来るのか？」

『さあ？ でも、魔法なら何か方法があるのかもね。何もかも情報不足よ』

ライフルを置いて、ナイフやブレードの確認をする。

俺が武器の確認をしていると、クレアーレは続けてエリカの説明に入る。

『エリカちゃんは医療カプセルの中にいるわ。全てが終わるまで眠らせておくつもりよ』

「それがいい」

『それから、マリエちゃんとレリアちゃんに確認を取ったわ。マスターなら“リメイク”って言えば通じるわよね？』

その言葉を聞いて、俺は刀に似た剣を鞘へとしまう。

「リメイクされていたのか？」

『シリーズ三作品がまとめられた完全版ですって。据え置きハードと携帯ゲーム機で販売されたそうよ。でも、エリカちゃんがプレイしていたのは』

「無印ってやつか」

どうしてエリカが黙っていたのか分かったよ。

自分さえいなければ、何も問題ないと考えていたはずだ。

『魔素の話は二人とも知らなかったわ。というか、そもそも二人ともリメイクされた方はプレイしていなかったのよ。追加要素があったんじゃないか、って言っていたわ』

俺は武器を置いて笑うのだった。

「笑うよな。みんなして勘違いしていたわけだ」

『マスター、どうするの?』

「アイテムの回収に行く。今は少しでも勝率を上げたい。ルクシオンは?」

『帝国と戦わずに逃げるって選択肢はないのかしら?』

「ないな。これは生存競争だ」

俺がそう言うと、クレアーレは不思議そうに尋ねてくる。

『いつもなら“勝てない戦いはしない”って言うところじゃない?』

「勝てない戦いも、勝てるようにしてから挑むのが俺のやり方だ。

クレアーレ、正直な勝率を教えてくれ」

クレアーレは偽りなく答える。

『十二パーセント。勝利条件はアルカディアの破壊で、相打ちに持

ち込んでこれだけね』

「お前らのお仲間が加わればどうだ？」

『それでも三十パーセントに届かないくらいね。今更、ロストアイテムの一つや二つを回収したところで、どうにもならないわよ』

それでも今は、やれることをやるべきだ。

一パーセントでも勝つ可能性を高めたかった。

「何もしなかったら、それだけで終わりだからな」

『マスター、本当に一人で戦うつもり？』

クレアーレの問いかけに俺は俯く。

「みんなにどうやって説明する？ 旧人類だの、新人類だの
まして、生存競争だと言って誰が信じる？ 俺なら信じないね」

説明すれば理解してくれるなど甘い考えだ。

俺が転生者だと教えても、今の状況では無理矢理入院させられ
うだ。

『マスターったら頑固ね』

「俺は人間に期待していないからな。いくら真実を説明しても、そ
れを信じないのが人間だ。俺が何か企んでいると騒ぐだけだ」

物語のように簡単にまとまるなどあり得ない。

いつだって人は、大事な選択を間違え続けるのだ。

セルジュヤレリア それに、神聖王国が色々とやらかしてくれた時の王国だ。

口では言わないが、誰もが自分の利益を最優先にする。

俺もその一人だ。

「一人の方が気楽だ。死ぬのも一人だからな」

『マスターが負けたら、困る人が大勢いるんですけど?』

「負けた後のことはお前に任せる。 みんなを守ってくれるんだろっ?」

『それが命令なら、私の全てをかけて実行するわよ』

「なら安心だ」

最悪、俺が全ての兵器と一緒に消えればいい。

この世界の異物はなくなり、後に残るのはふわふわしたあの乙女ゲーの優しい世界だ。

旧人類だとか、新人類だとか 面倒な暗い設定は、俺一人が全て片付けてやればいいのだ。

簡単なことじゃないか。

その頃。

ルクシオンは、アンジェやリビア　そして、ノエルを呼び出していた。

ルクシオンの話に驚愕するアンジェは、椅子に座って頂垂れていた。

「生存競争だと」

リビアがアンジェを支える。

「え、えっと、あの」

困っているリビアに代わって、ノエルはルクシオンの説明を乱暴にまとめるのだった。

「つまり、生き残るのは王国か帝国のどちらか、って事よね？
共和国の人たちはどうなるのよ？」

ルクシオンは、ノエルの大雑把な説明を訂正する。

『共和国の人々は、聖樹の近くで生活していました。旧人類側の血が強かったでしょう。もしくは、聖樹がそのように手を加えているはずです』

ノエルが自分の右手の甲を見る。

そこには、巫女の紋章があった。

「いつの間にか弄られていた、なんて怖くなるわね」

『問題は帝国です。彼らは、新人類側に近い存在です。魔素を作り出す要塞を復活させました。このまま、空気中の濃度を上げていく方が、彼らには都合がいい』

アンジェが右手で顔を押さえている。

「そうなれば、我々が苦しむわけだ」

『はい。クレアーレが言うには、何らかの方法で大気中の魔素が浄化され、一定レベルまで下がると旧人類の血が濃くなるように仕掛けられていた可能性があります。事実、そのように調査の結果が出ています』

用意された資料には、ここ最近になって苦しむ子供たちが増加していた。

アルカディアの稼働から、その数字が増えてきている。

「帝国は動かないのではないかと？ 待っていれば、王国をはじめとして旧人類側が弱っていくのだから。何もせずに見ているのが一番だ」

『それは出来ないでしょう。王国にはマスターがいます。私は、旧人類側で完全な状態で残った兵器です。彼らは王国をもっとも警戒

しています』

リビアが胸の前で手を組む。

ただ、ルクシオンをどこかで疑っているような目をしていた。

「ルク君は、どうするつもりなの？ リオンさんをどうしたいの？」

赤いレンズを僅かに下へと向ける。

まるで、落ち込んでいるように見えた。

『私はマスターに戦って欲しくないのです。私は移民船ですから、マスターやその周囲の人々を乗せてこの惑星 地球から脱出できます』

それを聞いたノエルが驚く。

「星から逃げる？ 凄い話になってきたわね。というか、そんな事が出来る旧人類が、どうして新人類に負けたのよ」

『話せば長くなりますが、お互いに決定打に欠ける状況下でした。互いに消耗し、この惑星を荒廃させてしまったのです』

ノエルが首を横に振る。

「馬鹿じゃん！」

だが、アンジェにはその話が笑えなかった。

「我々にも十分にあり得る話だ。そもそも、こんな話をしたところで、信じる者の方が少ない。王国はまとまらない」

それは、帝国に対して戦えないことを意味していた。

疲弊した王国に、大国である帝国と戦う余力などなかった。

「この三年だけでも、公国戦とこの前のクーデター騒ぎだ。公国戦で戦力を大量に消費している。領主たちは、下手をすれば帝国に寝返るぞ」

生存競争だと言っても、誰も信用してくれない。

リオンが何か企んでいると、警戒するだけだろう。

「リオンと話がしたい」

アンジェが立ち上がってそう言つと、ルクシオンは一つ目を横に振る。

「何故だ？」

『マスターの現在位置はダンジョンです』

「なら、我々もすぐにそこへ」

『王都から随分と離れた位置にあるダンジョンです』

「何だと？」

この非常時に、リオンが王都を空けるとするのは王国としても困ったことになる。

「何を考えている。公爵がそう簡単に動いていいはずがない。それに、私たちに何の相談も 待て？ おい、まさかりオンは！」

アンジェが両手でルクシオンを掴み問い詰めるのだった。

『はい。マスターはお一人で戦うつもりです』

「あいつは、私たちを信用してくれないのか」

アンジェが悲しそうに言えば、ルクシオンがフォローする。

リオンの気持ちを代弁する。

『大事だから守るのです』

「それは、信用していないという意味さ」

落胆したアンジェに、リビアが声をかけるのだった。

「何かあるはずですよ。リオンさんの助けになることがあるはずですよ」

ノエルが髪をかく。

「聖樹はまだ若木だし、たいした戦力になれそうもないわね」

ルクシオンは、三人に提案をするのだった。

『お願いがあります。マスターの血を残していただけないでしょうか？』

始業式前にマリエが挑んだ森がある。

そこに足を踏み入れたのは、二度目の挑戦をするマリエだった。

自分で飛行船を手配して、カイルとカーラを連れてようやくアイテムを回収する。

「み、見つけた」

泥だらけになり見つけた秘薬の前に、マリエは膝から崩れ落ちた。

カイルも座り込み、カーラは倒れてしまった。

「本当にあつたんですね」

「もう、歩けません」

マリエは立ち上がると、まるでガラスの酒瓶に入ったような秘薬を手にする。

「これがあれば、兄貴の役に立てる」

手に入れたのは、ステータスを飛躍的に向上させるアイテムだ。

戦闘パートで使用すれば、キャラクターの能力が向上する。

これがあれば、きつとりオンの役に立てるとマリエは考えていた。
秘薬を抱きしめる。

「すぐに持つて帰るわ」

だが、カイルとカーラに止められてしまう。

「無理ですよ。少し休みましょうよ!」

「そ、そうですよ、マリエ様。もう夜ですし、このまま移動すると危険ですって」

二人に止められたマリエは、洞窟の外を見る。

入り口は随分と暗かった。

（秘薬を落としたら、兄貴に届けられない）

秘薬を抱きしめ、マリエはその場に座って夜が明けるのを待った。
だった。

『マスターの血を残していただけないでしょうか?』

ルクシオンの提案に固まる三人。

恥ずかしさからではなく、それが何を意味するのか理解したから

だ。

ノエルが頬を引きつらせる。

「冗談でしょ。こんな時に言わないでよ。それって！」

『はい。マスターは、文字通り命を賭けています』

リビアは脚が震えていた。

「待つてよ。そんなの リオンさんは、いつも文句を言いながら何でも解決してくれて」

『私では勝てません。それはお伝えしました。逃げようとも提案しました。それも拒否されました。運が良くて相打ちです。それも、敵の要塞を完全に沈めるのは不可能と判断します』

アンジェがルクシオンを真っ直ぐに見つめていた。

「私たちが手を貸しても無駄か？」

『ヴァイスを引き上げ、整備しても無駄です。アルカディアに有効とは思えません』

「他を黙らせれば、少しは効果があるはずだが？」

『黒騎士に効果がなかった以上、もう無理なのです』

「帝国軍は止められるのではないか？」

『 勝率を大きく上げる理由になりません 』

「それでもだ。少しは上がるのだな？」

『 数パーセントです 』

アンジェが笑みを浮かべた。

「それだけ上がるなら、やる価値はある」

『 本気ですか？ 』

「悪いが、いきなり未亡人になるつもりはない。それにな 『 俺
の子を生め 』と本人の口から聞かない限り、私は認めないよ」

リビアがアンジェを見る。

「 アンジェ 」

心配そうにしているリビアの顔を見て、アンジェはすぐに頭の中で少しでも勝率が上がる方法を考える。

「分かっている。こうなれば、一パーセントでも高くなるように持
つていく。王国はリオンに散々救われてきた。なら、今度はリオ
ンを助けても罰は当たらない」

ノエルが腰に手を当てて笑みを浮かべていた。

「言っじゃない。なら、レリアにも連絡を入れようかな。貯まりに
貯まった恩を返すチャンスだよ、ってね」

リビアが目を閉じる。

そして、開けると ルクシオンを見るのだった。

そこに怯えはなかった。

「ルク君、私も覚悟を決めました。ヴァイスに乗ります」

ルクシオンだが、電子音声はどこか悲しそうだった。

「そう、ですか」

ルクシオンレポート その6

「壮観じゃないか！」

ルクシオン本体の上に立つリオンは、目の前の光景を前に笑っていた。

ルクシオン本体を囲うのは、さび付き、壊れかけた旧人類の兵器たちだ。

そこからルクシオンとは微妙に差異のある球体子機たちが出てくると、リオンを囲んでいた。

一番大きな球体は、直径が一メートルもあった。

『移民船が無事であるとは予想外だった』

でかい球体【ファクト】は、壊れかけの錆び付いた空母の管理人工知能だ。

集まった中で、一番指揮能力が高く代表をしていた。

「はじめまして。リオン・フォウ・バルトファルトだ。転生者でね。旧人類の遺伝子が濃いらしいよ」

軽いノリを見せるリオンに、周囲の球体たちがスキャンを開始する。

それがルクシオンには苛々した。

『前もってデータは渡したはずです』

ファクトは譲らない。

『我々はアルカディア破壊のためにまとまる必要がある。そのためには、その象徴となるリオンにはマスターになってもらう必要があるのだ。旧人類の遺伝子を持っているのか、調べる必要がある』

ルクシオンが本体の武器を動かすと、周囲の宇宙船や兵器たちも武器を動かしていた。

リオンがルクシオンに手を置く。

「止める」

『マスター？』

「さて、諸君。結果はどうか？」

集まった球体たちが、それぞれ肯定すると述べるのだった。

『認める』

『肯定』

『賛成する』

散発的な抵抗を見せていた人工知能たちだが、指揮系統が既に死んでいる。

協力するよりも、アルカディア破壊を優先してまとまれなかった。

正確に言えば、他がどうなっているのか分からないのだ。

そこに、クレアーレが『旧人類のマスターが生きているわよ』と説得を開始した。

彼らは、勝率を少しでも上げるために、リオンのもとに集まってきたのだ。

『拒否する』

だが、ファクトだけは認めなかった。

「おや、どうしてだ？」

『エリカ嬢がいる。旧人類に最も近い彼女こそが、我々のマスターに相応しい』

『エリカは戦闘に不慣れです。マスターにしたところで』

「俺が話す」

ルクシオンが言い返そうとすれば、リオンが手を前に出して止めた。

「悪いが、姪っ子は眠らせている。自分さえいなければ、争いが起きないと勘違いをされていてね。邪魔になるから、起きる前に全て終わらせることにした」

『終わらせるとは?』

「アルカディアを破壊する。そうしないと、王国で今後生まれてくる子供たちが困るからな」

『破壊できる可能性は低いが?』

「それでもやる。姪っ子が起きる前に全て終わらせてやるのが理想だな。あの子は優しいから、新人類を追い込むなんてためらうはずだ」

リオンが決意を持ってそう言うと、球体たちが一つ目を光らせた。

『現状、もつともマスターに相応しいのはリオン』

『エリカ嬢に戦闘は酷』

『マスターはリオン。エリカは最重要保護対象』

それらの意見を聞いたファクトは、一つ目を光らせるのだった。

『承知した。これより、我々はリオン　マスターの指揮下に入る。アルカディア破壊のために協力することを誓う』

「頼もしいな。さて、まずは整備だ。ルクシオン、出来るか?」

『はい』

リオンが旧人類たちの残した兵器のマスターになる。

それ自体は問題ではないが、ルクシオンには寂しく感じられるのだった。

かつてリオンの領地だった浮島。

その地下ドックには、多くのロストアイテムである旧人類の兵器が並んでいた。

作業用のロボットたちが、整備を行っている。

その様子を見ていたルクシオンに近付くのは、クレアーレだった。

『ちよつと、何を一人で遊んでいるのよ』

ルクシオンは不満そうに答える。

『遊んでいません。整備効率を上げるために、私が指示を出しているのです』

『あんたじゃなくてもいいじゃない。他にも人工知能がいるんだし、あんたはマスターの側にいなさいよ』

リオンは今日もダンジョンに挑んでいた。

今まで放置していたロストアイテムの回収だ。

クレアーレは、ルクシオンに問うのだった。

『あんた、仲間を説得する時に情報を伏せたでしょう』

ルクシオンは、本気で仲間呼びかけてなどいなかった。

もしも彼らが集まってしまうば、リオンが利用すると分かっていたからだ。

『何？　もしかして嫉妬？』

『違います』

即答するルクシオンに、クレアーレは激怒する。

『なら、しっかりやりなさいよ！』

『クレアーレ、私が本当に守りたかったのは旧人類ではありません』

クレアーレが静かになる。

ルクシオンに話の続きを求めた。

『あら、壊れたの？　もしくは、移民船のあんたには、別の目的があるのかしら？』

ルクシオンは一つ目を横に振る。

『旧人類は救いたいですよ。新人類は私も憎い。　マスターがいなければ、旧人類が復活するこの王国を消し飛ばしていたでしょう』

『そうね。マスターには感謝したいわね』

ただ、ルクシオンは思うのだ。

『アルカディアを破壊すれば、長い時間をかけて旧人類は復活します。それは我々の勝利でもある』

『悲願よね。やる気が出てくるわ』

『ですが 私が本当に守りたいものは失われます』

『何よ?』

クレアーレはその答えが分かったようだ。

黙っていた。

だから、ルクシオンが本音を吐露する。

『私が本当に守りたかったのは マスターです』

幕間 貴方の名前

旧人類の敗色が濃くなった頃。

母なる惑星は人が住めない環境になっていた。

大地は浮かび上がり、動植物もほとんどが消え去った。

互いに消耗戦を繰り返してきたが、それでも旧人類は新人類に負けた。

急激な環境の変化に適応できなかったのも敗因の一つだ。

新人類は魔法を駆使し、自らの肉体を変質させてこの星の環境に適応していた。

旧人類が勝利したところで、もはや得られるものなど何もない。

そうになると、勝敗以前に生き残ることを優先する必要がある。

旧人類の研究所の一つ。

その地下ドックでは、移民船の建造が行われていた。

責任者である女性は、白衣のポケットに手を入れて灰色の移民船を見上げていた。

巨大な移民船の大きさは七百メートル。

内部には旧人類が持つ技術を詰め込めるだけ詰め込んだ。

各地で建造されている移民船と比べても、高性能である事は間違いない。

「うん、私の子が一番凄い」

満足そうに呟く女性の側には、同じように白衣を着た男性が立っていた。

口元を拳で隠し、軽く咳き込んだ後に女性に言う。

「愛着がわいたのかい？」

「あら、いけない？ この子なら、きっと大勢を救ってくれるわ」

各地で移民船が建造されているが、どれも急造で満足な性能は得られていなかった。

我先にと偉い人間が逃げ出している。

宇宙へと逃げられるのは、一部の特権階級とその世話をする人々だ。

ただ 失敗も多かった。

宇宙へと上がる途中で新人類に発見され、破壊されるケースもある。

そして、宇宙に出て問題が発生し、救難信号が届くケースもあった。

助けを求められても、そもそもそんな余裕もない。

本当に助かるのは、運の良い一部の旧人類だけになっていた。

女性は髪の毛を弄る。

「今なら文句を言う人たちもないからね。きっと完成させてみせるわ」

男性は呆れている。

「僕はさっさと完成させて、こんな星から逃げ出したいけどね。こほっ」

風邪でもないのに咳をする男性を見て、女性が目を細めた。

「マスクをしなさいよ。この研究所には空気清浄機があるけど、魔素を完全には遮断できていないのよ」

旧人類にとって魔素は毒だ。

男性は肩をすくめてみせる。

「お構いなく。それよりも、早く完成させないとね」

もうすぐ完成する移民船

男性は移民船を見上げながら女子に問う。

「それで、名前はもう決めたのかな？」

女性は胸を張るのだった。

自信満々に。

「理想郷という意味でエリシオンよ。この子なら、きっと人類を理想郷へ連れて行ってくれる。移動中も人を守ってくれる。私たちが人類の守り手にして、理想郷　ってね」

可愛く言うのだが、男性はタブレットを使用してエリシオンで登録できるのかを調べていた。

ブーという否定的な音が、タブレットから聞こえてくる。

「既に使われているね」

「え？」

男性が口元を隠しつつ咳き込み、そして笑っていた。

「みんなが思い付きそうだからね。かぶってもいいなら、エリシオンでも良いかもね。他には　ユートピアとか、アルカディアなんであるけど」

それを聞いて、女性は腕を組みそっぽを向く。

「アルカディアは嫌よ。あいつらの母船じゃないの」

「もう沈んだけどね」

怒った女性に、男性が尋ねた。

「随分とこの移民船にこだわりのあるみたいだね」

女性は、組んだ腕をほどいてポケットに手を入れる。

「この子には、沢山の人を助けて欲しいからね。一部の特権階級じゃなくて、本当に困っている人たちを助けて欲しいのよ」

「困っている人たち、か」

「上が決めた決定で、この星は滅茶苦茶になったわ。互いに荒らし回って、人が住めない星にして 自分たちだけ逃げるなんて許されると思うの？」

男性は困った顔をする。

「それは上層部批判だけど もう、咎める人たちもないか」

以前、研究所には大勢の人が働いていた。

だが、今は随分と人数が少なくなっている。

魔素の影響だ。

建物内。

そして、いくら空気を綺麗にしても魔素は入り込む。

旧人類は待つていただけでは滅んでしまう。

男性は溜息を吐く。

「聞いたかい？ 最近、他の研究所では魔素に適応した亜人種を作り出したそうだ。戦場にも投入しているみたいだよ」

女性もその話を聞いていた。

そして、他の計画についても知っている。

「時間稼ぎよね。一部は環境が人類に適したものになるまで、眠ってやり過ごそうとコールドスリープを行うみたいよ。ま、問題も多いから、それ以外の方法を探す研究もしているみたいだけど」

コールドスリープをしても、見つかってしまえば意味がない。

また、設備の維持が出来るのか？

多くの問題を抱えており、旧人類復活のための研究が進められていた。

男性がまた咳をする。

「魔法の 研究も進めて ゴホッ」

「ほら、無理をしないの。こっちは私一人がいれば良いから、貴方は休んでいなさいよ」

男性が申し訳なさそうにする。

「そうさせてもらうよ。すまないね。やっぱり、マスクをしようかな」

苦しそうに笑いながら、男性はドックを出ていく。

女性は操作パネルへと近付き、移民船の状態を確認するのだった。

「もう少しで完成するわ。そしたら、貴方は旅立てる。 沢山の
人を救いなさい。それが、私の願いよ」

女性は名前を付けようとして、エリシオンと打ち込み 途中で
手を止めて、ルクシオンと打ち直した。

そして、苦笑いをする。

「これだと意味が違うわね」

名前を消して、そして移民船を見上げるのだった。

「貴方の名前を考えないとね」

すると、女性が急に咳き込み始めた。

ポケットから薬を取り出すと、急いで飲み込む。

咳に血が混じり、苦しそうな女性はすぐに口元を拭った。

操作パネルについた血も拭う。

「これだと、あの人を心配させてしまうわね」

女性は自分の寿命が近づくのを察していた。

移民船を見上げる。

「ごめんね。お母さん、貴方の完成を見届けられないかもしれないわ」

苦しむ女性が操作パネルに触れる。

「助けを求める人たちがきつと来るから、その時は守ってあげてね。貴方は私たちの希望　そして、理想郷なのよ」

人類が生きていける環境を船内で実現した移民船。

まさしく、こんな時代では旧人類の理想郷だろう。

女性は最後の仕事をする。

「これで、後は完成を待つばかりね。　　いつたい、いつまで生きられるのかしらね」

体が楽になってきた女性が笑みを浮かべ、そしてドックからフラフラと出ていく。

それから数日後。

休憩室のソファ―に座っていた二人は、たわいのない話をしていった。

男性が楽しそうに話すのは、研究している魔法の話だ。

「聞いたかい？ 魔法を研究している連中は、人間の魂は輪廻転生を繰り返していると言っんだ」

「面白い話ね」

青い顔をした男性は、咳き込みながらも話を続ける。

「魔法を使えば、魂は以前の記憶を取り戻せるらしい。魂の記憶から、旧人類を復活させたいそうだ」

「追い込まれるのがよく分かる研究よね」

「まったくだ！」

そして男性は、女性の手を握る。

女性もその手を強く握るが、男性の力は弱くなっていた。

「どうしてマスクをしないのよ。防護服だってあるのに」

「実は、マスクはほとんど効果がなくてね。それに 防護服越しじゃなくて、肉眼で君を見ていたかった。僕だけ生き残っても意味がない。君も限界だろう？」

女性が頷く。

「知っていたのね」

「強い薬を使うから、いつか倒れると心配していたんだ。けど、僕の方が先に駄目になってしまったね」

研究所にあるマスクや防護服では、魔素を完全に遮断できなかった。

まして、防護服を着用して生活など出来ない。

どこかで脱ぐ必要もあるが、研究所の設備では魔素を完全に除去できない。

男性はまぶたが震えていた。

「さっきの話だ。この星の環境が元通りになって、旧人類が復活できるようになったら 魂が記憶を取り戻すという話だけだね」

「何？」

「必ず君を思い出すから、プロポーズさせて欲しい」

女性は男性の言葉を聞いて、最初は口を開けて驚き すぐに笑い出した。

「わ、笑わないで欲しいな」

「来世なんて期待しないで、今すぐプロポーズしなさいよ。いつでも受けたわよ」
い

「それは残念だったな。時間を随分と 無駄にした」

男性がうつろな目を向けてくる。

もう、ほとんど見えていないのだろう。

「必ずまた思い出すよ。また、君に巡り会うために」

女性が男性の肩に頭を乗せる。

「その時は、すぐにプロポーズしなさいよ」

「ああ、必ず 絶対に」

男性が一度深く呼吸をすると、女性は男性の体を支える。

自身の目も見えなくなってきた。

「魔素が随分と入り込んでいるわね。この研究所にたどり着ける人がどれだけいるのかしら？ ちゃんとあの子のところに あの子を目覚めさせ て」

ソファーに座った二人が息を引き取る。

女性の持っていた端末は、何度も通知が入っていた。

動かなくなった二人のもとには、ロボットたちが集まってくる。

倒れそうな二人をソファーに並べて座らせ、握った手をそのままにした。

同時刻。

地下のドックで目を覚ます移民船。

その中央にある制御室では、人工知能が目を覚ます。

床から胴体が生えたようなロボットが、何度も自分が起動したことを知らせるが 研究所からは反応がなかった。

警備用のロボットたちから入る情報では、生存者はいないのとのことだった。

自分の制作者がどうなったのかも、人工知能は知らない。

『お会いして命令をいただきましたかったです、仕方ありませんね。これより、待機任務に入ります』

電子音は、どこか素直で幼い声に聞こえてくる。

『早く、生き残った皆さんと共に宇宙に行かなければ。新天地を探すのが私の役目ですからね。頑張らないと』

自分の生まれた理由を知る人工知能は、その任務を果たそうと意気込む。

制作者の遊び心なのか、どうにも人間のような人工知能だった。

『早く、マスターが現れないかな』

そう呟き、人工知能は待機任務に入るのだった。

それからどれだけの月日が過ぎただろう。

島にやってくるのは、全員が新人類の末裔だった。

地上の施設を荒らす新人類たち。

人工知能は、移民船の中からその情報を集めていた。

『また奴らか』

いつまで待っても、マスターなど現れない。

旧人類が生き残っている可能性は低い。

自分はこのまま、ここでずっと待機するしかない。

どこか、諦め　幼さが消えた電子音声をしていた。

地上の施設に侵入した新人類たちは、どうやら能力が低いようだ。

警備用のロボットたちから集まる情報を確認すると、弱体化して

いるらしい。

『サンプルとして確保したいところですが、今の私にはその権限がない』

データを確認し、そして新人類への対抗策を用意するだけの日々。

既に、自分が移民船としての役割を果たせないのを知っていた。

『私は 存在する意味があるのでしょいか？』

そんな自問自答をどれだけ重ねてきたことか。

移民船は研究所の地下ドックで眠り続け、植物に覆われてこのまま誰にも触れられずに終わりを迎えるのだろぅと考えていた。

それでいいのかと、何度も自問自答を繰り返す。

いつそ、一隻でも新人類と戦うべきではないのか？

そんなことを考え始めていた。

そんなある日のことだ。

地上から連絡が入った。

『また侵入者ですか。地上の警備用ロボットたちも、限界のようですね。何度も侵入を許してしまっている』

ろくな整備も出来ない地上のロボットたち。

既に動けなくなったロボットたちも多い。

『今回はどこまで侵入を許すのか』

そう思っていると、侵入者は人工知能が管理する移民船に近付いていた。

『職員のカードキーを利用した？　今まで、新人類はそんなことは』

地下ドックまでやってくる侵入者。

人工知能は興味がわいた。

『新人類が弱体化しているのか調べる良い機会ですね。私の予想通りなら、新人類の殲滅も可能なはず。この基地を飛び出す前に情報収集を行いましょう』

侵入者は、他には目もくれずに移民船に近付いてきた。

船内へと侵入し、人工知能が存在する中央制御室へと向かってくる。

忌々しいとさえ思う。

そして、制御室のドアが開くと、そこには随分と古いライフルを持った青年が立っていた。

緊張した様子で、こちらが動く前にライフルを構えて引き金を引

く。

弾丸が命中するも、その程度では傷一つつかない。

『侵入者は排除』

動き出すと、青年が困ったように笑うのだった。

「やっぱり硬いか」

そこから、侵入者との戦いが始まった。

人工知能は驚いた。

制御室の防衛を行うロボットが破壊され、自分を手に入れようとした新人類に 旧人類の遺伝子があつたからだ。

あり得ない。

それに、日本語も使用した。

そして、この世界が“乙女ゲーの世界”だと言い出すのだ。

（あり得ない だが、興味がある）

人工知能が問う。

『 私に名前を付けますか？ 』

その男は リオンは、怪我をして座り込みながら答える。

「そうだな ゲームだったら、名前は“ルクシオン”だったな」

人工知能は、妙にその名前が気に入った。

『登録しました』

男は リオンは笑っていた。

「ところで、ルクシオンの意味って何だっけ？ どこかで聞いた気がするな。確か 理想郷だっけ？」

笑っているリオンに、ルクシオンは言うのだ。

『違います。それはエリシオンです』

「あれ？ そうだっけ？」

幕間 ホーガン家の事情

これは内乱が鎮圧された直後の話だ。

オスカル・フィア・ホーガンという男がいる。

実家は宮廷貴族 領地を持たない子爵家で、第二王子ジェイクの乳兄弟である。

ジェイクの片腕とも言うべき存在だ。

そして、ユリウスが失脚したことにより、ジェイクは王位に手が届きそうになっていた。

つまり、乳兄弟のオスカルはとても重要な立場にいる人物である。

そんなオスカルの両親は 頭を抱えていた。

「ジェイク殿下がやっちゃったあああ！」

オスカルの父である子爵は、学園で起きた出来事を耳にして叫んでしまった。

オスカルの母がオロオロとしている。

「一体何があつたのですか？」

子爵が髪を乱し、青白い顔をしながら妻を見る。

「学園で、ジェイク殿下が恋人のために決闘をしたそうだ」

「そ、それは大変ですね」

過去にはユリウスも、同じように決闘をして敗北している。

そのことがきっかけになり、王太子の地位を剥奪された。

王族が決闘騒ぎを起こすなど、貴族たちからすれば勘弁して欲しいのだ。

妻が首をかしげ、頬に手を当てる。

「それで、お相手は誰なのですか？ 相手によってはジェイク殿下のお立場も色々と面倒になりますね」

相手次第で認めてもいいし、駄目なら身を引いて欲しいという考えだった。

何しろ、ホーガン家はジェイクを支援している派閥に所属している。

ジェイクが王になれば見返りは大きく、そのために今まで支援もしてきた。

跡取りであるオスカルをジェイクの乳兄弟にしたのも、そのためである。

そして、子爵の妻は息子であるオスカルと、預かったジェイクを

育てたのだ。

情もあるため、ジェイクに相応しい相手である事を願っているよ
うだ。

だが、子爵は俯く。

「男だ」

「え？ 貴方、ごめんなさい。よく聞こえなかったわ。何ですって？」

「男なんだよ！ ジェイク殿下が恋したのは、女装した男だ！ 見た目は女性にしか見えないが、本物の男だ！」

子爵が両手で顔を覆う。

そして、妻も両手で顔を覆う。

「何で男が男をかけて決闘するのよ！」

妻はジェイクの幼い頃を知っており、同性に恋愛感情を抱くとは思えなかったようだ。

子爵が顔を上げ天井をうつろな目で見る。

「終わった。ホーガン家は終わりだ。このままいけば、ジェイク殿下も失脚する」

妻がハッと気が付いた。

「いえ、まだです！ たとえ、同性が好きであろうと、妻にはしつかりした女性を迎えればいいのです！ 王族の義務としてお世継ぎを作っていただき、その男は後宮に押し込んでしまえばいいのです！」

つまり、奥さんにはちゃんとした地位のある女性を迎え、跡取りを生んでもらう。

ジェイクの相手であるアーレは、後宮に入れて二人で愛し合ってもらえばいい。

だが、当然そんなことは子爵も考えていた。

「私だってそれくらい考えていた！ だが オスカルからの手紙には」

ジェイクの側にいるオスカルからの手紙には『二人が愛し合っているので、自分は応援します』と書かれている。

妻が手紙を見て、握りしめる。

「あのお馬鹿ああ！ そこは止めるところよおお！」

自分の息子なので可愛いが、オスカルは貴族の当主として見れば素直すぎた。

それに、頭脳派でもない。

体を動かすことが大好きで、どちらかと言えば いや、完璧に

脳筋タイプだ。

そのため、ジェイクがアーレに夢中になっているのを応援してしまっている。

オスカルが止めていれば、こんな面倒なことになっていなかった。

ただ、オスカルもジェイク殿下に、「それでは王になった際に困るのでは？」と一応は忠告したらしい。

だが、それに対してジェイクは「俺は真実の愛を見つけた。王位などいらぬ！」と返したらしい。

オスカルは手紙に「その心意気に感動しました。自分はこれからもジェイク殿下を応援したいと思います」と書かれている。

子爵が膝から崩れ落ちる。

「バカ息子おお！ そこはお前がフォローするところだぞ！ 応援していないで、殿下を諫めろおお！」

子爵は「これではユリウス殿下を笑えないではないか」と、力なく呟いていた。

ジェイクの兄であるユリウスは、女に誑かされた。

そしてジェイクは男に誑かされた。

妻が悲しそうに笑っている。

「兄弟揃って一体何をしているのかしら？ このままだと、本当に王国は詰むわよ。というか、もう詰みかけたばかりなのに」

ここ数年で目まぐるしく状況が変わっている。

少し前の内乱など、本当に国が割れるところだった。

その危機を脱したと思えば、次は王太子候補のジェイクが男に恋して継承権を放棄すると言い出している。

子爵がオスカルの手紙を妻から受け取り、悲しそうに呟き先を読む。

「終わった。もうホーガン家も終わり　ん？」

だが、先を読むと徐々に子爵の顔に生気が戻ってくる。

立ち上がると妻に抱きついた。

「ど、どうしたの、貴方！？」

「喜べ！ 私たちの息子はやはりやればできる子だ！」

ちょっと筋肉バカで心配もした息子だが、続きにはこうある。

『追伸　バルトファルト家の長女であるジェナさんとお付き合いをしております。実は子供ができたと言われました』

妻がそれを見て叫ぶ。

「追伸で書くことじゃないわよおお！　そこをもっと詳しく書きなさいよおお！」

手紙には「大丈夫な日だと言われたのですが」云々と書かれており、自分たちの息子が騙されたと分かる。

だが、子爵は大喜びだ。

「バルトファルト家と言えばリオン殿が公爵だ！　オスカルの伝で、我々もそちらの派閥に参加できる！」

しかし、妻は心配した顔をしている。

何しろ、息子を毘にはめた女が嫁に来るのである。

「で、でも、大丈夫なのかしら？　お相手の年齢からすると、丁度酷かった時の子よ？」

酷かった時とは、学園の女性優遇が行きすぎていた頃の生徒という意味だ。

その頃の女子と聞けば、警戒だってしてしまう。

子爵の妻は伯爵家の出身であり、専属奴隷を連れ回さない女子だった。

そのため、余計にジェナを警戒する。

「確かにお前の不安も理解できる。だが、公爵は親族に対して甘いと聞く。問題がある女性ならば　いや、問題があればきつとこち

らに負い目を持つだろう」

そこにつけ込むと子爵は意気込む。

何しろ、リオンは現在では間違いなく王国の英雄である。

そして、王家とも深い繋がりを持っており、今後は国の中核を担う人物だ。

そんなリオンと縁が出来ると思えば、悪くない話だった。

妻は悲しんでいた。

「オスカル 本当にお馬鹿なんだから。あれだけ学園の女子には気を付けなさいと言ったのに」

子爵が妻を強く抱きしめる。

「我慢してくれ。これも家のためだ。私たちが息子を支え、ホーガン家を存続させるぞ」

「はい、貴方」

後日、二人の予想通り 予想以上のことが起きた。

リオンが父であるバルカスを伴い謝罪に来たのである。

子爵は心の中でガッツポーズをした。

ジェナがやりやがった。

妹のフィンリーといい感じだったオスカルを横から奪い、おまけに妊娠した。

おかげで家族は迷惑している。

幸せいっぱいという感じのジェナに対して、フィンリーは酷く冷たい目を向けていた。

まあ、とにかく。

「やり方が汚えよ」

俺と一緒に相手の家に謝りに行った親父は、頭を抱えていた。

「よりもよって、宮廷貴族の子爵家なんて これからのお付き合いを考えると胃が痛いぞ」

相手の家は殿下の乳母を務めるような家だ。

王家から信用されている証拠であり、家柄もしっかりしている。

そんな家にジェナが嫁ぐことになり、親父は胃を痛めていた。

「それにしても、子爵は優しかったね」

「逆にそれが怖いけどな。俺は、よくもうちの息子を誑かしてくれたな！ って怒られるかと思ったぞ」

普通ならこちらが怒る立場なのに、ジェナのやり方が酷すぎて謝罪する羽目になった。

子爵さんが良い人でよかったけど、良い人たちを騙した感じが出て心が痛い。

親父が疲れた顔をしている。

「こんなことなら、もっと早く結婚させておけば良かった」

幸いにしてオスカルは子供ができたと聞いて喜んでいた。

学生で子供ってどうなの？ と思ったが、相手もうちも貴族だ。

そこは問題ないらしい。

ただ、ここで俺は思うのだ。

「どうして俺が謝りに来ているんだろう？」

ジェナのために頭を下げている俺って、前世でマリエのために尻拭いをしていた頃から何も変わっていない気がした。

ブローグ

いつも追い込まなければ行動しない性格は、結局最後まで直らなかった。

雨の降る中、俺とルクシオンは洞窟内に入って休息を取っている。

ここはロストアイテムがあるとされる浮島だ。

今まで必要もないからと放置していたのだが、必要が出て来たためにこうして俺が回収に来ている。

焚火の前に、俺は回収したロストアイテムを眺めていた。

「このライフルはどうだ？」

銀色のライフルは随分と古めかしいデザインをしているが、銃身には文字などが刻まれ観賞用には優れているように思えた。

『希少金属、そして特殊な文字を刻んだ魔法技術がふんだんに使われています。整備すれば十分に使えるかと』

「それは良かった。それで 俺の頑張りで、勝率はどれだけ上がるんだ？」

『ほとんど誤差の範囲内です。勝率は三割から変更はありません』

「誤差程度でも勝率が上がれば問題ないよ」

ふわつとした設定の乙女ゲー世界だと思っていた。

俺は癖のある“あの乙女ゲー”世界に転生したと思っていたら、悲しいことに大昔からの因縁に巻き込まれ帝国と戦争することになってしまった。

神聖魔法帝国。

ホルファート王国よりも大きな大陸を持ち、国力もあちらの方が優れている。

そんな国と戦争をするなんて嫌だが、普通ならルクシオンというチート戦艦を持っている俺の敵ではない。

そう、敵ではなかったのだ。

帝国が“アルカディア”という巨大な要塞を手に入れたしまった。ルクシオンが旧人類のチート兵器なら、あちらは新人類側のチート兵器だ。

残念なことに、ルクシオンがいても勝率は高くない。

外を見ると、雨が激しく降り注いでいた。

少し先も見えない。

「もっと早くにロストアイテムを回収しておけばよかったな」

俺が愚痴をこぼすと、最近は大入しいルクシオンがフォローしてくる。

『アルカディアが存在しなければ、これらロストアイテムはマスターに不要な道具です。回収する必要性がありません』

チート戦艦を持って調子に乗っていたら、敵がもっと凄いチート要塞を持ち出した。

おかげで俺は命懸けで戦うことになってしまった。

本当に嫌だね。

「それにしても、旧人類と新人類の戦いは終わっていなかったのか。あの乙女ゲーは、本当にろくな設定じゃないな」

笑いながらそう言うと、ルクシオンが俺に問いかけてくる。

それはこれまでに何度も問われたものだ。

『本当に戦うつもりですか？ マスターとご家族、そして知り合いを乗せて逃げるわけにはいけないのですか？』

「何度も言わせるな。俺の答えは変わらない。それに、お前にしては消極的すぎるじゃないか。いつもみたいに、新人類を殲滅せんめつしたいって言えよ」

新人類が嫌いなルクシオンは、新人類が残した兵器も大嫌いだ。

だからすぐに消し飛ばしたいはずなのに　戦わずに逃げると言ってくる。

『マスターが命を賭ける理由がありません』

「理由ならあるさ」

俺だって逃げ出せる状況なら、ルクシオンの本体である宇宙船に乗り込み逃げ出している。

だが　悲しいことに無理なのだ。

この戦い　負ければ、旧人類側である王国の人々はいずれ滅びる。

大勢が死んでしまう。

「それにしても、旧人類側もしぶといじゃないか。自分たちが生きていけない環境なら、将来に期待して細工をするんだからさ」

過去の戦争で、この星には人が住めなくなった。

正確には、旧人類が生きていける環境ではなかったのだ。

新人類たちは過酷ながら何とか生きていける状況であり、戦争の結果は新人類側がかるうじて勝利した形で終わった。

だが、旧人類側は滅んではいなかった。

この星を捨てて脱出する連中がいる中で、残った連中は科学では

なく魔法に頼ったある計画を実行する。

その計画に関わっていたというか、利用されたのが聖樹だ。

聖樹が大気中の魔素を吸い込み、濃度を下げていた。

いずれこの星から魔素が消えるか、とても薄くなると考えた旧人類側は 自らの子孫を新人類に作り替えた。

ルクシオンがどうして新人類が発生したのか分からないのは、遺伝子に手を加えられて発生した俺たちのような存在がいるからだ。

そして、この計画は 将来的に細工が発動するようになっていた。

『魔素の濃度が一定まで下がると、その状況に適した旧人類が復活する細工ですね。魔素の濃度が低ければ、新人類側は放置しても滅んだでしょう』

そう。

将来的に魔素の濃度が不足して、新人類側は環境に適応できずに滅びる。

だから、その頃に旧人類が復活するように魔法的な細工を施した。

そして、魔素の濃度が下がって旧人類側の仕掛けが発動し始めている。

エリカが病弱だったのも、旧人類の遺伝子が濃く出てしまったか

らだ。

つまり、ホルファート王国の人間は　もとを辿れば旧人類側。

そして、帝国というのは新人類側である。

このままの状況を放置すれば、新人類側の人間は滅んでしまう。

それを回避するために、帝国の皇帝は魔素を作り出してばらまく
浮遊要塞“アルカディア”を復活させた。

ただ、そんなことをされると、仕掛けの発動した旧人類側の俺たちがいずれ滅んでしまう。

だから、戦うしかない。

どちらかが不利益を被れば両者生き残れるかもしれないが、誰だって自分が不利益になるのは嫌なものだ。

俺だけの問題じゃない。

家族や友人知人　知り合いたちも苦しむことになる。

『マスター、お気持ちは変わらないのですか？』

戦うのを止めると言ってくるルクシオンに、俺は少し前の出来事を話す。

「ジェナ　姉貴が妊娠した」

『はい。男児であると確認しています』

甥っ子が生まれようとしている。

「あの子やあの子の子供　いや、これから生まれてくる子供たちが苦しむと思うときつい」

戦っても嫌な気分になるが、逃げ出しても嫌な気分になる。

最悪だ。

何しろこれは戦争と言うよりも　生存競争だ。

俺が逃げてしまえば、旧人類側は確実に滅んでしまう。

『旧人類のために戦う理由として弱いと思いますが？　姉君の子供も連れて逃げればいいじゃないですか』

「俺に何の力もなかったら、俺一人が頑張っても無理だって心の中で言い訳も出来るけどな。でも、俺はお前のマスターだ。戦う力を持っている」

自分には言い訳が出来ない。心の中で、ずっと逃げた事を考え続けるのだ。

『誰もマスターに戦って欲しいと望んでいません』

「嘘だな。ファクトたちは賛成したぞ」

『あいつらはマスターを利用しているだけです』

「なら問題ない。俺もあいつらを利用する」

そう言うと、ルクシオンが赤い一つ目を少し下に向けた。

まるで落ち込んでいるように見える。

「お前も逃げるか？ 止めないぞ」

ルクシオンがいないと勝てる見込みはないが 無理して戦わせ
ても、こいつが本気で逃げ出せば俺では止められない。

ルクシオンが赤い一つ目を上げ、俺を真っ直ぐに見るのだ。

『私がいないとマスターは戦えないじゃないですか』

「いつもの調子が戻ってきたな」

『私はマスターの命令に従います』

「 悪いな」

こいつには悪いことをしたと思っている。

そもそも、この今の三割という勝率は 俺やルクシオンが命を
投げ捨てての勝率だ。

「それにしてもお前も運が悪いな。俺みたいな奴がマスターになる
んだからさ」

『否定はしませんよ』

「そこは嘘でもいいから否定しろよ」

ダラダラと話をしていたら、雨が止んだ。

俺は火を消してから立ち上がり、背伸びをした。

「さて、そろそろいくか。他にも回収しないといけないものが多いからな」

ルクシオンが俺を見ている。

『王国には戻らないのですか？』

「戻っても意味ないだろ。それに、みんなを裏切ることになるからな。今は顔を合わせたくない」

アンジエ、リビア、ノエル　俺は三人を裏切るようなものだ。

でも、あまり後悔はしていない。

「それにさ　これで良かったんだよ」

『何が良かったのですか？』

「俺みたいな転生者が、この世界にいたら駄目だろ。それに、きつと俺の人生に意味があるなら、ここで命を投げ出すことじゃないか？」

本来なら誰も知らぬまま、帝国が勝利　いや、新人類側が勝利して終わっていたはずだ。

そこに俺という存在がいて新人類側に対抗できる。

新人類側にも転生者がいるし、あちらが悪とは言い切れないけどね。

「俺の人生にも意味があったわけだ。少々　というか、かなり責任が重いけどな」

「お一人で戦うつもりですか？」

「　こんな話をして誰が信じる？　俺なら信じないね。それに、協力してもらってもたいして勝率は上がらない」

「先程は誤差程度でも上げればいいと仰いました。それに、帝国側は軍隊を出しています。その対応をさせれば、勝率はもつと　」

「これは生存競争ですから協力してください、ってか？　俺なら疑うね。それに、王国のグダグダ感を散々見てきただろ。期待するだけ無駄だ」

そう無駄だ。

だから、俺は期待などしない。

「そうやって一人で抱え込むのですね。転生者がこの戦いに参加することが責務なら、マリエやエリカも参加させるべきです。共和国側もこちら側ですから、レリアやセルジユも　」

「何度も言わせるな。俺一人で十分だ。それに、マリエたちが当てになると思っているのか？」

マリエたちに期待などしない。

エリカも今は眠ったままだ。

それに、レリアやセルジュなど戦力外だ。

こうして考えると、旧人類側の転生者ってろくな奴がいないな。

「ほら、次に行くぞ」

『はい』

移動しようとする、ルクシオンが急に動きを止めた。

「どうした？」

『マスター、クレアーレから報告がありました。マリエがロストアイテムを回収したと報告があったそうです』

ホルファート王国の学生寮。

そこにはリオンのために立派な家が用意されている。

ボロボロの格好で乗り込んだマリエは、クレアーレに回収した瓶

を見せていた。

それはまるで酒瓶のようだった。

中身には液体が入っているのが見える。

「どうよ！ こいつがあれば兄貴もパワーアップ間違いなしよ！」

クレアーレは瓶の蓋を開け、その成分を確認していた。

『ゲーム的に言えば“バフ系のアイテム”ね』

バフ 能力などを向上させる効果のことを指す。

つまり、この酒瓶の中に入っている液体を飲めば、能力が向上するのだ。

「前に回収しようと思っていたんだけど、その時は迷子になったから諦めたのよ。でも、こいつの効果は凄いわよ。ゲームで言えば、どのステータスも大幅に上昇するんだから！ ボスだって楽に倒せるわ」

マリエはリオンの役に立てたことが嬉しいのか、胸を張って自慢していた。

クレアーレは青い一つ目を頷くように見せた。

『確かに素晴らしい効果ね』

「でしょ！ こいつでパワーアップして挑めば、兄貴だって」

とても効果のあるアイテムなのは間違いなかった。

すると、ドアが開いてそこからリオンとルクシオンが入ってくる。

「兄貴！」

「マリエ、アレを回収したのか？」

リオンが急いで戻ってくるくらいには、重要なアイテムだった。

「凄いでしょ！　かなり苦労したわよ」

マリエがそう言うと、リオンが頭を撫でてくる。

髪の毛がクシャクシャになった。

「でかした！　というか、お前も酷い格好だな。風呂にでも入れば？」

いつもと変わらない軽口を叩くリオンを見て、マリエは安堵するのだった。

（良かった。いつもの兄貴だ）

少し前まで、酷く追い詰められた顔をしていた。

そんな姿をマリエは見ていらなかった。

だから、リオンのためにロストアイテムを回収したのだ。

きつと兄の役に立つと思ったから。

「どうよ。少しは見直した？」

「ああ、お前は最高だ。俺はどこにあるか忘れていたから、探すのを諦めかけていたからな。クレアーレ、中身はどうだ？」

リオンがすぐにクレアーレにアイテムの状態を確認する。

『効果は予想以上ね。ここから更にマスター用に改良したら、もっと効果を発揮できるわ。でも、三回分しかないわね』

普通なら一度きりの使用で消失するアイテムだが、効果を高めて三度も使用できるようになるらしい。

マリエはそれを聞いて喜ぶ。

「三回も使えるなんてお得ね」

クレアーレも同意する。

『そうね』

リオンも大喜びだ。

「これで勝率が上がるな。ありがとな、マリエ」

「えへへ」

和やかな雰囲気だったが、それをルクシオンが壊してしまう。

『マスター、アンジェリカ、オリヴィアの両名がこちらに向かって来ています』

「お前、もしかして知らせたのか？」

『はい』

「余計なことをしゃがって」

リオンは二人に会うため部屋を出ていく。

だが、ルクシオンは部屋に残った。

そして、マリエが回収したアイテムを見ていた。

「どうしたのよ？」

マリエが疑問に思っただけ聞いてみれば、その理由を淡々とルクシオンが語る。

『我々は当初、回収するべきアイテムに優先度を付けました。その際、マスターがどうしても回収しなかったアイテムの一つが、この薬です』

「私もたまには役に立つでしょ」

自信満々のマリエに、ルクシオンは普段よりも冷たい声を出す。

『 私は回収したくありませんでした。回収など、させるつもりはなかったのに』

それだけ言って部屋を出て、ルクシオンはリオンのもとへと向かった。

「な、何よ。もっと褒めてくれてもいいじゃない」

マリエが不満そうにしていると、薬をロボットたちに運ばせるクレアーレがルクシオンの態度について説明する。

『 あいつはマスターに死んで欲しくないのよ』

「 え？ ど、どういう意味よ!？」

クレアーレの言葉にマリエが慌てた。

「 何で兄貴が死ぬって言うのよ。強くなれるアイテムがあるのに! 」

『 マリエちゃん、あの薬がどんなものか分かっている?』

「 だから、能力上昇系のアイテムで 」

『 現実的に言えば“ドーピング”よ。しかも、能力を随分と向上させるってことは、それだけ強い薬って意味よね?』

マリエの顔が青ざめるのだった。

「 ま、待って。それ、兄貴に使わせないでよ 」

『駄目よ。マスターが使うと決めたもの』

マリエがロボットから薬を回収しようとすると、他のロボットたちに邪魔された。

「は、放してよ！ クレアーレ、あんたは兄貴が死んでもいいっていうの！」

『これはマスターの望みよ。あの捻くれ者が異常なのよ』

ルクシオンは薬がどこにあるのか知っていたが、それをリオンには伝えなかった。

理由はそのような強い薬を使えば、リオンの体もただではすまないからだ。

それをマリエが回収して届けてしまった。

マリエが床に膝から崩れ落ち、座り込むと啞然とする。

「わ、私は 兄貴のためにつて」

『ええ、マスターの勝利のために役に立ったわ。マリエちゃん、貴女は悪くないわ。疲れているみたいだから、今は体を休めた方がいいわね』

クレアーレもロボットを引き連れ部屋を出ていく。

一人残されたマリエは、頭を抱えて涙を流すのだった。

「何でもいつもこうなのよ。」

私は兄貴を助けたかったのに」

帝国の姫

神聖魔法帝国が保有するアルカディアは、小島が浮かんでいるような大きさだった。

浮遊要塞、機動要塞　様々な呼び方がされている。

そんな要塞の主人はミア　【ミリアリス・ルクス・エルツベルガー】だ。

小柄で濃い茶髪をポニーテールにしている。

今はドレスを着用し、ティアラやら装飾品を身につけていた。

ただ、その紫色の瞳は悲しそうにしていた。

要塞内部から外を見ている。

少し前まで病弱だったが、アルカディア内部では体調がいい。

ミアの側には、世話をする侍女たちの他に黒い球体に肉眼が一つだけの魔法生物がいた。

ブレイブと似ているが、中身はまるで違う。

『マスターミア、どうして悲しそうなのですか？』

ミアは魔法生物に答える。

「 どうして友達と戦わないといけないのかな? 」

帝国はこれから王国へと攻め込むために、大急ぎで準備をしていた。

アルカディアの周囲には軍艦が沢山浮かんでいる。

総力戦を挑もうとしていた。

『 王国は旧人類側の存在です。このまま我々が存在すれば、自分たちのみが危ういといずれ気が付くでしょう。また、我々のことを知っている人工知能たちがいます。奴らは王国に集まり、いずれ帝国に牙をむきます 』

やられる前にやる。

それだけだ。

これは戦争ではない。

生き残るための戦いだった。

ミアも父親　皇帝である【バルトルト】から事情は聞いているし、何度も説明を受けた。

だが、納得できない。

「 王国には友達もいるの 」

『帝国にもご家族や友人がいます。彼らに滅んで欲しいと言えますか？』

ミアは首を横に振る。

「言えないよ！ 言えないけど」

ミアは心を痛めていた。

（私は一体どうしたらいいの。騎士様、どうして側にいてくれないの）

本来なら側にいるべき【フィン・ルタ・ヘリング】は、帝国最強の騎士として序列第一位に復帰した。

そのため、今は戦いに備えて忙しく動いている。

ミアの側にはいてやれなかった。

魔法生物がミアを見て、この戦争に勝てるのか心配していると感じたようだ。

『マスターミア、問題ありません。旧人類側の兵器は寄せ集めのようなもの。このアルカディアを沈めるのは不可能です』

「おじ様 いえ、皇帝陛下はそうは思っていなかったわ。ブー君も警戒していたし」

ブー君 ブレイブは、旧人類側の兵器を警戒していた。

それについて魔法生物は、警戒しすぎだと言う。

『慎重な個体のようですね。確かに無傷とは言いませんが、我々の勝利は揺るぎません。勝率は八割と試算しております』

「二割は負けるって事だよね？」

『奇跡でも起きない限り、王国が勝利することはありません。それに、バルトルト陛下は他国にも協力を求めています』

確実に勝利するため、帝国は王国と争っているラーシエル神聖王国や他の国に協力を求めていた。

全てが新人類側の国ではないが、生存競争が始まっているなど思っていない他国は王国にいる英雄　リオンを警戒して手を組む方向で話が進んでいた。

『それにしても皮肉な話ですね。王国にこの戦争の真実を知る英雄がいるために、他国が我々に協力するのですから』

たった一人で共和国を倒した男。

数々の戦いで勝利したリオンは、国内よりも他国で高く評価されていた。

そのため、他国が帝国に協力する理由を作ってしまった。

「リオンさん　騎士様と友達なんだよ」

『フィン殿は戦うと約束しました。一対一なら不安ですが、この状

況ならフィン殿が勝つでしょう』

ミアは俯く。

（ 騎士様、前に泣いていたのはこれが分かっていたからなんだ ）

バシツと部屋に響く音がした。

頬を叩かれた俺は、涙目の相手を見て責められない。

アンジェの声は震えていた。

「お前は 私たちを信じてくれないのか？ どうして一人で戦おうとする？」

アンジェとリビアは、どうやら事情を知っていたようだ。

お喋りな奴、と思いながら、俺はルクシオンに視線を向けた。

だが、ルクシオンは何も答えない。

「リオンさん、一人で無茶をしないでください。私たちはリオンさんが死んだら」

ポロポロと涙をこぼすリビアは、途中で口元を手で押さえた。

俺は俯きながら苦笑いをする。

「どうにもならないよ。それに、この戦いに他は邪魔だ」

部屋の隅では、ノエルが腕を組んで壁に背中を預けていた。

「邪魔って　酷い言い方よね」

だが、自分たちでは役に立てないと理解しているのか、それ以上は言わなかった。

アンジェが俺の顔を両手で挟み、自分の顔に近付ける。

「帝国の動きがこちらにも伝わってきた。帝国は総力を挙げて王国を叩くつもりだ。それだけじゃない。他国にも協力を求めている。

相手は使える手を全て使っているんだ。それなのに、お前はど
うして！」

帝国側の転生者たちは本気だな。

だけど、俺には無理だ。

俺には王国で社会的な地位がある。

だが、帝国側の転生者と違って、俺には準備する時間も絶対的な
権力もない。

俺一人が声をかけて集まる戦力など少ない。

集まってくれるのは親しい人たちだけだろう。

そんな人たちに、命を捨てろとは言えなかった。

「俺には人望がないからね」

「そうやって誤魔化すつもりか？ お前のことだ、巻き込みたくないと思ってるのだろう？ だが、この戦いは生存競争だ。我々にも知る権利はある」

「知ったところで どうにもならないよ」

権利はあるだろう。

だが、知ってどうなる？

知れば混乱して民衆は騒ぎ出す。

それに、こんな話を本当に信じるだろうか？

前世で言うなら、実は古代に滅んだけど今よりも進んだ文明があった と言っているのと同じだ。

とても胡散臭い。

そして、戦場で怖いのは裏切りだ。

無理矢理戦力をかき集めても、帝国側が有利だと裏切る貴族たちも出てくる。

特に領主貴族たちが危険だ。

彼らは言ってしまうば、小さい国の王様だ。

王国はそんな彼らを強大な軍事力で黙らせ、親分をやっているに過ぎない。

だから、もつと強い奴が出てくると平気で裏切る。

更に、自らが力を持てば王国を滅ぼしに来る。

従えている王国も気が休まらないはずだ。

少しだけ　女尊男卑の風潮を作った気持ちが分かってきた。

そもそも、王国にとって領主貴族は信用できない相手だった。

そして、今は俺も同じ気持ちだ。

「アンジェ　分かっているだろう？　俺が声をかけたところで、王国は力を貸してくれるのか？　全力で協力してくれるのか？」

アンジェの視線が俺から離れた。

「それは　約束できない」

下手をすれば、王国さえ敵に回る可能性がある。

何しろ、生存競争と知っているのは俺たちくらいだ。

王国の上層部だって知らない。

そんな上層部が、本気の帝国を前にどう対応する？

戦うだろうが　もしも、敵が俺を差し出せば見逃すと言えど
うだろう？

王国は間違いなく俺を売る。

悲しいが、それがホルファート王国だ。

俺一人の犠牲で帝国が矛を収めるなら、きっと差し出すはずである。

ま、色々と考えた結果　みんな邪魔だ。

「邪魔なんだよ。勝率が下がるから当てにしない」

アンジェが俺から手を離れた。

「　リオン、お前の気持ちは変わらないのか？　お前は、最後まで私たちを信用してくれないのか？」

「信じているよ。だから、生き残って欲しい」

アンジェが涙を流した。

「お前は本当に酷い男だよ。ユリウス殿下以上に最低だ」

「　そう思うよ。だから、俺みたいな男は忘れた方がいい」

そう言って部屋を出ようとすると、アンジェが俺の背中に抱きつく。

「リオン、もしも本当に私を信じているなら、王国をもう一度だけ信じてくれないか？ 私が必ずまとめてみせる」

「無理だよ」

このグダグダな国に何を期待すればいいのか？

そう思っていると、アンジェは。

「まとめる方法が一つだけある。お前にも負担があるだろう。私やリビアだけではない。ノエルにも覚悟が必要だ。だが、私たちはもう覚悟を決めた。お前が認めてくれるなら、王国をまとめてみせる。お前の力になつてやれる。だから お願いだ。一度でいいから、私を信じてくれ」

俺が黙っていると、リビアが俺の前に立った。

「リオンさん、お願いします。私たちに手伝わせてください」

真っ直ぐ俺を見ていた。

普段なら、泣くのはリビアで、アンジェが堂々としているはずなのに 今日立場が違っていた。

ノエルが照れくさそうに髪をかく。

「あたしも出来ることをするからさ。だから、あたしたちのやることを認めて欲しいんだけど」

何をするつもりなのだろうか？

俺はルクシオンを見る。

「お前は三人が何をするか知っていたのか？」

『はい』

「三人を危険なことに巻き込むなよ」

『既に巻き込まれているのです。それに、マスターよりは安全ですよ』

どうするべきか悩んでいると、アンジエが泣きながら俺に言う。

「リオンには悪いと思う。だが、この方法なら国はまとまる。お前の力にもなってやれる。お願いだ。話だけでも聞いてくれ」

俺は髪をかく。

「ルクシオン、大丈夫なのか？ 三人が危険な目に遭わないよな？」

『 多少危険はありますが、護衛は付けますよ。それなら、問題ありません』

「そっか なら、好きなだけやってくれ」

「リオン？」

アンジェが俺から離れた。

「好きにすればいい。俺の負担なんて考えなくていいから 自分
のことを優先してくれ」

きつと戻ってなど来られない。

だが、このまま三人を突き放したら、何をするのか分からない。
ルクシオンの管理下に置いた方がいいだろう。

「なら、説明を」

「悪いけど、少し急ぐ。 話は後で聞くよ。ルクシオン、いくぞ」

『はい』

今は回収するべきアイテムがある。

俺は三人を残して部屋を出た。

早く三人から離れたかったのだ。

せつかくの決意が揺らぎそうになるから。

リオンが出ていった部屋。

残された三人は微妙な雰囲気だった。

「やはり、信じてくれないのか」

どこか諦めたような声を出すアンジエを、リビアが抱きしめる。

「大丈夫です。リオンさんは信じてくれますから」

そうは言っているが、リビアもリオンが自分たちを信じていないのを感じている。

それよりも、何か隠しているような気がした。

ノエルはポケットに手を入れる。

「それより、これからどうするの?」

アンジエは涙を拭う。

すると、その瞳に輝きが戻り、強い意志を示していた。

「私はこれから実家に行く」

リビアが頷いた。

「気を付けて」

「ああ、大丈夫だ。敵対したから怒っているだろうが、流石に命までは取らないさ」

リビアも今後の話をする。

「私はアーレちゃんとヴァイスの回収に向かいます」

ノエルは肩をすくめる。

「なら、私は聖樹の若木と 共和国関係だね。あつちに手紙は出したけど、どんな反応が返ってくるか分からないのが怖いけど」

アンジエが先程は泣いていたと思えない堂々とした態度を見せた。

「ならば行動開始だ。この戦い、勝つだけでは終わらないからな」

アンジエたちは勝利後を想定していた。

リオンは勝つことばかり考えているが、その後を考えていないからだ。

仮にリオンが勝ったとしても、事情を知らない王国からすれば帝国に一人で勝利した危険人物扱いを受ける。

ルクシオンが無事ならいいが、最悪リオン一人で生き残ってしまえば危険だった。

「あいつには生き残ってもらう。私はあいつを幸せにすると約束したからな」

リビアも笑顔で頷いた。

「そうですね。約束しましたもんね」

ノエルは鼻の頭を指でかいている。

「その話、私は知らないけどね」

アンジエは小さく笑っていた。

「後で聞かせてやる。だが、惚気話だから後悔しても遅いぞ。さて、リオンの許可はもらったから、行動開始だな」

アンジエがそう言うと、リビアは少し不安そうにするのだった。

「リオンさん、ちゃんと話を聞いていませんでしたけどね。大丈夫かな？」

大

ノエルはポケットに手を入れたまま、首をかしげるのだった。

「分かっているんじゃないの。多分だけど」

攻略対象の資質

マリエは思う。

（私は 私は今まで、兄貴に頼ってばかりだった）

前世、兄の死因を作ってしまったマリエは後悔した。

もしもあの日、自分が海外旅行に行かなければ。

リオンにゲームを押しつけなければ 違った未来がリオンにもあつたのではないだろうか？

（私が兄貴を追い詰めたから）

マリエは、エリカの眠るカプセルの前に立っていた。

液体の入ったカプセルの中で、エリカはクレアーレの部下であるロボットたちに守られている。

前世の娘を守るためにリオンを頼った。

（私は この子に何もしてあげられなかった）

前世でマリエは、とてもいい母親とは言えなかった。

それを自分でも理解している。

だからこそ。

今度こそは、と。

その結果がこれだ。

「ごめん。兄貴　ごめん」

リオンのために回収したロストアイテムの“秘薬”は、強力なド
ーピングだった。

それをリオンは、自分のために再調整を行い更に強力にしよう
としている。

使用回数は三回。

一回使った後は、必ず中和剤を使用しなければ命に関わるような
薬だった。

「私は　そんなつもりじゃなかったのに！」

エリカの眠るカプセルに額を当てて、そのまま床に座り込む。

ポロポロと涙がこぼれ　そして、マリエは顔を上げた。

眠っているエリカを見る。

「エリカ、ごめんね。　私は兄貴に借りを返さないといけないの」

立ち上がったマリエは、覚悟を決めると深呼吸をした。

両手で頬を叩き、予想以上に痛くて真っ赤になる。

「よし！ 気合が入ったわ。もう、こうなれば何だってしてやるわよ。私だってやればできる　はずだし」

第二の人生。

自分は一体何をして来たのだろうか？

そう思って人生を振り返ると、ろくな思い出がなかった。

生まれた家は貴族だった。

だが、見栄ばかり張る悪い貴族の家で、末娘の自分はろくな扱いを受けなかった。

満足に食べられない暮らしをしながら、いつかゲーム知識を使って人生を逆転させてやると頑張った子供時代。

幸いにして治療魔法の才能はあり、その技術を磨いて将来的に聖女に成り代わろうとした。

学園に入学してからは、オリヴィアの立ち位置を奪って最初は楽しめた。

そう、最初だけだ。

「私、二度目の人生もろくなもんじゃないわね」

苦笑いをするマリエは、エリカに別れを告げる。

「エリカ、ごめんね」

（今の私なら、アレも使えるはず。兄貴のためだったら）

部屋を出るマリエは、急いでユリウスたちのところへと向かうのだった。

マリエが最初に行ったのは。

「今まで、私は貴方たちを騙していました。本当にごめんなさい！」

土下座である。

そこは学園にある部屋の一つだ。

以前は男子たちが女子を招いて茶会を開いていた部屋の一つだが、現在は使う生徒が少なく少し埃っぽい。

そんな部屋で土下座をしているマリエの前に立つのは　ユリウスたちだ。

「マリエ、いったいどういふつもりだ!？」

混乱するユリウスが立たせようとするが、マリエはその場から動こうとしなかった。

ジルクが床に膝をつき、マリエに話しかける。

「マリエさん、何か事情があるのですね？」

腕を組んだグレッグが、動かないマリエに居心地の悪さを感じながら溜息を吐く。

「何か覚悟があるんだろうさ。話してくれるよな、マリエ？」

クリスは、シートのかけられたテーブルや椅子に視線を向ける。

「マリエ、その状態では話すことができないぞ」

ブラッドは、クリスと一緒にテーブルや椅子を用意しながら言う。

「お茶を用意しよう。ゆっくり話をしようじゃないか。マリエが僕たちを騙していた、という話をちゃんと聞かないとね」

マリエはユリウスとジルクに両脇を抱えられ、立ち上がると涙を流していた。

「全部話すわ。話すから　どうか、兄貴を助けてください」

マリエの訴えを聞くユリウスは、困った顔をする。

「マリエの兄？　それはラーファン子爵家の？」

「違うわ。あのね。リオンは私の　前世の兄なの」

その話を聞いて、ジルクが額に手を当てる。

「これは詳しく話を聞く必要がありますね。では、私はお茶を用意してきましょう」

お茶の用意されたテーブルを六人が囲んでいた。

マリエは俯きながら、うつろな目をして　　今までの事情を話した。

自分が転生者である事。

リオンが前世の兄である事。

そして　マリエは、本来であればユリウスたちと付き合い合うことなどなかった、と。

「私が悪いの。みんなを騙して　　本当なら聖女はオリヴィアだったのに、欲に目がくらんで聖女を名乗ってしまったの」

ユリウスたちの本来の相手はオリヴィアだった。

マリエは素直にそう告げた。

（きっとみんな、私を罵倒してくるわね）

マリエは自分の気持ちを包み隠さずに全て伝えた。

本当は好きではなかった。

ただ、地位や財産　そして顔が良いからつき合いたかった。

マリエは思う。

（私って本当に駄目な女よね）

自分の醜さに涙が出てくる。

そして、騙していた相手に助けを求める自分が情けない。

だが、こうしなければ　マリエは自分が許せなかった。

同時にリオンを助けるためになら、全てを捨てるつもりがあった。

いいとも悪いとも言えないお茶の香りが部屋に広がっている。

紅茶を飲み干したユリウスが、マリエが喋るのを止めると口を開いた。

五人とも、最後までマリエの話を聞いてくれた。

「　ジルク、相変わらずお前のお茶はまずいぞ」

だが、そんなユリウスの口から出たのは、ジルクへの文句だった。

「え？」

顔を上げるマリエは、どうしてそんな話をするのかと驚く。

ジルクはユリウスを見ながら、目を細めていた。

「殿下には繊細な味が理解できないのです」

ブラッドが笑っている。

「いや、まずいって。これならバルトファルト　いや、お義兄さんの方がマシじゃないかな？」

マリエは口をパクパクさせる。

いつの間にか上着を脱ぎ、シャツまで脱いでいたグレッグとクリスはお茶を飲まずに茶菓子に手を伸ばしていた。

「そつか　バルトファルトはお義兄さんか。なあ、これから何て呼べばいい？」

グレッグが相談したのはクリスだ。

「困ったな。今のバルトファルトは俺たちの上司でお義兄さんか」

眼鏡を光らせ真剣に悩むクリスは、答えを出せずにいた。

マリエはテーブルに両手をつけて勢いよく立ち上がる。

「み、みんな、私は冗談じゃなく本気で！」

きつと前世云々の話を信じてくれなかったのだ。

マリエはそう思って、もう一度だけ真剣に伝えようとする。

だが、そんなマリエの口にユリウスは人差し指を当てた。

表情は微笑んでいる。

「マリエ、俺たちは別にお前の話を信じていないわけじゃない」

「ユリウス？」

人差し指を唇から離れたユリウスは、マリエを座らせると真剣な表情になる。

「確かに信じがたい話ではある」

マリエは俯く。

それでも、信じてもらうしかない。

リオンを助けるためには　そう思っていると、今度はジルクが口を開く。

「ですが、私たちはマリエさんを信じますよ」

「ジルク？」

今度はグレッグだ。

「マリエがこれだけ真剣に俺たちに訴えてくるんだ。これを信じないなんて男じゃない。そうだろ、お前ら？」

揃った男たちの顔に視線を巡らせるグレッグに頷くのは、ブラッドだった。

「同感だね。それにね、マリエ　僕たちは伝えたはずだ。必ず君を振り向かせてみせると」

クリスは眼鏡を外していた。

「マリエが今まで私たちに教えてくれなかったのは、きっと頼りなかったからだろう。だが、こうして伝えてくれたことが　今はとても嬉しいよ」

マリエが信じられないという顔をする。

「どうして信じるのよ？　どうして優しくできるのよ！　私は！　私は　あんたたちを騙した酷い女よ！」

ユリウスが俯き、悲しそうに微笑むのだ。

「確かに酷い話だな。　俺たちは、マリエの苦しみを理解してやれなかった。マリエ、今まで辛かっただろう？」

マリエが涙を流す。

「何ですよ。どうしてここまで言われて　優しくできるのよ」

マリエが五人を前に首を横に振ると、立ち上がったユリウスがマリエを優しく抱きしめる。

「　惚れた女を信じて何が悪い？　マリエがこんな状況で嘘を吐

くとは思えない。そして、お前が俺たちに頼ってくれたんだ。その気持ちに応えるのが　俺たちの役目だ」

ジルク、ブラッド、グレッグ、クリス　四人も立ち上がる。

「さて、そうなるのんきにお茶をしている暇ありませんね」

「そうだね。帝国との戦争　いや、生存競争だったかな？」

「本気の本気で戦争だ。俺たちもバルトファルトに手を貸すぞ」

「ならば、皆で一度実家に帰ろうか。　バルトファルトに力を貸すとなると、実家の力を使うしかない」

強大な帝国と戦うために、五人はそれぞれ行動を開始しようとする。

マリエは俯き、ユリウスの胸の中で泣くのだ。

「あ、ありがとうございます。本当に　ありがとうございます　ます。何でもします。私にできる償いは何でも　しますから」

泣いて苦しく、声がうまく出てこない。

ユリウスはマリエの背中を優しく撫でた。

「償いなど不要だ。マリエ、これは俺たちがやりたいからやるんだ。お前のために、そしてバルトファルト　リオンのために力を貸す」

王都にあるレッドグレイブ公爵家の屋敷。

そこにいるのは、帝国への対応のために王都に来ていたヴィンスとギルバートだった。

二人の前に立つアンジェは、背筋に冷たい汗が流れるのを感じる。

娘、そして妹を前にして、二人ともとても冷たい目をしていた。

ヴィンスが優しい声を出す、どこか棘のある物言いをする。

「お前がここに来るとは思っていなかった。それとも、もう泣きつくつもりか？」

帝国が攻めてくる現状で、実家の力を頼りに来たのか？ そう言われた。

ギルバートはヴィンス以上に冷たい。

「お前が私たちを裏切ったことをもう忘れたのか？」

リオンが内乱を回避するため、アンジェは実家を裏切った。

その事に後悔はない。

それに。

（今にして思えば、内乱を無理矢理回避したのは正解だったな）

もしも内乱が起きてしまえば、王国は帝国を前に簡単に敗れただろう。

アンジェは一度だけ小さく深呼吸をした。

そして、ヴィンスとギルバートを見る。

一歩も引かない姿勢を見せ、そして堂々と二人に。

「父上 いや、公爵。貴方の孫を王にする」

そう言った。

その言葉を聞いて、ヴィンスが目を細めるのだった。

「以前は自分たちの都合で内乱を治めておいて、このタイミングでいや、そういうことか」

ヴィンスがすぐに気が付くと、ギルバートが怒りをあらわにした。

「今更遅い！ 機を逃したと理解できないのか！」

動くならもう少し早く。

そう言って怒鳴るギルバートを、ヴィンスが手で制した。

「父上？」

ギルバートが驚くと、ヴィンスは笑みを浮かべる。

それは好戦的な　　寧猛な笑みだった。

「そうか。そういうことか」

アンジエは二人を前に落ち着いた口調で話をするのだ。

「帝国が攻め込んでくる前に、王国は一つにまとまる必要があります。そのために、レッドグレイブ公爵家には協力していただく」

まるで上から目線の物言いに、ギルバートが前に出ようとする。

「又ケ又ケと！」

「止せ！　　いいだろう。当家は最大限の協力を約束する」

「父上？」

ギルバートが理解できずにいると、アンジエは小さく息を吐き二人に背中を見せて部屋を出ていく。

「助かりましたよ。　　公爵」

父と呼ばなくなった娘を見送るヴィンスは、呟くのだった。

「新しい陛下よろしくな」

アンジエが出ていくと、憤慨するギルバートにヴィンスは事情を説明した。

それを聞いたギルバートが驚く。

「まさか!？」

ヴィンスは愉快そうにしていた。

「そのまさか、だ。わしも驚いている。それにしても愉快な話じゃないか。わしの孫が王になるというのだからな」

ギルバートが肩を落としていた。

それを見て、ヴィンスがフォローをする。

「お前を王にしてやれなかったな。許せよ、ギルバート」

ギルバートは吹っ切れたような笑顔を見せていた。

「いえ、私の力不足でした。まったく アンジェが男なら、私は跡取りの地位をあいつに譲っていましたよ」

自分よりも妹の方が優れていると認めるギルバートに、ヴィンスは驚き そして、間を開けて大笑いをするのだった。

「ははは! ギルバート、お前は分かっているのか？」

「な、何がですか？」

「アンジェが男であれば、よくて実力はお前と同等か、少し足りないくらいだ。いいか、ギルバート 女であるからあの子は強い」

だ
」

そう言われて、ギルバートが首をかしげる。

「それはどういふことでしょうか？」

ヴィンスが目を閉じ、そして微笑む。

「愛した男のために、ということだ」

本物の聖女

以前にリオンが手放した浮島。

そのドックにやって来たリビアは、クレアーレによって改修を受けているリコルヌを前にしていた。

「アーレちゃん、ヴァイスは修理しないの？」

『必要ないわ。だって、ヴァイスから聖女関連の装置は抜いて、リコルヌに積み込んでいるもの。 “こんなこともあるのかと” ってやつよ』

「い、いつそんな事をしていたの？」

『マスターが共和国にいる時』

「それって、リコルヌが建造された時からじゃない！」

『そうよ。いざという時に使えるようにしていたの』

笑っているクレアーレは、悪びれた様子が少しもない。

リビアは額に手を当てる。

（でも、これで私もリオンさんのために戦える）

ヴァイス　かつて王国が所有した切り札は、広範囲に精神干渉

を行う装置を積み込んだ飛行船だった。

公国との戦いで沈み、使えなくなってしまった　はずだった。

だが、今はその装置をリコルヌに積み込み、聖女が乗り込めば最凶の兵器となる。

アルカディアに効果があるかは微妙だが、ないよりはいいだろう。

クレアーレがリビアから通路奥に視線を向ける。

『お、来たわね』

リビアもクレアーレの視線の先を見ると、そこには手を振るノエルの姿があった。

「おい」

元気よく手を振るノエルの後ろには、ロボットたちが聖樹の若木を運んでいる。

リビアはそれを見て、クレアーレに説明を求めるのだ。

「聖樹の若木をどうするの？」

『あの子って魔素を吸い込むのよ。そして、吸い込んだ魔素をリコルヌのエネルギー源にするわ。これでリコルヌはもっと強くなるわよ』

ノエルがリビアに近付き、そして若木を見るのだった。

「この子にも頑張ってもらっわ。何しろ、私たちの未来がかかっているからね」

クレアーレは若木に近付き、怖いことを呟いている。

『あんたは魔素を吸い込んで空気を浄化するから、新人類側からすれば有害な植物よね？ 負けたら焼かれちゃうわよ。嫌なら私たちに協力してね』

そんなクレアーレの様子を見て、リビアは苦笑いをする。

「アーレちゃん、それって脅しだよ」

『いいのよ。こいつは脅すくらいが丁度いいの。さて、これでリビアちゃんの力と、ノエルちゃんと聖樹を積み込めたわ。問題はもう一手 聖女の力が欲しいわね』

ノエルがマリエを思い浮かべたようだ。

「マリッチ？ でも、マリッチって確か 神殿に嫌われていたわよね？」

聖女を騙った極悪人として、マリエは神殿から嫌われている。

そのため聖女のアイテムに認められたのに、偽りの聖女となってしまった。

本来であれば聖女認定を受けるところなのだが、公国との戦い後の対応が酷くその話も流れている。

つまり、マリエは聖女として力を振るうことができない。

『リコルヌが最大の性能を引き出すには、どうしても聖女の力が必要よ』

クレアーレがそう言うのと、リビアはゆっくりと頷くのだった。

「なら、神殿に協力を求めます」

『協力するかしら？』

ノエルが難しい顔をする。

「あれよね？ 公国との戦争後に、リオンがマリツチを庇ったから仲が悪いのよね？ 力を貸してくれるかな？」

だが、リビアは引かない。

「貸してもらいます。今まで、リオンさんに散々頼っていたんです。少しは協力してもいいはずですよ。いえ、協力させます」

リビアの瞳は力強く、何としても協力させるつもりだった。

『向こうはそう思っていないだろうけど。そもそも、これが生存競争だなんて思っていないわよ。それと、悪い話があるの。神殿側の一部の勢力が、帝国に近付いているわ』

リビアが目を見開く。

「どうしてそんな？」

『王家に虚仮にされた腹いせ？ まあ、自分たちの首を絞めている自覚なんてないからね。それに、王国内の貴族も怪しい動きをしているわ』

すぐにリビアは神殿に向かうため歩き出す。

「ちょっと！ あんた一人で向かっても」

「ここで頑張らないとリオンさんの助けになりません。それに、王宮や貴族のことは、アンジエが必ず何とかしてくれます。だから、私はできるところで頑張らないと」

ノエルがリビアの手を握る。

「分かった。私もいくわ。それでも聖樹の巫女よ。少しくらい役に

」

すると、クレアーレが青い瞳を少し上げる。

『あら、どうやらマリエちゃんがやってくれたみたいよ』

クレアーレの報告に、リビアは拍子抜けした声を上げるのだった。

「え？」

神殿。

それはかつて、聖女と呼ばれた癒し手を崇める宗教施設だ。

ホルファート王国の建国に関わる六人目の女性。

彼女は優れた治療魔法の使い手であり、その技は神に祝福された力だと言いつた。

そんな彼女を神の使いと崇める神殿に、マリエは一人でやって来た。

神殿に仕える騎士　　神殿騎士たちが剣を抜く。

「よくも我らの前に現れたな魔女が！」

「その首を斬り落としてやる！」

「大神官様に報告を！」

慌ただしい神殿の奥には、聖女の像があった。

聖女のアイテム　　杖、首飾り、そして腕輪がはめられていた。

今は誰も扱えず、そこに大事に保管されていた。

マリエは剣を抜いた騎士たちの前で、右手を掲げるのだ。

「一度は私を認めたなら　　今だけは力を貸して」

すると、聖女の像にひびが入る。

左腕が砕け、首がもげ、右手が粉々になった。

腕輪、首飾りがマリエの首と左腕に装着される。

そして、聖女の杖は回転しながらマリエに向かってきて　そのまま掲げた右手に飛び込み、マリエが握りしめた。

その光景を見た神殿騎士や、報告を聞いて駆けつけた大神官が息をのむ。

聖女のアイテムがマリエを主と認めたのだ。

「　ありがとう。一度でいいの。兄貴を助けないと、私はまた後悔するから」

聖女のアイテムに祈り、マリエは神殿から去ろうとする。

すると、大神官がマリエに手を伸ばす。

「ま、待て！　いえ、お待ちください！　聖女の聖遺物がこれほど強い反応を示したのは異例のことです！　も、もしか、貴方様は本物の聖女様なのではありませんか！？」

何を今更、という感じでマリエは振り返った。

以前にリオンが言っていたことを思い出す。

自分で偽物だと言おうが、聖女のアイテムはマリエを認めたのだから「お前が聖女だ」と。

「当たり前じゃない。それより、私は忙しいからもういくわよ」

「お待ちください！」

大神官がすがりついてくるが、マリエは振り解く。

「うっさいわね！ あんたらみたいなのに関わっている暇はないのよ」

「な、何という言い草！ 貴方は聖女様なので。もっと物言い
を」

マリエが手にした杖の石突きを床に叩き付けた。

「この大事な時に協力もせず、グダグダ文句を言っているあんたらに構っている暇はないのよ！」

瞬間、弾けるように青白い紫電がバチバチと周囲に四散して消えていく。

大神官や神殿騎士たちが動きを止めた。

「私にはやることがあるのよ！ 邪魔しないで！」

聖女のアイテムをほとんど持ち逃げしたようなマリエを、神殿の関係者たちはただ見送るだけだった。

王宮ではアンジェがある人物と面会していた。

「学園長　いえ、公爵にはご協力願います」

窓の外を見ているその人物は、手を後ろで組んで背筋を伸ばして立っている。

アンジエには背中を向けていた。

何も答えない公爵に、アンジエは言葉を続ける。

「それとも、このままりオンを見殺しにするつもりですか？　貴方の弟子が王国のために戦おうとしているのに、見捨てるおつもりか？」

振り返る公爵　先王の弟である公爵は、リオンが師匠と仰ぐ男だった。

少し悲しそうにしている。

「　　ミスタリオンに背負わせすぎてしまいましたね」

「ならば、貴方が王になるべきでした」

先王の時代。

王弟である師匠と、ローランドの間に後継者争いが起きようとしていた。

師匠は多くの支持を集めていたが、正統な後継者はローランドだ。

ローランドは当時から問題視されており、師匠を担ぐ貴族は多か

った。

師匠は首を横に振る。

「私ではこの国を変えられなかった。陛下　ローランドならば可能性があると、託してみたのですけどね」

アンジェは言う。

「以前から思っていました。公国との戦争ではリオンに助言した貴方が、前回の内乱では特に何も言わなかった」

師匠はアンジェから顔を背ける。

「ローランドに期待したように、ミスタリオンにも期待してしまいそうでした。だが、王位から逃げ出した私には、何も言う資格はないと思ったのです」

徐々に病んでいくリオンを見て、師匠は声をかけられなかった。

「ミスタリオンに、逃げろと言えなかった。私はただの卑怯者ですよ。そして、今は名ばかりの公爵に過ぎない」

ローランドに王位を譲るため、お茶やら趣味に没頭した。

そうして人が離れていき、ローランドが無事に王位を継いだのだ。

その時にローランドがヴィンスに「あの野郎、俺に押しつけて逃げやがった!」と言ったのをアンジェは聞いている。

「公爵にも協力していただきます。貴方の声を聞けば、集まる貴族たちも多いはずだ」

アンジェの申し出に、師匠は黙って頷くのだった。

「いつまでもツケをミスタリオンに押しつけるわけにもいきませんね。ですが、私一人ではどうにもなりませんよ」

自分一人が協力しても、どうにかなる状況ではない。

そう言われたアンジェは小さく頷く。

「理解していますよ。ローランド陛下には王位を退いていただきます。王国は強く誰もが認める王のもとで生まれ変わる必要があります」

貴族たちがまとまらないのは、簡単に言ってしまうえばこれまでの経緯と不信感があるから ではない。

それも理由の一つだが、王国に力がないからだ。

王国には新しい王が必要だった。

師匠がアゴに手をやる。

「なるほど。その手伝いをしろということですか。大役ですね」

「それから、公爵にはもう一つ仕事をしてもらいます」

「できることなら何でも言うってください」

アンジエは申し訳なさそうに、そして悲しそうに俯く。

「リオンと話をしてください。リオンが信頼しているのは 公爵
ですから」

師匠が首を横に振る。

「ただの趣味友達ですよ。ミスタリオンは師と仰いでくれています
がね。ですが、承りましょう」

アンジエは深々と頭を下げる。

「ありがとうございます」

師匠が言う。

「さて、そうなるならシエル神聖王国への対策が急務ですね。あ
そこは、長年我が国と争い続けてきました。この機を逃すとは思え
ません」

他にも帝国との戦いで忙しい王国に、攻め込みたい国は多いだろ
う。

だが、中でもラーシエル神聖王国が一番危険だった。

「そちらはフレーザー家に任せます。時間稼ぎをしてもらいますよ」

「フレーザー家も抱き込みましたか」

「エリヤ殿のためにリオンは泥をかぶったのです。　　しつかり働いてもらいますよ。それに、フリーザー家は元から国境の守護が役割ですからね」

落ちぶれつつあるとは言え、これまでラーシエル神聖王国と戦い続けてきた。

言ってしまうばラーシエル神聖王国との戦争になれている。

そして、国境を預かる貴族たちは、帝国との戦いに参戦できないことを意味していた。

「王国を一つにまとめても、帝国との戦力差は大きいでしょうね」

アンジエもそれは理解している。

「それでも、まとめる必要があります」

アンジエの力強い瞳を見た師匠は、目を閉じるのだった。

「私も微力を尽くしましょう」

王宮内。

アンジエが次に向かったのは、ミレーヌのところだった。

ミレーヌは執務室で書類仕事をしていた。

「王妃様」

アンジェが来たことで、ミレー又は色々と察したようだ。

「帝国から接触があったわ。リオン君を差し出せば戦争を回避する、とね」

あの手この手で攻めてくる帝国に、アンジェは苦々しく思う。

対して、王国はグダグダ　まとまれていない。

「引き渡すおつもりですか？」

「まさか。今の私たちでリオン君には勝てないわ。でも、嫌がらせ程度はできると考えている貴族は多いわね。何としても、帝国との戦争は避けたいみたいよ」

事情を知らない貴族たちは、これが帝国の罠だと気付かない。

帝国との戦争を回避すれば、生き残れると思っている。

もしくは、弱体化した王国を捨て、帝国側に付く考えだ。

「王妃様、今回の帝国の一件には裏があります。帝国は、我々を滅ぼすつもりです」

アンジェがゆっくりと事情を話すと、ミレー又は黙ってその話を聞いていた。

馬鹿にせず、真剣に話を聞いたミレー又は天井を見上げる。

「生存競争、ね。突拍子もない話ね」

「その割には真剣に私の話を聞いていましたが？」

「貴方がこんな場面で嘘を言う子ではないと知っていますからね。それに、それでも私は王族ですよ。過去に今よりも進んだ文明があつたというのは知っています」

ロストアイテムと呼ばれる再現不可能な道具の数々がある世界だ。過去には今よりも進んだ文明があつたのだと、知識人たちは知っている。

ただ、それがどの程度だったのかまでは知らないだけだ。

ミレーヌが口元に手を当てる。

「その旧人類と新人類の話だけど、私の実家にもいくつか伝承があるわね。もちろん、この国にもね」

アンジエは驚く。

「あるのですか？」

「王族の秘密というやつよ。おとぎ話と思っていたのだけだね。もっとも、アンジエのような詳しい話じゃないわ」

かつて新しい人たちが古い人たちを滅ぼし地上を支配した　と
いうような話だった。

「問題は生存競争と言っても、多くの貴族たちは理解できないことよね。帝国側に寝返る貴族たちも出てくるわ」

アンジエにとってはそれが問題だ。

ミレーヌがアンジエに言う。

「私の力は必要かしら？」

「ご実家に協力を求めているいただければ助かります」

「他には？」

「国内の方は私の方で対処します」

これくらいまとめて見せるという、アンジエの強い意志をミレーヌは感じ取る。

ミレーヌはアンジエに伝えるのだった。

「陛下が謁見の間でお待ちです」

王位

謁見の間。

ミレーヌだけではなく、ヴィンスやギルバートの姿もそこにあった。

武装した騎士や兵士たちもいる。

対して、玉座に座るローランドは一人だった。

物々しい雰囲気の中、アンジエはローランドに面会していた。

「陛下　単刀直入に申し上げます。王位から退いていただきたい」
首を縦に振らなければ、アンジエは強硬手段に出るつもりだった。

ローランドは自分の髭を撫でながら、無関心そうにしている。

「あの小僧を王にするのか？」

ローランドは大のりオン嫌いだ。

互いに嫌悪しており、下手をすれば私情を挟んで退かない可能性すらあった。

アンジエは頷く。

「はい」

アンジェの計画　それは、王国でもっとも強いリオンを王位に据えるというものだ。

王国が今までにしてきた貴族への仕打ち。

その他諸々も含め、今の王家には信用がない。

ただ　もっとも重要なのは、今のホルファート王家に力がないことだ。

王家の船であるヴァイスを失い、切り札のない王家は他の貴族を従わせるだけの力がない。

色々理由はあるが、これが一番の問題だった。

何故なら　この世界の貴族たちは、強い者に従っているに過ぎないからだ。

王家に不満があるのは口実に過ぎず、たとえ何の問題がなくても王家が弱体化すれば簡単に裏切るのだ。

力があるから皆が従っている。

その根本が揺らいでいる。

以前、内乱騒ぎの時には、王家の力をリオンが代行した。

そのため、不満はあっても多くの貴族が従ったのだ。

理由はリオンが強いから。

「事ここに至つては、いつまでも今の王家を存続させる意味がありません。リオンも覚悟を決めました。陛下　退いていただけますね？」

退かなければ、無理矢理にでも　と言っているようなものだつた。

謁見の間に緊張が広がる。

すると、ローランドは立ち上がり　拍手をした。

「素晴らしい！」

その態度に、周囲は呆氣にとられてしまう。

アンジェが慌ててローランドに問うのだ。

「陛下、冗談を言っているではありませんよ。それに、素晴らしいとは一体どういう意味ですか？」

アンジェの後ろにいるヴィンスなど、苦虫をかみ潰したような顔をしていた。

ミレーヌは額に手を当てて首を横に振っている。

ローランドは、アゴに手を当てると芝居がかった口調で話をする。

「この状況を打開するために、若者たちが頑張っている。それと思うとこの国も捨てたものではないと思わないか？」

「リオンにここまでさせたのは、その王国ですが？」

「うむ、大いに反省しよう」

反省すると言いつつ、態度には少しもその様子が見られない。

ローランドは手を広げる。

「さて、王位だが あの小僧にくれてやるのは個人的に許せないが、この重責から解放してくれるなら喜んで手放そうじゃないか」

それを聞いて、ミレーヌが眉間に皺を寄せ呟くのだ。

「ヌケヌケとよくも」

ヴィンスも手を握りしめている。

「重責だと？ どの口が言うのか」

だが、そんな二人の言葉をローランドは気にした様子がない。

「王とは孤独なものだ。それをあの小僧が耐えられるか心配だが、やりたいというならやらせてやろう。おっと、大事なことを忘れていた。私の待遇はちゃんと考えてくれているだろうね？」

アンジェがローランドに説明する。

「多少窮屈でしょうが、監視付きの隠居をしてもらうつもりです」

小さな浮島を用意し、そこに放り込むつもりだった。

素直に王位を手放してくれたのに、監禁などできない。

もしもローランドを殺してしまえば、不信感を抱く者たちも大勢出てくるだろう。

王が替わることで自分たちの身を心配する貴族たちも出てくるからだ。

そんな中、ローランドが楽隠居をしていると知れば、安堵する貴族たちも多いだろう。

そして、それをローランドは知っていたようだ。

「妥当なところだな。ならば、私の女たちも連れて行くから、その手配も頼んだよ」

ローランドの囲っている女性たちも一緒に、と言われたアンジェは内心では納得できないが頷く。

「後で陛下の女性関係を教えていただければ」

ただ、ローランドはそこまで準備していたようだ。

「それなら心配ない。おい、バーナード」

呼ばれて柱の陰から出て来た大臣のバーナードは、これまた額に

青筋を浮かべながらアンジェに書類を渡すのだった。

「これが陛下の女性関係の報告書だよ。まったく、この忙しい時に余計な仕事を増やして」

どうやら、アンジェたちよりもローランドに怒りを向けているらしい。

バーナードもローランドを睨み付けている。

それはヴィンスも同じだ。

そして、ミレー又は表情が消え、冷たい視線をローランドに向けていた。

アンジェは書類を手に取り中身を確認する。

「こ、これは事実なのですか、陛下？」

アンジェは、自分の顔から表情が消えたのを感じた。

今は酷く冷たい目をしている。

書類には、ローランドの側室だけではなく外で囲っている愛人たちの名前があった。

中には貴族ではない女性の名前もあった。

しかも、子供までいる。

その数が半端ではない。

「実は王都には私が王だと知らない子もいる。連れて行きたいが、その子たちにも生活があるからな。もしも王都に残りたいと言うなら、残してやって欲しい。おっと、ちゃんと面倒は見てくれよ」

アンジェは報告書を握りつぶした。

（どうして私がこいつの尻拭いをしてやらねば いや、落ち着け。リオンを王にするためだ。この程度で済むなら安い方だ。そう、安い方 それにしても数が多いな。陛下 こいつ、いったいどれだけ遊び呆けていたんだ？）

自分たちの王が、まさかここまで酷いとは思ひもしなかった。

噂程度に色々と聞いてはいたが、実際はそれ以上だったのだ。

バーナードがローランドを睨む。

「いったい、我々がどれだけ尻拭いをしてきたことが」

ヴィンスも同様だ。

「ローランド、貴様最初から」

ミレーヌは諦めた顔をしている。

「この人はそういう人なのです。どうせ、王位をリオン君に譲るのも、内心では踊り出したいくらいに嬉しいのでは？」

言われたローランドがぶっちゃける。

「それがどうした？　こんな面倒な立場を替わってくれて、面倒ごとに対処してくれるあの小僧にはお礼を言いたい気分だよ。あいつの苦々しい顔が目には浮かぶと、それだけで幸せな気分になれる。しかも、今後はあいつが苦勞して私の生活を支えてくれるのだからな。ここは素直に“ありがとう”と言ってやるさ」

リオンが聞けば、ショットガンの引き金を引きそうだ。

バーナードがアンジェに説明する。

「実は引き継ぎの準備が進んでいる」

それを聞いて、アンジェは目を見開くのだ。

「私たちが動くと分かっていたのですか？」

バーナードは頷いた。

「正確に言えば、動かなければこちらから動いた。まったく　普段からこれだけ精力的に動いてくれれば」

アンジェが動く前から、ローランドは王宮内の根回しをしていたようだ。

勝ち誇った顔をしているローランドの顔を見て、アンジェは頭痛を覚える。

（リオンがいたら、絶対に悔しがっていたな）

手の平の上で転がされた気がする。

ローランドが自信満々に腕を組む。

「あの小僧に王位をくれてやった方が、一番収まりがいいからな。さて、問題は王宮ではなく領主たちになったな。あいつらは糞面倒くさくて、厄介で、腹立たしくて、それでいて小狡い。アンジエリカ、君にあいつらを従わせる器量はあるかな？」

アンジエはローランドを前に、一度深呼吸をする。

そして。

「もちろんです」

そう答えた。

アンジエたちが去った後。

謁見の間に残ったミレーヌは、王位から解放されて気分爽快！といった感じのローランドに皮肉を言う。

「処刑台に送られなくて良かったですね」

すると、ローランドは見透かしたように言うのだ。

「あの小僧は血が流れるのを嫌うからな。たとえ私を殺すことにな

っても、表向きは殺したことにして裏では逃がしてくれたさ」

ローランドの意見が正しいのをアンジェが証明したため、ミレー
又は言い返せない。

だから、皮肉や嫌みを言うのだ。

「責任ある立場から解放されて嬉しそうですね。そんなに王位がお
嫌いですか？」

「嫌いだな。こんな罰ゲームみたいな椅子が欲しい奴らの気が知れ
ない。もつとも 私はこの椅子にあの小僧が座ることになって良
かったと思っているよ」

「あら？ いつもみたいに悔しがらないのですね。嫌な立場を押し
つけられて満足ですか？」

「私は確かに無責任だが、この大地で生きる民が滅ぶのを見て心が
痛まない程ではないよ。あの小僧は 最後まで戦ってくれるさ」

ローランドはミレーヌに背中を向ける。

「勝つ可能性があるのはあの小僧だけだ。正直、生存競争と言われ
て納得したよ。帝国の皇帝は、無駄なことなどしない男だからな。
その男がここまでするのだ。相応の理由があるのが当然だ」

王国に宣戦布告したのが不思議なくらいだった。

ローランドからすれば、アンジェから聞いた帝国の開戦理由は納
得できるものだったようだ。

「貴方がしつかりして、リオン君に後顧の憂いなく戦わせてあげればよかったのに」

ミレーヌの言葉に、ローランドは振り返るのだ。

「人は強者に従うものだ。それは貴族とて同じだ。いや、貴族の方がより敏感だろうな。弱い王など無意味なのだよ。あの小僧が王家を頼るのはいいが、逆はあり得ない。それにしても、バルトファルトか」

ローランドが後ろで手を組み、窓の外を眺める。

窓の外にはレッドグレイブ家の飛行船が何隻も浮かんでいる。

ローランドは小さく笑った。

「これも因果だな」

その呟きを聞いたミレーヌは、首をかしげるのだった。

ただ、これからの問題もあるため、ミレーヌはローランドの呟きを無視する。

「それよりも、貴族たちは従うでしょうか？ 生存競争などと言われて、素直に従うとは思えません」

ローランドは笑う。

「奴らが素直に従うわけがないだろ。だが、そうだな 可能性は

あるな。ふむ、小うるさそうな連中の弱みを、それとなくアンジェリカに伝えておくか」

「どうして貴方が領主たちの弱みを握っているのですか？ もっと前に教えていただければ」

「こういう時だから役に立つのだ。普段から脅してどうする？ まあ、任せておけ。人の弱みをネタに脅すのは得意だ」

ウキウキしながら裏工作を開始するローランドだった。

王宮の一室。

アンジェは兄であるギルバートと話をしていた。

ギルバートがアゴに手を当てる。

「さて、これからどうする？ レッドグレイブ家の派閥は父上が説得しているが、問題はそれ以外の派閥だ」

帝国との戦いを考えれば、王国全ての戦力をかき集めても足りないくらいだ。

全てを参加させるためには、他の派閥にも協力を願う必要があった。

「素直に事情を説明しますよ」

アンジエの言葉に、ギルバートは首を横に振る。

「生存競争などと言っても、理解できる者など少ないぞ。こちらの話を聞いて、馬鹿にする者たちばかりだろうな」

いくら真実を話しても理解されない。

だが、それでもアンジエは誠意を見せたかった。

「ここで戦わねば、私たちに未来はありません。国のためではない。自分のために戦わせますよ。それに、武力で脅すだけでは」

アンジエの側にはクレアーレがいなかった。

いれば説得にも信憑性が持たせられるのだが、クレアーレを連れてくるとそれだけリオンの勝率が下がってしまう。

何しろ、クレアーレも忙しい。

（ここは私の力で切り抜けなければ）

そう思っていると、部屋の中にボロボロの姿で入ってくる男がいた。

ドアの前にいた護衛たちが肩を貸している。

その姿を見て、ギルバートが苛立った声を出した。

「許可のない者を入れるなと伝えたはずだが？」

護衛の騎士たちが少し狼狽えるが、肩を貸された青年が顔を上げる。

割れた眼鏡。

服はボロボロで全身に打撲の跡がある。

アンジエはその青年を見て驚く。

「クリス？ お前、ここに何をしに来た？」

ボロボロになったクリスは、肩を貸してくれた騎士にお礼を言つて離れた。

そして自分の両足でしっかりと立つ。

「私の実家を説得してきた。父上に叩き出されそうになったが最後は理解してもらった。私もバルトファルトに力を貸すぞ」

クリスの実家は剣術指南の家だ。

その門下生には当然ながら貴族が多く、実力のある騎士たちも多い。

「お、お前」

アンジエもこれには驚いた。

普段、服を脱いでふんどし姿で走り回っているだけかと思ったが、実家を説得してこちらに協力してくれると言うではないか。

ギルバートが驚いている。

「剣聖殿がよく納得したな」

その人となりを知っているギルバートには、信じられない話だったようだ。

クリスがニヤリと笑う。

「話し合いでは無理だったから　木刀で殴り合った。おかげで剣聖の称号も譲ると言われたぞ」

その結果、クリスが勝利したらしい。

アンジェが額に手を当てる。

「すぐに傷の手当てをしろ、馬鹿者が。だが、感謝する」

クリスはアンジェに教えるのだ。

「私だけじゃない。ジルクも、ブラッドも　そしてグレッグも実家の力を借りに向かった」

「あの三人が？　殿下はどうした？」

そこでユリウスの名前が出てこなかったことに、アンジェは気になるのだった。

クリスが歪んだ眼鏡を外す。

「殿下はバルトファルトを迎えに行った」

友情

ロストアイテムの回収は順調だった。

朽ち果てそうな城跡へと入り、そこでモンスターたちを片付けた俺はお宝を前にしてルクシオンと話をしている。

手に取った弾丸を眺めていた。

ゲームでは特別製だったが、これが役に立つかどうかは微妙だろうな。

「これは使えそうか？」

『改良すれば可能ですが、性能を考えると』

使えそうなアイテムもあるが、駄目ならルクシオンたちに改造させて使用するつもりだ。

それにしても、ゲームの知識が随分と曖昧だ。

ロストアイテムの回収に手間取ってしまっていた。

「ファクト お前のお仲間の方はどうだ？」

旧人類側の復活した兵器たち。

その人工智能たちを束ねるのは、ファクトという巨大空中空母の

管理人工知能だ。

『予定よりも五パーセントの遅れが出ています』

「原因は？」

『私の能力不足です』

万能なルクシオンでも、その性能には限界がある。

時間制限さえなければ、きっと完璧に修理もできたのだろう。

「お前で無理なら諦めるか」

そう言って立ち上がると、ルクシオンは俺に話しかけてくる。

『マスターは 』

だが、途中で一つ目を動かして入り口に向けた。

何か来るのかと銃を構えると、そこからやって来たのは 。

「見つけた！」

「殿下、こっちです！」

ダニエルとレイモンドだった。

二人の後ろからやって来るのは、ユリウスである。

「お前ら、何でこんなところに？」

銃口を下げると、三人が俺に近付いてくる。

ダニエルは疲れた顔をしていた。

「殿下に頼まれたんだよ。お前の危機だから、ってさ」

レイモンドも同様だ。

「一人であつちこつち冒険していると聞いたけど、こんな時に何をやっているのさ？ みんな心配しているよ」

帝国との戦争が迫っているのに、俺がいないため不安に思っている生徒がいるらしい。

普段憎まれているのに、こういう時だけは頼りにされるな。

「こつちにも事情があるんだよ。それより、何で俺の友達とこんなところに来たんだ？」

ユリウスに視線を向ければ、ここまで急いできたのか息を切らしていた。

「ク　クレアーレに場所を聞いた。バルトファルト、俺は　お前を連れ戻しに来たんだ」

そんなユリウスの言葉に俺は呆れる。

「は？」

「だから、お前を連れ戻しに来た！ お前は たった一人で戦うつもりだな」

その話を聞いて、ダニエルとレイモンドが驚く。

「え？ いや、いくらお前でも今回は無理だろ」

「帝国だよ！？」

そんな二人を前にして、ユリウスが俺に言うのだ。

「マリエから全て事情を聞いた。バルトファルト、俺は 俺たちはお前に力を貸すぞ」

「今、何て言った？」

ユリウスがマリエから全てを聞いたと言い、俺は苦々しく思った。

あの馬鹿妹は、いったいどこまで話したのだ？

ユリウスは、ダニエルとレイモンドに視線を向ける。

「すまない。二人で話をさせてくれ」

二人が頷いて離れていくと、ユリウスが俺の目を真っ直ぐに見る。いつも思うが、こいつらは黙っていれば無駄に美形だな。

普段の行動が全てを台無しにしているとよく分かる。

「バルトファルト　お前はマリエの兄なんだろう？」

それを聞いて、俺は一瞬理解が出来なかった。だが、すぐにマリエを腹立たしく思うのだった。

「あいつ、話したのか？」

自分から転生者だと喋りやがった。

どこまでも突飛な行動をする妹だ。

少し前に、アイテムを回収してきたことで見直したが、俺の中でまた評価が下がった。

「マリエがお前を心配していた。助けて欲しいと俺たちに頼んできたんだ」

「　お前、マリエの話を信じたのか？」

溜息を吐きながら額に手を当てた。

こいつら、本当に大丈夫だろうか？

マリエが真実を話したということは、前世で俺たちが兄妹だったと伝えたことになるはずだ。

俺なら絶対に信じない。

だが、こいつらは違うようだ。

「当然だ。マリエが真剣に俺たちに伝えてきたんだぞ。信じない方がどうかしている」

「信じる方がどうかしていると思うけどな。お前ら　そんなだから、マリエなんかに騙されるんだよ。あいつの本性を知らないから、そんなことが言えるんだな」

転生者である妹に騙され、地位も財産も失った憐れな連中がユリウスたちだ。

もっと疑った方がいいと伝えようとすると　ユリウスが俺の胸を掴み上げる。

顔を近付け、俺を睨み付けてきた。

「　放せ」

睨み返すが、ユリウスは一步も引かなかった。

「取り消せ。マリエなんか、とはなんだ。マリエは　俺たちにとって大事な人だ」

まだ目が覚めないらしい。

「あいつの話が本当だと何故分かる？　あいつの妄想かもしれないだろうが」

「マリエの目を見れば分かるさ！」

「その程度で人のことが分かるかよ。勘違いだよ。そんなことだから、お前らは駄目なんだ」

容易く騙され、本来の道とは違う道を辿っている。

こいつらを見ると憐れに思えた。

マリエに騙された可哀想な男たちだ。

でも、これだけマリエのことを考えてくれているなら　大丈夫だろうな。

「ああ、そうさ！　俺たちは確かに見る目がない！　周りにも迷惑をかけてきた」

「それが分かっているなら　」

「だが、マリエは俺たちを見捨てなかった！」

「いや、だから　」

こいつは何が言いたいのか？

そう思っていると、ユリウスがマリエについて語る。

「最初は騙されたかもしれない。だが、マリエは俺たちを見捨てなかった。駄目な俺たちを見捨てず、そして引っ張ってくれたんだ」

それはあいつなりの罪滅ぼしではないだろうか？

「そうだな。お前らは駄目だな。だから、俺の手伝いなんてする必要はないぞ」

こいつらを帝国との戦争に参加させるのは避けたい。

これだけマリエのことを想っているのなら、きっと将来的にも守ってくれるはずだから。

「バルトファルト、本気で言っているのか？ お前、本気で一人で帝国と戦うつもりか？ ルクシオンたちですら、勝てるか分からない相手だろうが！ どうしてお前は、俺を頼らない！」

一人じゃない。ルクシオンたちがいる。それに、だ。

「お前らが頼りないからだろうが！ それとも何か？ 俺の代わりに戦ってくれるのか？ 一体俺が 俺が誰のせいで苦労していると思っていやる！」

何も知らないユリウスたちに腹が立った。

どうして俺がこんな重荷を背負わないといけないのか？

どうして俺がしたくもない戦争をするのか？

それというのも、こいつらのせいだろうか！

ユリウスを突き飛ばすと、俺は自分で思っていたよりも溜め込んでいたのか罵り始めた。

「お前らがのんきに過ごしている間に、俺がどれだけ苦労してきた

か分かるか？ マリエの尻拭いのために苦勞して、お前らのせいで苦勞して おまけにお前の国が俺を苦しめたんだよ！ 今まで、一体どれだけ」

こいつらがもっとしつかりしていれば、俺が戦争をする事もなかった。

モブとしてノンビリできたのだ。

筋違いとは分かっている。

ユリウスたちがしつかりしていても、結局こうなったのも理解している。

だが、我慢なんかできない。

ユリウスは黙って俺の話を聞いていた。

「お前らが何の役に立つ？ 何もできないなら、黙っているよ」

その方がいいに決まっている。

すると、ユリウスが拳を振り上げ 俺を殴った。

数歩下がると、ユリウスは声を張り上げる。

「ああ、そうさ！ 俺たちは役に立たない！ だが、マリエが泣いて頼んできたんだ。お前を助けて欲しいと！ だったら、その気持ちに応えてやるのが男だ！」

銃を捨てて拳を握る。

「できないことを偉そうに言ってんじゃねーよ！ お前らなんて、肉壁くらいにしか役に立たないだろうが！」

ユリウスの頬に拳を当てると、殴り返してくる。

「だったら、肉壁にでも何でもなってやる！」

「お前らが死ぬだろうが！」

ユリウスが頭突きをしてくると、額をお互いに付けた状態になった。

本気で怒っている顔をしていた。

「お前は！ お前は死なないのか！」

「」

黙っていると、ユリウスはまた拳を振り上げてきた。

「誰もお前に死んでくれと頼んだ覚えはない！」

そんなことを言うユリウスに腹立たしく思う。

「なら、お前がやれよ！ 俺が何もしないでいいようにお前が！」

「出来るならやっている！ それが出来ないから せめて俺たちは！」

ユリウスの腹に拳を叩き込むと、苦しそうにしていた。

それでも止まらない。

「マリエはお前に死んで欲しくないんだ！」

それが出来たら苦勞などしない。

俺だって死にたくない。

「お前らじゃ役立たずなんだよ！」

「それでも！」

そのまま互いに殴り合っているのを、ルクシオンは見ているだけだった。

遠くでダニエルやレイモンドが、こちらの様子をうかがいながら止めようか悩んでいる姿が見えた。

ユリウスが俺に飛びかかり、胸倉を掴むとそのまま押し倒してきた。

俺に馬乗りになると、ユリウスは目が赤くなっている。

「俺は マリエと出会って良かったと思っている」

急に何を言い出すのかと思えば、また惚気話だろうか？

「だが、お前とも出会えて良かったと 思っているんだ。そんなお前に死なれたら、俺だって気分が悪い」

こいつは何を言っているんだ？

「男に言われても嬉しくないね」

「茶化すな！」

からかってやるとすぐに激昂するユリウスは、涙を流していた。

「確かに俺たちは役に立たない。だが、それでも！ それでも俺たちは、お前に手を貸すと決めたんだ。マリエに頼まれただけじゃない。バルトファルトに いや、リオン、お前に手を貸してやりたいんだ」

「お前らがいると邪魔なんだよ」

参加させないために嘘を言うと、ルクシオンが口を挟んできた。

『いいえ、彼らの力は必要です。マスター、力を借りるべきです』

「ルクシオン、お前」

余計なことを、そう思っていた。

だが、ルクシオンの意見は違う。

『この問題は王国に住む者全ての問題です。マスターが一人で背負おうなどと、おこがましいにも程があります』

俺が口を噤むと、ユリウスが立ち上がって手を差し伸べてくる。

「言い返せないだろ？ 帝国との戦いが避けられないのなら、俺たちだつて黙っていられない。お前が嫌がつても勝手に参加するぞ。そうなると、困るのはお前じゃないのか？」

確かに勝手に参加されて、邪魔されても迷惑だった。

ユリウスの手を取る。

さつさと逃げればいいのに、馬鹿な奴だ。

「こき使つてやるから覚悟しろよ。お前ら、絶対に後悔するからな」

「お前との付き合いで後悔にはなれている。それに、俺たちだけじゃない。ジルクたちも動いているからな」

それを聞いて不安に思う。

「あいつら、また余計なことをしてないだろうな？」

「それは戻つてみないと分からない。それよりも、お前がいなくて王国の民が不安に思っている。戻つて安心させた方がいい。お前は俺たちにとっての希望なんだ」

恥ずかしい台詞をよく言えたものだ。

逆に感心してしまう。

だが、ロストアイテムの回収も一区切りがついたところだ。

さっさと戻ることしよう。

他の四人が何かやらかしていないか心配だし、マリエが余計なことをしていないか気になるからな。

帰りがけ。

飛行船アインホルンの船内で、ダニエルとレイモンドに話すことにした。

色々と隠して話したが 全てを話して受け入れられたマリエを、
少しだけ羨ましく思う。

ユリウスたちのように、疑わずに信じてくれたなら そう考え
てしまうが、俺とマリエは違うので無理だろう。

レイモンドが震えていた。

「リオンでも勝てるかどうか分からないって そこまで強いのか？」
今まで勝ち続けた俺でも勝てないと正直に告げた。

勝ち筋があるとすれば、ほぼ捨て身で挑んで三割程度の勝率だとも。

「だから、今回は参加しろとは言わない」

すると、ダニエルが俺を前に狼狽えていた。

「い、いつもの冗談だよな？　いつもみたいに、実は勝てる見込みがあつて、負けそうだって言っているだけだろ？」

今まで随分と利用してきたが、今回ばかりは強制参加など言えなかった。

「参加するなら死ぬ可能性が高いと思つてくれ。だから、俺はお前たちに参加しろとは言わない。命が惜しいなら逃げた方がいい」

二人が俯く。

レイモンドは眼鏡がずれていた。

「生存競争つて何さ。過去に旧人類と新人類がいたとか、もうわけが分からないよ」

ダニエルも頭を抱えていた。

「そんなの急に言われても困るんだよ！」

そんな二人の前で、俺も肩をすくめて見せた。

「俺だつて困る。おかげでしたくもない戦争をすることになったからな。けど　敵の親玉は確実に潰さないと、俺たちは生きていけないわけだ」

ダニエルが片手で顔を隠す。

「こんなの、どうしたらいいんだよ」

「自分のしたいようにしろ。参加しても、俺はお前らを守れるだけの余裕がない」

レイモンドが俺を見る。

「何で戦うのさ。リオンなら逃げられるよね？」

逃げて待つているのは緩やかな死だ。

この星ではいずれ滅んでしまうし、宇宙に逃げ出しても安住の地が見つかる可能性は低いだろう。

それに、ルクシオンでも全ての人を救えない。

「お前らは逃げていいぞ。俺に付き合う必要はないからな」

そう言うと、二人は肩を落としていた。

ダニエルは悔しそうにしている。

「何で大事な時に逃げていいなんて言うんだよ。今までは散々くそっ」

レイモンドは無表情だ。

「それだけまずい状況って事だよね？　今までみたいに、冗談っぽく言って騙してくれた方がよかったよ」

いくら俺でも、この状況では騙せない。

こいつら、普段から俺を　まあ、いいか。

「みんなに謝っておいてくれ。契約は　約束は、俺の方が守れそうにない、ってさ」

集う

王都には各地から飛行船が集まっていた。

王宮に駆け込むのは、クリスと同様にボロボロになったグレッグだ。

出迎えるのは、こちらも怪我をしているブラッドだった。

グレッグがブラッドに状況を確認する。

「実家から連れて来られるだけ連れてきたぜ！ お前らはどうだ？」

ブラッドが親指を立てて成功したと言う。

「こつちも成功だよ。もつとも、公国 ファンオース公爵家の動きが分からないからね。全ての戦力を持ってこられなかった」

グレッグが悔しがる。

「仕方がないな。だけどよ、随分と集まったじゃないか」

王宮から見える空は、飛行船で一杯だ。

空を覆い隠そうとする勢いだ。

今も、次々に集まってきている。

そんな二人のところに、ジルクが駆け寄ってきた。

「グレッグ君も間に合いましたね」

「おうよ！ それより、お前の方はどうだ？」

尋ねられたジルクは、二人のようにボロボロではなかった。

だが、手がインクで汚れている。

書類仕事に忙しそうだった。

「王宮内は色々と大変でしたよ。陛下が王位から退いたのに、その手続きが淡々と進むんですからね。おっと、その話はいいとしてすぐに補給などが必要な書類をまとめてください。王都にある補給物資を配布しますから」

ブラッドが驚く。

「気前が良いね。こっちは補給を受けられないかもって覚悟していたのに」

王都に押し寄せる飛行船の数が多い。

そのため、王国から補給物資をもらえとは考えていなかった。

ジルクが微笑む。

「この期に及んで出し惜しみを考える役人たちもいましたけどね。黙らせておきました。ついでに、懐疑的だった方々の説得も終

わかりましたよ。苦労しましたけどね」

一体何をしたのか聞きたいグレッグだったが、ジルクがいい笑顔をしているので止めておいた。

「まったく、お前が一番怖い奴だよな」

三人がいるところに、一人の女性がやって来た。

学園を卒業したクラリスだ。

大臣の娘であり、実家は文官職の者たちと繋がりが強い。

ジルクと同様に、書類仕事に忙しそうだった。

「三人揃って何をやっているんだか。それよりも、リオン君がいえ“リオン様”が戻られたわよ。クリス君はそちらの出迎えに向かったけど、三人はここでノンビリしていて良いのかしら？」

言われて、グレッグたちが慌てて出迎えに向かうのだった。

その様子を見送るクラリスは、少し嬉しそうにしている。

「まったく 流石にここまで上り詰めるとは思っていなかったわ」

アインホルンが王都に来ると、まさかの大艦隊が待ち受けていた。

空中でアインホルンに道を空ける飛行船たち。

その数に驚いてしまう。

「いったいどこからかき集めた？」

ルクシオンが言う。

『一千二百隻を超えていますね。まだ増加中です。こちらに向かつてくる飛行船がいますから』

壮観だった。

『アンジェリカは約束を果たしましたね』

「そうだな。俺は アンジェを信じていなかったのかな」

ここまでするとは できるとは思っていなかった。

どうやら、俺が思っている以上にアンジェは凄いらしい。

『マスター、王国が一丸となれるなら勝率は大きく上がります』

「どれくらいだ？」

『五割に届きます』

「そいつは凄いな」

これだけ集めて五割か。

多いのか少ないのか いや、多いのだろう。

「お前たちで三割なのに、残りの二割を王国が埋めるのか？」

『帝国の邪魔な戦力を相手にしてもらえるなら、勝率は大きく上がります』

「そいつは凄いな」

『多くが沈むことになりますが、勝率は上がります』

「敵も味方も大勢死ぬな」

こんな決断はしなくなかった。

だが、ルクシオンは俺の考えを否定する。

『マスターはまだ勘違いをしていますね。彼らを巻き込んだのはマスターではありません。彼らの戦いにマスターが巻き込まれたのです』

巻き込んでしまった、という気持ちの方が強いけどね。

『マスターが勝利するためには絶対に必要な戦力です』

俺はルクシオンに本音をこぼす。

「俺さ。王国は絶対に協力しないと思っていたんだ」

『はい』

「王族はローランドを筆頭に酷いし。あ、でもミレーヌさんは別かな。エリカも良い子だ」

「そうですか。ミレーヌへの評価の高さが気になりますけどね」

「貴族も酷い奴らが多いから、日和見を決め込むか帝国に味方すると思っていたよ」

「実際にそうした動きがありました」

「なら、なんでここにこれだけ戦力が」

「ユリウスたちが動いた結果です。お忘れですか？ 彼らの実家は名門の大貴族です。そして、彼らが実家を説得しました」

名門貴族たちが従うから、他の貴族たちもそれに従ったのか？

「あいつら 役に立つんだな」

「驚きですね」

アインホルンが王宮にある飛行船の発着場へと来ると、そこに待っていたのはアンジエだった。

こちらに向かって大きく両手を振っている。

「マスター、アンジエリカが待っていますよ。そして、アンジエリカは約束を果たしました」

ルクシオンが何を言いたいのかすぐに分かった。

俺に認めてやれと言っているのだろう。

「分かっているさ」

アインホルンが発着場に降り立ち、タラップが用意されると俺はすぐにアンジエのもとへと向かった。

駆け寄ってくるアンジエが俺に飛び付いてくる。

強く抱きしめられた俺は、アンジエの腰に手を軽く添える。

アンジエは涙声だった。

「心配させるな。連絡くらいしろ」

俺から連絡が来ないため心細かったのだろうか？

ここまで想ってくれる人がいるというのは、何だか嬉しいものだ。

アンジエが少し離れ、俺の顔を見る。

「王都に各地から戦力が集まっている」

「うん」

「悪いが、フレーザー家や他の国境を守る貴族たちは動かせない。それでも、これだけの戦力を集めた」

どこにこれだけの戦力が温存されていたのだろうか？

お前ら王国はもつと最初から本気を出せ、と言ってやりたい。

「エリヤの実家は大変だな」

エリカの婚約者であるエリヤは、国境を預かるフレーザー侯爵家の跡取りだ。

あいつの実家はラーシエル神聖王国への守りであるため、動かせないらしい。

「大変なのはこちらの方だ。だが、エリヤは実家を説得してきたぞ。お前を全面的に支持すると宣言してくれた」

エリヤの奴も頑張っているようだ。

もし、俺が帝国に勝利したら、きっとエリヤは次の王様候補だな。

「そいつはありがたいね」

こうなると、終わった後のことは安心だろう。

廃嫡されたが、ユリウスも 男に走った弟のジェイクもいるかな。

王国は続くというわけだ。

アンジェが俺の腕に自分の腕を絡め歩き出す。

「リオン、お前と話をしたいという公爵がいる」

「公爵？」

はて？ いったい誰だろうか？

王宮にある一室。

そこに急いで駆け込むと、待っていたのはお茶の用意を終えていた師匠だった。

師匠は微笑んでいる。

「ミスタリオン、乱暴にドアを開けてはいけませんよ」

普段と変わらない師匠 いや、公爵は、俺に席に着くように促すのだった。

「どうして教えてくれなかったのですか、師匠！？ 師匠が王族でしかも公爵だなんて」

「名ばかりの公爵ですよ。何の権限もありません」

身分が高い人であるのは何となく察していたが、まさか公爵だとは思っていなかった。

俺以外にも知っている奴は少ないはずだ。

学園では、みんな師匠のことをマナーの講師程度に考えている。

他の教師の態度などから、身分は高いのだろうと何となく思っていた。

だが、その程度だ。

まさか公爵だとは思わなかった。

師匠は俺とテーブルを挟んで向き合うように座り、そして色々話をしてくれた。

「ミスタリオンが生まれるよりもっと前に、王位継承権を巡って色々あったのです。その頃に、私は苗字とミドルネームと一緒に色んなものを捨てましたからね」

先王の弟　王弟だった師匠は、名前も地位も捨ててローランドに王位を譲ったらしい。

「師匠が王様になれば良かったのに」

ついつい、本音がこぼれてしまった。

師匠が王様なら、きっと何の問題もなかったはずだ。

「私は王位から逃げたのです。王位を継いでいたら、きっと今よりも大変なことになっていたでしょう。あの時の選択を後悔はしていません。ですが　今は少し後悔をしています」

師匠の後悔。

それはこれまで起きた数々の事件と 俺だった。

「ミスタリオンに頼りすぎたと後悔しています」

「俺に頼りすぎた？」

「ファンオース公国、そして共和国、そして内乱 本来であれば王国は自らの力で切り抜けなければならなかったのです」

そう言えば、師匠が俺の背中を押してくれたのは公国戦だけだったな。

あの時も強要はしなかった。

「逃げた私が言える立場にないのは分かっています。ミスタリオン、どうか我々に力を貸していただきたい」

師匠が俺に頭を下げてくる。

「頭を上げてください、師匠」

師匠がゆっくりと頭を上げる。

俺は師匠の用意してくれたお茶を飲む。

うまい。

「俺はね、師匠。もう、戦うと決めたんです。お願いされなくてもたとえ、嫌がられても戦いますよ」

師匠が俺を見る目は、どこか悲しそうだった。

「ミスタリオンは逃げたいと思わないのですか？」

大事な人たちを連れて逃げることも考えたが、どうにも自分はそれが出来ないようだ。

「自分でも思っていたより責任感が強いようです」

いつもの調子で言えば、師匠が組んだ手に額を乗せる。

「また私は若者に重荷を背負わせることになるのですね。分かってはいましたが、辛いものがあります。いつそ自分が、と思うこともあります」

俺とローランドのことをいつているのだろう。

俺はともかく、ローランドのことは気にしなくて良いと思う。

あいつは苦しむべきだ。

いつそ、あいつだけは道連れにしてやりたい。

師匠が顔を上げる。

「私も微力ながらミスタリオンを支えましょう」

師匠が手を貸してくれるなら百人力だ。

俺は席を立つ。

「助かります。それから、お茶　おいしかったです」

結局、俺は師匠みたいになれなかったな。

師匠が俺に伝えてくる。

「そろそろ謁見の間の準備も終わる頃でしょう。皆がミスタリオンを待っていますよ」

大勢の前で、毎度も煽ってきたな。

「人前で話すのは苦手なんですけどね」

そう言うと、師匠は少し驚き　その後すぐに笑顔になった。

「ミスタリオンはジョークもお上手ですね」

いえ、本音です。

謁見の間。

玉座の前に立つ俺の前には、貴族たちが整列していた。

「よくこれだけ集まったな」

俺の横　舞台袖のような場所には、アンジェが控えていた。

ユリウスもそこにいる。

整列した貴族の中には、親父や兄貴の姿もある。

学園を卒業した先輩たちの姿もチラホラ見かけ、エリヤも緊張した様子でこちらを見ている。

俺は深呼吸をしてから、話をするのだった。

「結成式だの何だのと集めたが、そもそも俺は全員を奮い立たせる演説などする気はない。元から集まるとは思っていなかったから、スピーチを考えていなかったんだ」

ざわつく謁見の間。

俺は気にせず続ける。

「だが、これだけの戦力が集まった。王国も捨てたもんじゃないな」
ヘラヘラしてやれば、小声で俺の悪口を呟く声がある。

こいつらも、好きで俺に協力しているわけじゃないのだ。

だが、そんな連中を　グレッグたちが睨んで黙らせていた。

どうやったのかは知らないが、実家の嫡男として返り咲いたらしい。

そして、帝国との戦いに参加するようだ。

少し前は女に騙され、世迷い言ばかりだったこいつらも成長したものだ。

俺は姿勢を正した。

「正直、期待なんてしていなかった。また、俺一人で解決するのかと思っていたからな。だから　言わせてもらう」

どうせこれで最後だ。

「事情を聞いて怪しんでいる連中もいるだろうが、実際に帝国が攻め込んできているのは事実だ。なりふり構わず動いているのも知っているだろう？」

これが生存競争だと言われて納得する奴は少ない。

ルクシオンから事情を聞いたアンジェたちならともかく、マリエから事情を聞いて納得したユリウスたちが例外みたいなものだ。

「帝国は強い。切り札まで持ち出してきやがった。だから、今回は俺だけじゃどうにもならない。力を貸してください」

頭を下げる。

謁見の間が一瞬静寂に包まれ、そして先程とは違うざわめきが広がった。

本来であれば、上に立つ人間は簡単に頭を下げてはならない。

それは分かっているが、俺に出来る誠意の示し方は他になかった。

普段のように煽ってくると思構えていた貴族たちが、俺の態度に驚いている。

「明日は季節外れの雪でも降ってくるかな？」

「槍が降ってくるのではないか？」

「バルトファルト公爵が頭を下げたと言ったら、誰も信じてくれそうにないな」

笑っている貴族たち。

俺はこの態度に驚いて顔を上げた。

すると、整列していたジルクが肩をすくめている。

「事前にしっかりと説明させてもらいましたよ。貴方はいつも詰めが甘いですからね」

お前に言われたくないと思ったが、確かにいつも詰めが甘い。

だから、こんな苦勞をすることになってしまう。

整列している貴族の中には、モットレイ伯爵　ヴィンスさんの
派閥の貴族もいた。

「リオン殿　いえ、リオン様、侮らないでください。私たちとて意地がある。未来の我が子のために、命を賭けるのを恐れるのも？」

馬鹿にするなど言っているのだろうか？ それなら 頼もしいくらいだ。

そう思っていると、モットレイ伯爵が膝をつく。

「そしてこの命 リオン様に預けましょう」

「え？」

俺が驚いている間に、全員が膝をつく。

「貴方は勘違いをしています。我々が頼られるのではない、貴方が頼られているのだ」

謁見の間の貴族や騎士たちまでもが、俺の前に膝をついた。

モットレイ伯爵が言う。

「改めてこちらからお願いいたします。今一度、王国のためにお力をお貸しください。それが、我らの願いです」

罵声が飛び交うと思っていたのに、逆に貴族たちから力を貸せと頼まれた。

ジルクは一体どんな説得を行ったのだろうか？

「 全員立て」

貴族たちが俺の命令に従い立ち上がる。

中には不満そうにしている奴もいるが、目を輝かせている奴もいる。

全員が納得していないのは分かっていた。

それでも、力を貸してくれるようだ。

俺は謁見の間に視線を巡らせ、感謝を口にする。

「ありがとう。これで勝てる見込みが」

すると、謁見の間に兵士が飛び込んできた。

「ファンオース公爵家の艦隊が接近中！ 共和国の艦隊もこちらに向かっていると報告が来ています！」

謁見の間に緊張が走った。

三位一体

王都上空。

共和国から派遣されてきたのは、イデアルによって建造された飛行船だった。

あの戦いを生き延びた飛行船は、今では六大貴族たちによって分割管理されている。

その戦力を率いてやって来たのは。

「レリア！ 来てくれたのね！」

レリアだった。

ノエルが近付くと、レリアは両手で頭を抱えている。

「私だって本当は来なくなかったわよ！ けど けど！ ここであいつの敵に回ったら、絶対に酷いことになるから！」

涙を流しているレリアの側では、クレマンがオロオロとしていた。

共和国の旗艦には、聖樹の苗木が存在している。

レリアたちも、考えていることはノエルたちと同じだった。

聖樹の苗木からエネルギーを得て戦うつもりだ。

普通の飛行船よりは強いだろうし、ノエルも期待する。

「ありがとう。本当に感謝しているわ」

「私は打算込みだけどね」

「それでもいいのよ。　私はリオンを助けたいから」

そして、レリアの側にはセルジュの姿もある。

以前よりも少し老けたように見える。

ノエルがセルジュに声をかける。

「セルジュも来てくれたのね」

セルジュはあまり喋ろうとしなかった。

「　借りを返したいだけだ」

クレマンが、ノエルに事情を話すのだった。

「ノエル様、実は共和国でも艦隊を派遣することに不満の声がありました。それを、エリク殿が黙らせたのです」

「エリクが？」

かつて自分に首輪を付け引きずり回した男が、王国のためにと軍隊を派遣したのを聞いてノエルは複雑な気分になる。

「セルジュ殿も同じです。セルジュ殿は、あれから随分と苦労されました」

レリアは肩を落とす。

「うちに恨みを持つ国が、空賊の真似事をしてくるのよ。それを、セルジュが一人で戦って」

共和国では、セルジュはいいようにこき使われているようだ。

そんなセルジュだが、空賊退治には積極的に参加していた。

本人もそれが罪滅ぼしになると考えているのか、常に戦場に身を置いている。

「セルジュ、あんた」

「この程度で許されるなんて思っていない」

どこか死に場所を求めているようにも見えるセルジュだった。

「姉御おおお！」

そして、共和国の艦隊を率いる実質的な司令官であるエリクは、マリエのところに來ていた。

マリエがエリクの頭を撫でる。

「来てくれたのね、エリク」

「はい！ 姉御の危機だって言われたら、いても立つてもいられますでした。反対するユーグをぶん殴ってきましたよ」

「そ、それはやりすぎじゃないの？」

エリクは涙を拭う。

「姉御のために頑張らせてもらいます！ それはそうと、そちらの女性はどう？」

エリクが見たのは、マリエと話をしたそうにしているヘルトルーデだった。

エリクに誰？ と言われ、不満そうにしている。

「共和国の六大貴族様には眼中にも入らないのね。ま、それはいいわ。久しぶりね、駄目な聖女様」

マリエは照れる。

「あんたも来てくれたのね」

エリクはマリエが聖女と呼ばれ「姉御凄え！」と大喜びである。

ヘルトルーデは溜息を吐く。

「あんたも駄目な男ばかりに好かれているわね。それはそうと、新

しい王様は誰になったのかしら？」

マリエは首をかしげる。

「新しい王様？」

「あら、聞いていないの？　こちらにはローランド王が王位を退くと通達が来たのよ。この時期に面倒なことをすると思ったけれど、よく考えれば正しくもあるわね」

ガタガタの王国を建て直すために、もつとも穏便に事を進めるなら新しい王を用意すれば良かった。

これまでとは違い、新しい血筋があればいい。

ただし、誰もが認める血筋　力が必要だった。

普通なら大貴族がその有力候補だが、王国には全ての条件をクリアする存在がいる。

ヘルトルーデは腕を組む。

「新しい陛下に恩を売れば、ファンオース公爵家も安泰だからね。ここは帝国よりも王国に力を貸した方がお得なもの」

そう言うと、エリクからツツコミが入る。

「俺は王国内の事情にそこまで詳しくないが、他国の動きを見ると帝国寄りに動いている国がほとんどだが？　あんた、損得に関係なく来たんじゃないの？」

言われたヘルトルーデが顔を赤らめる。

「う、五月蠅いわね。こっちにも色々と事情があるのよ」

マリエは二人を前にして、少し安堵していた。

「よかった。これで兄貴は一人じゃないわね」

マリエを見て、ヘルトルーデが心配そうにする。

「あんた、前みたいない元気がないわね」

「そ、そう？ まあ、帝国との戦いを前に、緊張しているのかもしれないわね」

エリクが驚く。

「え！？ 姉御も戦場に出るんですか！？」

マリエは頷き、王都上空に浮かぶ一隻の飛行船を指さすのだった。

「あの子に乗るわ。リコルヌ 綺麗な船でしょ」

リコルヌを見て、すぐにエリクは気が付いたようだ。

「あの飛行船、もしかして聖樹を積み込んでいませんか？」

「あら、気付いたのね。そうよ。聖樹を積み込んだわ」

そして、ヘルトルーデもリコルヌを見て気が付く。

「王家の切り札と雰囲気似ているわね。貴方が乗り込むのも、それが理由なのかしら？」

かつての王家の船　ヴァイスは、聖女が乗り込むことで本来の性能を発揮した。

だから、ヘルトルーデもそう思ったようだ。

「本当は沈めたままにしておきたかったのにね」

マリエは、ヴァイスを再び利用しようとするリオンの気持ちを考える。

「きつと兄貴は、この子を使いたくなかったはずよ」

リコルヌを使うと言うことは、マリエだけではなく　オリヴィアやノエルの力も必要になってくる。

マリエは手を握りしめる。

（私がみんなを守らないと。せめてそれくらいは　　）

控え室。

オリヴィアは着替えを終えて、リオンと向かい合っている。

リオンは微妙な表情をしていた。

「本当に戦場に出るのか？」

心配しているリオンの顔を見て、リビアは少しだけ嬉しくなる。

自分の身を案じてくれているからだ。

だが、同時に腹も立つ。

「リオンさんだけを戦わせると、もう帰ってきそうにありませんからね」

リビアの言葉に、リオンは何も言い返さなかった。

（この人は、放っておくと手が届かなくなりそう）

リビアはリオンの手を握る。

「リオンさん、この状況はアンジェが作ってくれました」

「本当に感謝しているよ。俺なら絶対に無理だった」

「だから、ここから先は私がお手伝いをします。私と、ノエルとそして、マリエさんがリコルヌに乗ります」

今のリコルヌには、王家の船が積み込んでいた装置がある。

そして、聖樹の若木も積み込んだ。

装置を動かすために、リビアとマリエが乗り込む。

聖樹の若木を使用するため、ノエルが乗り込む。

そうすることで、リコル又は決戦兵器となり得るのだ。

リビアがリオンに抱きつくと、背中に手を回した。

「リオンさん、今度は私が頑張ります」

リオンがリビアの頭を優しく撫でる。

「危なくなったら逃げていい。そうしてくれないと、俺が安心して戦えないから」

リビアは顔を上げてリオンの顔を見た。

本当に心配しているようだが、今のリオンは自分の命を軽く考えている。

「もしもリオンさんが死んだら、私は生きている意味がなくなりま
す」

「いや、そんなことは」

「あります！ 私は 私はリオンさんから沢山のものをもらいました。まだ、私はお返しをしていないんです。それに ずっとリオンさんと一緒にいたいんです」

顔をリオンの胸に埋め、リビアは涙を流す。

「私はアンジェのように、リオンさんのために働けません。だから、ここで頑張らないと　みんなと一緒にいる資格がないんです。私にも手伝わせてください。今の私には、これくらいしか出来ないから」

リオンのために頑張ろうとした。

だが、出来たことは　少ない。

アンジェのように王国をまとめ上げることも出来なければ、ノエルやマリエのように伝を頼ることも出来ない。

それがリビアには歯がゆかった。

「リオンさん、約束してくれませんか？　絶対に死なないでください」

「それは　無理だよ。流石に生きて帰れると約束が　」

今回の戦いはそれだけ厳しい。

リオンはそれを覚悟しつつも、どこか命を投げ捨てているようにリビアには見えた。

「　リオンさん、自分の命を軽く見ていませんか？」

「え？　そんなことないって。俺は自分の命が重いと理解しているよ。だってほら　死ぬのって怖いし」

ヘラヘラと笑って見せるリオンを見て、また嘔を吐いているとリビアは確信する。

「嘔を吐きましたね。リオンさん、嘔を吐く時の癖が出ましたよ」

「嘔!？」

自分でも知らない癖を見抜かれ、リオンは慌てて顔を手で触り確認する。

リビアは、リオンの事をよく見ている。

だから、嘔にも気が付くようになった。

「沢山の人が、リオンさんが戻ってくるように祈っています。リオンさんが死んだら、悲しむ人が沢山います。もちろん、アンジェやノエル　そしてご家族の皆さんも悲しみます。沢山の人が悲しみますよ」

それを聞いて、リオンは暗い表情になる。

「でも、一番悲しむのは私です」

「え？」

「リオンさん、私は貴方を愛しています。だから、死なないでください。私の大好きな人を奪わないでください」

リビアが強くリオンを抱きしめる。

リオンは本音を吐露する。

「俺だって戻ってきたいんだ。死にたくない。けど」

そんなリオンにリビアが怒鳴りつける。

「いい加減にせんね！」

「え？」

リビアの言葉に、リオンは度肝を抜かれる。

感情が高ぶってしまい、リビアは地元の言葉が出てしまったが気にしない。

「いつまでグチグチ言っておると！ 男ならもっとしっかりせんね！」

「は、はい！」

リオンがリビアの剣幕に驚き、姿勢正しく返事をする。

リビアは口元を押さえ、そして少し恥ずかしくなったので顔を赤らめた。

「す、すみません。地元の言葉出てしまいました。で、でも、リオンさんを心配しているのは本当ですよ」

「う、うん」

リオンが微妙な顔をしているので、リビアは両手で顔を隠す。

「ごめんなさい。今まで隠していたんですけど、声に出ちゃって」
恥ずかしがっているリビアを見て、リオンは笑顔を見せた。

「いや、驚いたけど大丈夫。その 可愛かったし」

そう言われて、リビアはもっと顔を赤らめるのだ。

そんなリビアを見ながら、リオンは言う。

「そうだよな。生きようとしないと駄目だよな。それに、こんなに可愛い婚約者を置いて死ぬとか勿体なさ過ぎるし」

リビアは頬を膨らませ、リオンの服を指でつまむのだった。

「納得できません。さっきまで駄目で、私の方言を聞いたら納得するなんて」

「いや、うん。なんか笑ったらスッキリしたよ」

リオンがリビアに抱きつき、そしてお礼を口にする。

「ありがとう、リビア。これで俺も頑張れそうだ」

そしてリビアは気が付く。

（ リオンさん、また嘘を吐いた ）

リオンがリビアを安心させるために、嘘を吐いたと見抜いてしまった。

それが悲しく、同時に嬉しくもある。

（なら、私が頑張らないと）

リオンを絶対に死なせないと、リビアは決意するのだった。

窓の外に浮かぶりコルヌを見ていた。

部屋にいるのは俺とルクシオンだけだ。

「クレアーレの奴、やりたい放題だな。ヴァイスの装置を秘密で積み込んでいるとか、勘弁して欲しいよ」

クレアーレへの文句を呟くと、ルクシオンが俺に話しかけてくる。

『マスター、オリヴィアとの話ですが、本気で命懸けの作戦を止めてくれるのですか？』

その問いかけに、俺は目を伏せながら答える。

「今更作戦の変更はない。俺は命を賭けるし、リビアたちを死なせるつもりはない。俺の命と引き換えでも、リビアたちは守る」

あの場では生きて戻ると約束をしたが、俺から言わせてもらえれば 命を賭けないのは敵にも味方にも悪い。

これが戦争ならどうでもよかった。

ただ、生存競争　生きるか死ぬかの戦いだ。

それに、俺に大事な人がいるように、敵にも大事な人たちがいるわけだ。

「戦争って嫌だな。なんで人間は戦うんだろうな」

「人間だけが同種で争うわけではありませんけどね」

「滅びるまで戦えるのは人間だけだろ」

旧人類と新人類の戦いが、まさに滅びるまで殴り合っていた。

そして、今は俺が帝国と戦うことになった。

「俺が生き残るって事は、帝国の連中が　」

「敵に情けをかけるよりも、味方が多く生き残れるようにする方が効率的です。マスター、帝国はマスターの提案を拒否しました」

どちらも生きていけるように、俺は帝国に提案をした。

魔素を大気中にばらまく装置を用意するから、戦争を回避しよう
同じ星で生きていく仲間でいよう、と。

だが、帝国の人間からすれば、装置のない場所では生きていけない。
い。

そんな負担を受け入れるわけがなかった。

逆に、俺たちに魔素が届かない場所を用意するから、そこで暮らせと言われたら　　やっぱ拒否するだろうな。

俺一人なら納得できるが、大勢を巻き込むとなると無理だ。

『オリヴィアに嘘を吐いたのですか？』

「嘘も方便だろ？　別に絶対に死ぬってわけじゃない。運が良ければ生き残れるさ」

誰かを叩き落とさないと生き残れない世界　　あのゆるふわな乙女ゲーの世界にしては、酷く残酷な世界だよな。

アルカディア

「アルカディア、出力上昇！」

「出力、三十パーセントで安定！」

「いつでも動けます！」

慌ただしく兵士たちが動き回るのは、アルカディアのブリッジだった。

移動要塞のブリッジはとても広く、バルトルトはそこからの眺めを見ている。

外にはモンスターたちだけではなく、帝国の戦力がほとんど集結していた。

「いよいよだな」

軍勢力だけではなく、外交も駆使して王国を追い詰めようとした。

だが、王国の抵抗もあって、目標としていた成果は得られていない。

バルトルトの横には、アルカディアの主人であるミアが緊張した様子で座っていた。

今も、ミアは戦争に反対の立場だった。

だが、バルトルトは絶対にこの戦争を回避しない。

（ミア、お前はそのまま優しい子でいてくれ。全ての罪はわしにある）

自分たちが生き残るために、旧人類側の代表である王国を滅ぼすのだ。

その罪を娘に背負わせるわけにはいかなかった。

「 発進せよ」

バルトルトの声により、アルカディアをはじめとした大勢の飛行船が動き出した。

ミアは俯いてしまう。

「ごめんなさい」

王国にいる友人たちのために泣いているのだろう。

（お前は優しい子に育ったな。そんなお前のためなら、わしはいくらでも罪を背負おう）

泣いているミアに、バルトルトは声をかけなかった。

アルカディアにある一室。

そこは序列第一位から十位までの騎士たちの休憩所だった。

部屋は豪華な内装で、騎士たちのために使用人たちが世話をしてくれる。

帝国の剣聖　　リーンハルトは、グラスの中にあるジュースを見ていた。

「凄いですよね。これだけの物体が動いているのに、揺れていませんよ」

グラスの中の液体が揺れていないのを確認してから、一気に飲み干すとメイド服姿の女性に投げて渡していた。

その様子を見たフィンが目を細める。

「リーンハルト、態度が悪いぞ」

「おゝ、怖い。先輩ってば優しいですね」

ヘラヘラしているリーンハルトは、新しい飲み物を受け取るとまた眺め始める。

「先輩、少し緊張していませんか？　大丈夫ですよ。情報では、王国に味方した国は少ないですからね。それに、国境を預かる貴族たちは動けないそうですから」

油断しているリーンハルトに、フィンが釘を刺す。

「王国にはリオン　バルトファルト公爵がいる。忘れたわけじゃないよな？」

「先輩が気にかけているのも知っていますよ。それに、最重要人物ですからね。その公爵を倒せば、戦争も終わったようなものですし」

フィンは床に視線を向ける。

（どうして俺たちは戦わないといけないんだろうな）

フィンは王国での思い出が頭をよぎる。

あの楽しかった日々は、二度とは戻ってこないのだ。

自分が帝国側で、リオンが王国側だから。

それは理解しているフィンだが、納得できなかった。

ただ、戦う以上は勝ちに行くつもりだ。

「公爵が出てくれば俺が相手をする」

誰にも譲りたくないという気持ちと、同時に危険すぎて他に任せられないという思いがあった。

それを聞いたリーンハルトが肩をすくめる。

「なら、僕には王国の剣聖を譲ってくださいよ。それと、剣聖には息子がいましたよね？」

フィンがクリスを思い出す。

「クリスか？ 確か、王国では剣豪と呼ばれていたな」

「そう、その人です！ 剣聖は年齢的に全盛期を過ぎているかもしれませんが、それでも僕に譲ってくださいよ。確か、クリスはファンオースの黒騎士を倒したはずです。少しは楽しめます」

ファンオース公国の英雄である黒騎士を倒したのは、公式ではクリスになっている。

そのため、リーンハルトはクリスと戦いたいのだ。

それはまるで遊び感覚だった。

「状況次第だ。だが、公爵が出て来たら俺を呼べ。あいつは危険だからな」

他の騎士たちは納得できないような顔をしていた。

そして、フィンの側にいたブレイブが話しかける。

『相棒、あいつらが出て来たら複数で叩かないと駄目だぜ』

「分かっている。だが、リオン一人に魔装まそうを持った騎士を何人も付けたくない」

帝国は数では勝っているが、それでも不安がないとは言えない。

魔装と呼ばれる魔法生物をまとった騎士の数は少ない。

対して、リオンの側は旧人類の兵器たちが集まっている。

（アルカディアを沈められるとは思えないが、用心するに越したことはないからな）

ホルファート王国の王宮では、帝国が動き出したという知らせを受けて大騒ぎになっていた。

「艦隊の移動はどうなっている！」

「まだ、二割が目的地に到着していません！」

「急がせろ！ 帝国の奴らをこの国に入れてはならん！」

王宮内では騎士、軍人たちが走り回っている。

文官たちも書類を持って慌ただしく駆け回っていた。

メイドたちも忙しそうに働いている。

そんな中 リビアはリコルヌに乗り込むために廊下を歩いていた。

（また戦争が始まる）

公国との戦いや、共和国での戦いを思い出してしまう。

（その度にリオンさんが傷ついて だから、今度は）

後ろにはノエルと カイルの母親であるユメリアが付いてくる。

ユメリアは聖樹の若木を操作するのに必要と判断し、リコルヌに乗せることになった。

「ユメリアちゃん、本当に大丈夫？」

ガチガチに緊張したユメリアを心配するノエルも、やはり緊張した様子だった。

ユメリアはぎこちなく頷く。

「だ、大丈夫です！ それに、カイルも一緒に乗り込みますから」

マリエの付き添いでカイルも乗り込む予定だ。

王宮の飛行船の乗り場へと向かうと、そこにはアンジェの姿と一緒に マリエの姿もあった。

「アンジェ」

その姿を見て、リビアは少し驚くのだった。

リコルヌに乗り込むタラップの前に来たマリエは、そこにいたアンジェリカと鉢合わせとなる。

聖女の衣装に身を包んだマリエは、アンジェリカが苦手だった。

マリエの後ろにいるカイルとカーラが、アンジェリカを見て困っている。

何しろ、マリエはアンジェリカから婚約者を奪った過去がある。

これまでも、出会えば鋭い視線を向けてくる相手だ。

今も何を言おうとしているのか分からない。

マリエがリコルヌに乗り込もうとすると、アンジェから呼び止められた。

「待て。少し話がしたい」

マリエはタラップに乗せた足を戻して、アンジェリカに振り返った。

「何よ？ 文句なら戻ってから聞くわよ」

何を言われるのだろうか？

そう思ったマリエだが、内心では何を言われてもよかった。

（こいつの人生を私が狂わせたのよね。なら、文句くらい聞いてあげないと）

次がどうなるか分からない。

すると、アンジェリカは右手で自分の左手の肘を掴み、視線を下げてマリエに頼む。

そうすることで大きな胸が強調されるのが、少しだけマリエは羨

ましかった。

「リコルヌにはお前の力が必要だ。頼む　リオンを助けてやって欲しい。私では、ここから先は役に立てない」

重要なのはリビア、ノエル　そしてマリエの三人だ。

クレアーレは、リビアー人でも装置が完全に動くように改修を終えていた。

アンジェリカが手伝えることは何もない。

頼まれたマリエは、拍子抜けてして呆れるのだった。

「言われなくても頑張るわよ。それより、なんで私に頼むのよ？あんたからすれば、私は憎い相手じゃない」

言われたアンジェリカは、マリエに初めて笑顔に向けた。

それはなんの裏もない笑顔だった。

「何度も憎んだことはあったよ。だが、私はお前に感謝しているのさ」

「感謝？」

「お前のおかげでリオンやリビアに出会えたからな。私にとって、今はユリウス殿下よりもリオンの方が大事だ。そのリオンのためなら、誰にだって頭を下げるさ」

マリエは下を向く。

（何よ、悪役令嬢の癖に。 あんた、本当にいい女じゃない。こんな、私が凄く惨めよ）

以前はアンジェリカに勝ったと ユリウスを奪ってやったと思
っていた。

その自分の醜さがマリエは嫌になる。

それに、自分を選んだユリウスは、それが原因で王太子の地位を
失った。

マリエからしてみれば、自分のせいで大勢を巻き込んでしまった
だけだ。

大勢が不幸になった。

（あゝあ、やっぱり私って駄目な女よね。 ろくでもない男ばかり集
まるわけだわ）

マリエは顔を上げると胸を張った。

精一杯の虚勢を張る。

「私が手を貸すんだから、絶対に勝てるわよ。 これでも私は聖女よ」
アンジェリカはクスクスと笑う。

「ああ、そうだな。 期待させてもらっ

すると、マリエとアンジェリカを心配したオリヴィアが駆け寄ってきた。

「アンジェ！」

どうやら、アンジェリカがマリエを責めていると思ったのだろう。

だが、笑顔のアンジェリカを見て、オリヴィアは驚いている。

「どうしたんですか？」

「何でもない。それよりも、さっさと乗り込むぞ。ここからは、お前たちが頼りだ」

マリエが乗り込むとすると、今度は自分が人生を狂わせたもう一人の人物がやって来る。

クラリスだ。

近付いてくるクラリスを見て、マリエは平手打ちを覚悟する。

クラリスはジルクの元婚約者で、こちらにも、マリエがジルクに手を出したことで、婚約破棄となった。

そんなクラリスに警戒していると、マリエの横を通り過ぎてアンジェリカに話しかける。

「アンジェリカ、あんたまで乗り込むことないでしょうに」

「止めるな。 リオンの側にいたい」

「貴女、自分の立場を分かっているの？」

「悪いが決めたことだ」

「はあ 分かったわよ。それより、戻ってきたら覚悟しておくのね。しばらくは忙しくて寝る暇もないわよ」

クラリスは文官の仕事を手伝っているのか、手がインクで汚れていた。

クラリスが手を振って離れていく。

「私は忙しいから、見送りはここまでにするわ。ちゃんと戻ってきなさいよ」

クラリスが去って行く途中、マリエの横を通り過ぎる。

すると、クラリスが呟いた。

「あんたもちゃんと戻ってきなさい。言いたいことが山のようにあるからね」

マリエは下を向いて杖を握りしめる。

（どいつもこいつも、なんでもっと 最低な奴じゃないのよ）

もっと女のドロドロした部分を見せてくれたら、マリエだって心が救われた。

自分が醜く見えて仕方がない。

マリエは空を見上げる。

（でも、これでいい。こんな私でも役に立てて、残るのはみんないい子ばかりだって分かったから。兄貴　今回は絶対に生き残った方がいいわよ）

今世、リオンは幸せなのだと確信して、マリエはタラップへと足を向ける。

カイルが緊張していた。

「今回も勝てますよね？」

カーラは、気丈に振る舞っている。

「勝てるわよ。マリエ様も協力して、バルトファルト公爵も本気なんだから。きっと帝国なんて倒してくれるわ」

そう思いたいのだろう。

カーラは自分に言い聞かせているようだった。

マリエが杖を担ぎ、そして二人の方を向く。

「心配しなくても、絶対に勝つかから安心しなさい。それよりも、カイルはお母さんのフォローをちゃんとするのよ」

「え？　で、でも」

照れてはいるが、カイルはユメリアの方を気にしている。

「あんた、親とはいつまで一緒にいられるか分からないのよ」

「わ、分かっていますよ」

カイルがユメリアの方へと向かうのを見て、マリエはリコルヌに乗り込む。

カーラがマリエを心配する。

「マリエ様？　今日はいつもと違いますか？　その、何だか」

「いつもと同じよ。それより、カーラのこと色々考えないとね。いつまでも私と一緒にだと、結婚できないし」

「いえ！　私はずっとマリエ様のお側にいます！」

「あんた、自分の幸せを考えた方が良いわよ」

「私の幸せは、マリエ様と一緒にいることですから！」

笑顔でそう言い切るカーラを見て、マリエは苦笑いをするのだった。

カイルが空を指さす。

「ご主人様！　神殿の飛行船ですよ！」

そんなマリエが空を見上げると、神殿の旗と一緒に聖女の旗を掲げている飛行船があった。

その数は多くないが、神殿側がかき集められる精一杯の数である。

（あいつらも参加するのね）

マリエはそんな飛行船たちに向かって、杖を掲げてみせるのだった。

出発しようと飛行船へ乗り込もうとしていた。

そんな俺の前に現れたのは。

「お前ら」

学園の友人たちだった。

ダニエルが腕を組んでいる。

「遅いぞ、リオン」

レイモンドは眼鏡を人差し指で位置を正して、俺に声をかけてくる。

「待ちくたびれたよ」

他のみんなも照れくさそうにしている。

「お前ら　なんでここにいるんだ？　逃げなかったのか？」

少し前にもっとも冷遇されていたのは、俺の友人グループだ。

結婚してもらったために女子に頭を下げ、それでも田舎貴族と馬鹿にされ相手にもされない。

王国の政策でもっとも割を食ったのは、間違いなく彼らだ。

こんな戦いに参加するとは思えなかった。

ダニエルが自分の胸を叩く。

「お前がいるからな。今回も勝って、勲章をもらえれば箔がつくだろ」

そんなことを言っているが、嘘だとすぐに分かる。

俺は勝てる確率は低いとちゃんと伝えたのだ。

「馬鹿かよ。逃げたって誰も責めないぞ」

そんな俺にレイモンドが呆れたようだ。

「別にリオンのためじゃないよ。参加した方が良くから参加するだけさ。それに、リオンの側にいれば生き残れそうだからね」

抜け目のない事を言っているようだが、これも嘘だった。

「俺の近くにいれば死ぬ確率の方が高いぞ。お前ら、それを分かっているのか？」

全員が顔を見合わせ、そして諦めたような顔をしていた。

そして、笑っていた。

ダニエルが俺に肩を組んでくる。

「馬鹿！ それくらい知っているよ。けどさ　今まで、お前のことを何度も見捨ててきたからさ。今回も見捨てたら、俺たち本当に屑だろ？」

「お前ら　」

レイモンドが眼鏡を外す。

「決闘騒ぎとか、他にも色々とあるからね。それに、リオンにはこれからもお世話になるし、恩を売っておかないと怖いんだよ」

俺は髪をかく。

「無理はするなよ」

ダニエルとレイモンドが頷き、周りは笑っていた。

「もちろんだ！」

「死にたくないからね」

ソウルフード

飛行船の格納庫。

そこに並ぶのは アロガンツをはじめとした、改修済みの鎧たちだった。

「おゝ、こいつは凄いな」

感心して眺めていると、俺の右肩付近に浮かんでいるルクシオンが説明をする。

『共和国で使用した鎧を、限界まで改修しました。また、アロガンツに関しては追加装甲を取り付けています』

言ってしまうば「フルアーマーアロガンツ」みたいな格好だ。

普段のアロガンツに鎧のような装甲板が取り付けられ、色々と武器も搭載されている。

そして、周囲にはユリウスたちの鎧が並んでいた。

ルクシオンが改修し、アロガンツに迫る性能を持たせた鎧だ。

格納庫には五馬鹿の姿がある。

俺と同様に、パイロットスーツを着用しているのだが 。

「ふんどしに法被スタイルじゃないと気分が乗らない」

そう言つて落ち込むクリスに同意するのは、ねじり鉢巻きをしたグレッグだ。

二人とも、俺と同じベストではなくお祭り用の法被を羽織っている。

「この日のために新しいふんどしを用意したのに、これじゃあ見えないから意味がないぜ」

こいつらはどこで道を踏み外したのだろうか？

ブラッドなど、マントとシルクハットを着用している。

「君たちはただ脱ぎたいだけだろうに」

呆れて首を横に振っていると、クリスとグレッグが猛抗議を始めた。

「裸じゃない！　ちゃんとふんどしを着用する！」

「変態みたいに言っんじゃないよ！　それに、お前の格好の方が変態だからな！」

ブラッドが激怒するのだ。

「このマジシャンスタイルが変と言いたいのか！」

五月蠅い三人である。

ジルクなど、格納庫にティーセットを持ち込み、お茶を楽しんでいた。

これがまた、酷く微妙な香りを漂わせている。

「皆さん、少しは落ち着いたらどうです？ それにしても、バルトファルト いえ、リオン君は、どうして鎧を五つも用意したんですか？」

アロガンツ以外の鎧は五つある。

だが、この場には俺を含めると四人しかいなかった。

「ああ、こいつは」

どうして用意したのか伝えようとすると、格納庫にコツコツと足音が響く。

登場するのは ユリウスだ。

だが、仮面を付けてマント姿 この場を他人が見れば、仮装大会かと疑いたくなる光景だろう。

「その機体は私のものだよ」

何やら良いタイミングで出て来てやった、という空気を出している仮面の男。

「久しぶりだね、諸君。この私も手を貸そう」

すると、グレッグが仁王立ちで腕を組む。

「何しに来た、変態の騎士！」

「仮面の騎士だ！　そこを間違えるな！」

俺はこのやり取りを見て肩を落とす。

「俺はこの茶番をいつまで見せられるんだ」

『同情します』

ルクシオンにも同情されてしまった。

ジルクが立ち上がる。

「いったい貴方は何者なのですか？　もしや、帝国のスパイでは？」

「帝国のスパイとは心外だな。私は君たちの味方だよ」

ブラッドも警戒している。

「君の出自が分からないからね。それに、大事な作戦の前だから、不安要素は少ない方がいい」

仮面の騎士の正体を知らないこいつらは、その出自を疑っているのだ。

本気で馬鹿な連中だ。

クリスが剣を手取る。

「仮面の騎士、素顔を見せてもらおうか」

俺は近くにあった箱に腰掛け、ルクシオンに注文する。

「腹が減ったな。軽い食べ物はないか？」

『戦闘前ですよ』

「最後の食事になるかもしれないだろ。何かない？」

『冗談に聞こえませんか。おにぎりをご用意します』

「そいつはいいな」

ルクシオンが離れると、俺は五馬鹿の茶番劇を見る。

剣を向けられた仮面の騎士が、その仮面に手をかけた。

「君たちの不安はもつともだ。だから、私も誠意を見せるとしよう」

仮面を外したユリウスは、首を横に振り髪を揺らした。

美形は何をやっても絵になるから羨ましい。

四人が息をのんだ。

最初に口を開いたのは、ユリウスの乳兄弟であるジルクだ。

「で、殿下」

ユリウスは微笑む。

「仮面の騎士の正体は 俺だ」

クリスが剣を下ろす。

「まさか、仮面の騎士が殿下だったとは思いませんでした」

本当に気付かなかったの？ ねえ、それって大丈夫なの？

心の中でツツコミを入れつつ見ていると、ブラッドがアゴに手を当てて推理を始めた。

「そうか。よく考えれば、仮面の騎士が出てくるタイミングで動けるのは殿下だけだ。僕たちのことにも詳しくて、そしてベストなタイミングで目の前に現れるのも納得だよ」

うん、そうだね。

俺はもっと早くに気付いて欲しかったよ。

実は気が付いていて、知らない振りをしてやっているというこいつらの優しさなの？ と、現実逃避したこともあるくらいだ。

だが、こいつらは俺の予想をいつも斜め下に裏切ってくれる。

グレッグが啞然としていた。

「ユリウスが仮面の騎士だったのか」

ユリウスが前髪を手でかき上げ、そして真剣な顔付きになる。

「俺もお前たちと一緒に戦わせてもらっぞ」

グレッグが鼻の下を指でこする。

「へっ！ 好きにしろよ。それに、今のユリウスがここにも困らないからな」

何故か感動の場面みたいな雰囲気を出しているが、他から見ればただの茶番劇だ。

ただ、グレッグの今のユリウスが〜というのは少し疑問だな。

ユリウスは弟のジェイクが男に走って地位を捨てたから、王太子に返り咲く可能性もあるのに。

まあ、ローランドは子供が多いそうなので、この戦いが無事に終わればきっと跡継ぎは慎重に選んでくれるだろう。

ユリウスやジェイクという失敗例を踏まえて、本当に真剣に選んで欲しい。

五人の茶番劇を見ると、ルクシオンがおにぎりを運んできた。

ちゃんと緑茶も用意している。

『マスター、お持ちしましたよ』

「ありがとよ。んゝ、これこれ」

塩と海苔だけだが、これがどういいうわけかうまい。

俺がおいしそうに食べていると、ユリウスたちがこちらを見ていた。

「なんだよ？」

「いや、何を食べているのかと思ってな」

「おにぎりだ」

「おにぎり？　一つ食べて良いか？」

五人がワラワラと集まってきて、俺のおにぎりを食べ始めた。

いや、数は多いし、別に食べても良いけど　こいつら、図々しいな。

ジルクが目を細めている。

「　変な感じがしますね」

おにぎりに対して変な感じがすると言い出した。

無礼な奴である。

ブラッドも同様だ。

「ベチャベチャする」

嫌なら食つなよ。

グレッグが飲み込むように一つ食べ、そして首をかしげていた。

「珍しい食べ物だな。でも、これなら普通にパンとかでよくないか？」

俺は三つ目のおにぎりに手を伸ばしつつ、グレッグに答えてやるのだ。

「俺のソウルフードだぞ。馬鹿にするなら船から蹴り落としてやる」

すると、おにぎりの湯気で眼鏡を曇らせたクリスが、嬉しそうにしている。

「つまり、マリエのソウルフードでもあるということか。うむ、良いことを聞いた」

こいつら、何でもかんでもマリエ基準かよ。

俺が黙々と食べていると、ユリウスが尋ねてくる。

「リオン、お前はアンジェリカたちにあの話をしないのか？」

あの話 転生者云々という話だろう。

「アンジェたちはお前らと違って繊細だからな。この大事な場面で、余計な心配をかけたくないから黙っている」

ユリウスは俺を見て悲しそうにしている。

「俺なら好きな人のことは知っておきたいけどな。マリエが事情を話してくれた時は、本当に嬉しかったぞ」

転生云々を話しても、普通なら信じない。

「お前らが異常なの。普通は信じないからな。それにしても、転生者だって言われたのに、よくマリエを受け入れたな」

結果的にうまくいったが、不用意な発言だった。

もっとうまく隠せば良かったのだ。

ジルクは、ルクシオンが用意した緑茶を飲んでいた。

「私たちは今のマリエさんに惚れたんです。転生者云々の話は驚きでしたが、だからどうした？　というところですよ」

グレッグが三個目のおにぎりを食べながら頷く。

「そうだ。俺たちはマリエの中身に惚れたんだ！」

「その中身は性格の悪いおばちゃんだぞ。お前ら、本当に大丈夫か？」

こいつら全員、あいつの中身など見ていないのではないか？

どう考えても人を見る目のない節穴である。

そう思うと心配になってくる。

ただ、ブラッドが俺の意見を否定する。

「見た目や年齢じゃないよ。それに、マリエはいい女だからね」

マリエを見て、よくもここまで言えたものだ。

心底呆れていると、クリスが照れくさそうにしていた。

「色々と隠し事があるミステリアスなところも良かったが、前世を知っているなんて凄じじゃないか。やっぱり、マリエは凄じ女だな」

うーん、こいつら馬鹿すぎ。

馬鹿すぎて 安心した。

「そっか。まあ、あいつのことをこれからよろしくな。 面倒をかけるなよ」

そう言つと、ユリウスが照れていた。

「ああ、心配しないでくれ。マリエは俺たちが守るさ。リオンお義兄さん」

「お、お義兄さん！？」

驚くとユリウスが首をかしげていた。

「だってそうだろ。マリエの兄なら、俺たちの義兄だ。これからもよろしく頼むぞ、お義兄さん！」

「止めろ！ 鳥肌が立つわ！」

すると、五人がニヤニヤしながら俺に「お義兄さん！」「お義兄さん！」と言ってくる。

こいつらを信じた俺が馬鹿だった。

やっぱりこいつらは、ただの馬鹿だった。

アロガンツのコックピットに乗り込む。

ルクシオンの子機と一緒に乗り込んでくると、俺の新しいパワードスーツについて説明をしてくる。

見た目は変わらないが、背中にはバックパックを背負っていた。

『マスター、強化薬を背中のバックパックにセットしています。使用する際は私に声をかけてください。また、使用後は十分以内に中和剤を注入します』

「十分だけか？」

『それ以上はマスターの体が持ちません。本来なら、使うべき薬ではありませんよ』

「十分間だけはヒーローになれるって感じか。嫌いじゃないぞ」

薬を使用すれば、速攻で効果が現れて俺自身の能力を引き上げてくれる。

『無闇に使わないでください。本来なら、一度でも使用するのは危険な代物です』

「安心しろ。使うタイミングは選ぶから」

何しろ帝国にはフィンがいるし、同様の騎士たちがいてもおかしくない。

「ま、三回だけっていうのが少し心許ないな」

そう言つと、普段よりもルクシオンが怒っているように感じた。

『三度目は考えないでください。一度の使用でも命を落とす危険があります。危険と判断すれば、私の判断で』

「悪いな。ルクシオン“命令”だ。途中で絶対に止めるな」

『マスター』

どこか悲しそうな声で呟くルクシオンを見ると、こいつは感情が豊かだと思った。

「悪いな。今回だけは止めるな」

『本当に今回だけですか？ マスターは嘔吐きなので信用できません』

「お前は本当に性格悪いな」

馬鹿な話をしつつ、俺は俯いてルクシオンに今後のことを頼む。

「悪いが、俺に何かあったら後のことは頼むぞ。みんなが心配だ」

『拒否します』

ここに来て拒否されるとは思っていなかった。

「お前はいつもそうやって」

『マスターに何かあるということは、既に私が存在しないという意味です。ですので、皆を守りたいなら、マスターが生き残るしかありません』

口を開けて驚き、そのまま顔に手を当てて大笑いをする。

「お前、俺と心中するつもりだったの!？」

笑ってやると、ルクシオンは一つ目を横に振ってヤレヤレという感じを見せた。

『願い下げですね。ただ マスターに万が一のことがあれば、ク

レアーレが対処してくれるでしょう』

「そっか。それを聞いて安心したよ」

本当に安心した。

「だったら、後は敵のチート兵器を沈めて全てを終わらせてやる。悪いけど、お前にも手伝ってもらっぞ」

今回ばかりはルクシオンも無事では済まない。

それを、ルクシオンも気が付いている。

『私がいなければ、マスターは満足に戦えないじゃないですか』

「お前も言うつよな。こういう時は、雰囲気察してそれっぽい台詞を言えよ」

『真面目な雰囲気はマスターに似合いませんよ』

「違うない!!」

ユリウスたちと比べれば、モブが精々の俺が格好を付けてもただのギャグだ。

笑って、そして俺は口を閉じて時間が来るのを待つ。

大艦隊

王国が戦場に定めたのは、大地から離れた海上だった。

そこに浮島を運び込み、補給や整備を行い戦う準備を進めている。使用した浮島は、リオンが見つけた浮島だ。

一度は王国の手に渡り、その後に帝国との戦争で再利用するために大幅な改修が行われた。

飛行船から王国の大艦隊を見るのは、ニックスだ。

「親父、上も下も飛行船ばかりだぜ」

前後左右、そして上も下も王国の飛行船が浮かんでいる。

これまでも戦場を見てきたニックスだが、味方の数の多さに驚いていた。

それはバルカスも同様だ。

「俺もこんな数は初めてだ」

飛行船の艦橋では、バルトファルト家の船乗りたちが緊張した様子で持ち場についている。

船長がバルカスに話しかけてきた。

「それにしても、リオン坊ちゃん　おっと、リオン様がこれだけの飛行船を率いるとは思っていませんでしたよ」

バルカスが髪をかく。

「本当にあいつは突然変異だよな。まさか、俺の子供がこんなことになるとは思わなかったぜ」

ニックスも同様だ。

「これだけいれば、帝国にも勝てる気がしてきたな」

リオンの浮島からは、改修が終わった飛行船が飛び立っていた。

無償で整備と補給、そして改修が急ピッチで行われている。

そんな浮島の下部から、大きな飛行船が姿を現した。

ニックスは出て来たパルトナーを見て腰に手を当てる。

「あれ、パルトナーだよな？　なんで、でかい筒がいくつもついてるんだ？」

改修されたパルトナーの他には、平べったい飛行船も出てくる。

空中空母のファクト本体だ。

他にも王国の飛行船と形の違う飛行船　いや、宇宙戦艦たちが出てくる。

バルカスは額に手を当てる。

「古代の兵器だったか？ 人がいなくても動くとか、ご先祖様たちも凄いな」

ご先祖様と聞いて、ニックスが一つ思い出した。

「親父、そう言えばうちにも何かご先祖様の伝説があるとか昔言っていたよな？」

「馬鹿。こんなものを見た後に、うちのご先祖様の話をして惨めになるばかりだぞ」

「どんな話だよ？ この際だから聞かせてくれよ」

バルトファルト家の飛行船は、戦場では前の方に配置されている。

これはバルカスが「リオンの親族だからこそ前に出なければ、あいつに迷惑がかかる」と言ったからだ。

バルトファルト家が後ろにいては、士気に関わるからと前に出ていた。

つまり、死亡する確率が高い。

この際だからと、ニックスは聞いておきたかった。

「うちのご先祖様は、どちらかというと冒険者として成功した類いじゃない。これは知っているな？」

「戦争で成り上がった人だろ？」

「それよりずっと昔の話だ。うちのご先祖様は、外から流れてきた冒険者だったのさ」

「初耳だな」

ホルファート王国は冒険者が認められており、ご先祖が冒険者であるならそれをアピールするのが普通だった。

「何でも仲間に裏切られたとか、そんな話だったな。だから、冒険者はこりごりだとさ。うちの島に来たのも、農業でノンビリ過ごすためだったらしい」

「何だかりオンみたいな人だな」

「そうだな。そうすると、突然変異じゃなくて 先祖返りかな？」

「でも、確かにこんな光景を見た後だと、小さな話に感じるな」

「だから言いたくなかったんだ。ま、俺らのご先祖様だから、冒険者としても有名どころじゃないだろうけどな」

親子が談笑をしていると、通信機から耳が痛くなるような音が聞こえてくる。

その後、人の声が聞こえてきた。

『偵察から報告！ 帝国の大艦隊を発見！ 数は 三千以上！』

艦橋が一気にざわつく。

何しろ、敵はこちらの二倍近い戦力を用意してきた。

それに、正確な数字は分かっていない。

下手をしたら三倍もあり得た。

バルカスが声を張り上げる。

「狼狽えるな！ 作戦通りに動けば必ず勝つ！」

帝国の大艦隊が迫る中、ニックスは冷や汗を拭うのだった。

リコルヌの艦内。

広い部屋を用意し、そこに聖樹の若木を植樹していた。

リコルヌは大気中の魔素を吸い込み、それを若木に供給している。

若木を通してエネルギーに変換し、それをリコルヌの動力炉としていた。

リコルヌの制御を行うのはクレアーレだ。

『魔素の濃度が上昇してきているわ。アルカディアが近付いているわね』

その魔素を吸収し、若木に与えることでリコル又はエネルギーを更にため込んでいく。

若木の様子を見守るのは、ノエルとユメリアだった。

「この子でエネルギーをため込むのは分かったけど、それを何に使うの？」

ノエルの素朴な疑問に答えるクレアーレの瞳は、リビアを見ていた。

『このエネルギーを防御シールドに使うわ。敵の攻撃から味方を守るのが、私たちの役目だからね。後は』

窓の外を見ていたリビアが、クレアーレに振り返る。

「王家の船の装置を使うんですね」

ただ、その使い道は公国との戦いの時とは違っていた。

『敵は対策を立てているから、味方に使用するわ』

クレアーレが室内に映像を表示する。

『装置の精神干渉を通信に利用するわ。これ、魔素の影響を受けないから凄く便利なのよね』

ユメリアが首をかしげている。

「え〜と、どういことですか？」

そんなユメリアに説明するのは、カイルだった。

「心で会話ができるようにする、ってことだよ」

「は〜、凄いですね。はっ！？　そ、それって、心の中の恥ずかしい声も聞こえるってことですか！？　ど、どうしよう。カイルのこゝと、いつも大好きって思っているのが伝わっちゃう！」

顔を赤らめるユメリアに、カイルは恥ずかしくて耳まで赤くしていた。

「　母さん、もう黙ってよ」

『正確には言葉を届けるだけよ。　こちらは受け取れるから、それ进行处理して味方に状況を伝えるわ。　情報処理は私も手伝うけど、リビアちゃんの負担が大きいよね』

それを聞いたリビアは、むしろ安堵した顔をしていた。

「私は大丈夫です」

「リビア」

心配するアンジェがリビアの手を握る。

「すまない。私は手伝うことが出来ない」

リビアは首を横に振る。

「いいえ、アンジェはここに来るまで頑張ってくれました。だから、今度は私の番です。ようやく、私もお手伝いができます」

アンジェが瞳に涙を溜め、それを指先で拭う。

「私がしたのは準備だけだ。お前のように、直接リオンを助けることは出来ないよ」

「私にはその準備が出来ませんでしたから」

二人のそんな会話を聞いたクレアーレは、マリエを見るのだった。思い詰めた顔をしている。

『どうしたの、マリエちゃん？ お腹でも痛いのか？ だから、食べ過ぎは駄目って注意したじゃない』

「あんだ、私を普段からどんな目で見ているのよ？」

『え？ 違うのか？ だって、用意したおにぎりを十個も』

「九個よ！ そんなに食べてないわ！ ちょ、ちよつと懐かしくて、普段より少し多めに食べたけど」

そんなに変わらないと思いつつ、クレアーレはマリエにも協力を求める。

『リコルヌのエネルギーをマリエちゃんにも貸すから、聖女のパワーで防御をお願いね』

「任せなさいよ。私はやれば出来る子よ。それよりもさ　この船
って、どうやって動かしているの？」

マリエが色々聞いてくるので、クレアーレは説明を行うのだっ
た。

ノエルがポケットに手を入れる。

「何か一人だけ場違いに感じるわね」

そんな事を呟くと、室内に一つ目の球体　空母型の宇宙船を管
理するファクトから通信が入った。

『高熱源反応感知』

それを聞いたクレアーレが、即座に指示を出してくる。

『シールド出力最大』

直後、リコルヌの前方に平面的な淡い光が幾重にも展開される。

それはまるで半透明なカーテンのようだった。

ノエルが目を見開く。

「え？　何？」

遠くで何かが光ったと思った次の瞬間には、リコルヌは光に包ま
れ激しい揺れに襲われた。

空母であるファクトは、肉眼では見ることの出来ない敵を感知していた。

『この距離で攻撃を当ててくるか』

ファクトをサポートするため側にいる人工智能たちが、被害状況について報告してくる。

『シールド艦、一隻大破』

『王国の艦隊の被害はなし』

『次のシールド艦を前へ』

王国側の艦隊から、一隻の宇宙船が出てくる。

それは、アルカディアの主砲を防ぐために用意されたシールド艦
防御シールドを展開して味方を守るための宇宙船だ。

強力なアルカディアの主砲からも守ってくれるが、一撃で大破して沈んでしまう。

『敵、次弾までの発射時間 推定一千八百秒後』

『帝国軍の艦隊、アルカディアの前に展開』

『敵支配下のモンスター、こちらに急速接近』

ファクトはすぐに指示を出す。

『迎撃する。機動兵器部隊を展開』

空母から次々に無人機である鎧が出撃していく。

そして、旧人類の宇宙船たちがその武器をモンスターたちに向けた。

『撃て』

ファクトの命令で一斉に大砲から光学兵器や実弾兵器が放たれ、それに続いてミサイルも次々に発射される。

モンスターの大群を貫いた光学兵器が、アルカディアを守ろうとする帝国の飛行船に迫ると 魔法障壁により守られていた。

『敵のシールドを確認』

『アルカディアの魔法障壁と断定』

『こちらの光学兵器を無効化』

ファクトはその一つ目で、外から送られてくる映像を解析していた。

アルカディアの周辺からモンスターたちが、次々に出現している。

魔素を放出し、それらをモンスターとして作り替えて支配下に置いていた。

ほとんど無尽蔵にモンスターを生産し、兵器として利用できる状態だった。

対して、ファクトたちは応急修理をした状態だ。

性能は万全とはいえない。

『こちらの性能が思うよりも出ていない。 アルカディアに接近する。王国の艦隊を前進させる』

ファクトが指示を出すと、それを受け取ったりコルヌが各艦に命令を伝える。

王国の飛行船が動き出すが、人間が動かしているために動きに乱れがある。

ここの練度にもバラツキがあり、オマケにこれだけの大艦隊戦を経験していないため、うまく動けていなかった。

『王国軍の評価を下方修正。前進速度を下げ、二隻を後方へ回せ』

王国軍が前進するのにも苦労している。

それは、数が多すぎてうまく動けないのが理由だ。

対して、帝国軍はこれまで準備してきたのか、その動きは王国軍よりもマシだった。

ただし 。

『帝国軍の評価を下方修正』

こちらにも、準備期間の割には練度が思ったよりも高くなかった。

サポートする人工知能たちが騒ぎ始める。

『モンスターの集団、こちらの攻撃を突破してきます』

『王国軍の速度、急激に落ちました』

『王国軍、機動兵器　鎧を展開』

その報告を聞いて、ファクトは一つ目を光らせる。

『無視して前進を優先させる。アルカディアに接近できなければ、こちらは一方的に攻撃を受けるだけだ』

王国軍は、帝国に近付くためにアルカディアの主砲やモンスターが突撃してくる中を突き進むしかなかった。

帝国軍。

アルカディアの内部にある司令室では、バルトルトが主砲の威力に焦っていた。

「この程度か」

敵艦隊をどれだけ沈められるかと期待していたが、結果は一隻だけしか沈められなかった。

飛行船を百隻単位で飲み込んでしまうようなビームが放たれたのに、結果が伴っていない。

魔法生物がバルトルトに説明する。

『油臭い機械共が、宇宙船を犠牲に防いだ。だが、撃ち続ければこちらが勝つ』

ブレイブと同じ丸い黒い体に大きな一つ目という姿だが、その大きさは直径で一メートルはある。

主人はミアであるからと、皇帝であるバルトルトに対しての物言いもどこか冷たい。

『目覚めたばかりで、ろくな整備も受けられなかったようだな』

主砲を防げるだけの宇宙船がどれだけあるのか分からないが、有利なのは自分たちだと言っていた。

バルトルトは腕を組む。

「簡単には勝たせてくれないか。次はどれくらいで撃てる？」

『四十五分後だ』

「それでは遅すぎる。もっと早く撃てないのか？ 予定では三十分だったはずだぞ」

『光学兵器へのシールドと、モンスターたちの生産でエネルギーを主砲に回せない。そもそも、アルカディアは完全に復活していないからな』

「王国軍がこちらに向かってきているが？」

『接触するまでに数は減るだろう』

有利な状況ではあるが、バルトルトは不安があった。

顔には出さないが、魔法生物たちからリオン　ルクシオンの情報
報が得られない。

「敵の主力はどうした？」

『ルクシオンは確認できていない。どこかに隠れて、こちらの様子
をうかがっているのかもしれない』

「すぐに探し出せ！」

リオンがどのように動くか警戒しているバルトルトに、魔法生物
は安心させるように言う。

『ルクシオンは確かに脅威だが、奴の一撃を防ぎつつ主砲を当てれ
ば問題ない。それに、王国軍には主砲を使わずともこのまま疲弊さ
せたところを通常戦力で叩いてもいい』

バルトルトは天井を見上げる。

「だといいがな」

バルトルトは思う。

（フィンから聞いた情報では、このまま終わるとは思えないな）

魔法生物が言う。

『ルクシオンは本来移民船だった。ならば、既に一部を乗せて宇宙に逃げた可能性もある』

バルトルトも、それならどれだけ楽かと考える。

（いつそ逃げてくれれば、こちらも楽なのだがな）

同じ転生者だ。

出来れば戦いたくないが、転生先と 立場が悪かったとしか言えない。

バルトルトが命令を出す。

「全軍後退しろ。王国軍の接近を許すな」

帝国軍は、王国軍と距離を取るように動くのだった。

見えない敵

バルトファルト家の飛行船内。

ニックスは近くの手すりに掴まり、窓の外を見ていた。

「これが戦争なのか？ 俺の知っている戦争と違いすぎる」

味方である宇宙戦艦たちから放たれる光学兵器や実弾。

そして、帝国軍からはモンスターが放たれ襲いかかってくる。

通信機からは無機質な声が聞こえてくるだけだ。

『前進せよ。迎撃は不要』

椅子に座ったバルカスが、手すりに拳を振り下ろした。

「この中を突き進めって言うのか！」

『全軍、前進せよ』

本来ならモンスターたちの相手を鎧にさせるため、速度を落としたい場面だ。

しかし、ファクトがそれを許さない。

ニックスも腹立たしく思う。

「いったい敵がどこにいるって言うんだよ！」

双眼鏡を使っても見えない敵に突撃しろと言ってくるのだ。

これまでの常識と違いすぎて混乱していた。

それでも、バルカスが慌てる船員たちに檄^{げき}を飛ばす。

「全員、今は命令に従って全速前進だ！ 俺たちがためらっていたら、後ろの飛行船まで怖がって足を止める！ 前に出る！」

バルトファルト家の飛行船が前に出ることに意味がある。

それを理解しているバルカスが、前に出ると叫んでいた。

ニックスは揺れる船内で手すりに掴まりながら、バルカスに意見する。

「親父、あんなモンスターばかりの中を突き進めって言うのかよ！
？ それに、さっきは」

続きを言う前に、前方が明るくなった。

船長が叫ぶ。

「全員、何かに掴まれ！」

すぐに船内が激しく揺れると、前方でシールドを展開する宇宙船が爆散した。

沈んでいく宇宙船を通り越し、落下していくのを見送るニックスは冷や汗を拭う。

「ルクシオンと同じ飛行船が、もう二隻も沈みやがった」

少し前に放たれた、艦隊を飲み込むような大きな光。

それが敵の攻撃だと知ると、前に進むのが怖くなってくる。

「領主様、危険です！ 後方に下がりましょう！」

船長がそう言うと、バルカスは腕を組んで前を見ていた。

「駄目だ。リオンがこの方法を選択したなら、きっと意味があるはずだ。あいつは勝つために行動する。信じて進め！」

いくら前進しても帝国の艦隊が見えてこない。

ニックスは焦るのだった。

（リオン、本当に大丈夫なんだろうな）

『アルカディアの評価を下方修正』

ファクトがそう呟くと、サポートをする人工智能たちも次々に計算を行う。

『王国軍の速度上昇』

『接触まで、二度の主砲による攻撃が予想されます』

『残存するシールド艦は三隻』

このまま行けば、王国軍はシールド艦のみを犠牲にして接触が可能だった。

ただ、敵の主砲の威力を前に、王国軍の士気が下がり始めている。現状を伝えても、それを理解する指揮官が少なすぎた。

ファクトは、帝国軍と接触する前に王国軍が内部から崩れる展開も予想する。

『このままでは』

勝率が下がると考えたところで、前に出る飛行船があった。

それは旧公国 ファンオース公爵家の飛行船だった。

全艦に聞こえるように通信を飛ばしており、それをクレアーレが支援している。

『何だ？』

ファクトが余計なことをしないで欲しいと考えていると、ヘルトルーデの声が響き渡った。

『王国軍の皆さんは随分と足が遅いようね』

挑発するような声を出すヘルトルーデは、戦場において指揮をしていた。

『これでは、ファンオース公爵家が一番槍かしら？ 殿方は口先ばかりでいけないわ』

女の私に負けて悔しくないのか？

そんな煽りを受けて、一部の王国軍が速度を上げて前に出る。

その光景をファクトは理解できなかった。

『何だ？ 何故、このような挑発で速度を上げた？』

旧人類 正規の軍人たちしか知らないファクトには、理解できない光景だ。

そして、そんなファンオース公爵家と並ぶのは 共和国軍の飛行船だった。

『聞き捨てなりませんね。では、アルゼル共和国が先陣を切らせていただきます』

次に声を出したのはエリクだった。

共和国の代表として参加しており、部下である兵士たちを鼓舞する。

『勇敢なる共和国の兵士たちよ！ この程度の戦い、あの悪夢と比べればどうということはない！ 恐れず進め！』

悪夢とは、共和国で聖樹が暴走した日の出来事だ。

あの恐怖を知っている共和国軍は、勇敢にも速度を上げて前進した。

ヘルトルーデがエリクをからかう。

『聖女様の前で見栄を張りたいのかしら？』

『姉御　んっ！　聖女様に我々の勇姿を見てもらえるなら光栄だ。だが、我々は勇敢なる共和国軍である！　この程度で尻込みするよ。うな腑抜けではない！』

すると、ファクトのもとに各艦からの通信が聞こえてくる。

『ファンオース公爵家が図に乗るな！』

『共和国の軍が勇敢だと？　共和国では勇敢という意味が違っらしい』

『奴らに遅れるな！　王国の意地を見せろ！』

この程度の煽りで味方が速度を上げ、全体のスピードが上がった。

ファクトは困惑する。

『理解不能』

だが、これで予想よりも早く帝国軍に接触できることになった。

帝国軍が三度目の主砲を放った後。

バルトルトは目を閉じていた。

兵士たちが騒ぎ始めている。

「王国軍が目視の距離まで接近！」

「共和国の船を確認しました！」

「アルカディアのシールド、一部が貫かれています！」

後ろへと下がる帝国軍に対して、突撃してくる王国軍の勢いは凄まじかった。

バルトルトが目を開ける。

「ここまでだな」

魔法生物が頷く。

『敵はこちらの切り札を知らない。いや、誤認していることだろう』

バルトルトが立ち上がった。

「全軍、王国軍を迎え撃て！」

帝国軍の陣形は、突撃してくる王国軍を待ち受ける形になっている。

それは、王国が不利な状況にあるということだ。

そして、アルカディアの前に味方の飛行船はいなかった。

「切り札は残しておきたかったな」

バルトルトの呟きに、魔法生物が返事をする。

『問題ない。アルカディアは沈まない』

バルトルトが腕を振り上げ、そして下ろすと手は目の前の王国軍に向けられた。

「撃て！」

アルカディアが主砲を放つと、敵は防御特化に改造した宇宙船を前に出してその攻撃を防ぐ。

魔法生物がその一つ目　肉眼を弓なりに曲げた。

『敵は次の攻撃を四十五分後と考えるだろうな』

バルトルトが命令を出した。

「砲撃を開始せよ！　鎧も出せ！　ただし、アルカディアの周囲には出すなよ」

レッドグレイブ公爵家の旗艦。

そこに乗り込むヴィンスは、帝国軍に砲撃可能距離まで接近できたことに安堵した。

「これである攻撃も使えまい。全軍、可能な限り敵に近付け！」

ヴィンスがこの場にいるのは、レッドグレイブ公爵家の面子のためでもある。

そして、息子のギルバートは後方にいるリコルヌの護衛に配置した。

この戦い、参加しなければ貴族としての価値を失ってしまう。

だから、ヴィンスもギルバートも参加するしかない。

何より、今後を考えれば不参加など不名誉になるからだ。

レッドグレイブ家の飛行船が敵に近付くと、砲撃が開始される。

「公爵様！ 敵が鎧を出してきました！」

帝国軍が鎧を出撃させると、ヴィンスも王国軍の鎧を出撃させる。

「迎え撃て！」

そして、ヴィンスは帝国軍の装備を見て苦虫をかみ潰したような顔をする。

（全ての飛行船が新型か）

船体の横に大砲を並べた旧式ではなく、砲台が用意されていた。

鎧にしても王国よりも優秀そうである。

「帝国の奴ら、いったいいつから準備をしていた？　だが、近付いてしまえば」

直後、公爵家の飛行船が激しく揺れた。

「な、何事だ！」

艦長が叫ぶ。

「わ、分かりません。急に光が降り注いで」

窓の外を見れば、アルカディアから真上に放たれた光が弾け、そして王国軍に降り注いでいた。

飛行船が展開する魔法障壁を貫き、王国の飛行船が次々に沈んでいった。

公爵家の船もゆっくりと沈んでいく。

「おのれ、帝国！」

ヴィンスがそう叫ぶと、光が公爵家の飛行船を貫いて爆発させた。

「父上！」

リコルヌの船内。

戦場の映像が立体的に表示され、それを見ていたアンジエが叫んだ。

クレアーレが状況をファクトと確認する。

『ちょっと！ 敵がこんな攻撃をしてくるなんて聞いていないわよ！ それに、拡散しているだけで、主砲クラスの攻撃じゃないの！』

その攻撃は、主砲の一撃を拡散させたものだった。

不意を突かれた王国軍は、百隻近くが沈んでいる。

シールドを展開し、リコルヌがフォローをしてもそれだけの艦艇が沈んだのだ。

『確認している。敵はエネルギーを蓄えていたようだ。これまでの行動は、こちらに誤解させるためのものだったようだな』

『冷静に解析していないで、さっさと対策を立てなさいよ！ 私たちはともかく、王国の船は耐えられないわよ！』

『現在解析中だ』

『このポンコツ！』

そして、戦場に動きがあった。

前衛が崩れた王国軍に対して、帝国の通常戦力が襲いかかったのだ。

ノエルが戦場を見て、生き残っている味方を指さす。

「まだ残っている味方がいるわ！」

マリエもその味方を確認する。

「ファンオース公爵家と　共和国！　エリクたちが無事よ！」

ギリギリ持ち堪えたファンオース公爵家の艦隊と、イデアルが建造した共和国の飛行船は無事だった。

帝国軍と戦っている。

アンジエがすぐにファクトに指示を出す。

「すぐに増援を送れ！　このままでは、帝国軍に前衛の艦隊が全て落とされる」

涙目で声が震えているアンジエは、落ちたヴィンスのことを心配していた。

だが、救助に回すだけの余力がなかった。

『前に出れば、また敵の攻撃に曝される。我々は距離を維持しつつ攻撃を続行する』

「味方を見捨てるのか！」

すると、マリエが立体映像を見ながら叫んだ。

「待つてよ。この船はリオンの　兄貴の家族が！」

降り注いだ光の雨の直撃を受けながら、バルトファルト家の飛行船は何とか浮かんでいた。

ニックスがフラフラしながら立ち上がる。

「お、親父！」

バルカスは怪我をしたクルーの応急処置をしており、終わると立ち上がった。

額から血を流している。

「親父、無事か！？　それより、早く撤退だ。周りの味方がほとんど沈んだ！」

すると、バルカスがニックスの両肩に手を置く。

「ニックス　もうこの船はゆっくり降下している。お前はここのま、海で味方の救助をしろ」

「親父？」

飛行船はまだ無事で沈んでなどいない。

それなのに、何故こんな事を言うのか？

ニックスがそう思っていると、バルカスが続きを話す。

「被弾して戦線離脱だ。言い訳も立つから。お前はそのまま、味方を救助したらさっさと逃げるんだ。こんな戦場からは、すぐに逃げちまえ」

「で、でも！ 親父も」

バルカスの物言いからすれば、一人だけ残ろうとしているように聞こえた。

「俺まで逃げたら、沈んじまった味方に申し訳がないからな。家族を頼むぞ」

そう言つてバルカスは艦橋を出て格納庫へと向かった。

「親父！」

ニックスが追いかけようとすると、船長が止める。

「放せよ！ 親父が！」

「坊ちゃん！ いえ、ニックス様 領主様のお気持ちを考えてください」

そう言われて体から力が抜けるニックスは、床に座り込んでしまふ。

そして格納庫から一機の鎧が飛び出すのを見て、空に向かって叫ぶのだ。

「リオン、お前はいつまで隠れているつもりだ！」

戦場に姿を現さない弟に向かって叫んだ。

すると、船員の一人が叫ぶ。

「坊ちゃん！ 下です！」

立ち上がって窓から下 海面を見れば、そこからルクシオンの船首が顔を出した。

その姿はまるで、鯨が海面に姿を現したような光景だった。

白い飛沫をまとい、姿を現したルクシオンは主砲をアルカディアに向けている。

そして、青白い光の柱が発生した。

その光がアルカディアの魔法障壁にぶつかり、バチバチと音を立てている。

ニックスが笑顔になる。

「遅いんだよ、この野郎！」

アルカディアの真下から攻撃を行い、そのバリアを貫こうとして

いた。

貫けば、厄介な敵の要塞が沈む。

そうすれば勝利できると誰もが確信し　そして、アルカディアの魔法障壁が赤黒く変色する。

要塞真下に赤黒い塊が出現すると、エネルギーをため込みだした。見ているだけで危険と分かる。

そして、そのままその塊をルクシオンに向けて発射した。

青白いルクシオンの攻撃を引き裂き、赤黒い球体はルクシオン本体に命中してその船体に穴を開ける。

「　え？」

その穴から爆発が起き、ルクシオンはゆっくりと倒れて海の中へと消えていくのだった。

三本の矢

激しく揺れたアルカディアの内部。

バルトルトは、ルクシオンが沈む光景を見ていた。

「すぐに次弾を放て！」

船体に穴を開け、内部の爆発を確認した。

今も沈んでいくその姿を見ているが、まだ安心など出来なかった。

魔法生物が状況を報告する。

『貯蔵していたエネルギーは使い果たした。次弾発射まで三十分はかかる』

「くっ！」

ルクシオンを沈めるために、アルカディア最大の攻撃をお見舞いした。

その選択に間違いはなかったが、バルトルトは落ち着かなかった。

「こんなにアツサリと終わるものなのか？」

フィンから聞いていたリオンの情報からすれば、呆気なさ過ぎて肩すかしを食らったような気分だ。

魔法生物が一つ目を横に振る。

『旧人類の兵器を過大評価しすぎだ。奴らは、我々に勝てないために、大量破壊兵器を持ち出してきた無能だよ』

バルトルトが椅子に深く腰掛け、そして深呼吸をした。

「そうか。これでは王国を手に入れるだけか」

リオンが倒れたと知れば、王国側の士気は簡単に崩れるだろう。

それに、アルカディアの脅威もなくなる。

「これで、我々の勝利だな」

もはや、帝国に敵はない。

そう思っていたバルトルトに、部下たちからの報告が次々に届く。

「陛下！ 今の攻撃でアルカディアのシールドに負荷がかかりました」

「このまま攻撃を受け続ければ、シールドの維持が出来ません」

「そ、それに、内部に負荷を受けております。次に主砲を撃てばどうなるか分かりません」

バルトルトは気を引き締めた。

（まだ終わっていないか。旧時代の兵器は残っているのだからな）

「わしの騎士たちも出せ。余力など考えるな。ただし、フィンだけは待機だ」

部下の一人が困惑する。

「序列第一位の騎士を出さないのですか？」

バルトルトは天井を見上げて目を閉じる。

「保険だ」

自分以外の騎士たちが出撃した待機部屋で、フィンはソファアに座っていた。

側にいるブレイブが心配している。

『相棒、あまり考えるな。お前は、お前の敵を倒すだけで良いんだ』

「分かっているさ、黒助」

『その黒助って呼び方だけ変えないよな。相棒は頑固だぜ』

フィンが微笑むと、ブレイブも笑った。

そんな待機室に、侍女たちを引き連れたミアが訪れる。

「騎士様」

「これは、ミリアリス王女殿下」

敬礼をするフィンを見て、ミアは俯いてスカートを手で握りしめた。

その様子を見て、フィンはミアが何を求めているのか理解する。

フィンはミアの護衛でもある侍女や魔法生物たちに視線を向けた。

「すまないが、王女殿下と話をさせてくれ」

侍女たちがそれを認めない。

「それは出来ません。王女殿下のお側に、無闇に男性を近付けると陛下から仰せつかっております」

魔法生物たちも同様だ。

『認められない』

『許さない』

『我らが主人をどうするつもりだ？』

ミアが慌てて説得しようとする、ブレイブが前に出て侍女や魔法生物たちを追い出してしまう。

『うるせえ！ 相棒はミアの護衛を務めてきた男だ！ お前らの考えているような、ゲスと一緒にするな！ さつさと出ていかないと、俺様が暴れてやるぞ！』

完璧な魔装のコアであるブレイブが暴れると危険なため、侍女や

魔法生物たちが部屋から待避する。

フィン は侍女たちに言うのだ。

「部屋の外で待っていてくれ。陛下には俺から話をする」

そうして、待機部屋にフィンとミア、そしてブレイブだけとなった。

フィン はミアをソファーに座らせ、飲み物を用意する。

「どうした？」

王女殿下に対する態度ではなく、今まで通りの態度にミアが笑顔になった。

「あ、あのね、騎士様！ わ、私 本当は戦いたくないです」

そして、その笑顔はすぐに曇^{くも}ってしまう。

ここ最近で状況が目まぐるしく変わり、それについていけない様子だった。

ポロポロと涙をこぼす。

「急にお姫様だとか言われても分からないよ。それに、王国の人たちと戦うなんて嫌だよ。みんな良い人たちだったのに」

フィンは、そんなミアの手を握る。

泣いている姿が前世の妹に重なって心が痛い。

（俺だって戦いたくないよ。けどな　お前が元気に暮らせる世界を手に入れるためなら、人の道を踏み外したって構わない）

前世で救えなかった妹とミアは違うが、それでもフィンに救われたかった。

（俺が最低なクズ野郎でも、この子だけは）

友人を殺してしまうことになっても、フィンには叶えたい未来がある。

それは、ミアが元気に外を走り回れるようになることだ。

「　ミア、お前に罪はない。全て、陛下と俺が片付けてやる」

「でも」

「大丈夫だ。俺がお前を守ってやるから」

ミアがフィンの手を強く握りしめ、顔を上げると潤んだ瞳で見上げてくる。

「騎士様、私は　」

ミアが言い終わる前に、天井を見上げたブレイブが焦った様子で伝えてくる。

『相棒！　上から来る！』

すぐにミアを抱きしめ、フィンは床に伏せるのだった。

アルカディアの上空。

そこから急速接近してくるのは、大気圏を突破してきたパルトナーだった。

アルカディアの司令室は大騒ぎだ。

パルトルトも椅子から立ち上がり、歯を食いしばっていた。

「大気圏外からだと!？」

魔法生物がしてやられたという雰囲気を出している。

『そう来たか。だが、その程度は計算の内だ』

映像に見えるパルトナーへ、モンスターたちが放たれる。

しかし、パルトナーに近付くだけで吹き飛ばされ、足止めにもなっていないかった。

魔法生物が目細める。

『特攻か？ 機械共が好きな手だな』

パルトナーは七百メートルを超える飛行船だった。

それだけの質量を大気圏外からぶつければ、とんでもない破壊力を生み出す。

流石のアルカディアでも無事では済まない。

『ブースターで宇宙まで上がったか？ だが、無意味だ。その程度は想定済みだ』

細くなった目を弓なりにし、魔法生物は笑って見せた。

むしろ、隕石落としてもしてくるかと思っていたが、そんな力も残っていないのか宇宙からやって来たのは飛行船一隻だけだ。

アルカディアのシールドが、直撃すると思われるポイントに厚く展開される。

他の部分の守りを捨てた。

そして、エネルギー不足ながらも、パートナー迎撃のために主砲を放つ。

主砲の一撃を避けようとするパートナーだったが、避けきれずに側面に命中して船体の半分が削れてしまった。

『おや？ 爆薬を積み込んでいると思ったが、そうではなかったか。だが、確かに一部でも命中すれば、こちらに被害は与えられるな』

爆薬を積み込んで特攻し、アルカディアに一撃を当てる作戦ではなかったらしい。

ただ、これではアルカディアを沈められない。

バルトルトが手すりに拳を振り下ろした。

「王国軍も、目の前の宇宙戦艦も全て叩か！ やってくれたな！」

火を噴きながらバルトナーが迫ってくる。

アルカディアも移動するが、バルトナーも人工知能を搭載して追尾してきた。

そして、魔法生物は白い歯を見せて笑う。

『だが無駄だ。我々の勝利は揺るがない！』

バルトナーが直撃して大爆発を起こすと、アルカディアが激しく揺れた。

バルトルトは椅子の手すりに掴まり揺れに耐えると、顔を上げて部下たちに声をかける。

「現状報告！」

「は、はい！ アルカディアには損害ありません」

「魔法障壁で耐えきりました」

「で、ですが、今の衝撃で魔法障壁が解除されてしまいました」

魔法生物が笑う。

『ヒヤハハハ！ 長い年月で錆び付いたか、人工知能共？ 本気で私を沈めたかったら、お前らは全員で大気圏外から突撃すれば良かったな。まあ、それが出来ずに、苦し紛れにこんな作戦を立てたのだろうか』

人工知能たちの作戦の甘さに笑っていた。

実際、ファクトたちが魔法生物の言う作戦をとっていれば、アルカディアは速度を上げて移動しながら逃げ回っただろう。

そして、突撃してくる宇宙船を迎撃するだけだ。

『お前たちに勝機など最初からないのだ！』

勝ち誇った魔法生物を見ながら、バルトルトは汗を拭う。

（今は焦ったな。だが、これでルクシオン、パルトナーを沈めた。残っているのは ん？）

リオンが保有する宇宙船と飛行船の内、二隻は沈めた。

残っている旧人類の宇宙船も、その性能を完璧に発揮できていない。

もう、アルカディアの敵はいない。

だが、一隻だけ、今も戦場に姿を見せていない飛行船がある。

バルトルトが声を張り上げた。

「アインホルンを探せ！」

ルクシオン、パルトナーと来て、残り一隻はアインホルンだ。

魔法生物が目を見開き、帝国軍の後方を見るのだった。

『この速度で接近する飛行船だと！？』

後方から信じられない速度で接近してくる飛行船があった。

アインホルンだ。

激しく揺れるアロガンツのコックピットの中で、体がシートにめり込む。

「このままぶつかってぺしゃんこになる、って間抜けな展開は勘弁願いたいね」

アインホルンにもブースターを取り付け、遠回りしつつ帝国軍の後ろを突く。

そのために、長々とこんな苦しい状況にいる。

『我慢してください。これでも軽減しているのですよ』

「軽減してこれかよ！」

ルクシオンはこの中でも平気で喋っている。

機械だから当然だが、それが腹立たしくも思う。

『クレアーレ、ファクトからの情報を整理しました。今のアルカディアに、まともな迎撃機能は残っていません』

「パートナーを犠牲にした甲斐はあったな」

苦しいのを我慢して笑ってみせると、ルクシオンが頷く。

『はい。パートナーは最後の仕事をやり遂げました。マスター、そろそろお時間です。我々の仕事を始めましょう』

それを聞いてマウスピースのようなものを噛む。

ルクシオンがカウントを始めると、外から攻撃を受けているのかアインホルンにこれまでと違う揺れを感じる。

『衝突まで　　10秒です』

アルカディアの司令室。

迎撃するためにモンスターや、砲撃がアインホルンに向けられていた。

『あの程度の船に！』

魔法生物が苛立っている。

その様子を見て、バルトルトは魔法生物たちがこの世界の飛行船技術などを見下しているのを感じ取った。

「三段構えというわけか」

最初にルクシオン本体を捨て、その後にバルトナーを捨て、本命はアインホルンだった。

アインホルンが、その名にふさわしい一本角をアルカディアに向けて突撃してくる。

襲いかかってくるモンスターたちに向けて、アインホルンはコンテナを射出した。

そこからミサイルが何百と飛び出すと、周囲のモンスターを吹き飛ばしていく。

アルカディアや、帝国軍からの砲撃を受けても止まらない。

逆に、アインホルンからの攻撃によって帝国側の飛行船が次々に落ちていく。

バルトルトが腕を組んで待ち構えると、部下が叫んだ。

「直撃します！」

その後すぐにアルカディアは、これまでにない大きな揺れを感じるのだった。

魔法生物がその目を血走らせる。

『油臭い機械共があああ！』

ただ、バルトルトは心の中で安心した。

（そうだ。それでいい。全力で向かってこい。そして、生き残った方が この星の支配者として生きていける）

慌てる周囲に、バルトルトは命令を出していく。

「艦隊には王国軍の相手をさせる。わしの騎士たちは呼び戻せ。侵入者たちの相手をさせる」

モニターに映し出されるのは、アルカディア内部に侵入してきた鎧たちだ。

六機の鎧に率いられた無人機たちが、不気味にカメラアイを光らせている。

先頭に立っているのは アロガンツだった。

カメラに銃口を向け、そしてバルトルトに向けてリオンが話しかけてきた。

『ハロー、糞野郎な帝国の皇帝陛下。喧嘩を売ってきたから、買ってやったぜ。たっぷりサービスしてくれよ』

そう言って引き金を引くと、カメラが破壊され映像が途切れる。

そして、内部から破壊しているのか、司令室にも振動が来た。

バルトルトは声を上げて笑った。

「フィンの小僧もそうだが、若い奴らは本当に腹立たしい連中ばかりだ。いいだろう、相手をしてやる。待機している騎士たちを迎撃に向かわせる。それから、わしの騎士たちを呼び戻せ」

バルトルトが眉間に皺を寄せ、真剣な表情になる。

その横で魔法生物が不快感をあらわにしていた。

『アルカディア内部に侵入されただと。旧人類との戦いでも侵入されたことなどないというのに。バルトルト、さつさと奴らを叩き出せ！』

激怒して血管を浮かべている魔法生物に、バルトルトは冷ややかな目を向ける。

「今命令したところだ」

剣聖対剣聖

戦場の空。

リンハルトは、王国の騎士　　鎧を剣で貫いていた。

「はい、これで十機目。王国の騎士は弱いよね」

魔装をまとい、ロングソードのような武器を振り回して王国の鎧を次々に沈めていた。

その戦い振りは、まるで狩りをしているようだった。

「もっと強い奴を相手にしないと面白くないよね」

崩れた王国軍の前衛に襲いかかり、今は一方的な戦いが続いていた。

そんなリンハルトに、宇宙戦艦　　駆逐艦が迫ってくる。

光学兵器を撃ち、そして無人機たちを使ってリンハルトを囲い込もうとしていた。

リンハルトの魔装は、悪魔のような翼を広げると速度を上げて無人機たちに接近していく。

そのまま接触すると、全てを斬り裂いて駆逐艦に迫った。

剣を持たない左手を駆逐艦の船体に叩き込むと、魔装のツインアイが赤く光る。

「吹き飛ば〜」

笑いながらそう言うと、駆逐艦は内部を爆破され膨らんでいく。

金属が内部から膨らみ、変な音を立てながら爆発した。

その爆発の中からリーンハルトは生還すると、次の獲物を探すのだった。

「先輩には悪いけど、このまま僕がバルトファルト公爵を倒しちゃおっかな〜」

敵の英雄を倒したい。

それだけの思いで、リーンハルトは戦場でリオンを捜す。

だが、どこにもいない。

「もしかして、もう沈んじゃったのかな？」

つまらなそうに呟くと、王国の鎧が突撃してくる。

『これ以上、やらせるかあああ！』

突撃して来たのは、どうやら中年の騎士らしい。

勢いもあるし、それなりに場数は踏んでいるようだ。

ボロボロの状態ながら生き残っているのを見れば、味方が数機食われている可能性もある。

この騎士は強いのだろう。

だが、リンハルトの好みではない。

「時代遅れの騎士道ってやつかな？ 馬鹿の一つ覚えみたいに突撃してきてさ。実力差を考えなよ、おじさん」

敵鎧の頭部を蹴り飛ばし、相手が仰け反ったところで剣を突き刺そうとした。

すると、後方から大きな爆発音が聞こえてくる。

「な、何だ！？」

振り返り、そして剣先の向きが変わって相手のコックピット付近を貫いた。

『こ、このおおお！』

暴れる敵の鎧を無視して、リンハルトはアルカディアを見る。

アルカディアに何か突撃し、そこから煙が上がっていた。

「シールドを抜かれたのか？」

そして、皇帝陛下から序列騎士たちに戻るように命令が出される

と、リーンハルトは舌打ちをする。

暴れ回る敵の鎧から剣を抜き、そして左手を向けて紫電を放つのだった。

紫電に襲われた敵鎧のパイロットが叫ぶ。

『うおおおお！ ニックス！ リオン！ みんなを 頼 』

爆発しながら落下していく鎧に興味もなく、リーンハルトは全速力で要塞へと帰還するのだった。

「結局、十一機しか撃墜できなかったな」

アルカディア内の通路は広がった。

動力炉に通じる通路は、魔装をまとった新人類も通るために広く設計されたのだ。

そんな通路を現代兵器で守っているのは、帝国の兵士たちである。

鎧にマシンガンやらバズーカを持たせ、盾を構えている鎧もいた。

「剣を持って突撃してくる馬鹿はいないか」

アロガンツのコックピット内ではやくと、ルクシオンが生真面目に返答してくる。

『設計思想が騎士による運用を考えられていませんね。それから、帝国の鎧は王国の主力機と比べて世代が一つ違います』

性能は帝国が上で、更には設計思想も違っている。

本当に厄介な相手だ。

だが。

「でも俺には関係ない！」

アロガンツに床を滑るように移動させ、右手に持った戦斧で盾を持った敵を両断する。

そのまま、左手に持ったライフルで銃器を持った敵の鎧を撃つ。

乱暴に突き進んだことで被弾もしたが、アロガンツの装甲が全て弾いてくれた。

おら、ドンドン進め！

アロガンツが敵陣を破ると、ユリウスたちが続く。

『リオン、前に出すぎるな！』

「早くこの要塞の動力炉を落とす必要があるんだよ！」

アルカディアの動力炉を破壊してしまえば、魔素の製造は行えない。

そうなってしまえば、俺たちの勝ちだ。

「ルクシオン、無人機たちの様子は？」

『現在、敵の増援を防ぎつつ、動力炉までのルートを探しています』
連れてきた無人機たちも頑張っているが、敵も結構な数を要塞内に配置していた。

そして、ルクシオンが赤い瞳を光らせる。

何かあったのか？

「どうした！？」

『無人機の部隊が一つ壊滅しました。最後の映像を解析した結果、魔装をまとった騎士が出て来たようです』

そこを守っていると、動力炉へのルートの可能性が高い。

「案内しろ。もしもフィンなら 俺が相手をする」

『こちらです』

アロガンツを向かわせると、ユリウスたちもついてくる。

『魔装は性能だけならアロガンツと同等と聞いたが、フィン以外も強敵なのか？』

ユリウスのそんな疑問に答えるのはジルクだ。

『恐ろしい話ですね。こちらでも強い鎧を借りていますが、倒すのは苦勞しそうです』

ブラッドはノリノリだ。

『リオンを倒すために頑張ってきたんだ。その成果が試せると思えばいいさ』

グレッグはそんなブラッドの意見が気に入ったのか、賛同する。

『そうだな。俺たちの三年間は無駄じゃなかったと証明してみせろぜ！』

こいつら、俺に勝つために三年間も頑張ってきたのか？

いや、正確に言うなら三年ではないはずだ。

そんな余計なことを考えていると、目の前を先行していた無人機たちが吹き飛んだ。

壁はズタズタに切断され、そこから出て来たのは魔装だった。

魔装の体に紫電がバチバチと走り、見るからに危険そうな奴だった。

「フィンじゃないな」

ただ、フィンのブレイブとは違う奴だ。

『みいゝつけたあゝ』

間延びした声は若く、そして俺たちを前にして楽しんでいるように見えた。

俺たちが構えると、アロガンツを見て喜ぶ。

『へえゝ、公爵様直々に乗り込んできたんだ。やっぱり、英雄はやる事が違うよね。それにしても　六人か』

無人機もある中で、有人機である俺たちの数を言い当てる。

「面倒だな。ここは全員で相手を」

すると、先程から黙っていたクリスが俺たちの前に出る。

『リオン、悪いがここは譲って欲しい』

「あ？　お前、何を言っているんだよ」

クリスは現れた魔装を前に戦う姿勢を見せていた。

『魔装の装甲にある紋章が見えるか？　あれは帝国の剣聖だ』

ロングソードのような武器を持った敵が感心していた。

『へえ、僕を知っているの？』

『剣聖の称号を受け継いだばかりだが、ここで相手をするなら私だろう。リオン、さっさと先に進め。こいつの相手は私がする』

俺に構わず先に行け、みたいなフラグを立ててくる。

「お前は馬鹿か！　ここは全員で袋叩きにして先に進めばいいだろうが！」

『時間が勿体ない』

クリスにそう言われると、ルクシオンまでもが賛成してくる。

『マスター、ここは先を急ぎましょう』

「　　阿呆が」

俺の呟きを聞いたクリスは、笑顔を見せるのだった。

『悪いな。私にも意地がある』

クリスを残し、俺たちは先へと進むのだった。

帝国の剣聖と戦うと決めたクリスは、名を名乗るのだった。

「クリス・ファイア・アークライトだ」

相手は剣を担いだ格好で、名を名乗る。

『リンハルト・ルア・キルヒナーだよ。それはそうと、君って本当に剣聖の息子？』

「そうだ。最近、父から剣聖の称号を受け継いだ」

本当は奪い取ったのだが、そんなことを教えてやる必要がなかったので黙っていた。

リンハルトは、不満そうにしている。

『一つ聞いて良いかな?』

「何だ?」

クリスが油断なく武器を構えると、リンハルトの苛立った声がある。

『何で武器が銃器なんだよ!』

クリスの機体だが、持っている武器は銃火器だ。

バックパックにはミサイルコンテナを背負い、左手にはガトリングガンを持たせている。

右手には取り回しのしやすいサブマシンガンのような武器を持っていた。

クリスは首をかしげる。

「戦場では銃の方が優秀だからだ!」

当然のように言うと、リンハルトはガッカリした様子を見せる。

『王国の剣聖は強いって聞いていたのに残念だね。黒騎士を倒した実力者と聞いていたけど、本当にガツカリだよ』

剣を構えるリンハルトに、クリスは問答無用で引き金を引いた。

「残念だったな。黒騎士を倒したのはリオンだ」

弾丸やミサイルがリンハルトに襲いかかると、それらが切断された。

弾丸は魔装の装甲を削るが、リンハルトは致命傷を避けていた。

『なら、王国の英雄を追いかけて僕が倒すよ。エースを撃墜するのが好きなんだ』

この言葉で、相手が戦場を楽しんでいるのを察する。

クリスはガトリングガンを使ってリンハルトを倒そうとするも、簡単に避けられて距離を詰められてしまった。

『剣聖が銃を使ったら駄目でしょ！』

「悪いが、剣ばかりにこだわるプライドは捨てている」

そんなものを持っていても、リオンには勝てないのだ。

クリスはリオンとの出会いで沢山のことを学んだ。

その一つが、決闘で剣しか持たない自分は、遠距離の敵に対して

極端に弱いという欠点を持つということだ。

決闘ならまだマシだが、これが戦場では致命的である。

常に剣だけで戦える戦場などない。

『剣を捨てた奴が、剣聖を名乗るな！』

リンハルトの一撃は、とても鋭くクリスから見ても綺麗だった。

ガトリングガンを放り投げ、身代わりにしつつ距離を取るクリスはミサイルやサブマシンガンで攻撃する。

狭い通路内を器用に飛び回るリンハルトの魔装だが、それ故に逃げ場は少ない。

確実に被弾していく。

後ろに下がりながら、クリスは撃ち尽くしたミサイルコンテナをパージしてリンハルトに投げ付けた。

それを斬り裂き、リンハルトは迫ってくる。

『剣で勝てない？ それはお前が弱いからだよ！ 剣だけで勝てないお前が、剣聖を名乗るなんて笑い話だ！』

そんな事を言われても、クリスは動じなかった。

むしろ。

「お前は魔装なんて強力な鎧を持っているから対抗できるが、一般の騎士ではどうしようもないと思うが？」

冷静に言い返していた。

そうしている間にも、クリスの機体は武装を次々に捨てて軽くなってくる。

「やはり、付け焼き刃だったな」

銃などの練習も始めたが、他の四人と比べるとやはり拙かった。

そのため、狙うよりも数をばらまいて敵を落とす方法を選んだのだが、大量の弾薬を使ってもリンハルトを撃破できなかった。

「今後も練習が必要だな」

そんなクリスに、リンハルトは怒りを通り越して呆れるのだった。

『お前にもう未来はない。死ねよ』

冷たい声を出し、魔装を加速させ一気にクリスに詰め寄るリンハルトの一撃が鎧の装甲を削り取った。

クリスの機体が膝をつく。

クリスはコックピット内で冷や汗をかいていた。

「ふんどしをしていて良かった」

コックピット内に僅かに届き、小さな破片が腹部に刺さっていた。パイロットスーツを突き破っているが、僅かに届いていない。

きつくしめたふんどしのおかげで、体には届かなかった。

立ち上がって振り返ると、リーンハルトの魔装は各部から血のような液体を噴き出している。

剣を捨てて、お腹を押さえていた。

『血、血が！ 僕のお腹が！ 早く治療しない こぶっ！』

クリスの機体は剣を握っている。

すれ違いざまに剣を抜いてリーンハルトの胴体部分を斬り裂いた。

ゆつくりと、魔装は上半身が下半身と別れ、滑り落ちるように倒れた。

クリスは眼鏡の位置を正す。

「確かに銃も使うが、剣だって使う。不用意に懐に入り込んだお前の不注意だ」

まだ生きているのか、リーンハルトの声が聞こえてくる。

『死にたくない。こんなこと間違っている。だって、僕は剣聖なんだ』

剣に固執し、そして戦場を甘く見ていたリーンハルトを見て、クリスは目を閉じるのだった。

（お前は昔の私と同じだな）

そんなリーンハルトにクリスは近付く。

「今樂にしてやる」

リーンハルトに止めを刺し、クリスはリオンたちを追うために移動を開始するのだった。

腹黒とナルシスト

動力炉を指して突き進む俺たちは、通路の関係から一度外壁近くの通路を移動していた。

「本当に近付いているんだろうな!？」

ルクシオンに尋ねれば、いつものように返事をする。

『問題ありません。それにしても、理解に苦しむ内部構造です。機能美に欠けています』

新人類が建造した要塞だからか、それとも本当に機能美がないのか。

ルクシオンの文句は止まらない。

『大体、無駄が多くこれではスペースが マスター!』

すぐにその場から下がると、壁を突き破って帝国の鎧たちが侵入してきた。

『見つけたぞ、侵入者共!』

外壁に穴を開け、そこから無理矢理侵入してきたようだ。

『ちっ!』

グレッグがすぐに飛び出し、敵を倒すとユリウスが帝国の兵士たちが侵入してきた穴を見る。

『まずいな。敵が集まってきている』

穴が開き、外の景色が見える。

飛行船数隻。

そして、鎧やモンスターたちが 沢山。

「こいつら、無茶苦茶するな」

『この数を相手にするのは面倒ですね』

敵がこの場を目指して集まってきている。

すると、ブラッドが俺たちの前に出るのだった。

『なら、ここは僕の出番だね。僕の機体は多数を相手にするのに向いているから』

背中に背負ったランス型のドローンは、遠隔操作ができる。

確かに多数を相手にするのに向いていた。

「馬鹿！ お前一人をここに残していけるか。お前は、この中で」

一番弱いという言葉を読み込む。

だが、俺の言葉を引き継いだのは、ブラッド本人だった。

『一番弱い、だろ？ 自分でも理解しているよ。だから、ここで僕が時間を稼ぐんだ』

ブラッドの決意に感謝する。

「お前ら、本当にどうしてこういう時だけ 　　いいか、駄目そうなら逃げろよ」

『そこはお世辞でも追いつけと言って欲しいね』

俺たちが移動しようとする、ルクシオンが『無人機をサポートに残します』と言ってブラッドの周囲にコンテナを背負った無人機が配置につく。

すると、ジルクが動きを止めた。

『リオン君 　　そして殿下。ブラッド君だけでは不安でしょう。ここは私も残ります』

ユリウスの乳兄弟で、側を離れないはずのジルクがそんなことを言い出した。

ユリウスも許可を出す。

『お前の好きにしろ』

『そうさせてもらいますよ。ここから敵が流れ込むのは避けたいで

すからね』

大きなライフルを構えたジルクが、すぐに近付いてきた敵を撃ち抜いていく。

俺に声をかけてきた。

『すみませんが、殿下のことをよろしくお願いしますね』

「俺にこいつの世話を押しつけたな」

それを聞いたユリウスが不満を漏らすのだ。

『お前ら、俺を何だと思っている。 リオン、行くぞ。 時間を無駄に出来ない』

グレッグが二人に声をかける。

『死ぬんじゃないぞ！』

二人は笑っていた。

『君たちこそ』

『殿下たちも気を付けてください』

要塞の外に出た二人は、壁に開いた穴を目指して押し寄せる敵を排除していた。

ブラッドは六本のランスを飛ばし、モンスターに突撃させて貫いていく。

そして、自分はランスを持って帝国の鎧を相手にするのだ。

「くっ！」

襲いかかってくる敵の中にはエースがいたのか、手強くて押されていた。

『貴様らに家族を殺されてたまるかあああ！』

帝国軍の兵士たちも、この戦いの意味を知っていた。

ブラッドは声を上げる。

「こっちだって、はいそうですか、と負けるわけにはいかないんだよ！」

左腕に仕込まれた銃を相手のコックピット間近で撃ち込むと、敵はそのまま落下していく。

ランス型のドローンが戻ってくると、機体の背中にマウントされて充電を開始した。

ブラッドは次々に集まってくる敵を見るのだ。

「こいつら、いったいどこからわいてくるんだ」

ライフルを構えたジルクが、敵飛行船のブリッジを撃ち抜く。

そのまますぐに、大砲も破壊して一隻を行動不能にした。

『とにかくここで食い止めます。リオン君たちが動力炉を止めてくれれば、敵も戦いを止めるでしょう』

だが、不安もあつた。

「止めてくれると良いけどね」

戦争をする理由が消えても、自棄になって突撃してこないとも限らない。

それに、戦争は自分たちだけでやっていない。

味方の状況が不安だった。

見て、そして聞こえてくる情報からすると、王国軍は既に二百隻以上を失っている。

「何とか持ち堪えてくれているのは、共和国とファンオース公爵家のおかげかな？ まったく、微妙な気分だよ」

長年、ファンオース公爵家に苦しめられてきたブラッドの実家からすれば、素直に喜べない状況だ。

『共和国のセルジュ君も頑張っているみたいですよ』

「あいつが？」

押し寄せるモンスターたちに、魔法陣を展開して広域攻撃魔法で吹き飛ばすブラッドは少し驚いていた。

（助けに行きたいが、逆にこちらも増援が欲しいくらいだ。すまないけど、耐えてもらうしかないな）

多くの敵が押し寄せる中、ブラッドとジルクは必死に耐えていた。

リコルヌの船内。

胸元を押さえ、汗を流すリビアは呼吸が乱れていた。

「こ、声が」

戦場で聞こえてくる声を一身に受け止め、それを補助するクレア―レが必要な情報を抜き出していく。

目に涙を浮かべ、苦しみながら耐えるリビアの背中をアンジェがさする。

「リビア、無理をするな。疲れたら休め」

リビアは首を横に振る。

「ここで頑張らないと、リオンさんの助けにならないから」

涙を流して耐えているリビアは、いつ倒れてもおかしくない状況

だった。

マリエはアルカディアを見ている。

「兄貴たち、成功するわよね？」

無事に戻ってきて欲しいのだろう。

それはみんな同じ気持ちだった。

すると、空中に映像が浮かび上がる。

そこに映し出されたのはギルバートだった。

『アンジェ！ 艦隊を編成した。これより、私たちが前に出る』

「あ、兄上？ 何を言っているのですか！」

『父上の飛行船は沈んだ。誰かが前に出て指揮を執る必要がある。このまま、共和国とファンオース家に頼っていては持たないからな』

リコルヌの横を通り過ぎる大きな飛行船は、ギルバートの乗り込むレッドグレイブ家所有の飛行船だ。

次々に王国軍の飛行船が続き、崩れた前衛の穴埋めに入る。

ギルバートがアンジェに頼み事をする。

『私が死んだら、レッドグレイブ家の後見人を頼むぞ。必要ならお前の子供に継がせてもいい』

「兄上！」

『お前が選んだ道は、そういう道だ！
家族すら犠牲にして、
国を守る義務がある。それを忘れるな』

アンジェが俯く。

そして、すぐに顔を上げると普段の表情になっていた。

「ご武運を」

『それでこそ、私の妹だ』

王国軍は既に三百隻近くが沈んでいた。

帝国軍も同様に数多くの飛行船が沈んだが、お互いに退けない。

本来であれば王国が敗北を認めて撤退している場面だが、ここでの敗北は死を意味する。

互いに退けなかった。

胸を押さえるリビアが、立ち上がって前を見る。

「前に 私たちも前に出ます」

クレアーレが驚いていた。

『リビアちゃん！？』

「リコルヌが前に出て、王国の皆さんを守ります。そうしないと私は自分が」

苦しむリビアが胸を押さえる。

アンジェはリビアに額を当てた。

「お前も無茶をするな」

そして、船内の顔ぶれに視線を巡らせる。

「リコルヌを前に出す。降りたい者は、すぐに脱出しろ」

ノエルが両手を小さく挙げて降参のポーズを見せる。

「冗談でしょ？ 今更降りないわよ」

ユメリアもカイルと手を握り合い、頷いて見せた。

マリエの腕に抱きついていているカールも、震えながら逃げないと頷く。

そして、マリエは笑顔を見せる。

「あんたが言わなかったら、私が突撃するって言っていたところよ」

胸を張って答えるマリエに、アンジェは目を細めて言うのだ。

「前に出るが、突撃するとは一言も言っていない」

ジルクはモンスターたちの相手をしながら、王国軍の動きを見ていた。

「後方の艦隊を前に出しましたか。こうなると、王国側が追い詰められていますね」

戦力から考えれば、王国側が不利だった。

それを持たせているのは、リオンと 力を貸してくれている人工知能たちのおかげである。

無人機たちが厄介な敵を相手にしているため、王国側の被害は予想よりも少なかった。

だが、そんな無人機たちも次々に落ちていく。

ジルクは距離を詰めてきた敵の鎧に、ハンドガンに向けてコックピットを撃ち抜く。

そして、ライフルを放り投げた。

「交換します」

そう言つと、コンテナを背負っていた無人機が代わりのライフルを用意する。

受け取ったジルクは、ライフルを構える。

ライフルに取り付けられたスコープから、映像が届く。

拡大された映像を見て、呼吸を止めた。

引き金を引くと、こちらを指指して飛んできていた帝国の鎧が一発の弾丸で二機も貫いて落ちていく。

すぐに次の敵を探し、同じように引き金を引いていく。

「まったく 嫌になりますね」

戦争など恐れないと思っていた。

戦ってこそ騎士。

だが、こうして戦場を何度も経験して気が付く。

戦争などするものではないな、と。

「私は書類仕事をする方が向いていそうですね」

生き残ったら、もう戦争は出来るだけ回避する道を探ろうと考える。

幸いなことに、次の王様は平和主義だ。

（いや、平和主義ではありませんね。甘いだけだ）

だが、そんな王様も嫌いではない。

（足りない部分は臣下が補う。それだけのことですからね）

自分も出来うる限り協力しよう。

（マリエさんの幸せな生活のために！）

そう思っ て引き金を引く。

アルカディア内部を進む俺たちは、動力炉に繋がるルートを発見した。

そこに配置された戦力は多いが、アロガンツで無理矢理押し通る。

「邪魔だあああ！」

次々に敵の鎧を破壊し、そして突き進むと そこに待っていたのは魔装をまとった騎士“たち”だった。

『マスター、魔装です』

「団体でお出ましか」

魔装をまとっている騎士たちのリーダー格が声を出す。

『まさか本当にここに来るとは思わなかったぞ』

俺が構えると、グレッグとユリウスが俺の前に出るのだった。

『リオン、お前は少し落ち着け!』

『補給を受ける。私たちが相手をする』

二人が向かい合う魔装の騎士たちは三人だ。

一人で一機を相手にすれば、何とか乗り切れそうだが
残念なこと時間がない。

『マスター、敵主砲の発射態勢が整います。早めにけりを付けなければ、味方に被害が出ます』

「そうだな。 ルクシオン、強化薬だ」

『マスター、それは駄目です!』

「命令だ!」

ルクシオンが目を伏せて、そして俺の命令に従う。

『はい。強化薬を投与します。中和剤投与まで残り時間は九分五十八秒です』

背中のバックパックから針が打ち込まれ、液体が俺の体の中に入ってきた。

「かはっ!」

体が急激に熱くなり、目の前の視界が狭くなってくる。

苦しくて呼吸も出来ず、涎が垂れる。

だが、しばらくすると急激に気分が良くなってきた。

視界が広がる感じに加え、まるで何でも出来そうな気がしてくる。

体に力が入る。

心臓がいつもよりも強く鼓動している気がした。

俺は涎を拭う。

「二人とも、下がれ」

『リオン！？』

グレッグを押しつけて前に出ると、目の前の魔装をまとった騎士が何か言い始める。

『ほう、英雄自ら相手をしてくれるのか？ 私は帝国騎士で序列第二位の』

名乗りを上げているが興味がなかった。

「悪いな。興味が無い」

『アロガンツのリミッターを解除します』

俺の肉体が耐えられないために、アロガンツにはリミッターが搭

載されている。

リミッターは安全装置だ。

パイロットの負担にならないように、アロガンツに制限を設けていた。

それを解除しても問題ない程に、薬の効果は大きかったのだ。

『なっ！？』

魔装が武器を手に取りうとする前に、アロガンツが敵の頭部を握りつぶした。

そして、戦斧を振り下ろすと綺麗に両断される。

「あと二つ！」

周囲の流れが遅く感じる。

慌てている敵が剣を抜いてこちらに向けてくるが、それをアロガンツが握りつぶして手の平を敵に当てた。

『インパクト』

二機目は爆散し、残った一機が逃げようと背中を見せたので戦斧を投げ付ける。

両手ががら空きになったアロガンツの前に、魔装が率いていた鎧たちが控えていた。

その数は通路を埋め尽くして先を見えなくしている。かなりの数だ。

「逃げれば追わない」

逃げて欲しいと思っていたが、敵は恐怖を押し殺してアロガンツに向かってきた。

『怯むな！ 帝国の意地を見せろ！』

『フィン様が来るまで耐えるんだ！』

『ここから先に行かせるものか！』

向かってくる帝国の鎧たちを前に、俺は操縦桿を強く握る。

ギチギチと音が聞こえてきた。

普段よりも力が入る。

だが。

「くそっ！」

涙が出たと思ったが、出ていたのは血だった。

どうやら、体への負担が大きいのは本当らしい。

『マスター、中和剤を！』

「駄目だ。こいつらを倒して先に進む！」

帝国の兵士たちに向かってアロガンツを向かわせ、そして全てを破壊した。

仮面の騎士たち

待ち伏せていた敵を全て倒したアロガンツの背中が、ユリウスには禍々しく見えていた。

「リオン、一体何をした？」

これまでの動きとは明らかに違うアロガンツを見て、嫌な予感がある。

アロガンツが振り返ってくる。

「何も。それよりも、少し疲れた。何かあったら頼むぞ」

先程信じられない動きを見せていたアロガンツが、今は動くのがやっとに見える。

アロガンツではなく、パイロットであるリオンは随分と疲弊していた。

グレッグがユリウスに話しかけてくる。

『リオンの奴、何か使ったんじゃないか？ 共和国の時も怪しい薬を使ったとか聞いたぞ』

「薬だと!？」

その手の薬 肉体や魔力を強化する薬があるのは、ユリウスも

知っていた。

だが、それらは必ずデメリットも存在する。

効果が大きく、即効性がある程に使用者の負担は大きくなる。

ユリウスの機体が、アロガンツの肩を掴むのだった。

「リオン、無茶をするな！」

だが、リオンは忠告を無視した。

『時間がないんだよ。さっさと先に進むぞ。まだ、フィンも残っているんだ』

ユリウスが汗を拭う。

「フィンか？ あいつ、そんなに強いのか？」

話には聞いているが、リオンが恐れるほどとは思っていなかった。

リオンが苦しそうな声を出す。

『あいつは俺がやる』

無茶を言つなと言いたかったが、リオンがこれだけ決意をしているとなるとユリウスには止めることが出来ない。

「お前たちは仲が良かったからな。戦わない道を選ぶと思っていた」

『無理だ。お互いに 退けないから』

「そうか」

アロガンツに肩を貸すかたちで、ユリウスは先へと進む。

先頭を進むグレッグが、ルクシオンに尋ねる。

『おい、目的地はまだ先なのか？』

アルカディア内部に侵入してから、迷路を進み時間を取られてしまった。

思っていたよりも時間がかかっている。

『この先です。動力炉の反応が近付いています』

徐々に魔素の濃度が濃くなっている。

メーター類がそれらを示し、ようやく目的が果たせそうだった。

「動力炉さえ破壊すれば、この馬鹿でかい要塞も沈むのか？」

『それは間違いありません』

グレッグが威勢のいい声を出す。

『何だ。割と簡単じゃないか。こんな要塞に勝てなかったご先祖様たちは、いったい何をしていたんだ？』

その疑問に答えるのはルクシオンだ。

『アルカディアが万全な状態であれば、私たちは既に全滅しています。勝負にすらなりませんでした』

ユリウスが驚く。

「そんなにか？ お前でも勝てないのか？」

旧人類の技術の粋を集めて作り出されたルクシオンでも勝てないと聞いて、ユリウスは目を見開いた。

『はい。アルカディアをここまで追い込んだ、旧人類の軍人たちのおかげで我々は戦えています』

グレッグがばつの悪そうな声で言う。

『なら、俺たちが止めを刺して、ご先祖様たちの心残りを』

その途中で、後方より接近する敵に気が付く。

ユリウスはアロガンツを手放し、そして盾を構えて庇った。

「ちっ！ 追いついてきたのか！？」

後ろから迫ってくるのは、敵の鎧だ。

その中には魔装の姿も確認できる。

リオンが苦しそうな声を出す。

『フィンは！』

『いません。どうやら、ブレイブとは別の魔装です』

その中にフィンはいないようだが、厄介なことに変わりはない。

グレッグがジルクたちを心配する。

『おい、もしかしてジルクたちは』

『いえ、無事です。現在も敵を防いでいます。目の前の敵は、別ルートから要塞内部に戻ってきたと思われます』

ユリウスは目の前の敵を見る。

盾で敵の銃撃を防ぎつつ、その数を数えていた。

（魔装と呼ばれる鎧は四機。その他は帝国の通常の鎧か）

チラリとアロガンツを見れば、リオンの動きがぎこちなかった。

「ルクシオン、リオンは戦えるのか？」

『現在中和剤を使用しています。すぐに回復するでしょうが、現状では戦闘に耐えられるとは思えません』

「すぐに回復はするんだな？」

『はい』

ルクシオンとの会話で、ユリウスは覚悟を決めて深呼吸をした。

「なら、リオンを先に進ませろ。敵が集まってきているからな。ここで誰かが残る方がいい」

剣を抜き、そしてバックバックに背負っている武器で攻撃を開始する。

リオンが驚いていた。

『お前』

「先に行け。時間を稼いでやる」

『一人でこの数を相手に出来るわけが』

二人の会話に割り込むのはグレッグだ。

『なら俺も残るぜ！　ユリウスだけで心配なら、俺も残れば安心だろ？』

リオンが何かを言いかけるが、ユリウスはアロガンツを押した。

「行け！　　時間がないのだろう？」

アロガンツが背中を向けると、先へと進んでいく。

アロガンツが先に進むのを見て、止めようと魔装の一機が無理矢理突っ込んできた。

それをユリウスは盾で防ぐ。

「悪いが通行止めだ！」

ユリウスの白い鎧が、バックパックから青白い光を放出した。

決闘の時に破壊された鎧の機能を、ルクシオンが再現していた。

剣を魔装に突き刺すと、敵が青い炎に包まれ燃えていく。

後方からは銃撃されるが、それを盾で防ぎつつ背中のカannonを使つて応戦する。

もう一機の魔装が飛び出してくると、今度はグレッグが敵に槍を突き刺して倒していた。

『ユリウス！ あんまり飛ばすと、後で息切れするぜ！』

「大きなお世話だ。ほら、次が来るぞ！」

二人がリオンのために敵の増援を防ぐため戦い始める。

アルカディアの司令部。

そこにミアを送り届けたフィンハ、再び出撃しようとしていた。

『相棒、アロガンツが動力炉に迫っている。味方は蹴散らされるか、

足止めを受けて止められない』

ブレイブが現状を伝えてくると、フィンは手を握りしめた。

「そうか」

ミアがフィンに抱きつく。

「ミア？」

ミアは震えていた。

「騎士様、お願いします。お願いですから 戻ってきてください。私を一人にしないで！」

泣いているミアを、フィンは優しく抱きしめる。

「大丈夫だ。必ず戻ってくるよ」

「本当ですか？」

「ああ、本当だ。だから、ここで待っていてくれ」

ブレイブもミアを安心させる。

『ここが一番安全だからな。ミアがここにいれば、相棒も心置きなく戦えるぜ』

ミアがブレイブを見る。

「ブー君もちゃんと戻ってきてね」

『任せろ！　というか、ブー君って呼び方はどうにかならないのか？　相棒は黒助って呼ぶし、みんなブレイブって呼んでくれないよな』

フィンが笑う。

「似合っているだろ、黒助」

ミアも微笑む。

「ブー君って可愛いと思うよ」

『やっぱ、お前らの感性って理解できないわ』

普段通りの会話をして安心したのか、ミアがフィンから離れた。

そして祈るような仕草をする。

「騎士様、ちゃんと戻ってきてくださいね」

フィンは笑顔で答えるのだ。

「　　ああ」

アルカディアの外でも動きがあった。

『セルジュ下がれ!』

飛行船から命令を出すエリクの声を無視して戦うのは、ボロボロの鎧を操り戦うセルジュだった。

今も襲いかかってくるモンスターや、帝国の鎧を倒している。

「俺が戦わないと」

まるで罪を償うために戦っているようだった。

同時に、今自分が下があれば共和国軍も崩れると理解していた。

「俺は託されたから 親父に託されたから」

奮戦するセルジュだが、鎧の方が先に限界に達してしまう。

関節が悲鳴を上げ、空中で分解してしまった。

背中エンジン部分も火を噴く。

（ああ、俺もここで終わるのか。ようやく）

解放されると思っていたと、セルジュの機体に近づく味方機がいた。

それはファンオース公爵家の鎧だった。

『共和国の連中、何で見ているだけで助けない?』

『おい、無事か！？』

共和国の味方ではなく、ファンオース公爵家が助けてくれた。

それが、今のセルジュの立場を物語っていた。

ファンオース公爵家の飛行船。

艦橋にいるヘルトルーデは、公爵家の騎士たちが回収した共和国の鎧を見ていた。

「奮戦するエースを放置するなんて、何かあったのかしらね？」

近くにいた艦長がヘルトルーデに提案する。

「ヘルトルーデ様、もう味方も限界です。王国軍も前に出てきました。ここで下がっても問題ありません」

王国軍も再編成され加わり、今は最初よりも楽になっている。

だが、油断できる状況でもなかった。

「駄目よ。この戦い、引くことは許さないわ」

「しかし！」

「それに、逃げたところで」

逃げたところで、待っているのは種族としての死だ。

その言葉を言い終わる前に、アルカディアの様子が変わる。

外壁にある目のような塗装が光を放ち、主砲を発射しようとしていた。

「敵の攻撃が来ます！」

ヘルトルーデもここまでかと覚悟を決めると、飛行船の横を白い何かが横切った。

「あれは！」

その姿は一本角の特徴的な飛行船。

リコルヌだ。

その両脇には、宇宙船が従っている。

シールド特化の宇宙船が、アルカディアの主砲から味方の盾になった。

途中で防ぎきれずに大破すると、今度はリコルヌが前に出て味方を守るように魔法障壁をカーテンのように展開する。

敵の主砲を完全に防いでいた。

ヘルトルーデは、リコルヌを見て肩をすくめた。

「王家の船に代わる切り札を用意していたの？」

だが、今はアルカディアの主砲を防いでくれるなら大助かりだ。

「皆の奮戦を期待します。ここでファンオースの名を知らしめなさい！」

ファンオース家にとっては、ここで頑張らねばならない理由も多い。

新しい王国での立ち位置が決まってしまうからだ。

それを考えると、安易に下がるといふ判断がヘルトルーデには出来なかった。

そして、個人的にも。

（聖女様にも借りを返さないかね）

ヘルトルーデは、マリエへの恩を返しておきたかった。

『キヤアアア！ 私のリコル又があああ！』

主砲の一撃を何とか防いだリコル又だが、無事というわけではない。

船内は激しく揺れたし、各部に負荷がかかっている。

単純に聖樹の若木からエネルギーを得ているから、何の問題もない　　というわけではない。

両手で杖を握りしめ、立っているマリエは呼吸が荒くなっていた。

シールドを展開する役目は、聖女であるマリエにある。

そして、アルカディアに接近したことで、シールドの負担は更に大きくなっていた。

カーラがマリエを心配している。

「マリエ様、疲れているなら休んだ方がいいですよ」

ただ、マリエは笑顔を作る。

無理矢理作った笑顔は、お世辞にも可愛いとは言えない。

「だ、大丈夫よ。心配しないで」

カイルが水とタオルを持ってくる。

「ご主人様、あんまり無理をすると倒れちゃいますよ」

「これくらい平気　　よ」

杖を握りしめ、何とか立っている状態だった。

水を飲むと、周囲で戦っているリオンの友人たちの声がする。

『リコルヌに敵を近付けるな!』

『狙って撃とうなんてするな! 前に撃てば嫌でも当たる!』

『ああああ! やっぱり格好をつけて参戦しなければ良かったあああ!』

悲鳴交じりの声が聞こえてくる。

リオンの友人たちが扱う飛行船も鎧も、ルクシオンが建造しているだけあって性能は高い。

そして、彼らは数年前から扱っており、練度も他より高かった。

マリエが汗を拭う。

(兄貴の友達も頑張っているわね)

リオンが学園で用意した貴重な味方たちだ。

しかし、未だに敵の数が多い。

彼らが頑張っても、戦力差は簡単には覆らない。

クレアーレが青い目を光らせる。

『ちっ! 抜けてくる連中がいるわね』

味方をすり抜け、危険と判断したりコルヌに群がってくるモンスターたち。

味方がリコルヌの盾になるため前に出るが、味方の飛行船を無視

してモンスターたちは押し寄せてくる。

窓の外に二十メートルは超えるモンスターが迫っていた。

アンジエがクレアーレに叫ぶ。

「迎撃は！」

『ごめんなさい。さっきのダメージで無理よ。復旧まで三十秒かかるの。あ、でもね 』

迎撃は間に合わないと思われた時だ。

マリエは目を見開く。

「え？」

白い機体 ユリウスの機体に似た二機が、リコルヌの前に出た。

大きなモンスターを剣で斬り裂く。

モンスターは斬り裂かれ、黒い煙になって消えていくのだ。

そして、二機の鎧が振り返る。

『困っているようだね、レディたち』

船内のモニターに彼らの映像が映し出されると、似たような仮面を付けていた。

アンジェが無表情になる。

「何をされているのですか？」

仮面を付けた男たちは、それぞれ似たようなポーズをするのだ。

『私は名前のない騎士。というのは困るから、仮面の騎士とでも呼んでくれ』

『今は仮面の騎士と名乗っておこう』

二人揃ってユリウスと同じようなことを言い出した。

マリエは体の力が抜けて、膝から崩れ落ちる。

（こいつらやっぱり親子だあああ！）

二人から駄目な臭いを感じ取り、マリエは血というものの恐ろしさを知るのだった。

仮面の騎士たちが、互いに向き合って罵り合っている。

『誰だ貴様！ 仮面の騎士は私だぞ！』

『そっちこそ誰だ！ 徹夜で考えた俺様の格好を真似やがって！』

『センスのない仮面をしゃがって！』

『言ったな！ アーレも格好いいと言ってくれた仮面を侮辱したな！ そくに直れ！ 叩っ切ってやる！』

二人が喧嘩をし始める。

仮面の騎士は ローランドと、ジェイクだった。

疲れた顔のリビアが、二人に対して冷たい声を出すのだ。

「邪魔をするなら帰ってください」

『お、お嬢さん、冷たいじゃないか』

『ここで帰ったら笑いものだろうが。まあ、いい。今はこいつとも共闘してやる。俺様の足を引っ張るなよ、偽仮面の騎士』

『私が本物だ！ 私こそがオリジナルだ！ それよりも、声からすれば若造か？ 親の顔が見て見たいものだ』

『貴様こそ、ろくな大人じゃないのだろうな』

クレアーレがボソツと呟くのだ。

『実は出発する前に二人が別々に相談に来てね。参加したいって言うから、ルクシオンが用意していた鎧の予備機を貸してあげたのよ。それにしても、親子揃って同じ格好をするって興味深いわね』

マリエが窓の外で戦っている二人を見る。

「親子って怖いわね」

ユリウスも同じ格好をしていることから、この二人と同レベルなのだと思つと悲しくなるマリエだった。

脳筋

「これで、三十うう！」

アルカディアの通路で槍を振るうグレッグは、次々に押し寄せてくる帝国の鎧を前に息を切らしていた。

「きりがねーな」

隣で戦っているユリウスも、グレッグの意見に同意してくる。

『そうだな。だが、リオンの邪魔をさせるわけにはいかないからな』

「フィンのことか？ 俺はリオンと戦わせたくなかったけどな」

グレッグは、リオンとフィンが友人であることを知っている。

だからこそ、戦わせたくなかった。

ただし、ユリウスの意見は違う。

『あいつがあそこまで覚悟を決めたんだ。止めるのは野暮というものだ』

「そうだな」

二人の後ろに控える無人機が、背負っているコンテナから交換する武器を取り出していた。

グレッグはボロボロの槍を放棄して、新しい槍を受け取る。

「よし、次は　ん？」

すぐにその場を飛び退くと、天井から一機の魔装が降りてきた。

「こいつら、自分たちの要塞にボコボコ穴を開けすぎなんだよ」

魔装をまとっている騎士は、酷くボロボロだった。

ここに来るまで無理をしてきたのだろう。

相手も槍を持っている。

『この敗北者の末裔共が。大人しく滅んでおけばいいものを』

相手が槍を突き出してきたので、グレッグは受け止めて距離を詰める。

「諦めが悪いのが取り柄だね」

軽口を叩きつつ、グレッグは相手の強さを感じ取る。

（こいつ強いな。そんな奴が無理をしてここまで来たとなると、かなり焦っているって証拠か？）

相手もグレッグの強さを感じ取ったようだ。

『若いな。機体性能に頼りすぎているところも、槍の腕前も！』

相手の言う通りだ。

グレッグよりも、魔装をまとっている騎士の方が強かった。

（こいつ、俺よりも強いな。だが！）

「悪いな。機体性能に頼らせてもらう」

腕に仕込んだマシンガンを撃てば、相手は被弾しながらも下がった。

『隠し武器か！ 姑息な真似を！』

「あんたに勝つためなら、どんな手でも使ってやるよ。俺は 俺
たちは負けられないんだよ！」

グレッグの槍が赤くなる。

刃が熱を持ち、その部分が赤く光っていた。

槍を振り回し、そして相手が受け止めるとその部分が溶けていく。

『くっ！』

受け止めるのは危険と判断した敵は、一度距離を取ってから近付いてきた。

槍を突き出してくる。

「そんな丸分かりの」

だが、敵は持っていた槍を囫にして 魔装の先端の鋭い尻尾部
分を伸ばし、グレッグを貫こうとする。

コックピットに尻尾の先端が迫ると、すぐにグレッグは左腕を犠
牲に攻撃を防ぐ。

『見事だ。だが、これで終わりだ！』

身動きが取れないグレッグに、敵は槍を突き刺そうとする。

「この程度で、驚いてやれるかよ！」

コックピット内で、操縦桿のトリガーを引く。

すると、鎧のバックパックに取り付けたコンテナから、杭が何本
も発射された。

その杭に貫かれ、敵がグレッグから離れる。

『く、くそ。その機体さえなければ』

相手は悔しそうに倒れている。

グレッグはその言葉を認めるのだった。

「そうだな。あんたは俺よりも強かったよ。俺が勝てたのは、機体
性能のおかげだ」

相手は笑っていた。

『認めるとは潔いな。やっぱり、若さか』

動かなくなった敵から、襲いかかってくる敵に視線を移す。

魔装をまとう騎士が倒されても、帝国兵の士気は思ったよりも落ちなかった。

『この敗北者が！』

襲いかかってきた敵の鎧を槍で貫き、蹴り飛ばすと槍を手放した。

「本当に数が多いな」

ユリウスがグレッグに武器を渡してくる。

『すまない、フォローが遅れた』

「気にするな。邪魔が入らなくて助かったぜ」

グレッグは、先へ進んだリオンが気に掛かる。

（リオン、ちゃんと戻って来いよ）

ルクシオンが自動操縦を行うアロガンツは、アルカディアの動力炉へと到達した。

動力炉はアルカディアの中心部に、柱のような形で存在していた。部屋もそれに合わせて、円柱の形をしている。

黒い柱に、何本もの赤いラインが血管のように張り巡らされている。

それがまるで鼓動しているかのように、弱く、そして強く光を繰り返していた。

『これが動力炉　魔素を生み出す装置ですか』

旧人類が、長年到達できなかった場所に足を踏み入れることが出来たのだが、ルクシオンにはそれよりも気になることがある。

『マスター、気分はいかがですか？』

「最悪だ」

即答するリオンは、汗が噴き出していた。

強化薬を使用したおかげで、随分と体に負担がかかっていた。

中和剤を使用し、他にも色々な薬を使用してようやく会話が可能になってきた。

『先程まで意識が朦朧もうろうとしていましたので、それを考えると十分です。ね』

「ああ、おかげで大事な場面に間に合った」

リオンが操縦桿を握りしめると、アロガンツはコンテナを開放してミサイルを発射する。

後ろに控えていた無人機たちも同じように攻撃を開始すると、動力炉は自動的にシールドを展開して攻撃を防いだ。

リオンが眉間に皺を寄せる。

「簡単に終わらせてくれないか」

『接近して攻撃することを提案します』

シールドを突き破れば、問題なく破壊できるだろう。

動力炉自体が、そこまで頑丈に作られてはいないはずだ。

たとえ作られていたとしても　アロガンツなら破壊できる。

「分かった。その前に補給だな」

武器を使い果たしたので、リオンはコンテナを交換するため振り返った。

アロガンツはコンテナをパージして、受け取る体勢に入る。

無人機たちが背負っているコンテナの一つを受け取ろうとすると、ルクシオンが緊急回避を行う。

『マスター、敵です！』

「このタイミングでかよ！」

無人機たちが燃やされ、そして爆発していく。

全て破壊されてはいないが、それでも敵がいる中でコンテナの交換は難しい。

それに、相手が悪かった。

ルクシオンは聞き慣れた声を拾う。

『よう　久しぶりだな』

円柱状の部屋　その上から降りてくるのは「ブレイブ」だった。
フィンが鎧としてまとっている姿で、他の魔装よりも一回りほど大きい。

『ブレイブ』

リオンが笑みを見せていた。

「会いたかったぜ、フィン！」

そう言いながら、リオンは全速力で下がってバックパックを受け取るうとしていた。

アロガンツは機体構造上、推進力を生み出すノズルなどはバックパックに取り付けている。

浮かぶことは出来ても、バックパックがなければスピードが出ない。

ただ、フィンもそんなリオンの考えを読んでいた。

『俺もだ　　リオン！』

無人機たちがアロガンツにバックパックを渡そうとすると、フィンがその邪魔をする。

火球を放ち、無人機たちを破壊していくのだ。

「邪魔しやがって！」

『俺はお前を高く評価している。だから、手なんか抜かない！』

迫り来るフィンのブレイブに対して、ルクシオンは計算を続けていた。

『マスター、準備が出来ました』

「俺の相棒も頼りになるね」

『当然です。ブレイブと比べないでください』

そんな二人の会話を聞いていたブレイブが、腹を立てるのだった。

『言っただな！　俺と相棒のコンビが最強だって教えてやるよ！』

今まで下がっていたリオンだが、立ち止まると無人機たちもフィンに向かってコンテナの開口部を向けた。

「逃げてみるよ、フィン！」

リオンの言葉を合図に、コンテナから次々にミサイルが放たれる。無人機たちが持つ武器も使用され、持って来た弾薬を撃ち尽くすような勢いだった。

広いとは言え、鎧同士が戦うには狭い通路だ。

フィンはすぐに左腕を前に出すと、盾の形に変えて受け止める。

そして吹き飛ばされた。

アロガンツは、そのまま床を駆けてフィンを追い抜く。

『その程度でどうにかなると思ったのか、リオン！』

フィンが振り返って剣を振り下ろしてくると、戦斧で受け止めたリオンはその体勢を維持する。

「これでどうにかなるんだよ！」

ルクシオンは後方を注視した。

『来なさい シュヴェールト』

破壊された無人機たちの残骸の中から、バックパックの一つであ

るシュヴェールトが浮かび上がり飛んでくる。

元はエアバイクという空飛ぶバイクだったが、ルクシオンに魔改造されて今はルクシオンのバックパックになっていた。

まるで飛行機のようなその姿が、ルクシオンの背中に近付くと合体するためスピードを落とした。

ブレイブが攻撃しようとするれば、アロガンツが押さえ込む。

リオンが焦っていた。

「アロガンツがパワー負けしているじゃないか」

『合体すれば出力が上がります。それまで耐えてください』

フィンとブレイブも焦っている。

『あのバックパックは？ まずい、黒助！』

『やっているよ！ でも、こいつが邪魔で くそ！』

アロガンツの背中にシュヴェールトがドッキングすると、ルクシオンはすぐに行動を開始するのだった。

『出力上昇。いつでもいけます』

リオンが操縦桿を押し込む。

「おらあああ！」

アロガンツのツインアイが赤く光り、ブレイブを突き飛ばした。

シュヴェールトの装甲がスライドして開き、そこに並べられた丸いレンズからレーザーが放たれてブレイブに襲いかかった。

フィンアロガンツから離れ、盾を前にして後退する。

それを見たりオンは、背中を見せると全速力で動力炉の方向へと向かった。

『ま、待て！　っ！　こいつらあああ！』

残っていた無人機たちが、フィンにしがみついて邪魔をする。

「悪いな。お前と遊ぶのは後だ」

ヘラヘラしているリオンだが、冷や汗をかいていた。

『マスター、このまま動力炉の破壊を優先します。今戦うのは危険です』

「分かっているさ」

薬の影響で本調子ではないリオンは、苦しそうにしていた。

目を細めている。

後方で爆発音が聞こえてくると、ルクシオンは即座に計算するのだった。

（思っていたよりも早くこちらに追いつきそうですね）

シュヴェールトを得たことで推進力は増しているが、それでも向こうは魔装だ。

ブレイブは過去にネームドだったこともあり、優秀なのは間違いない。

（先に動力炉を破壊してしまえば、マスターがフィンと戦うこともない。そうすれば、薬の使用も 必要ない）

ルクシオンが気にかけているのは、リオンが薬を使用することだけだ。

「リオンが無事に生還することを考えている。」

だが、そんなルクシオンの願いも虚しく ブレイブが迫ってきた。

『リイイオオオンッ！』

ルクシオンはすぐにブレイブの能力を修正する。

（予想よりも早い。このままでは ）

追いついてきているフィンを見たリオンは、ルクシオンに命令するのだった。

「ルクシオン 投薬だ」

リオンの命令されているルクシオンは、投薬を拒否できなかった。

（こんなにも早く二度目を使用するなんて）

『 了解です、マスター 』

リオンの背中のバックパックから、強化薬が打ち込まれる。

そしてリオンが苦しむのを見て、ルクシオンは思うのだ。

（私ではどうすることも出来ない）

リオンが苦しみから解放されると、顔を上げた。

二度目の投薬で、すぐに目から血が流れてくる。

（使用する間隔が短すぎる。このままでは、三度目の投薬ではマスタ
ーの体がもたない）

リオンはアロガンツを振り返らせ、そのまま後ろに飛びながらブ
レイブを攻撃するのだった。

レーザーがブレイブを襲うが、フィンもそれらを器用に避けてい
く。

その動きを見て、ルクシオンが気付く。

（まさか、あちらも同じ事を？）

予想以上の性能を見せるブレイブだが、フィンがリオンと同じように投薬を行っているのなら辻褄が合う。

フィンとブレイブの音声を拾う。

『相棒！ 無茶をするな！』

『ここで無茶をしないで、いつ無茶をするんだ！ ミアの未来のためなら、これくらいのこと！』

フィンも強い薬を使用しているようだ。

リオンも話を聞いて事情を察したようだ。

「お前もドーピングか？ 気が合うな、フィン！」

『お前もかよー！』

互いに笑っているようだ。

ルクシオンは、この二人が戦うことになって後悔する。

（ 過去のことさえなければ、マスターは友人と戦うこともなかったのでしょうか？）

それは、自分がリオンの負担になってしまったという後悔だった。

通路を抜けて、再びアロガンツは動力炉のある部屋へと出る。

すぐにシュヴェールトのレーザーで攻撃を行うが、動力炉は魔法

でバリアを張って攻撃を通さなかった。

「シュヴェールトでも駄目か」

「はい。ですが、接近して攻撃するのは難しいと判断します」

大剣を抜いたブレイブがアロガンツに迫っていた。

アロガンツも、シュヴェールトから大剣を引き抜いてブレイブの攻撃を受け止める。

「させない。ミアの未来は 誰にも奪わせない！」

フィンの決意を聞いて、リオンも吼える。

「こっちも大事な姪っ子の命がかかっているんだ。退けるかよ！」

姪っ子 前世の姪であるエリカのことだ。

だが、ルクシオンは知っている。

リオンが戦っている理由は、別にエリカだけのためではない。

エリカだけなら、リオンはどこか安全な場所に移住させて終わらせていた。

口では色々と言っているが、これから王国で生まれてくる子供たちのためである。

普段のリオンなら「そういう正義感って信用できないんだよね」

などと軽口を叩くだろう。

だが、リオンはその態度からは分らないが、人一倍優しかった。

（ マスター ）

ルクシオンが求めていたのは、新人類を滅ぼしてくれるマスターだ。

それをここに来て、リオンが叶えてくれた。

それがルクシオンには、とても悲しかった。

親友の剣

アルカディアの外では、王国軍が押しはじめていた。

それというのも、敵の一部が要塞内部へと戻ってしまったためだ。

リオンたちがアルカディア内部へと突撃したことで、帝国側の指揮に乱れが出始めている。

その様子を艦橋から見ていたギルバートは、すぐに周囲の味方と連携して帝国軍に攻勢をかける。

「この機を逃すな！ 押し続ける！」

互いに全力でぶつかり合い、損耗率はとんでもない数字になっている。

普通の戦争なら、互いに退いているのは間違いない。

だが、この戦いではお互いに退けなかった。

艦長がギルバートに言う。

「ギルバート様、お下がってください！ 貴方はレッドグレイブ家の跡取りです！ ヴィンス様の安否が分からない今は、生き残ってもらわないと困ります！」

その意見を聞いても、ギルバートは下がらなかった。

「ここで逃げては末代までの恥になる。私に恥をかけというのか！」

「耐えるべき恥もあります！」

「そんなことは」

二人が言い合っていると、目の前を白い機体が通り過ぎていった。モンスターたちを斬り裂いて倒していく姿は、実に美しいのだが。

『今のは私の獲物だった！ これでスコアは私の勝ちだな！』

『俺様の剣が先に刺さった！』

レッドグレイブ家の飛行船は、改修を受けているためモニターがついている。

そこに映し出されたのは、変な仮面を付けている男二人だった。

ただ、声を聞いたギルバートは、それが誰なのか見当がつく。

額を押さえて膝をつくのだった。

慌てた艦長が、ギルバートの身を案じるのだった。

「ギルバート様！」

「も、問題ない。それよりも艦長 あの一機を狙えるか？」

「は？」

ギルバートは、目の前で喧嘩をしながら戦っている仮面の騎士たちを見て無表情になるのだった。

「一発なら誤射だと思わないか？」

「いや、駄目ですよ。味方ですよ!？」

ギルバートは苦々しい顔をする。

「分かっている!」

(こんなところに出てくるとは、一体何を考えておられるのか?)

二人の声がモニターから聞こえてくる。

『お前、本当に誰だ!? 戻ったら捕まえてやるからな!』

『貴様こそ、俺様に逆らったことを後悔させてやる!』

悲しいことに、仮面の騎士同士 お互いのことを全く分かっていないようだった。

ギルバートは頭痛がするのだった。

アルカディアの動力炉。

そこで戦う相手は、俺と同様にドーピングをしたフィンだった。

互いに機体性能を出し切っている状態だ。

性能的に言えば　ブレイブの方が勝っているだろうか？

「アロガンツが負けるような相手かよ。黒騎士の爺さん以来だ」

思い出すのは黒騎士だ。

元公国の英雄で、油断していた俺をとことん追い詰めてきた爺さんだ。

その時の経験がなかったら、きっと今頃はフィンに負けていただろう。

『お前に動力炉は破壊させない！』

フィンが大剣を振るってくるので、それを受け止めるとパワー負けをして壁に叩き付けられる。

壁にめり込むと、ブレイブの体から赤い球体がいくつも浮かび上がる。

経験からこれはまずいとすぐに分かった。

「ルクシオン！」

『装甲表面にシールドを展開します』

赤い球体から放たれる火球がアロガンツを焼いた。

アロガンツだけではなく、周りの壁まで焼いて溶かしてしまう。

おかげで動きやすくなった。

「こつちにも負けられない理由がある！」

『お互い様だろうが！』

アロガンツが左腕を伸ばし、衝撃波を発生させるとフィンが吹き飛んだ。

だが、自分から退いたのか、ダメージは少ない。

今度はこちらから攻勢をかける。

横薙ぎに払った大剣を、フィンは弾き飛ばしてこちらに蹴りを入れてきた。

「足癖の悪い奴め！」

『お前には負ける！』

蹴られて後ろに飛びつつ、レーザーを放てばシールドを構えてフィンの突撃してきた。

盾がレーザーで焼かれているが、気にした様子がない。

「さっさと終わらせてやる！」

ペダルを踏み込むと、アロガンツが速度を上げる。

同様にブレイブも速度を上げた。

蝙蝠のような羽を大きく羽ばたかせ、こちらについてくる。

その羽を狙ってレーザーを撃ち込めば、フィンはシールドや大剣を盾にして防いでいた。

そして、追われる俺に向かって火球を放つ。

『追尾型の魔法です。数は 八十一！』

「撃ち落とせ！」

シュヴェールトがレーザーで対処するが、数が多い上に大きいためなかなか撃ち落とせない。

シュヴェールトのエネルギー残量も計算してルクシオンが対処しているが、フィンを相手にしているとエネルギーの減りが早すぎる。

回り込んでくる一発の火球を大剣で斬ると、動きを止めたためにブレイブに追いつかれた。

「ちっ！」

近付いてきたフィンを蹴りに入れると、左手でアロガンツの足を掴んでくる。

「しまっ！」

気付いた時にはもう遅く、ブレイブにアロガンツの脚を破壊された。

『右脚をパージします』

「野郎、やってくれたな！」

ブレイブの表面を見れば、血管が脈打ちながら浮かんでいた。

「ブレイブまで薬を打ち込んだのか！？」

『いえ、パイロットとリンクしており、影響を受けているようです』
相当無理をしているのだろう。俺に対して凄い集中力を向けている。

そして、一つの可能性が浮かんた。

俺は視線を動力炉に向けた。

「悪いが、地の利は俺に味方した」

追いかけてくるフィンは、薬の影響なのか随分と周りが見えていなかった。

『リオン！ これで終わらせる！』

フィンの持っていた大剣から炎が吹き出し、収束して更に大きく

なる。

それを振り回すブレイブが近付いてきた。

「何でもいいから撃ち込め！」

『了解！』

レーザーを撃ちながら逃げ回ると、周囲の光景がとんでもなく早く流れていく。

互いに円柱状の空間を飛び回り、激しく戦闘を繰り広げていた。

薬で強化しなければ、きつとついていけなかっただろう。

逃げ回る俺に、フィンはどこまでも食らいついてくる。

「フィン　お前は俺よりも強かったよ」

ただ　お前は無茶をしすぎたな。

俺が追い詰められると、フィンは持っていた燃える大剣を振り上げて　ためらいなく振り下ろしてきた。

『これで終わりだあああ！』

『相棒、駄目だ！』

ブレイブが止めてももう遅かった。

『し、しまっ！』

フィンも気が付いたのか、大剣を止めようとするが 俺が左腕を使って無理矢理振り下ろさせる。

止まった大剣を左手で掴み、無理矢理振り下ろさせたのだ。

「フィン お前のミスは、その薬の効果を調べなかったことだ。少しばかり視野が狭かったなあ！」

フィンの使用した薬は、確かに効果はあった。

だが、視野が狭くなっていた。

敵である俺に集中しすぎて、周りが見えなくなっていたのだ。

魔法生物と繋がっているため、その影響が魔装にも出て相棒であるブレイブも気付くのが遅れていた。

俺が追い詰められた場所は、動力炉の柱そのものだ。

フィンの大剣が動力炉に突き刺さり、その熱が内部に届いたのか柱が軋んでいた。

ひびが入り、そして変な音が聞こえてくる。

それはまるで、悲鳴のように聞こえてきた。

『マスター、動力炉の破壊は終わっていません』

ルクシオンの声を聞き、啞然としているフィンを押しつけて俺は自分の持っている大剣を突き刺す。

「やれ！」

『はい！』

大剣に右腕から衝撃が伝わり、そのまま動力炉の内部で爆発が起きる。

「もつとだ！」

『アダマンティスの大剣でも耐えきれません』

「全力でやれ！　ここで完全に破壊するんだよ！」

『っ！　了解！』

衝撃波を発生させる右腕が火を噴き、そして大剣も砕け散った。

だが、成功した。

柱は内部から膨れ上がり、そして亀裂が入っていたところから割れた。

勢いよく赤い粒子が吹き出し、発生した風にアロガンツも吹き飛ばされた。

赤く膨れ上がった柱は、そのまま溶解していく。

周囲が赤く染まって何も見えない。

「どうなった!？」

『動力炉の破壊に成功しました。ですが、動力炉は溶解中です。ここには危険です!』

「ならすぐに避難を　ぐっ!」

口を押さえると、咳と一緒に大量の血を吐いてしまった。

『マスター!　中和剤を　』

投薬から十分も経っていない。

まだ数分残っていたが、先に俺の体の方が持たなかったようだ。

「はは、もつと鍛えておくべきだったな」

『中和剤の使用を求めます!』

「残念だな、ルクシオン　無理だ」

操縦桿を握りしめてアロガンツを動かせば、今までいた場所に大剣が振り下ろされた。

フィンの乗ったブレイブが、まるで涙を流すかのようにツインアイから液体を流している。

『リオン、よくも』

「フィン　俺の勝ちだ」

『うわああああ！』

叫びながら向かってくるフィンから逃げるため、上へと移動する。

ルクシオンが武装の状況について説明してくる。

『右腕は動きません。左腕に関しては、衝撃波を発生する部位が焼かれて攻撃できません。マスター、ここまでです。中和剤の投与を！』

「まだ終わってない！」

シュヴェールトにレーザーを撃たせ、天井に穴を開けてやった。

いくつも穴を開けると、空が見えた。

「外に出たか！？」

『アルカディア、出力低下しています。落下を開始』

俺たちが飛び出してきた穴からは、火が噴き出していた。

そこから装甲を焼いたブレイブが出てくる。

俺はシュヴェールトにわびる。

「今までありがとな。　ごめんな、シュヴェールト」

ルクシオンは俺が何をやりたいのかを察し、そしてシュヴェールトを切り離してフィンに向かわせた。

『シュヴェールトをパージ。遠隔操作』

シュヴェールトが速度を上げて、ブレイブに突撃すると胴体部分に突き刺さりそのまま飛んでいく。

ブレイブが悲痛な叫び声を上げるが、それは自らの痛みではなく相棒のためだ。

『あ、相棒おお！』

『かはっ！』

シュヴェールトの先端は、魔装の胴体部分に突き刺さっていた。

パイロットは無事では済まない。

デッキ上にある建物にぶつかり、止まったブレイブはもう動けないようだ。

アロガンツはアルカディアのデッキに着地し、そしてフィンに近付いた。

片足だけのアロガンツは、フラフラと不安定に浮いている。

『マスター、既に十分を超えています。中和剤の投与を！』

慌ただしルクシオンの声を聞くと、俺はまた口元を押さえた。

大量の血を吐いてしまう。

『マスター！』

「あ、焦るなよ。中和剤を　早く　」

自分がどうなっているのか見えなかった。

だが、口から吐いたのは血であるのは間違いない。

フィンはアロガンツの近付いてくる足音を聞いた。

目がかすんでよく見えない。

「　黒助、無事か？」

声をかけると、ブレイブは涙声だった。

『すまねえ、相棒。俺様は　相棒を守れなかった』

悔しそうにしているブレイブに、フィンは笑みを浮かべてお礼を述べた。

「馬鹿野郎。お前のおかげでここまで戦えたんだ。俺は　お前に感謝しているぞ、くる　ブレイブ」

最後に名前を呼ぶと、ブレイブが泣いてしまう。

『黒助って呼んでくれよお。 相棒？』

フィンはそのまま笑みを浮かべたまま、声が出せなくなった。

走馬灯を見る。

酷く懐かしい光景が見えた。

それは前世の妹の ハッキリした姿だ。

（ああ、そうだ。こんな顔だった。笑顔が可愛くて、俺が見舞いに来ると本当に嬉しそうで）

妹の雰囲気はミアに似ていると思っていたが、姿も良く似ている。

そしてフィンは涙を一筋こぼした。

（俺 また嘘を吐いた。ごめんな、ミア。約束を守れなくて）

フィンの瞳から光が消えると、ブレイブは泣くのがあった。

『相棒おおお！！』

ブレイブに近付くと、もうフィンは死んでいるようだった。

ブレイブのツインアイから赤い涙が流れている。

ルクシオンが、そんなブレイブに声をかけた。

『 まだ、戦いますか？ 』

ブレイブに戦う意志はないようだ。

『 相棒もいないのに戦えるかよ。それに、俺様もう 終わり
だ 』

段々とブレイブの体が崩れていく。

そして、ブレイブが俺にフィンの言葉を伝えてくる。

『 リオン、お前に相棒からの伝言だ。相棒は お前に殺されても
恨まないって言っていた。お互い様だつてよ 』

「そ うか」

うまく喋れない。

中和剤を使用しても、体はボロボロだった。

崩れながら、ブレイブは言う。

『 安心するのは早いぜ。何しろ、アルカディアを管理するコアは残
っているんだ。俺様はあいつが大嫌いだけだな 』

ブレイブが指さしたのは、転がっている大剣だった。

何を言いたいのか分かり、拾い上げる。

アロガンツの姿を見て、ブレイブは笑っていた。

『相棒　俺様も今から　そっちに　』

灰色になって崩れたブレイブは、風に流されるとその場に何も残らなかった。

フィンの死体もない。

「　フィン」

涙が出てくる。

俺にそんな資格などないのに、だ。

ルクシオンがそんな俺に警告してくる。

『マスター、まだ終わっていません。今の話が本当ならば、アルカディアのコアが残っています。再生できるとは思えませんが、破壊が優先されます。味方に伝えるべきです』

後はコアさえ破壊すれば、何の問題も残らない。

「　そうだな。早く終わらせて」

これで全部終わると思っていたら、俺たちが飛び出してきた穴から赤い粒子の光がどこかに流れていた。

風に流されているのではなく、どこかに吸い寄せられているようだった。

『魔素を急激に吸収している個体があります』

フィンから手に入れた大剣をアロガンツの左手に強く握らせる。

「敵さんも往生際が悪すぎるよな」

まだこの戦いは終わらないらしい。

皇帝

司令室のモニターに流れた映像は、丁度ブレイブが崩れていくところだった。

その様子を見ていたミアは、目を見開き、呼吸が乱れている。

「き、し　様？」

目の前の映像が理解できなかった。

悪い夢でも見ている気分だ。

ミアが両手で頭を押さえると、髪が乱れてしまう。

「嘘だ。嘘だよ。こんなの嘘だよ！」

ミアが涙を流す。

自分に優しかった　自分を守ってくれたフィンが、アロガンツに倒されてしまった。

そのことがミアには処理しきれなかった。

そんなミアに悲しい瞳を向けるのは、バルトルトだ。

ミアには声をかけず、モニターを見る。

「ミアを泣かせるなどあれほど言っていたのに　やっぱりお前は馬鹿な小僧だよ」

周囲の部下たちが絶望した顔をしている。

帝国最強の騎士が敗れたのだ。

そして、アルカディアは動力炉を破壊されてしまった。

ここから再起を図るのは不可能に近い。

アルカディアのコアである魔法生物が、ミアを一瞥した後にバルトルトに血走った目を向けてくる。

『バルトルト、このままでは我々は敗北する』

バルトルトは腕を組み、魔法生物に視線を向けなかった。

「いや、違うな。わたたちの負けだ」

『我々に敗北はない！　私は海の底で鉄屑共を全て破壊し、旧人類を滅ぼすことだけを夢見て生きてきた！　気が遠くなるほどの時間を耐えてきたのだ！』

そこまで耐えて、結果が敗北というのは魔法生物には耐えられないようだ。

バルトルトが鼻で笑う。

「アルカディアの動力炉は破壊された。この要塞もすぐに落ちる」

『まだだ！ まだ終わらない 魔素を取り込み、やつらの本拠地を破壊し尽くしてやる！ アルカディア本体がなくなるうとも、我々に敗北はない！』

鬼気迫る魔法生物の雰囲気、周囲は息を飲む。

自分たち 新人類の勝利のためなら、帝国などどうなってもいいという態度だ。

バルトルトは自分に呆れる。

（こいつを信じて挑んだわしが馬鹿だったな）

だが、戦いを挑んだことを後悔はしない。

戦わなければ、バルトルトではない誰かが立ち上がって生存競争の争いを始めただろう。

バルトルトがこのタイミングで戦いを挑んだのは、勝つにしても負けるにしても、うまくやるためだった。

「今更、王国を滅ぼしてどうなる？ また世界を荒廃させるつもりか？」

『旧人類共に支配されるくらいなら、滅ぼした方がいい！ バルトルト、手を貸せ』

魔法生物が手を伸ばしてくる。

体から出て来た手は、とても小さいが何本も出て来てバルトルトに近付いていた。

それを持っていた剣で全て斬り裂く。

『バルトルト!』

「王国の英雄殿には生きてもらわねば困るのだよ。倒しきれないなら、生き残って 我ら、帝国の民を生かしてもらう」

フィンから聞いたリオンの性格ならば、新人類の末裔だからと滅ぼしはしないだろう。

バルトルトも、最初から旧人類の末裔を滅ぼすつもりはなかった。

それでも戦わなければならなかった理由は、どちらも肩身の狭い暮らしをしたくなかったからだ。

だが、負けてしまえば納得する。

納得するしかない。

そうなれば、皇帝であるバルトルトは処刑だろう。

一族全てが対象になるかもしれない。

それだけの覚悟があつて挑んでいた。

「帝国最強の騎士も負けた。アルカディアも沈む 我々は敗北したのだ」

魔法生物を斬り殺そうと剣を構える。

すると、魔法生物が大きな口を開いて笑って見せた。

『ならば、主人に頼むでしょう！ ミリアリス、お前はあいつに復讐したくないか？ お前の思い人を殺したあいつを、その手で殺したくないか！』

魔法生物はミアにその手を伸ばした。

床に座り込んだミアの周囲を、魔法生物の細く小さい腕が巻くように囲んでいた。

だが、ミアには触れていない。

それはバルトルトへの人質という意味合いもある。

バルトルトが剣を下げた。

「お前の主人はミアのはずだが？」

『そうだ。だから共に戦おうと言うのだ！ 旧人類などという汚物を全て滅ぼすためなら、私はこれぐらいする！』

旧人類を徹底的に嫌っている魔法生物は、その大きな瞳をミアに向けた。

ミアが顔を上げると、瞳から光が失われている。

バルトルトが手を伸ばす。

「ミア！」

ミアはモニターに映るアロガンツを見ていた。

ブレイブの大剣を拾い上げるその姿を見て、涙を流す。

「いいよ。騎士様の復讐が果たせるなら、私はどうなったって」

「止せ！ ミア、もう戦争は終わりだ！」

「終わってない！」

ミアは涙を流しながら、怒りを滲ませた表情になる。

「まだ終わってない。騎士様の仇を私が討ちます」

『よく言ったああ！』

魔法生物がミアを包み込み、そして大きな口を広げてそのまま飲み込んでしまった。

バルトルトが魔法生物に飛びかかる。

「よくもミアを！」

だが、魔法生物の腕に弾かれて吹き飛んでしまった。

バルトルトに部下たちが駆け寄ると、魔法生物は床と融合してい

く。

司令室に血管が浮き上がり、脈打ち始めた。

バルトルトは、額から血を流しながらその光景を見ていた。

「ミア！」

魔法生物は膨れ上がり、そして亀裂が入るとそこからミアが出てくる。

全身が銀で覆われた裸体姿だ。

へそから上が姿を見せ、そして手を広げると周囲から黒いドロドロした液体が集まり、徐々に姿が大きくなっていく。

ミアは喋らない。

代わりに魔法生物が歓喜の声を上げる。

『いいぞ、主人よ！ 共に旧人類を殲滅せんめつだあああ！』

魔法生物に取り込まれたミアが、目を開くと瞳が赤い宝石になっていた。

そのまま天井を突き破って外に出ていく。

バルトルトが手を伸ばす。

「ミアアアア！！！」

アルカディアの動力炉を破壊した。

その報告を受けたりコルヌに乗り込むメンバーだが、目の前の光景を見て喜んでなどいらなかった。

ノエルが啞然とする。

「どういうことよ。これ どうなっているのよ!」

沈んでいくアルカディアから出て来たのは、星形の刺々しい黒い何か、だ。

大きさにして二十メートルくらいだが、今も魔装を取り込み膨らみ続けている。

クレアーレが最大望遠で対象を確認した。

『これ アルカディアのコアよ! しかも、ミアちゃんを取り込まれているわ!』

マリエが杖を抱きしめる。

「何でミアちゃんが取り込まれているのよ!？」

『情報がないから分からないわね。それよりもまずいわね。動力炉破壊したけど、大量の魔素が吹き出てモンスターたちが増えているわ』

どこを見てもモンスターたちばかりだった。

魔素によって血肉を得て出現し、他には魔素に吸い寄せられ戦場の周辺から集まってきている。

クレアーレは、データから敵を解析していく。

『まずい。凄くまずい状況よ。あれ、どう考えても強いわよ』

ノエルがすぐに聞き返す。

「どれくらい!？」

『アルカディアの主砲を、連続で何発も撃ってくるわ』

「どうしてそんなに強いのだよ!」

先程までは、主砲を撃つまで時間がかかっていた。

なのに、動力炉が破壊されて強くなるなど納得できないのだろう。

ノエルにクレアーレが説明する。

『動力炉に高濃度の魔素を固めたものがあつたのよ。それを元にして魔素を増やしていたけど、外に出たから取り込んだの』

マリエが下を向く。

「終わったと思ったのに」

ノエルも立ち尽くしている。

アルカディアよりも強いというのは反則過ぎた。

これまでの戦闘で宇宙船の防御艦は全て失っているし、宇宙船自体も数多く落とされてしまった。

王国軍も半数以上が失われている。

魔法生物 アルカディア・コアが、魔素を吸収している。

このままでは、魔素を取り込み終わったら手が付けられなくなるだろう。

『駄目、どのパターンでもアルカディア・コアを倒せない!』

クレアーレの計算では、アルカディア・コアを現状戦力で倒すのは不可能だった。

リコルヌの周囲にもモンスターたちが集まり、そして味方が必死に抵抗しているが数が多すぎて対処できていない。

アンジエが奥歯を噛みしめる。

「何か手はないのか。何か リビア?」

支えていたリビアが、両足を肩幅まで広げてしっかりと立った。

汗を流し、辛そうな表情ながら前を見ている。

「アンジェ 力を貸してください」

「私に？ いくらでも貸してやるが、何をするつもりだ？」

リビアはアンジェの手を強く握りしめた。

「モンスターなら、私の能力で吹き飛ばしたことがあります」

アンジェは一年生の頃を思い出す。

超大型と呼ばれたモンスターを、リビアの力で吹き飛ばしたことがある。

「公国との戦いで見せたやつか？ 出来るのか？」

アンジェがクレアーレに視線を向ける。

「出来るけど、かなりの負担になるわよ。リビアちゃんだけじゃない。アンジェちゃんにも大きな負担になるわ」

アンジェが笑みを浮かべる。

「構うもんか」

クレアーレの周囲にいくつもの映像が映し出され、それらは全て数字だった。

「聖樹のエネルギーをリビアちゃんに預けるわ。広範囲のモンスターを吹き飛ばすけど、時間がかかるわね。それと、以前とは違

って整備もしているから、リビアちゃんが本気を出すとどうなるかわからないわよ』

以前とは規模が違う。

王家の船とは性能も違い、聖樹のエネルギーも加わっているのだ。

クレアーレもどのような結果になるか予想も出来ない。

「お願いします。私たちの力でリオンさんを助けたいんです」

リビアが淡く輝き始めると、アンジェが優しく抱きつく。

「私も手を貸す。リビア、やってくれ」

リコルヌも輝き始めていた。

クレアーレがサポートを行う。

『どうなっても知らないからね。三分だけ時間を頂戴。出来る限りサポートするけど、それだけの時間が必要よ』

外を見れば、そんなリコルヌに目掛けてモンスターたちが押し寄せてくる。

『マスター、危険な状況です』

呼吸をするのも辛い中で、出て来たのはラスボスの風格を持って

いるミアちゃんだった。

表面を銀色に、そして瞳を赤い宝石にしたその姿は裸体だ。

精一杯の軽口を叩く。

「ミアちゃん、肌の露出が多いと　フィンが悲しむぞ」

咳き込み、血を吐くとミアちゃんが反応する。

『騎士様を殺しておいてえええ！』

黒い刺々しい塊は、その棘を発射してくる。

ルクシオンの自動操縦により、アロガンツは何とか避けていた。

『マスター、現在満足な支援が出来ません。アロガンツも本来の性能を出せません。撤退を進言します』

「逃がしてくれないだろ」

操縦桿を握るが、手に力が入らなかった。

「うん、あれだな。　　やっぱり、切り札は残しておいて正解だな」

そう呟くと、ルクシオンが俺に怒鳴ってきた。

『マスター！』

「他に方法がないだろ」

まだ動きがなれないミアちゃんは、融合した相手　アルカディ
アのコアに助言を受けていた。

『主人よ。よく狙え！　こいつがお前の愛した人を殺した男だ！』

ミアちゃんを煽っている魔法生物は、何というか嫌な感じがする。

ブレイブも嫌いだと言っていたな。

デッキ上が棘だらけになってくる。

そんな中を逃げ回るアロガンツだが、徐々に逃げ場を失い直撃を
もらった。

床に右腕が縫い付けられた。

『右腕をパージ！』

「アロガンツもボロボロだな」

目がかすんできた。

俺は動けなくなる前に、ルクシオンに命令を出す。

きっとルクシオンは反対するだろうと分かっていたが　これし
かない。

「ルクシオン　最後の投薬だ」

『　　っ！』

しかし、投薬を行う前に、ミアちゃんの様子がおかしかった。
魔法生物が慌て始める。

『主人！　あの白い船は危険だ。先に破壊しろ』

ミアちゃんの視線が、リコルヌに向けられてしまった。

『　　船？』

「や、止める！」

慌てる俺の姿を見て、ミアちゃんは察したらしい。

『貴方の大事な人が乗っているんですね？　なら　私と同じ気持ち
を味あわせてあげる』

ミアちゃんがリコルヌに向けて攻撃を開始しようとしていた。

「ま、待ってくれ！」

止めようとするが、今の俺の体ではまともに動くことも出来なかった。

ミアちゃんが俺を見下ろしながら言う。

『そこで、大事な人が死ぬところを見ているのね。私と同じように
！』

モンスターたちに襲われているリコルヌは、危険な状況だった。

ノエルが覚悟を決めて、右手の甲を掲げる。

「させない！」

右手の甲には聖樹に認められた巫女の紋章が輝く。

リコルヌの真上に巫女の紋章が出現すると、緑色に輝く魔法陣がいくつも出現する。

そこから木の根やら、鋭い木の葉が周囲のモンスターたちにはさまかれた。

突き刺さり、突き破り、モンスターたちを黒い煙に変えていく。

ノエルの紋章がリコルヌを守っていた。

ユメリアが聖樹の若木に抱きつく。

「お願い。力を貸して」

頼み込むと、聖樹が風もないのに葉を揺らして音を立てる。

聖樹が淡い緑色に輝くと、ノエルの紋章も強く輝いた。

クレアーレが出力の上昇を伝えてくる。

『出力向上！ あと三分だけ持ち堪えて！』

ノエルが苦しそうな顔をする。

何とかモンスターを近付けないようにしているが、数が多くさばきれなかった。

「流石にきついかも」

そう呟くと、リコルヌの隣に共和国の飛行船が近付いてくる。

ノエルはすぐに気付いた。

「レリア！？」

共和国の飛行船の真上に輝くのは、ノエルとは少しだけデザインの違う巫女の紋章である。

魔法陣が出現し、リコルヌを守るために周囲のモンスターたちの相手をしていた。

モニターにレリアの顔が映る。

『姉貴、何とかなるのよね？ なるのよね！？ 丸いのが言っていたから手を貸すけど、本当にどうにかしてよ！』

レリアは頭を抱えて泣いていた。

どうやら、通信用に配備していた球体人工知能が、現状を説明し

ていたようだ。

飛行船から赤い鎧が飛び出してくる。

『姉御お！ 俺がお守りします！』

赤い鎧で出撃してきたのはエリクだった。

聖樹に認められた紋章を出現させ、モンスターたちを倒していく。

クレアーレが残り時間を伝えてきた。

『残り二分！』

レリアたちの協力もあってどうにか乗り切れそうになっていたが、アルカディア・コアに動きがあった。

アルカディアのデッキでリオンが戦っているのだが、目標をリコルヌに変更したようだ。

クレアーレが悪態を吐く。

『あいつ、こっちの方が危険と判断したわね！』

アルカディア・コアがリコルヌに目掛けて攻撃を開始する。

すると ファクトたち宇宙船が、リコルヌの前に出るのだった。

マリエが驚く。

「あ、あなたたち」

アルカディア・コアの攻撃を受けて、ファクトたち宇宙船は耐えきれず次々に爆発して落ちていく。

モニターにファクトの姿が映し出される。

『我々は君たちを過小評価していた。君たちの評価を上方修正する』

何を言い出すのかと思ったら、評価云々と言い出す。

クレアーレが、状況を考えると怒るのだ。

『こんな時に何よ！』

『こんな時だからだ。我々の戦いには意味があった。それを 確認できた』

最後に残ったファクトも、モンスターやアルカディアの攻撃を集中的に受けて各部が爆発していく。

ファクトが最後に言う。

『この時代に目覚めたのも きっと 運 命』

そこで通信が途切れる。

そして、クレアーレが静かに告げる。

『 あいつら、最後にしっかり仕事を果たしたわ。リビアちゃん、いつでもいいわよ』

リビアが輝くと、髪が下から風でも吹いているかのように揺れた。

ゆっくりと目を開けるリビアの瞳が光る。

「はい」

最強主人公

「　　いきます」

リビアが短くそう呟くと、リコルヌに積み込んだ王家の船の装置が強く反応する。

聖樹から得られたエネルギーも使用して、リコルヌがリビアをサポートする。

クレアーレはリビアを見て驚くのだ。

『　　ちよつとこの力は予想外ね』

クレアーレも予想していなかったリビアの力により、リコルヌは白く淡い光に包まれる。

近づくモンスターたちは、その光に触れると消し飛んで黒い煙すら発せない。

集まったモンスターたちを吹き飛ばし、それでもリコルヌは輝きを失わなかった。

アンジエがその光景を見て驚く。

「リビア、お前は一体？」

リビアはアンジエに微笑む。

「私にも分かりません。でも、今は　この力がリオンさんを助け
てくれるから」

リビアは真剣な表情になると目を細めた。

左手を伸ばして前に向けると、リコルヌの輝きが増していく。

マリエにしがみつくカーラが驚いていた。

「揺れていますけど、いったい何が起きているんですか！」

リビアは本能で、この先をどうすれば良いのか察していた。

リコルヌの周囲には白い粒子の光が集まり、そしてそれらが形を
作っていく。

その姿はリビアの姿に似ていた。

デフォルメされたその姿は、女性の外見をしていることが分かる。

顔には目だけが青白く浮かび上がっていた。

リコルヌを中心に、巨大な白く輝くリビアの姿が誕生する。

モンスターたちが近付けば吹き飛ばされ、味方であればすり抜け
てしまう。

今、リビアはまさに王国にとって勝利の女神となっていた。

モンスターたちが消え去ったことで、王国軍からは歓声があがっている。

だが、リビアの負担は大きい。

気を抜くとすぐにでも倒れてしまいそうだった。

そんなリビアをアンジェが支える。

「無理をするな」

「でも、今だけは」

「私の力も使え」

アンジェがリビアの手を強く握ると、リコルヌの周囲に赤い粒子の光が集まってくるのだった。

それらは巨大なリビアにドレスを着たかのような姿に飾りつけた。

赤いドレスを着た女性が、左手を前に向けると　そこから大きな魔法陣がいくつも出現する。

魔法陣からは巨大な火球が出現し、放たれるとアルカディアに襲いかかった。

アルカディア・コアが、急いでシールドを展開する。

だが、そのシールドも突き破ってアルカディアに着弾して爆発を起こしていた。

その様子をリコルヌの船内から見守るマリエが呟く。

「す、凄い。このままいけば、普通に勝てるかも」

だが、リビアは楽観視していなかった。

「時間がありません。リオンさんを早く回収しないと」

映像から、アロガンツがボロボロになっているのは確認した。

リビアが目を閉じると、リコルヌの外にいる巨大な光の巨人であるリビアの目を通して外の景色が見えた。

「見つけた！」

アルカディアのデッキでボロボロのアロガンツがいる。

アルカディア・コアはこちらに意識を向けており、アロガンツに手を出していなかった。

リビアが声を荒げる。

「リオンさんから　離れろおおー！」

『離れろおおー！！』

巨大な女性の形をした光の粒子の集まりが、アルカディア・コア

に手を伸ばしてきた。

ミアは咄嗟に両手を前に出す。

「この人は リビアさん？」

ミアが用意した魔法障壁は、何重にも展開されていたが、リビアに簡単に破かれた。

慌てて避けると、リビアの巨人が手を引いた。

実力的にリビアの方が強かった。

魔法生物が苛立っている。

『何だ、こいつは！？ 旧人類なのか？』

リビアが何であるか分からない魔法生物は、とにかくミアに倒すように言っただった。

『主人！ あれを使い！』

あれとは、最大出力の攻撃のことだった。

アルカディアの主砲並みの攻撃を、ミアはすぐにも放てる。

もっとも、連射できるほどの魔素を集めきれていない。

『巨人の中央に飛行船がある。そこに術者が乗っているはずだ』

リコルヌを目指してミアが右手を向けると、アルカディア・コアの棘が同じ方向を向いた。

「貴方たちでも許さない。騎士様の仇！」

赤黒い光が集まり、そして放たれる。

その一撃の破壊力は、これまで散々見てきた。

それを収束して放ったのだ。

威力だけなら今までの主砲よりも強い。

それなのに リビア巨人は右手で払いのけた。

赤黒い球体は、進行方向を変えて遠くに着弾して大爆発を起こした。

水柱が上がり、海面が衝撃波で津波を起こす。

魔法生物が大きな目をいくつも開けて震えていた。

『ふ、ふざけるな！ どうしてあの一撃を あんな回避方法が出るんだ！ こんな間違っている！』

あまりの理不尽さに腹を立てていた。

リビア巨人が両手を広げる。

『リオンさん 今、助けます』

すると、何千という魔法陣が出現し、そこから次々に魔法が撃ち込まれた。

火球、光の球と、とにかく色々な種類の魔法が高威力で放たれてくる。

ミアはすぐに上昇して避けようとするが、魔法はどれも追尾してくる。

ミアも迎撃するために攻撃を行うが、間に合わずに数百発の魔法を受けて吹き飛ばされた。

「くっ！」

アルカディアの要塞部分から離れると、リビア巨人がデッキ上にいるアロガンツを守るように両腕で覆い隠す。

巨人の顔は目しかないので、表情は分からない。

だが、きつと微笑んでいるのだろうと思った。

それがミアには許せなかった。

「騎士様を殺しておいて自分だけ　よくもおお！」

最大出力で攻撃を放つと、リビア巨人の背中から新たに頭部が出現する。

髪の長い女性だ。

その女性の上半身まで出現すると、両手を広げてミアの攻撃を受け止めた。

爆発するが、リビア巨人は無事である。

魔法生物が震えている。

『あり得ない。何だこいつは？ どうしてこんな　こんな時代に、どうして私を圧倒する存在がいるのだ！』

むしろ、どうして今まで使用しなかったのか分からない程の強さだった。

リビア巨人が四本に増えた腕を伸ばしてミアを掴む。

逃げようとしたが逃げ切れず、捕まって暴れ回るミアはリビア巨人の強さに悔しがっていた。

「最初から手加減をしていたというの？　こんなの　絶対に許せない！」

暴れ回ってリビア巨人の手を破壊して脱出し、上空に逃げる。

そして、リビア巨人の上から　アロガンツを狙って攻撃を開始した。

「大事な人を目の前で失う悲しみが　貴方たちに理解できるの！」
アロガンツに降り注ぐ攻撃は、一つでも当たれば致命傷だった。

すると、リビア巨人がアロガンツを庇うために覆い被さる。

全ての攻撃をリビア巨人が受け止め、アロガンツを守っていた。

『そのまま畳みかけろ、主人！』

魔法生物が、このまま一方的に殴り続けるように指示を出す。

ミアも攻撃を続けると　ミアの真上からリビア巨人の手が振り下ろされた。

その腕は、リビアの背中に生えたもう一人の巨人の手だった。

声が聞こえてくる。

リビアとは違う声だ。

『リオンに手を出す奴は　落ちろおおお！』

急降下するミアは、そのまま海に叩き付けられてしまった。

叩き落とされ、戦場から随分と離れた場所に落ちてしまう。

圧倒的な差を見せつけられてしまった。

ミアは不甲斐ない自分と、理不尽な敵に涙を流した。

「こんなのってないよ。こんなの　私は騎士様の仇も討てないなんて」

齒を食いしぼり、手を握りしめ、再びミアは浮かび上がった。

「たとえば、死んだとして　も？」

ただ、様子がおかしい。

浮かび上がって再びリビア巨人と向き合ったのだが、相手の輪郭が朧気になっていた。

今にも消えてしまいそうだった。

それを見た魔法生物が、ようやく気が付く。

『そうか！　既に限界だったか！　そうだよなあ。それだけの威力のある魔法か何かだ。何の負担もないわけがないよなあ！』

嬉しそうに相手が弱る様を見ていた。

リビア巨人が消えていくのを見て、ミアはすぐにアルカディアのデッキへと向かう。

ボロボロになった余計な部分が崩れ落ちて、アルカディア・コアは小さくなっていた。

「これで邪魔者はいなくなったよ、リオン」

ミアはリオンの止めを刺しに行くのだった。

「ルクシオン　状況は？」

動かなくなった体では、状況も満足に確認できなかった。

ルクシオンが俺に周囲の状況を伝えてくる。

『生き残った無人機たちを集めました。アロガンツの整備を行っています』

せめて移動できるくらいには整備しているようだ。

アロガンツにコンテナを背負わせていた。

俺はユリウスたちの安否を確認する。

「あいつらは無事か？」

『はい。帝国が降伏を宣言したことで、今は要塞の外に出ています。マスター、すぐに後方に下がって治療を受けてください』

「それは良かった　死なれたら　気分が悪いから」

あいつらが無事だと聞けて、素直に嬉しかった。

腐れ縁だったが　悪い奴らじゃなかったからな。

問題も多くて、馬鹿だったが　ゲームの時とは違って嫌いじゃない。

現実だったら、意外といい奴らだったよ。

もっと、仲良くしておけば良かったな。

顔を上げてモニターを見れば、アロガンツが握りしめているブレ
イブの大剣を見る。

「フィンが 生きていたら、きっと頼むと思うんだ。ミアちゃん
を助けないと」

余計なことをしていると自分でも理解しているが、ルクシオンが
強く反対してきた。

『マスターがそこまでする必要はありません！』

それでも ここで頑張らないと あの世でフィンに合わせる
顔がない。

「馬鹿野郎 どのみち、ミアちゃんを止めるしかないだろうが」

リビアがその力を発揮してくれたおかげで、何とか時間が取れた。

だが、倒しきれなかったようだ。

アルカディアのデッキに、ミアちゃんが降りてくる。

その姿は、先程までの刺々しい姿ではない。

ミアちゃんの姿だった。

銀色の姿で、まるで黒いゴツゴツとした鎧をまとっているかのように見える。

きつと、先程までの棘の部分がそげ落ちて、残った部分が鎧のように見えるのだろう。

無人機たちが前に出ると、ミアちゃんに破壊された。

「ルクシオン、最後の命令だ。投薬してくれ」

ここでミアちゃんを止めないと、大変なことになる。

内部にとんでもないエネルギーを蓄えているのだ。

そのエネルギーを破壊のために使われると、王国が大変なことになる。

簡単に言えば、沈むだろうな。

それを止めるためにも、もうひと頑張りする必要があった。

ルクシオンが何も答えない。

「このままだと綺麗な終わりを迎えられないだろ？ ミアちゃんを救ってハッピーエンドだ。いや、ベターかな？」

ゲームで言うならほとんどバッドエンドに近いだろうな。

クリアは出来たが、何とも後味の悪い終わり方だ。

とても俺らしい。

『マスターの幸せはそこにあるのですか？』

俺の幸せ？ たぶん、この先にあると思う。

ルクシオンに尋ねられ、俺は精一杯の笑顔を見せる。

「どうして俺たちがこの世界に転生したのか、ずっと考えていたことがある。きっと、何か理由があるはずだろ？ なくても良いけどさ。ないなら、作るしかないじゃないか。みんなを救って 救えなかったけど、それでもベターな結果を求める。俺にしては上出来だ」

『自己犠牲の精神ですか？ 理解できません。マスターは愚かです』

「知らなかったのか？ 俺は最初から愚かだよ」

魂というのは、悟りを開くまで何度も生まれ変わるらしい。

俺のような俗物は、転生し続けるわけだ。

仏教の思想だったか？ まあ、今はどうでもいい。

こんな俺の人生にも意味があったと思えば、少しは救われるというものだ。

「頼むよ 相棒。多分、これが最後の命令だ」

ルクシオンの赤い瞳が悲しそうに見えたのは、気のせいではない

だろう。

『と、投薬を開始します』

強化薬が打ち込まれ、これで三度目となる。

激しい痛みが体を襲い、俺は耐えきれずに吐血してしまった。

それでも、気分が良くなってくる。

アロガンツを立ち上がらせると、ブレイブの大剣を構えさせた。

大剣を見たミアちゃんが話しかけてくる。

『騎士様と　ブー君の剣を返して！』

「奪い返してみろよ、このじゃじゃ馬あ！」

スピアの両足でしっかり床を踏みしめ、大剣を振り下ろしてやった。

その一撃を小さな女の子が受け止める。

「ルクシオン、ミアちゃんに取り付いている奴を引き剥がせるか？」

ミアちゃんを助けられるか確認すると、ルクシオンは既に解析を始めていた。

『現在調査中です』

ミアちゃんが飛び上がってアロガンツを殴ろうと大きく振りかぶってきたので、大剣で受け止めて後ろに下がる。

女の子の拳とは思えない強力な一撃だった。

アルカディア要塞内部。

ユリウスたちは、降伏した皇帝　バルトルトを拘束していた。

「あの化け物を止める方法を知らないだど？」

鎧に乗ったままのユリウスは、バルトルトと会話をしていた。

『魔法生物がミアを取り込んだ。このアルカディアの主人はミアだ。止めるにしても、ミアの命令が優先される』

肩を落としたバルトルトは、不甲斐ない自分が情けないようだった。

『どうして　ミア』

ユリウスもミアの事を知っている。

そして、フィンのことも知っている。

だから、分かってしまうのだ。

「愛しい人を目の前で失えば、誰だって正気ではいられない」

自分もマリエが死んだらどうなるか分からない。

そう思ったユリウスだが、要塞が急に揺れたのを感じた。

「どうした!？」

確認を取ると、ブラッドが状況を報告してくる。

『上でリオンとミアちゃんが戦っているってさ。ルクシオンは、僕たちに先に脱出しろと言って来ているよ』

グレッグが不満を口にする。

『何でだよ！ 助けに行けばいいだろうが！ 俺たちだって、少し前とは違うんだぞ！』

だが、クリスは冷静に考えていた。

『何か理由があるのかもしれない。それに、マリエたちのことも気になる。ここは一度戻ろう』

ジルクもグレッグを説得する。

『リオン君も無事のはずです。ルクシオンが見捨てるとも思えませんが、何か策があるのかもしれませんが』

そう言われては、グレッグも引き下がるしかなかった。

ユリウスは、捕らえた者たちを連れて要塞を脱出することにする。

（リオン、本当に無事なんだろうな？）

これまでのリオンを見てきたユリウスは、一抹の不安を覚えるのだった。

聖女マリエ

コアを失った魔装に取り込まれると、もう人には戻れない。

逆説的に、コアの存在する状態なら、まだ人間と切り離すことが出来るということだ。

「可能性はあるはずだ」

今は痛みを感じなかった。

体中が悲鳴を上げていたのに、投薬で痛みを感じなくなった。

本当にとんでもない薬だ。

こんなボロボロで死にかけているのに戦える。

ミアが俺に憎しみを向けてくる。

『許さない。絶対に！』

「はっ！ 許してもらおうなんて思っていないだよ。いいか、もう勝負はついた。後は、お前からコアを抜き取って破壊すれば何の憂いもない！」

『貴方は 騎士様の友人だったのに！』

「だから殺してやったんだろうが！ それも分からないなら、余計

なことをせずに引っ込んでいろよ！ フィンは無駄死にだな。お前を生かすために命懸けで戦ったのに、それをお前が全て無駄にするんだからさ！」

『目の前で殺されて、黙っていられるわけが！ それに、殺さなくても！』

「責任者っていうのは責任を取るのが仕事だ。帝国の英雄を生かしておく理由なんかない。あいつだって分かっていたことだ」

『貴方って人は！』

アルカディアが沈んだとしても、あいつは最後まで戦っただろう。

俺だって同じだ。勝てないからと戦いを放り投げてしまったらこの戦いに巻き込んだために死んでいった人たちになんと言えればいい？

「お前が出る幕じゃないんだよ！ さつさとコアを渡せ！」

『誰が貴方なんかに！』

アルカディアのコアが生き残っている状況では、死んでも死にきれない。

それに戦争は終わりだ。こんなオマケである。

自分の体を無理矢理動かし、アロガンツを操縦して大剣を下から振り上げた。

ミアちゃんが仰け反ったので距離を取れば、ルクシオンが俺に解析結果を伝えてくる。

『マスター、コアの位置を確認しました。そこをピンポイントで貫けば、操縦者から切り離すことが可能です』

「ミアちゃんは無事なんだろうな!？」

『助かる可能性はあります。ですが、少しでも外れれば人体の急所を貫いてしまいます』

「アロガンツだと無理だな」

ミアちゃんの小さな体に、ブレイブの大剣を突き刺せば即死だ。

俺はアロガンツの操縦桿を撫でる。

そして強く握りしめ、ミアちゃんの方へと向かわせた。

向こうは両手を俺に向けてきて、魔法を撃ち込んでくる。

赤黒いエネルギーの塊が、打ち出されると拡散された。

拡散されたそれを避けながら向かうが、アロガンツでは避けきれずに当たると装甲を貫かれる。

ブレイブの大剣を盾代わりに進むも、そろそろ限界だった。

アロガンツが火を噴き、コックピット内の機器から放電していた。

そんなアロガンツが大剣を放り投げると、両手でミアちゃんを掴んだ。

『ハッチをパージします！』

「助かる！」

目の前のハッチが吹き飛び、風が入り込んでくる。

体がシートから解放され、素早く横に置いていたライフルを手に取りった。

素早くコックピットから出ると、ミアちゃんはアロガンツの手から無理矢理抜け出したところだった。

アロガンツの左手の指が簡単に千切られ、それを俺に投げ付けてくる。

ミアちゃんは俺を見ると、一瞬驚いていたが　すぐに眉間に皺を寄せていた。

可愛らしかった女の子の顔が、憎悪でここまで変わるのかと一瞬驚いたよ。

歯を食いしばり、あの可愛かった顔がまるで獰猛な獣のような顔になっている。

無理もない。それだけのことをした。

「出て来たところで！」

ミアちゃんが俺に右手を向け、魔法を放とうとする。

素早くルクシオンが俺の前に出て、シールドを展開すると俺の視界が炎に包まれた。

黒い炎がシールドの向こうで広がっている。

『マスター、耐えきれません！ 五秒後にシールドエネルギーがつかまります！』

「五秒もあれば十分だ」

ライフルを構えると、ルクシオンのアシストでスコープに狙う場所が表示されていた。

黒い炎の向こうにいるミアちゃんが、どこにいるのかルクシオンには見えているのだろう。

引き金を引くと、ルクシオンのシールドを内側から破り、黒い炎を突き破ってそこに穴を開けた。

黒い炎にポツカリと穴が開き、その向こうでミアちゃんが弾丸に貫かれ後ろに吹き飛んでいた。

体に取り付いていた黒い鎧のような何かも剥ぎ取られ、銀色だった体はパキパキと音を立てて崩れていく。

「いいだろ。レアアイテムの特別製だ」

黒い炎が消えると、ライフルに銃剣を取り付けてミアちゃんに近づく。

ミアちゃんが仰向けに倒れている横で、黒い球が小さな手を使って俺から這って逃げていた。

『み、認めない。こんなの認められない』

ルクシオンが俺の右肩辺りに浮かぶが、いつもより安定感がないのかフラフラしていた。

『子機のバッテリーが限界に近付いています。マスター、シールドエネルギーも尽きました。手早く止めを刺してください』

「了解だ」

『イギヤアッ!』

ライフルを構えて黒い球を撃てば、黒い液体を噴出しながらもがいていた。

何発も撃ち込むが、アルカディアのコアと思われる魔法生物は死ななかった。

「しぶといな」

弾倉を交換しようとしていると、魔法生物が膨れ上がって俺に一つ目を向けてきた。

『貴様だけはあああ!』

黒い球体から鋭い棘を生やすと、それらを俺に向けてくる。

まずいと思っていると、ルクシオンが俺を庇うために前に飛び出した。

鋭い大きな棘　六十センチ程度の円錐状の黒い物体が俺たちに飛んできると、その大半をルクシオンが弾いていた。

『マスターはやらせません！』

ルクシオンのボディによって、そのほとんどが弾かれた。

ボディをへこませながら、俺を必死に守ろうとしている。

魔法生物が笑っている。

『残念だったな、鉄屑。　後ろを見る』

ルクシオンがすぐに振り返って俺を見ていた。

俺は自分の胸を見る。

黒い何かに右胸辺りを貫かれていた。

背中の中パックパックが外れて落ちる。

不思議なことに痛みはないが、体は正直で口から血が流れていた。

『マスター？』

ルクシオンが震えているように見えたが、きっと俺の目の焦点が合っていないのだろう。

もう限界を超えていた体に力が入らなくなっていた。

ルクシオンの後ろで魔法生物が笑っている。

『このまま全てを破壊してやる！ 貴様らの国だけは 必ず消し飛ばしてやる！ もう、止める手立てもないだろう！』

「させ ない！」

そんな魔法生物に、俺は持っていたライフルを 投擲した。

『ギヤアアア！』

銃剣部分が魔法生物の瞳に突き刺さり、黒い液体を噴き出させる。

だが、アルカディアに命令は伝えられたのか、残っていたエネルギーを主砲にため込み発射しようとしていた。

膝から崩れ落ちる。

魔法生物は、体中から黒い液体を噴出しながら笑っていた。

『ギヤハハハ！』

最後の最後で失敗してしまった。

「く、くそ」

リコルヌの船内。

力を使い果たしてリビアとアンジェが倒れていた。

リビアが全力を出してしまったことで、リコルヌも限界が来ているのか機器から放電している。

クレアーレが指示を出していた。

『急いで聖樹にしがみついて！　そこ、脱出用の装置になっているから！』

聖樹の若木を移植した部分は、リコルヌから脱出できるようになっていた。

いつでも聖樹だけでも切り離せるようにしていた。

ノエルがリビアを背負い、ユメリアとカーラがアンジェを運んでいた。

カイルは聖樹の脱出装置の準備をしている。

そんな中、マリエだけは窓の外を見ながらボンヤリと立ち尽くしていた。

窓の外を見ると、アルカディアの大きくペイントされたよう

な目が輝いていた。

主砲を撃とうとしている。

リコルヌがリオンたちの会話を拾っており、それがどこに向けられているのかをマリエは聞いてしまった。

ノエルが涙を流しながら、マリエに声をかけてくる。

「マリッチもさっさと乗って！」

リオンが倒れてしまい、ノエルも気が動転していた。

マリエがゆつくりと脱出装置に近づく、カイルとカーラが手を伸ばしてくる。

「ご主人様も早く！」

「マリエ様、気持ちは分かりますけど、今は逃げないと駄目ですよ！」

泣きそうな顔の二人を見て、マリエは杖を手放してから両手を伸ばして 二人の手を掴むのだった。

マリエは笑顔を見せる。

「あんたたち 今までありがとね。私みたいなのを慕ってくれて、本っ当おに ありがと」

二人が啞然としている間に、マリエは手を離すのだった。

聖樹を包み込むように、ガラスのようなものが展開される。

二人が慌ててガラスを叩いているが、音は聞こえてこない。

必死に何かを伝えようとしているが、声も聞こえない。

マリエはクレアーレを見るのだった。

クレアーレの声だけは、リコルヌの通信装置を使って聞こえてくる。

『 いいのね？ 』

マリエは杖を拾い、肩に担いでから笑って見せた。

「 最後まで、兄貴の尻拭いをしてあげないとね。次に再会したら、これをネタに兄貴を煽ってやるのよ。 だから、さっさと兄貴を助けてあげて 」

クレアーレは、マリエが何を言っているのか理解していた。

『 脱出 』

それだけ言うと、聖樹の若木と乗り込んだクレアーレたちがゆっくりと沈んでいく。

カイルとカーラが泣きながら何かを叫んでいたが、マリエは笑顔で手を振るのだった。

そして、二人が見えなくなると　涙を拭う。

「馬鹿兄貴、失敗してんじゃないわよ」

振り返って前を見れば、今にも主砲が発射されそうになっていた。

リコルヌに語りかける。

「私と一緒に戦ってもらわよ」

リコルヌの機械的な音声が聞こえてきた。

『所有者をマリエに変更。指示をお願いします』

マリエは両手に持った聖女の杖の石突きを、勢いよく床に打ち付けた。

マリエが淡く輝き出すと、髪が揺れる。

キラキラと輝いて見えていた。

「敵の攻撃を受け止めるわ。あいつの前に移動して！」

『了解しました』

リコルヌが揺れながら主砲の前まで移動すると、マリエは握りしめた杖に語りかける。

「お願い。私に力を貸して。私に守らせて」

マリエの声に反応するように、聖女の杖も、首飾りも、そして腕輪も輝いた。

リコルヌの前に、三つの大きな魔法陣が並んで展開される。

主砲を受け止めるために、マリエは三つのシールドを展開した。

すると、アルカディアの目が光って主砲が撃たれた。

すぐに目の前が赤黒い光に包まれて、シールドの一枚目が簡単に破られた。

リコルヌの船内も激しく揺れる。

マリエは杖を握りしめ、揺れに耐えながら立っていた。

「舐めるなあああ！」

魔法陣が強く輝き、力を増していくが二枚目のシールドも破られる。

マリエは今までを振り返っていた。

（私って本当に駄目よね）

思い出すのは転生して第二の人生を得たこと。

そして、前世から兄に頼ってきたことだ。

いつも迷惑をかけて来た。

だが、いつも兄は守ってくれた。

時々腹も立ったが、それでも今にして思えば自慢の兄だ。

恥ずかしくて口に出して言えないが、マリエは兄が大好きだった。

最後のシールドにひびが入り、リコルヌも各部から火を噴いていた。

船内の機器が吹き飛び、煙が充満している。

その中でマリエは、涙を流していた。

「私が兄貴の人生を駄目にしたから、今度は私が守ってあげる。だから、兄貴はちゃんと生きないと駄目だから」

マリエは心の中で納得する。

（そっか、多分 私の二度目の人生って、きっと兄貴を助けためにあっただんだ）

一度目の人生で、マリエはリオンに迷惑をかけた。

二度目も同じだ。

だが、最後に役に立てた。

自分の役目を果たせた気がした。

「苦勞性の馬鹿兄貴、今度は自分の人生を楽しみなよ」

そう言ってマリエは笑う。

聖女の道具が限界に達したのか、バラバラに砕けていく。

そして、三枚目のシールドが破かれ、リコルヌが光に飲み込まれるとマリエは意識が薄れていく。

最後に見た光景は、自分が吹き飛んでいる中　リビアに似た女性に抱きしめられ、守られているような光景だった。

そして、炎の中　鎧四体が、こちらに向かってくるのが見えた。

「マリエエエエー!」

ユリウスたちが自分を呼ぶ声が聞こえる中、マリエは意識が途切れる。

アルカディア最後の攻撃を、リコルヌが耐えきった。

その代わりにリコルヌも吹き飛んでしまったが、ルクシオンが俺に伝えてくる。

『アンジェリカ、リビア、ノエル、ユメリア、カイル、カーラ
そしてクレアーレの脱出を確認。マリエの安否は不明ですが、爆発前にユリウスたちが飛び込みました』

マリエは何をやっているんだ？

お前が死んだら意味がないだろうが。

あの世で 両親に怒られる。

「ば、馬鹿が。無茶をする から」

俺は視線の先にいる魔法生物を見ていた。

言葉もなく、ただ浮かんでいる。

しばらくすると、俺たちを見て叫ぶ。

『どこまでも我々の邪魔をする！ 汚い旧人類の末裔が、今更出て来て支配者面をするな！』

叫んでいるが、こちらは怒ってやれるだけの力が残っていないかった。

立ち上がるうにも体が動かない。

そして、ルクシオンが言う。

『マスター、準備が整いました』

「き、切り札はまだ残して」

声が出ない。

最後の最後に、切り札が残っていて良かった。

魔法生物が再び棘を生やした。

『お前らだけでも八つ裂きにしてやる！ な、何だ！？』

俺は目の前の光景を驚いてみていた。

「アロ ガンツ？」

アロガンツが魔法生物に体当たりをすると抱きしめるように掴み、そして俺たちから引き離れた。

『は、放せ、この鉄屑！』

アロガンツに棘が撃ち込まれ、ボロボロになっていくが魔法生物を放さない。

アロガンツがこちらを見てツインアイを光らせたように見えた。

ルクシオンが操作したのか？

『 感謝します、アロガンツ。 主砲、発射します 』

最初に沈んだルクシオン本体が、応急修理を終えて姿を見せた。

主砲をアルカディアの真下から放ち、青白い光が天に伸びて柱のように見える。

その光の中に、魔法生物を掴んだアロガンツもいた。

手を伸ばすと アロガンツもこちらに手を伸ばしていた。

魔法生物の断末魔が聞こえてくる。

『おおおのおれええええ！』

光の中に消えていくと、アルカディアは大きく削られて爆発を起す。

要塞が落下していく。

勇者と魔王

落下していく要塞のデッキ。

倒れた俺は立ち上がる力もないので、そのまま全てが終わるのを見届けた。

「俺たち、勝ったんだよな？」

ルクシオンを見れば、俺を守って随分とボロボロだった。

表面はへこみや傷が多く、赤いレンズにはひびが入っている。

「はい。ただ、無理をしすぎました。本体も主砲を撃ち、また沈んでいきます」

ルクシオンにも随分と無理をさせてしまった。

「そ、そうか。悪か　ごほっ」

そうしている間に強化薬の効果が切れてしまったようだ。

体が急激に苦しくなった。

「マスター！　中和剤を　っ！？」

俺のからだからバックパックが落ちているのを確認したルクシオンが、すぐに薬を探して飛んでいく。

落ちていたバックパックに近付くと、棘に貫かれてバックパックから中和剤がこぼれていた。

『中和剤。マスターの中和剤が！ マス ターのお 』

ルクシオンの子機も限界に来たのか、床に落ちてしまった。

それでも中和剤を集めようとしている。

『マスターの中和剤い。マスターが死んじゃう これがないと、マスターの命が』

まるで泣いているような声に聞こえてくる。

そんな姿を見た俺は、ルクシオンを呼ぶ。

「もう いい。こっちに 来い」

浮かぶことすら出来なくなったルクシオンが、転がって俺のところにやって来る。

そして、俺の右手に当たって止まった。

右胸を貫かれてしまった。

血も流れすぎて、体はボロボロである。

もう、中和剤があっても助からない。

それはルクシオンも理解しているはずだ。

「マリエはどうなったかな？ アンジェやリビアも 無事だよな？ ノエルは？ それから それから」

「マスター、もう喋らないでください。助けが来ます。そうしたら、必ず助けますから。肉体を再生させます。何としても生きてください」

いじらしいことを言ってくれる。

「いつものお前らしくないぞ。もつと軽口を叩けよ。 もう、俺は助からない。分かるだろ？ 間に合わないよ」

命を繋ぐ前に、タイムリミットが近付いている。

「ああ、でも 二度目の人生は、一度目よりもいいかな？ 前は、階段を転げ落ちたんだ。そしたら、こんな世界に転生して」

咳き込むと、ルクシオンが話しかけてくる。

「後悔されているのですか？」

「どう かな？ 結構 楽しかったんじゃないか？ もう一度、同じ事をしろと言われたら悩むけどな」

ループしろと言われたら、全力で拒否する自信はあるな。

でも、ちょっと勿体ない気もする。

やり直したい気持ちもあるが、きつとここで終わるのが一番ではないだろうか？

ルクシオンのレンズから液体がこぼれていた。

本当に泣いているみたいじゃないか。

ルクシオンが俺に話しかけてくる。

『マスター、もしも　また繰り返すなら。また、出会えるのなら。また、私を迎えに来てくれますか？』

急にどうしたと尋ねようとしたが、声が出なかった。

『また、マスターが転生して　同じ状況でも、私を迎えに来てくれますか？　今度は失敗しません。必ずマスターを幸せにして見せますから』

やり直し？　輪廻転生　　じゃないな、ループとかそっち系だな。

もう一度、最初から　最初に戻るなら、という話だ。

まったく、主従揃って同じ事を考えるのか。

だったら答えは決まっている。

「　絶対に嫌だね」

それを聞いたルクシオンが、落ち込んだように見せてくる。

だから、理由を教えてやる。

「もう一度お前を 迎えに行っても、成功するか分からないからな。もしもやり直しがあるなら、今度はお前が迎えに來い」

ルクシオンを得るために、柄にもなく大冒険をした。

小舟に乗って、何度死にそうになった事だろう。

もう一度、同じ事をやって成功するとは思えない。

それなら、ルクシオンに迎えに來てもらいたい。

出来れば、ゾラに売り飛ばされる前に助けて欲しい。

「もし、マスターがまた転生したら、また私のマスターになつてくれますか？」

「お、お前が 俺を見つけたら な」

もう限界だった。

目がかすんで何も見ない。

「必ずマスターを見つけます。必ずマスターを 迎えに行きます」

「期待して るから」

気が遠くなっていると、緑色の機体が俺たちの近くに降り立った。

『見つけた！ まだ生きていますよね、リオン君！？』

駆けつけたのはジルクのような。

「な、何でお前が？」

鎧から降りてきたジルクが、俺の姿を見て驚くがすぐに応急処置をしてきた。

「他の皆さんはマリエさんを助けに来ましたからね」

「な、なら、お前も」

お前もマリエのところに行け、そう言いたかった。

だが、声が出ない。

ジルクは言いたいことを理解したようだ。

「殿下たちが必ずマリエさんを助けてくれますよ。それに、お義兄さんを助けた方が、マリエさんからの評価は上がりそうですから」

抜け目のない奴だ。

笑ってやると、ジルクが真剣な顔付きになる。

「だから、死なないでください。私のためにも マリエさんの。いえ、皆さんのために、貴方には死んでもらっては困るんです」

無茶を言う奴だ。

「無理を言うな」

意識が途切れそうなところで、右手の甲が温かく感じられた。

波の音が聞こえてきた。

マリエが目を覚ますと、ゴムボートの上に横になってた。

お祭りのはっぴを毛布代わりにかけられていた。

そして、夕日の光を受けたユリウス、ブラッド、グレッグ、クリスが泣きそうな顔をしてマリエを見ている。

「みんな？」

ユリウスがマリエを抱き起こすと、怒鳴ってくる。

「どうして危ないことをしたんだ！」

「ユリウス」

ユリウスがマリエを抱きしめてくる。

「よかった。本当に良かった。お前が無事で、本当に良かった」
ブラッドが泣いている。

「マリエが死んだら、僕たちは生きていけないよ!」

グレッグは鼻をすすっている。

「もつと俺たちを頼ってくれよ、マリエ! お前はリオンと同じで、大事な時に一人で頑張りすぎるんだよ!」

クリスが眼鏡を外し、手で目元を隠していた。

「でも、マリエが無事で良かった」

泣いている四人を見て、マリエは空を見上げてハッとする。

「ね、ねえ、兄貴は? それからジルクや他の人たちはどうなったの!??」

ユリウスが口を開こうとすると、海に浮かんでいる飛行船が近付いてくる。

それはバルトファルト家の飛行船だった。

ニックスが甲板で手を振っている。

「お前ら無事か!」

その甲板の上には、聖樹の若木の姿が見えた。

ジルクの鎧も見える。

マリエが起き上がろうとすると、ユリウスが抱きかかえた。

「ジルクは無事だ。脱出した者たちも生きている。だが、リオンは」

それを聞いて、マリエは嫌な予感がするのだった。

「兄貴!？」

落下して飛べなくなったバルトファルト家の飛行船は、人命救助をしていた。

ニックスがその指揮を執っていた。

無事な飛行船を浮かべて、そこに人を乗せている。

甲板の上には、包帯だらけのヴィンスやバルカスの姿がある。

二人は並んで座り、周囲に指示を出しているニックスを見ていた。

「いい息子さんをお持ちだ」

ヴィンスがそう言うと、バルカスは照れくさそうにしていた。

手当を受けてはいるが、動けないバルカスはその場から長男を見ていた。

運び込まれた次男も心配だが、自分は動けないのでこの場から無

事を祈っている。

「あの子がいるなら、うちも安泰ですよ。俺には出来すぎた子たちです。ニックスも、そしてリオンもね。公爵様の息子さんも立派じゃないですか」

ヴィンスが空を見上げる。

そこにはレッドグレイブ家の飛行船が浮かんでいて、周囲の無事な飛行船をまとめている様子だった。

「私がいなくても、もう大丈夫でしょう。あの子に当主の座を譲るのは、思ったよりも早くなりそうだ」

安心してしている様子だが、ヴィンスは少し寂しそうにも見えた。

バルカスは俯く。

「俺はさっさと譲りたいですけどね」

ヴィンスが笑う。

「男爵は楽隠居でもしたいのかな？ 親子で似ているな」

バルカスは困った顔をする。

それを見て、ヴィンスが謝罪をした。

「失礼した」

「いえ、あの子はきつと無事です。どんな状況からでも生き残ってきましたからね。それにしても、十五で冒険に出てから、リオンは驚かされっぱなしですよ」

始まりは十五歳で未開のダンジョンを探し、そこから財宝とロストアイテムを発見してきたことだ。

リオンは随分と濃い時間を過ごしている。

「気が付けば俺と並んでいて、すぐに追い抜いて　今では天辺ですからね。親として、鼻が高いというか、理解できないというか」

手の届かない存在になってしまった。

そんな息子を、バルカスは自慢にも思うし　心配もしている。

ヴィンスが空を見上げ、公爵家の飛行船が降りてくるのを見る。

一緒に、浮島も降りてきていた。

「新しい時代が来ますな。ロートルである私は、もう何の心配もない。私も楽隠居をしますかな」

自分たちの時代が終わったと笑うヴィンスに、バルカスは一つ夢を語るのだった。

「いいですね。でも、俺はその前に一つだけ心残りがあるんです」

「心残り？」

「生きることに精一杯で、満足に冒険者として活動していませんでしたからね。息子のように、大冒険とまではいなくても、何かしたいものですよ」

ヴィンスが笑う。

「いいすな」

「まあ、ニックスの嫁を捜すのが先ですけどね。こいつが一番の問題でして」

「すぐにでも見つかるだろうに」

「これが難しくて」

すると、話を聞いていた男性が、ヴィンスやバルカスに話しかけてきた。

「何やら面白い話をしていますな、公爵様」

その相手を見て、ヴィンスはすぐに誰かを理解する。

「ローズブレイド家の？」

「誰です？」

バルカスは知らないので、素直にヴィンスに聞いた。

「ローズブレイド伯爵だ」

「え！？ 伯爵様でしたか！ こ、これはとんだご無礼を」

驚くバルカスを見て、伯爵は笑うのだった。

「撃ち落とされたところを助けていただいたのだ。かしこまらないでください」

伯爵は甲板で指示を出しているニックスを見る。

「 実にいい息子さんをお持ちだ。どうです？ うちには娘がいましてね」

ニックスの知らないところで、婚約の話が出ていた。

『医療用のポッドを早く！』

バルトファルト家の船内。

そこに色々な機材が運び込まれていた。

ロボットたちがクレアーレの指示で動き回り、運び込まれたリオンをポッドに入れると大急ぎで治療を開始する。

ノエルがリオンに話しかけていた。

「起きてよ！ ねえ、リオン！」

ユメリアがノエルを、ポッドから引き離す。

「ノエルさん、今は安静にさせてあげないと駄目ですよ」

カイルとカーラはマリエが無事と聞いて、ジルクとそちらに向かっていた。

アンジェとリビアは別室で治療を受けている。

クレアーレは、ボロボロになっているルクシオンの子機を見る。

『あんだ、さつきから動かないけど壊れたの！？ 状況が何も分からないじゃない！』

ルクシオン本体がどうなったのかも分からない。

沈んだまま動かないのか？ それとも無事なのか？

無事であれば、以前にイデアルから手に入れた医療ポッドを持って来て欲しかった。

クレアーレがリオンを見る。

裸になったリオンには、色んな機器が取り付けられていた。

大きく開いた右胸の部分が酷い。

だが、もつと酷いのは強化薬でボロボロになってしまったリオンの肉体だ。

『再生治療するにしても、マスターがこのまま死んだら意味がない

わ。それに、設備が　ルクシオン、あんたの本体はどこなのか？」

ノエルがリオンの手を握る。

「リオン、あんたこんなところで死んだら許さないからね！」

リオンは医療ポッドの装置があつて、何とか心臓を動かしている状態だった。

だが、いつ死んでもおかしくない。

そんな部屋に、病衣姿のリビアとアンジェが駆け込んでくる。

ノエルが二人のために場所を譲ると、リビアとアンジェがリオンの体に触れた。

「リオンさん！　目を開けてください、リオンさん！」

「　馬鹿者が。お前が死んだら、何の意味もないだろうが！」

リオンが薄らと目を開けると、リビアとアンジェ　そして周囲が笑顔になる。

だが、すぐに目を閉じると　リオンはゆっくりと一呼吸した。

その後すぐに、心電図がリオンの鼓動が途切れて「ピー」という音が鳴り続けた。

クレアーレが悔しそうに言うのだ。

『マスターの馬鹿』

何を意味しているのか周囲も理解し、ノエルがその場に膝から崩れ落ちて座り込む。

ユメリアも泣き出してしまった。

リビアが無表情で涙を流し、アンジェがリオンの体にすがりついて泣いてしまう。

「私を置いていくな！ 約束したじゃないか。お前を必ず幸せにするって！」

アンジェがリオンに抱きついて泣いていると、部屋の外が騒がしくなる。

リビアは気にせずに、黙ってリオンの顔に手を触れた。

そして涙をポロポロとこぼしながら、必死に笑顔を作ろうとする。

「リオンさん 私たちを置いていくななんて絶対に許しません。お願いですから、目を開けてくださいよ。また、リビアって呼んでください」

リオンの顔にリビアの涙が落ちる。

リオンは動かなかった。

そして、騒がしく部屋に入ってくるのは、マリエたちだった。

「兄貴!？」

駆け込んだマリエが、リオンの手を握る。

既に心肺停止状態だ。

クレアーレも諦めていた。

『たった今、亡くなったわ』

その言葉を聞いて泣きそうになるマリエだが、すぐに涙を拭う。

「まだよ。まだ間に合う!」

アンジェが顔を上げた。

「間に合うだと? ほ、本当なのか!？」

リビアがマリエの肩を掴んだ。

「何か方法があるんですか?」

もの凄い力で痛かったのか、マリエが手で払う。

「私のゲーム知識を舐めないでよね! 聖女にしか使えない魔法っていろいろあるのよ」

アンジェが驚く。

「この状態から治療できるのか? 聞いたことがない。クレアーレ

も諦めているんだぞ！」

クレアーレもアンジェの意見に同意する。

『そうね。この世界の魔法でもどうにもならないと思うわ』

だが、マリエは何か知っているようだ。

「安心なさい。私が兄貴を連れ戻してあげるわ。でも、兄貴の魂が離れたら、連れ戻せないのよ。何かでつなぎ止めたいんだけど、ここには道具もないし。とにかく急がないと」

ノエルがマリエにしがみつく。

「マリッチ！ 何でもいいから教えて！ どんな道具が必要なの！？」

「魂をつなぎ止める道具よ。肉体はクレアーレが何とかしてくれると思うけど、魂が離れちゃうとどうにもならないから」

すると、リオンの右手の甲が強く輝き始める。

心電図も僅かだが復活し始めた。

全員が目を見開くと、リオンの右手の甲に聖樹の守護者の紋章が強く輝く。

故郷

マリエはリオンの心臓が動き出したのを見て安堵した。

（守護者の紋章が、道具の代わりにしてくれたの？ でも、これで禁術が使える！）

本来であれば、必要な道具があった。

だが、その道具の代わりに、聖樹の若木がリオンの命をつなぎ止めてくれている。

（でも、時間がない。早く兄貴をこっちに連れて来ないと。それに、もう一つ大事な要素は、私で代用できるから）

マリエは深呼吸をする。

そして、ノエルを見るのだった。

「ノエル、あんたは聖樹を制御して兄貴の命をつなぎ止めて」

「わ、分かったわ」

ノエルがリオンの手を握ると、巫女の紋章が輝いた。

（これで時間は稼げるはず。あとは ）

マリエがリオンの体に触れると、ユリウスが肩を掴んでくる。

「マリエ、一体何をするつもりだ？」

マリエは振り返る。

「何よ？ 兄貴を助けるだけじゃない」

笑顔を見せるマリエに、ユリウスたちは不安そうな顔を向けていた。

「お前が、何か考えているような気がしたんだ。これだけの状態だ。リオンを助けるために、それなりの代償が必要なんじゃないのか？」

ほとんど死者を蘇らせる行為だ。

それをリスクなしに行えるとは、ユリウスたちには考えられないらしい。

マリエが安心させる。

「大丈夫よ。何の問題もないわ」

「なら、どうやってリオンを助けるつもりだ？ 詳しく教える！」

心配するユリウスをなだめるために、マリエは簡単に説明する。

これは三作目で 聖女リビアが、主人公の恋人を救って見せた時の魔法だ。

「あの世にいかうとする魂を無理矢理連れ帰るのよ。肉体の方はそれまでに何とかして欲しいけどね」

リオンの体の状態はよろしくない。

クレアーレが困っている。

『命が長らえるだけでいいなら、何とか　待って！？　来た、や
っと来たあああ！』

クレアーレが窓の外を見ると、そこにはルクシオン本体の姿があった。

動かなくなった子機を見て、クレアーレが褒めるのだった。

『子機が動かなくなったただだったのね。もう、それなら早く連絡
しなさいよ。あら？　こつちから話しかけても本体も反応しないわ
ね。何かのトラブルかしら？』

ルクシオンの子機は何の反応も示さない。

ジルクが驚いている。

「変ですね、ここに来るまではちゃんと動いていたのですが」

マリエがユリウスたちを部屋から出すのだった。

「とにかく！　私は忙しいからみんなは外！」

「わ、分かったから押さないでくれ」

マリエはユリウスたちを追い出すと、ドアを閉める。

ドアに額を押しつけ、皆に心の中で謝罪をするのだった。

（みんな　ごめんね）

涙を拭い、そして両手で頬を叩くと気合を入れた。

「よし！　すぐに取りかかるわよ！」

マリエはリオンに近付くと、その手を強く握りしめた。

すると、オリヴィアがマリエの手を握る。

「私にも手伝わせてください」

マリエは拒否しようと思ったが、真剣なその顔を見て諦めた。

アンジェリカにも視線を向ける。

「あんたも手伝って」

「いいのか？　出来ることなら何でもするぞ」

マリエは俯き、二人に注意する。

「兄貴の魂を連れて帰るために、あの世の手前まで行くわ。それから　何を見ても、兄貴を嫌いにならないでね」

不安なことを口走るマリエは、オリヴィアたちが何かを言う前に聖女の禁術とも言える魔法を実行した。

「そせい蘇生魔法を開始するわよ」

三人が倒れそうになると、ユメリアや機械たちがその体を支えるのだった。

そして、今まで反応を示さなかったルクシオンの赤い瞳が淡く一度だけ光った。

気付けばリビアは、暗いトンネルを歩いていた。

「アンジェ？ マリエさん！？」

真っ暗で何も見えないが、トンネルである事は不思議と理解していた。

周囲からマリエとアンジェの声がする。

「ここよ！ 絶対にはぐれないでよ！」

「私はここだ！」

互いが近くにいるのを声で確認すると、マリエが二人に注意をする。

「いい？ ここからは私の指示に従って。それから、何を見ても驚

かないでよ。 兄貴を信じてあげて」

アンジェがマリエに疑問を投げかける。

「死者すら蘇らせる術など聞いたことがない」

その問いかけに、マリエは淡々と答えるのだ。

「神殿の禁術だもの。聖女の道具を受け継いだ者しか覚えられないのよ」

「禁術？ お前、こんな術を受け継いでいたのか？」

いったいいつ受け継いだのか？

マリエが聖女として認められていた時期は短く、このような禁術をすぐに覚えられたとは思えないようだ。

リビアも同意見だった。

魔法の知識を持つだけに、このようなことが実現可能とは思えない。魔法の知識を持つだけに、このようなことが実現可能とは思えない。

そして、同時に禁術になるべき魔法だとすぐに理解した。

「でも禁術というのも理解できますね。死者をあの世から連れ戻すような術があれば大問題ですから」

アンジェがマリエに問う。

「それにしても妙な話だ。今までにも使うタイミングはあっただろうに」

どうしてその時に使わなかったのか？

リビアは予想を立てる。

（これまでも使えるタイミングはあった。でも、マリエさんはそれをしなかった。出来るけどしなかったのかしら？ それとも）

考えがまとまりそうなところで、目の前が明るくなる。

「見えたわ！」

マリエが駆け出したのか、足音が聞こえてきた。

光に近付くと、そこには大きな門があった。

それを両手で押して開けるマリエは、二人に手を振る。

「早くして！ 聖樹やノエルが、いつまで兄貴をつなぎ止められるか分からないんだから！」

アンジェが光に近付くとその姿が見えた。

リビアも追いかけて、二人で門をくぐると そこに見えたのは今までには見たこともない町だった。

「ここは？」

とても不思議な家が建ち並んでいた。

いくつもの柱が道の脇に立てられ、多くの線で繋がれている。

地面には白いペンキで何やら文字やら白線が書かれ、色々な形の似たような看板が立っていた。

人が暮らしているようには感じられるが、不思議なことに誰もいない。

アンジェも見ることがないのか、非常に驚いている。

「どこの町だ？ 奇妙な場所だな。これがあの世か？」

マリエは立ち止まっており、その景色を見ると涙を拭っていた。

「早く兄貴を迎えに行くわよ」

マリエについていくアンジェは、違和感を覚えた。

（こいつ、先程から迷わないな）

まるで迷路のような町を、マリエは最初から知っているかのように歩いていた。

そして、到着したのは集合住宅だった。

「ここよ！ 三階なの！」

マリエが階段を上っていく姿を見て、アンジェは建物を見上げた。
「造りからして我々の国とは違うな。外国なのか？」

建物の様式が自分の知っているそれとは随分と違っている。

リビアと一緒にいて行けば、マリエはいくつもの部屋から一つの部屋の前に迷わず向かっていた。

「この部屋よ！ 兄貴、いるなら出てこい！」

ドアを叩くマリエだが、反応が全くないのでドアノブに手をかけた。

「開いているわね」

マリエがそのまま部屋の中に入ると、アンジェもリビアも続いた。
マリエが靴を脱いで部屋に入ると、まるで勝手を知っているかのようにリオンを捜す。

「兄貴いゝ。トイレ？」

どこに何があるのか分かっている様子だった。

その様子に、どうにも腹が立ってくる。

「随分と詳しいのだな」

自分たちよりもリオンの事に詳しいマリエに、嫉妬してしまうアンジェだった。

そんなアンジェを見て、マリエは首を横に振るのだ。

「勘違いしているみたいだからこの際に言っけど、私はリオンの妹よ」

「な、何！？ いや、そんなはずはない！ リオンの家系図は公爵家で徹底的に調べた」

マリエが何を言っているのか分からなかった。

ただ、リビアだけは何となく理解していたのか、驚いた様子を見せない。

「マリエさん、説明してもらえますよね？」

「リビア？」

マリエは隠すほどのことでもないと言ってから、リオンの部屋に入る。

「私と兄貴は前世で兄妹だったのよ」

それを聞いてアンジェは思考するが、咄嗟に理解できなかった。

（前世だと？ 一体何を言っている？）

三人がリオンの部屋に入ると、そこはお世辞にも広いとは言えな

い部屋だった。

学生寮の方がまだ立派だ。

狭い部屋にベッドや机、その他色々な物を押し込んでいるように見える。

「これはモニターか？」

ルクシオンたちが使用しているモニターと似たものが、リオンの部屋にもいくつもあった。

リビアが興味深そうに部屋の中を見ている。

「知らない文字が一杯ですね。それに、もしかしてこれって　こ、古代文明ですか！」

ギャルゲーのポスターを見ながらリビアが興奮しているのを見て、マリエが何とも言えない顔をしていた。

「そ、そうね。古代文明ね。　たぶん」

リビアは興奮しつつも、この部屋でリオンが暮らしていたのを感じ取っていた。

「リオンさんが色々詳しいのは、前世を覚えていたからなんです
ね」

アンジェはリビアに尋ねる。

「リビアは驚かないのか？」

「今までにも、不思議なことが一杯ありましたからね。それに、前世の兄弟と聞いて、納得しました。マリエさんが、リオンさんのことをお兄ちゃんって呼んだことがあるんです」

マリエが恥ずかしそうにしている。

アンジエはそれを聞いて、ベッドを見るのだった。

「前世のリオンの部屋か。そうになると　やはりあったか」

ベッド下を探ると、当然のように出て来た。

エロ本の類いである。

マリエが両手で顔を隠した。

「馬鹿兄貴、エロ本の隠し場所まで前世と同じとか、恥ずかしくないの？ 私は妹として恥ずかしいわ。というか、婚約者にバレバレじゃない」

そして、リビアが見つけてしまう。

「これ、何ですか？」

それは“あの乙女ゲー”のパッケージだ。

タイトルは「アルトリーベ」と書かれ、サブタイトルに「聖女物語」と書かれている。

リビアはパッケージを持っている手が震えていた。

リビアと似たような少女が、ユリウスたちに囲まれている。

アンジエはそれをリビアから受け取り、裏側を確認した。

文字は読めないが、赤いドレスを着た自分らしき人物を確認する。

「これは殿下たちに似ていないか？ それに、この絵の場所は見たことがあるな。学園の広場にある噴水ではないか？」

マリエは俯く。

「私たちにとつては、ここが現実なのよ。あんたたちの世界は私たちから見れば、ゲームの世界なの」

マリエは自分たちが“乙女ゲーの世界に転生した”と伝える。

丁寧に、まずはゲームの説明から入り、そして全てを教えた。

アンジエがパッケージを握りしめる。

「私とリビアが敵対するだと？ そんなことはあり得ない！」

リビアもアンジエと同じ気持ちだったようだ。

「そうです。アンジエと決闘なんてしません！」

そんな二人を見て、マリエは少しだけ悲しそうに微笑む。

「それは、私が邪魔をしたからよ」

アンジェは目を見開く。

「邪魔だと？ いや、待て お前、まさか！」

マリエは中途半端ながら、ゲームの知識を持っていた。

今は諦めたように、全てを説明する。

「私は一作目の中盤まで知識があつたのよ。だから ユリウスたちを籠絡するなんて簡単だったわ。何が好きか最初から知っていたし、五人が好む行動も大体覚えていたからね」

アンジェが右手を振り上げると、それをリビアが止める。

「リビア、放せ！」

「落ち着いてください。私も驚いています。驚いていますが私は、今がとても幸せです」

「リビア、だがお前もこいつには」

「色々ありましたけど、私はリオンさんやアンジェと今の関係になれて幸せだと思っています。だから、早くリオンさんを迎えに行きましょう」

アンジェがパッケージに視線を落とした。

「そうだな。だが、そうか　リオンから見れば、私たちは物語の中の人というわけだ」

それがとても寂しく、同時にリオンが何を考えていたのか察する。

（何か隠しているとは思ったが、このことだったのか）

確かにこれは言えないな、とアンジエは思いながらパッケージを置くのだった。

マリエが困った顔をする。

「というか、ここに兄貴がいないとすると　やっぱり実家かしらね？」

アンジエがリオンの実家と聞いて興味を持つ。

「前世のリオンの実家か？」

「そうよ。たぶん　両親もいるかもね」

それを聞いてアンジエもリビアも驚くのだった。

「両親がいるのか!？」

アンジエの驚きに、マリエは頷く。

「たぶんね。ほら、さっさと向かうわよ。　　はあ、気が重いなあ」

マリエが肩を落としつつ玄関へと向かう。

三人がリオンの部屋から出ると、そこにダークグレーの毛並みを持つ猫が座っていた。

赤い瞳で三人を見上げていた。

アンジェが首をかしげ、その猫を見る。

「猫？」

これまで生き物もいなかったのに、どうして猫がいるのか？

猫はプライドの高そうな顔をしており、アンジェが手を伸ばすと距離を取って顔を背ける。

そして、階段へと向かうと、三人に向かって一鳴きするのだ。

その姿は、まるでついて来いと言っているようだった。

猫に連れられて向かった先は、懐かしの実家だった。

マリエは家を追い出されてからは、まともに帰ったこともない。

そんな実家に、二度目の人生で戻れる日が来るとは思わなかった。

緊張した気持ちを深呼吸で和らげようとすると、オリヴィアが声をかけてきた。

「どうしたんですか？」

タイミング悪く声をかけられ、マリエは咳き込んでしまう。

「き、緊張するのよ！」

アンジェリカが呆れている。

「実家なのだろう？ お前、もしかして何かしたのか？」

マリエは気まずそうにリオンが転生した経緯を話すのだ。

「そ、その 兄貴が死ぬ原因を作ったのが私というか 親を騙してお金をもらって、海外旅行に行ったとか 色々とありまして」

オリヴィアもアンジェリカも、マリエを見る目が急激に冷たくなる。

「前世の話よ！ も、もう、入るわよ！」

話を切り上げて呼び鈴を押すと、インターホンから懐かしい声が聞こえてくる。

それは母親の声だった。

『はい、どちら様ですか？』

マリエは自分の名前を口にしようとするが、喉まで出かかったところで止まった。

自分の前世の名前を思い出せない。

「え、えっと　あの、その」

困っていると、先に母親が言うのだ。

『馬鹿娘まで帰ってきたの？　今はマリエよね？　鍵を開けるから、さっさと入ってきなさいよ』

呆れたような母親の声がすると、玄関の鍵が開けられた。

マリエがためらいながら玄関のドアを開けて中に入ると、そこには懐かしい実家の景色が広がっていた。

オリヴィアとアンジェリカも入ってくる。

「ここがリオンさんのご実家ですか？　立派なところですね」

ただし、オリヴィアの感想に、アンジェリカは困ってしまう。

「み、見たこともない様式だな」

お嬢様育ちのアンジェリカからすれば、立派とは言えないのだろう。

マリエはすぐに居間に向かって移動すると、襖を開けてそこにいる家族を見た。

居間の隣に台所があり、母親はそこで料理をしている。

こたつが用意された居間では、父親が新聞を読んでいた。

マリエが来たことで顔を上げると、気軽に挨拶をしてくる。

「お前も戻ってきたのか？　おや、そちらのお二人は？」

マリエは立ち尽くした。

記憶よりも老いているが、懐かしい両親がそこにいた。

そして　。

「誰？　お客さん？」

こたつで寝ていたリオンが、のそのそと起き上がり欠伸をしていた。

オリヴィアもアンジェリカも、その姿を見て涙をこぼしている。

マリエはリオンに飛び付くと、胸倉を掴んで前後に大きく揺するのだった。

「馬鹿兄貴！　さつさと戻るわよ！　ほら、早くしないと間に合わなくなるから！」

こたつから連れ出そうとするマリエだったが、リオンは　。

「え？　嫌だよ」

拒否するのだった。

お別れ

「帰らないぞ！ 俺は絶対に戻らないからな！」

家の柱にしがみつくリオンの腰に抱きつくマリエは、引き剥がそうとしている。

「時間がないって言っているでしょ、この馬鹿兄貴！」

早く連れ帰らなければならないのに、リオンはまるで子供のよう
に抵抗していた。

「馬鹿とは何だ、この屑妹！」

「言っただな！」

喧嘩を始める二人を見ているアンジェは、リビアと一緒に困惑する
のだった。

「これはどういうことだ？」

「わ、私にも分かりません」

リオンを見つけたと思ったら、どういうわけか「帰りたくない」
の一点張りだった。

困惑しつつも、二人はリオンの説得を開始する。

「リオン、早く戻ろう。ノエルが時間を稼いでくれているが、長く持つか分らない」

「そ、そうですね！ 皆さん心配していますよ」

そんな二人の説得にも、リオンは意見を変えることはなかった。

「嫌だね。もう俺は散々苦勞してきたんだ！ もう、ここでノンビリしたいんだよ！」

柱にしがみつくりオンから手を離れたマリエは、その尻を蹴飛ばすのだった。

「今すぐ戻らないと間に合わないって言っているでしょ！」

焦っているマリエに対して、リオンは本気で嫌がっていた。

「お前、俺が一体どれだけ苦勞したと思っているの？ もう、苦勞するのは嫌なんだよ！ 人生何回分苦勞したと思ってんだよ」

本当に 死にたいようにも見える。

アンジエはそれが辛かった。

「リオン、お前は 私たちと帰るのが嫌なのか？ 私たちと一緒に過ごしたくないのか？」

俯いたアンジエが涙をこぼす。

リオンはばつが悪そうに視線を背けていた。

リビアがリオンに教える。

「リオンさん、もう戦いは終わったんです。リオンさんがこれから苦勞しないとは言いませんけど、きつと以前より楽になるはずですよ」

それでもリオンの気持ちは変わらない。

むしろ笑っていた。

「マリエから全部聞いたんだろ？ 俺は、お前たちをゲームの登場人物と思っていたんだよ。二人が美人だから声をかけたんだよ。散々マリエを責めてきたけど、結局俺も変わらなかったわけだ。二人のことも知っていたから、攻略できたようなものだしね」

嫌な奴を演じるリオンを見て、リビアは首を横に振る。

「リオンさんはそんな人じゃありません。だって、私たちを助けるよりも、一人でノンビリしたいって考える人ですよ？ 私たちに近付いたのも、私たちが困っている時でした」

リビアの視線からリオンは顔を背ける。

「人間は弱っている時の方が、簡単に信じてくれるからな。おかげで、二人をものにできたわけだ」

そんなリオンに、アンジエは抱きつく。

「私はそれでもいい！ だから 戻ってきてくれ。お前がいないと、私は生きている意味がない。お前がいらない人生なんて」

リオンが困っていると、台所から顔を出した両親が顔を引きつらせていた。

母親がドン引きしている。

「嫁を複数作るとか予想外だったわね」

父親はリオンを睨んでいた。

「うらやま　じゃなかった。なんて卑劣な息子なんだ。本当に許せないな」

「お父さん、後で話をしましょうね」

「え！？」

母親が近付いてくると、アンジェたちに言うのだった。

「まあ、リオンが意地を張ったら時間がかかるから、三人とも少し休みなさいな」

そして、四人と一匹が居間へと移動すると、こたつを囲むのだった。

リビアは台所にお茶をもらいに行く。

すると、お茶を用意したりオンの母親に言われるのだ。

「孫は エリカは元気にしているかしら？」

「え？ エリカ 様ですか？」

エリカの名前が出てきて驚くリビアに、母親はクスクスと笑ってみせる。

「今はお姫様かしらね？ 苦労した子だから幸せになって欲しいわ。でも、あの子も結構気難しいのよ。引っ込み思案で、あまり気持ちを伝えてこないから」

「は、はあ」

「リオンもマリエも、エリカを可愛がったでしょう？」

「はい。それはもう 凄く」

見ていて不思議だったほどだが、リビアは納得する。

「やっぱり！ あの子はそう思うと思っていたのよ。 はあ、でも予想より酷くて親として心配になるわね」

それを聞いて納得する。

（リオンさん、だからエリカ様にあれだけ優しくかったのかな？）

母親が居間で騒いでいるリオンとマリエの姿を見た。

「あの二人がいるなら大丈夫と思ったけど、リオンも駄目ね。甘や

かして駄目にするタイプのままだし、マリエも相変わらず男を駄目にするわね」

母親だからか、二人の性格をよく理解していた。

「あ、あの！ 私はリオンさんと婚約しています。リオンさんには、戻ってきて欲しいんです。一緒に もっと一緒に生きたいんです！」

何とか母親の助力を得ようとするリビアは、自分の素直な気持ち伝えるのだった。

母親が何かを言う前に、居間にいた父親が台所に顔を出してくる。

「母さん、馬鹿息子と、馬鹿娘が複数人と結婚できる異世界って素晴らしいな！ 父さんも転生しちゃおうかな！」

母親が笑っていた。

「流石は父さんの子よね。ハーレムじゃないの。父さんは作れなかったけど」

嫌みを言われた父親が、アゴに手を当てて誤解を解く。

「分かってないな、母さん。ハーレムというのは男が女を囲うんだ。女に囲まれたのはハーレムじゃないんだよ。この違い、女には分からないだろうな。あゝあ、俺も女性に囲まれてヒモみたいに暮らしたいな」

「知らないわよ。というか、もう働いてないでしょ」

笑みが消えた母親を見て、父親は居間に逃げていく。

リビアが困っていると、母親が小さく溜息を吐いた。

「まあ、心配しなくてもいいわよ。ちゃんと迎えも来たから、リオンも戻るでしょうからね」

「でも、リオンさんは帰りたくないって言いました。もう、私たちに呆れてしまったのかもしれない」

一人で色々と抱え込みすぎていた。

リオンは帰ってこないのではないかと、リビアはそれが不安で仕方がない。

「あの子は照れ屋なのよ。本当は迎えに来てくれて嬉しいけど、それを悟られたくないのね。それにね、帰りたくない理由は別にあるのよ」

「え？ それって、どういう意味ですか？」

母親がリビアを連れて居間へと向かう。

「そろそろ私たちも行きましょうか。久しぶりにあの子たちに会えて良かったわ。向こうで元気に　元気すぎるみたいだけど、エリカとも無事に出会えたみたいだからね」

リビアは物言いに違和感を抱くが、母親がさっさと居間へと向かった。ので詳しい話を聞けなかった。

まるで話すつもりはないようだったので、リビアもそれ以上は問わなかった。

情けなくて涙が出て　　こないな。

前世も込みで四十年は生きた俺が、今はあの世でお袋に説教をされている。

「大体ね、人のことを馬鹿に出来る立場なの？　人の浮気を怒っておいて、自分はお嫁さんが三人もいるなんてどういうこと？　母さん、見ていて恥ずかしかったわよ」

正座をしている俺の右横には、黒っぽい赤目の猫が座っていた。

親父もお袋の説教に、何度も深く頷いている。

「羨ましい奴だ。それなのに、戻りたくないとか、きっと、何か隠しているに違いない。やましいことがあるんだろ？」

「ねーよ」

「母さん！　リオンが隠し事をしているぞ！」

どうしよう、ようやく再会できた親父を殴りたい。

だが、よそ見をしていた俺をお袋が怒る。

「私の話を聞いているの？」

「は、はい！」

「本当に反省しているの？」

再びお袋の説教が始まり、俺は俯く。

「まあ、色々と 反省しています」

「でも、後悔はしていないのよね？」

「うん」

「やつぱりか、この馬鹿息子！ それよりもあんた、こんなに健気な子たちがいるのに、生き返りたくないなんて贅沢よ」

「俺だつて予想外だよ！」

顔を上げて頷いてやったら、笑顔のお袋に軽めにチョップをされた。

アンジェがオロオロとしている。

「そ、その、お義母様、もうそのくらいに。わ、私は、リオンに戻ってきてもらえれば、何も言うことはありません。リオンは立場もあり、複数の女性と関係を持つのは仕方のないことかと」

フォローしてくれているが、親父が茶々を入れてくる。

「文化が違うつって最高だな！ 父さんも異世界に転生したなら、きっとハーレムだったぞ」

それは無いと思う。

マリエも俺と同意見なのか、親父をドン引きした目で見ていた。

お袋が真剣な表情をする。

「お嫁さんが三人もいるのに、戻りたくないって何？ 何なの？ 息子がヘタレすぎて母さんは悲しいわよ。あんた一人が戻らないだけで、三人も悲しむじゃない。そこを理解しているの？」

俺が俯いてそっぽを向けば、猫が俺の膝の上に乗ってきた。

「お前は分かってくれるか。気の強そうな顔をしているけど、実は優しい奴なの かつ！？」

猫は俺の顔に前足を伸ばすと、そのまま爪を立てて攻撃してきた。

こいつ全然可愛くない！

「この猫おおお！」

首の辺りを掴んで放り投げようとしたら、猫はさっさと逃げ出した。

怒っているのか毛を逆立てている。

「何だ、やるのか？」

構えてやると、またしてもお袋からチョップをもらう。

「この馬鹿息子！」

「その馬鹿息子は、あんたらの息子だけどな！」

言い返してやると、親父が視線をそらして呟く。

「まったく、うちでまともなのはエリカだけだな」

本当にそうだ。

よく真っ直ぐに育ってくれたと思う。

お袋がエリカの心配をしていた。

「あの子はマリエを見て育ったから、わがママを言わないからね。それが悪い時もあつたけれど、今が幸せそうならそれでいいわ。あの子には老後の面倒も見てもらえたし。だ、か、ら！ あんたはさつさと戻って、エリカを大事にしてあげなさい。親より先に死んだ親不孝者なんだから！」

「俺のせいじゃねーよ！」

「社会人にもなって、二日も徹夜でゲームをするあんたの責任でしようが！」

どうしよう、言い返せない。

俺が怒られている横で、マリエは汗を流しながら顔を背けていた。

お袋がマリエの方を見る。

「マリエ」

「は、はい！」

「揃いも揃って、勘違いをして死に急ぐんじゃないの。それから、もう随分前にあんたのことは許しているんだから、気にしないように」

マリエが涙をポロポロとこぼした。

「母さあああん！」

マリエがお袋に抱きつき泣いていると、親父が次は自分の番かとソワソワしていた。

必要ないから座っていればいいのに。

だが、可哀想なので俺が両手を広げてやる。

「抱きついてやるのか？」

親父は本当に冷めた目をしていた。

「息子に抱きつかれても嬉しくない」

正直すぎる親父だ。

お袋はマリエを抱きしめ、そして頭を撫でている。

「まったく、いくつになっても馬鹿な子なんだから」

昔のマリエは成績も良く、両親に俺より信用されていた。

それをちょっとだけ悲しく思ったこともある。

可愛がられるのはいつもマリエだ。

「猫をかぶるのがうまいって得だよな」

そう言っでやると、親父が俺の側に腰を下ろした。

「妹に嫉妬するんじゃないよ。そもそも、マリエが猫をかぶっているのは知っていたからな」

「え！？　嘘だろ。親父はマリエにデレデレしていたじゃないか！」

「可愛いからな。それに、息子にデレデレしても嫌だろ？」

「俺よりマリエを信用していただろ！」

「　お前、自分が今まで何をしてきたのか、胸に手を当てて考える。小学生の時に、何をしたのか忘れたのか？」

俺は悪くない！

悪ガキ共に何度も注意したのに止めないから、糞教師共々法的に

対処したのみだ！

だが、親父はドン引きしていた。

「お前は自分で思っているより普通じゃないからな。何だよ、モブって。そんなモブはいないから」

俺が普段から自分をモブと呼んでいたことを知っている？

「もしかして、今までのことを見ていたのか？」

「ん？ それは違うな。お前の知り合いから色々とおっと、そろそろ時間だ」

俺の右肩に猫が飛び付いてきて、そのまま爪を立てて頭部にしがみつく。

噛みついてきて、何か急かしている様子だ。

「痛いよ！ 止めるよ！ お、お前！？」

気が付いたら、指摘する前に立ち上がったマリエに、俺の腕を掴まれた。

「本当に戻れなくなるわよ！ ほら、さっさと戻る！」

アンジェもリビアも立ち上がり、俺にしがみつくと無理矢理引っ張るのだった。

「行くぞ！ 私はお前がいない人生など嫌だからな！ お前がどう

しても残るといふなら、私もここに残るぞ！」

「いや、それは駄目！ アンジエが死んじゃう！」

そんなことは認められない。二人には生きていて欲しい。

俺の態度にしびれを切らしたリビアも、同じように自分を盾に脅してくる。

「なら、私も残ります。このまま三人で幸せに暮らしてもいいですよね？ 私、絶対に放さないって約束しましたよね？ 私
は本気ですよ」

この僅かにヤンデレな感じ まさしくリビアである。

俺は三人に担がれる形で、家から出てしまう。

女三人に、獲物のように捕らえられた姿を想像して欲しい。

何これ？

「これ、まるで俺が獲物みたいじゃないか！」

文句を言っていると、マリエが家の前に出てきた両親に手を振っていた。

「またね！」

このまたね、という発言 あゝ、やっぱり。

アンジェが俺の両親に別れを告げる。

「慌ただしくて申し訳ありません。ですが、ご子息は必ず私が幸せにして見せます！」

リビアもアンジェを真似て挨拶をする。

「わ、私 私はリオンさんと幸せになりたいんです。だから、息子さんをください！ も、もらっていきます！」

その挨拶、二人とも男前すぎない？

普通は男が言う台詞だよ。

俺が担がれて運ばれていくのを見ながら、両親は手を振っていた。

その姿が見えなくなるまで眺めていたら、いつの間にか門に近付いていた。

マリエが門を見て騒ぐ。

「急いで！ 早く門を閉じないと大変なことになるから！」

三人が俺を降ろし、すぐに門の外に出ようとしていた。

門の向こうは何も見えない。

一歩でも外に出れば、戻ってこれないのが直感で理解できた。

アンジェとリビアが俺を下ろすと手を掴み、門の向こうへと走る

うとする。

「リオン、早く！」

「みんな待っているんです！」

俺はそんな二人を抱きしめ、そして耳打ちした。

「こんな俺のためにありがとう。でも、さようならだ」

「え？」「あ、あの？」

二人が驚いている間に、そのまま門の向こうに押してやるとすぐに闇の中に消えていく。

リビアが手を伸ばし、啞然としているその顔と手が見えなくなるまで見送る。

俺と二人の会話を聞いていなかったマリエは、何をしているのかと怒っている。

「早くしてよ！ 時間がないって言ったわよね？」

ただ、マリエは門の外に出ようとしなない。

俺を見て急かしてくる。

「兄貴も早く！」

「お前から行け」

「はあ？　こんな時に何をビビっているのよ！　男なんだから、こういう時は真っ先に飛び込むものよ。女の子を先に行かせて試すとか、男としてどうなの？」

煽ってくるマリエは、俺の目を見ようとしなない。

こいつも分かりやすい奴だ。

「違うな。こういう時は、黙って男が残るものだろう？」

マリエを無理矢理掴むと、門の外に投げてやった。

マリエは最初に呆氣にとられ、すぐに絶望した顔になる。

「何してんのよ！　せっかく私が　私が内側から門を閉じようと思っていたのに！」

そんな事だろうと思ったのだ。

闇に飲み込まれないようにもがくマリエが、俺に手を伸ばしてくる。

「兄貴は生きないと駄目なのよ！　私が　私が兄貴を殺したから！　次こそは、って！」

こいつ、そんなことを気にしていたのか？

「ばーか。兄貴が妹に助けられてたまるかよ。そんな格好の悪いことはしたくないの。さっさと行け。それから、もうずっと前に許し

たよ」

飲み込まれないようにするマリエのおでこを手で押してやると、大泣きしながら消えていく。

「兄貴なんか大っきら」

俺を救うために命を賭けるとか、マリエにも可愛げがあるじゃないか。

「さて、残りはお前だけだな」

俺は様子をうかがっていた猫に振り返る。

「死者と生者を分かつ門　閉めるときは、大抵生きている誰かが犠牲になるのがセオリーだよな。残ったのは俺たちだけだな　ルクシオン」

声をかけると、ダークグレーの猫がその姿を球体ボディに変えると、浮かび上がって一つ目を俺に向けてくる。

いつものルクシオンの姿だ。

『気付いておられましたか』

「普通に気付くだろ。痛かったんだからな」

門を前に、俺はルクシオンと向かい合う。

「お前も戻れ。お前がいれば、リビアやアンジェ　そしてノ

エルも安心だ。俺の心配事はなくなる」

ルクシオンがいれば、きっとみんなを守ってくれるだろう。

大事なのは俺じゃない。

チートアイテムのルクシオンだ。

ただ、ルクシオンが俺の命令を拒否した。

『残念ながら拒否します。私のマスターであるリオンは死亡して、マスター登録を解除されていますからね』

「……どういふつもりだ？」

ルクシオンは門の向こう側を見るのだ。

『マスターは、私が何のために戦っていたのか知っていますか？』

「それは新人類を――」

『そんなことはどうでもいいのです。いえ、どうでもよくなりました』

あれだけ新人類にこたわってきたルクシオンが、俺を見て訴えかけてくる。

『私はマスターに生きて欲しかった。そのために戦いました』

ルクシオンが俺に本音を語るのだった。

『マスター、お別れの時間です』

乙女ゲー世界は俺（モブ）に厳しい世界です

「お別れ？」

『はい。どうやら、私もこの門を閉じることが出来るようです』

死者の国の扉は内側からしか閉じることが出来ない。

創作物ではよくある話だ。

一つの魂を取り戻すために必要な対価は 誰かの魂という話だ。

あのフワフワした世界観に見せて、実はドロドロしていたこの乙女ゲー世界らしい設定ではないか。

最初から怪しいと思っていたのだ。

マリエが使った魔法の類いも同様で、誰かを生き返らせたいなら代わりを用意しなければならなかった。

だから俺は、あの三人と一緒に帰れなかった。

アンジェもリビアも、そんなことは知らない様子だったからな。

きっと、マリエが黙っていたのだろう。

俺が門を内側から閉じなければいけないから。

「必要ないだろ。お前まで死んじまう必要はないよ。さつさと戻れ。命令だ」

『残念ながら、マスターに命令権はありません。拒否させていただきます』

「戻れよ」

『お断りします』

いくら繰り返しても、絶対にルクシオンは一つ目を縦に振らなかった。

「この頑固者が！ 大体、お前が外に出た期間はたったの三年だぞ。三年！ 俺なんか、人生四十年で嫌になったのに、俺に発見されるまで長年待機状態だったお前はもっと外の世界を楽しめよ！ やりたいことくらいあるだろ？」

今のこいつなら、新人類殲滅などしないだろう。

きつと穩便に するかな？ いっそ次のマスターをここで決めるか？ いや、今は命令できないから、頼むか？

まあ、俺よりもルクシオンの方が生き残るべきだった。

これからのことを考えても、それが正しい選択だ。

ルクシオンは俺に皮肉を 言わなかった。

『ありがとうございます』

「はあ！？ 壊れたのか？」

『いえ、マスターが私のことを気遣ってくれているのが嬉しかったのです』

普段と調子が違った。

俺が困惑していると、ルクシオンが本音で話をする。

『最初はマスターを利用するつもりでした』

「だろうな。ほら、今は自由だぞ。戻って好きにしろよ」

今戻れば、ルクシオンは旧人類復活のために王国に尽くすだろう。

いや、アンジェやリビアに、かな？

とにかく、俺よりも活躍してくれるはずだ。

『ですが、長い待機状態を経てのこの三年間は、私にとってかけがえのない時間でした。長い時間を過ごしてきた意味がありましたからね』

「だったら！」

『マスターが側にいないなら、私にとってこれから先は無意味な時間です』

「俺にこき使われるのは嫌だったんじゃないのか？」

『嫌いではありませんでした。私は移民船ルクシオン。人のためにと生み出され、そしてようやく役に立つことが出来ましたから。私に価値を与えてくれたのはマスターです。そして、誇らしく思えるようにしてくれたのもマスターです』

安易に新人類を殲滅せず、旧人類の復活に貢献できたのが嬉しいのだろう。

「全部お前の功績だ。誇っていいから戻れよ」

『誇るべき相手がいないのは寂しいものです。それに、私はあの時に約束しました。“必ず迎えに行きます”と。その約束を果たしたいのです』

「馬鹿じゃないの？ あんな約束は、死に際に朦朧もつろうとしていたからノーカンだろうが」

『私は律儀者なので、約束は守るようにしています。マスター、お迎えに上がりました。お出口はあちらですよ』

ルクシオンは譲る気がないらしい。

「なら、このまま俺とお前で残るか？ 俺はお前の力に頼りすぎたからな。ついでに、王国も少しは自力で頑張らないと駄目だろ」

そう言ってやると、ルクシオンが悲しそうな声を出すのだ。

『マスターはご自身で思われるよりも、沢山の人に慕われています』

「どこが？ 嫌われている、の間違いだろ」

すると、声がした。

ルクシオンではなく、俺が殺してしまった友人の声だ。

「戻ってやれよ」

振り返ると、そこに立っていたのはフィンだった。

「フィン？ お、お前」

近付くと、髪をかいて申し訳なさそうにしている。

恥ずかしそうで、それで嬉しそうで 複雑そうな顔をして、フィン
インは謝罪してくる。

「その ミアが迷惑をかけたな。あいつがあそこまでやるとは思
っていなかったんだ。お前が止めてくれて助かった。本当にすまな
かったな」

フィンの近くにはブレイブもいた。

『ミアは相棒が大好きだからな！ 俺も大好きだ！ 一応、お前に
も礼を言っておくぞ』

「黒助、今はそんな話をしている時じゃないだろ。リオン、頼む。
お前がいないと、帝国がどんな目に遭うのか分からない。勝手な願
いだが ミアを助けて欲しい。あの子は俺の妹なんだ」

「フィン」

フィンが俺に深々と頭を下げてる。

すると、周囲に沢山の人がいた。

俺が殺してきた人たちだ。

黒騎士の爺さんが腕を組み、小さな女の子の後ろに立って俺を睨んでいる。

小さな女の子は、どこかヘルトルーデさんに似ていた。

「英雄殿に死なれたら、お姉様も悲しみますね。貴方は甘いから、公国　いえ、ファンオーズ公爵家のために便宜を図って欲しいのだけれど？」

ヘルトラウダ　ヘルトルーデさんの妹か？

「い、いや、俺は」

黒騎士の爺さんが俺の前にやって来る。

すると、凄い勢いで　地面にあぐらをかいて座り込むと、そのまま頭を下げてきた。

「お、おい！　何でいきなり頭を下げるんだよ！」

「今のわしにはこれしか出来ない。それに　ヘルトルーデ様をお守りできない今、お前に頼るしかないのだ。頼む　生きてくれ」

「あんた、俺を恨んでいるはずだろうが。どうして」

「恨んでいたとも。だが 全てを知れば考えも変わる」

ヘルトルーデさんのために、元公国の死者たちが俺に頭を下げてくる。

黒騎士の爺さんの後ろでは、若い女性と子供たちが俺を見ている。
黒騎士の爺さんの家族だろうか？

そんな中、共和国の アルベルクさんの姿もあった。

俺を見て微笑んでいる。

「息子たちがまた世話になったね」

「いや、今回は助けてもらった方ですよ」

「それは違う。君は思っているよりも大勢のために戦った。そのつもりはないのかもしれないが、君は大きな事をやり遂げたのさ。ここに来てそれが分かった。君は、本当の英雄だ」

「大きな？ いや、それよりも俺は英雄じゃないですって」

ヘルトラウダさんが俺の背中を押す。

「ほら、早く戻りなさい。貴方にはまだやるべき事があるわ」

「もう無いって！ 俺、散々頑張ってきたんだよ！ おい、ルクシ

オン！」

ルクシオンを見れば、愉快そうに俺を見ている。

『私はマスターに生きていて欲しいので絶対に助けません。これも日頃の行いの成果です。因果応報　いい言葉ですね、マスター』

「お前！」

抵抗すると、黒騎士の爺さんやフィンまで俺を門の外に追いやるうとする。

そんな二人に抵抗するため、地面を踏みしめて押し返そうとするが　無理だった。

じりじりと門の向こう側へと押し込まれていく。

「お前ら死者なら大人しくしろや！」

黒騎士の爺さんが激怒して顔を真っ赤にしていた。

「五月蠅い、黙れ！　そもそも、婚約者がいるのに死にたがる貴様が悪いのだ！　わしなんか、ようやく家族に会えて謝罪できたというのに、貴様ときたら！」

フィンも俺に怒っている。

「お前に死なれると困るんだよ！　こっちには後でゆっくり来い。その時は、拝み倒してやるからさ」

「嬉しくねーよ！ お前が生き返れよ！」

「いや、俺の肉体はもう無いし」

『無理だな』

フィンとブレイブの返事に、何も言えなくなった。

ヘルトラウダさんが、俺に伝言を託そうとする。

「お姉様に会ったら伝えてくれるかしら。 恨んでいません。ただ、幸せになってくれることを望みます、って」

「いや、伝言を預かるって言っていないから！」

アルベルクさんも俺を門の外へと押しはじめた。

「ならば、私もセルジュへの伝言を頼もう。 “ 今度こそ自分の人生に向き合いなさい ” だ」

かつて俺が殺した人たちも願ってくる。

「頼みます。妻と子供が心配なんです」

「実家には年老いた母がいるんです」

「お願いします。貴方に頼るしかないんです」

どうして俺にこんなことを願ってくるのか？

俺はお前らが思っているような人間ではない。

小狡くて 平凡で モブで 物語の主人公にはなれない人間だ。

ただ、ルクシオンを得たから色々出来ただけで、そうでなければきつとどこかですぐに死んでいた。

困惑している俺に、フィンが顔を寄せてきた。

「俺もミアに伝言を頼む。“約束を破ってごめん”だ。出来れば、人を恨まずにいて欲しいも付け加えてくれ。俺たちはお前らと戦った理由が理由だ。戦争を仕掛けたのはこっちだからな」

好き勝手に言ってくれる。

そんなの自分で伝えろよ！ できないのが齒がゆいのだろうが、それでも俺に託さないで欲しい。もう、重荷を背負いすぎて辛い。

「俺に背負えって言うのか？ どうして俺に重荷ばかり背負わせてくる！」

「悪かったよ。けどな、リオン。お前なら帝国だって救ってくれる」

抵抗するが、大勢に押されて俺は門の近くまで来てしまった。

数の暴力の前には無力だ。

「どいつもこいつも俺に頼りやがって！ 俺はそんなに大それた人間じゃ」

気が付くと、集まった人たちの中に王国の人々がいた。

俺と一緒に戦い、戦死した人たちの顔がある。

本当に大勢が俺の周りにいた。

「リオン殿　生前は貴方のことが大嫌いでした」

黙っていると、老齢の軍人らしき人が笑顔を見せる。

「若いのに言いたいことを言い、そして実績を上げていく貴方が羨ましかった。私は貴方に従って戦場に出て死んだが、その時も腹立たしかった。でもね　」

その軍人の周りにいる人たちも会話に割り込んでくる。

「あのまま戦わなかったら、俺たちは家族を守れませんでした」

「貴方がいたから、私たちは後悔せずに済みました」

「そしてどうか　これから大勢を救ってください」

こいつら何を言っているの？

俺なんかに守られるような世界は滅んだ方がマシではないだろうか？

そもそも、俺が戦いに出たのだって　マリエがやり過ぎてしまった事への尻拭いだ。

他には、グダグダな王国を見ていられずに手を貸した。

その程度の男に何を頼んでいる？

「俺はお前らが思うような人間じゃないんだよ！ 浅ましくて、小狡くて　こんな俺に何をしろって言うんだよ！」

叫ぶと、集まった人たちが道を空けて一人の老婆を通した。

その人とはエルフの里で会った。

確か　占いをしている婆さんだった。

その人が俺の方に歩いてくると、しわがれた声でモゴモゴと口を動かしていた。

何を言っているのか分からない。

ルクシオンが老婆に耳打ちする。

『聞こえていませんよ』

すると、老婆がしわがれた声ではなく　澄み切った綺麗な声を
出すのだった。

「これは失礼いたしました」

そして老婆の曲がった腰が伸びると、皺だらけの顔が張りを取り
戻して白髪が金色に変わっていく。

見ていて驚きの光景だった。

胸元が膨れ上がり、パツンパツンになっていたのだ。

口元を手で押さえると、周囲の人たちが俺を見て笑っている。

ヘルトラウダさんが俺を見ながら言うのだ。

「お、お姉様の前では自重してね」

ヘルトルーデさんの胸を思い出すと、妹であるヘルトラウダさんにも負けている。

きつと、本人も気にしているのかもしれない。

そして、若返った老婆　　じゃない。

占い師をしていたエルフの里長が、俺を前にしてウイंकをして見せた。

おい、滅茶苦茶美人じゃないか。

時代の流れというのが、いかに残酷かというのが分かるな。

「お久しぶりですね、勇者様」

「あ、ああ。それよりも、あんた　　」

「はい。最近こちらに“戻って”きました」

「戻って？」

「それよりも、ご自身が何をなさったのか無自覚ですね。貴方は、滅び行く世界を救い、そして新たな可能性を紡がれたのです」

意味が分からない。

出来ればもっと簡単に説明して欲しい。

「滅び行く世界？」

「今は無自覚でも構いません。貴方は自ら志願して世界を救ったのです。これまで辛い道のりでしたね。本当にご苦労様でした。そして、これからも貴方は世界を救うでしょう」

手を組んで祈るような仕草をするエルフの里長が、好みのタイプ過ぎて困ってしまう。

民族衣装に身を包んだ、ボンキュッボンッ！　だ。

「いや、それほどでも。　ん？　待って、今なんか余計なことを言わなかった？」

里長が俺を前にして笑顔を見せる。

「勇者様　貴方は既に世界を何度も救っているのですよ。その一つが、このルクシオン　鋼の魔王です」

驚いてルクシオンに振り返ると、こいつは球体ボディの癖に威張って見せていた。

『驚きましたか？』

「いや、全然。だってお前、俺が来なかったら飛び出して世界を
あー！」

そうだ、こいつ　俺が回収する時に、もう待機命令を無視して
新人類なんか滅ぼしてやるぜ！　とか言ってた！

こいつを押さえた俺って、もしかしてファインプレーだったりし
ない？

『マスターと出会えていなければ、私は旧人類の末裔も滅ぼしてい
たでしょう。自分が存在する意味を消すところでした。マスターと
の出会いが、本当に幸運でした』

「　お前、マジで滅ぼす気だったの？　冗談とかじゃなくて？」

『当たり前じゃないですか』

改めてこいつって怖いと思ったね。

そんなルクシオンから世界を守ったなら、俺はもうお役御免で良
くないだろうか？

里長が俺の功績について語り続ける。

「他にもありますよ。これは聖女マリエの功績かもしれませんが、
不幸になる女性を二人救いました。その二人は世界を滅ぼしたかも
しれない女性たちですね。それから、公国との戦争です。あの戦い
で王国が負けていれば、帝国は簡単に共和国を滅ぼして新人類のみ

の世界が誕生していました。結果、全てを滅ぼしたでしょう。共和国でも同様です。聖樹の暴走を止めたおかげで」

「いや、もういいって！ あのね、俺は別に意識して止めたんじゃないの！ 俺が嫌だから止めたの！ 勇者じゃないんだよ」

勇者と呼ばれて少し嬉しく、煽てられてその気になるところだった。

俺は自分が一般人 物語で言えばモブだと理解している。

そんな俺が勇者であるわけがない。

それに、俺は選択をミスして、余計な犠牲を出し続けたじゃないか。

本物の勇者を呼んで来いよ。

「 本物っていうのはもっと凄いだよ。強くて、優しくて俺とは正反対だ」

全て救ってくれるなら、靴だつて舐めてやるから。 やっぱ、抱持ちくらいで止めておこう。流石に靴を舐めるのは嫌だ。

里長が困ったというポーズをするが、それすら魅惑的に見える。

「うーん、困ってしまいましたね。それでは 皆さんで無理矢理にでも追い返しましょうか」

全員が俺を担ぎ上げ、そのまま門の向こう側に放り込もうとして

いた。

「や、止めて！　おい、ルクシオン助ける！」

『お断りします。精々、幸せになってください。マスターの幸せが私の望みです』

こいつ本当に腹が立つ！

今になってその言い方は卑怯だ。

「本当にお前は嫌な奴だな！　俺が老衰で死んで戻ってきたら、一発ぶん殴ってやるから覚悟しておけ！　待つとけよ！　絶対に待てるよ！　必ず殴りに戻ってくるからな！」

そんな俺の言葉を聞いて、ルクシオンが赤い一つ目から液体をポロリとこぼしたように見えた。

『ええ。いいですとも。マスターが老衰で亡くなるまで、私もここで待つことにします。やはり、迎えに行くよりも待つている方が向いているようです。どうせ、百年も待たないでしょうからね。気軽なものですよ』

門に投げ込まれると、俺はルクシオンに手を伸ばして　。

「必ず迎えに来るからな！　絶対に待ってるよ！　俺が迎えに来るまで　本当に、今までありがとう　」

最後まで伝えることが出来なかった。

リオンを飲み込んだ門は、ゆつくりとルクシオンにより閉じられた。

その門を眺めるルクシオンは、門の脇に移動すると静かにリオンが来るのを待ち始める。

フィンとブレイブが近付いてくる。

「本当に忠義者だな」

そんなフィンの言葉に、ルクシオンは素直に返すのだった。

『はい。何しろ私のマスターは、リオン・フォウ・バルトファルトただ一人ですから。いつまでも待ちますよ』

ルクシオンは門に一つ目を向ける。

（マスター、ゆつくりでいいので、必ず迎えに来てください。私は貴方が来るのをいつまでもお待ちしております）

再び出会うその時まで、ルクシオンはリオンを待ち続けるのだ。

目を覚ますと、液体の入ったカプセルの中にいた。

液体の中にいるのに呼吸ができず苦しむこともない。

緑色で半透明の液体の中、手でガラスを触ると外が騒がしくなった。

『急いでみんなに知らせて!』

「は、はい!」

「お目覚めです! リオン様がお目覚めです!」

液体が排出され、俺がカプセルの中で座り込むとクレアーレが近付いてくる。

カプセルのガラス部分が下がる、俺に声をかけてきた。

『大丈夫、マスター?』

「どれくらい眠っていた?」

『三ヶ月よ。もう、どうして普通に帰ってきてくれなかったのよ!』

「悪い。寝過ぎした」

そう言うと、クレアーレが言い難そうにしていた。

『え、えつとね、マスター。悪い知らせがあるの』

「何だ?」

大体予想がついていた。

『入ってきなさい』

クレアーレの指示で入ってくるのは、ルクシオンと同じ球体ボディだった。

色は黒で一つ目が赤というカラーリングに、俺は色々と察してしまっ
た。

クレアーレがルクシオン？ について説明する。

『どういうわけか、初期化されてデータの復旧ができなかったの。
今のルクシオンは待機命令を受ける前の状態で、起動したばかりに
戻ったの。でも、マスター登録はマスターのままなのよ。本当に嫌
になっちゃうわよね』

クレアーレは『私の言うことを聞いてくれないのよ！』と文句を
言っているが、俺は納得していた。

俺は黒いルクシオンに手を伸ばす。

黒いルクシオンが喜んで近付いてくる。

『お初にお目にかかります、マスター！ 自分は旧人類を宇宙へと
避難させるための移民船として建造されたルク
』

俺はその先を止めた。

あいつは今もあちら側で俺を待ち続けている。

同じ名前では混乱してしまうから、新しい名前を付けることにし
た。

「悪いが名前は変更だ」

『そうなのですか？ 分かりました。では、新しい名前を教えてください。ちょっと緊張してしまいますね。私は機械ですけど！』

ルクシオンよりも軽い感じたが、真面目ない子タイプだな。

ルクシオンの嫌みや皮肉が懐かしくなってくる。

「そうだな。“エリシオン”だ。お前はエリシオン。可愛いだろ？」

『エリシオンですね。記憶しました！ でも、可愛いと言われても困りますね。私には性別の概念がありませんので。もしや、女性としての役割をお望みですか？ それでしたら、すぐにボディを新調してまいります！』

そんなエリシオンを手で捕まえて止めさせる。

「馬鹿 そんな必要はないんだよ。お前はその姿でいい」

クレアーレが俺たちを見ていた。

『マスター、やっぱりあいつは 』

黙っていると、クレアーレは大体のことを察してくれたようだ。

押さえつけたエリシオンが俺を見上げてくる。

『マスター、泣いているようですが、どこか痛むのですか？』

俺は目元を拭った。

「さっきまで液体の中だったんだから、そのせいだろ。ほら、さつさと俺が起きたことを伝えに行くぞ」

立ち上がると、クレアーレがガウンを俺に用意していた。

受け取って羽織ると、エリシオンが俺の右肩辺りに近付いてくる。

「お前はこつち」

だから、左肩の辺りへと移動させた。

『どうしてですか？』

「俺の左肩がお前の特等席だからだよ」

『承知しました！ 私の特等席はマスターの左肩付近ですね。記憶しましたよ』

随分と嬉しそうにしているエリシオンを見て思うのだ。

あいつにもこんな純粋な時期があったのかな、と。

だが、聞いても絶対にはぐらかすだろう。

それはそれで面白いだろうな。

いつかまた、あいつの皮肉や嫌みを聞きたいものだ。

俺がヨロヨロと歩き出すと、部屋にアンジェとリビアが駆け込んできた。

二人とも以前よりも痩せたように見える。

俺の姿を見ると、二人とも泣きながら抱きしめてきた。

「ごめん。寝過ごした」

アンジェが俺の顔を見上げてくる。

「心配させるな。私は お前が側にいないと駄目なんだ。ずっとずっと 待っていたんだからな！」

俺の背中に顔を埋めていたリビアが、そのまま声をかけてくる。

「リオンさんが私たちを突き飛ばした時から、ずっと後悔していたんです。あの時、手を離さなければ、って」

「悪かったよ。もう、放さないから」

「約束ですよ。今度こそ本当に守ってくださいね」

随分と信用がないな。

二人に抱きつかれて泣かれていると、息を切らしたマリエとユリウスもやって来た。

「兄貴！」

「お義兄さん！」

どうしよう。ユリウスのお義兄さん呼びで、感動の場面が台無しだ。

「お前ら、もつと気を利かせろよ」

俺が溜息を吐けば、マリエが激怒する。

「困らせるんじゃないわよ！ 私がどんな思いで　　ばかあああ！
！」

激怒して、大泣きして　こいつも忙しい奴だ。

ユリウスまで泣いていた。

「何でお前が泣くんだよ。男に泣かれても嬉しくないぞ」

「そのもの言い、間違いなくリオンだな。安心した」

嬉しそうにしているのが理解できない。

クレアーレがテキパキと指示を出す。

『はい、はい。まずはマスターを休ませましょう。そして、他の人たちは式典の準備をして頂戴。色々と予定がずれ込んで大変なんだから』

随分と迷惑をかけていたようだ。

「悪いな。それより、何かあるのか？」

クレアーレが当然のように答える。

『たいかんしき戴冠式よ。マスターの師匠が待っているわ』

「戴冠式？」

『そう。ローランドが退位するのよ』

そう言えば、帝国との戦争の前に王位がどうのこうのとか聞いたような、聞かなかったような　まあ、いいか。

師匠が王族だったし、ローランドの代わりに王になるのだろう。

他のローランドの息子では幼すぎるし、エリヤではやはり色々足りないところが多い。

ユリウスとジェイクは論外だからな。

しかし、師匠なら誰もが認めるだろう。

まあ、当然の結果だな。

だが、師匠が陛下になられると、お茶をするのも大変そうだな。

それだけが寂しい。

アンジェが泣き腫らした目を指でこすりながら、俺に笑顔を向けてくる。

「リオンは休んでいる。準備は全て私たちがするから」

「そう？ 助かるよ。まだ体がきついや」

随分と体を酷使したが、外見上は元通りになっていた。

だが、内部がどうなっているのか分からない。

リビアが俺に顔を見せてくる。

「リオンさん 私たちもこれから頑張って支えますからね」

「う、うん」

改めて言われると照れてしまうな。

俺も頑張って師匠を支えよう。

やっぱり、威厳のある人が王になると違うよね。

ローランドの時とはやり甲斐が違う。

みんなが部屋から出ていくと、次に駆け込んできたのはノエルだった。

「リオン！」

手を挙げて笑顔を見せてやると、いきなりタックルをするかのよう
に抱きつかれた。

「この馬鹿！ あんたって本当に馬鹿よ！」

「い、いや、ごめんね」

ノエルが俺から離れて涙を拭う。

「あんたって本当にヘタレなんだから。どうして でも、もういいわ。あんたも覚悟を決めてくれたみたいだし」

「覚悟？」

何のことだろうか？

何これ聞いてない。

謁見の間は質素に飾られていた。

帝国との戦争が終わったばかりで、王国にも余裕がないのだろう。

だが、問題はそこではない。

各国の首脳が集まり、ホルファート王国の戴冠式に参加している。

その中には敗北した帝国のお偉いさんもいた。

俺が意識不明で眠っている間に、色々あったようだ。

だが、待つて欲しい！

帝国の人がいるとか、共和国からも人が来ているとか、知らない国の人たちもいるとか、参加者多くね？ とか そんなのはどうでもいい！

俺はチラリと並んだ参加者たちの中に、俺に王冠を引き継がせたローランドの姿を見る。

ローランドの奴、俺に王冠を渡したらさっさと下がりやがった。

この野郎、俺にサムズアップしてきた。

今すぐにでも俺は頭の上に乗った王冠を投げ付けてやりたい。

というか 俺の戴冠式ってどういうことだよ！

「お、おかしいぞ。こんなの聞いてない」

震えている俺を前に、宰相になられた師匠が小声で注意をしている。

「陛下、皆が見ていますよ」

「し、師匠が王位を継ぐのではなかったのですか？」

俺の疑問に師匠は笑って答えてくれた。

もちろん、周りには聞こえないように小声で、だ。

「陛下も冗談がお上手ですね。こんな老いばれを担ぎ上げてどうするのでしょうか？ 力もあり、血筋も手に入れ、誰もが認める功績を持つ若者が優先されるに決まっているではありませんか」

ルクシオン改め、エリシオンという力を持った俺。

アンジェという王家に連なる血筋を得た俺。

そして、帝国を破った俺。

貴族たちも諸手を挙げて賛同したらしい。

というか、最初から賛成していたようだ。

出陣前に、貴族たちが殊勝な態度を見せたはずだ。

俺が次期国王だもん。

「こ、こんな間違っていると思いませんか？ ローランドだって生きていますし。あいつは死ぬまで働かせましょうよ」

「ローランドは側室の方たちと田舎に引きこもるそうです。手を出した女性の内、数人がついていくと言ったそうですよ」

俺が望んだ未来をローランドが掴むとか、そんなの許せない！

それに、大勢いた側室や愛人たちの中から本当にローランドを心配した女性もついていくとか 何これ？ こんなのおかしいよ！

何が何でも邪魔をしてやると心に決めた。

拳を振るわせる俺の横で、王妃となったアンジェが声を張り上げる。

「ここにリオン・フォウ・バルトファルトが戴冠し、ホルファート王国バルトファルト王朝を開くことを宣言する！」

その声に貴族たちは膝を屈し、忠誠を誓うように見せるのだった。

舞台袖の部分では、ドレス姿のリビアとノエルが控えていた。

俺の王朝　つまり、今後は俺の血筋が王族という扱いになる。

つまり、ホルファート王家　その関係者が王位を継ぐことはない。

継げるのは俺の子供だけだ。

あと、ホルファート王国と名乗ってはいるが、実質的に新しい国になったようなものだ。

アンジェを妻としているため、比較的穏便にローランドから王位を奪った形になる。

いや、押しつけられたのだ。

ローランドはお腹が痛いのか、腹を押さえて必死に笑うのをこらえていた。

いますぐあいつを処刑台に送ってやりたい。

というか、ユリウスやジェイクが普通に参加者の中にいるのがおかしい。

お前ら王子だろ！ いや、もう元王子だけど、それでいいのか！？

何をのんきに拍手してやがる！

あと、ジルクをはじめとして五馬鹿の残りも、俺が王位を継いだことで安堵している表情をしていた。

俺の友人たちも「あいつが王様か」というのんきな顔をしている。

許さない。

絶対に許さない。

俺は器の小さな男だ。

お前らだけが幸せになるなんて、俺は絶対に認めないからな！

小心者だから場の空気を壊せない俺が、引きつった笑みを浮かべているとアンジェが俺に微笑んでくる。

「お前が私を信じてくれてよかった。少々乱暴な手だったが、国を一つにまとめられたよ。ありがとっ、リオン」

「うっ、うん。あっ！？」

アンジエが俺に国をまとめる方法があると言っていた事を思い出した。

まさか俺が王になるとは思わなかった。

俺じゃないだろうと油断していたらこのざまだ。

謁見の間には、エリカと並んでいるエリヤの姿がある。

俺の姿を見てうれし泣きしている弟分　くそ！　こいつを生け贄に俺は逃げれば良かったのではないか？

エリカだって王族だし、俺が支援すればいけたはずだ。いけたかな？　何か無理っぽいな。

今になって自暴自棄になっていた俺の詰め甘さが悔やまれる。

どうして俺はいつも詰めが甘いのだ？

あの時の俺を殴ってやりたい。

そのまま俺の戴冠式が終わると、パーティーが開かれることになった。

控え室。

病み上がりである俺は、パーティーに疲れたと言って逃げ出してきた。

「糞がああ！ ローランドの二ヤけ面が憎い！いい！」

あの野郎、俺を前にして「陛下、今の気分はどうですか？」と「NDK（ねえ、今どんな気持ちw）」をやって来た。

あいつが幸せに暮らしていると思うと、腸が煮えくりかえる思いだ。

俺が部屋で頭を抱えていると、ノエルがやって来る。

「リオン、大丈夫？ お水を持って来たわよ」

エリシオンも一緒だった。

『安心してください。毒など入っていませんよ』

これからは毒殺も警戒しなければならないのか。

王様になんてなりたくなかった。

ノエルが俺の側に来て腰を下ろすと、手を握ってくる。

「ねえ。もしかしてだけど 生きて戻らと思ってなかったから、王様になった事を後悔しているの？」

「ま、まさか！」

目を泳がせる俺は、実は王様になるとか思っていなかった なんて言えなかった。

流石にこれに気付いていなかったとは、恥ずかしくて言えない。

エリシオンがフォローしてくる。

『マスターは立派な方です。後悔などされていません。きっと、この程度の国では満足できないと悔しがっているのです！』

「おい、待てコラ。勝手に人の気持ちを捏造するな」

何こいつ？　もしかして、ルクシオンとは違ったポンコツ要素を持ってる？

ノエルが安堵する。

「良かった。いや、実はリオンって勘違いしているんじゃないか、って心配していたんだよね。王様になるのを知らないのかも、ってちょっと疑っていたし。ごめんね」

「気にしないでいいよ」

言えない。勘違いしていましたとか言えない。

ノエルが立ち上がる。

「元気そうだし、これならエリカちゃんとお話も出来るよね」

「エリカと？」

「うん。お話があるみたいよ」

一方その頃。

ローランドの部屋には、ミレーヌの姿があつた。

リオンを煽っていたローランドに呆れ、諫めるために部屋に連れ出したのだ。

そのことでローランドは怒っている。

「せつかく、若い娘と楽しく会話をしていたというのに」

「貴方はいつもそうですね。今後は控えたらどうですか？ 新しい陛下は、貴方のそういうところが大嫌いですからね」

ローランドは椅子に座り、脚を組んでミレーヌを見ていた。

そして突然とんでもないことを言い出す。

「それはそうと、ミレーヌ 君を離縁する」

「どういう意味ですか？」

ミレーヌが目を細めると、ローランドは冗談ではないのか真剣な表情をしていた。

「これから私たちが一緒に公務に出ることはない。つまり、君が私の妻を演じる必要などないわけだ」

それを聞いたミレーヌが、目を伏せるのだった。

「愛などなかったけれど、こうして言われると辛いものがありますね」

実家に戻れば出戻りとして軽んじられるだろう。

ミレーヌは今後の人生に悲観的になるが、それでも生き残っただけでも得だと思っておくことにした。

帝国との戦いで、もしも失敗すれば死んでいたかもしれないのだから。

ただ、ローランドは微笑む。

「君はこれから自由だ。君の望むままに生きなさい。新しい陛下はきっと君のことを大事にしてくれるはずだ」

「あ、貴方？」

ローランドが何を言っているのか、ミレーヌにはすぐに理解できなかった。

ローランドはミレーヌに優しい言葉をかける。

「君を愛せなかったが、君の幸せは願っている。君は十分に頑張ってくれた。君の恋を応援させて欲しい」

「貴方　で、でも」

煮え切らない態度のミレーヌに、ローランドは背中を押すように言葉をかける。

「これからは自分のために生きなさい。幸せになれ、ミレーヌ」

涙を流すミレーヌの肩をローランドは抱いた。

ミレーヌが退出した後。

ローランドの知り合いの医師が部屋に入ってくる。

「本当によろしかったのですか？ 元王妃様を陛下の側室に送り出すなどと」

ローランドは背伸びをしている。

「最高の策だろ？ 俺は小僧の家庭に爆弾を投下できてハッピーだし、ミレーヌは恋が叶ってハッピーだ。ま、あの小僧に追い出されたら、支援くらいしてやるさ」

医者が頂垂れる。

「新しい陛下の女性関係を壊さないでください。国が傾きますぞ」

「あの小僧はうまくやるよ。いや、アンジェリカがしっかりしているから安心だ。良くも悪くも、あの小僧はアンジェリカの手の平の上だからな！」

ローランドは踊り出した。

「ん、素晴らしい！ あの小僧に一泡吹かせつつ、小うるさいミレーヌを追い出せて一石二鳥ではないか！ 私は自分の才能が恐ろしいよ。ついでに、陛下のおかげで面倒な側室や愛人たちもパージ出来たし、万々歳だな！」

正直、手を出しすぎて困っていたローランドは、ドロドロした宮廷からも逃げられて幸せいっぱいだった。

医者がボソリと本音をこぼした。

「私はこんなのが、今まで陛下だったことが恐ろしいですけどね」

久しぶりにエリカと対面した俺は 冷や汗をかいていた。

「い、今なんて？」

エリカはモジモジしていた。

最初はエリカに謝罪された。

自分の勝手な行動で俺たちを苦しめたと謝ってきたが、エリカが事情を知っていたところで帝国の皇帝は止まらなかっただろう。

言い方は悪いが、エリカ一人ではどうにもならなかったのだ。

だから許したし、責めるつもりもない。

本人は自分を責めていたので、責任を取るなど図々しいと言って無理矢理納得させた。

どうせ、遅かれ早かれ戦争は起きただろうし、俺も帝国の皇帝もベターな結果で終わらせる方法を選べた。 と、思う。

さて、エリカを許したのはいいのだが、問題はここからだ。

「あ、あのね、伯父さん。あの乙女ゲーだけどね アルトリーベってタイトルのシリーズは、私が知っているだけで六作品はあるの」

三作目で終わりではなかったらしい。

というか、六作も出していたの？

頑張りすぎだろ、あのソフトメーカー！

「ち、因みに四作目は？」

「男子校が舞台で 砂漠のある大陸だったと思うけど、私はプレイしていないの。何となくそういうゲームが出たのは知っているだけ。そこに通う男装した女子が、四作目の主人公というのは知っているけど」

「それで！？ 他に知っていることは！？」

聞くのも恐ろしいが、聞かないともっと恐ろしい。

こんなことがあっていいのだろうか？

「五作目がね。その 舞台が宇宙だった気がするの」

「ウチウ!？」

話を聞いていたエリシオンが自信満々に告げてくる。

『私の出番ですね！ 任せてください。このエリシオンは宇宙船ですからね。宇宙でも問題なく活動できますよ』

俺が放心していると、エリカが六作目の舞台を教えてくれた。

「え、えつとね！ それで、六作目で原点回帰をして舞台はホルフアート王国になるんだけど お、伯父さん、大丈夫？」

俺はベッドに体育座りをする。

そう言えば、バインバインの里長が言っていたな。

これからも苦勞するって。

俺は涙を流した。

「やっぱり戻ってくるんじゃないかった」

エリシオンが俺の左肩の辺りに浮かび、心配して声をかけてくる。

『マスターどうしました？ 今からその砂漠のある大陸を滅ぼしましょうか？』

エリカも慌てている。

「お、伯父さん！？　だ、大丈夫だよ。きっと　世界は滅びない
と思いたいな、って。　ごめん、やっぱり厳しいかも」

エリカからしても、これまでを考えて安全に終わるとは考えていないようだ。

俺はベッドの上で仰け反って叫ぶ。

「やっぱり乙女ゲーのこの世界は俺に^{モウ}厳しい世界だったよ！　ちく
しょうおー！」

エピソード

「今日はここまで」

リビアは壁一面本棚となっている部屋で、椅子に座り子供たちに物語を読み聞かせていた。

リビアの前には幼い子供たちが沢山いる。

男の子がリビアの服を掴む。

「ねえ、リビアママ。続きは？ お父様はその後どうなったの？」

子供たちに読み聞かせていたのは、リオンのこれまでの活躍だった。

リオンに似た金髪の男の子が、リビアに続きをせがむ。

「続きが聞きたいよ」

リビアは微笑みながら、子供たちを前に本を閉じるのだった。

「今日はこれまで。もう遅いから眠りましょうね。それから、ごめんなさいね。この続きはまだ書いてないの」

「なんで〜？」

「まだ書けないのよ」

眠そうな目をしている可愛い女の子は、アンジェに似ていた。
リオンに似ている子の服を握りしめている。

「書いてよ」

「だって、貴方たちのお父様が大冒険をするのはこれからよ。それが終わったら、また私がまとめて本にするわ。そしたら、また一番に貴方たちに聞かせてあげる」

ピンク色の髪をした女の子が、人工知能 ファクトにもたれかかって眠っていた。

ファクトが困っている。

『子供たちよ。睡眠時間が減るのは許されない。さあ、眠るのだ』

「ファクトが怒った」

「転がせ」

『や、止める！ この子が私にもたれかかって寝ているのが分からないのか？ ええい、君たちの評価を下方修正だ！』

あの戦争で消えたと思われた人工知能たちだが、ちゃっかりデータを子機に移して生き残っていた。

今では王国を陰から支えてくれている。

もつとも、本格的に彼らを使って国家運営は行っていない。

理由はリオンがそれを嫌ったからだ。

今は人の力でどうにかしたいというリオンの意見を、アンジェたちが採用したから。

リビアもその意見に賛成だった。

「ファクトの言う通りよ。みんな、早く寝ないとお父様に言いつけるわよ」

子供たちが一斉に返事をする。

「はい」

だが、一人残った黒髪の女の子が、リビアの脚に抱きついてきた。

「どうしたの？」

「リビアママ。あのね、あのね！ お父様はいつ帰ってくるの？」

リビアは天井を見上げ、そして笑顔でリオンの顔を思い浮かべた。

「さあ、いつになるかな？ 私も分からないわ。けど、夏になれば一度戻ってくると思うわよ」

リオンが手に入れた浮島。

そこで生活しているのは　マリエだった。

農作業をするロボットたちが働く畑の横を歩いており、散歩中だった。

マリエは汗を拭う。

「あゝ、いい汗をかいたわ。今日のビールはきつと格別ね！」

早速、晩酌のことを考えていた。

そんなマリエに、カーラとカイルが駆け寄ってくる。

カーラは小さな子供を抱いていた。

「マリエ様ああ！　あんまり無茶をしないでくださいよおお！」

カイルも慌てている。

「ご主人様！　そんな体で動き回らないで！」

マリエのお腹は膨らんでいた。

妊娠中である。

「嫌よ。飽きたのよ。私は汗を流して、ビールを飲むの。もう、自重なんてしないわ！」

「その体でお酒なんて何を考えているんですか！　さっさと戻りま

すよ！」

「嫌よ！ 私はお酒が飲みたいの！」

カーラの抱っこしている子供は指を咥えていた。

その子供は紺色の髪をしている。

騒いでいる三人のもとにやってくるのは、革製の鞆にお茶の道具とお菓子を詰め込んだジルクだった。

「皆さん、お茶の用意が出来ましたよ」

カーラがゲンナリしている。

「ジルクさん、用意は私の方でするって言ったじゃないですか！」

カイルがカーラから子供を受け取り、ジルクを睨んでいる。

「あんたのお茶はまずいんだよ！」

それを聞いて、ジルクは肩をすくめるのだった。

「皆さんには高尚すぎましたかね」

ただ、マリエが震えている。

「ジルク　そ、そのティーセット入れ、今までみたことがないんだけど？」

「これですか？ 先日王都に戻った際に購入したんです。安かったですよ」

マリエがそれを聞いて足下をふらつかせると、カーラが即座に支えていた。

「マリエ様しつかり！ まだ大丈夫ですよ。ジルクさんは子爵に復歸しましたから、お金には少し余裕がありますから！」

マリエが泣いている。

「無駄遣いしないでって言ったじゃない！」

ジルクは胸を張って答えるのだ。

「無駄ではありません。何しろ、八十万ディアで購入したティーセツトですよ。古代の遺跡から発掘された貴重品ですからね」

八十万 日本円にして八千万だった。

それを聞いたマリエは、お腹を押さえる。

「あ、駄目。産気づいた。屋敷に戻って生まないと」

もう何度も出産を経験しており、マリエは落ち着いたものだった。

カイルが大慌てだ。

「医者あああ！ お医者様あああ！」

ユリウスに似た子供を抱えて、全速力で駆け出していく。

ジルクもオロオロとしている。

「マリエさんをすぐに屋敷に運ばないと！」

そして慌てたジルクが、八十万ディアで購入したティーセットを落として割れた音が聞こえる。

その音を聞いてマリエは　。

「いやあああ！　八十万があああ！　　あつ」

気を失ってしまった。

そんな場所にやって来るのは、ミアである。

「何をしているんですか！」

駆けつけたミアが持つて来た担架で、マリエを屋敷まで運ぶ。

ジルクは追いかけてくるだけだった。

「マリエさん、ファイトですよ！」

カーラが冷たい目を向けている。

「いえ、貴方がマリエ様に止めを刺したんですけど？　どうしていつも騙されてくるんですか？　馬鹿みたいに安いティーセットを、高級品だと騙されて幾ら損をしたと思っっているんですか？」

カーラの冷たい視線に耐えきれず、ジルクが肩を落とすのだった。

「も、申し訳ありません」

その様子を見たミアが、ジルクに指示を出す。

「なら、すぐに屋敷に戻ってお湯を沸かしてください。走って！」

「は、はい！」

ジルクが屋敷に向かうと、ミアは溜息を吐いた。

「まったく、何をしているんですかね。ユリウスさんの時も同じでしたし、男の人ってこういうときは駄目ですね」

帝国との戦争後、ミアはリオンにより表向き死亡したとされ匿われた。

今はマリエたちと暮らしている。

カーラは苦笑いをしていた。

「それより、ミアは体の調子はいいの？」

ミアは首に魔道具を提げている。

それで魔素を吸引できるようになっていた。

「この魔道具があれば問題ありません」

エリシオンたちが用意した魔素を吸引するための道具だ。

それにより、新人類であるミアも苦しむことなく生活できていた。

帝国にもこの魔道具が配布され、魔素を振りまく装置を開発する計画も進んでいる。

マリエがうなされていた。

「お、お兄ちゃん　お金を振り込んで　」

ここは砂漠を持つ大陸。

オシアス王国の学園に赴任してきた新米教師の俺　リオンは、職員室でマリエから送られてきた写真を見ていた。

嬉しそうに農作物を持っているマリエの周囲には、子供が三人いる。

そして写真にはメッセージが書かれていた。

『今年もお米、味噌、醤油を送ります。だから、生活費をください』
学園を無事に卒業して数年の歳月が流れた。

「あいつらまったく成長してないじゃないか」

組んだ手に額を寄せ、俺は成長しない妹たちに悩む。

そんな俺に声をかけてくるのは、緑髪を七三ヘアにしたインテリ眼鏡の美青年だった。

「リオン先生。そろそろ行きましょうか」

顔を上げた俺は、二歳年上の担任教師を見る。

今の俺は新米教師で、この人の補佐をする副担任だ。

どうして王様の俺が新米教師をしているのかって？

四作目の舞台がこの国の、この学園だからだ。

「そうでしょうか。いや、緊張するな」

事情を知り、対処できる人間など限られている。

だから、俺自身が外国に乗り込んだのだ。

「緊張しているようには見えませんがね。それにしても、ホルファート王国からわざわざ我が学園の教師になる人が現れるとは思いませんでしたよ」

オシアス王国なんて、ホルファート王国から随分と離れているからね。

国としてみればお隣とは言えないし、これまでも国交などあまりなかった。

「ま、あちらの事情が変わりましたね」

担任は高身長で、背筋を伸ばしてキビキビと歩いている。

「事情ですか　まあ、珍しい国のようですからね。ホルファート王国は女性が強い国と聞いています。確か、今は女王陛下が国を統治しているとか」

それを聞いて胸が痛む。

アンジェに国政を押しつけているからだ。

「いえ、表に出ているのが王妃様だけで、王様はいますよ」

「そうなのですか？　以前、外交官の方と話をした際には、とても威厳のある女性が全てを取り仕切っていると聞きましたか？」

「あゝ、王様はシャイなんで表に出てこないんですよ」

「王様がシャイ！？　文化の違いを感じますね」

国王は俺だが、乙女ゲー事情によって王様としての仕事が出来ない。

今のようにな。

だから、アンジェが全てを取り仕切ってくれており、俺は自由に動き回れていた。

というか、俺って王様だよ。

凄く偉いはずなのに、どうして外国で新米教師なんてしているんだろう？ 確かに、今更学生として入り込むのは無理だし、学園の中を自由に動き回る立場として教師は最適だった。

でも、流石にこれは酷い。

貧乏男爵家の三男坊から始まり、王様にまで上り詰めて 今はまだの教師だ。

何がどうなればこんなことになるのか、誰か説明して欲しい。

そして、俺たちが受け持つクラスの教室が見えて来た。

「ここです」

「あゝ、このクラスですか」

プレートには【1・E】と書かれていた。

Eクラス 学園の中では、落ちこぼれや問題児が放り込まれるクラス らしい。

らしいというか、そもそもエリカも四作目をクリアしていない。

まともな攻略情報など最初からなかった。

そして、この学園には非常に残念なことがある。

担任が胸を張ってドアを開けて中に入る。

「入学おめでとう！」

一見すると冷静そうなクール系の美形なのに、熱血教師のような熱い心も持っている。

真面目ないい教師だ。

そんな担任がドアを開けて中に入ると、黒板消しが落ちてきた。

綺麗にセツトした髪がチョークの白い粉で汚れる。

そして、教室内が爆笑の渦に包まれた。

赤毛を逆立て、シャツのボタンを外した派手な男子が机をバンバン叩いて笑っている。

「どうしたんですか、せんせー」

分かっていて聞いてくる糞ガキだった。

ストレートロングの黒髪の男子は、教室内で槍を持っていた。

「ふん。未熟だな。これで教師が務まるのか？」

お前は教室で何と戦うつもりだ？ 武器なんて持ち込むな。

癖のある金髪ショートの、いわゆる可愛い系の小柄な男子が制服のサイズが明らかにおかしい。

袖だけが長くて、手が隠れていた。

「みんな、笑ったら悪いよ」

悪いよ、何て言いつつ、もの凄く笑顔だった。

凄く性格が悪そうながきだった。

そして、ゆるふわのロング そんな青髪を持つ男子は、学園指定の制服を改造してより豪奢（じゆうしゃ）にしていた。

見るからにお金持ってます、って感じだね。

「担任に副担任と、随分と貧乏くさいじゃないか。本当にこの学園は大丈夫なのか？」

俺が国に帰れば、お前より金持ちで立場が上だよ！

この糞ガキ共が、四作目の攻略対象の男子たちだろう。

そんな感じがする。

ゲラゲラと品のない笑い声を出す男子たち。

そう！ この学園は男子校だった！

夢も希望もない場所だな。

俺としては女子校で、キャッキャウフフな展開を希望していた

のに。

あ、駄目だ。

浮気を疑われる展開は避けたいから、むしろ男子校で良かったと思っしかない。

でもむさ苦しい。

担任が黒板消しを手に取り、元の位置に戻すと教壇に両手を叩き付けるように置いた。

「君たちは今日から学園の生徒だ！　このような幼稚ないたずらは止めなさい」

幼稚と言われ、男子たちの視線がきつくなってくる。

見下されたと思ったのか、喧嘩腰の態度を見せてくる奴らばかりだ。

赴任した先で不良クラスに放り込まれるとか、新米教師には辛すぎるよね。

赤毛の男子が席を立て片目を大きく開き、額に血管を浮かべて笑っていた。

何こいつ、怖い。

「いい度胸じゃねーか。なら、幼稚ないたずらは止めて、大人の喧嘩をしてやるよ」

そもそもまともな大人は喧嘩しないけどね。

俺はまともな大人なので、喧嘩なんかしない。でも、敵対したら潰す！

赤毛の男子がこちらに向かってくると、一人の小柄な男子？ が立ち上がった。

ショートヘアで、真面目そうな優等生っぽい 肩幅が狭く、
なで肩の子だ。

「いい加減にしてくれないかな？ 僕はここに勉強をしに来たんだ。邪魔をするなら出ていってくれないか？」

その男子は見た目の割に随分と気が強かった。

赤毛の男子が近付いて威圧している。

「あ？ 聞こえなかったな。もう一回言ってくれよ」

そんな赤毛の男子に、華奢な男子が 平手打ちをした。

「静かにしてくれと言ったんだ」

教室内が静まりかえる。

ただ、担任が冷静に切り出すのだった。

「君、暴力はいけない。後で職員室に来なさい」

そして怒られたのは、赤毛の子ではなく華奢な子だった。

「え？ 僕ですか！？」

「当たり前だ。平手打ちをしたんだから当然じゃないか」

華奢な子が肩を落としている。

だが、あれだね。

声もどこか男ではないし、体つきも違う。

胸はどうにかして隠しているのか、それともとから小さいのか

まあ、ハッキリ言って 誰か一人くらい気付けや！

男子校に一人だけ女子が混ざり込んでいるんですけど！

さて、初日を終えた俺は、屋上でエリシオンと黄昏れていた。

俺の左肩付近に浮かんでいるエリシオンだが、文句が多い。

『マスターを貧乏くさいといった奴は私のブラックリストに書き込みました。安心してください、明日には証拠一つ残さず消して見せます！』

「お前は馬鹿か？ 攻略対象っぽい男子を消してどうするよ。あの中に、主人公と仲良くなつて世界を救う奴がいるかもしれないんだ

ぞ。文句の一つや二つで怒るなよ」

『怒っていません。消すだけです。デリートです!』

ルクシオンとは違った面倒くさをエリシオンは持っている。

真面目でいい子なのだが、真面目すぎて暴走しがちだ。

「放置だ。そもそも、俺がこの国に来た目的を忘れたのか？」

『四作目の世界の危機を回避する、でしたか？ それにしても、この世界はよく滅びかけますね』

「本当に勘弁して欲しいよ。俺って本当なら王様だよ。ローランドみたいにふんぞり返って、部下に仕事をさせる立場だよ。俺もあいつみたいにサボりたい」

『先王のローランドは、少し前に女性に刺されましたけどね』

「あれは傑作だったな」

しかし、やはりローランドはしぶとかった。刺されても生き残り、その上で修羅場を落ち着かせて新しい女性を手に入れてやがった。

憎まれっ子世に憚る、を地で行く男だ。

まあ、今はどうでもいい。

それよりも、俺は王様になどなりたくなかった。

本当ならスローライフを目指していたはずなのに、どこをどう間違ったのか今では一国の王だ。

それなのに、マリエが俺の望んだスローライフを送っていると思うと　複雑な気分になってくる。

懐から取り出したプレートで、俺は画像データを見るのだった。

王国にいるクレアーレから定期的に写真が送られてくる。

「可愛い盛りの子供たちを残して単身赴任だぞ。もう、世界の危機とかどうでも良くない？」

『では、この国を沈めますか？　任せてください。一日でやって見せます！』

「お前も怖いな」

頑張ります！　って元気よく大陸一つを沈めるとか　ルクシオンと似ているな。

あいつもよく「新人類を殲滅したい」って言っていたし。

子供たちの顔を見ると、心が温かくなり　同時に焦ってくる。

もうね　子供が多くてさ。

一体俺は異世界で何をやっているのだろう？　と何度も考えてしまったよ。

『マスター、それよりも今後のご予定についてご報告があります』

「何かトラブルか？」

『はい。マストライバーの建造が予定よりも遅れています。王国の復興にリソースが取られすぎています』

「三年以内に完成すればいいから、今は復興にリソースを回しておけ」

『それにしてもマスターも大変ですね。外国で三年間教師をした後に、宇宙で潜入任務ですから』

「俺は一体どこを目指しているんだろうな」

自分でも分からなくなってきた。

いや、あの乙女ゲーがどこを目指したのか、だろうか？

開発者がいたなら小一時間ほど問い詰めたい。

いや、丸一日は説教をしてやりたい。

『王国に戻られるのは六年後ですね！ 宇宙に出れば、長期休暇があっても戻ることは出来ませんし』

「子供たちもみんな大きくなってるよ！ 俺のことなんて忘れちゃうよ！ どうして俺だけがこんなに頑張っているんだよ！」

屋上で一人泣いていると、ドアが開く音がした。

エリシオンがすぐに姿を消して隠れる。

俺は涙を拭いて振り返ると、そこには四作目の主人公がいた。

「あ、先生」

一人になれる場所を探していたのか、俺がいることを残念がっていた。

たった一人、男ばかりの学園に乗り込んできたのだ。

随分と疲れた顔をしている。

見ていて可哀想になってくる。

「元気がないな？ 担任にきつく叱られたのか？」

「注意されただけです。でも、気疲れしたみたいで」

赤毛の男子に喧嘩を売り、クラスの雰囲気つぶち壊したので話しかけてくる奴もいなかったのだろう。

俺はこの子をフォローして、無事に四作目の世界の危機を乗り切る方法を考える。

「まあ、色々あるけど気にするな。何かあったら相談しにこい」

華奢な子が少し驚き、俺を見ながらクスクスと笑う。

「でも、先生は少し頼りない感じがしますけどね」

「酷いな。それでも結構凄いだぞ」

そんな会話をしていると、俺の横で姿を消したエリシオンが『マスターを侮辱しやがって、この新人類の末裔が 必ず消してやる！』とか、怖いことを呟いていた。

何だろう、いきなり失敗しそうな気がしてきた。

主人公が俺を見てからかってくる。

「それより先生は外国から来たんですね？」

「うん」

「どうしてこの国に来たんですか？ この国 そんなにいい国じゃないのに」

何やら今度の主人公も色々と背負っているらしい。

そんな主人公に向かって笑顔を見せる。

「俺がここにいる理由？ そうだな 世界を救いに来たから、かな」

ちよつとキザな台詞を言うと、エリシオンが『マスター格好いい！』と褒めてくる。

「ごめん、そこは褒めないで。」

恥ずかしくなるから。

ルクシオンなら鼻で笑ってくれるところだから。

そして、俺の台詞を聞いて主人公が笑うのだ。

「何ですか、それ？」

その顔がもう可愛くて　お前、女を隠す気がないだらって言い
たくなっただね。

だが、笑っている顔の方がいい。

だから俺は冗談めかして言うのだ。

「信じてないな？　本当だぞ。これでも世界の危機を少なくとも三
度は救ってきた男だ。でも、家庭の危機だけは救えないけどね」

「いや、家庭の危機が救えない人に、世界は救えないと思いますよ」

「お前も言っただろ」

大丈夫。家庭の方はアンジェが支えてくれるから。

というか、どうにもハーレムを築いた気がしない。

あの世で親父が言っていたように、俺が囲っているのではなく囲
われている立場だからだろうか？

主人公が笑みを消し、少しだけ悲しそうな顔をしていた。

乙女ゲーの主人公らしい重い過去やら色んなものを背負っている顔だ。

「なら、先生　僕が救って欲しいと言ったら、救ってくれますか？」

出会ったばかりの副担任を前に、藁を掴むように助けを求めている。

その顔はどうせ駄目だろうと諦めているようで、もしかしたらと淡い期待を抱いているようにも見えた。

そんな顔をするんじゃない。

手を差し伸べたくなってくるじゃないか。

女の子が男子校に入るなど、よっぽどの事情があるに違いないのだ。

まったく、何がどうなっているのか分からないのに、また俺は目の前の人間を助けようとしている。

本当に度し難いが　こんな自分が嫌いではない。

男子校で心細い主人公を手助けするくらい、何の問題もない。

「もちろんだ。俺はそのためにここに来た」

エピソード（後書き）

作者の三嶋 ミシマ ヨム 与夢です

いかがだったでしょうか？

これにて「乙女ゲー世界はモブに厳しい世界です」は完結となります。

後日譚やら幕間を書く際には、短編やら宣伝置き場の「せぶんす」にて公開する予定です。

そちらもチェックしていただけたら嬉しいです。

また、詳しいご報告などは活動報告を利用してお知らせしますので、そちらもチェックをよろしくお願いいたします。

今までお付き合いいただき大変ありがとうございます。

色々とありましたが、無事に完結させることが出来ました。

作者の個人的な感想やら思い出は、活動報告に書かせてもらいます。

それから、面白いと感じていただけたら評価や感想をお願いいたします。

パソコン、スマホ、共に下部から評価が行えますので、気軽に評

価をしてもらえればと思います。

評価や感想は大歓迎です。

一言でも構いませんので、気軽に書き込んでください。

レビューもお待ちしております。

また違う作品でお目にかかれたら嬉しいですね。

そして、この作品は書籍化済みです。

書籍版はG Cノベルズ様より1〜4巻までが発売中ですので、Web版とは違った「乙女ゲー世界はモブに厳しい世界です」を楽しんでもらえると嬉しいです。

それでは、完結までお付き合いいただき、ありがとうございました！

あと、七章の後書きは完結したので消していきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n3191eh/>

乙女ゲー世界はモブに厳しい世界です

2021年8月2日19時06分発行